

栃木県埋蔵文化財調査報告第396集

あがた駅南遺跡

—足利市あがた駅南地区用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

(第1分冊)

2020.3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

あがた駅南遺跡

—足利市あがた駅南地区用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

(第1分冊)

2020.3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団



序

あがた駅南遺跡は、栃木県の南西部、足利市に位置しています。足利市は市内を東西に流れる渡良瀬川の流域を中心に古くから発展し、藤本観音山古墳、足利学校、鑿阿寺など、数多くの史跡が残されています。また古くからの農業の推進に加え、近年では北関東自動車道も開通し、インターチェンジ周辺に工業団地も設置されるなど、交通の要衝及び工業都市としても発展を続けています。

この度、栃木県企業局が実施する足利市あがた駅南地区用地造成事業に先立ち、開発区域内に所在する遺跡の取扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

発掘調査では、縄文時代後晩期の拠点的な集落跡や古墳時代から平安時代の集落跡が確認され、特に土偶や耳飾りをはじめとする縄文時代後期から晩期の資料は北関東渡良瀬川流域における縄文時代の文化を考える上で貴重な例となりました。

また、古墳時代前期から中期の資料は、足利市域における古墳時代の社会を考える上で良好な例と言えます。

本報告書は、あがた駅南遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました栃木県企業局、足利市産業開発課、足利市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和2（2020）年3月

栃木県教育委員会

教育長 荒川 政利

例 言

- 1 本書は栃木県企業局による足利市あがた駅南産業用地造成事業に伴い、発掘調査が実施されたあがた駅南遺跡（足利市県町）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は栃木県企業局から委託を受け、平成 28 年度～平成 29 年度現地の発掘調査、平成 30 年度～令和元年度の整理・報告書作成作業について、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本書の編集は公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターの江原英、谷中隆が行った。編集に当たっては、栃木県教育委員会、足利市教育委員会の他、館林市教育委員会、足利市産業開発課、足利市生涯学習課、秋田かな子、足立佳代、石川隆道、長田友也、齋藤糸子、齋藤弘、鈴木徳雄、鈴木正博、大工原豊、竹澤謙、中村耕作、能登健、藤坂和延、山口逸弘の各氏にご指導をいただいた。
- 4 あがた駅南遺跡に関わる発掘調査及び整理報告書作成作業は以下の担当者により実施された。
発掘調査
平成 28 年度 塚本師也・亀田幸久・初山孝行
平成 29 年度 塚本師也・中村享史・江原英・亀田幸久・谷中隆・初山孝行・大木丈夫
整理作業
平成 30 年度 塚本師也・江原英・植木貴志
整理・報告書作成作業
平成 31 年度 江原英・谷中隆・初山孝行
- 5 発掘調査から報告書作成に至るまで下記に委託業務を行った。
株式会社中央航業、株式会社シン技術コンサル、技研コンサル株式会社、株式会社アルカ、有限会社アルケーリサーチ、第一合成株式会社、株式会社パレオ・ラボ、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社火山灰考古学研究所、神谷建設株式会社、マクタ建設株式会社、三興工業株式会社、株式会社荒井工業、小川忠博、下野印刷株式会社
- 6 発掘調査・整理作業の協力者は以下のとおりである。

(発掘調査)

相澤保夫 相場重男 相原辰雄 青木克至 浅川大三郎 厚川廣美 阿部清 阿部茂、阿部友美
天野崇弘 安藤欣美 飯塚正昭 五十嵐裕子 井腰稔 石井剛 石井守 一鐵護 井野口三樹雄
今井清美 岩下孝子 岩下伸子 岩下久義 岩本真理子 植木佐市 植木貴志 牛久保三郎 歌川盛夫
内海千尋 恵田竜弥 遠藤茂 大久保保江 大里由美子 大関衣映 大竹哲夫 大谷公男 大庭睦美
大屋典世 荻原恵美子 尾花彰 恩田紀子 加藤利江 加藤博之 金井千恵子 金井雅博 金井悠美
金田マーフディ 亀田光紀 北詰大地 久保田憲司 熊倉洋子 倉持進 栗田美智子 栗原勉 黒田誠二
黒田正子 小島純子 小島祥一 小島鉄男 小島幹雄 小玉淳子 児玉裕美子 小沼和英 小林節子
小林春枝 小林秀子 小林麻衣 小林真理子 小林充男 古谷野悟 齋藤純子 齋藤永一 齋藤英明
五月女貴之 佐瀬隆一 猿橋美佐子 早良亮 塩見和彦 塩見奈々江 篠崎真弓 柴山イツ子 嶋田和正
島谷義博 嶋田浩子 下山武男 下山日呂美 須賀保一 菅谷宣義 杉原新一 鈴木高 鈴木忠司
須藤健一 須藤伸一 須藤由紀夫 須藤洋子 須永満 須永欣伸 諏訪すみ子 関口敏春 関口誠
関口芳友 関弘隆 関屋勝次 瀬下勇夫 高橋麻佐美 高橋一雄 高林真理子 高山あんな 高山玲帆
高山和美 滝川美佐子 田口充英 多田美喜子 蓼沼稔 立山総恵 田中真理子 田村秀実 塚田稔

津久井弘子 辻本博子 堤橋一雄 勅使河原誠 寺崎由美子 寺嶋美雪 富澤周平 富田博 永井信之
永井一 中尾宏代 中里一郎 長島秀樹 中嶋幹夫 長竹輝幸 中原國隆 中村綾花 中村和子
中村富保 西島誠 西谷義信 西田幸夫 野城陽子 新田山善男 根岸大 根津悦男 橋爪秀夫
橋本貞夫 蓮沼透 原田和沙 原行夫 春山静江 樋口成二 廣上昭子 福田昇二 福田利作 福地大輔
藤井敏夫 藤田貴映 藤野政宏 古澤政之助 星野忠夫 星野次夫 前原哲夫 丸山昌子 水澤美智江
村松幸夫 茂木哲夫 茂木哲男 元澤清二 山内愛子 山上菊三 山口航平 山口仁 山口弘美 山下潤
山田今朝一 山根千都子 山本進 山本眞夫 横澤利道 吉江芳夫 吉岡剛 吉澤正浩 吉田裕 若江智
和田由美

(整理作業)

天野崇弘、新井勝美、出井百合子、大貫昭夫、熊谷早苗、佐藤愛、杉山真理、鈴木知子、関根幸子
田口里美、武田智子、長道子、土井悦子、野尻直子、保坂葉子、和田恵美

- 7 遺跡の概要は一部公表されているが、本書をもって正式報告とする。
- 8 本遺跡の出土遺物、実測図、図版等は公益財団法人とちぎ未来づくり財団栃木県埋蔵文化財センターで保管している。
- 9 遺構の略号は竪穴住居跡：SI、土坑：SK、溝：SD、不明遺構：SXとしたが、調査時発番のS〇〇をそのまま継承した呼称例もある。また、原則として発掘調査時に発番された遺構番号を踏襲した。但し複数の遺構が同一の遺構番号となっている場合、1遺構の建替や拡張の場合は新しい方から小文字アルファベットを遺構番号の後に付し、別遺構の場合は大文字アルファベットを遺構番号の後に付して区別した。
- 10 遺跡の測量は世界測地系で実施した。また、あがた駅南遺跡では開発区全体にグリッドを設定した。東西方向がア～カまで、南北方向がA～Eまで、それぞれ100mのグリッドを設定し、更に20m、4m単位のグリッドも設定した。遺構図や遺物一覧表等ではEウ14-20などの表記がされているが、これは東西南北のグリッド番号を組み合わせた表記である。なおあがた駅南遺跡の略号はAKAGである。
- 11 遺構の縮尺は1/60,1/80を基本とし、遺構・図面によって適宜1/30～1/160等に使い分けている。遺物の縮尺は、原則として縄紋土器破片1/3、縄紋土器復元個体1/3～1/6、石器は2/3～1/6、土師器・須恵器1/4で表示した。須恵器、灰釉陶器、陶器については土器実測図の断面を黒にしている。遺物の色調は「新版標準土色帖」(財)日本色彩研究所を参考として記述している。
- 12 遺物は掲載図番号で管理しているが、未掲載遺物をはじめ整理当初に付した仮番号のままの例やグリッド表記のまま収納している遺物も多い。
- 13 古墳時代の時期区分について、古墳時代前期は日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジウム2「東日本における古墳出現過程の再検討」における時期区分で、古墳時代中期については陶邑窯跡群における須恵器編年(『年代のものさし—陶邑の須恵器』大阪府立近つ飛鳥博物館2006年など)による型式名で表記している。
- 14 遺構・遺物図版中のスクリーントーンは以下を示す。



第1分冊 目次

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	4
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3章 西地区の遺構と遺物	13
第1節 西地区調査の概要	
第2節 A区の遺構と遺物	21
第3節 B区の遺構と遺物	113
第4節 C区の遺構と遺物	199
第5節 D・E区の遺構と遺物	297
第6節 G・H・I区の遺構と遺物	355
第7節 J・K・L区の遺構と遺物	369
第8節 土製品	388
第9節 石器	433
第10節 石製品	443
第11節 その他の土器・土製品、その他の遺物	463
(以下第2分冊)	
(別添CD)	
遺物観察表	

挿図目次

第1図	あがた駅南遺跡の位置	1	第52図	A区出土土器(19)	53
第2図	あがた駅南遺跡の開発区	2	第53図	A区出土土器(20)	54
第3図	開発区全体図	3	第54図	A区出土土器(21)	55
第4図	周辺の地形区分図	6	第55図	A区出土土器(22)	56
第5図	周辺の遺跡分布図	9	第56図	A区出土土器(23)	57
第6図	あがた駅南遺跡西地区全体図	15	第57図	A区出土土器(24)	58
第7図	西地区トレンチ配置図	16	第58図	A区出土土器(25)	59
第8図	T1北拡張区(SX1～3)全体図	17	第59図	A区出土土器(26)	60
第9図	T3南拡張区(P1～8)全体図	17	第60図	A区出土土器(27)	61
第10図	T4北拡張区(SK1・P1～7)全体図・遺物出土図	17	第61図	A区出土土器(28)	62
第11図	T1北拡張区 SX1～3平面図・断面図	18	第62図	A区出土土器(29)	63
第12図	トレンチ出土土器(1)	19	第63図	A区出土土器(30)	64
第13図	トレンチ出土土器(2)	20	第64図	A区出土土器(31)	65
第14図	A・A2・A3区全体図	21	第65図	A区出土土器(32)	66
第15図	A・A2・A3区SD全体図・断面図	23	第66図	A区出土土器(33)	67
第16図	A区出土銅製品	23	第67図	A区出土土器(34)	68
第17図	A3区 SD1・2平面図・断面図	24	第68図	A区出土土器(35)	69
第18図	A2区 ウ OSD2～4平面図・断面図	24	第69図	A区出土土器(36)	70
第19図	A区 ア0上層平面図・断面図	25	第70図	A区出土土器(37)	71
第20図	A区ピット群(ア1・2・イ0・1・ワ0・1) 平面図・断面図	26	第71図	A区出土土器(38)	72
第21図	A区ピット群(ア1・2・イ0・1・ワ0・1)断面図	27	第72図	A区出土土器(39)	73
第22図	A区出土土器(1)	28	第73図	A区出土土器(40)	74
第23図	A区出土土器(2)	29	第74図	A区出土土器(41)	75
第24図	A区イ0(アOP1・イOSX1・4・P1～4) 平面図・断面図	30	第75図	A区出土土器(42)	76
第25図	A区イOSX1遺物出土図・断面図	30	第76図	A区出土土器(43)	77
第26図	A区アOP12平面図・断面図	31	第77図	A区出土土器(44)	78
第27図	A区出土土器(3)	31	第78図	A区出土土器(45)	79
第28図	A2区ウ1S1・ウ2SK2・S3(P1)平面図・断面図	32	第79図	A区出土土器(46)	80
第29図	A2区SX3(ウ1S1・ウ2S3)・A区イ2SX6・7・ ア2S2平面図・断面図	32	第80図	A区出土土器(47)	81
第30図	A区出土土器(4)	33	第81図	A区出土土器(48)	82
第31図	A区出土土器(5)	34	第82図	A区出土土器(49)	83
第32図	A区イ3P1・2平面図・断面図	35	第83図	A区出土土器(50)	84
第33図	A区イ4S1平面図・断面図	35	第84図	A区出土土器(51)	85
第34図	A区ア4S1平面図・断面図	35	第85図	A区出土土器(52)	86
第35図	A2区ウOS1平面図・断面図	36	第86図	A区出土土器(53)	87
第36図	A2区ウOS5平面図・断面図	36	第87図	A区出土土器(54)	88
第37図	A2区ウ3S1平面図・断面図	36	第88図	A区出土土器(1)	90
第38図	A2区ウ2SX1遺物出土図・断面図・下位面及び掘り方 平面図・断面図	38	第89図	A区出土土器(2)	91
第39図	A区出土土器(6)	39	第90図	A区出土土器(3)	92
第40図	A区出土土器(7)	40	第91図	A区出土土器(4)	93
第41図	A区出土土器(8)	41	第92図	A区出土土器(5)	94
第42図	A区出土土器(9)	42	第93図	A区出土土器(6)	95
第43図	A区出土土器(10)	43	第94図	A区出土土器(7)	96
第44図	A区出土土器(11)	44	第95図	A区出土土器(8)	97
第45図	A区出土土器(12)	45	第96図	A区出土土器(9)	98
第46図	A区出土土器(13)	46	第97図	A区出土土器(10)	99
第47図	A区出土土器(14)	48	第98図	A区出土土器(11)	100
第48図	A区出土土器(15)	49	第99図	A区出土土器(12)	101
第49図	A区出土土器(16)	50	第100図	A区出土石器(13)	102
第50図	A区出土土器(17)	51	第101図	A区出土石器(14)	103
第51図	A区出土土器(18)	52	第102図	A区出土石器(15)	104
			第103図	A区出土石器(16)	105
			第104図	A区出土石器(17)	106
			第105図	A区出土石器(18)	107
			第106図	A区出土石器(19)	108

第 107 图	A 区 出土石器 (20)	109	第 166 图	B 区 出土石器 (6)	171
第 108 图	A 区 出土石器 (21)	110	第 167 图	B 区 出土石器 (7)	172
第 109 图	B 区 SD6·8 平面图·断面图	113	第 168 图	B 区 出土石器 (8)	173
第 110 图	B 区 全体图	114	第 169 图	B 区 出土石器 (9)	174
第 111 图	B 区 土层断面图	115	第 170 图	B 区 出土石器 (10)	175
第 112 图	B 区 VII 层分布图	116	第 171 图	B 区 出土石器 (11)	176
第 113 图	B 区 X 层分布图	117	第 172 图	B 区 出土石器 (12)	177
第 114 图	B 区 SK9·S10 平面图·断面图·遗物出土图	117	第 173 图	B 区 出土石器 (13)	178
第 115 图	B 区 SI12·S13 平面图·断面图	118	第 174 图	B 区 出土石器 (14)	179
第 116 图	B 区 SI12 遗物出土图	119	第 175 图	B 区 出土石器 (15)	180
第 117 图	B 区 S14 平面图·断面图	119	第 176 图	B 区 出土石器 (16)	181
第 118 图	B 区 出土石器 (1)	120	第 177 图	B 区 出土石器 (17)	183
第 119 图	B 区 S11 平面图·断面图	121	第 178 图	B 区 出土石器 (18)	184
第 120 图	B 区 S15·16 平面图·断面图	122	第 179 图	B 区 出土石器 (19)	185
第 121 图	B 区 S15·16 断面图	123	第 180 图	B 区 出土石器 (20)	186
第 122 图	B 区 出土石器 (2)	124	第 181 图	B 区 出土石器 (21)	187
第 123 图	B 区 出土石器 (3)	125	第 182 图	B 区 出土石器 (22)	188
第 124 图	B 区 出土石器 (4)	126	第 183 图	B 区 出土石器 (23)	189
第 125 图	B 区 出土石器 (5)	127	第 184 图	B 区 出土石器 (24)	190
第 126 图	B 区 出土石器 (6)	128	第 185 图	B 区 出土石器 (25)	191
第 127 图	B 区 出土石器 (7)	130	第 186 图	B 区 出土石器 (26)	192
第 128 图	B 区 出土石器 (8)	131	第 187 图	B 区 出土石器 (27)	193
第 129 图	B 区 出土石器 (9)	132	第 188 图	B 区 出土石器 (28)	194
第 130 图	B 区 出土石器 (10)	133	第 189 图	B 区 出土石器 (29)	195
第 131 图	B 区 出土石器 (11)	134	第 190 图	B 区 出土石器 (30)	196
第 132 图	B 区 出土石器 (12)	135	第 191 图	B 区 出土石器 (31)	197
第 133 图	B 区 出土石器 (13)	136	第 192 图	C 区 全体图 1	200
第 134 图	B 区 出土石器 (14)	137	第 193 图	C 区 全体图 2	201
第 135 图	B 区 出土石器 (15)	138	第 194 图	C 区 基本土层	202
第 136 图	B 区 出土石器 (16)	139	第 195 图	C 区 S106 (P1~5·7~11)·S106 石圈炉灶大图· S137·139·144·157·158·T6 北拔張区 (P1~7) 平面图·断面图	203
第 137 图	B 区 出土石器 (17)	140	第 196 图	C 区 出土石器 (1)	204
第 138 图	B 区 出土石器 (18)	141	第 197 图	C 区 S143b (P1~23)·145 平面图·断面图	206
第 139 图	B 区 出土石器 (19)	143	第 198 图	C 区 S143b (P1~23) 平面图·遗物出土图	207
第 140 图	B 区 出土石器 (20)	144	第 199 图	C 区 出土石器 (2)	208
第 141 图	B 区 出土石器 (21)	145	第 200 图	C 区 出土石器 (3)	209
第 142 图	B 区 出土石器 (22)	146	第 201 图	C 区 出土石器 (4)	210
第 143 图	B 区 出土石器 (23)	147	第 202 图	C 区 S141·147 (P1~15)·152 平面图·断面图· 遗物出土图	211
第 144 图	B 区 出土石器 (24)	148	第 203 图	C 区 出土石器 (5)	212
第 145 图	B 区 出土石器 (25)	149	第 204 图	C 区 出土石器 (6)	213
第 146 图	B 区 出土石器 (26)	150	第 205 图	C 区 出土石器 (7)	214
第 147 图	B 区 出土石器 (27)	151	第 206 图	C 区 S120·126·135·150·151·151b 平面图·断面图	215
第 148 图	B 区 出土石器 (28)	152	第 207 图	C 区 S120 平面图·断面图	215
第 149 图	B 区 出土石器 (29)	153	第 208 图	C 区 S135 平面图·断面图	215
第 150 图	B 区 出土石器 (30)	154	第 209 图	C 区 S136 平面图·断面图	215
第 151 图	B 区 出土石器 (31)	155	第 210 图	C 区 出土石器 (8)	216
第 152 图	B 区 出土石器 (32)	156	第 211 图	C 区 SK117·118·130·131·S121·128·129· 132·140 平面图·断面图	218
第 153 图	B 区 出土石器 (33)	157	第 212 图	C 区 出土石器 (9)	219
第 154 图	B 区 出土石器 (34)	158	第 213 图	C 区 S121 平面图·断面图	220
第 155 图	B 区 出土石器 (35)	159	第 214 图	C 区 SK108·113 平面图·断面图	221
第 156 图	B 区 出土石器 (36)	160	第 215 图	C 区 S110·112 平面图·断面图	221
第 157 图	B 区 出土石器 (37)	161	第 216 图	C 区 出土石器 (10)	222
第 158 图	B 区 出土石器 (38)	162	第 217 图	C 区 出土石器 (11)	223
第 159 图	B 区 出土石器 (39)	163	第 218 图	C 区 S105·107 平面图·断面图	223
第 160 图	B 区 出土石器 (40)	164	第 219 图	C 区 SK119·123 平面图·断面图	223
第 161 图	B 区 出土石器 (1)	166			
第 162 图	B 区 出土石器 (2)	167			
第 163 图	B 区 出土石器 (3)	168			
第 164 图	B 区 出土石器 (4)	169			
第 165 图	B 区 出土石器 (5)	170			

第 220 图	C 区 S142 平面图·断面图	224	第 278 图	C 区 出土石器 (11)	280
第 221 图	C 区 S124·125 平面图·断面图	224	第 279 图	C 区 出土石器 (12)	281
第 222 图	C 区 S159 平面图·断面图	224	第 280 图	C 区 出土石器 (13)	282
第 223 图	C 区 出土石器 (12)	225	第 281 图	C 区 出土石器 (14)	283
第 224 图	C 区 SK104·S109·111·114~116 平面图·断面图	226	第 282 图	C 区 出土石器 (15)	283
第 225 图	C 区 SD101·102 平面图·断面图	226	第 283 图	C 区 出土石器 (16)	284
第 226 图	C 区 SD103 平面图·断面图	227	第 284 图	C 区 出土石器 (17)	285
第 227 图	C 区 出土石器 (13)	227	第 285 图	C 区 出土石器 (18)	286
第 228 图	C 区 出土石器 (14)	229	第 286 图	C 区 出土石器 (19)	287
第 229 图	C 区 出土石器 (15)	230	第 287 图	C 区 出土石器 (20)	288
第 230 图	C 区 出土石器 (16)	231	第 288 图	C 区 出土石器 (21)	289
第 231 图	C 区 出土石器 (17)	232	第 289 图	C 区 出土石器 (22)	290
第 232 图	C 区 出土石器 (18)	233	第 290 图	C 区 出土石器 (23)	291
第 233 图	C 区 出土石器 (19)	234	第 291 图	C 区 出土石器 (24)	292
第 234 图	C 区 出土石器 (20)	235	第 292 图	C 区 出土石器 (25)	293
第 235 图	C 区 出土石器 (21)	236	第 293 图	D 区 SD2·3·4 平面图·断面图	297
第 236 图	C 区 出土石器 (22)	237	第 294 图	D·E 区 全体图	298
第 237 图	C 区 出土石器 (23)	238	第 295 图	E 区 SD2·3·5 平面图·断面图	299
第 238 图	C 区 出土石器 (24)	239	第 296 图	D 区 SK1·3·6·7·S4·5·8 平面图·断面图	300
第 239 图	C 区 出土石器 (25)	240	第 297 图	D 区 SK2 平面图·断面图	300
第 240 图	C 区 出土石器 (26)	241	第 298 图	D 区 出土石器 (1)	302
第 241 图	C 区 出土石器 (27)	242	第 299 图	D 区 出土石器 (2)	303
第 242 图	C 区 出土石器 (28)	243	第 300 图	D 区 出土石器 (3)	304
第 243 图	C 区 出土石器 (29)	244	第 301 图	D 区 出土石器 (4)	305
第 244 图	C 区 出土石器 (30)	245	第 302 图	D 区 出土石器 (5)	306
第 245 图	C 区 出土石器 (31)	246	第 303 图	D 区 出土石器 (6)	307
第 246 图	C 区 出土石器 (32)	247	第 304 图	D 区 出土石器 (7)	308
第 247 图	C 区 出土石器 (33)	248	第 305 图	D 区 出土石器 (8)	309
第 248 图	C 区 出土石器 (34)	249	第 306 图	D 区 出土石器 (9)	310
第 249 图	C 区 出土石器 (35)	250	第 307 图	D 区 出土石器 (10)	311
第 250 图	C 区 出土石器 (36)	251	第 308 图	D 区 出土石器 (11)	312
第 251 图	C 区 出土石器 (37)	252	第 309 图	D 区 出土石器 (12)	313
第 252 图	C 区 出土石器 (38)	253	第 310 图	D 区 出土石器 (13)	314
第 253 图	C 区 出土石器 (39)	254	第 311 图	D 区 出土石器 (14)	315
第 254 图	C 区 出土石器 (40)	255	第 312 图	D 区 出土石器 (15)	316
第 255 图	C 区 出土石器 (41)	256	第 313 图	D 区 出土石器 (16)	317
第 256 图	C 区 出土石器 (42)	257	第 314 图	D 区 出土石器 (17)	318
第 257 图	C 区 出土石器 (43)	258	第 315 图	D 区 出土石器 (18)	319
第 258 图	C 区 出土石器 (44)	259	第 316 图	D 区 出土石器 (19)	320
第 259 图	C 区 出土石器 (45)	260	第 317 图	D 区 出土石器 (20)	321
第 260 图	C 区 出土石器 (46)	261	第 318 图	D 区 出土石器 (21)	322
第 261 图	C 区 出土石器 (47)	262	第 319 图	D 区 出土石器 (22)	323
第 262 图	C 区 出土石器 (48)	263	第 320 图	D 区 出土石器 (23)	324
第 263 图	C 区 出土石器 (49)	264	第 321 图	D 区 出土石器 (24)	325
第 264 图	C 区 出土石器 (50)	265	第 322 图	D 区 出土石器 (25)	326
第 265 图	C 区 出土石器 (51)	266	第 323 图	E 区 出土石器 (1)	327
第 266 图	C 区 出土石器 (52)	267	第 324 图	E 区 出土石器 (2)	328
第 267 图	C 区 出土石器 (53)	268	第 325 图	E 区 出土石器 (3)	329
第 268 图	C 区 出土石器 (1)	270	第 326 图	E 区 出土石器 (4)	330
第 269 图	C 区 出土石器 (2)	271	第 327 图	E 区 出土石器 (5)	331
第 270 图	C 区 出土石器 (3)	272	第 328 图	E 区 出土石器 (6)	332
第 271 图	C 区 出土石器 (4)	273	第 329 图	E 区 出土石器 (7)	333
第 272 图	C 区 出土石器 (5)	274	第 330 图	E 区 出土石器 (8)	334
第 273 图	C 区 出土石器 (6)	275	第 331 图	E 区 出土石器 (9)	335
第 274 图	C 区 出土石器 (7)	276	第 332 图	E 区 出土石器 (10)	336
第 275 图	C 区 出土石器 (8)	277	第 333 图	E 区 出土石器 (11)	337
第 276 图	C 区 出土石器 (9)	278	第 334 图	E 区 出土石器 (12)	338
第 277 图	C 区 出土石器 (10)	279	第 335 图	E 区 出土石器 (13)	339
			第 336 图	E 区 出土石器 (14)	340

第 337 図	E 区 出土土器 (15)	341	第 394 図	土版 (1)	398
第 338 図	E 区 出土土器 (16)	342	第 395 図	土版 (2)	399
第 339 図	E 区 出土土器 (17)	343	第 396 図	土版 (3)	400
第 340 図	E 区 出土土器 (18)	344	第 397 図	土版 (4)	401
第 341 図	E 区 出土土器 (19)	345	第 398 図	耳飾り (1)	403
第 342 図	E 区 出土土器 (20)	346	第 399 図	耳飾り (2)	404
第 343 図	E 区 出土土器 (21)	347	第 400 図	耳飾り (3)	405
第 344 図	E 区 出土土器 (22)	348	第 401 図	耳飾り (4)	407
第 345 図	E 区 出土土器 (23)	349	第 402 図	耳飾り (5)	408
第 346 図	E 区 出土土器 (24)	350	第 403 図	耳飾り (6)	409
第 347 図	E 区 出土土器 (25)	351	第 404 図	耳飾り (7)	410
第 348 図	E 区 出土土器 (26)	352	第 405 図	耳飾り (8)	411
第 349 図	E 区 出土土器 (27)	353	第 406 図	耳飾り (9)	412
第 350 図	D 区 石器 (1)	354	第 407 図	耳飾り (10)	414
第 351 図	H・G 区 全体図・基本土層	356	第 408 図	耳飾り (11)	415
第 352 図	G 区 出土土器 (1)	357	第 409 図	耳飾り (12)	416
第 353 図	H 区 出土土器 (1)	358	第 410 図	土製垂飾	418
第 354 図	H 区 出土土器 (2)	359	第 411 図	有孔土製円盤 (1)	419
第 355 図	I 区 全体図	360	第 412 図	有孔土製円盤 (2)	420
第 356 図	I 区 基本土層	360	第 413 図	土錘	421
第 357 図	I 区 S202～218 平面図・断面図	361	第 414 図	匙・手燭形土製品 (1)	423
第 358 図	I 区 S210 平面図・断面図	362	第 415 図	匙・手燭形土製品 (2)	424
第 359 図	I 区 出土土器 (1)	363	第 416 図	匙・手燭形土製品 (3)	425
第 360 図	I 区 S215 平面図・断面図	364	第 417 図	土器片錘・その他の土製品	426
第 361 図	I 区 S201 平面図・断面図	364	第 418 図	その他の土製品	428
第 362 図	I 区 出土土器 (2)	365	第 419 図	ミニチュア (1)	429
第 363 図	I 区 出土土器 (3)	366	第 420 図	ミニチュア (2)	430
第 364 図	I 区 遺物出土分布図	367	第 421 図	ミニチュア (3)	431
第 365 図	J 区 出土土器	368	第 422 図	粘土塊	432
第 366 図	K・L 区 全体図	369	第 423 図	石鏃 (1)	435
第 367 図	K・L 区 S1 平面図・断面図	370	第 424 図	石鏃 (2)	436
第 368 図	K・L 区 S1 遺物出土図	371	第 425 図	石鏃 (3)	437
第 369 図	K・L 区 S1 出土土器 (1)	372	第 426 図	石鏃 (4)	438
第 370 図	K・L 区 S1 出土土器 (2)	373	第 427 図	石錐	439
第 371 図	K・L 区 S70 ピット群平面図・断面図 (S7～11・ 13～20・20a・27・29～31・33・36a・36b・39・ 42 (P6)・51～60・P1～10・12～18)	374	第 428 図	E・I 区 出土石器 (1)	441
第 372 図	K・L 区 S3～6・26 平面図・断面図	375	第 429 図	E・I 区 出土石器 (2)	442
第 373 図	K・L 区 S11・12 拡大図	376	第 430 図	玉 (1)	444
第 374 図	K・L 区 S18・19 遺物出土図	376	第 431 図	玉 (2)	445
第 375 図	K・L 区 S7～9 平面図・断面図	376	第 432 図	玉 (3)	446
第 376 図	K・L 区 S16・17・21～23・25 平面図・断面図	377	第 433 図	玉 (4)	447
第 377 図	K・L 区 出土土器 (1)	378	第 434 図	玉 (5)	448
第 378 図	K・L 区 出土土器 (2)	379	第 435 図	石剣類 (1)	449
第 379 図	K・L 区 出土土器 (3)	380	第 436 図	石剣類 (2)	450
第 380 図	K・L 区 出土土器 (4)	381	第 437 図	石剣類 (3)	451
第 381 図	K・L 区 SD2 平面図・断面図	382	第 438 図	石剣類 (4)	452
第 382 図	K・L 区 出土石器 (1)	384	第 439 図	石剣類 (5)	453
第 383 図	K・L 区 出土石器 (2)	385	第 440 図	石剣類 (6)	454
第 384 図	K・L 区 出土石器 (3)	386	第 441 図	石剣類 (7)	455
第 385 図	K・L 区 出土石器 (4)	387	第 442 図	岩版 (1)	456
第 386 図	土偶 (1)	389	第 443 図	岩版 (2)	457
第 387 図	土偶 (2)	390	第 444 図	岩版 (3)	458
第 388 図	土偶 (3)	391	第 445 図	岩版 (4)	459
第 389 図	土偶 (4)	392	第 446 図	独鈷石 (1)	460
第 390 図	土偶 (5)	393	第 447 図	独鈷石 (2)	461
第 391 図	土偶 (6)	394	第 448 図	独鈷石 (3)	462
第 392 図	土偶 (7)	395	第 449 図	西地区出土土器補足	464
第 393 図	土偶 (8)	396	第 450 図	M 区 出土土器	465
			第 451 図	製塩土器 (1)	466
			第 452 図	製塩土器 (2)	467

第 453 図 製塩土器 (3)	468	第 457 図 土製品補足 (1) 動物形	472
第 454 図 異系統・顔面付	469	第 458 図 土製品補足 (2)	473
第 455 図 発泡土器	470	第 459 図 骨角器 (1)	474
第 456 図 籠目土器	471	第 460 図 骨角器 (2)	475

表目次

第 1 表 周辺の遺跡一覧	10~11	第 31 表 C区掲載石器計測観察表
第 2 表 A区遺構計測表	111~112	第 32 表 D・E区掲載石器計測観察表
第 3 表 B区遺構計測表	198	第 33 表 E・I区掲載石器計測観察表
第 4 表 C区遺構計測表	294~296	第 34 表 K L区掲載石器計測観察表
第 5 表 西地区トレンチ遺構計測表	296	第 35 表 石鏃石錐計測観察表
第 6 表 D・E区遺構計測表	354	第 36 表 石鏃未掲載分計測表
第 7 表 I区遺構計測表	368	第 37 表 石錐未掲載分計測表
第 8 表 K・L区遺構計測表	387	第 38 表 炉石等未掲載石器計測表
第 9 表 石器集計表	433	第 39 表 黒曜石計測表
第 10 表 土製品・石製品集計表	476	第 40 表 石錐未掲載分計測表
(以下 C D 所収)		第 41 表 チャート剥片集中地点出土石器計測表
第 11 表 土偶計測観察表 (第 386 ~ 393 図)		第 42 表 垂飾玉類計測観察表 (第 430 ~ 434 図)
第 12 表 土版計測観察表 (第 394 ~ 397 図)		第 43 表 石剣類計測観察表 (第 435 ~ 441 図)
第 13 表 耳飾り計測観察表 (第 398 ~ 409 図)		第 44 表 岩版計測観察表 (第 442 ~ 445 図)
第 14 表 土製垂飾品計測観察表 (第 410 図)		第 45 表 独鈷石計測観察表 (第 446 ~ 448 図)
第 15 表 有孔土製円盤計測観察表 (第 411 ~ 412 図)		第 46 表 石製品玉類未掲載分計測表
第 16 表 土錘計測観察表 (第 413 図)		第 47 表 石剣類未掲載分計測表
第 17 表 手燭形土製品・匙形土製品計測観察表 (第 414 ~ 416 図)		第 48 表 岩版未掲載分計測表
第 18 表 その他土製品計測観察表 (第 417 ~ 418 図)		第 49 表 独鈷石未掲載分計測表
第 19 表 ミニチュア土器計測観察表 (第 419 ~ 421 図)		第 50 表 白色泥岩等計測表
第 20 表 土製粘土塊計測観察表 (第 422 図)		第 51 表 発泡土器計測観察表 (第 455 図)
第 21 表 土偶未掲載分計測観察表		第 52 表 籠目土器一覧表 (第 456 図)
第 22 表 土版未掲載分計測観察表		第 53 表 動物形土製品計測観察表 (第 457 図)
第 23 表 耳飾り未掲載分計測観察表		第 54 表 その他土製品計測観察表 (第 458 図)
第 24 表 有孔土製円盤未掲載分計測観察表		第 55 表 骨片計測表
第 25 表 土錐未掲載分計測観察表		第 56 表 炭化物種子類計測表
第 26 表 ミニチュア土器未掲載分計測観察表		第 57 表 土器分類集計表
第 27 表 土製円盤未掲載分計測観察表		第 58 表 A区出土銅鏃観察表
第 28 表 粘土塊未掲載分計測観察表		第 59 表 骨角器観察表
第 29 表 A区掲載石器計測観察表		第 9-2 ~ 10 表 各地区別石器分類集計表
第 30 表 B区掲載石器計測観察表		

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

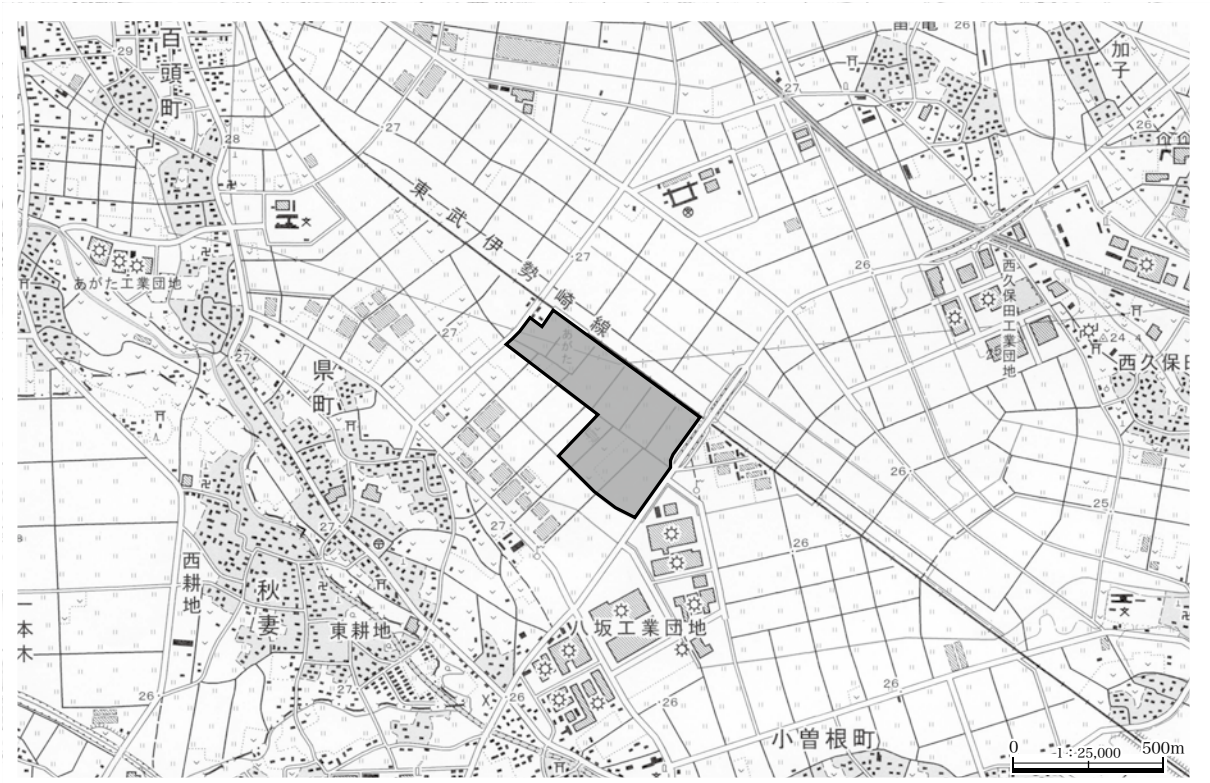
足利市あがた駅南産業団地は、18.4ha（分譲面積 12.4ha）の産業団地で、平成 27～令和元年度にかけて栃木県企業局（以下「県企業局」）が整備した工業団地であり、現在分譲も終了している。魅力ある産業団地の安定的供給をめざす県企業局は、地域や環境への貢献・地方創生に向けた経済活性化の一つとして、東京から 80 km圏内、約 90 分と都内からのアクセスに優れている足利市南部に工業団地の造成を計画した。平成 26（2014）年 11 月あがた駅南産業団地の基礎調査に着手し、平成 27 年（2015）年 7 月には あがた駅南産業団地の事業実施決定、翌平成 28 年（2016）年 9 月には あがた駅南産業団地の造成に着工、平成 29（2017）年 1 月には あがた駅南産業団地の第 1 期予約分の分譲を開始した。

産業団地が計画されて以降、栃木県企業局は、足利市をはじめとする関係機関と協議を行い、開発に先立って栃木県企業局から栃木県教育委員会教育長あて、あがた駅南産業団地事業地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について照会がなされた。これを受けて栃木県教育委員会事務局文化財課（以下「県文化財課」）は、県企業局及び足利市産業開発課と共に平成 27 年 1 月 7 日に所在調査を行い、遺物の多量の散布を認めた。この遺物の確認及び隣接地に市遺跡番号 288 の彦間遺跡があることから、事業地内の確認調査が必要なこと、遺跡が確認された場合発掘調査が必要となり、その際には遺跡の取扱いについて協議を継続してゆく必要がある旨、文書にて回答した。

平成 28 年 1 月県文化財課が事業地内一部の試掘調査を行った（当初の遺跡名は八坂工業団地内遺跡と呼称）。この結果、事業地内の北西側については、調査対象から除外された。その後、試掘調査実施に関わる協議を進め、県企業局による試掘先行調査と共に、平成 28 年 4 月 1 日付けで締結した重要遺跡等範囲確認調査契約の中で当該区域内の確認調査を行うこととなった。その後この計画について、県企業局・足利市産業開発課・県文化財課・埋蔵文化財センターで協議し、6 月にはトレンチによる「先行調査」を開始、また 7 月には重要遺跡等範囲確認調査契約の中で、引き続きトレンチによる確認調査を行った。開発区域内の大半が現況水田の地域であり、湧水の著しい時期に確認調査を行うことは難しい旨



第1図 あがた駅南遺跡の位置



第2図 あがた駅南遺跡の開発区

要望したものの、開発計画の関係もあり、できるだけ早く確認したい旨の県企業局側の要請に応えることとした。これら確認調査の結果を踏まえ、事業地内の埋蔵文化財調査に係る予算・期間・調査範囲について協議を重ねたところ、事業地内の大きく2箇所（東地区及び西地区）の41,800㎡について総額3億6,200万円円で本調査及び整理報告を行う方向で協議された。

その後調査区設定等の準備を進めつつ、同年8月31日に協定を締結し、翌9月1日には県知事と財団理事長名による平成28年度の契約を締結、実際の調査を開始した。また遺跡名についても足利市教育委員会と協議の上「あがた駅南遺跡」と呼称することとなった。当該年度の契約は40,306,000円である。平成28年度調査部分は分譲開始区域との関係から東地区の5,400㎡を対象区域とした。調査によって、当初の推定以上の遺構・遺物が確認されたことから、協定変更を視野に入れての協議を進めたが、事業地の分譲計画も変更できないとのことから、重機の導入や測量委託の効果的な活用により、迅速な調査を推進する方向も含め、引き続き協議を行う方向で調整された。変更契約協議依頼が企地第178号にて財団理事長宛てにあり、見積書提出を受けて11月30日に変更契約の締結を行った。変更内容は面積及び金額の増加であり、8,400㎡、57,554,000円での変更契約締結となった。

平成29年度には4月1日付けで依頼があり、同日付けとち埋文7号にて契約の締結となった。平成29年度は33,400㎡の発掘調査で、当初契約額は216,118,000円である（その後変更契約により198,706,443円）。平成29年度当初においても、西地区の再度の確認調査の結果から、縄紋後晩期の集落跡として推定以上の遺構・遺物があり、当初計画では期間・費用とも困難であることを報告し再度の協議を行ったが、協定の変更はできないとのことから調整は不調に終わっている。このため、調査中においても東地区（V区～VII区）及び西地区の一部（M区）では再度のトレンチ調査により本調査部分を絞り込むことを行い、また作業員の大幅な募集追加、測量委託の積極的な活用などの努力を行った。当該年度末の平成30年3月には東地区及び西



第3図 開発区全体図

地区の全てについて現地での調査を終了することとなった。

平成30年度には整理作業に着手する。事業は整理作業で45,425,880円（変更契約で55,239,948円）の契約である。整理収納箱1,300箱に及ぶ遺物の水洗から始め、分類選別から実測、遺構図の整理など基礎的な整理を行った。なお11月3日にはつくば公民館での展示、平成31年5月12日には足利市文化財愛護協会での講演なども行っている。また遺跡の内容を示した現地での看板も設置された。

平成31年度（令和元年度）の契約内容は整理・報告書作成作業で、当初契約額50,265,609円（変更契約で50,499,609円）の契約で作業を進めた。実測図作成、製図、デジタル化、原稿執筆・観察表作成、編集などを進めた。また理化学分析なども委託し、本遺跡の発掘調査成果をより明らかにできるように努めた。本報告書が作成されたことにより、県企業局による足利市あがた駅南地区産業用地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすべて終了したことになる。

第2節 調査の方法

開発区全域に100m×100mの大グリッドを設定した。南西を起点とし、西よりア・イ・ウ・・・とし、南からA・B・Cとしている。更にこの100mグリッドを分割する形で20m単位のグリッドを南西から1～5、その北側で6～10という順で計25グリッドを設定、更に最小の4mグリッドを、やはり南西から1～5、その北側で6～10というように25分割した（第6図・第2分冊第2図）。つまりEイ24-10というような表記で、遺構の位置、4mグリッド単位の遺物取り上げを行っている。また層位的な把握も行っており、これらの層位も遺物取り上げでは付記している。なお整理にあたってこのグリッドを継承して用いており、本報告でも〇〇-〇〇グリッド出土土器、というように示しており、これは実物の注記や実測図と対応可能である。

XYの座標値は世界測地系の数字である。一部地点で測量上の誤差・齟齬が見られており、測量時によるずれがある（最大1.2m）点、全体を見る上では注意が必要である。また西地区の最優先区A区やトレンチ拡張区では任意の方向及び範囲のグリッドを設定しており、座標との整合ではやや問題も残されている。基本的に遺構名は西区と東区で異なり、更に西地区の中でも地区毎、場所によってはグリッド毎に付しており、混乱が生じている（A区ア1-S2など）。遺構の整理不十分なまま、遺物の整理を行った部分もあることから、原則として遺構名の改称はせず、当初現地で付した遺構名のままとしている。西地区のトレンチについても最初に付した○数字のトレンチと△数字のトレンチがあり、一部混乱がある。遺物についても混乱しないよう、○数字トレンチについては点を付すなどで区別したが、不徹底な部分がある。

調査では特に西地区で日常的に多量の遺物が出土したこと、複数の担当者が複数の地区を担当したことなどから、記録化にあたって統一がとれていない部分がある。また、一部の記録類には今後の更なる整理追跡が必要なところもある。

整理に際しては、多量の遺物であったことから、西地区出土遺物については、水洗後分類を行い、無文の胴部破片や微細な小片については注記以降の整理作業を省略した。また石器・礫の一部については整理資料から除外し、土器などについても一部の復原個体は実測図化を行い得ず、限定的な資料提示となっている。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

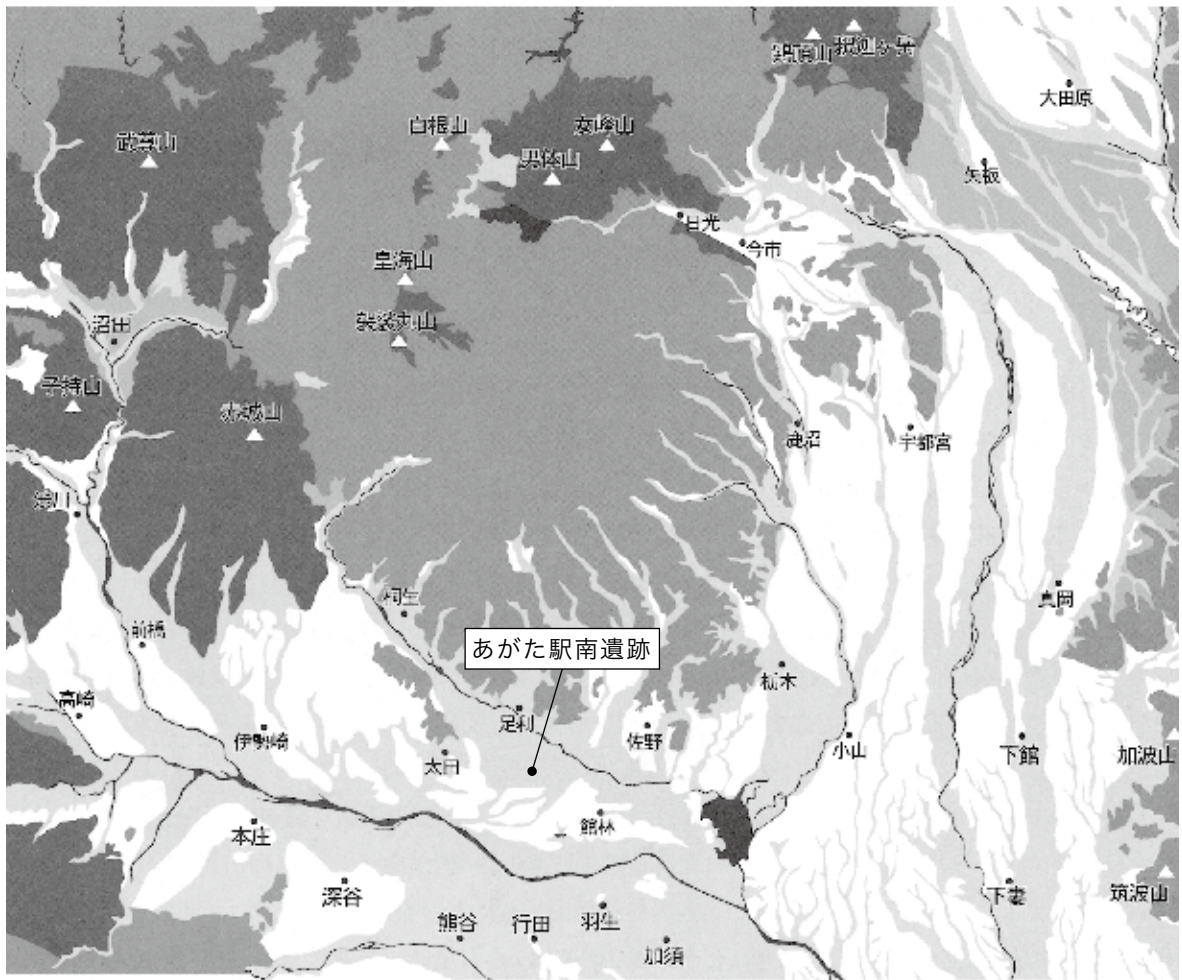
栃木県は関東平野の最北にあり、東北地方から続く山岳部と関東平野の北縁が接する地域である。県の東西に山地があり、東部には八溝山地が、南西部には足尾山地がある。県央部は南北に長い平野部で、主に丘陵部、台地及び低地で形成される。

あがた駅南遺跡が位置する足利市は栃木県の南西部に位置し、東は栃木県佐野市、南～西は群馬県太田市・邑楽郡・館林市、北西は群馬県桐生市に接する。栃木県南西部から群馬県南東部に跨る一帯は栃木県・群馬県の旧国名である下毛野・上毛野になぞらえて両毛地域と呼称され、足利市は隣接する佐野市、桐生市、太田市及び館林市などと共に同地域の中核をなしている。経済的・文化的な繋がりは、県庁所在地である宇都宮市よりも群馬県東部地域における大規模市町との関係の方が密である。

地形的には関東平野の北縁に立地し、市域北部は日光や足尾の山々に連なる山地となる。山地は松田川・袋川・田島川・名草川・樺崎川などの南流する小河川に浸食され、深い谷地形が形成されている。現在の足利市街地北部では、田島川、名草川、樺崎川が谷の出口付近で扇状地を作り袋川に合流する。袋川は沖積地を形成しながら南流し渡良瀬川に注ぐ。沖積地内には、浸食の進んだ足尾山地の末端が稲荷山（標高 88.6 m）などの独立丘陵となって残されている。鏝阿寺（源姓足利氏の居館跡）や足利学校跡の所在する足利市街地は、こうして形成された沖積地の南西部分に位置し、渡良瀬川北岸の自然堤防上を中心に発達してきたのである。

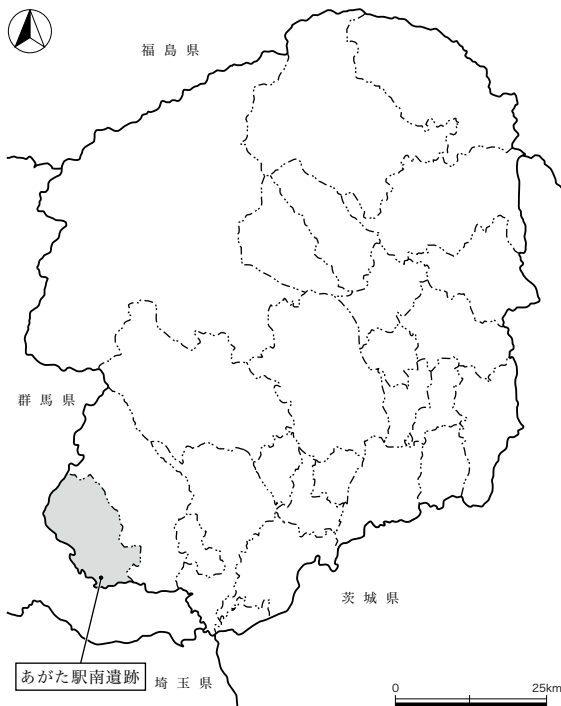
一方、市街地中央部を東へと貫流する渡良瀬川より南の市域南部には平地が広がる。ここは渡良瀬川が流路を変えつつ盛んに削平と堆積を繰り返して作り上げた扇状地で土地は肥沃であり、現在は米、麦のほかトマト、いちご、大根、人参等多種多様な農産物を生産するほか、冬季の豊富な日照量を活用した野菜や花卉のハウス栽培も盛んである。渡良瀬川扇状地は太田金山・八王子丘陵と足尾山地との間に広がる広大な扇状地で群馬県桐生市付近を扇頂とし、太田市下小林から御厨地区付近とを結ぶ線を扇端とする。洪積世後半から完新世に形成されたもので、下部に浅間板鼻褐色軽石群を含むローム層が堆積する最も古い形成面は扇状地の西側にあり、東側ほど新しい段階の形成面となる。扇状地の形成とともに渡良瀬川は東へと移動し、当初は金山・八王子丘陵のすぐ東側にあった流路は菰川筋、矢場川筋へと移っていった。縄紋時代から古墳時代前期頃までの流路は現在の菰川筋で、古墳時代あるいはそれ以後に洪水によって運ばれた土砂で一帯が覆われ、渡良瀬川は現矢場川筋へと移動したと考えられている。中世の流路は、太田市市場と足利市借宿の間を南下して現矢場川に沿って流れ、市内南東部の下野田付近で現在の渡良瀬川の位置になっていた。現在の流路は、永禄5（1562）年と8（1565）年に起きた大洪水を契機に改修した結果とみられている。

あがた駅南遺跡は JR 両毛線足利駅から南東へ約 5 km ほどの足利市県町に所在する。地形区分図でも明らかのように周辺一帯は低地であるが、詳細に見ると渡良瀬川によって形成された扇状地面と自然堤防、後背低地などが入り組む複雑な地形であり、旧河道とみられる低地もある。また藤本観音山古墳などが位置する新宿町などには、扇状地形成時の侵食を免れた中部及び上部ローム層が堆積する洪積台地もわずかに存在する。現在の集落や遺跡の多くは洪積台地や扇状地面、自然堤防といった微高地上に立地している。あがた駅南遺跡周辺の標高は 26 m で低地内に位置するが、表土及び後世の堆積土を除去すると縄紋時代や古墳時代の遺構がある部分はそれ以外の地区より若干高くなっており、低地の中に埋没した微高地上に位置するものといえる。遺跡の南西側は広い自然堤防であり、調査地点は自然堤防の縁辺部と見ることがもできる。なお周辺は水はけが悪く、雨が続くと調査区が水没することが常であった。



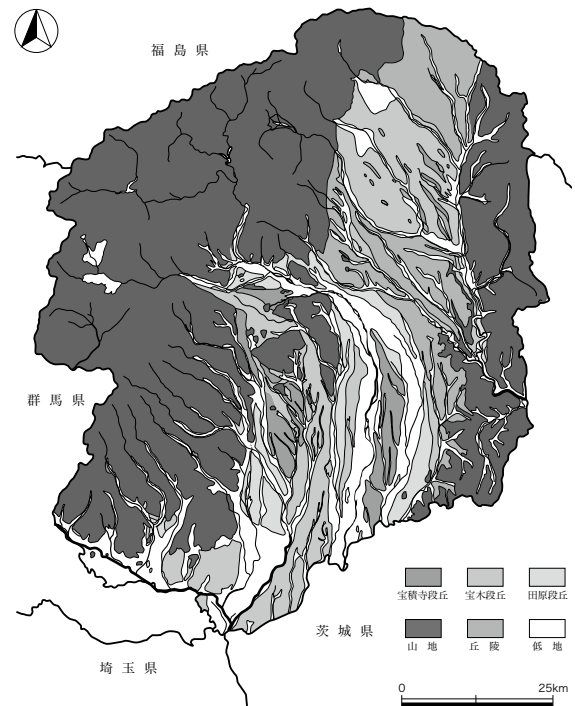
沖積地
 台地
 丘陵
 岩石山地
 火山

0 20km



あがた駅南遺跡 埼玉県

0 25km



宝積寺段丘
 宝木段丘
 田原段丘

山地
 丘陵
 低地

0 25km

第4図 周辺の地形区分図

第2節 歴史的環境

あがた駅南遺跡は矢場川左岸の沖積地に位置し、縄紋・古墳時代を中心に縄紋時代から中・近世までの遺構・遺物が確認された。周辺の遺跡の分布より、本遺跡を取り巻く歴史的な環境を概観する。なお、本遺跡周辺となる渡良瀬川南岸の遺跡のほとんどは、自然堤防等の微高地上に占地している。

旧石器時代 小曾根遺跡でナイフ形石器が出土する。前節で触れたように当該期の本遺跡周辺は渡良瀬川が扇状地を形成している段階でありローム層は安定的に堆積していないが、扇状地内の一部には洪積台地が残存する。小曾根遺跡は残丘状に残る狭い洪積台地上に立地するために遺物が確認できたものといえる。

縄紋時代 縄紋時代草創期の遺跡は山麓の斜面や、平地の微高地上に分布する。山下町にある平石遺跡では草創期から前期にかけての土器が出土し、昭和56年に発掘調査された菅田西根遺跡では、ローム層を地山とする微高地上から撚糸紋系の土器が出土する。早期には遺跡数が増加し、山麓斜面の他に北部山麓の平坦地や南部の洪積台地にも分布し始める。本遺跡から最も近い高松遺跡（59）では条痕文系土器が出土する。前期には遺跡数が更に増加し、早期同様の立地に加えて扇状地や洪積台地でも遺跡がみられるようになる。反過遺跡では羽状縄紋の土器を伴う竪穴住居跡が発見され、菅田町の神畑遺跡では関山Ⅱ～黒浜式古段階にかけての土器や前期初頭から後半にかけての石器などが住居跡に伴って出土、市街地北部の田島川沿岸に位置する田島持舟遺跡では黒浜式を主体に関山式期、諸磯式期の土器片が出土する。中期には遺跡数の変化はあまりないが、山地斜面に立地する遺跡は減少し、山麓の平坦地や微高地上に多くなる。現渡良瀬川河川敷にあって中期後葉の竪穴住居跡5軒が確認された奥戸遺跡や散布地である新田町遺跡などは沖積地内の微高地上に立地する遺跡の一例である。後期中葉以降は、県内他地域と同様遺跡数が減少する。立地は中期と同じく平坦地だが、山麓斜面の遺跡も認められる。この時期の遺跡には、神畑遺跡、北郷小裏遺跡、足利公園遺跡、反過遺跡がある。晩期には遺跡数は激減し、後期から継続する遺跡が台地や微高地上に営まれる。洪積台地上に占地するとみられる高松遺跡（59）では早期から晩期の遺物が多量に出土するが、主体は後期中葉から晩期である。本遺跡の南東2kmの距離にあり耳飾りや土偶、岩版、土版なども出土し、本遺跡との関連が注目される。近隣ではこのほか馬宮古墳（41）、久保田西馬場遺跡（49）、西久保遺跡（51）などで遺物が確認でき、高松遺跡東側に位置する中日向遺跡では早期、前期及び晩期の土器が出土する。

弥生時代 市内の弥生時代の遺跡は、水稻耕作に適した平地や低湿地を臨む山裾や低台地、低地などに立地する。名草川流域や渡良瀬川北岸の市街地などに分布するが、発掘調査が行われた遺跡は少なく、大半は散布地である。名草川西岸の菅田西根遺跡では、弥生時代後期の住居跡や古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代後期に廃絶するとみられる水田跡等が確認された。神畑遺跡でも弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓が確認されている。田島持舟遺跡からは、中期後半の壺棺墓、後期吉ヶ谷式と樽式の土器を伴う住居跡3軒等が発見されたほか、前期～後期の土器等が出土する。市街地の本城一丁目遺跡は中期から後期の散布地で須和田式や樽式土器が確認され、赤松台遺跡、利保南遺跡からは後期赤井戸式の土器が出土する。本遺跡に近い渡良瀬川南側では、反過遺跡や中沖遺跡（36）などで後期の土器片が出土するほか、本遺跡南東の高松遺跡東側に位置する中日向遺跡で中期の再葬墓3基が確認され、1基は合わせ口にした壺2個体、1基は土器と凹み石、1基は赤彩された石が各遺構内から出土する。

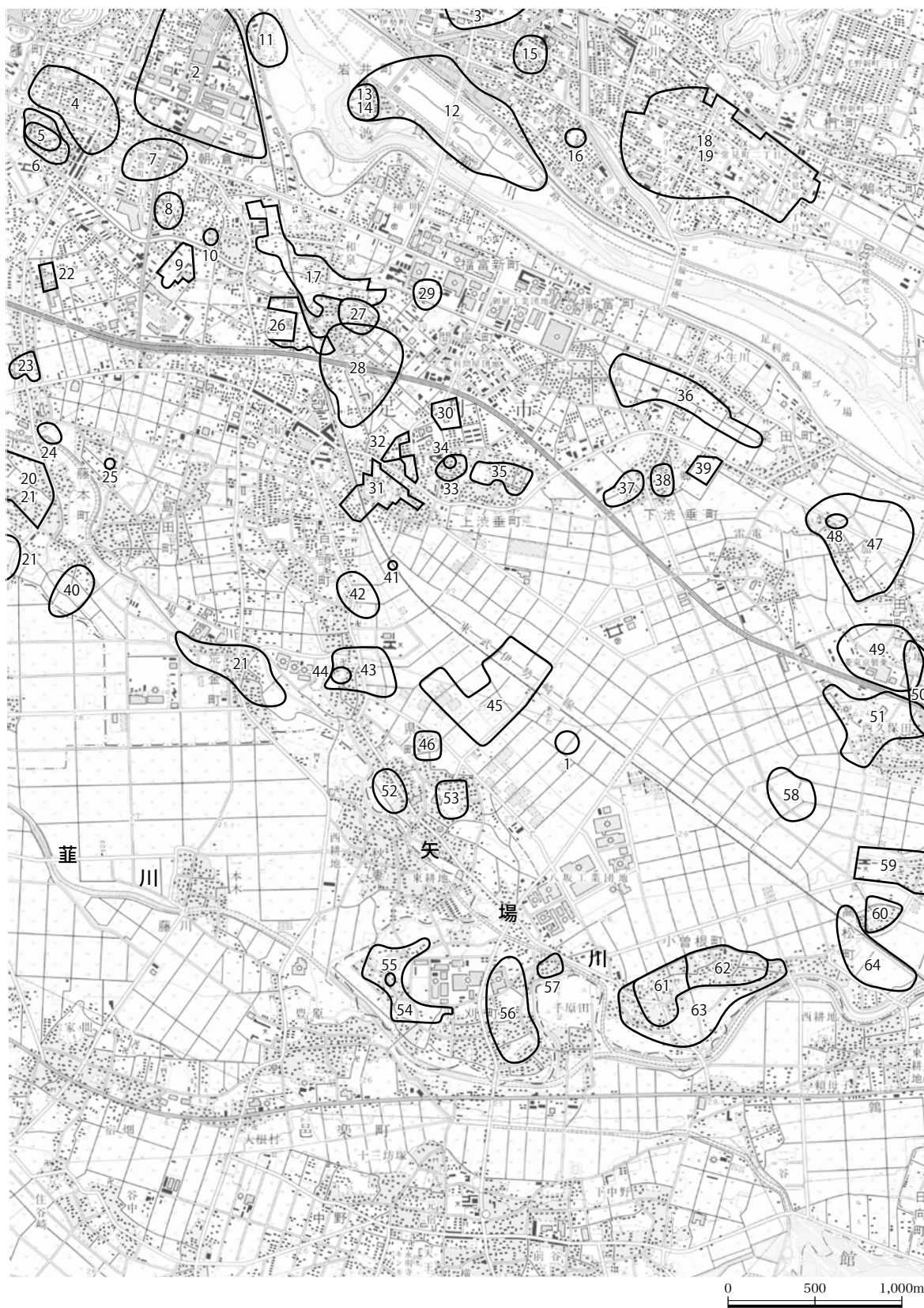
古墳時代 足利市内には1,300基以上の古墳があるとされ、全国有数の古墳集中地域である。前期古墳では小曾根浅間山古墳（前方後円墳、63）や国指定史跡の藤本観音山古墳（前方後方墳）などがあり、本遺跡に近い渡良瀬川南部に多く分布する。前期のやや早い段階から前方後円墳が存在することは、前期に前方後方墳が築かれ続ける栃木県の様相とは異なり、群馬県域との関連を強く感じさせる。中期には渡良瀬川南部

に加え、渡良瀬川北岸の市街地東部周辺に勸農車塚古墳や助戸十二天古墳など帆立貝形の前方後円墳が築かれる。分布域はやや広がるが、数にさほど変化はない。後期には築造数が爆発的に増加し、渡良瀬川北岸の山麓や山頂に多数の古墳群を形成する。墳形は円墳主体だが、足利公園古墳群や機神山古墳群などのように30～40mの前方後円墳を主墳とする古墳群もある。袋川下流の常見古墳群では全長103mの前方後円墳である正善寺古墳など大規模な古墳が集中し、正善寺古墳－海老塚古墳（円墳、径50m）－口明塚古墳（円墳、径48m）へと続く首長墓系譜が辿れる。本遺跡周辺では、小曾根浅間山古墳（前期、前方後円墳）と永宝寺古墳（後期、前方後円墳）のほか円墳等7基からなる小曾根古墳群（63）、藤本観音山古墳を含み90基以上あったされる矢場川古墳群（21）、中期後半～後期前半の墳墓が調査された新宿遺跡（20）、後期の横穴式石室から馬具や須恵器等が出土した文選11号墳を含む文選遺跡（31）、前方後円墳1基、円墳33基以上があったとされる後期の明神山古墳群（5、市指定）、全長38mの前方後円墳と推定される羽刈観音山古墳（55）等、前期から後期の古墳が数多く存在する。煙滅した古墳では、全長90mの前方後円墳と伝わる中里車塚古墳（29）、前方後円墳で銅鏡や銅鏃出土とされる県天王塚古墳（52）、前方後円墳の加子車塚古墳（48）、県薬師堂古墳（53）、5基以上からなる前田古墳群（42）、古墳4基の久保田古墳群（50）等がある。

集落跡は、古墳の様相と一致する動向が看取される。前期では足利市南部に多く、反過遺跡では昭和57・58年の調査で3軒の前期住居跡が確認される。中期は前期に比べ遺跡数はさほど変わらないが、渡良瀬川南岸地域に加え国府野遺跡など市街地周辺でも確認できるようになる。後期になると東部・西部・北部の山間部へ分布域を広げ、遺跡数も増加する。本遺跡周辺では小曾根遺跡（61）で中期の竪穴住居跡2軒、新宿遺跡（20）で中期末～後期初頭の集落、中沖遺跡（36）で前～後期の竪穴住居跡、高松遺跡（59）で後期の集落をそれぞれ確認しているほか、明体遺跡（58）や和泉遺跡（17）で前期土器が出土する。これ以外に散布地もあり、一帯には古墳時代各期の集落が多数存在すると考えられる。なお、久保田町の神取町遺跡では後期の小区画水田の畦畔が確認されている。

奈良・平安時代 足利市における奈良時代の遺跡数は古墳時代後期と比較して大きな変化はないが、平安時代になると遺跡数は減少する。下野国は和名類聚抄によれば足利、梁田、安蘇、都賀、寒川、河内、芳賀、塩屋、那須の9郡で構成される。今日の足利市は足利郡と梁田郡に相当すると考えられ、足利郡は大窪、田部、堤田、土師、余部の5郷、梁田郡は大宅、深川、余部の3郷があったとされる。また、足利郡には駅家の所在が記されている。梁田郡は渡良瀬川南側の市域南部にほぼ相当すると考えられ、田中・朝倉条里跡（2）北側の反過遺跡とその周辺を足利郡田部郷、上洪垂伊勢宮遺跡（30）周辺を梁田郡大宅郷とする想定もある。

足利郡の群衙推定地は現在のJR両毛線足利駅周辺に所在する国府野遺跡であり、基壇建物跡、掘立柱建物跡、柵列や区画溝等の遺構が発見されている。第9次調査では正倉とみられる総柱建造物群が確認され、8世紀中葉から9世紀代の瓦が大量に出土する。中里阿弥陀前遺跡（28）では多数の火葬墓のほか複弁蓮華文軒丸瓦などが出土し、梁田郡衙に推定されている。須恵器や瓦の窯跡は市街地北側の山麓部に所在し、田島岡古窯跡では須恵器窯と瓦窯が確認された。瓦は極印文叩きと縄叩きを特徴とし、国府野遺跡へ供給されたとみられる。30km離れた下野国府跡でも出土例があり、9世紀初頭に編年されている。田中古窯跡では下野国分寺跡出土瓦と同様の軒丸瓦が出土し、馬坂古窯跡群では3基以上の須恵器窯が確認される。小曾根遺跡（61）では鍛冶関連遺物が出土し、鍛錬鍛冶が行われたと推定されている。条里遺構は市街地北寄りの江川・利保条里跡、助戸・大月条里跡、東武足利駅周辺にある田中・朝倉条里跡（2）がある。水田では田中・朝倉条里跡と中沖遺跡（36）で浅間B軽石下の水田を調査しているほか、下八幡遺跡（4）、菅田西根遺跡、毛野中南遺跡で畦畔等が確認されている。また、下八幡遺跡では陸稲栽培に関わる畝状遺構も調査している。



第5図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時期	備考
1	あがた駅南遺跡	集落跡	縄文、古墳 ～近世	
2	田中・朝倉条里跡	条里跡	奈良～平安	古代条里制の遺構。
3	助戸・勸農遺跡	集落跡	縄文～平安	古墳～平安の住居跡40軒以上。大規模集落。
4	下八幡遺跡	集落跡	古墳～平安	12次の発掘調査。奈良～平安の住居跡、畑作遺構、水路等確認。
5	明神山古墳群	古墳	古墳	市指定史跡。後期群集墳。前方後円墳1、円墳31、円墳か方墳1の計33基。うち10基調査。
6	明神山遺跡	散布地	縄文～平安	縄文草創期土器、弥生中期後半土器、奈良火葬墓など
7	中遺跡	散布地	古墳～中世	古墳前期～室町時代頃までの遺物出土。
8	根本神社古墳	古墳	古墳	一辺25m程度の方形状。前方後方墳の可能性あり。周辺古墳数基あったとされる。
9	福居台遺跡	散布地	奈良～平安	土師器、須恵器の小片。
10	天王古墳	古墳	古墳	鹿島神社境内内。円墳と推定。墳頂部に神殿。
11	田中阿弥陀堂遺跡	散布地	奈良～平安	土師器の小片。
12	勸農遺跡	散布地	縄文	縄文土器、石器採集。
13	岩井山古墳群	古墳	古墳	円墳3基。
14	勸農城跡	城館跡	中世	平山城。
15	勸農車塚古墳	古墳	古墳	中期前葉の帆立貝形前方後円墳。後円部径70m以上で周溝幅20m以上。埴輪、滑石製模造品。
16	竜蔵寺古墳	古墳	古墳	前方後円墳。
17	和泉遺跡	散布地	弥生～平安	特に弥生後期土器出土地として著名。
18	常見遺跡	散布地	縄文～平安	小学校建築工事の際、縄文後期と奈良・平安時代の遺構・遺物多数出土。
19	常見古墳群	古墳	古墳	正善寺古墳(前方後円墳、全長103m、6C後半)、海老塚古墳(円墳、全長53m、6C後半)、口明塚古墳(円墳、全長45m、7C前葉)、星の宮古墳、田島古墳ほか小円墳もあり。
20	新宿遺跡	古墳、集落跡、 城館跡	縄文～古墳、 中世	矢場川城の堀、中世土抗墓。縄文土器、土師器、須恵器、埴輪、玉類、かわらけ、磁器出土。
21	矢場川古墳群	古墳	古墳	藤本観音山古墳、上宿古墳、淵ノ上古墳などの現存古墳含む。昭和10年には径90基の円墳主体の古墳群。
22	天神前遺跡	散布地	古墳～平安	土師器採集。塚があったと言われる。
23	掘込宮前遺跡	散布地	奈良～平安	土師器片。
24	久島遺跡	散布地	奈良～平安	土師器片。
25	島田古墳	古墳	古墳	円墳と推定。上部に石碑。
26	諏訪遺跡	散布地	奈良～平安、 近世	土師器、須恵器、土錘、陶器等。近世の屋敷跡と推定される場所あり。
27	中里城跡	城館跡	中世	南北に長い台形。北西～南東の土塁残存。土塁高1.8m、幅6～7m、箱罫研状の堀は深さ1.8m、幅5m。足利氏の家臣柳田伊豆守が築城とされる。
28	中里阿弥陀前遺跡	墓地	古墳～平安、 中世	国道50号部分調査。古代～中世の土抗墓確認。土師器、須恵器、黒色土器、陶器、瓦、埴輪等出土。
29	中里車塚古墳	古墳	古墳	明治時代に煙滅。推定全長90mの前方後円墳で直刀、玉類、埴輪等出土といわれる。
30	上渋垂伊勢宮遺跡	散布地	奈良～平安	発掘調査済。住居跡、溝確認。土師器、須恵器、緑釉陶器等出土。
31	文選遺跡	散布地	古墳～平安	古墳群と散布地。古墳は4基現存の他6基以上煙滅。土師器、須恵器、埴輪、古墳から馬具や刀剣類出土。
32	御邸遺跡	散布地	古墳～平安	土師器、須恵器。
33	阿海街道遺跡	散布地	古墳	土師器。
34	阿海街道館跡	城館跡	中世	北東部に幅3.5mの堀と幅5×高2mの土塁50m残存。
35	厨子遺跡	散布地	古墳	埴輪、土師器。
36	中沖遺跡	散布地	古墳～平安	古墳前期～平安の集落。As-Bに覆われる水田と畦畔確認。発掘調査や工事の際土師器、須恵器出土。
37	西浦遺跡	散布地	古墳	土師器、埴輪。
38	下渋垂本郷館跡	城館跡	中世	北、西、南の一部に堀。北側の堀は長さ70mでオクラ堀と称する。
39	梁田宮内遺跡	散布地	古墳	土師器。古墳があったとされる。

No.	遺跡名	種別	時期	備考
40	永代遺跡	散布地	奈良～平安	土師器、カワラケ。
41	馬宮古墳	散布地、古墳	縄文、古墳	古墳は線路工事や耕地整理で削平。埴輪、土師器、須恵器、石斧出土。
42	前田古墳群	古墳	古墳	煙滅。5基以上といわれる。埴輪(円筒、馬)出土。
43	県上遺跡	散布地	古墳～平安、中世	埴輪、土師器、カワラケ、磁器等出土。
44	上県城跡	城館跡	中世	長さ50m、幅1mの堀残存。堀内側(南側)に土塁の痕跡あり。「陣屋畑」、「前田」の地名あり。
45	彦間遺跡	散布地	古墳～平安	埴輪、土師器、須恵器、灰釉、陶器等。
46	県中妻館跡	城館跡	中世	地籍図より東西、南北とも100mの方形と推定。北側に高1.5m、長30mの土塁。内側の幅1.5mの堀は現状水路。西、南、東にも水路通じる。
47	東可子遺跡	散布地	古墳～平安	土師器、須恵器、埴輪。
48	可子車塚古墳	古墳	古墳	煙滅。前方後円墳。「神加子車塚両皇大神宮跡」の碑。
49	久保田西馬場遺跡	散布地	縄文、古墳～平安	縄文土器、土師器、須恵器。
50	久保田古墳群	古墳	古墳	削平。地籍図や埴輪などより4基(浅間神社古墳、観音堂古墳、塔ノ木稲荷神社古墳、吉次塚)確認。
51	西久保遺跡	散布地	縄文、古墳～平安	縄文土器、土師器、須恵器。
52	県天王塚古墳	古墳	古墳	煙滅。前方後円墳。三角縁神獣鏡や銅鏃出土とされる。
53	県薬師堂古墳	古墳	古墳	煙滅。薬師堂西に盛り土があったとされる。土師器、須恵器、カワラケ、磁器等。
54	西原・小屋川遺跡	散布地	古墳～平安	土師器、須恵器、カワラケ。
55	羽刈観音山古墳	古墳	古墳	前方後円墳であろう。全長38m、口縁部高3m。墳丘両側が削られ土手状。
56	羽刈久保遺跡	散布地	奈良～平安	土師器、須恵器。
57	下ノ宮館跡	城館跡	中世	幅5m、高さ1.5mの土塁が鉤の手状に残存。東側7m、南側5m。
58	明体遺跡	散布地	古墳～平安	土師器。
59	高松遺跡	集落跡	縄文、古墳	発掘調査2回実施。縄文時代(早期～晩期)と古墳時代(後期)の集落跡。経石出土。
60	八形城跡	城館跡	中世	東西約140m、南北約170mの方形に堀を巡らせた平城と推定。西側に堀と土塁、北側に堀残存。
61	小曾根遺跡	散布地	古墳～平安、中世	平成20年発掘調査。埴輪、土師器、須恵器、カワラケ、鉄滓等。
62	小曾根城跡	城館跡	中世	3郭からなる平城。北小路館跡(東西約120m、南北100m、土塁・堀あり)、ジョウガイド館跡(東西約100m、南北100m、土塁・堀あり)、寺地館跡(東西約90m、南北80m、土塁あり)。
63	小曾根古墳群	古墳	古墳	前方後円墳の小曾根浅間山古墳(前期、全長58m、市指定)と永宝寺古墳(後期、全長48m、市指定)のほか残存2基、消滅4基、不明1基の計9基。多くは円墳と推定。
64	八形遺跡	散布地	古墳～平安	埴輪、土師器等。隣接する水田から石斧、石鏃、土器、カマド等発見とされる。

集落としては国府野遺跡と助戸・勤農遺跡(3)がともに古墳時代から継続する集落で、助戸・勤農遺跡はこれまでに9次にわたって発掘調査が行われ、8世紀末から9世紀の住居跡45軒が確認されている。市街地北部では北関東自動車道建設に伴って調査された田島持舟遺跡や和田遺跡がある。本遺跡周辺では、反過遺跡、上渋垂伊勢宮遺跡(30)、文選遺跡(31)、御邸遺跡(32)、高松遺跡(59)、下八幡遺跡(4)などが挙げられ、他の時代同様微高地上に占地する。

10世紀には秀郷流の藤原氏が台頭し足利・梁田両郡を直接支配する在地領主となっていた。11世紀中頃に入ると、前九年・後三年の役によりこの藤原系の勢力範囲に源姓足利氏が拠点を作り始め、開発地を上級権門に寄進しその勢力を強めていった。治承・寿永の乱により藤姓足利氏は滅亡し、現在の足利市域である足利郡と梁田郡は源姓足利氏の支配地域となった。足利氏館跡は源姓足利氏二代目の足利義兼が12世紀末に

築いたとされ、現在は内郭と考えられる部分が鑊阿寺（国指定史跡）境内となっている。ほぼ210m四方の敷地は土塁や堀に囲まれ、居館の形跡をよくとどめる。

中世・近世 平安時代末期には、足利郡・梁田郡という国衙領を支配する藤姓足利氏と、足利庄・梁田御厨の荘園を掌握する源姓足利氏が並立する。あがた駅南遺跡の位置する県町周辺は旧梁田郡に相当すると考えられ、市域南部の多くの地区とともに梁田御厨に包括される。御厨には伊勢神宮が勧請されるが、旧梁田郡地域では福富にある御厨神社を中心に伊勢町、中川町、南大町、里矢場町、百頭町、県町、羽刈町、小曾根町、久保田町、瑞穂野町にそれぞれ伊勢神宮の末社である神明社があり、これが梁田御厨の範囲を示すと考えられている。治承・寿永の乱による藤姓足利氏の滅亡の後には、源姓足利氏の支配となる。鎌倉時代の初めには、源義家の孫にあたる足利義兼が当地を支配した。鑊阿寺境内の大御堂や鐘楼は鎌倉時代のものである。また、市街地北東部の八幡山東麓には、足利氏の菩提寺として浄土庭園を持つ樺崎寺が造営された。

城郭は数多く築かれており、福居町には源姓足利氏家臣柳田伊豆守が南北朝に築城したと伝わる中里城跡（27、市指定）がある。柳田氏の菩提寺である宝福寺が城の西にあり、伊豆守夫妻の花崗岩製層塔2基（市指定）が現存する。層塔には応永二十二（1415）年と三十二（1425）年の陰刻が刻まれる。中里城跡の北側、現渡良瀬川河道に近接する場所には足利長尾氏初代長尾景人が文正元（1466）年に居城として築いた岩井山城跡（勸農城跡、14、市指定）がある。本遺跡周辺の自然堤防上などには、阿海街道館跡（34）、下渋垂本郷館跡（38）、上県城跡（44）、県中妻館跡（46）、下ノ宮館跡（57）、八形城跡（60）、小曾根城跡（62）、高松遺跡西側の高松西馬場館跡など、多くの城郭が一定の距離を置いて築かれている。遺構や時期の詳細は明らかにされていないが、各城郭とも周囲に巡らされた土塁や堀が部分的に残存する。

近世には、史跡足利学校が徳川幕府による百石の所領を受け繁栄した。史跡整備に伴う発掘調査では、方丈や庫裏、書院などの建物跡や庭園、土塁と堀が確認され、陶磁器や漆椀、古銭等が出土している。あがた駅南遺跡周辺では、朝廷より日光東照宮に幣帛を奉獻するための勅使が通る日光例幣使街道が整備され、八木宿（福居町）と梁田宿（梁田町）の2つの宿が置かれた。幕末には梁田宿にて幕府軍と官軍による戦闘があり、幕府軍戦死者の墓である「梁田戦争戦死塚」、幕府軍の戦死者を追悼する碑である「明治戊辰梁田役東軍戦死者追弔碑」、砲弾を受けた痕跡がある「弾痕の松」が梁田戦争関連史跡として現地に残る。

参考文献

- 足利市教育委員会 1989『足利市遺跡地図』 2009『掘り出された足利の歴史』
 1987『昭和61年度埋蔵文化財発掘調査年報』
 1995『平成6年度埋蔵文化財発掘調査年報』 1997『文選第11号墳発掘調査報告書』
 1998『中日向13号墳発掘調査報告書』 2005『藤本観音山古墳発掘調査報告書Ⅰ』
 2011『新宿遺跡発掘調査報告書』 2013『掘り出された足利の歴史』
- 足利市史編さん委員会 1977『近代足利市史』第一巻 通史編
 足利市史編さん委員会 1979『近代足利市史』第三巻 史料編 原始・古代 中世 近世
 大澤伸啓・斎藤糸子 1998『高松遺跡第2次発掘調査報告書』足利市教育委員会文化課
 佐藤 弘 2013『奥戸遺跡発掘調査報告書』足利市教育委員会文化課
 初山孝行・吉田 哲 2012『小曾根遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
 前澤輝政 1963『御厨高松遺跡の研究』早稲田大学考古学研究室報告第9冊
 谷中 隆・田中裕子 2012『和田遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団

第3章 西地区の遺構と遺物

第1節 西地区調査の概要

調査経過の概要

平成27～28年度にかけて、調査に関わる協議と平行して開発区域内全域を対象に試掘トレンチ調査が行われた（図示省略）。県文化財課による調査と共に、平成28年度には財団への委託事業の中でもこのトレンチ調査を行うこととした。但しこの時は季節的な問題もあって数十cmの掘り下げで湧水が著しくなり、遺構・遺物の確認が困難な状況であった。結果的にこれらのトレンチ調査ではV層包含層上面をトレンチ底面としている部分が多い。その後、西地区内の調査部分が確定してゆくとともに、遺構・遺物の状況を確認するため、再度この西地区内全域にトレンチ調査を行った。また、平成29年度当初には、重機による掘り下げ・表土除去の準備に時間を擁したことから、このトレンチを一部拡張する形で人力による面的調査部分を設定し、掘り下げでの調査を行った。また当初M区としたB区東側、G区北側について、再度2本のトレンチを設定し重機による確認調査を行ったが（図版三七-4）、ここでは遺構・遺物とも認められなかったことから、協議を経て本調査除外区とした。なお平成29年度後半に当初公共緑地と予定された部分の西地区調査区の南端に水道管を設置する工事が計画され、契約範囲外であったものの一部工事立会の形で遺構の確認・遺物の回収を行った（図版三七-5.6）。ピットが少数確認されると共に、KL区に隣接するところ等では土器復原個体の出土も見られた。この立会部分について、担当者間の齟齬・ミスによりM区と呼称してしまったが、ここで出土した資料について、極めて限定的であるが、一部示す（第450図）。なお個体によってはおおまかな出土位置を記録したのものもあるが、整理途上でもあることから、調査区の位置を含め別の機会とする。

その後本調査の範囲・面積・期間等が確定し、本調査部分について、工事の進捗に対応する形でA区を最優先に調査し終了後引き渡すこと、その後当該年度中にB区～KL区まで全て本調査を行うこととなった。A区の調査では、遺物が密に確認されると共に、配石遺構や幾つかのピット・土坑が確認され、縄紋後晩期の集落域であることが改めて確認された。

その後、面積的にも広いB区とC区をA区に次ぐ優先区域として、重機による表土除去・掘り下げ後、縄紋時代包含層部分について人力による調査を進めることとした。B区・C区でもそれぞれ住居跡をはじめとする幾つかの遺構、そして極めて遺物量の多い包含層部分を調査することとなったが、一定の層位まで掘り下げた遺構確認・調査後、更に包含層掘り下げ～遺構確認・調査という、何面にもわたる調査であり、単純な面積を基にした積算では対応不能な状況であるにもかかわらず、十分な調査期間を得られず、極めて粗い調査を行わざるを得なかった。

更にその後、調査区南側（工事単位の名称では工業用地内の道路部分）となるG区～L区の表土除去を行い人力による本調査に備えたが、この時点で時間的猶予が無くなったことから、内部のサブトレンチ調査などの結果も参考にして、遺物量が少ない地点については細かい調査を行わずに終了扱いとすること、また遺物量が多い遺物包含層についてもある程度下位まで重機による掘り下げを行うという苦渋の決断を迫られることとなった。KL区では中央の一部を残して、V層包含層全体を重機による掘り下げを行った。

こうして3月末には一通り調査区全体の調査を終えたものの、下層の調査が不十分なところも多い結果が推測された。このことから、3月最終週でより下位の状況を確認すべく、C区やE区について、トレンチを

設定し、重機による下方の状況を確認する調査を行った。これにより一部の下位の状況確認は行い得たものの、全域の丁寧な確認には至らず、総じてD・E区やI区・H区・KL区では掘り下げ調査や記録化を断念した部分が多く、このことが検出した遺構数や遺物量にも関わっている。つまり、確認し得なかった遺構が相当数あること、また遺物についても遺漏が多く、とりわけ微小な遺物については、サンプリングエラーがかなり多くある点、注意しておく必要はあろう。

西地区トレンチ及びトレンチ拡張区の概要（第8・9図）

平成28年度、当初の調査区全域に設けたトレンチの調査結果では遺構の分布や内容、遺物出土状況について不明な部分が残っていたことから、平成28年度末（29年3月）に、西地区内に31本のトレンチを設定し重機による掘り下げを行った。西地区の調査範囲7,300㎡中約5%にあたる372㎡について調査した。

その結果、トレンチによっては、遺構の存在や密な遺物分布、包含層の厚さ・深さを確認することができ、本調査の期間等に関わる協議データとした。この時点で、土器石器以外にも、土偶などの土製品が確認され、包含層の調査に時間がかかる点、予想された。平成29年度当初（4～6月）、重機による表土除去を行うまでの期間で、人力で面的に調査する場所を数ヶ所設定し、遺構・遺物の状態を確認するようにした。これがトレンチ拡張区で、第7図に示したように、6箇所約4m四方程度の面的調査を行った。T7拡張区のように殆ど遺構・遺物とも見られなかった部分もあるものの、これ以外では密な遺物包含層が確認され、この調査、更に精査しての遺構確認・調査を行った。

ここでは、トレンチ拡張区での遺構・遺物の状況について報告する。なおT15東拡張区及びT16西拡張区は、後にA区の調査部分となり、遺構についてもそこで報告する。但し遺物については、トレンチ出土遺物のまま取り上げたものも多く、若干の混乱が生じている。従って本来A区出土遺物とすべきものについて、一部はここで示している。接合・同一個体判断なども不十分であり、本来検討すべきところである。

トレンチの中には例えば△2トレンチでは遺物が多く遺構の存在も推定されている。その後この部分はKL区のS1として調査した部分に近いところであり、トレンチの調査所見と整合的であった。

△T1拡張区（第8図、写真図版三六）

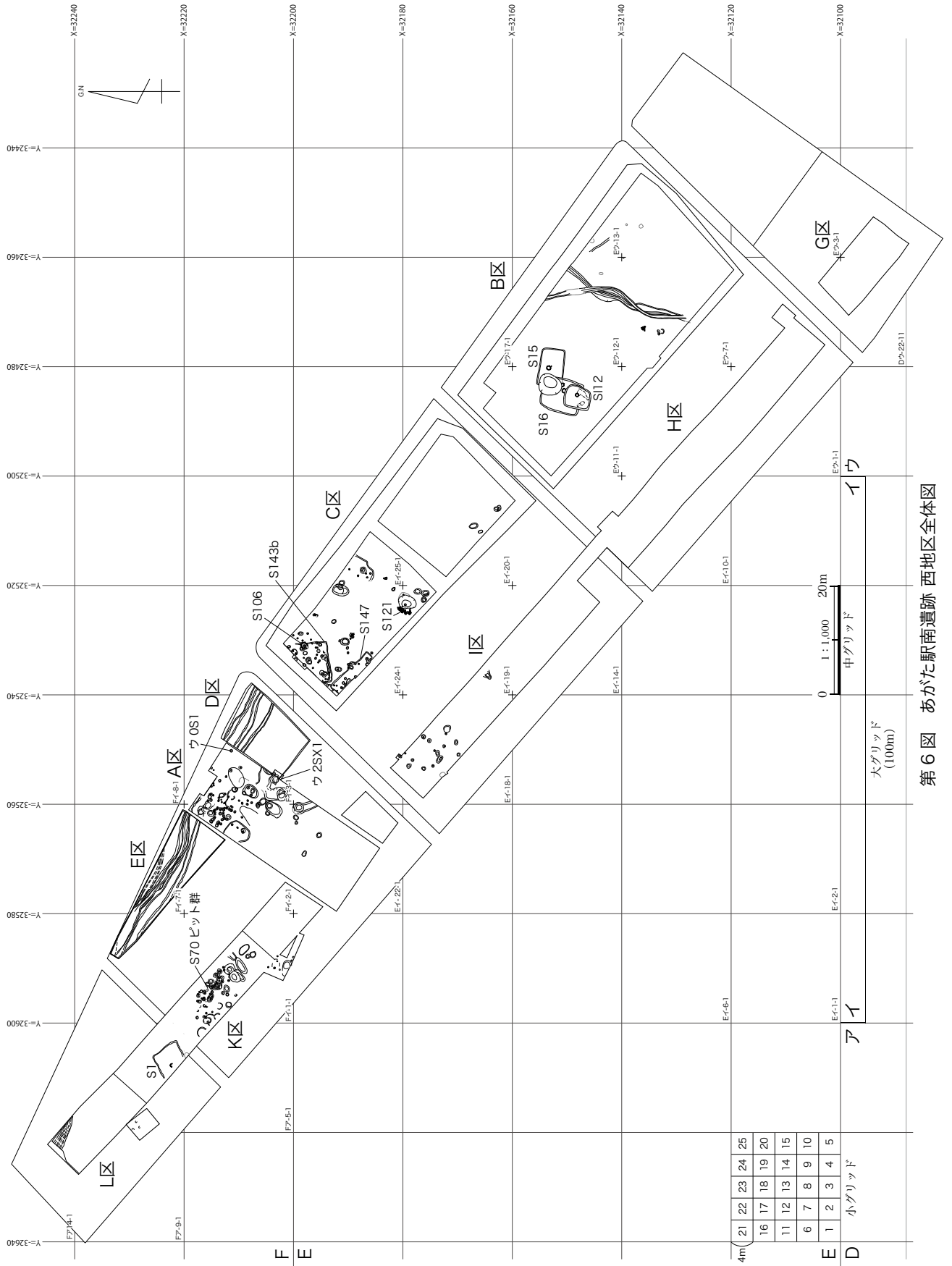
この拡張区は△T1を北側に拡張する予定で設定した。実際にはトレンチから1m程度の距離をおいての4.5×3.5m程度の方形範囲を面的に掘り下げた部分である。本調査区L区の南側にあたる。表土より人力により掘り下げたが、他の調査区と同様、IV層までは遺構遺物とも殆ど無く、V層より急激に遺物出土量が増加している。V層包含層及び以下に示す土器埋設遺構の調査後、VI層以下も若干の掘り下げを行ったが、遺物は出土したものの、顕著な出土量では無いこともあって、このVI層より下位の調査は殆ど行っていない。

SX1～SX3（第11図、写真図版三六）

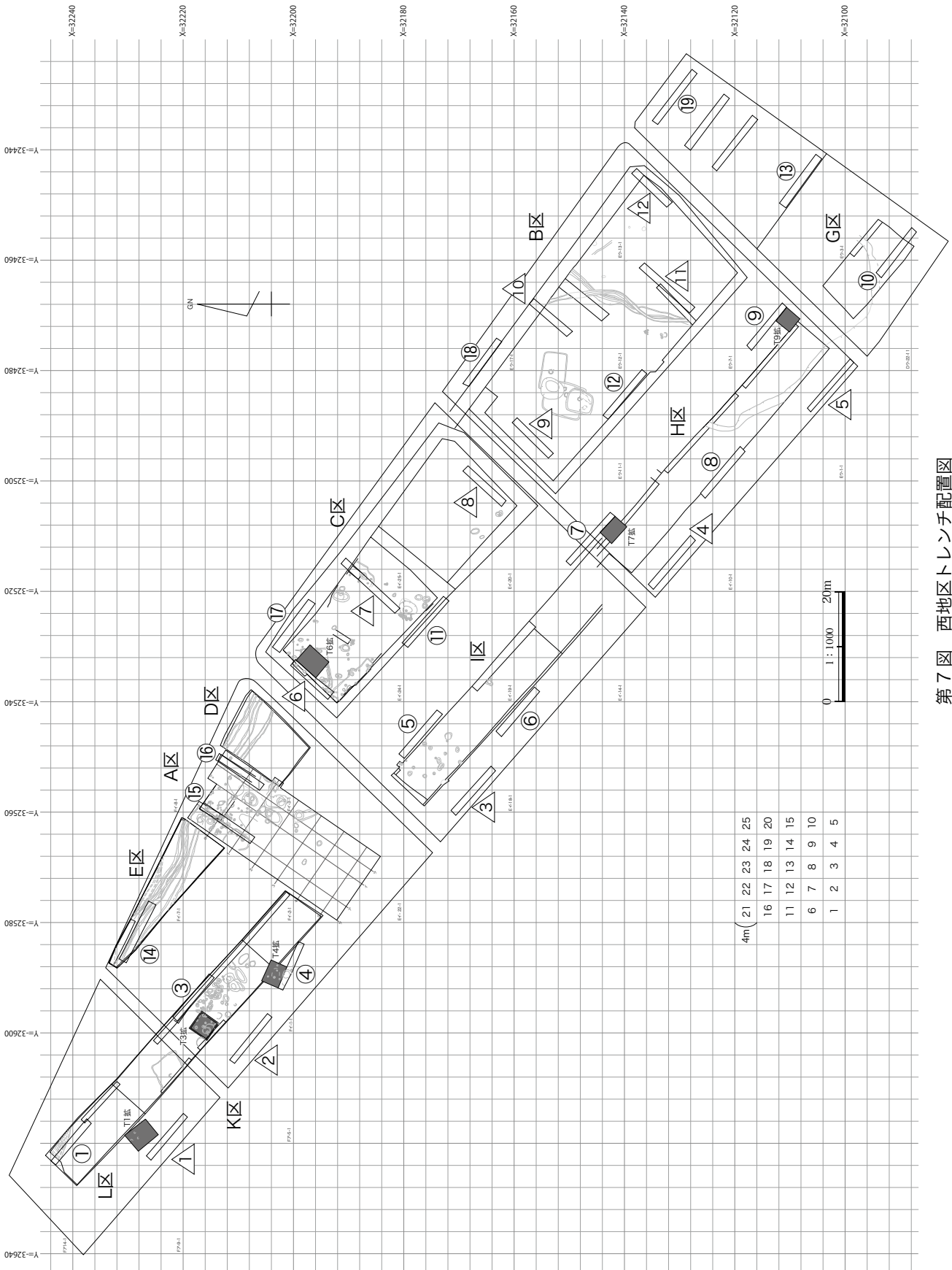
V層包含層掘り下げで3基の土器埋設遺構が確認された。他の包含層出土遺物の写真・図面等による記録化・遺物取り上げ後、観察・記録・取り上げを行った。この時点で3基とも土器以外の周囲の土については除去されており、掘り込みや土器の上端などの情報については不明な部分が多くなっている。この拡張区では、3基以外の遺物もちろん多く出土したが、ここまで遺存状況の良いものは見られていない。またこの3基が比較的近い位置関係にある点も注目されよう。

SX1は横位～斜位に無文の粗製土器（第12図2）が確認されたもので、その下位に別個体の土器（第12図3）が据えられていた。上位の無文土器は25cm×23cm程度の遺存、下位の土器は台付土器脚部を逆位

第1節 西地区調査の概要

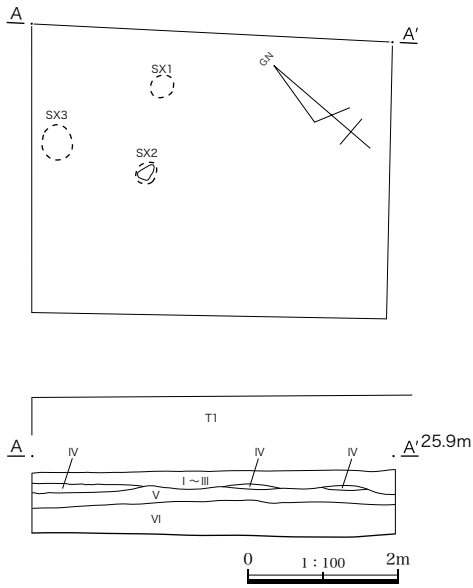
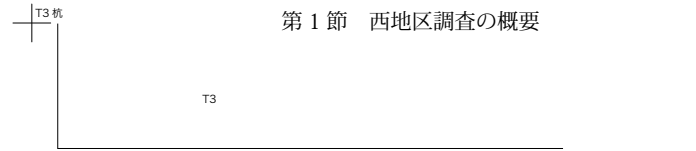


第6図 あかた駅南遺跡 西地区全体図

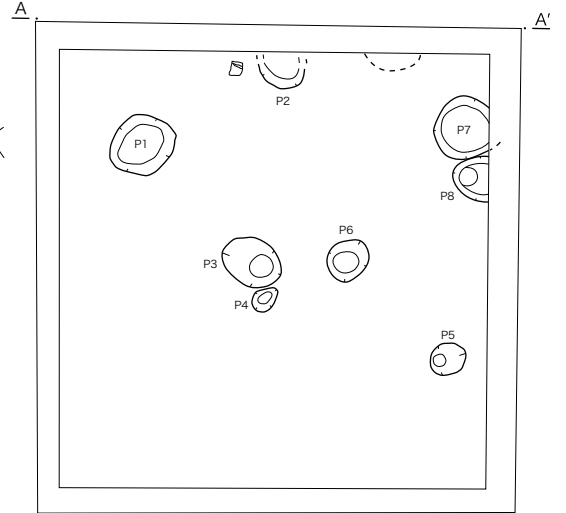
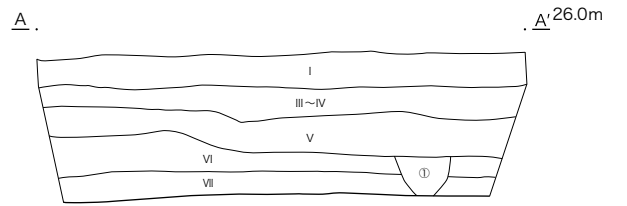


第7図 西地区トレンチ配置図

第1節 西地区調査の概要

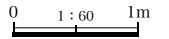


第8図 T1北拡張区 (SX1~3) 全体図

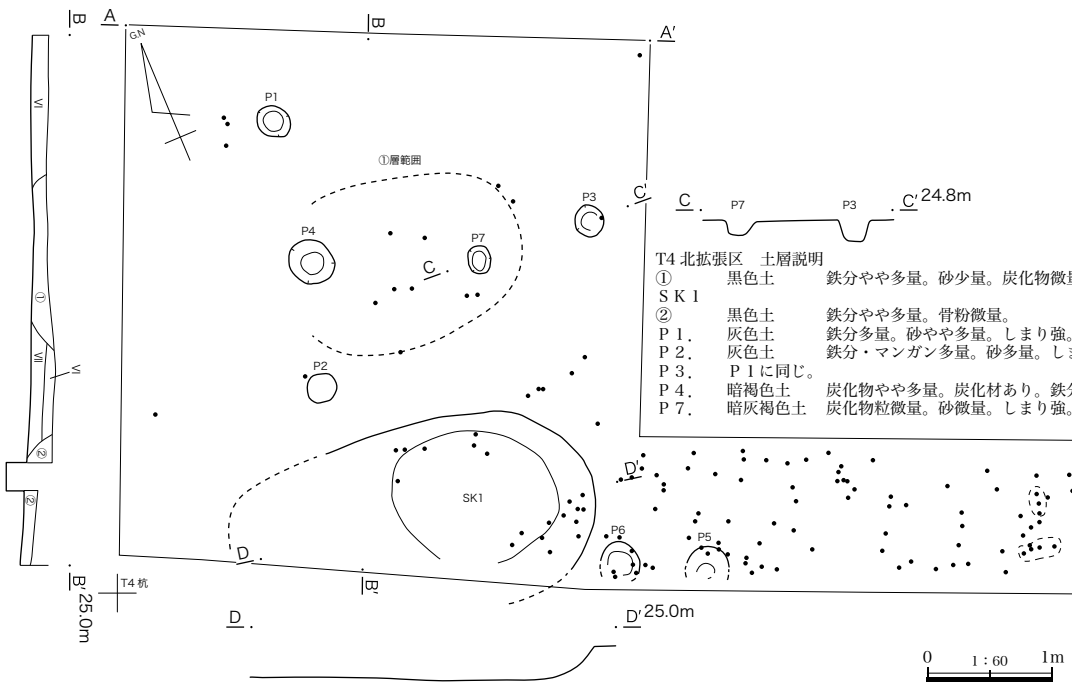
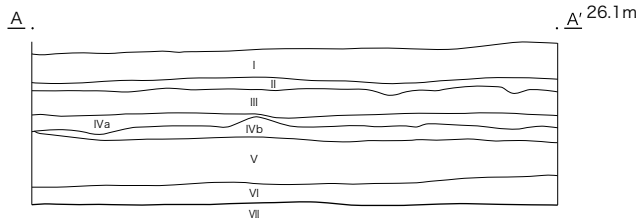


T3南拡張区 土層説明

- III~IV. F A少量。
- V. 黒色土 炭化物多量。骨微量。
- VI. 暗灰色土 炭化物少量。
- VII. 淡灰色砂質土
- ① 暗灰褐色土 炭化物少量。しまり強。



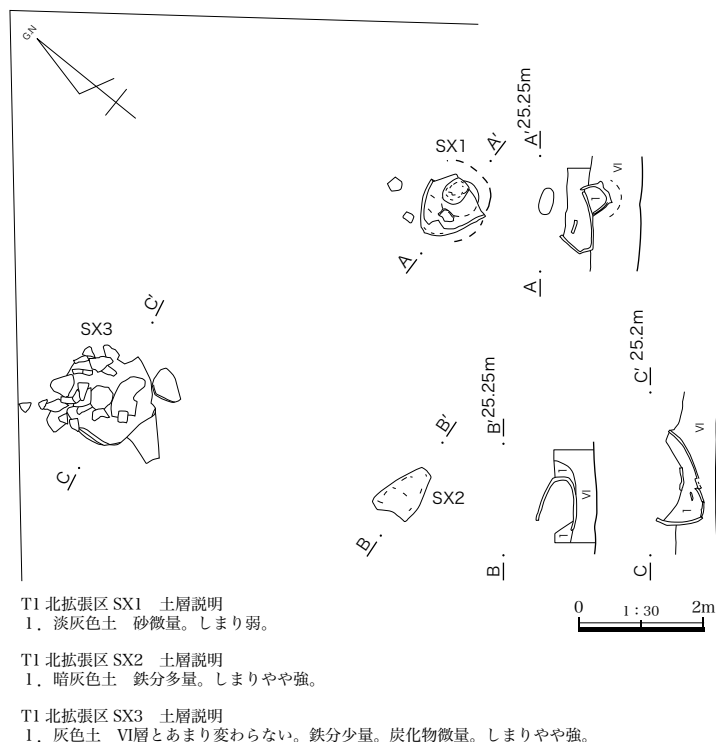
第9図 T3南拡張区 (P1~8) 全体図



T4北拡張区 土層説明

- ① 黒色土 鉄分やや多量。砂少量。炭化物微量。しまりやや弱。<遺構?>
- SK1 黒色土 鉄分やや多量。骨粉微量。
- P1. 灰色土 鉄分多量。砂やや多量。しまり強。
- P2. 灰色土 鉄分・マンガン多量。砂多量。しまり強。
- P3. P1に同じ。
- P4. 暗褐色土 炭化物やや多量。炭化材あり。鉄分少量。しまり強。
- P7. 暗灰褐色土 炭化物粒微量。砂微量。しまり強。

第10図 T4北拡張区 (SK1・P1~7) 全体図・遺物出土図



第11図 T1 北拡張区 SX1～3 平面図・断面図

T3 南拡張区 (第9図 写真図版三六)

本調査区KL区のほぼ中央にあたる。この拡張区も表土から人力で掘り下げたが、IV層までは遺構遺物とも無く、V層で多量の遺物出土が見られた。数回にわたる遺物出土の記録化・取り上げの後、概ねVI層上面での精査を行ったところ、幾つかのピットが確認されるに至った。ピットはいずれも浅く10～30cm程度の深さである。もちろん、住居跡等の建物跡となる可能性はあるが、ピット上端面でもあるVI層上面の精査でも硬化面や焼土跡は確認されず、また調査区壁面の観察でも立ち上がり等は確認されていない。KL区S1やS70ピット群周辺の位置にあたることから、本来合成平面図を示すべきであるが、座標合わせがやや困難なこともあって、現時点で別々の図示とせざるを得なかった。なお包含層の状況はA区やKL区の状況と概ね同じで多量の土器・石器・礫・土製品の出土が認められている。これについても記録の提示を行うべきであるが、断念している。また遺物の提示もここでは行い得なかった。

T4 北拡張区 (第10図 写真図版三七)

A区の西側でT4に接しつつ、この北側およそ3×4mの範囲を調査した。T4も拡張区調査時点でV層中位までの掘り下げ部分が多く、拡張区調査と平行してやや下位まで掘り下げることにした。本調査部分ではKL区南東部分で、一部重複しつつ概ね本調査部分範囲外にあたる。

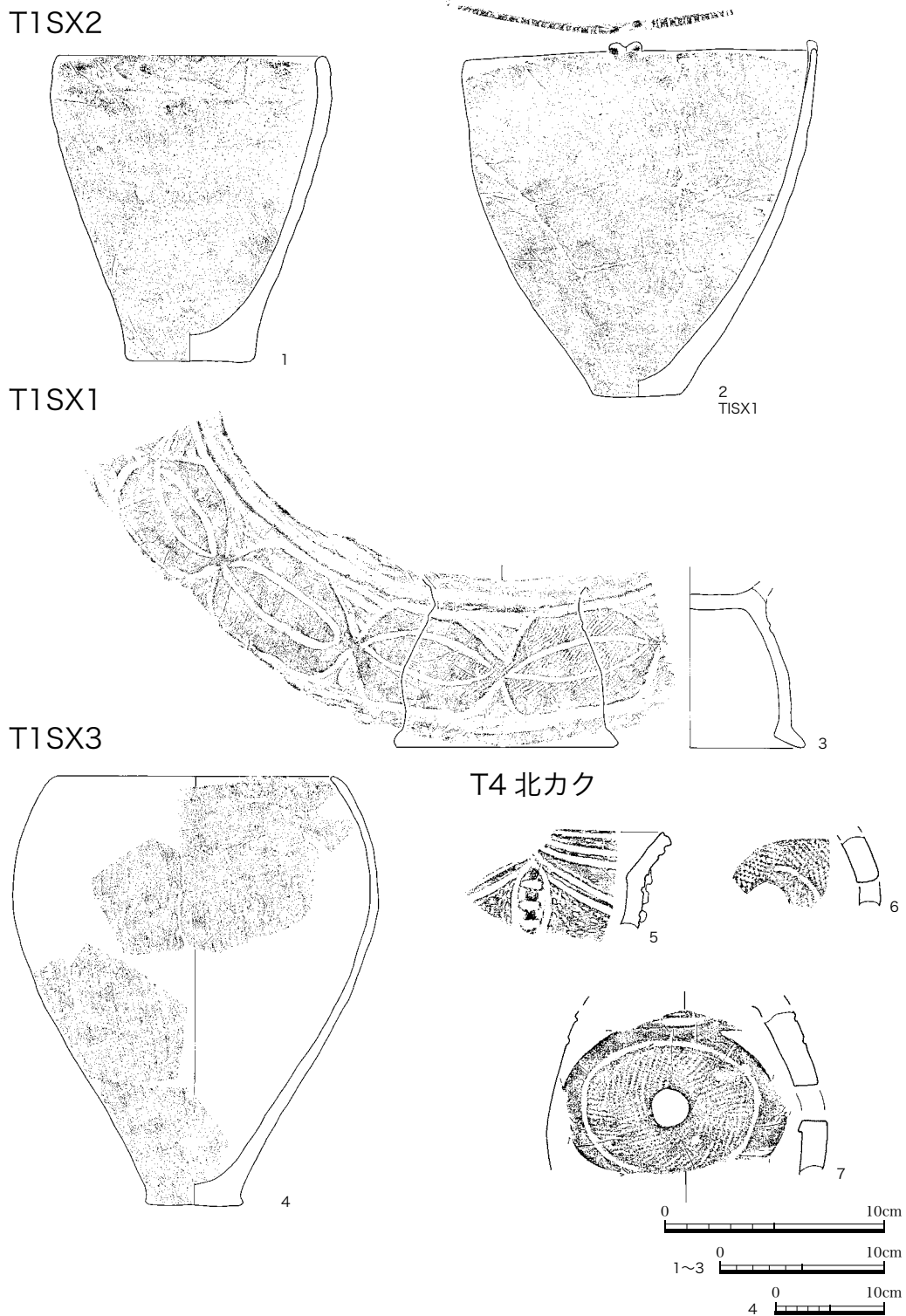
この拡張区中央では掘り下げ時にプラン状の色の变化も見られたため、ある時点からベルトを設定して掘り下げた。VI層上面で再度精査を行ったところ、落ち込みと推定される部分の掘り下げを行ったものの明瞭な壁などは確認できず、結果的に遺構とは判断できなかった。但し土層断面では包含層VI層とは異なる土層が観察され、一応この①層の分布範囲も示した。掘り込み不明瞭な土坑となる可能性は残っている。

拡張部分～トレンチにかかる部分で土坑状の落ち込み・プランが確認され、これを掘り下げたところ、や

～斜位に据えている。両者は密着しており、連続した行為による組み合わせの土器埋設と捉えられる。

SX2は一部の土層観察でVI層を掘り込む掘り方が確認されている。掘り方内にほぼ横位に土器を据えている。25cm×15cm程度のやや小形でほぼ完形の無文深鉢(第12図1)である。

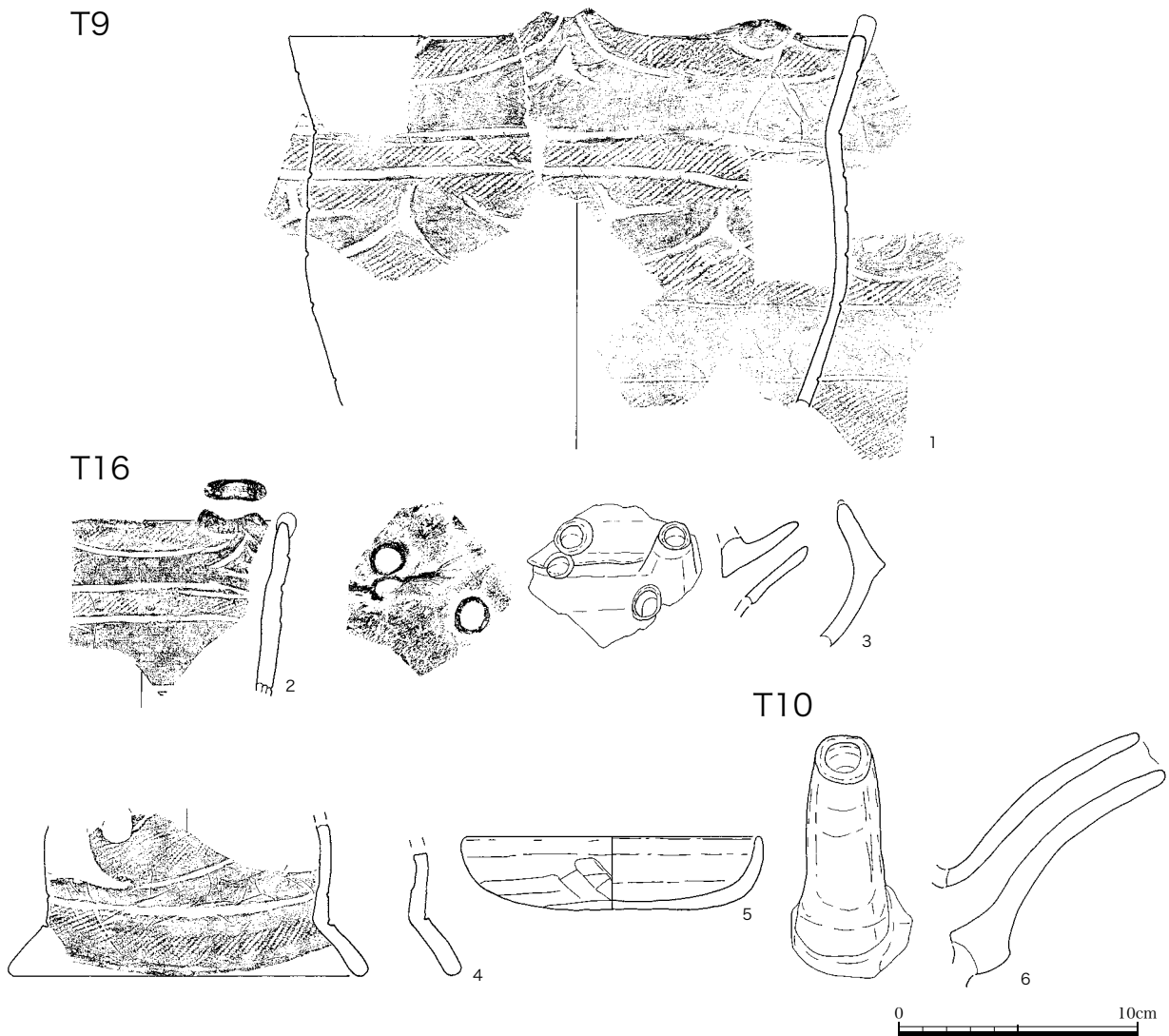
SX3は横位～斜位の土器個体が確認されたもので、掘方は不明である。土器は36cm×35cm程度の確認で、やや遺存状態が悪い。整理での接合でも復元があまり進まなかった土器である(第12図4)。遺存状態や掘方不明な点から、埋設土器との確定も問題があり、通常一般の大形破片遺物出土となる可能性も残されている。



第12図 トレンチ 出土土器 (1)

や不整形ながら遺構と推定され、これをSX1とした。調査区外にもかかることや、この部分にポンプによる水揚げ場を設定したこともあって、不明瞭な部分は残るが、調査区壁断面の観察からも掘り込みはほぼ問題無いと判断された。これ以外では7基のピットが確認されたが、深く良好なものは限られた。

包含層の状態は他のA区やKL区と変わらず、V層で多量の遺物が出土した。またここではVI層やVII層で



第13図 トレンチ出土土器(2)

も遺物の出土がやや多く認められている。平面図上でも、出土位置を点で記録したものについてドットで示したが、図で示したような、必ずしもトレンチ内での出土量が多い状態では無かった点は付記しておく。調査時における感覚的なものだが、安行3c～3d式が目立っていたとの所見がある。

その他のトレンチ拡張区

T△6東拡張区では石囲遺構が確認され、その後C区の調査の中でS106として扱うこととなった。このトレンチ拡張区での調査の経緯記録についてもC区内で触れる。また記録を示せないが、T7南拡張区では遺構が見られず、遺物量も極めて少なかった点も注意すべき所見である。ここは本調査区H区の西端に相当し、この時の調査でも遺物量は少なく、トレンチ調査の所見と整合的である。この部分の北側C区東端やB区西端、近い位置のI区東端でも遺物量が少ない傾向が認められており、西地区内でも遺物量の少ない包含層部分がある点は、注意しておく必要がある。一方T9南拡張区では比較的多くの遺物が出土し、とりわけ後期末～晩期前半の資料が多いとの所見が得られている。また耳飾りの出土も比較的目立っていた。この部分はH区の東端に相当し、H区やG区の調査所見とも整合的である。こうした地点と型式別との相関についても本来詳細に検討するべきであり、トレンチ及びトレンチ拡張調査区の所見も更なる検討が必要となろう。

り、より下方への調査については断念している。A区の内の特に北側では、遺物の包含はより下位まで続いていることを確認しており、B区での調査状況のように、より下方まで遺構遺物が存していた可能性は残る。遺物の包含はA区内でも北側のV層中が最も多量であり、VI層中では遺物の集中部分はやや狭い範囲になっているようにも捉えられた。具体的にはワ3～ア3～イ3～ウ3のラインより南側では確認された遺構は稀薄で、遺物も少ない印象がある。但し湧水で掘り切れていないこともあり、確定的な判断は示し得ない。VI層上面のレベルはA区内ほぼ均一（水平）である。若干南側が高い可能性もあるが、面的に整ったVI層上面を南側では捉えていないため、良く分からない。

V層黒色土中での遺構確認は困難で、以下に示す遺構も多くはVI層上面～中位の面で確認されたものである。つまり、多くはV層包含層の調査を終えた後、VI層上面での遺構確認・遺構調査、そしてVI層包含層の調査に至ったという流れである。

A区の遺構は住居跡2軒、土坑13基、ピット78基、配石遺構1基、埋設土器遺構2基、その他落ち込み等9基、溝6条である。住居跡の1軒は石囲炉のみの確認、残り1軒はピット集中からの推定である。その他落ち込み等とした中には不整形の落ち込み、遺物集中区なども含まれ、人為的な遺構として良いか判断が難しいものも多い。またイ0SX1は遺物の集中範囲に対して付した遺構名で、明瞭な掘り込みを伴ってはいない。

第20図に示したピット群はA区～A3区にかけてピットの集中が確認されたもので、竪穴の掘込み、炉や床硬化面などは確認されていないものの、列状に並ぶピット群の配置からはこの時期の住居跡との推定を強く示す。一応ピット群のまま報告するが、住居の可能性は高く、先に示した住居跡軒数に含めている。一方この南側で浅い落ち込みが広がるワ2SX1は、当初住居跡の可能性も考えて調査したが、掘り込みは認められるものの、床面やピットの確認は出来ず、住居跡となる可能性は低いと判断している。

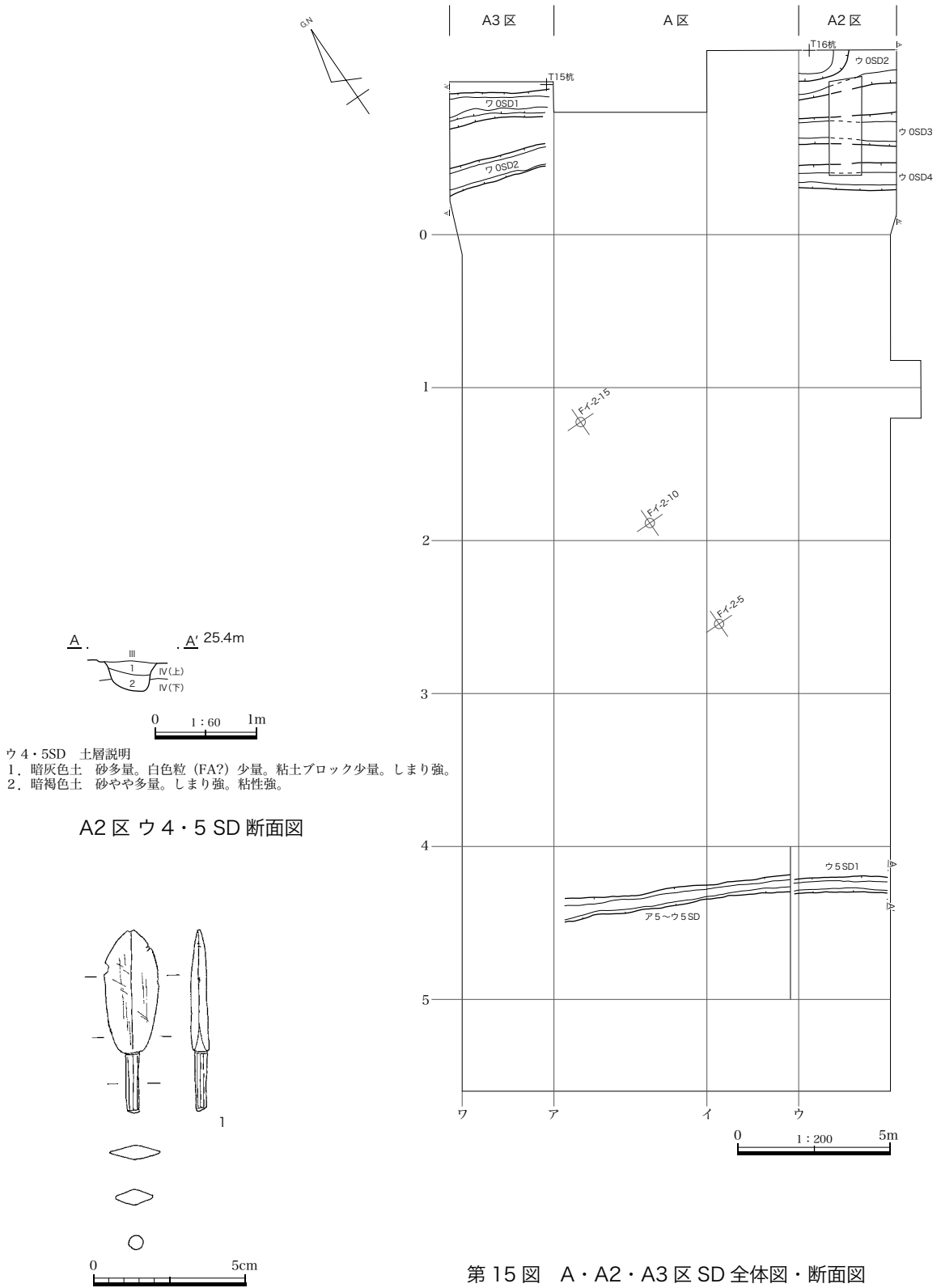
以下の記述でも、すべての遺構について網羅的な記述や写真の提示は為し得ず、遺存状況の良いもの、記録や所見が明確なものについてを中心とする。従って平面図と計測値のみの提示となっている遺構もあることは了解されたい。基本的に調査時の遺構名を変更していないが、T16西拡張区P1,P2としたものはイ0P1,P2に変更、またSX01P1,P2をイ0P3,P4に変えている。なおグリッド毎に遺構名を付しており多少の混乱が生じていることは否めず反省点として残された。

A区上位確認の遺構（第15～18図、写真図版四）

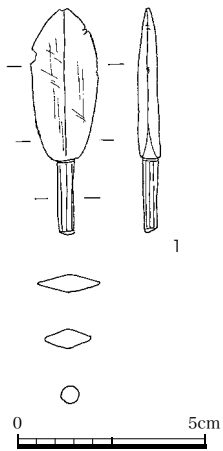
A2区で3基の溝を平面的に調査した。これらをウ0SD2～SD4としている。そしてA3区で調査した2基の溝に対してワ0SD1、及びSD2としている。これらは一連の続く溝で、狭義のA区やT16調査時にも断面で確認されていたものであるが、それらでは下位の遺構確認を優先としたこともあり、これらの溝を面的に調査していない。いずれもIV層以下を切る溝であるが、III層（AS—Bを含む層）には覆われている。この基本層位との関係はA3区西壁（第17図）、A2区東壁（第18図）いずれも同様で、ここで示し得なかったものの旧A区（A1区）東西の壁でも同様の関係は確認されていた。溝の幅は70～120cm程度、深さは20～40cm程度である。溝覆土中にFAと想定される白色粒を含んでおり、再流入を考慮する必要はあるものの、溝の時期を一定程度推定できる。

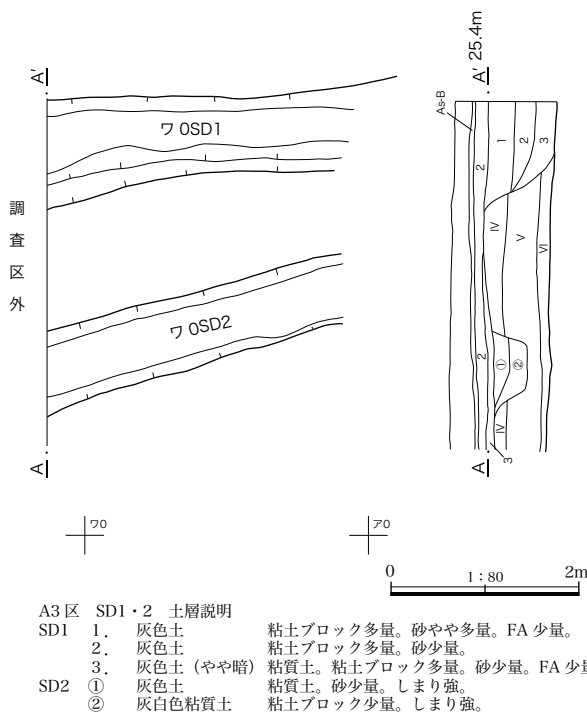
A2区とA3区で面的に調査した溝であるが、相互個別の関係は判断できない。A3区ワ0SD2の軸延長上はA2区ウ0SD2のプランに相当することから、この連続性を推定する案の蓋然性が高いものの、この場合A2区ウ0SD3、4の西側への展開については、不明となる。

D・E区やC区にも同形態・同方向の溝が続いており、連続している可能性が高いが、未調査区を挟むこ

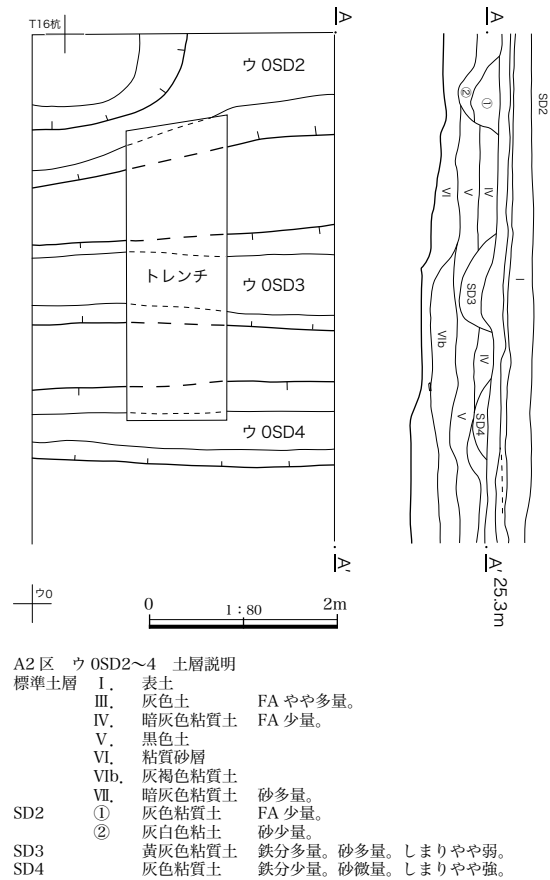


第16図 A区出土銅製品





第17図 A3区 SD1・2 平面図・断面図



第18図 A2区 ウ OSD2～4 平面図・断面図

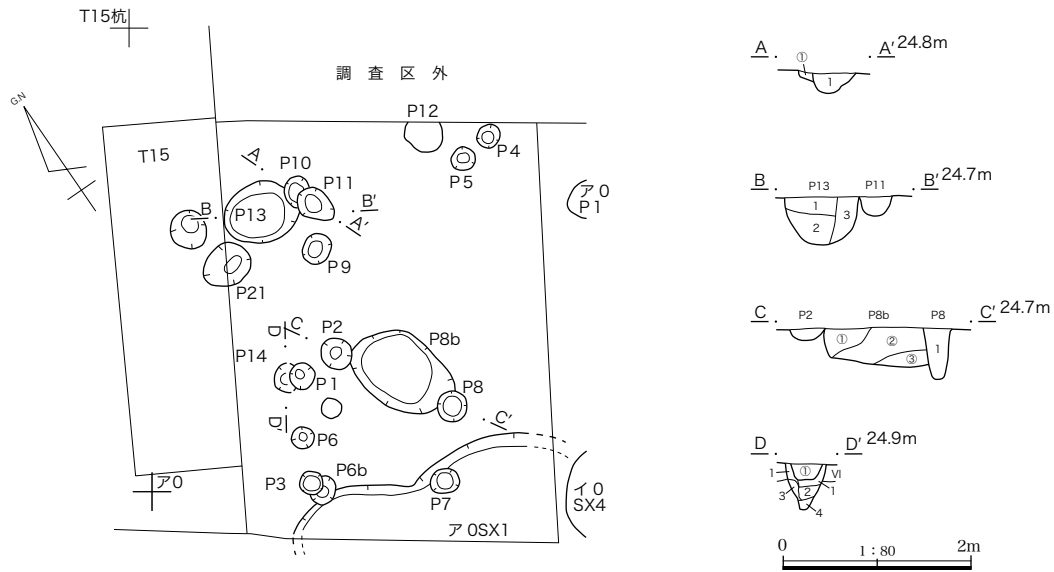
ともあり、個々の対応関係は把握し得ておらず、溝相互の新旧関係も検討していない。ここではA区内の溝のみ第15図全体図及び第17,18図に平断面図を示す。なおこれらとは別にA区の南側でも東西方向の浅い溝を調査した(ウ4・5SD1)また、イ5区V層上面で確認された銅鏃を第16図に示す。

A区ピット群中央部分上層(第19図)

ア0ピット群は当初T15の拡張調査の段階で確認・調査したものである。南端では不整形の落ち込みア0SX1が確認されたが、少し時間をおいて調査し確認面が異なることもあって、ア1の遺構とは整合せず、問題が残る。同様に南東側についてもイ0SX4とは異なる遺構のようで、不明な部分が残された。ア0SX1自体が遺構とはならない可能性も残る。一方ピットについては、比較的明瞭に確認され、掘り込み・壁も明瞭である。中には50cmを超える深さのものもあり、A区ピット群全体を広く見て検討した方が良いかもしれない。確認面の問題もあり、とりあえずア0のピット群についてはT15拡張区上層図として第19図に示す。P13やP8は比較的規模があり、土坑と考えて良いであろう。

A区ピット群中央～西側部分(第20,21,24～26図、写真図版五、六)

イ1SX2は浅い楕円形の落ち込みで長軸288cmと比較的大きめである。内部のピットP1,SX2b,SX2bP2b



T15 東拡張グリッド P10・11 土層説明

P10

1. 灰褐色土 鉄分少量。砂少量。しまり強。

P11

① 淡灰色土 砂やや多量。しまり強。

T15 東拡張グリッド P13 土層説明

1. 灰色土 砂少量。炭化物微量。しまりやや強。

2. 暗灰色土 砂微量。粘土少量。しまりやや弱。

3. 淡灰色土 砂少量。しまり強。

T15 東拡張グリッド P8・P8b 土層説明

① 灰色土 砂微量。しまりやや弱。

② 暗灰色土 炭化物多量。骨粉微量。砂微量。しまり強。

③ 灰色土 砂やや多量。しまり強。

1. 灰褐色土 鉄分少量。砂多量。しまり強。

T15 東拡張グリッド P1・14 土層説明

P1

① 灰褐色土 粘土粒少量。しまり強。

P14

1. 淡灰褐色土 鉄分少量。砂やや多量。しまりやや強。

2. 暗灰褐色土 砂少量。しまりやや弱。粘性やや強。

3. 灰褐色土 鉄分少量。砂少量。粘土やや多量。しまりやや強。

4. 灰色土 砂少量。粘土多量。しまり強。

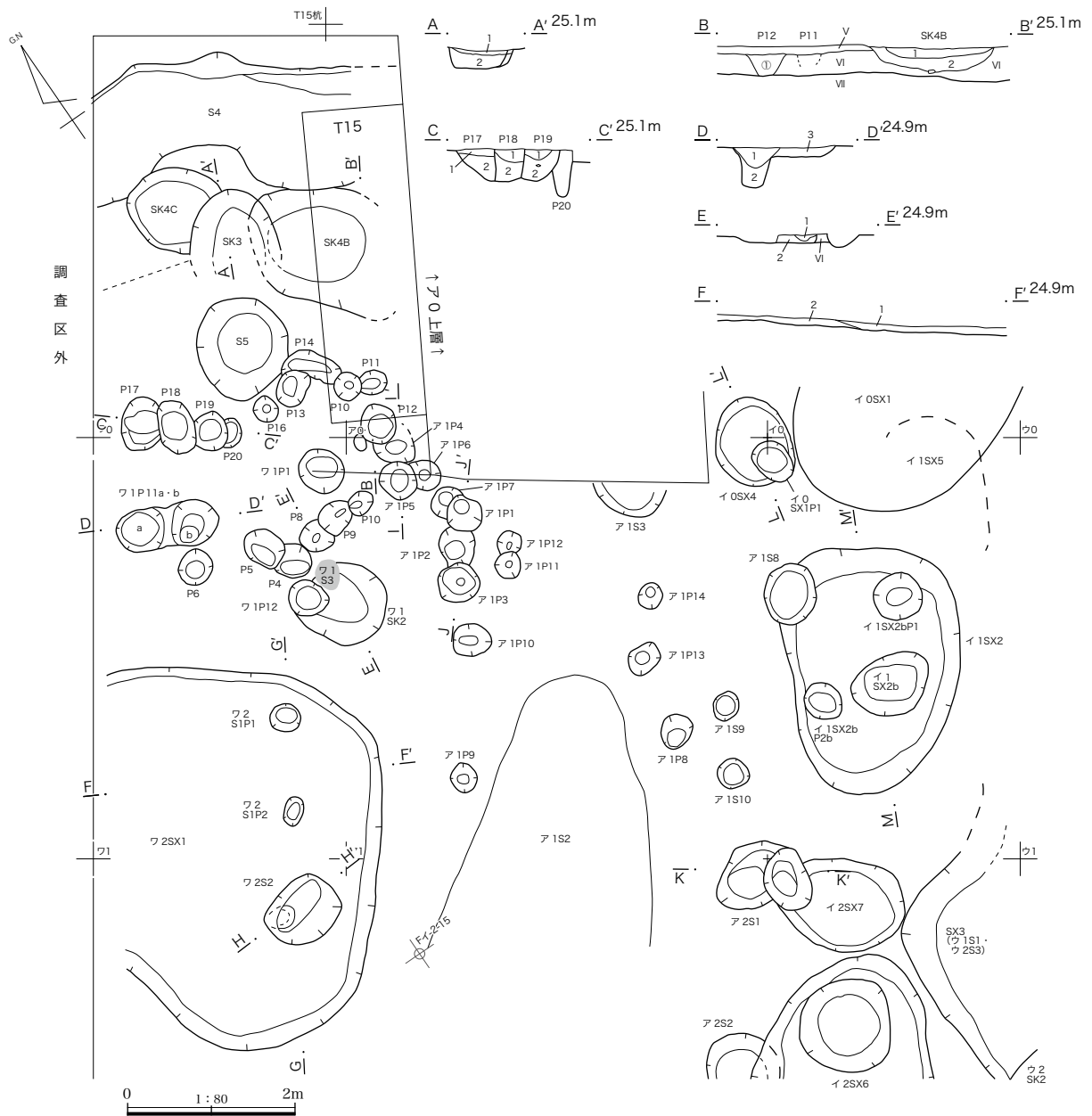
第19図 A区ア0上層平面図・断面図

などはSX2の底面で確認されたものであり、SX2より古いまたは伴うものと推定される。プラン確認で確認された黒色部分を遺構と想定し掘り下げたが、遺物出土状態や土層断面の記録をとり得なかったこともあり、不明な部分が多い。掘り込みは比較的明瞭なようである。

この北側にあるイ0SX01は遺物集中に対して付した遺構名、イ1SX05は遺構の可能性を考慮して付した遺構名だが、最終的には遺構と判断していない落ち込みみである。イ0SX4は浅い土坑で、土層断面観察からイ0SX1P1に切られる。南西側にあるア1P14,13～ア1S10等も含め考えてピットの配列をみると、弧状の展開を窺うこともできるが、建物跡復元には至らない。

一方西側のワ0～ワ1、イ1西側に展開するピットは集中部や重複部分もあり、A区の中では注意すべきところである。なおこの図で示した遺構の内、ワ0グリッド北側、S5、S4はこれより南のピット群とは若干検出面を異にしている。即ち、S4等は上位のV層下位部分で確認・調査したもの、これより南のピット群は概ねVI層上面～上位で遺構確認したものである。SK3はS4B、S4Cと重複するが、関係性は捉えていない。S3を最初に調査しており、S3が新しくなる可能性がある。いずれもやや浅い土坑であるが、包含層部分と覆土の区別は比較的明瞭であった。底面・壁もVI層中のところでは比較的明瞭であるものの、遺構の形状はやや不整で遺構の性格も不明である。

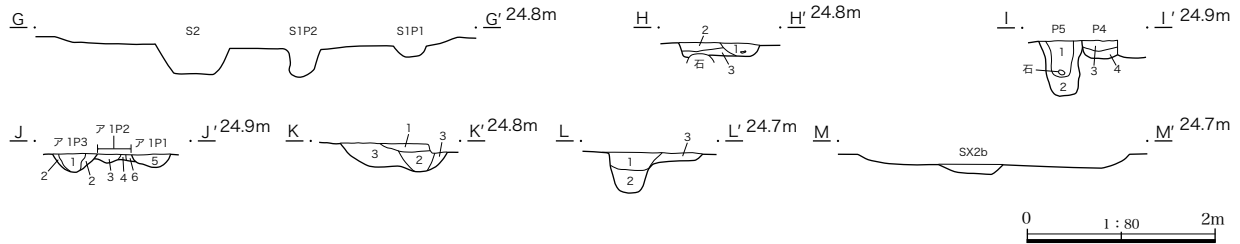
S3、S4、S4Bの出土遺物は第22図に示した。いずれも安行3b式、同3c式が目立っており、遺構の時期もこれらの範囲内となろう。S4で小形鉢の大形破片、S4Bでは完形に近く復元されたやや小形の壺



第20図 A区ピット群 (ア1・2・イ0・1・ワ0・1) 平面図・断面図

形土器が出土している。これらの土器の出土状態について明らかな記録は確認し得ないが、形を保ったままの出土ではなかったようである。土器の説明は後述する、

ワ0P17,18,19,20,16,13,14,10,11,12 にア1P5,6,7,1,12 と並ぶ配列は後晩期住居跡の入口ピット群の状況を窺わせる。これを入口ピット群とし、西側方向に炉跡等軸を設定し、ア1P13 付近をコーナーとする一辺8~9mの方形に近いプランの住居跡を想定することもできる。この場合の主軸は、N-68° -E、となるが、一方p17~20の並びを重視し、これを壁柱穴群と考えればN-20° -E程度の軸となるかもしれない。ワ1S3の焼土跡との関係も注目され、これを炉跡とする案も考えたが、判然としない。浅い掘り込みのア1S2やワ2S1との関係も考えたがこれらとの対応は難しい。とはいえ、ア1P13,14あたりのピットが希薄



- A-A' (ワ OSK3) 土層説明**
 1. 黒褐色土 V層+粘土多量。砂やや多量。しまりやや弱。
 2. 灰褐色土 砂多量。炭化物微量。しまりやや強。
- B-B' (ワ OSK4B) 土層説明**
 1. 黒褐色土 V層に近い。骨片粒多量。砂少量。しまりやや弱。
 2. 灰褐色土 粘土ブロックやや多量。砂やや多量。しまりやや弱。
 ① 暗灰褐色土 骨片微量。砂少量。粘土ブロック少量。しまりやや強。
- C-C' (ワ OP17・18・19) 土層説明**
P17 1. 暗灰褐色土 骨粉微量。炭化物粒微量。砂やや多量。しまりやや強。黒味強。
 2. 黒褐色土 炭化物粒やや少量。砂やや少量。しまり強。
P18 1. 淡灰褐色土 炭化物粒少量。砂やや多量。しまりやや強。
 2. 灰褐色土 炭化物粒やや少量。砂やや少量。しまりやや強。
P19 1. 淡灰褐色土 炭化物粒微量。砂やや少量。粘土ブロック少量。しまりやや弱。
 2. 黒褐色土 炭化物粒微量。砂少量。粘土粒やや多量。しまり強。
- D-D' (ワ IP11) 土層説明**
 1. 黒褐色土 炭化物粒やや多量。鉄分粒微量。骨粉少量。しまり強。
 2. 灰褐色土 炭化物粒微量。砂やや少量。しまりやや弱。
 3. 淡灰褐色土 砂やや多量。炭化物粒微量。しまり強。
- E-E' (ワ IS3+SK2) 土層説明**
 1. S3 焼土粒。焼土ブロック多量。焼土粒やや多量。粘土多量。しまり強。
 2. SK2 灰褐色土 砂多量。炭化物微量。しまりやや強。
- F-F' (ワ 2SX1) 土層説明**
 1. 黒褐色土 V層に近いがやや淡い。土器や炭化物少量。砂やや多量。しまりやや強。
 2. 暗灰褐色土 黒色ブロック少量。砂やや多量。しまりやや強。
- H-H' (ワ 2S2) 土層説明**
 1. 黒褐色土 砂少量。炭化物粒やや多量。骨微量。しまり強。
 2. 暗灰褐色土 砂やや少量。しまりやや強。
 3. 淡灰褐色土 砂やや多量。粘土やや少量。しまり強。

- I-I' (ア IP4・5) 土層説明**
 1. 黒褐色土 砂多量。炭化物微量。しまり強。
 2. 暗灰色土 砂多量。しまり強。
 3. 灰色土 砂やや多量。炭化物微量。しまり強。
 4. 淡灰褐色土 砂多量。しまり強。
- J-J' (ア IP1・2・3) 土層説明**
 1. 暗灰色土 砂やや多量。しまりやや弱。
 2. 灰色土 砂多量。しまり弱。
 3. 灰色土 砂少量。しまり弱。
 4. 淡灰色土 砂やや多量。しまり弱。
 5. 灰色土 砂やや多量。粘質。炭化物微量。しまりやや弱。
 6. 淡灰色土 砂多量。しまり弱。
- K-K' (ア 2S1) 土層説明**
 1. 淡灰色砂層 基本VI層の上位か?炭化物微量。砂多量。しまりやや弱。
 2. 黒褐色土 炭化物少量。砂やや少量。しまり強。
 3. 暗灰褐色土 黄色砂やや多量。しまりやや強。
- L-L' (ア OSX4) 土層説明**
 1. 黒褐色土 炭化物粒子少量。白色粒子微量。鉄分やや多量。しまりやや弱。粘性強。
 2. 暗灰褐色土 鉄分多量。炭化物粒子少量。白色粒子微量。しまりやや強。粘性強。
 3. 褐灰色土 黄褐色砂質粘土多量。鉄分粒やや多量。しまりやや強。
- M-M' (ア ISX2) 土層説明**
 黒褐色土 炭化物粒やや多量。砂多量。しまりやや弱。
SX2b
 暗灰褐色土 炭化物粒やや多量。砂やや多量。鉄分多量。しまりやや弱。
SX2bP1
 灰色土 炭化物粒少量。砂多量。鉄分微量。しまりやや強。
SX2bP2b
 暗灰色土 砂少量。しまりやや強。粘性やや弱。

第21図 A区ピット群(ア1・2・イ0・1・ワ0・1)断面図

であり、また支柱穴相当の深いピットも認められなかった点も明確な住居との推定を躊躇させる部分である。他方、ピット同士の重複部分・土層断面で切り合い関係が認められたところもあることから、2軒以上の住居跡が重なっている可能性も指摘できよう。例えば、ア1P2→同P1,P3の関係が記録されている。

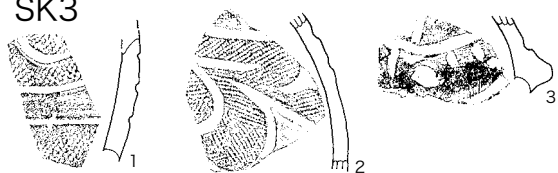
なおア1S2はピット群も含めた周辺遺構とは別に確認された落ち込みであるが、掘り下げたものの皿状に緩く下がるのみで、最終的に遺構とは確定し得なかったことから、確認された黒色土のプランのみ示した。

イ1SX2は浅い楕円形の落ち込みで長軸288cmと比較的大きめである。内部のピットP1,イ1SX2b,SX2bP2bなどはSX2の底面を含めた精査で確認されたことから、SX2より古いまたは伴うものと推定される。プラン確認で確認された黒色部分を遺構と想定し掘り下げたが、遺物出土状態や土層断面の記録を取り得なかったこともあり、不明な部分が多い。ア1S8との関係は不明である。

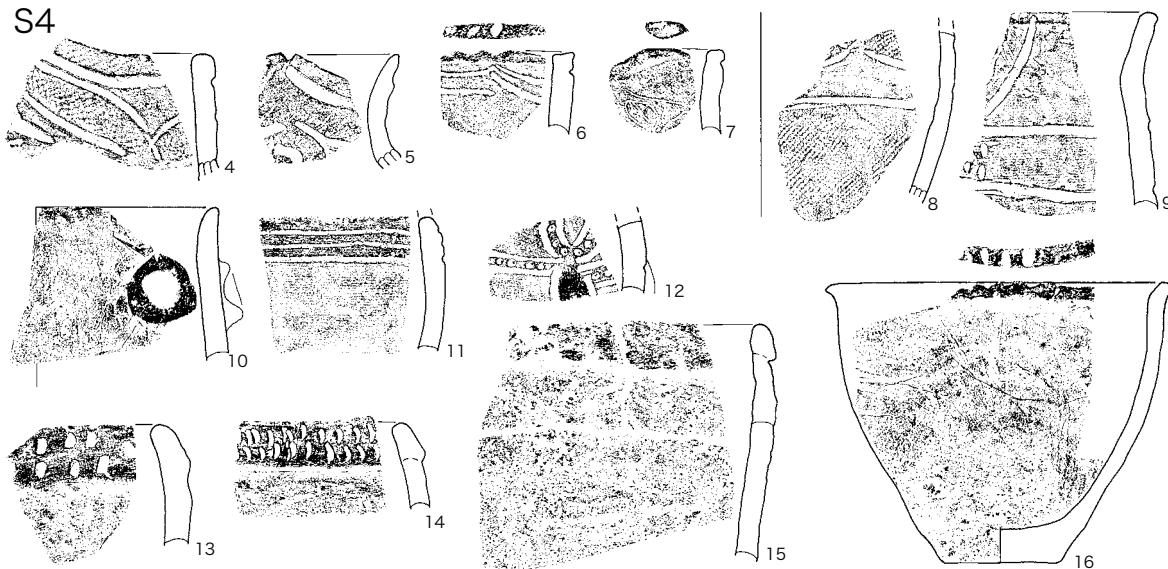
イ0SX01 (第24,25図、写真図版六)

この北側にあるイ0SX01は遺物集中に対して付した遺構名、イ1SX05は遺構の可能性を考慮して付した遺構名で、遺構と確定できない落ち込みであった。イ0SX1は、一定の面に遺物群がまとまる様相があり、他の包含層遺物出土状態との違いから、便宜的にSX名を付した。範囲をどの程度までとみるか難しいが、4×2.2m程度の範囲と捉えた。この中でも外側周縁部分ではやや遺物分布密度は薄く、中心部分がより密集している。大形破片が割られてそのまま置かれたような状態や、割れた同一破片が重ねられたような状態

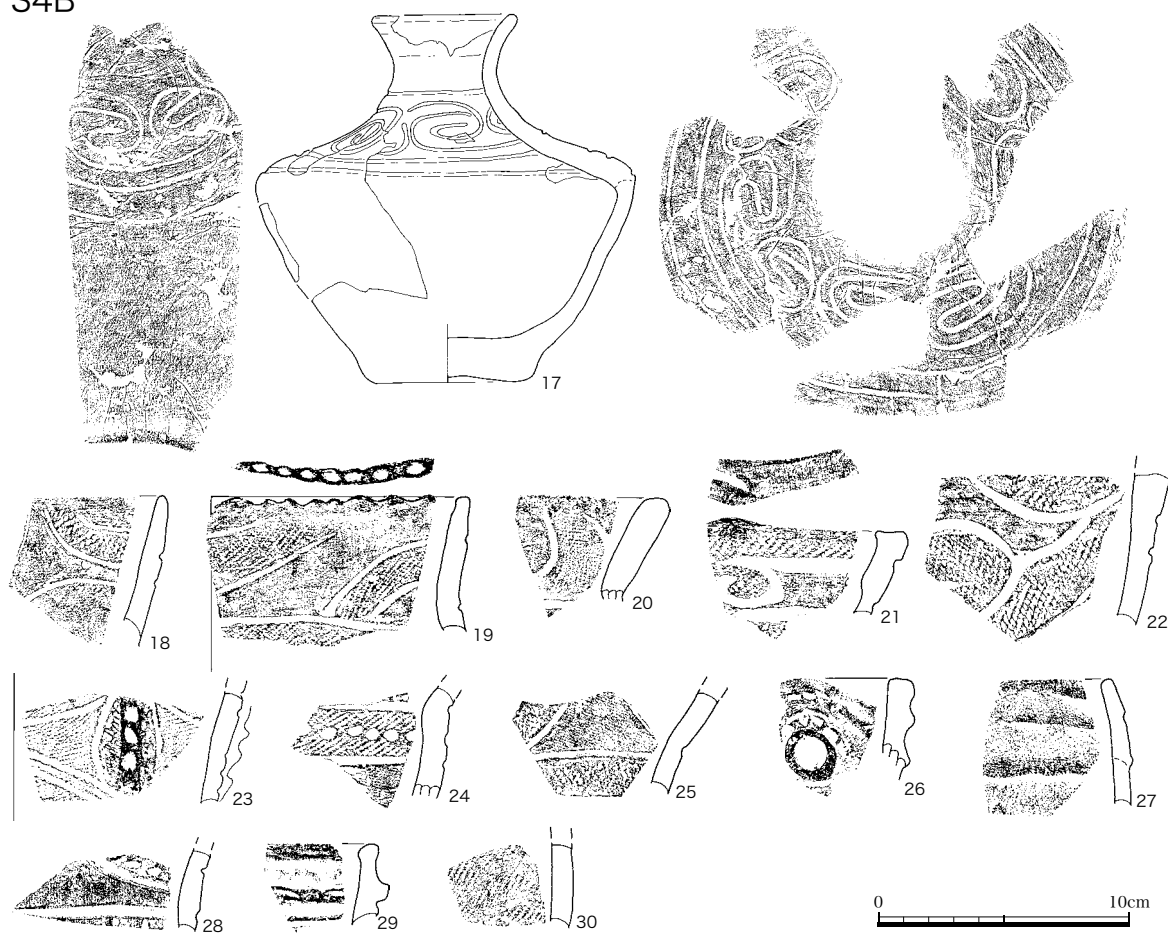
SK3



S4



S4B

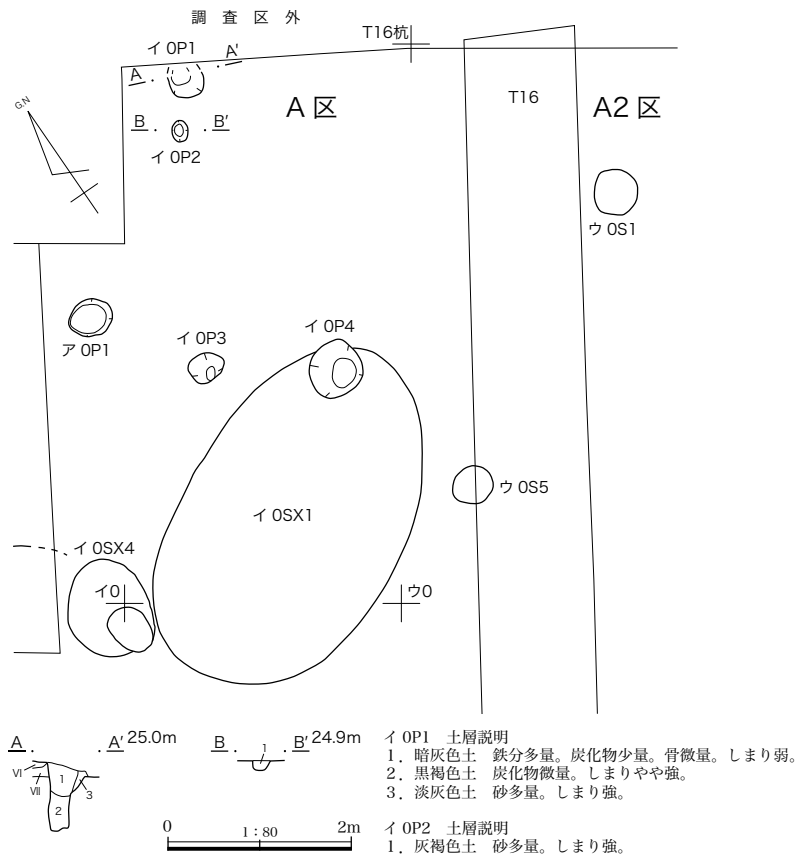


第22図 A区出土土器(1)

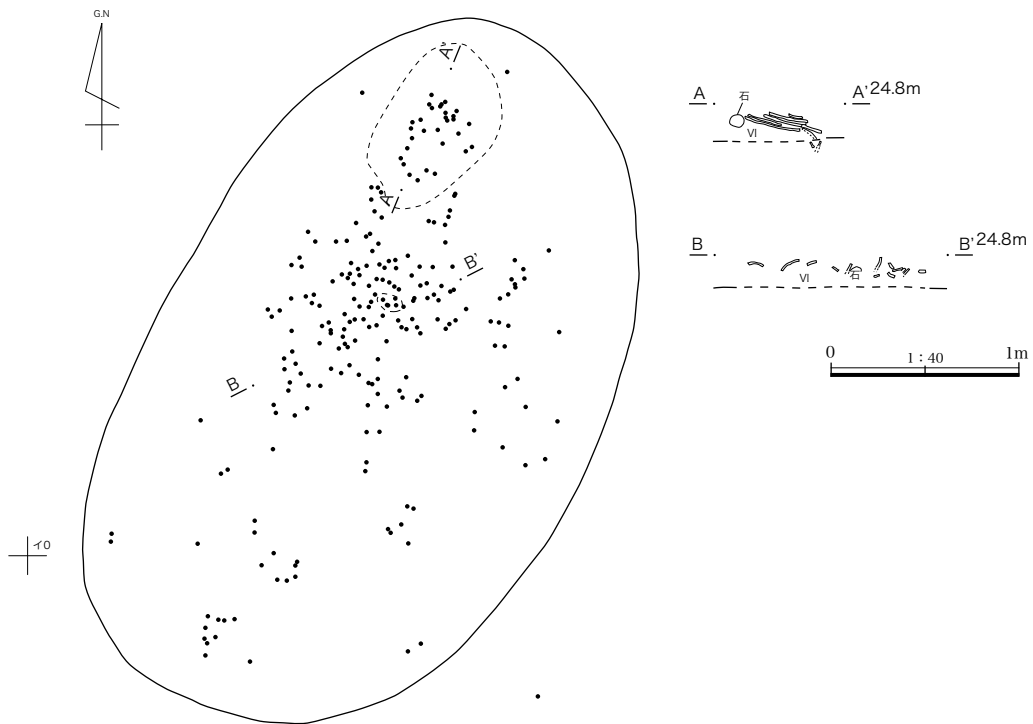


第23図 A区出土土器(2)

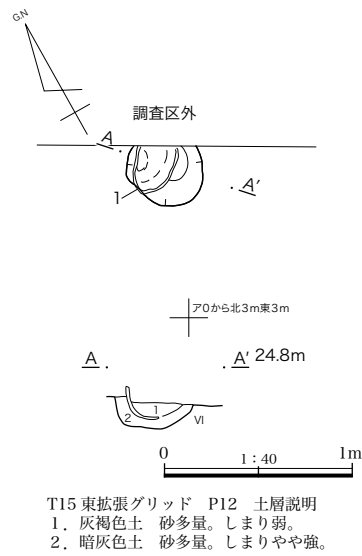
の部分もあり（断面A-A'部分）、特徴的な出土状況と言える。垂直レベルでは10cm程度の範囲にまとまり、これより下位では通常の包含層出土状態であった。但し上位については、明確で詳細な記録を行わないまま包含層調査を進めており、不詳な部分が残る。従って、ここで記録した面的広がりより上位まで続いていた可能性も残るものの、数十cmに亘る塚状の堆積・広がりではなかったものと推定しておく。とはいえ、ほぼ水平な面的広がりとも判断され、このことも意味があるかもしれない。なお遺物の取り上げはT16西拡張の遺物No.としており、遺物集計は行い得たものの、その後のミスもあって図化等を行い得なかった（集計表ではT16西拡張No.）。従って出土遺物は遺憾ながら第27図1を除く殆どを報告できないが、再確認後の段階で補う機会をもちたい。なお隣接のイ0SX4やイ1SX5との関係は不明である。



第24図 A区イO(アOP1・イOSX1・4・P1~4)平面図・断面図

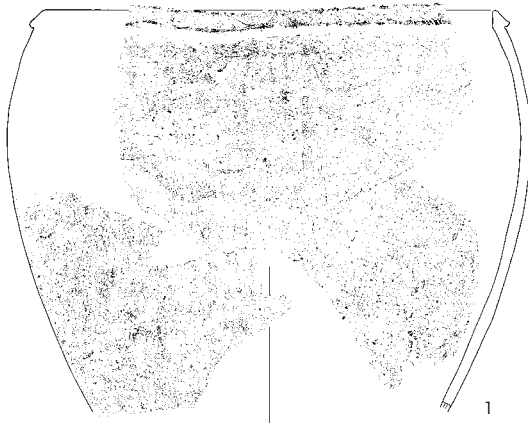


第25図 A区イOSX1遺物出土図・断面図

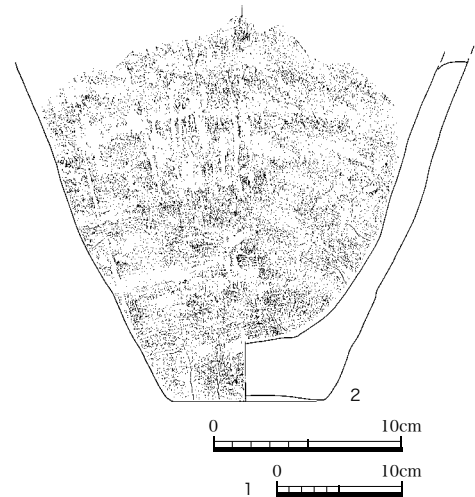


第26図 A区アOP12平面図・断面図

T16 カク SX1



T16 カク P12



第27図 A区出土土器(3)

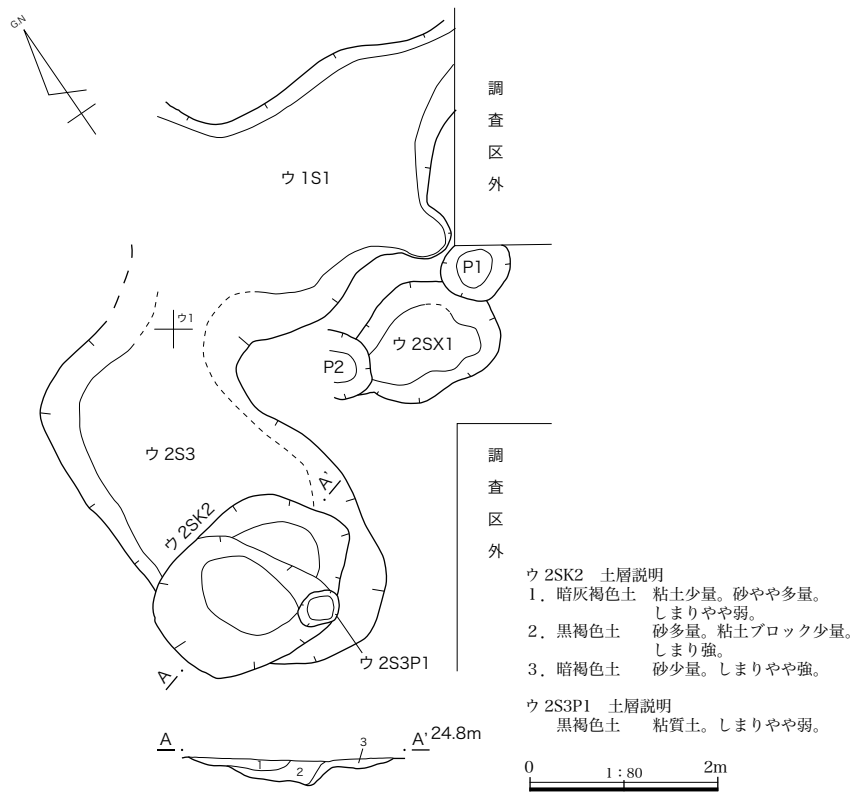
アOP12(第26図)はピット内に土器が据えられたかのような状態で出土したものである。ただし土器は深鉢の底部～胴部下半(第27図2)で、確実に据えたもの、埋設したものと捉えてよいか、判断は難しい。

イOSX4は浅い土坑で、土層断面観察からイOSX1P1に切られる。南西側にあるア1P14,13～ア1S10等も含め考えてピットの配列をみると、弧状の展開を窺うこともできるが、建物跡復元には至らない。

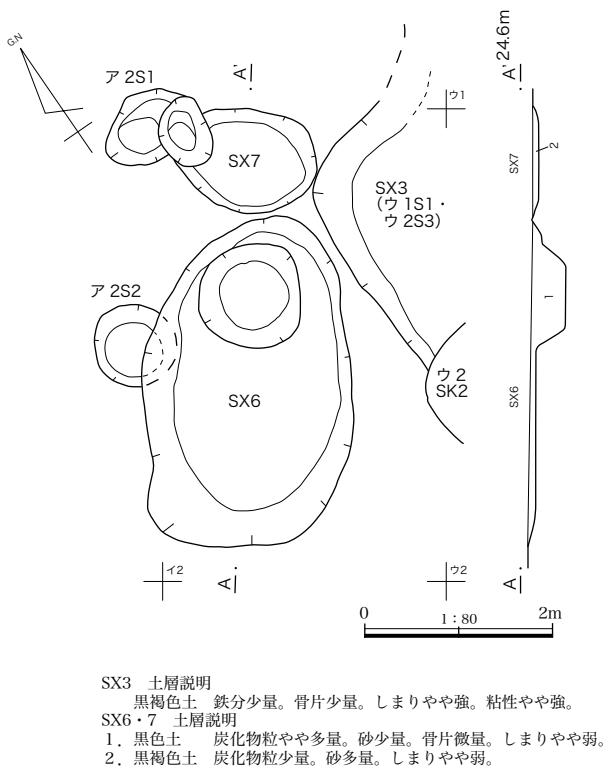
A区SX3、ウ1S1、ウ2S3、イ2SX06,07、ア2S2(第28,29図)、イ4S1等

東側に位置するウ2S3等のある第28図は第20図等と別に示したが一連の調査で連続的である。

この両挿図に示したプランはVI層上面～中位で確認されたもので、概ね同一面のものである。調査時はA区イ2SX3、A2区ウ2S3、ウ1S1それぞれ別遺構で扱ったが、一連の浅い落ち込み部分が連続的でこれら



第28図 A2区 ウ1S1・ウ2SK2・S3 (P1) 平面図・断面図

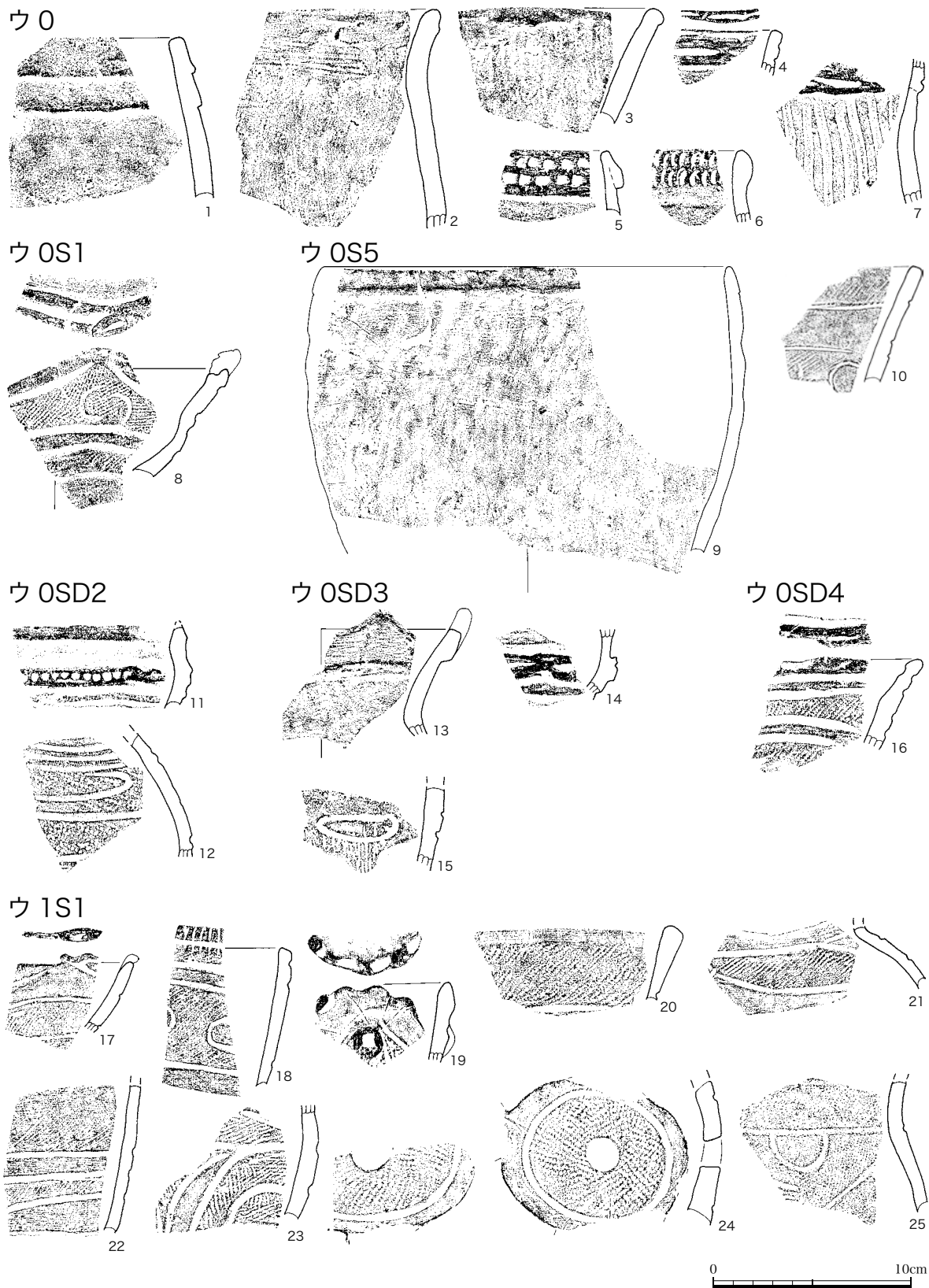


第29図 A2区 SX3 (ウ1S1・ウ2S3)・A区 イ2SX6・7・ア2S2 平面図・断面図

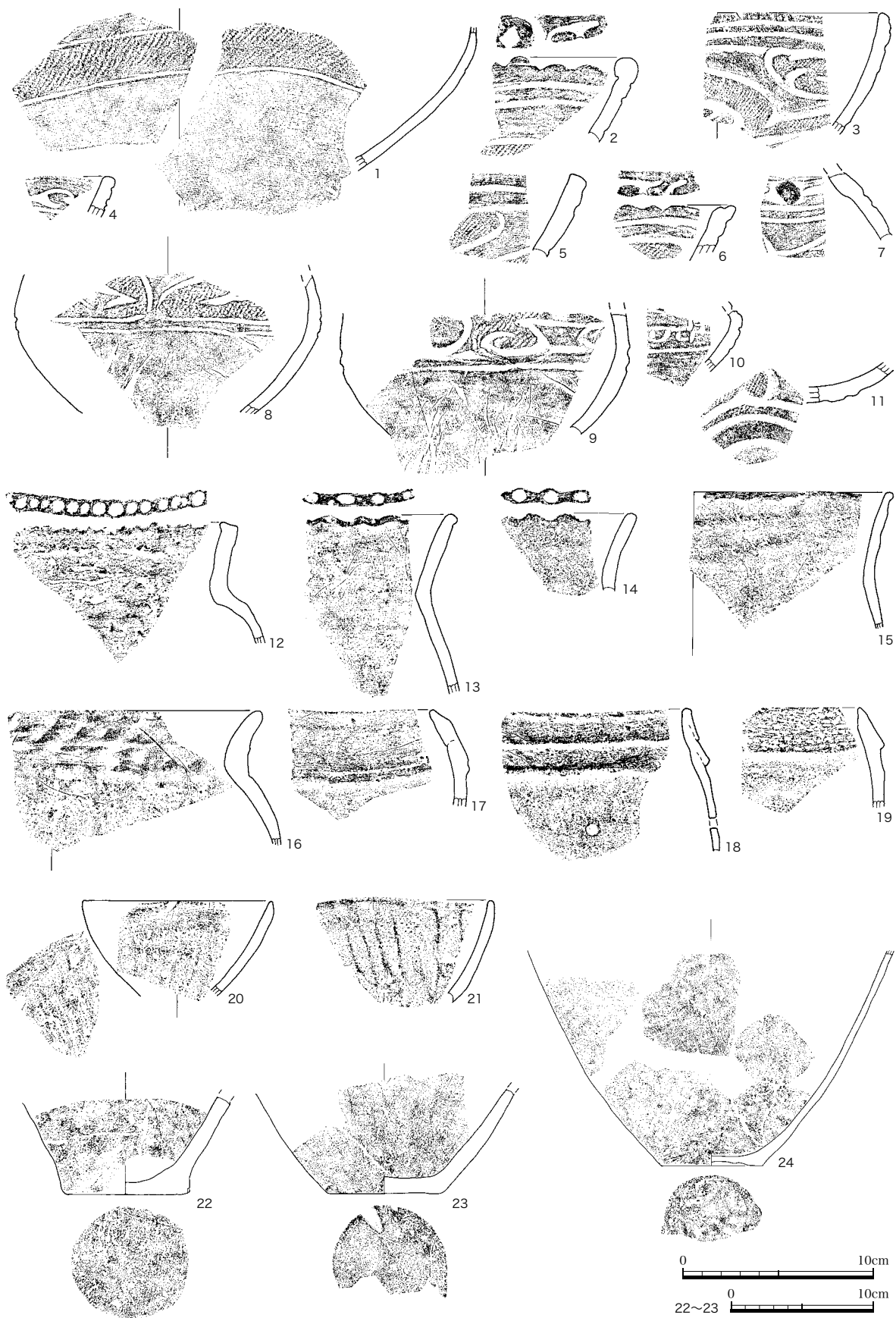
をまとめて同一遺構で扱う。当初遺構と想定しこれらを掘り下げたが、明確で整ったプラン・掘り込みや壁を確認することはできなかった。或いは複数遺構重複の可能性も残るが、これについても判断し得ない。ウ3S1等も含めて広く溝・周溝状の遺構との推定も不可能ではない。なおこれらはA区調査の最終局面で行ったもので湧水著しく確実な底面の確認に至っていない。一方この黒色部分から多量の土器が出土した点は所見として記しておく。

つまり遺構との判断も難しく、VI層中の黒色土(基本V層対応?) 落ち込み部分とした方が良さそうである。更には言えばVI層上面は必ずしも平坦では無く、凹凸のある面、或いは後の自然的要因により平に広がる面が波打つようになった、或いはそもそも時間的断絶のある不整合面が形成されていなかった可能性なども窺わせる。

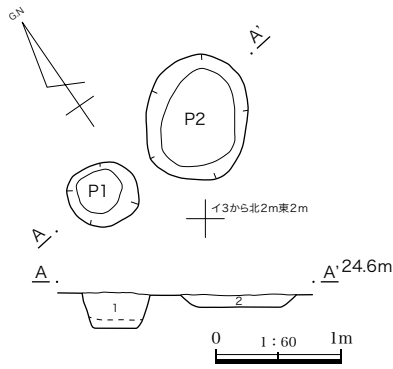
この意味ではこのウ2S3と重複するウ2SK2や隣接するウ2SK1等も人為的な掘り込みを有する遺



第30図 A区出土土器(4)



第31図 A区出土土器(5)ウ1S1



イ3P1・2 土層説明
 1. 暗灰褐色土 炭化物粒やや多量。鉄分少量。砂やや多量。
 しまりやや弱。土器多量。
 2. 暗灰褐色土 砂やや多量。炭化物粒やや多量。しまりやや弱。
 土器多量。

第32図 A区イ3P1・2平面図・断面図

構と言うより、落ち込み・起伏と捉えた方が良いかもしれない。

ウ1S1出土土器を第30,31図に示した。一定時期幅が認められるが、安行3b式、大洞C1式などが目立っている。ウ2S3(第72図)では晩期安行式前半がやや目立っている。

SX6(第29図)も浅い落ち込みで楕円形の土坑と捉えて調査した。西側で重複するア2S2との関係も不明だがS2を先に確認し掘り下げており、SX6→S2となる可能性が高い。SX7とア2S1との関係も不明、またSX6・SX7・SX3(ウ1S1)相互も隣接状態にあるが関係性は不明で、一連の浅い落ち込みと捉えた方が良いかもしれない。

A区イ4S1(第33図)：長軸100cm近い規模で浅い楕円形の土坑である。VI層中最終確認面で捉えた黒色プラン部分を掘り下げたところ、浅い落ち込みとなり遺構と判断した。但し底面壁とも不明瞭で覆土も記録観察所見無く、遺構の性格や特徴などを判断できない。

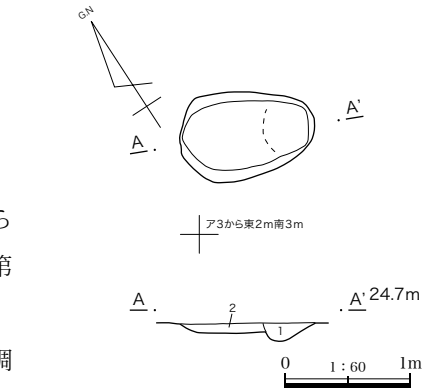
イ3P1・P2(第32図)：径50～100cm、深さ10～25cmの規模でVI・VII層を掘り込む土坑・ピットである。最終確認面で黒色部分があり掘り下げて遺構と判断した。P1断面図の下端ラインは掘り過ぎのようであり、本来の底面と推定される部分を点線で示した。イ2P2の東1.3mにはウ3S1がある。

ア4S1(第34図)VI層上面で確認された浅い楕円形土坑である。周囲に遺構が少ないのは、VI層上面での遺構確認が湧水により困難を極めたことも関係している可能性はある。土層断面では東側のピット状部分が浅い西側部分の覆土を切るように観察され、2基遺構重複の可能性を示す。平面的な把握は困難であったが、図での対応するラインを破線で示した。一応一遺構として規模を計測すると、107×70×14cmとなる。第49図23に出土土器を示す。無文の口縁部破片で時期判断は難しいが、晩期の範囲内ではあろう。

ウ0S1石囲炉(第35図)

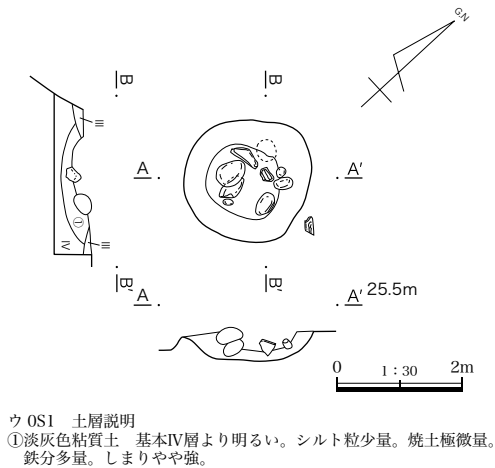
ウ0区上位の包含層中で確認された炉跡である。確認はV層上位の黒色土中。掘り方は50×47×12cm。掘り方・石囲の範囲とも小さめと言えるかもしれない。この内部にやや大きめの礫が円周状に配される。但し南東側など抜けている部分もあり、構築使用時の状況をどの程度留めているのか疑問な部分も残る。V層

第33図 A区イ4S1平面図・断面図

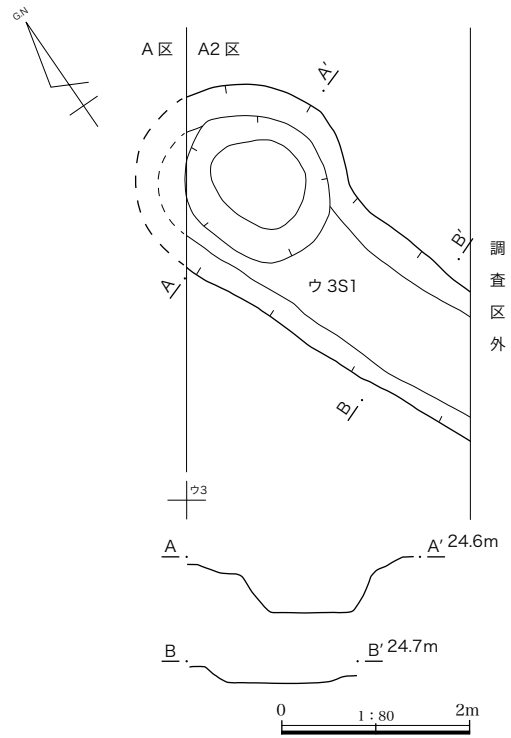


ア4S1 土層説明
 1. 暗灰褐色土 鉄分・炭化物少量。しまり強。
 2. 灰褐色土 砂少量。しまりやや強。粘性やや強。

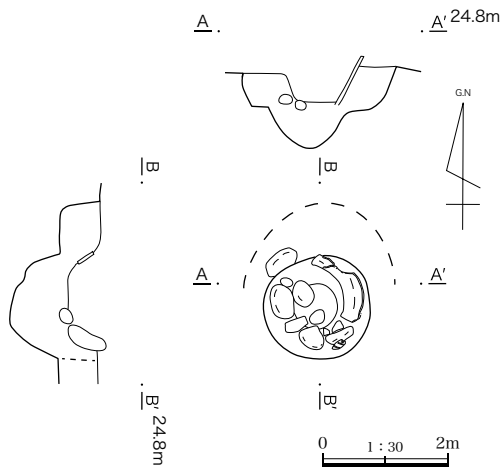
第34図 A区ア4S1平面図・断面図



第35図 A2区 ウ OS1 平面図・断面図



第37図 A2区 ウ 3S1 平面図・断面図



第36図 A2区 ウ OS5 平面図・断面図

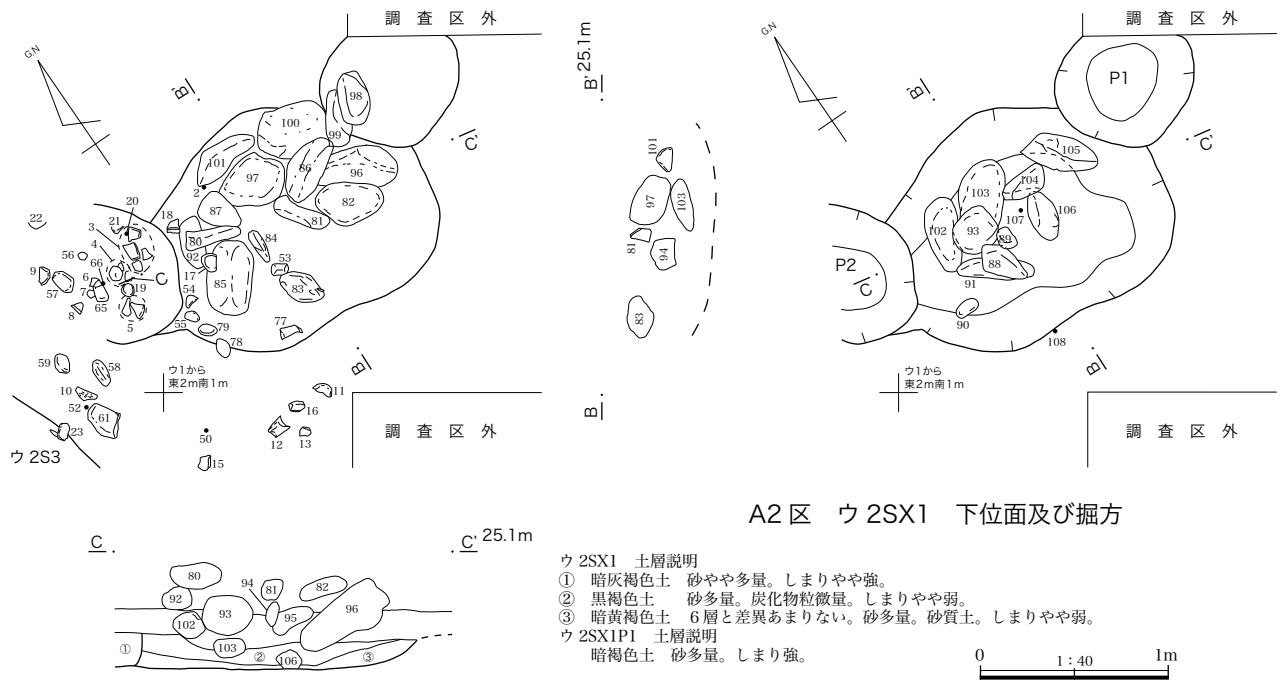
でもかなり上位での確認であり、重機による表土除去時の影響もあるかもしれない。この炉確認時に住居を想定して黒色土の精査、立ち上がりや硬化面の検出を試みたが、黒色土包含層上位ということもあり、本炉跡と関わる遺構や立ち上がりなどは認められなかった。

本遺構は大きめの礫4～6個を掘り方埋土中に置いている。囲い内部の中央に底部破片の出土があったが、使用時や廃棄時の状況を示すものか判断はし得ない。焼土や炭化物の確認はわずかで、礫の被熱もさほど著しくはない。記録は取り得ておらず、整理時のチェックも行なっ

ていないが、周囲から出土した土器は大洞C2式であったとの所見がある。

ウ OS5 (第36図、写真図版八)

包含層調査最終局面で確認された土器埋設遺構である。礫と土器を伴う土坑とも言える。9つの石と組み合わせるようにして土器が埋設されているが、土器の遺存は少なく全周していない。VI層での確認である。掘り方＝土坑は径40cm程度、深さ20cmで掘り込みはより上位でも一部確認されていた。推定上位面での規模は60cm程度となるようで、深さも30cmを越える可能性がある。平面形は円形。内部の覆土(掘り方埋土)は記録をとり得なかったが、基本VI層との差異は殆ど見られなかったとの所見がある。この意味では掘り込み自体も疑問な部分が残るが、一部の断割り調査や周辺の状況(このような土器礫の集中は見られなかった



第38図 A2区ウ2SX1遺物出土図・断面図・下位面及び掘方

こと)から、土器埋設遺構と判断している。出土土器は第30図9,10に示した。

A2区ウ3S1 (第37図)

溝及び円形土坑が複合的となる落ち込みに対してこの遺構名を付した。VII層確認面で黒色土の堆積部分があり、このプランを掘り下げて遺構と確認した。溝状部分、土坑状部分いずれもプラン内すべての底面検出に至っておらず、まだ下がるようである。溝状の部分は幅1.4～1.5m、深さ18cm、土坑状部分は径1.7m程度である。他の包含層部分に比べ遺物がやや多く、石鏃や耳飾りも出土している。遺物図は第72図13～32、第73図に示した。安行3b式、大洞C1式、同C2式等があり、大形破片、径復元個体もある点は注意される。

A2区ウ2SX1 (第38図、写真図版七)

ウ2SX1は土坑または掘り方を伴う配石遺構である。ウ1～ウ2にかかる遺構で、一部東側に調査区を広げて全体形状の把握に努めた。掘り方(土坑)の規模は長軸160cmを越える大きさだが、掘り込みは必ずしも明瞭ではない。上位はV層中位～下位、掘り方底面はVI層中である。東側にP1、西側にP2と重複するが、いずれも石を除去後の掘り方確認と併せての遺構確認による。石の広がり等から、P1→SX1→P2の新旧関係を捉えている。P2とSX1は覆土相互の観察からの関係で、P1との関係はP1側に石・遺物が広がっていることによる。南西にS3やS2等の遺構はあるが、関係性は不明である。

石は3段程度の積み重ねで、平面の配置も含めランダムに近い。配石というより集石とすべきかもしれない。但し横長の礫を横位に据え置いているように観察され、立位状のものは無い。30～40×20cm程度の楕円形礫主体でこれに小さめの礫が加えられる。南側は石が少なく、半円～弧状の配列或いは意図的な内部空間をつくり出していると捉えられなくも無いものの、明確ではない。或いは本来より多くの石が配されていた

可能性も残るものの判断は難しい。周囲包含層中にこのような大きさの礫は殆ど認められず、崩落したような状態も認められないことから、概ね構築或いは廃棄時の形を留めている＝原位置から大きく動いていないことを推定しておく。

壁は掘り方部分以外は不明で、配石内部の土が周囲包含層の土と大きく変わっているとの観察所見はない。確認初期の段階でも周辺土層（V層）との関係、掘り込みに注意したが、確実な所見は得られなかった（図版七-2）。第71図に出土土器を示した。晩期前半から認められ、時期幅はあること、出土位置のチェックを行い得ていないこともあって、遺構の時期判断も困難である。やや大きめの破片や比率などから考えれば大洞C1式期の可能性を指摘できよう。

A区出土土器（第39～87図）

土器整理の概要：出土土器の整理は、大きくは区・グリッド毎に行い、図示にあたっては原則としてこのグリッド毎の提示とする。水洗後の資料について分類を行い、グリッド毎に各分類の数量カウントを行った。無文の胴部破片、微細な小片については、その後の整理資料から除外とした。微細な小片以外の有文破片、無文土器などの粗製土器については、径復元可能な大形の破片等について注記を行い、その後接合、図化資料の選択、実測等の整理へと至った。接合については十分な時間をかけることができず、版組後に判明したものも比較的多く、その訂正すら行い得なかったものもある。とりわけグリッド間を跨ぐ接合については殆ど行っておらず、整理時に気付いたものみの反映に留まっており、不十分な部分が多い。

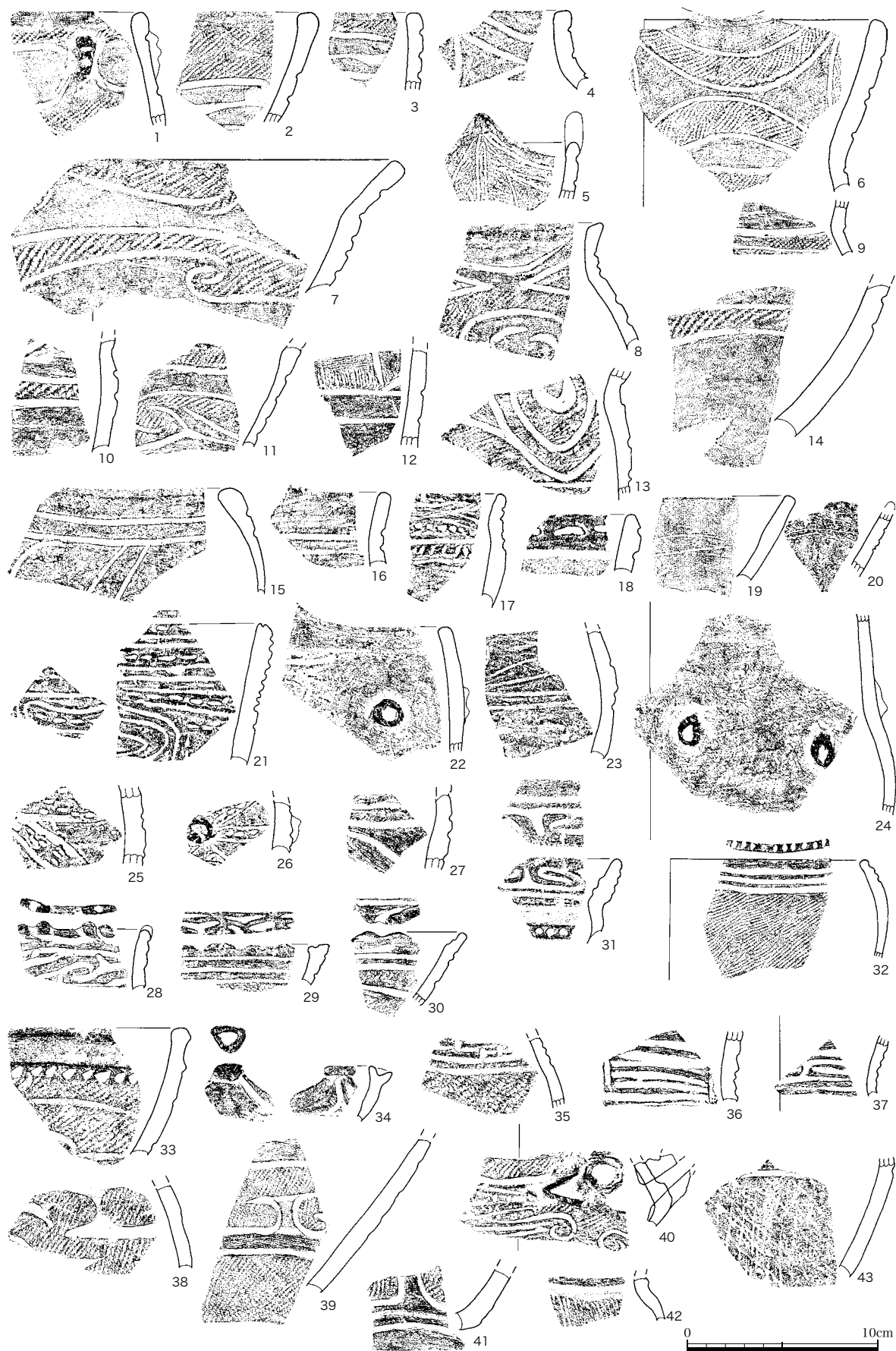
また、整理当初に行ったA区やD・E区では比較的細かな破片まで図化することができたが、B区等ではかなり限定した資料の選択となり、実測図化したにも関わらずトレース製図の段階で選択除外したのも多くある。更にH区・I区・KL区の資料については、分類～接合までは行い得たものの、遺構出土資料やグリッド出土の復元個体についても実測図化を行い得ないままとなっている。これらの中には注目される資料も含まれており、いずれかの機会に補いたいと考えている。

A区出土土器の概要：大雑把に捉えるならば、A区出土資料は晩期の資料が主体である。とりわけ晩期中葉、大洞C1式～同2式期の資料で注目すべき土器がある。晩期初頭・前葉の資料や、晩期後葉にかかる例もあり、一定時期幅の資料が同一グリッド同一層位から出土していると言ってよい。調査時においては、V層とVI層以下で主に含まれる土器の型式差があることも推定していたが、整理の結果ではさほど明らかではなく、むしろ両方の層とも一定時期幅の資料が混在している様相であった。整理でも実測等までは層位毎に区別して整理していたが、最終的な版組では一部を除き、層位毎の提示は行わないこととした。

図版の提示の中では、大きくは分類を活かしつつ、更に細かな型式の差異、器種や系統の違い及び文様要素の違いなどに注意して配列した。例えばA0グリッドの第39図では1～10が磨消縄文を特徴とするB群で、安行3b式あたりが目立っている。A1グリッドの第41図では1～18がB群で、一部「前浦式」の19もここに含めている。第39図では15～27がA群としたもので、紐線文系の粗製土器、またその系統をひく「副文様帯系」、沈線及び沈線+刺突施文の「安行3c式、3d式対比土器群」、円形浮文等の特徴とする「天神原式」などがここに含まれる。A1グリッド例では第41図の21～46、第42図の1～9がこのA群に相当する。A0グリッドでは第39図の28～43が「大洞式」系統の土器群で、いわゆる「半精製」や燃糸紋、網目状燃糸紋の破片などもここに含める。

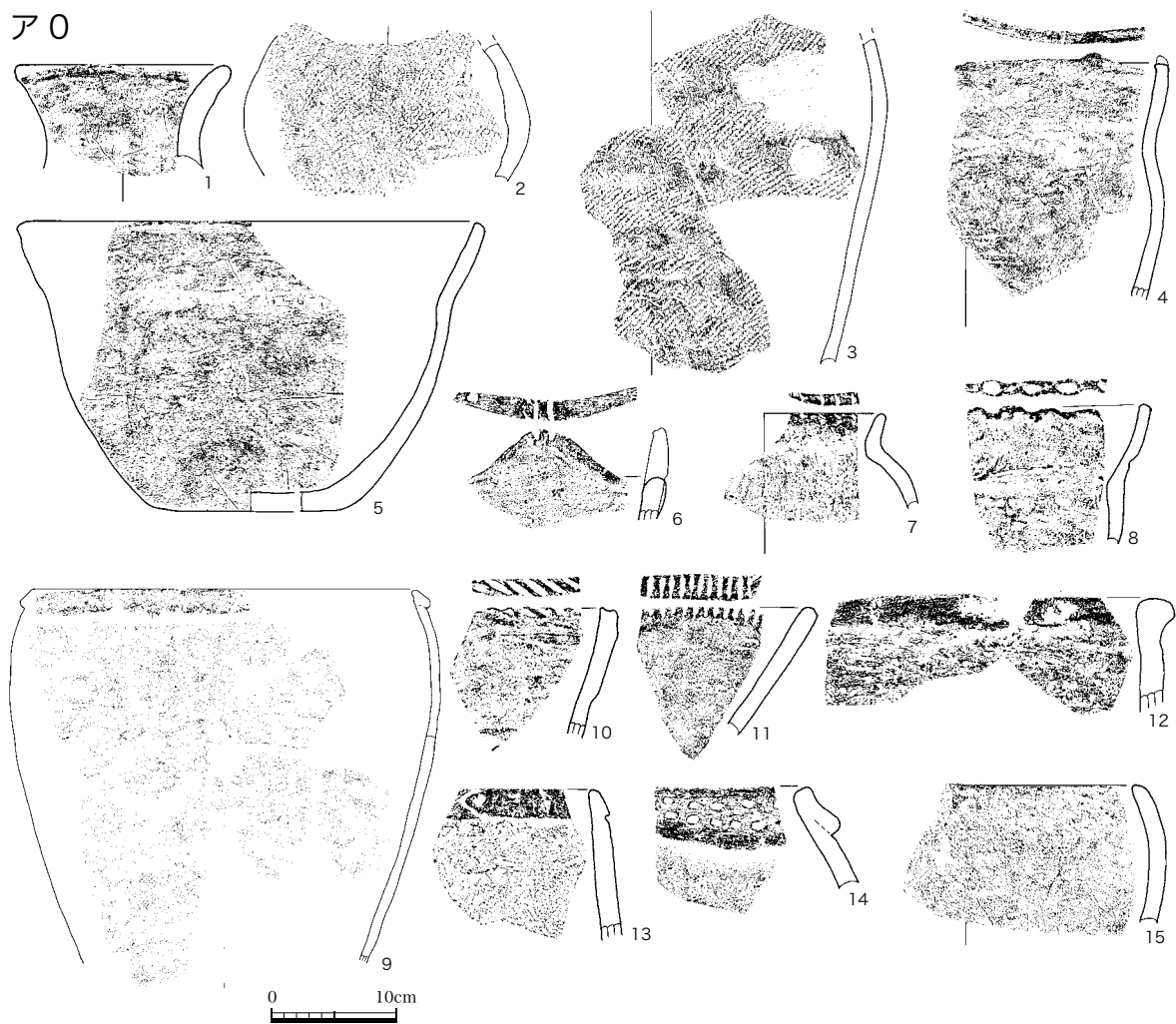
以下無文Bとした無文の中でも鉢などの深鉢以外の器種例、波状口縁や口縁端部に装飾を加える例（第40図6～8、10、11）、付帯口縁（折り返し口縁）の例、付帯口縁上に装飾を有する「折B」の例（第40図

（→P43）

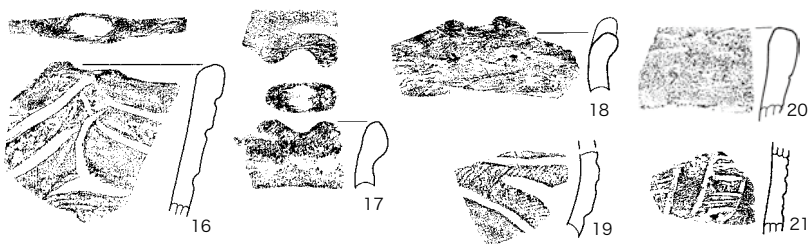


第39図 A区出土土器(6)ア0

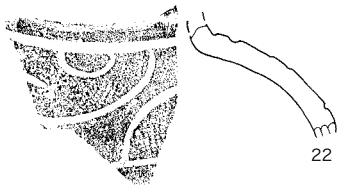
ア0



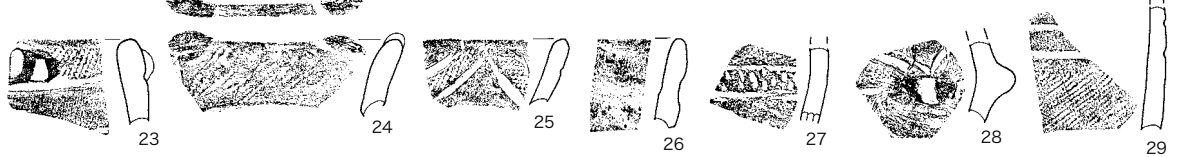
ア1S2



ア1P6



ア1S4



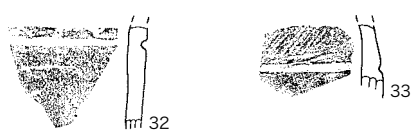
ア1S10



ア1P5



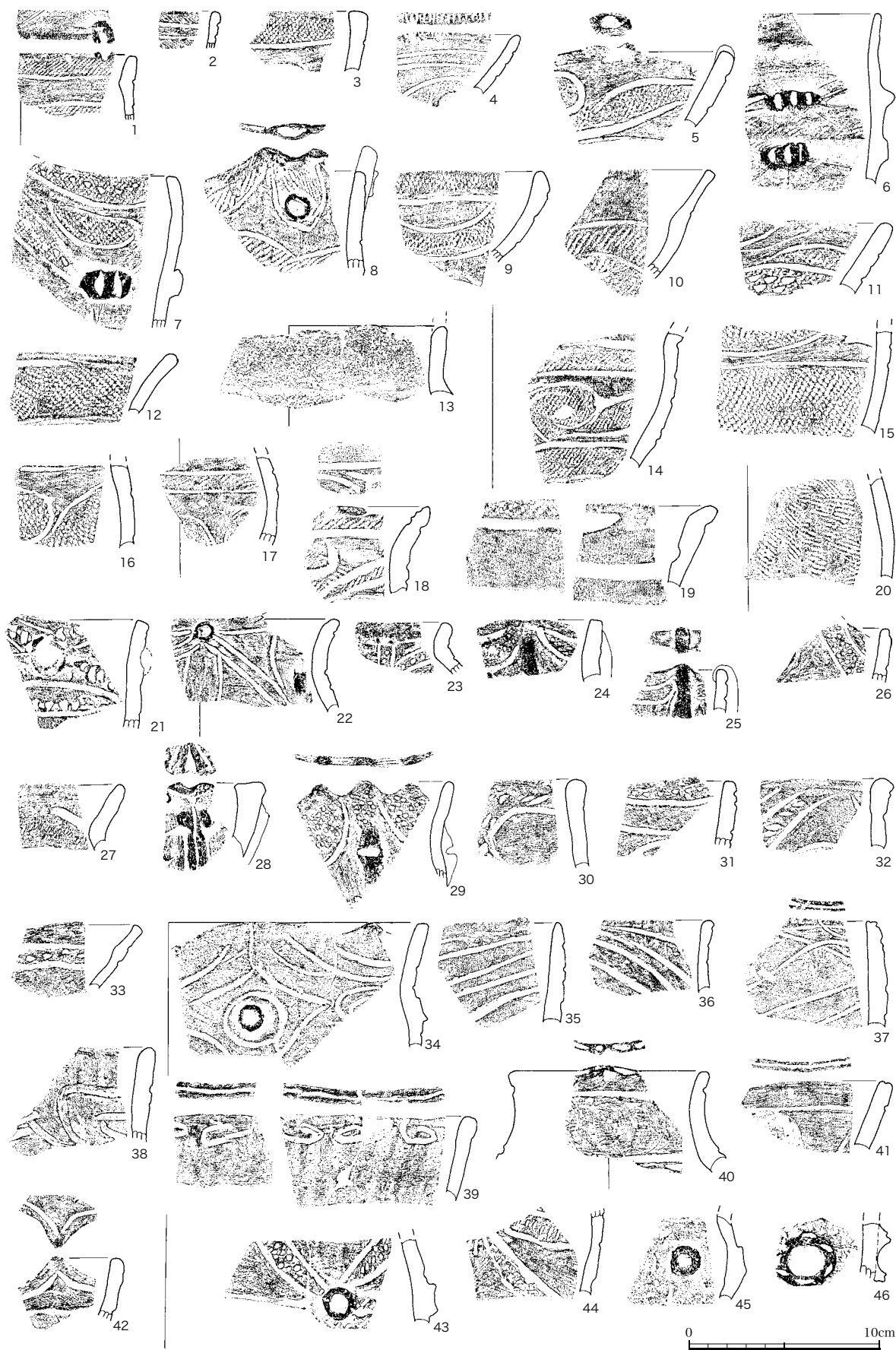
ア1P10



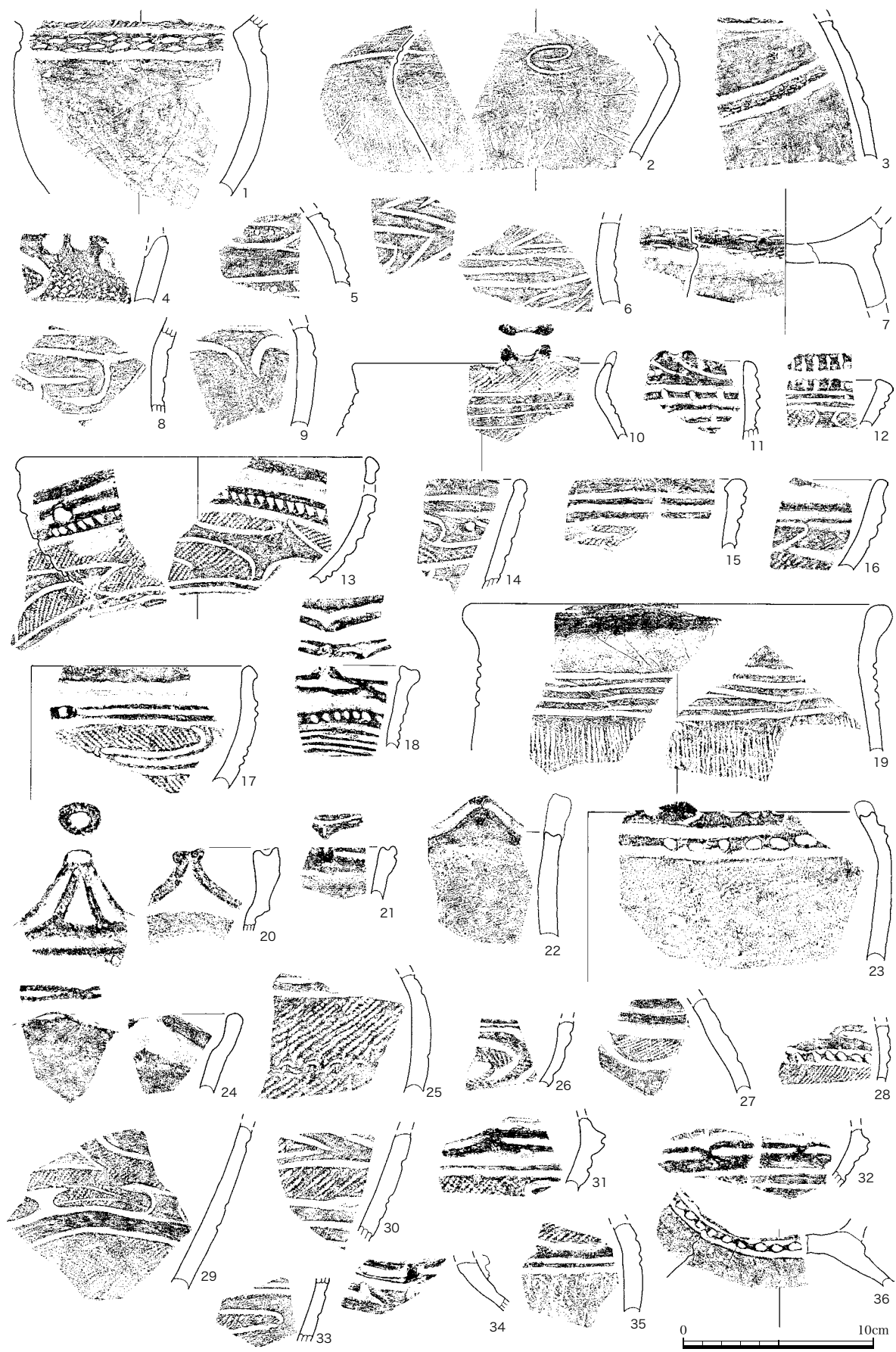
ア1P13



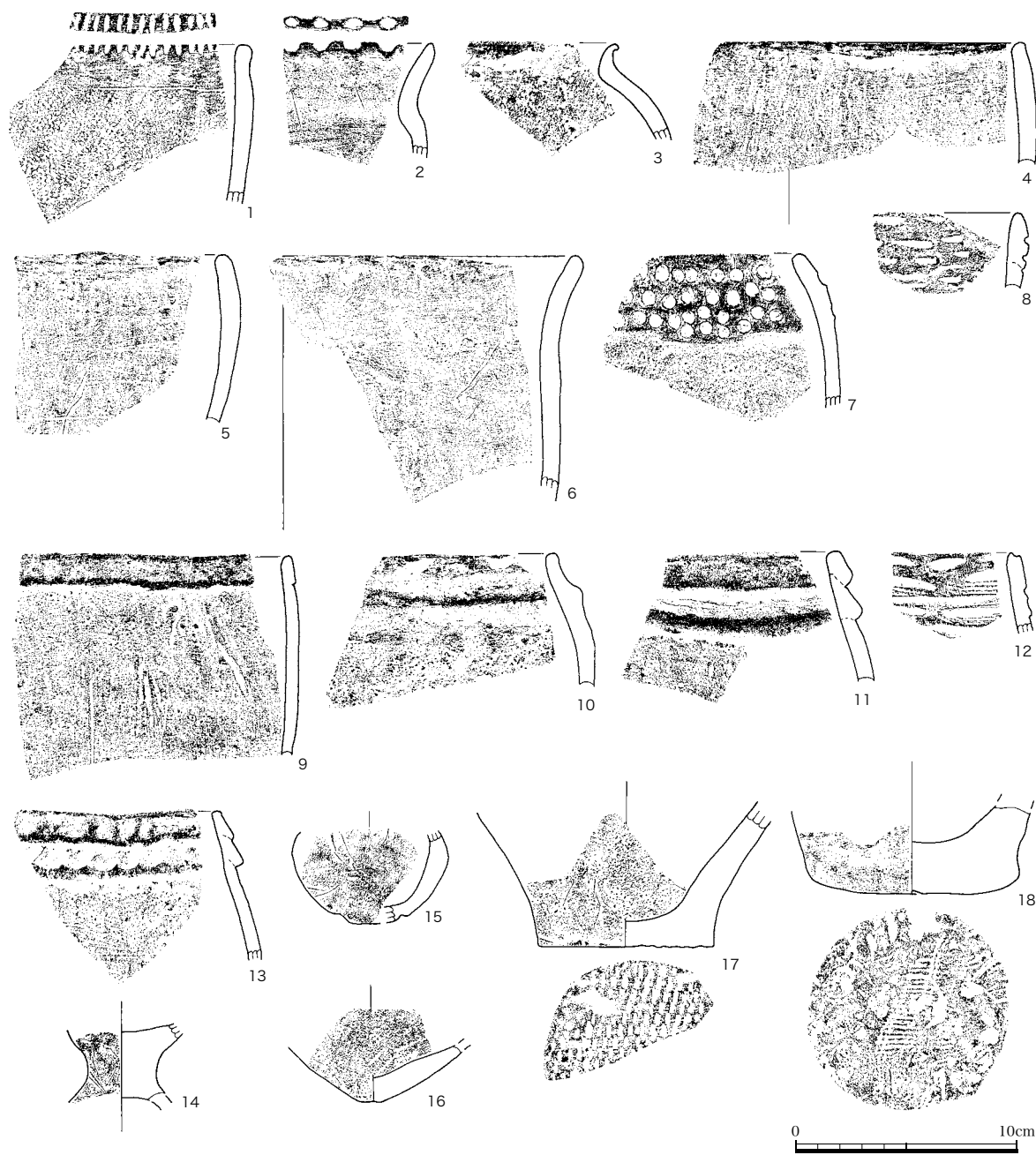
第40図 A区出土土器(7)



第41図 A区出土土器(8)ア1



第42図 A区出土土器(9)ア1



第43図 A区出土土器(10)ア1

14)、縄紋のみ及び無文の例などの順で示している。

遺構出土資料について以下概観する。

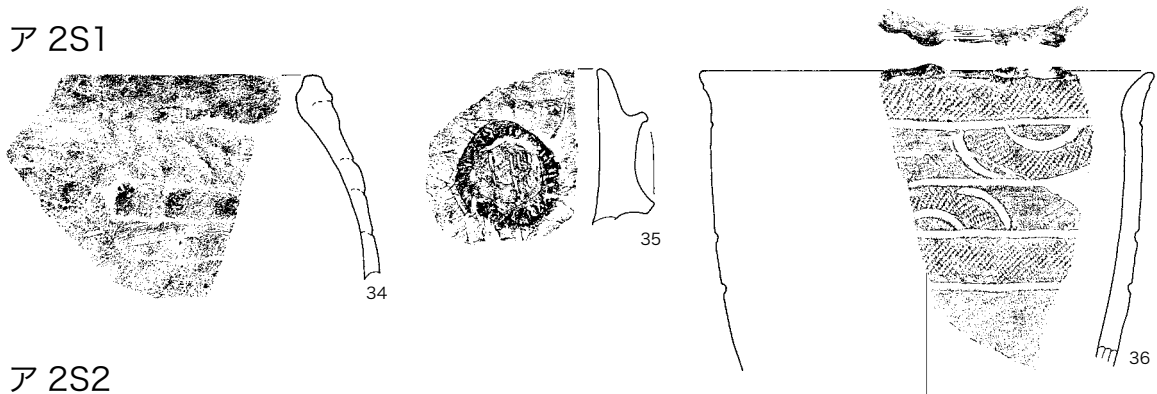
ア1S2(第40図16～21)では晩期前半の資料が目立つ。ア1P6,P5,P10,P13(第40図22,30～34)では小片多く判断難しいが、安行3b式あたりが目立つ。ア1S4(40図23～29)では安行3b式、同3c式がある。以上が各遺構の時期判断の参考とすべき資料である。

第41～43図はア1グリッド出土資料である。A群の安行3c式～天神原式系が目立つ(第41図34～46など)。大洞系では第42図18～22などが大洞C2式新段階～同A1式対比となろうか。

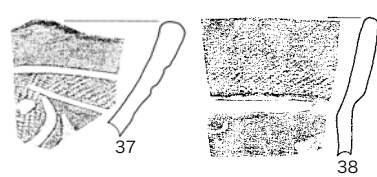
ア1・VI層



ア2S1



ア2S2



ア2S3



第44図 A区出土土器(11)



第45図 A区出土土器(12)ア2



第46図 A区出土土器(13)ア2

ア1 VI層出土資料を第44図上中段に示す。安行3b式～同3c式対比資料が多い。

ア2S1及びS3出土資料(第44図34～36,41)は小片のみで型式判断が難しい。ア2S2(第44図37～40)は安行3a～3b式あたりが目立つ。

ア2グリッド出土資料を第45～47図に示す。第45図18,21,22の縄紋のみの破片は、帯状構成や瘤付系の帯状入組構成を縄紋のみで描いているもので、当初は後期末瘤付系の資料と推定していたものである。晩期初頭まで下る資料もあるようだが判然としない。カウント上はこのような例も「瘤付系」としている。17は前浦式系か。沈線施文または沈線+円形突起、刺突文などの沈線主体で描く構成は多様であるが、菱形～矢羽根状を呈するものが目立っているようにも思える。

第46,47図は大洞系・無文、ア2グリッドのVI層出土資料を示す。第46図7は大洞系の壺形土器で、雲形文の構成を採りつつも変容が著しい。摩滅が著しく縄紋施紋が不鮮明なものである。8も特徴的な壺形土器で、口縁の単位は6単位、頸部～体部の沈線は一周する部分と途切れながら数単位施される部分とがある。24の壺は微隆線表現の縦位線が特徴的なものである。26の突帯状浮線は、異系統を思わせる構成、要素だが、胎土や質感ではさほど異質な感が無い。第47図10は第44図4と同一個体、第47図11は口縁の肥厚部分に円文及び三叉状沈線が描かれるもので、他に例をあまり見ない土器である。

第48,49図にはア3～ア6グリッド出土の資料を示す。ア3グリッドでは安行3c式あたりの資料が目立つ。第49図18は体部に撚糸紋が密に施される土器で、内面調整なども比較的丁寧なものである。20の体部は条線でおそらく同図4と同一個体。

第50図はイ1グリッドV層の径復元個体・大形破片をまとめた。1は内部に入組文を擁する菱形文を基調とした文様を描く台付鉢。4は小形の鉢または台付鉢で口縁にはB突起が巡る。

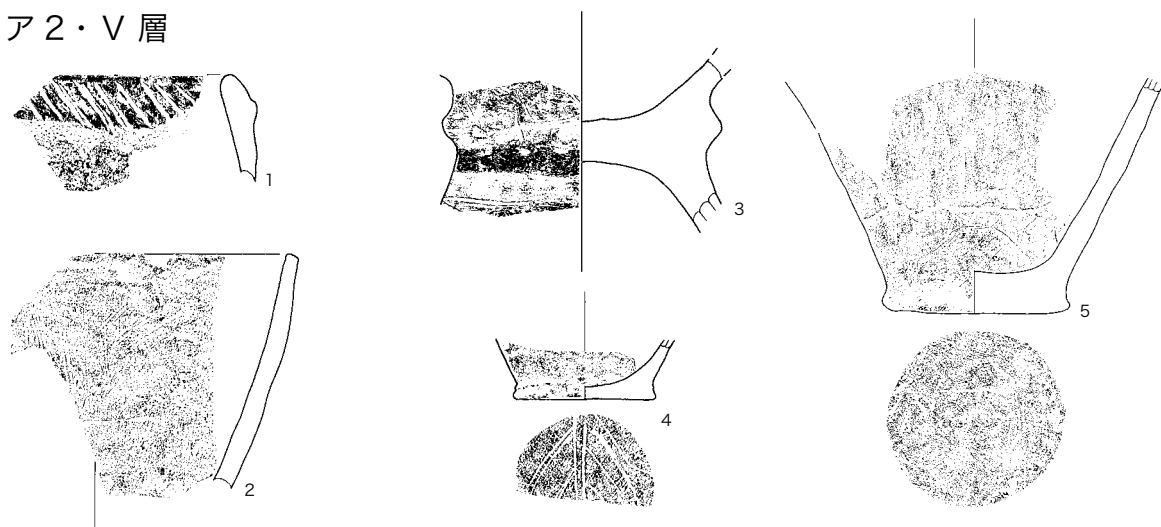
第51図はイ1グリッドのVI～VIII層資料。安行3a式、同3b式の波状縁系深鉢がある。第52,53図はイ1グリッドV層の資料で単位の突起左右で弧線が描かれる第52図29や三角形状区画内に入組文が描かれる第52図30などが注目される。第53図の6以下は大洞系で、口縁や無文部以下に眼鏡状隆帯が巡る16,17の資料が注意される。19は小形の鉢となるようだが、口縁装飾があまり例を観ないものである。

第54図はイ1グリッドV層出土の無文土器、付帯口縁の土器、底部などを上段に、下段にはイ2グリッド出土の安行系資料を示した。第55図もイ2グリッド出土資料。1は当初上下逆も考えた安行系資料で、全体の文様構成は疑問な部分が残る。11は第52図29と同一個体か。10は基体の傾き・歪みから波状縁の土器と捉えたが、違和感が残る。第56図はイ2グリッド出土資料で13や26等が注目される例である。26は上面観方形に近い皿形の土器でミガキ調整が顕著に残されている。口縁に弧状の突起が付されこの下位に小さな対の貫通孔が設けられる。31は弧状の隆帯を入り組むような位置関係に配している付帯口縁の土器である。第57,58図はイ3グリッド出土資料で、P1,P2出土例もここに示した。安行系では台付鉢脚部の資料が目立つ。第58図の12以下に示す大洞系では入組三叉文が二帯描かれる12の例や13の鉢が注目される。第59図はイ4～6グリッド出土資料で、ここでは小片が多く特徴も見出しがたい。

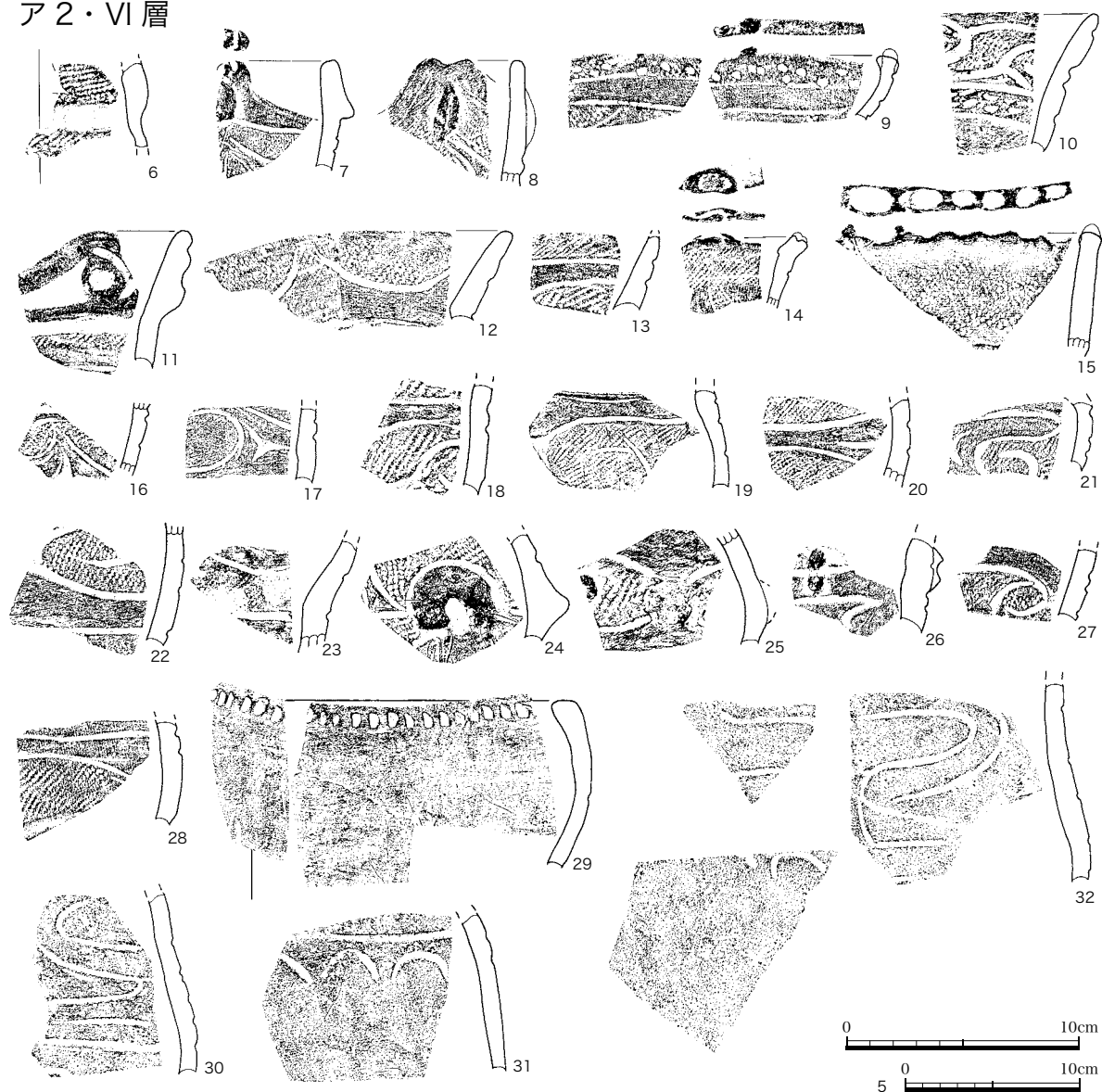
第60～62図はウ0グリッド出土土器で大洞系の良好な復元個体もある。第60図1は口縁にA突起、体部に網目状撚糸紋が施される深鉢(広口壺)。2も壺状の器形で変容の著しい雲形文が描かれる。交互充填施文も不徹底で縄紋も無節であることなど、かなり異質なものである。3も形制や口縁端部の突起は大洞系の特徴を示すものの、対向弧線状の文様構成や縄紋ではなく刺突を充填するなどの特徴がある。5も縦位の区画状隆線の存在など異質な感があるもの。第62図上段の大洞系では大洞C2式が目立っている。A突起で内面文様もある10～13等はC2式新段階からA1式となろうか。13は口縁直下の帯状部に節の細かい縄紋LRが

(→P51)

ア2・V層

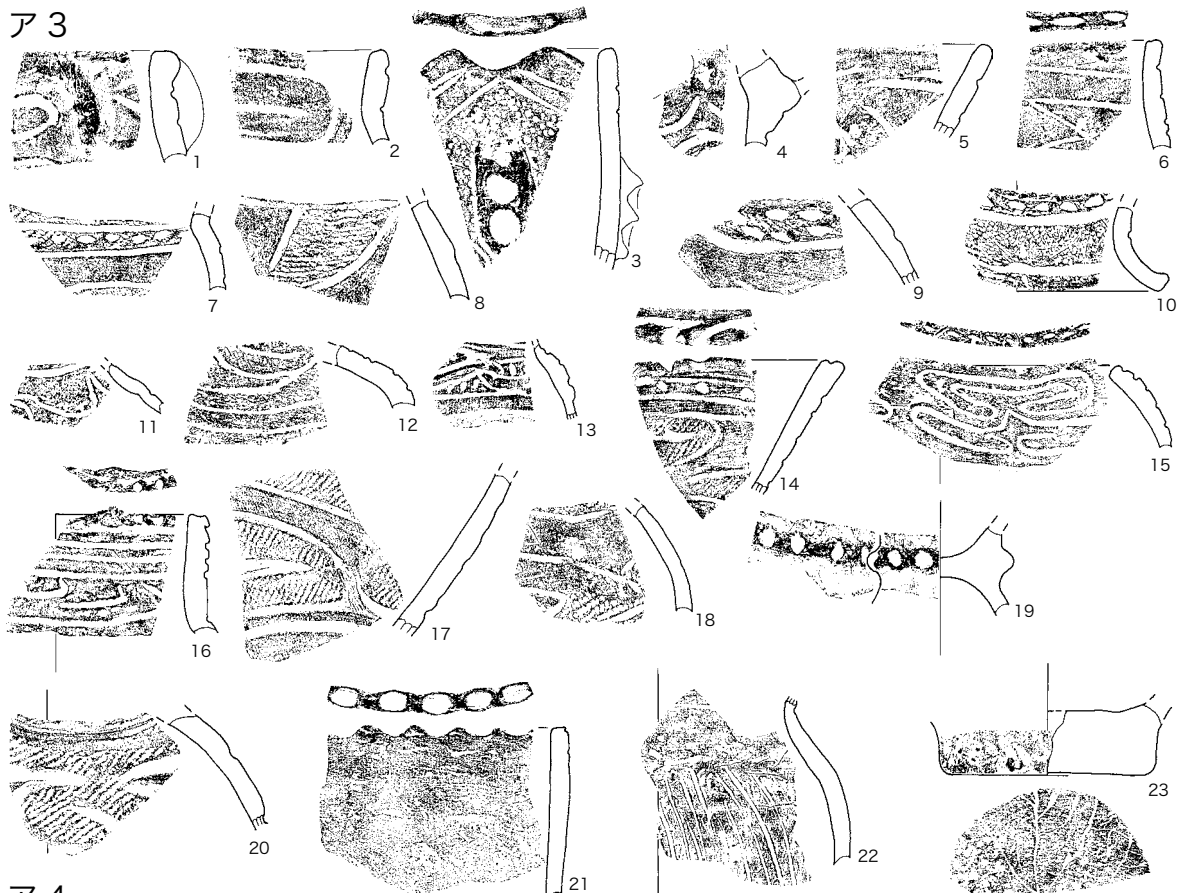


ア2・VI層

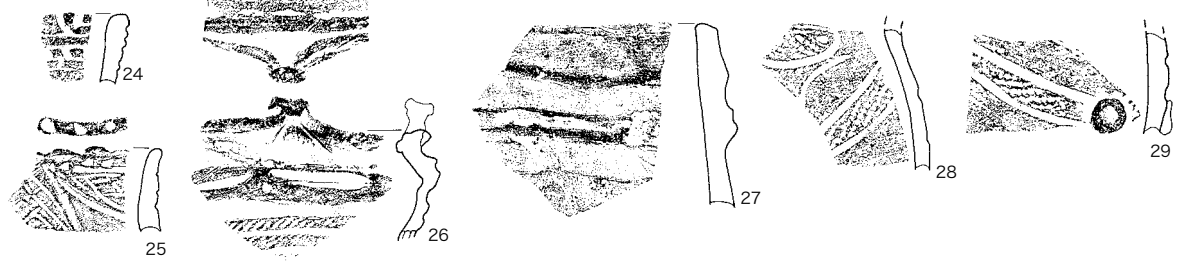


第47図 A区出土土器(14)

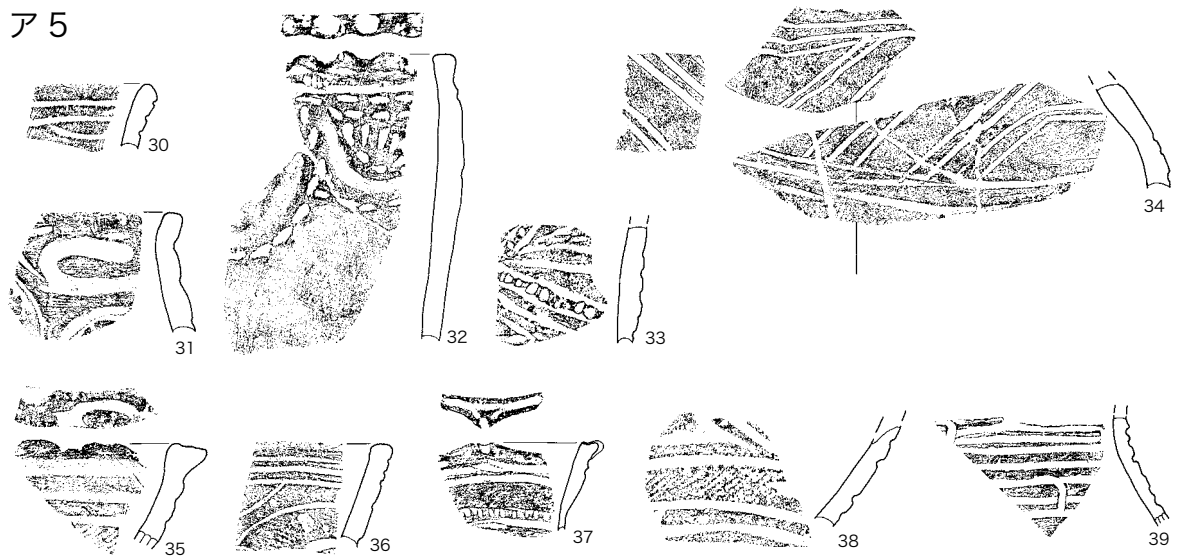
ア3



ア4

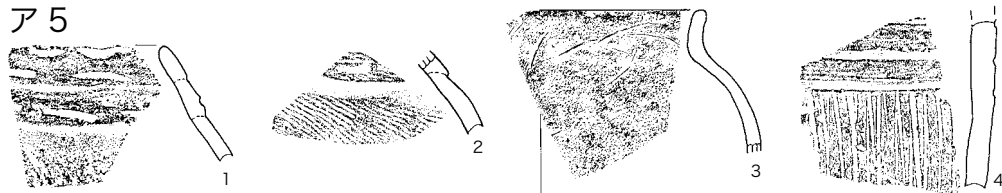


ア5

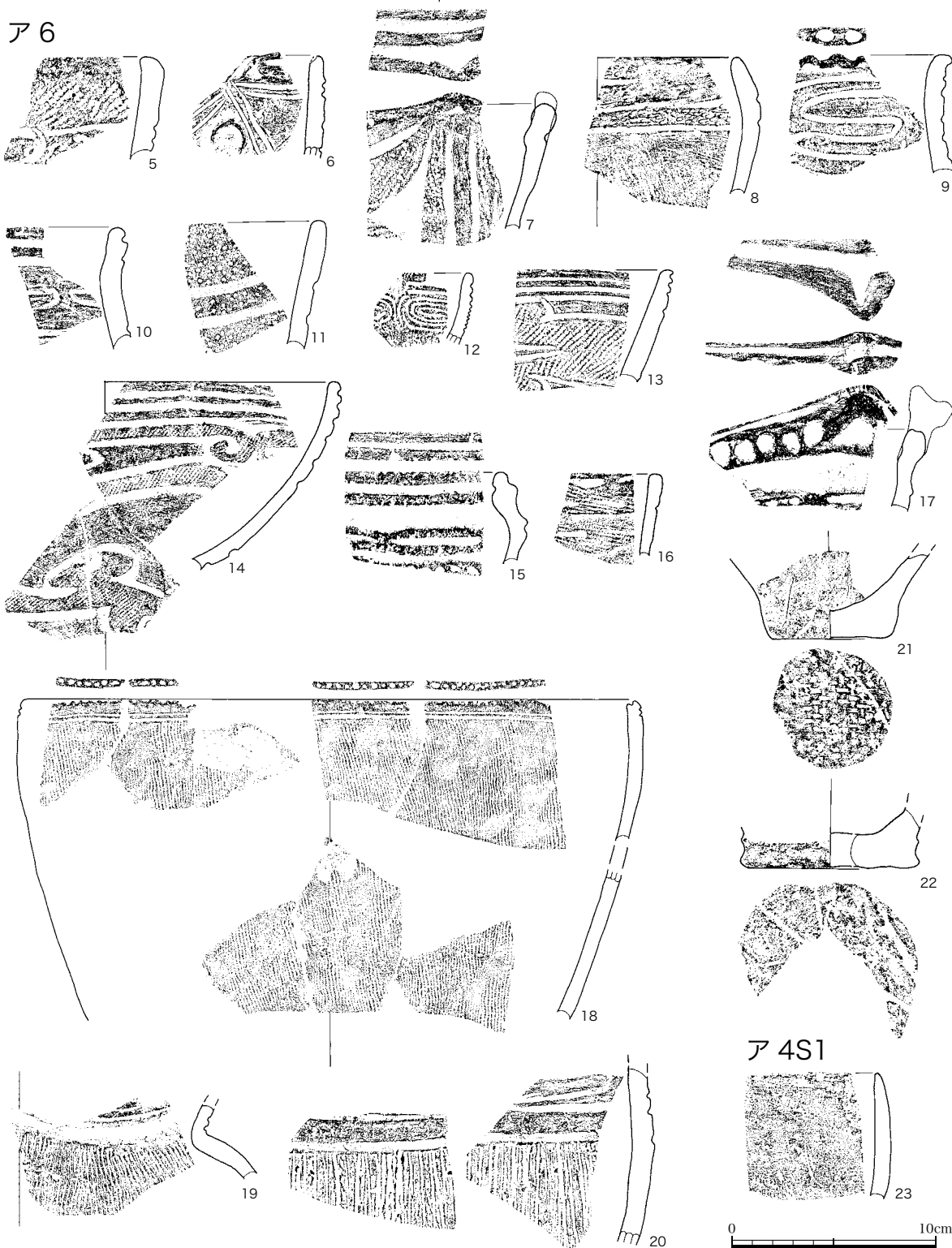


第48図 A区出土土器(15)

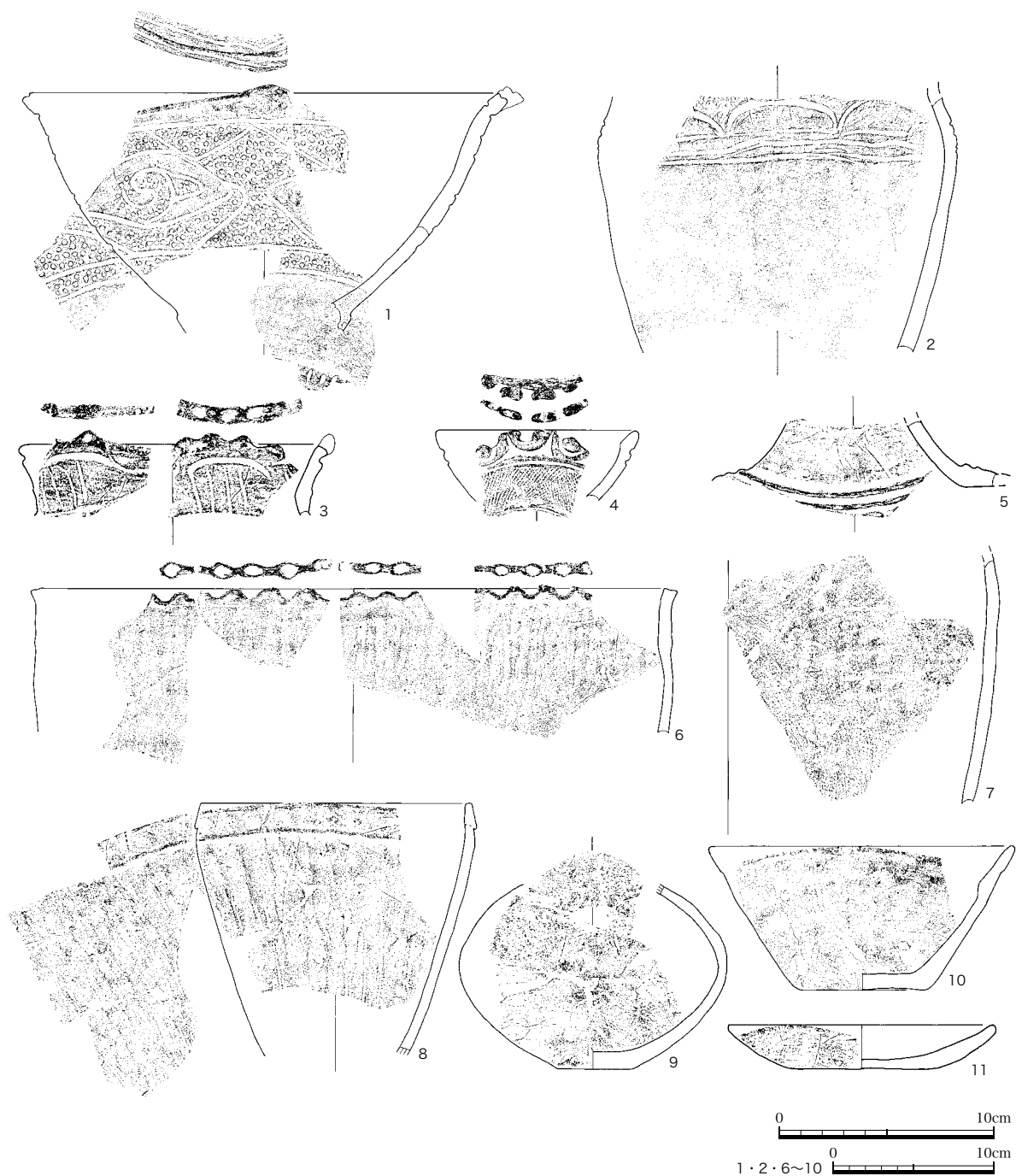
ア5



ア6



第49図 A区出土土器(16)



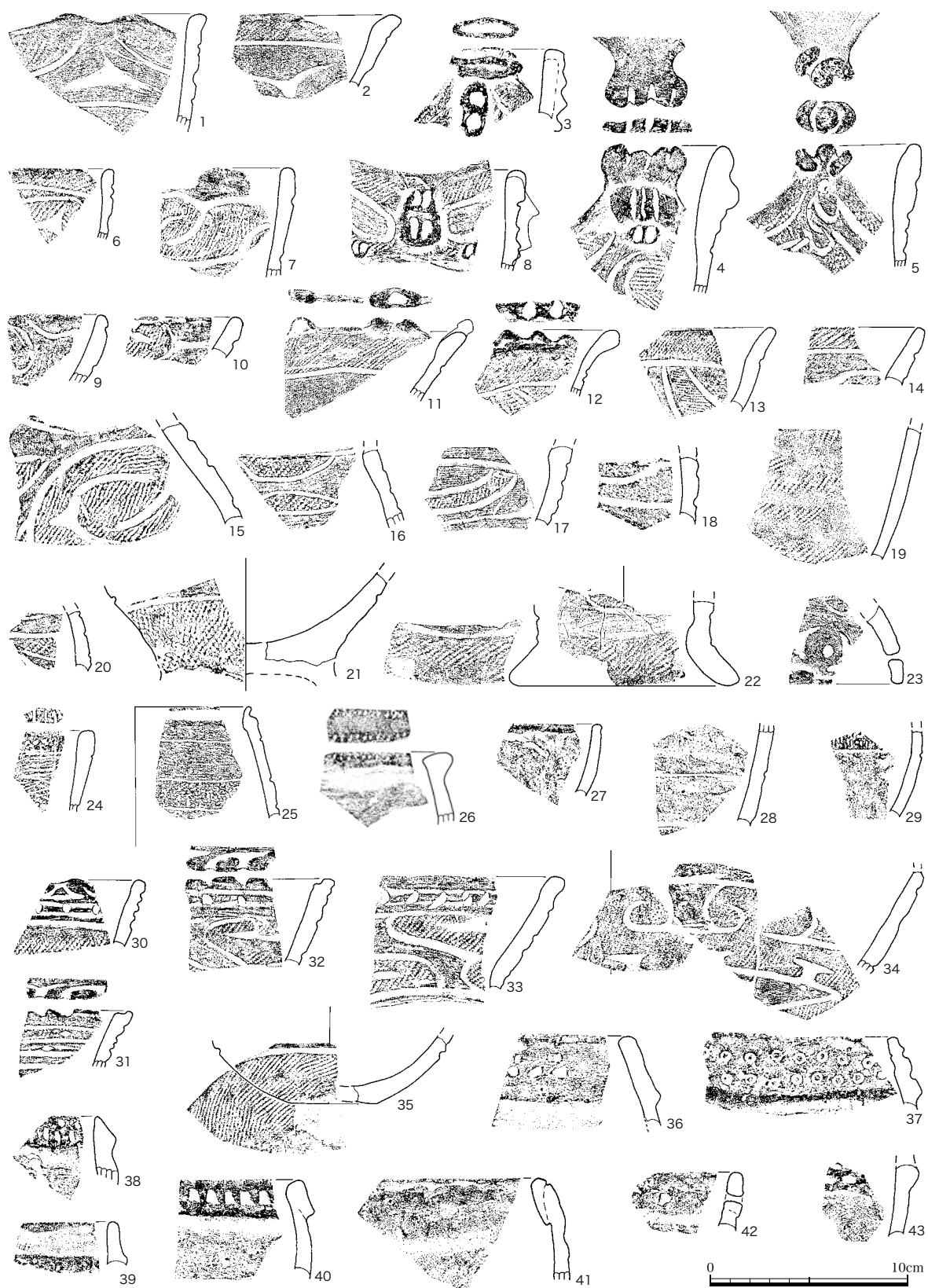
第50図 A区出土土器(17)イ1・V層

施されている。

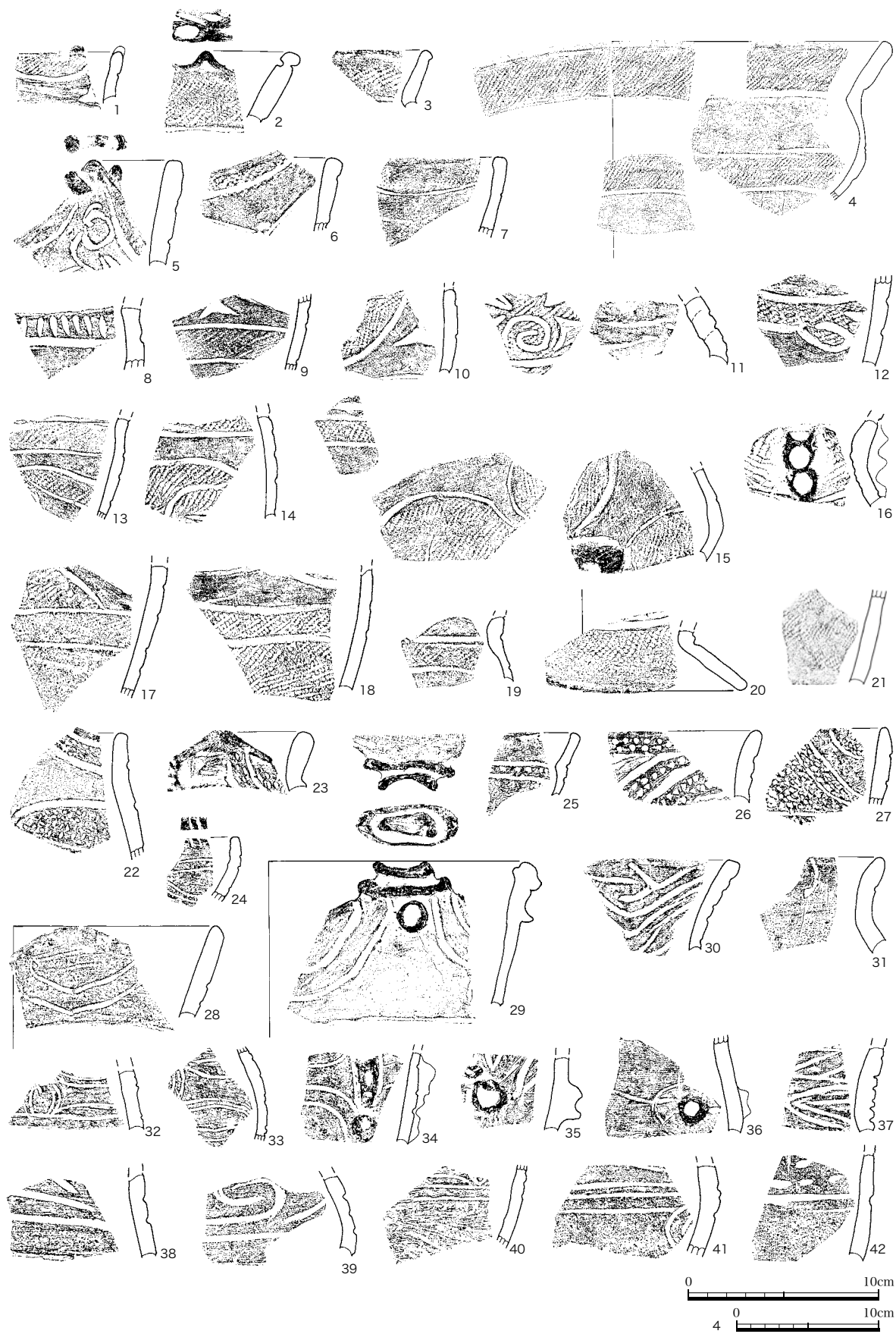
第30,31図はウ0グリッドの遺構出土資料だが、溝出土のものについては混入なのでグリッド出土と捉えられる。ウ1S1では安行3b式が比較的まとまっているようにもみえる。但し第31図に示した大洞系では同C1式がやや目立っており、一定時期幅の資料とみた方が良さそうである。

第63～65図はウ1グリッド出土土器で、注目される例が幾つかみられる。第63図32～36は、沈線表現や意匠は異なるものの、安行3d式平行期の資料となろう。第64図8は円形浮文と弧線文が特徴的で第

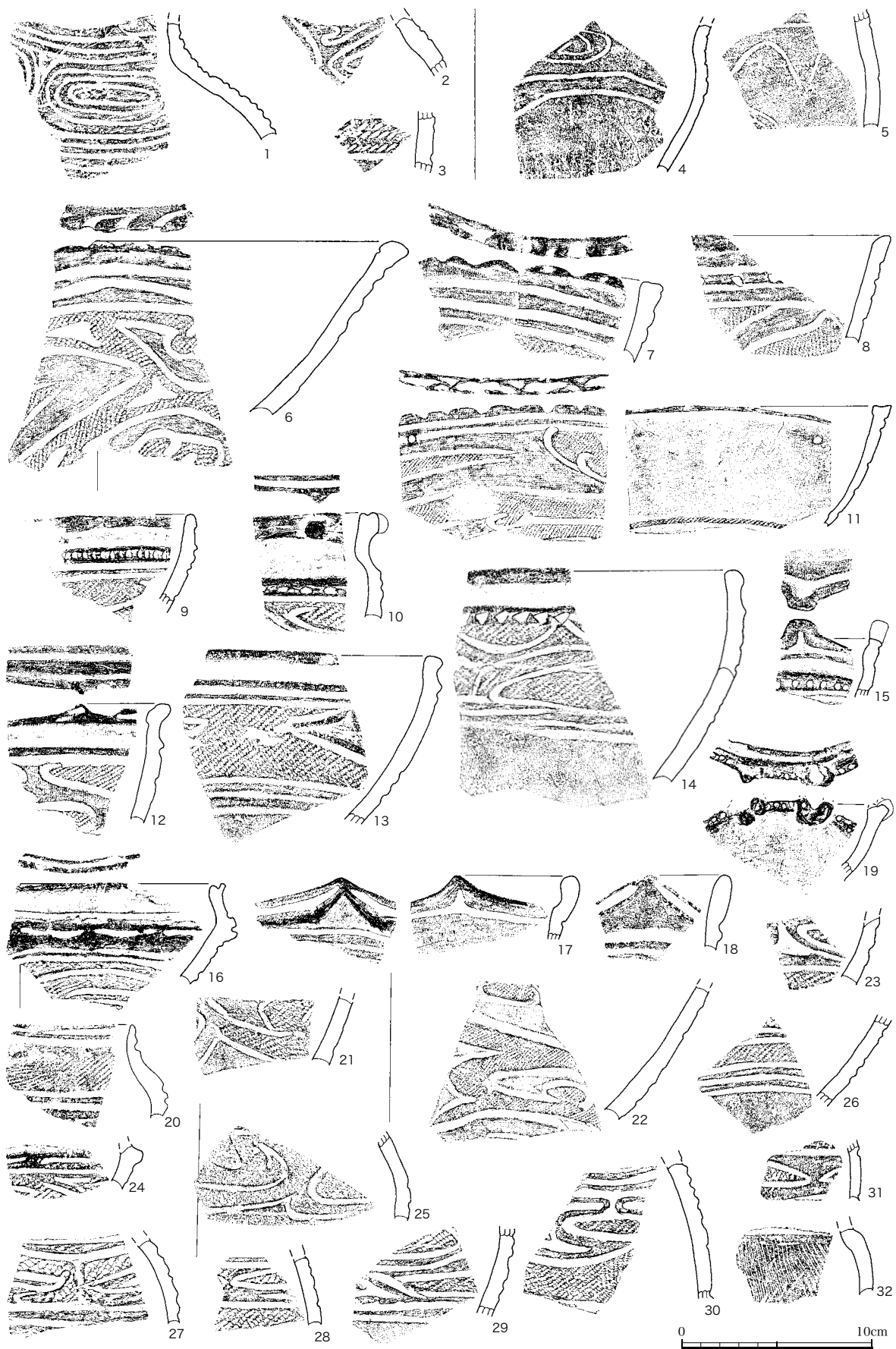
(→P60)



第51図 A区出土土器(18)イ1・VI~VIII層

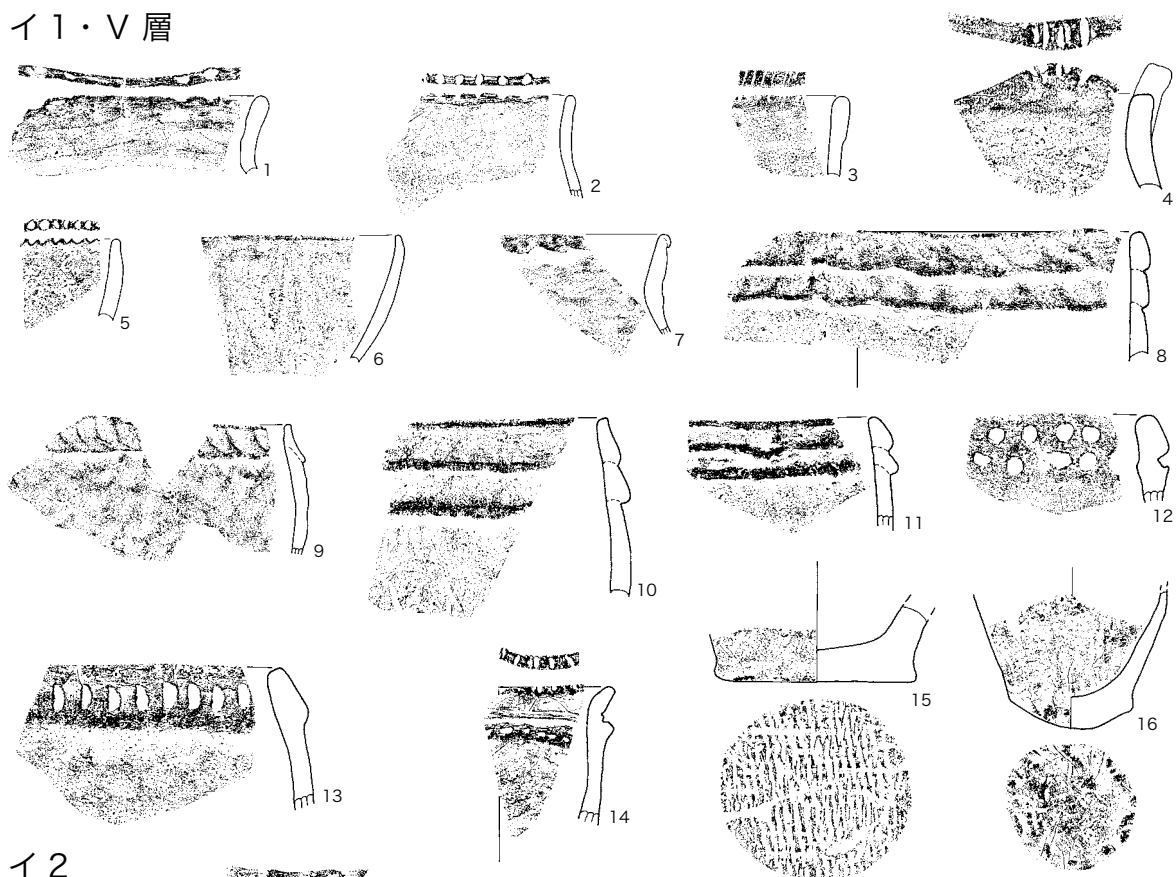


第52図 A区出土土器(19)イ1・V層

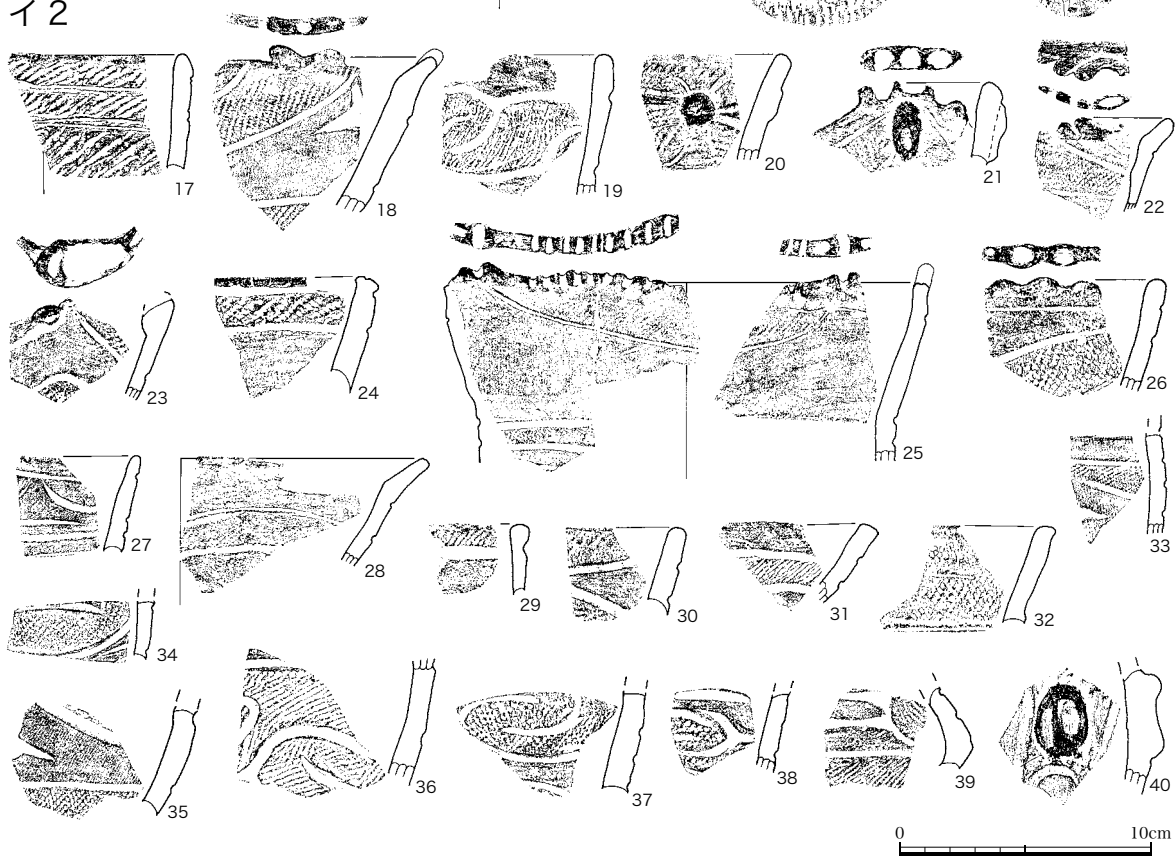


第53図 A区出土土器(20)イ1・V層

イ1・V層



イ2



第54図 A区出土土器(21)



第55図 A区出土土器(22)イ2

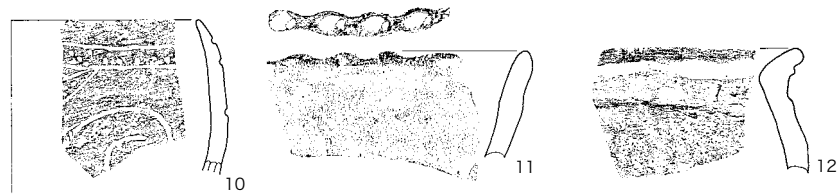
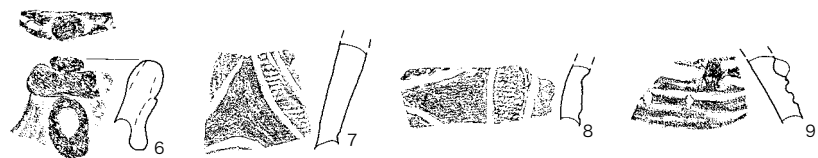


第56図 A区出土土器(23)イ2

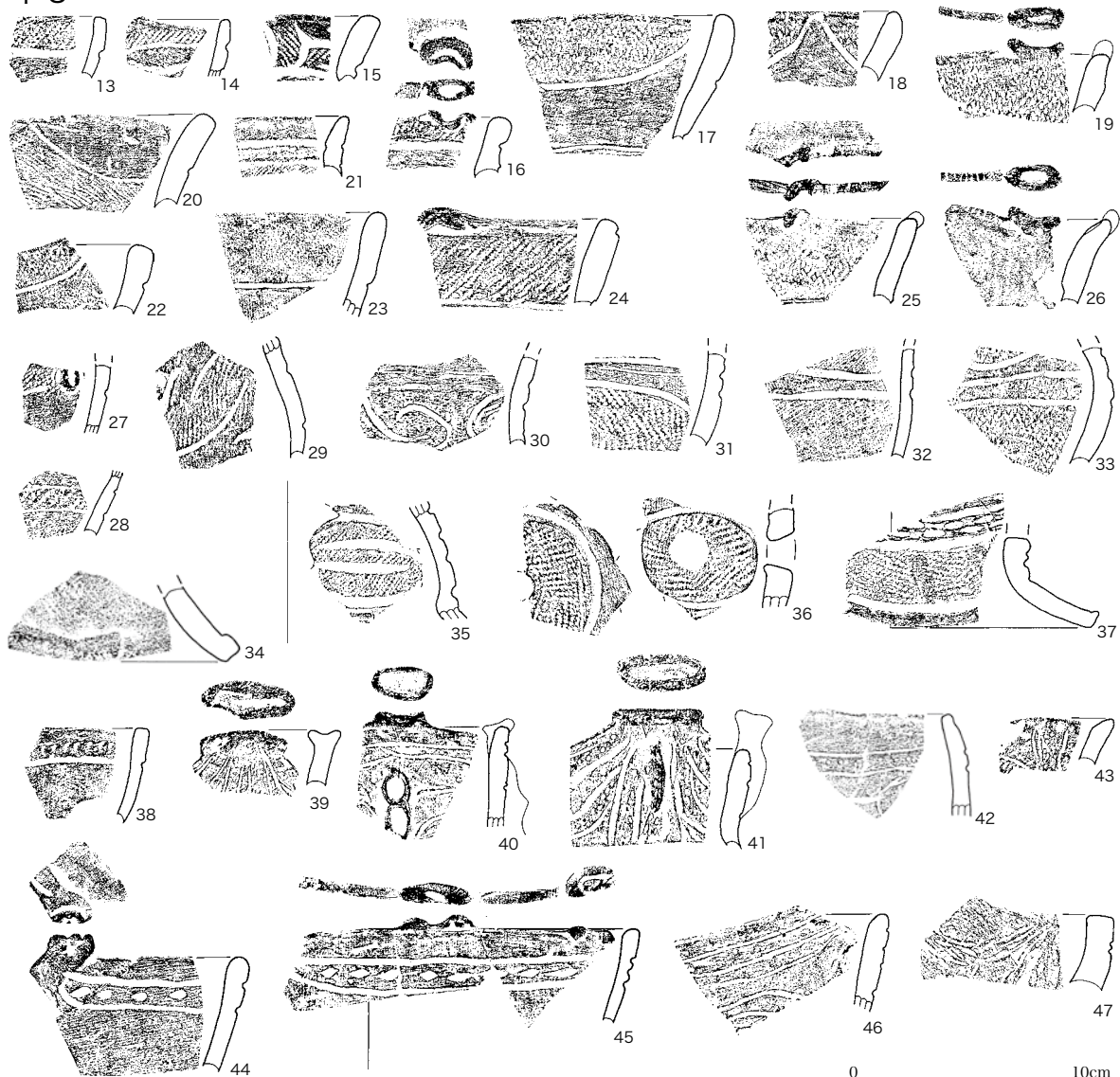
イ 3P1



イ 3P2



イ 3

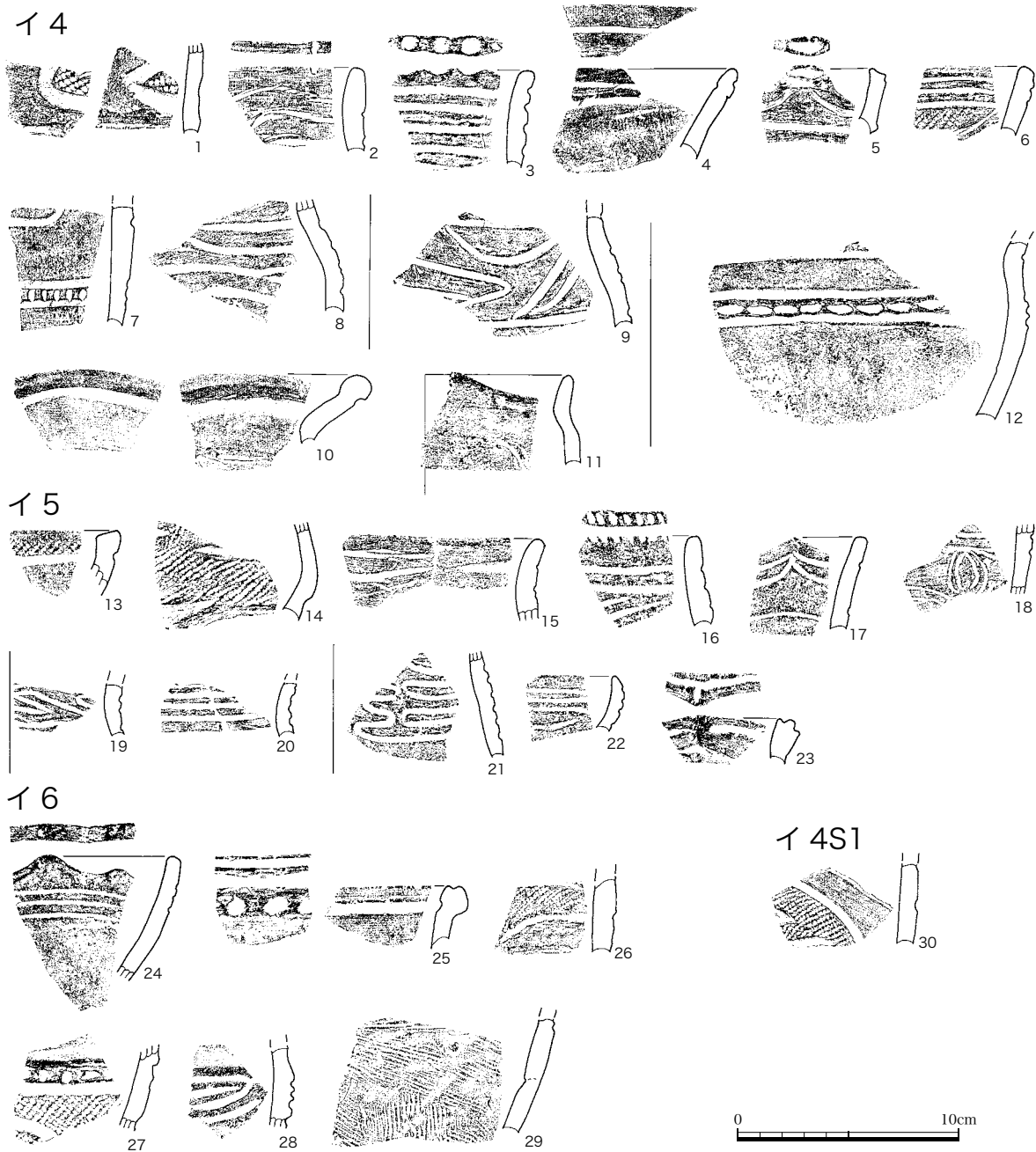


0 10cm

第57図 A区 出土土器 (24)



第58図 A区出土土器(25)イ3



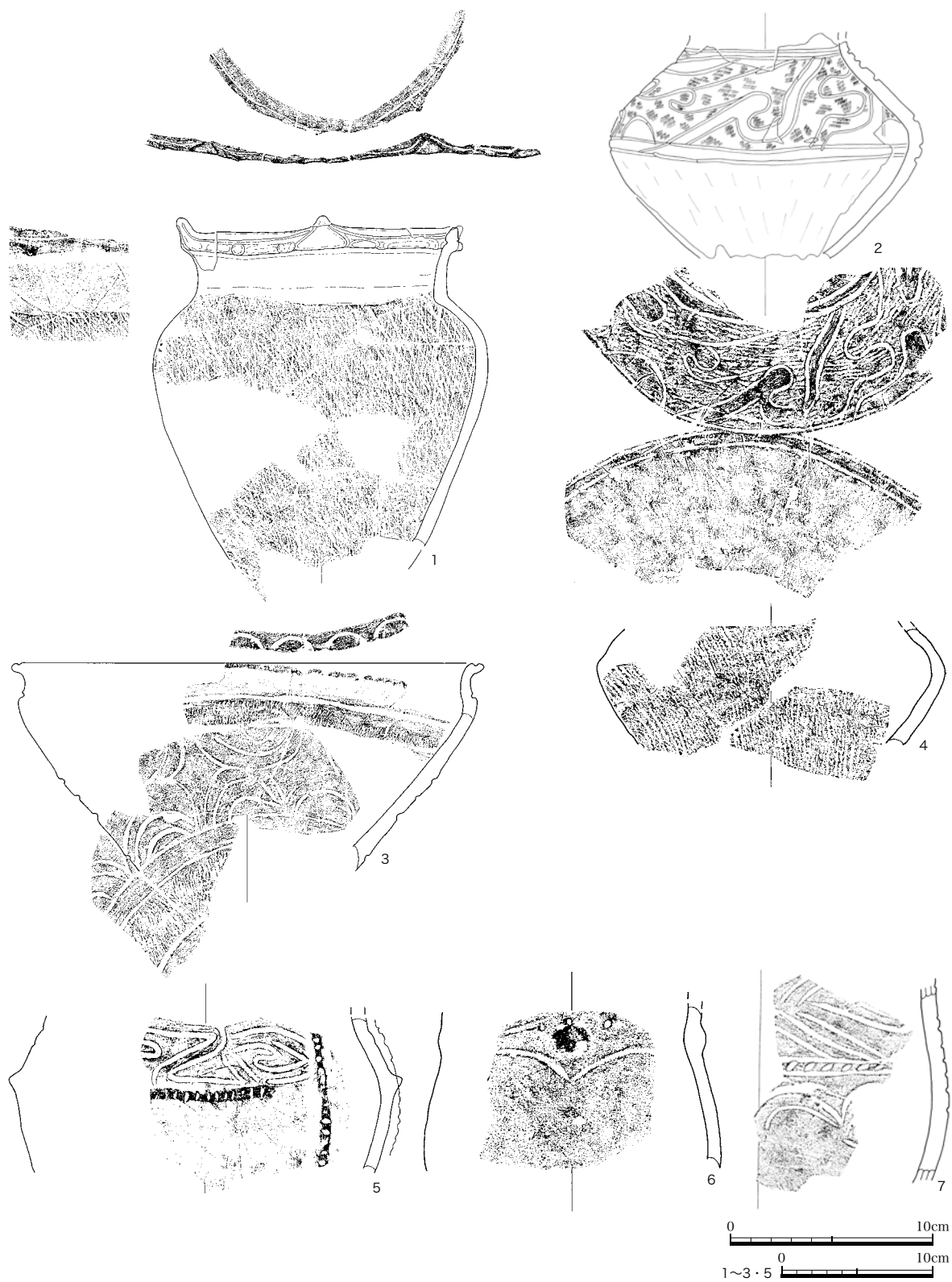
第59図 A区出土土器(26)

60図6と同一個体となろう。大洞系では大洞C2式中～新段階資料がややまとまる。第65図の無文土器、付帯口縁の土器は形態・端部加飾の多様性が確認される。底部資料では木葉痕が多い(第65図16,18)。

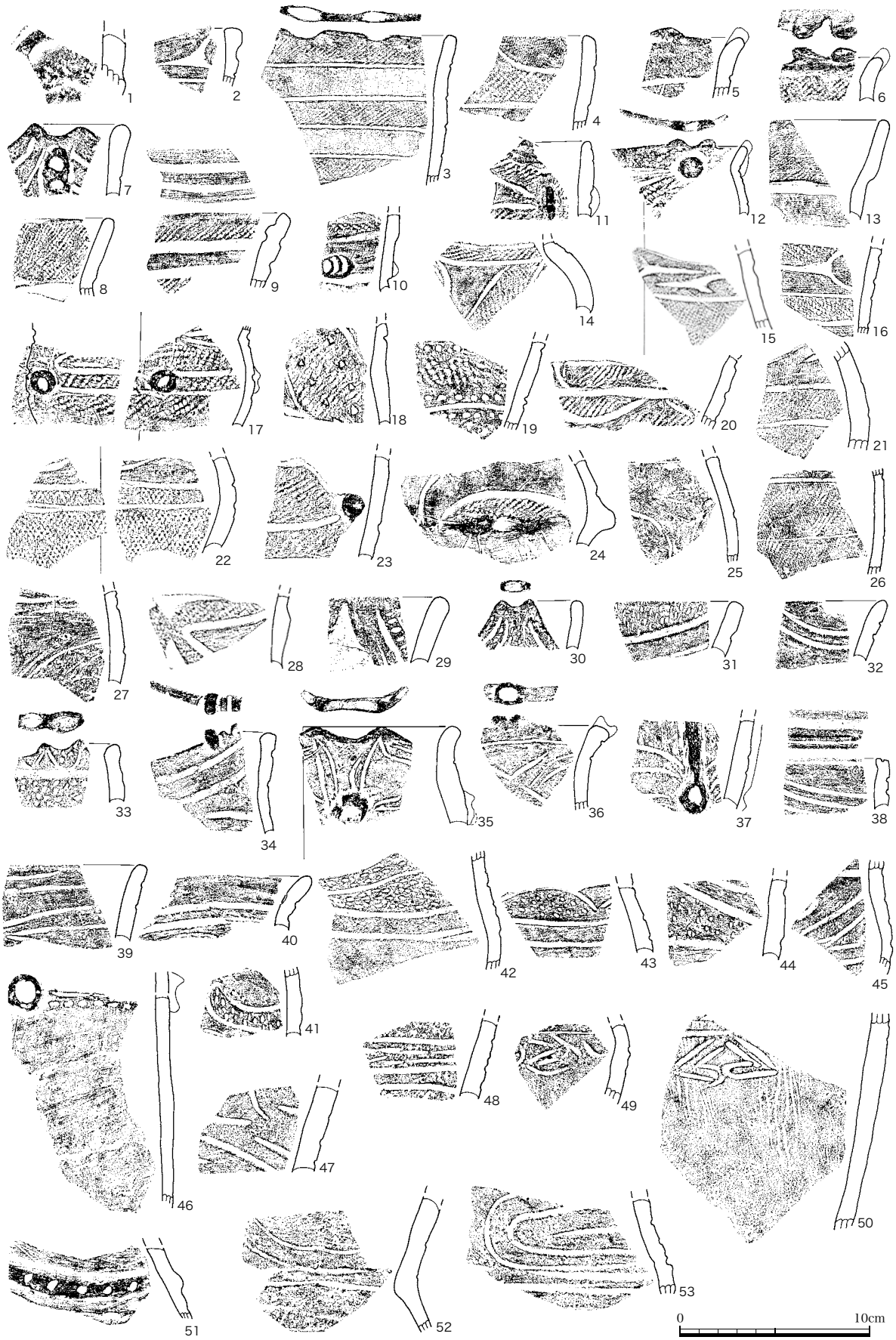
第66,67図1～11はA区SX2(恐らくA1S2)出土土器で第66図1はやや大きな鉢形の口縁部に大洞C1式文様が描かれるものである。体部の無文部や内面は良く磨かれており、丁寧な作りの感を受ける。同図3は半精製の土器で、縄紋施紋は観られない。

第67図12以下はSX03(ウ1S1=ウ2S3)出土土器で、第68図1の壺形土器や8～10の頸部～体部にも文様を有する付帯口縁の土器が注目される。第70図はウ2グリッド出土土器で1の台付土器が注目さ

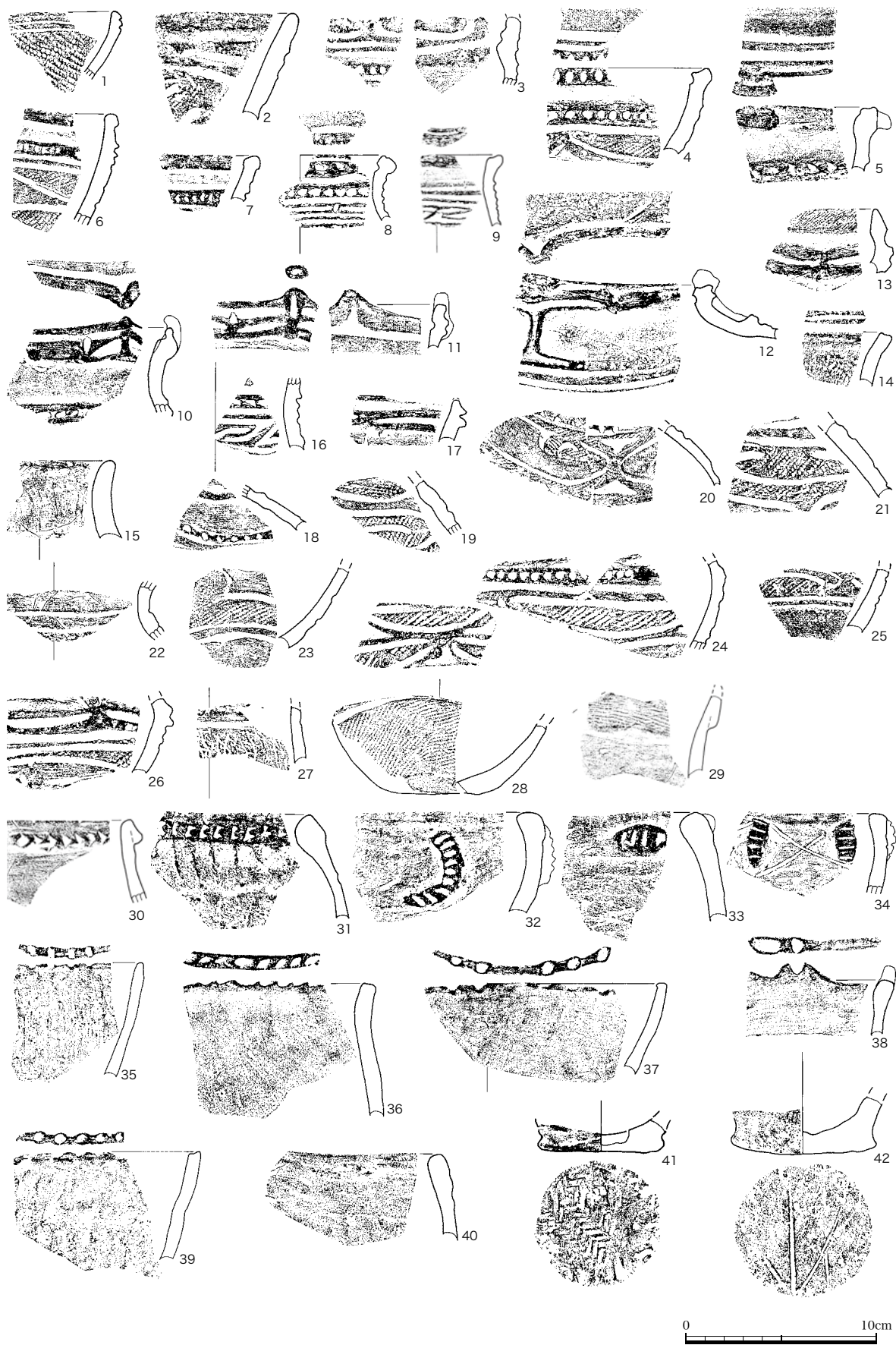
(→P71)



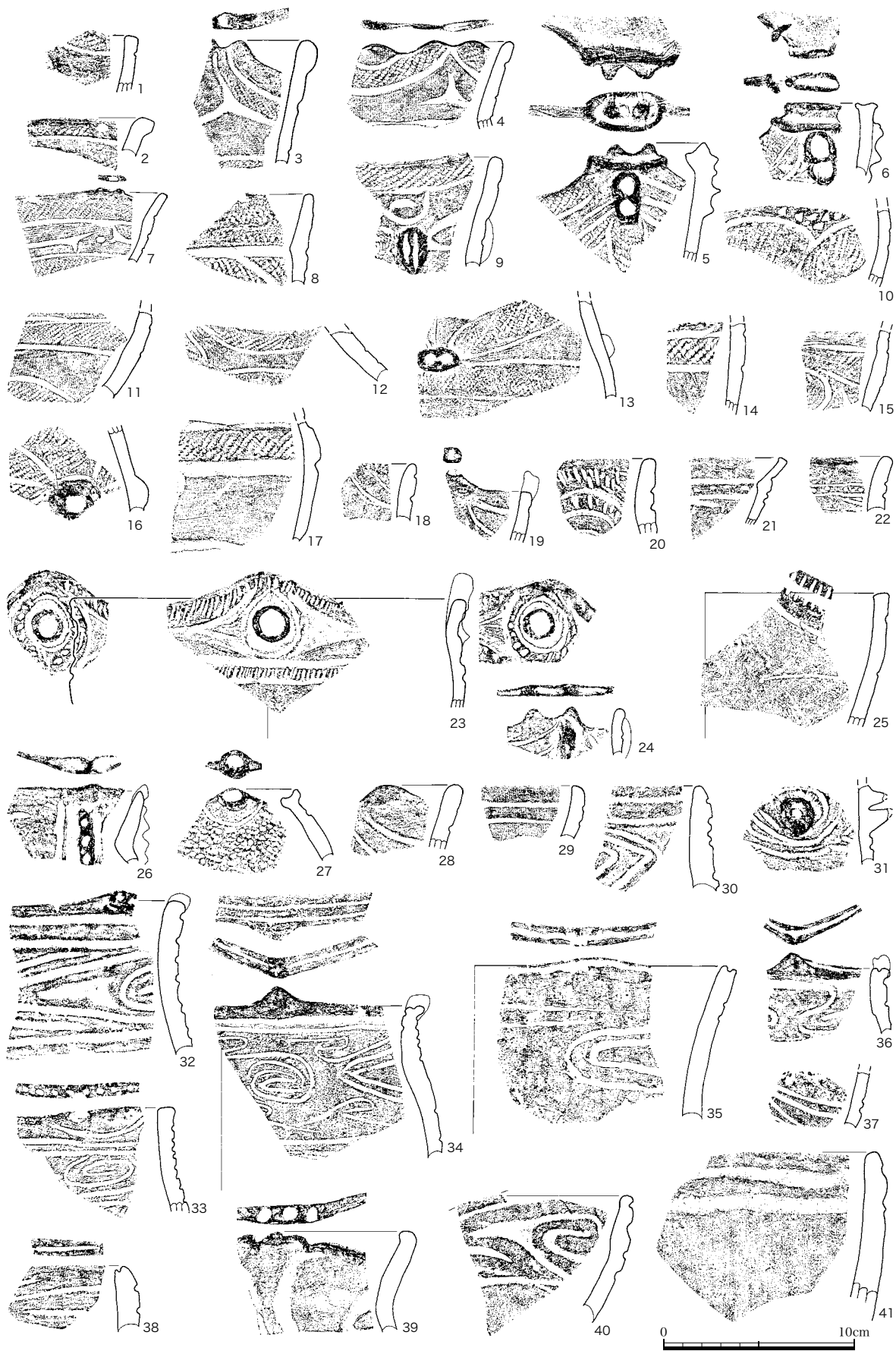
第60図 A区出土土器(27)ウ0



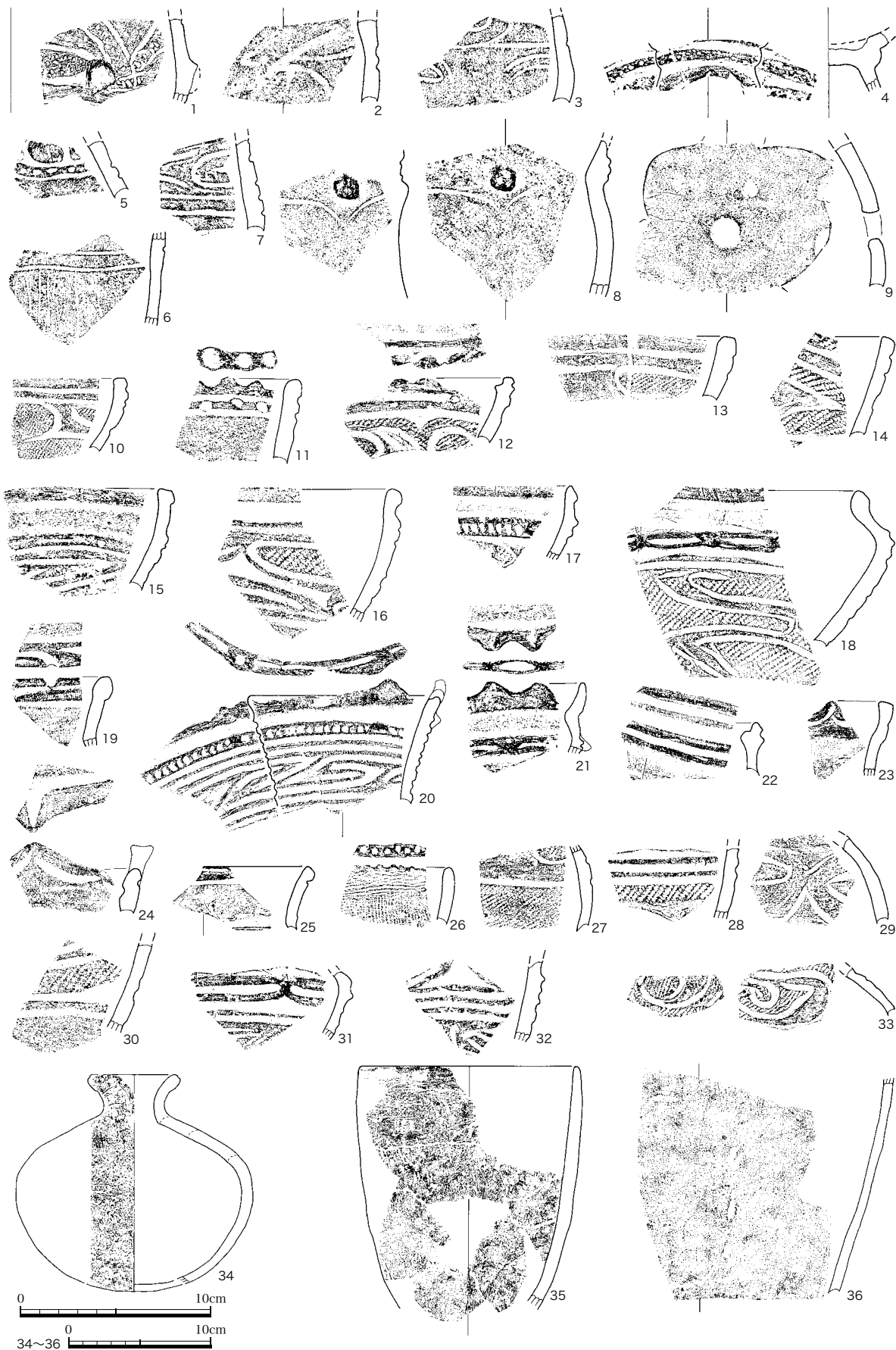
第61図 A区出土土器(28)ウ0



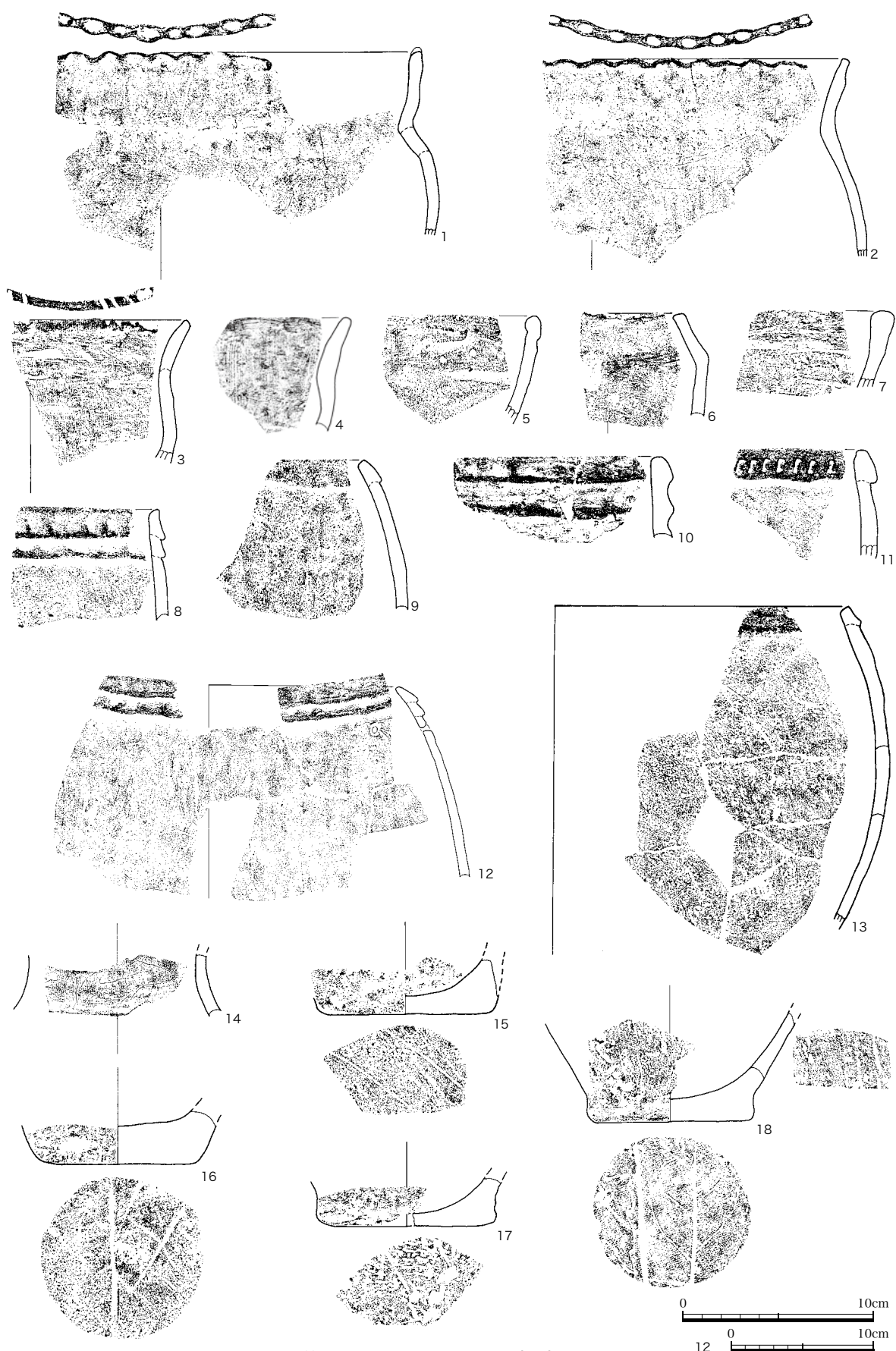
第62図 A区出土土器(29)ウ0



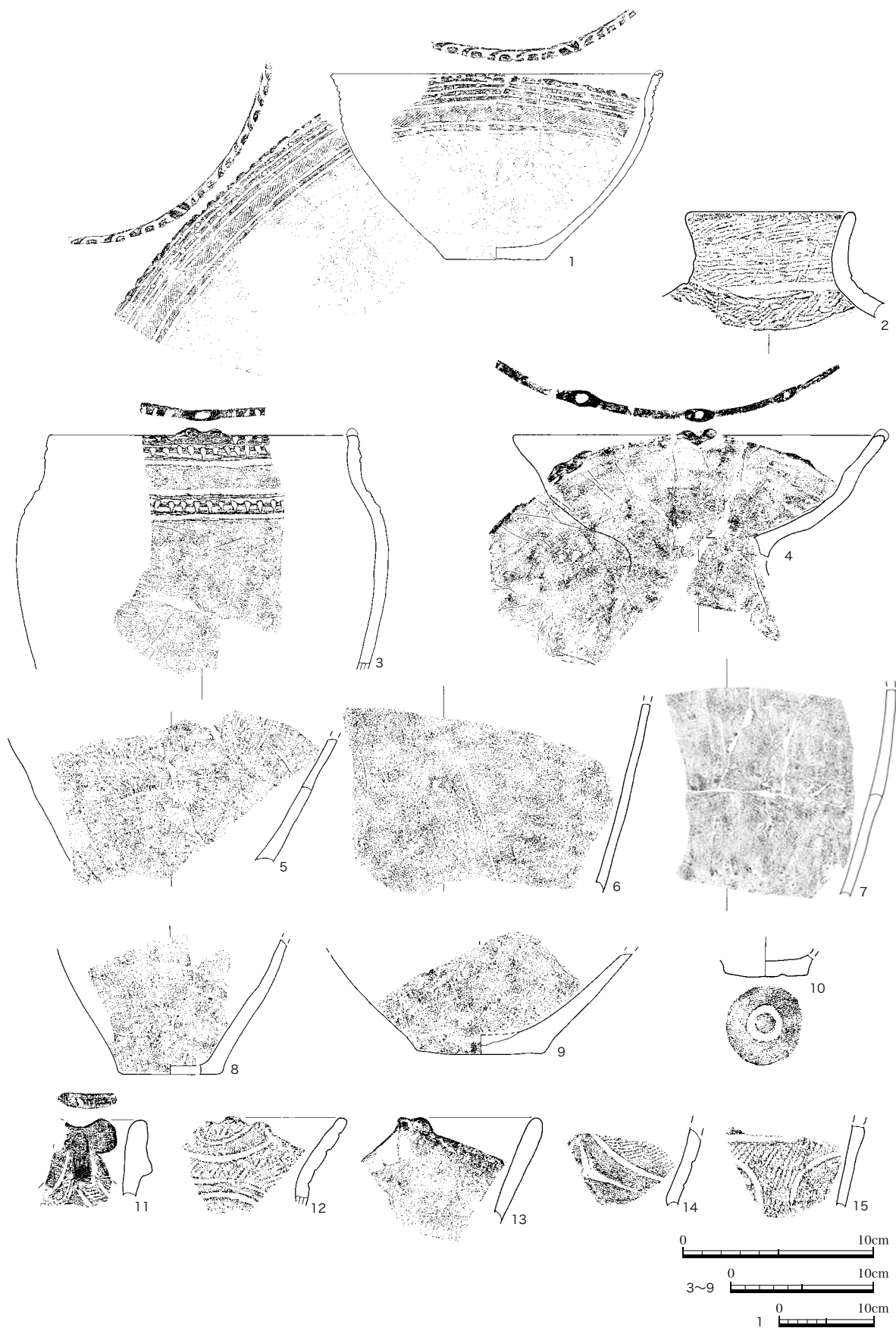
第63図 A区出土土器(30)ウ1



第64図 A区出土土器(31)ウ1

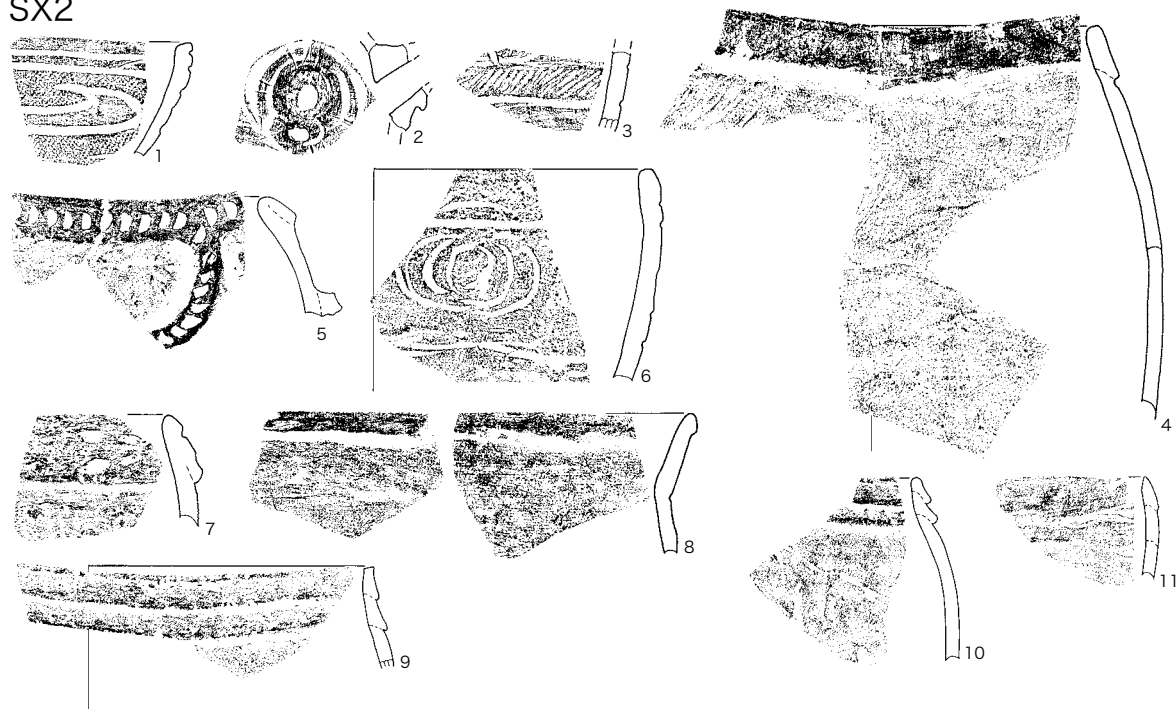


第65図 A区出土土器(32)ウ1

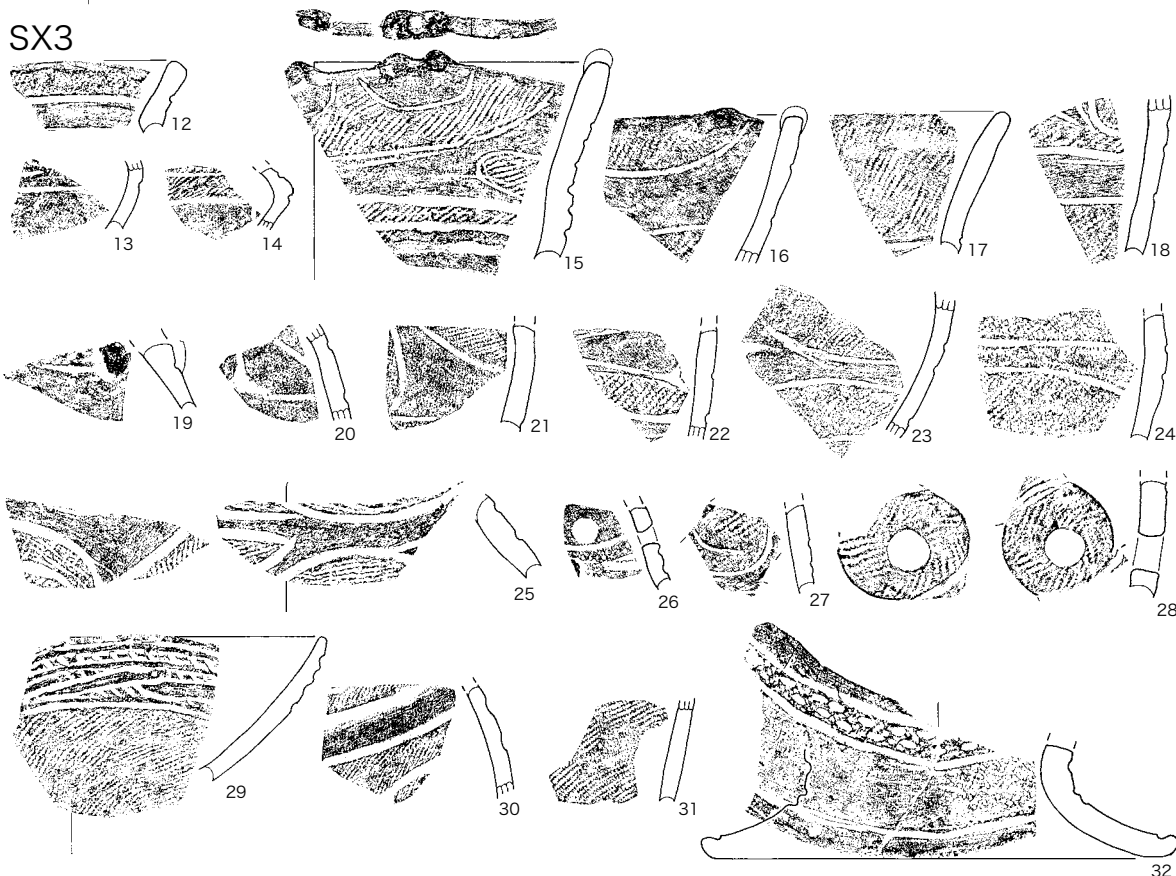


第66図 A区出土土器(33) SX2

SX2

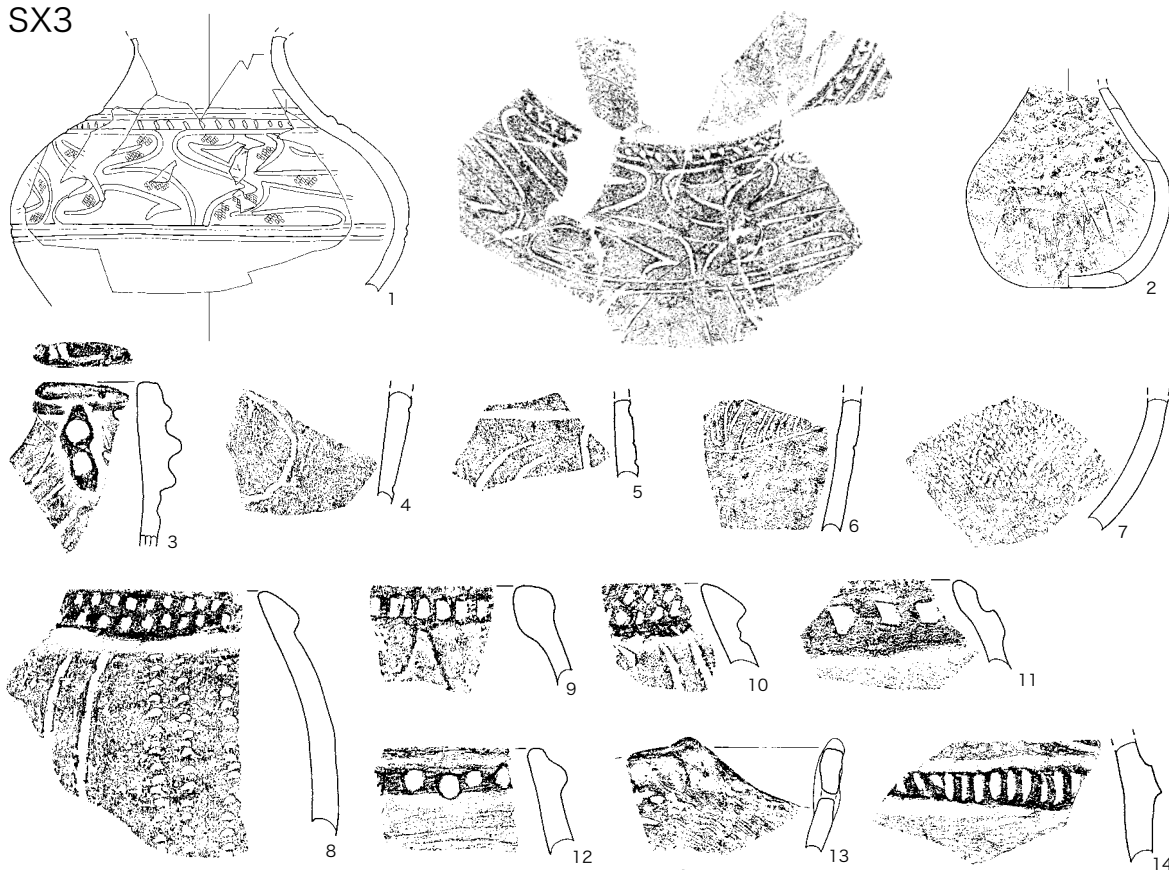


SX3

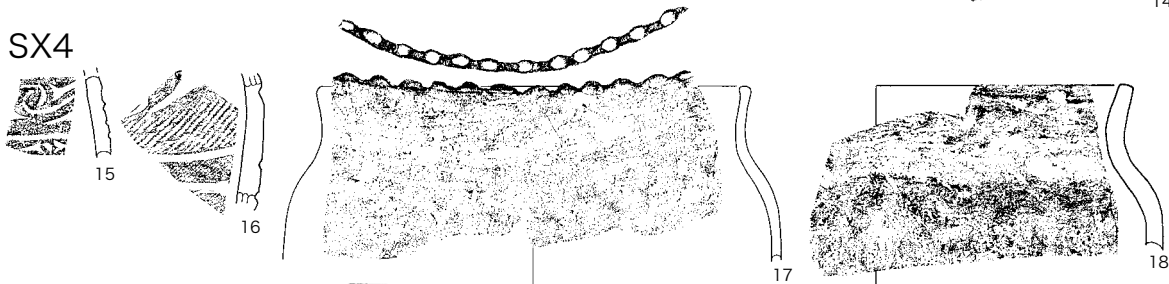


第67図 A区出土土器(34)

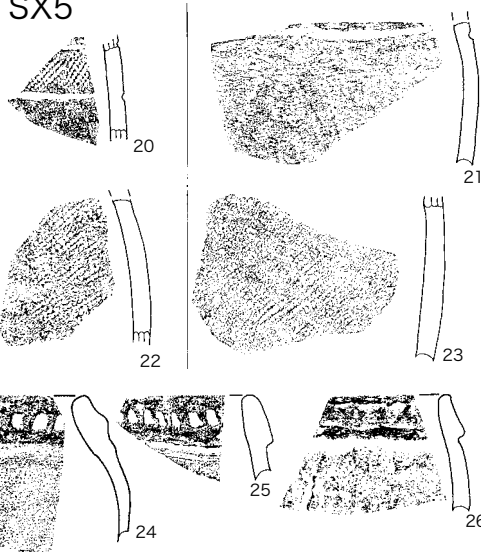
SX3



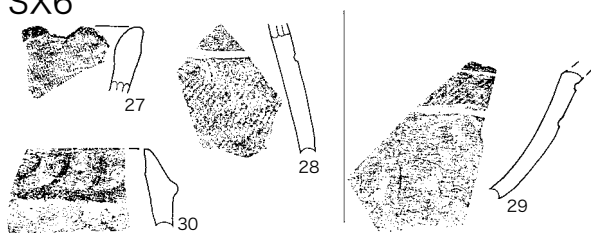
SX4



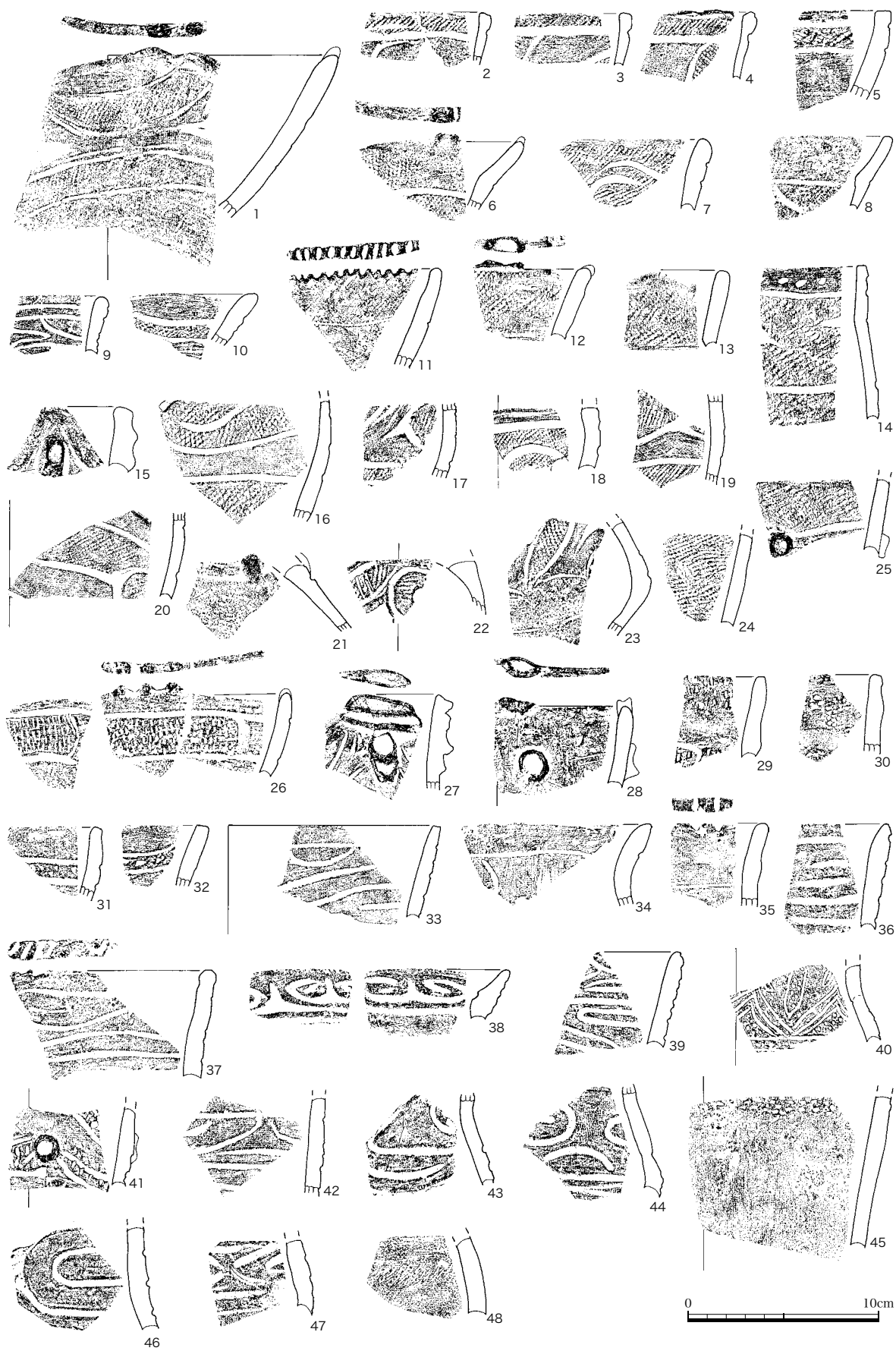
SX5



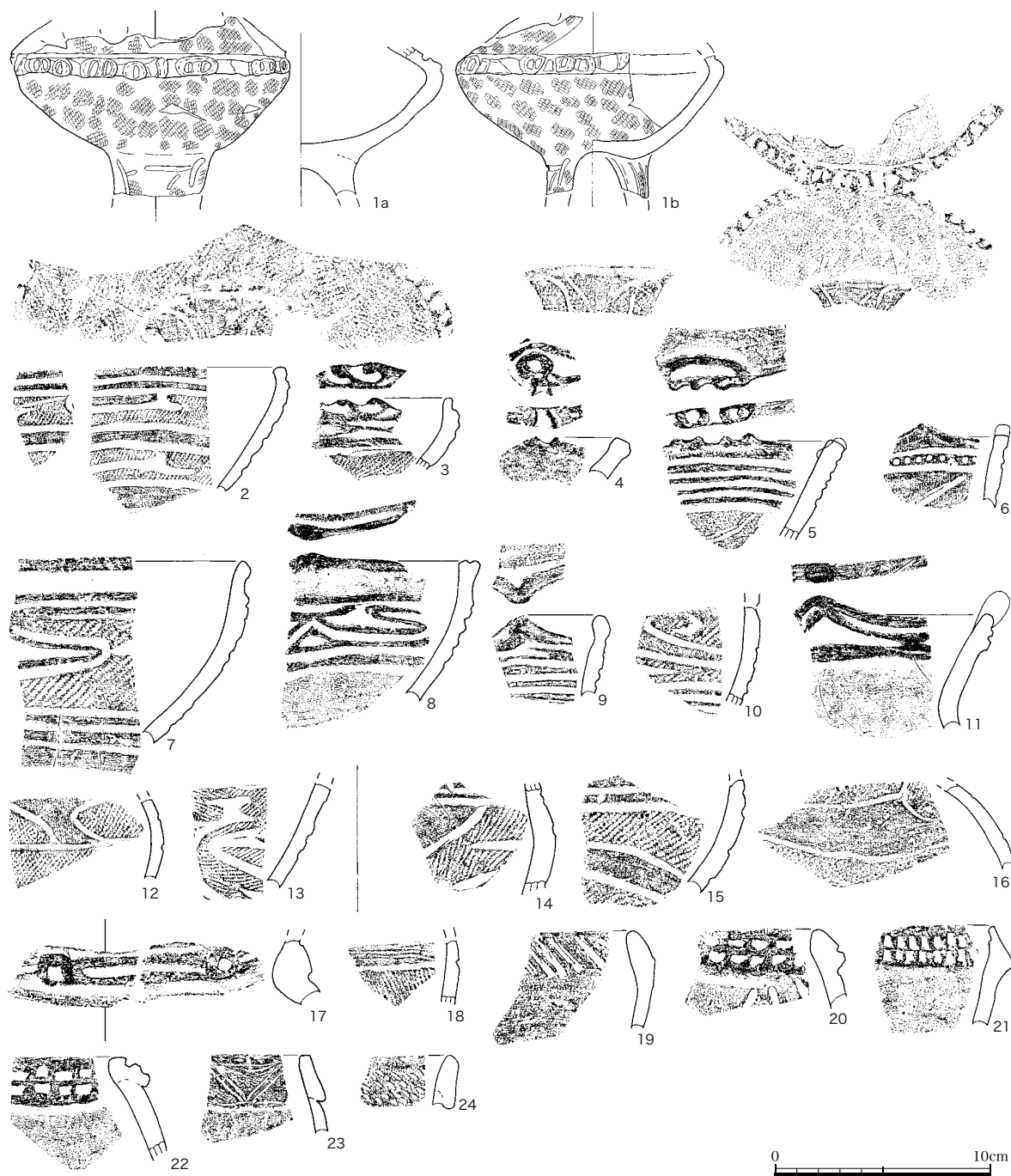
SX6



第68図 A区出土土器(35)



第69図 A区出土土器(36)ウ2

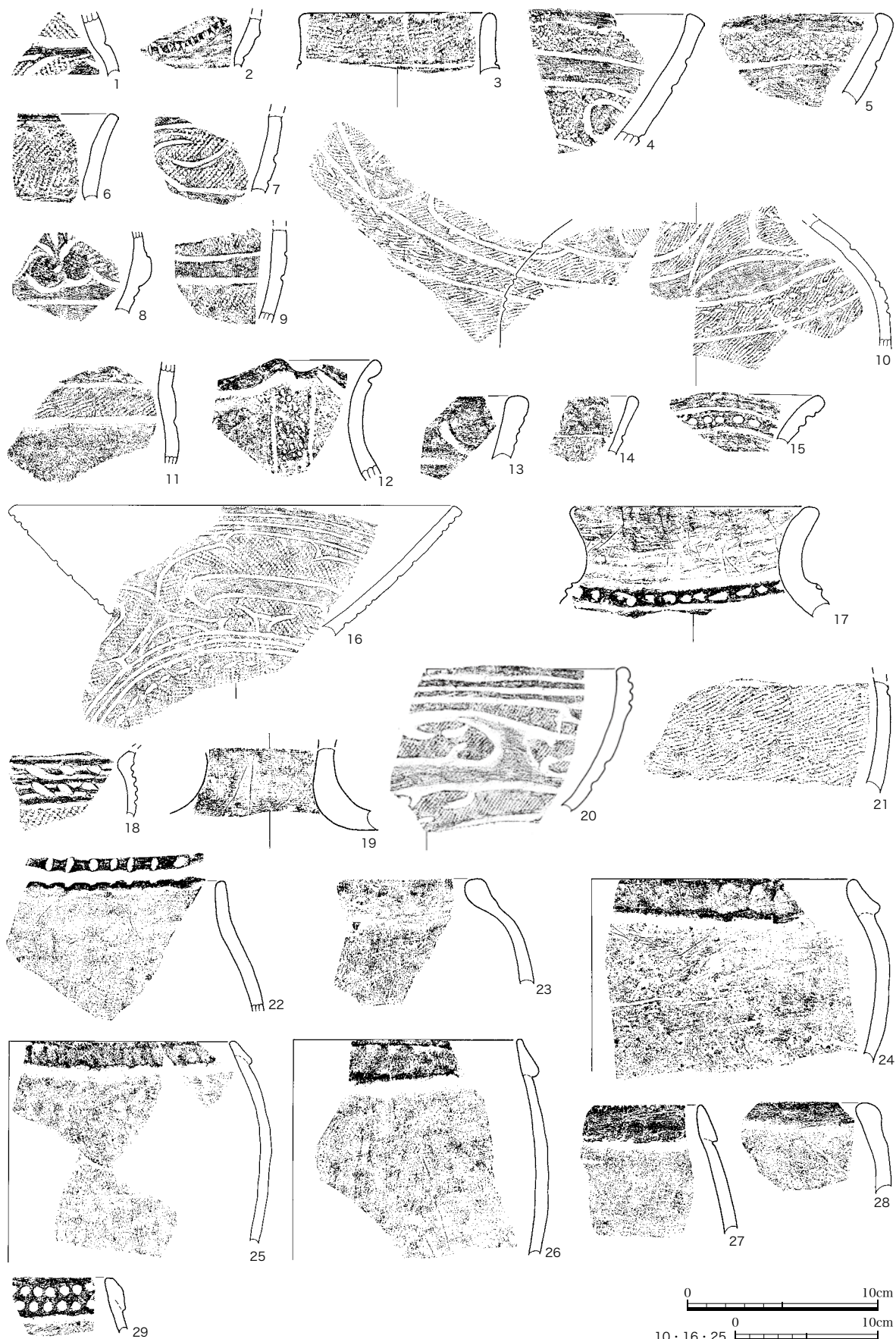


第70図 A区出土土器(37)ウ2

れる。上位を多く欠損しており不明な部分が多いが、内部に凹点状の刺突を有する突起が屈曲部に巡り、上位には三角形や円状の透かし表現がある。第71図のウ2S1出土土器では安行系・大洞系などを示す。大洞系では16の変形した雲形文がやや細い線で描かれる鉢、比較的浮彫的表現で整った雲形文の20がある。

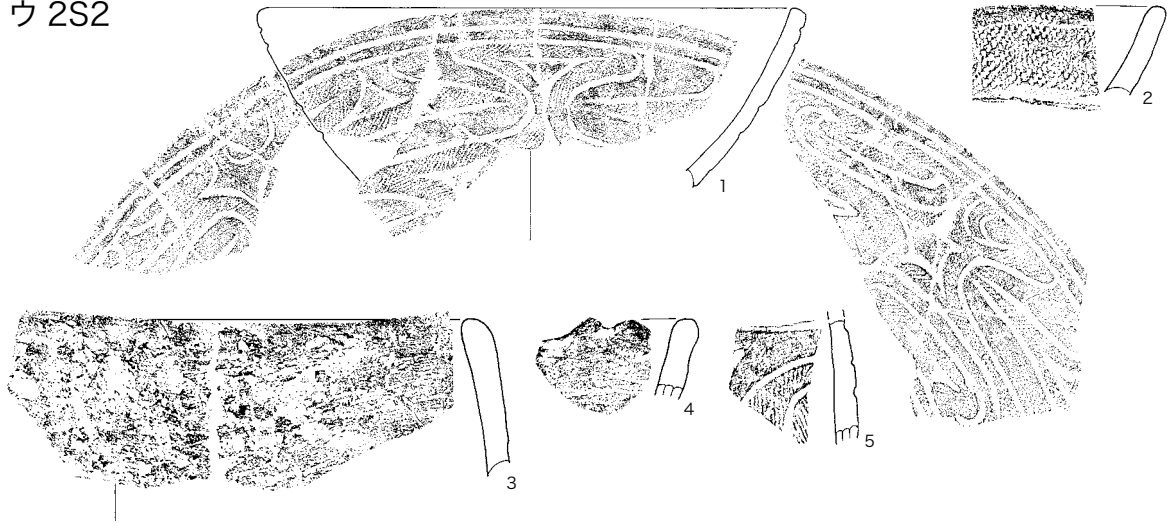
第72図ではウ2S2などの遺構出土土器を示す。1の大洞系は、比較的整った配置文・充填文が描かれているものである。第73図には径復元個体や付帯口縁の土器を示す。3の大洞系は、器形や文様意匠の違和感はあるものの、沈線～ミガキの浮彫的手法を観察できる点は注意される。第74,75図はウ3グリッド出土土器。第74図1は菱形+弧線の文様配置という点では安行・姥山系と言えるが、低平化した突起、円形浮文にも近

(→P87)

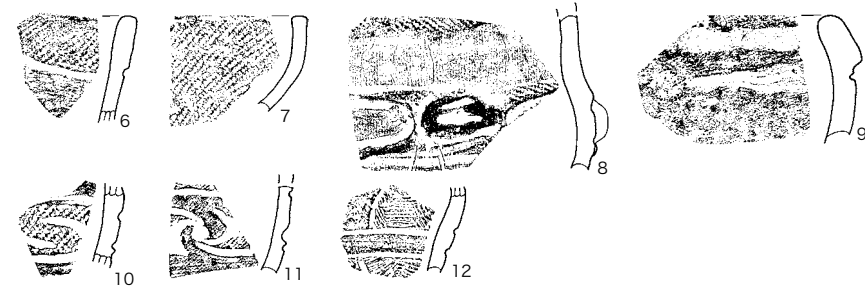


第71図 A区出土土器(38)ウ2S1

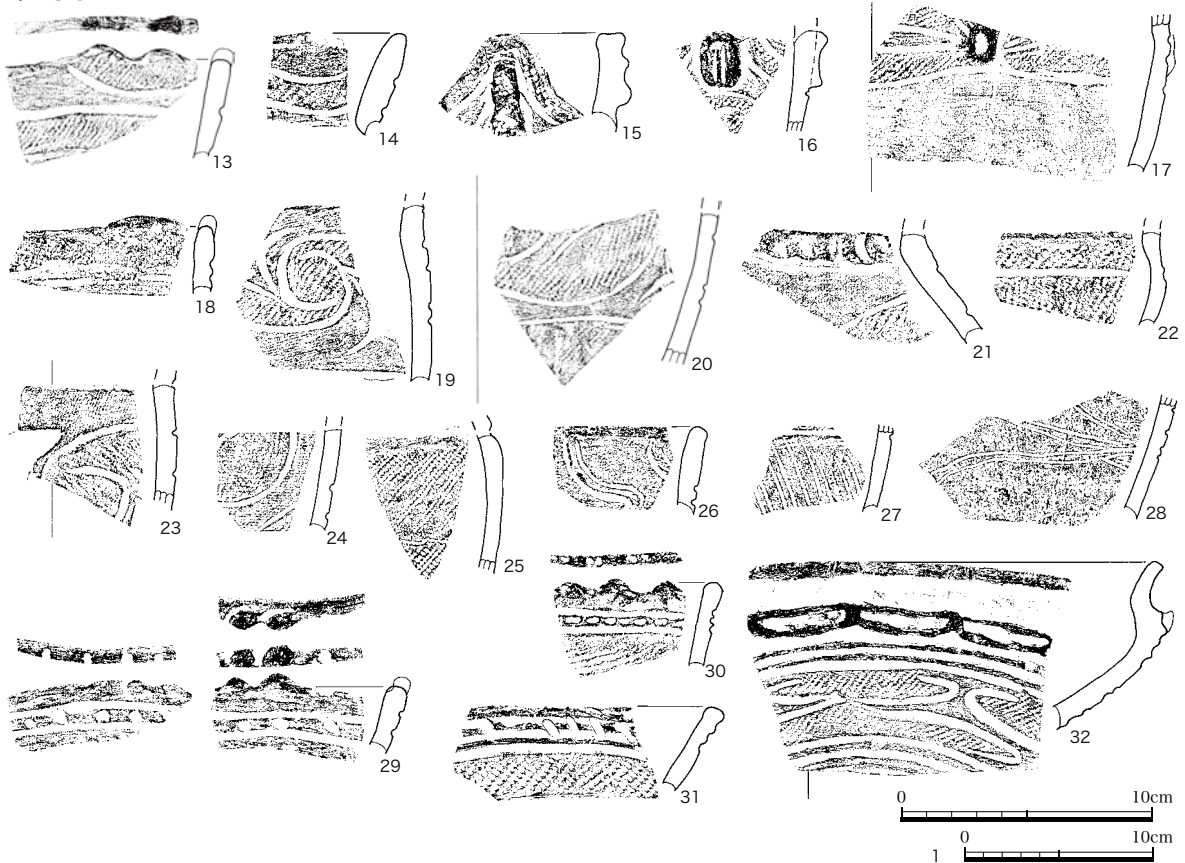
ウ 2S2



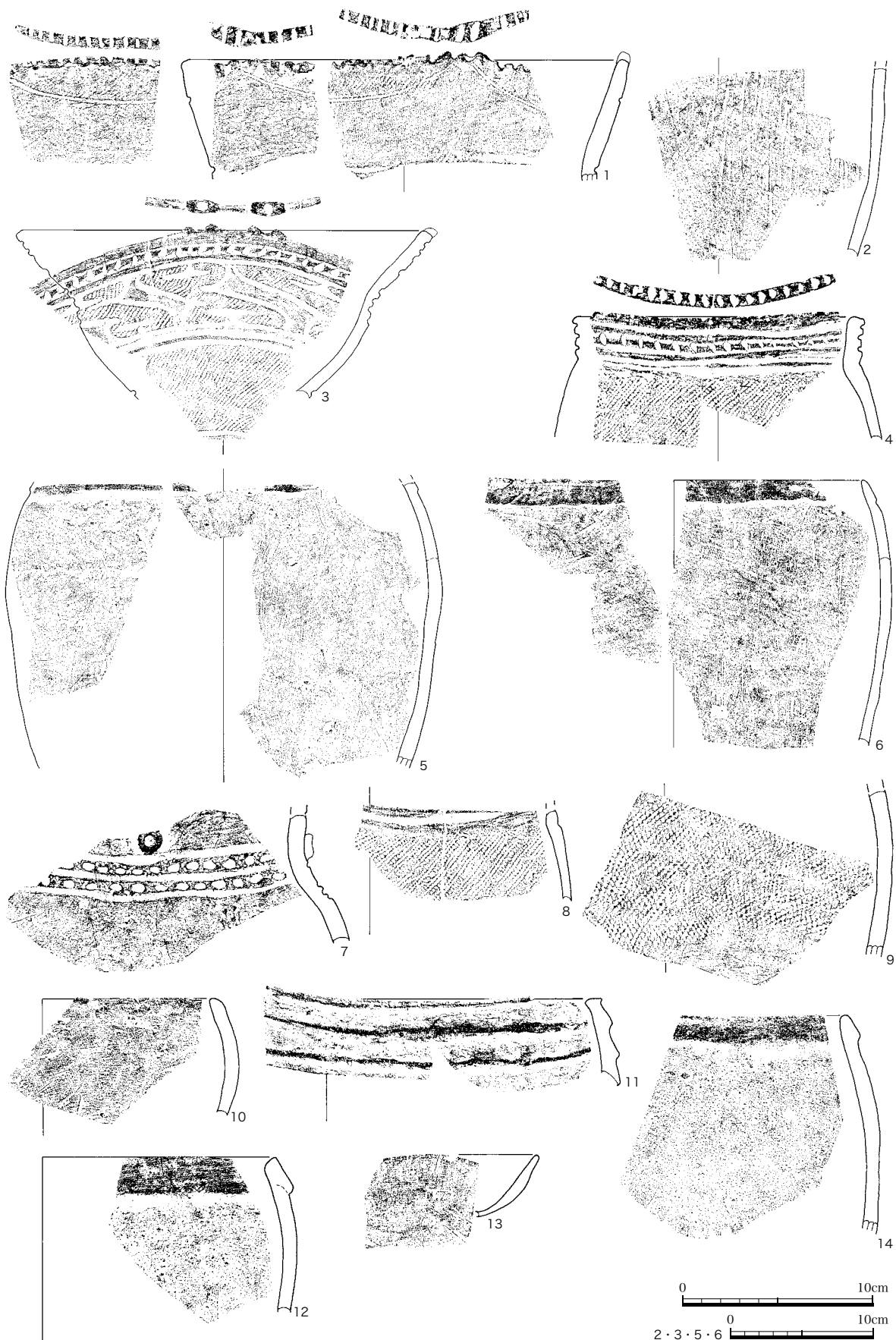
ウ 2S3



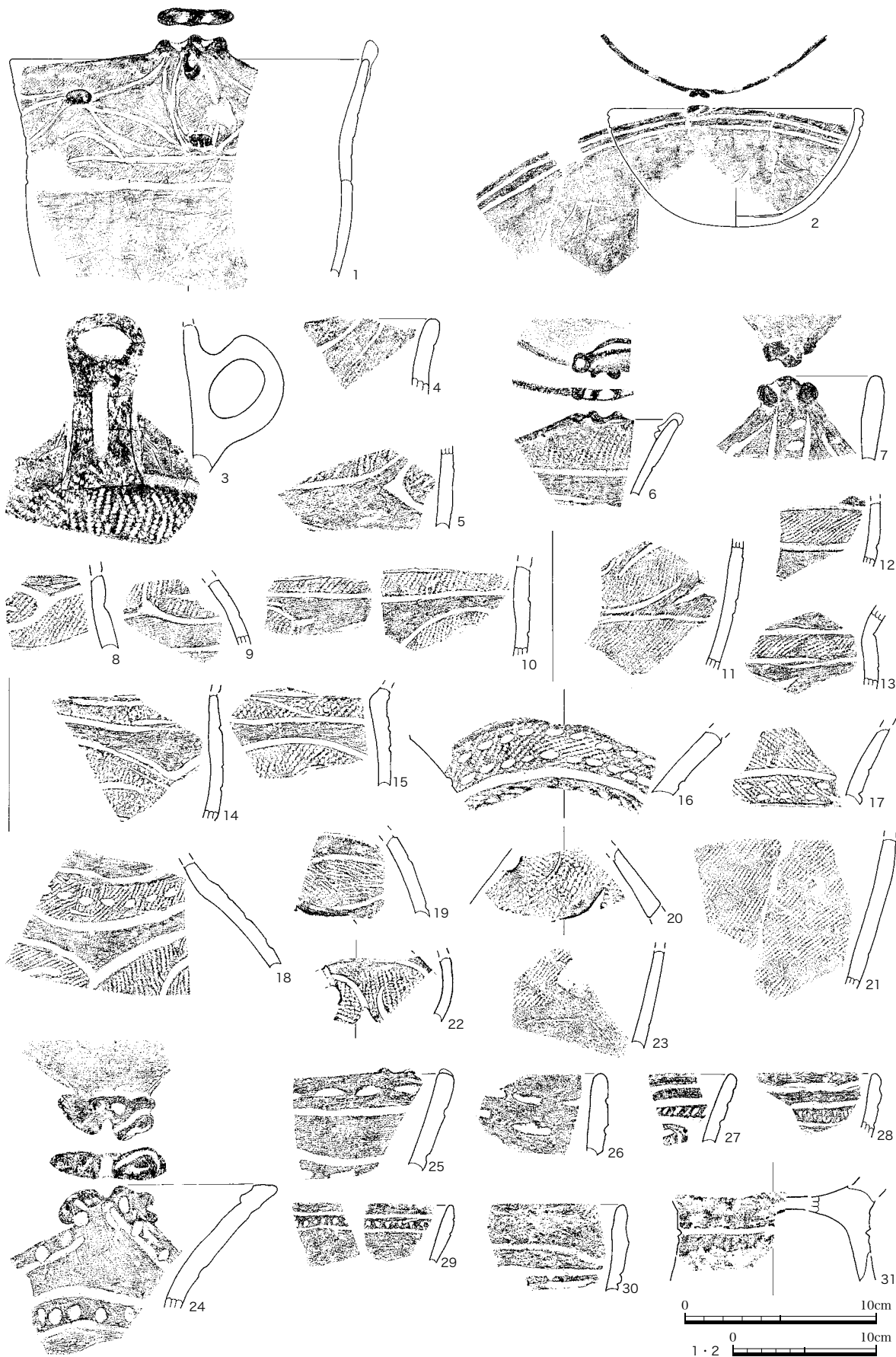
ウ 3S1



第72図 A区出土土器(39)



第73図 A区出土土器(40)ウ3S1

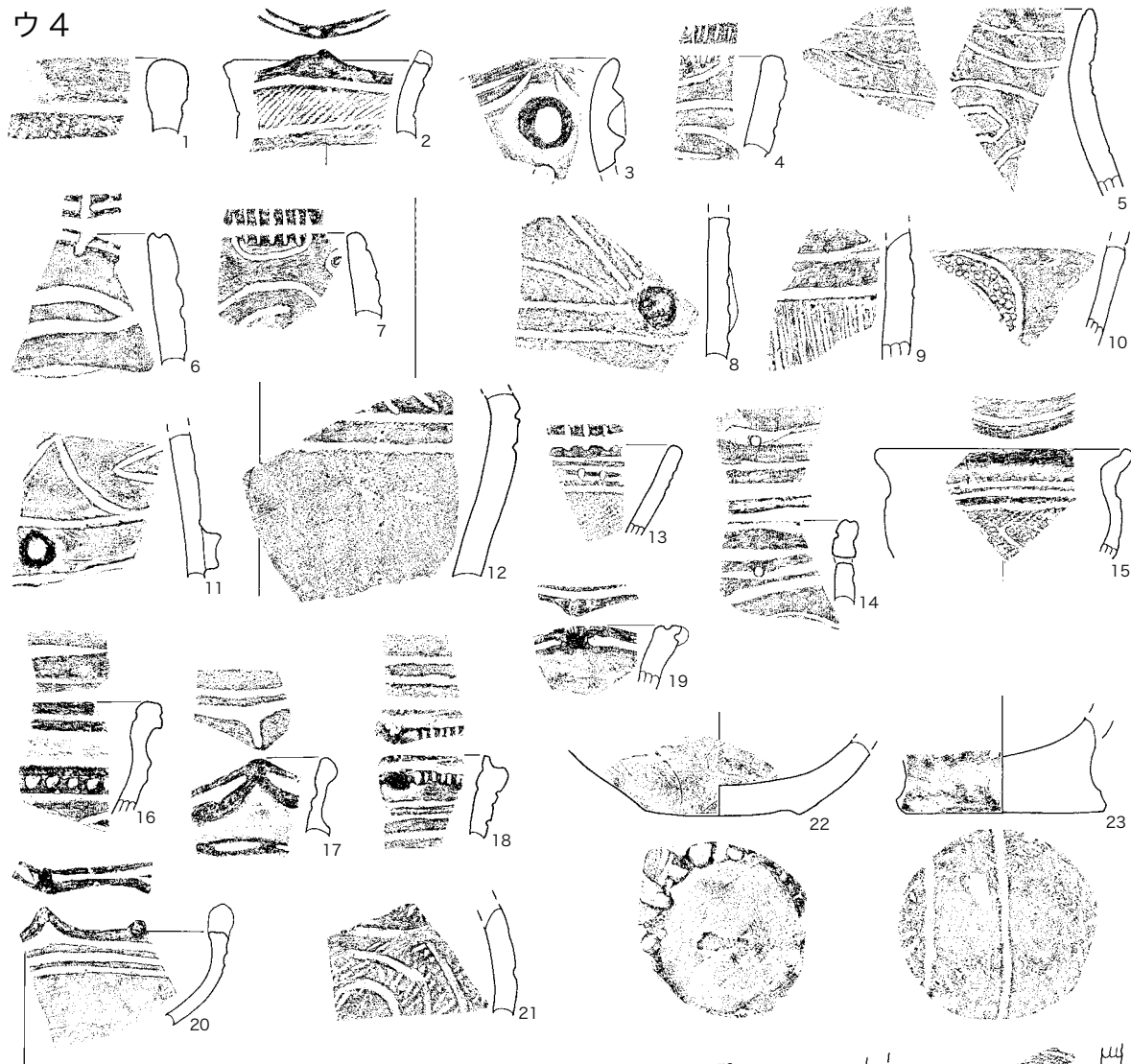


第74図 A区出土土器(41)ウ3

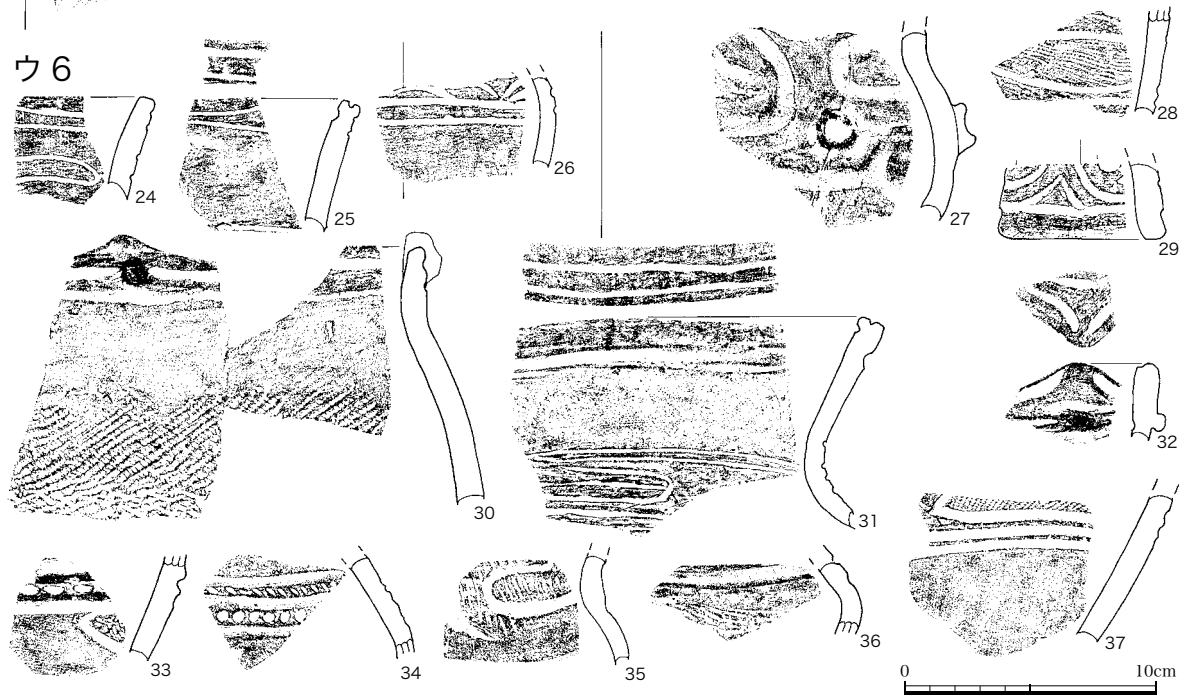


第75図 A区出土土器(42)ウ3

ウ4

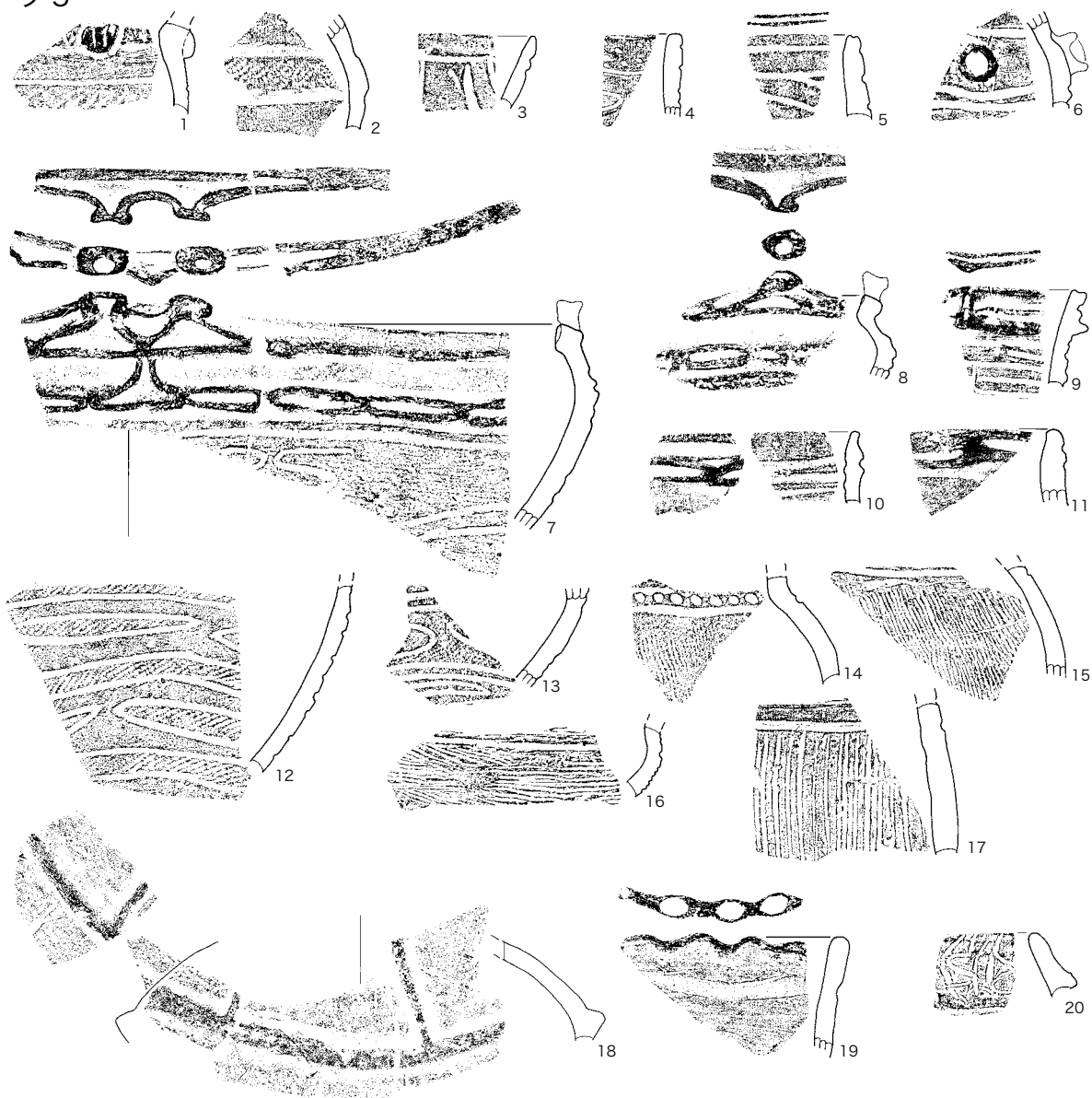


ウ6

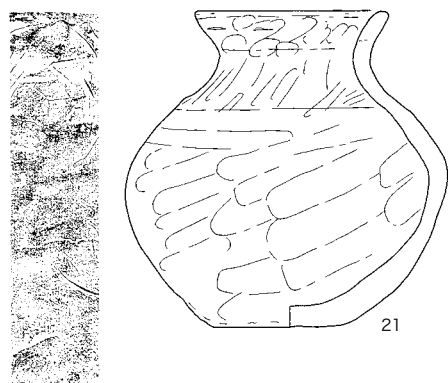


第76図 A区出土土器(43)

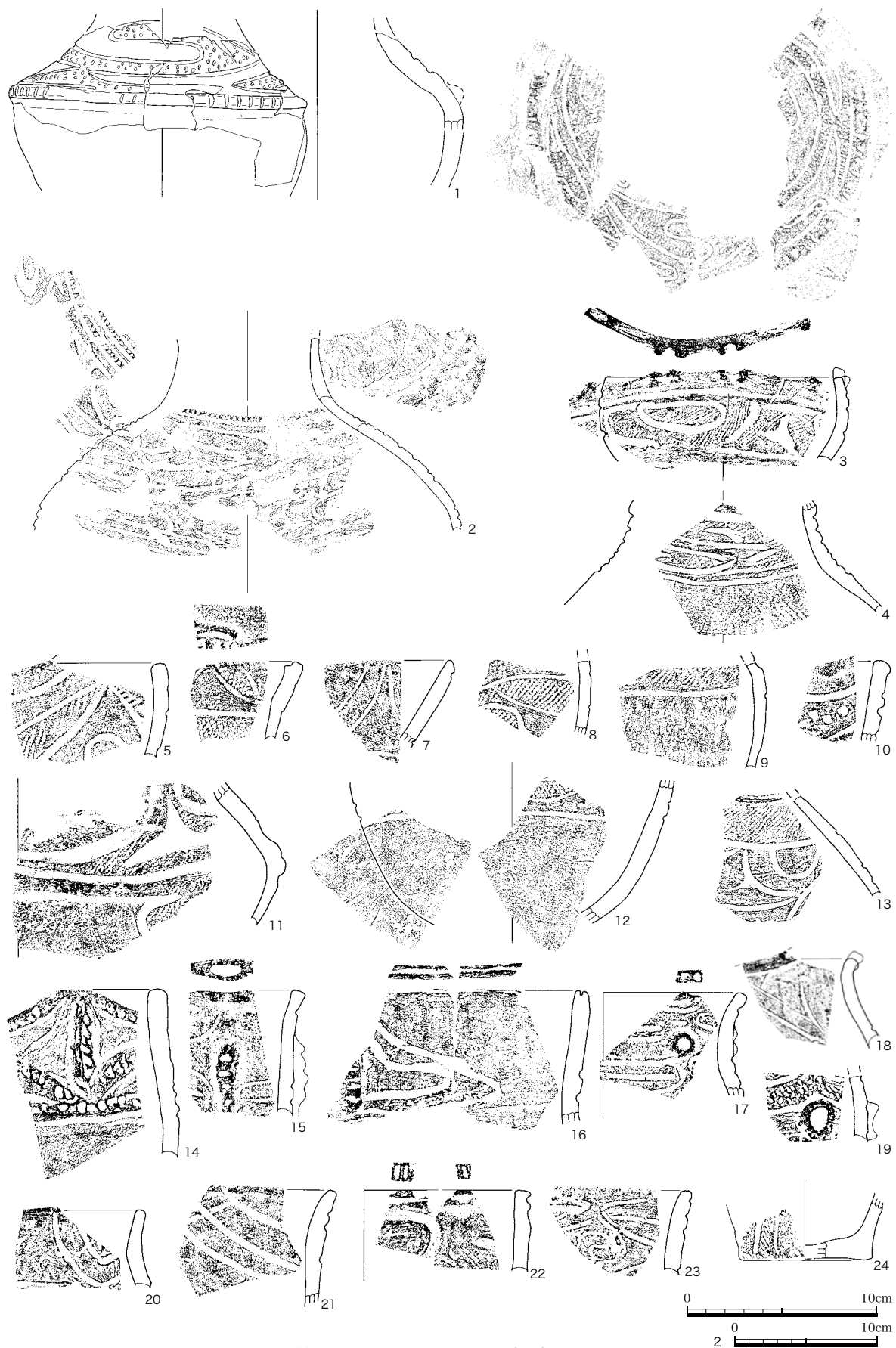
ウ5



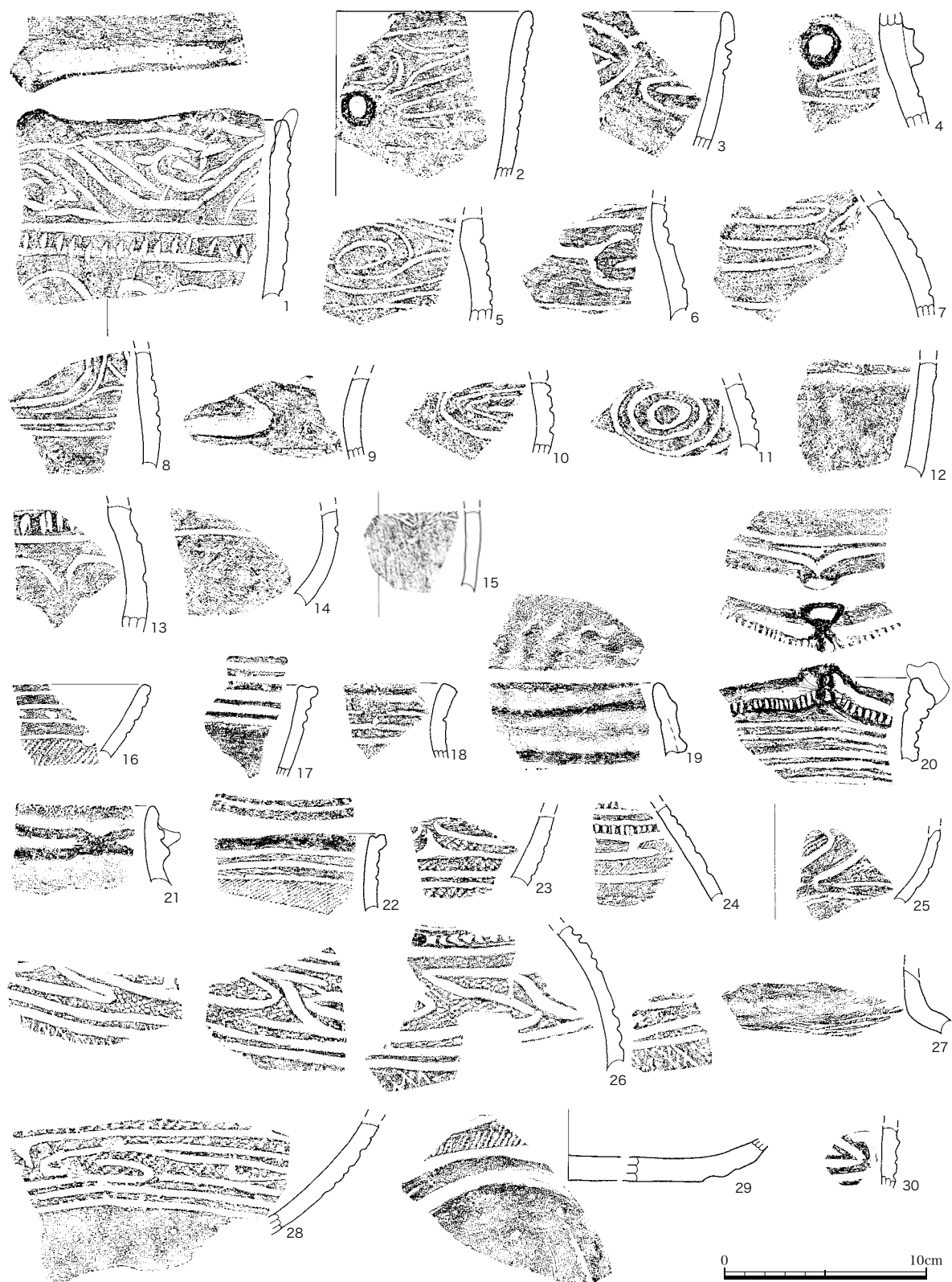
ウ1S1



第77図 A区 出土土器 (44)

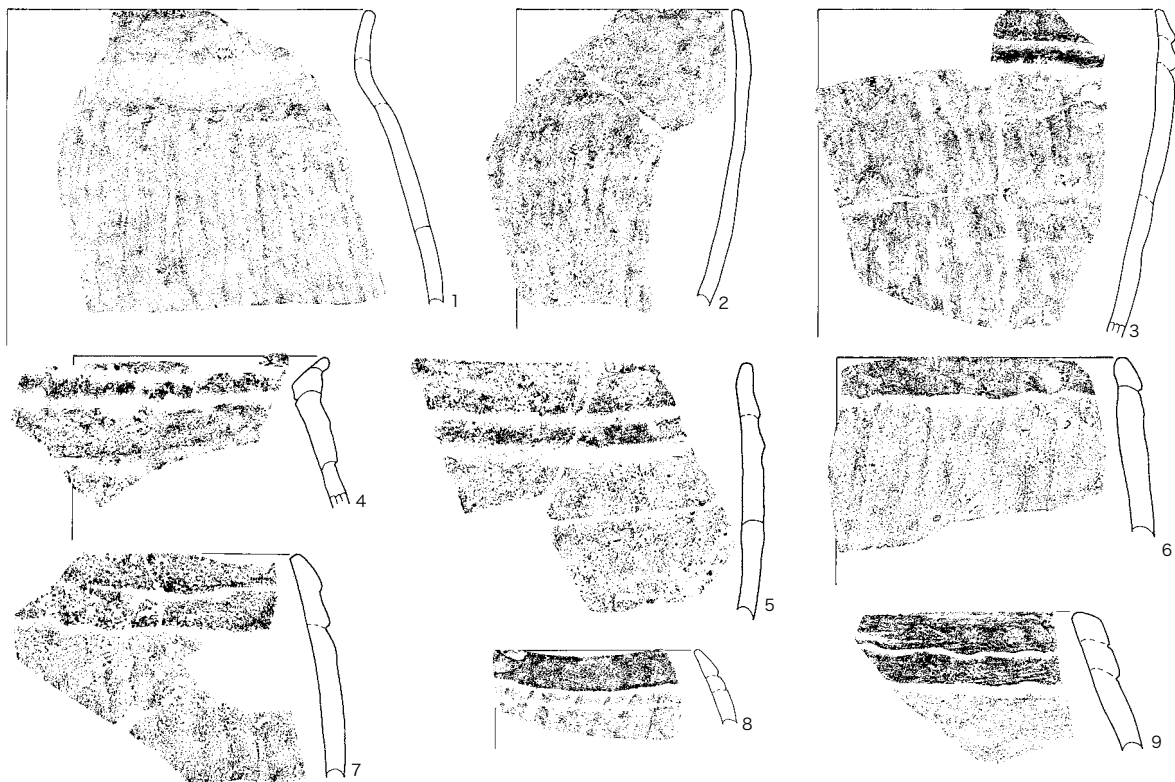


第78図 A区出土土器(45)ワ0

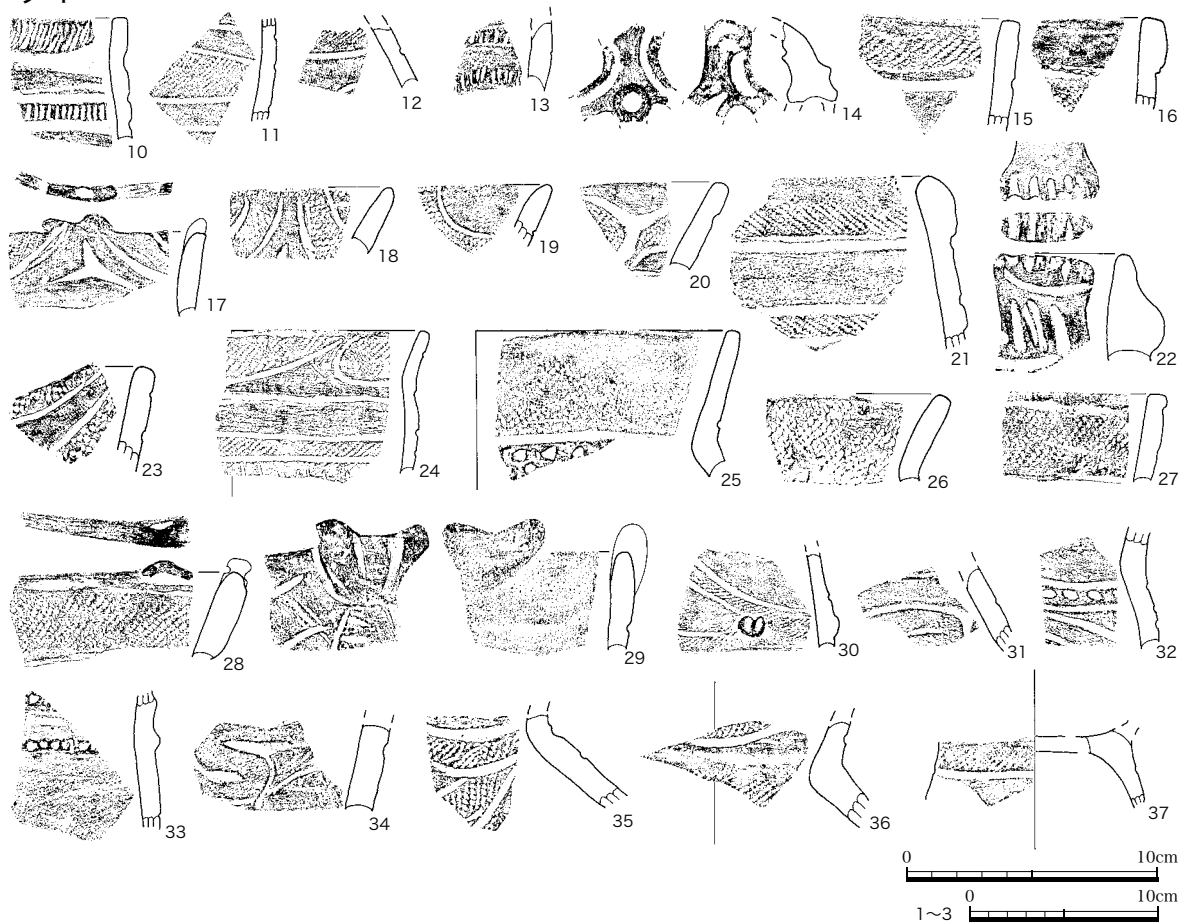


第79図 A区出土土器(46)ワ0

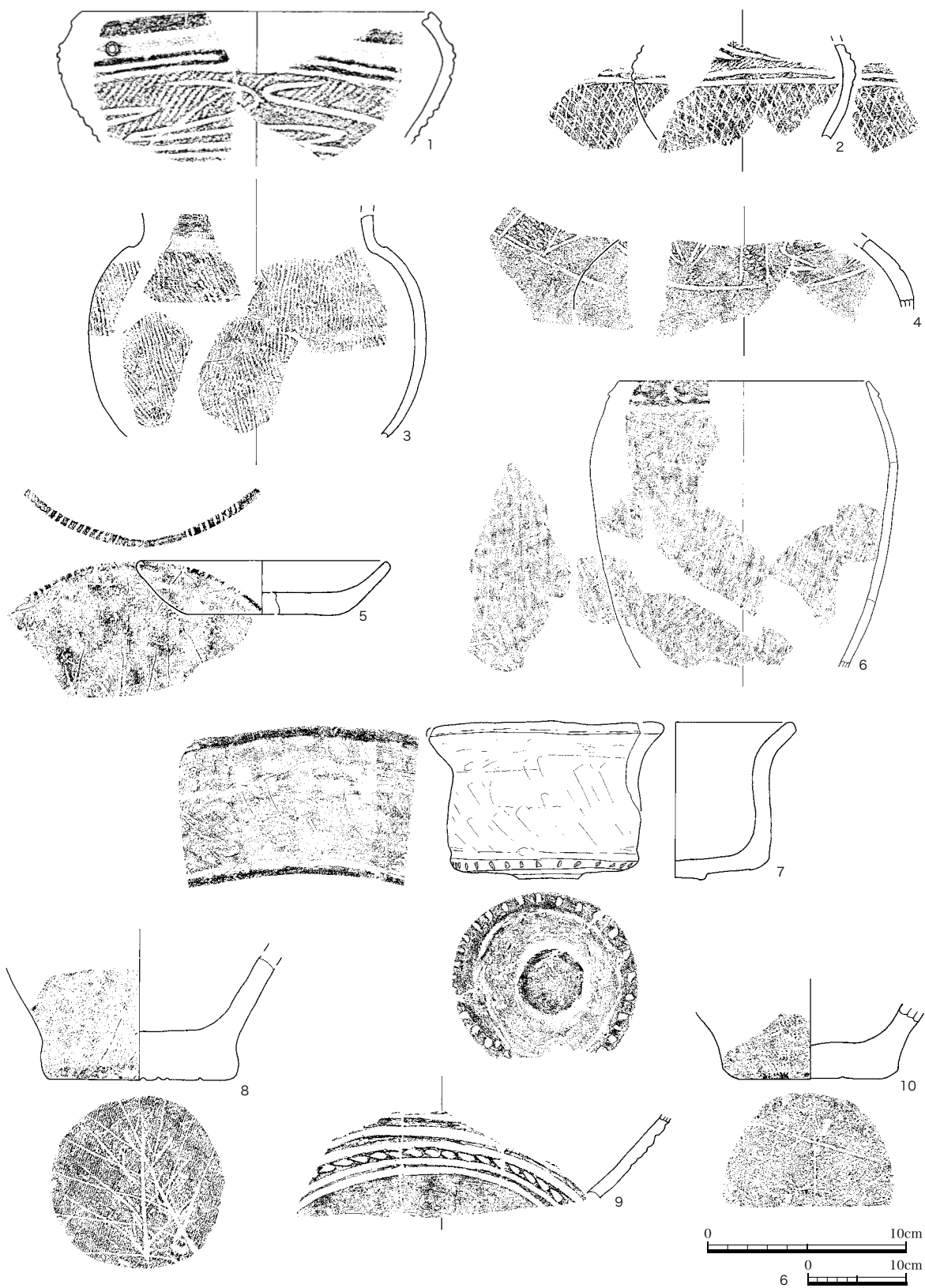
ワ0



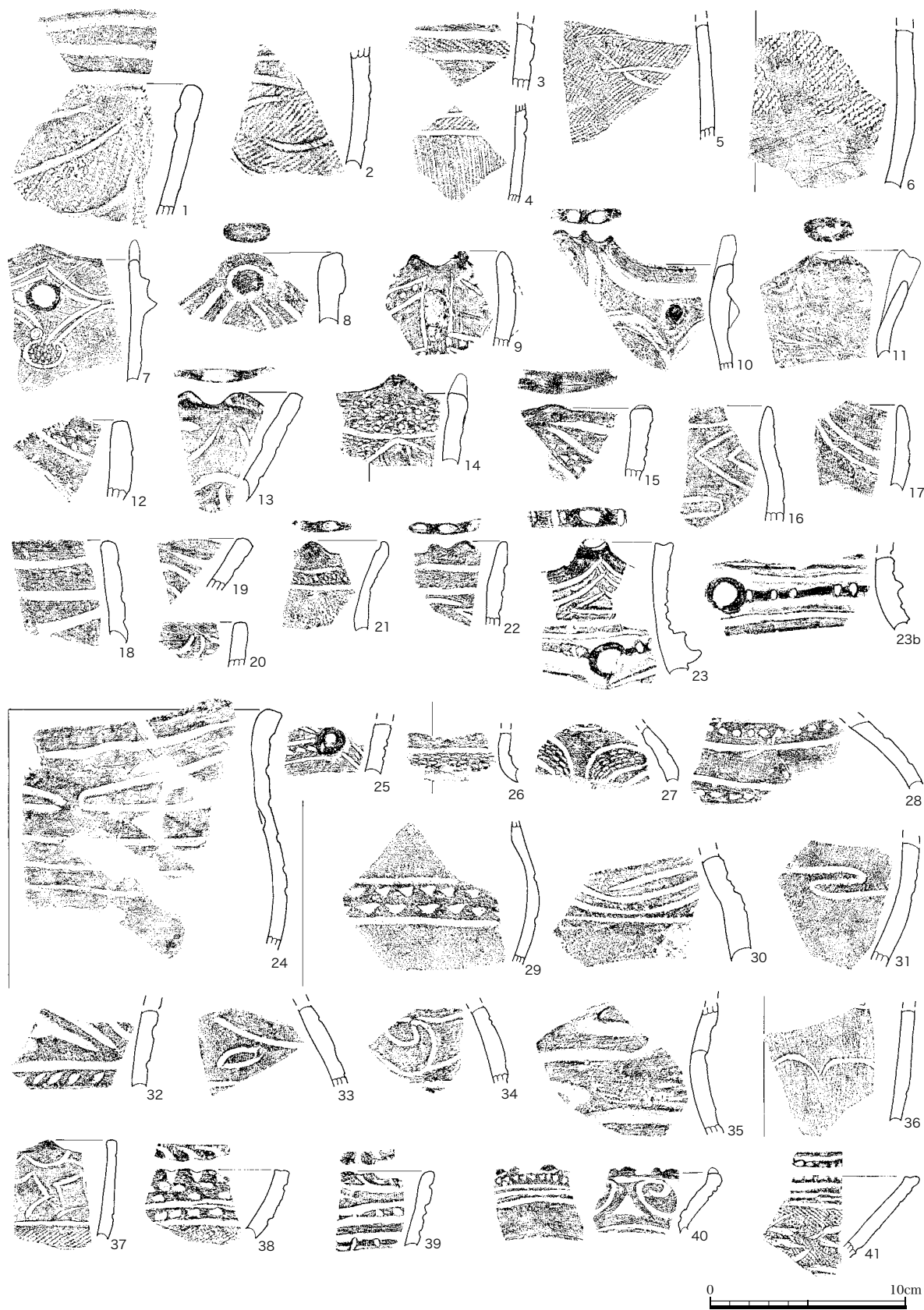
ワ1



第80図 A区出土土器(47)



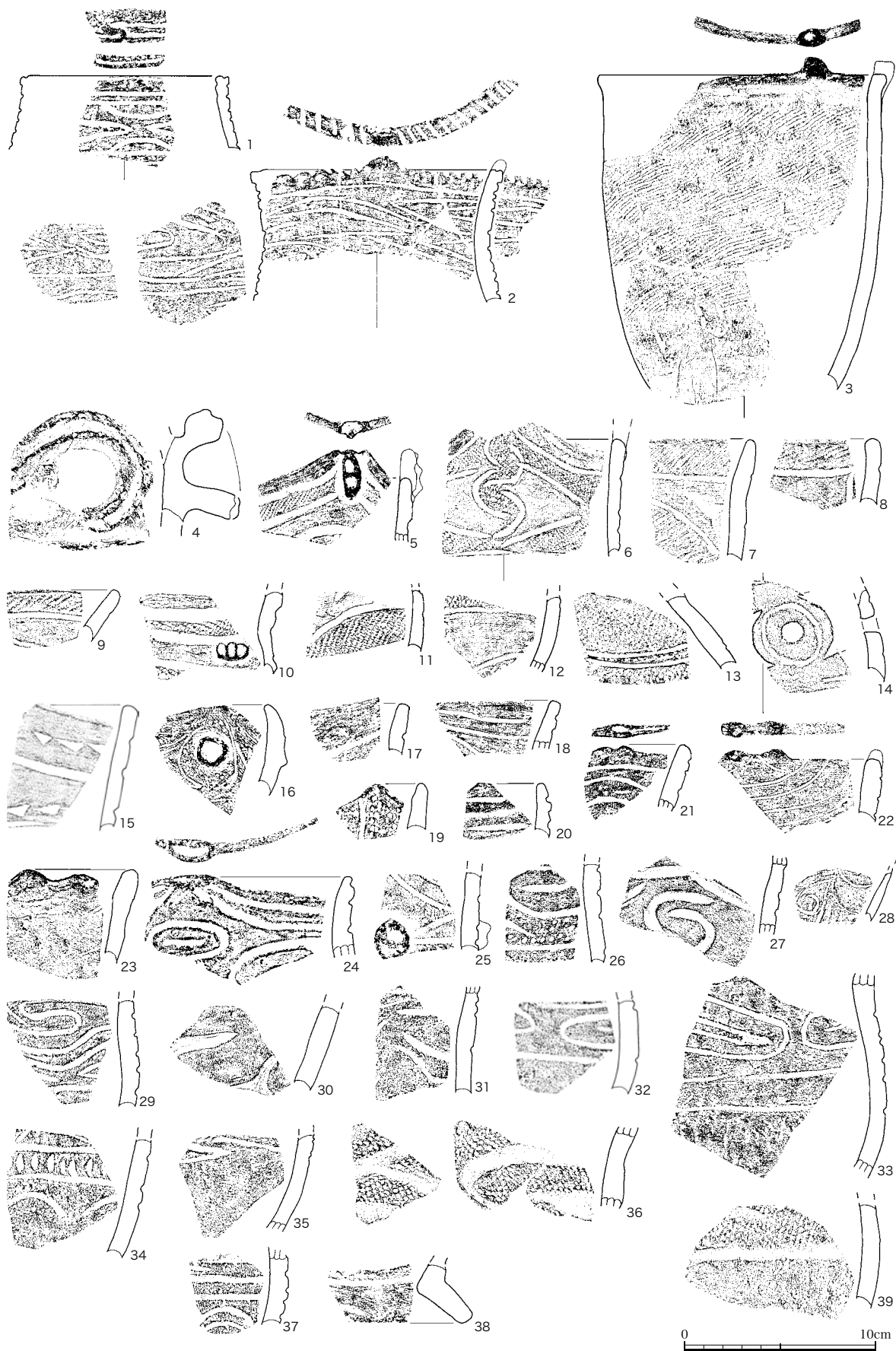
第81図 A区出土土器(48)ワ1



第82図 A区出土土器(49)ワ1

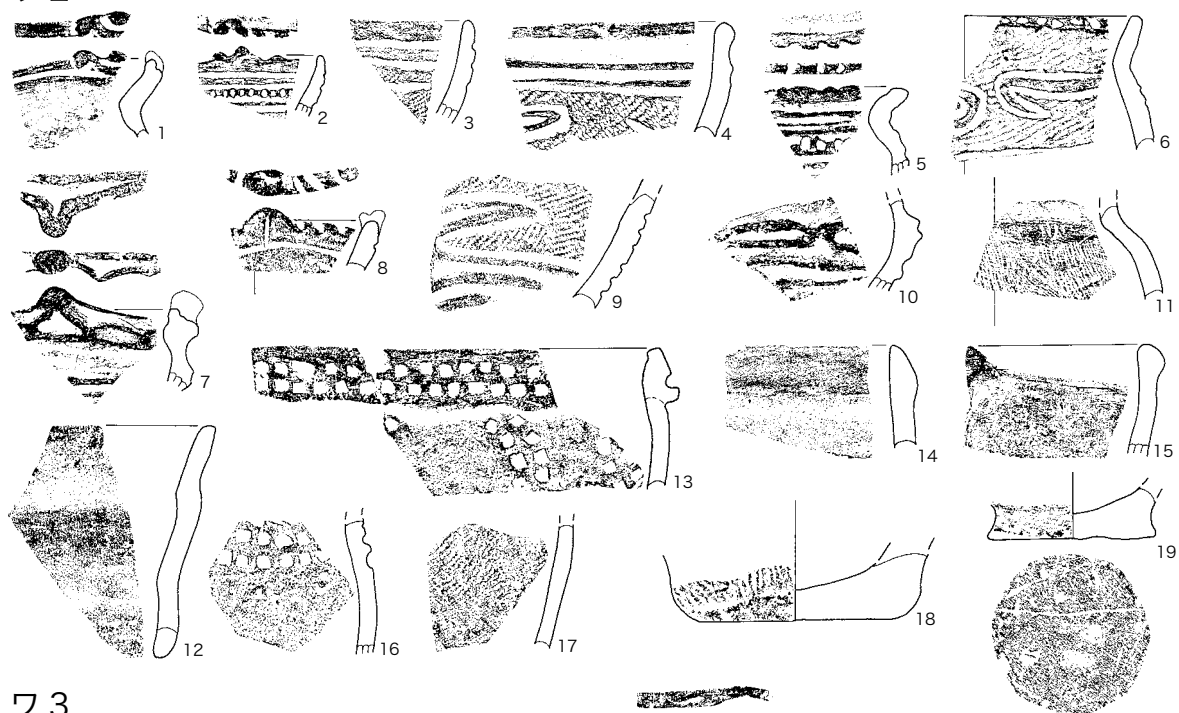


第83図 A区出土土器(50)ワ1

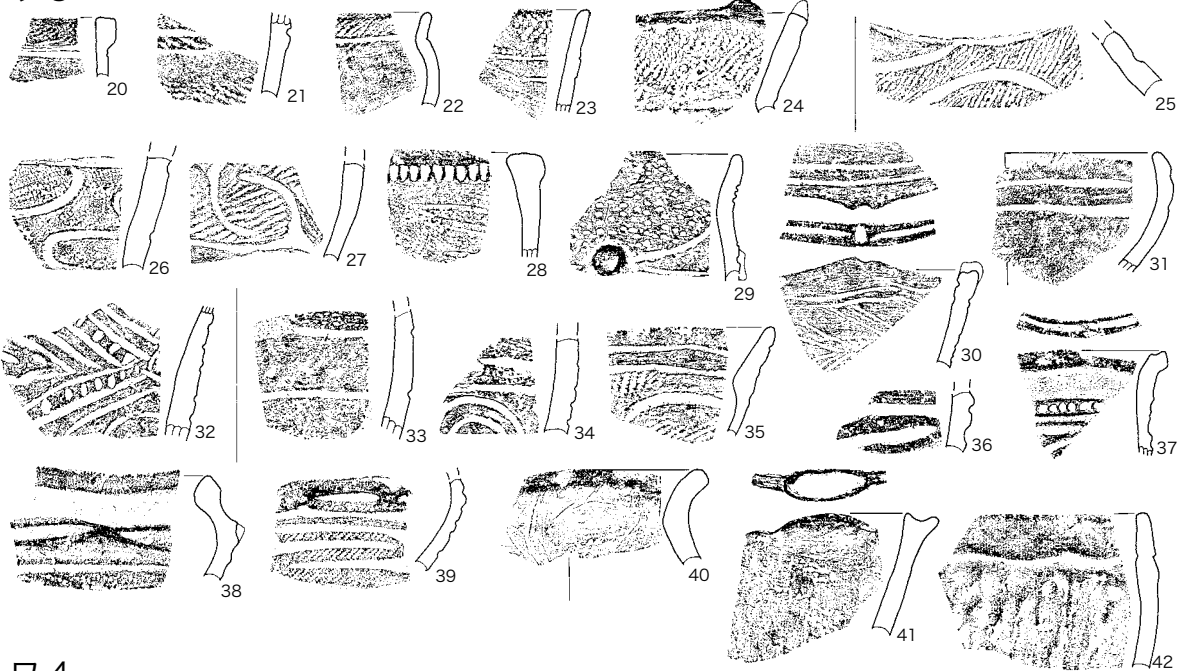


第84図 A区出土土器(51)ワ2

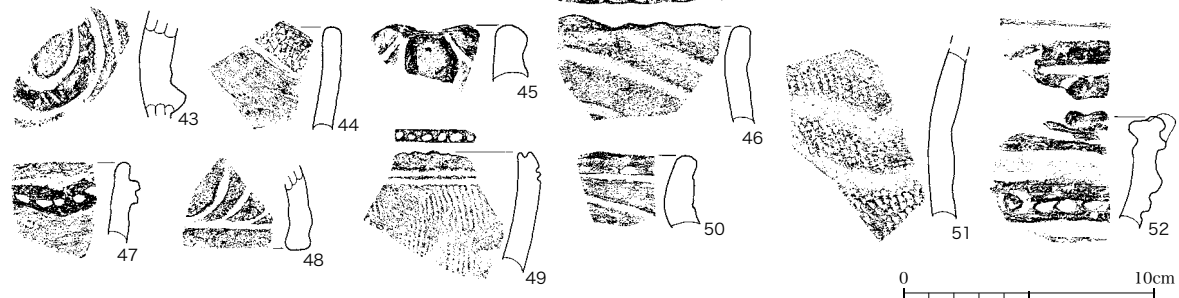
ワ2



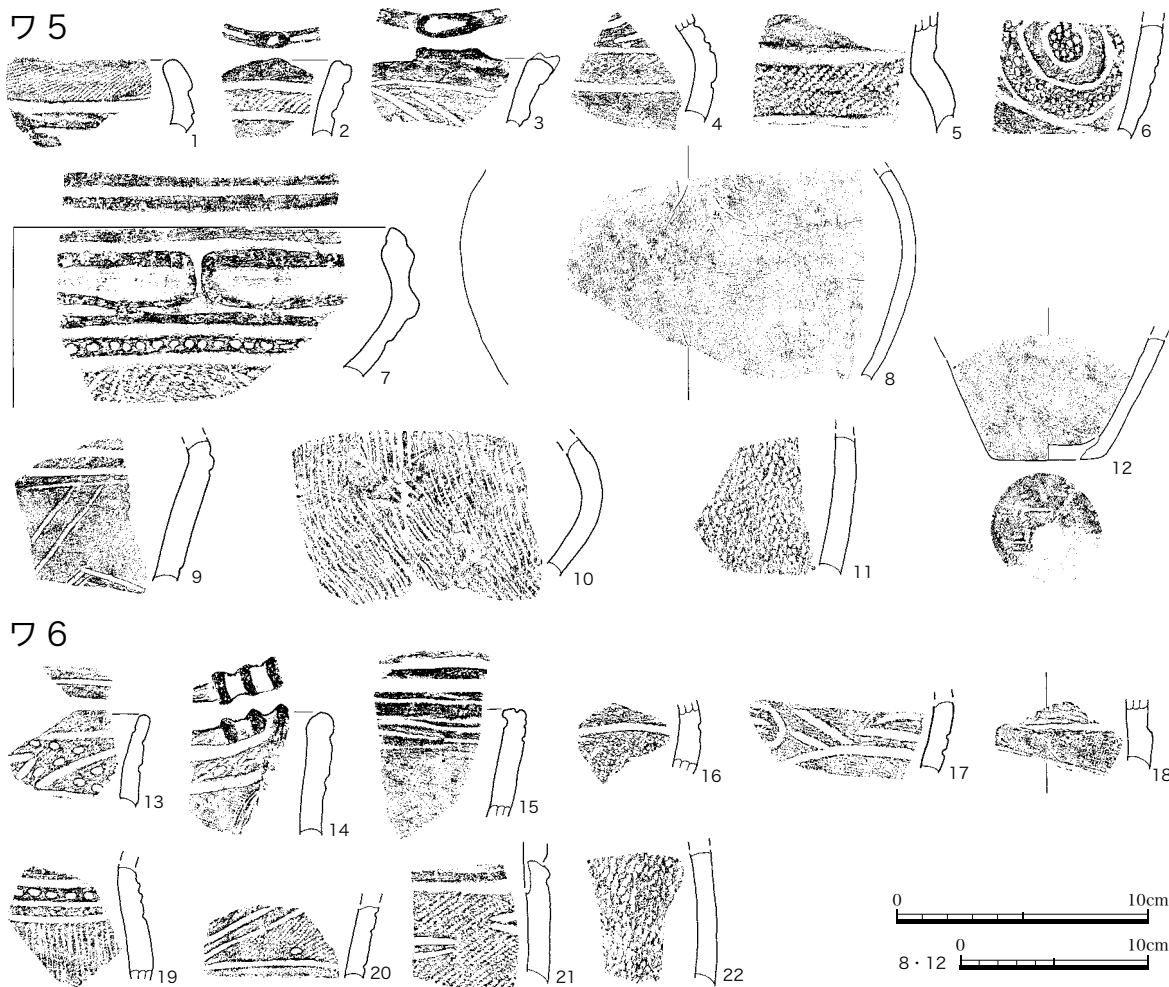
ワ3



ワ4



第85図 A区出土土器(52)



第86図 A区出土土器(53)

い瘤状突起、節の細かい縄紋充填など「天神原式」への漸近的变化を窺える資料である。3は加曾利E式で全体にかなり摩滅している。18は壺形土器で第71図10と同一個体か。第75図はウ3グリッド出土土器、第76図がウ4.6グリッド出土土器である。第76図22,23は底部の作りの上で注目されるもので、23は沈線状の直線凹部が観られる。文様装飾ではなく、切り離しなどの製作過程痕跡であろうか。

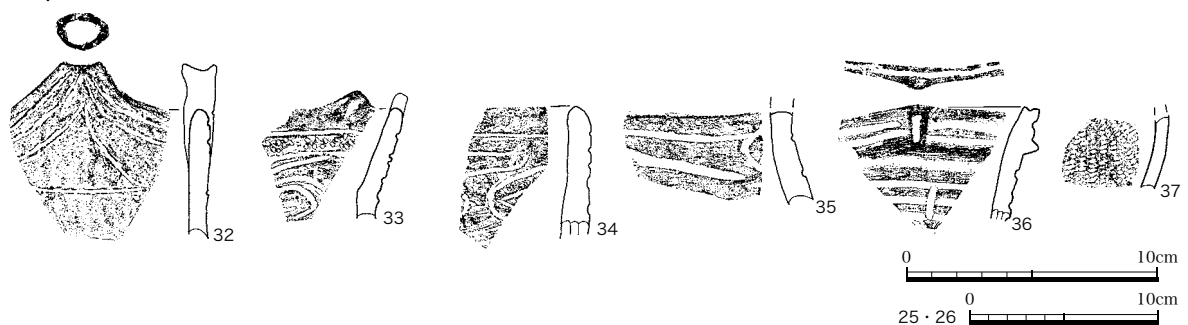
第77図はウ5グリッド出土土器及びウ1S1出土土器の補足である。7はかなり大形となる大洞系の鉢でA突起が2連並列で付されており、注意される資料である。18は大洞C2式～A式で観られる体部に縦位線が描かれる壺形と推定される。

第22図はワ0グリッドの遺構出土土器で、17の壺形土器が注目される資料である。文様構成・意匠は雑な感があるが、器面は比較的良く磨かれている。S4,S4Bとも時期幅があるが、この例は中でも新しいものである。第23図はワ0～ワ2グリッドの遺構出土土器を示す。ここでは住居跡と推定したピット集中部があり、ピット出土土器を可能な限り示した。小片が多く型式判断も難しい。一定の時期幅を認めるが、安行3b～3c式あたりが目立っている。第78図はワ0グリッド出土土器。1は入組帯状部分に円形刺突が密に充填されるもの、2,4はかなり変形しているが大洞系の壺形土器。第79図もワ0グリッド出土土器である。1は南関東安行3c式～3d式でもみられる文様構成で太い沈線表現なども共通する。直立する器形、厚い器壁なども特徴的である。20は口縁下2段目の隆帯上に刻みが付されるもので、突起や内面文様も注意される。

A4区



A区



第87図 A区出土土器(54)

第81図はワ1グリッド出土土器の径復元個体などをまとめた。7は類例をあまり確認できない土器で、底部の円状突出部、外縁の刻み列、研磨調整痕の胴部など興味深い特徴を観察できる。第82,83図では安行3c式～3d式対比の沈線施文資料の多様性が看取される。第84,85図上段にワ2グリッド出土土器。第84図2はやや細く浅い線で交互三角形～菱形配置となる文様を描いている。口端部の短沈線（刻み）も特徴的である。第85図には上段にワ2グリッド、その下位にワ3,4グリッド出土土器を示した。ワ4の51は幅広い凹線+縄紋?充填による文様表現があるもので、第84図36と同一個体かもしれない。線の手法は前浦式に類するが、検討を要する。第86図にはワ5,6グリッド出土資料を示す。7の鉢や擬縄紋の資料11が注意される。第87図はA4区及びA区出土土器を示す。A4区は道路工事立会部分であるが、層的にはV層～VI層対応の土層が確認されている。他のA区と同様、安行3b式辺りから大洞C2式期のものが認められる。

A区出土の石器（第88～108図）

遺跡内における石器全体の数量、組成比、分類の概要については第9節に譲る。個別の観察結果については観察表を参照されたい。ここではA区出土石器について概要を示す。石鏃・石錐についても第9節で示す。

第88～92図には遺構出土石器を示す。この遺構出土例でもすべてを示し得ず、限定的に選択しての図示である。特に礫石器についてはかなり限定的であり、遺構の性格などを考える上では問題も多く残るが、ひとまずの概要として示すこととする。なお土器と同様、遺構の名称発番～取り上げで若干混乱が生じており、遺構図で示した遺構との対応が不明なままのものがある。今後の追跡確認が必要な状況と言える。

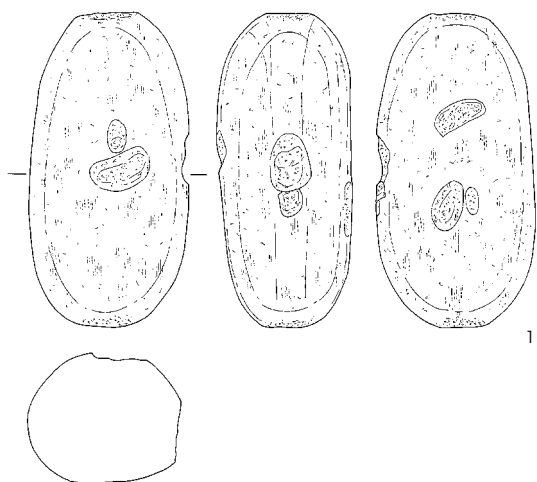
第88図にはア1S2、ウ1S1等の遺構出土例を示す。ア1S2は不整形の落ち込みで最終的に遺構と確定しなかった部分である。ウ0S1は石囲炉で、炉石として転用された石器のうち、礫器1点と磨石兼敲石の1点を示す。他に石鏃1点、磨石4点などの出土がある。ウ1S1は土器も比較的多く出土している落ち込み遺構(=SX3)出土で、楔形石器、使用痕ある剥片、磨製石斧、磨石を示す。他にウ1S1で取り上げた中では石鏃2点、打製石斧2点、礫器1点、砥石1点、石皿5点、磨石24点等の出土がある。第89図はウ2SX1、ウ2S3の出土石器を示す。前者は配石遺構、後者はSX3及びウ1S1と同じ遺構である。いずれも土器を含め遺物量は多い。第89図2は扁平小形の礫、同図3は棒状の礫で、いずれも磨痕が若干認められるものである。4,5は磨石兼敲石だが、側面や上下端部での顕著な敲打痕が特徴的である。この遺構では他には石鏃5点、石錐1点、礫器1点、石錘3点、石皿類8点、磨石類30点等の出土がある。ウ2S3は土器も比較的多く出土している。6は比較的形態が整っている打製石斧で、刃部はほぼ片刃で厚みを有している。

第90図はウ3S1等幾つかの遺構出土石器を示す。ワ0P14は住居跡の可能性のあるピット群内のピット。ワ0SK4は土坑2基と溝いずれの遺構にも付したもので、S4B出土の5以外ほどの遺構かは特定できない。4,5とも両極の剥片素材だが二次加工による刃部作出は不明瞭で、RF「二次加工ある剥片」と捉えた方が良さそうか。11の16TSX1はイ0SX1と同一遺構と推定されるもの、12のSK1も同じ可能性がある。ワ2SX1は縦穴状の落ち込みである。9は扁平で大きめの石皿だが表面下方に敲打集中部がある。

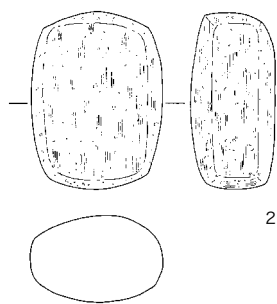
第91図にはワ1P5及びSX2で取り上げた資料を示す。前者はワ0～1、ア1にかけて広がるピット群内にある遺構で、扁平な礫の表面に磨痕がある。砥石とすべきか。2以下のA区SX2は不備により遺構を確定し得ないがイ1SX2と同じ遺構の可能性はある。S2で取り上げた資料もあり、これとも混同している。同様に第92図のSX3やSX5で取り上げた資料も、最終的に確定した遺構を特定し得ない。SX3はウ1S1＝ウ2S3とも同じ遺構の可能性はある。土器でもこのSX名資料がある。第92図7はウ2S1遺構で第89図に示したウ2S1と同じ遺構出土か。8の16TSX1は16T拡張区＝イ0SX1となる可能性が高い。扁平礫の下

(→P94)

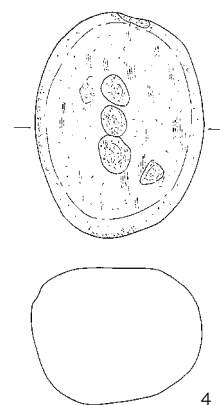
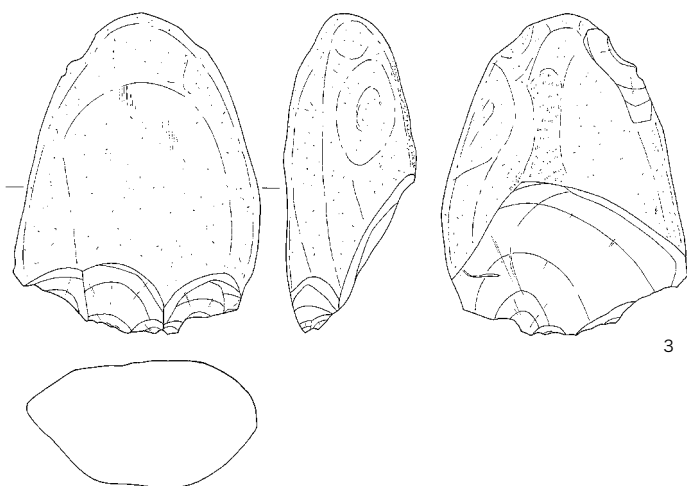
ア 1S2



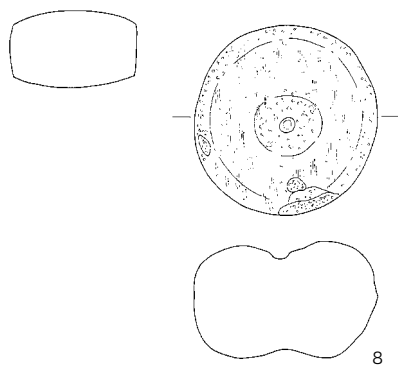
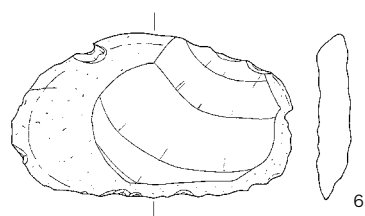
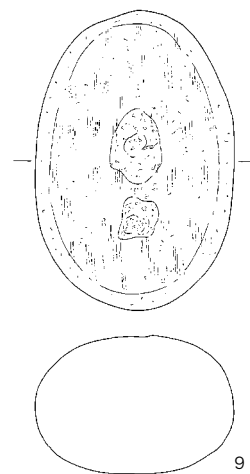
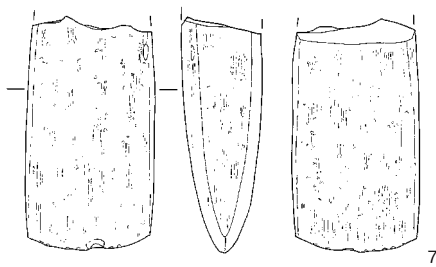
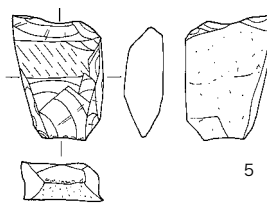
イ 1SX2



ウ 0S1

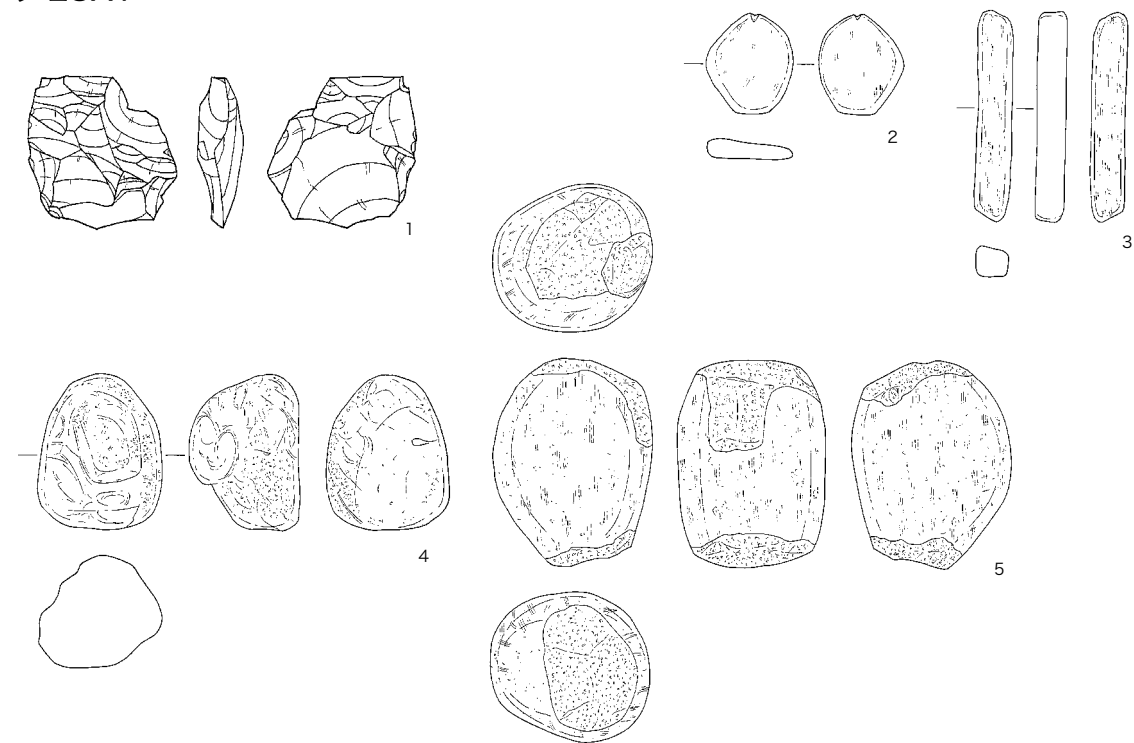


ウ 1S1

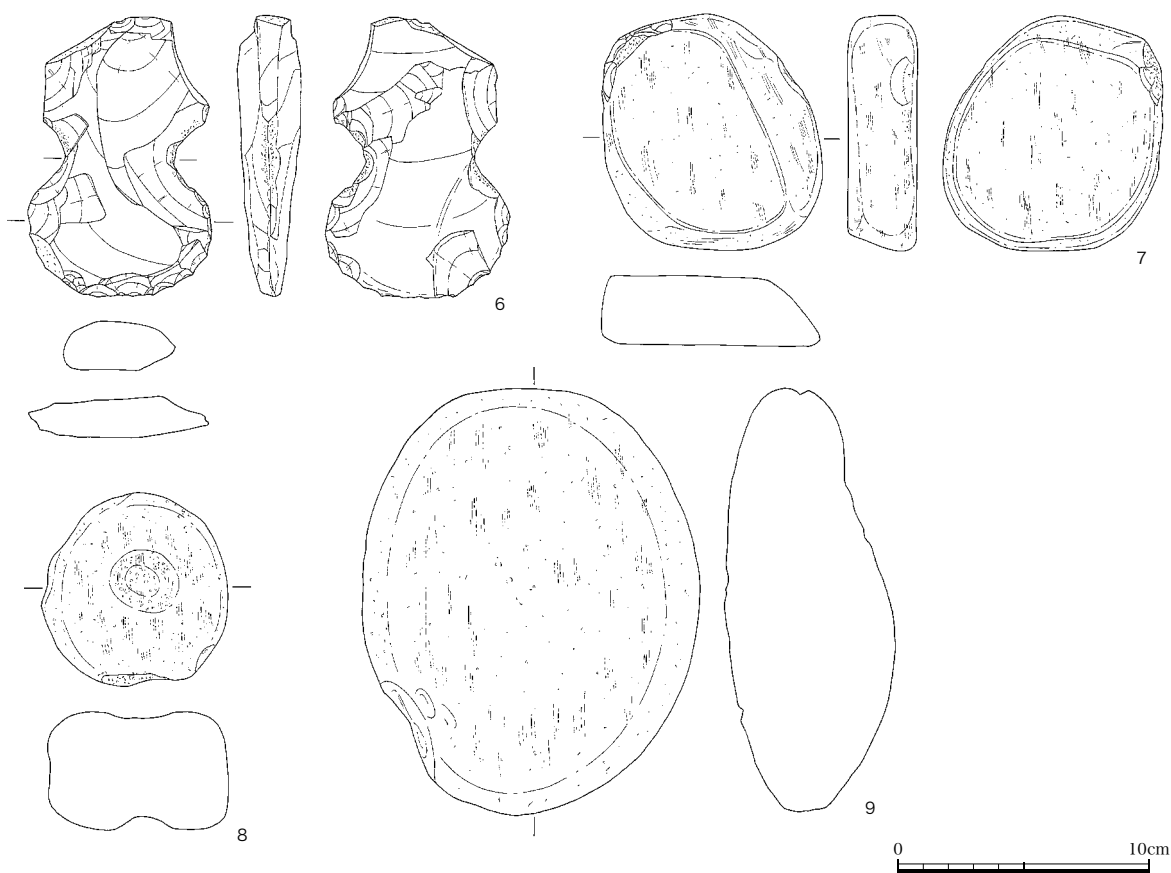


第88図 A区出土石器(1)

ウ2SX1

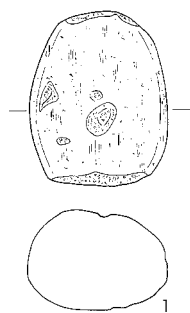


ウ2S3

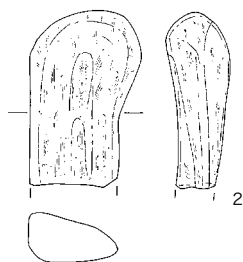


第89図 A区出土石器(2)

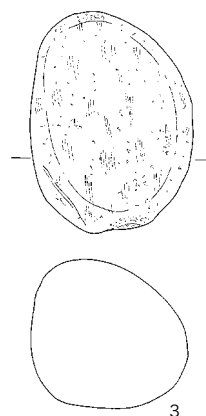
ウ 3S1



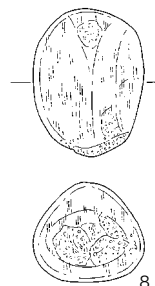
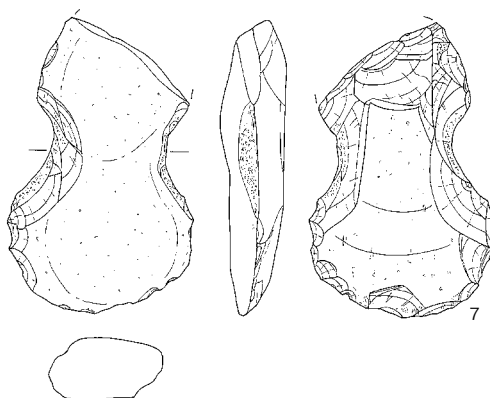
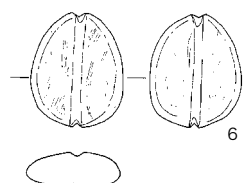
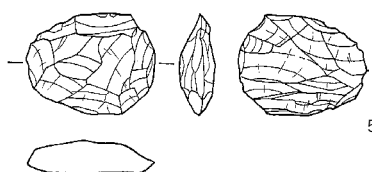
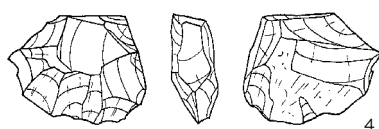
ワ 0P8



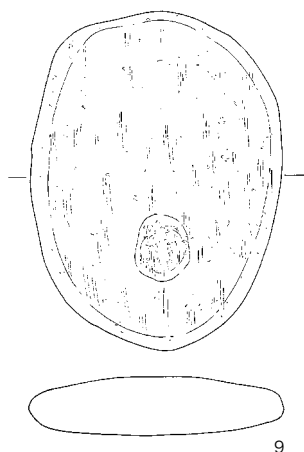
ワ 0P14



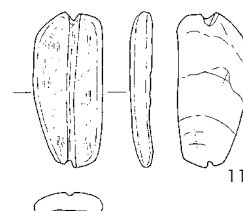
ワ 0SK4



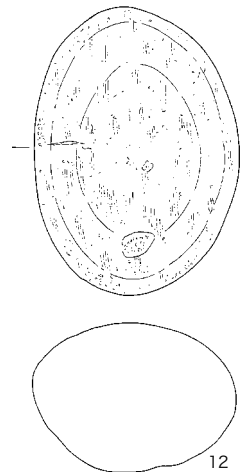
ワ 2SX1



16TSX1

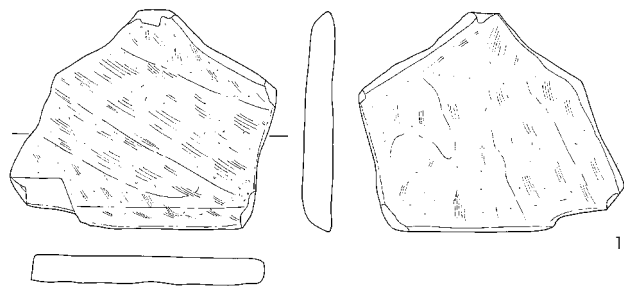


SK1

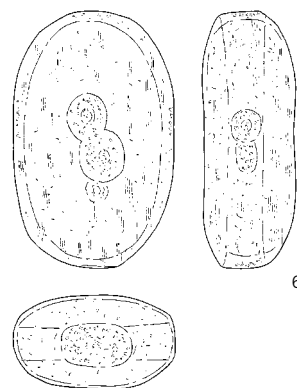
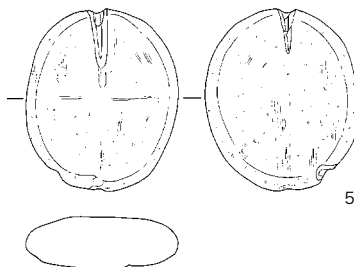
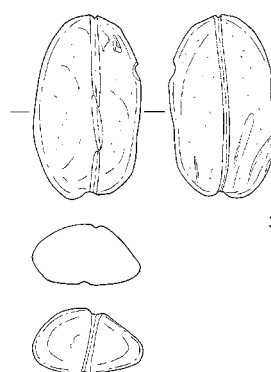
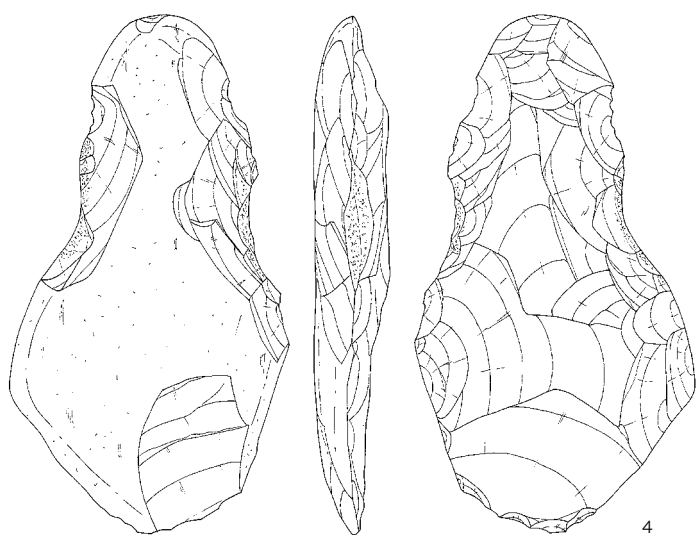
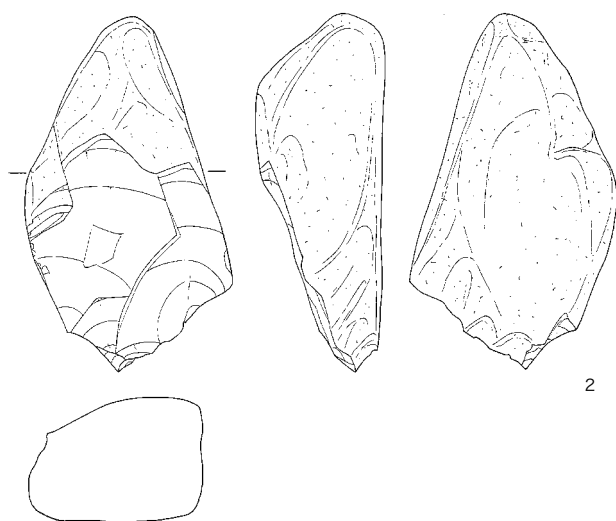


第90図 A区出土石器(3)

ワ 1P5

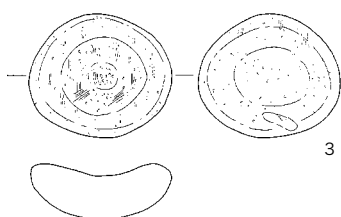
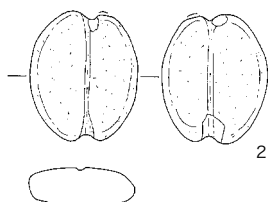
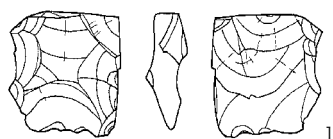


A区 SX2

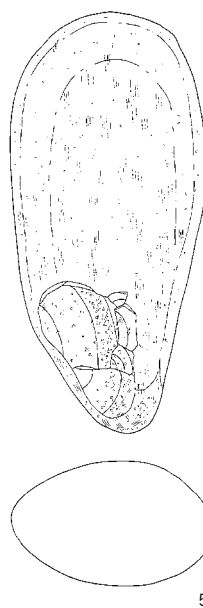


第91図 A区出土石器(4)

A区 SX3

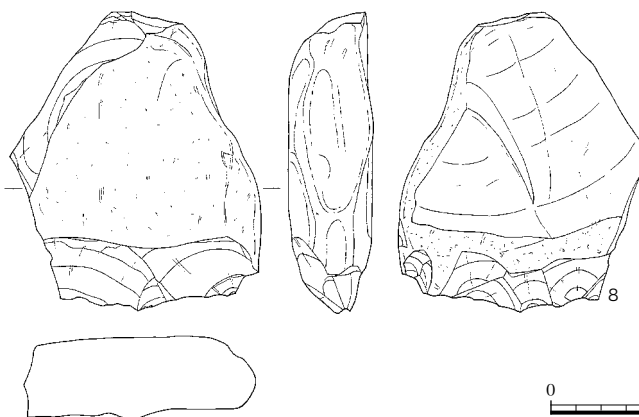
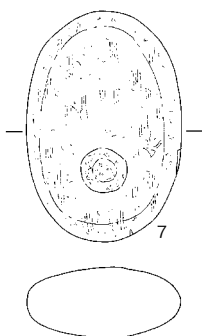


A区 SX5



SX1

ウ2 SI

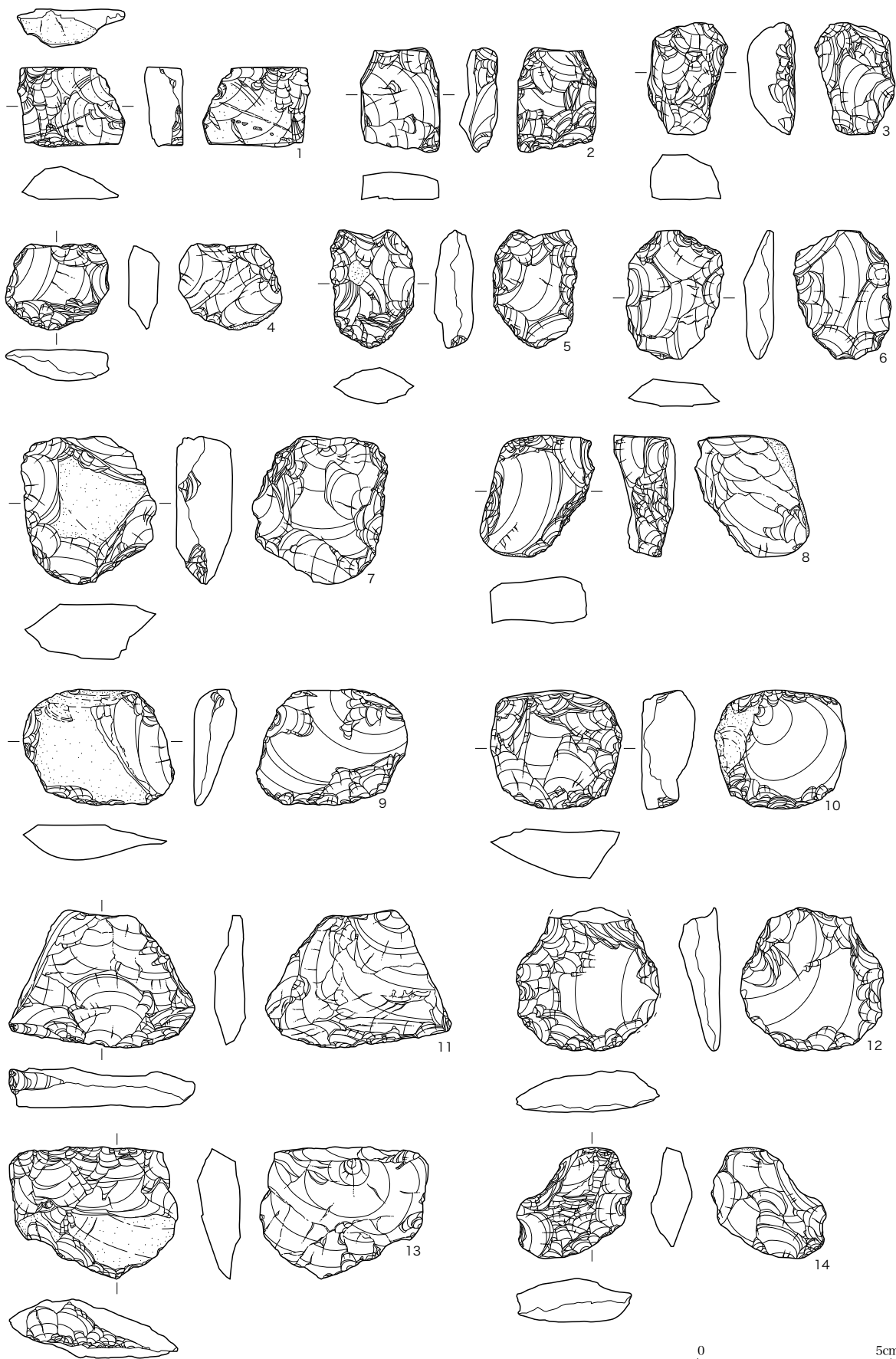


第92図 A区出土石器(5)

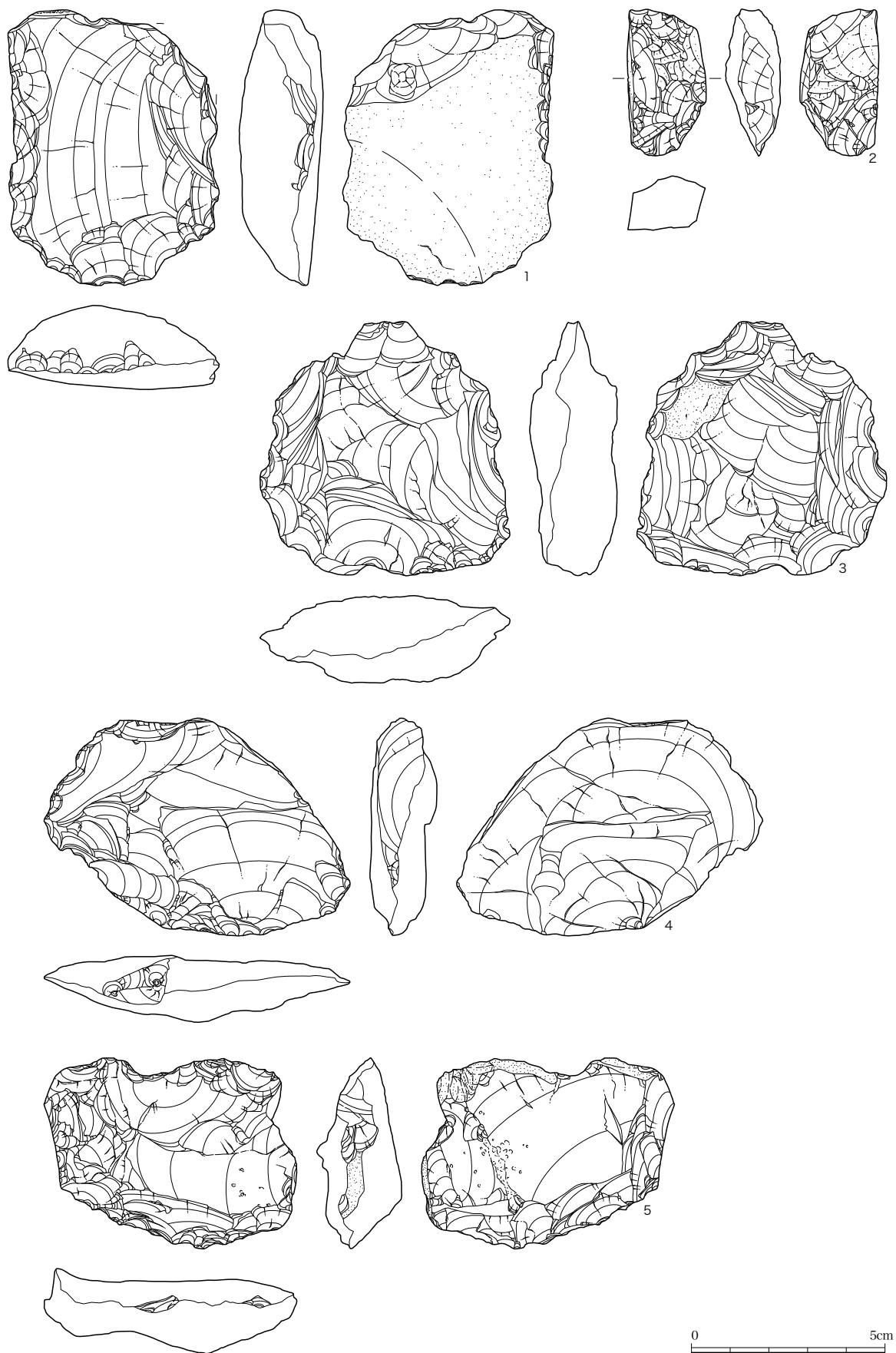
端をやや大きな剥離で刃部状にしている礫器で、他の部分は殆ど加工がされていない。

第93～95図は剥片石器で、株式会社アルカに実測図化を委託したものである。チャートをもととする剥片石器自体は多量に出土しているが、二次加工痕や使用痕が見られるものは一定数に限られる。二次加工の明確なもので、更に刃部が比較的明確なものを中心に選択図示している。それでも代表的なものに絞っており、本来詳細な分類や検討が必要であるが、ここでは示し得ない。定型性に欠けるもので、単なる形態やサイズでの分類は難しいものの、小形のものでは台形状～長形状のものがやや多い。第93図には主にこの小形の例を示す。2,3等のように、両極剥片素材で一辺に二次加工が観られるものでは楔形石器ピエスエスキューと判断できる例もあるが、スクレイパー類や二次加工ある剥片との区別が難しいものも多い。特に一部の二次加工で、刃部状とならないものについてスクレイパー類との判断が難しい。両面の丁寧な二次加工が観られるもの(10,12等)はスクレイパーと捉えている。また加工の有無や部位、加工の形態などの種別と共に、使用痕で見た場合で顕著な刃こぼれ状の使用痕があるものと殆ど見られないものがある。

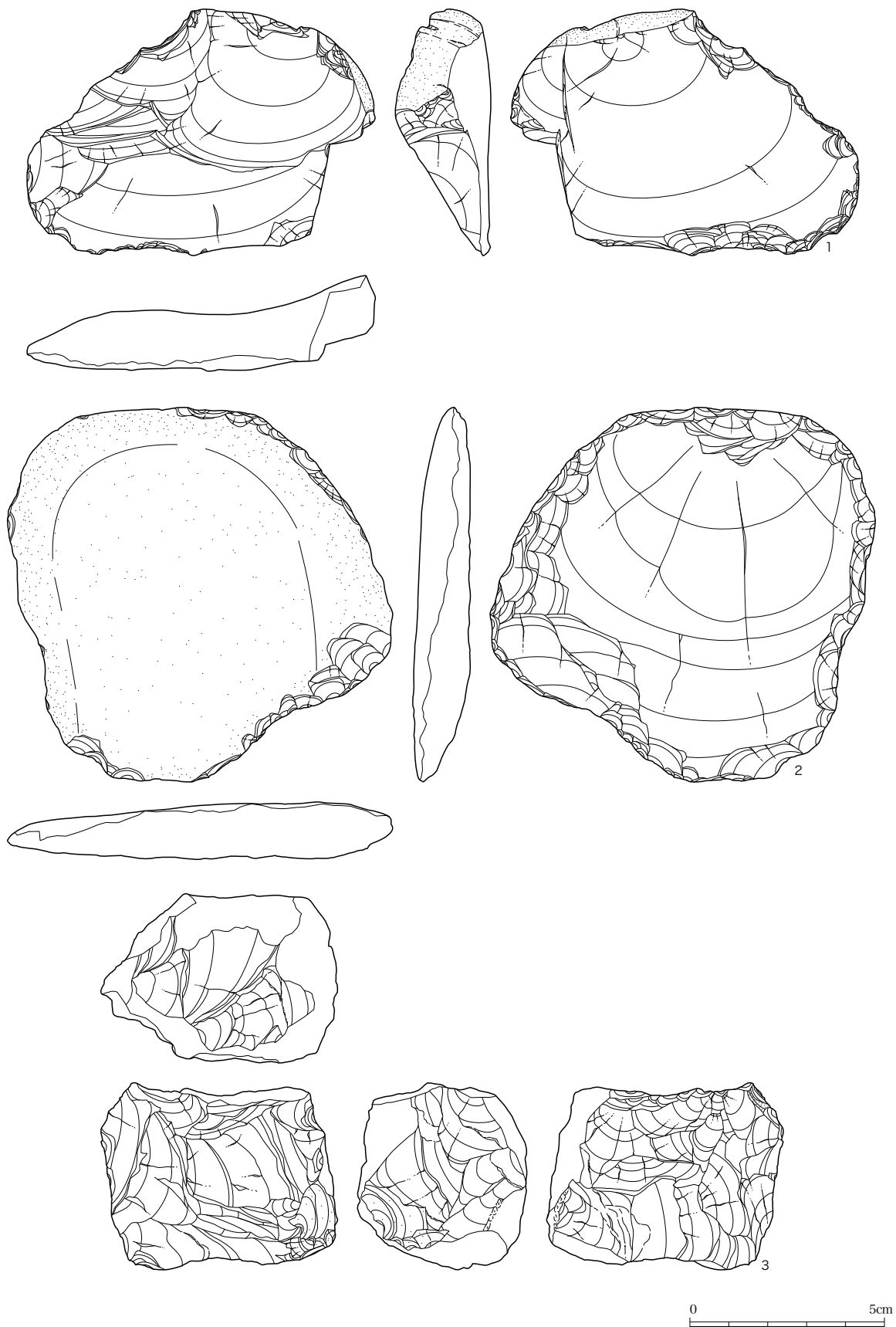
第94図の1,3～5にはやや大形の剥片石器を示す。総じて厚みのある素材のままで、1～数辺に二次加工
(→P100)



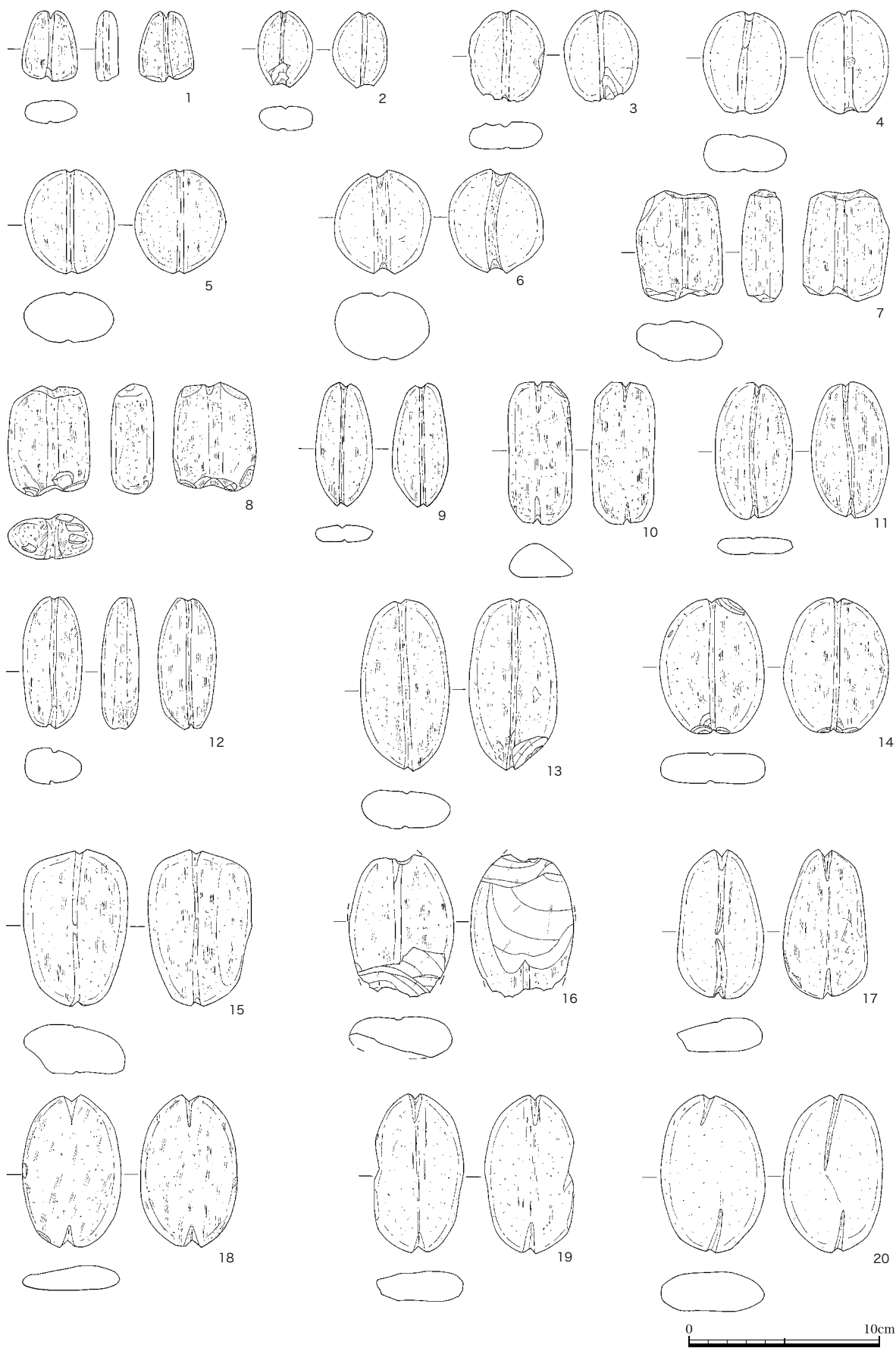
第93図 A区出土石器(6)



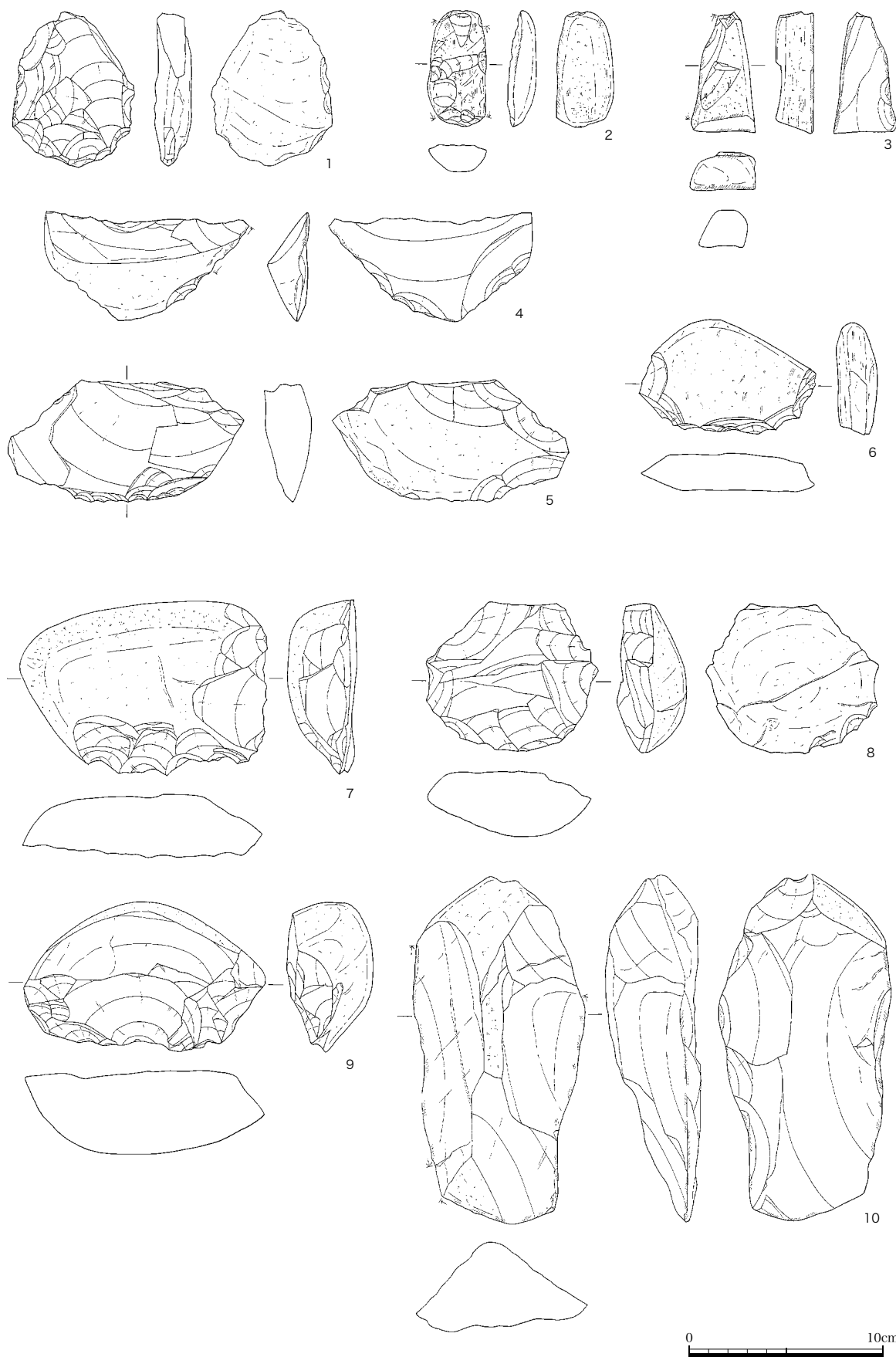
第94図 A区出土石器(7)



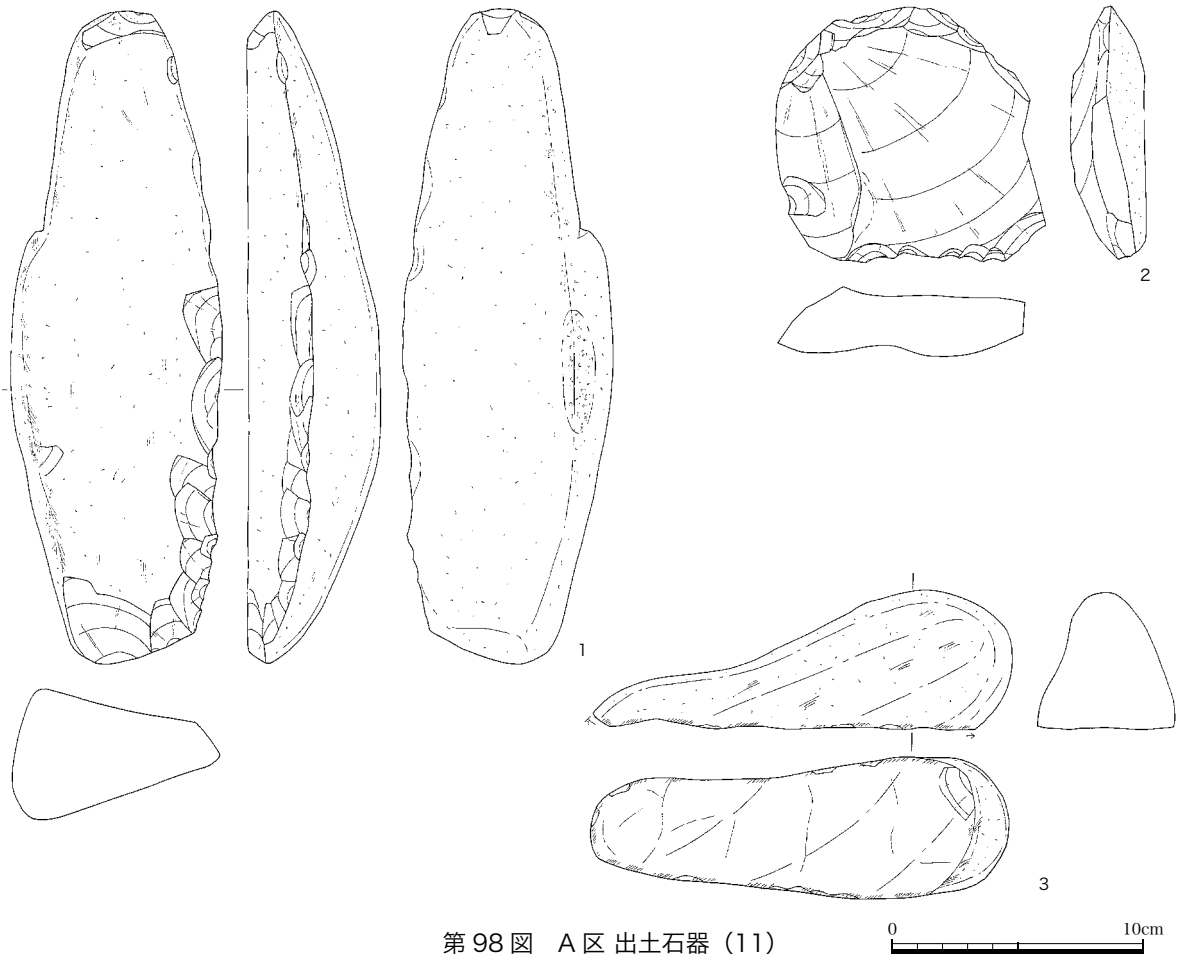
第95図 A区出土石器(8)



第96図 A区出土石器(9)



第97図 A区出土石器(10)



第98図 A区出土石器(11)

を加えている。1のように、細かい剥離加工を行っていない辺でも使用痕刃こぼれ状の微細剥離が見られる例がある。5は鈍角の下端辺に粗いながらも連続的な二次加工・剥離を加え刃部としている。

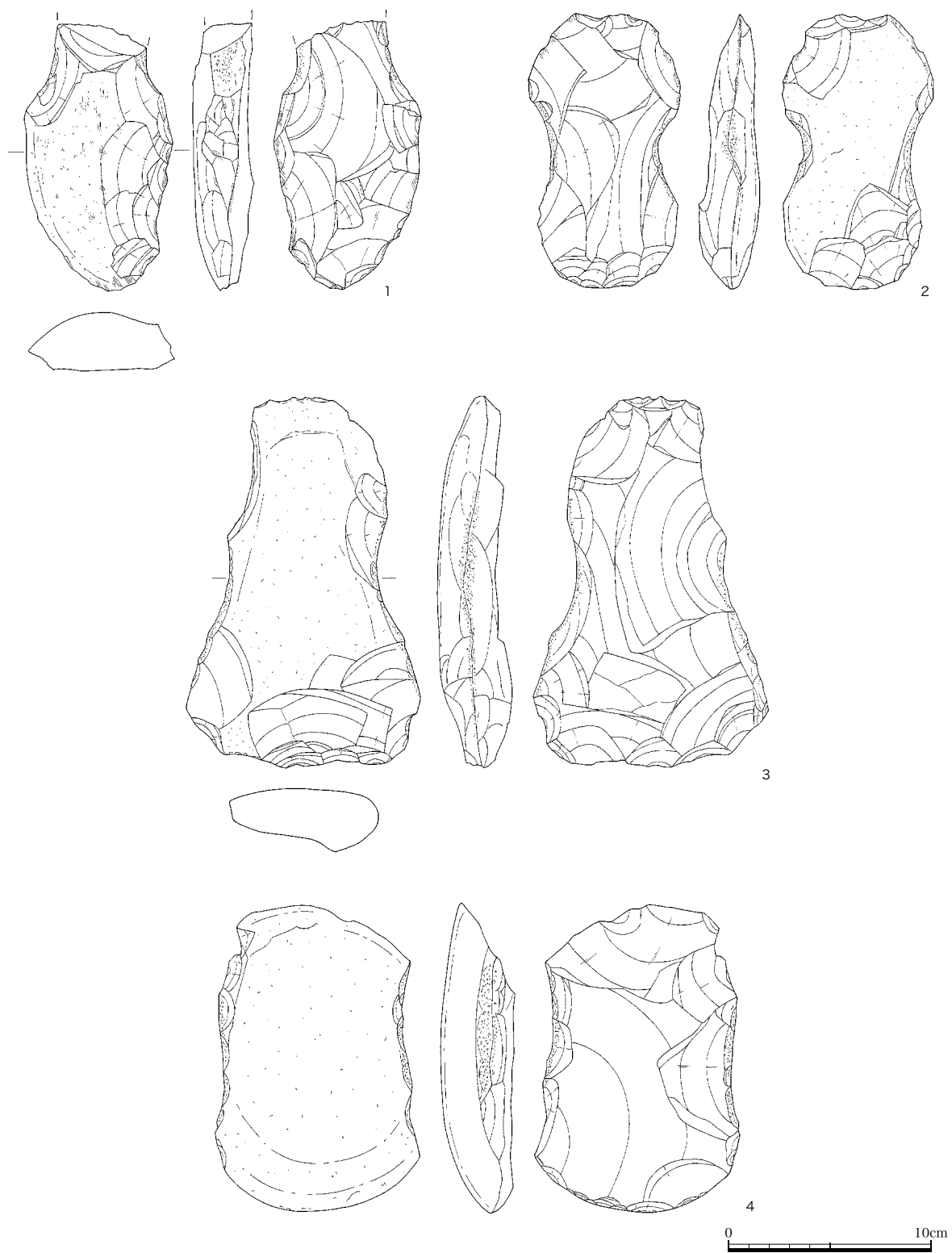
第95図の1,2も同様であるが、2の片面はほぼ自然面礫面のままで、片面では全周に近く二次加工を加えており、礫器との判断もあろうか。3は石核である。石核(残核)も多量に出土しているが、殆ど図化できず、また詳細な観察検討も行っていない。石鏃等の定型的な剥片石器をとっていると推定できるものはあまり観られないようである。図示した本例が代表的なものとも言い難く、本来詳細な検討を必要としよう。

第96図以降には礫石器を機種毎に示す。石錘はA区で58点出土しており、ここでは20点のみ示す。形態等からの分類は行っていないが、いわゆる有溝石錘と切目石錘・両端打ち欠きの石錘があり、有溝例がかなり多い点は注目される。有溝例でも均等な幅・深さで全周するものと、中央付近では浅く細くなる例(17,19等)もある。中央で痕跡状に残っている線状痕は使用痕か。20のように上下からの溝がずれる位置関係にある例も認められる。また若干の研磨整形で形を整えているものと、殆ど整形していないものがある。

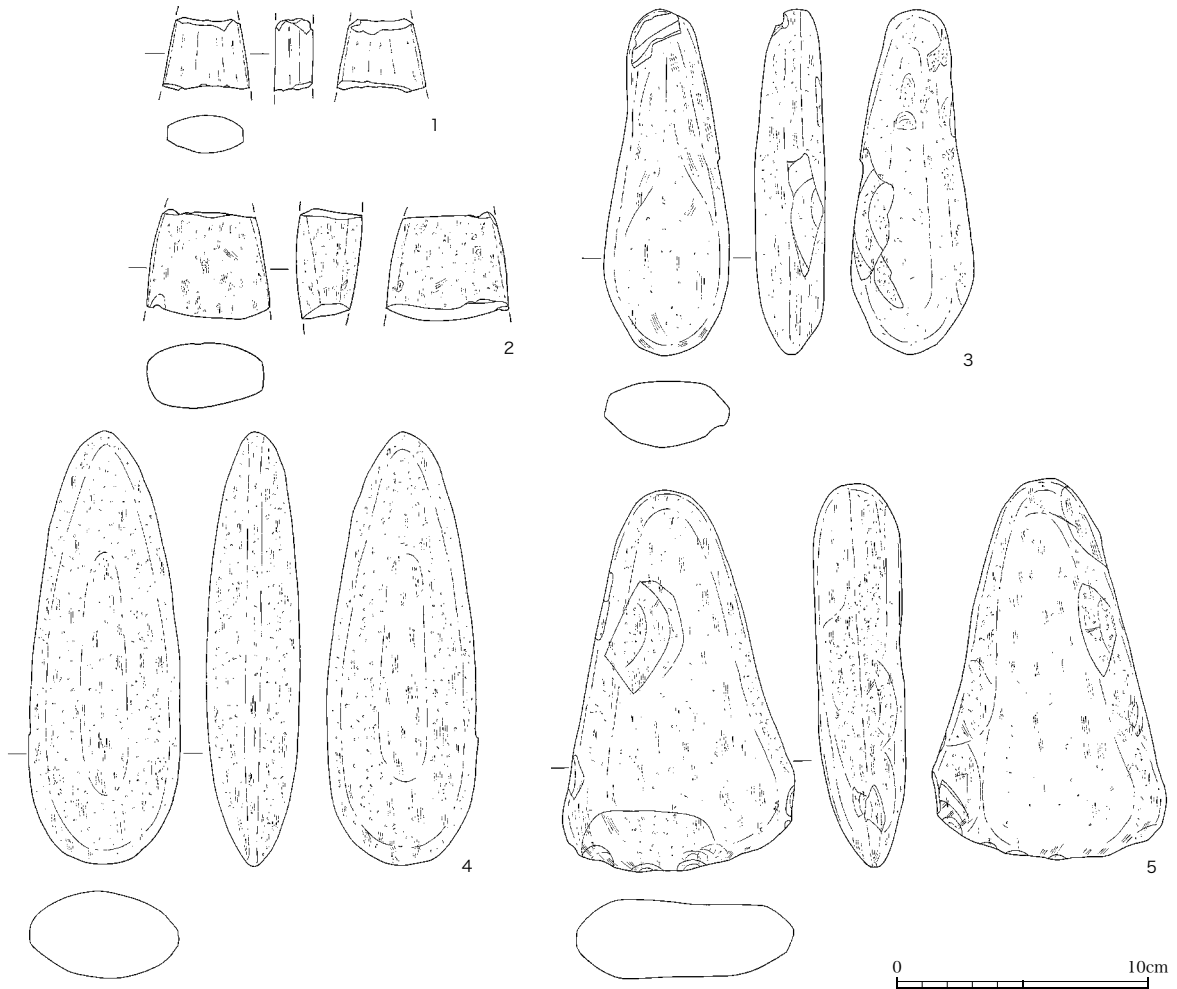
第97・98図にはスクレイパー類・礫器類を示す。一部第93～95図に示したものに近い例もあるが、自然面を多く残す礫器、またはそれに近いものを主に示す。また縁辺の摩滅が顕著な「擦切具」も一部ここで示す。第97図2,3,4は1～2辺で著しい摩滅痕が認められる「擦切具」で、2では面の一部も摩滅している。5～9はやや大きめの剥片素材の下端などに二次加工を加え刃部状にしているものである。刃部は片刃状でやや鈍角となっている。10はやや大形の礫を剥離加工し(両極?)、この左右縁辺及び下端辺に顕著な摩滅痕が生



第99図 A区出土石器(12)



第100図 A区出土石器(13)



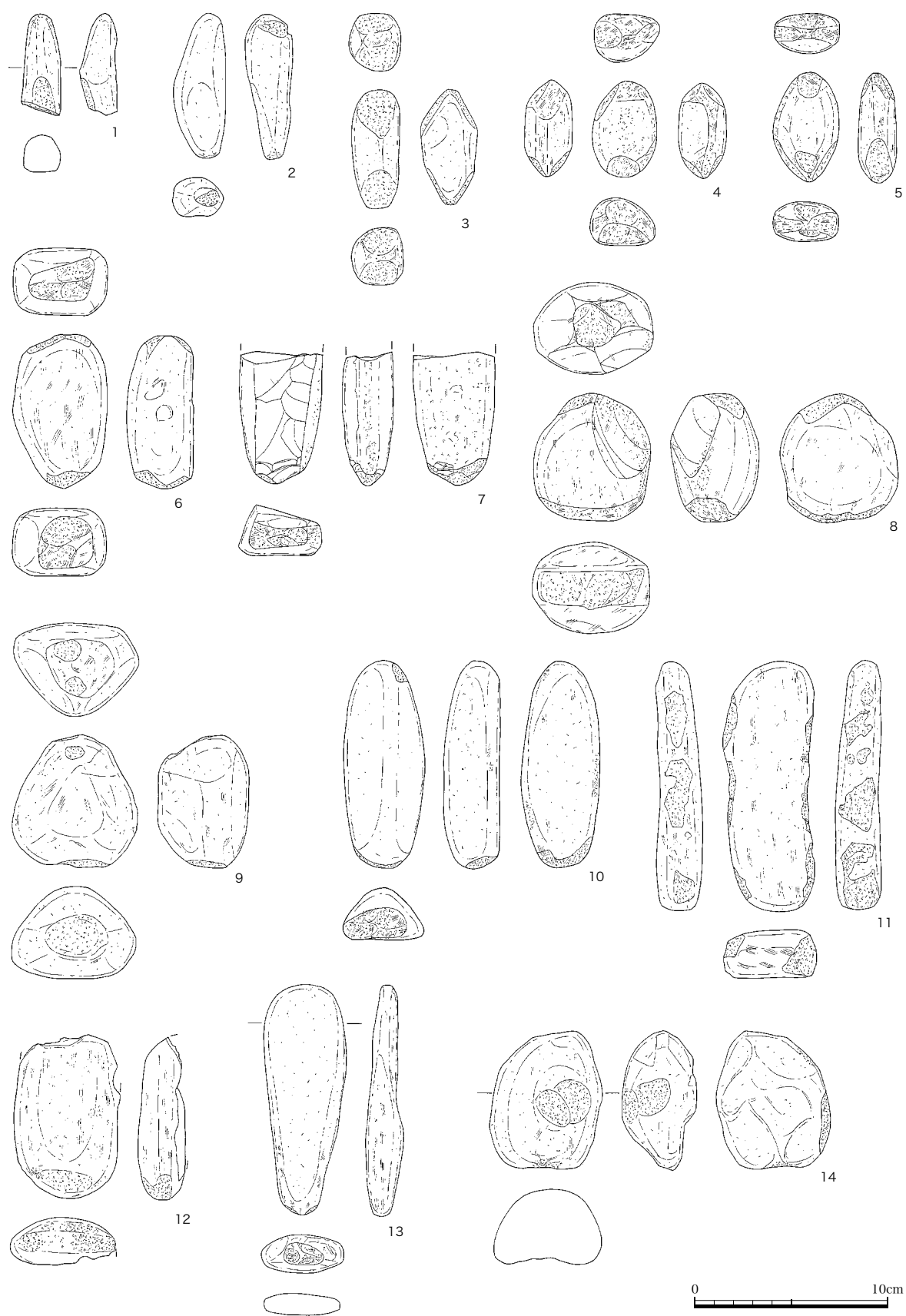
第101図 A区出土石器(14)

じる使用を想定させるものである。第98図1は縦長の礫一辺に二次加工剥離を加えているものだが、剥離のない部分での摩滅が顕著な「擦切具」である。3もやや細長い礫の剥離面にかかる角の部分が全周に近く摩滅しており、この鈍角な角を用いての使用が推測されるものである。

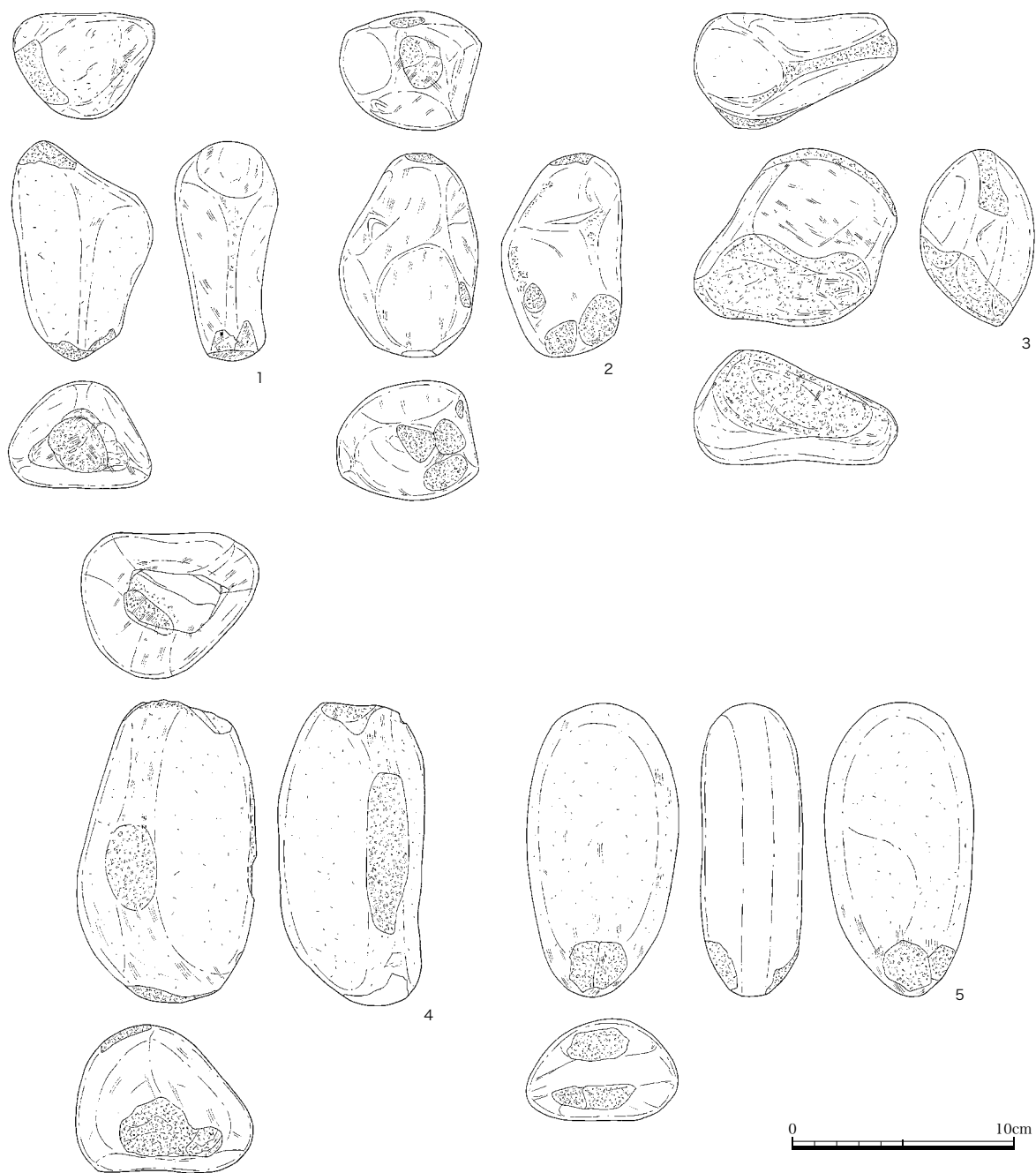
第99,100図には打製石斧を示す。多くの形態が確認されており、本来詳細な観察分類及び検討を行うべきであるが為し得ていない。定型的な分銅形(第99図3,100図2)は少なく、細長く非対象のもの(第99図5)、撥形に近いもの(第100図3)などがある。総じて括れの弱いものが目立つが、この括れ部への敲打痕は多くの場合顕著である。丁寧な刃部加工を加えているものは少なく、第99図5,6や第100図4のようにわずかな加工に留まっているものもある。第99図3,5,6では刃部或いは他の縁辺が摩滅しており(特に第99図3は著しい)、使用時に擦るような行為が行われていることを推定させるもので、検討が必要である。

第101図は磨製石斧5点を示す。1,2の破片は定格式と推定されるが、3~5はかなり異なった形態で、3,4は乳房状にも近い。第102,103図は敲石である。磨石兼用のものも多いが、上下端など一定部分に顕著な敲打痕がある。敲打痕の位置や形態・サイズなどからの分類検討も必要であろうが、ここではそのまま羅列的に示す。1,2などの小さめの細長い礫の下端に顕著な敲打痕があるもの、3~5のような敲打・研磨により上下端部が山形状になるもの等は宇都宮市刈沼遺跡でも多く観られ、後晩期特有の形態としても良いように思える。8は多面体状にも近いが、上下端部への集中が目立つ。11は左右側面での敲打が顕著なもので、やや異質である。第103図も非定型的な敲石だが、1~3は形態サイズとも類似しており、意味があるかもしれない。

第104,105図は磨石をまとめた。A区だけでも2,103点と膨大な数量が出土しており、極めて限定しての



第102図 A区出土石器(15)

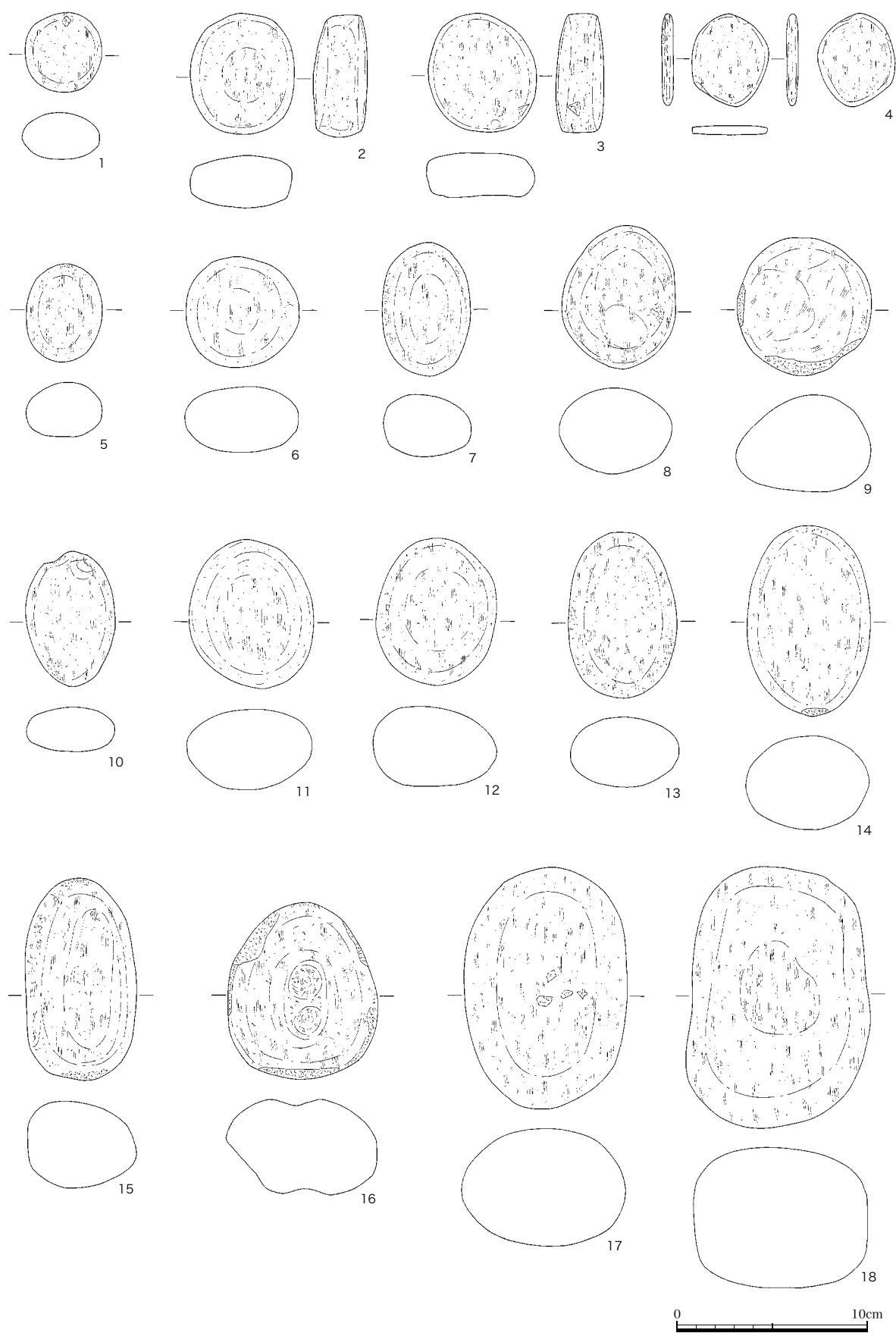


第103図 A区出土石器(16)

図示である。第104図2,3は表裏面と側面との境となる角・稜が明瞭で、非常に整った形を呈する、北関東の後晩期に特有のものである。4は小形扁平の例、5～14はやや小形で円～楕円基調の例を示す。15～18はかなり厚みのあるもので、中央に顕著な磨痕を有しているものも目立つ(第104図16,18)。第105図1～9も表裏面などに凹みや敲打痕集中部、磨痕集中部などが認められるものである。所謂凹み石と分類されるものもここに含めている。凹み孔は縦2連のもの、縦長となっているものもやや目立つ。

第106～107図には石皿類をまとめた。当初分類の多孔石や台石を含めている。縮尺を統一していないので分かり難いが、第107図には大きめのものを示している。広く面的に磨痕があるもの(第106図5、107図5)、一定部分に集中するもの(第106図7、107図3など)、多孔石面と複合するもの(107図4,6)等がある。「多孔石」とすべき形態例などもここに含めている。磨痕の程度、側面整形の有無など、分類にも関わる観察

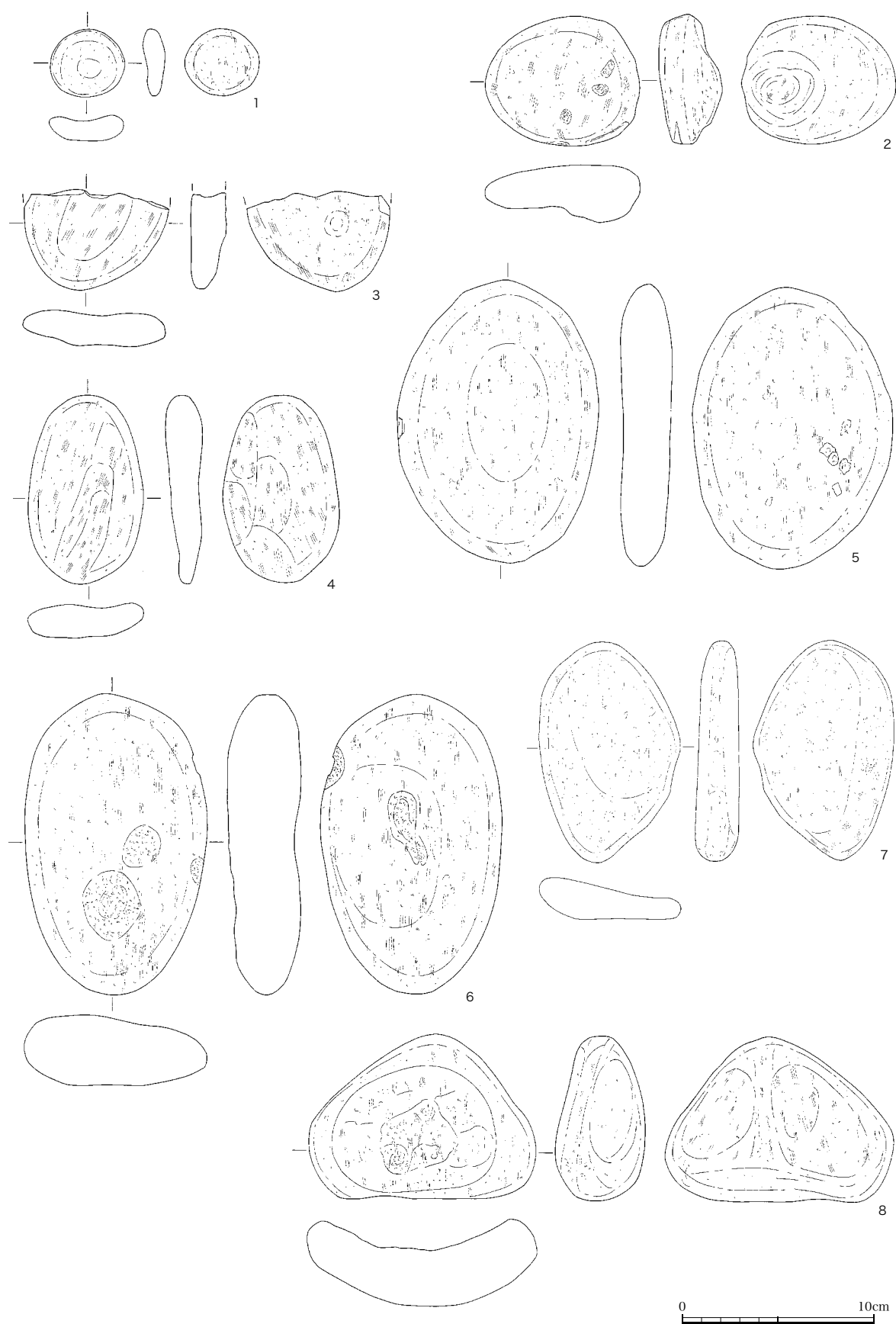
(→P110)



第104図 A区出土石器(17)



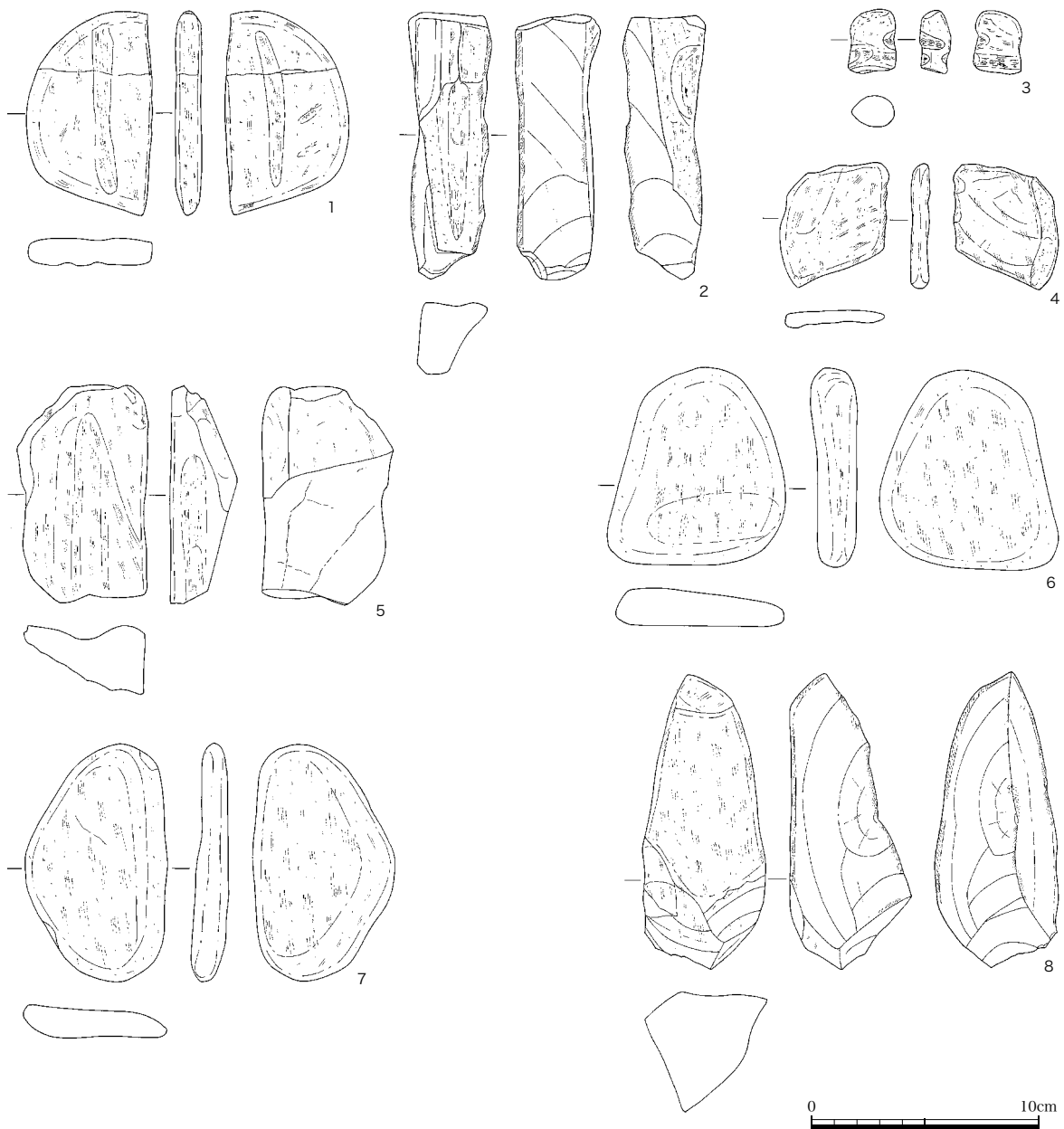
第105図 A区出土石器(18)



第106図 A区出土石器(19)



第107図 A区出土石器(20)



第108図 A区出土石器(21)

事項について本来検討すべきであるが為し得ていない。

第108図には砥石を示す。所謂面砥石については石皿との区別が難しいものが多いが、石材、形態、砥石面の状態等から区別した。1,2,5は所謂筋砥石で、一定帯状部分に砥石研磨痕が集中するものである。2はやや不整形で縦長の剥片状のもの的一面を用いている。3は小形円柱状のもので、近年沿岸地域で貝輪製作に関わる道具として注目されているものに近い形態の例である。内陸なので骨角器製作に関わるものが推測され、宇都宮市刈沼遺跡でも良好な例が出土している。6,7は面砥石だが、6ではやや表面下方に集中している。8は砥石兼擦切具で、断面三角形の各辺=やや鈍角な稜の部分が摩滅しており、擦切使用を推測する。砥石からの転用(または逆)なのか、或いは並行的に用いているのかは不明であるが、後者の可能性が高い。

第2表 A区遺構計測表

遺構	長軸	短軸	深さ	特徴・軸	遺物種別数量	遺構図版	遺物図版	写真図版
ア OP1	46	38	27			19		
ア OP1(T15P1)	30		18		礫 2	19		
ア OP2	38		18			19		
ア OP3	26		18			19		
ア OP4	26		31			19		
ア OP5	24		32			19		
ア OP6a	25		15			19		
ア OP6b	32	17	52			19		
ア OP7	32	26	34			19		
ア OP8	34		26			19		
ア OP8b	110	84	36			19		
ア OP9	35	32	20			19		
ア OP10	34	20	9			19		
ア OP11	44	32	20			19		
ア OP12	42	30	30	埋設土器		26		
ア OP13	82	66	52			19		
ア OP14	16	34	49			19		4
ア OP21	54	44	21			19		4
ア OP22	42	38	12			19		4
ア 1S1	112	90	29	2基重複?		19		
ア 1S1 南のピット	89	86	11	ア 1S3?				
ア 1S2				遺構図なし			40	
ア 1S3				遺構図なし	ChFl1、HoFl1			
ア 1S4				遺構図なし	剥片石器 1、石皿 3、磨石 4、ChCo7、Ho2、礫 5		40	
ア 1S8	60	72	16					
ア 1S10	34		11				40	
ア 1P1	40		25		ChCo1	20		
ア 1P2	39	37	24			20		
ア 1P3	46	48	19		剥片石器 1、ChCo1	20		
ア 1P4	47	28	20		剥片石器 1、ChCo1	20		5
ア 1P5	44		69		ChCo1	20	40	5
ア 1P6	35	30	29		礫器 1	20	40	5
ア 1P7	38	22	17			20		
ア 1P8	38	41	21			20		
ア 1P9	34	32	17	S9?		20		
ア 1P10	46	38	9			20	40	
ア 1P11	32	28	13			20		
ア 1P12	30	28	13			20		
ア 1P13	40	32	32			20	40	
ア 1P14	32	28	43			20		
ア 2S1	99	76	32		ChFl1	20,29	44	
ア 2S2	88	86	11		磨石 1、ChCo1、ChFl2、HoFl1、礫 5	20,29	44	
ア 2S3							44	
ア 2~ウ 2SD	50~70		29	N-62° -W				
ア 4S1	107	70	14		ChFl1、礫 1	34		
イ OP1	36		74	VI・VII層を 掘り込む		24		4
イ OP2	22	14	10			24		
イ OP3	40	32	19	SX1 下位で 確認		24		
イ OP4	60		41			24		
イ OSX1	395	220				24,25		6
イ OSX1P1	58	54						
イ OSX4	112	92	10			24		
イ OSX4 ピット	50	42	42	4 → 4P1		20		
イ 1SX2	288	203	16			20		
イ 1SX2b	92	68	14			20		
イ 1SX2bP1	56		31			20		
イ 1SX02bP2	46	41	11			20		
イ 2SX07	136	104				20		
イ 3P1	57	50	25		磨石 1、ChCo2、ChFl1、流紋 Ch1	32	57	
イ 3P2	100	78	10		磨石 1、ChCo2	32	57	
イ 3S2				P2 と同じ?	磨石 2、ChFl2			
イ 4S1	96	90	10		磨石 4、礫 2	33		8
イ 5SD1				遺構図なし	石鏃 1、Sc1、ChFl7、Ho1、			
ウ OS5	42	41	20		磨石 5	24,36	30	8
ウ OS1	60	70	34	推定				
ウ OS2	50	47	12		石鏃 1、U.F1、磨石 5、ChFl2、Ho1	24,35	30	
ウ OSD1					剥片石器 1、ChCo4、Fl1、礫 5			6
ウ OSD2	150		45	N-70° -W	砥石 1、ChCo2,Fl1			
ウ OSD3	90~110		30	N-56° -W	石鏃 5、U.F3、石鏃 3、磨石 14、軽石 2、ChCo10、Fl48、白色石英 2、流 1、Ho8、粘 1、礫 11	18	30	4
ウ OSD4	70~90		16	N-54° -W	石鏃 1、U.F4、磨石 5、軽石 1、ChCo2、Fl18、流 1、Ho7、礫 1	18	30	4
ウ OSD4	70~90		16	N-54° -W	石鏃 1、剥片石器 1、砥石 1、石皿類 1、ChFl11、Ho2、礫 2	18	30	4

Ch: チャート、Ob: 黒曜石、Ho: ホルンフェルス、Co: 残核・荒割材、F1: 剥片

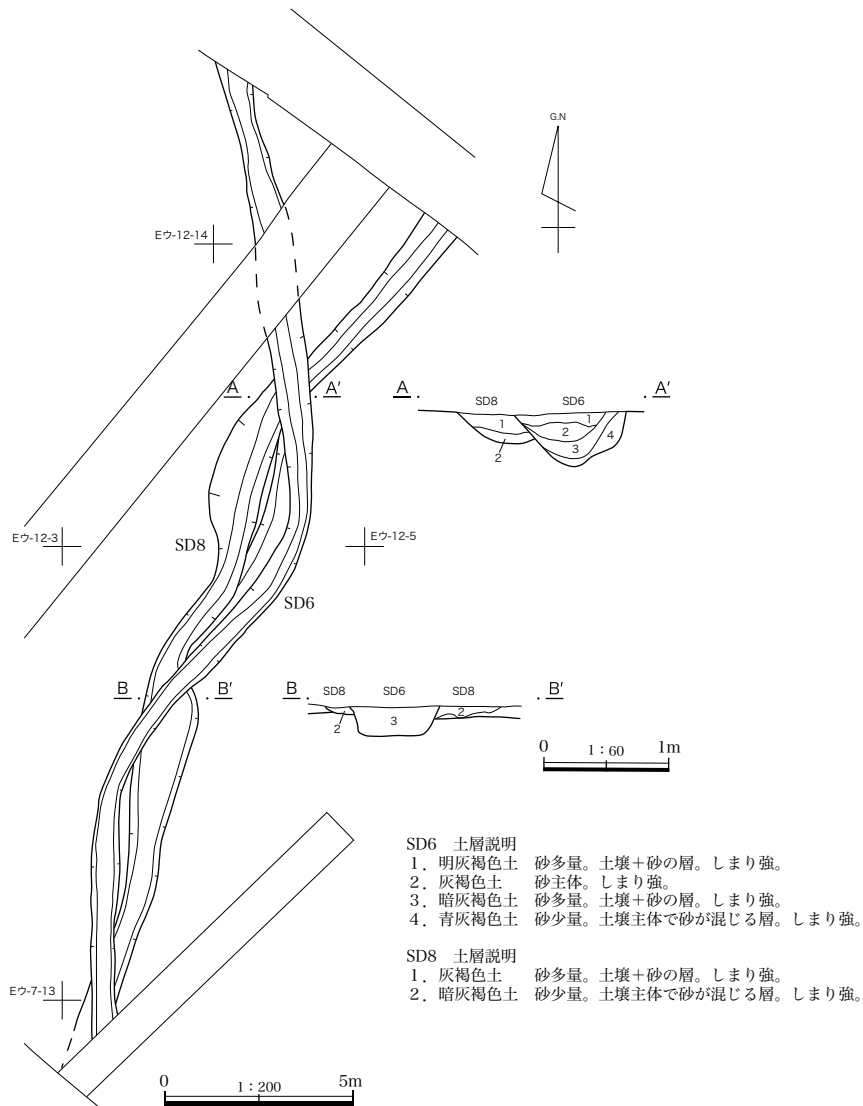
第3章 西地区の遺構と遺物

遺構	長軸	短軸	深さ	特徴・軸	遺物種別数量	遺構図版	遺物図版	写真図版
ウ1S1				遺構図なし	石鏃2、剥片石器1、打斧2、UF1、礫器1、磨石1、砥石1、石皿5、磨石26、ChCo45、Fl19、白色石英4、Ho11、礫31	20,28	30,31,77	8
ウ2SX1	160	118	27	配石遺構	石鏃5、石錐1、礫器1、敲石2、石錘3、石皿類8、磨石31、石剣類2、軽石1、緑泥2、Ob2、ChCo26、F89、流4、白色石英2、Ho13、礫53	20,28,38		7
ウ2SX1 下土坑					岩版1、ChCo4、Fl3、流2、Ho1、礫1	20,28		
ウ2SX1P1	70	66	15		Sc1、UF1、剥片石器2、敲石1、白色石英1、礫1	20,28		
ウ2SX1P2	70	40	18			20,28		
ウ2SK2	216	160	26		UF1、磨石2、ChCo7、Fl13、Ho3、礫2	20,28	72	
ウ2S3	430	230	14		UF2、剥片石器1、打斧2、敲石1、石皿類5、磨石14、ChCo10、Fl8、流4、礫8	20,28	72	
ウ2S3P1	46	40	13		磨石1、Ho3	20,28		
ウ3S1	172	164	60		UF1、砥石3、敲石1、石皿類3、磨石10、軽石2、ChCo8、Fl12、Ho5、流6、白色石英2、礫12	37	72,73	8
ウ3S1 幅部分	150		18					
ワOP5							23	
ワOP6				遺構図なし	ChFl1			
ワOP7				遺構図なし			23	
ワOP8				遺構図なし	砥石1、磨石1		90	
ワOP9				遺構図なし	ChFl3			
ワOP10	34		39			20		
ワOP11	40	28	47		Ho1 (11b : ChFl2)	20	23	
ワOP12	47	40	22		礫器1、石皿1	20		5,6
ワOP13	43	34	30		白色石英1、Ho1	20	23	5
ワOP14	65	28	35	2基?	UF1、磨石1、ChFl2、白色石英1、Ho1、礫1	20	23	5
ワOP15				遺構図なし	ChCo3	20		
ワOP16	41	41	22			20	23	
ワOP17	64	45	39		ChFl4	20	23	6
ワOP18	64	42	37		磨石7、ChCo3、F16、流1、礫5	20	23	6
ワOP19	48	40	36		SC2、UF1、ChCo5、Fl9、礫1	20	23	6
ワOP20	36	22	58		緑泥1、ChCo2、Fl1、流3、白色石英2、礫1	20		
ワOSK3	90	105	22			20	22	
ワOSK4c	116	100			緑泥1、ChCo1、Fl3、Ho1	20	22	
ワOSK4B	186	148	32		石鏃1、Sc1、剥片石器2、石錐2、石皿1、礫器1、磨石9、ChCo14、Fl36、流5、Ho11、礫11	20	22	
ワOSK5	122	108	25			20		
ワOS4				遺構図なし	石鏃2、剥片石器2、UF1、打斧1、礫器1、石錘1、石皿類3、磨石5、白色泥岩1、ChCo14、Fl34、白色石英1、Ho9、礫7	20		6
ワOSD1	85~120		43	N-52° -W		17		
ワOSD2	74~82		36	N-66° -W	石鏃2、ChCo2、Fl8、Ho1、礫2	17		
ワ1P1	64	53	27			20	23	
ワ1P4	44	40	16		ChFl1	20	23	
ワ1P5	47	40	18		UF1、砥石1、ChCo1、Fl2、礫1	20		
ワ1P6	44		14		ChFl1	20		
ワ1P8	40	37	15			20		
ワ1P9	43	38	15		ChFl2	20		
ワ1P10	32	27	13			20		
ワ1P11a	56	54	48			20		
ワ1P11b	56	48	12			20		
ワ1P12	48	42	49		Ho1	20		
ワ1SK2	100	94	9			20		
ワ1S3	35		6	焼土跡	白色石英1	20		
ワ1S2~3				遺構図なし	ChFl1、Ho1	20		
ワ1S7				遺構図なし	軽石1、ChCo1、Fl16	20	23	
ワ2SX1	450	340	10		石鏃1、磨石2、ChFl1、礫3	20	23	6
ワ2SX1P1	36	34	14			20		
ワ2SX1P2	36	22	30			20		
ワ2S2				遺構図なし	Sc1、ChFl3、礫1			
SX1				遺構図なし?	Sc1、ChFl2、Ho2、礫4			
SX2b				遺構図なし?	磨石10、敲石1、ChCo4、ChFl13			
SX3(ウ1S1、ウ2S3)	326		10	遺構図なし?	緑泥片2、ChCo17、Fl20		68	
SX5				遺構図なし?	磨石4、ChCo5、Fl5、Ho2、礫1		68	
SX6(イ2SX6)	350	270	11	遺構図なし?	石鏃1、敲石1、礫器1、石皿類1、ChCo6、Fl12、HoFl1、礫2	29	68	
SX7(イ2SX7)	148	108	7	ア2?遺構図無し?	磨石1、敲石1、ChCo2、ChFl5	29		
A3-SX1				遺構図なし?	UF1、磨石7、ChCo11、Fl24、流1、礫7			
A3-SK3				遺構図なし	石鏃1、石皿1、ChCo2、Fl12、白色石英1			
S2	88	72	34	遺構図なし?	石錐1、打斧2、礫器1、砥石2、石錘1、石皿類3、磨石20、ChCo9、Fl15、白色石英2、Ho7、礫8		66,67	
S2(ア1S2)	340	250	10	遺構図なし?	石鏃1、磨石12、石剣1、ChFl17、ChCo2、礫13			
S3	90	35	11	遺構図なし			67,68	
S8	72	60	36	遺構図なし				
S9	38	37	18	遺構図なし				
S10	38		11	遺構図なし				

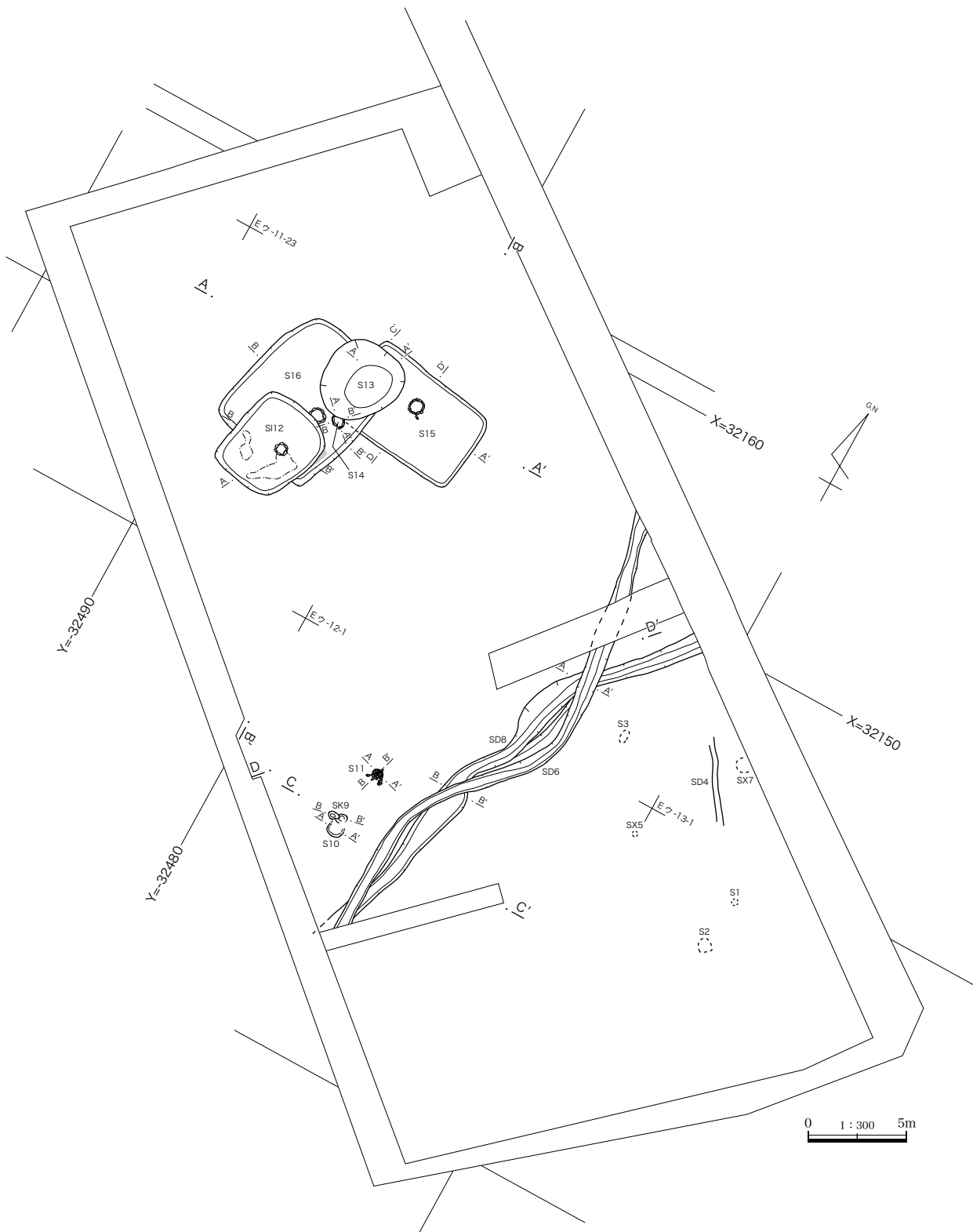
第3節 B区の遺構と遺物

B区の調査

B区は平成29年9月より掘り下げでの調査を開始し、平成30年3月までの調査期間を費やした。検出した遺構数は住居跡・竪穴状遺構5軒、土坑・ピット2基、配石遺構1基、溝3条と少ないが、包含層中の遺物量はC区よりも多い。当初V層上面での遺構確認及びV層包含層調査を行ったが、A区やB区と比べてV層中の遺物量は少なく、早い段階でVI層以下の調査となった。他の調査区と比べこのVI層以下の遺物量が多い点が特徴で、最終的に調査時における最も下層のX層まで掘り下げた唯一の調査区となった。但しB区内でもすべてを均等に同一精度で調査し得ず、VI層中位または下位までの掘り下げとなった部分も東半16グリッド分(約256㎡)、西半377グリッド分(約592㎡)ある。むしろVII層～Xb層まで掘り下げた部分は東半8グリッド分(約128㎡)、西半32グリッド分(512㎡、X層上面まで)に留まっている。Xc層は無遺物層となり、この調査については一部のグリッド調査(東半約10㎡)に留めている。B区西半の住居跡S15,16の遺構底面はXc層であり、ここでもこれより下位の遺物出土は認められなかった。これら掘り下げ

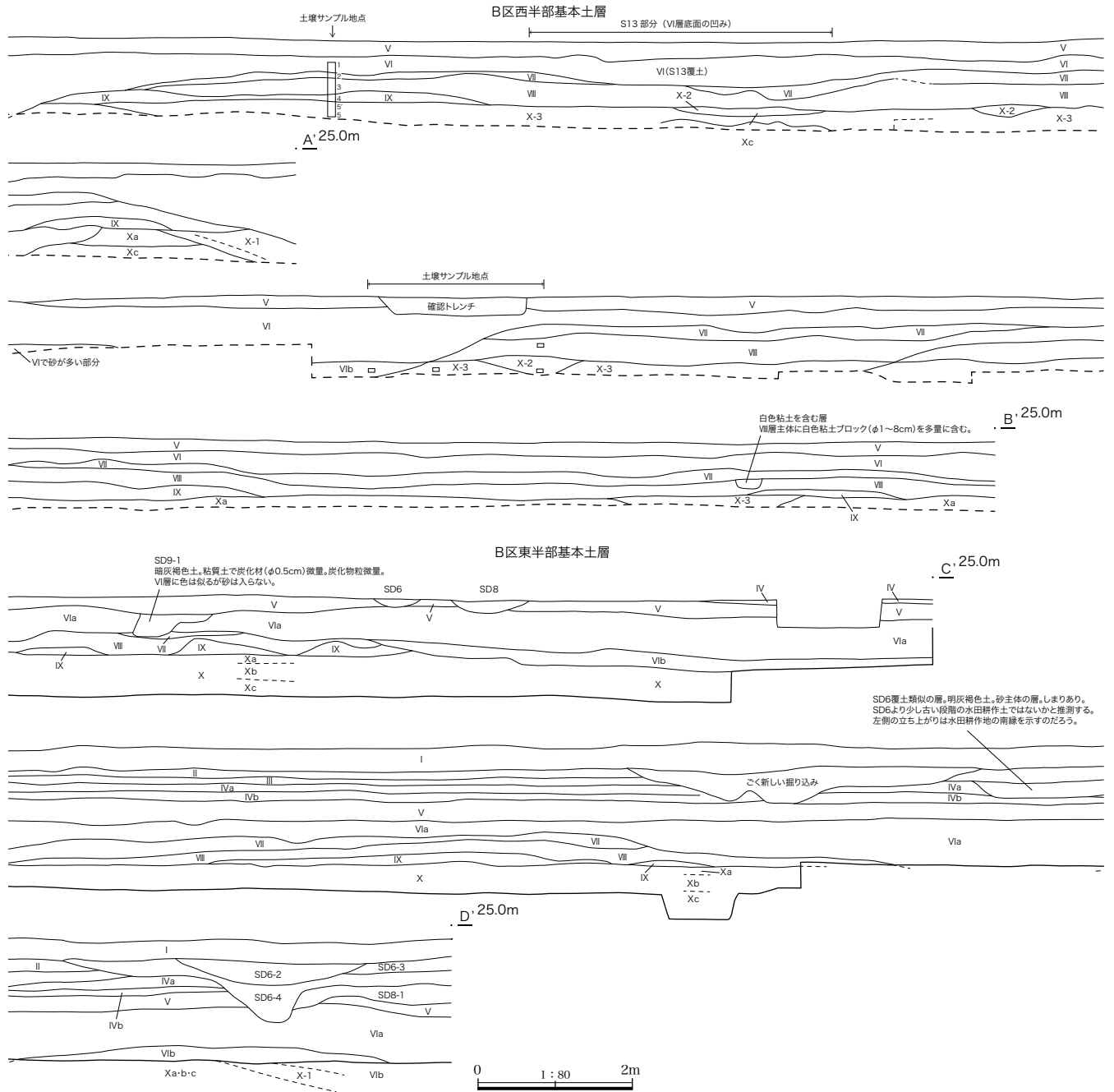


第109図 B区SD6・8平面図・断面図



第110図 B区全体図

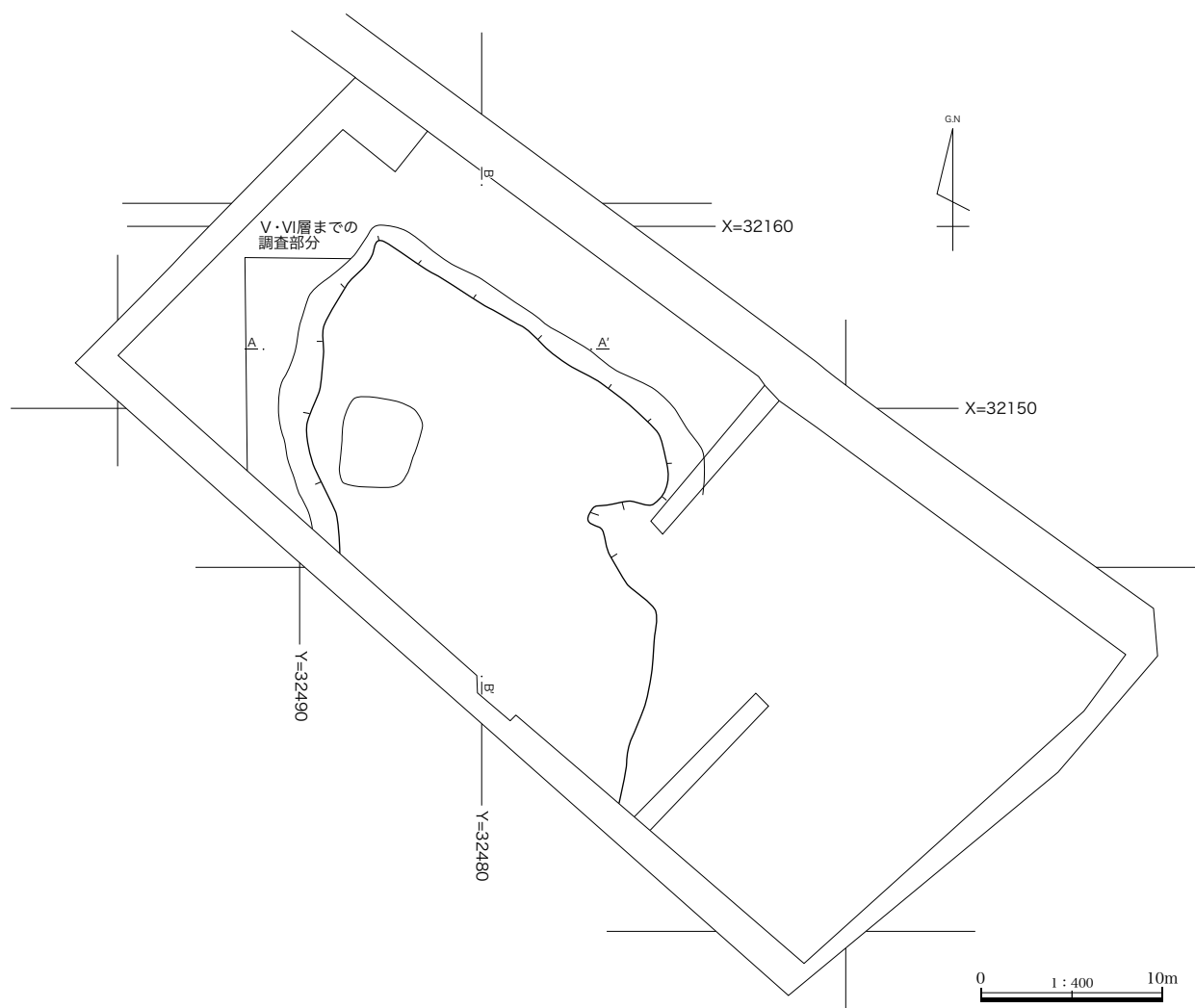
第3節 B区の遺構と遺物



C区基本土層 土層説明

- Xa, X層でもやや茶色っぽい。IX層からの漸移層的な層。遺物あり。層厚 0~10cm
- Xb, X層の中でも黒っぽく炭・骨が集中。遺物集中。層厚 20~30cm
- Xc, X層の中で最も青っぽい。炭はなし。きれいな青灰色の層。遺物なし。層厚 40cm+α
- X-1, X層のうち最上層に相当。黒っぽく、遺物・炭・骨なし。水平ではなく、斜めに堆積する。VII・VIII・IX層がグライ化した層とも考えられ、各層からスムーズに連続しているように見える。
- X-2, 暗黒褐色土 堆積土中、最も黒い。炭化物が多い砂か。遺物・炭・骨とも極めて多い。漆黒色。X層の上面付近に部分的に存在する。西半北部に多い。
- X-3, 黒褐色土 遺物・炭・骨多い。色的にはX-1に近いが自然堆積っぽいX-1に比べ、X-3は暗褐色、黒褐色、青灰褐色(Xc層だろう)のブロックが目立つ。人為的にかきまわされた、あるいは埋め戻されたような印象を受ける。
- X-4, 暗黒褐色土 X-2と同じ漆黒色の土。X-3層下に部分的にある。Eウ-11・14・15付近に顕著。炉と関連する土層か？
- I, 暗褐色土 表土
- II, 明黒褐色土 土壌。白色土粒(Hr-FA及びAs-B相当)を多量に含む。地点により、砂を多く含む。As-Bより上位、近世以降だろう。
- III, 暗灰褐色土 砂主体で土壌も含む。白色土粒(Hr-FA及びAs-B相当)を少量含む。鉄分酸化による赤褐色土多量に含む。
- IVa, 暗褐色土 土壌。白色土粒(Hr-FA主体だろう)を少量含む。古墳中期以降の包含層。鉄分酸化による赤褐色土少量含む。古墳中期以降の遺構はこの上面から掘り込む。
- V, 黒褐色土 土壌。縄文遺物包含層。鉄分酸化による赤褐色土微量含む。
- VI, 明褐色土 粘土及び土壌。縄文遺物包含層。砂少量含む。(VI層はVIaとVIbに分けられる。VIaは明褐色土でVIbは青灰褐色土。VIbは遺物わずかでグライ化した砂層であり、鉄分酸化による赤褐色土を微量含む。)鉄分酸化による赤褐色土少量含む。
- VII, 灰褐色土 粘土及び土壌。縄文遺物包含層。砂少量含む。鉄分酸化による赤褐色土少量含む。炭化材(φ0.5cmくらい)微量。骨微量。
- VIII, 暗灰褐色土 粘土及び土壌。縄文遺物包含層。砂少量含む。鉄分酸化による赤褐色土少量含む。炭化材(φ0.5~2cm)少量。骨微量。
- IX, 灰褐色土 粘土及び土壌。縄文遺物包含層。砂少量含む。鉄分酸化による赤褐色土微量含む。炭化材(φ0.5cmくらい)微量。骨微量。
- X, 暗青灰褐色土 粘土及び砂。縄文遺物包含層。グライ化した粘土と土壌の層で、砂少量含む。鉄分酸化による赤褐色土微量含む。炭化材(φ0.5cmくらい)微量。骨微量。

第111図 B区土層断面図



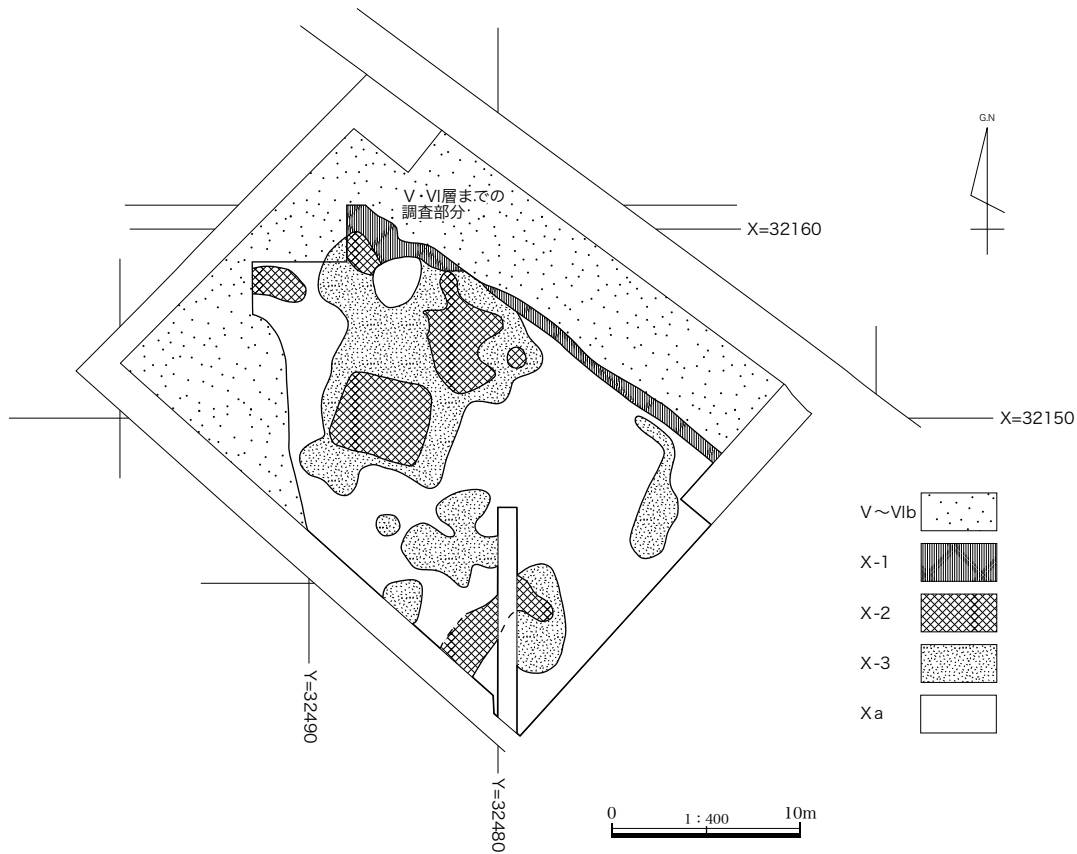
第112図 B区 VII層分布図

調査グリッドの選定にあたっては、層の安定性や遺物の出土状況などからその都度判断しており、遺物量の多いグリッド・層掘り下げを優先せざるを得なかった。その意味では別に示すグリッド別の土器出土量なども、同一基準ではなく、どの程度有意義かも問題は残るが、調査時所見も含め、出土遺物量の分布も一定の意味は見出せると考えている。

各層の堆積状況層厚は基本土層断面図等を参照されたいが、大きくはV層(25 cm)、VI層明褐色土(25 cm)、VII・VIII層灰褐色土(30～40 cm)、IX層(10 cm)、X a・X b層青灰色グライ土壌(40 cm)、X c層青灰色グライ土壌(30 cm以上)、との所見が残されている。VII層やX層については、平面的な分布の記録もとられており、第112,113図に示しておく。X層の各細分層は比較的複雑な堆積分布を示している。

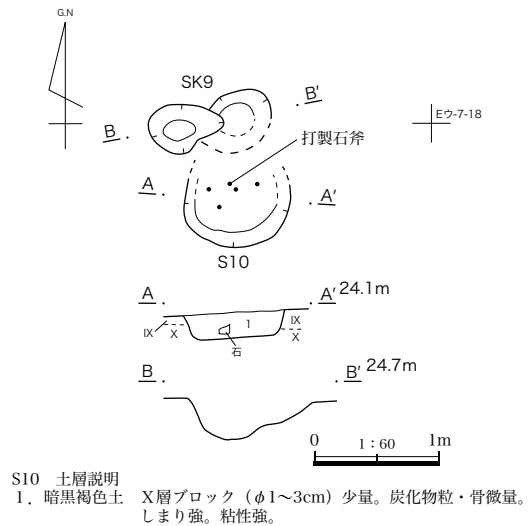
SD6・8 (第109図、写真図版一〇)

2条の蛇行する溝が3箇所重複している。SD08の方向は蛇行しており、最も西に振れる部分でN-10°-E、北端でN-38°-Eとなる。SD06も同様で、N-0°のところもあるが、北端では西方向N-5°-Wとなる。



第 113 図 B区 X層分布図

S D 06 の深さは 20 ～ 29 cm、S D 08 の深さは 15 ～ 24 cm といずれも浅い。SD08 の幅は 74 ～ 142 cm と場所により異なる。SD06 東側は一応立ち上がるようだが、上位で浅い掘り込みが比較的広く続いているようであり、より上位での確認・調査を行えば、調査・記録も異なっていた可能性がある。SD06 は表土近くからの掘り込みが確認されており、近現代の可能性が高い。S D 08 については、IV層?の下で確認されており、古墳時代 (F A 以前) との所見がある。断面皿状で底面の凹凸目立つ。南北方向に蛇行しながら続く。

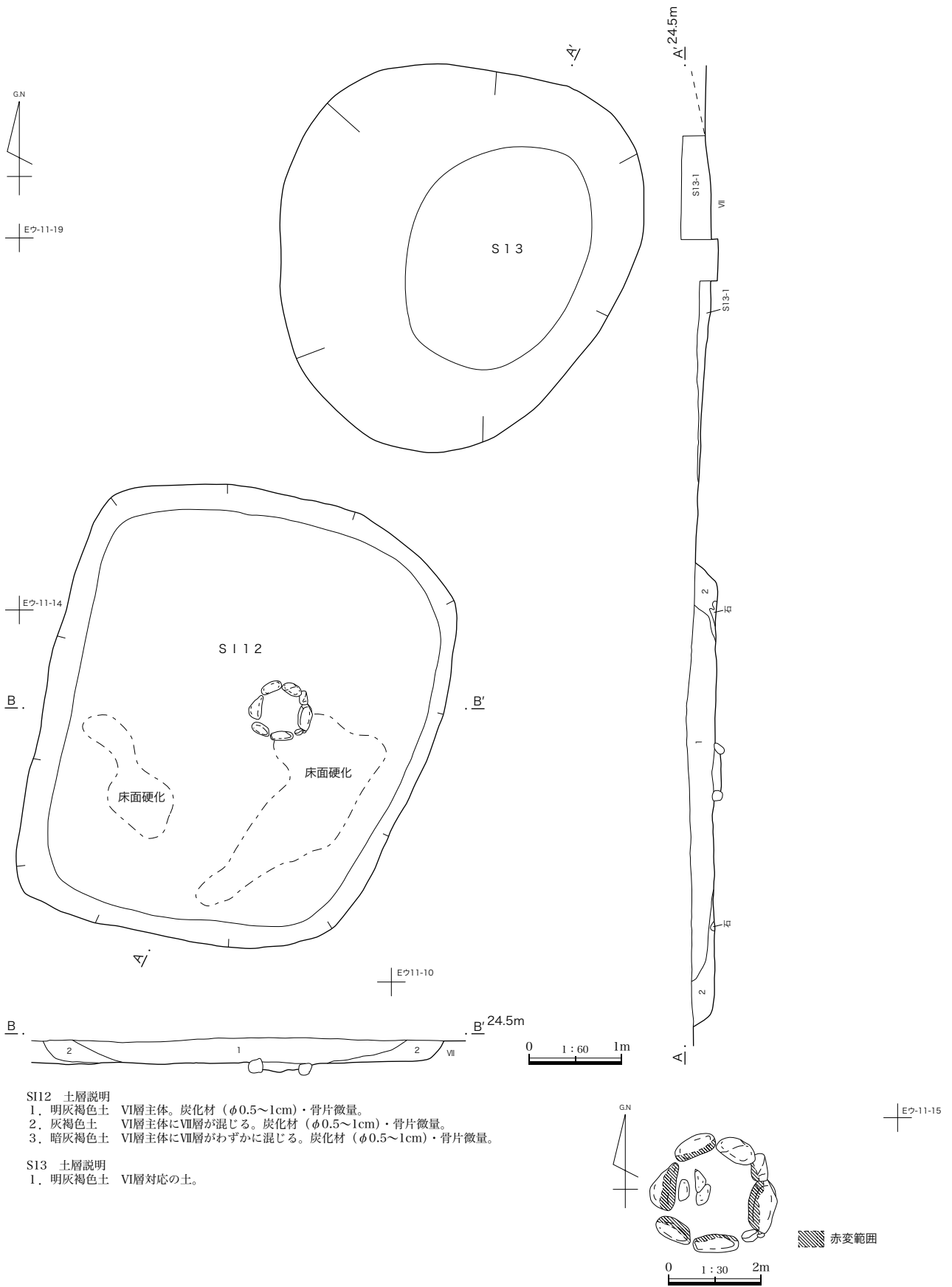


S10 土層説明
1. 暗黒褐色土 X層ブロック (φ1~3cm) 少量。炭化物粒・骨微量。しまり強。粘性強。

第 114 図 B区 SK9・S10
平面図・断面図・遺物出土図

S D 04・SX07・S01・05 (第 110 図)

B区北東で確認されたが、詳細に記録し得なかったこともあり、全体図にのみ示す。S D 04 は浅い溝、S X07 は遺物集中である。S 1 は浅い小ピット、S 2, S 3 は浅い土坑である。いずれもVI層を掘り込んでおり、縄紋時代遺構と捉えておくと、覆土中に白色粒少量との記録もあり、古墳時代以降の可能性も残る。S 5 は大きめの土器個体及び周辺に対して遺構名を付している。土器埋設の掘り込みも確認されなかったことから、



SI12 土層説明
 1. 明灰褐色土 VI層主体。炭化材 (φ0.5~1cm)・骨片微量。
 2. 灰褐色土 VI層主体にVII層が混じる。炭化材 (φ0.5~1cm)・骨片微量。
 3. 暗灰褐色土 VI層主体にVII層がわずかに混じる。炭化材 (φ0.5~1cm)・骨片微量。

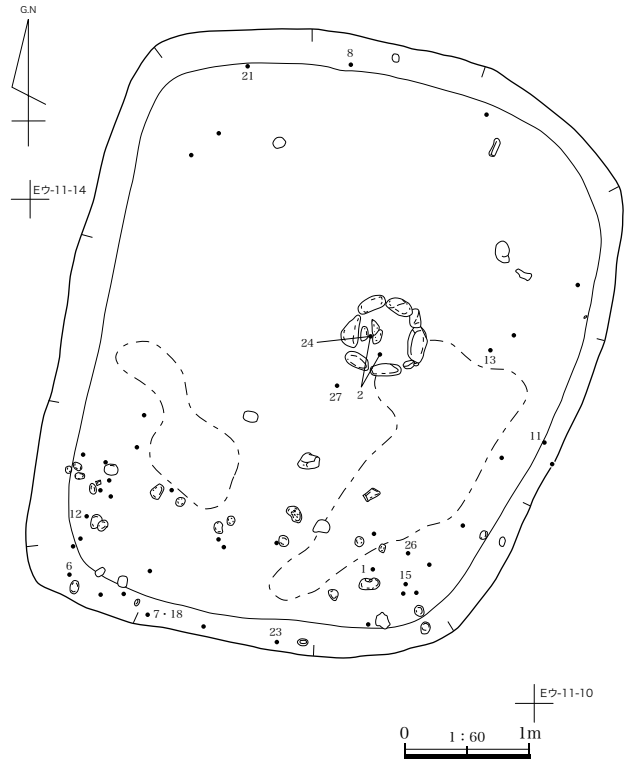
SI13 土層説明
 1. 明灰褐色土 VI層対応の土。

第115図 B区 SI12・SI13平面図・断面図

これについても全体図のみ位置を示す。整理時においても遺物は確認されていない。

S K9, S 10 (第114図、写真図版一一)

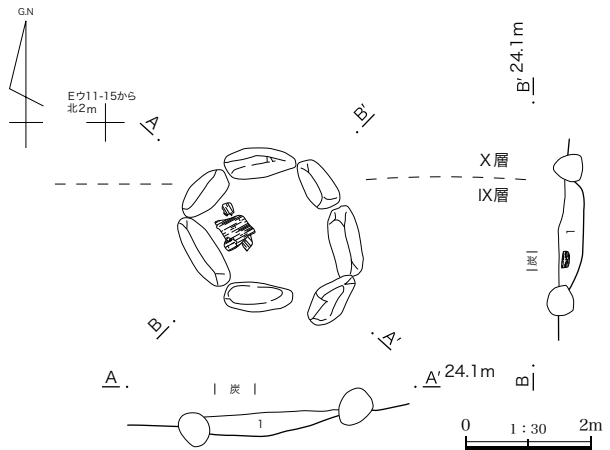
Eウ7-12,17グリッドに位置する。S K9は2基のピットで仮に西側を09a、東側を09bとする。VI層の上位～中位で確認された。S K10は円形土坑で底面は平坦、壁は急角度で立ち上がる。VIII層下面IX層上面で確認された遺構で、S K9とは確認面が異なる。底面はX層中である。掘り込みは比較的明瞭。覆土中から大きめの礫がややまとまって出土している。S 10出土遺物は土器小片(第118図2)、打製石斧1点(第161図1)を示した。第118図2は安行1式あたりの体部破片であろう。



第116図 B区 S112 遺物出土図

S 11 (第119図、写真図版一一)

B区南側、Eウ7-17グリッドに位置する。X層上面に作られた石囲炉である。径70cm程度の範囲内に石を廻らしている。石は10cm程度の河原石。火床のような硬化焼土面は無く、覆土中の焼土も殆ど無いが、灰は確認されている。南東側など若干周囲にも礫は散っているが、主な石は概ね原位置を保っていると推定する。南側の礫1点は斜位～立石状である。掘り方も不明瞭で、若干の浅い窪みとした部分に石を設置している。周囲に硬化面や伴うピット等見られないが、形状としては石囲炉として問題無く、住居跡の炉と判断しておく。出土土器として、第118図8～11の4点を示す。小片で時期幅もあり、遺構の時期判断も難しいが、後期末となるうか。



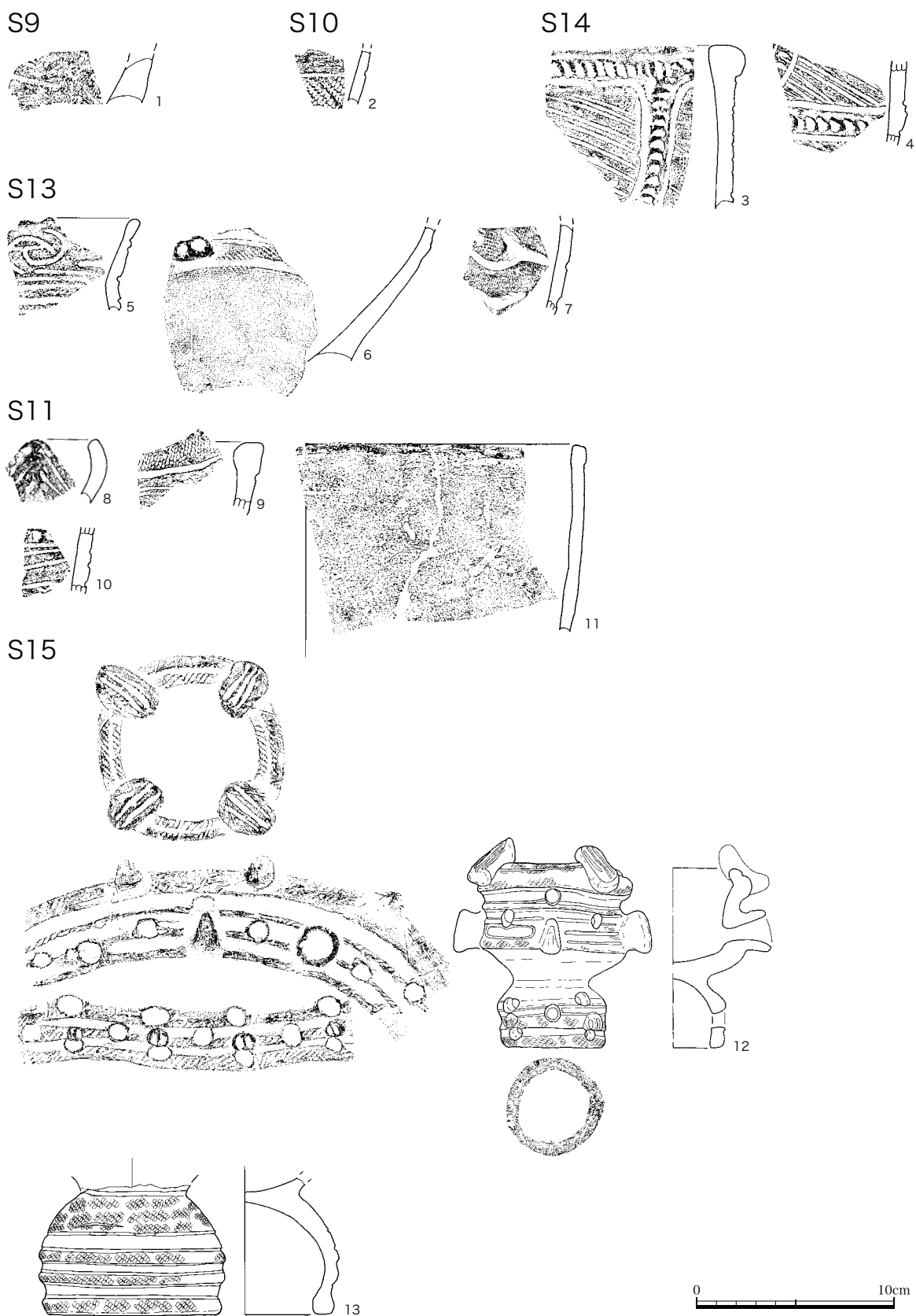
S14 土層説明
1. 黒褐色土 VIII層対応。炭化材(φ1~5cm)含む。

第117図 B区 S14 平面図・断面図

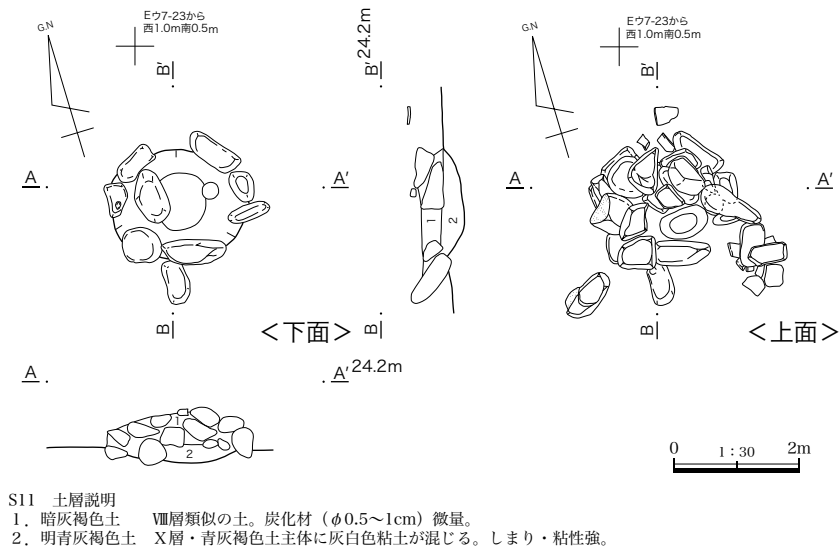
S 12・13 (第115,116図、写真図版一二)

B区西側およそ中央で遺構の集中する部分があり、その中でもやや上位で確認された。相互に別の遺構であるが、近い位置にあり併せての記述とする。S 14～16は平面的には重なるが、やや下位で確認されたものであり、これらより新しい可能性が高い。

いずれもVII層を掘り込む遺構で、このVII層上面での確認である。VII層の分布を確認する精査時点で方形プランが確認され、その後この部分を掘り下げて遺構と



第118図 B区出土土器(1)



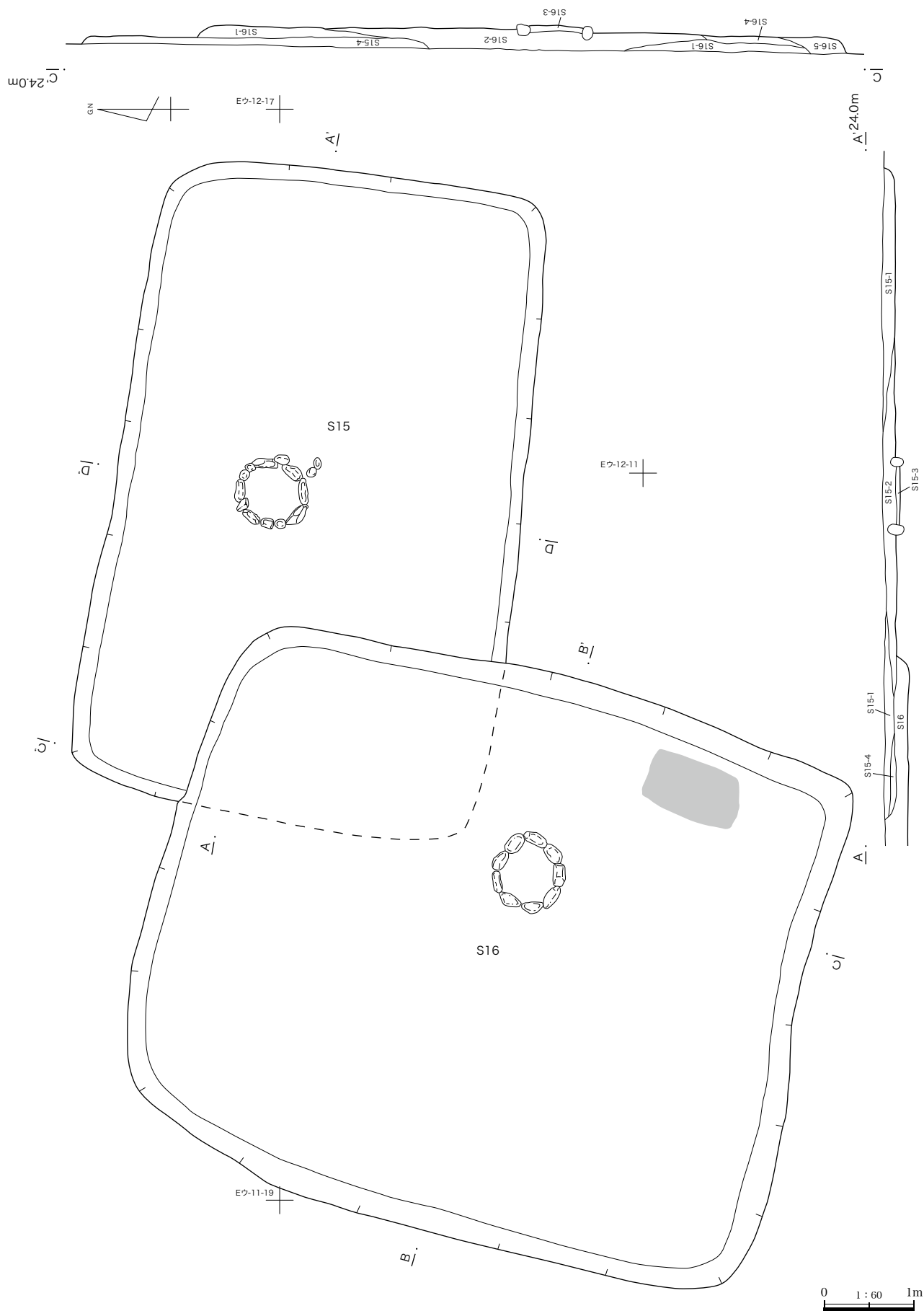
第119図 B区S11平面図・断面図

判断した。同様にS12ほど明確ではなかったが、やや広い楕円状部分のプランがあり、こちらをS13としている。いずれも底面はVII層～一部VIII層に及ぶ。覆土はVI層対応の土と捉えられ、壁際ではVI層及びVII層が混じったような特徴が見られた。基本土層との違いも不明瞭な部分があるものの、炭化物や骨片の含有が多いという特徴があり、特にS12では明瞭に区別された。

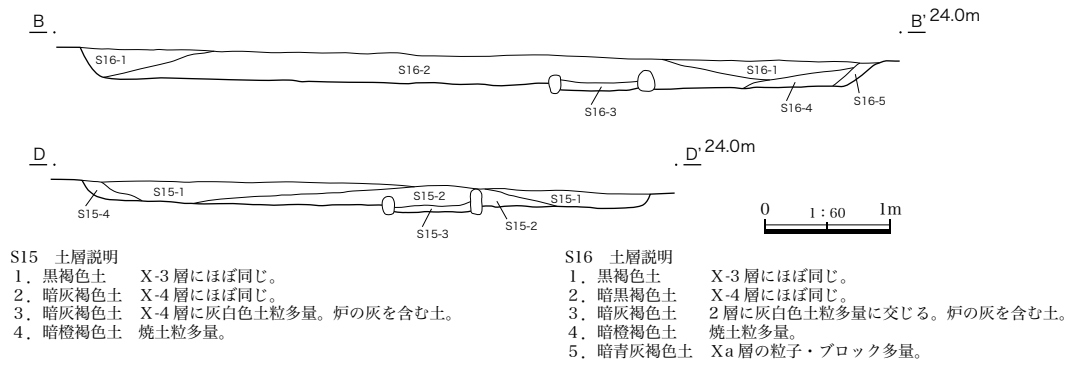
S13は恐らく確認の面より上位より掘り込まれていると思われ、確認された壁は下側の一部のみとなろう。プランもやや不明瞭な部分があり、本来の竪穴遺構の形状をどの程度捉えられたか問題も残るが、一応竪穴の掘り込みがある住居跡と捉えておく。底面皿状に中央が低くなり、外側に向かって緩やかに立ち上がるような形状である。硬化床面や柱穴・炉跡は確認されていない。遺物も少なく晩期初頭の土器3点の図示に留まる。確定的な判断はしにくいだが、この時期の遺構と捉えておく。

S12は隅丸方形プランで壁はやや緩やかに立ち上がる。壁が分かりづらい部分については、断割って確認している。本遺跡のような条件下における縄紋後晩期の住居跡としては比較的深い掘り込みとも言えよう。床面は図示のような硬化範囲が認められた。柱穴は確認されていない。中央やや北東よりに石囲炉がある。炉の石は10～30cmの河原石を用い、円～方形に近く廻らしている。内側が強く被熱しているものが多い。囲いの内側北西で小礫が数点あり、囲い部分に充積的に配されていたものが移動したものか、或いは周囲のものが入り込んだものかの判断はできない。石囲内に火床のような顕著な焼土部分や灰・炭化物などの痕跡は殆ど見られなかった。ローム層と異なり、焼土が形成されにくい土層であることも関係していよう。

S12の出土遺物は第122図に示す。遺物は住居跡の南側で多い(第116図)。大形破片～復原個体は少なく多くが小片である。安行1式から認められるが、安行2式～同3a式がやや多く、遺構の時期もこれに相当させることができよう。礫・石器も多く、石鏃3点、打製石斧2点、磨石59点、石皿類4点等がある。S13については第118図5～7の3点を示す。こちらも小片だが晩期初頭が目立つ。第122図1は屈曲下位が膨らむ器形で、入組三叉文が円形浮文・瘤と連関しつつ配されている。3は堀之内式であろうか。4,7等は瘤付系の口縁部、18以下が紐線文系の資料で附点系、添付紐線文系いずれも認められる。



第120図 B区 S15・16平面図・断面図



第121図 B区 S15・16断面図

S 14 (第117図、写真図版一一)

Ⅷ層下位～Ⅸ・Ⅹ層上面で確認された。S 15・S 16と平面的に重なる位置関係にあるが、それらより高い面で確認されている。またS 12、S 13とも重なる位置関係だが、それらよりは30cmほど下位の面である。つまりS 15,16→S 14→S 12,13ということになる。

単独確認の石囲炉で、80×70cmとやや縦長の範囲内に石が廻らされている。南側で若干空いている部分があり、構築・機能時の位置を留めているのかも良く分からない。すべての石が被熱しており、赤変、クラック、表面の剥落が顕著なものも多い。覆土はⅧ層対応とされる。図でも示したように、炉の北側の面はⅩ層、南側がⅨ層対応層である。「Ⅸ層が南に向かって厚くなっているため、S 14は南東が高く、北西に向かって低くなっている。」との所見がある。周囲に硬化面、掘り込み、柱穴など見られなかったが、住居跡の炉と判断する。炭化物・炭化材は比較的良く残り、一部はその位置の記録もとり得た。遺物は紐線文系の粗製土器(第118図3,4)が覆土上位から出土しており(写真図版一一-4)、後期末から晩期初頭の範囲内となろう。

S 15,16 (第120,121図、写真図版一三)

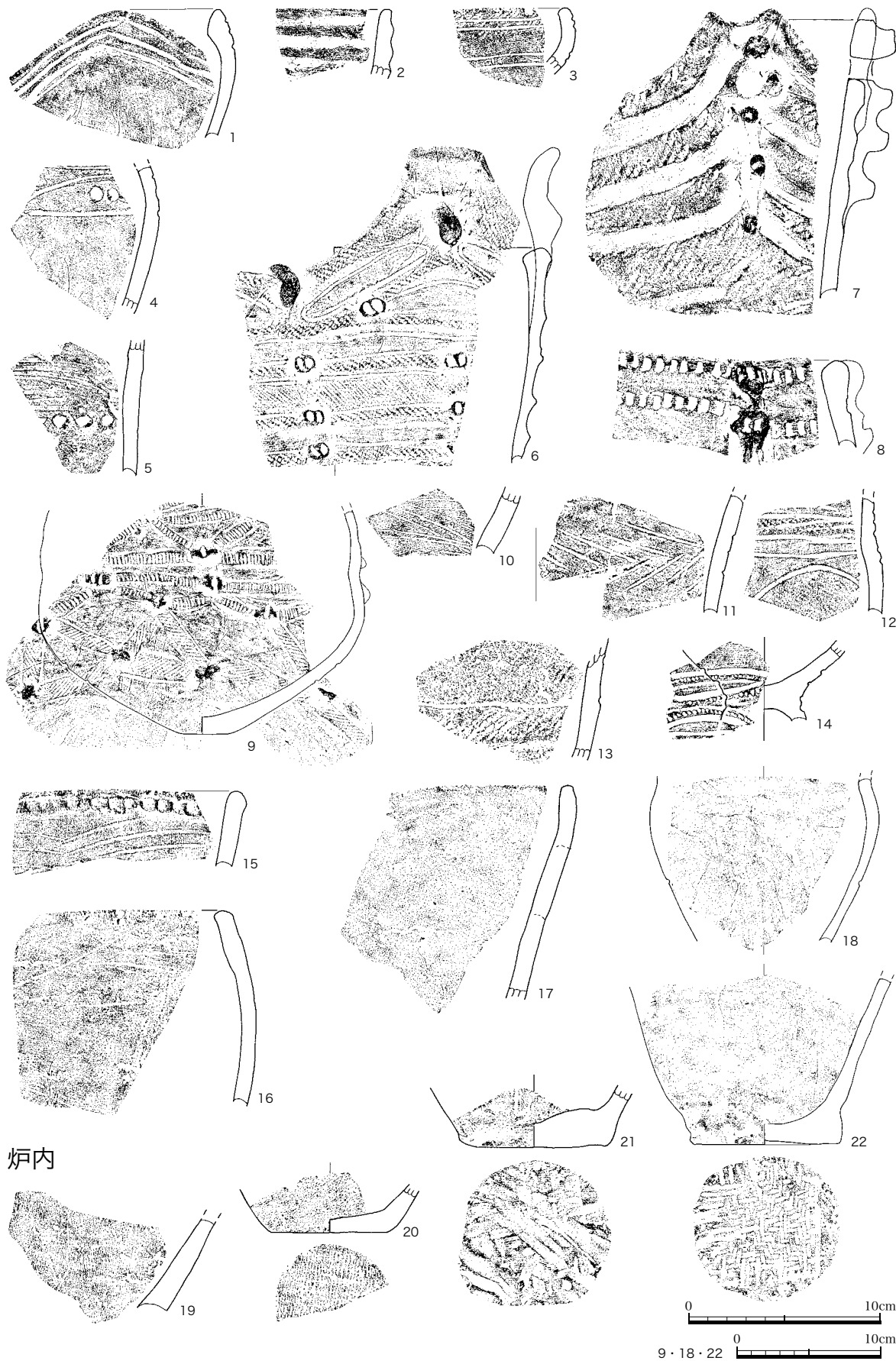
この2軒についてまとめて記述する。いずれもⅩ層上面で確認された。確認時のプランはやや不明瞭であったが、掘り下げたの床面・壁は比較的明瞭である。S 15は東西に長い長方形、S 16はやや南北に長い長方形を呈している。いずれも石囲炉を擁し、長方形の一辺にやや寄った位置にある。床面は概ね平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。S 15の方が一部やや急角度で立ち上がる。床面の硬化面や柱穴は確認されていない。Ⅹ層はⅩ-1,2,3層に細別されているが、Ⅹ-3,4層としていた部分の一部がS 15,16覆土に相当する。

床面レベルはS 15の方が若干上位にあるが、S 16→S 15であることが覆土観察から明らかになっている。覆土自体は両者類似している。S 16北南東コーナー近くで焼土のブロックが床面に広がっている。炉のアップ図は示していないが、いずれも80cm程度の円形範囲内円周上に長さ10～30cmの河原石を廻らせている。石の被熱は認められ、囲いの内部の覆土では焼土や灰を含むが、火床硬化面は形成されていない。S 15では若干外側にも礫が散っているが、原位置を留めているのか、或いは機能停止後に移動したものかの判断はし得ない。S 15・16の石を廻らす配置法・形状がS 12等も含め良く似ている点は注目される。

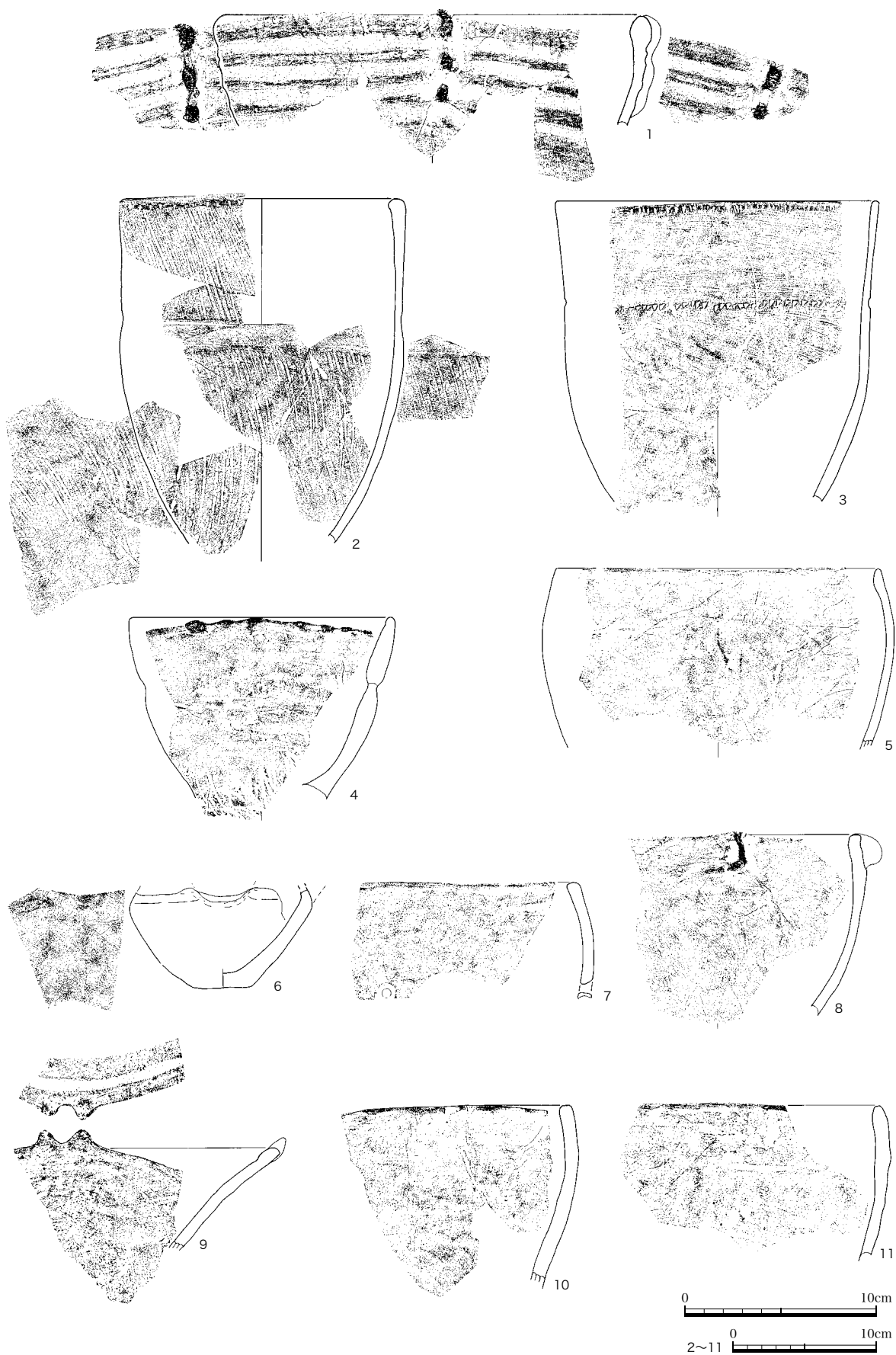
出土遺物はやや少ない。S 15出土土器(第118,123図)では曾谷式の時期から安行2式まで認められる。炉内出土土器は無文小片。全体の比率的には曾谷式～安行1式辺りが多いようにも見受けられるが、時期幅の中で新しい時期という点を考えれば安行2式がこの遺構の時期に推定できる。S 16(第124～126図)



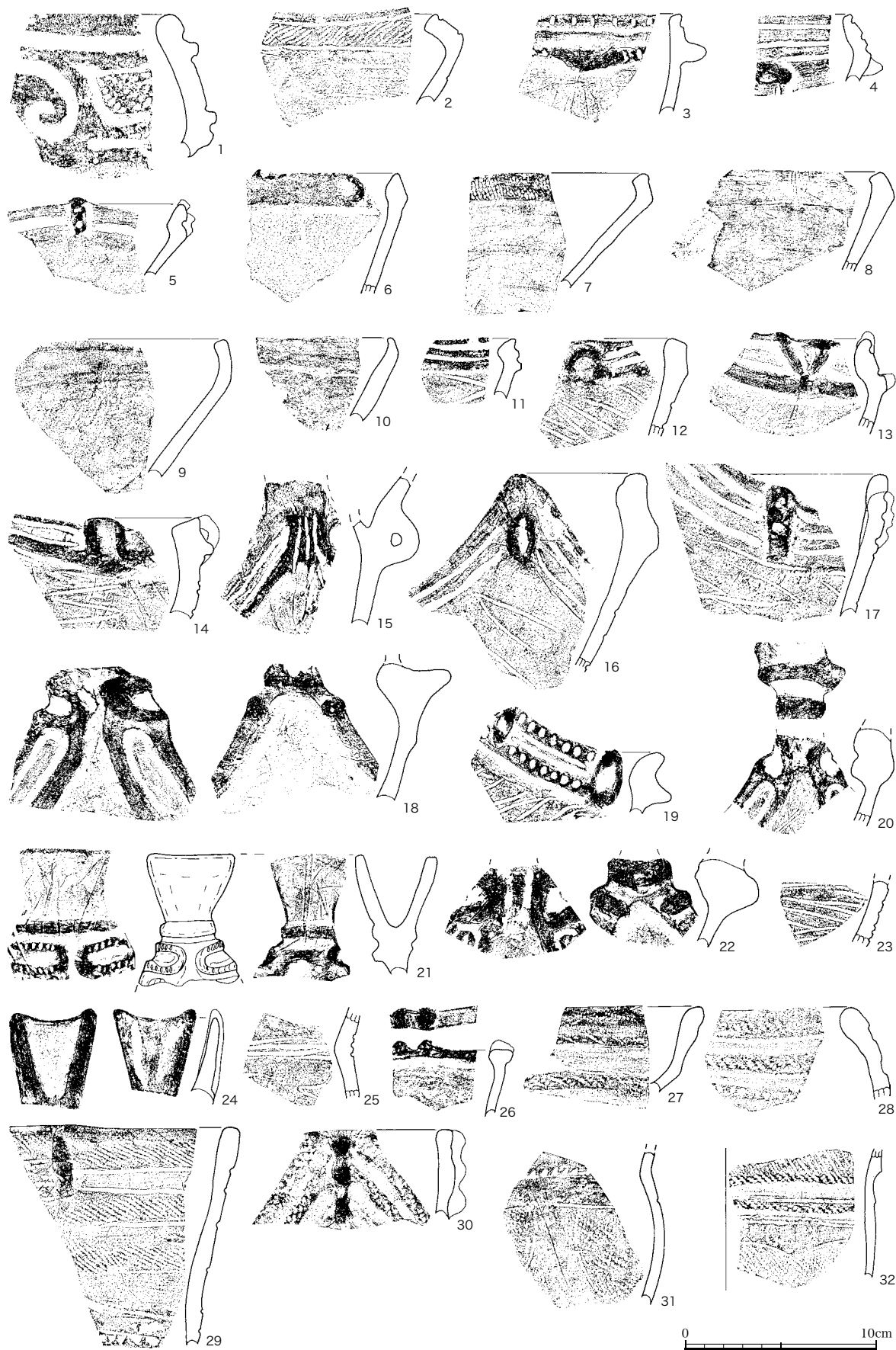
第122図 B区 出土土器(2) S12



第123図 B区出土土器(3) S15



第124図 B区出土土器(4) S16



第125図 B区出土土器(5) S16



第126図 B区出土土器(6) S16

は比較的図示資料が多い。加曾利E式から晩期初頭まで認められるが、安行1式・高井東式が比率的に多く目立っており、住居跡の時期もこの時期を推定できる。調査時に捉えた新旧関係S 16〈安行1式〉→S 15〈安行2式〉と整合的に捉えることができよう。

第118図12の異形台付土器は一部の突起部を除き完存である。突起4単位が口縁上端に付され、その中間位置に対応するように双口注口状突起部と三角形舌状突起部が配される。円形透孔が密に配されている点も特徴である。全体にやや粗い調整・施文である。13は台付土器の脚部である。第123図のS 15出土資料でも一定の時期幅が認められる。9は注口部が無いものの、安行系瓠形注口土器の下半資料である。

第124～126図にS 16出土の土器を示す。高井東系・安行式波状縁深鉢では瓶口状の突起第125図21や魚尾状の同図24が特徴的である。第124図の2以下に示した粗製土器も多くはこれに相当または近い時

期となろう。瘤付系の注口土器として小形の第126図13があり、注口部や上位を欠損しているが瘤付第2段階相当と考えられる。第125図1は加曾利E式で全体に摩滅が著しい。くの字状に屈曲する口縁部に縄紋などを施す第125図2,5～8は曾谷式平行となろうか。第126図5は晩期初頭となろう。

B区出土土器（第127～160図）

B区出土土器は59,953点に及ぶ多量の出土であるが、整理時後半から接合・実測を始めたこともあり、一定数図化を行ったものの、その後の整理資料から除外したのもも多く十分な提示を行い得ない。遺構出土例及び一部のグリッドについては破片資料も示し、グリッド出土資料の様相（系統や時期・器種に注意した分類毎の比率等）についても把握できるよう努めたが、殆どのグリッド出土土器は、土器論上注目される資料を選択して製図したため、限定的恣意的な資料の提示となった。この選択にあたっては、遺存率と共に、一般的・普遍的でこれまでに多く見られる資料が除外される傾向にあり、異質なものの、注目されるものを優先的に選んでいる傾向にある点、注意が必要である。従って無文土器、粗製土器についてはかなり良好な遺存例以外殆ど提示していないことから、「組成」を検討することができない状況となっている。

調査時よりの所見であるが、B区のVI層以下では後期後半の資料が多く出土していることが明らかで、この点A区やC区とは様相が異なっている。具体的には安行1式、同2式、高井東式、瘤付系土器群などがB区ではまとまっており、当地域の後期後半を考える上で良好な資料となろう。また、グリッドによっては晩期前半の資料も良好なものがあり、一部晩期中葉の例もある。とはいえ、数量的なチェックでも、大洞系の資料がA区やC区と対比して著しく少ない点は明らかで（第57表）、時期による地点差＝活動痕跡の違いは確認すべき重要な成果と言えよう。以下羅列的に土器の概要、観察所見を図版順に示してゆく。

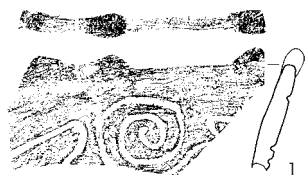
第127図以下はB区グリッド出土土器である。

第127図7～第128図はEウ6-25グリッド出土土器で、安行1式～同3a式を主に示す。8は安行系瓢形の土器、9も瓢形のようなが、隆起帯縄紋間の帯状部に楕円～三角形の刺突列が廻り、突起形状も含め瘤付系との関わりを想起させる。11はあまり例を見ないもので、破片左上に貫通孔がある。注口土器の可能性もあろうか。12の底部は数単位の突出部を有するもので、これによりやや角張った多角形状となっている。楕円状曲線文が描かれる第128図13,14など興味深い資料も見られる。第128図22は眼鏡状隆帯を屈曲部に廻らす鉢だが、入組三叉文が縦位隆帯を挟んで描かれており注目される。第129図6も同種の鉢だが、頸部に楕円状隆帯があり、その上位が突起状になるなどの変化形態が見られる。第129図4は大洞系の注口土器（または壺）だが、やや雑な施文と調整であり搬入的な感は受けない。

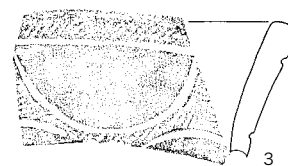
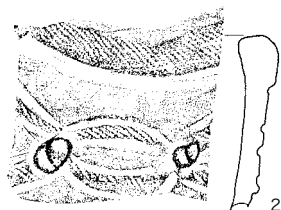
第130図のEウ7-12グリッド資料では大波状となる高井東系の突起が目立つ。頂部が三角形～靴篋状となる4,6と共に加曾利B3式で一般的な上面観円形の形態例（5）も見られる。10以下は晩期で、10は体部が膨らむ注口土器となろう。12の大洞B C式小形深鉢は比較的丁寧な作りと施文であり、搬入の様相を示す。

第131図～第132図1～4はEウ7-13グリッド出土土器で、安行1式～晩期安行3b式の資料を抽出し示す。第131図1は小さい脚部が付されることが推測される鉢で口縁部に凹線が描かれ屈曲部に突起の単位がある。比較的良く磨かれているが、厚手でさほど丁寧な感はない。第131図8の台付鉢は体部に入組三叉文が配されるものだが、渦巻状となる単位が大きめで不揃いな感がある。第132図1は姥山系の深鉢で破片数は多いものの、あまり接合は思わしくない。文様構成は典型例に近いが、施文はやや雑である。器面荒れているがミガキは比較的丁寧である。2はステッキ文及び入組文が描かれる土器だが厚手で胎土中の鉱物も多い。Eウ6-20グリッド出土の第132図5は南関東でも屢々みられる口頸部に対向弧線やレンズ状弧線文が

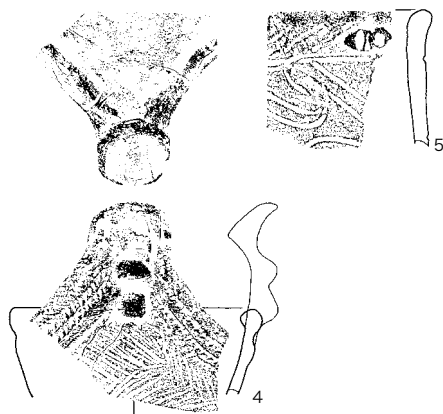
Eウ 2-11



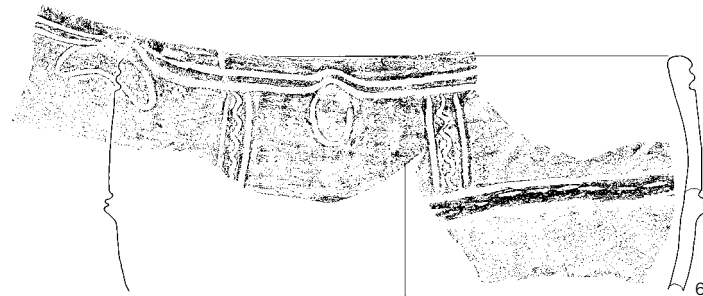
Eウ 2-16



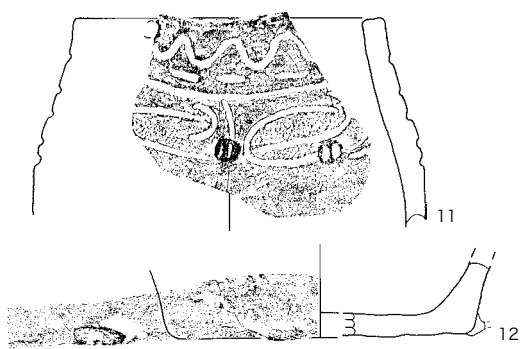
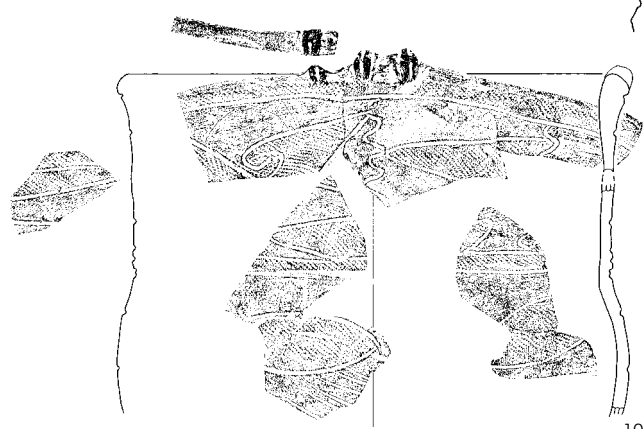
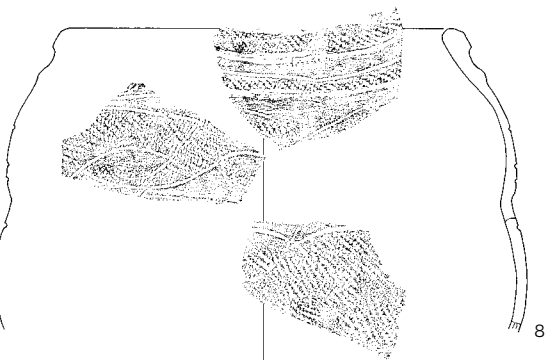
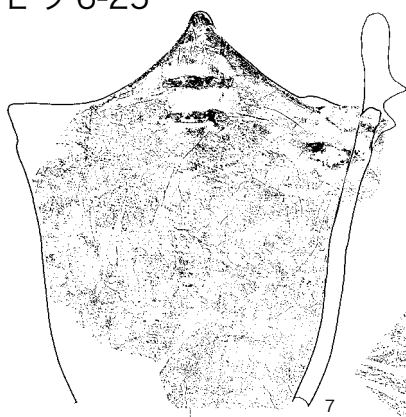
Eウ 6-20



Eウ 6-24



Eウ 6-25



第127図 B区 出土土器 (7)



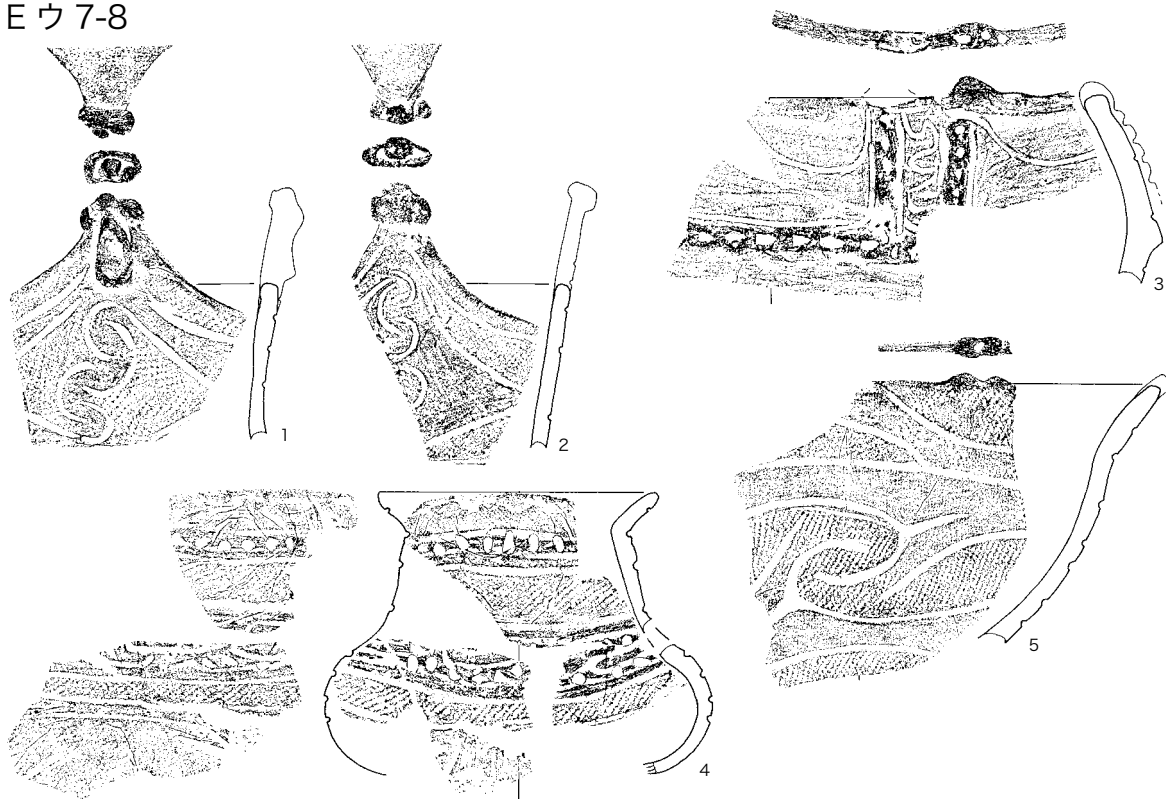
第128図 B区出土土器 (8) Eウ6-25

描かれる系統の土器で、下位は条線状の調整である。

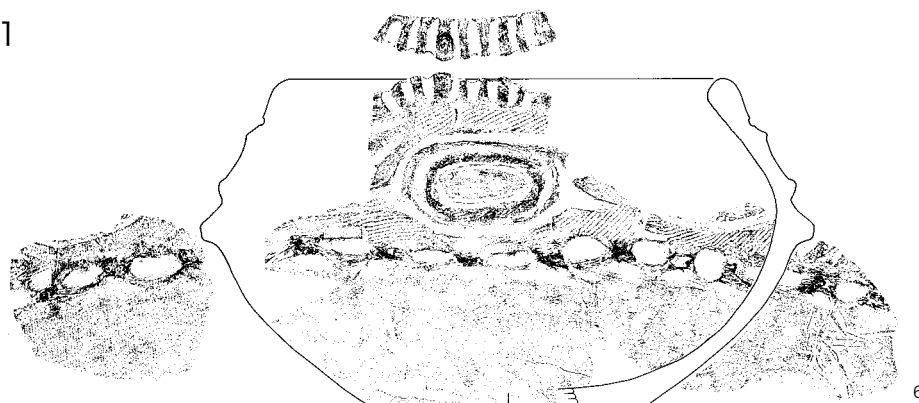
第133図1は入組三叉文が二帯に描かれるもので、二帯の表現はほぼ同じ描出法である。三叉部の挟りはさほど深くない。Eウ7-17グリッドの出土土器は第133図6～第134,135図にかけて示した。後期後半の資料が比較的まとまっている。第133図10は浅い縄紋地上に沈線・刻みが施されており、曾谷式と捉えて

(→P141)

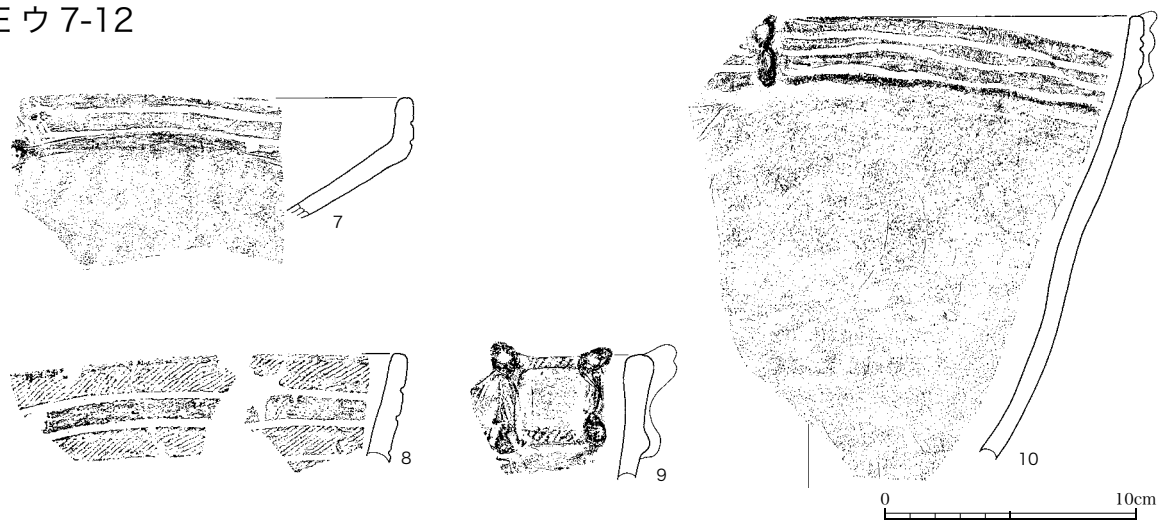
Eウ7-8



Eウ7-11

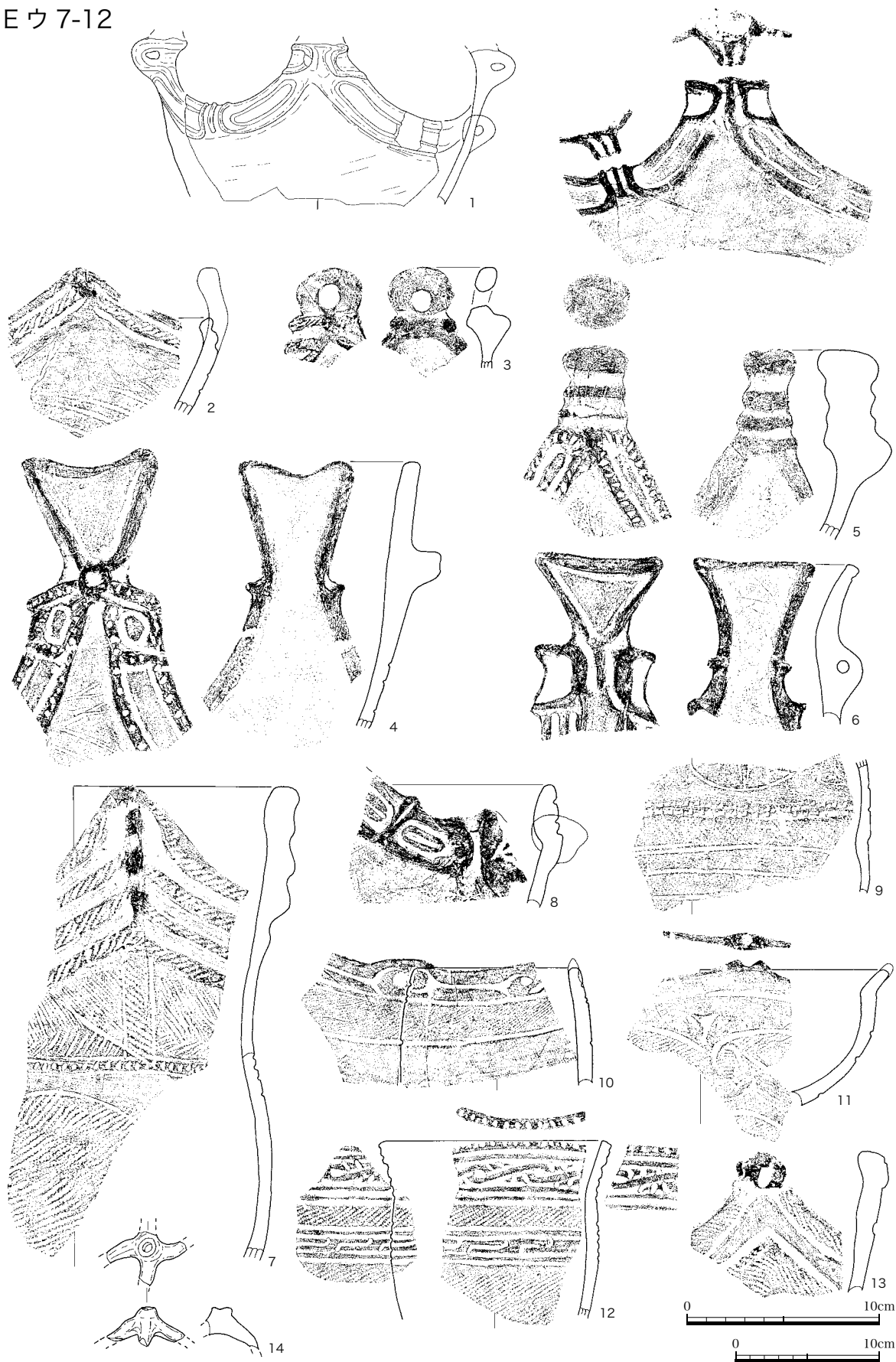


Eウ7-12



第129図 B区出土土器(9)

Eウ7-12



第130図 B区出土土器(10)

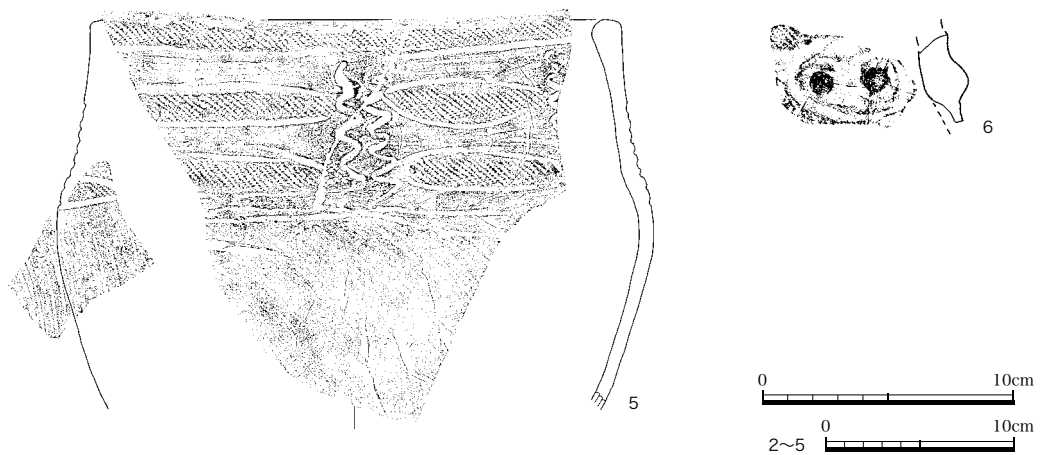


第131図 B区出土土器(11) Eウ7-13

Eウ7-13

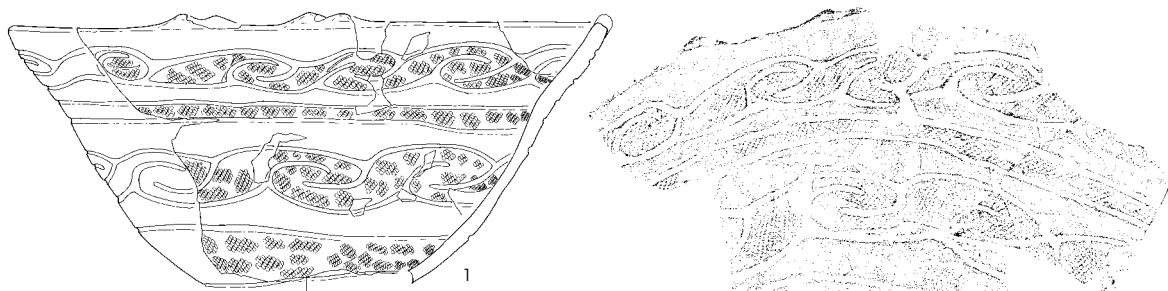


Eウ6-20

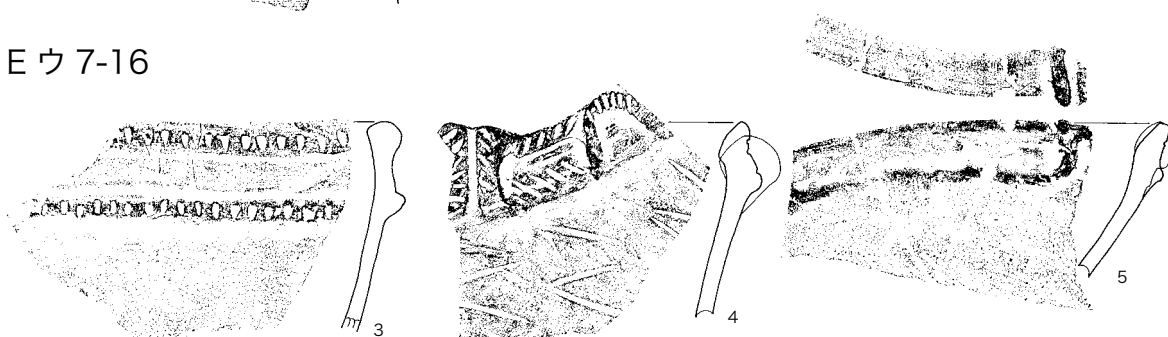


第132図 B区出土土器(12)

Eウ7-14



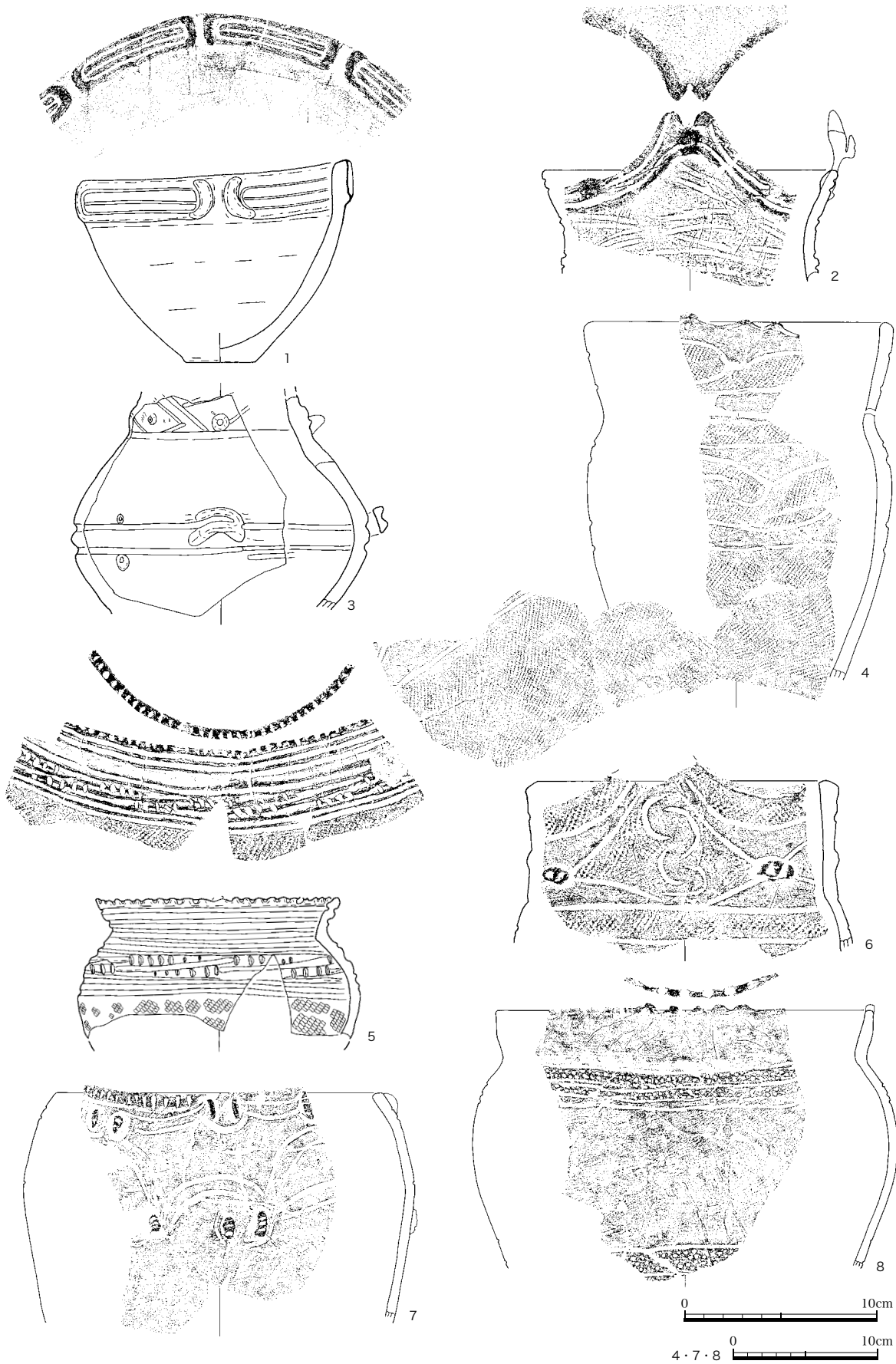
Eウ7-16



Eウ7-17



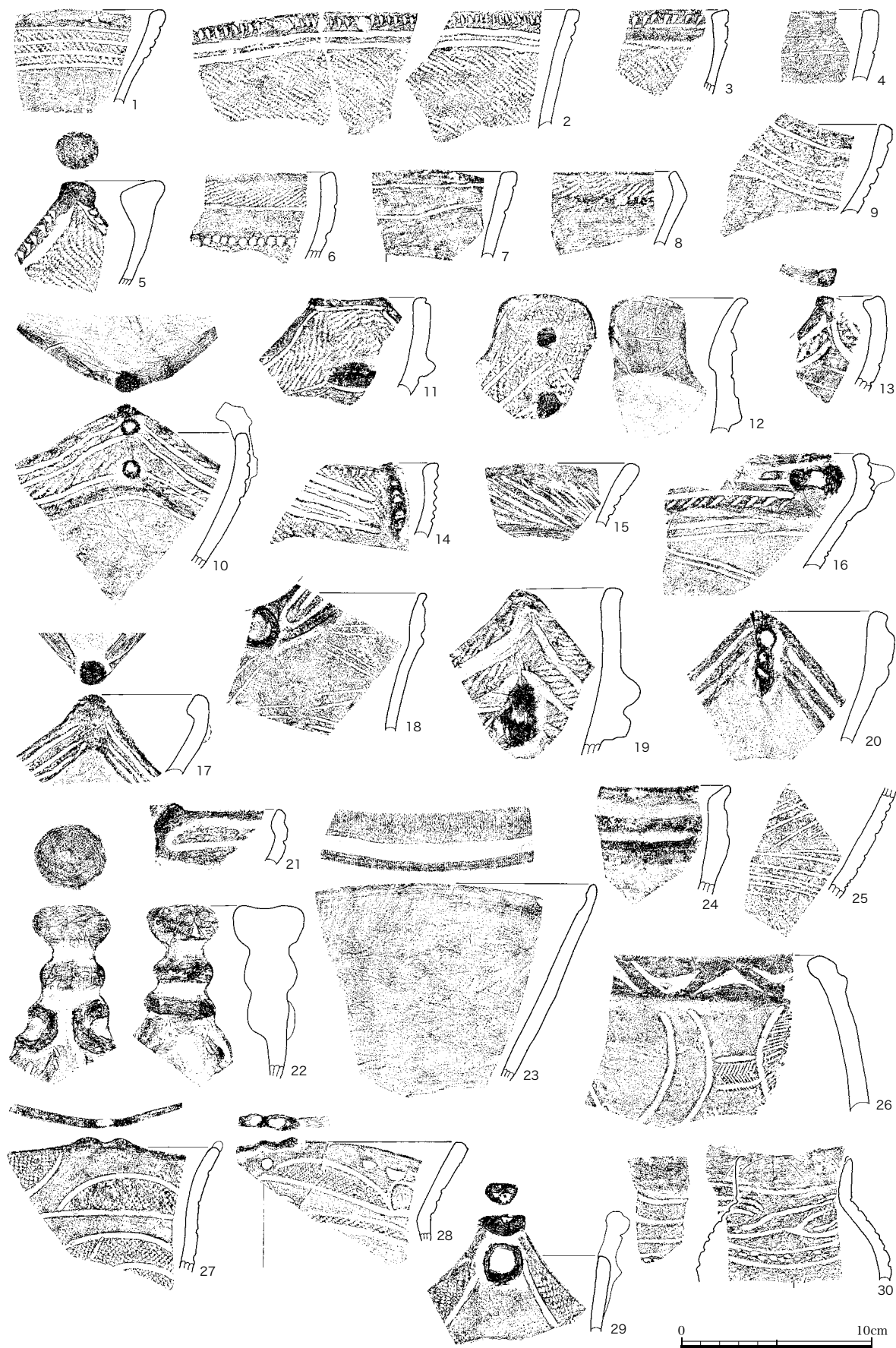
第133図 B区出土土器(13)



第134図 B区出土土器 (14) Eウ7-17

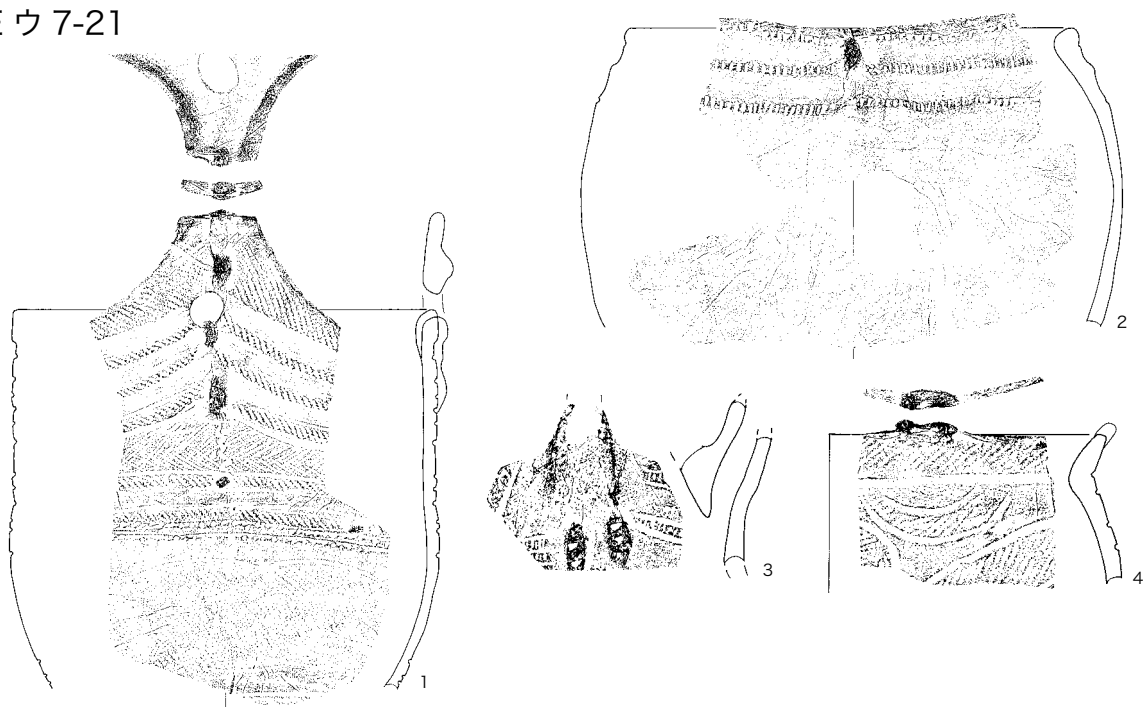


第135図 B区出土土器 (15) Eウ7-17

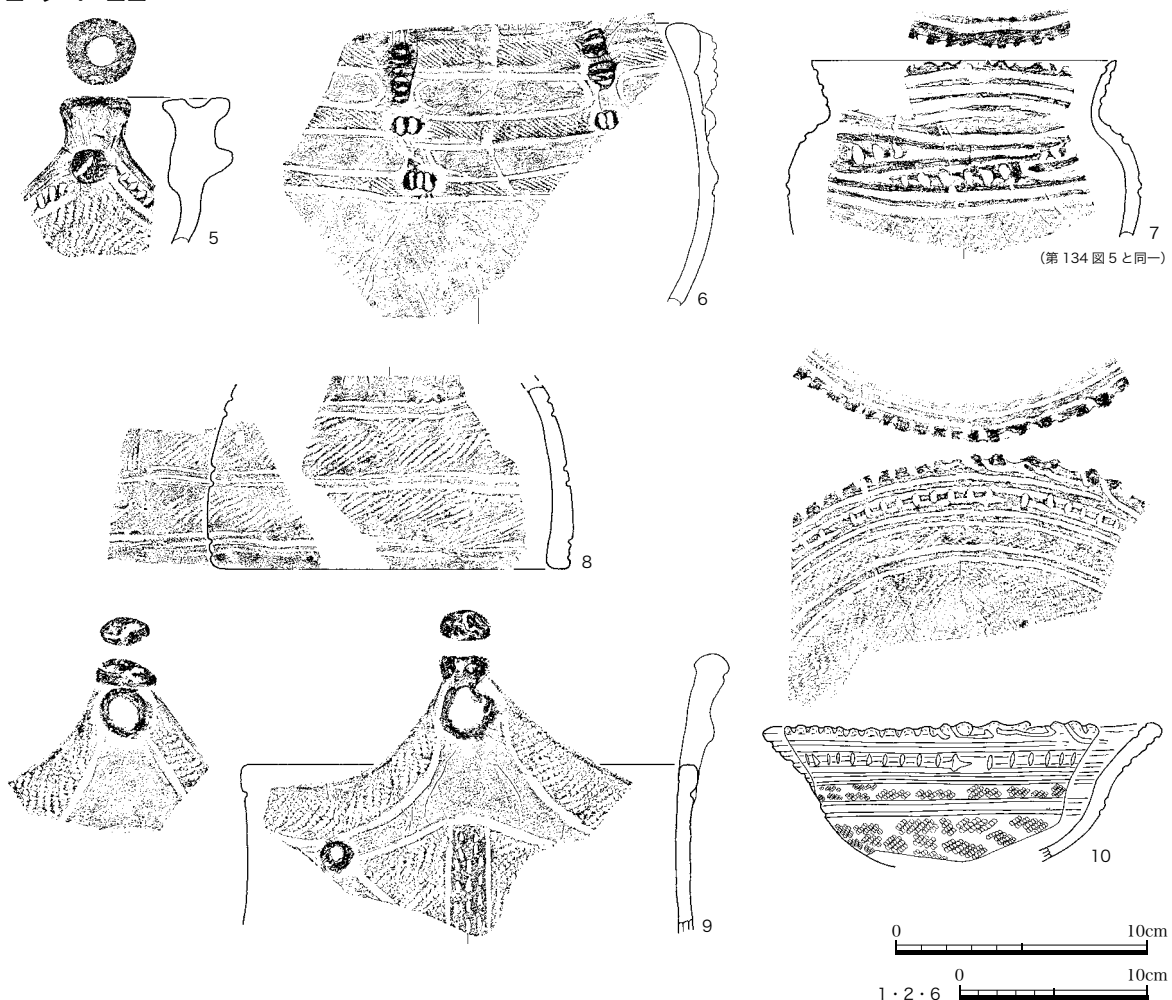


第136図 B区出土土器 (16) Eウ7-18

Eウ7-21

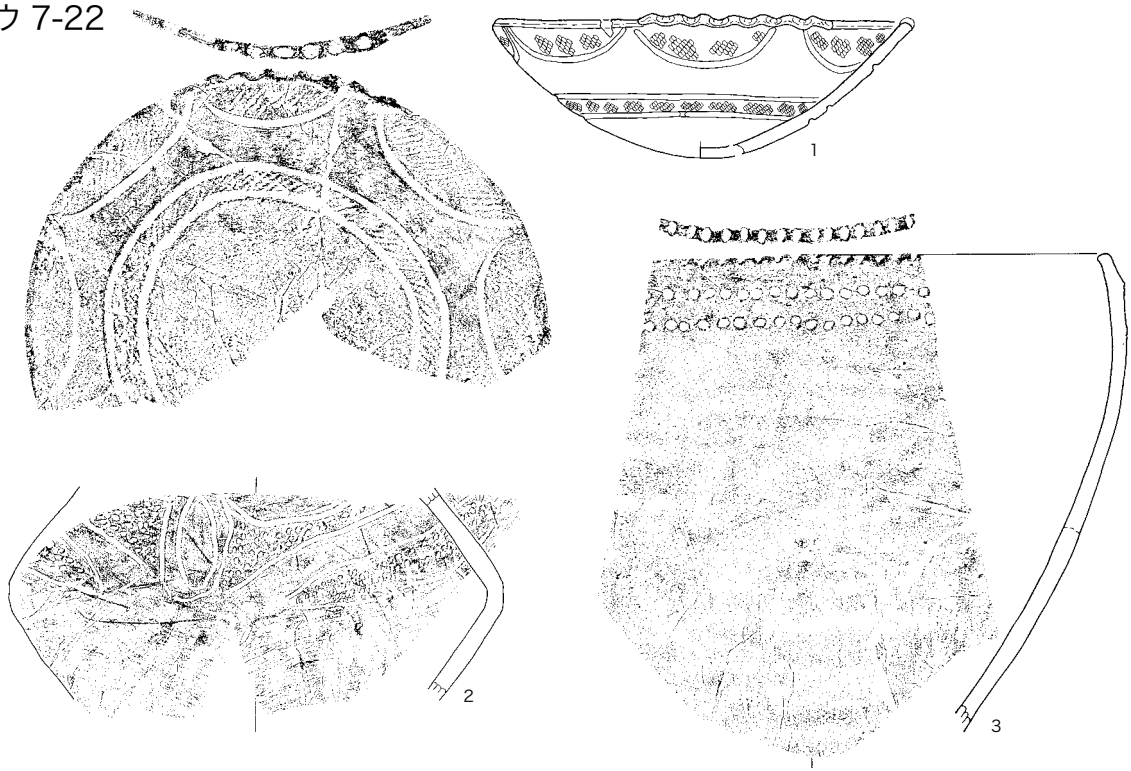


Eウ7-22

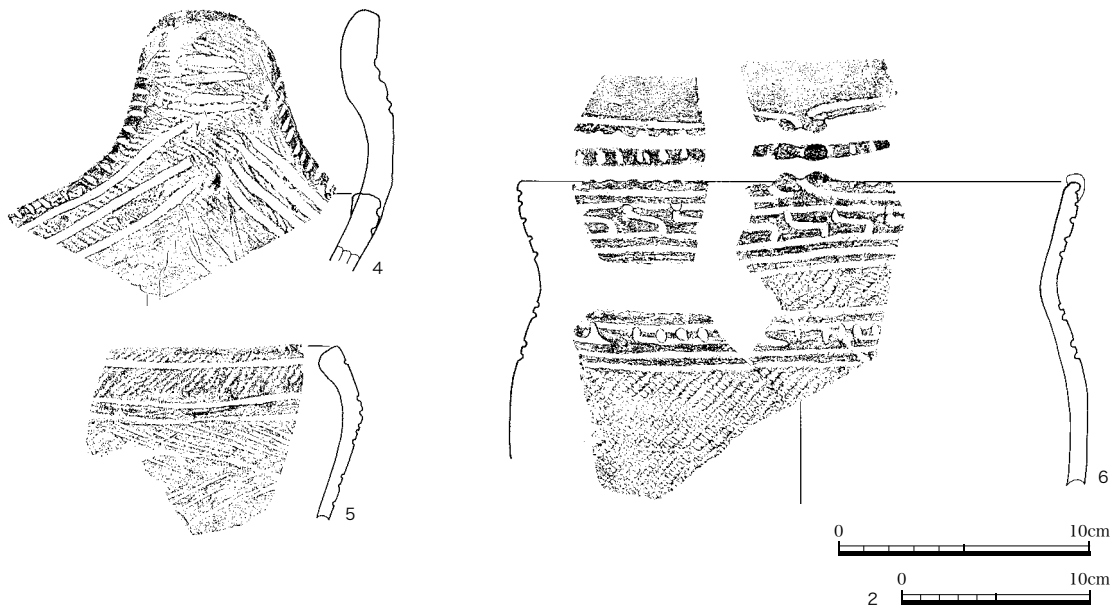


第137図 B区出土土器(17)

Eウ7-22



Eウ7-23



第138図 B区出土土器(18)

良いだろう。12は大きな波状となる口縁で隆起帯上には細長い刻みが浅く付される。第134図には主に径復元個体を示す。1の鉢、3の瘤付系注口土器(または壺)、浅く雑な施文が特徴的な7の深鉢、沈線間帯部に小さめの円形刺突を密に充填している8の土器など注目すべき資料が多く、詳細な観察結果に触れるべきだが、省略せざるを得ない。第135図の破片でも後期後半の資料、晩期前半の資料が注意される。第135

図3は加曾利B3式で良く見られる前面突出の円形突起が付され、口縁の2条隆帯上に付される刻み(刺突)も丸みを有している。17以下の粗製土器・無文土器では厚手でケズリ調整の19~21などが注意される。第136図はEウ7-18グリッド出土で、加曾利B3式、曾谷式、高井東式の資料が注目される。20や24の口縁部文様は凹線状の手法である。26は頸部の沈線間帯状部に細かい条線状の線が充填されるもので、いわゆる「細密沈線」に近似している。口縁直下の三叉印刻状文様も含め注目される。

第137~138図にはEウ7-21,22,23グリッド資料を示す。第137図1は安行1式、2は口縁の狭い範囲のみ隆起帯上刻みが巡るもので、体部の調整はやや粗いミガキ(研磨)調整である。7は破片左端が第134図5の右端と接合する。第137図9は4~5単位の波状縁で、突起の形状は姥山系の特徴を示す。第136図29も同一個体となる。10は比較的丁寧な作り・施文の大洞系鉢。第138図1は小形の鉢だが図正面の部分のみ口縁に小波状隆起(口縁端部の刺突列)があり、この下位の弧線文も弧線の長さがやや狭く他と異なっている。同図2の文様構成や3の円形刺突列が巡る鉢?なども興味深い。同図4は地縄紋施文の曾谷式、5は口縁縄紋帯、体部に矢羽根状沈線が描かれる例、6は小クランク文、体部に羊歯状文が描かれる大洞系の土器である。第139図にはEウ11-3,5,8グリッド出土土器から抽出した資料を示す。1は瘤付系の資料で、階段状や横繋がりとならず縦の単位内に帯状部が展開していく例。北関東で屢々観られるものである。3は上位を欠損しているが、瘤付系の特徴を示す。5は口縁部に粗い縄紋(偽縄紋?)を施し、体部は比較的磨かれている。同じグリッドの6も興味深い例で、横長楕円状区画、区画内外に小波状~鋸歯状の沈線が施される。沈線の幅や深さは不均一で雑な感を受ける。同図7~9がEウ11-10グリッド出土で、突起下の三角形単位文が特徴的な7、口縁下の沈線部分に三叉状の小抉り部がある8、頸部にやや不整な斜方向帯状区画線と弧状隆帯が配される9いずれも注目される。10は双口状の異形土器だが、全体形状は良く分からない。

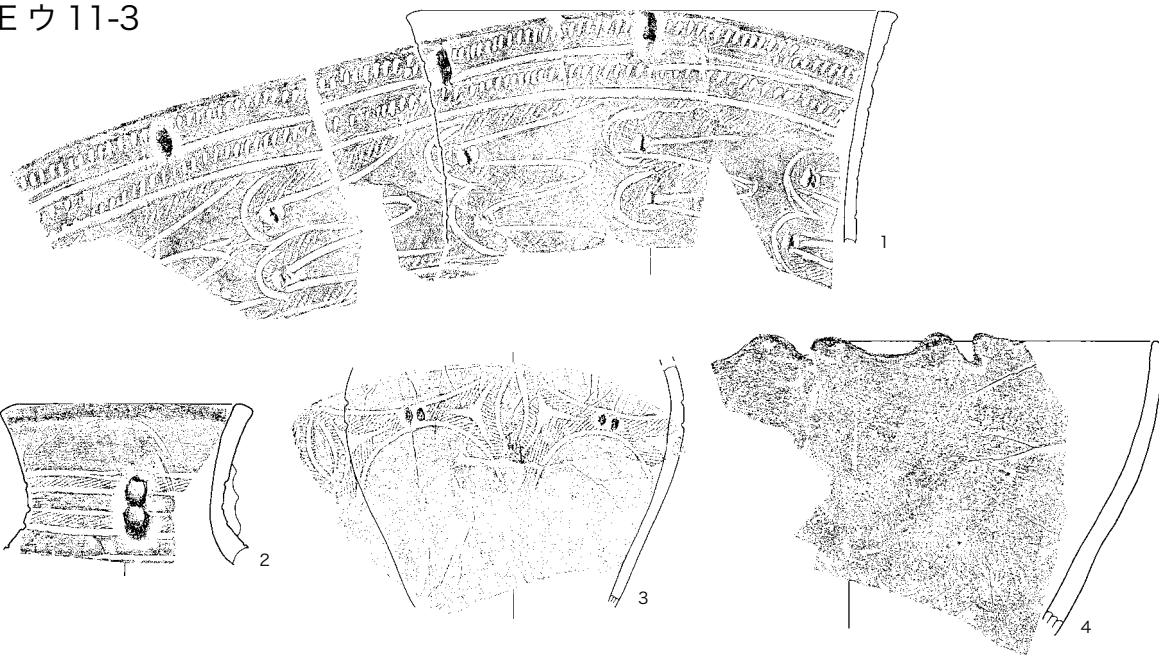
第140図はEウ11-4グリッド出土例で、ここでも注目される資料を主に限定して示す。3は上面観六角形状となる安行1式の鉢、4は互連弧状の文様が細めの多重線で描かれる小形の深鉢である。7は弧状の隆帯や円形浮文が粗い調整の面上に描かれているもので、顔面表現の可能性も考えたが良く分からない。第141図はEウ11-5グリッド出土資料で、瘤付系や注目される資料を選択していることから、典型的な安行系などは殆ど示し得ない状態となっており、必ずしもこのグリッドの様相を示してはいない。瘤付系でも1,3の深鉢は無文部ミガキも明瞭で、全体的にも丁寧な作りの感がある。7,8は壺または注口土器であろうが、沈線は浅いまたは粗い施文で全体の構成もはっきりしない。9の深鉢は構成の乱れに加え、豚鼻状突起も不整形であったり一穴の円形状例があるなどの変化が窺えるものである。

第142図はEウ11-9グリッド出土資料で、注目すべきものを示す。1は加曾利B3式3単位突起深鉢の口縁部で南関東(西関東)で良く見られる典型例に近い。3は4単位波状縁の深鉢で、薄手で丁寧な作り・施文の土器である。無文の頸部~体部、口縁の狭い隆起線上いずれも比較的丁寧に磨かれている。菱形状の突起には3つの瘤状小突起が表裏共に付される。4の高井東系大波状縁深鉢、9の瘤付系注口部頸部文様部分?なども注目される資料である。

第143図にはEウ11-13グリッド及び12-11グリッド資料を示す。1は紐線文系の粗製土器に近いが、口縁及び頸部に縄紋帯が配される資料。12は貼付紐線文系の資料で頸部に背合せの弧線文が数単位施される。第144図はEウ11-14グリッド出土資料である。2はかなり厚手で大形となる大波状縁深鉢口縁部破片。波底部の突起もかなり立体的で前面に向けてかなり突出する。8は瓢形の注口土器となろう。第145~146図にかけてEウ11-15グリッド資料を示す。第145図1は堀之内式、2~が曾谷式以降の土器で、注目される資料も多い。12は小形皿状の土器で入組三叉文が描かれるが、施文は雑で施文後のミガキも観られない。底

(→P148)

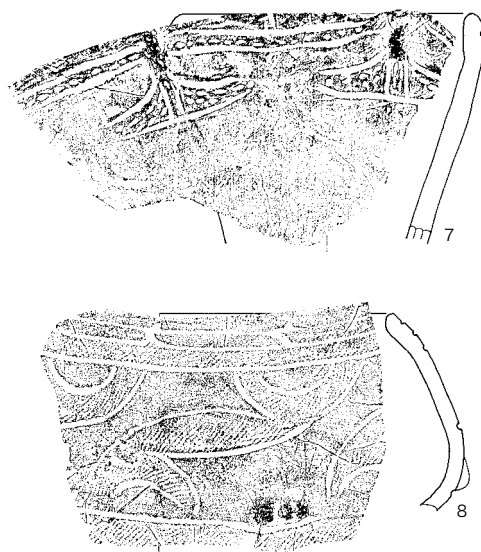
Eウ11-3



Eウ11-8



Eウ11-10

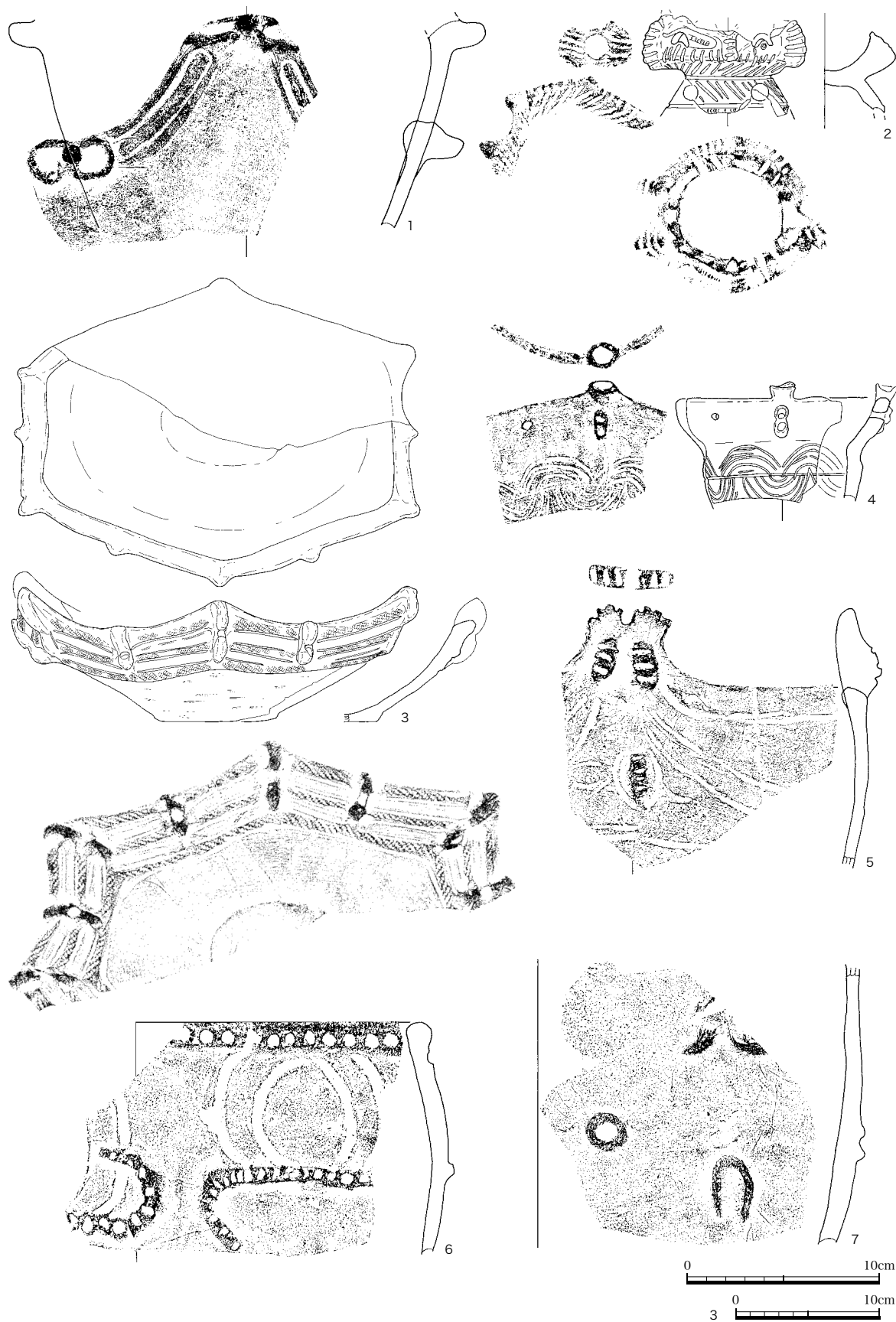


Eウ11-5

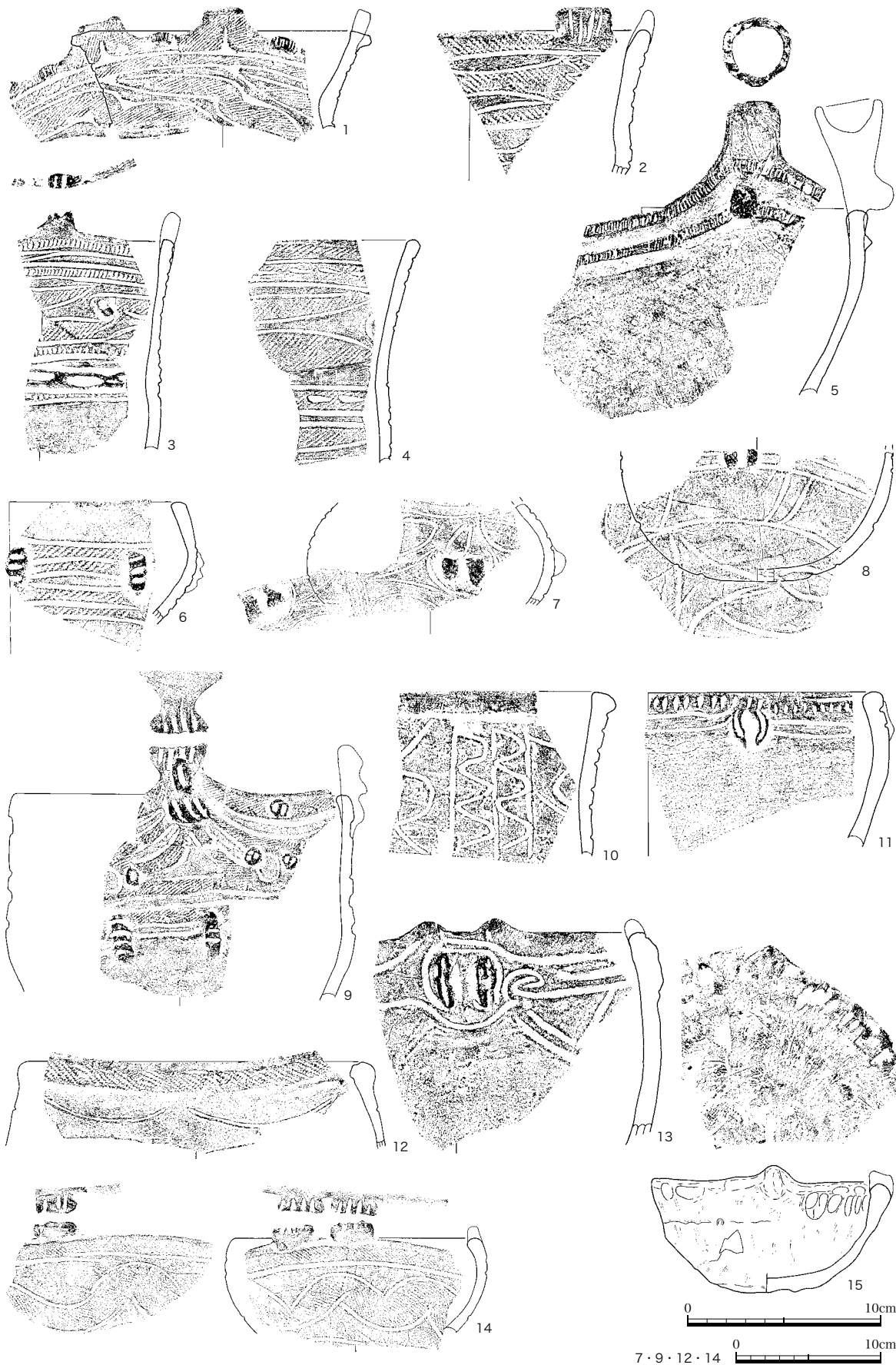


第139図 B区出土土器(19)

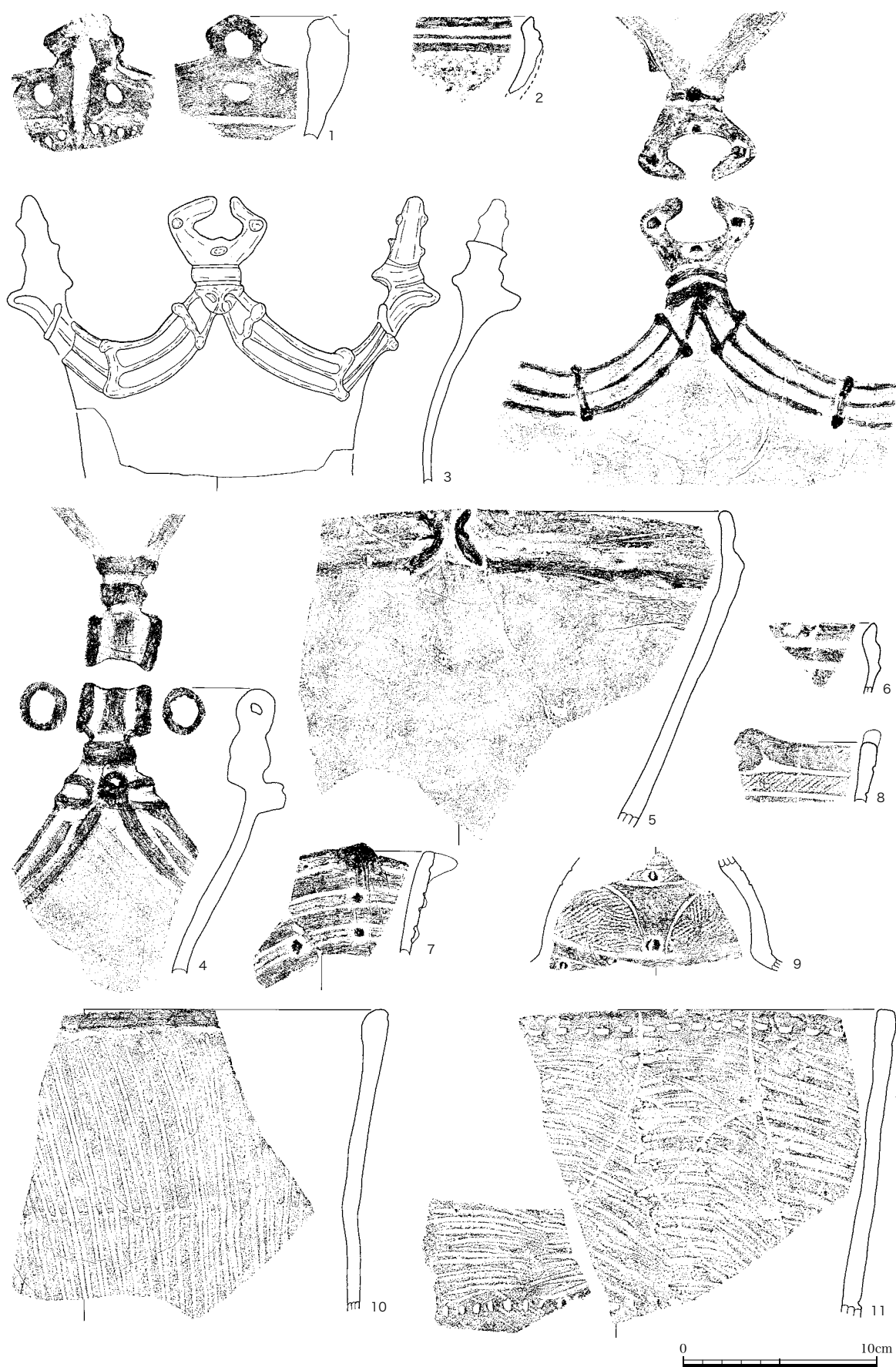
Eウ11-4



第140図 B区出土土器(20)

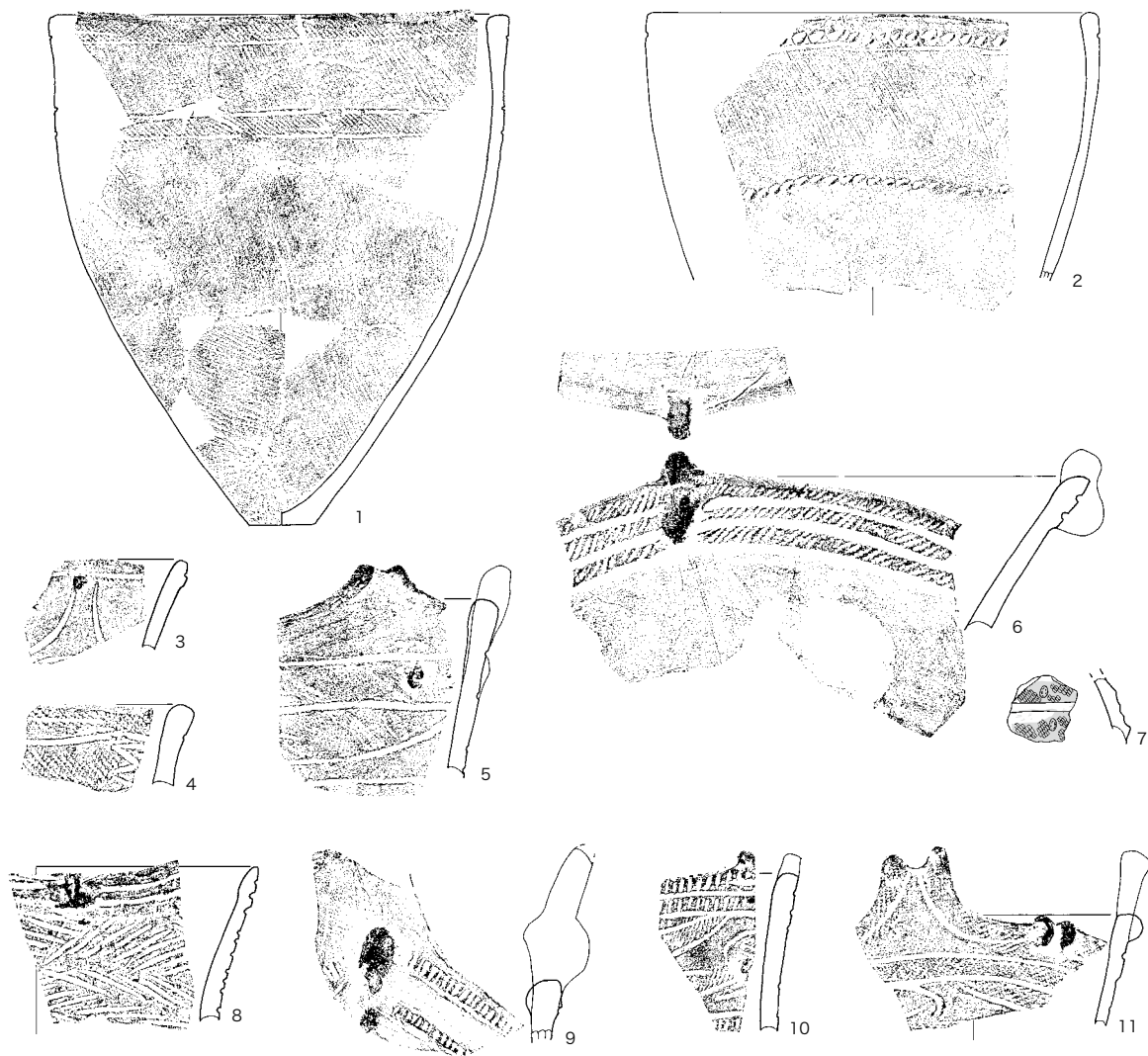


第141図 B区出土土器 (21) Eウ11-5

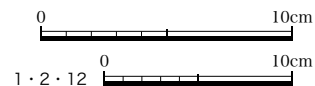
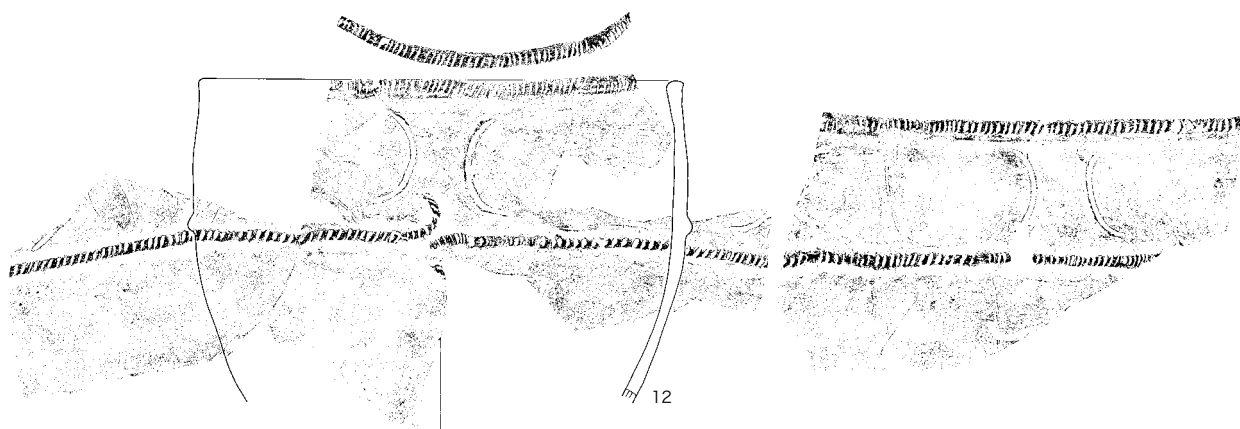


第142図 B区出土土器 (22) Eウ11-9

Eウ 11-13

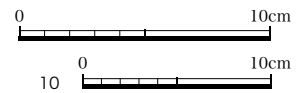
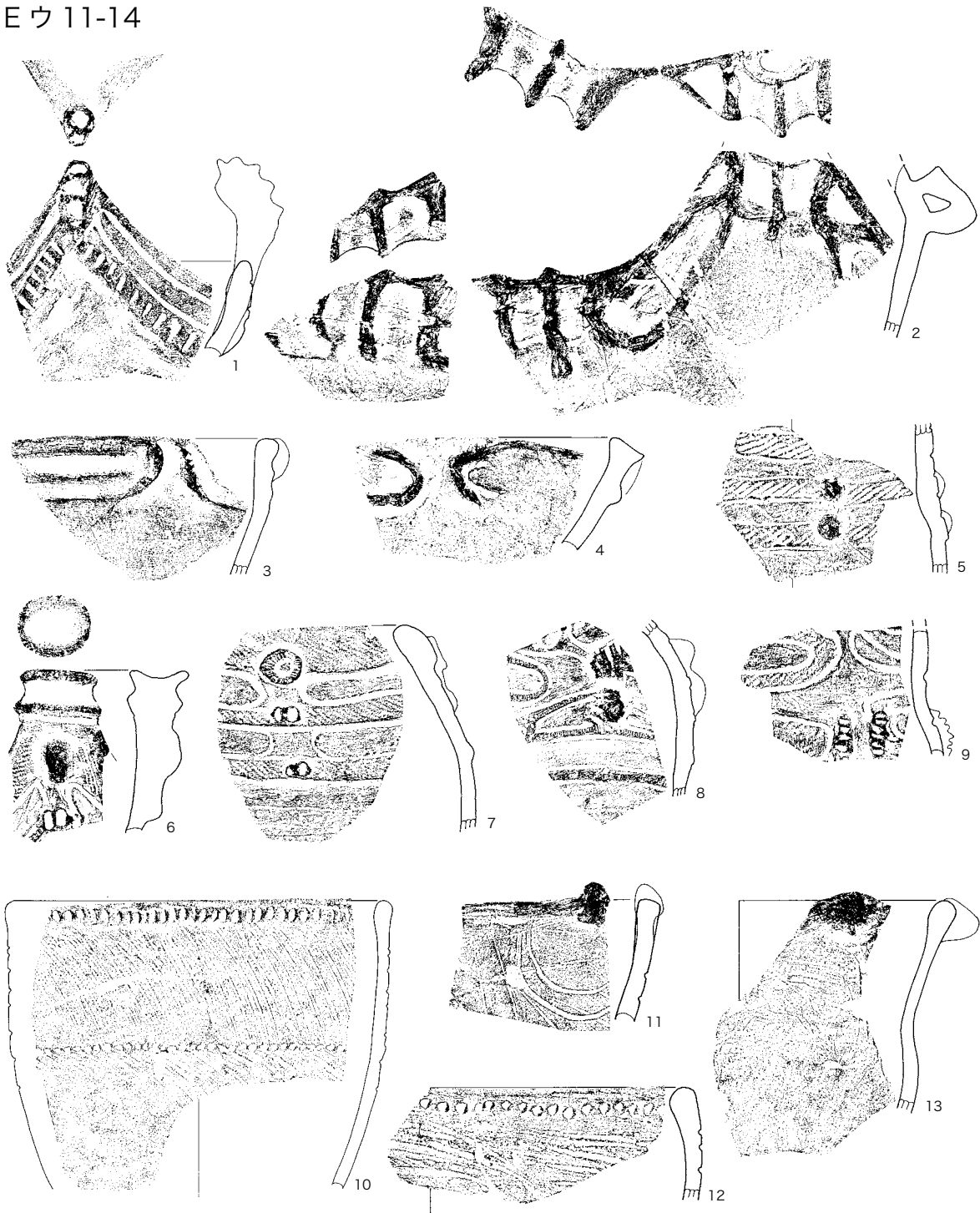


Eウ 12-11



第143図 B区出土土器(23)

Eウ 11-14

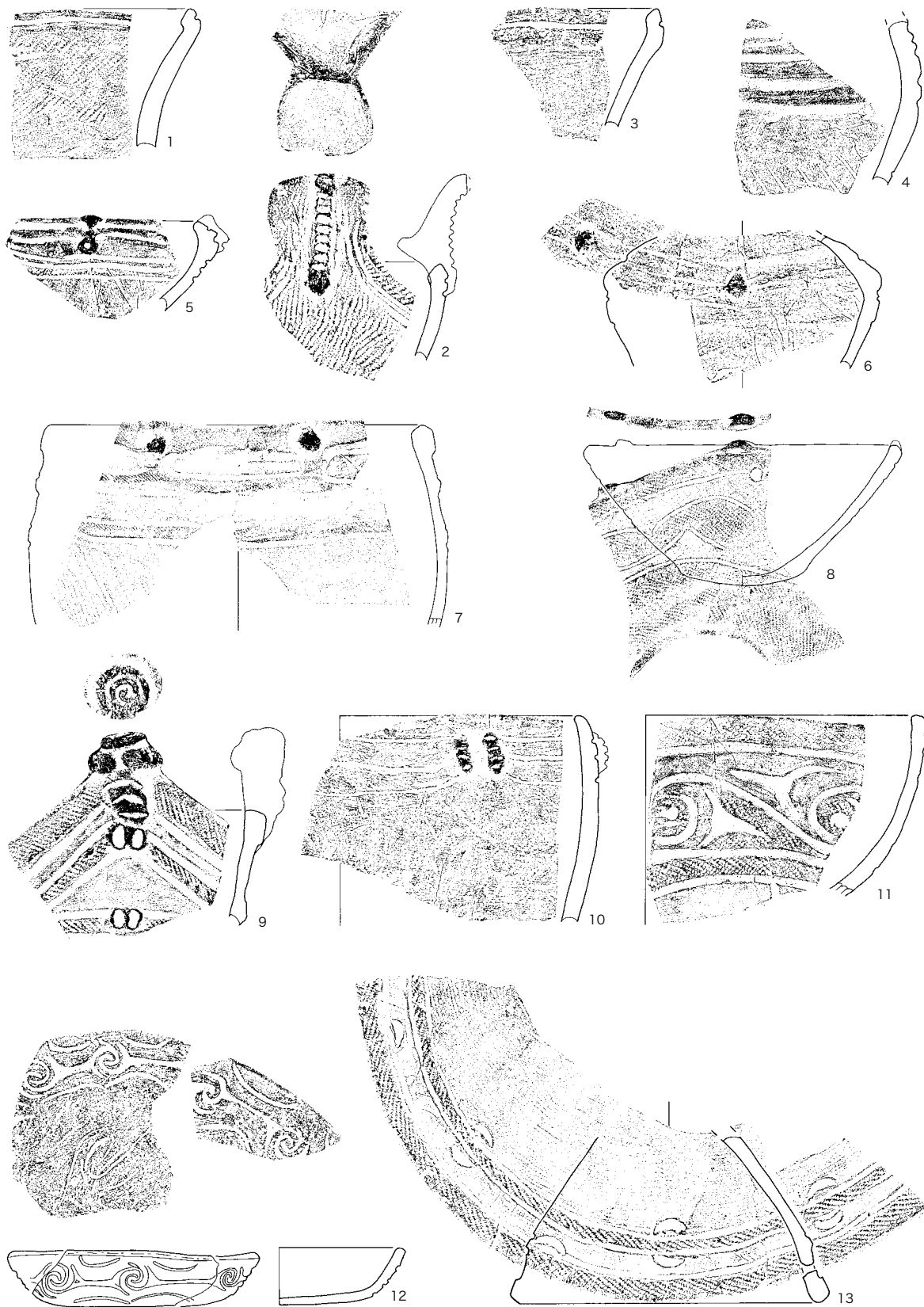


第144図 B区 出土土器 (24)

面にも細く浅い沈線で入組状の文様が描かれている。第146図1,2は貼付紐線文系の資料で、比率を示せないものの寺野東遺跡などと比べて貼付紐線紋系が多い傾向がある。3は角底の土器で底面文様も特徴的である。

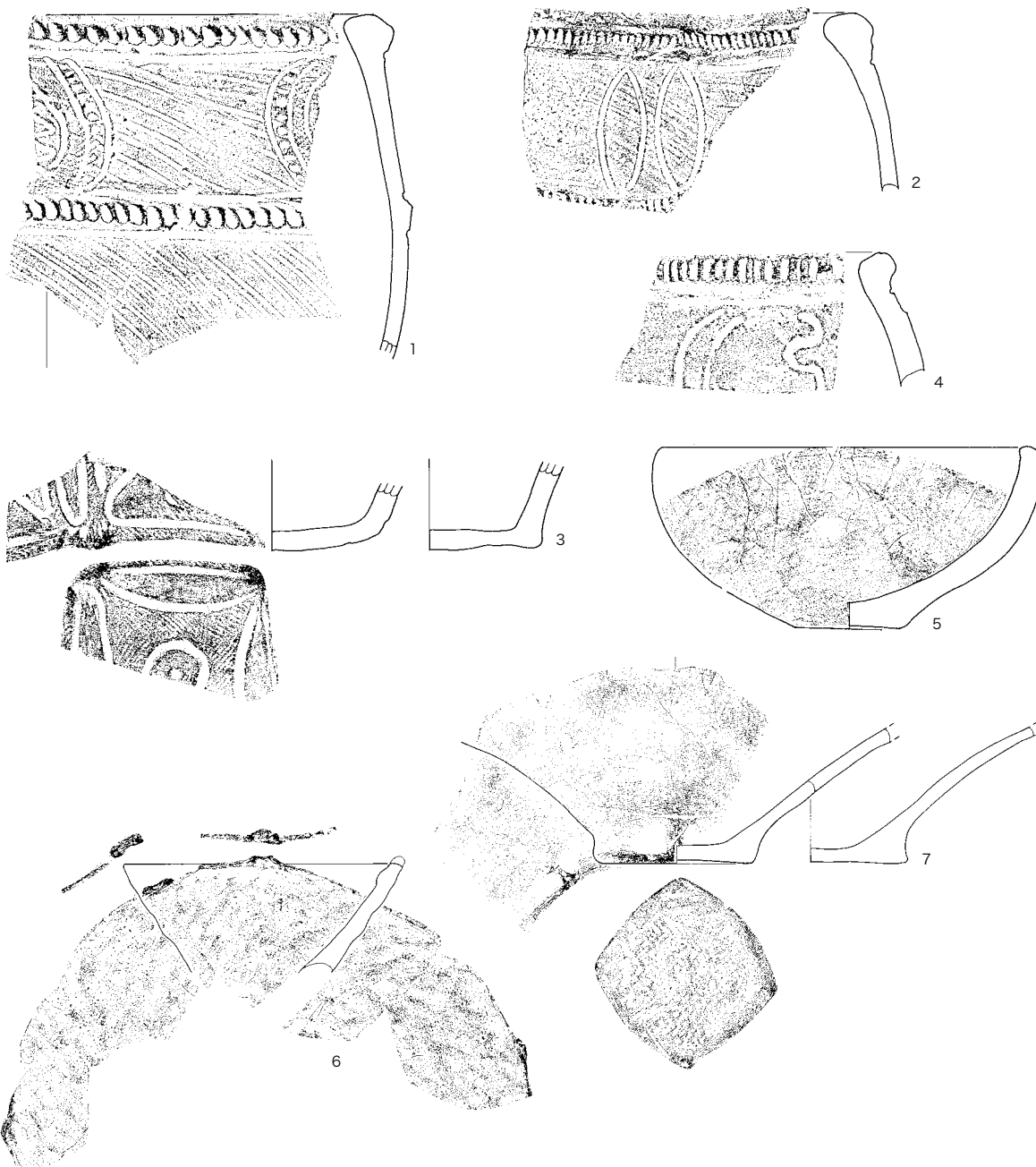
第147図はEウ 11-14,12-1 グリッド出土例で、前者は後期、後者は晩期の資料を主に選択して示す。1は

(→P162)

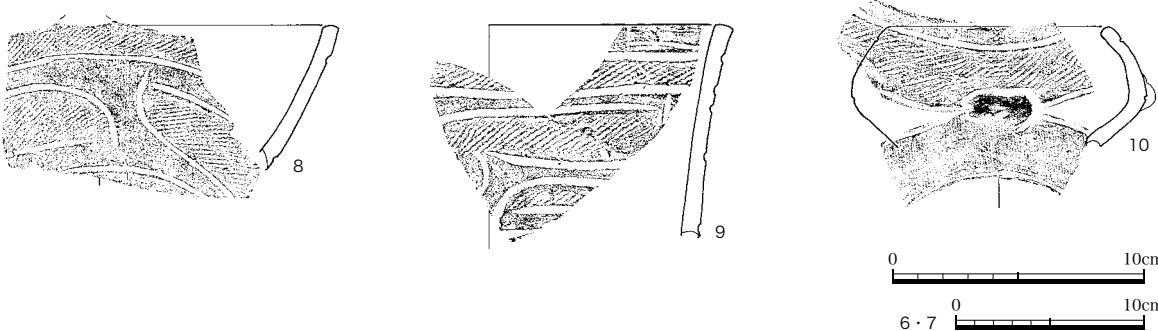


第145図 B区出土土器(25) Eウ11-15

Eウ11-15

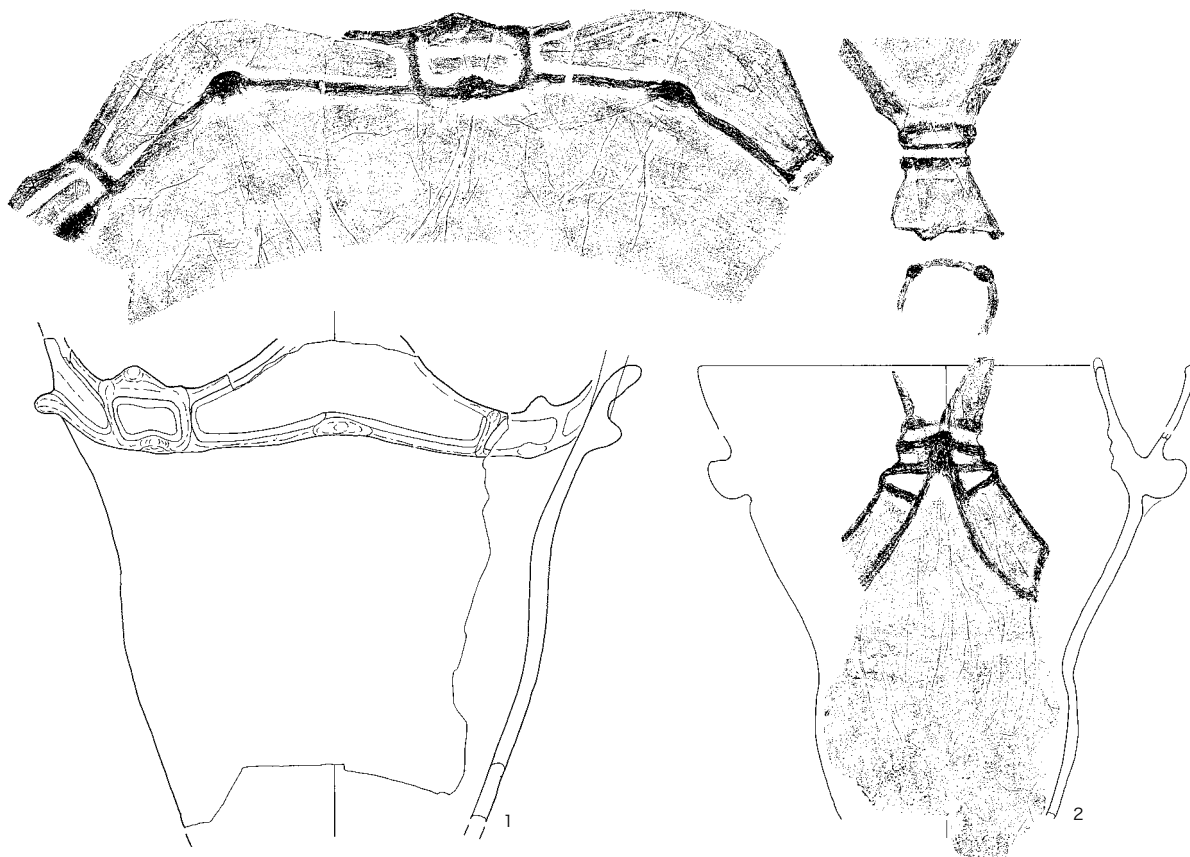


Eウ11-25

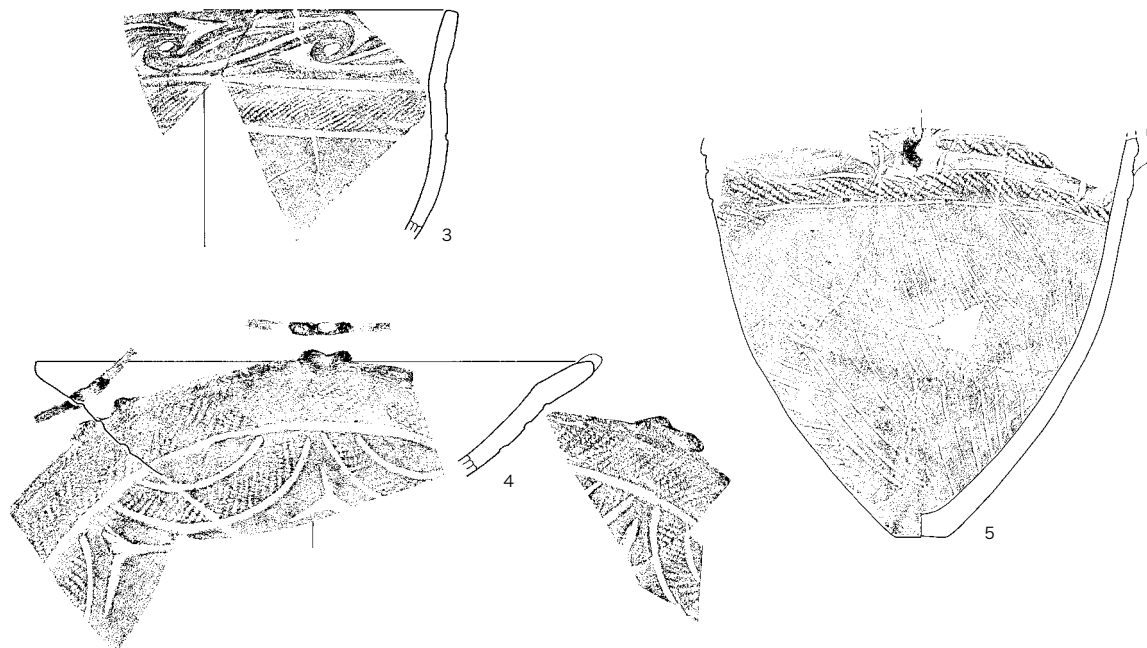


第146図 B区出土土器(26)

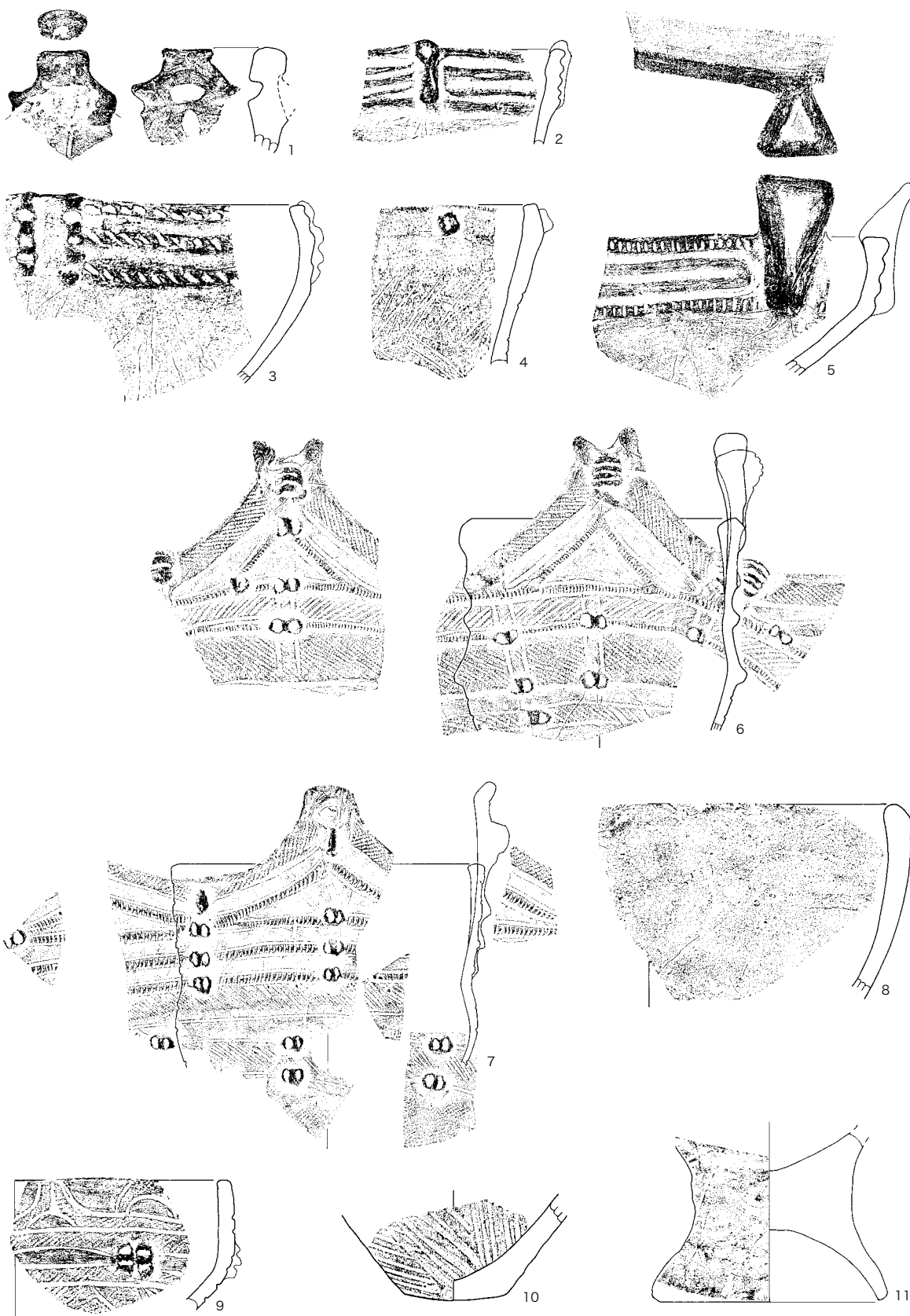
Eウ11-14



Eウ12-1



第147図 B区出土土器(27)

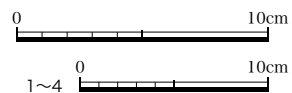
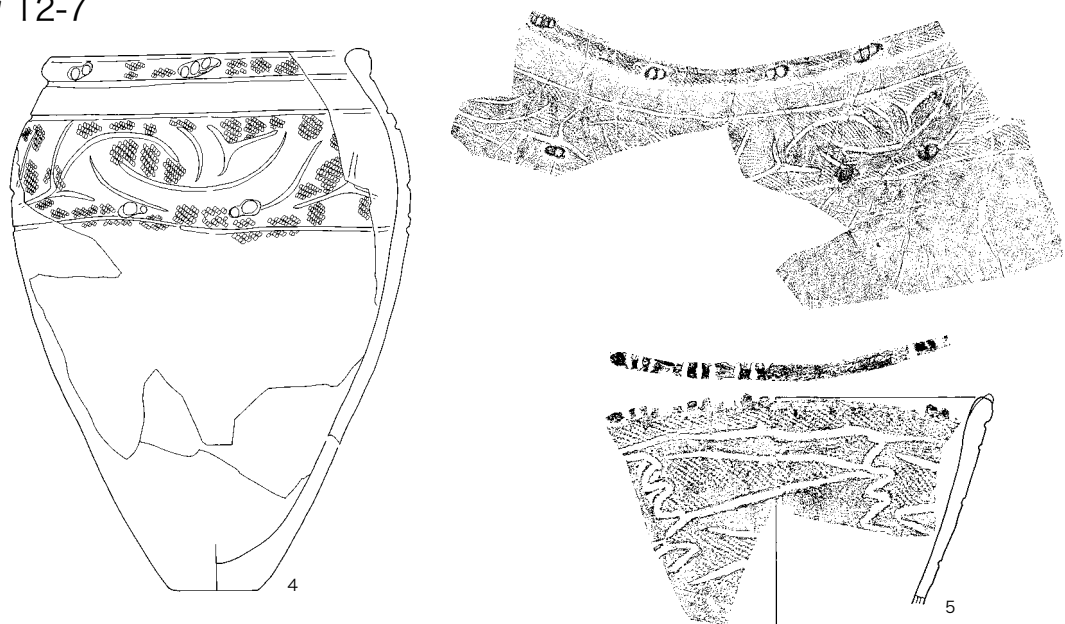


第148図 B区出土土器(28) Eウ11-19

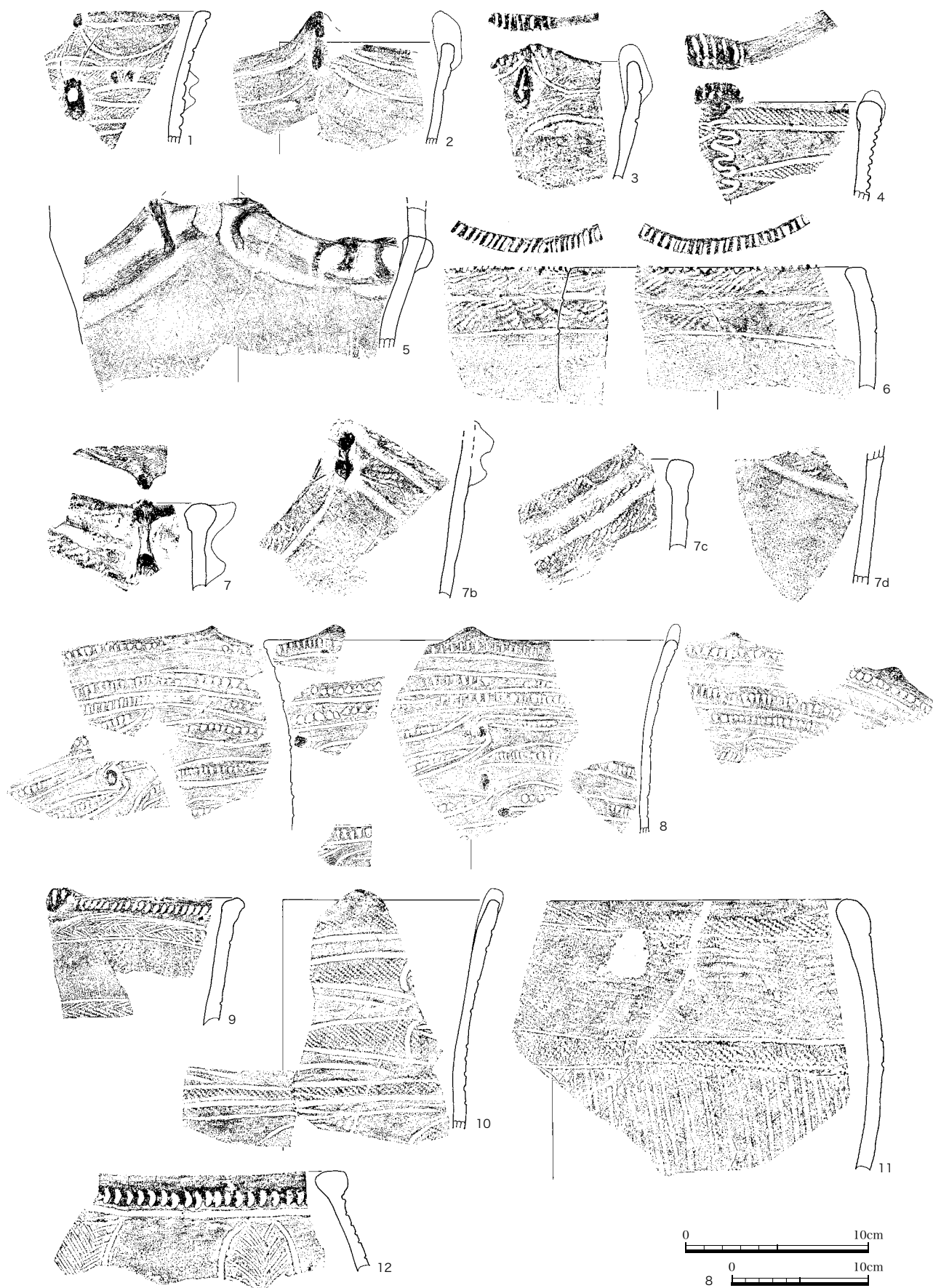
Eウ 11-19



Eウ 12-7

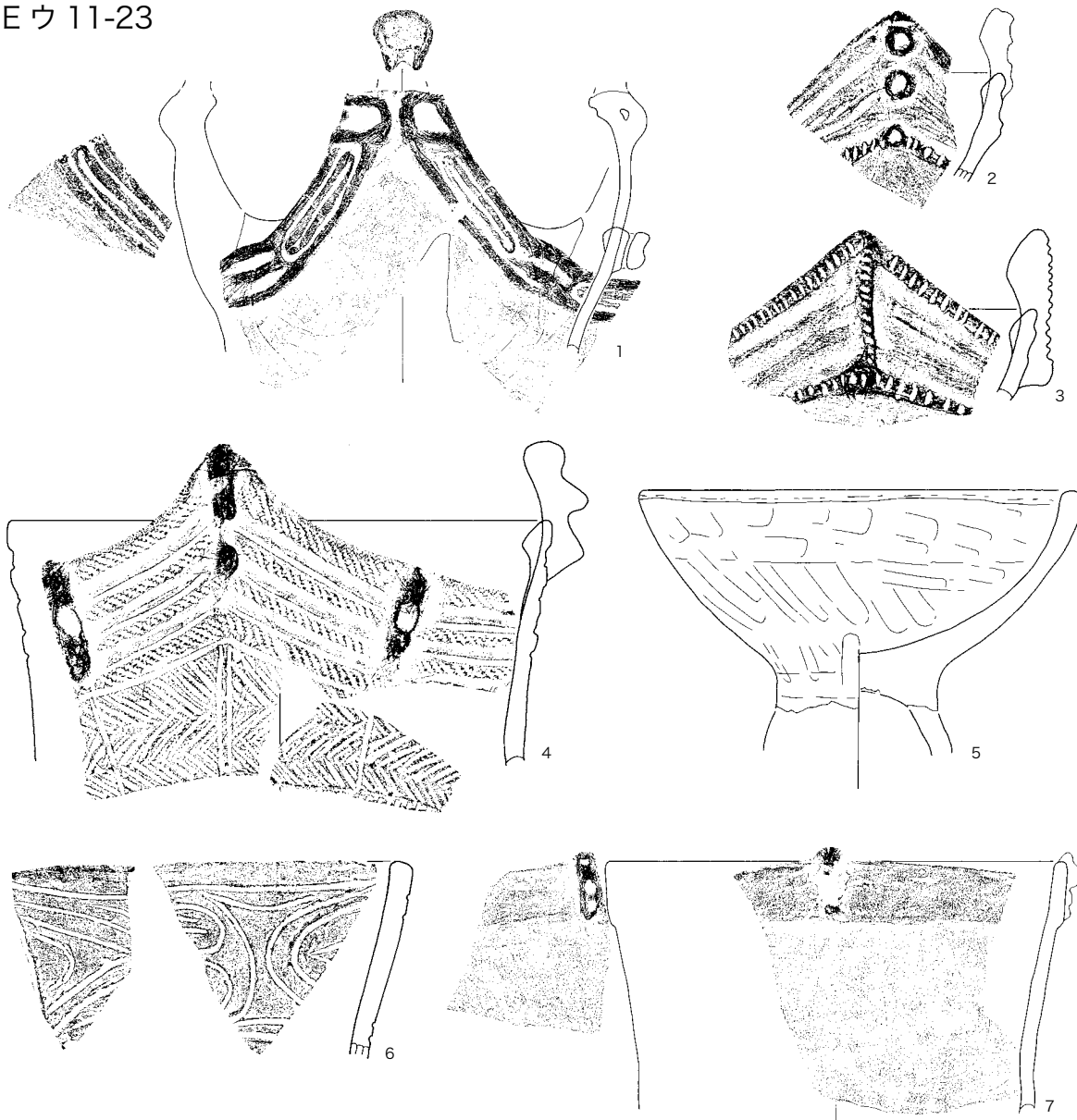


第 149 図 B 区 出土土器 (29)

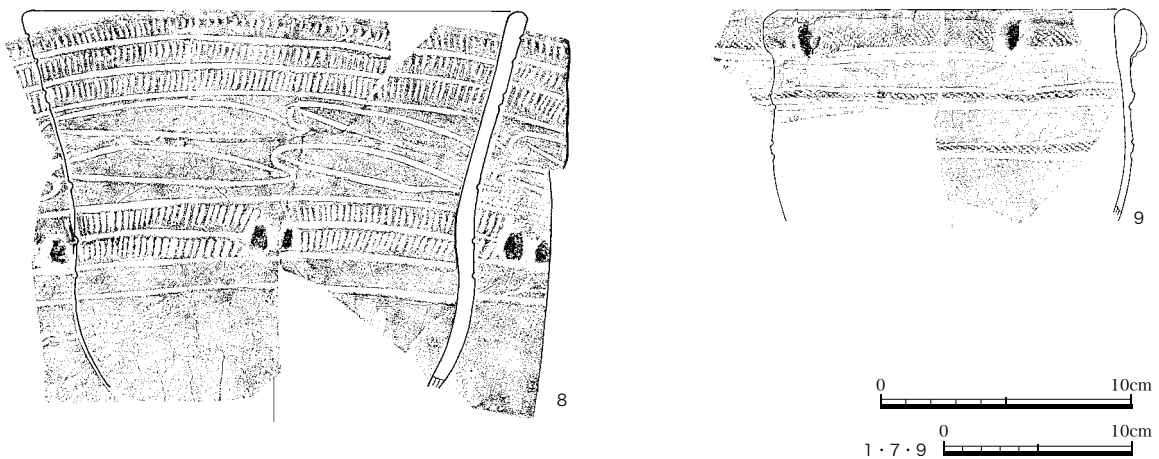


第150図 B区出土土器(30) Eウ11-20

Eウ11-23

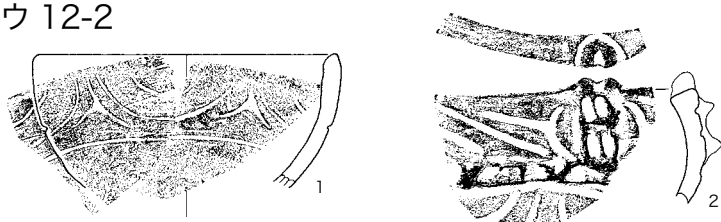


Eウ11-24

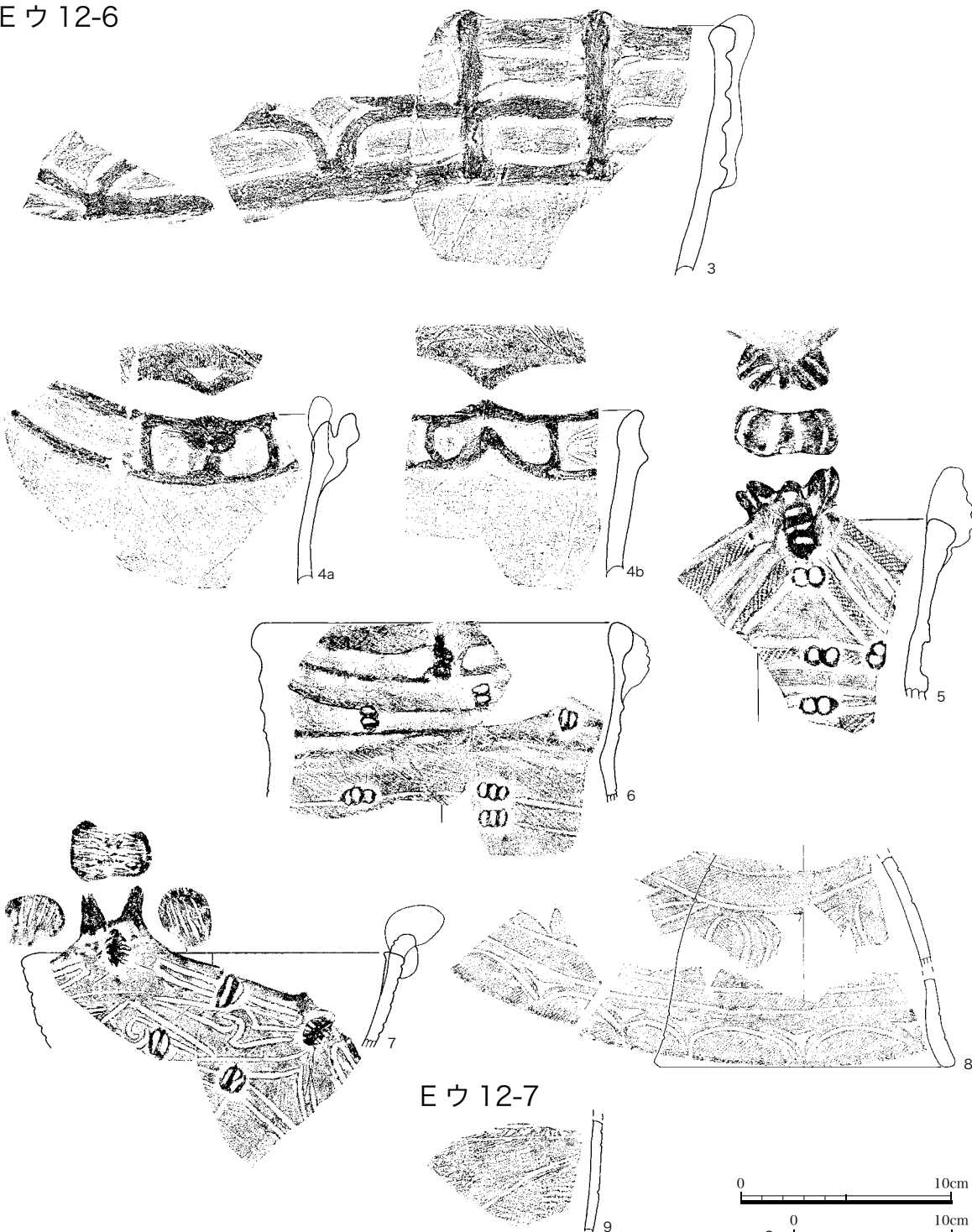


第151図 B区出土土器(31)

Eウ 12-2



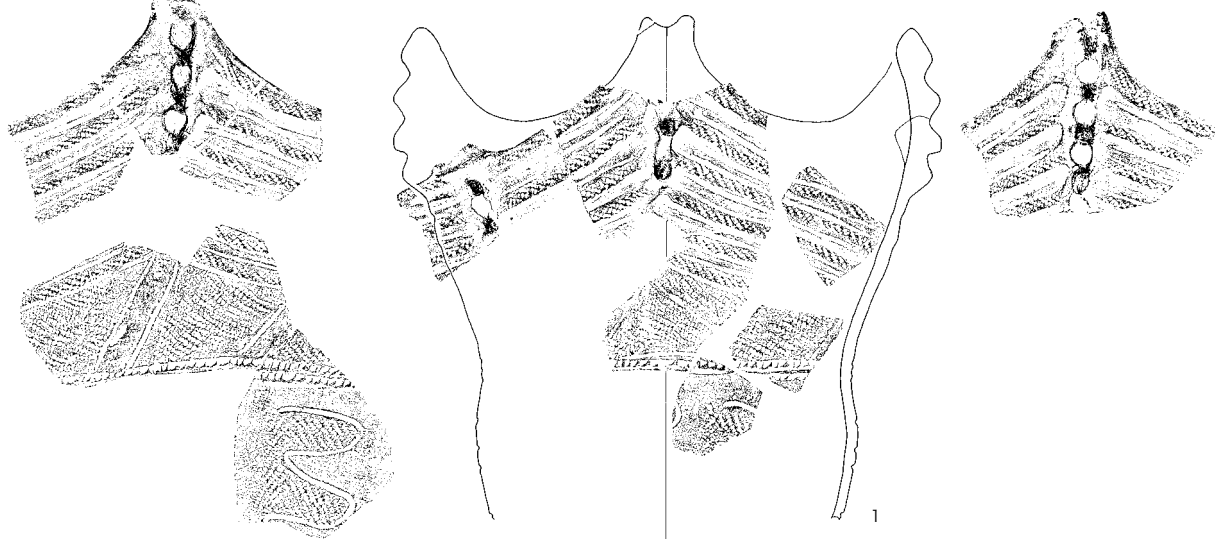
Eウ 12-6



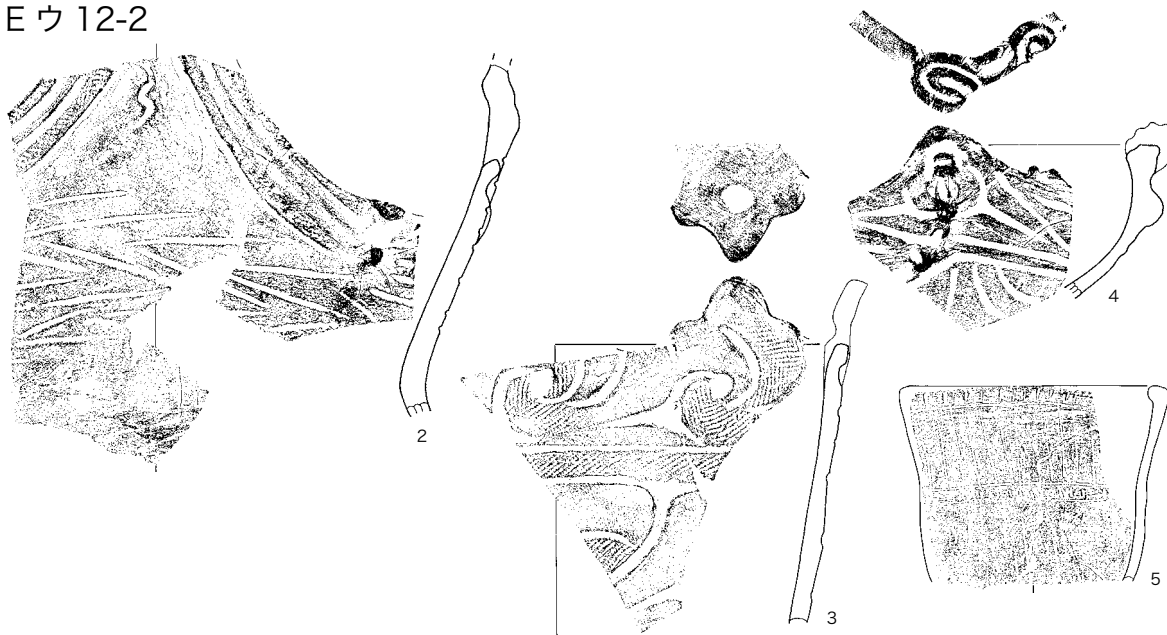
Eウ 12-7

第152図 B区出土土器(32)

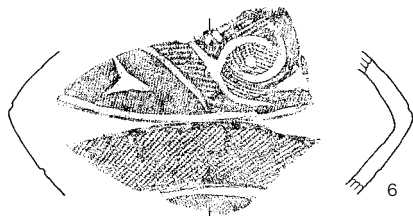
Eウ12-8



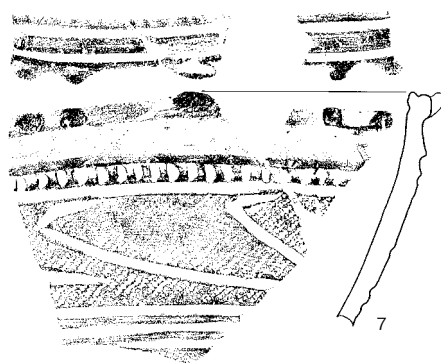
Eウ12-2



Eウ16-4



Eウ16-5

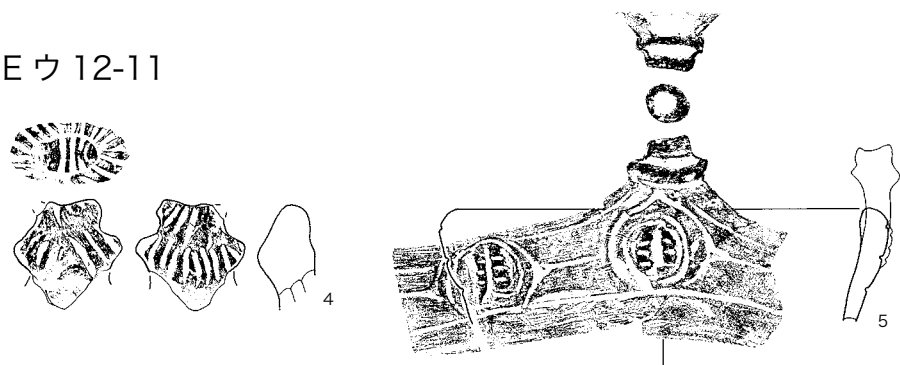


第153図 B区出土土器(33)

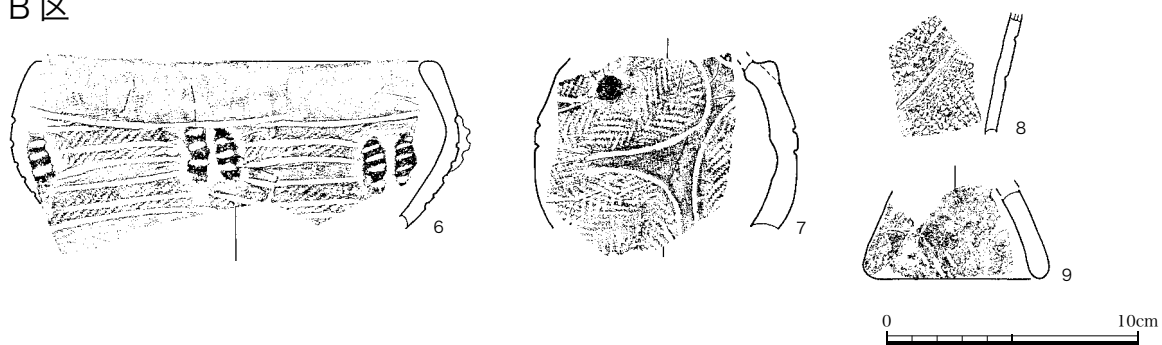
Eウ 12-13



Eウ 12-11



B区

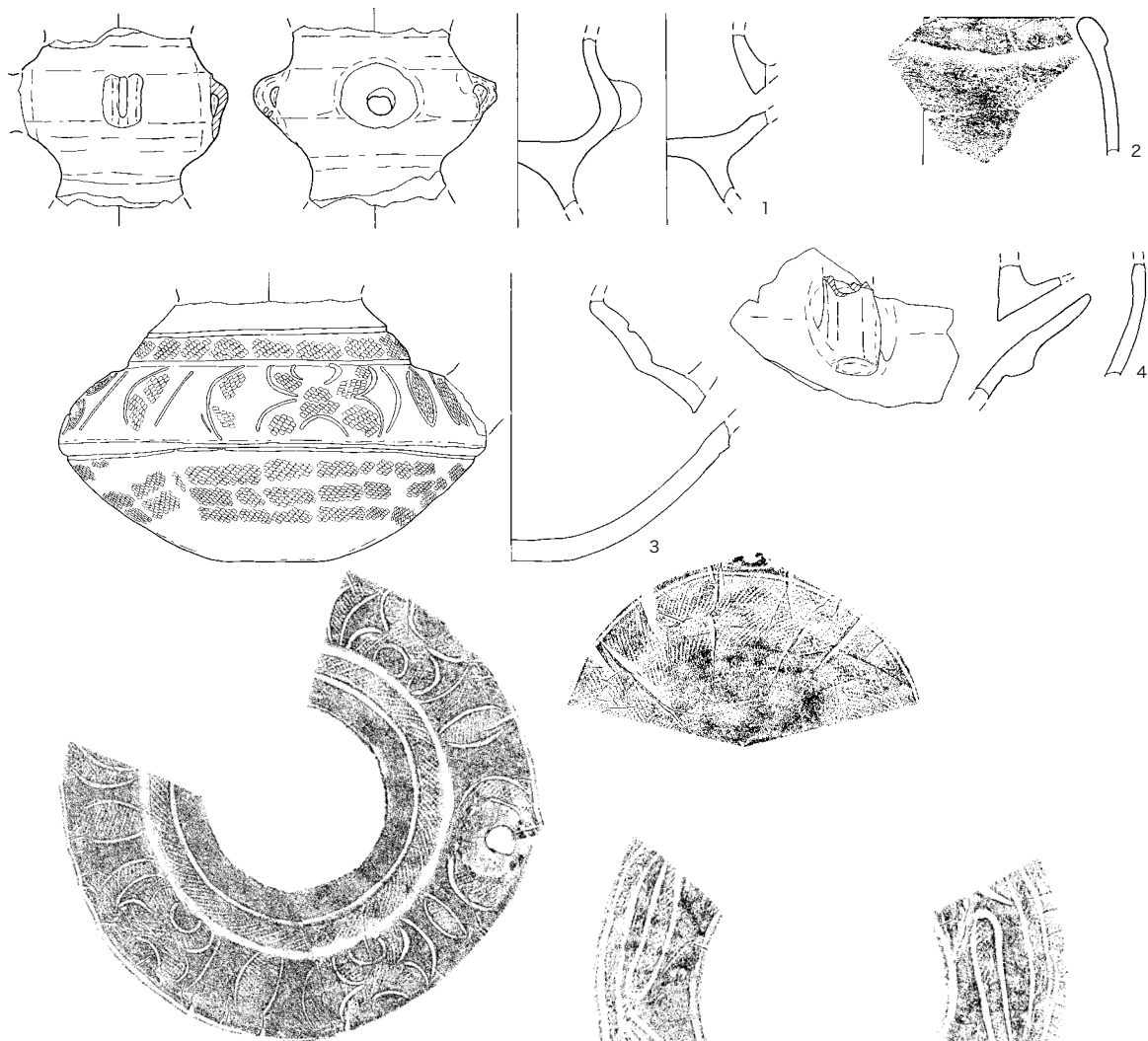


第154図 B区出土土器(34)

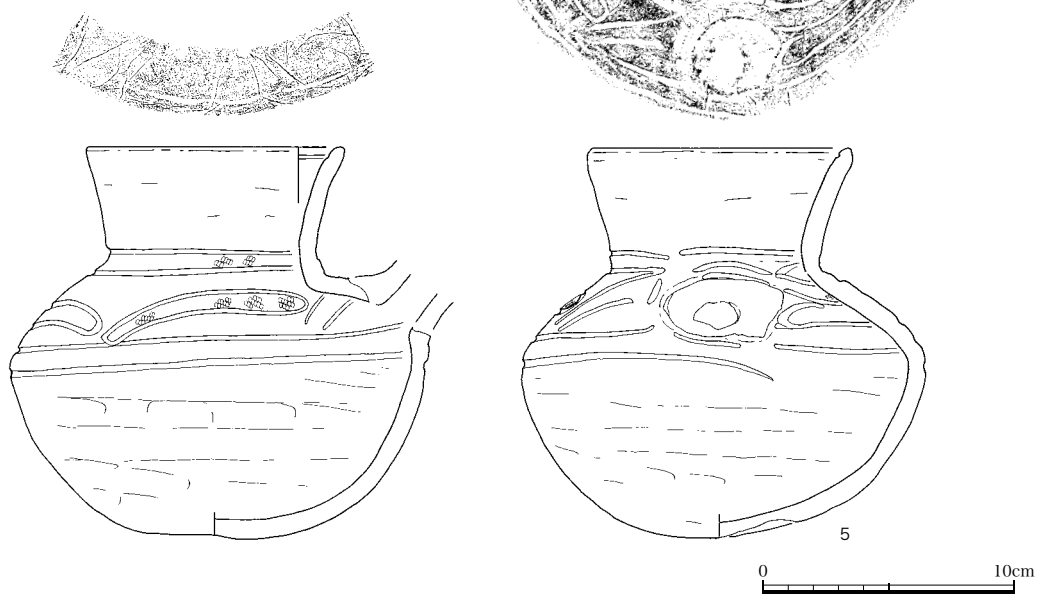


第155図 B区出土土器 (35) Eウ12-16

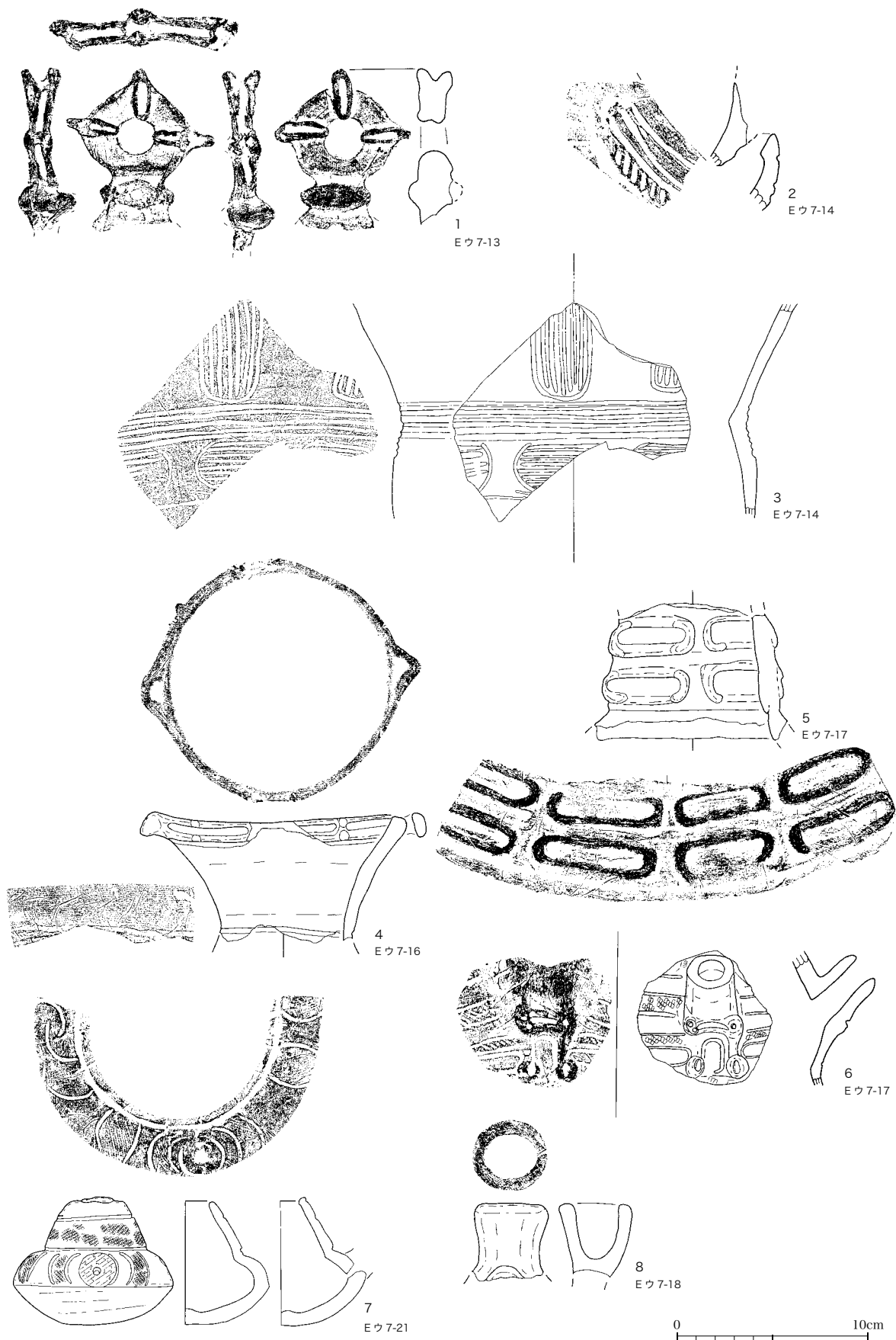
Eウ 6-25



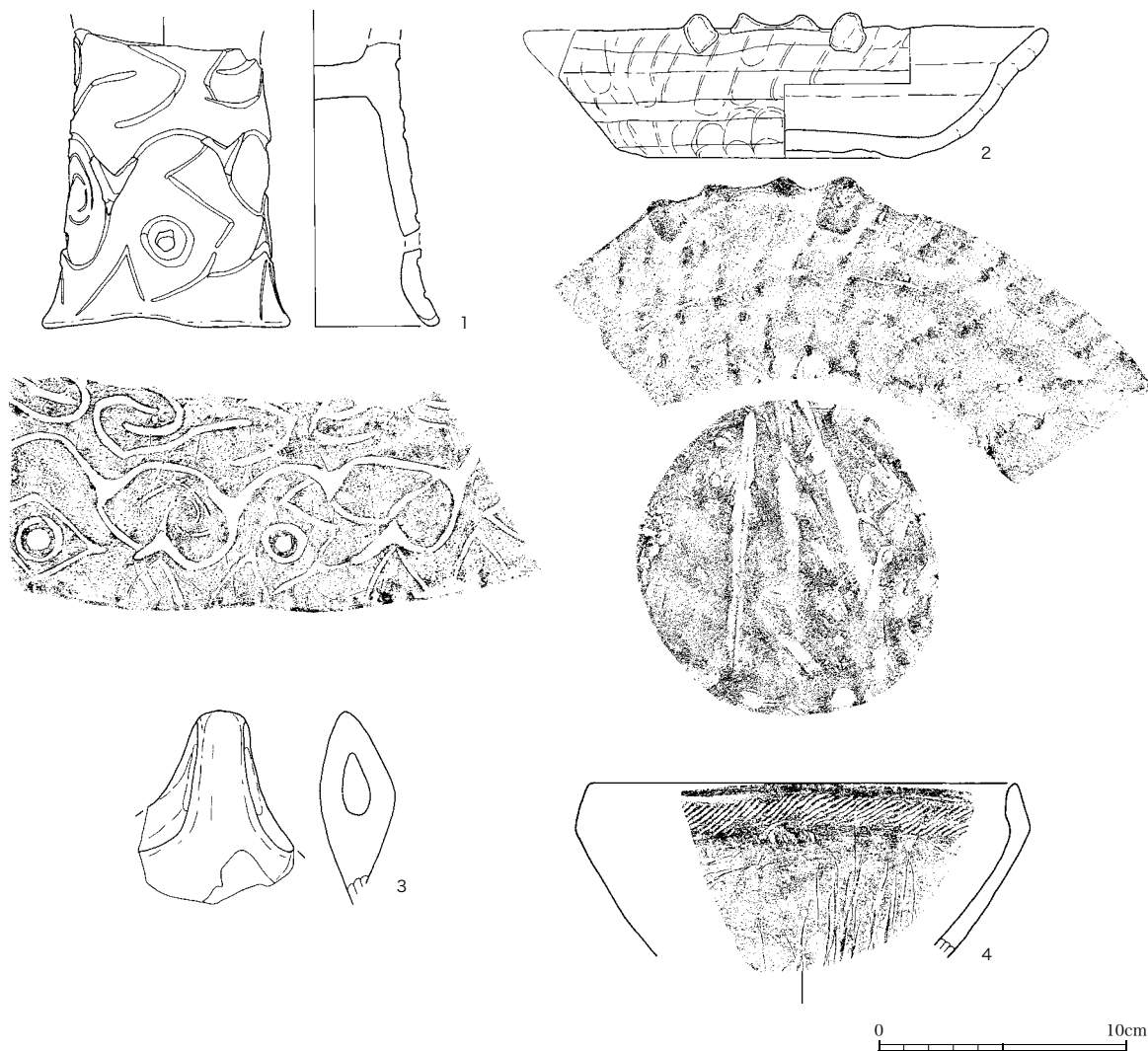
Eウ 7-13



第156図 B区出土土器(36)



第157図 B区出土土器 (37) Eウ7-13・14・16～18・21



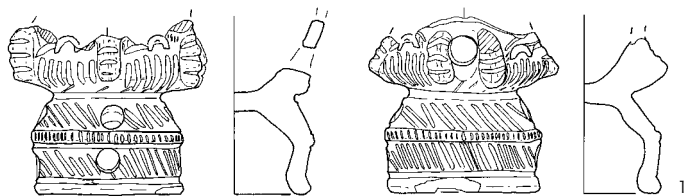
第158図 B区出土土器(38) Eウ7-23・24

波頂部を欠損しているが、4単位となる大波状縁深鉢で、口縁部体部とも無文で比較的丁寧なミガキ調整が観察される。2も高井東系でやや大きく開く瓶口状突起が特徴的である。第148,149図はEウ11-19グリッド出土土器である。第148図1は加曾利B式突起、2以下が後期後半の資料で隆起帯刻みの3,5、安行2式大波状縁深鉢の6,7等がある。安行2式例は比較的典型例に近い。第149図1は口縁部の狭い施文域に玉抱三叉文が連続的に配される土器で、全周近く遺存している。三叉文が玉の刺突や下端の横位区画沈線と接して描かれる点など注意される。大洞B2式と推定する。Eウ12-7グリッドの第149図4は粗製土器や副文様体系にも近い構成の文様が磨消縄紋で描かれている土器である。

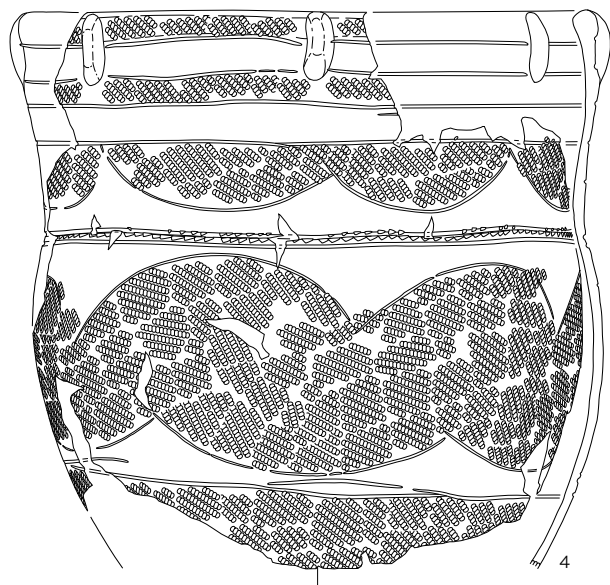
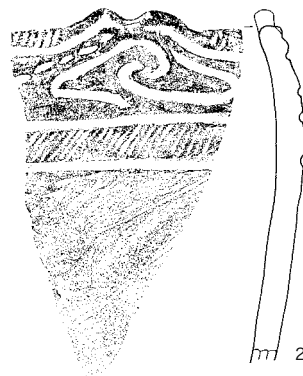
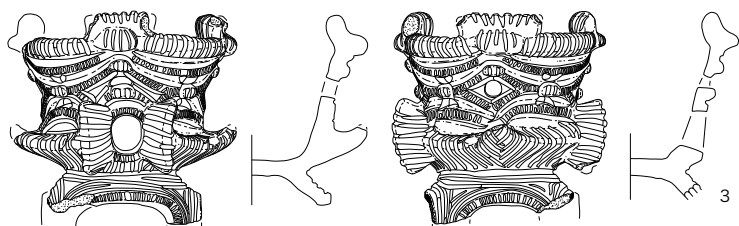
第150図はEウ11-20グリッド出土土器で型式順の配列を為し得ていない。8の瘤付系土器は破片数多いもののあまり接合しない。左下に示した破片から体部下半も階段状の入組文が配されるようだが判然としない。施文はやや雑で沈線や刺突の幅・深さなどは不均一、施文後のミガキも丁寧に欠ける感がある。12は紐線文系の深鉢でレンズ状の区画文内に矢羽根状の条線(細かい線)が充填されている。

第151図はEウ11-23,11-24グリッド出土土器で、後期の良好な資料を主に選択図示した。高井東系の1、凹線状の沈線がある2,3、曲線的な沈線文様のある6、瘤付系深鉢で横繫がりの入組文が配される8等、注目

Eウ 11-4



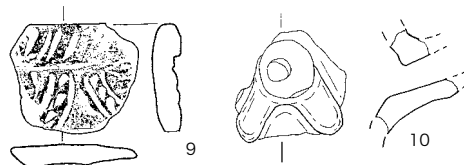
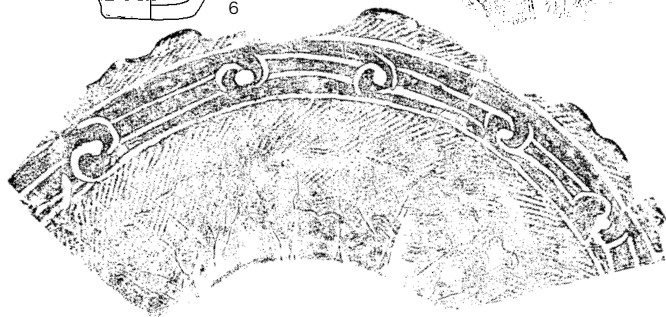
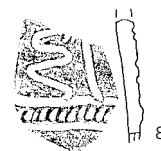
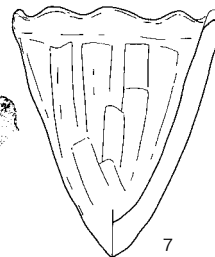
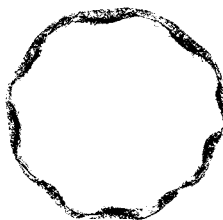
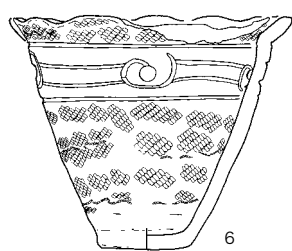
Eウ 11-10



Eウ 11-15

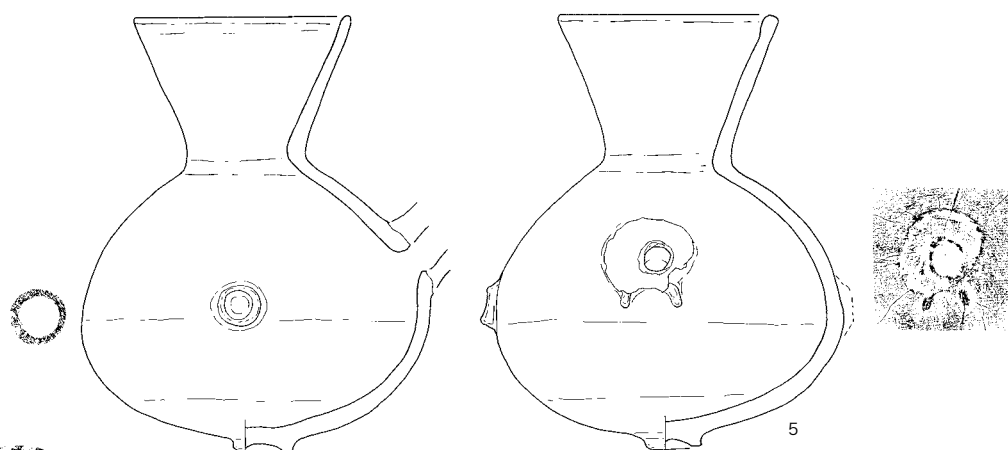
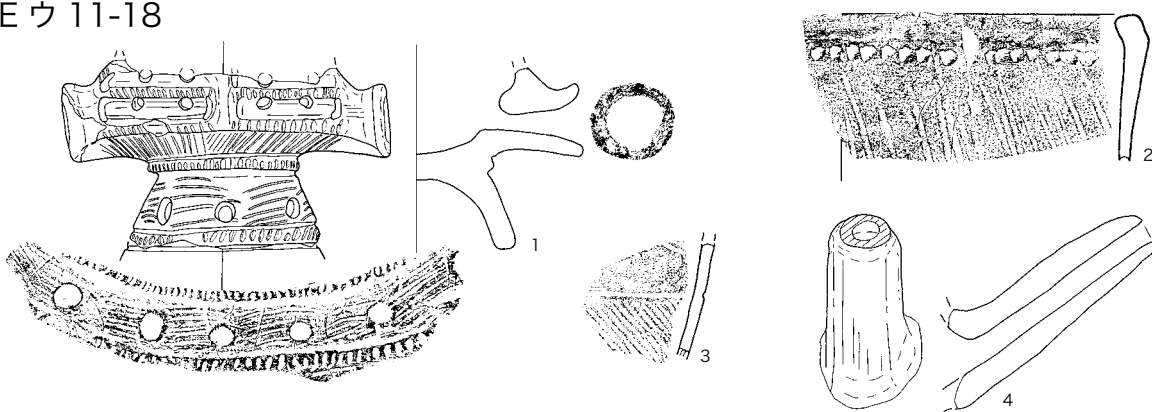


Eウ 11-14



第 159 図 B区 出土土器 (39)

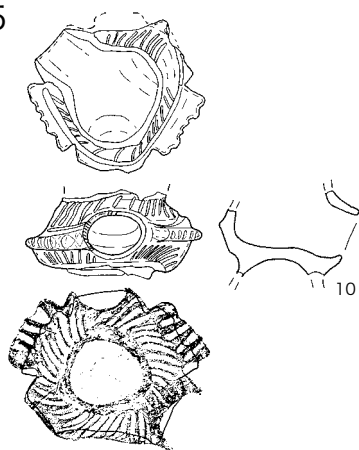
Eウ 11-18



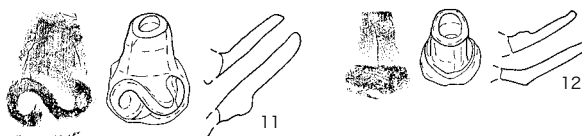
Eウ 11-20



Eウ 11-25



Eウ 12-1



第160図 B区出土土器(40)

される資料がある。第152図はEウ12-2,6グリッド出土土器で、ここでもやや異質な、或いは注目される資料を主に示した。8は接合思わしくないが、三角形の透孔が確認され、台付鉢と判断される。7も異質な例で入組文や三角形区画を組合せた文様が沈線により描かれるもので、要所にやや大きめの瘤状突起が配される。口縁部突起の上面や側面に条線状の多重線が加えられる。小形の鉢となるか。

第153図でもEウ12-8等幾つかのグリッド出土土器から注目される資料を選択して図示する。第153図4はこの破片左側に第152図2と接合することが判明した土器だが、接合後の図は作成・提示できなかった。グリッドとしては少なくとも4mの距離を持つての接合である。突起を挟んで斜傾線付きの三叉文が配されるもので、作り・施文後のミガキとも丁寧である。3も丁寧なミガキのある土器で、口縁部の三叉文、体部の入組文端部の三叉部いずれも若干の挟り込みが為されている。第154図にはEウ12-13,12-11グリッド及び詳細グリッド不明のB区出土資料を示す。1は大木8a式に関わる土器で、本遺跡出土土器では最も古いものとなるか。3の小形鉢は口縁部体部に文様が配されるもので、口縁部の入組三叉文では一部の単位で下端に接したり斜方向の線や弧線が加えられ羊歯状文の萌芽的な側面を見出すことができる。体部の帯状弧線及び玉抱三叉文も特徴的である。突起下の円文内に縦長の突起を擁し、左右に三叉文が配される小形の土器5、瘤付文様の若干レンズ状・弧状となる帯状部と縦長突起の組み合わせによる6の鉢、沈線区画内羽状縄紋充填の東北系の壺または注口土器の7などいずれも注目される資料である。

第155図はEウ12-16グリッド出土土器で、ここでは一般的な資料も含め示した。7は隆起帯縄紋とやや幅広の沈線で安行1式波状縁深鉢の文様が描かれるもので、北関東ではしばしばみられるものである。15は透かしの円孔があるもので、この周囲を円状に囲み、さらにそこから横方向に帯状沈線帯＋瘤状突起が配されている。17は注口土器、19は角底土器である。

第127・128図に示したEウ6-25グリッド出土土器で当該部分での掲載が漏れたものを第156図に補足提示する。1の異形台付、3の注口土器が注目される。5の注口土器はEウ7-13グリッド出土土器で、本来第131,132図に示すべきものである。口縁部や体部は粗いケズリに近い研磨調整と観察される。頸部文様は帯状部が斜方向に延びる文様で、瘤付系注口土器前半の弧線文様との関りも推測されるが検討が必要である。

第157図はEウ7-13,14,16,17,21グリッド出土土器で、これも本来第131～137図に合わせて組むべき資料である。1は高井東系の突起で表裏側面上面に貼付文様や沈線が施されている例、5は東北系の壺形または注口土器の頸部文様部分と推測されるが、隆帯による楕円文の連続配置は珍しい。4は口縁部に狭い文様部があるもので、突起2単位は欠失している。7は小形の注口土器で注口部対応の口縁上端にのみ小波状隆線が加えられている。丁寧な作りで無文部は良く磨かれている。3は弥生中期の土器で、薄手硬質で丁寧な作りの印象を受ける土器である。文様意匠の全体像は判然としないが、中部方面との関りなども含め検討する必要がある。この資料がB区でも下位のX層から出土したことは、この層（および上位のV～IX層）が縄紋後期の層位としてプライマリーな土層では無いこと、或いは攪乱の存在を暗示しており、注意が必要であろう。

第158図はEウ7-23,24グリッド出土で、第138図提示資料の補足である。1は台付鉢の脚部で円形透かし孔が2単位あり、入組文や鋸歯文が描かれる。器面が荒れていることもあるが、沈線の幅や深さも不均一で、施文線のミガキも観られないなど、雑な作りの印象を受ける。2は底部や外面に輪積痕を残す皿状の土器で、突起も付されている。内面は通常の土器に近いナデ～ミガキ調整。底部の太い凹線もしばしばみられるもので輪積などの接合痕跡を切るような線と観察される。3は加曾利EIV式でかなり摩滅している。

第159図はEウ11-4,10,14,15グリッド出土土器で、第139～146図に組むべきものである。1,3の異形台付土器、半周近く復元された4の安行1式深鉢、6の玉抱三叉文配置の小形深鉢などがある。6は器面が

若干荒れていることもあるが、無文部や内面のミガキは顕著ではなく、やや丁寧さに欠ける感がある。突起下に入組文～三角形文様が描かれる2もあまり例を観ないもので注目される。7の小形深鉢はミニチュアとしても良いもので、ケズリ痕跡のある体部、波状の口縁部、自立できない尖底などの特徴がある。

第160図はEウ11-18～12-1グリッド出土土器の補足で、これも本来第147～150図等に合わせて示すべきものである。1の異形台付土器、5の瘤付系注口土器、高井東系突起の6等を示す。5は注口部や一部突起以外完存している。底部の突出など瘤付系の特徴を良く示しており、搬入の様相を窺わせる。10は異形台付土器かと思われるが、3単位である点やや異質である。

B区出土石器 (第161～191図)

B区出土石器の整理もA区と同様で、遺構出土石器以外は機種分類及びカウントの後、凶化遺物を選択、以降の整理組上にのせた。かなり限定しての任意の選択であり、遺跡や地点の特徴を示すものとは言えないかと思われる。また、確認不十分ではあるが、特徴的な出土状態を示すものは無く、包含層中から土器等の他の遺物と併せて出土している。詳細なチェックを行えば、特定の機種がある数グリッド範囲に偏在するような可能性もあろうが、現段階では不明である。

第161図はS10出土石器で、打製石斧1点のみ示す。他にS10では磨石3点などがある。正面図右側縁の括れ部敲打が顕著である。第162,163図にはS12住居跡出土の石器を示す。第162図1,2がチャートの



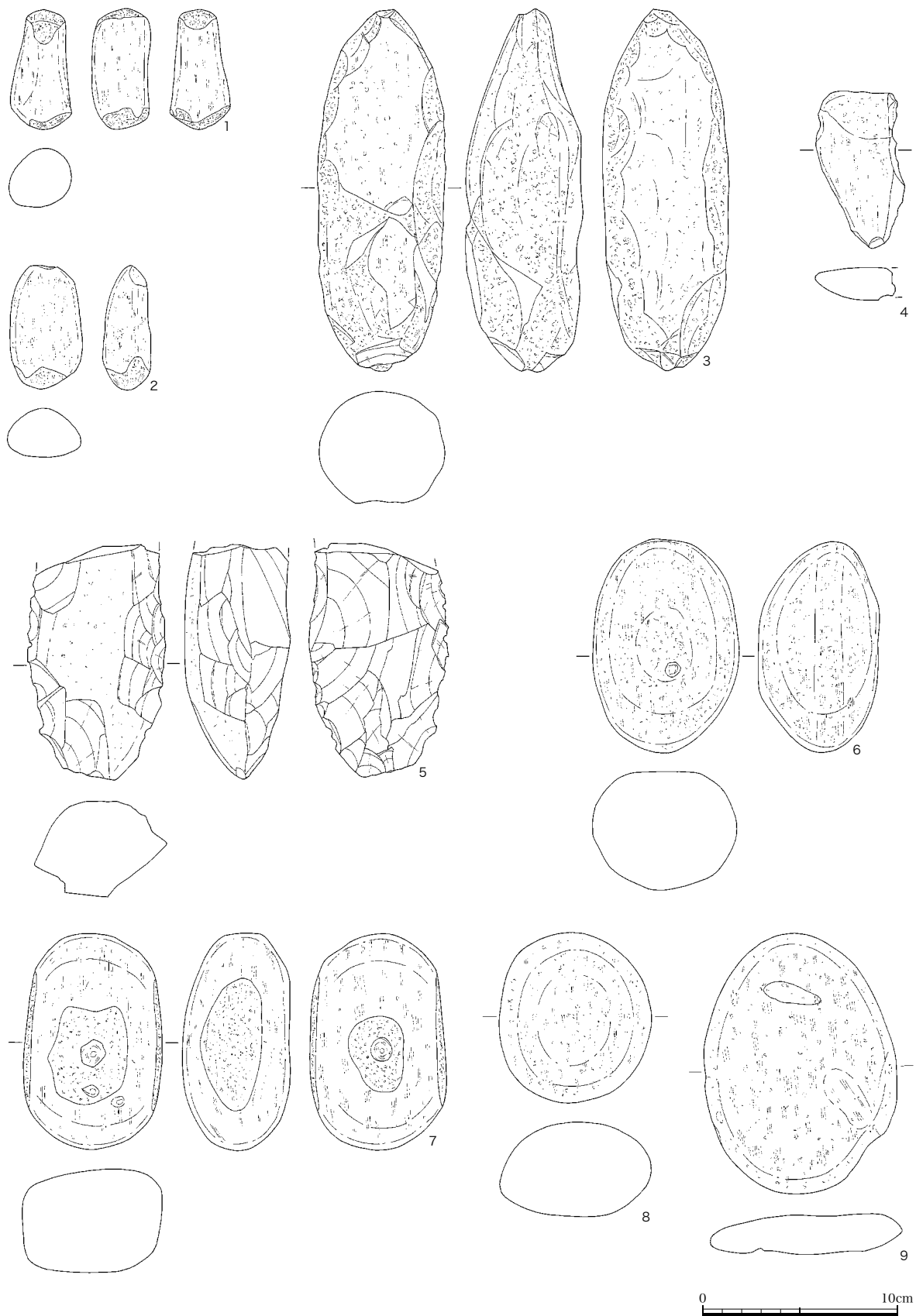
第161図 B区出土石器 (1) S10、S13



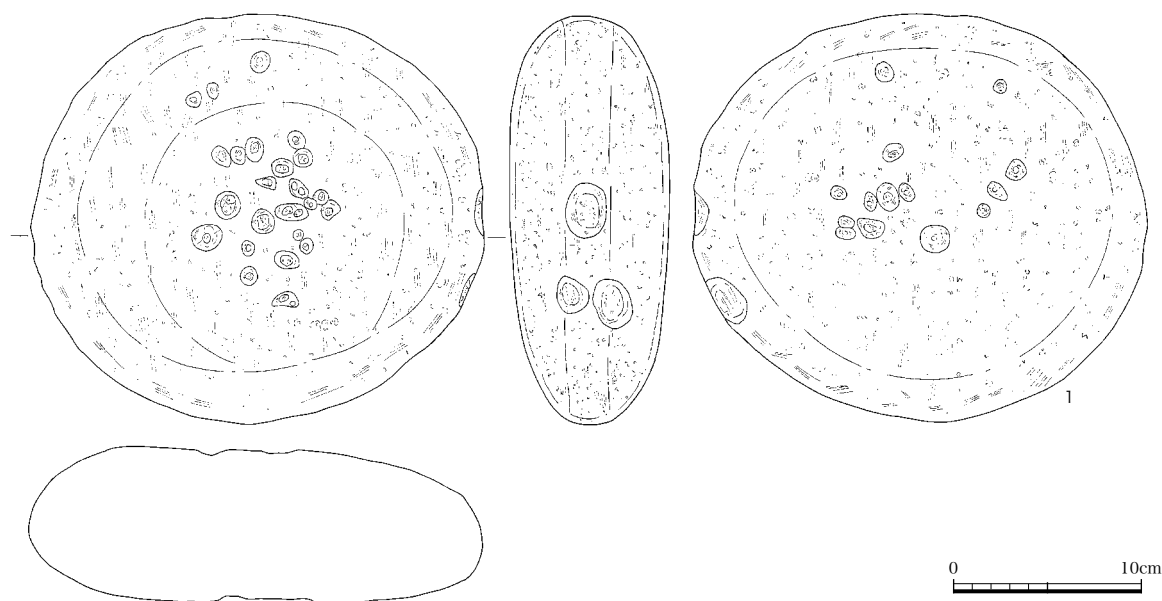
第162図 B区出土石器(2) S12



第163図 B区出土石器(3) S12



第164図 B区出土石器(4) S15



第165図 B区出土石器(5) S15

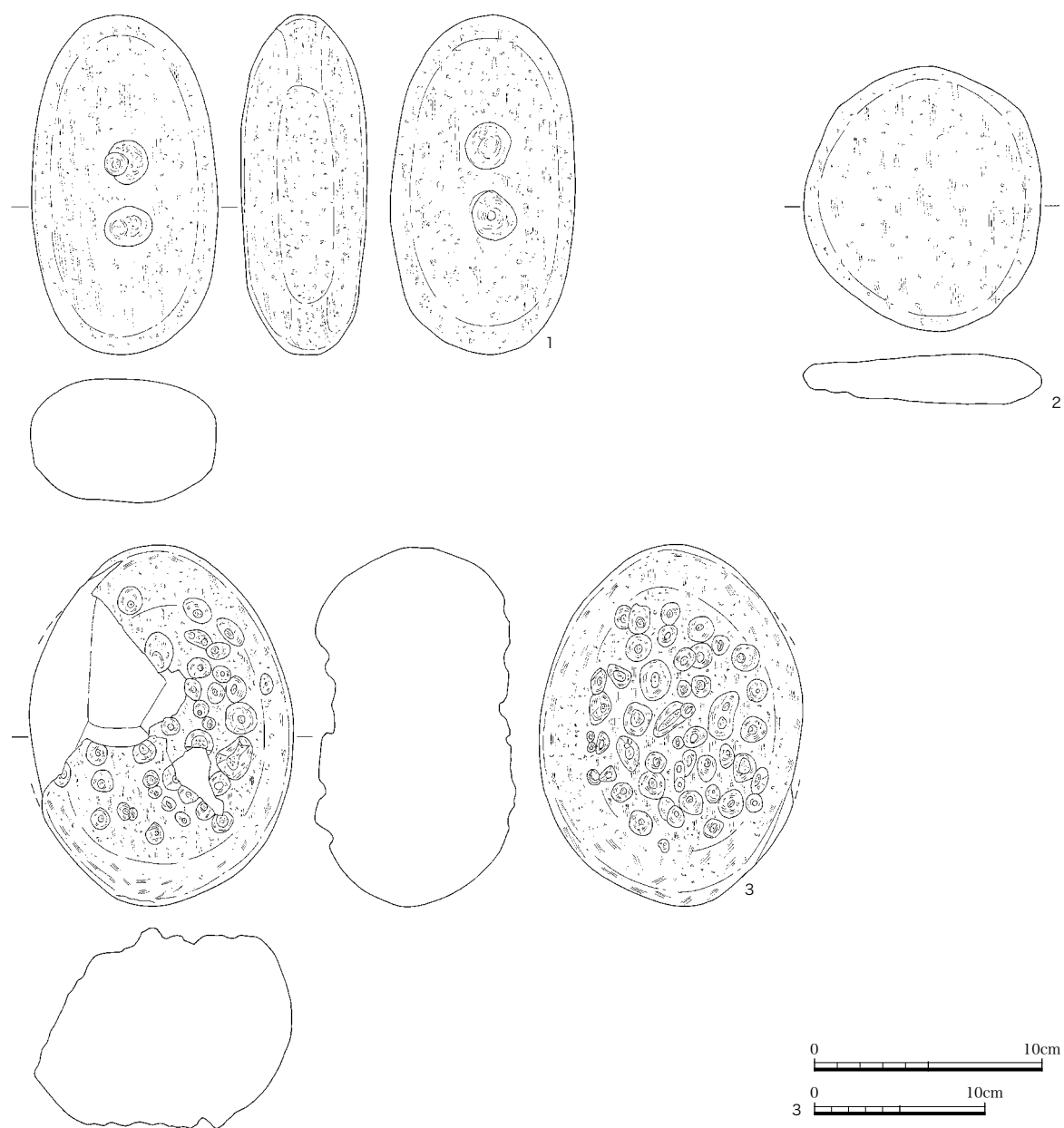
剥片石器で、1の下端では概ね両面の二次加工がある。3,4は石錘で4はかなり細長い形状の礫を用いている。5はかなり大きな打製石斧で、刃部近い縁辺部で顕著な摩滅痕が観察される。6は砥石、7は扁平礫の縁辺に剥離加工を加えているもので礫器と判断した。8もやや異質な剥片素材の敲石である。側縁～上下端部に顕著な敲打痕がある。9～第163図6は磨石である。第163図1はこの時期特有の表裏面と側面との角が明確な形態の磨石で、4もやや異なるが近い作りである。第163図4,5は表裏の中央に浅い敲打による浅い窪みを有している。第163図7は石皿類と判断したもので敲打痕のある浅い窪みが数ヶ所認められるものである。

S13は浅い竪穴状の遺構で図示した以外には石鏃類・スクレイパー類各1点、剥片石器1点、磨石5点、チャートの原石剥片類が53点出土している。ここではチャートの剥片石器2点のみ示す(第161図2,3)。いずれも二次加工ある剥片とするが、さほど丁寧な二次加工ではない。第164,165図はS15竪穴住居跡出土石器で、この遺構からは礫器4点、磨製石斧4点、砥石1点、磨石45点、敲石6点、石皿類10点、チャート原石剥片類26点が出土している。1,2は小形の敲石で先端山形状となる特徴的な形態の例である。3は磨製石斧未製品で、研磨が殆ど及んでいない段階のものである。4は砥石、5は一応礫器とするが、打製石斧の可能性も残る。下端における刃部作出の二次加工が顕著ではなく、むしろ左右側縁の二次加工が目立っており、打製石斧との判断を躊躇させる。6～8は磨石、9は扁平で小さめの石皿である。第165図1は多孔石兼石皿だが、孔の数はさほど多くない。比較的整った形であり、側面等整形している可能性がある。

第166,167図にS16出土石器をまとめた。S16では、石鏃類1点、剥片石器類1点、打製石斧1点、砥石2点、石錘1点、磨石62点、敲石2点、石皿類12点、チャート原石剥片類37点が出土しており、代表例を図化した。1,2は二次加工あるチャートの剥片で、いずれも両極剥片素材である。3の石錘は線の細い有溝石錘で、十字溝となっている点やや珍しいものである。4は小形の打製石斧で比較的整った形態を示す。5は敲石、6は砥石、7～10が磨石である。第167図1は表裏に二連の凹みがある磨石、2,3が石皿である。3は表裏多孔石面で、いずれも全体に中央が若干凹む。



第166図 B区出土石器(6) S16

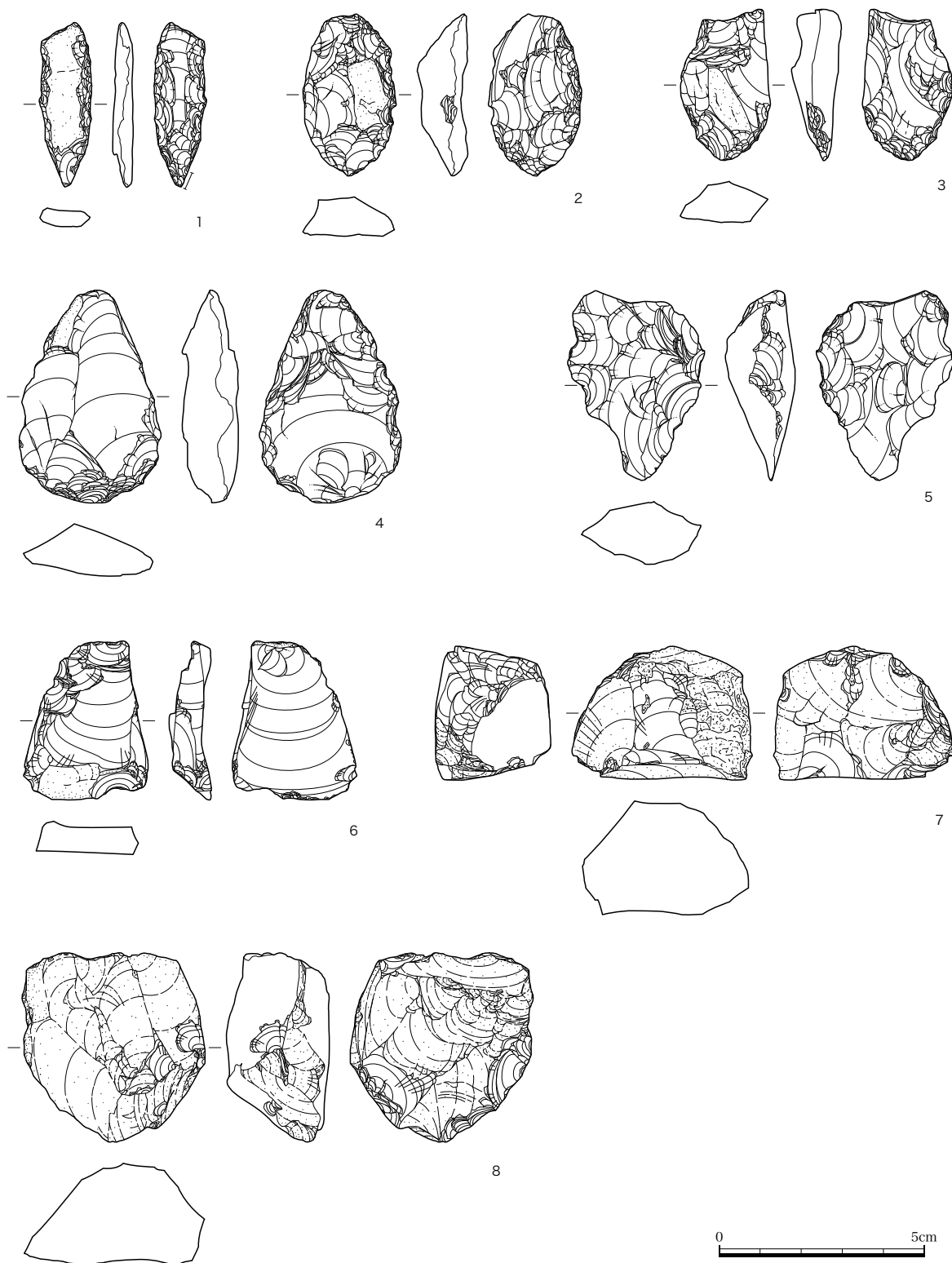


第 167 図 B 区 出土石器 (7) S16

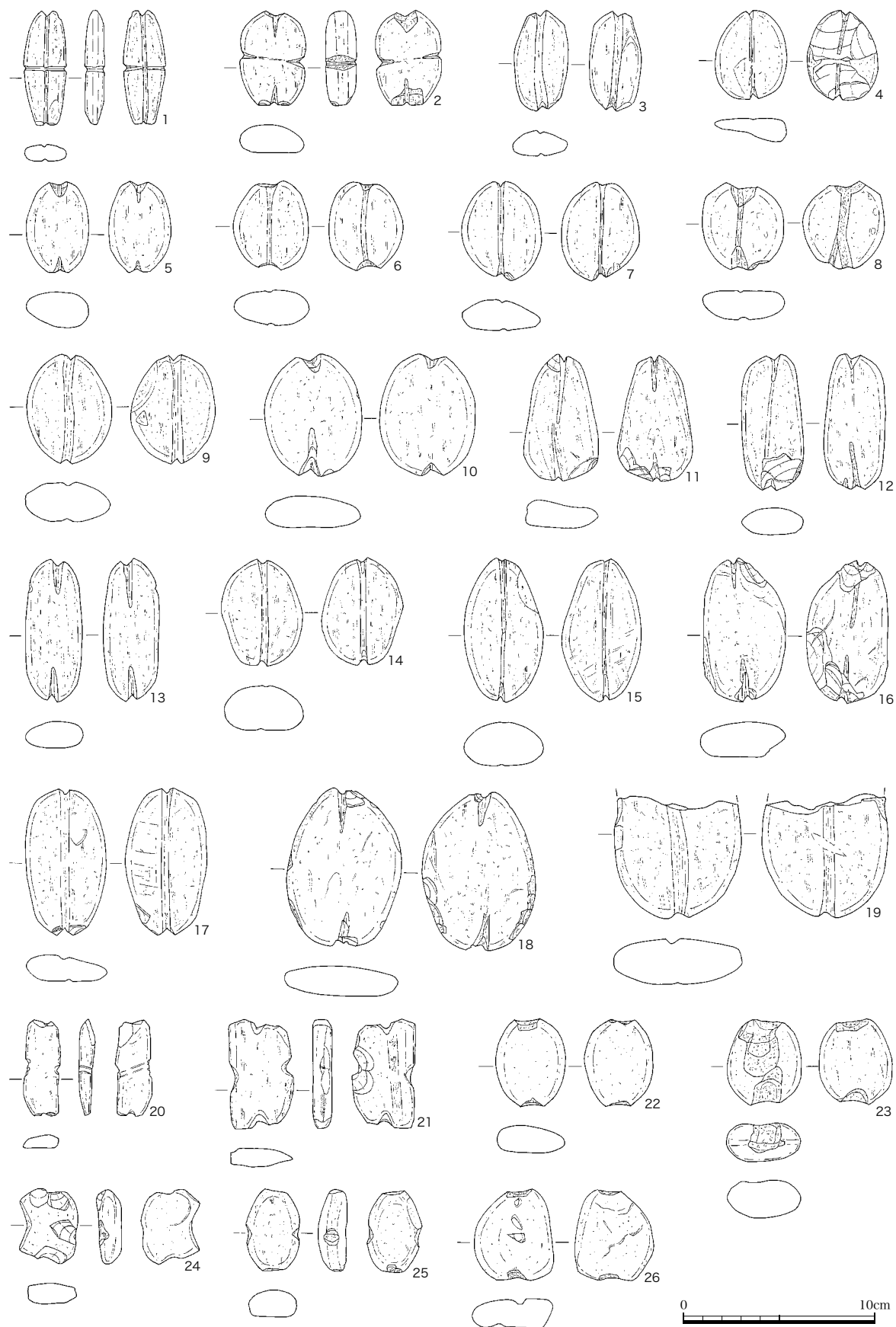
第 168 図が B 区出土の剥片石器である。1 は石錘で本来第 9 節 427 図に示すべきものである。2～4 はスクレイパーもしくは石鏃未製品と判断されるものである。5,6 は二次加工がある剥片で、5 はスクレイパーとの判断もあろうか。7,8 は黒曜石の石核である。

第 169 図以降に包含層出土の主に礫石器を示す。第 169,170 図は石錘で、項目名を付しての分類ではないものの、形態的特徴などに注意して配列した。第 169 図 1 が十字状の有溝例、2 は切目石錘だがやはり十字状に長短軸ともに切込みがある。3 以下は有溝石錘を概ねサイズ順に示す。溝が途切れているものも多く、切目に近いものもある。20 は石剣転用の石錘、21 は砥石転用の石錘で、帯状の砥面痕跡が残っている。22

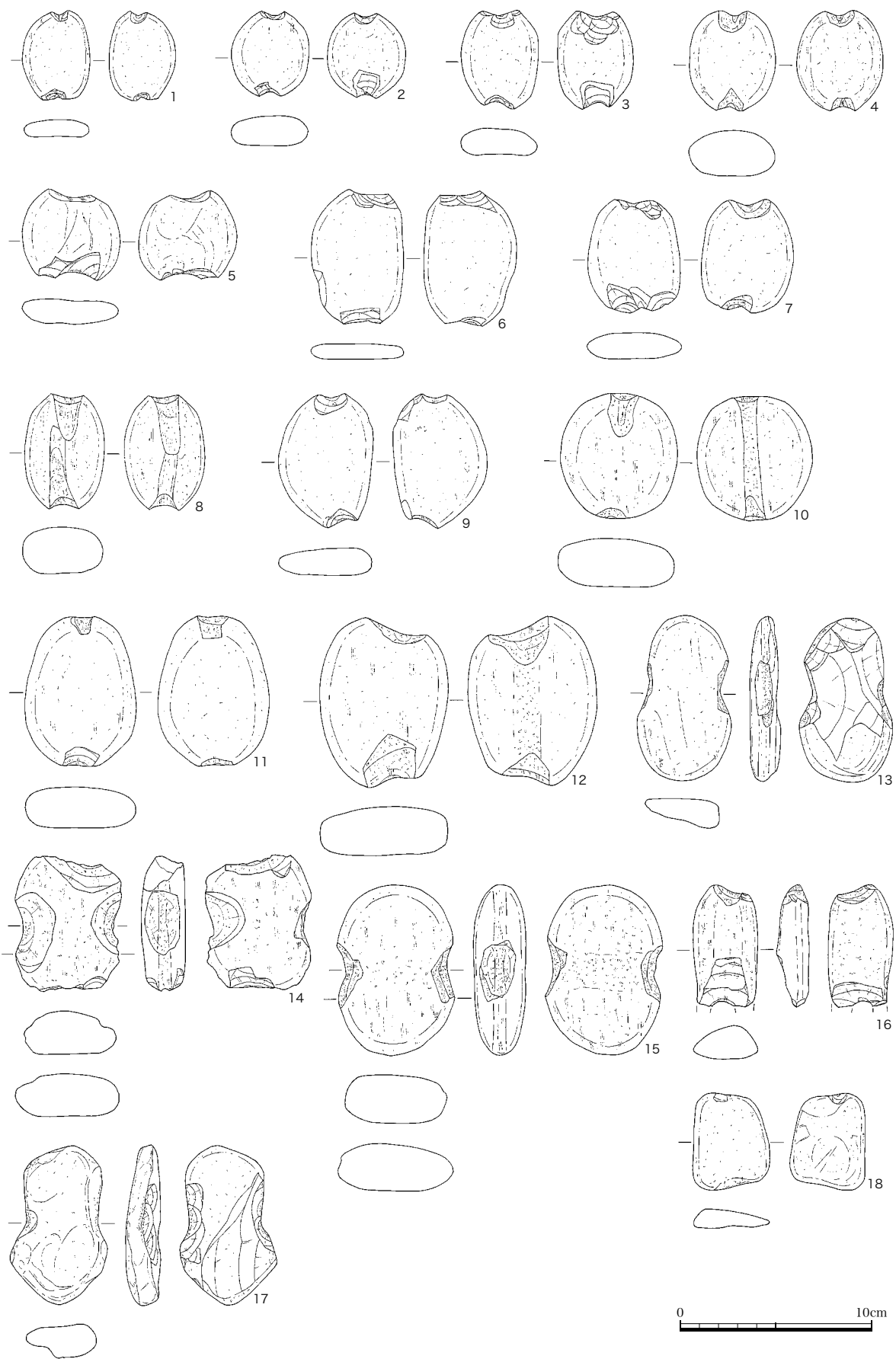
(→P181)



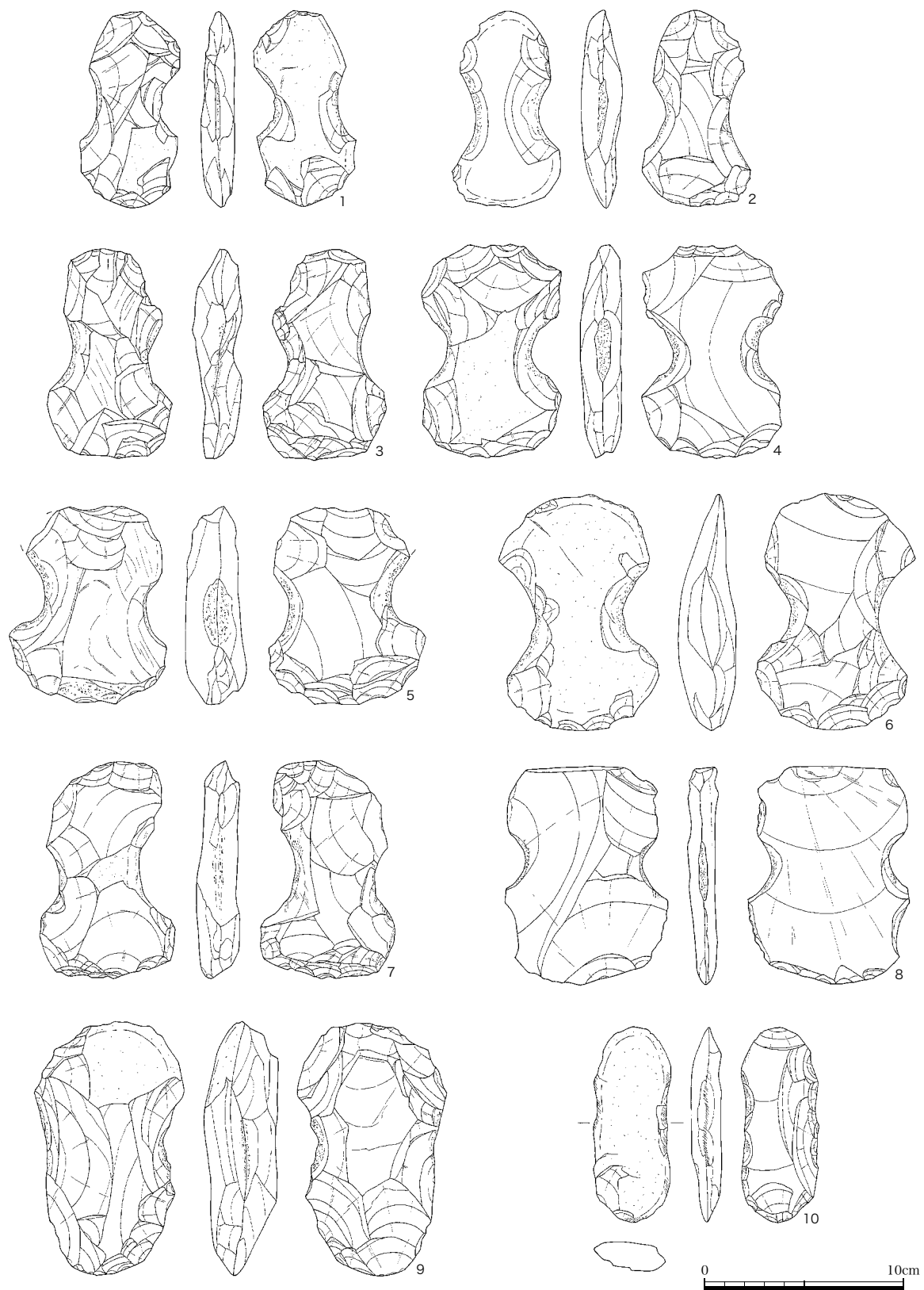
第168図 B区出土石器(8)



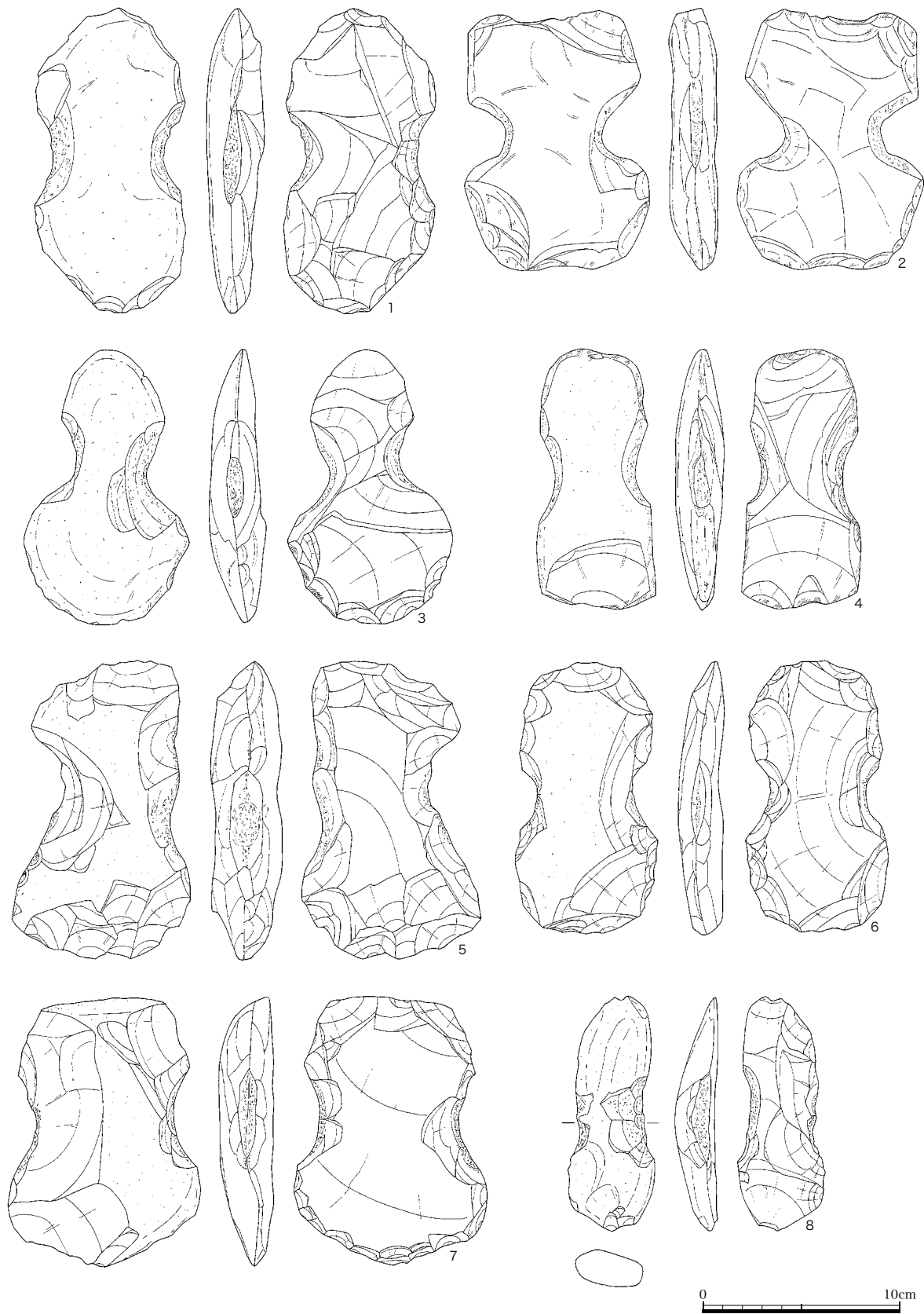
第169図 B区出土石器(9)



第170図 B区出土石器(10)



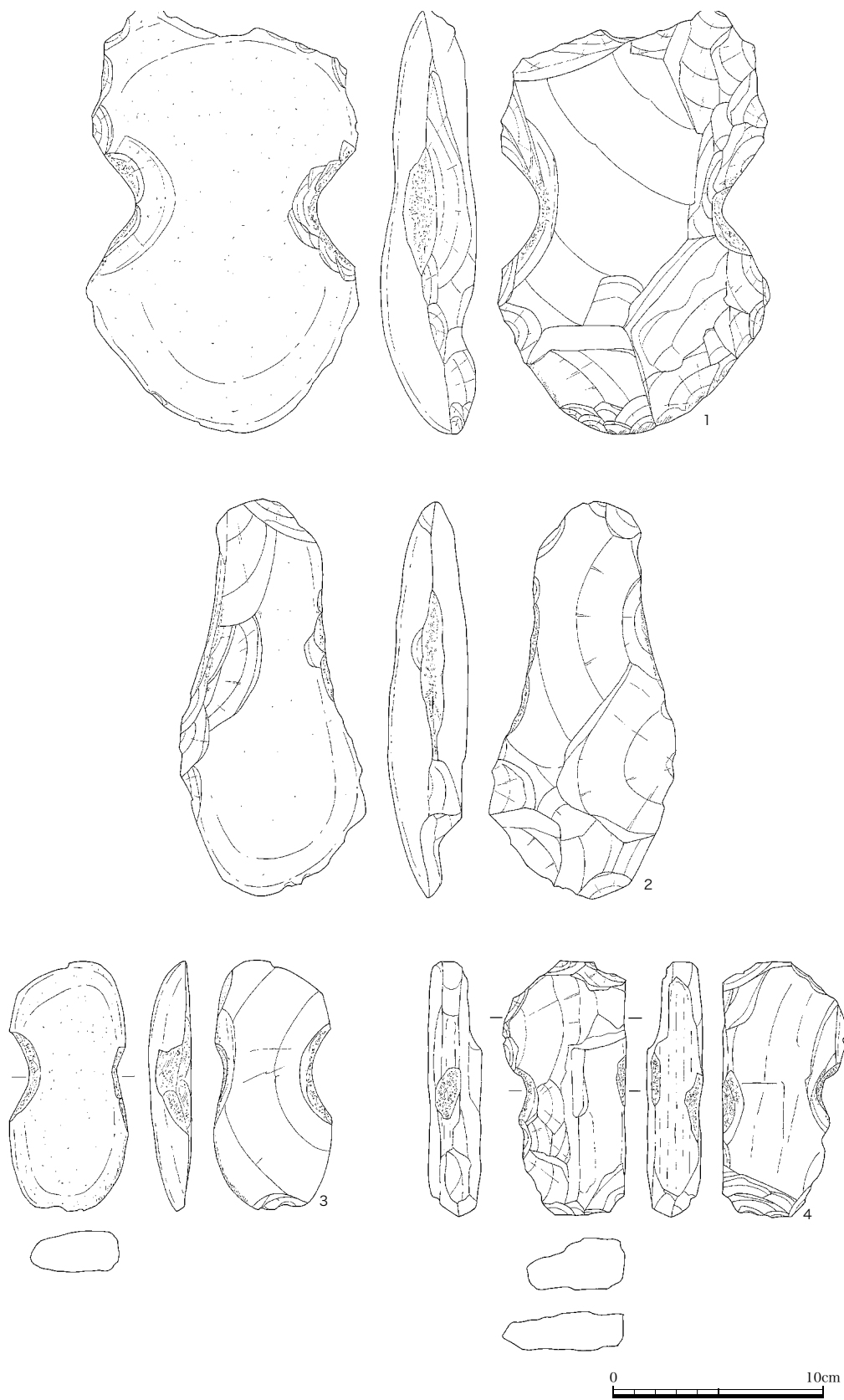
第171図 B区出土石器(11)



第172図 B区出土石器(12)



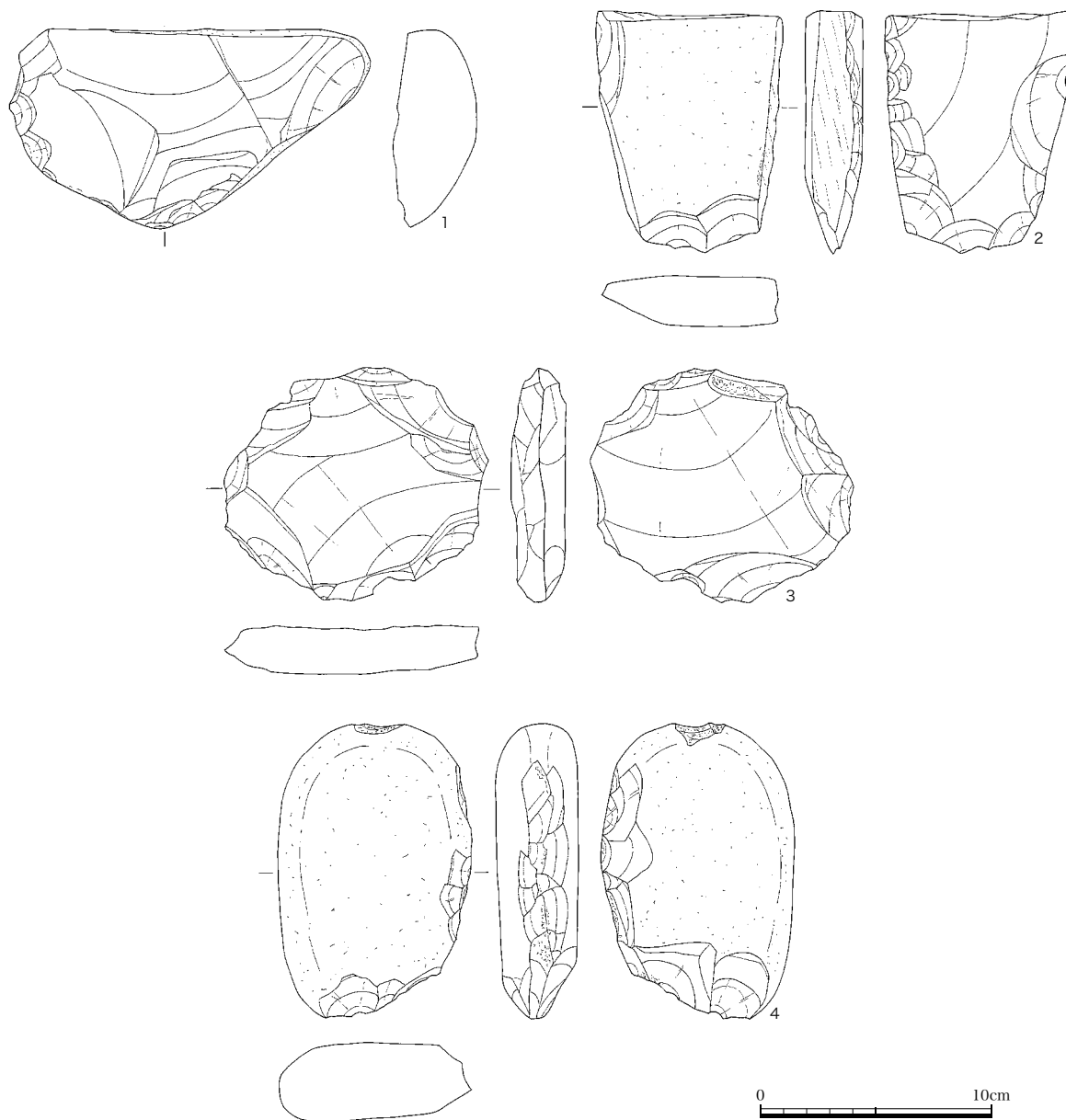
第173図 B区出土石器(13)



第174図 B区出土石器(14)



第175図 B区出土石器(15)



第176図 B区出土石器(16)

以降は打ち欠きのいわゆる礫石錘、第169図23、第170図8,10,12など、両端の間を繋ぐ帯状の擦れた痕跡が観察されこの部分がやや凹んでいる例もある。第170図14は長短軸の4箇所打欠き剥離があるもの、同図15は短軸に打欠きがあるものである。17は石錘として良いか不明なもので、側縁剥離からは剥片石器の可能性を窺わせる。18も剥離や擦れがあるものの、石錘として良いか検討を要するものである。

第171～174図には打製石斧を示す。B区では121点と多量の打製石斧が出土している。A区やC区と比べるとかなり多く、このB区への偏在傾向を認めて良さそうである。後期末～晩期前半が多いB区という時期との相関が第一に考えられるが、地点の特性ということも考慮すべきかもしれない、検討を必要としよう。またB区内の偏在などの細かな出土状態の検討には至っていない。現状での確認段階では、特徴的な出土状態を示した例は認められない。幾つかの形態例が確認されるが、A区同様詳細な検討や分類は為し得ず、羅

列的な配置及び記述とする。全体的に不整形、左右非対称の例が多く、刃部作出にかかる剥離加工も主に片面の片刃状の例が目立っている。

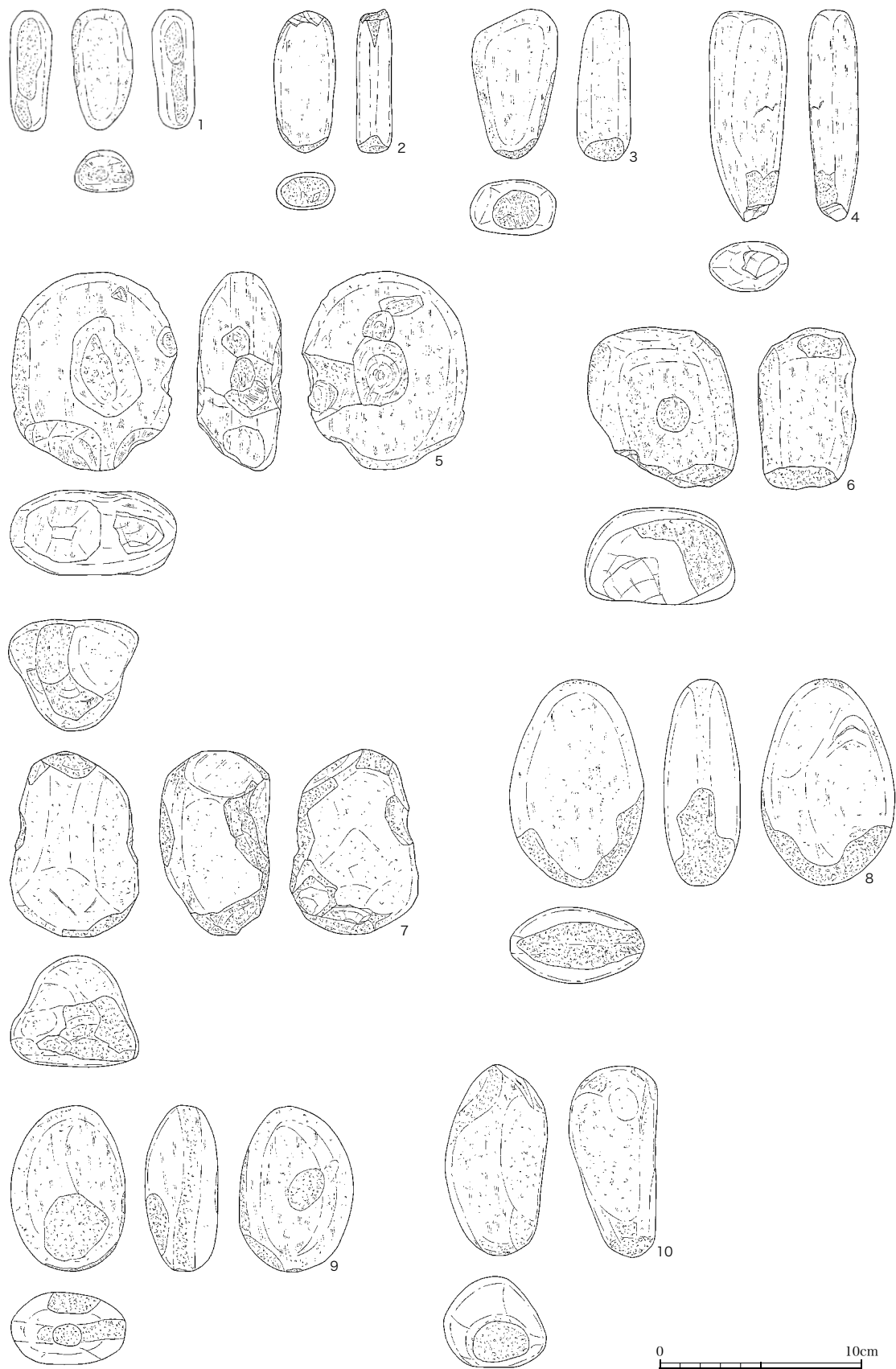
第171図には小形～中形で比較的整った分銅形態の例を主に示す。8は縦長剥片素材の例で、刃部を含めあまり二次加工がされていない点が特徴となる。未製品や製作途中の放棄品の可能性もあろうか。10は括れが弱く短冊状にも近い例だが、括れ部の敲打は認められる。第172図も小形～中形サイズで、2,3を除き括れが弱いものが目立つ。6のように上端も刃部状の加工がある例（或いは天地逆？）も認められる。5や8のように括れ部敲打も片側の方が顕著な例は多い。3は刃部～側縁にかけて摩滅～擦れ痕跡が確認されるもの。4も刃部の擦れが比較的目立つ。第173図はやや異質なものを主に示す。1,5は縦長で厚みがあるもの、2はかなり不整形で刃部も鈍角なもの、3は撥形に近い形状で表面は殆ど加工されないものである。2は未製品であらうか。4は上下端～左右側縁全体に敲打～摩滅痕があり、独鈷石未製品等の可能性がある。6も縁辺全周が敲打～摩滅しており、別機種の可能性がある。第174図も大形の例（1）、異質な例（2～4）である。1は大形だが括れ部の剥離敲打は丁寧で、刃部も片面では比較的細かい剥離加工がある。擦れ摩滅痕は使用痕跡であらうか。2は刃部作出が不明瞭不徹底で、未製品の可能性を窺わせる。3も同様に刃部の二次加工が殆ど観られないもの。4は極めて異例となる緑泥片岩素材のもので、機種判断に疑問な部分が残るものだが、下端の加工や括れ部敲打の特徴から打製石斧として扱った。

第175図は磨製石斧を示すが、機種判断に問題を残すものも含む。数も少ないことから、分類などは行っていない。小片を除くほぼ全てを示した。1～3は遠隔地石材の小形例で、丁寧な研磨が特徴的なものである。4は完存例だが半分程度の遺存例も目立つ。7は剥離～一部敲打の未製品と判断したが、別機種の可能性も残す。8も形態不整形で機種判断が難しい。9は便宜的にここで示したが、石剣類の可能性が高いか。10はやや大形の磨製石斧未成品だが使用している可能性もある。11も磨製石斧未製品と考えたものだが、これも他機種の可能性があるあろうか。

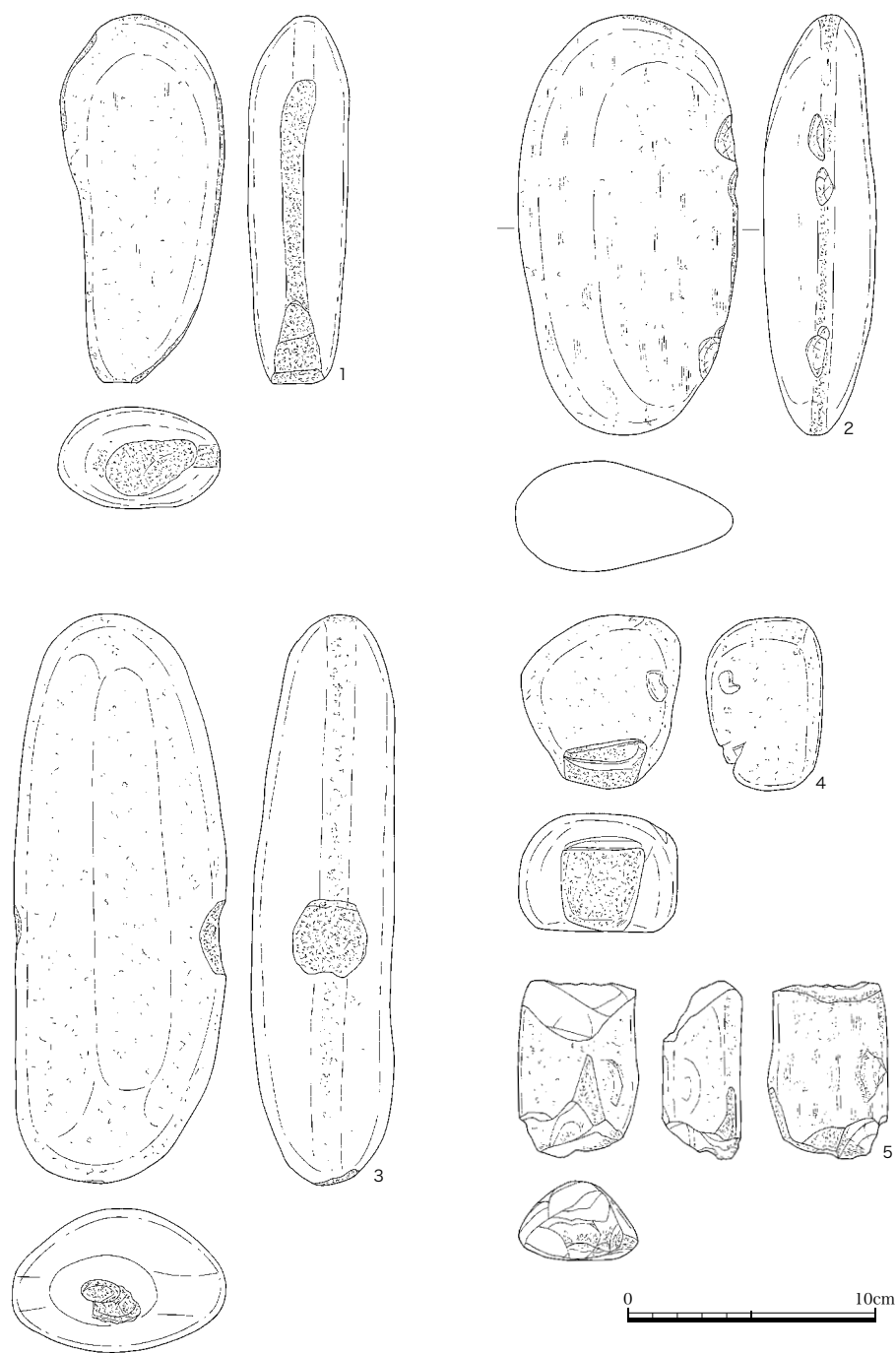
第176図は礫器と判断したものである。図示した例は少ないが、100点を超える数量が出土しており、本来これらの提示と検討が必要なものである。ここで示したのも代表例・典型例とは言い難いものだが、定型性に欠けるものであり、全体像を示すのは難しい。スクレイパー類と判断した方が良い例も含み、区別は便宜的なものである。1,2,4は礫面を多く残す。3は縁辺の一部に二次加工があるもの、4は下端部と右側縁に剥離加工がやや集中しているものである。

第177・178図は敲石である。B区で96点の出土とカウントしたが、磨石との兼用例も多く、問題も多く残す。ここでの図化遺物の提示も問題を残すが、敲打痕の顕著なもの、やや異質なものの、典型例に近いものを示すよう努めた。第177図1～4は小形棒状の礫を素材とし下端を主に敲打部分としているものである。上端や側面使用例もある。5,6は磨石兼用例だが、下端などで顕著な敲打痕を観察できる。7は剥離部分（敲打時剥離？）にも敲打痕が顕著に観られるものだが、敲打が及んでいないところも一部観られる。8は白色石英素材の例である。第178図にはやや異質な例を示す。1は下端～一側面にかけて顕著な敲打痕があるもの、2はやや鋭角な一辺に敲打痕があるもの、3は大形でやや細長い礫の下端や側面の一部に敲打が集中している例である。4は白色石英素材の例で下端に敲打が集中している。

第179～182図には磨石を示す。当初分類で3,792点と極めて多量の出土である。図化の選択にあたってもできるだけ形態等の特徴の多様性を示すよう考慮したが、数の多さからある程度任意に抽出せざるを得ず、多分に恣意的な選択となっている。とはいえ、形態自体は単純で使用痕跡なども大きくは共通する部分が多い。図示配列にあたっては、サイズや特徴に注意して配列したが、厳密な分類基準がある訳では無い。



第177図 B区出土石器(17)



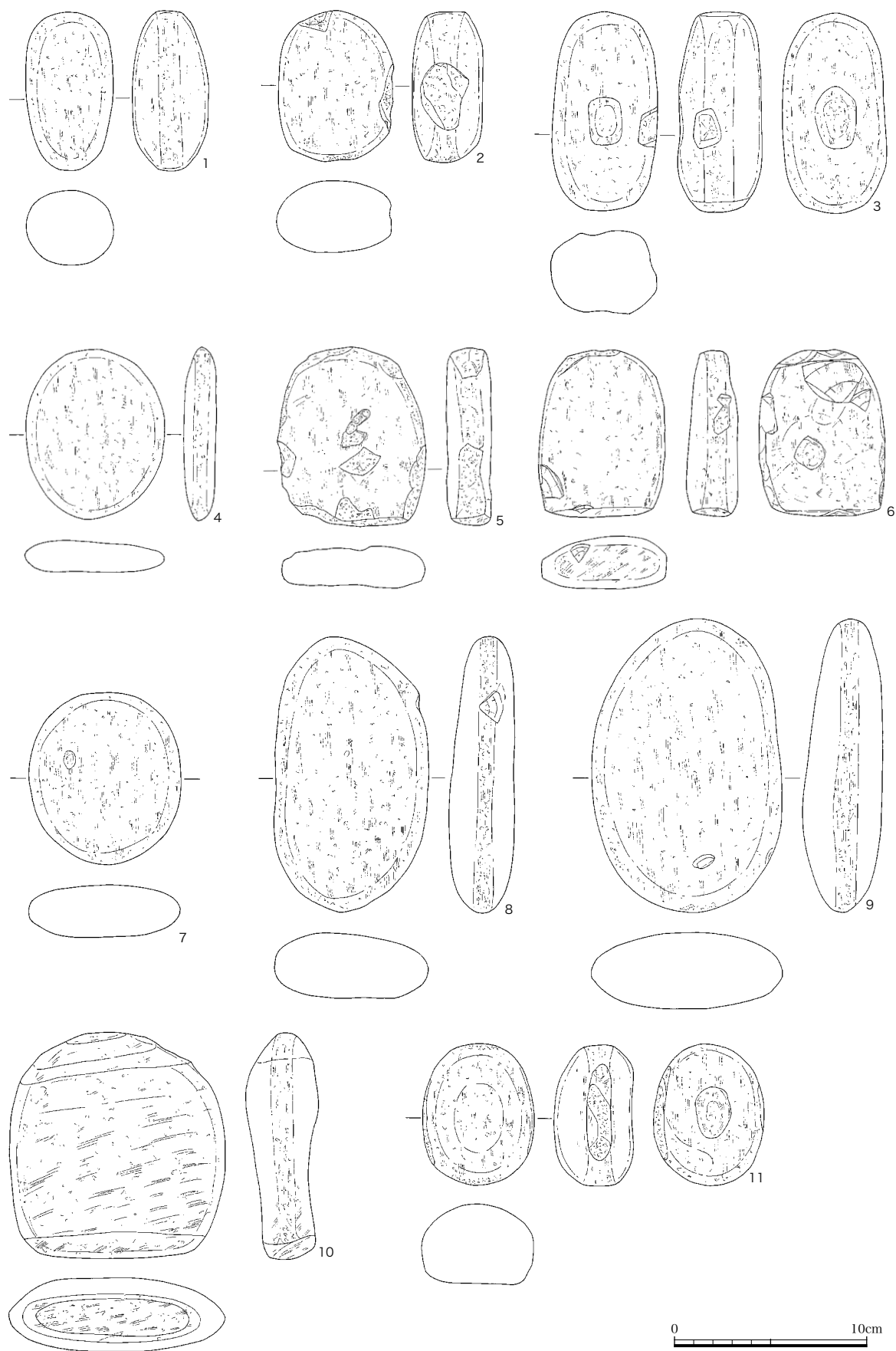
第178図 B区出土石器(18)

第179図1～9は表裏面と側面との境界が直角に近い角を有するものである。断面が隅丸長方形の整った形態であり、北関東後晩期に特有の形態である。平面は円形基調だが8は方形に近い。やや大きいサイズのものでは表裏面の中央にやや大きめの敲打の凹み部分を有するものが目立つ。11～13は樽状の形態を有し上下端部に磨痕が目立つもので、定型性を窺うことができる。第180図4～6は扁平板状の礫を素材としているものである。小さめの面砥石との区別が難しい。8～10は中形サイズで側面の磨痕が目立つもので、

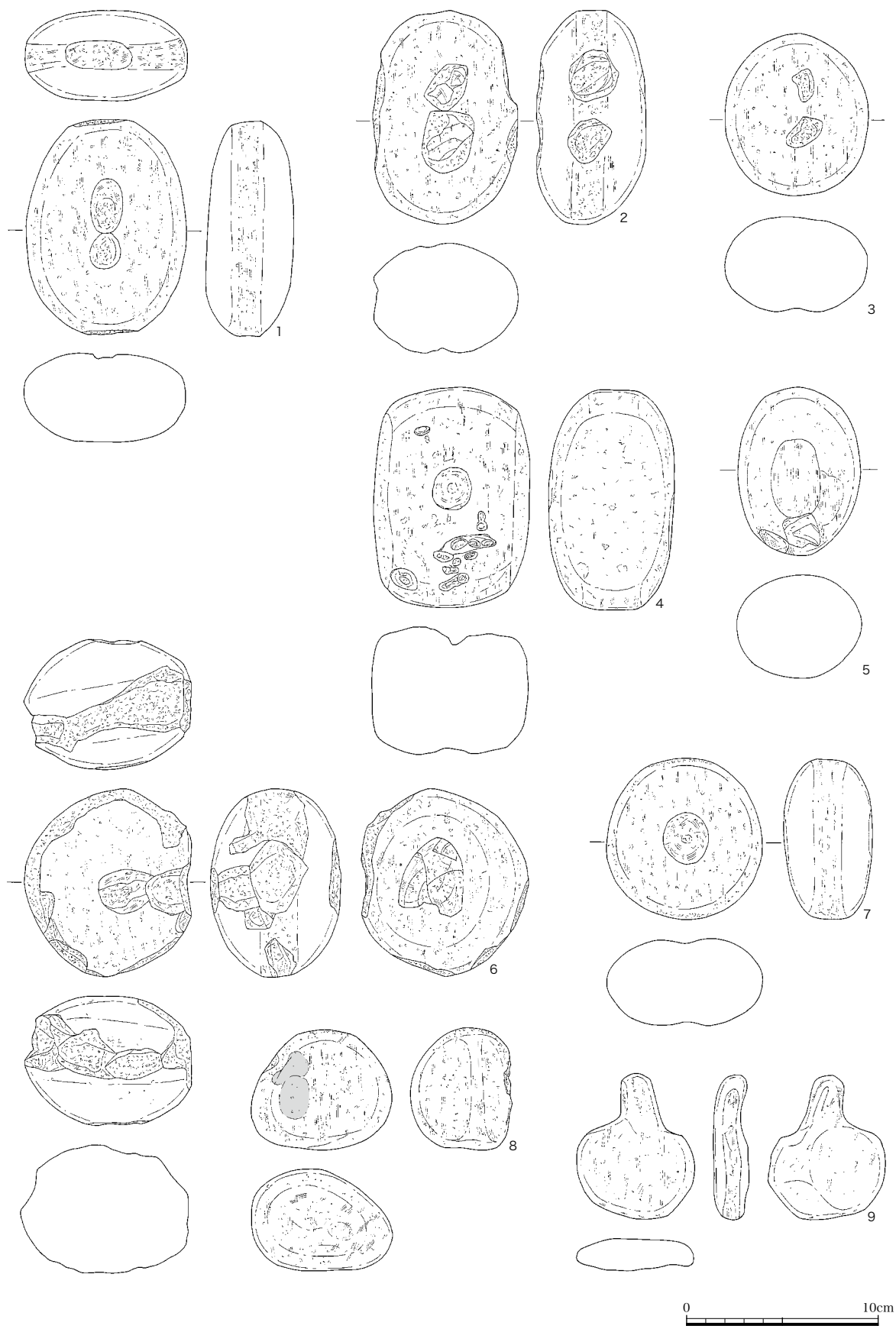
(→P195)



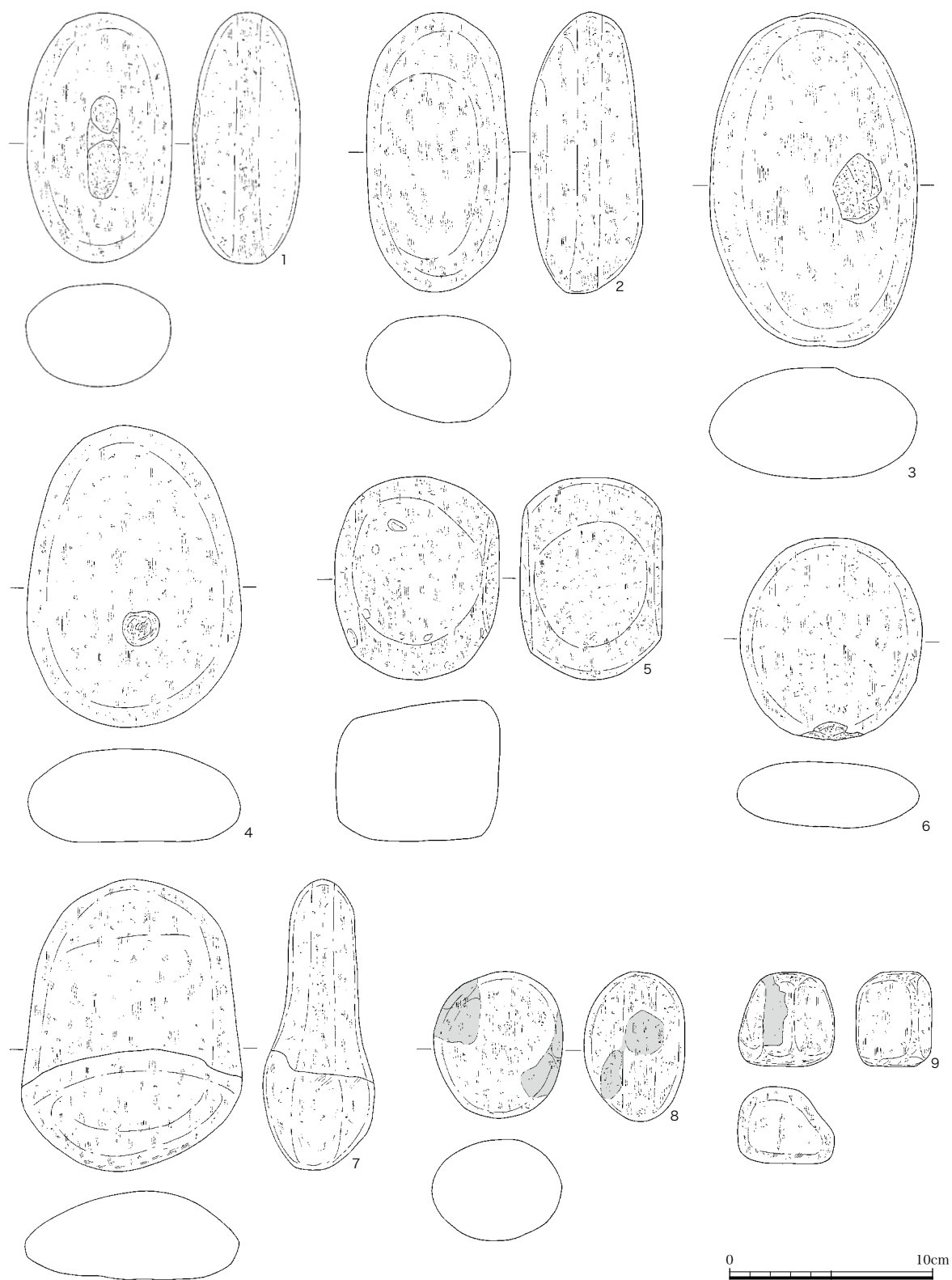
第179図 B区出土石器(19)



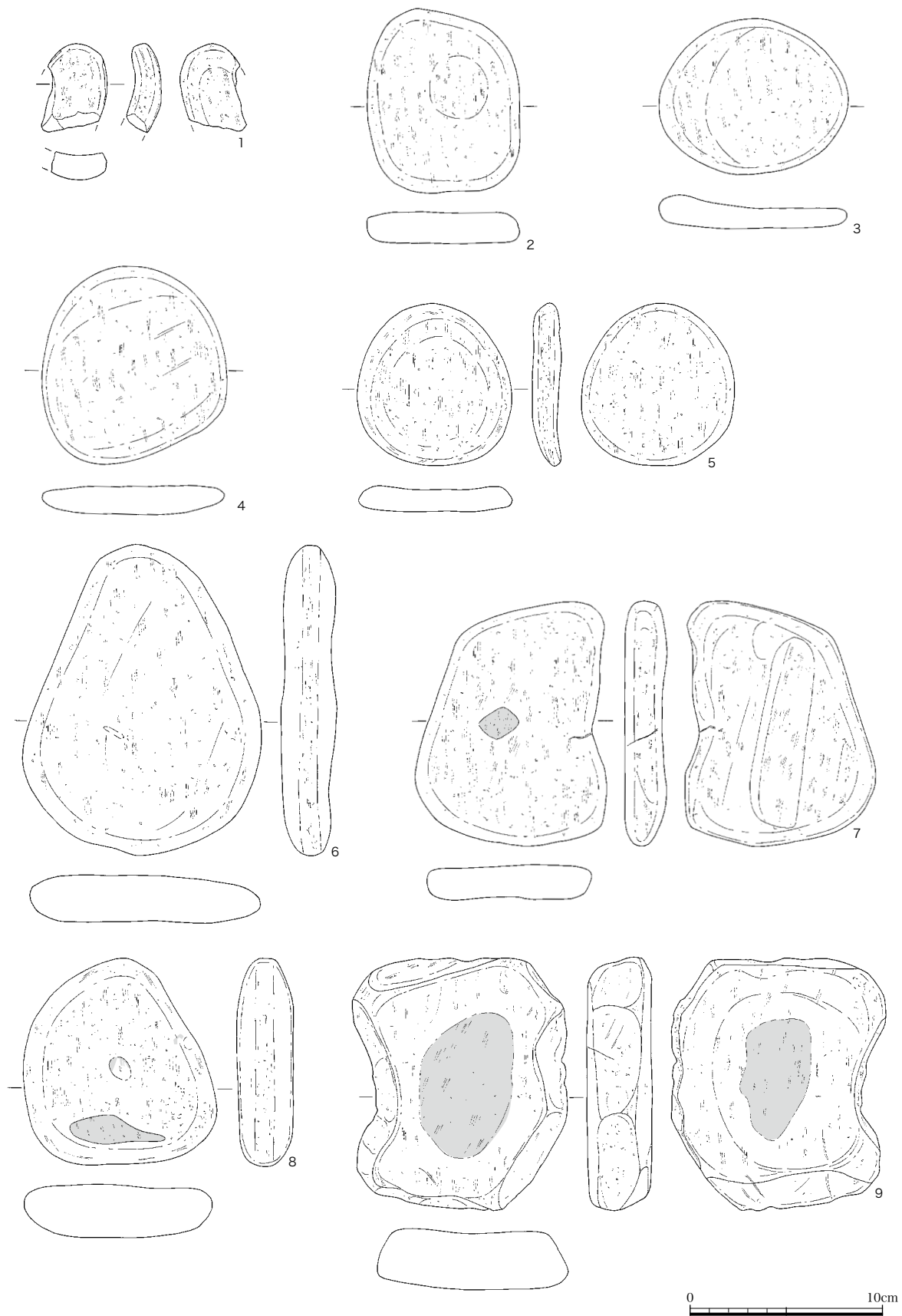
第180図 B区出土石器(20)



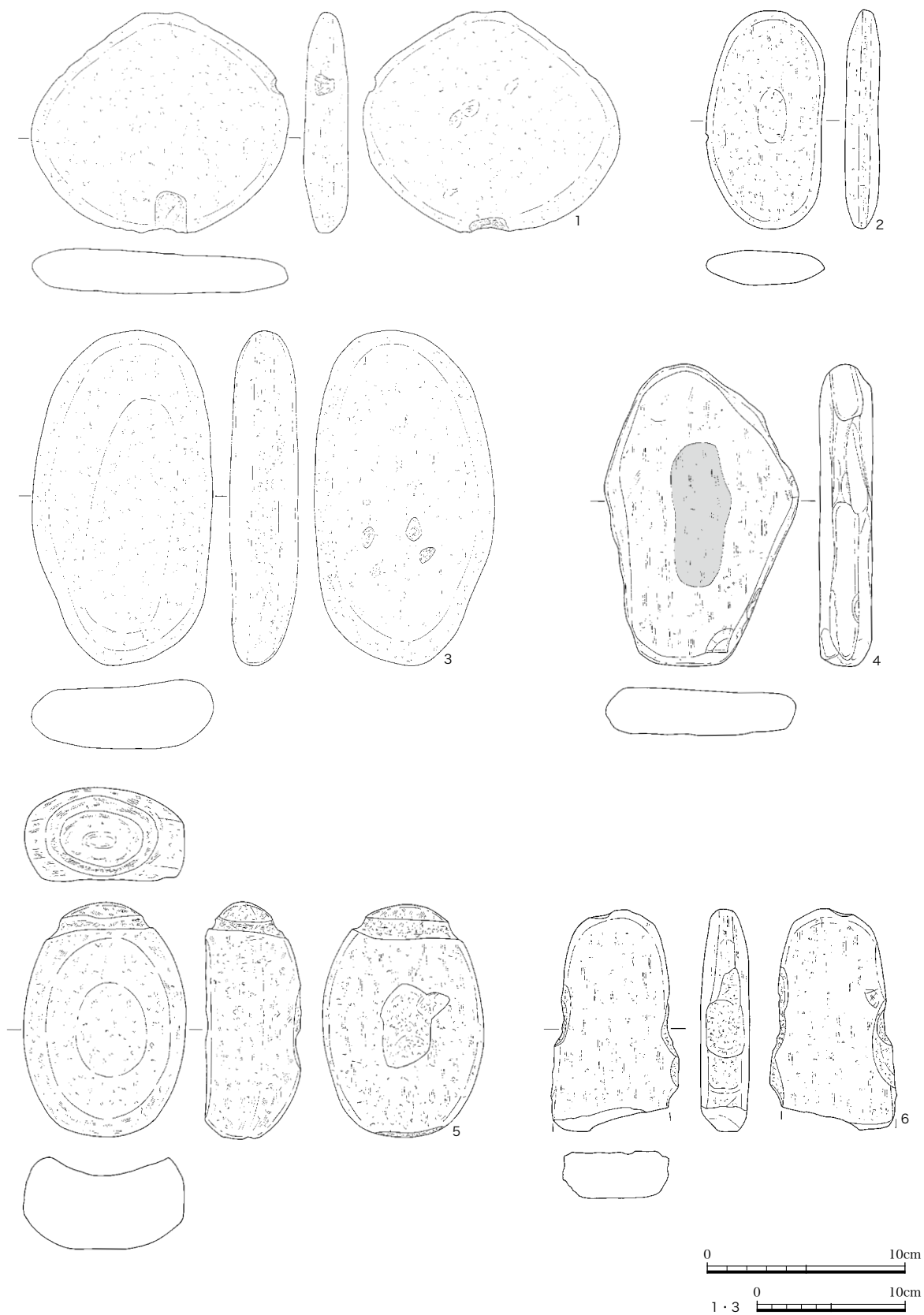
第181図 B区出土石器(21)



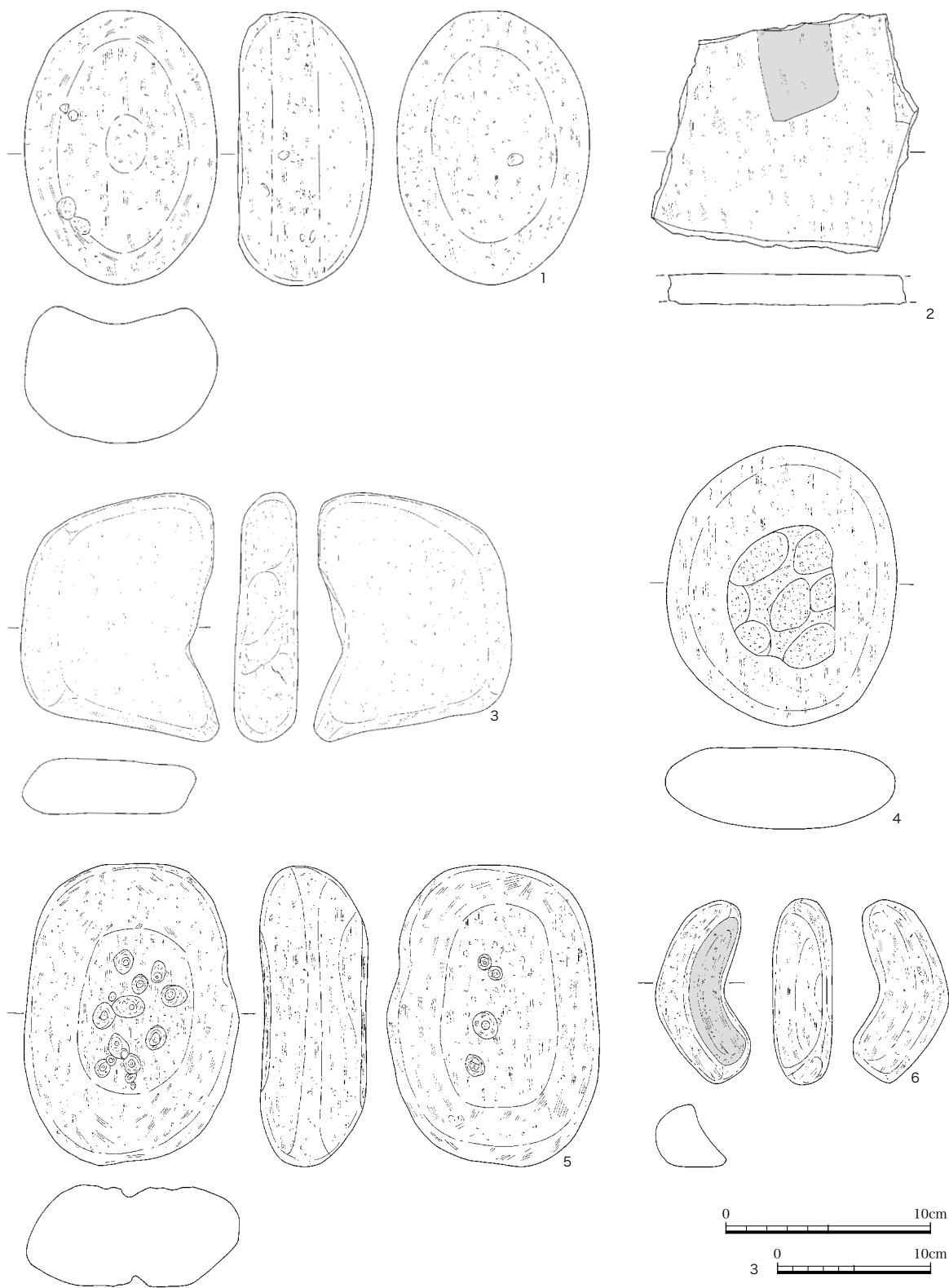
第182図 B区出土石器(22)



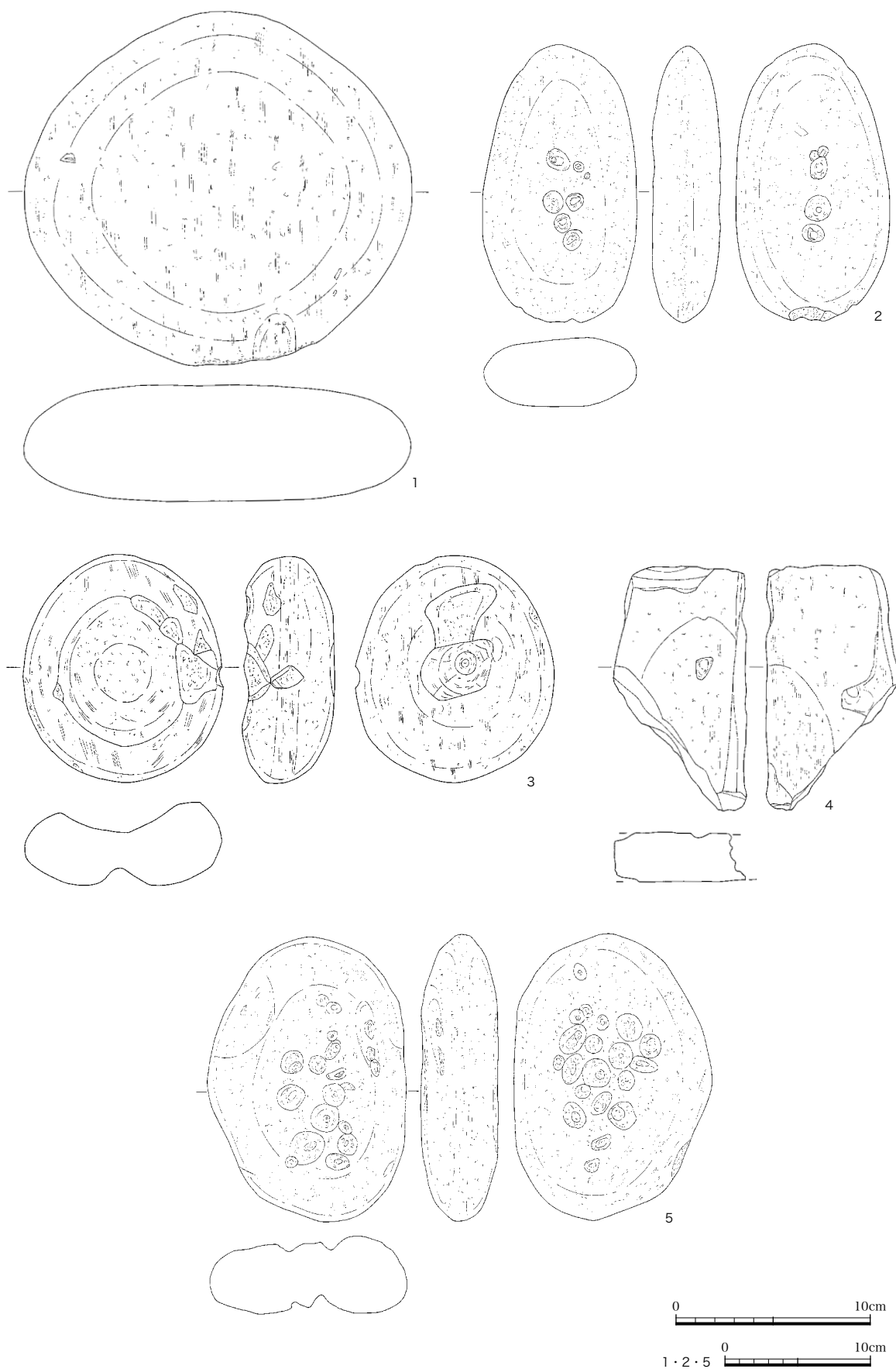
第183図 B区出土石器(23)



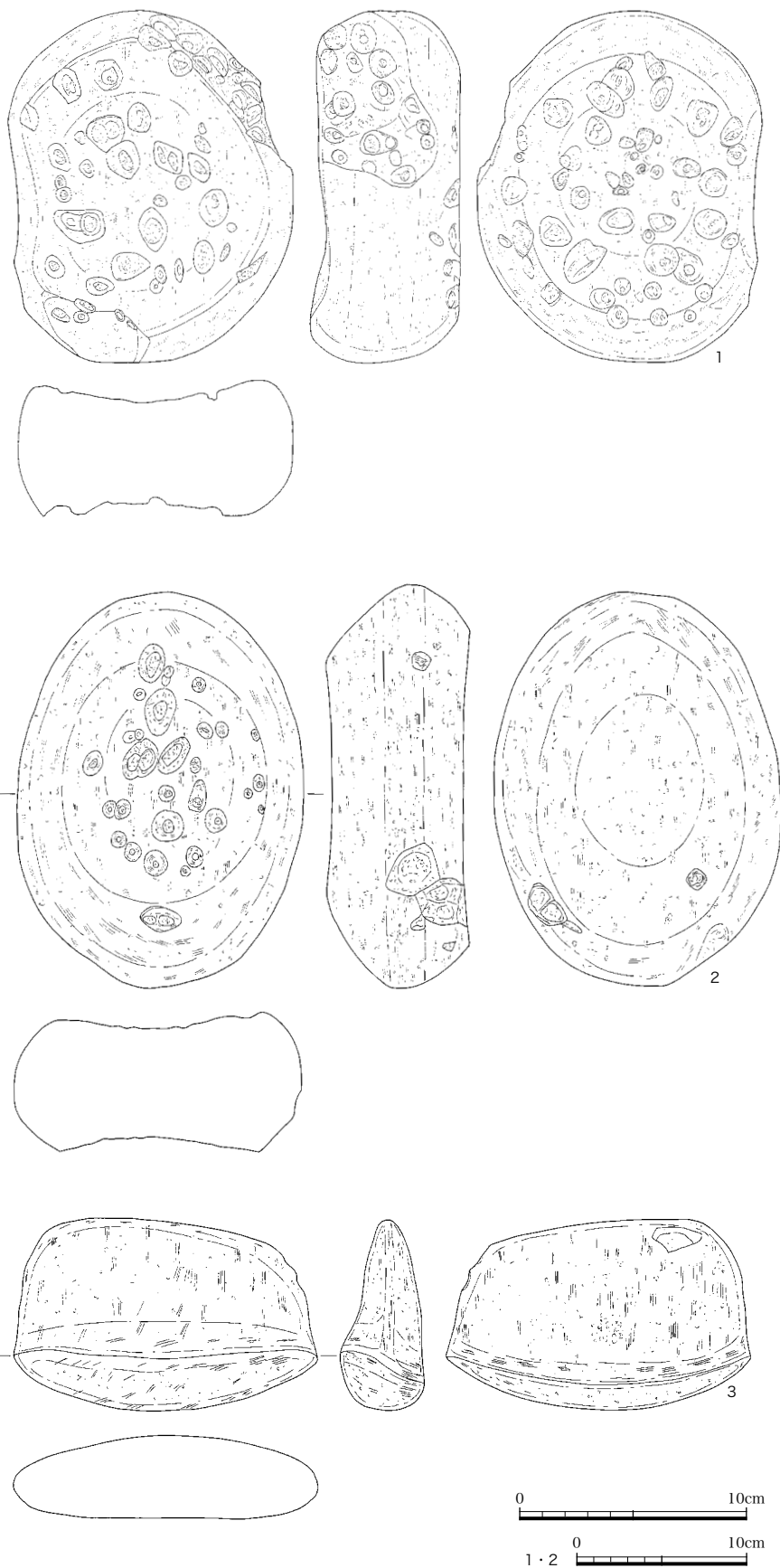
第184図 B区出土石器(24)



第185図 B区出土石器(25)



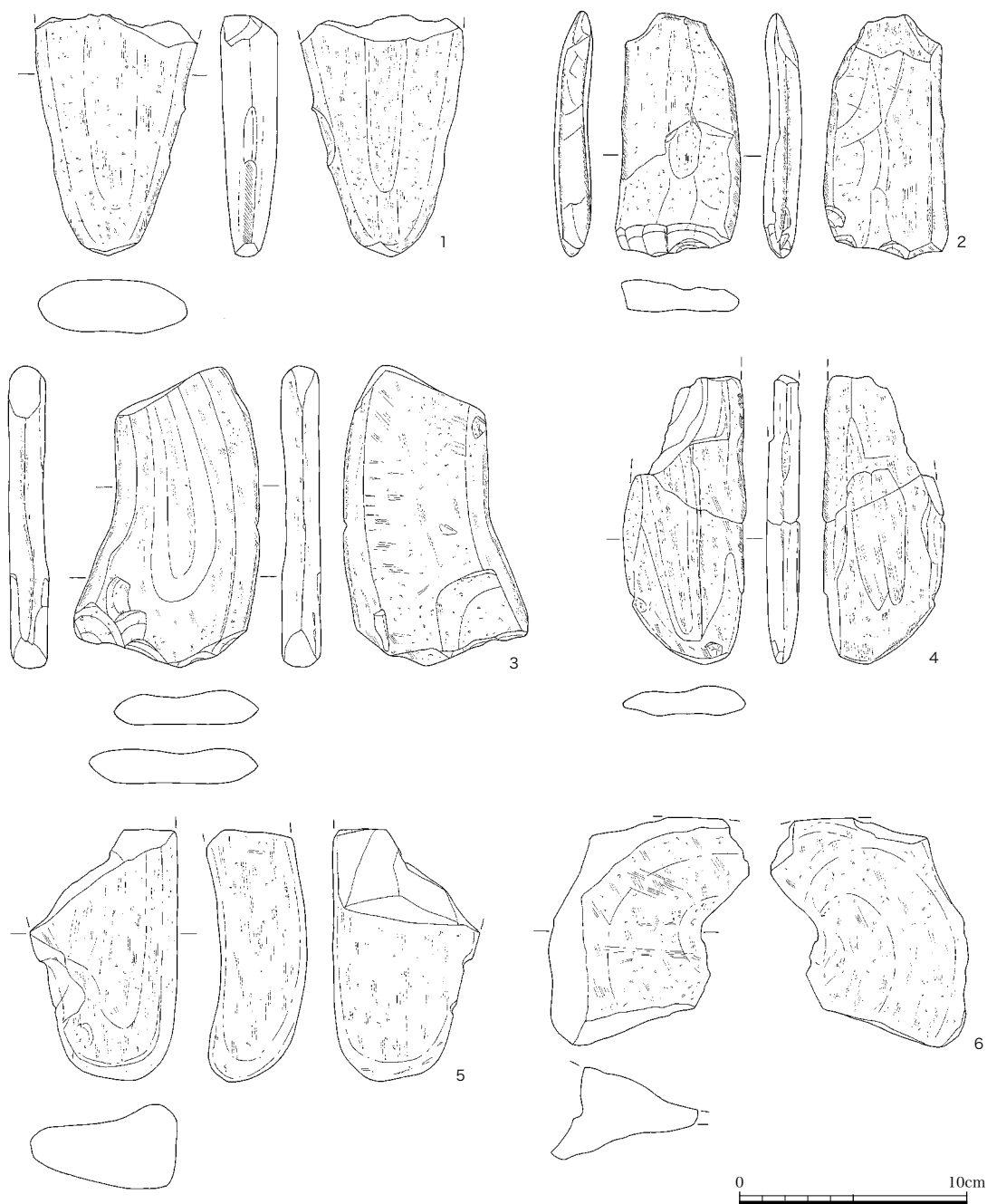
第186図 B区出土石器(26)



第187図 B区出土石器(27)

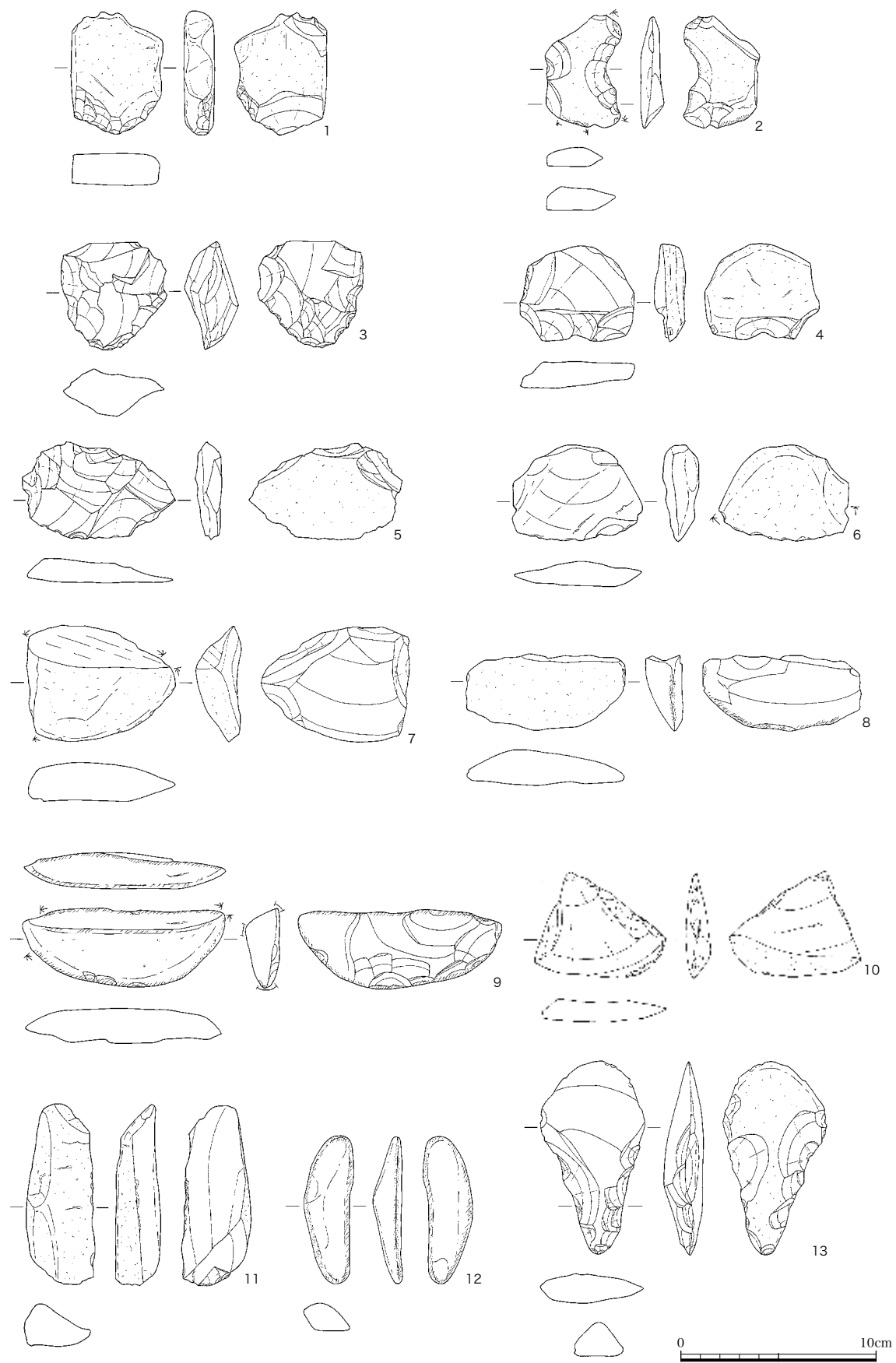


第188図 B区出土石器(28)

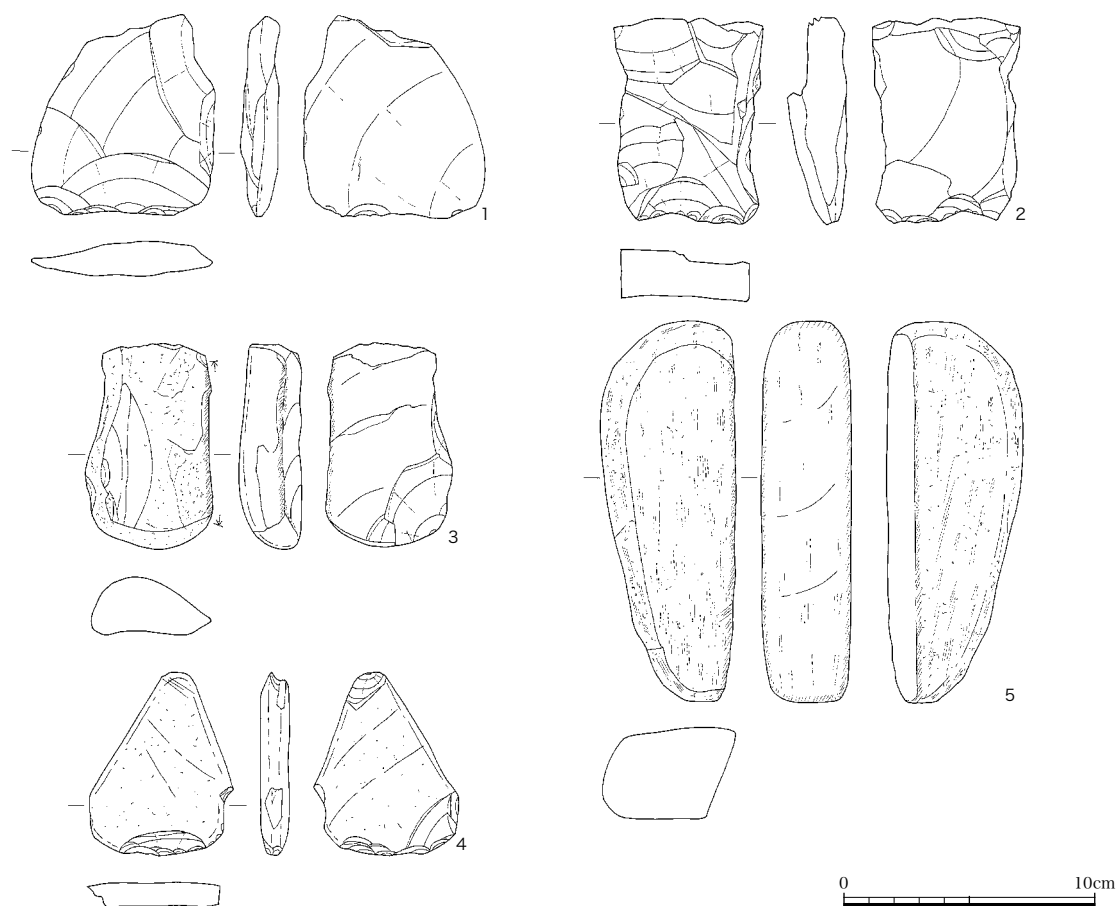


第189図 B区出土石器(29)

10は下端の磨痕も顕著である。第181図の1～7は表面または表裏面中央に凹みを有するもので、2のように側面にも凹みがあるものも認められる。6は側面全周に顕著な敲打痕があり、敲石として示すべきものである。9は突出部のある礫だが、磨痕があることからここに示した。第182図は中～大形のもの、厚みのあるものなどを示す。8,9は赤色顔料の付着が顕著なものである。第183～187図に石皿類を示す。B区での出土数は387点と多量である。当初台石としたものもここに含める。石皿類についても形態等の特徴に注意しつつも、かなり任意な選択図化とせざるを得ないが、代表的な形態例については概ね示すよう努めた。



第190図 B区出土石器(30)



第191図 B区出土石器(31)

大きいものについては縮尺を変えておりやや見づらくなっているが、大きさの変異幅は大きい。

第183図は小～中形のもので、特に1は極めて小さいもので、石皿類との判断も問題を残す。2～5は小さめで扁平なものである。7～9は赤色顔料が付着しているもので、一定部分への集中が観察される。第184図3～4はやや大形で扁平なものである。中央に顕著な磨痕が目立つものがある。5は上端近くに溝状の凹みが一周するもので意図的な作出の可能性も考えたが良く分からない。表面中央が皿状に凹むほか、裏面の中央も敲打痕の凹みがある。6は側面に剥離～敲打があるもので、敲石との兼用の可能性があるだろうか。第185図は2,4が大きめで扁平な例、一方1や5は厚みがあり表面等が石皿面として凹むものである。5では数は少ないが多孔石の孔も穿たれている。6は異質なもので赤色顔料が付着している。パレット状のものか。第186,187図は大形のものや多孔石と複合しているものを主に示す。第186図3や第187図1のように石皿面が大きく凹むものと第186図1のようにほぼ平坦なものがあり、石材との関わりも注目される。第187図3は石冠への判断も考慮したもので、判断は保留するものの便宜的にここに示す。下端の磨痕は比較的顕著で、使用時のものとすれば磨石となる。

第188,189図は砥石をまとめる。B区では58点とA区やC区に比べて少ないが、この点にかかる評価は難しい。第188図は主に手持ち砥石と推測されるもので、5,8,10等は带状部に研磨痕が集中する「筋砥石」

第3章 西地区の遺構と遺物

となる。側面に研磨痕・摩滅～擦れ痕が観られるものも一定量あり（1,2,6,7,11 など）、「擦切具」との複合兼用と捉えることもできる。9 はA区でも観られた手持ちの骨角器製作に関わることが推測されるものである。第189図はやや大きなものだが、1～3ではやはり側縁の研磨摩滅痕があり、擦切具との兼用である。転用との判断も想定され、検討が必要であろう。

第190,191図は擦切具と判断したものである。素材は多様で第190図3のような剥片、片側に礫面を残す横長剥片（第190図7,8）棒状礫（同図12）扁平礫（第191図4）などがある。石材も幾つかあるがホルンフェルスが多いようにも観える。縁辺の顕著な摩滅研磨痕跡が特徴だが、鋭角な縁辺のみ使用とは限らず、やや鈍角な部分にも認められる（第190図9,12、第191図3,5等）。二次加工・刃こぼれ状の使用痕と複合している例もある（第190図3,6等）。

第3表 B区遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	特徴・軸	遺物種別数量	遺構図版	遺物図版	写真図版
SD4	450	32		N-35° -W		109		
SD6	270	90	29	N-5° -W		109		10
SD8	240	142	24	N-38° -E		109		10
S1	37		10			110		
S2	61		8			110		
S3	105		52			110		
S5						110		
S7						110		
S9a	60	38	32			114	118	
S9b	60	47	16			114		
S10	83	52	22		石匙1、磨石3、ChCo1、Fl2	114	118	
S11	60	70	6		磨石4、ChCo8、Fl1	119	118	11
S12	424	490	26	N-86° -W	石鏃3、Sc4、剥片石器7、打斧2、砥石1、石錘2、磨石59、敲石1、石皿類4、ChCo3、Fl75	115,116	122	12
S12 炉	65	65				115		12
S13	418	386	18	N-13° -E	石鏃1、Sc1、剥片石器3、磨石5、ChCo2、Fl51		118	12
S14	80	70	11	N-48° -W		117	118	11
S15	710	462	14	N-7° -E	礫器4、磨斧4、砥石1、磨石45、敲石6、石皿類10、ChCo13、Fl13	120,121	123	13
S15 炉	80	80	5			120		13
S16	630	730	24	N-15° -E	石鏃1、剥片石器1、打斧1、砥石2、石錘1、磨石62、敲石2、石皿類12、ChCo18、Fl19	120,121	124～126	13
S16 炉	86	82	6			120		
7-12 剥片集中区					剥片石器2、打斧1、磨石62、ChFl54、玉髓Co1			

第4節 C区の遺構と遺物

C区調査の概要

C区は今回の西側調査区中でも中央の位置に辺り、東側はB区と連続的、西側には現道部分を挟んでA区がある。また南側は未調査区14mを挟んでI区が位置する。C区中央の幅2.5m部分は水田の畦・水路部分で、当面未調査部分としていたが、調査終了直前段階で、IV層上面までの掘り下げを行なった。基本土層はA区とほぼ同様で、表土層以下、AS-Bを含むIII層、FAを含むIV層、V層以下が縄紋包含層という基本パターンは変わらない。V層中の包含層遺物は極めて多量で、特にC区西側ではIV層中のレベルで多量の遺物包含が確認された。重機による表土除去段階ではこの下位、概ねV層上面までの掘削としたが、この時点で数箱に及ぶ遺物を回収している。但しC区東側（畦水路部分より東側）ではV層中の遺物量は少なく、V層自体の堆積も薄い傾向が見られた。このV層中の遺物が少ない傾向は、B区西側の状況と連続的である。

C区の調査はこの遺物多量の包含層を調査しつつ、途中各面での遺構確認も目指した。トレンチ拡張調査時点で確認されていた石囲炉（当初は配石遺構との想定もしていた）及び周辺の幾つかのピットのみ、V層中での確認である。これら以外でV層黒色土中での遺構確認は困難で、実際には概ねV層包含層調査後、VI層上面での遺構確認となった。後述の遺構S143やS147等多くの遺構は概ねこのVI層上面で確認・調査した遺構である。即ち第192図で示した全体図は、V層中及びVI層上面で確認された遺構を示したもので、若干検出面が異なるものの、縄紋時代後晩期内の一定時期幅の遺構分布を示すものと言える。

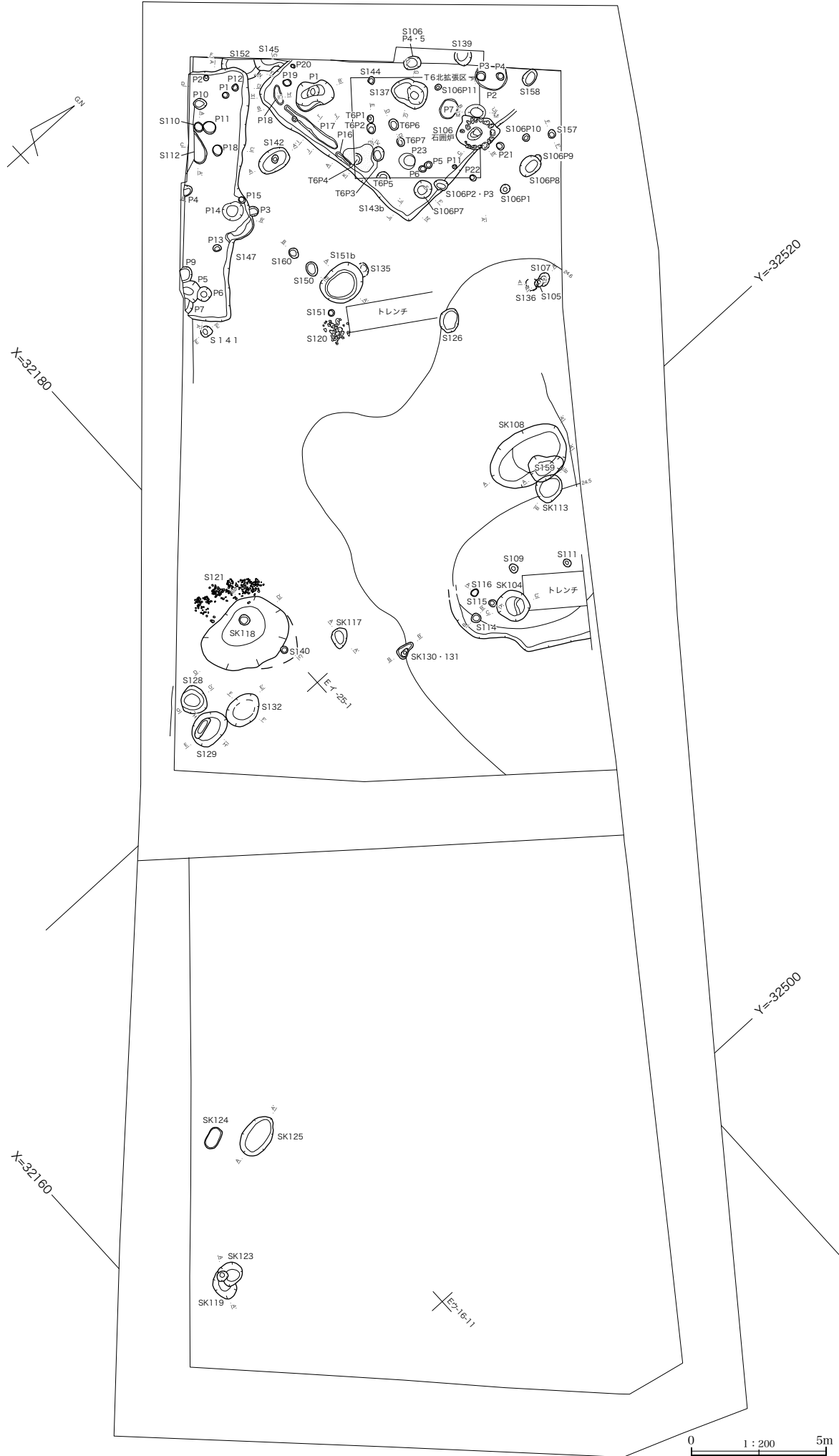
一方VI層以下の調査は湧水や時間的な関係から殆ど為し得なかった。調査最終局面で、VI層以下の層堆積状況、遺物包含状況、遺構の有無などを確認するため、C区西側で2本、東側で3本のトレンチを設定し、重機による掘り下げ調査を行った。トレンチは調査区際やグリッドラインに沿う方向に設定している。東側をトレンチ1～3、西側を西トレンチ1、2と呼称し記録している。なおいずれも、注意しながら5～10cmづつ掘り下げて平面断面の確認を行ったが、遺構は確認されなかった。また遺物も稀少であり、この点ではB区との差異を示している。トレンチ1の土層断面ではVI層～X層を確認した。これより上位は調査区壁の見通しとなるがV層が20cm程堆積している。VI層はここではより下層のVIb層を細別した。またX層も、より粘質で暗い色のXb層を細別している。これらは概ねB区の土層と対応するが、未調査区を挟むこともあり、確定的では無い部分もある。特にVIII層はB区では遺物の包含が多く見られており、対応に課題を残す。

C区西トレンチは記録が不十分なこともあり、ここでは図の提示は行わない。写真も示し得なかった。トレンチの中央Eイ24-14グリッドではVI層上位から50cm程でVIII層対応の土層が確認された。またEイ24-19グリッドや24-9グリッドではVI層上面より50cm程下位でX層が確認された。

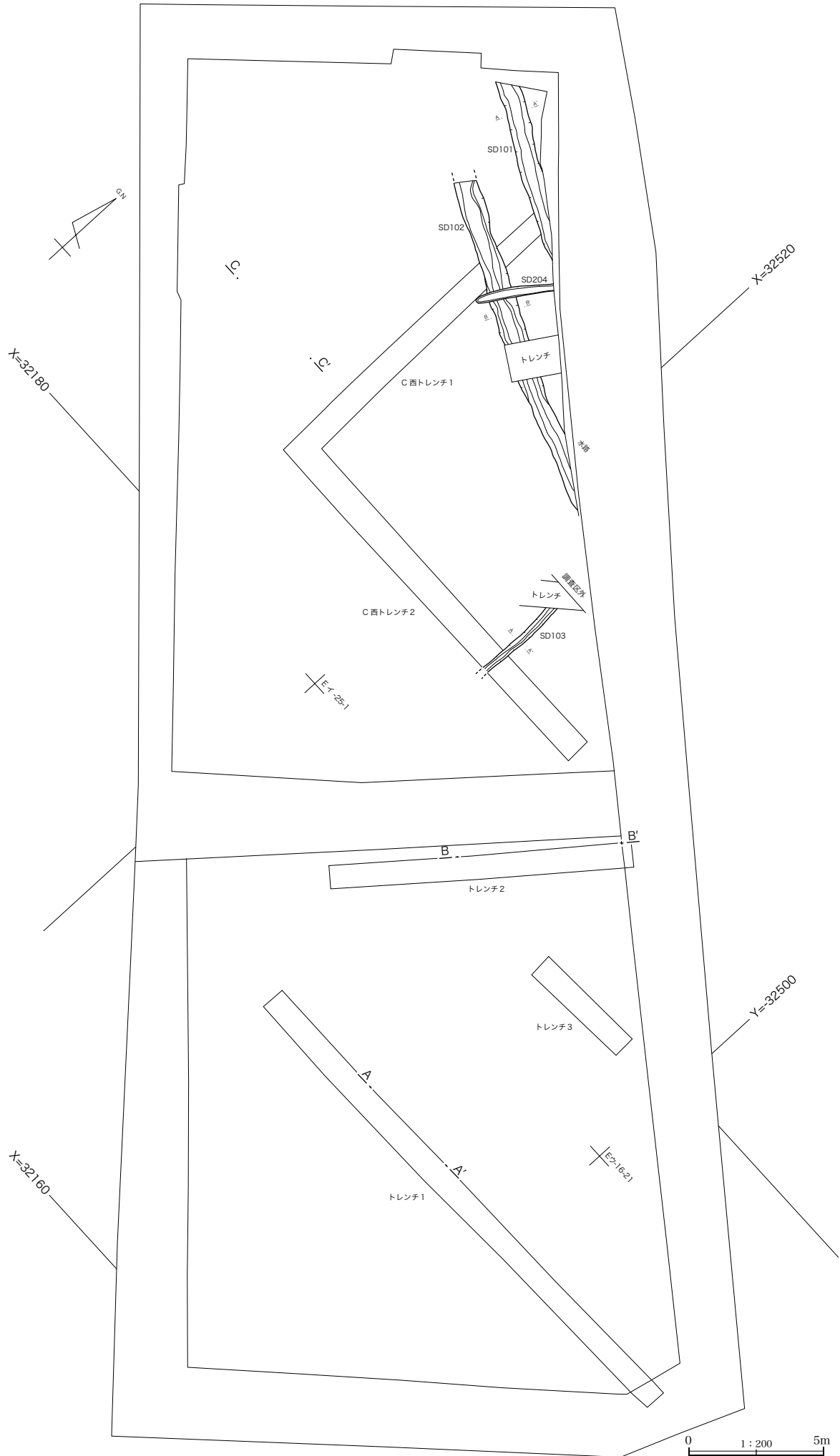
C区の基本土層（第194図）

C区ではグリッド掘り下げに際し、それぞれのグリッド壁に注意し、土層堆積状況についても一部記録をとっている。概ねC区西側内ではVI層上面より上位については大きな差異が無く、この1箇所のみ図を提示する（第194図C-C'）。C区北西部分はT6拡張区と重なり、V層の上位についてはこのトレンチ拡張調査の中で調査している。この時点でS106炉跡と呼称する配石部分が確認されており、C区を面的に調査する段階においても住居跡の可能性を考慮し周辺にベルトを数本設定して掘り下げを進めた。結果的に住居跡の掘り込みは確認されず、またこの南側で後に確認されるS143bについても周辺ベルトの観察では明瞭な包含層中の掘り込みを確認できていない。

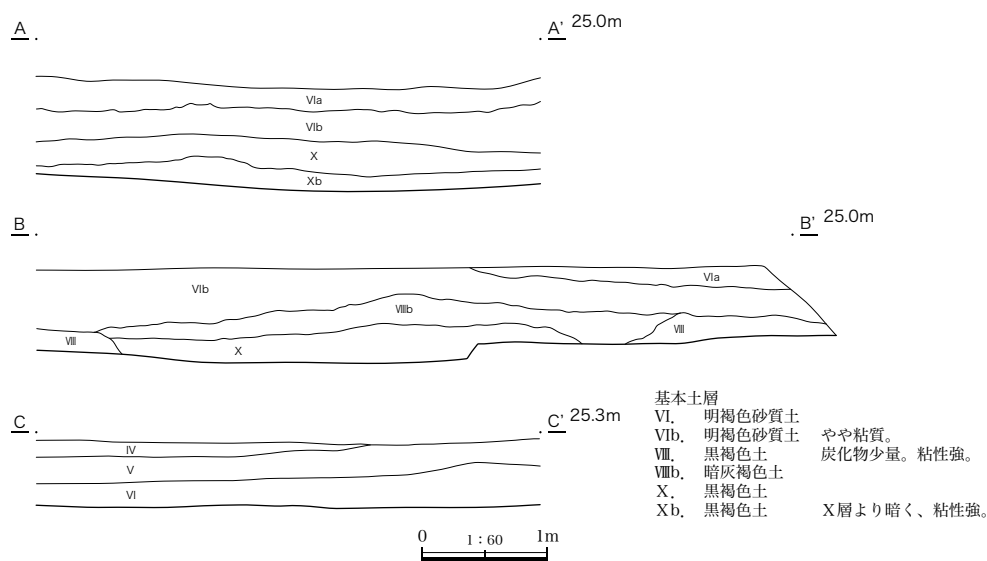
ここで示すIV～VI層については、A区やB区とほぼ対応する性質を示す。但し遺物の包含では既述のよう



第192図 C区全体図1



第193図 C区全体図2



第194図 C区基本土層

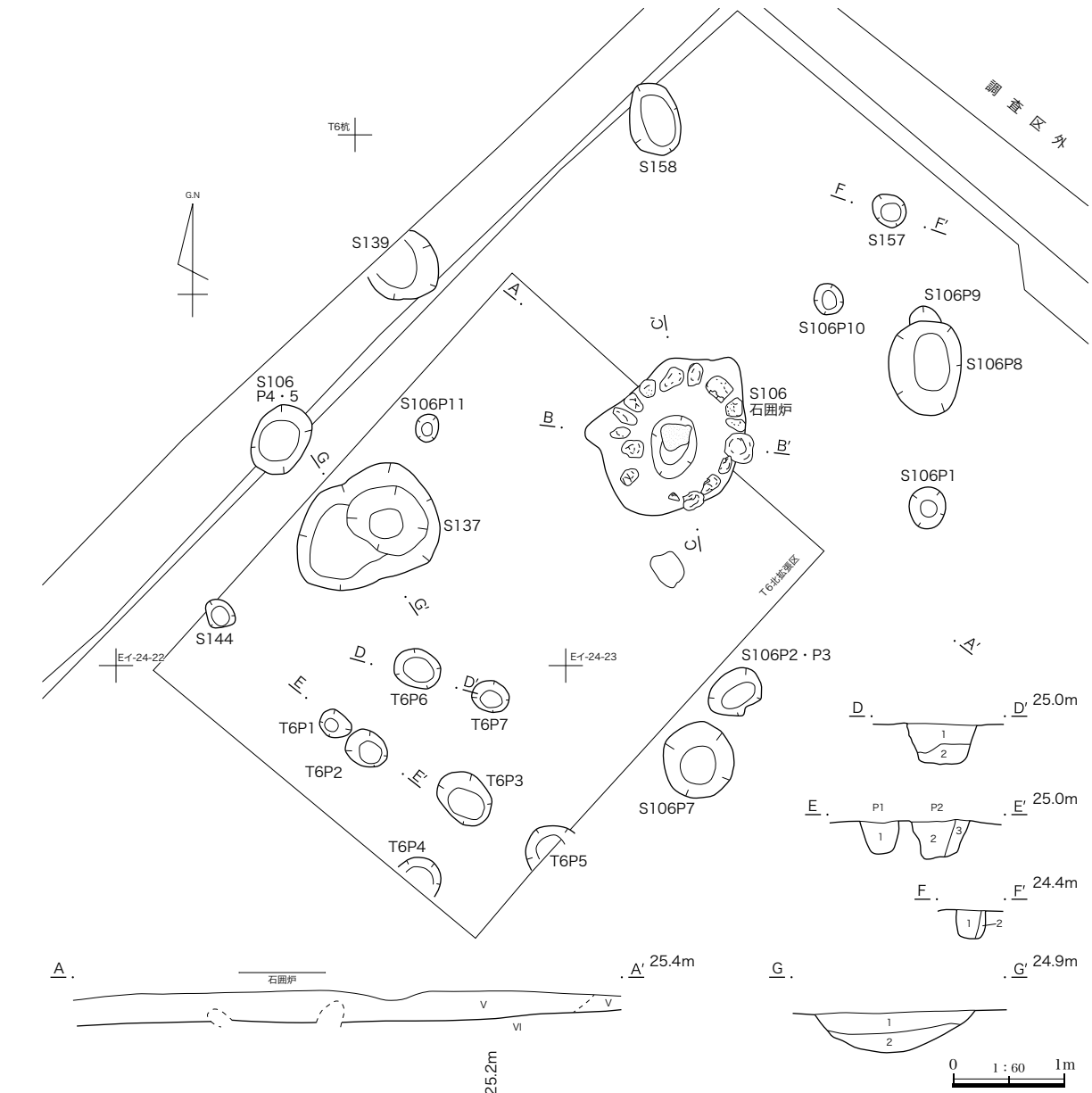
に、V層中の遺物包含量がB区と大きく異なっているほか、IV層中の遺物包含も顕著である。つまり土層断面観察においては、IV・V層間は不整合な水平面を形成しているものの、何らかの自然的或いは人為的要因による遺物の垂直レベルの変化や層位の不安定性なども検討する必要があることを示しているかもしれない。V層包含層中の遺物量も東に行くほど薄くなる傾向があり、整理時におけるグリッド毎の遺物量においてもこの点は明瞭に把握された。具体的にはEイ20-18,19,24,25グリッドより東では遺物密度がかなり薄くなる点、重要な調査所見として明記しておく（第6章第1節参照）。

S 106 (第195図、写真図版一八・一九)

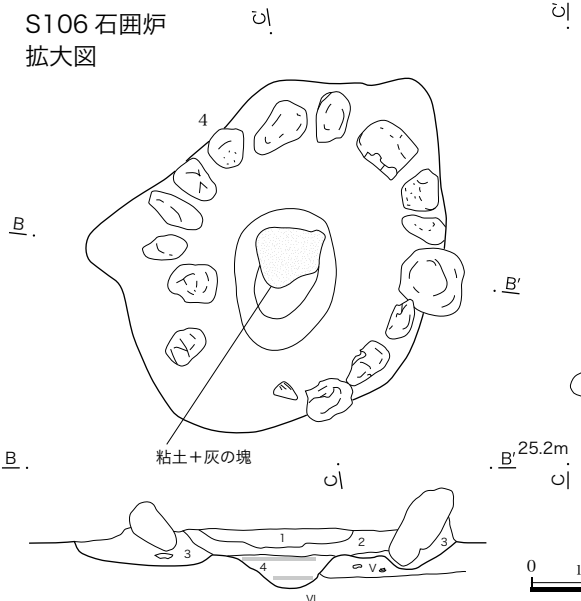
C区北西Eイ24-22,23グリッドに位置する。平成29年度調査当初、△T6東側を面的に確認する拡張区を設定し、一定の調査を行った。ここで石囲炉の北側約半分を確認し、周囲の土層観察及び床推定面での遺構確認を行った。この時点では配石遺構の可能性も考慮していた。また炉内の掘り下げはこの時点では行っていない。遺構確認の結果ピット7基が確認され、これの掘り下げ・記録化を行った。

その後C区を広く表土除去し面的に調査する過程で、石囲の南側半分の検出、周辺の土層観察、ピットの確認等を進めた。結果的に床面想定レベル及びやや下げた面で炉周囲に若干数のピットが確認された。(S106P1～P11)。但しこれらのピット全てがこの炉跡に伴うか判断は難しい(第195図)。また他にもS157～S158等とした遺構も伴う可能性があり、第195図にはこれらも示している。つまり第195図に示したピットは確認・調査のレベルを異にするものを含んでいる点注意が必要である。特にS157,158はVI層上面まで下がった段階での確認遺構である。つまり、ここで示したピットの中には、もちろん本跡に関わるものもあると同時に、S143b等の別の遺構や単独の別遺構も含んでいる可能性がある。また周辺土層の観察はC区の面的調査時にも注意して進めたが、竪穴の掘り込みや土層の違い、硬化の床面などは確認されなかった。従って正確な住居跡の範囲は不明とせざるを得ない。

以上のような状況を踏まえつつもピットの配列を検討すると、S144-T6P1-同P2-同P3-同P5-S106P7の配列は比較的集中し弧状のラインを描くことから、住居壁柱穴の可能性を充分考えさせるものである。これにS106P1-S157-S158との配列を積極的に考慮すれば、5.2×4.5m程度の楕円形プランの住居跡を



S106 石囲炉
拡大図



S106 (炉) 土層説明

- 1. 黒褐色土 骨粉・炭化物粒多量。焼土粒微量。しまりやや弱。
- 2. 灰褐色土 骨粉微量。炭化物粒・砂少量。しまりやや強。
- 3. 暗灰褐色土 粘土粒微量。砂粒少量。しまりやや強。
- 4. 淡灰褐色土 灰多量。骨粉やや多量。炭化物粒・焼土粒少量。しまり弱。

S137 土層説明

- 1. 黒褐色土 骨片・骨粉やや多量。炭化物粒少量。しまりやや弱。
- 2. 暗褐色土 VI層に類似。地山の可能性あり。

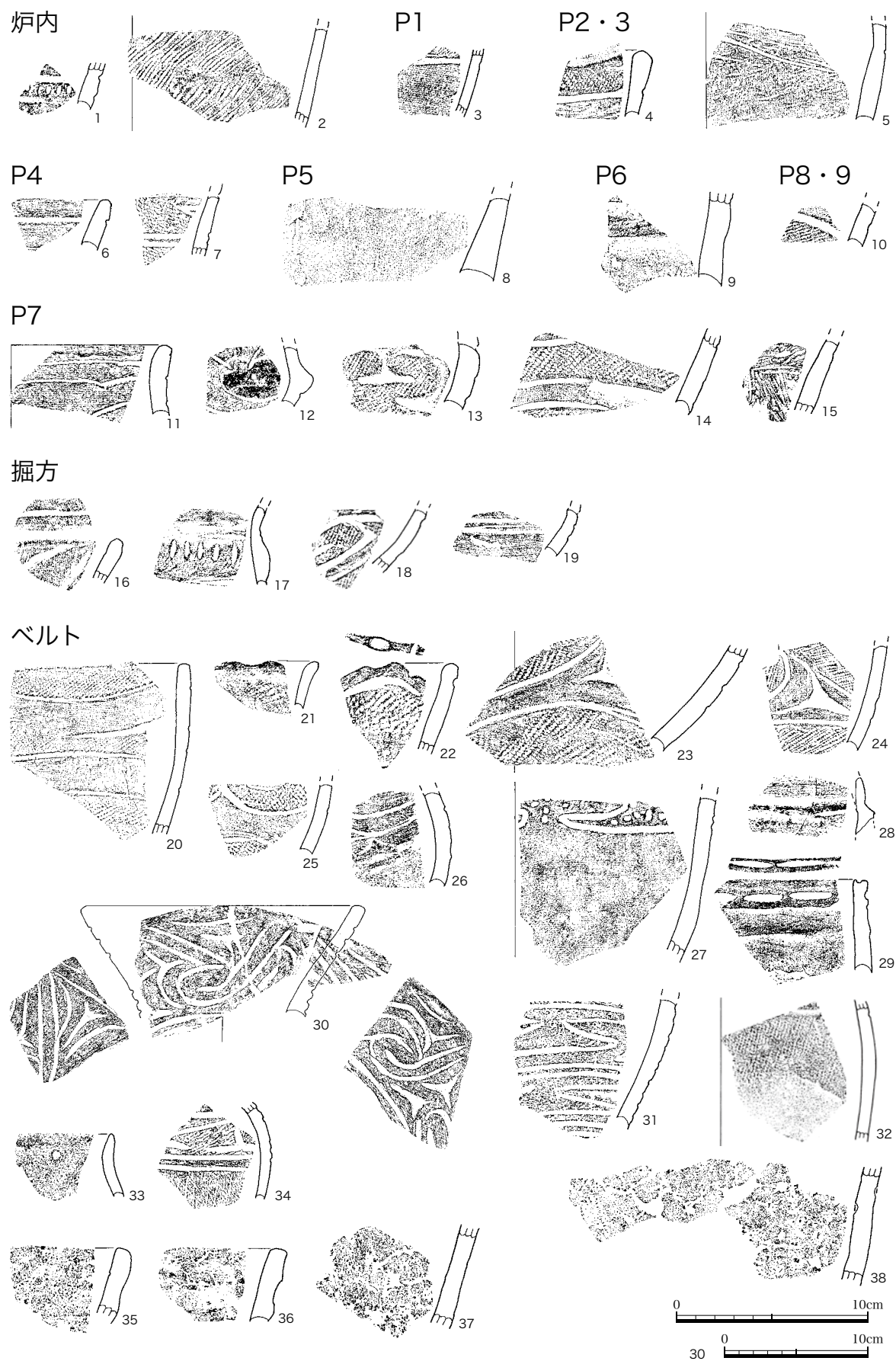
S157 土層説明

- 1. 暗灰褐色土 粘土ブロックやや多量。炭化物粒多量。しまり強。
- 2. 淡褐色土 粘土質。しまり強。

T6 東拡張 P1・2・6 土層説明

- P1・2
- 1. 暗灰褐色土 砂やや少量。しまり強。
- 2. 暗灰褐色土 1層にほぼ同じ。骨粉微量。
- 3. 灰褐色土 砂微量。しまり強。
- P6
- 1. 暗灰褐色土 黒味強。赤色粒・骨粉微量。しまり強。
- 2. 灰褐色土 砂やや多量。しまりやや強。

第195図 C区 S106 (P1～5・7～11)・S106石囲炉拡大図・S137・139・144・157・158・T6北拡張区 (P1～7) 平面図・断面図



第196図 C区出土土器(1) S106

想定することも不可能ではない。

なおこの区域内には、S 106 との関わりは不明ながら、幾かの遺構が確認されている。S 137, S 139、S 144、S 157、S 158 等で、S 106 との関わりが不明なもの、S 139 のように記録不十分なものもある。逐一の説明は省略し、規模等は計測一覧表に譲る。先に記したように、これらの中にはS 144 のようにS 106 に伴う柱穴の可能性があるものも含む。S 137 はやや大きめの土坑であるが、やや不整で一段北側が下がる。皿状の形態であり、柱穴となる可能性は低い。

S 106 ピットや周辺ベルトなどの出土資料については第 196 図に示した。調査時所見で大洞C 2 式期と捉えていたが、ピット出土土器ではやや古い資料も観られる。比較的遺存率のある第 196 図 30 は沈線がさほど密な施文ではないものの、安行3 d 式の構成である。上下逆で台付脚部かもしれない。

S 143 b (第 197,198 図、写真図版一九～二一)

この住居跡は、V層包含層掘り下げ後、ほぼVI層上面の精査段階で確認された住居跡である。南 0.5 mに S 147 がある。上位のV層中でS 106 石囲炉があり、これの調査後に確認されていることから、S 143b → S 106 は確定である。更に上位にはSD101,102 等の古墳時代よりのちの遺構も平面位置としては重なっている。また周囲には他に S151 等の土坑や S 157 ピット等がある。

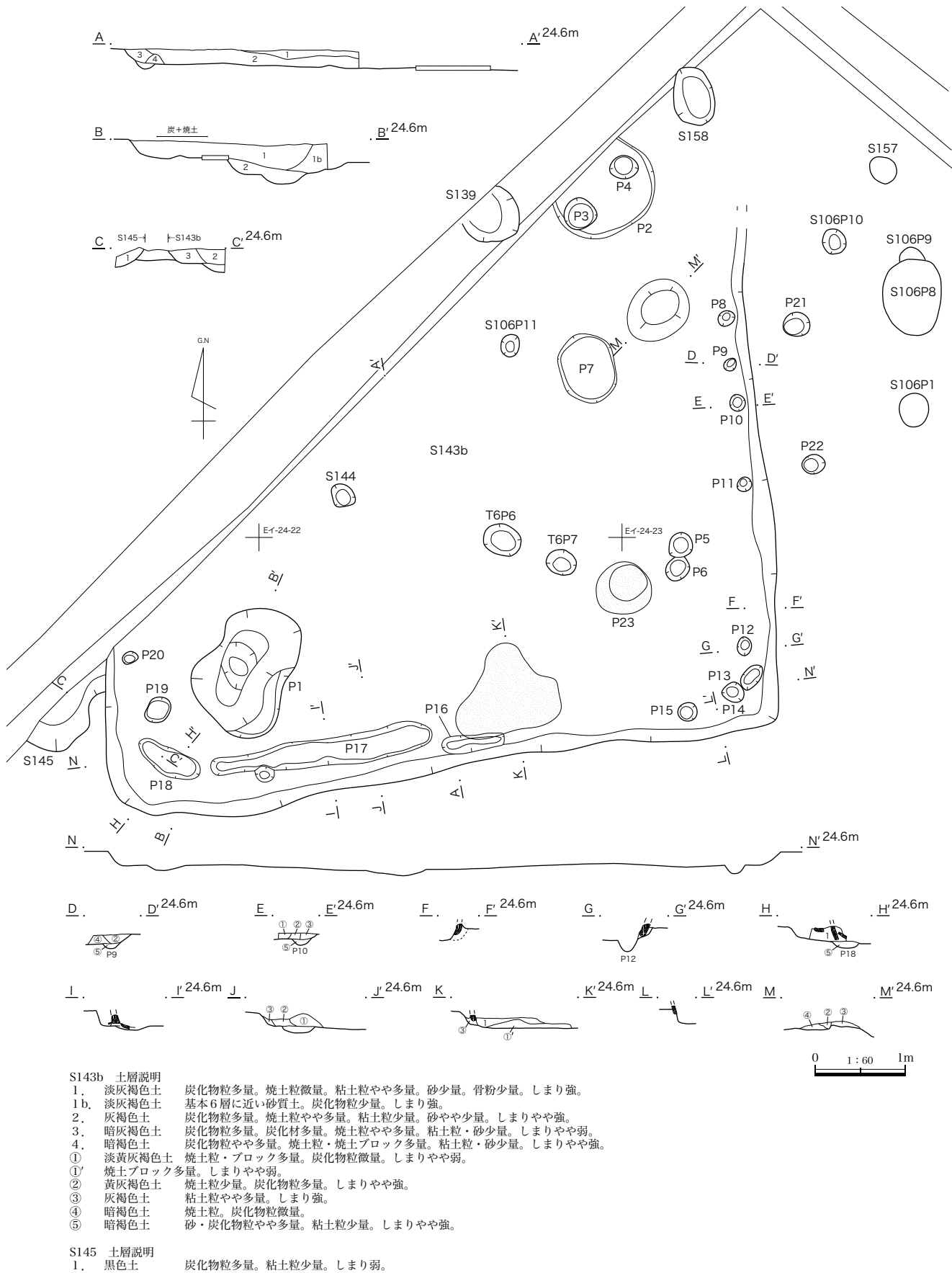
当初、先にVI層上面まで下げられていた南西側で土坑が確認され、これをS 143 としていた。結果的にP 1 部分がこれに相当し、焼土や炭化物を多く含む黒色の覆土で、この覆土部分の掘り下げを行っていた。またこの周囲でもV層包含層下位で焼土等が確認されていた。その後北東部分でのV層包含層掘り下げ後の精査で、のちに東壁と判明する直線的なプランが確認され、南側の再精査等と合わせ、方形となる黒色の落ち込み部分を確認し、更に掘り下げにより壁も確認されたことから、竪穴掘り込みのある住居跡と判断した。北側の範囲は不明瞭で、また西側は水路による掘削で不明となっている。但し水路壁部分でも焼土の堆積や黒色覆土を確認することができ、本来の住居の広がりやを推定できる。

一方掘り込み面については不明瞭で、V層中位や下位からの掘り込みであった可能性もあるものの、確認できていない。東西の掘り込み・壁から一辺 7.5 mの方形プランで、捉えられた掘り込みの深さは 17 cmである。軸はN-5°-Wとなる。年報等の報告では一辺 8 mを越えるとしており、今回訂正報告する。

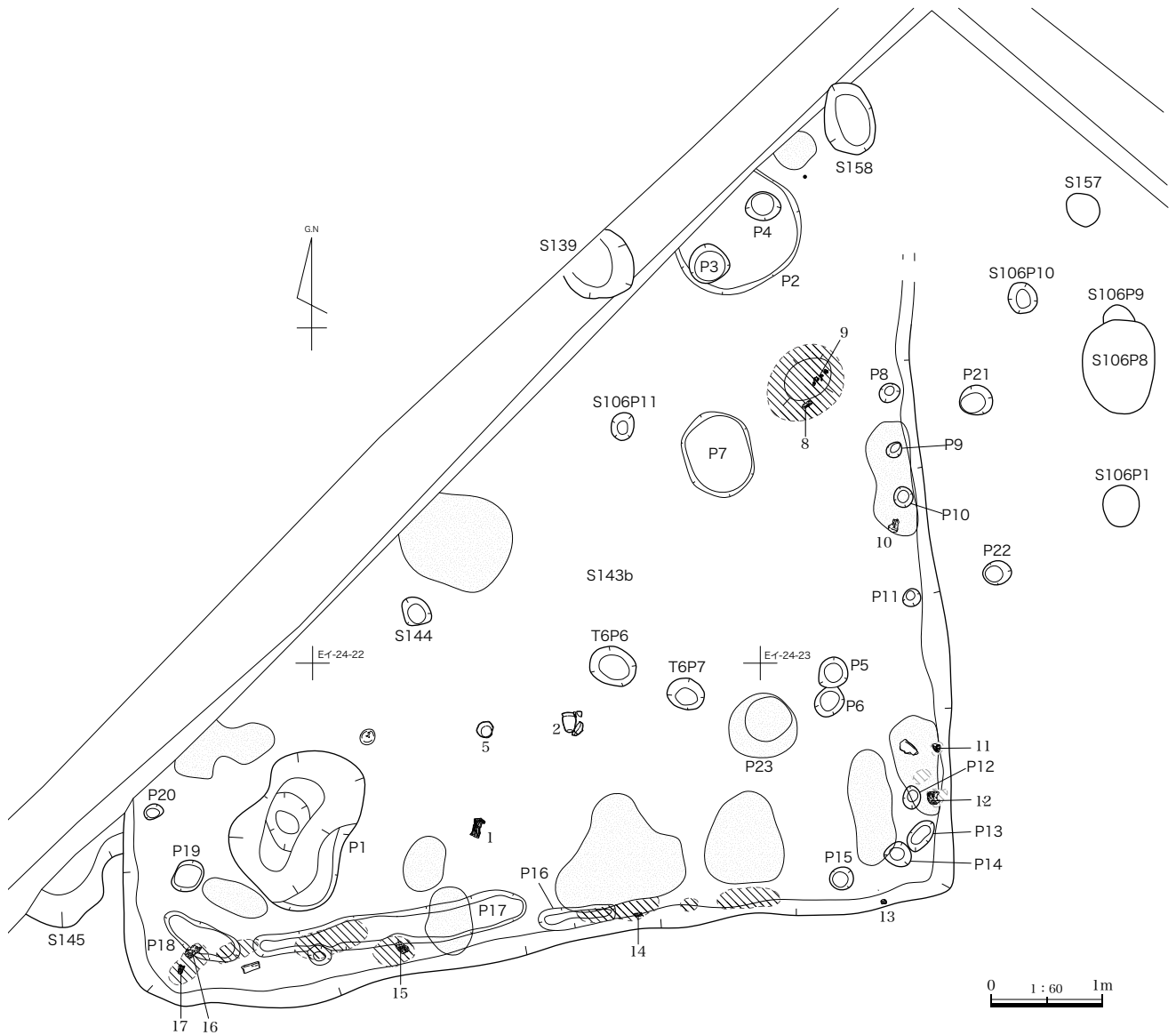
ピットは総数 23 基あり、壁際に位置するもの、内部にあるもの、住居外側に位置するもの等がある。後二者については、本住居跡に確実に伴うとは言い得ないが、可能性があるものは一応併せて図示した。壁際に壁柱穴が幾つか確認されたが、綿密な精査にも関わらず方形プランの安行式期住居跡としては検出数が少なくピットの深さが浅いことも含め問題となる。この時期の住居としては入口ピット群が不明なことも気がかりで、安易に調査区外に相当位置を推定することも問題が残る。

一方壁際で炭化材が立位～斜位で残っているものがある点については注意される。炭化材は、住居跡の壁からやや離れた部分で出土した例もあるものの、No. 10～17 はほぼ壁際にある。周溝や壁柱穴と近いまたは相当位置にないものも認められ (No. 8,9 等)、材の太さも考慮すれば、安易にすべてを壁柱材と断定しない方が良くもかもしれない。またこの材は住居外側に向かってやや傾斜して出土しているものが多いようにも観える。なお支柱穴についても、確実な指示をし得ないが、P 3、P 23、P 1 (旧 S 143) に調査区外の 1 本を加えた 4 本支柱を想定することができる。但し極めて深さがある訳ではなく、形態的にも疑問な部分が残るものもある。P 23 については、調査最終段階のダメ押しで確認されたもので、覆土や深さなど掘り下げ及び記録は不十分であるが、少なくとも 30 cm以上の深さがあることは確認している。

第3章 西地区の遺構と遺物



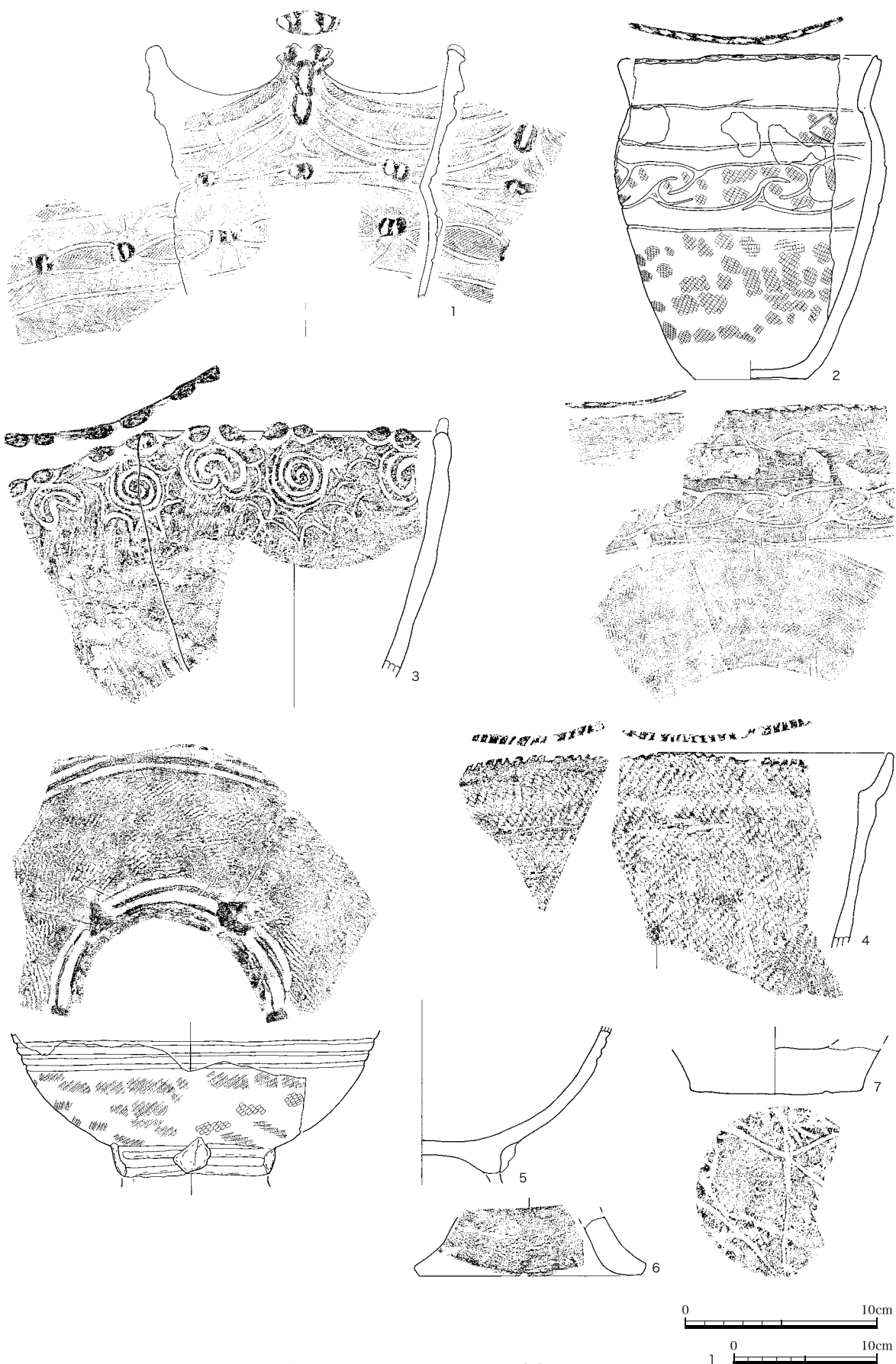
第197図 C区 S143b (P1~23)・145 平面図・断面図



第198図 C区 S143b (P1～23) 平面図・遺物出土図

壁際の焼土については、硬化したブロックというより、比較的細かな焼土粒・粒子の集合が土に混じるといふ様相である。炭化物も一緒に混じる様相の部分もあるが、ほぼ炭化物のみのブロックや焼土のみのブロックとも観える例もあり、単純ではない。調査時所見としては、焼土ブロックの方が床面より上位のレベルにあるものが多いように捉えられている。逐一の焼土範囲の形態規模を示さないが、60×30cm程度のもの、100×40cm程度のもの、95×120cm程度のものなどがあり、総じて不整楕円形に広がる形態が多いようにも捉えられる。図示していない部分でも焼土の集中部はあり、掘り下げ時に残し得た部分のみの記録とも言い得る。既述のようにP1内も焼土・炭化物は多く見られた。

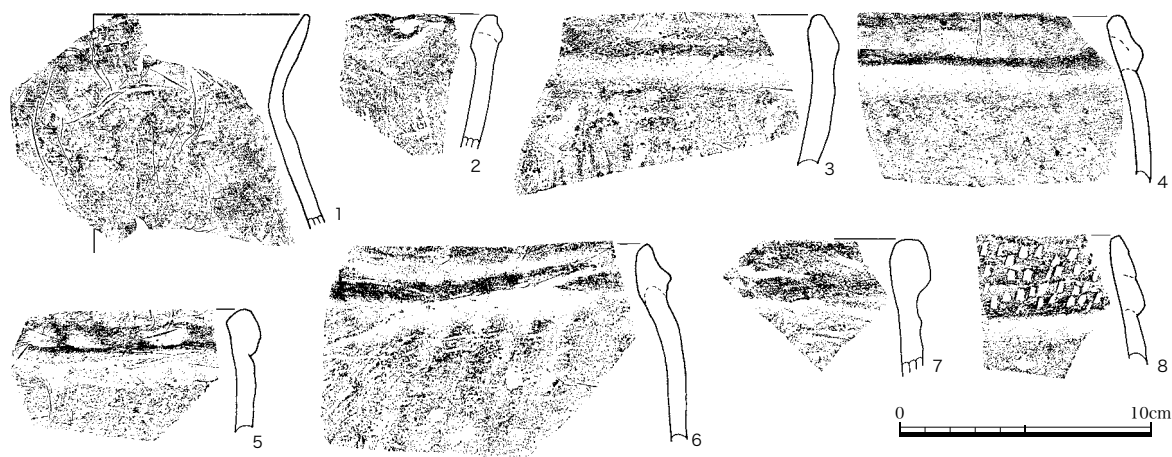
住居覆土は黒味のある灰褐色土が主体で、V層との区別が困難なばかりでなく、一部VI層との差異も難しいところも観られた。壁は比較的明瞭で、若干の傾斜がある。床面は概ね平坦だが硬化部分は観られていない。焼土が床面に接しているところもあり、或いは床面が焼けて焼土化したような状態の部分もあるが、このよ



第199図 C区出土土器(2) S143b



第200図 C区出土土器(3)



第 201 図 C 区 出土土器 (4) S143b

うな状態は壁際に限られ、床面の広い範囲に亘ってはいない。

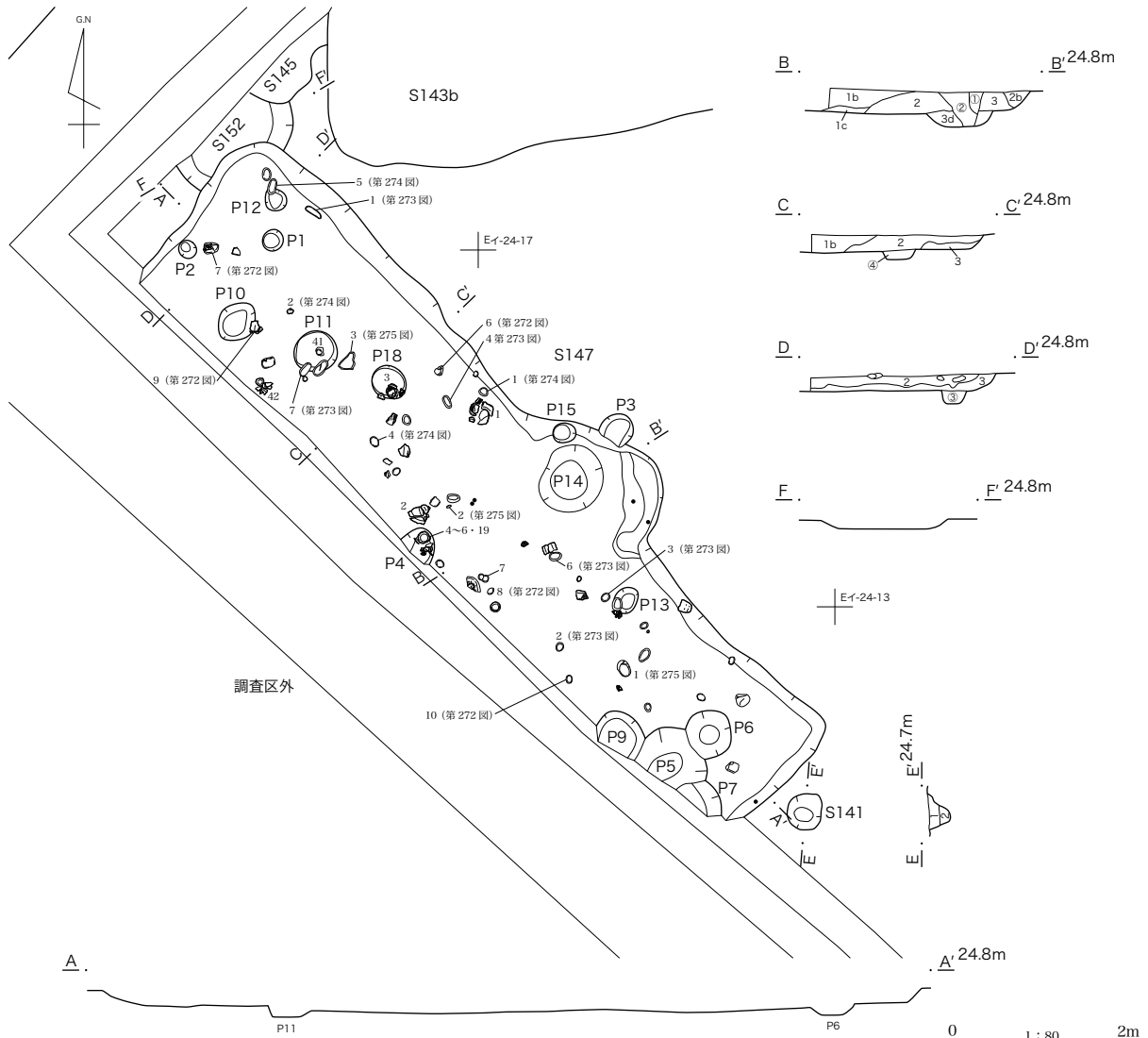
出土した遺物については、確実に覆土中遺物と言えるものは多くはなく、出土状態の記録も不十分である。V層中のグリッド取り上げで扱ったものの中にも本跡に帰属するものが相当数あることが、接合関係や同一個体判断から推定される。第 199 図 2 の安行 3 b 式がほぼ床面レベルで出土しており、他の出土遺物も含め考え、この時期の住居跡と判断する。上位の S 106 は大洞 C 2 式期と判断しており、先に示した層位レベル差の関係と整合的である。

第 199 図に復元個体を示した。床面より若干上位での出土である 1 は安行式大波状口縁深鉢で三角形区画内には三叉文が描かれている。覆土出土破片と幾つかのグリッド出土破片が接合したもので、他にも同一個体片が確認される。無文部のミガキは丁寧である。2 は頸部屈曲の小形深鉢で、通常屈曲部以下に入組文帯が入るものの、本例では縄紋帯が入り（破片右端一部にく状の沈線あるが、文様として良いか不明）、更に屈曲部より上位では縄紋が無い無文帯となっていること、口縁端部に刺突が巡ることなどの特徴がある。沈線は浅く、ミガキもあまり徹底されていない。三叉部は若干深く抉られている。3 も類例を見ない土器で、渦巻文の外側に弧線が周回する特徴的な意匠が横位連続的に描かれる。口縁の突起は B 突起に近いが繊細さに欠ける。4 もあまり見ないやや粗い縄紋施紋の土器で口縁端部には刻みが付される。第 200,201 図は破片資料である。安行 3 a 式なども見られるが、安行 3 b 式が目立っており主体的と言える。

S 147 (第 202 図、写真図版二一、二二)

C 区南西の VI 層上面で確認された住居跡である。近い位置にある S 143 b とは確認面床面ともほぼ同じレベルにある。黒味のある覆土で VI 層を掘り込んでいることが確認されたが、より上位の V 層中からの掘り込みであった可能性も残る。VI 層上面でのプラン確認においては、比較的明確に覆土と包含層の違いを観察することができた。但し壁自体はやや不明瞭で、若干緩やかな傾斜を有していることも含め、壁の形状には若干の問題を残す。第 202 図には周囲の遺構も一部示した。南東側の S 141 は浅いピットで、本跡と関わる可能性が若干残る。S 152 や S 145 については浅い土坑状の形態で、関わる可能性は低いであろう。

北西南東の壁間の距離が 9.2 m と大きく、2 軒以上重複の可能性も十分考えるべきだが、一応 1 軒の竪穴住居跡として報告する。南西は水路～調査区外となるが、水路壁面でも覆土は確認されており、より南西に広がることはほぼ確実である。この壁面の覆土観察でも覆土は連続的で明確な 2 軒重複の状況を示してはい

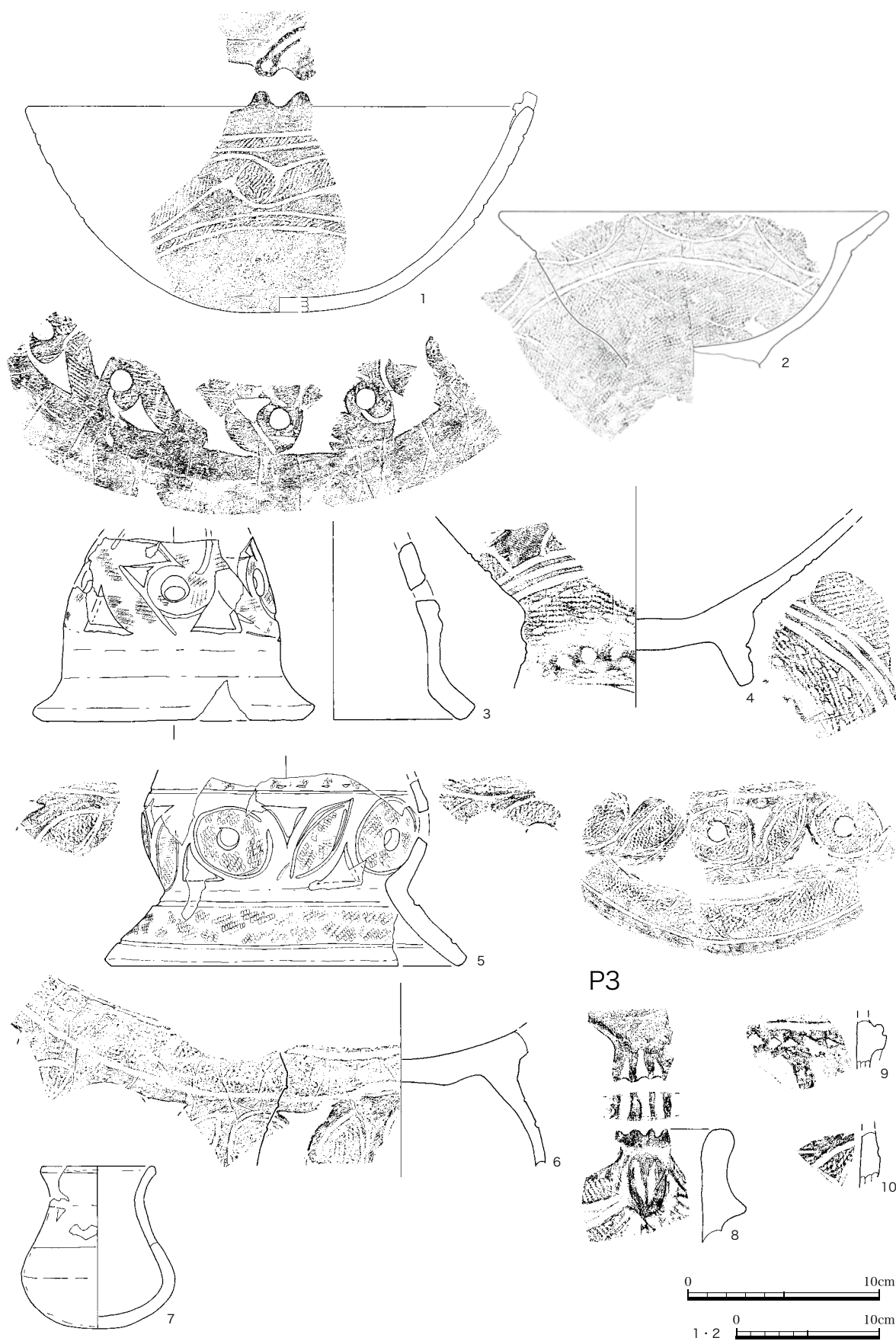


- S141 土層説明**
 1. 灰褐色土 炭化物粒微量、砂やや多量。しまり強。
 2. 淡灰褐色土 しまりやや強。
- S147 土層説明**
 1b. 淡灰褐色土 VI層に近い。砂質。炭化物粒少量。しまり強。
 1c. 淡灰褐色土 粘土粒やや多量、砂少量、炭化物粒微量。しまりやや強。
 2. 暗灰褐色土 砂少量、炭化物粒微量。しまりやや強。
 2b. 灰褐色土 粘土ブロック多量。砂・炭化物粒やや少量。
 3. 暗灰褐色土 砂やや多量。炭化物粒微量。しまりやや強。
 3d. 灰褐色土 粘土ブロック多量。砂やや多量。炭化物粒少量。しまりやや弱。
 ① 淡灰褐色土 粘土ブロックやや多量。砂やや少量。炭化物粒少量。しまり強。
 ② 暗灰褐色土 炭化物粒多量。砂やや多量。粘土ブロック少量。しまり強。
 ③ 灰褐色土 炭化物粒少量。しまりやや強。
 ④ 灰褐色土 炭化物粒微量。しまり強。

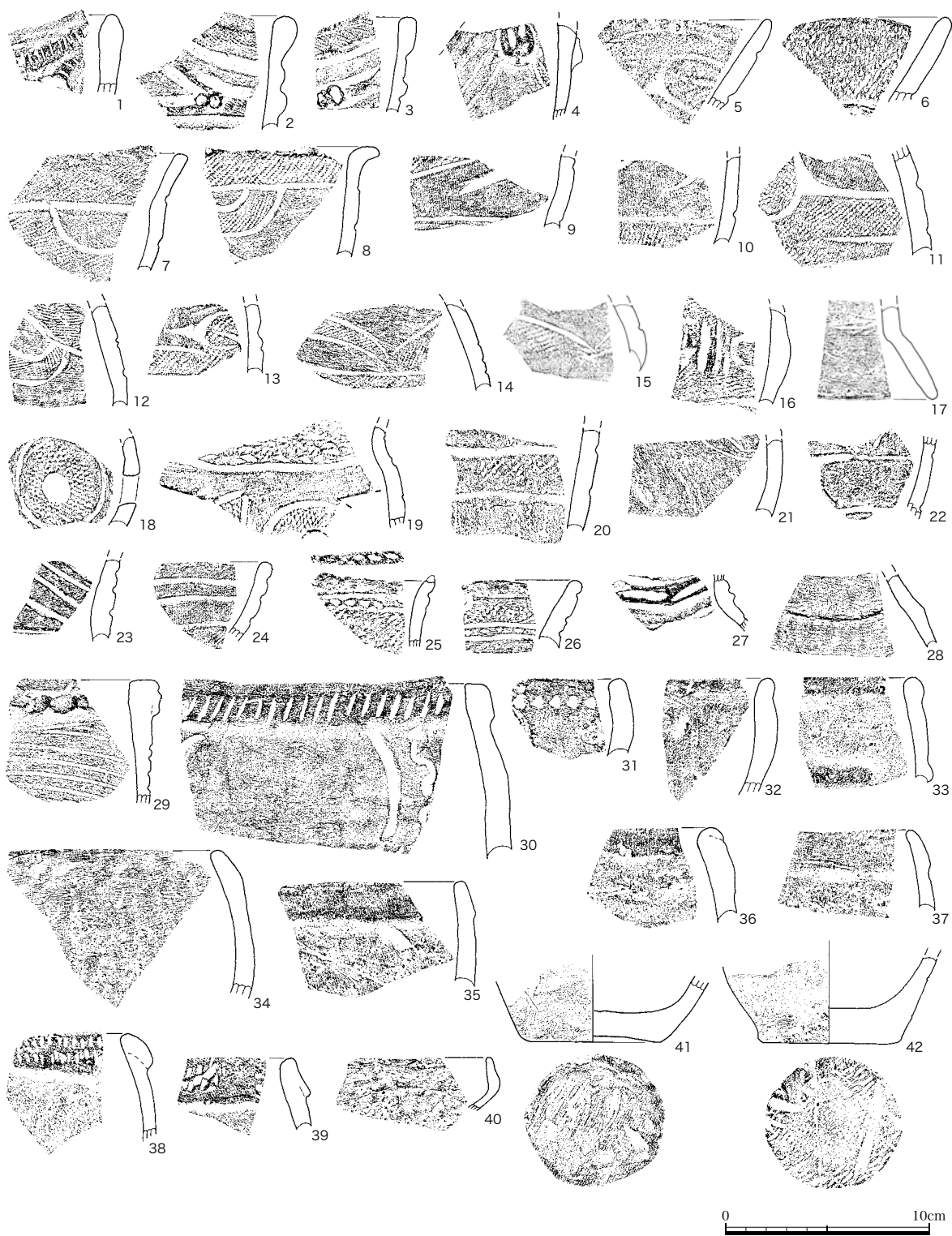
第202図 C区 S141・147 (P1～15)・152 平面図・断面図・遺物出土図

ない。北西や南東の壁からはN-46°-Eの軸を示し、確認された直交軸の長さは2.56m、確認面から床面までの深さは29cmである。

床面はおおむね平坦だが、硬化面は確認できていない。北側でS152と重複するが、相互の新旧関係は不明である。但し、S152の方が後から確認しており、S152→S147となる可能性が高い。また第202図には示していないが、S110とS112が本跡と平面的には重複する位置関係にある。但しそれらの遺構の検出面がより上位のV層中であることから、多少の問題を残すものの本跡との関わりは無いものと判断してい



第203図 C区出土土器(5) S147



第204図 C区出土土器(6) S147

る (S 147 → S 110,112)。

覆土掘り下げ及び遺物取上げ後、柱穴を検出すべく、床面の入念な精査を行ったが、ピットの確認は一定数に留まり、とりわけこの時期の住居跡で一般的な壁柱穴の検出は限られている。支柱穴についても、P5,P6 や P10,11 等がその可能性を示すが、いずれも浅く、確定的な判断はできない。また入口ピットについても、北東の壁が一部張出すところ (P3,P14 などの部分) が相当する可能性を窺わせるものの、P14 も浅く一段下がる程度で典型的な入口ピット群の形状とは大きく異なる。なお柱穴の覆土は殆ど記録をとり得なかったが、住居跡覆土とあまり変わりがないとの所見がある。またセクション B-B' ラインの覆土①②層は住居跡覆土を切るような分層ラインを示しており、ピットとすれば住居機能時より後のピットとなる。但し平面的には明らかにし得なかったことから、ピット番号を付しての平面的な図示はしていない。

遺物のうち土器は覆土中からやや少量が出土した (第 203,204 図)。礫や石器はやや多い。整理後の確認された土器ではピット出土土器を含め安行 3 b 式が主体的で、特に台付鉢が目立っている (第 203 図 2 ~ 6)。第 204 図に示した破片でも安行 3 b 式が目立つ。近い位置にある S 143 b について、位置関係からは同時存在は厳しいと考えるが、出土土器の型式では大きく異なることは無いようにも捉えられる。

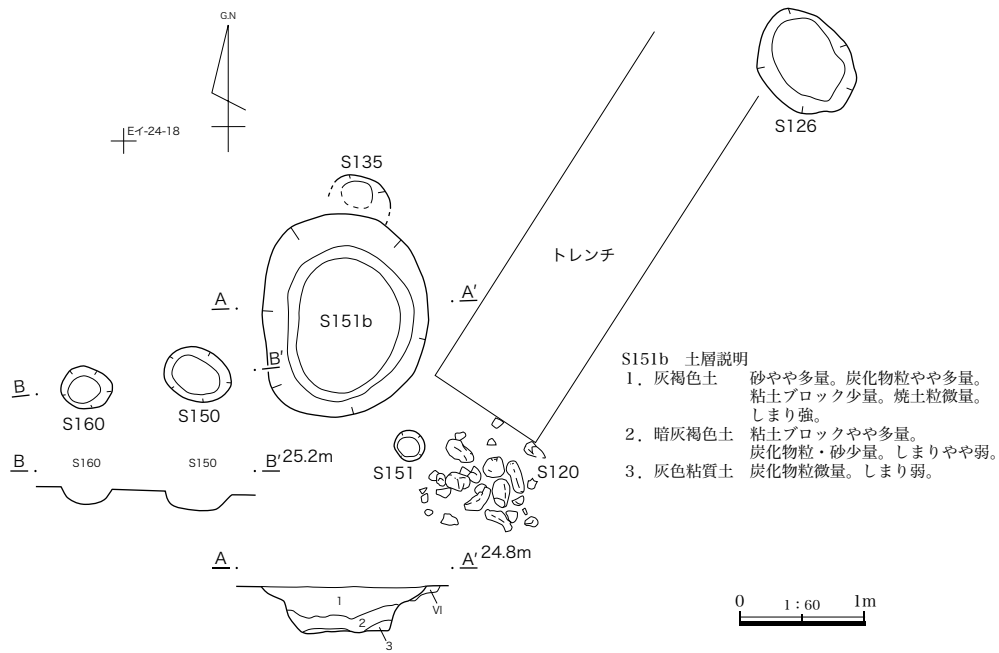
S 135 (第 205,206,208 図 写真図版二三)

土器埋設遺構で、VI層を掘り込む浅い掘り方内に横位に土器を埋設している。ほぼ真横に置くような形状で、上位は欠失部が多い。土器は無文の深鉢である。S 151 と重複するが、S 135 がより上位で確認されており、本跡の方が新しい。

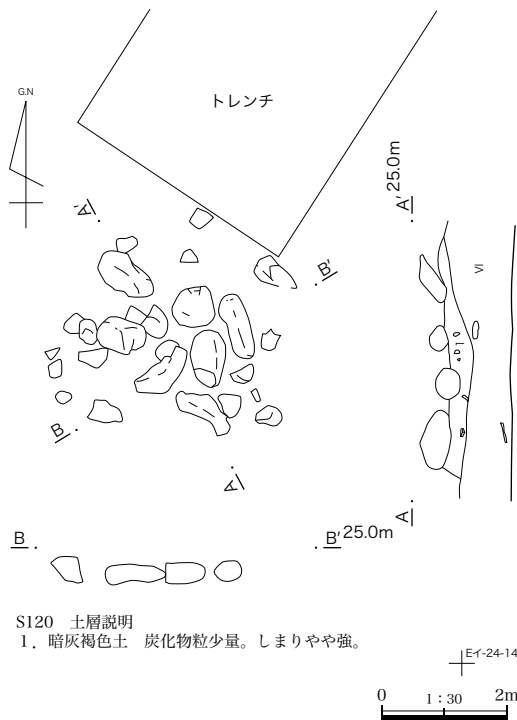
覆土など際だった特徴はない。土器は第 205 図 2 に示した。口縁も一部確認され、無文の砲弾型を呈する土器に復元された。



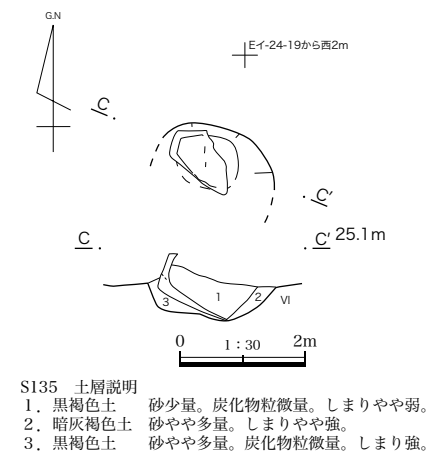
第 205 図 C 区 出土土器 (7) S135・S136



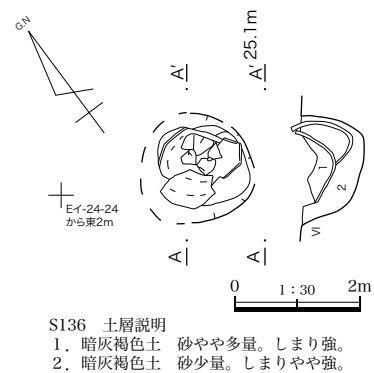
第206図 C区 S120・126・135・150・151・151b 平面図・断面図



第207図 C区 S120 平面図・断面図



第208図 C区 S135 平面図・断面図



第209図 C区 S136 平面図・断面図



第210図 C区出土土器(8)

S 136 (第209図、写真図版二三)

土坑状の掘り方内に正位～斜位で土器を埋設している。VI層を掘り込む比較的深い掘り方である。調査時は明瞭では無かったが、整理での接合により口縁も含め比較的遺存状態の良い高さ37cmの復原個体となった(第205図1)。口縁が内彎しつつ若干折り返し状になる無文土器で晩期中葉となろうか。

S 150、151、151b (第206図、写真図版二五)

S 150、S 151は浅いピット状。S 151 bは平面楕円形でやや深さのある土坑。図面中に指示し得なかったが覆土観察の記録をここで示す。

S 151 覆土は淡灰褐色土で砂粒多量、炭化物粒微量、しまりやや強。S 151は暗灰褐色土で鉄分多量、炭

化物粒微量、しまり強。S 151 bの壁は段差が付き、上位はかなり緩やかな角度になっている。下位は急な角度の壁で、比較的地山との区別は明瞭であった。性格を示すような覆土や遺物出土状態の特徴はない。遺物は覆土のやや上位で多い傾向があった。整理においても土器は比較的多く確認され、第210図16～22に代表例を示した。安行3 b～3 c辺りが目立っており、遺構の時期もこれに相当しよう。

この範囲内にある遺構でS 160は浅いピット、S 126は浅い土坑である。S 126出土土器として無文の土器2点(第210図12,13)を示す。

S 120 集石(第207図、写真図版二四)

110 cm四方の範囲内に30点程度の礫・土器片が集中している状態を確認し、遺構名を付した。明瞭な掘り込みは見られなかったが、礫の間からVI層上面までの間には若干V層やVI層とも異なる土層(セクション図1層)が確認され、掘り込みがあった可能性も残る。礫は10～20 cm程度の河原石で、一部並んでいるように見えるところもあるが、明瞭では無い。垂直方向の重複は見られず、概ね水平な面を為している。レベル差で言えば20 cm程度の範囲内である。配石遺跡の可能性も残るが、集石としておく。

出土土器は第210図の1～10に示した。小片が多く判断難しいが安行3 b式～同3 c式辺りが目立っており、遺構の時期を概ね示すと考えたい。石器では石錐1点と剥片石器1点を示すが、他に磨石類、石皿類の出土も確認されている。

S 117、118、121、128、129、130、131、132、140(第211図 写真図版二三・二四)

C区南東のV層下半～VI層上位にかけて土坑・ピット等が幾つか確認された。これらをまとめて第211図に示した。以下特徴的な遺構や所見があるもののみ記述する。これらの遺構確認は若干のレベル差があり、S 121はV層下位と比較的上位での確認であったが、S 129等はほぼVI層上面～一部若干下げた面での確認であった。S K 118も平面記録は概ねVI層上面での記録である。

S K 118

不整楕円形で中央が一段下がるやや大きめの土坑。残っていた土層ベルトからV層には覆われ、VI層を掘り込む遺構であることが確認されている。図での右上点線ラインは、ベルトセクションで掘り込みが確認された部分をもとに推定したVI層上面レベルでのプランである。壁の傾斜は緩やかでとりわけ北東方向はかなり緩やかに立ち上がる。底面も水平平坦な面は狭く、皿状の傾斜を有している。

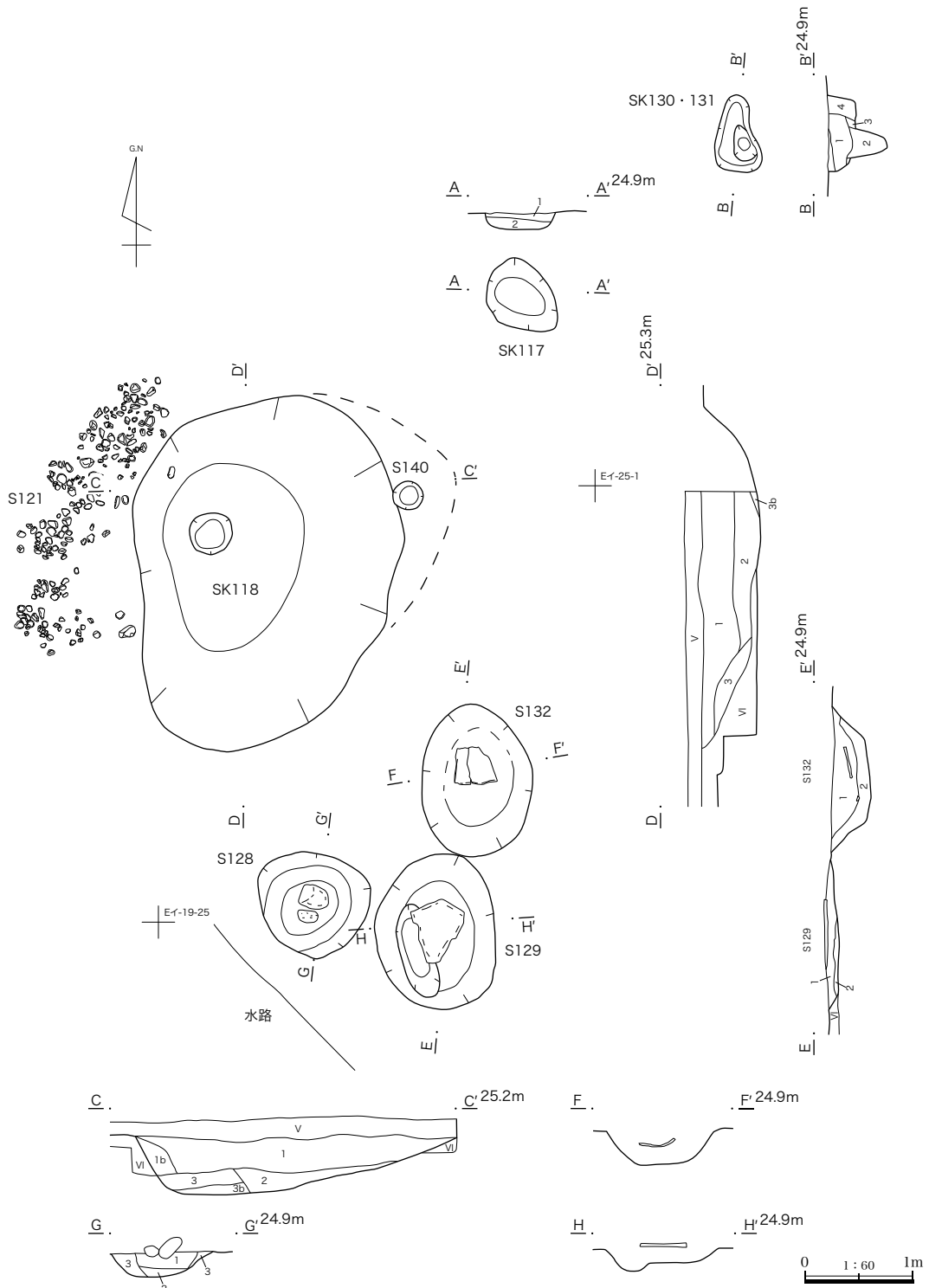
上位ではS 121の礫が入り込んでおり、S 118→S 121を想定させるものの、混入と判断しての逆の新旧関係となる可能性もある。S121の礫出土状況が、S 118を避けるように分布している点も気がかかりで、あるいは同時存在の可能性もあろうか。なおS 140とも重複しているが関係は不明である。

出土土器片は第212図に示した。比較的大形の破片もあり、安行3 b式や大洞C 1式がやや目立っている。

S 140の覆土は暗灰褐色土で炭化物粒微量、砂やや多量。しまりやや弱との記録がある。S 132からは大きめの土器片が中央上位で出土している。他に図示していないが礫や土器小片もやや多く出土している。

S 121(第211,213図、写真図版二四)

小礫の集中部をS 121とする。VI層上面で確認されたが、礫の一部はV層下位でも出土していた。礫取り上げ後の下方でも精査したが掘り込みは確認されなかった。また礫集中部の土層と周辺の土層との差異があるか注目して調査したが、明瞭な違いは確認されていない。礫の上面はほぼ同じレベルだが、水平に面を揃



SK117 土層説明

1. 暗灰褐色土 砂やや多量。粘土ブロック・炭化物粒少量。骨粉微量。しまりやや強。
2. 暗褐色土 砂やや多量。しまりやや強。

SK118 土層説明

1. 暗灰褐色土 小礫多量。砂やや多量。骨粉少量。炭化物粒微量。しまりやや弱。
- 1b. 灰褐色土 炭化物粒やや多量。小礫少量。しまりやや強。
2. 黒褐色土 粘土ブロック（6層部）やや多量。砂少量。しまりやや弱。
3. 淡灰褐色土 炭化物粒やや多量。砂やや少量。しまり強。土器少量。
- 3b. 暗灰褐色土 炭化物粒・砂少量。しまりやや強。

S128 土層説明

1. 黒褐色土 砂やや少量。粘土ブロック・粒少量。しまり強。
2. 暗褐色土 粘土ブロックやや多量。砂少量。しまり強。
3. 灰褐色土 粘土ブロックやや多量。砂やや少量。しまりやや強。

S129 土層説明

1. 暗灰褐色土 砂・粘土ブロックやや多量。しまり強。
2. 暗褐色土 粘土ブロック多量。砂少量。しまりやや弱。

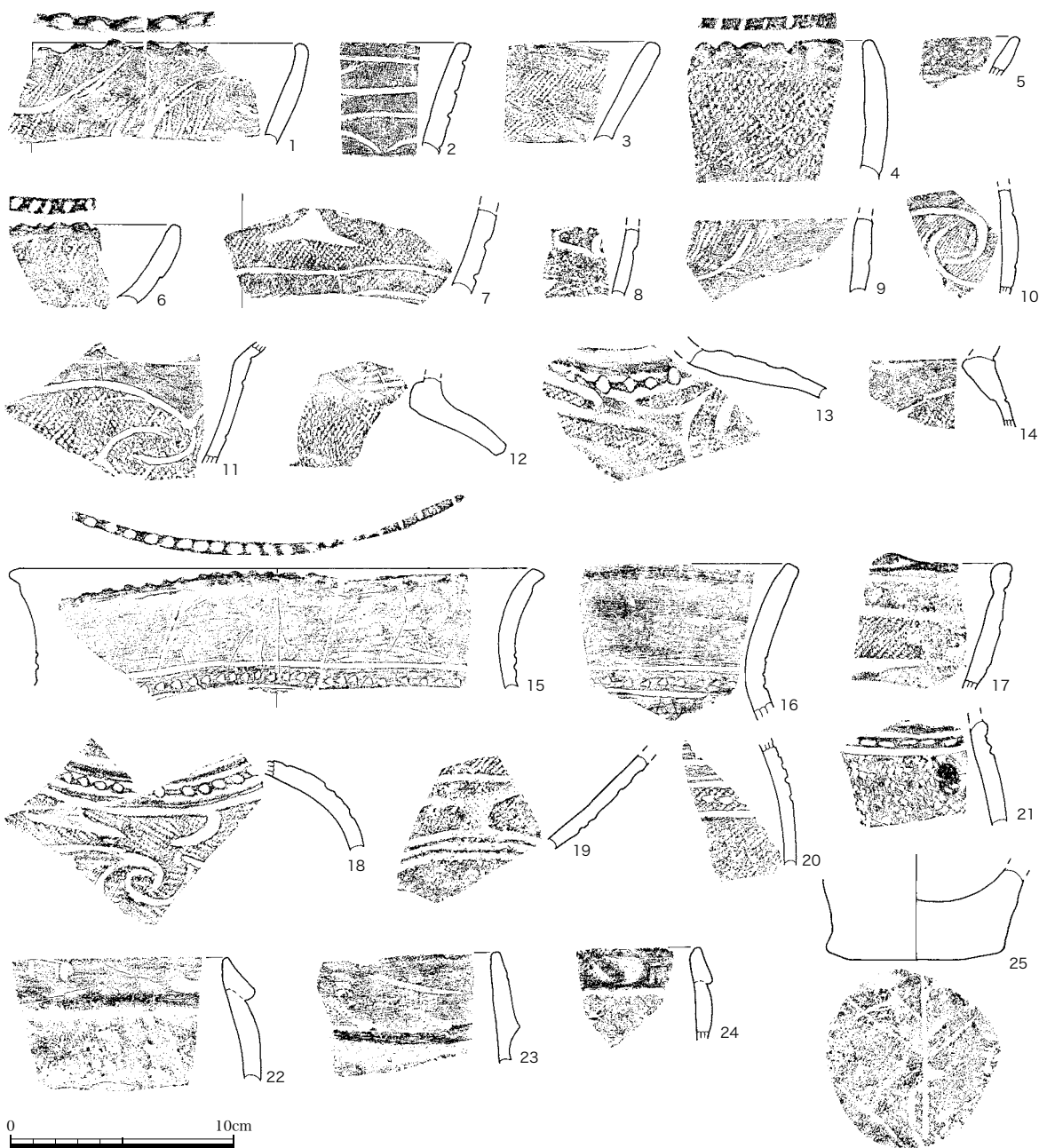
SK130・131 土層説明

1. 暗褐色土 砂やや多量。炭化物粒微量。しまりやや弱。
2. 暗灰褐色土 砂少量。しまりやや強。
3. 黒褐色土 炭化物粒微量。しまり弱。
4. 暗褐色土 粘土ブロック少量。しまりやや強。

S132 土層説明

1. 暗灰褐色土 砂・粘土ブロック少量。しまりやや強。
2. 灰褐色土 砂やや多量。粘土ブロックやや多量。しまり強。

第211図 C区 SK117・118・130・131・S121・128・129・132・140 平面図・断面図

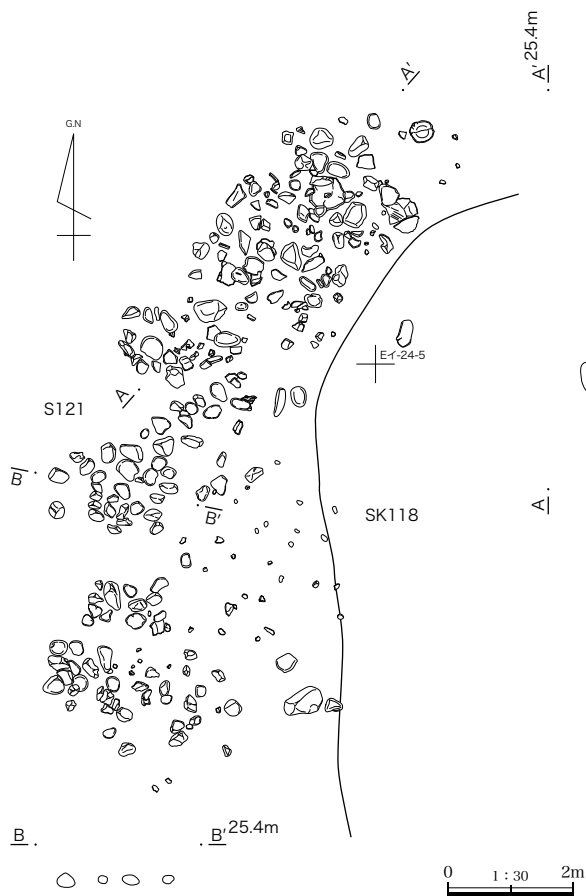


第212図 C区出土土器(9) S118

えたような状態とまでは言い得ない。図示の集中範囲以外の外側にも小礫は疎らに出土していたが、この部分は明らかに有意な集中部と捉えられる。S K 118の上位などでも礫は入り込んでいた。また若干の土器片はあるものの、確実に伴う大形破片のような例は見られていない。土器小片を第223図の13～17に示した。時期判断困難な破片が多いが、安行3b式～3c式あたりが目立っている。

石材の確認は不十分で鑑定も行い得ていないが、調査時の所見ではチャート、安山岩、凝灰岩などが目立っていたとされる。計196点の石器・礫が確認されたが、重量計測や個別の観察は行い得ていない。

仮に3つのブロックに分け規模を示すと、北側の楕円形範囲aが145×60cm、あえて軸を示せばN-40°-E、中央の概ね円形範囲bが75×57cm、N-80°-E、この南のブロックが75cm×75cm程度、となる。中央のブロックbは第2面ではやや東にずれて広がっており80×70cm程度となる。但しこの第2面ではやや



第213図 C区 S121 平面図・断面図

礫は疎らとなる。これら a～c のブロック全体では南北 260 cm、東西 160 cm 程度の範囲となり、長楕円状の範囲とも言える。

S 129 (第 211 図、写真図版二四)

S 129 は緑泥片岩の大形石皿(第 278 図 6)を覆土上面に据えている遺構。S 129 自体は浅い掘り込みの土坑で、石皿設置との関係も確定的ではなく、包含層中廃棄などの可能性も若干残るが、調査所見としてはこの石皿を設置と捉えた。但し下位の掘り込みを設置のための「掘り方」とまで推定できるか、或いは土坑覆土堆積後に設置という時間差を考えるべきかについては判断できない。土器は無文の小片 2 点のみの出土であり、時期の判断もできない。

S 130、131、132 (第 211 図)

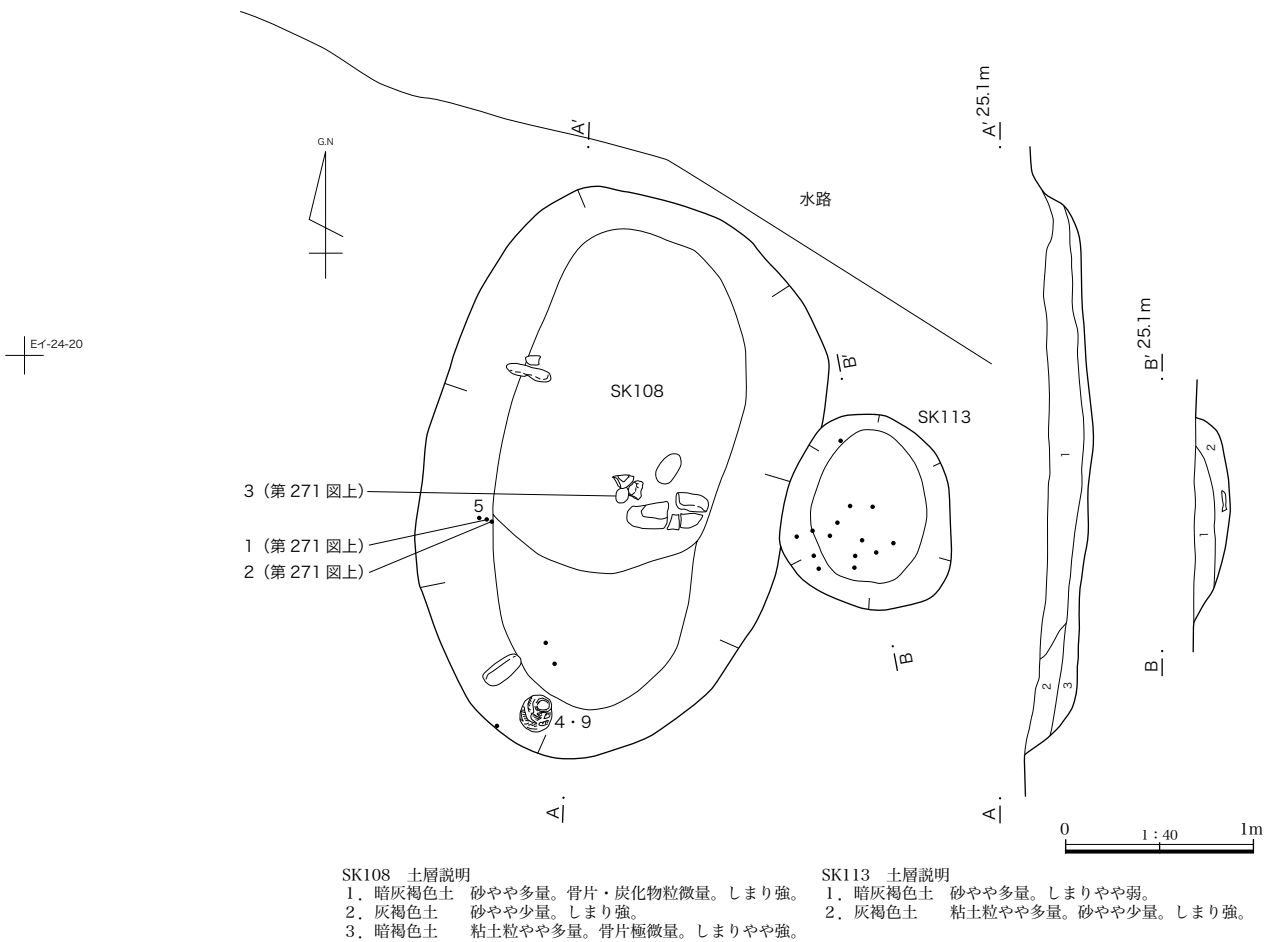
S 130,131 は 2 基の重複で S 130 → S 131 と捉えている。S 130 は小さい土坑状、S 131 はピット状である。S 117 も浅い土坑状の形態。

S 132 はやや浅い土坑、整理での出土遺物確認では土器片 34 点が確認されている。S 128 では 12 点の無文小片があり、第 223 図 26 のみ示した。

S K 108、113、159 (第 214 図、第 222 図、写真図版二三・二五)

C 区中央よりやや北側で確認された 2 基の土坑で、更にこの下位で S 159 が確認されている。S 159 (第 222 図) は 2 基の土坑調査後の若干下位で確認されたもので、S K 108・113 の方が新しい。この 2 基の新旧関係は不明であるが、S K 108 の方が先にプラン確認でき、その後の精査で S K 113 の確認に至っていることから、S K 113 → S K 108 の可能性が高い。S K 108 は全体で浅い皿状の形態で、底面や壁はやや不明瞭である。底面も平坦ではなく凹凸がある。形態的には墓の可能性を示すが、積極的に墓といえる特徴は認められない。覆土も自然堆積の様相を示している。S K 113 も浅い皿状を呈する小さめの土坑である。2 基の土坑調査後底面精査で確認された S 159 も浅い土坑で、掘り込みやや不明瞭なこと、不整な平面形であることも含め、自然の落ち込みの可能性さえ残る。

この 2 基の土坑いずれも比較的遺物が多く出土している。第 216 図に示す S K 108 出土土器では復元個体もある。1 は安行系(天神原系)の深鉢で、下半の破片数は少ないものの、概ね復元可能となった個体である。他にも大洞系壺の復元個体 4 や安行系の破片 2 などが確認されている。石器では敲石 1 点、打製石斧、磨石各 1 点を示した。他に石鏃類 5 点、礫器 3 点、砥石 2 点、磨石 14 点、チャート剥片類 51 点、チャート原石 10 点等が出土している。チャート原石・剥片類については S K 118 と整理時に混在の疑いも残るが、問題ないとするれば注意すべき事象と言える。S K 113 は礫がやや多い傾向にある。第 217 図に示した S K 113 出

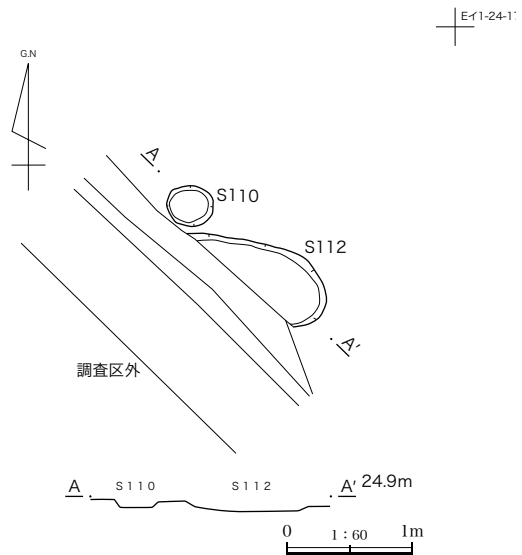


第214図 C区 SK108・113平面図・断面図

土器では安行系波状縁深鉢など数点を示した。S159出土土器としては14点があり、そのうち1点を示した(第210図24)。

S 110、S 112 (第215図)

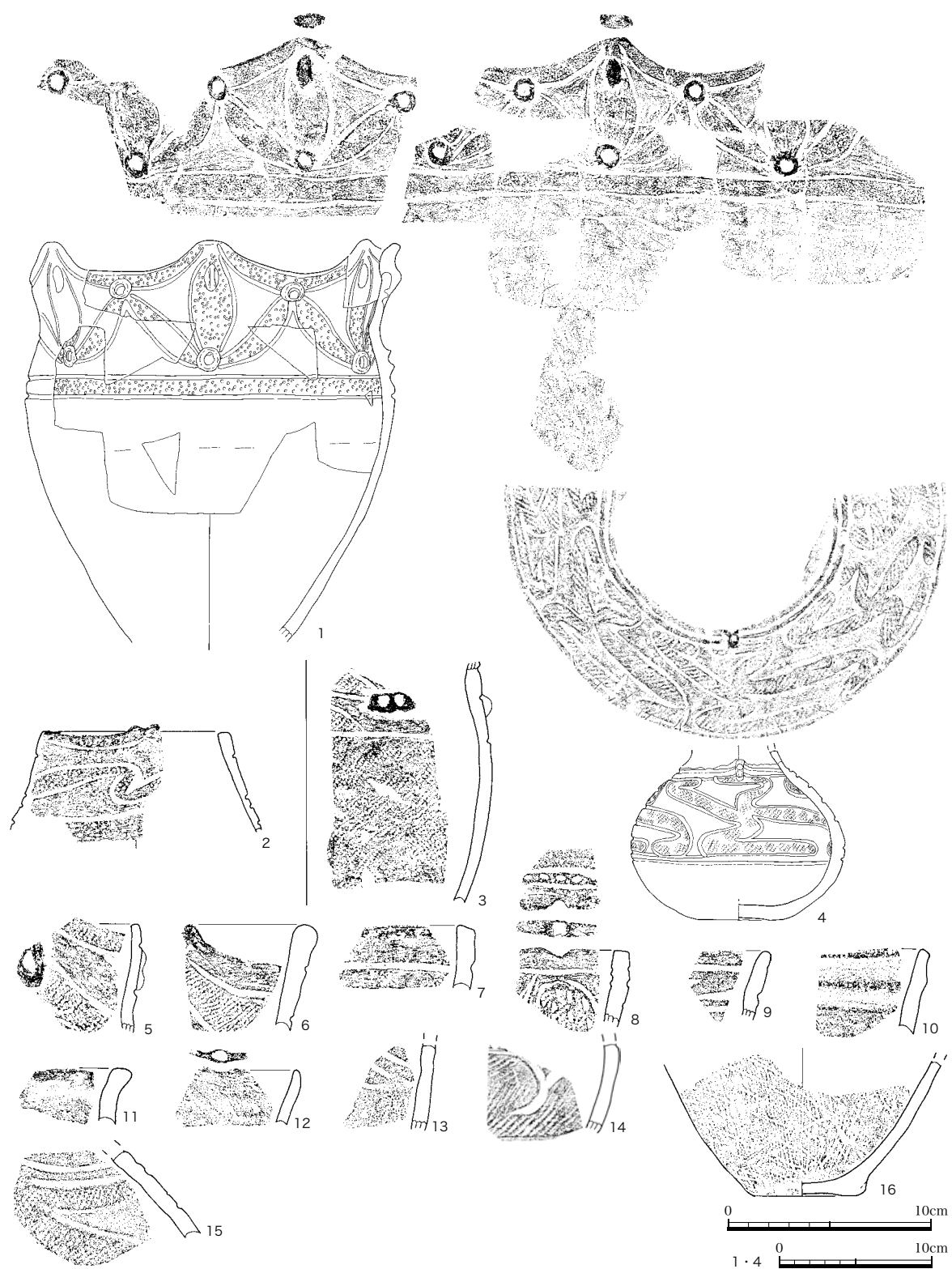
楕円形の土坑S112とピットS110が調査区南西のV層中で確認された。平面的に重なるS147がV層中に掘り込まれた遺構とすれば、双方の関係性も無関係とは言い難くなるが、一応別層準で別時期の遺構と捉えておく。S112出土遺物については、第210図11の1点を示した。



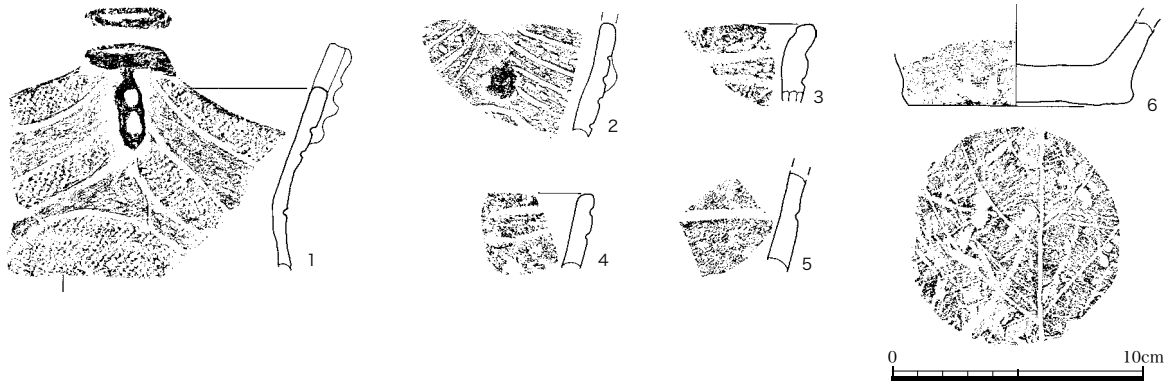
第215図 C区 S110・112平面図・断面図

S 107、S 105 (第218図)

S 105はV層中で確認、S 107はVI層上面で確



第216図 C区出土土器 (10) S108



第217図 C区出土土器(11) SK113

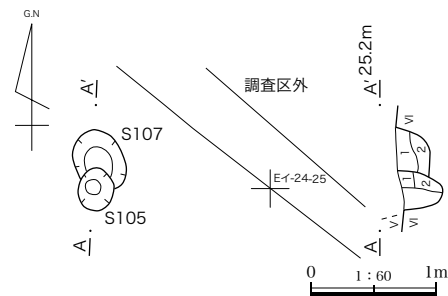
認められた。記録はほぼVI層上面でとっている。S D 102と直交する未命名の溝があり、これと重複する位置関係にあるが、溝はより上位での確認であり、2基のピットより新しい。いずれもピット状だが、周囲に同種のピットはない。2基の新旧はS 105の方が新しい。またS 135土器埋設遺構とも重複するが、S 135は2基のピット調査後に確認された若干下位の遺構でありこれより新しい。

S 119、S 123、S 124、S 125 (第219図、221図)

C区東側の調査区で確認された土坑・ピットである。この4基以外にC区東側の調査区で確認された遺構は無い。この東側の調査区では包含層V層やVI層中の遺物も少なく、この事象と対応すると考えられよう。いずれもVI層上面で確認された遺構で、このVI層を掘り込んでいる。

S 119・S 123は重複する2基の土坑で、更に未命名のピット1基が重なる。新旧関係はピット→S 119→S 123が土層断面から観察される。S 119では2点の小片(第223図24,25)が出土、S 123は遺物の出土がない。25は晩期前半となるうか。

S 124・125は近い位置にある2基の土坑で、いずれも平面楕円形の浅い土坑である。S 124の覆土は暗灰褐色土で粘土ブロック多量、しまりやや弱。S 125の覆土は暗灰褐色土、粘土ブロック少量、しまりやや弱との記録があり、攪乱に近いとの所見も残る。



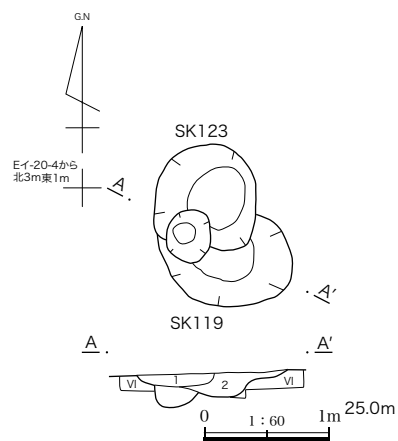
S105 土層説明

1. 灰褐色土 砂やや多量。白色粒微量。しまりやや強。
2. 淡灰褐色土 砂やや少量。しまりやや強。

S107 土層説明

1. 暗灰褐色土 砂少量。しまり弱。
2. 淡灰褐色土 砂やや多量。しまりやや強。

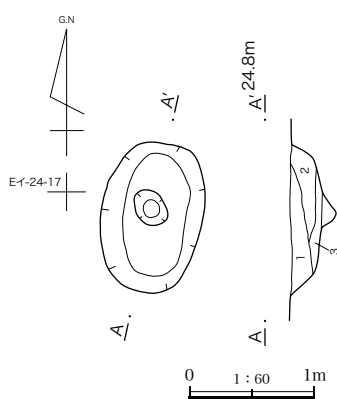
第218図 C区 S105・107 平面図・断面図



SK119・123 土層説明

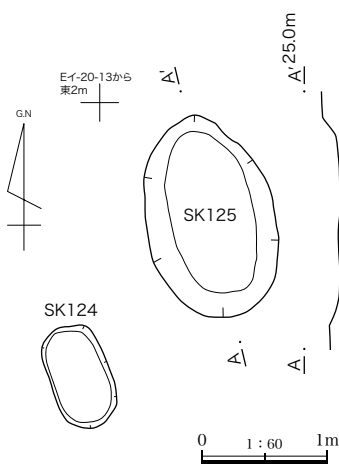
1. 灰褐色土 白色粒・炭化物粒微量。砂少量。しまり強。
2. 淡灰褐色土 粘土ブロック少量。砂微量。しまり強。
3. 暗灰褐色土 粘土ブロックやや多量。炭化物粒微量。しまり強。

第219図 C区 SK119・123 平面図・断面図

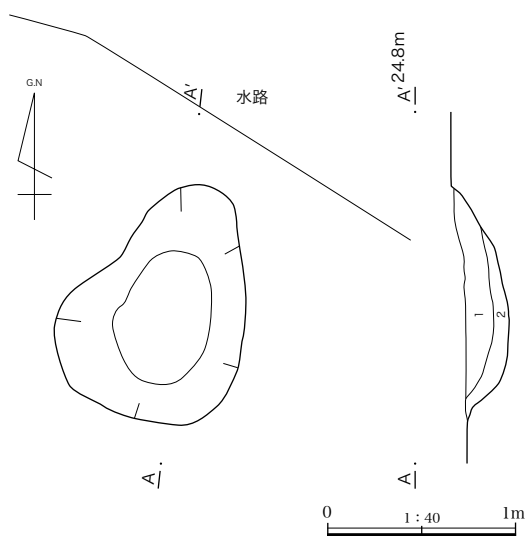


S142 土層説明
 1. 灰褐色土 炭化物粒・砂やや多量。しまりやや強。
 2. 暗灰褐色土 炭化物粒多量。骨片微量。しまり強。
 3. 淡灰褐色土 砂多量。炭化物粒微量。しまりやや強。

第220図 C区 S142 平面図・断面図



第221図 C区 S124・125 平面図・断面図



S159 土層説明
 1. 灰褐色土 炭化物粒やや少量。粘土ブロック・砂少量。しまり強。
 2. 淡灰褐色土 粘土ブロックやや多量。炭化物粒微量。しまりやや強。

第222図 C区 S159 平面図・断面図

S 142 (第220図、写真図版二五)

S 143 bとS 147の間に位置する浅い土坑である。底面より14cm程下がるピットがあり、別の遺構で重複の可能性もあるが判断できない。覆土は自然堆積の3層。出土遺物は第223図18～23に示した。

S 104、S 109、S 111、S 114、S 115、S 116 (第224図)

C区北東で確認された遺構群である。V層下位～VI層上面での精査で見つかり、掘り下げて遺構と確認した。これらの遺構の中ではS 104が比較的早くやや上位で確認された。確認面の精査では図に示したような弧状～半円状の黒色プランが確認され遺構の可能性も考え掘り下げたが、落ち込み・自然の傾斜部分と判断している。この落ち込みは概ね6cmの深さで、この内部で硬化面などは無く壁の傾斜も緩やかである。但しS 114、S 119など幾つかのピットがこの内部に位置していることから、住居となる可能性も否定はできない。とはいえ、S 114～116、S 109、S 111いずれも深さ10～20cmの浅いものであることも、柱穴との判断を躊躇させる。落ち込みの規模を計測すると、520×240×7cmとなる。

S 109の覆土は灰褐色土、砂やや多量、しまりやや強、S 111は淡灰褐色土で砂少量、しまりやや強の記録がある。S 104、S 114などの出土遺物は第223図に示した。いずれも晩期の範囲内だが絞り込みは難しい。

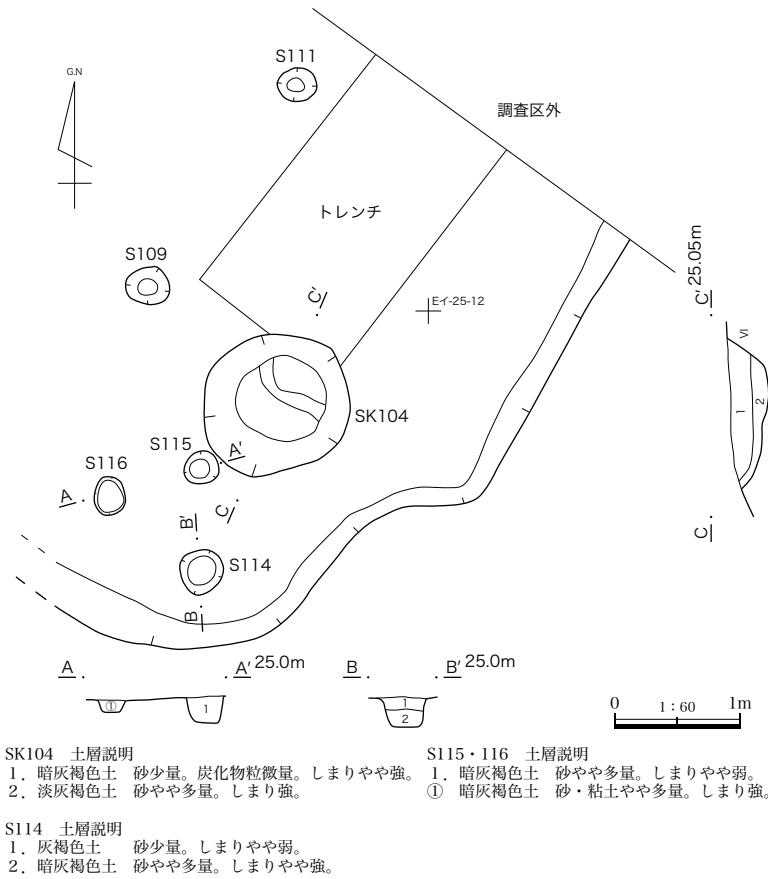
S D 101、102、103 (第225～226図、写真図版一七)

IV層～V層上位で確認された。S 101とS 102は概ね平行する。S 102の西側が途切れているのは、トレンチ拡張調査区で、溝より下位から調査したためである。覆土はいずれもFAを含む灰褐色土で、III層には覆われる。A区の溝ウ0SD2～SD4と同形態同方向であることから、一連の繋がる溝である可能性が高いが、未調査区を挟み、対応関係について検討していない。

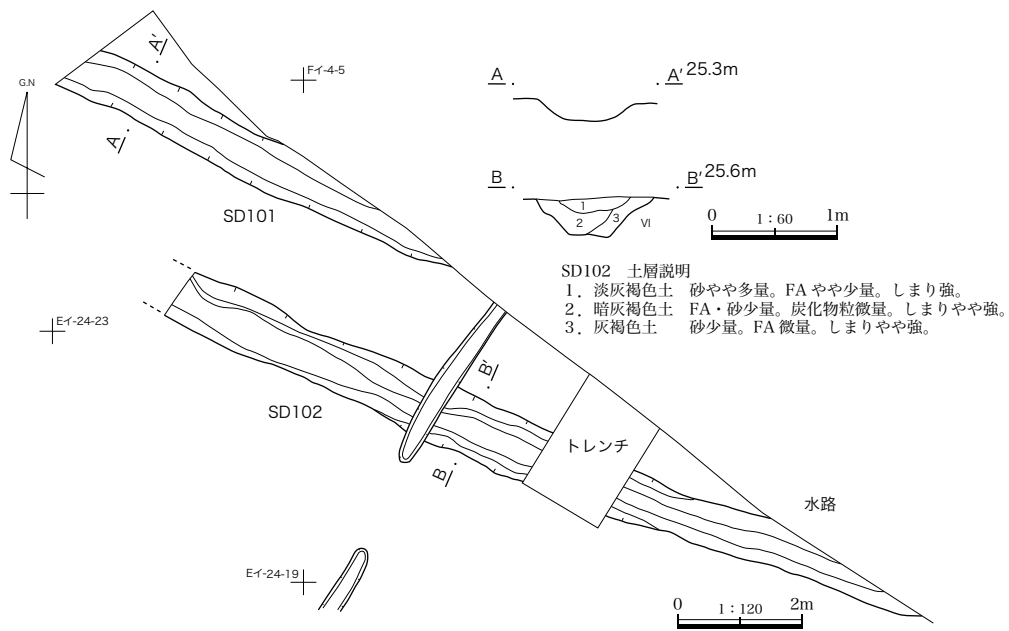
S D 101、S D 102とも直線的に推移し、断面は皿状～逆台形状を呈する。



第223図 C区出土土器(12)



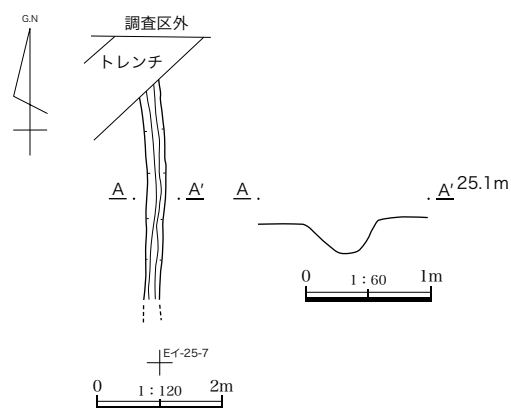
第224図 C区 SK104・S109・111・114～116 平面図・断面図



第225図 C区 SD101・102 平面図・断面図

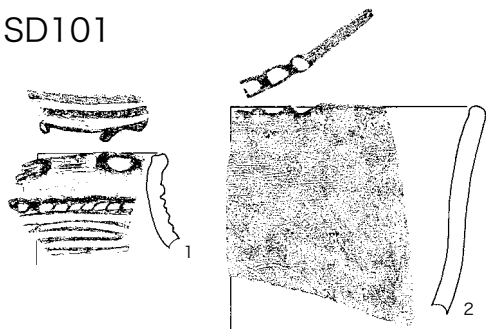
S D 102 と直交する溝について、調査時に遺構名を付していないが、仮に S D 204 とする。S D 102 と重複するが、新旧関係は不明である。形状は細く浅い溝である。他の溝と同様IV層を掘り込みIII層には覆われるようだが、明確な記録はない。

S D 103 (第226図) は 14 ~ 16 cm と浅い溝でV層上面での確認である。南北方向で直線的に推移し、これに平行・直交する溝等の遺構は無い。より南に延びることが推測されたが、包含層の調査を優先したこともあり、確認に至っていない。覆土の記録も認められないが、F A を含むようであり、S D 101 や S D

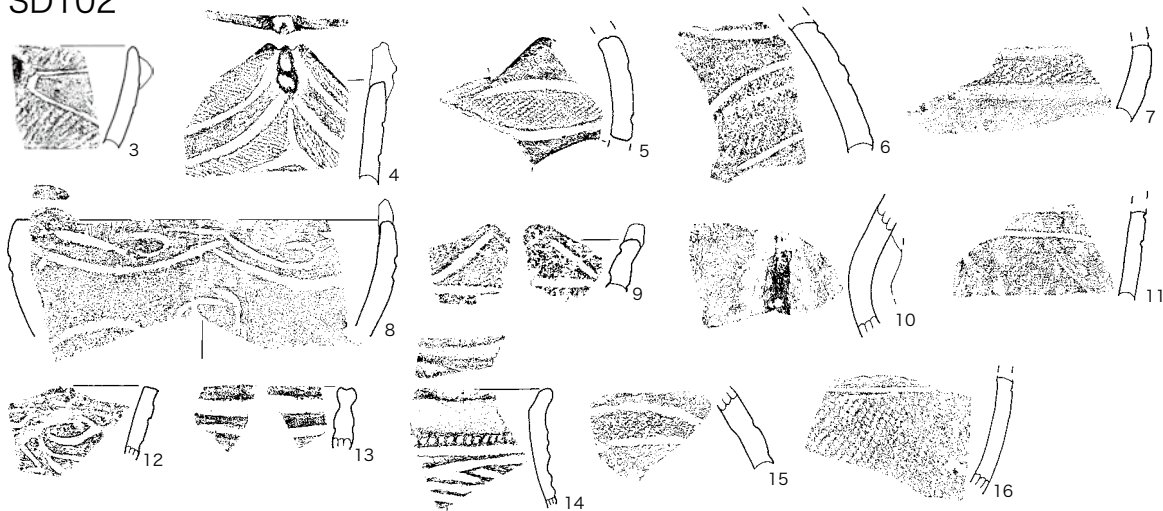


第226図 C区 SD103平面図・断面図

SD101



SD102



SD103



第227図 C区 出土土器 (13)

102 とさほど変わらない時期となる可能性もある。なおこれらの3条の溝から出土した土器について第227図に示す。明らかに混入の遺物で溝の時期を示すものではないが、参考として示す。V層上位までの浅い掘り込みということもあり、晩期中葉の土器が目立っている点は注意される。

C区グリッド出土土器（第228～267図）

第228図からはグリッド出土土器を示す。第228図はEウ16-19、Eウ19-25、Eウ20-13グリッド出土土器である。Eウ16-19グリッドの1は体部に雲形文が描かれるものだが、この器種・形制（大形の鉢？）でこの施文域に配される例は珍しい。上下が縄文帯であることも注意される。Eウ20-13グリッドの2は無文の粗製土器であるが、弧状の隆帯が付されており、顔面表現の可能性もある。Eウ19-25グリッドでは3の台付鉢、第217図1とも類似する6等が注意される。

第229図はEイ24-4グリッド出土土器で比較的大形の破片も認められた。安行3a～3b式辺りが目立つ。13の粗製土器は輪積み痕跡・指頭圧痕が良く残されている土器である。18は同種土器で、意図的かは不明だが粘土の塊が付いたまま焼かれている（拓影右側）。

第230図はEウ20-17,18、24-3,5などのグリッド出土土器を示した。1は幾つかの大形破片から復元したもので、破片は多いものあまり接合は思わしくない。縦位の隆線を単位として、この間及び下位に弧線文を主とする文様を描いているものである。沈線は比較的太めで明瞭であるが、施文後の調整があまり目立たないこともあって、雑な施文の感を受ける。Eウ20-18グリッドの3は上位がほぼ完形に近い無文土器で、口縁端部には凹点状の刺突を廻らす。器面はやや粗い削り～ナデ調整である。Eウ24-5グリッドの7はA突起を有する破片で、頸部文様は隆線～浮線状で描かれている。体部は撚糸紋である。

第231図はEウ24-7・9グリッドのもので、安行3a式・同3b式や大洞C2式が目立つ。17は安行3c式対比の小形で壺形器形の土器となろうか。

第232図はEイ20-21、24-4グリッドの土器を示す。1は突起下に弧状の隆線が付され、この下位の楕円形部分に大きめの刺突を充填している。単位間はX状または弧線～単位を挟んで菱形状となる構成の文様だが、直線的で整った菱形（X状）ではなく、S字状に近い弧線状の部分もあることが注意される。5は完形の小形壺で、若干削り痕にも近い研磨が観察される。

第233図はEイ24-8,10グリッド出土土器で、径復元個体を示す。1は小形の壺形土器で、口縁以外は完存である。頸部無文部は良く磨かれている。体部文様は比較的細く鋭い沈線による表現で、施文後のミガキも認められる。三叉部は彫去状である。拓影で示したように、縦長の三叉文が連続する部分と入組三叉文が描かれるところがある。2は頸部屈曲の大形鉢で、口縁の表裏それぞれに円形の浮文が貼付される。表面の幾つかは剥落している。頸部区画の沈線内点列はやや横長で明瞭なものである。4は幾つかの破片から推定復元したもので、注口土器と推定するが、注口部破片は無い。沈線→縄紋LR→ミガキであるが、沈線はやや浅く、ミガキはさほど顕著では無い。無文部に付される三叉部も挟り込みの彫去手法ではない。5は口頸部に紐線をめぐらす粗製土器だが、スリット外の部分では密な矢羽状沈線の充填であり「細密沈線」に近い手法である。6も特徴的な土器で、突起下の円文、対向弧線文楕円形瘤状突起などの組合せによる意匠表現である。口縁隆帯上及び弧線内には細い短沈線状の加飾が加わる。沈線の幅や深さが場所により異なるなど、総じて雑な施文で、施文後のミガキも認められない。

第234図はEイ24-11グリッド出土土器で、磨消縄文ではない沈線施文の安行3c・3d式対比資料がやや多いようである。第235～239図はEイ24-12グリッド出土土器で、第235,236図に径復元個体を示した。

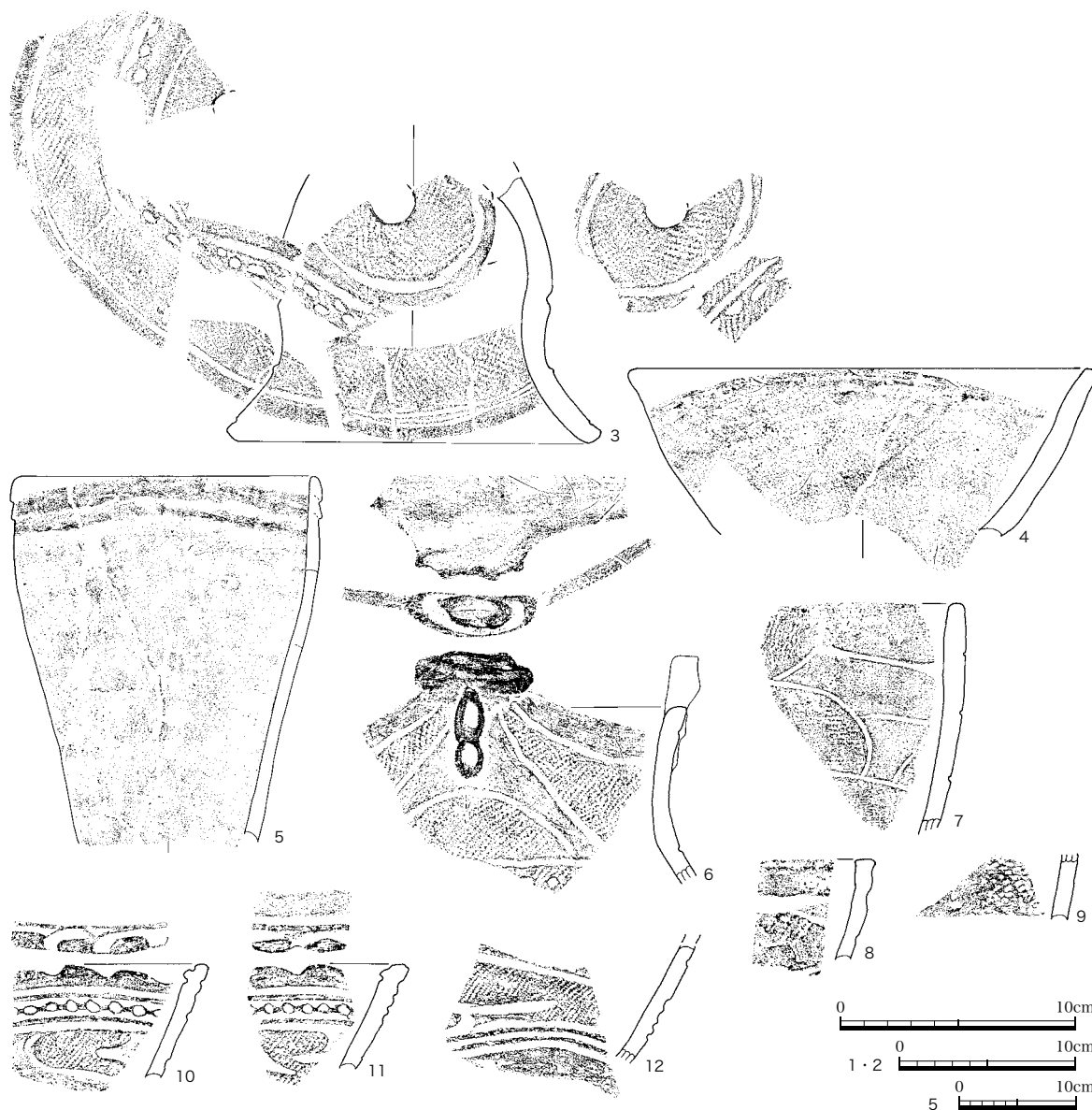
Eウ 16-19



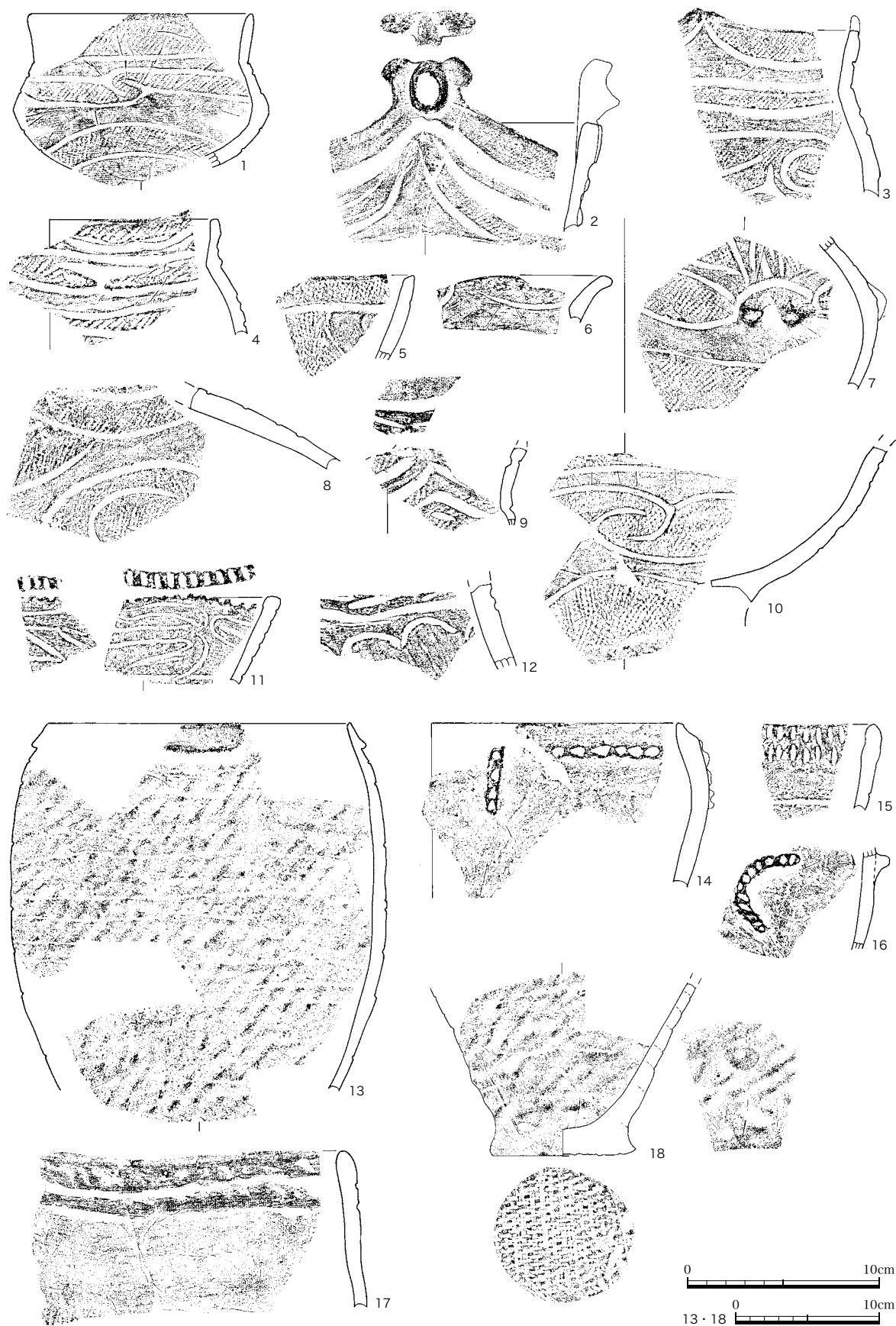
Eウ 20-13



Eウ 19-25



第228図 C区出土土器(14)

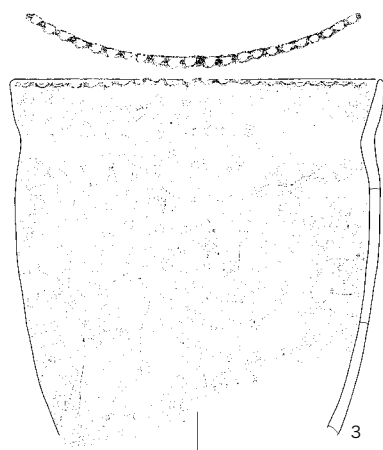


第229図 C区出土土器 (15) Eイ24-4

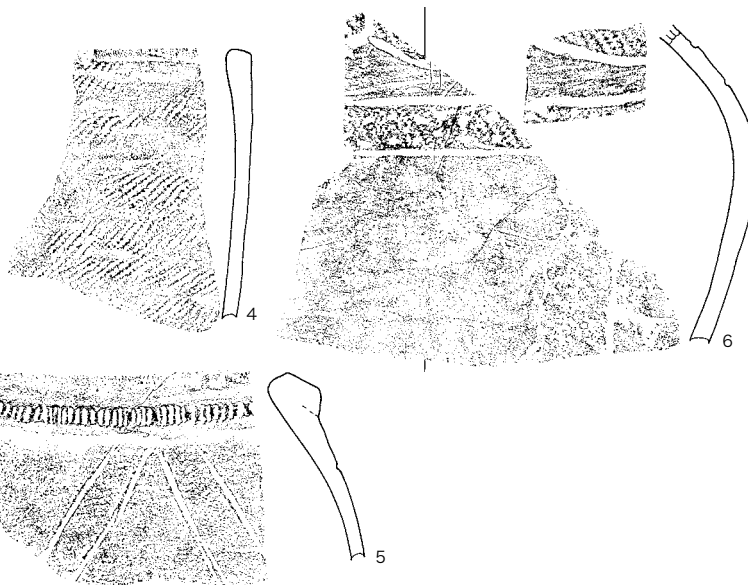
Eウ 20-17



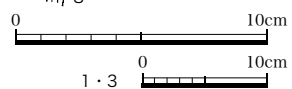
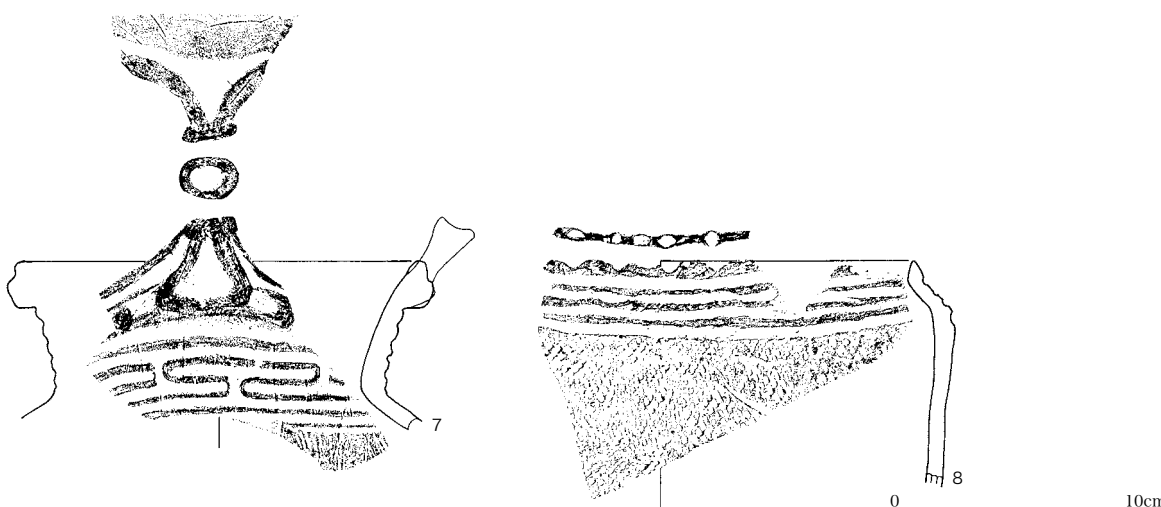
Eウ 20-18



Eイ 24-3

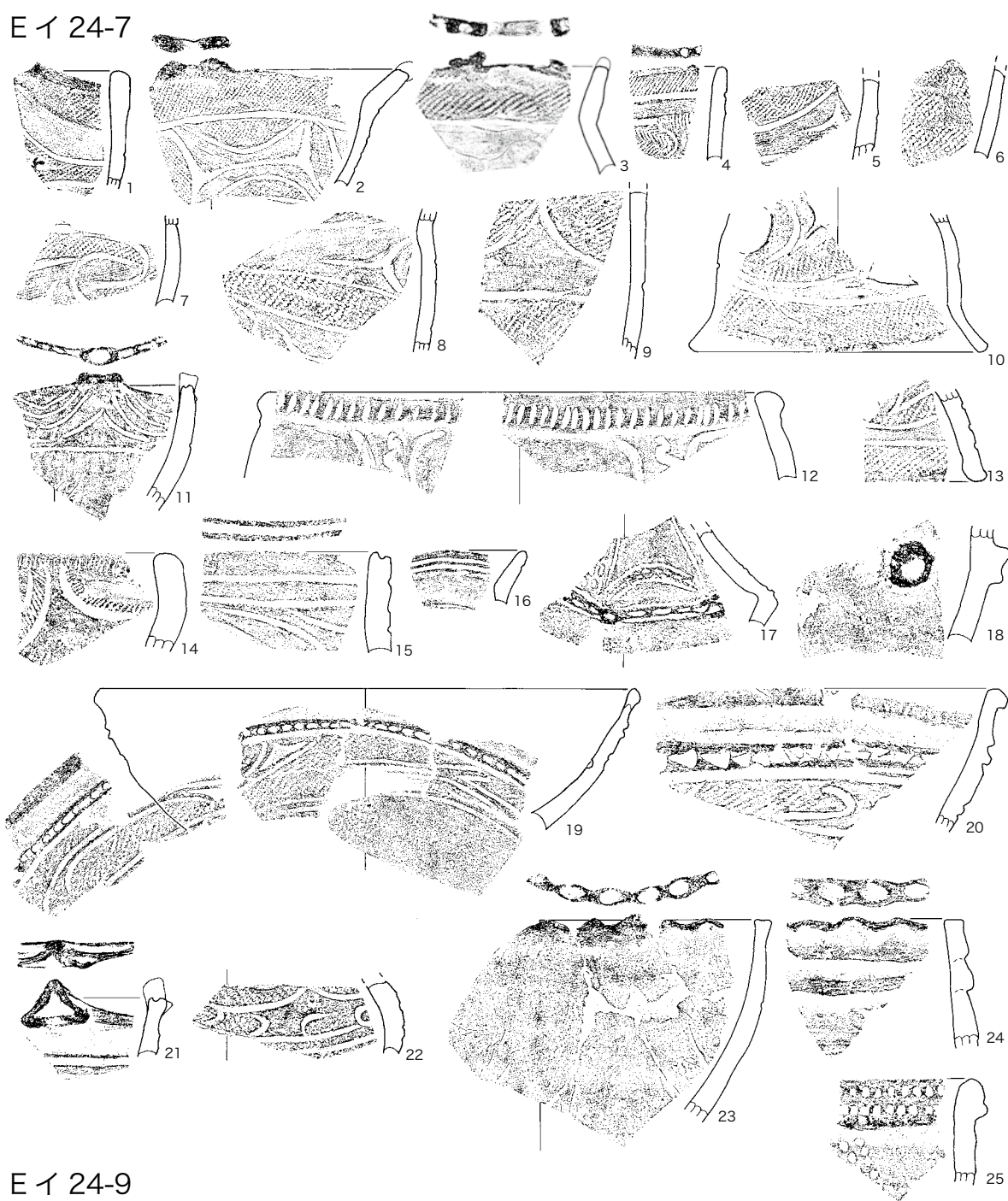


Eイ 24-5

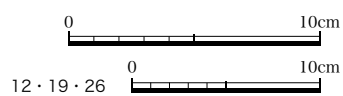
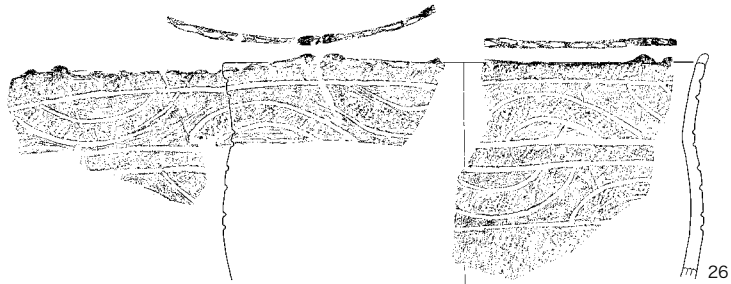


第230図 C区出土土器(16)

Eイ 24-7

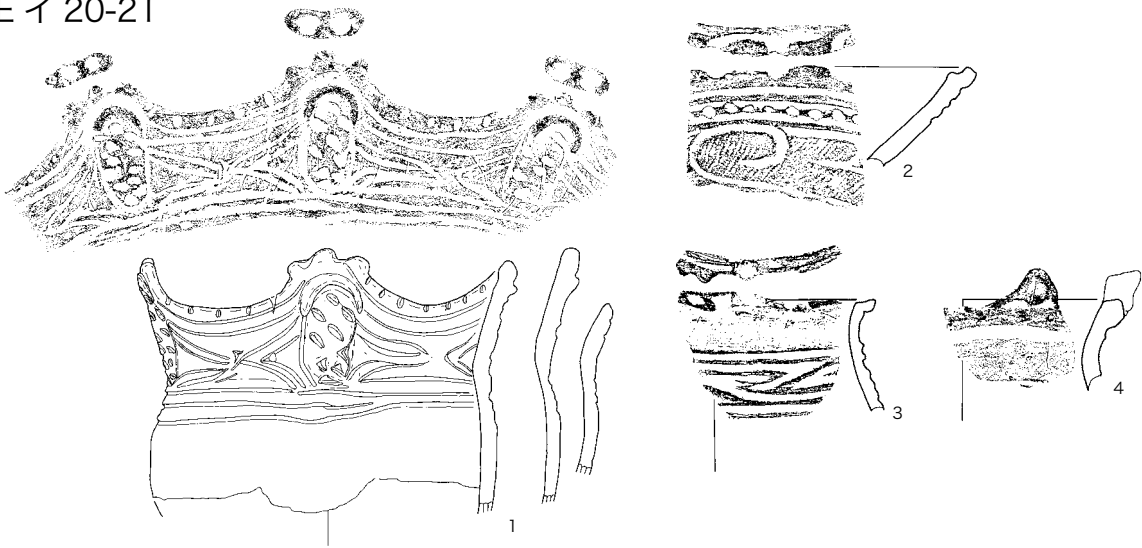


Eイ 24-9

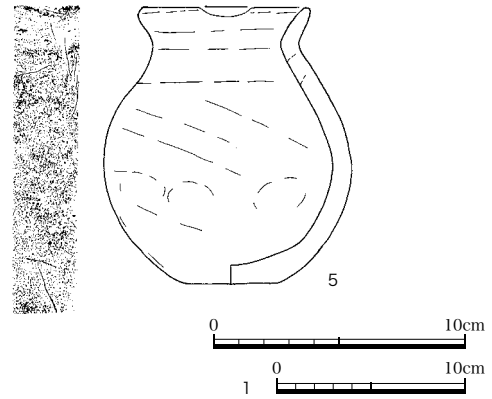


第231図 C区出土土器(17)

Eイ 20-21



Eイ 24-4



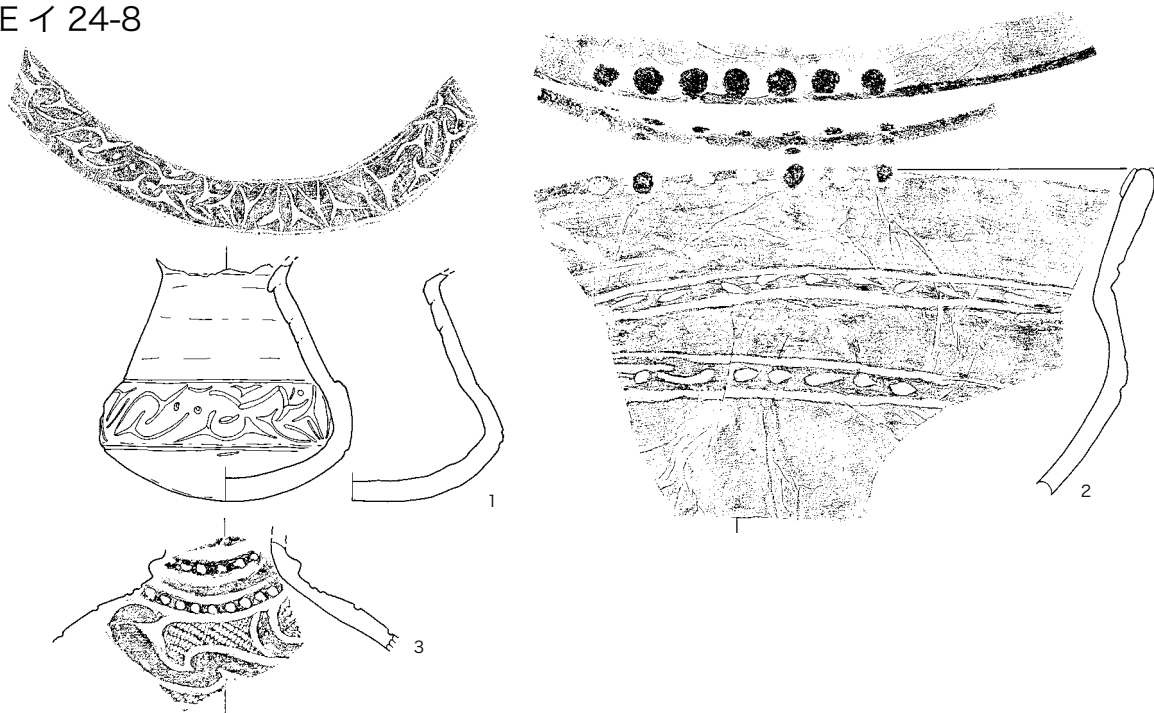
第 232 図 C区 出土土器 (18)

第 235 図 1 は低い隆起帯の上に浅い縄紋を施しているもの。同図 3 は砲弾状の器形体部に弧線の振幅単位が狭い入組三叉文が描かれるものである。三叉部は挟り込み状にはなっていない。7 は台付鉢接合部で、全体の文様構成不明ながら、太く深めの沈線、施文後のミガキ等、丁寧な作りが窺える土器である。8a・8b は当初別個体として扱ってしまったものだが、8 b 左端での接合が確認されている。接合後の合成図は作り得ないままとした。第 236 図 1 は紐線文系～副文様帯系のような構成で、途切れない S 字文が描かれるものである。第 236 図 2 はやや低くなっている突起、この下位に左右両端三叉の菱形状区画を擁し、内部に円形浮文、波底部相当位置に縦長の隆帯を配しているなど特徴的な土器である。分厚い作りで、沈線はやや幅広だが深さも含め一定せず、雑な作りのように感じられる。3 は内傾しつつ直立的な口頸部に対向弧線+菱形状区画の構成の表現がされているもので、本遺跡では少ない多重沈線表現である点も注目される。但し典型的な安行 3 d 式で観られるような太く明瞭な沈線ではなく、施文後のミガキも殆ど無い。口縁端部の浅い沈線も特徴となる。4 もあまり観ない土器で、口縁下の狭い施文域に X 状～入組状の文様を描いている。宇都宮市刈沼遺跡で見られたような、大洞 C 2 式文様の著しく変化したものとも考えたが良く分からない。6 は比較的丁寧な作りと羊歯状文施文の注口土器（または鉢？）である。

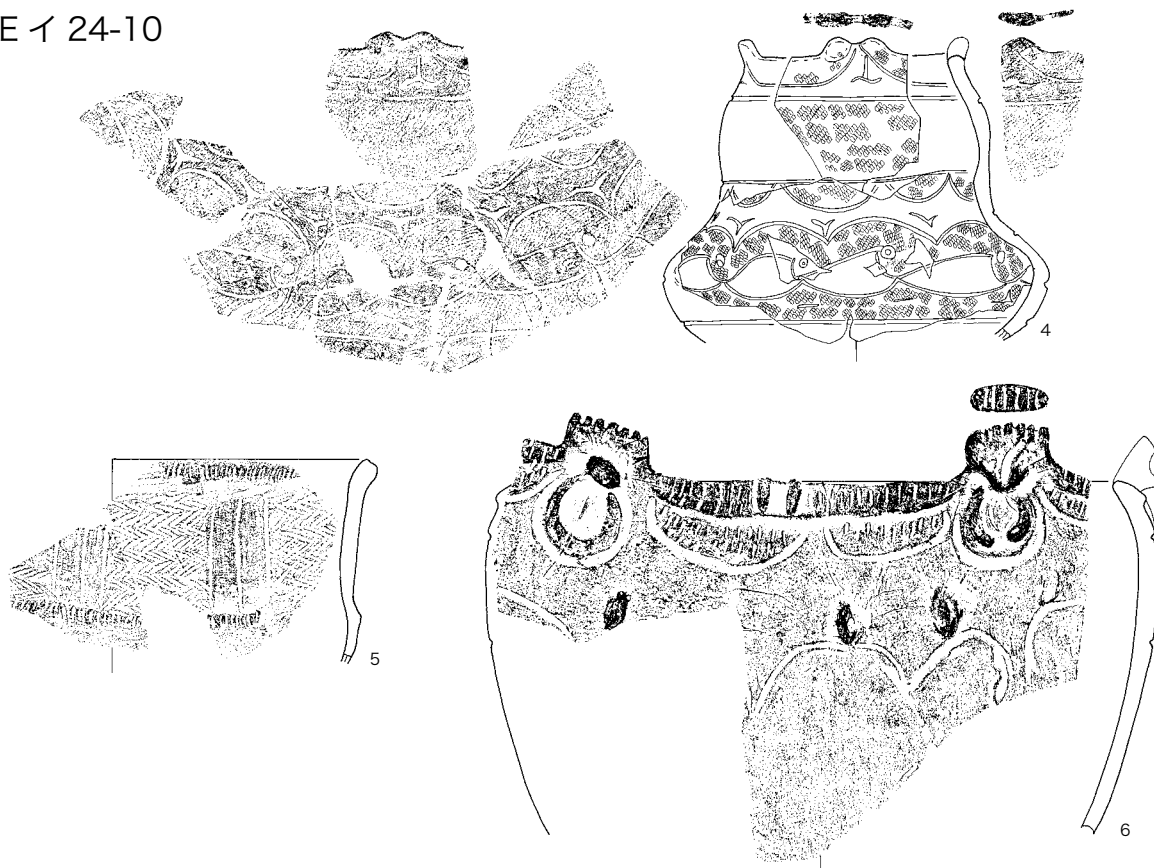
第 237 ～ 239 図は Eイ 24-12 グリッド出土土器の破片資料を示す。第 237 図では安行 3 a 式～入組文施

(→ P244)

Eイ 24-8



Eイ 24-10



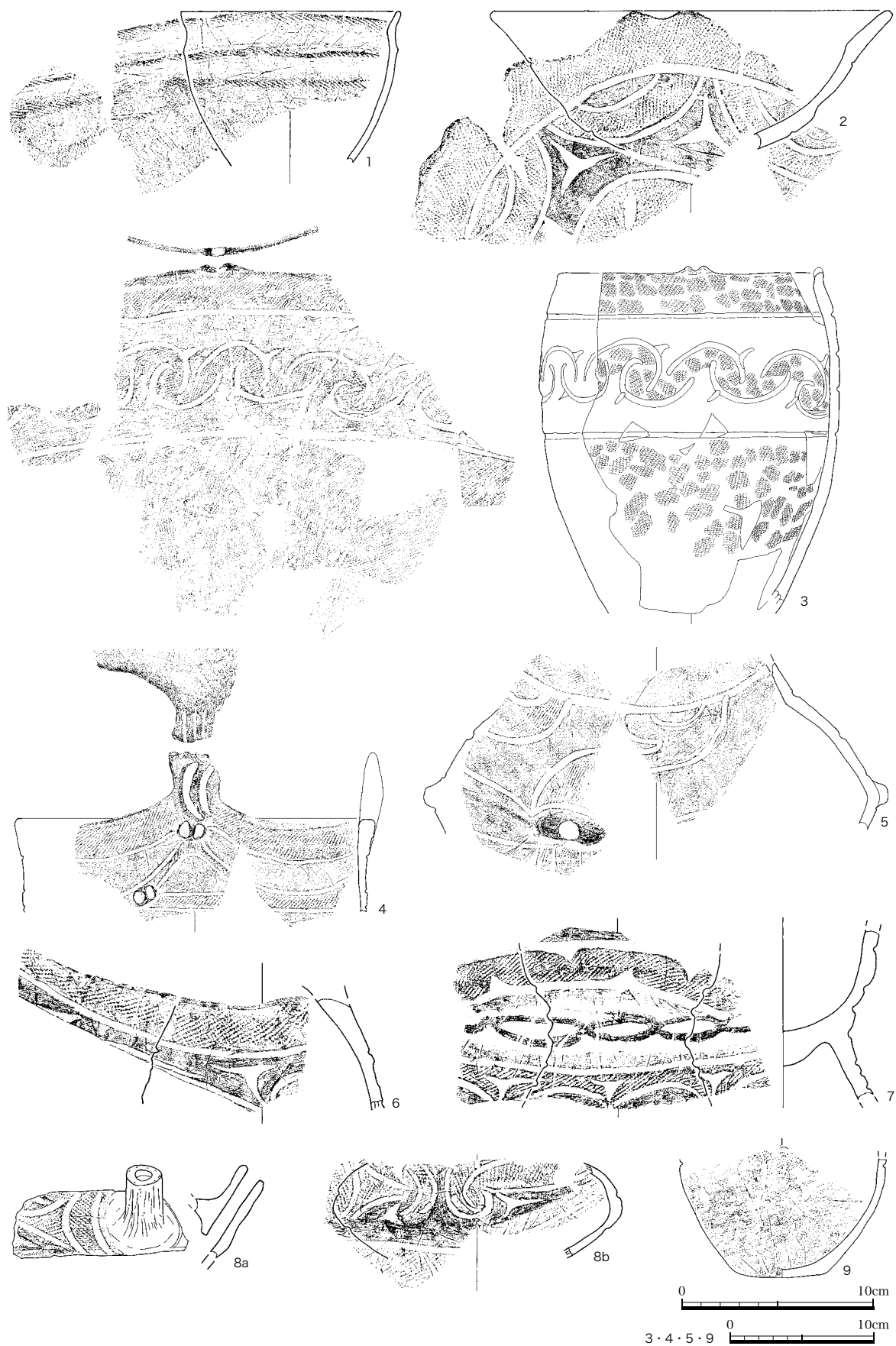
第233図 C区出土土器(19)



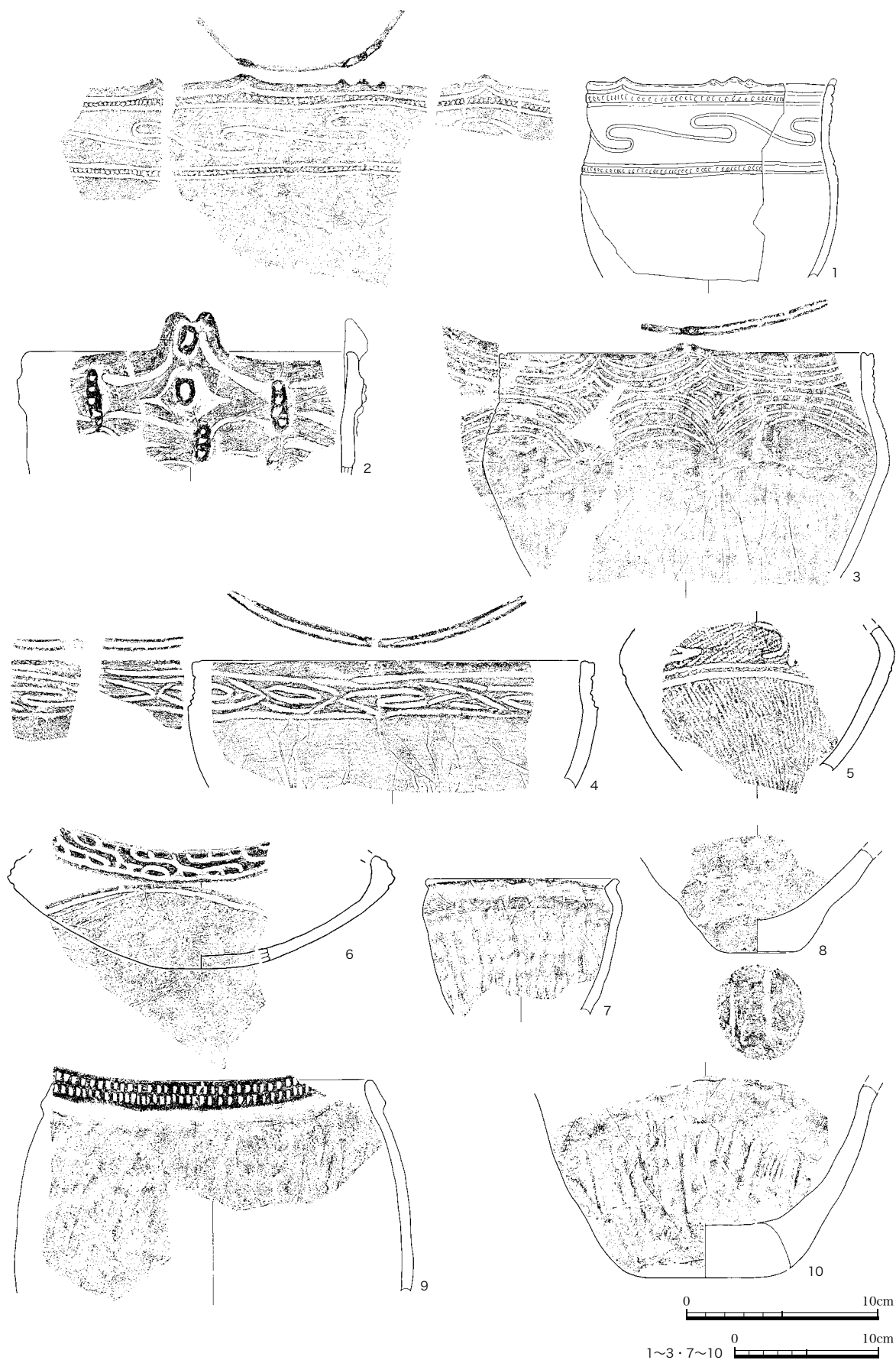
Eイ 24-11



第234図 C区出土土器(20)



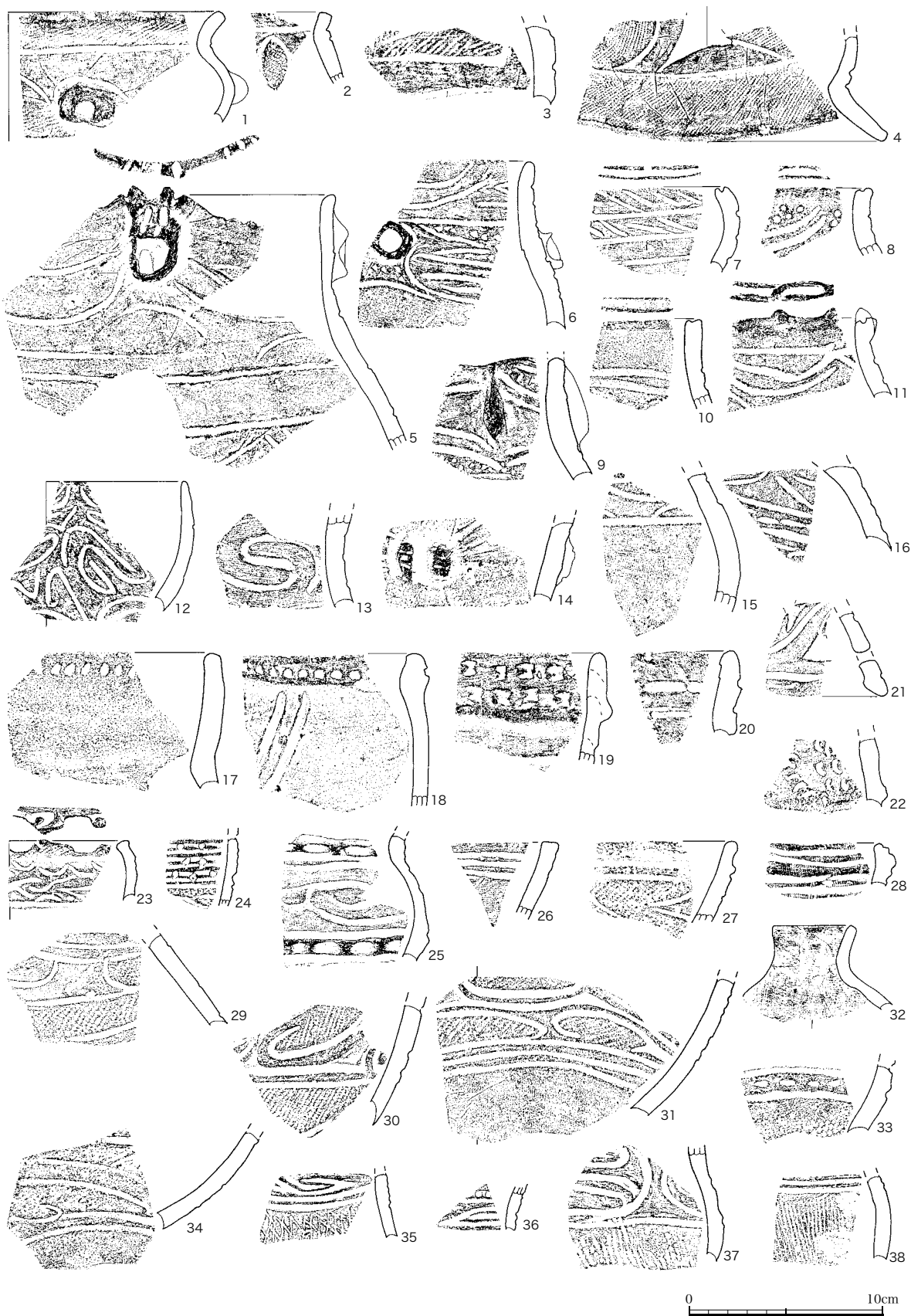
第235図 C区出土土器(21) Eイ24-12



第236図 C区出土土器(22) Eイ24-12

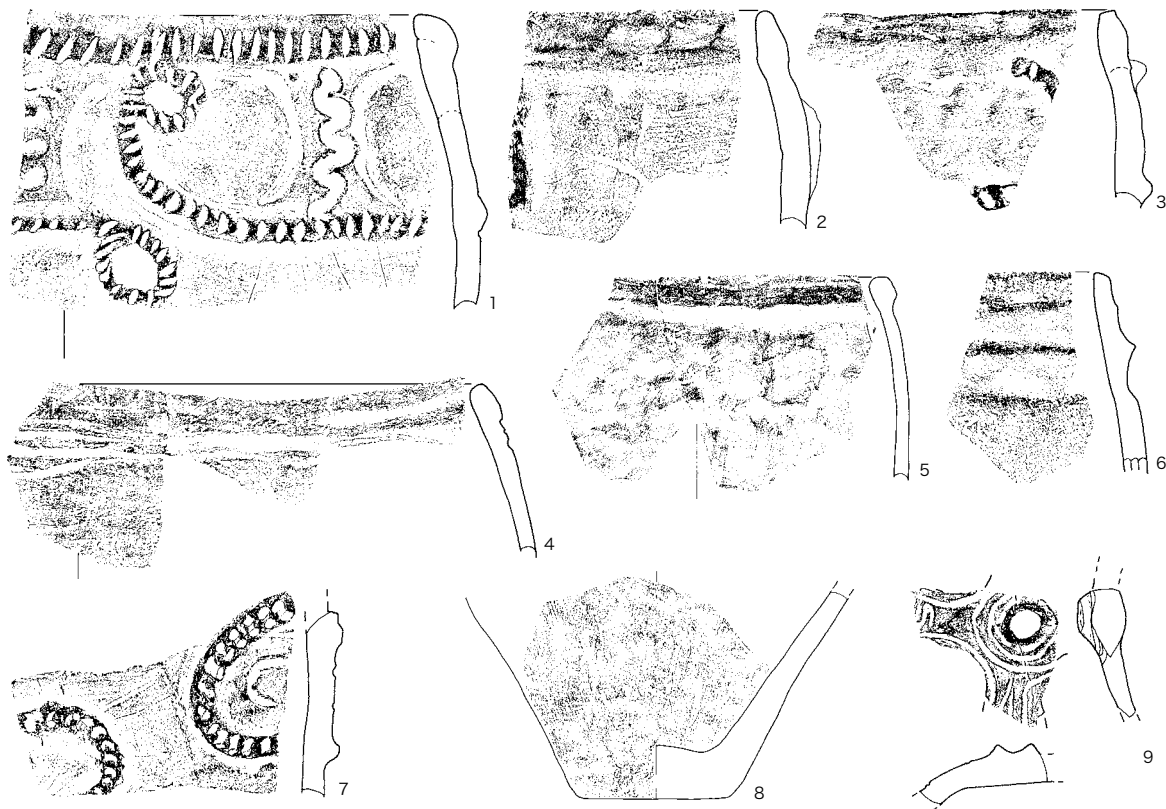


第237図 C区出土土器 (23) Eイ 24-12

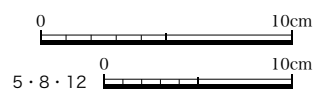


第238図 C区出土土器 (24) Eイ 24-12

Eイ 24-12

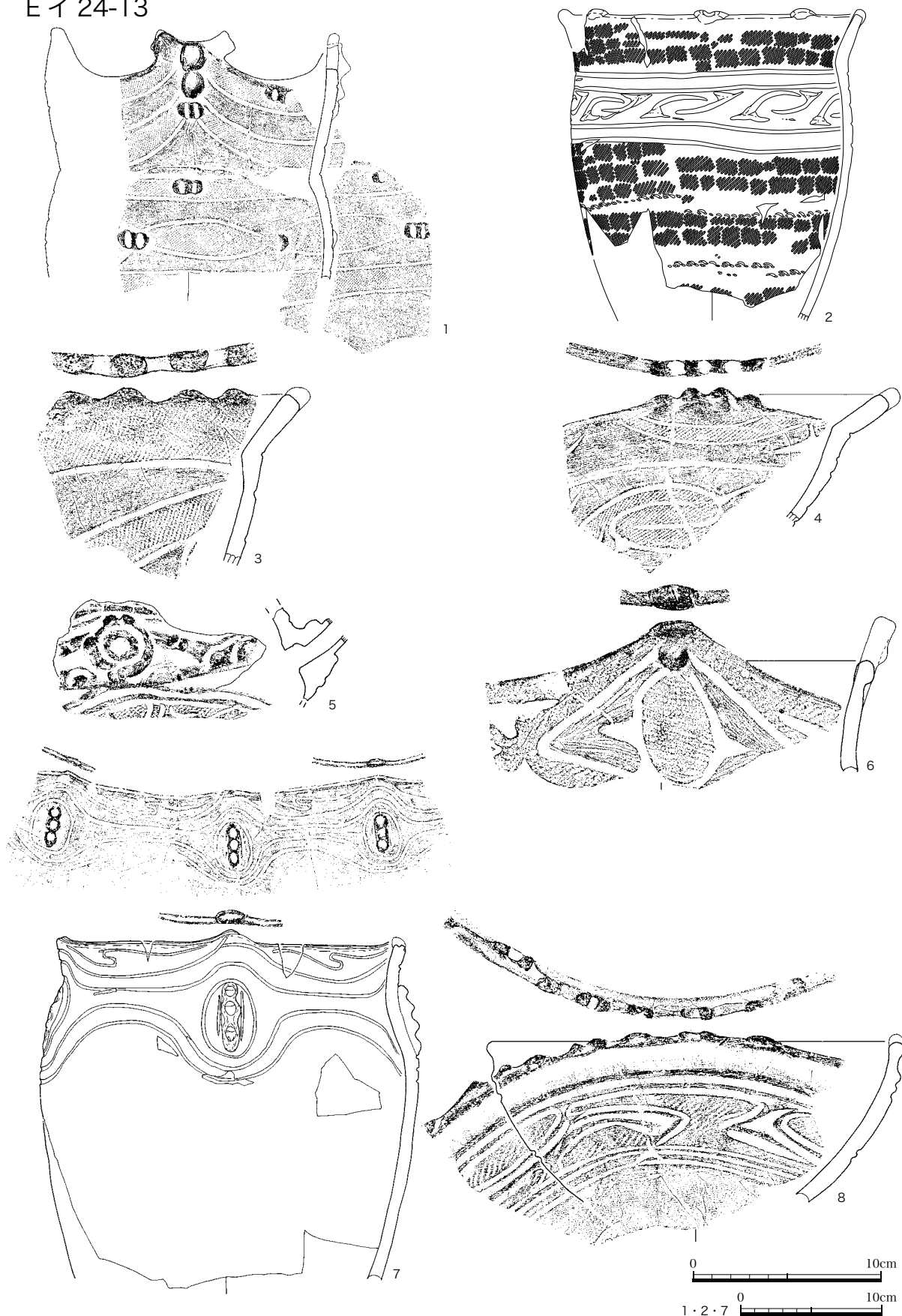


Eイ 24-14



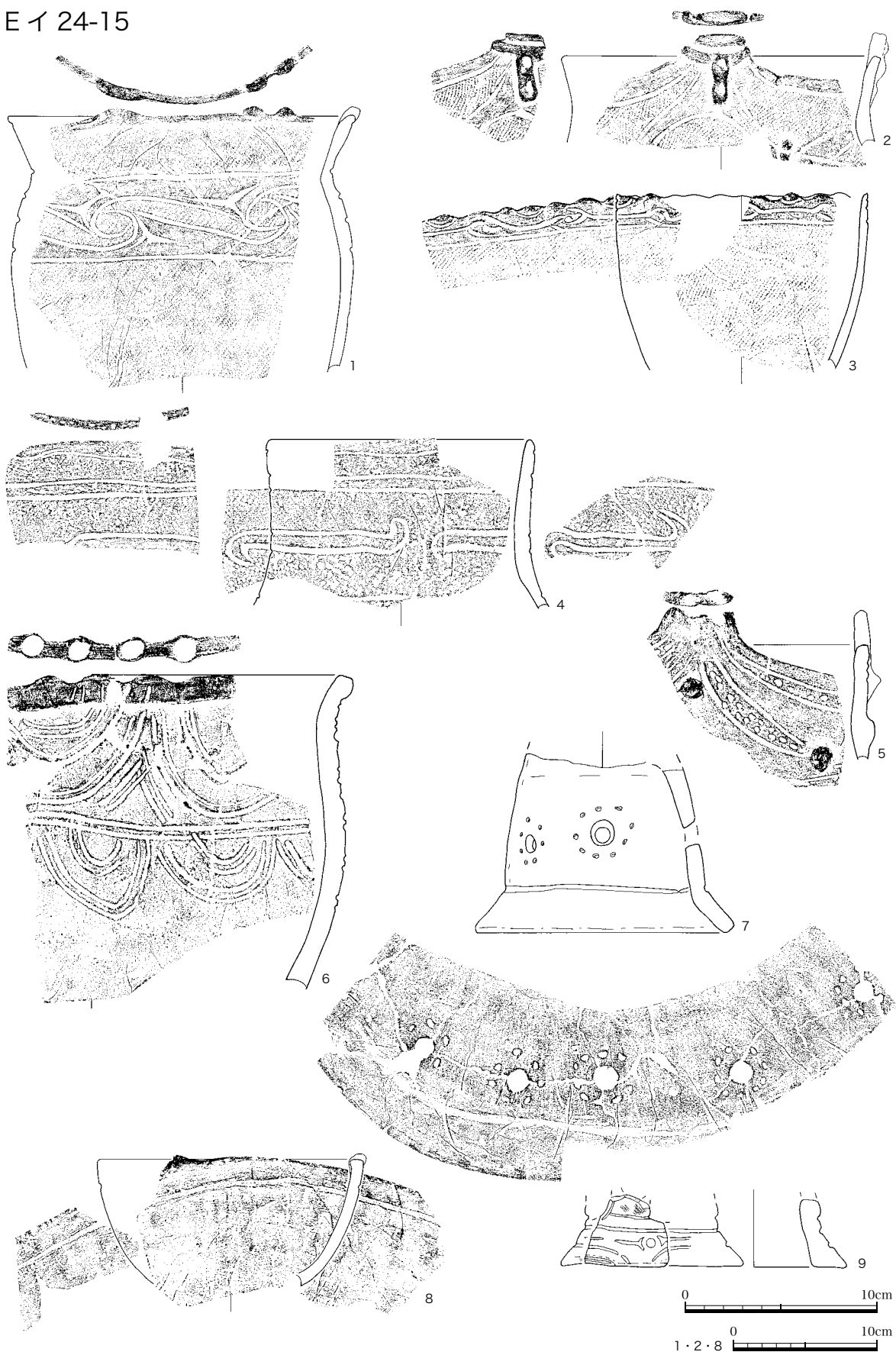
第239図 C区出土土器(25)

Eイ 24-13

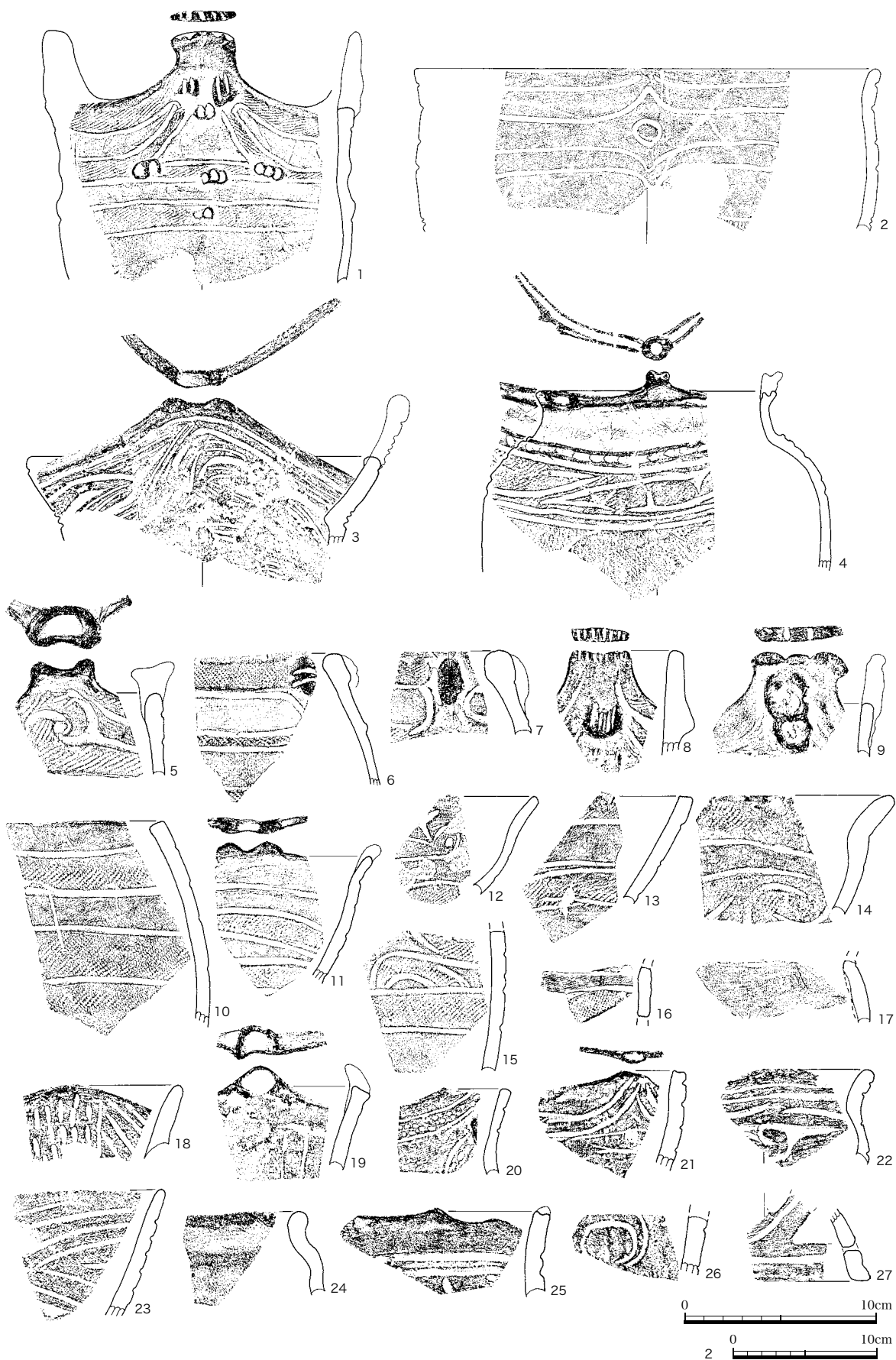


第240図 C区出土土器(26)

Eイ 24-15



第241図 C区出土土器(27)



第242図 C区出土土器 (28) Eイ 24-16

Eイ 24-16

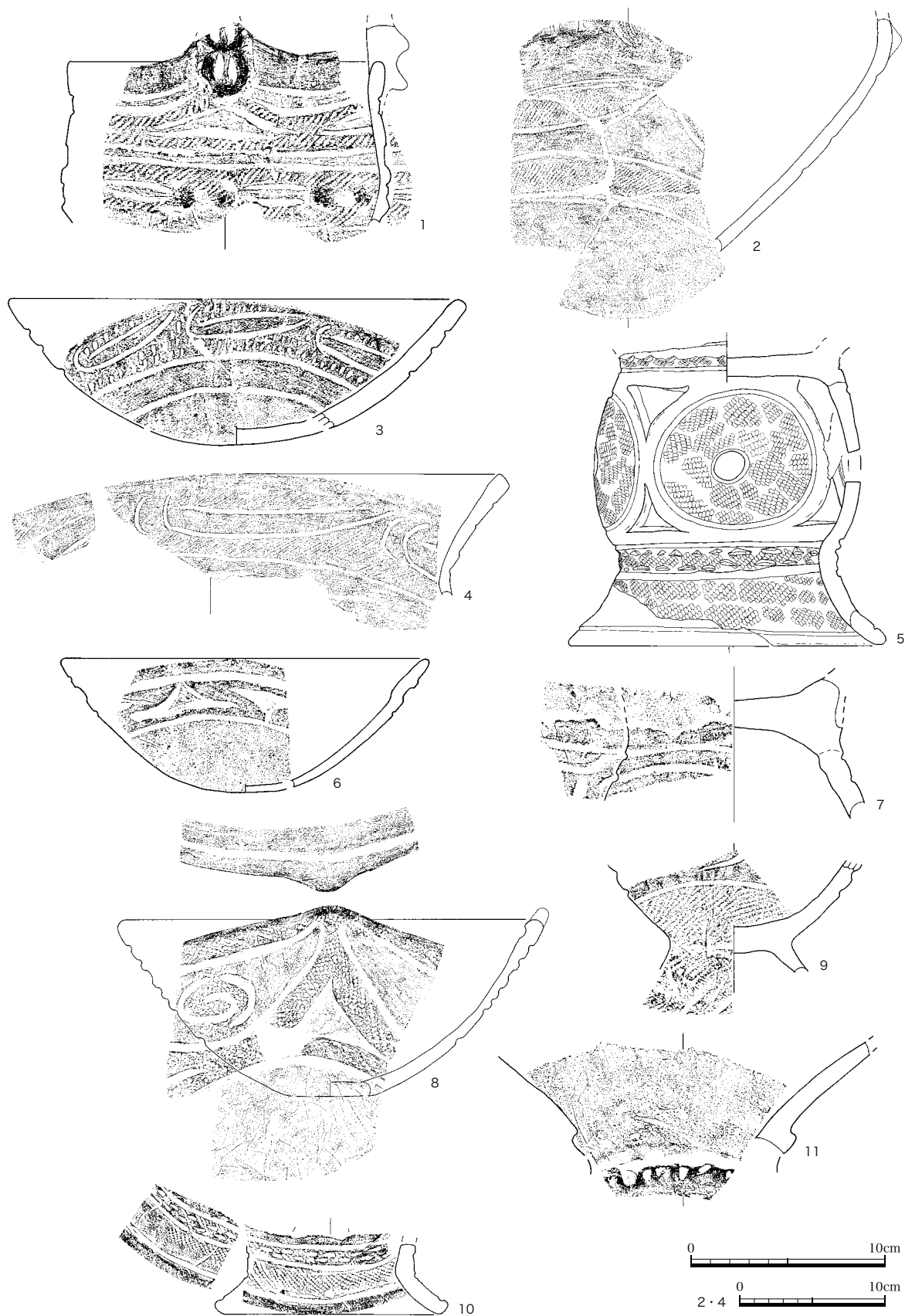


第243図 C区出土土器(29)

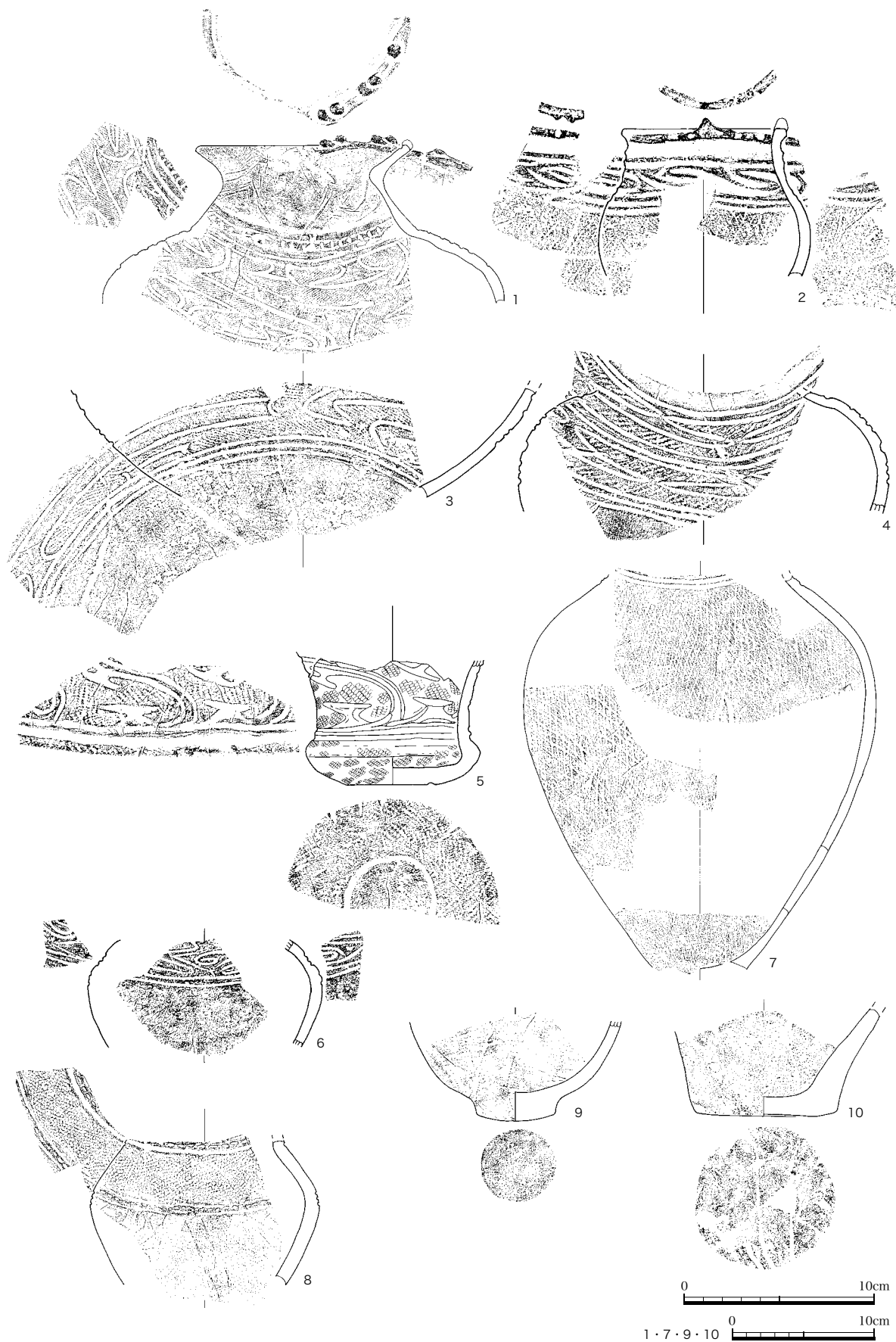
文の安行3 b式破片を中心に示す。第238図では上段に安行3 c式・天神原式系の資料、下段には大洞系の資料を示す。第239図上段は紐線文系などの粗製土器で、1は隆帯による頸部区画線が上位または下方に巻き上がるように屈曲しており、加飾の刻みや区画内の弧線・蛇行線含め興味深い資料である。7も同種の土器であろうか。9は吊り手の可能性があるものの、小片で良く分からない。円形浮文や線の手法はやや雑でこれまで示してきた北関東安行3 c式の表現手法に近い。第239図下段はEイ 24-14 グリッド出土土器で、外傾頸部縄紋帯の深鉢10及び台付鉢11がある。後者は、脚部以外ほぼ一周残存している。12の壺は頸部の比較的広い施文域に主に入組文・弧線の組合文様が描かれるもので、やや珍しい例と言える。

第240図にはEイ 24-13 グリッド出土土器を示す。1は安行式波状縁深鉢で頸部の三角形区画、体部のレンズ状弧線文が特徴的である。無文部は良く磨かれている。第199図1とかなり類似しているが、本例は三角形区画内無文である。2は大洞系の深鉢で、体部の入組三叉文が特徴で、無文部ミガキも丁寧である。5は

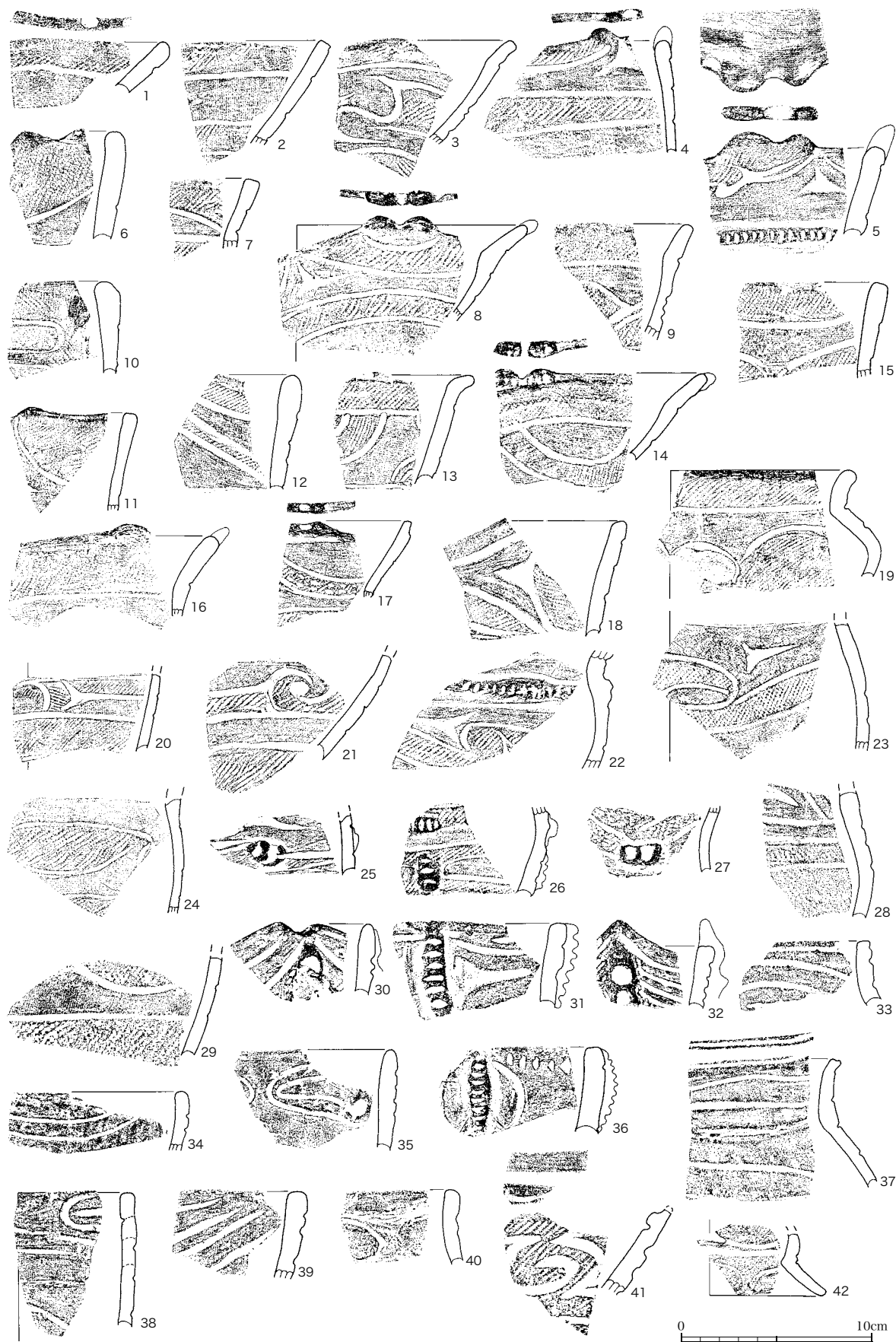
(→ P252)



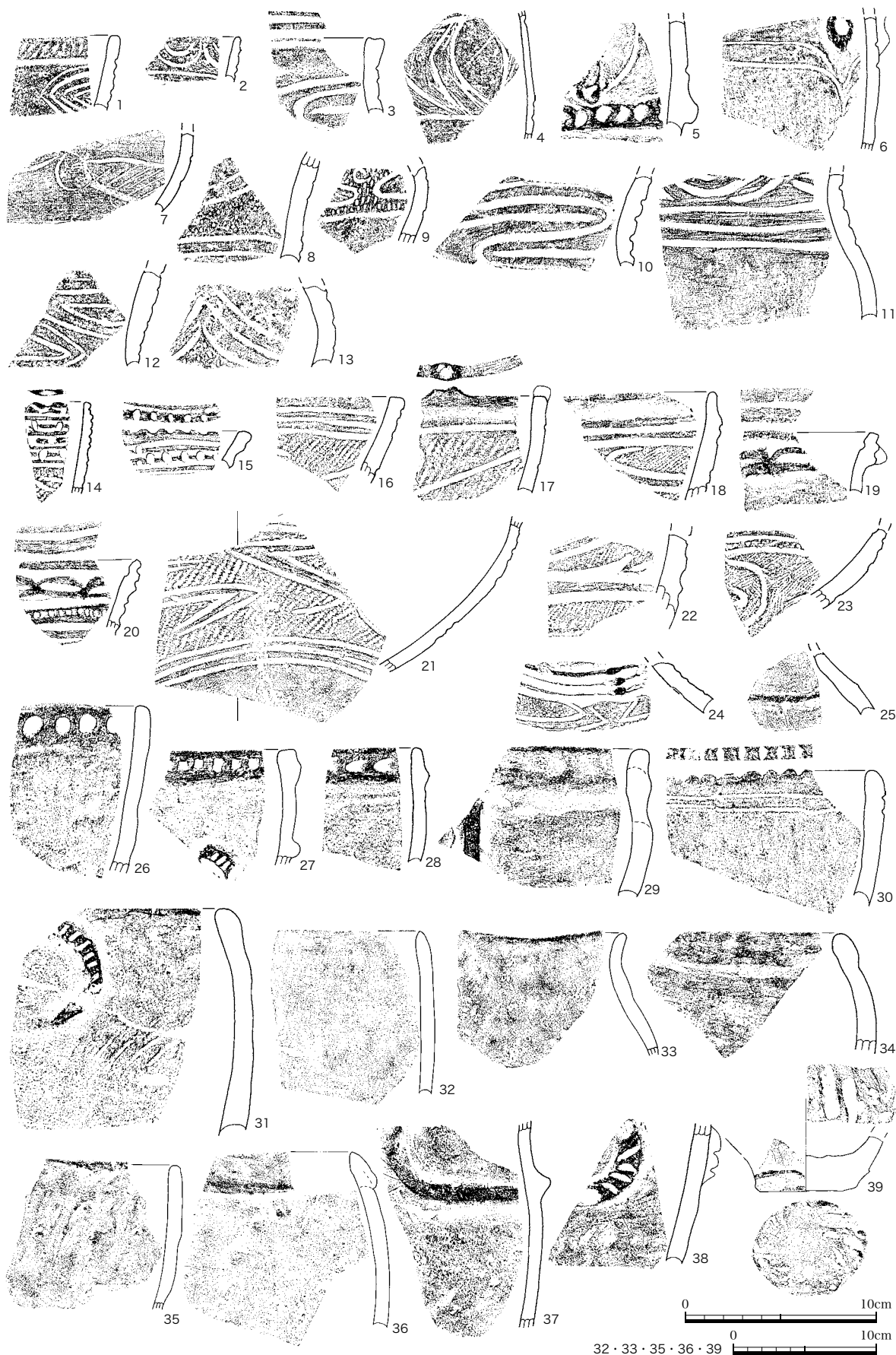
第244図 C区出土土器(30) Eイ24-17



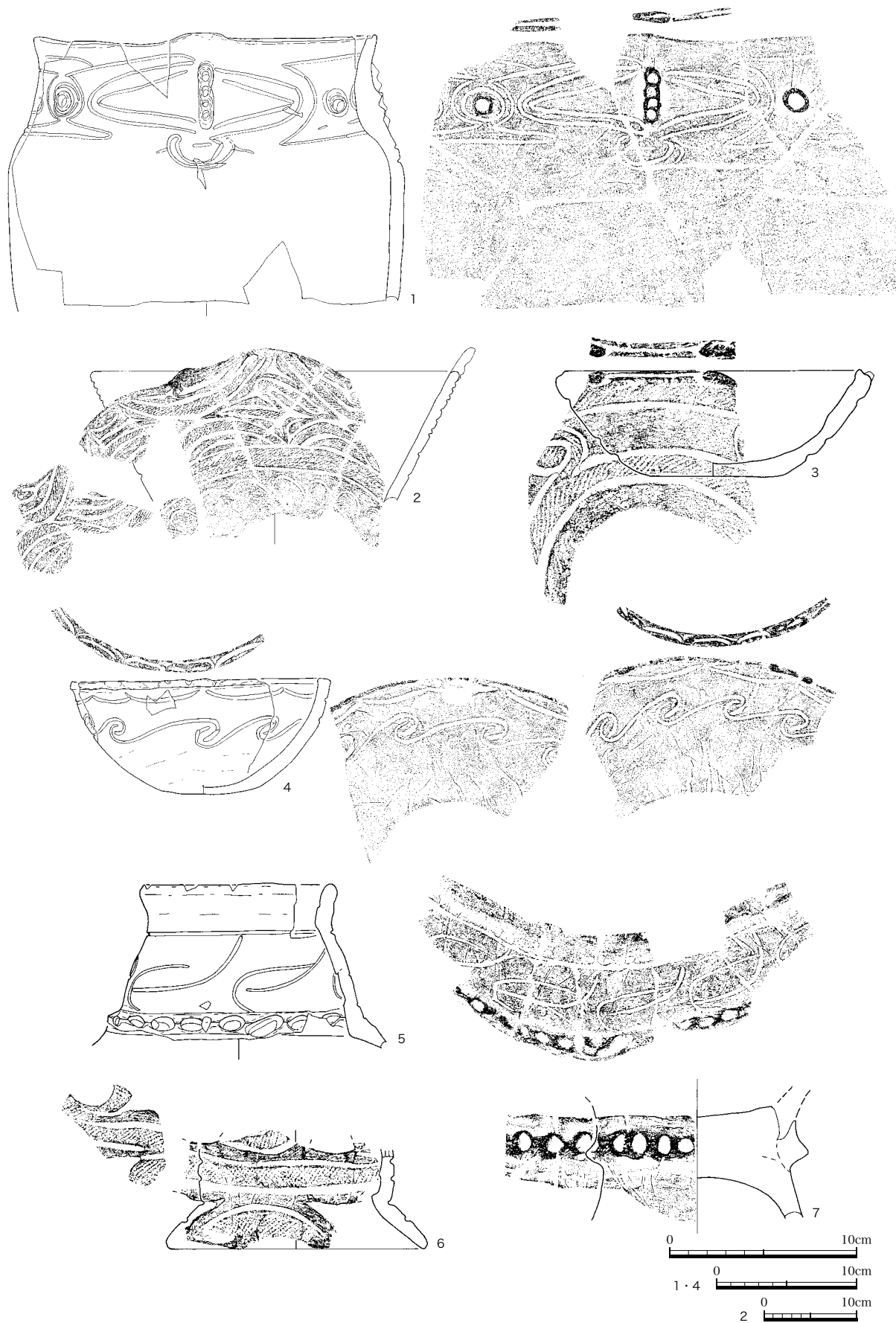
第245図 C区出土土器(31) Eイ24-17



第246図 C区出土土器(32) Eイ24-17



第247図 C区出土土器 (33) Eイ24-17



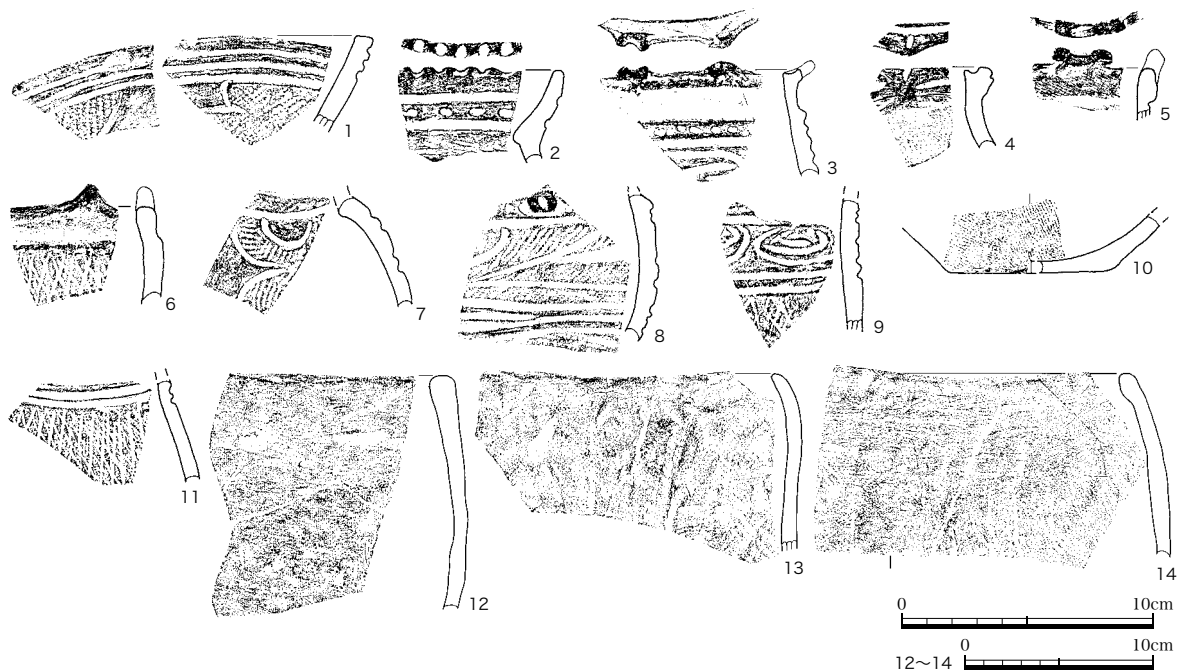
第248図 C区出土土器 (34) Eイ24-18



第249図 C区出土土器 (35) Eイ 24-18



第250図 C区出土土器 (36) Eイ 24-18



第251図 C区出土土器(37) Eイ24-18

大洞系注口土器、6は前浦式または前浦式直前型式と推定され、口縁波底部の位置に対向三叉文が確認される。7は比較的遺存の良い深鉢で4単位の低い突起、その下位の内部に縦位隆帯を配する楕円文、この楕円部を巻き込むように対向弧線～波状の構成が描かれる。沈線はやや太く明瞭で、器面調整も比較的丁寧である。8は大洞C2式の鉢で直線化・単位文化した雲形文が表現されている。

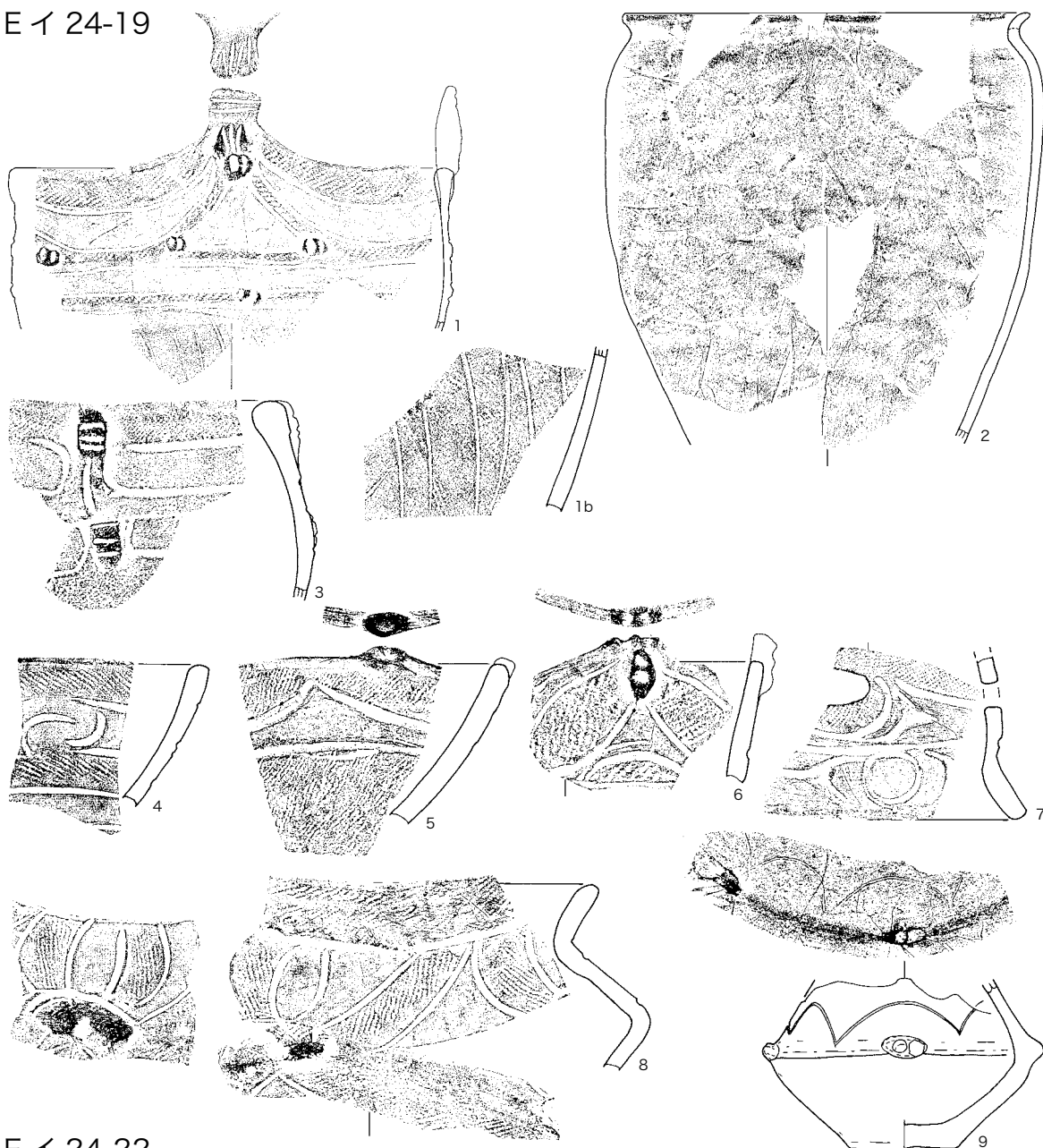
第241図にはEイ24-15グリッド出土土器をまとめた。1は体部に入組文を配する深鉢で、口縁にはB突起が付される。2は右端に第228図6が接合するが、接合後の合成図は作り得なかった。3は晩期初頭の大洞系小形深鉢だが、薄手で作り・施文とも丁寧であり非在地的な様相を示す。4は珍しい文様構成の土器で、体部に直線化したS字状単位文が並列的に配される。6も例を見ない土器で、半載竹管状工具による大柄な弧線文が2段描かれる。やや肥厚する口縁端部に凹点状刺突が施されるが、全周はしないようである。7の台付鉢脚部も特徴的で、円形透孔の周りに刺突が廻る。器面は比較的良く磨かれている。9も台付鉢脚部で、透かし孔の一部が確認される。下端に玉抱三叉文が配される例はあまり見ない。

第242,243図はEイ24-16グリッド出土土器である。第242図1は波状縁深鉢だが、突起下に2個1対の瘤が付される点注意される。2は長く延びた対向弧線が円文両側に配されるもので、破片下端に横位区画線+刻み列の一部が確認される。3は太い沈線と条線状の細い線により文様が描かれている土器だが、炭化物が厚く広い範囲で付着しており、文様が不鮮明になっている。年代測定などの資料候補であったが、分析は行っていない。4は大洞系広口壺で、直線化した雲形文変化の文様が描かれている。5以下は破片を示す。安行3a式～同3b式の磨消縄文の破片、安行3c・3d対比を主とする沈線施文の資料、大洞系、無文の土器等を示す。第242図22や第243図3等の注目される資料も含む。

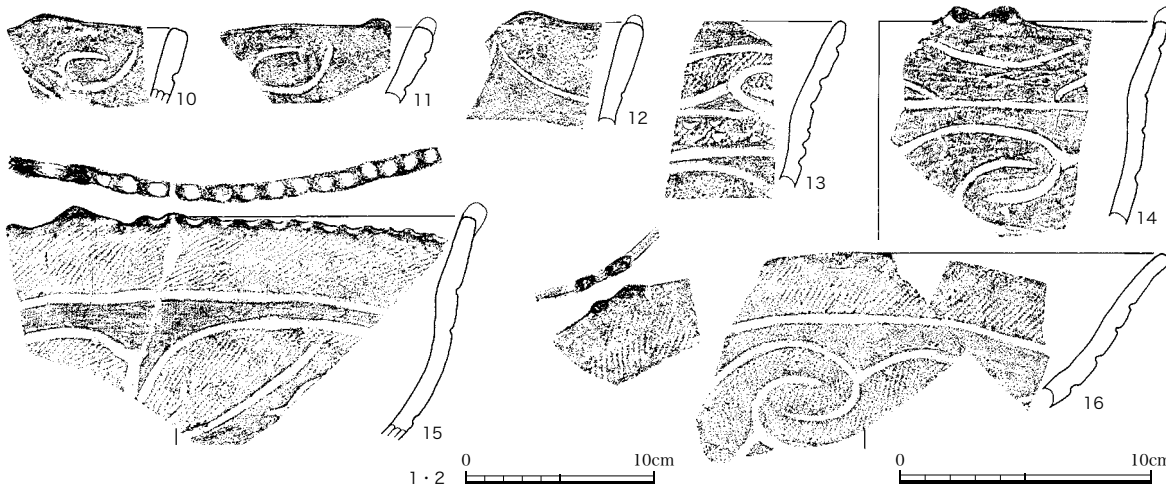
第244～247図はEイ24-17グリッド出土土器で、第244,245図に径復元個体を主に示した。第244図1は安行系波状縁深鉢だが、突起が低平化し、三角形区画も偏平になる等の変化が窺える。3はステッキ文の描かれる鉢だが、やや細い刺突が単位文の外側に充填される。

(→P266)

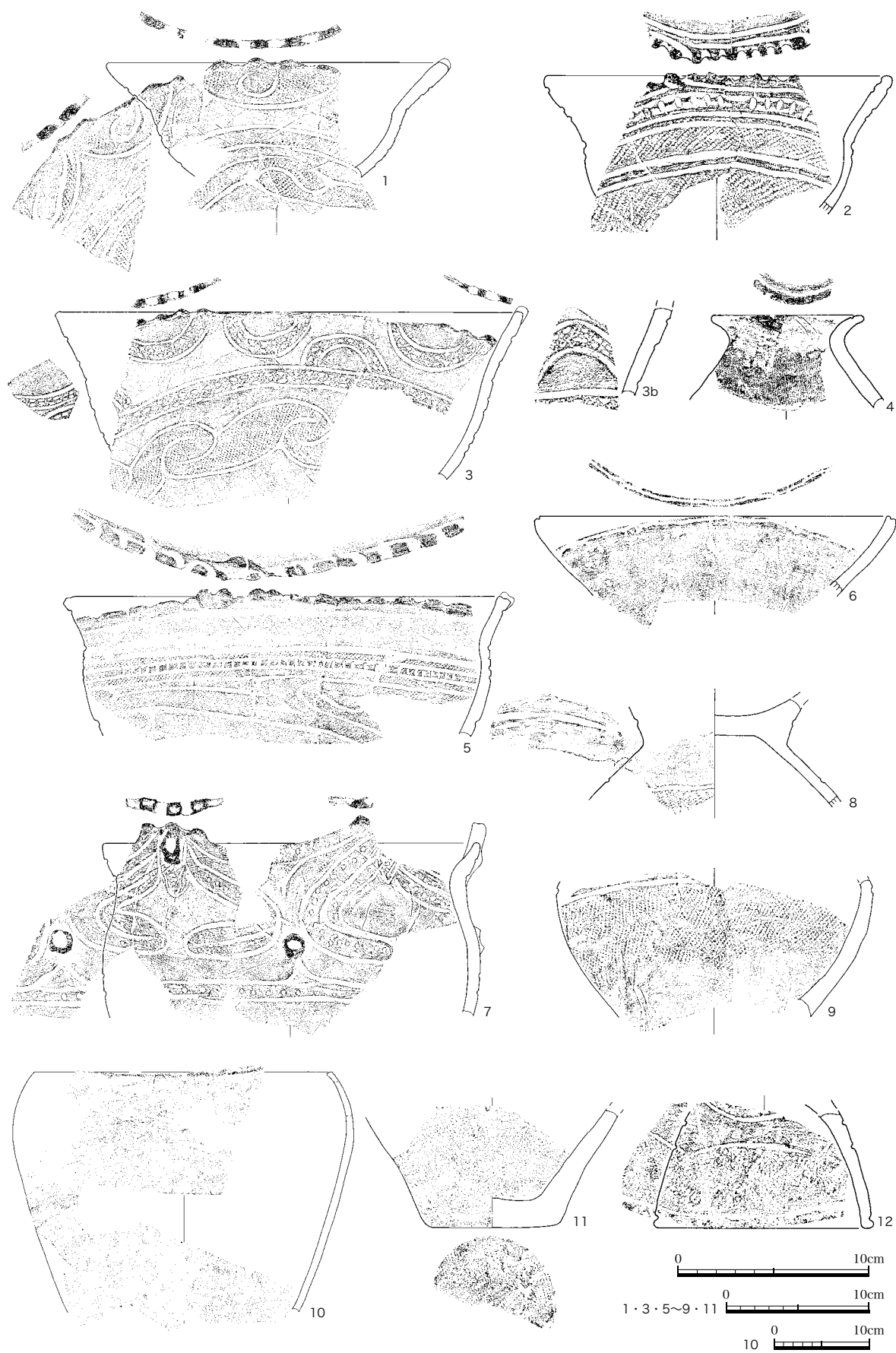
Eイ 24-19



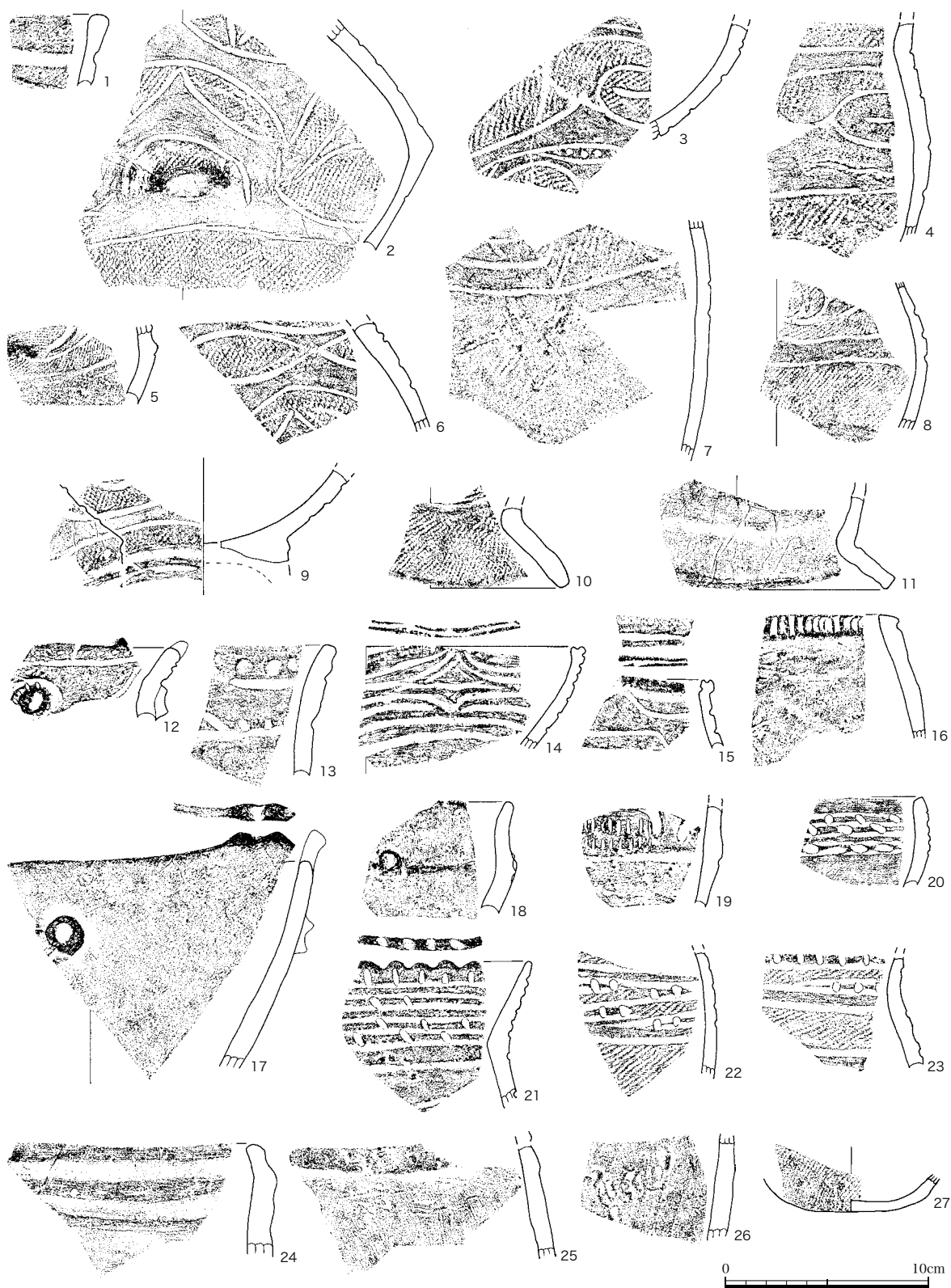
Eイ 24-22



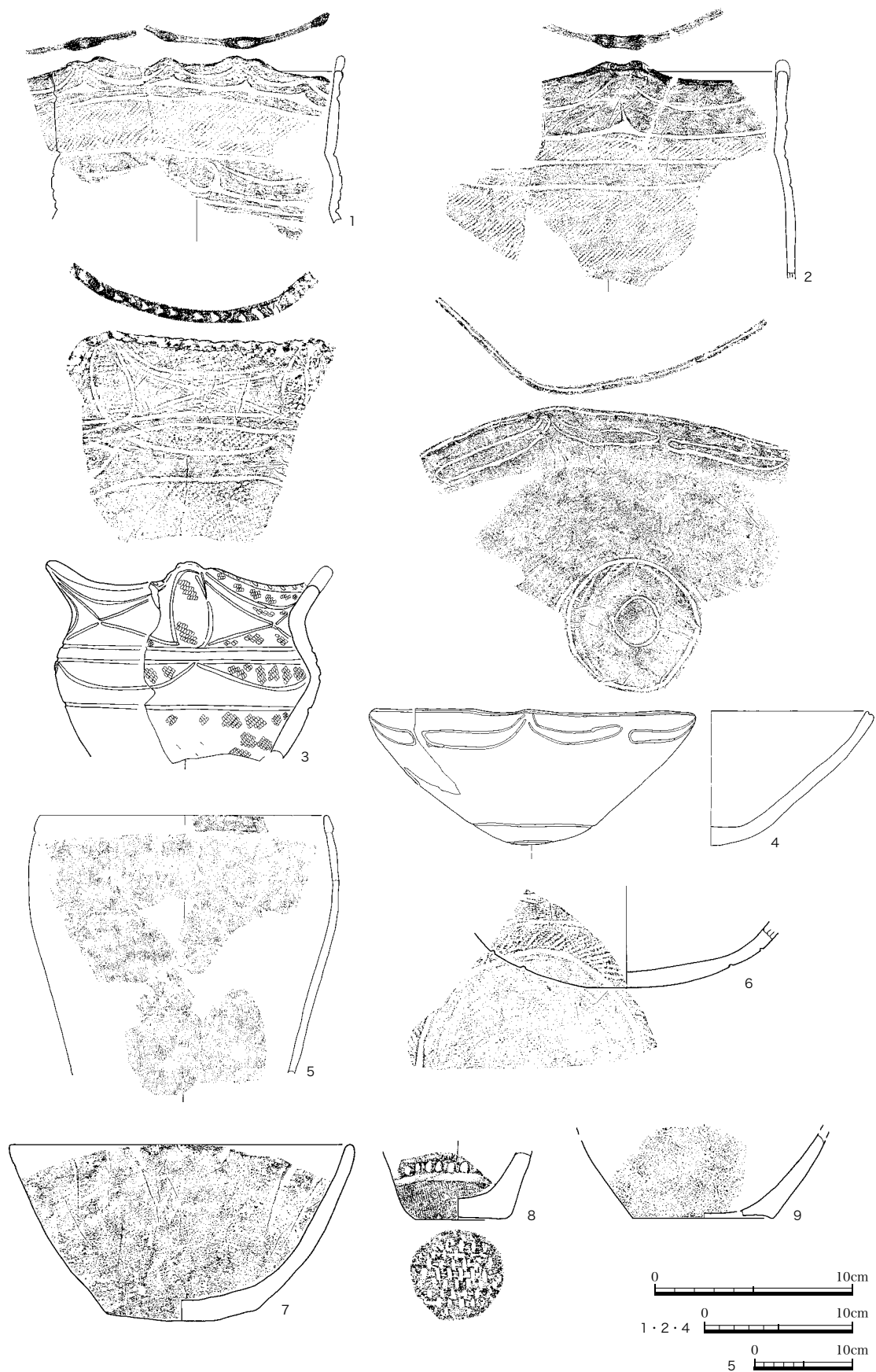
第252図 C区出土土器(38)



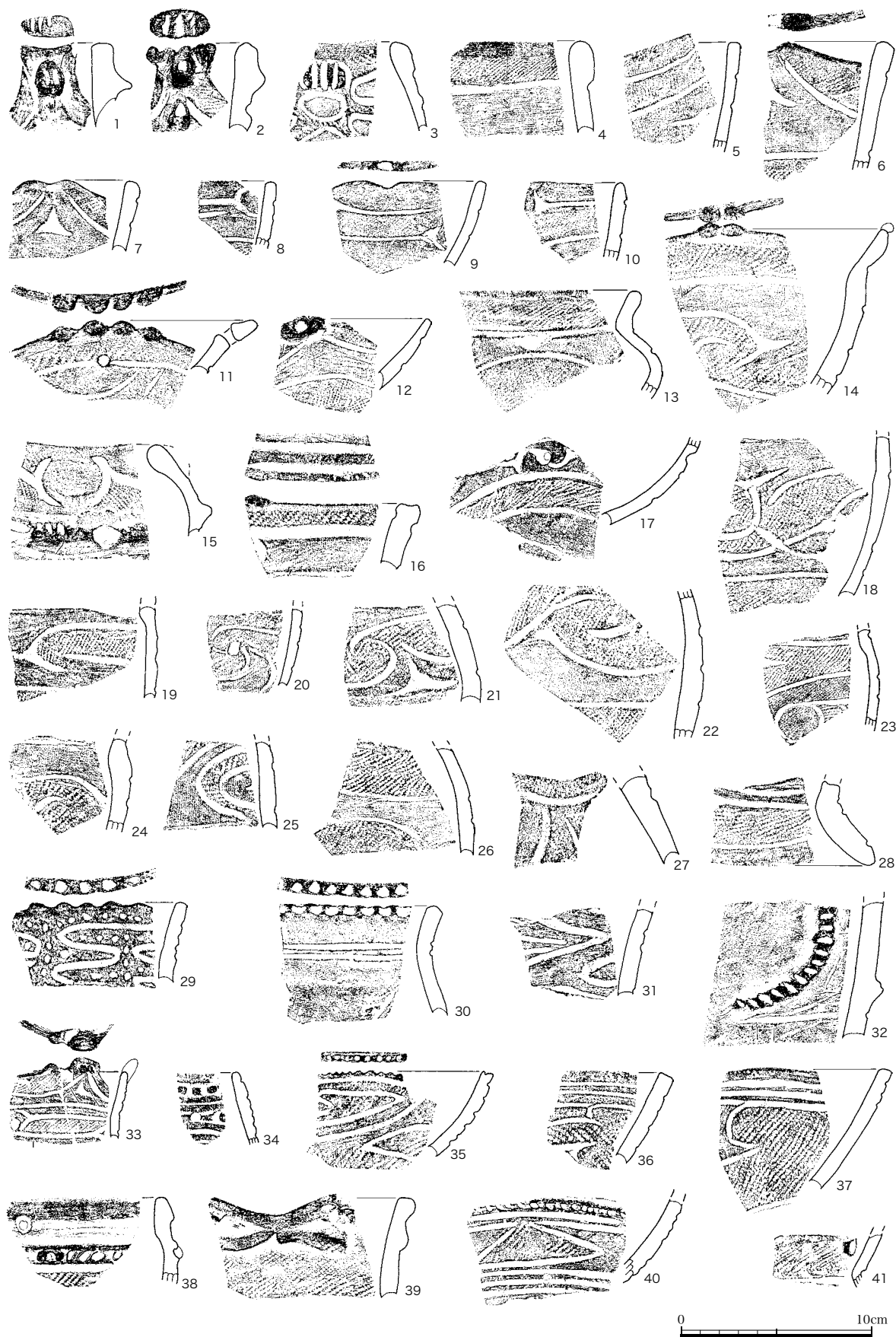
第253図 C区出土土器(39) Eイ24-22



第254図 C区出土土器(40) Eイ 24-22

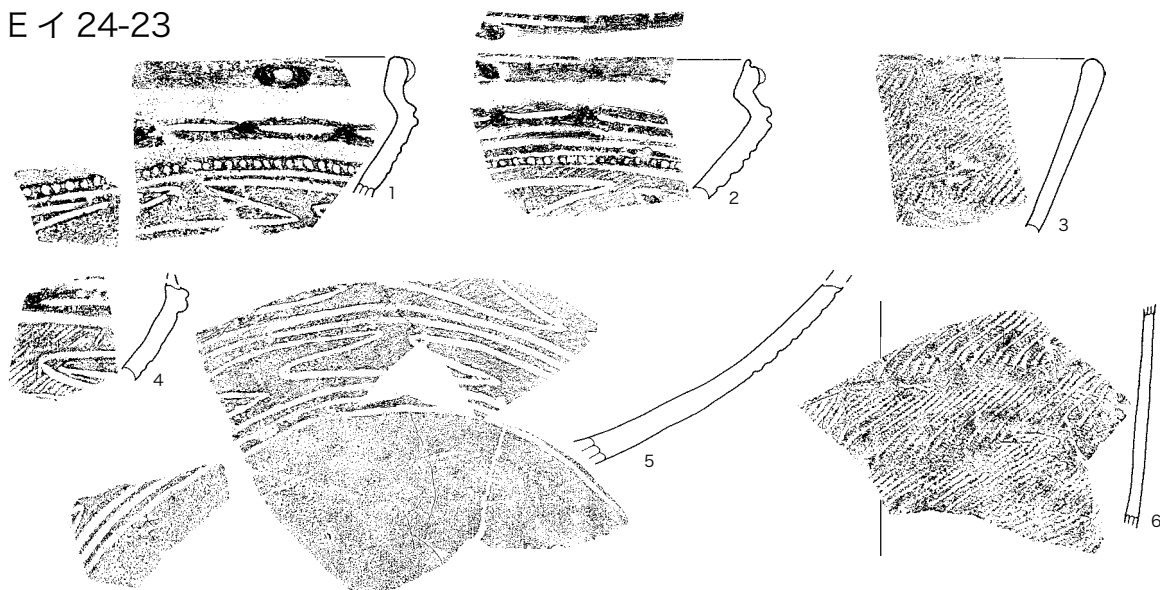


第255図 C区出土土器(41) Eイ24-23

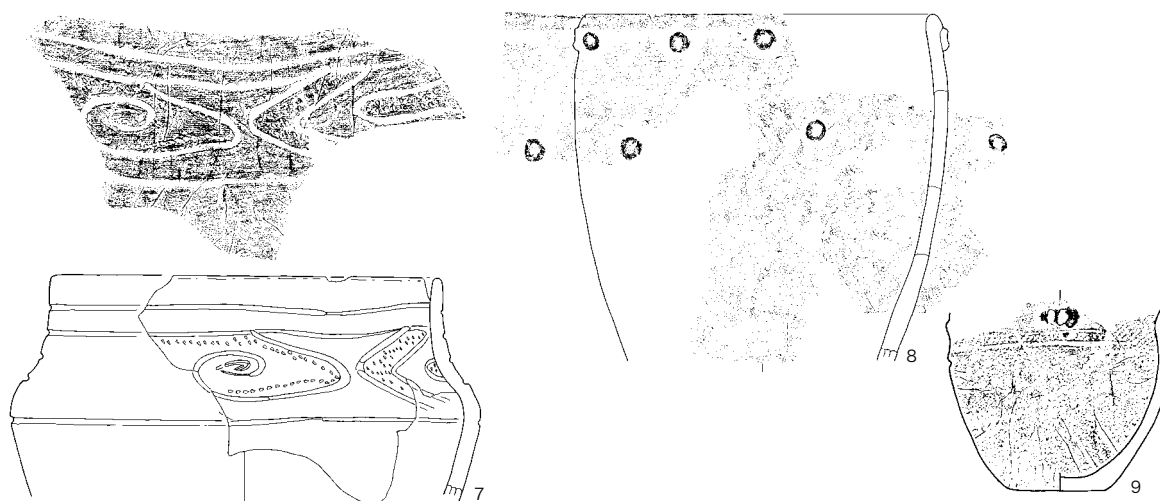


第256図 C区出土土器(42) Eイ24-23

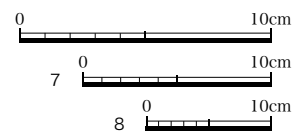
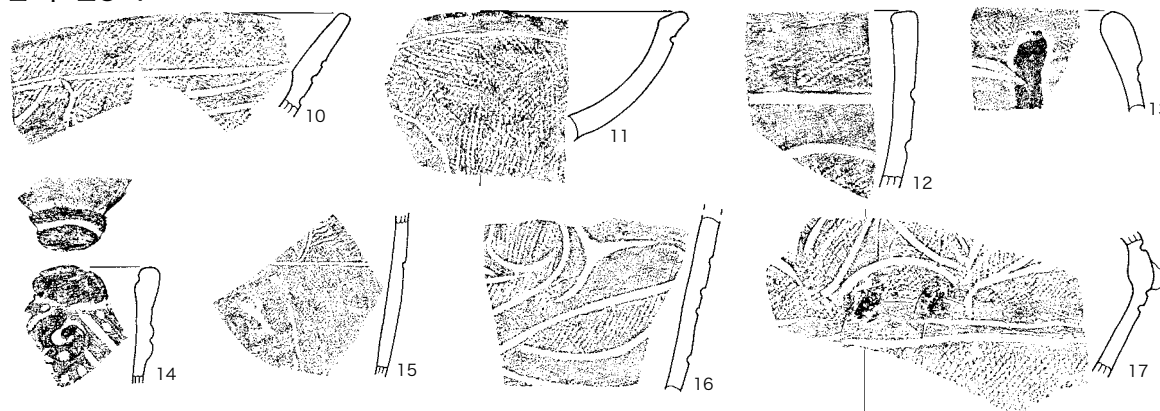
Eイ 24-23



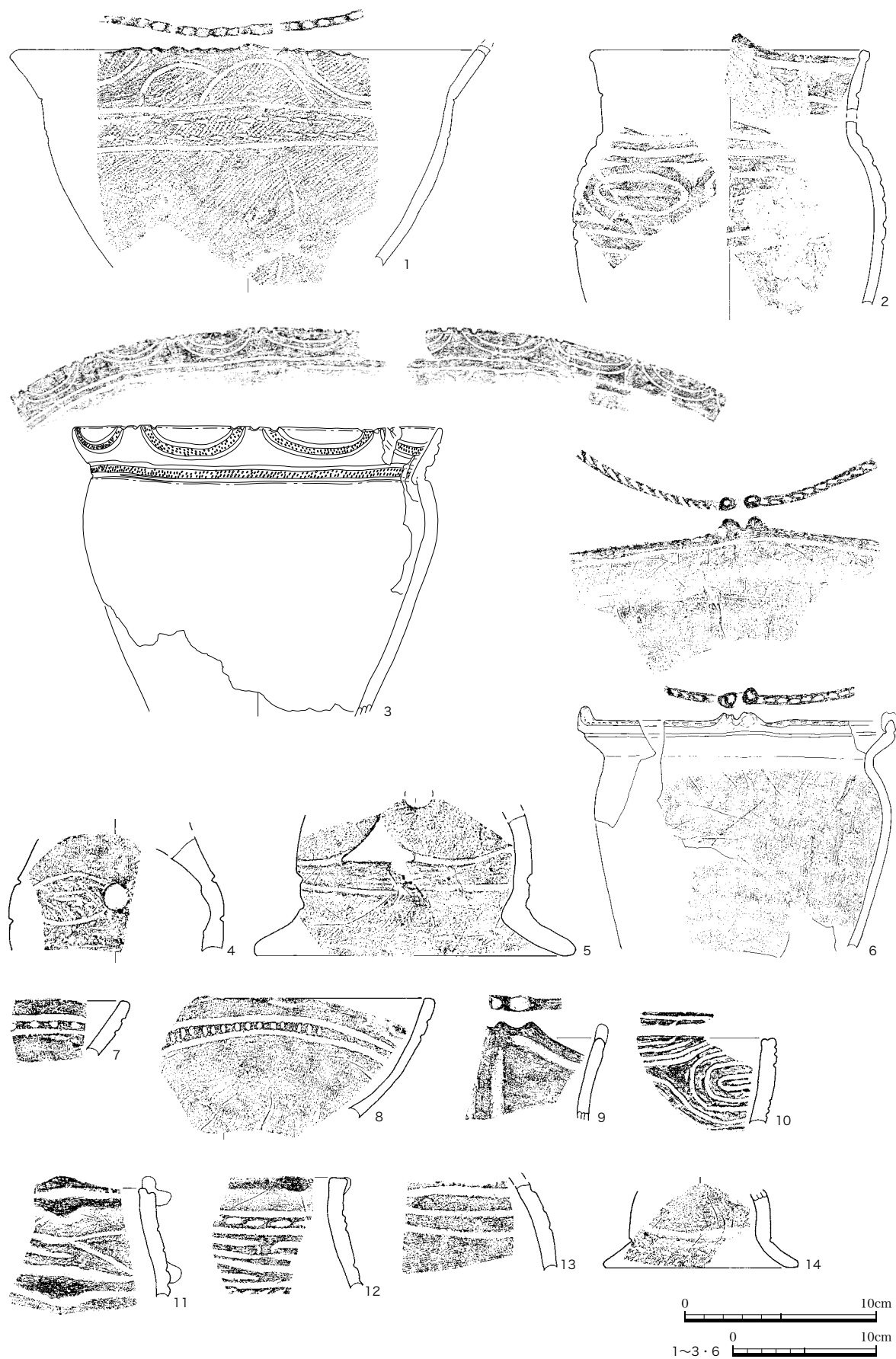
Eイ 24-24



Eイ 25-1

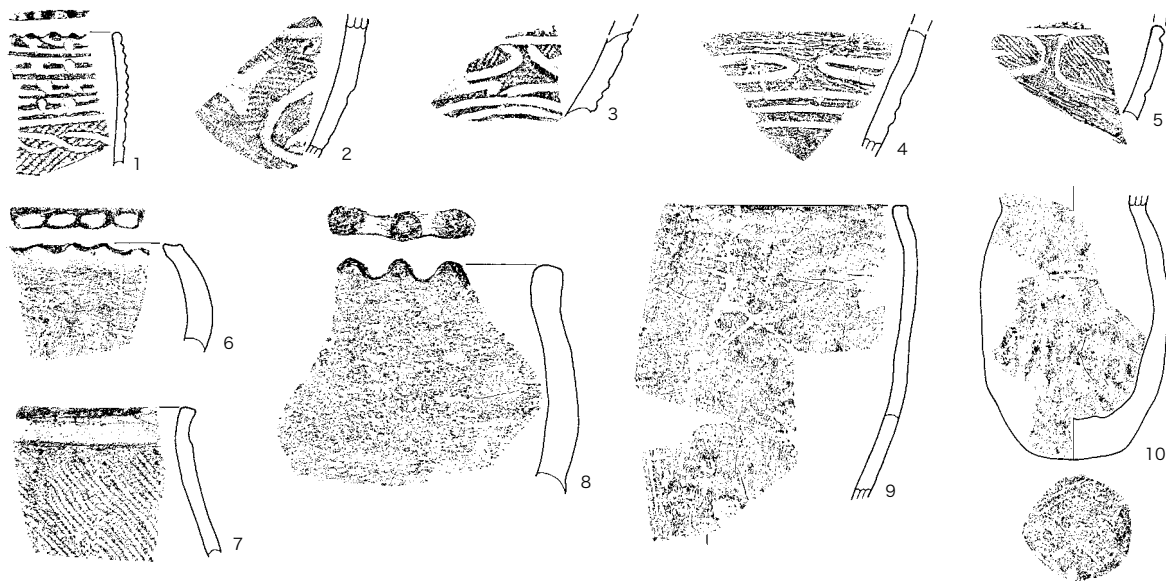


第257図 C区出土土器(43)



第258図 C区出土土器 (44) Eイ25-1

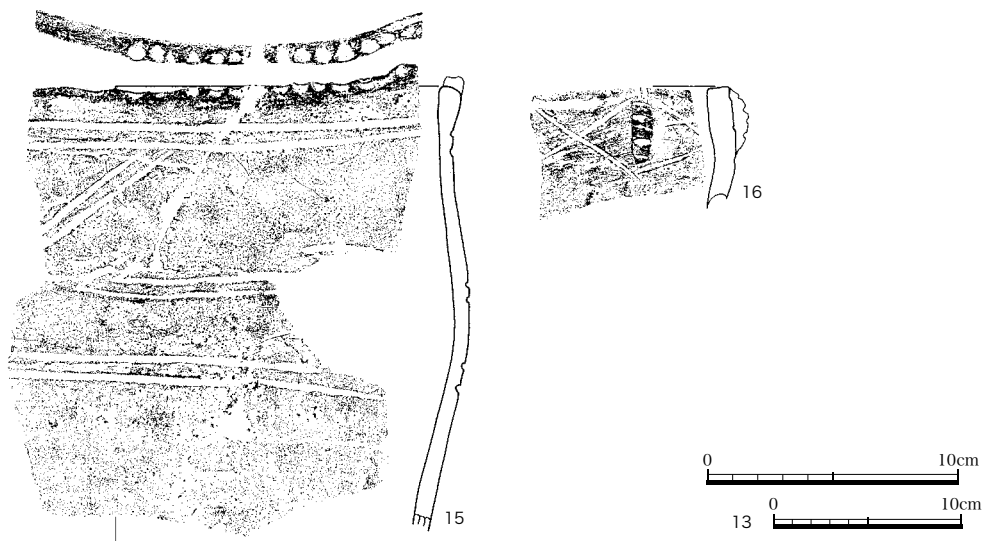
Eイ 25-1



Eイ 25-2

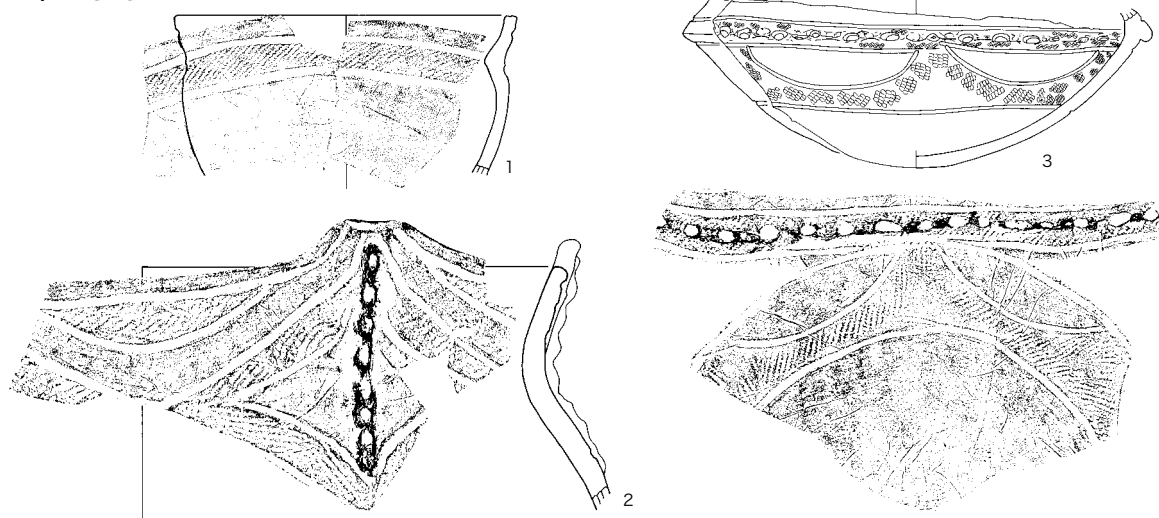


Eイ 25-3

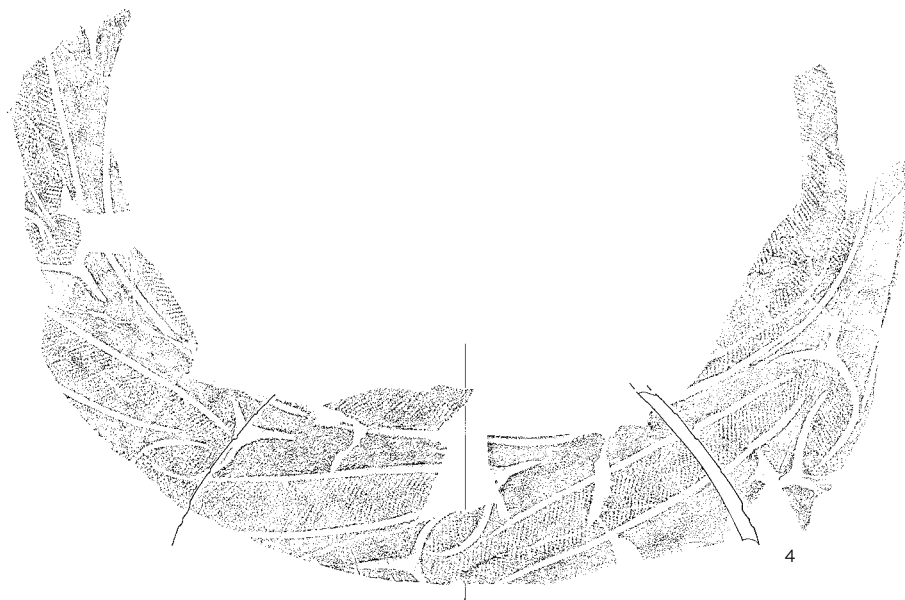


第259図 C区出土土器(45)

Eイ 25-6



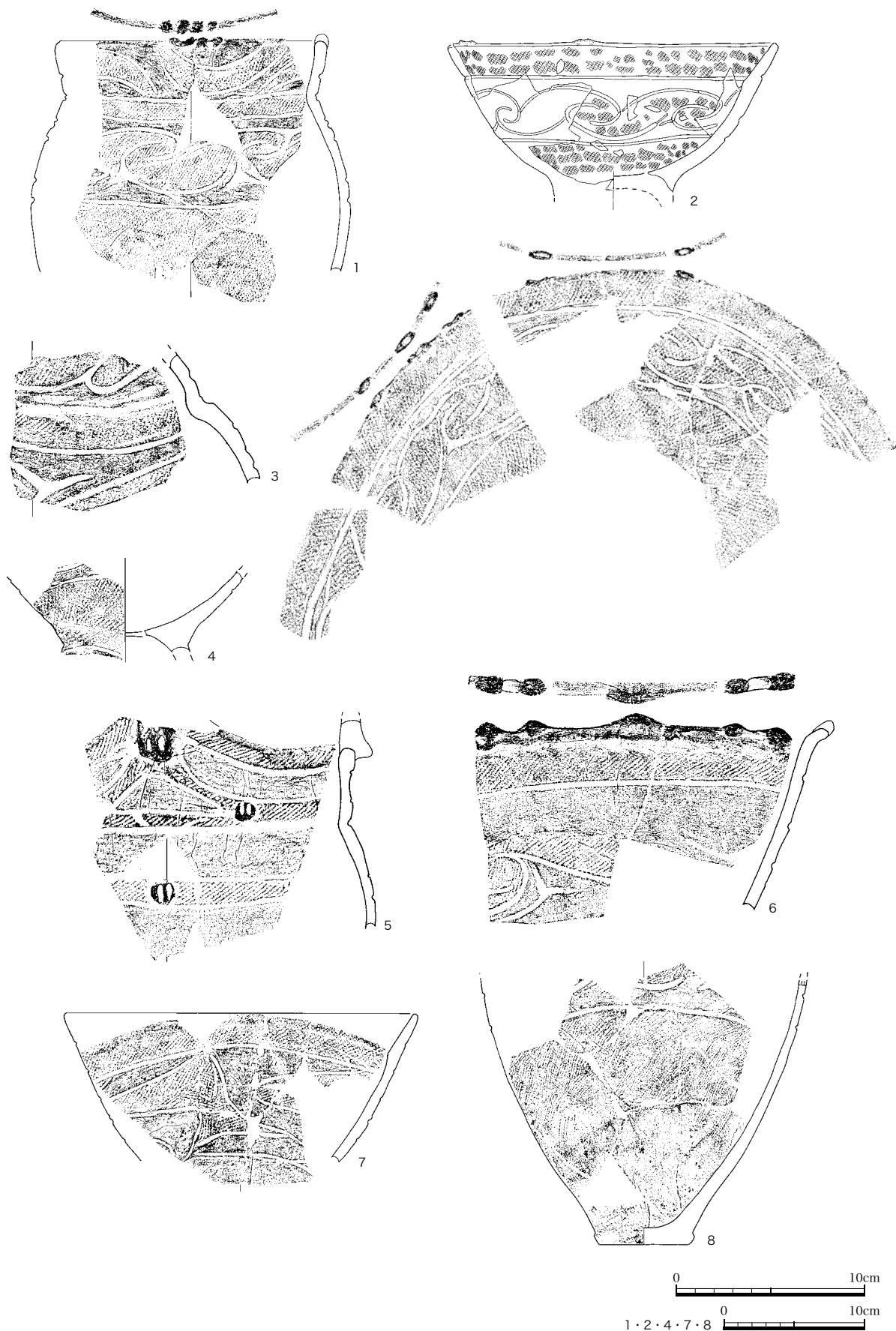
Eイ 25-7



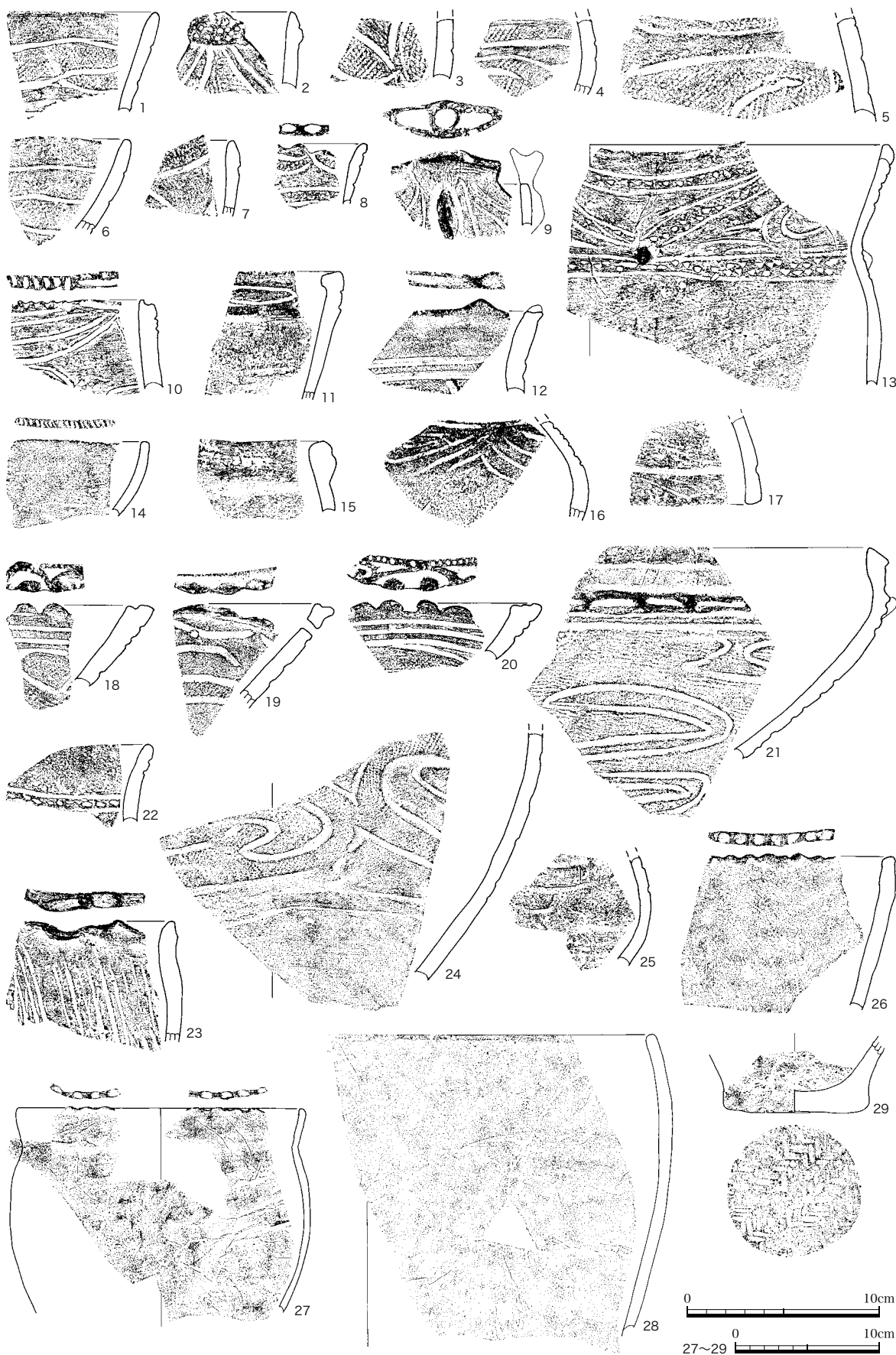
Eイ 25-7+25-8



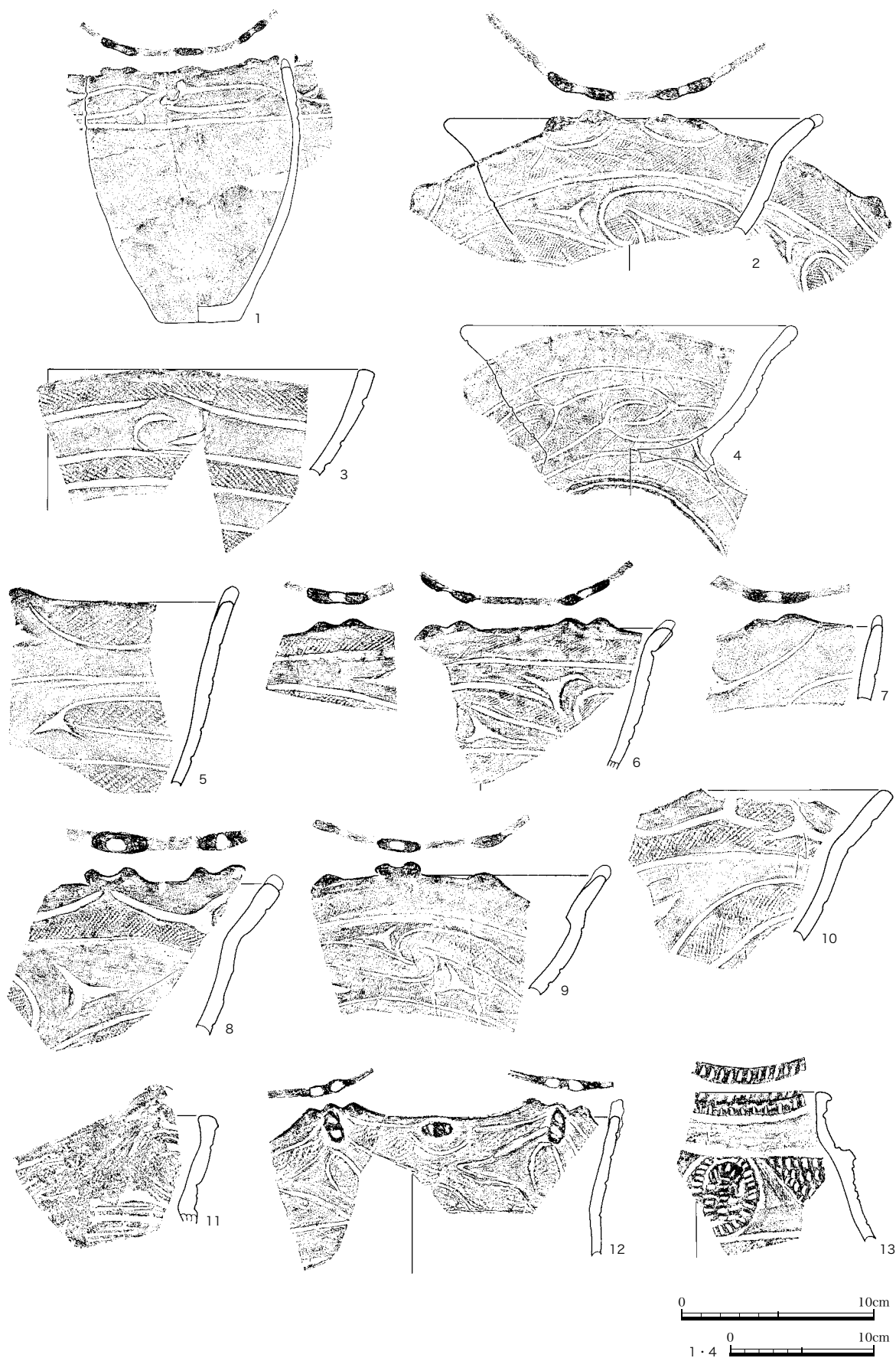
第260図 C区出土土器(46)



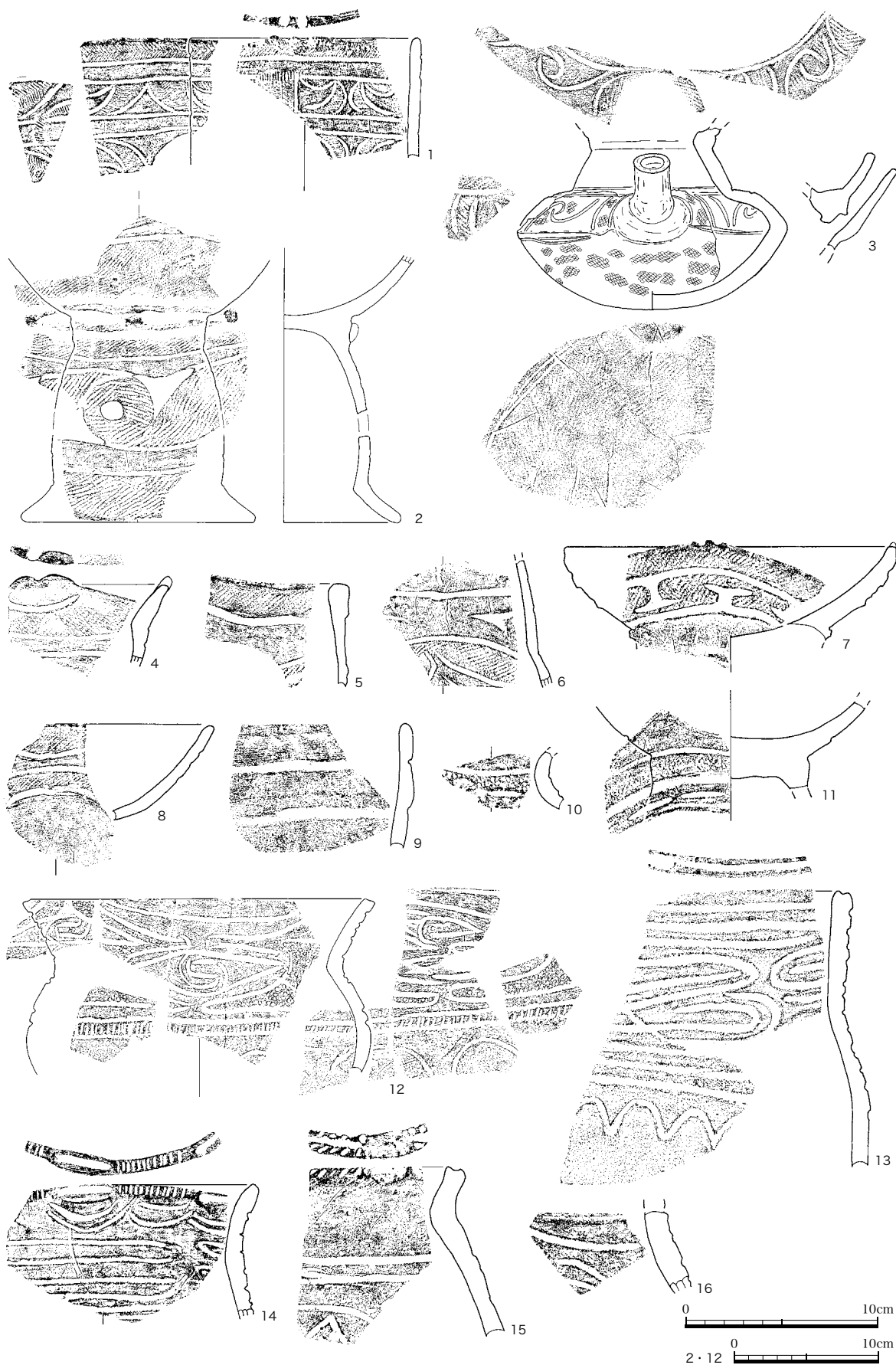
第261図 C区出土土器(47) Eイ25-7



第262図 C区出土土器(48) Eイ25-11



第263図 C区出土土器(49) N・W・S水



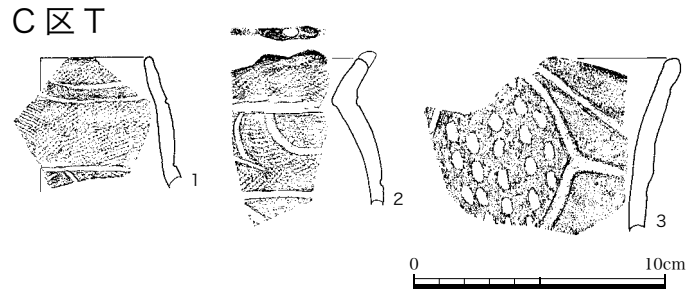
第264図 C区出土土器(50) N・W・S水



第265図 C区出土土器(51) N・W水

5は数片の接合によりほぼ一周の残存が確認された台付鉢脚部で、別に第267図に拓影展開及び接合部の拓影を示す。6の浅鉢も特徴的でやや深く抉り込んだ三叉文を上下交互に連続して配している。8は前浦式の鉢で、三角形区画内に「の」の字文が配される。第245図1は大洞系広口壺で、比較的整った雲形文でミガキも丁寧だが、浮彫的とは言いがたい。2以下は大洞系C2式で直線化した雲形文などが確認される。6はやや雑な沈線施文で、全体の文様構成も判然としないが、安行系の菱形配置が基本のようにも見える。

第246,247図には破片資料を示す。安行系磨消縄文の破片～沈線施文の破片、大洞系、粗製土器・無文の



第266図 C区出土土器(52)

順に示しており、型式細別順と対応していない。三叉文が単独的に配される資料が比較的目立っている。大洞系ではC2式中段階以降の破片が一定数ある。第247図39の底部は内面に凹線状のナデ痕跡がある。

第248～251図はEイ24-18グリッド出土土器で、第248図には径復原個体を主に示した。1は内部に縦位隆帯を擁する菱形状区画、波底部X状の構成で交差部に円形浮文という文様配置の土器である。2は菱形+X状構成の文様を太い沈線及び刺突列充填で表現している土器で、構成・施文手法・質感からも南関東安行3d式と判断して良さそうである。4はS字状文を入組み連鎖させて展開してゆく土器で、口縁端部の加飾は大洞式鉢との関係を窺わせる。文様線はやや浅く器面はさほど丁寧に磨かれてはいない。5は頸部に一段の階段状入組文が沈線でのみ描かれる土器で、全体が判然としないものの、体部が膨らむ壺形（或いは注口付き？）と想定される。第249図3以下は破片資料で、粗製土器でも第250図26のように注目される資料がある。第250図31は時期が大きく異なる。中期後半加曾利EⅢ式で、摩滅が著しい。

第252図1～9にはEイ24-19グリッド出土土器、同図10から第254図にかけてはEイ24-22グリッド出土資料を示した。径復原個体・破片とも頸部体部入組文表現の資料がやや多く、第253図1,3等は注目される資料と言える。第253図7は菱形+X状の構成を円形刺突充填の帯状部で描くもので、波底部では円形貼付文を挟んでの上下対向三叉表現が認められる。

第255～257図6はEイ24-23グリッド出土資料で、径復原個体を第255図に示した。3の小形深鉢では突起下の単位に楕円文、波底部X状構成となるもので、縄紋LRが充填される。4はやや小さめの鉢で、底面は丸みを持ち不安定、口縁の上面観はやや方形に近いという形態的特徴が認められる。沈線は細く浅めで、器面調整はやや粗い。

第257図にはEイ24-23グリッド出土の大洞系、Eイ24-24グリッド出土の径復元個体、Eイ25-1グリッド出土の破片資料を示す。第257図7は渦巻文やX状の文様をやや浅い沈線及び細かい刺突で描いているもの、8は円形貼付文のみ交互配置的に表現されているものである。Eイ25-1グリッド出土土器は第258図や第259図にも示した。第258図2の小形深鉢は他にも破片があるものの、接合思わしくなく掲載していない。3は全周に近く遺存している土器で、外傾する狭い口頸部の弧線帯状文内に針先状の細かい刺突を充填している表現など特徴的な土器である。体部は粗い研磨で削りに近い部分もある。6は頸部屈曲の深鉢で口縁上端に刺突列が廻る。体部は無文で粗い調整痕が残る。

第259図にはEイ25-1グリッドに加え、Eイ25-2,3グリッド出土土器も示す。第259図13は体部下方にも横位線が巡りこの下位が無文となるもので、大洞系半精製とも近い部分がある。第260図にはEイ25-6～25-8グリッド出土の主に径復原個体を示す。いずれのグリッドも全体の分類数量比は他とさほど変わらない。5は外傾する頸部、以下体部に入組三叉文が配される土器で、沈線はやや浅いものの、三叉部は挟られている。第261図はEイ25-7グリッド出土土器で、安行系の径復原個体を中心に示す。図示していないが、



第267図 C区出土土器(53) E-24-17・22・N水

小片では沈線施文の安行系や大洞系も出土している。体部磨消縄文による入組三叉文描出の資料が目立つ。7の鉢はかなり乱れた構成で、沈線の手法もやや雑な感がある。第262図はEイ25-11グリッド出土の破片資料で、13,21等の注意すべき資料がある。

第263～265図はC区調査区脇の重機による水路掘削時の廃土から回収した土器の一部を示す。掲載以外にも良好な資料は多く認められ、当初は図化候補を多く選択したが、遺憾ながら限定しての提示とせざるを得ない。第263図11は第242図3と同一個体の可能性がある。第263図及び第264図上位には主に磨消縄文の安行系を示した。第264図3はやや遺存の悪い注口土器で折影右側の破片は接合してはいない。同図1は本遺跡では少ない細密沈線文系の土器、7は三叉～I字状の文様が交互に配されるもので、台付鉢となるうか。9以降は沈線施文の安行系対比土器群で、円形刺突充填の文様構成、体部下半の弧線文例など注目される。第265図1～7は大洞系の資料、8,9は前浦式である。10はI字文が連続的に描かれるもので、土製品の可能性も考慮したものの判然としない。積極的に土版文様を採用した土器との判断もあろう。

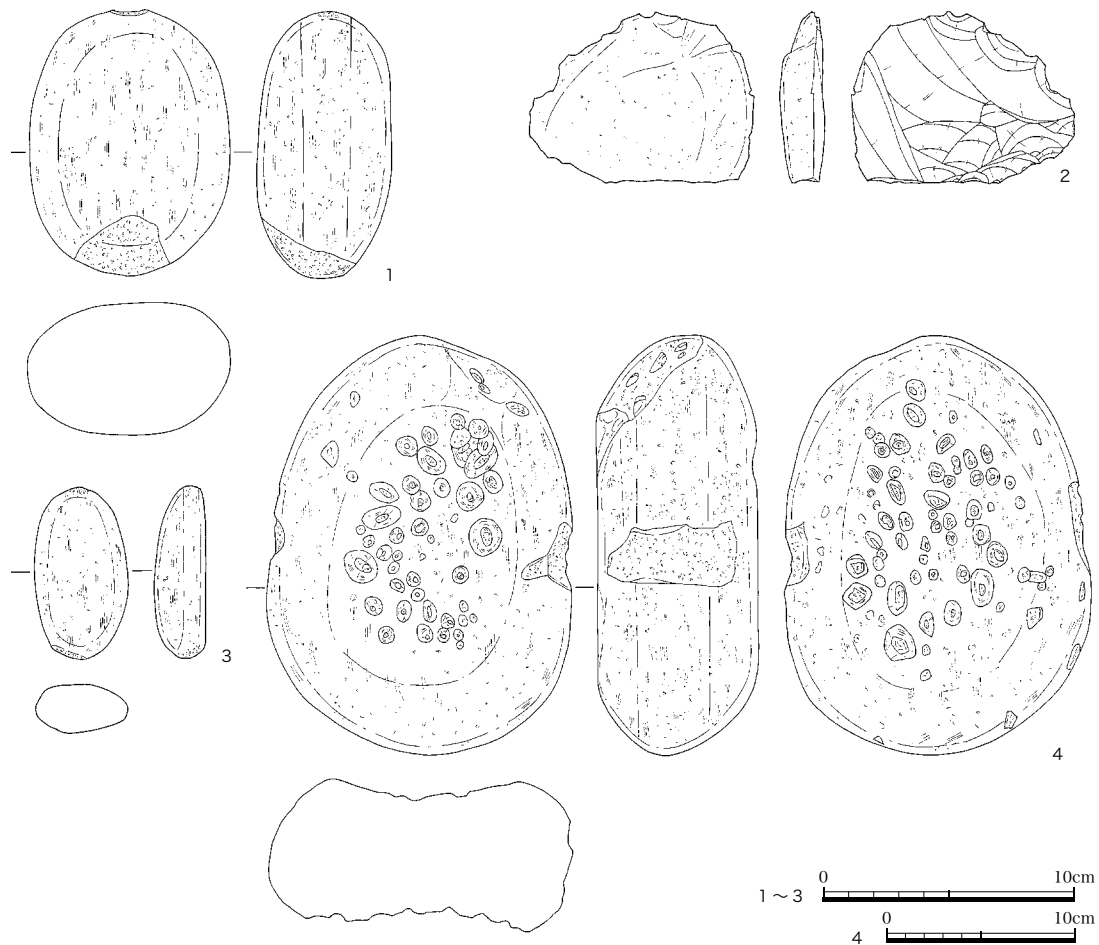
第266図にはC区トレンチ（VI層より下位の確認トレンチ）の出土土器の一部であるが示す。1は第233図4と同一個体の可能性がある。第267図は整理時のミスでこれまでに図示しなかったC区出土土器をまとめる。1は口頸部に円形貼付文・対向弧線文基調の表現が為されるもので、沈線・刺突→粗いミガキ（沈線縁若干粘土はみ出しの潰れ）が観察される。炭化物の付着も見られる。2は大洞系の台付鉢で、接合部が擦れており、「鉢」として転用されているようである。石英を多く含む粗い胎土で、沈線は深く施文後のミガキも丁寧であるが、彫去による浮彫り表現とはなっていない。全体に被熱し、炭化物の付着も顕著である。3は台付鉢脚部で、破片上端数ヶ所に透かし孔の辺が確認できる。右上に示した折影の破片が同一と推定されるが、接合せず確定的ではない。5は第244図5の折影と接合部下端折影を示した。4単位の円文で単位間では交互対向三叉の透孔が入る。版組後に接合が判明したことから、別図での提示となった。

C区出土石器（第268～292図）

C区出土石器も総数1万点を超える量であり、機種分類とそのカウントは行い得たものの、図化遺物の選択は限定しての任意の選択であり、遺跡や地点の特徴を示すものとはなっていない。なお確認不十分ではあるが、特徴的な出土状態を示すものは無く、遺構内や包含層中から、土器等の他の遺物と併せて出土している。特定の機種がある数グリッド範囲に偏在する可能性もあるが、現段階では確認していない。遺構出土石器、グリッド出土石器の順で以下羅列的に示してゆく。観察結果等についてはDVD所収の観察表に示す。

第268図はS106出土石器で、礫石器4点のみ示す。遺構出土として取り上げているものでは石鏃2点、石錐2点、礫器3点、磨石18点、敲石1点、石皿・多孔石類5点等を確認している。但しこのS106は石囲炉で確実な遺構覆土が捉えられてはおらず、出土状況等について不明であると共に、本来この遺構に帰属する石器の実数は不明である。4の石皿は炉石として用いられていたものである。1,3は磨石兼敲石、2は二次加工ある剥片である。4は両面多孔石の面もある石皿で、側面に敲打痕が集中しているところがある。

第269,270図にS143b出土石器を示す。大きめの住居跡の割には確認できた覆土が薄く、さほど多量ではない。石鏃類4点、礫器1点、砥石2点、石錘2点、磨石14点、敲石3点、石皿類1点等がある。土器では上位包含層グリッド出土土器との接合例があり、石器についてもこの住居跡帰属資料がグリッド出土石器となっている可能性は高い。他遺構やグリッド出土資料と比べると時期幅が比較的限られており、石器についても一定時期幅の資料と捉えることができよう。第269図1～4は剥片石器で、1,2は両極剥片素材の楔形石器となるうか。4はスクレイパー類に近いが顕著な二次加工は無く、鋭角な縁辺の一部に顕著な摩滅・



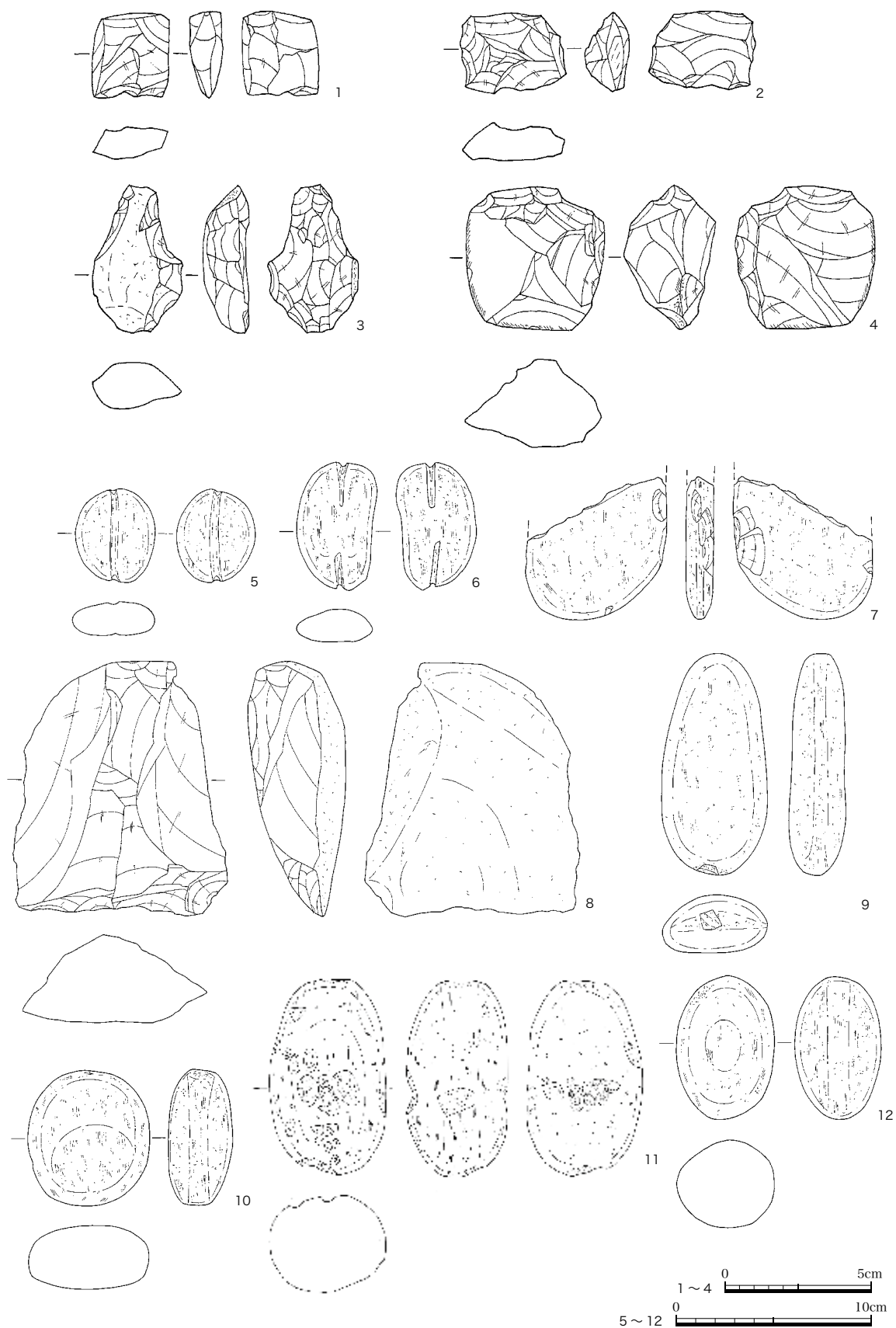
第268図 C区出土石器(1) S106

擦れ痕跡がある。5,6は石錘、7は磨石とするが、磨痕は顕著ではない。8は大形の剥片を素材とする礫器、9は敲石、10～12は磨石である。第270図の1～3も磨石でやや厚みのある礫素材の例が目立っている。4～6は石皿類だが、4は厚みがあり平面不整な形態で、やや珍しい。

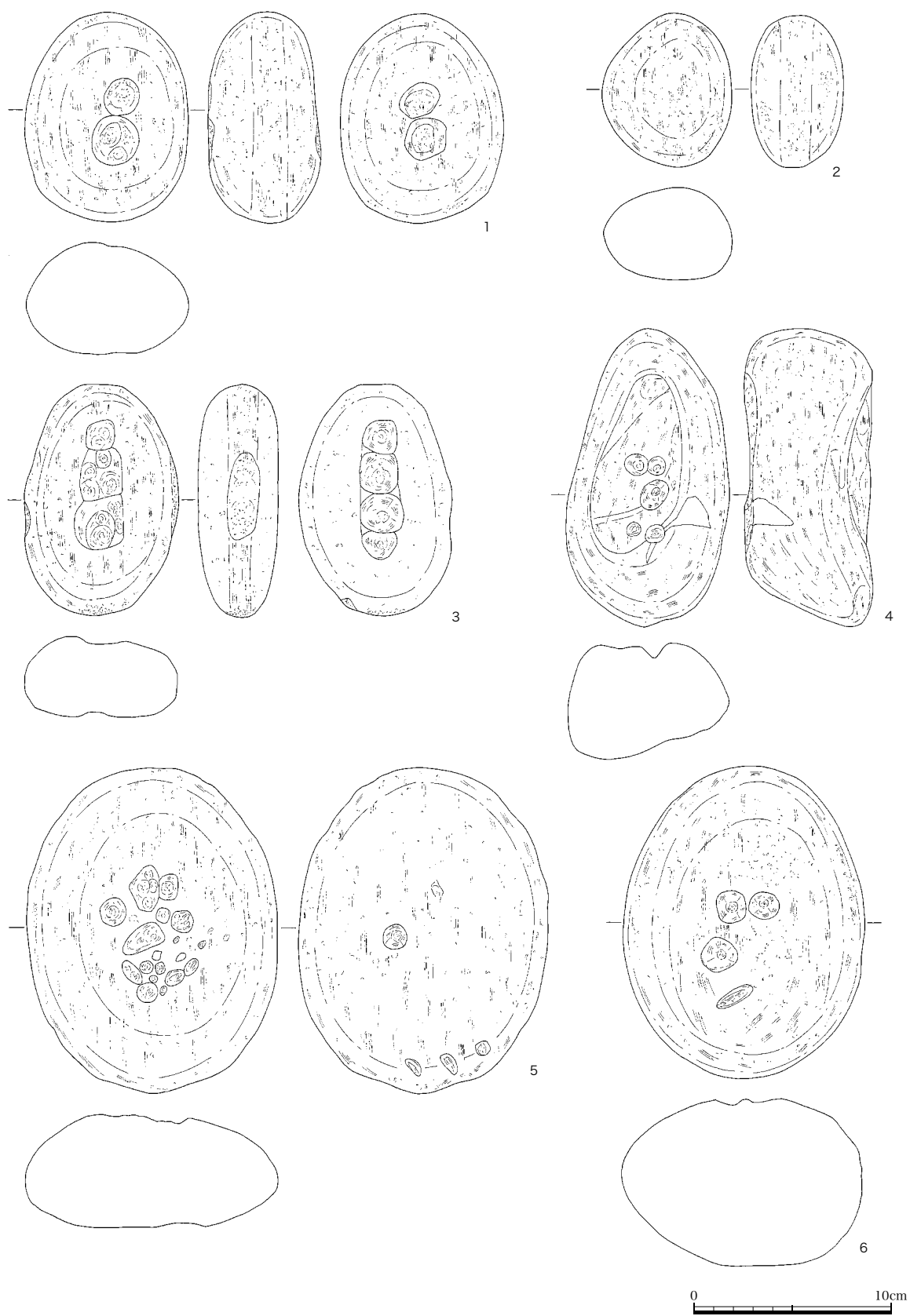
第271図4～6に示したS 137はS 143内にある柱穴で、S 143 bに伴う可能性も高い。5はやや不整な形態の石皿、6は磨痕が若干確認されるのみの礫で、炉石等であった可能性からここに示した。狭義の石器からは除外した方が良いかもしれない。1～3はS K 108出土石器である。

第272～275図にはS 147出土石器を示す。この遺構も確認された掘り込みは浅く、本来帰属の遺物がグリッド出土になっている可能性がある。但し調査時の出土状態の記録や所見でも、覆土中から比較的多くの石器・礫の出土が確認される。整理時の集計ではピット出土も含め、石鏃類2点、剥片石器類3点、礫器2点、石錘1点、磨石63点、敲石1点、石皿類9点等の出土が確認されている。第272図の1～4はチャートの剥片石器で二次加工ある剥片または使用痕ある剥片である。6はやや大形の礫下端を大きく剥離しているもので、礫器と分類したものの顕著な二次加工は無い。但しやや鋭角となっている縁辺一部に刃こぼれ状の使用痕が観察される。7～10は定型的な形態の磨石で、表裏面中央に浅い凹みを有するものが目立つ。第273,274図にも磨石を示す。C区のグリッド出土磨石は殆ど図化しておらず、このS 147資料でC区出土磨石の多様性を大まかには示し得ると考え、やや多めに選択図示した。平面形態、サイズ、断面・厚みなどで

(→P277)

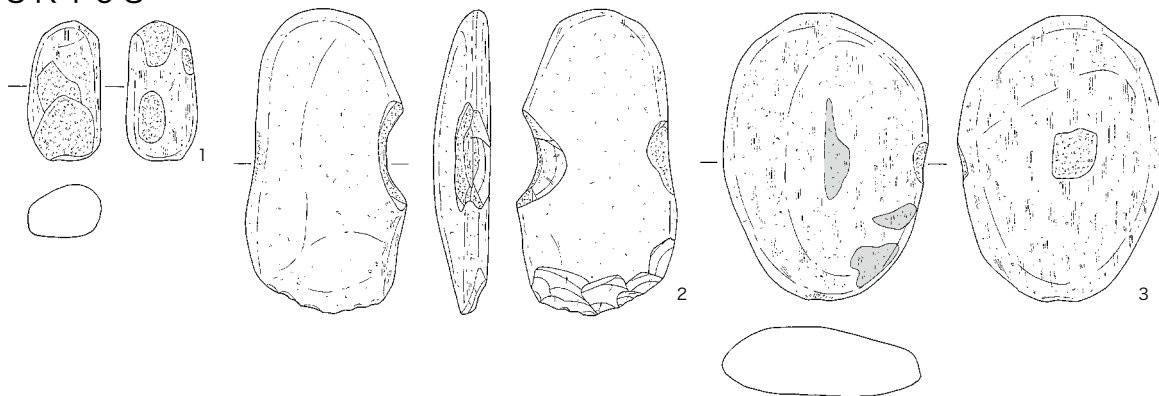


第269図 C区出土石器(2) S143b

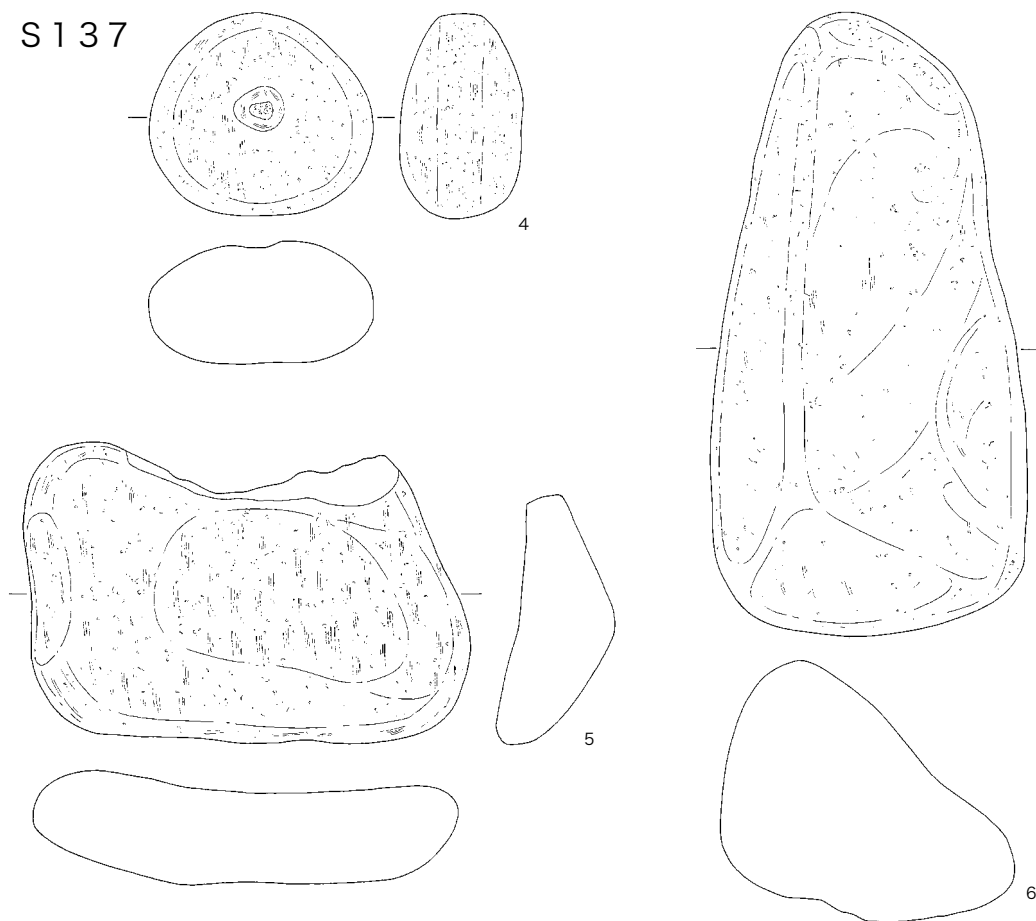


第270図 C区出土石器(3) S143b

SK108



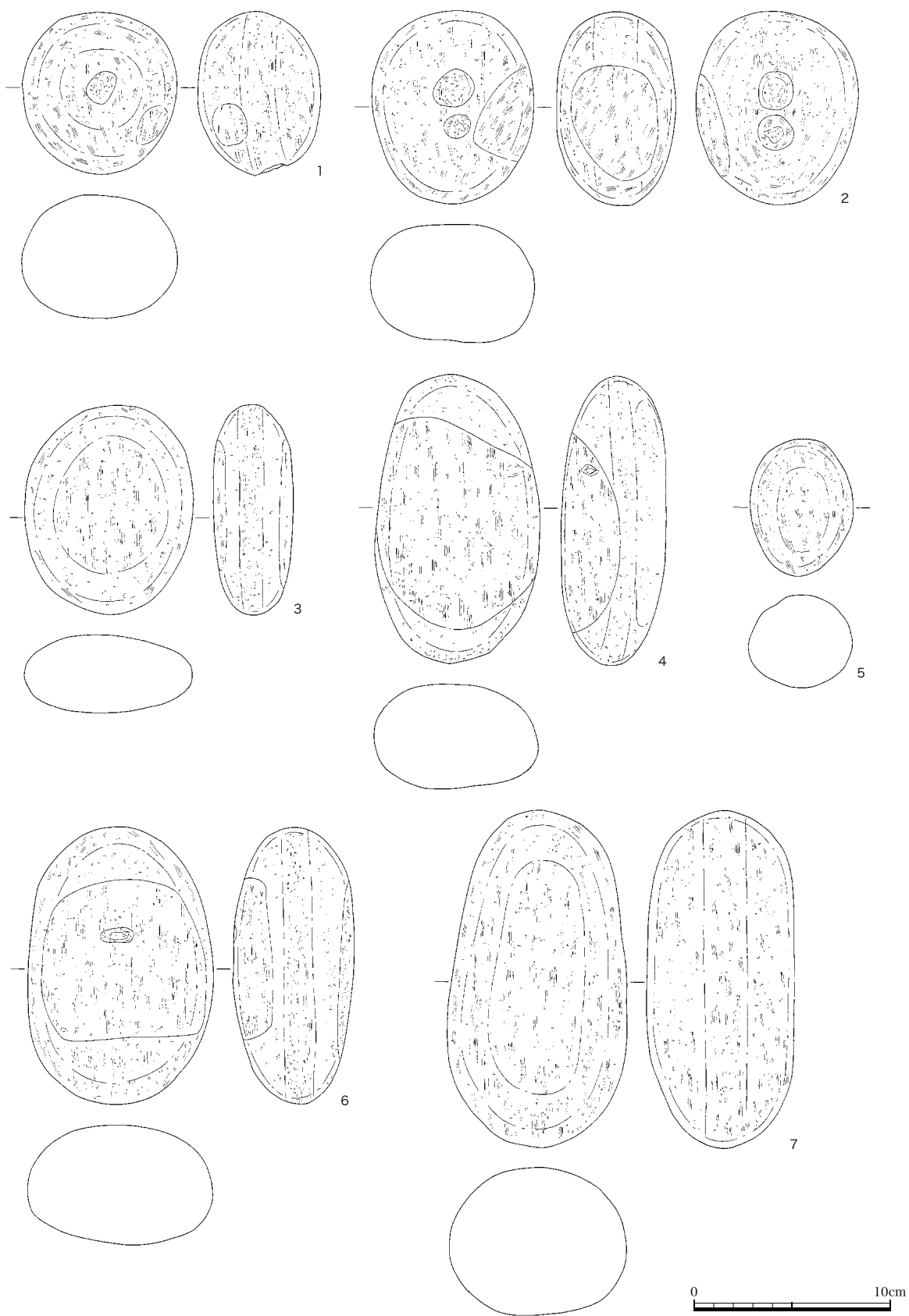
S137



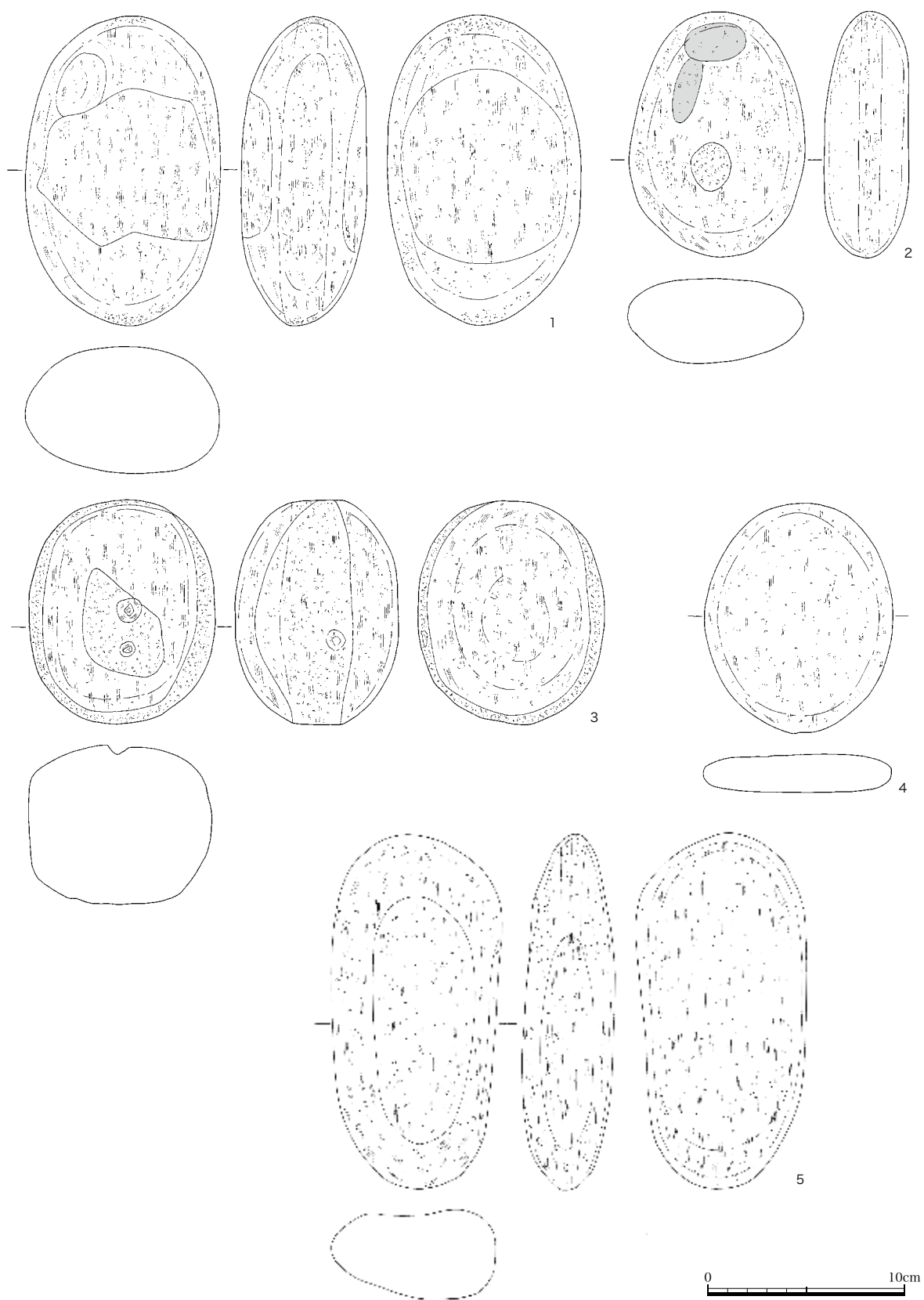
第271図 C区出土石器(4) SK108・S137



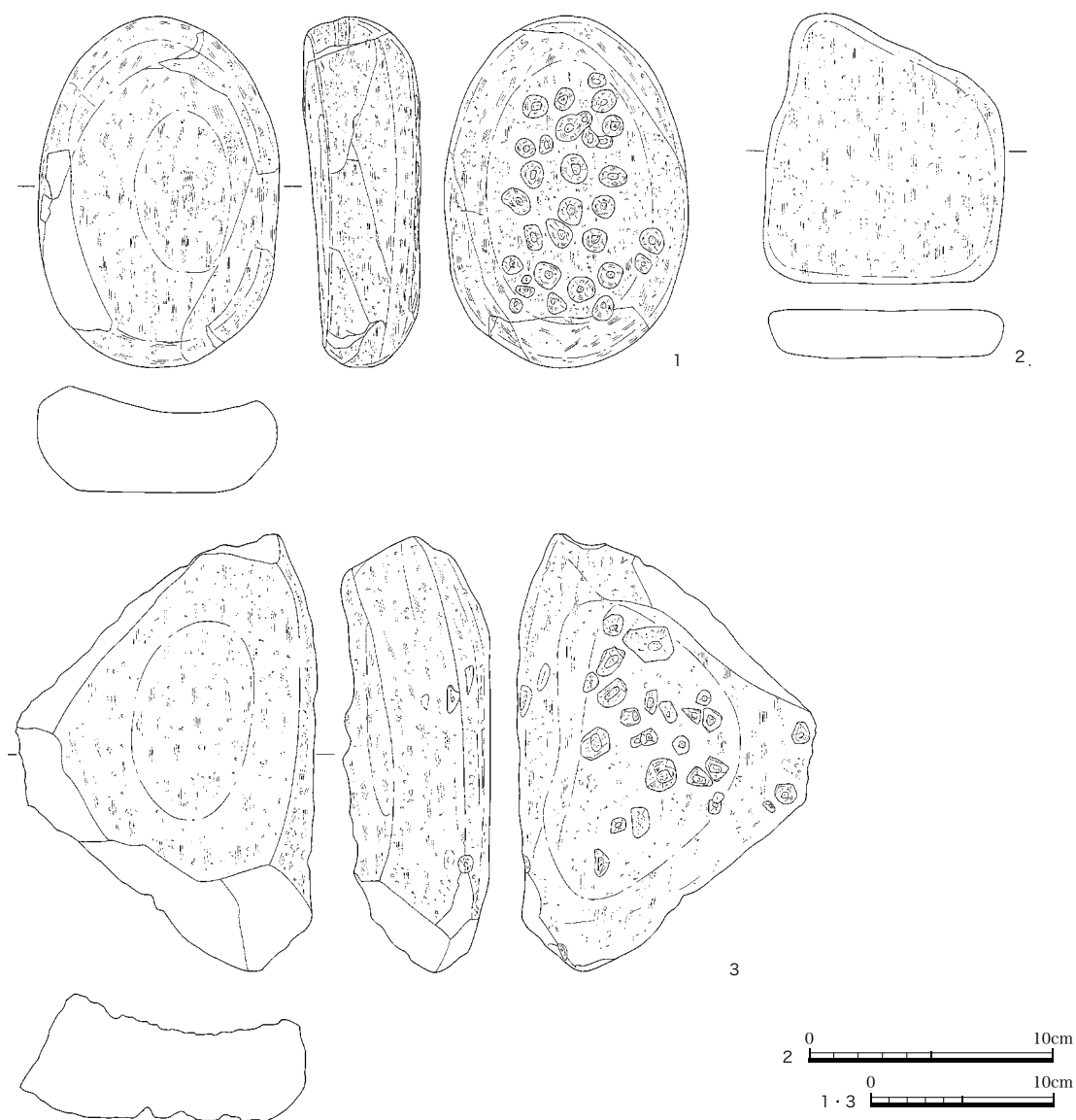
第272図 C区出土石器(5) S147



第273図 C区出土石器(6) S147



第274図 C区出土石器(7) S147

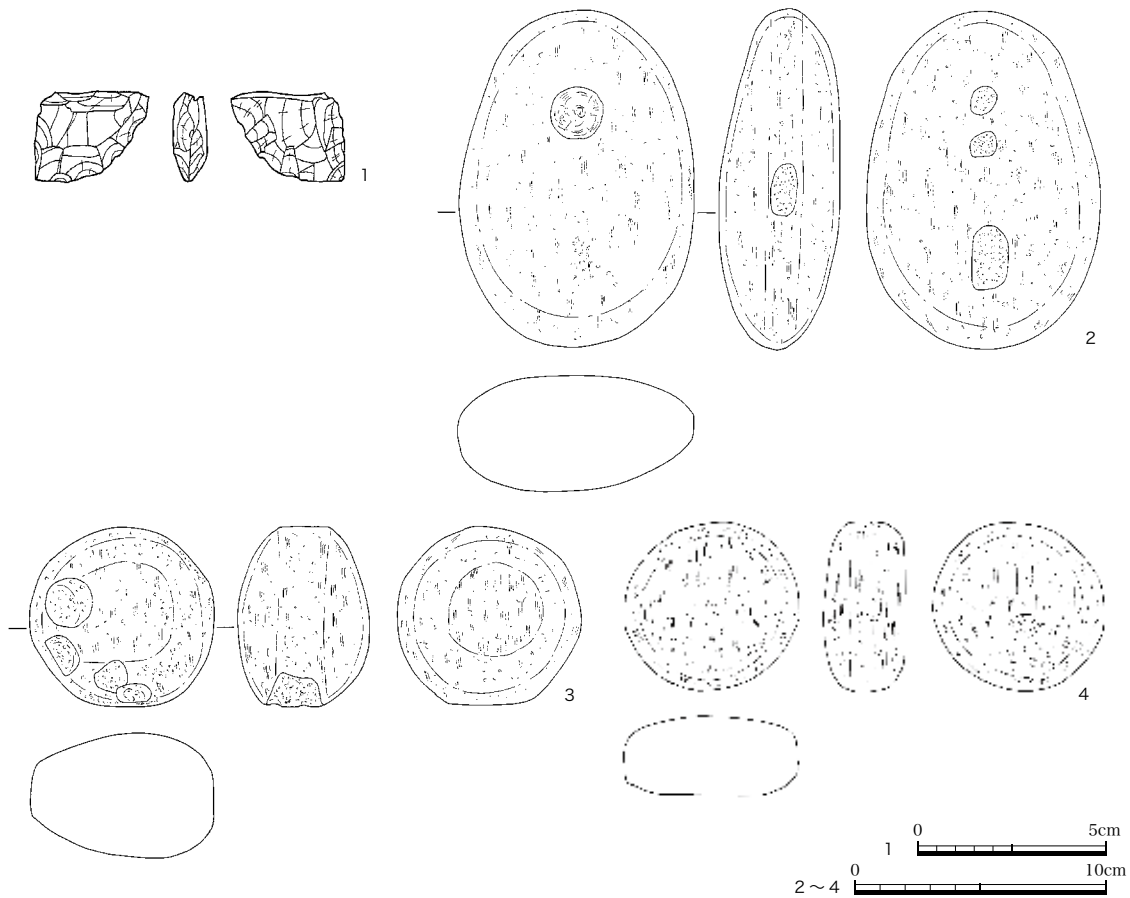


第275図 C区出土石器(8) S147

幾つかの種別がある。第274図4は扁平な例で石皿類との区別が難しい。同図3は球形に近い程厚みがあり、側面ほぼ全周に敲打痕があるなどの特徴が観察される。同図5、第275図1～3は石皿類で1,3は多孔石面も有する。第275図2はやや小形で扁平な例で、砥石との区別が難しいものである。

第271図1～3はS K 108出土資料である。やや大きめの土坑ということもあるが、遺物量が多く石器も礫を含めた総数92点が出土している。石鏃類5点、剥片石器類3点、打製石斧2点、礫器3点、砥石2点、磨石15点、敲打石1点である。1の敲打石は、小形で上下端部～表面側にかけて顕著な敲打痕を有するものである。2の打製石斧は片刃状の形態で、括れ部も一側縁側が強い括れで敲打が集中している。

第276図はS K 118出土石器である。スクレイパー類1点、剥片石器類3点、磨石44点、敲打石1点、石皿類2点、チャートの原石・剥片類が116点である。チャート原石・剥片類が多いのはチャート集石遺構S 121と隣接していることが関係していよう。第276図1は多量に出土しているチャート剥片類の1点のみだ



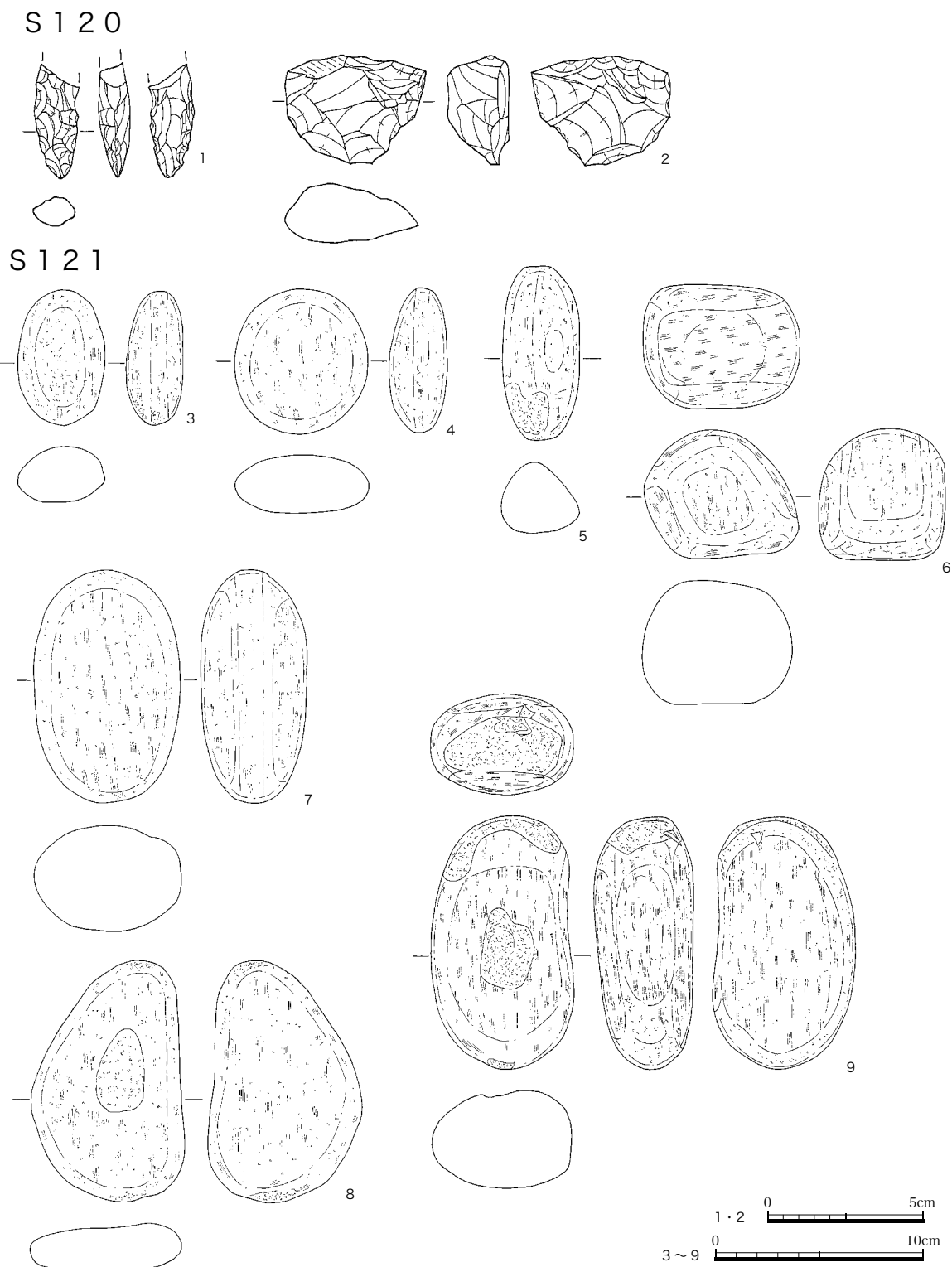
第276図 C区 出土石器 (9) SK118

がここに示す。比較的細かい二次加工があり、スクレイパー類と捉えられよう。残りは磨石だが、4が断面長方形に近い定型的な例である。

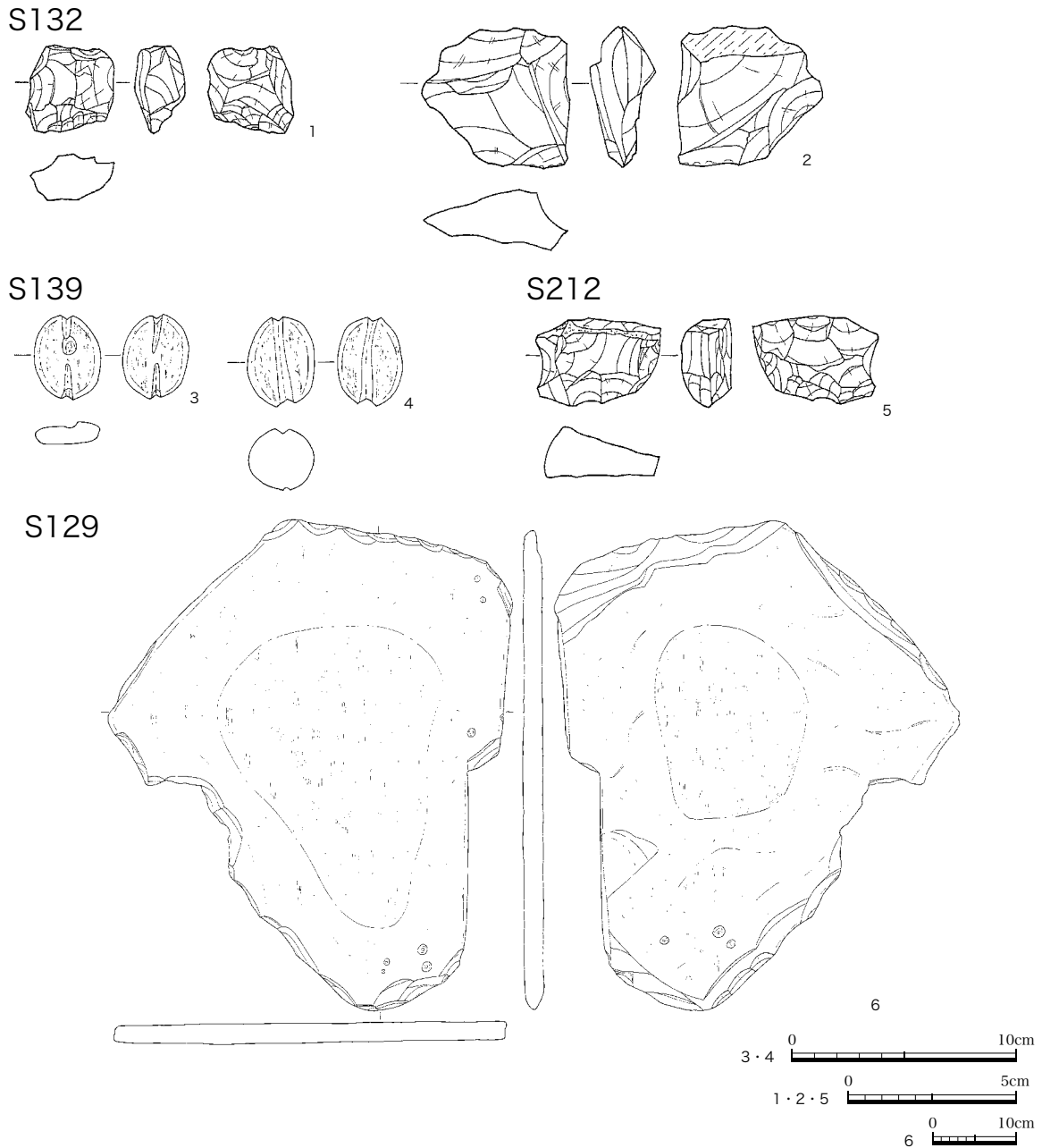
第277図1,2はS 120出土資料である。S 120からは磨石3点、石皿類2点、チャート原石・剥片類35点が出土した。集石遺構の集石下位でも遺物がみられたが、集石と関わらない包含層資料を含んでいる可能性もある。1は剥片類で当初分類したものだが、上位を欠損し、若干不整なもの石錐と判断する。

第277図3～9はS 121出土資料である。S 121は打製石斧1点、礫器1点、磨石37点、敲石1点、石皿類1点、チャート原石・剥片類155点が出土している。チャート原石・剥片類の集石遺構として注目されるものだが、覆土のある遺構ではないこともあって、他の石器機種が限定されることは注意して良いかもしれない。ここでは磨石類7点を示す。3は下端近くの敲打痕が顕著で敲石とした方が良いかもしれない。6は立方体状のもので側面から上面にかけての帯状範囲などに磨痕が集中している。8の表面は中央に敲打集中部があり、その周囲が光沢を帯びるほどの顕著な磨痕を観察できる。

第278図はS 132、S 139、S 212、S 129出土資料である。S 132はやや深さのある土坑、S 139はS 106と近い位置にある土坑、S 129は大形石皿設置の土坑である。S 132からは図示の2点のほか、砥石1点、磨石2点、石皿類1点、チャート剥片11点が出土している。図の1は二次加工ある剥片、2は使用痕ある剥片である。S 139では石錘2点を示す。他に石鏃2点が確認されている。S 212遺構は記録無く、取り上げ時もしくは整理時における遺構名またはグリッド名の記載ミスの可能性が高い。図示したものは二次加工ある剥片である。6は緑泥片岩素材の長さ59cmの石皿を1/8縮尺図で示した。遺構の上位で面を水平



第277図 C区出土石器(10) S120・S121

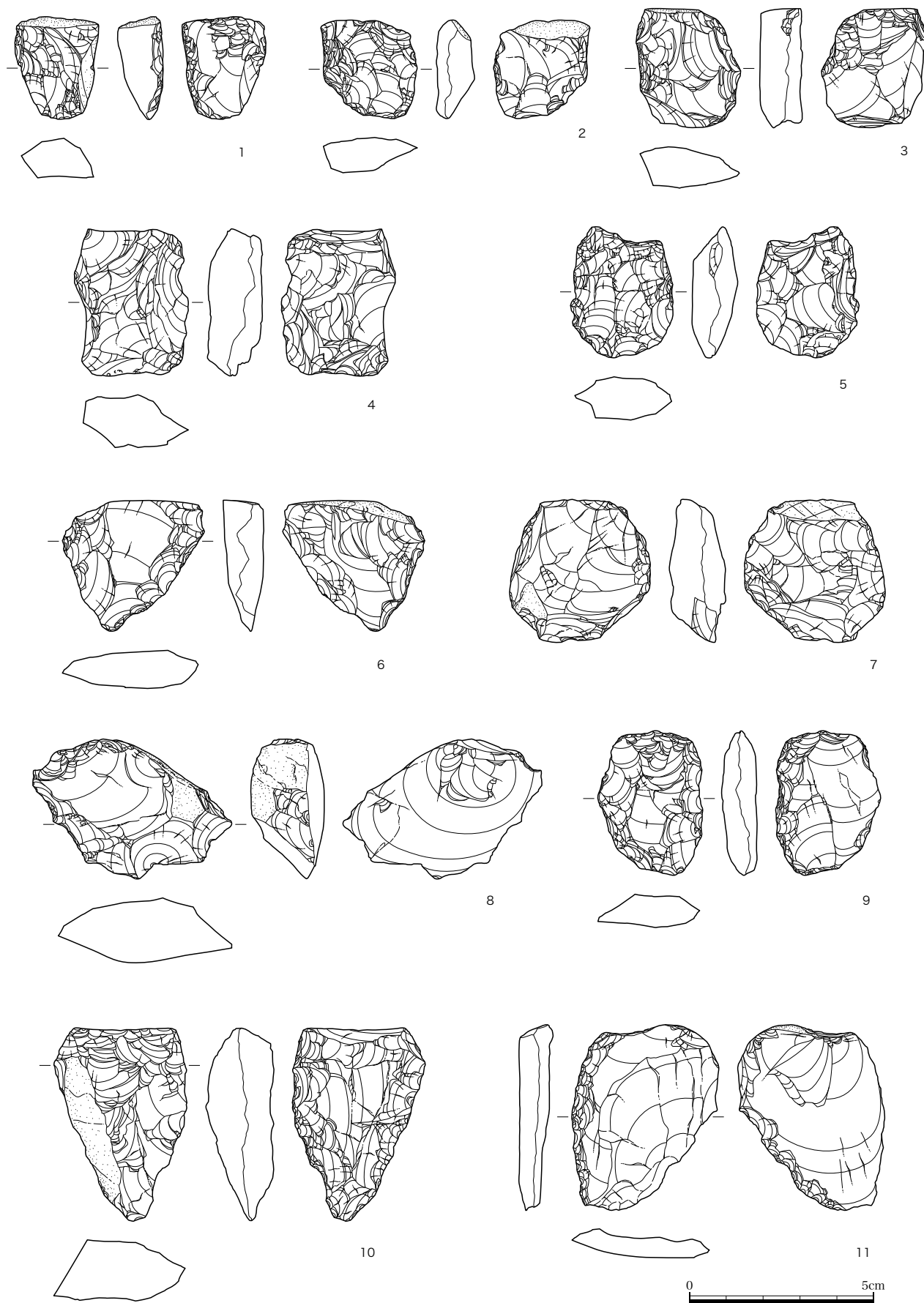


第278図 C区出土石器(11)

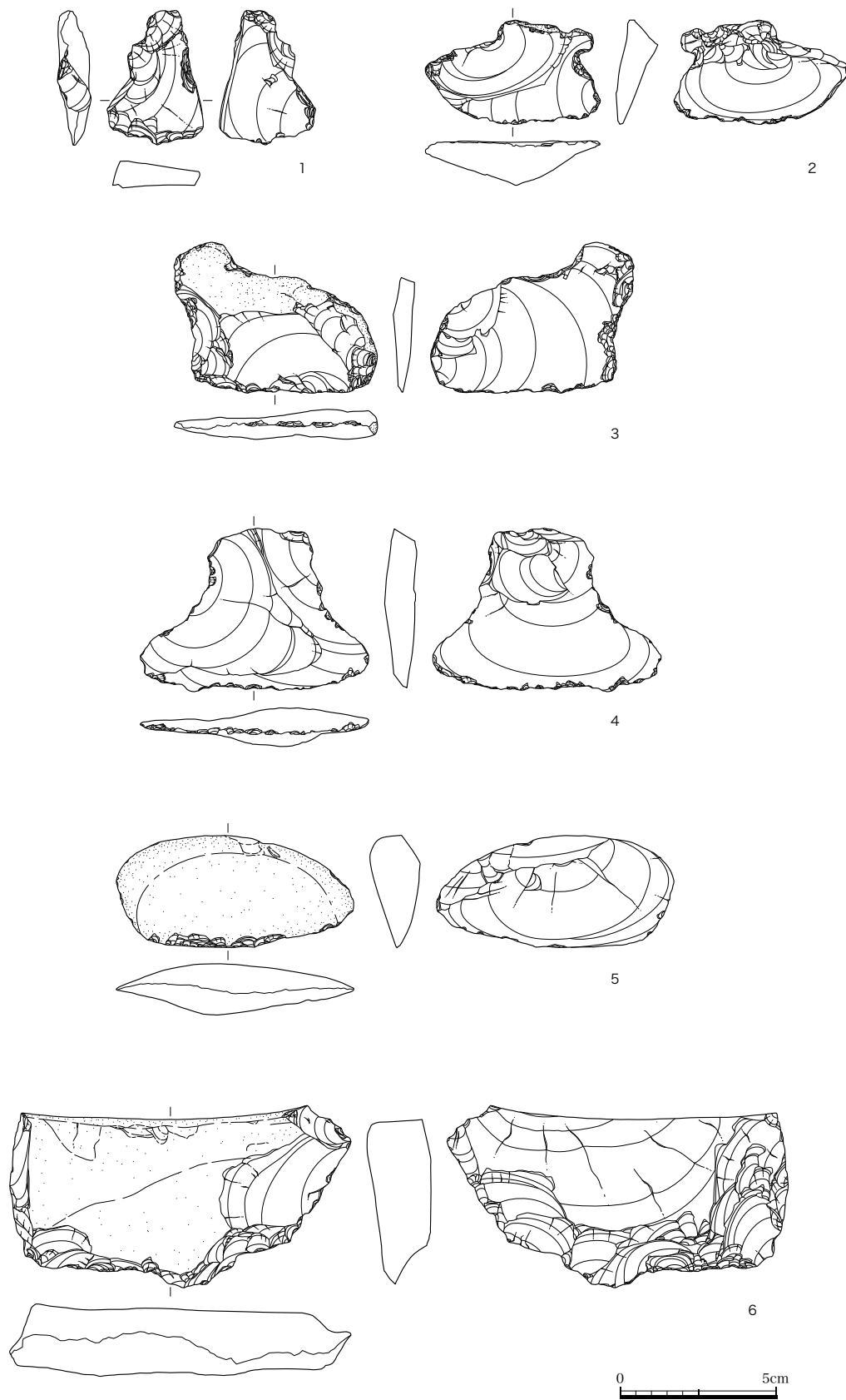
にして出土している(図版二四-2)。当初石剣類の素材かとも思われたが、表裏面の中央に磨痕があり、石皿と判断した。縁辺は剥離加工で整えているが、礫面または節理状の面のままとしているところもある。面の下方一部に浅い凹み孔が数ヶ所観られる。

第279図以下にC区グリッド出土資料を示す。剥片石器を第279～281図に示す。多量に出土しているチャートをもととする剥片石器について、極めて一部ではあるが選択して委託による図化を行った。第279図1～4は両極剥片素材の楔形石器、5～11がスクレイパー類と考えている。両面加工は殆ど無く、鋭角な縁辺の片面を二次加工により刃部としているものが多い。第280図2～5は図下端の直線的な縁辺部分に使用痕が認められるものである。2～4については頁岩製で粗製石匙との判断もあるかもしれない。2や4では二次加工が殆ど認められない。1,2では上端～側縁の縁辺を潰すかのような加工が加えられる。6は比較的大

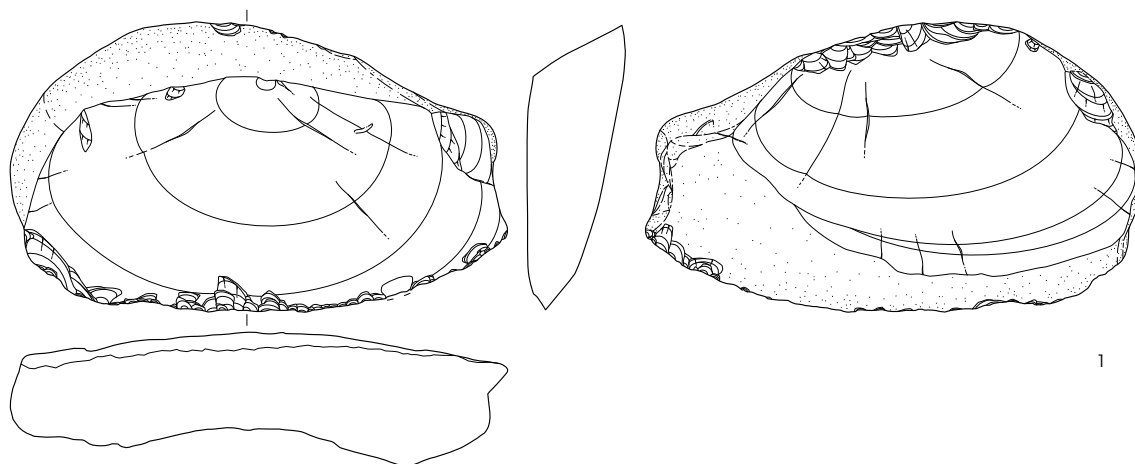
(→P288)



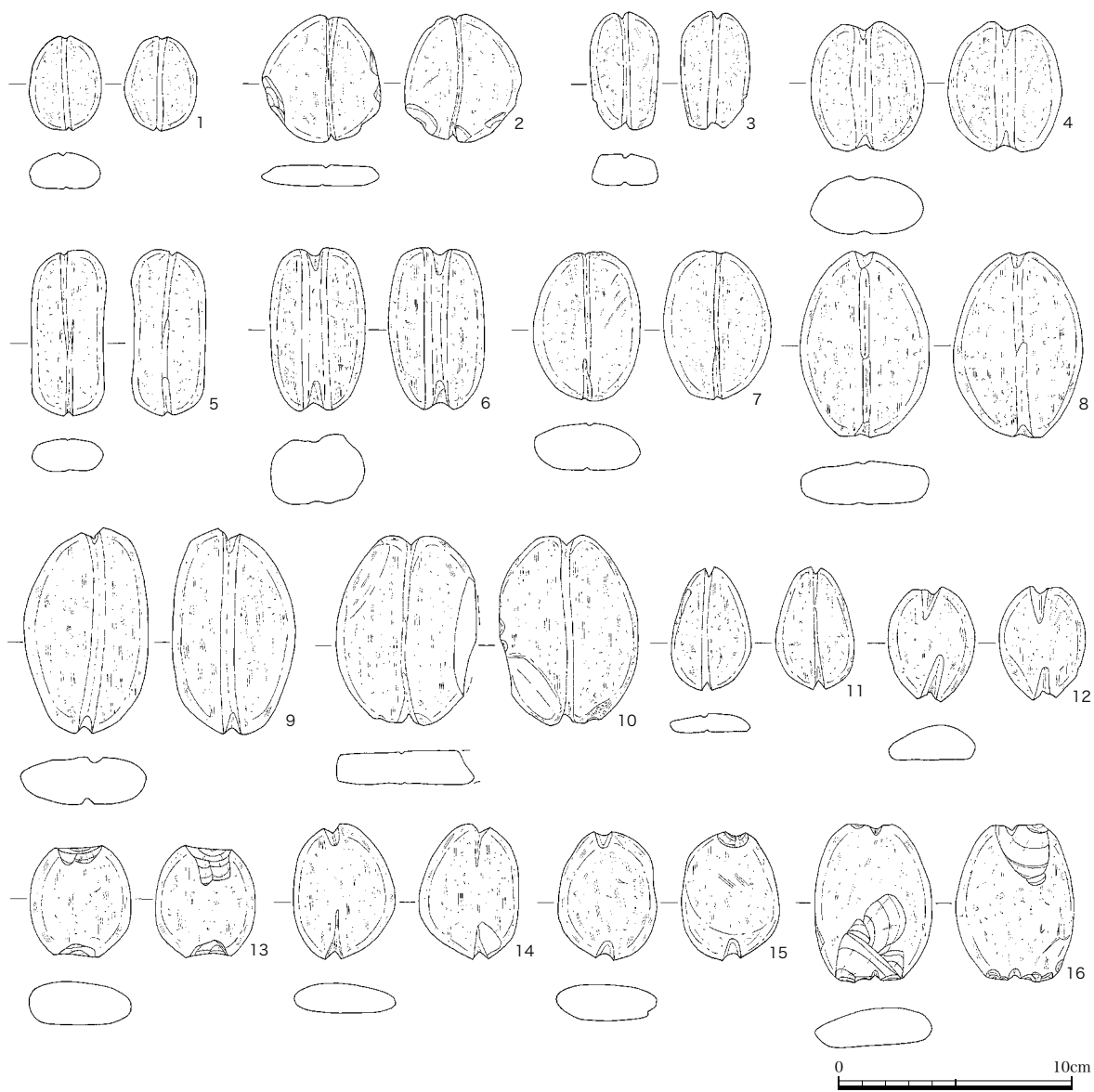
第279図 C区出土石器(12)



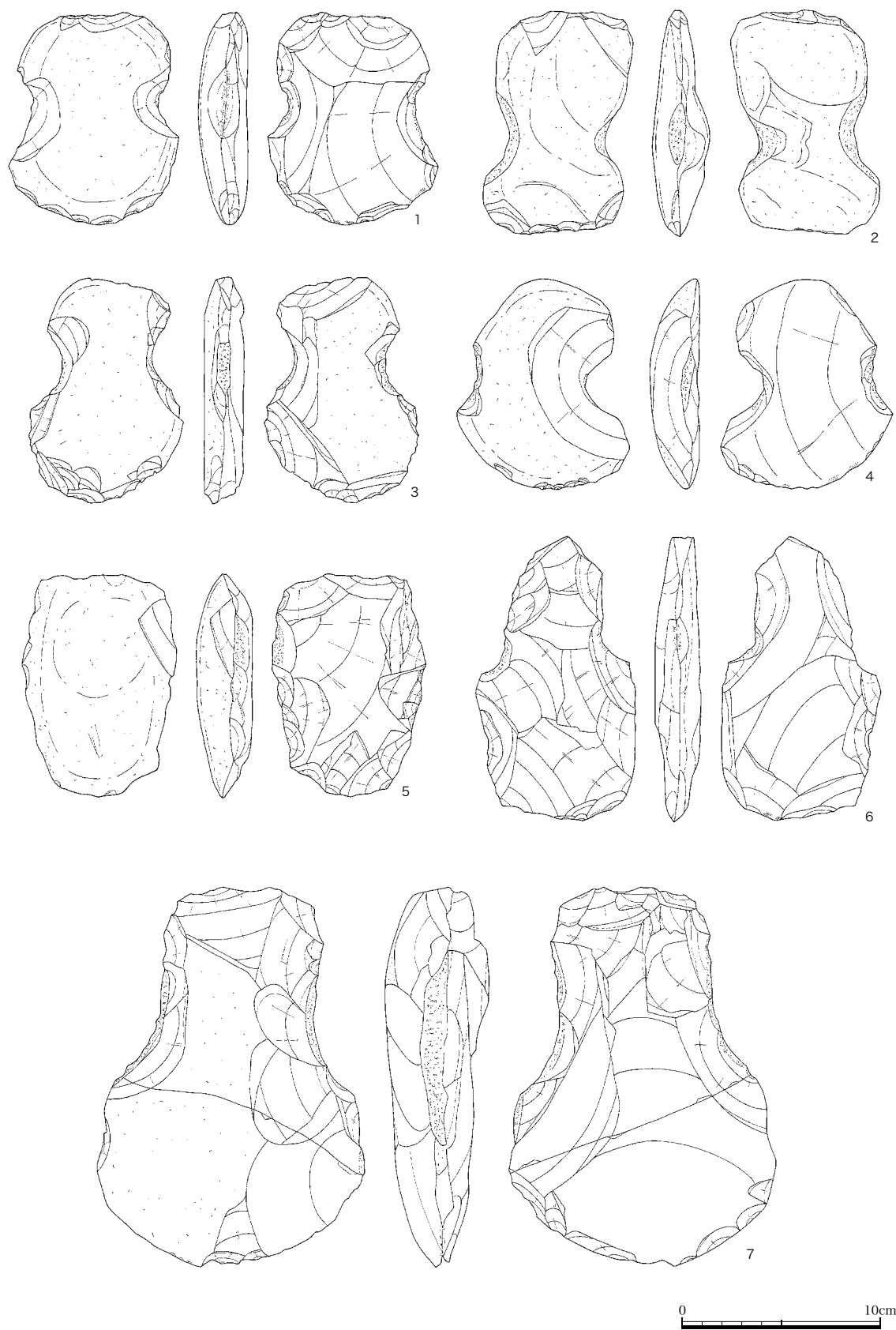
第280図 C区出土石器(13)



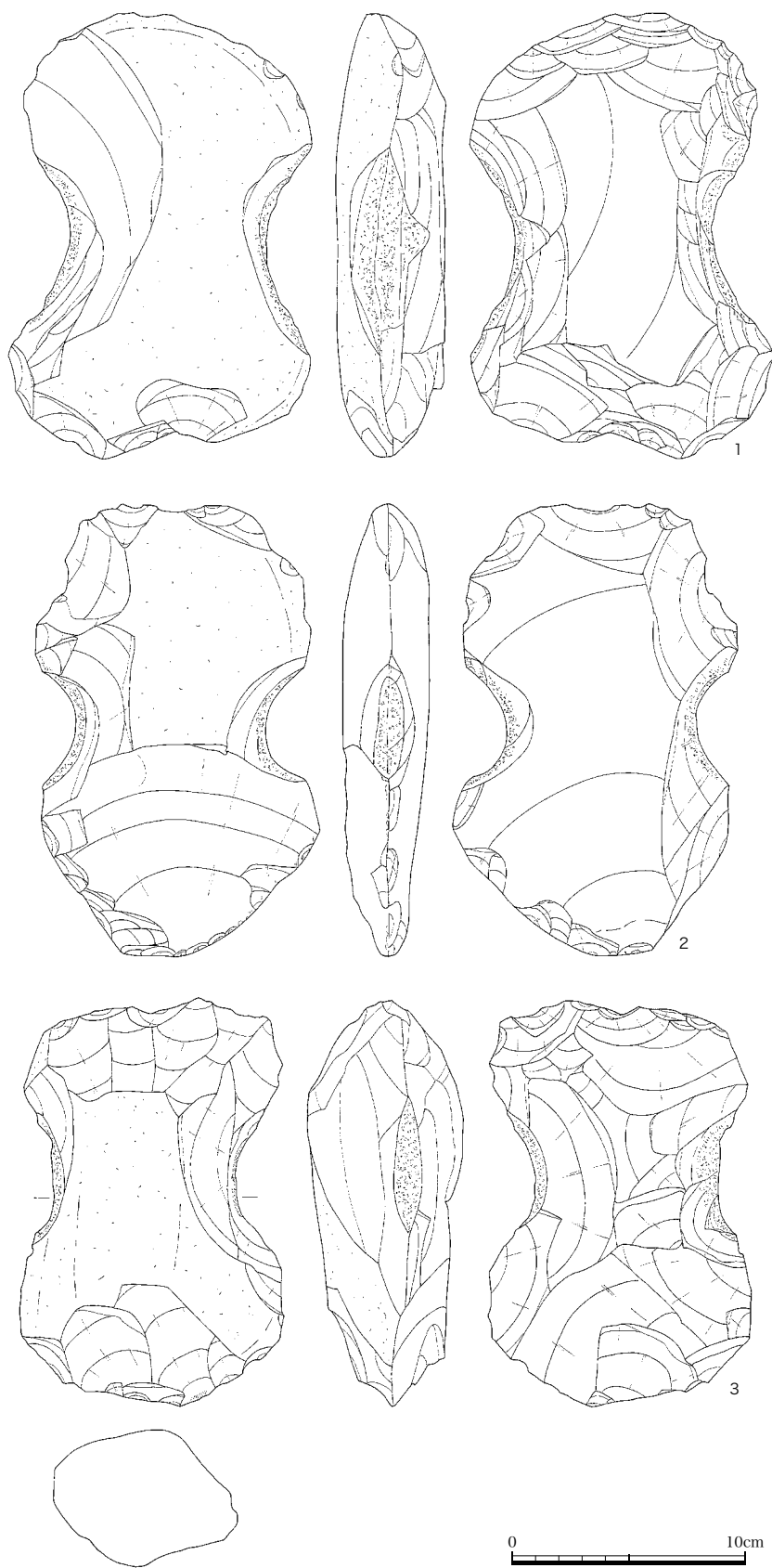
第281図 C区出土石器(14)



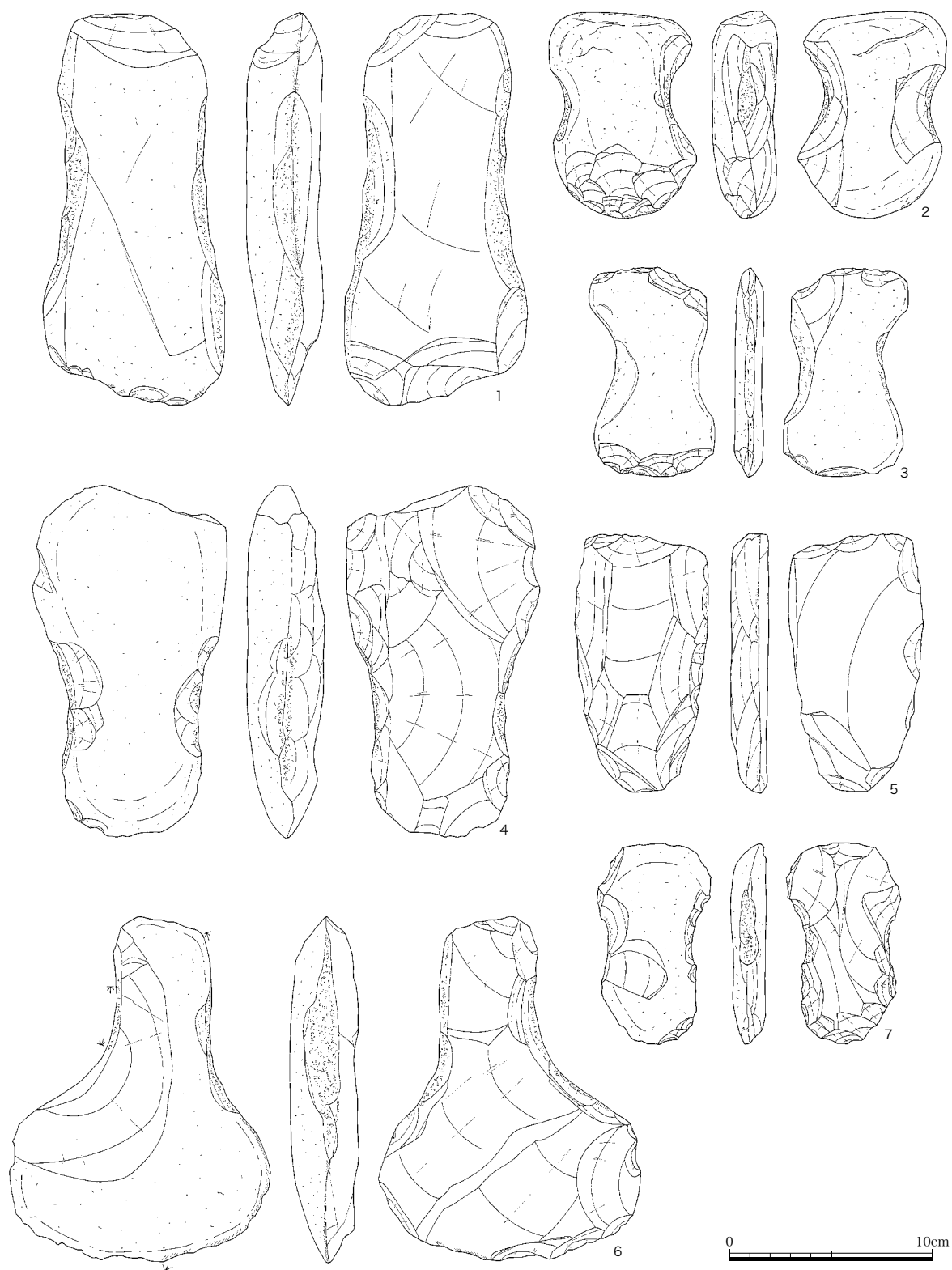
第282図 C区出土石器(15)



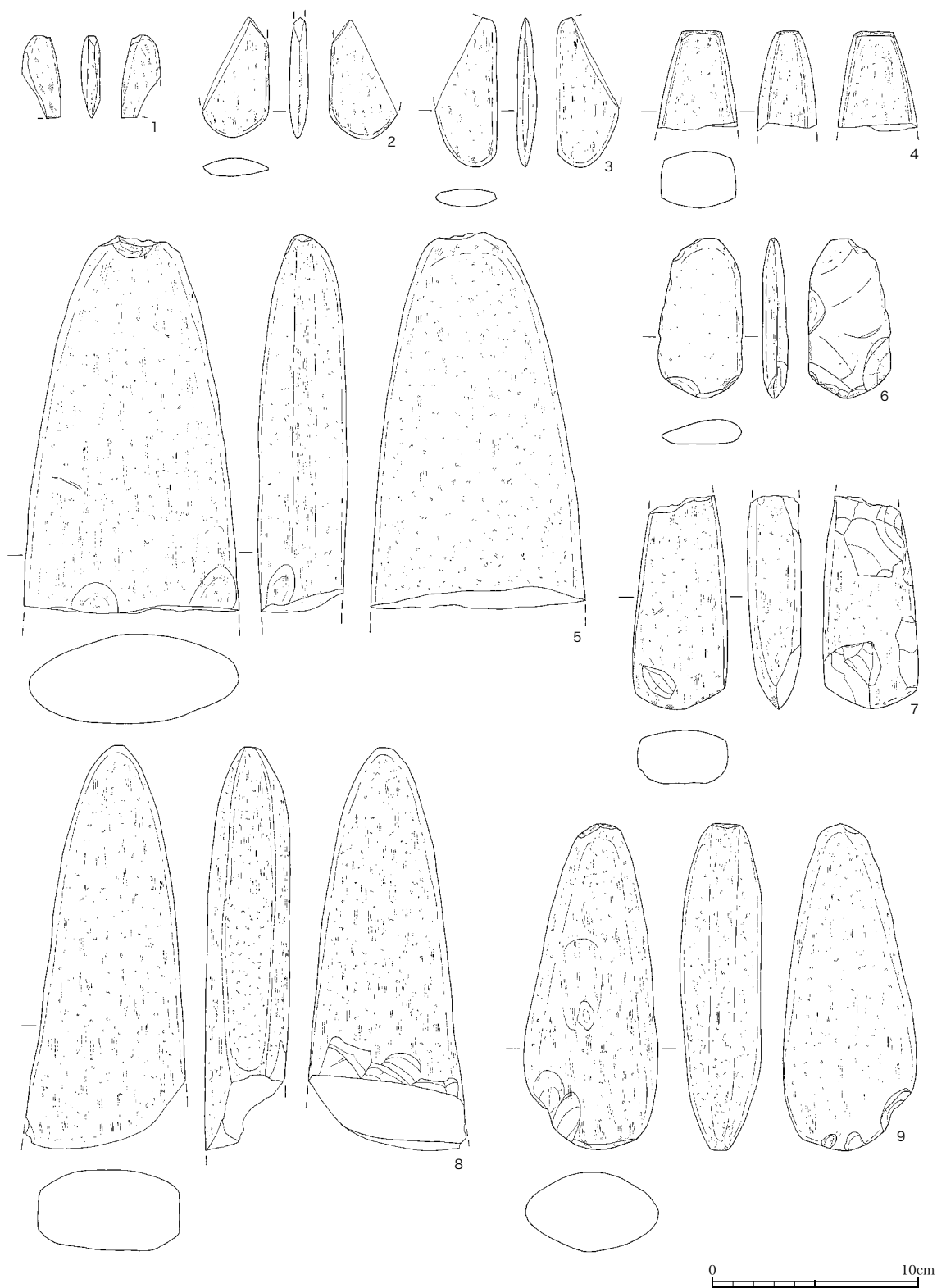
第283図 C区出土石器(16)



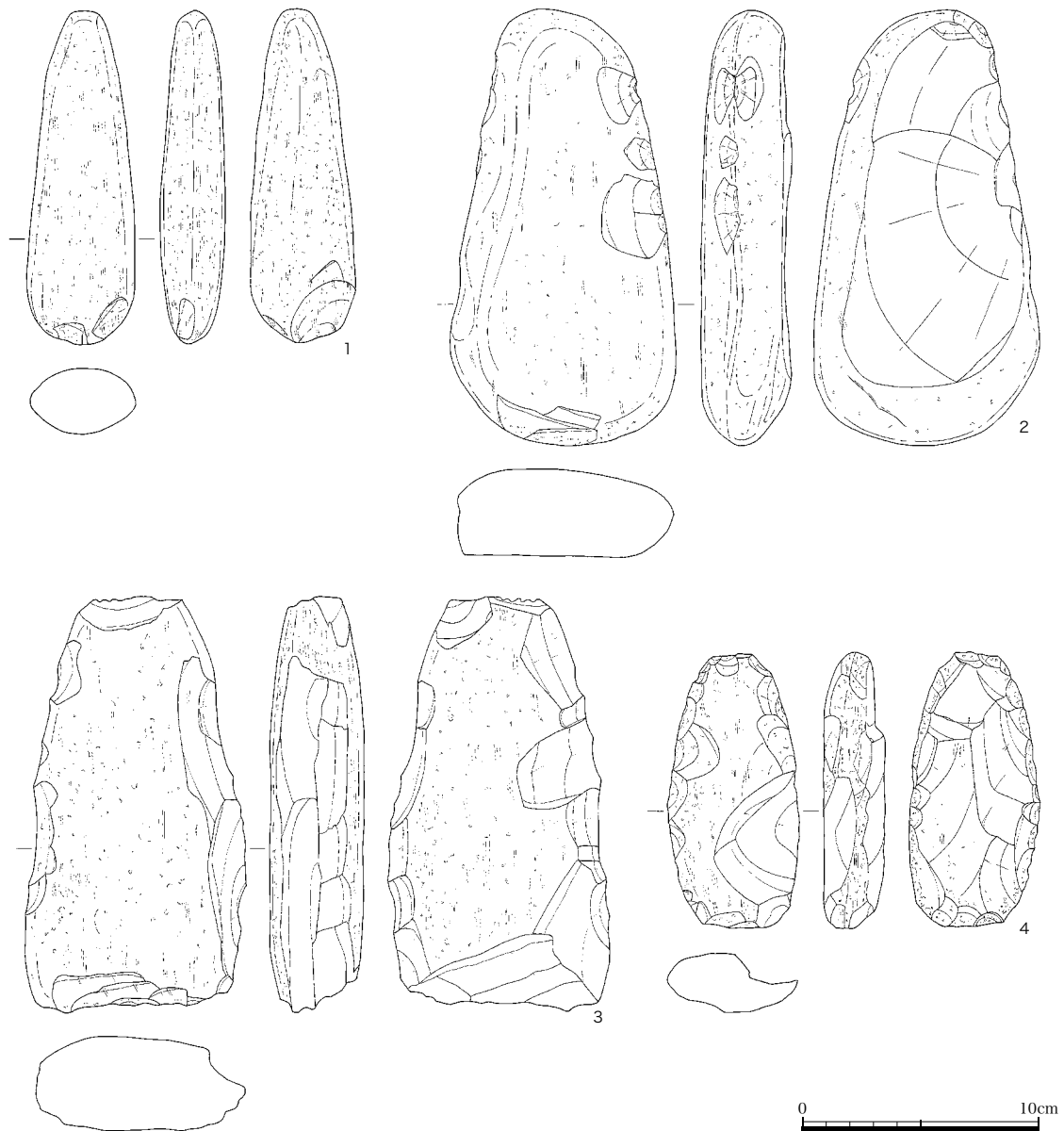
第284図 C区出土石器(17)



第285図 C区出土石器(18)



第286図 C区出土石器(19)



第287図 C区出土石器(20)

きい横長剥片素材で、下端縁辺を比較的丁寧に加工し、刃部を作出している。第281図1は第280図2～5と同種の剥片石器だがかなり大きめの頁岩製で下端に刃こぼれ状の使用痕がある。

第282図以下に礫石器を示す。第282図は石錘でB区では79点出土している。他の区と同様、有溝石錘が主体で、切り目、打ち欠きの「礫石錘」が少数となる。有溝の線は幅広の明瞭なものや細く浅いものがある。また形を整える磨痕があるもの(6等)とほぼ素材の礫のままのもの(1,2)とがある。

第283～285図が打製石斧でB区からは121点と多量に出土している内の一部を図化したに過ぎない。A区やC区と比べて突出した数であり、有意な事象かもしれない。形態としてはさほどA区と差異は無いように見えるが、整ったものがやや多い傾向にあるかもしれない。第283図1～4はやや小形で括れ部が明瞭なものである。6,7は撥形に近いもの、第284図の3点はやや大形で3は厚みもかなりある。天地逆或いは

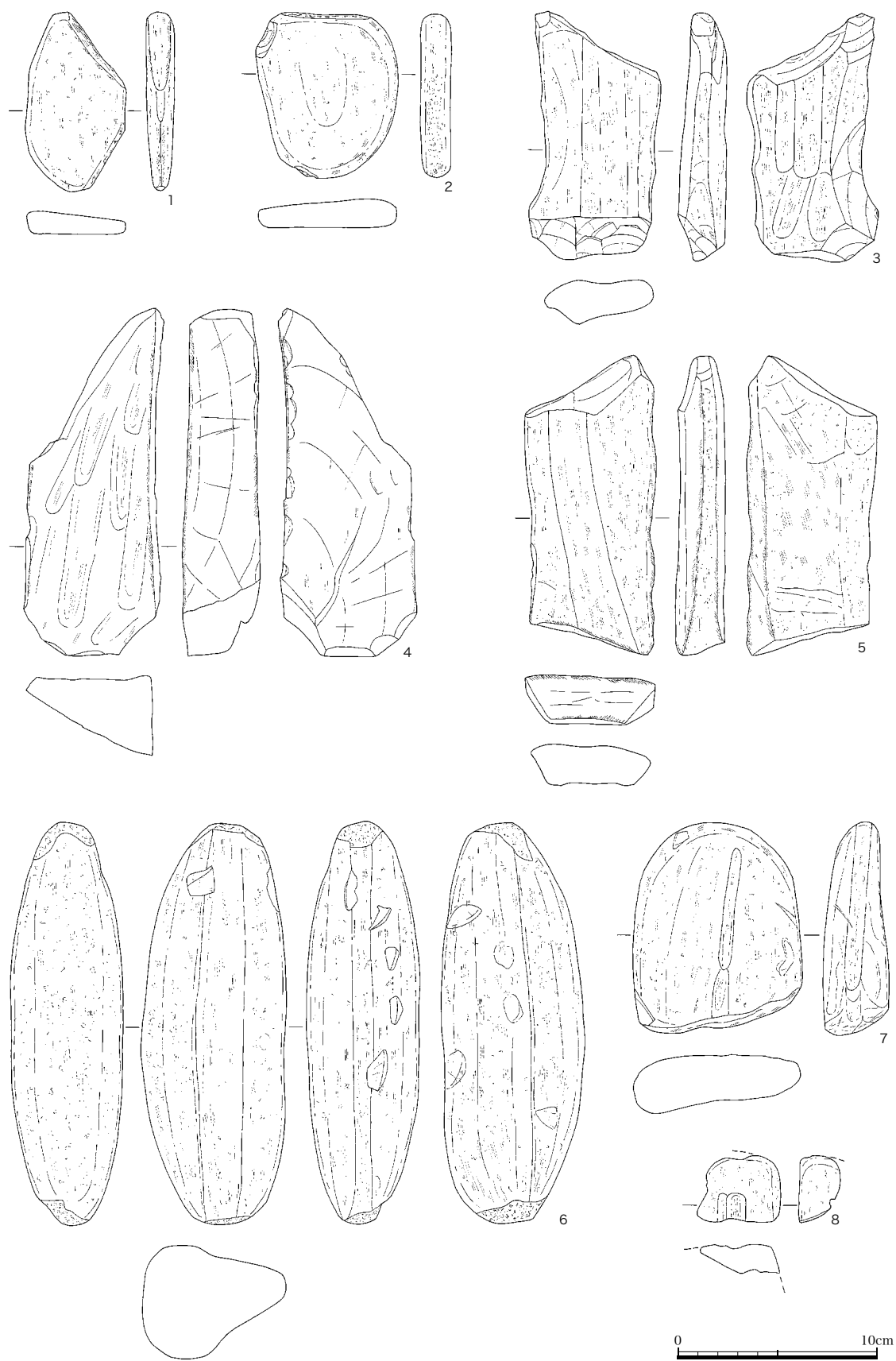


第288図 C区出土石器(21)

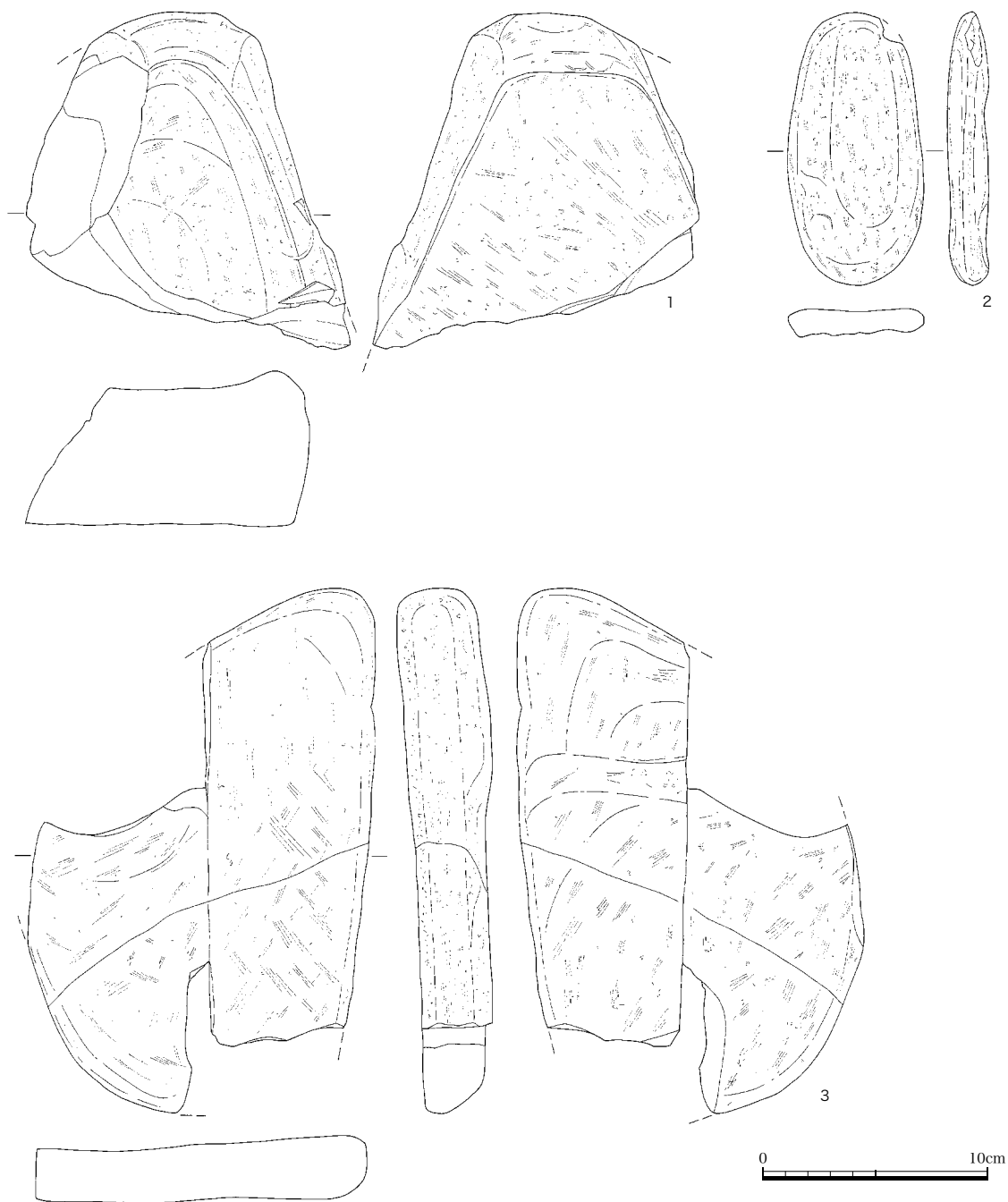
両端使用の可能性もあろうか。第285図にはやや異質なものを主に示す。1は側縁の広い範囲にわたって敲打痕が顕著に認められるものである。2,3はやや小形の例、4は刃部の作出加工が殆ど観られないもの、5は括れ部が無いもの、6,7も形態が一般的ではない例である。5は礫器やスクレイパー類との判断もあろうか。6は側縁の摩滅・擦れが顕著なもので、一般的な打製石斧とは異なる使用法を想起させる。

第286～287図にはB区出土の磨製石斧すべてを示す。一般的な形態ではない第286図3,8,9、第287図1～4等が目立っており検討が必要である。第287図2については刃部の作出は観られず、礫器や敲石とすべきかもしれない。第287図3,4は未製品と考えたもので、3は製作途中で放棄した可能性がある。

第288図は敲石である。B区全体では当初分類で91点の出土がある。2,3は小形棒状の例で端部の敲打集



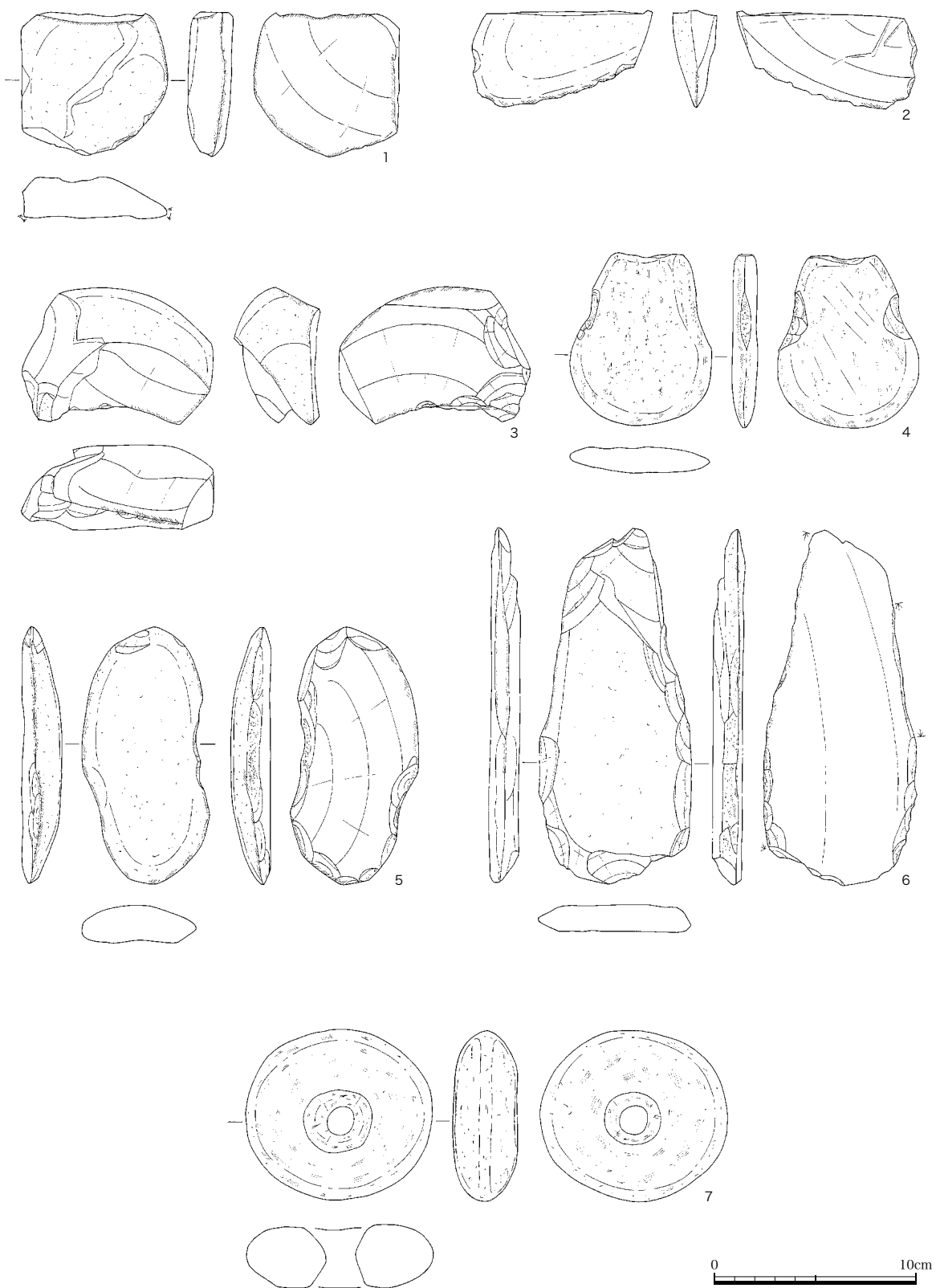
第289図 C区出土石器(22)



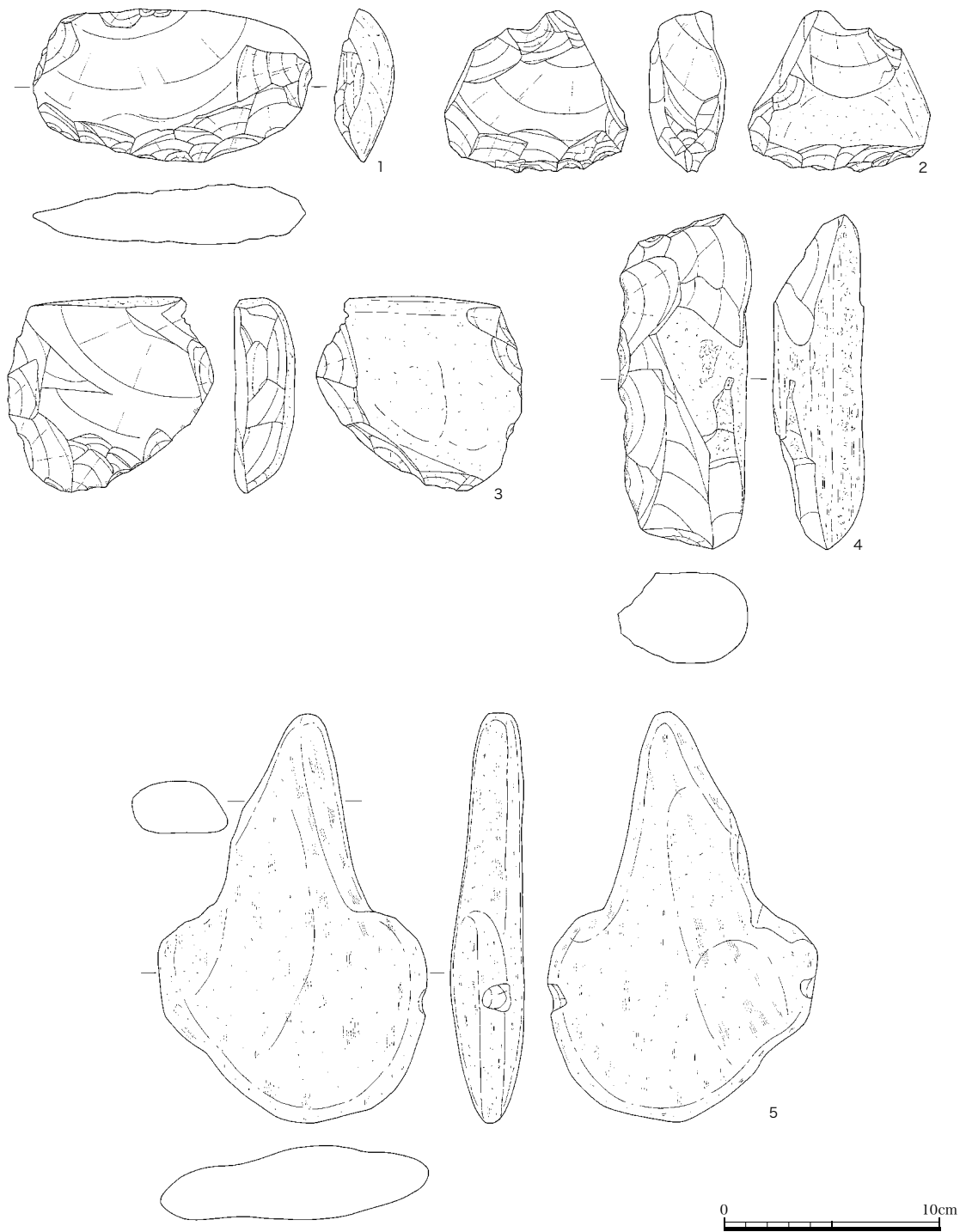
第290図 C区出土石器(23)

中が顕著である。2のように平面形下端が山形状の例も後晩期で目立つ形態である。7～9はやや広い表面部にも敲打痕が集中するものである。敲打時の剥離と敲打痕が複合的重複的な状態が観察される。10も特徴的な例で、顕著な敲打痕が側面にも及んでいる。

第289～290図は砥石である。第289図1,2は小形扁平のもの、同図3～5,7,8は带状の研磨痕がある「筋砥石」である。同図6は上下端部に敲打痕のある敲打兼用例で、断面三角形の二面で带状に窪む研磨部分が観察できるものである。一般の砥石とは石材も異なり機種判断も難しいがここに示した。第290図1,3は面



第291図 C区出土石器(24)



第292図 C区出土石器(25)

砥石で平坦な面が広く使われている。石皿類との区別も明確ではない。

第291図には摩滅・擦れの顕著な縁辺を有する「擦切具」を示した。当初分類では使用痕ある剥片や礫器などで分類しており、出土の実数は不明であるものの、少なくとも図示の2倍以上の数量は確認している。自然礫面を残すやや薄手の剥片素材例が多い。4は括れ部の位置に敲打痕があり打製石斧とも共通する要素があるが、下端は剥離加工が無く、磨製石斧にも近い鋭角な縁辺が作出され、ここに顕著な擦れ痕跡が確認される。6はやや大形扁平な例で、縁辺の剥離加工から打製石斧や礫器との判断もあろうが、擦れ・摩滅痕跡が著しい側縁の状態から擦切具としておく。7は「その他の不明石器」を便宜的にここに示す。中心孔があるので、孔部分の観察から意図的な穿孔と捉えた。磨石類と判断しても良いであろうが、側面の稜も比較的整っており、意図的な整形の可能性もあろう。

第292図には礫器を示す。やや粗いものの両面二次加工がある2はスクレイパー類とした方が良いかもしれない。4もやや異質なもので、棒状～短冊状の礫端部や側縁に若干の二次加工がある。5は礫器ではなく「その他の不明石器」である。第291図7と同じ扱いで、普遍性・定型性が無く機種分類不能なものだが、磨痕などの人為加工痕跡が認められるものである。かなり不整形形態であるが表裏面や側面に磨痕が認められ、石皿類とすることもできようか。

第4表 C区遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	特徴・軸	遺物種別数量	遺構図版	遺物図版	写真図版
T6P1	20	20	21			195		
T6P2	38	32	24			195		
T6P3	53	38	8			195		
T6P4	42		8			195		
T6P5	46		9			195		
T6P6	42	34	19			195		
T6P7	32	26	17			195		
S106			ku		石鏃2、石錐2、剥片石器1、礫器3、磨石18、敲石1、石皿類5、ChCo6、Fl23	195	196	18,19
S106P1	36	32	22			195	196	18,19
S106P2・P3	48	38	30			195	196	18,19
S106P4・P5	64	47	20			195	196	18,19
S106P7	68	62	17			195	196	18,19
S106P8	80	64	8			195	196	18,19
S106P9	28		7			195	196	18,19
S106P10	28	26	13			195		18,19
S106P11	24	22	8			195		18,19
S106掘り方	158	116	23			195		18,19
S104	125	112	31		石鏃1、剥片石器1、磨石2、ChCo3、Fl21	224	223	
S105	33	28	32		105・107：磨石2	218		
S107	40	38	27			218		
S108	296	190	27	N-13° -E	石鏃5、剥片石器3、打斧2、礫器3、砥石2、磨石15、敲き石1、ChCo10、Fl51	214	216	23
S109	34	30	17		磨石1	224		
S110	37	25	6			215		
S111	31	27	17			224		
S112	127	58	6		磨石1、石皿類1	215	210	
S113	101	86	18		石鏃1、磨石1、ChFl7	214	217	23
S114	35	34	22		磨石1、ChFl1	224	223	
S115	27		22			224		
S116	30	25	9		剥片石器1	224		
SK117	66	62	15		磨石1、ChFl2	211	223	23
SK118	335	250	54	N-15° -E	Sc1、剥片石器3、磨石44、敲石1、石皿類2、ChCo65、Fl51	211	212	
S119	105	70	17			219	223	
S119ビット	42	35	27			219		
S120	110	110			磨石3、石皿類2、Ch原石2、Fl33	206,207	210	24
S121	2600	1600			打斧1、礫器1、磨石37、敲石1、石皿類1、ChCo151、Fl4	211,213	223	24
S121a	145	60		N-40° -E		211,213		
S122b	75	57		N-80° -E		211,213		
S123c	75	75				211,213		
S123	83	78	29			219		
S124	84	47	20	N-19° -W		221		
S125	163	104	9	N-10° -W		221		

第4節 C区の遺構と遺物

遺構名	長軸	短軸	深さ	特徴・軸	遺物種別数量	遺構図版	遺物図版	写真図版
S126	80	73	12			206	210	
S128	104	93	19		磨石 2、石皿類 1、ChFl4	211	223	25
S129	142	110	18	N-4° -E	ChFl5	211		24
S130		25	26			211		
S131	54	44	53			211		
S132	137	104	36	N-11° -W	Sc1、剥片石器 1、砥石 1、磨石 2、石皿類 1、ChFl11	211		23
S134				遺構図無し	磨石 1、ChFl3			
S135	30		15	N-68° -W		206,208	205	23
S136	45	45	24		磨石 1、ChFl1	209	205	23
S137	134	98	25		剥片石器 1、砥石 1、磨石 8、ChFl6	195	210	
S139	62	48	34		石鏃 2、石錘 2	195,197		
S140	29		14			211		
S141	44		26			202		
S142	118	80	24	N-13° -E		220	223	25
S142 ビット	31	24	14			220		
S143b	7250	7460	17	N-5° -W	石鏃 3、剥片石器 1、礫器 1、砥石 2、石錘 2、磨石 14、敲石 3、石皿類 1、ChCo29、Fl50	197	199~201	19,21
S143bP1	138	108	27			197		
S143bP2	118	77	9			197		
S143bP3	34	35	47			197		
S143bP4	30	27	32			197		
S143bP5	27	26	4			197		
S143bP6	28	26	5			197		
S143bP7	76	61	6			197		
S143bP8	18		5			197		
S143bP9	12		3			197		
S143bP10	17		6			197		
S143bP11	15		4			197		
S143bP12	20	13	5			197		
S143bP13	31	16	4			197		
S143bP14	24	21	7			197		
S143bP15	21		17			197		
S143bP16	68	20	4			197		
S143bP17	22	16	4			197		
S143bP18	84	31	4			197		
S143bP19	29	24	3			197		
S143bP20	16	12	5			197		
S143bP21	29	25	35			197		
S143bP22	36	21	20			197		
S143bP23	52		(30)			197		
S143bP25				遺構図無し	ChFl2		200	
S143bP26				遺構図無し	ChFl1		200	
S143bP28				遺構図無し	石鏃 1		200	
S143bP40							200	
周溝 A	244	33	20			197		
S144	34	25	30		剥片石器 1	195		
S145	130	42	21			197		
S147	9200	2560	29	N-46° -E	石鏃 2、剥片石器 3、礫器 2、石錘 1、磨石 60、敲石 1、石皿類 8、ChCo15、Fl56	202	203,204	21,22
S147P1	23		17			202		
S147P2	19		9			202		
S147P3	36	34	12		磨石 1	202		
S147P4	34	32	22		石皿類 1、ChFl1	202		
S147P5	78	64	19			202		
S147P6	54		13			202		
S147P7	50	29	13			202		
S147P8	41	35	9			202		
S147P9	56	43	12			202		
S147P10	49	41	17			202		
S147P11	48	45	10			202		
S147P12	24		16			202		
S147P13	32	25	6			202		
S147P14	75	72	18			202		
S147P15	25	22	7			202		
S147a,153					磨石 2、ChFl8	202		
S150	62	41	14	N-60° -W	ChFl2	206	210	
S151	26		14			206	210	
S151b	160	128	44	N-1° -E	剥片石器 1、磨石 3	206		25
S152	140	36	7		ChFl2	202	210	
S157	32	28	26			195,197		
S158	64	44	9			195,197		
S159	128	94	23		ChFl6	222	210	25
S160	42	34	14			?		
S206				遺構図無し			223	

第3章 西地区の遺構と遺物

遺構名	長軸	短軸	深さ	特徴・軸	遺物種別数量	遺構図版	遺物図版	写真図版
S212				遺構図無し	Sc1、剥片石器 3、磨石 8、石皿類 2、ChF11			
SD101	695	84	19	N-66° -W		225	227	17
SD102	1300	92	34	N-65° -W		225	227	17
SD102 直交溝	295	36	10			225		
同上南側	120	30	10					
SD103	350	34	16	N-0°		226	227	17

第5表 西地区トレンチ遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	軸など	遺構図版	遺物図版	写真図版
T1 拡張区					11		36
SX1					11	12	36
SX2					11	12	36
SX3					11	12	36
T3 拡張区					9		
P1	53	46	7		9		
P2	36	18	10		9		
P3	48	38	16		9		
P4	26	17	10		9		
P5	40	25	30		9		
P6	36	34	11		9		
P7	55	53	90		9		
P8	35	33	22		9		
T4 拡張区					10		
SX1	270	133		N-85° -W	10		37
P1	25		19		10		
P2	23		24		10		
P3	23		18		10		
P4	37		11		10		
P5	33		25		10		
P6	26		9		10		
P7	21	17	14		10		
P8							



C区全景（西から）



C区東側調査状況（西から）



S118・121（北東から）

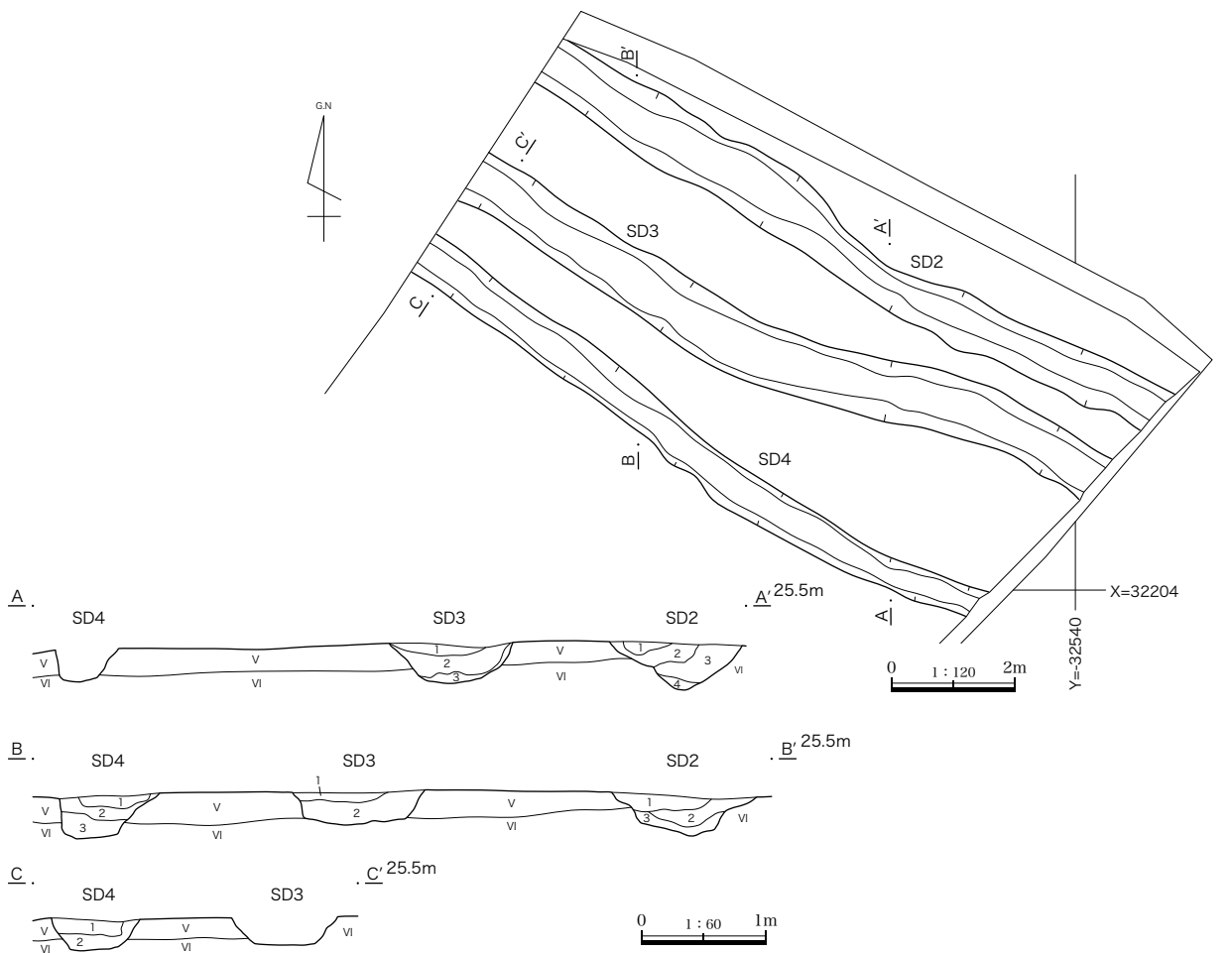


Eイ 24-13 有孔土製円盤出土状況（南東から）

第5節 D・E 区の遺構と遺物

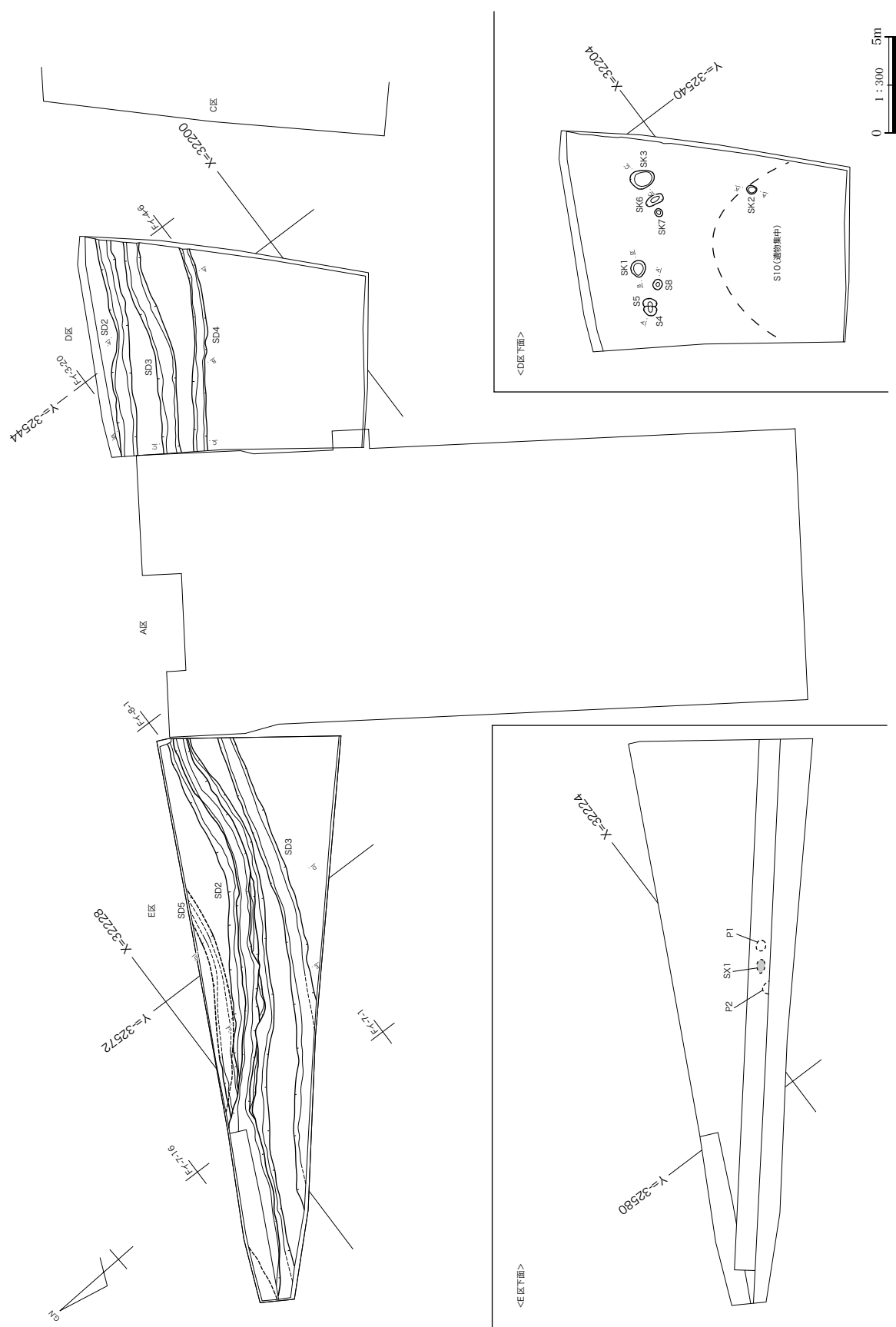
概要

D・E区は調査期間の終了近くに調査を行ったところで、V層包含層の調査途中で終了せざるを得なかった地区である。V層上面まで重機による掘り下げを行い、上位面での遺構確認・調査を行った。ここでは、A区やE区と同様、南東-北西方向の溝が3条確認され、この調査を行った。その後、V層上位の包含層掘り下げを人力で行い、V層中位における精査で幾つかの土坑・ピットが確認された。遺構の形態や分布は第294図に示した通りで、いずれも深さ20～30cmの浅い遺構である。この後V層下位～VI層包含層の調査を行う予定であったが、調査期間終了となり下位の調査を断念している。最終段階でS1～S7の「地山」に相当する部分で多くの遺物が確認されており、特に集中していた南側の部分をS10として一部の掘り下げを行っている。これら下位の遺構について、詳細な記述は行わず、規模などは計測表に譲ることとする。

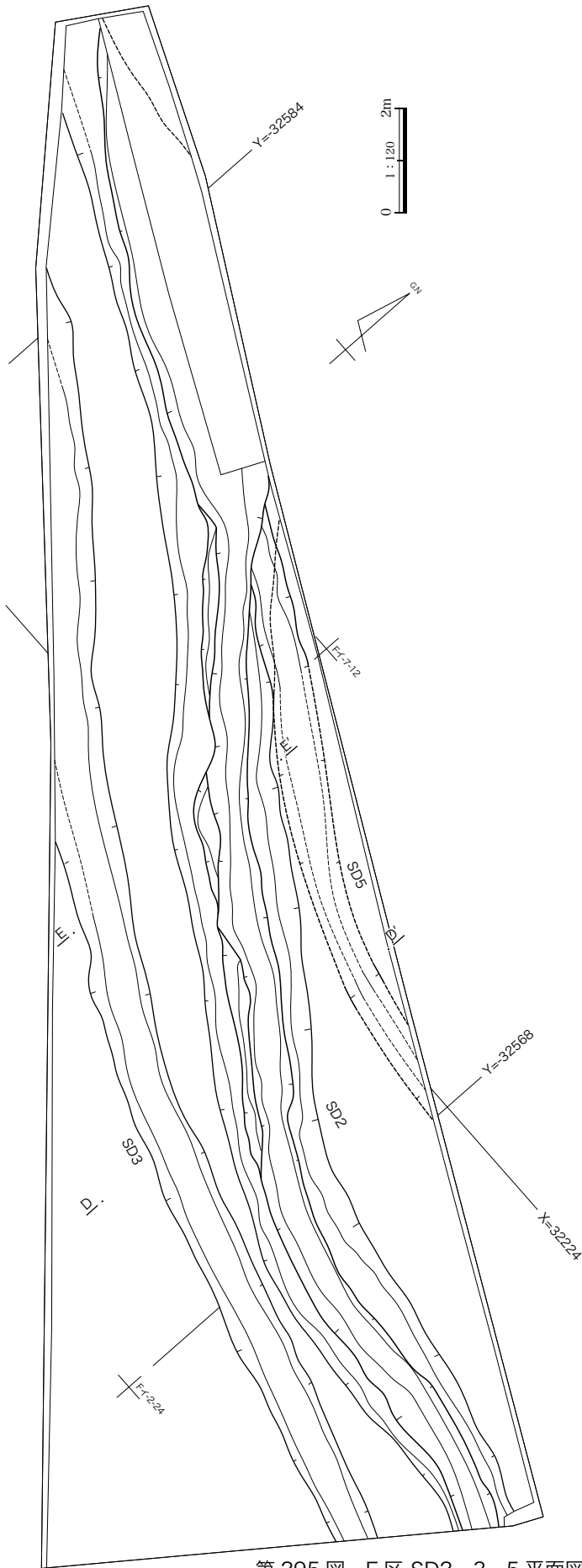


- | | |
|--|---|
| <p>SD2 土層説明</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰褐色土 灰褐色粘質土主体。白色粒、炭化物微量。しまりやや強い。 2. 黒褐色土 V層主体。黄色粘質土ブロックやや多い。白色粒微量。しまり強い。 3. 黄褐色土 黄色粘質土主体。粘性強い。 3b. 灰褐色土 灰褐色粘質土と黄色粘質土の泥土層。しまりやや強い。 4. 灰褐色土 灰褐色粘質土主体。砂粒と互層になる。しまりやや強い。 4b. 灰褐色土 4層と類似するが砂粒が少ない。しまりやや強い。 4c. 暗灰褐色土 4層と類似するが砂粒がやや多い（V層ブロック少量含む）。しまりやや強い。 5. 暗灰褐色土 1層と類似するがV層ブロックを多く含む。しまりやや強い。 | <p>SD3</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰褐色土 砂質土粒子と灰褐色土が互層になる。黒色土（V層）少量含む。しまりやや強い。 1b. 灰褐色土 褐色砂質土主体。しまりやや強い。 1c. 暗褐色土 黒色土ブロック（V層）少量含む。しまりやや強い。 <p>SD4</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰褐色土 灰褐色粘質土主体。しまりやや強い。 2. 黄褐色土 黄褐色砂質土を多く含む。しまりやや強い。 3. 灰褐色土 V層ブロック粒子を含む。しまりやや強い。 |
|--|---|

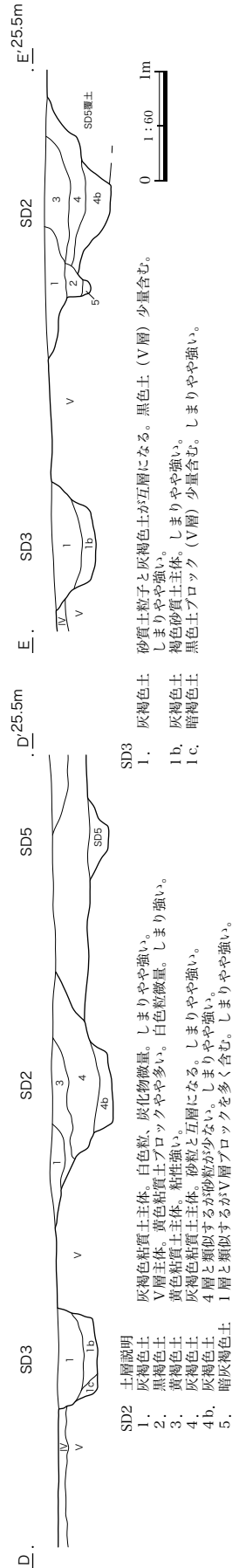
第293図 D区 SD2・3・4平面図・断面図



第294図 D・E区全体図



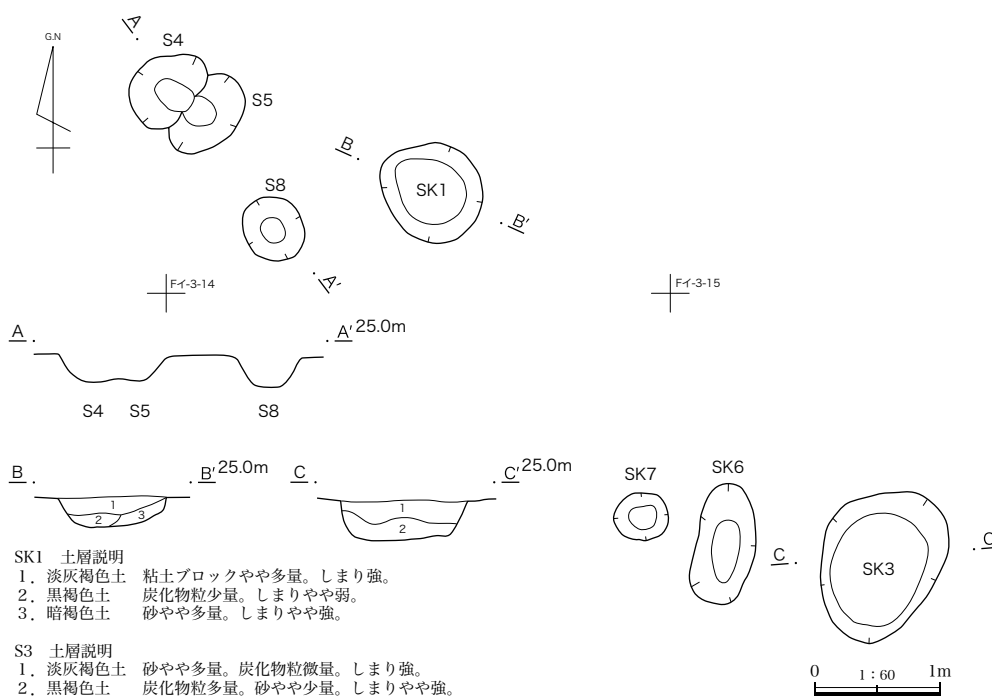
第 295 図 E 区 SD2・3・5 平面図・断面図



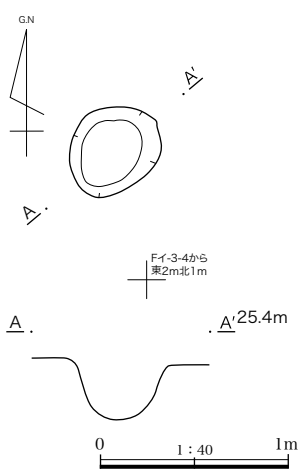
SD3
 1. 灰褐色土
 砂質土粒子と灰褐色土が互層になる。黒色土 (V層) 少量含む。しまりやや強い。
 1b. 灰褐色土
 褐色砂質土主体。しまりやや強い。
 1c. 暗褐色土
 黒色土ブロック (V層) 少量含む。しまりやや強い。

SD2
 1. 灰褐色土
 灰褐色粘質土主体。白色粒、炭化物微量。しまりやや強い。
 2. 黒褐色土
 V層主体。黄色粘質土ブロックやや多い。白色粒微量。しまり強い。
 3. 黄褐色土
 黄色粘質土主体。粘性強い。
 4. 灰褐色土
 灰褐色粘質土主体。砂粒と互層になる。しまりやや強い。
 4b. 灰褐色土
 4層と類似するが砂粒が少ない。しまりやや強い。
 5. 暗灰褐色土
 1層と類似するがV層ブロックを多く含む。しまりやや強い。

土層説明



第296図 D区 SK1・3・6・7・S4・5・8 平面図・断面図



第297図 D区 SK2 平面図・断面図

上位の遺構である溝は、SD2～SD4の3条である。幅は50cm程度～110cm程度で、SD2、4は概ね平行する。この中間にあるSD3はやや蛇行しているが、このD区内では他の2条の溝とは重複していない。溝の断面は皿状～逆台形状で、底面はやや凹凸がある。覆土は1～4層程度に分層され、基本土層IV層やV層に近い土が含まれている。A区等と同様、FAと想定される白色粒を含んでいるが、この調査区ではあまり顕著ではないようである。

E区の溝SD2・3・5（第295図、写真図版二九）

V層上面まで重機による掘り下げを行っており、平面的なプラン確認はV層ほぼ上面で行っている。土層断面の記録にも示したように、SD3がIV層を切ることは確認されている。他の2条の溝についても調査区壁面の観察等から、V層のみならず、IV層も切っていると捉えられている。3条の溝は概ね同方向で、特にSD2と3は概ね平行し重複しない。重複するSD5と2の関係については、SD2の方が新しい。またSD2は平断面での確認記録いずれもここでは2条の溝（掘り返し？）と捉えられ、E-E'ラインの断面では北側の方が新しいと判断されている。この北側部分の幅のみ計測すれば120～230cmとなる。或いは微妙な分層ラインや平面形態から、更なる重複・掘り返しを考えた方が良いかもしれない。

SD3はA区でのワ0SD2、SD2はA区でのワ0SD1に繋がり、更にD区、C区の溝へと連続する一連の溝と推定される。

E区下位の調査

E区でも上位遺構である溝調査後、V層包含層の調査を行った。一部ではVI層近くまで達したが、殆どの部分がV層中位までの調査となり、より下位の調査は断念せざるを得なかった。調査最終盤で、より下位の状況を確認するため、重機によるトレンチ調査を実施した。第294図下段の全体図に示した2本で、遺物の密な包含状態と、VI層上～中位で遺構を確認した。立会調査に近い状況であり、詳細な調査や記録はとり得なかったが、2基のピットと焼土跡を確認し、ピットについては一部掘り下げて深さを確認した。これらの平面的な位置や形態については、通常の記録化は行い得なかったので、全体図にのみ示す。

D・E区出土土器（第298～349図）

D・E区出土の縄紋土器については、VI層より下位について殆ど調査しておらず、多くがV層及びVI層上位からの出土である。調査時に細かい出土位置の記録を殆どとっていないが、層中からまんべんなく出土している。大形破片や復元個体に近い個体の出土も少数あるものの、他の地点に比べると少ないと言えるかもしれない。D・E区については、整理時の比較的早い段階で着手したこともあり、一般的普遍的な文様の土器や粗製土器・無文土器なども含め比較的小さな破片まで図化し、土器様相を把握できるよう努めた。それでもなお接合などが不十分な点は否めず、とりわけグリッド間の接合を行っていないことから、同一個体が別挿図に跨って配列されている場合も幾つか生じている。全体的に晩期前葉から中葉の資料が多く、その点では隣接するA区とさほど変わらない様相と言える。A～C区での提示と同様、細かい分類や詳細な観察結果の提示は行い得ず、注意すべき資料例の確認と概略の記述とする。

Fイ3-3グリッドでは第299図27の小形鉢？、第300図25,26、同図42の土器などが注目される。第300図26例は針先状の細かい刺突が充填されているもので、瘤の貼付位置なども晩期前半安行系からの変化を窺うことができる。接合合成図は作り得なかったが、第303図35の土器はA区出土の第50図1の右側下方と接合することが判明している。大洞C2式では中段階の資料が目立つ（第304図6など）。

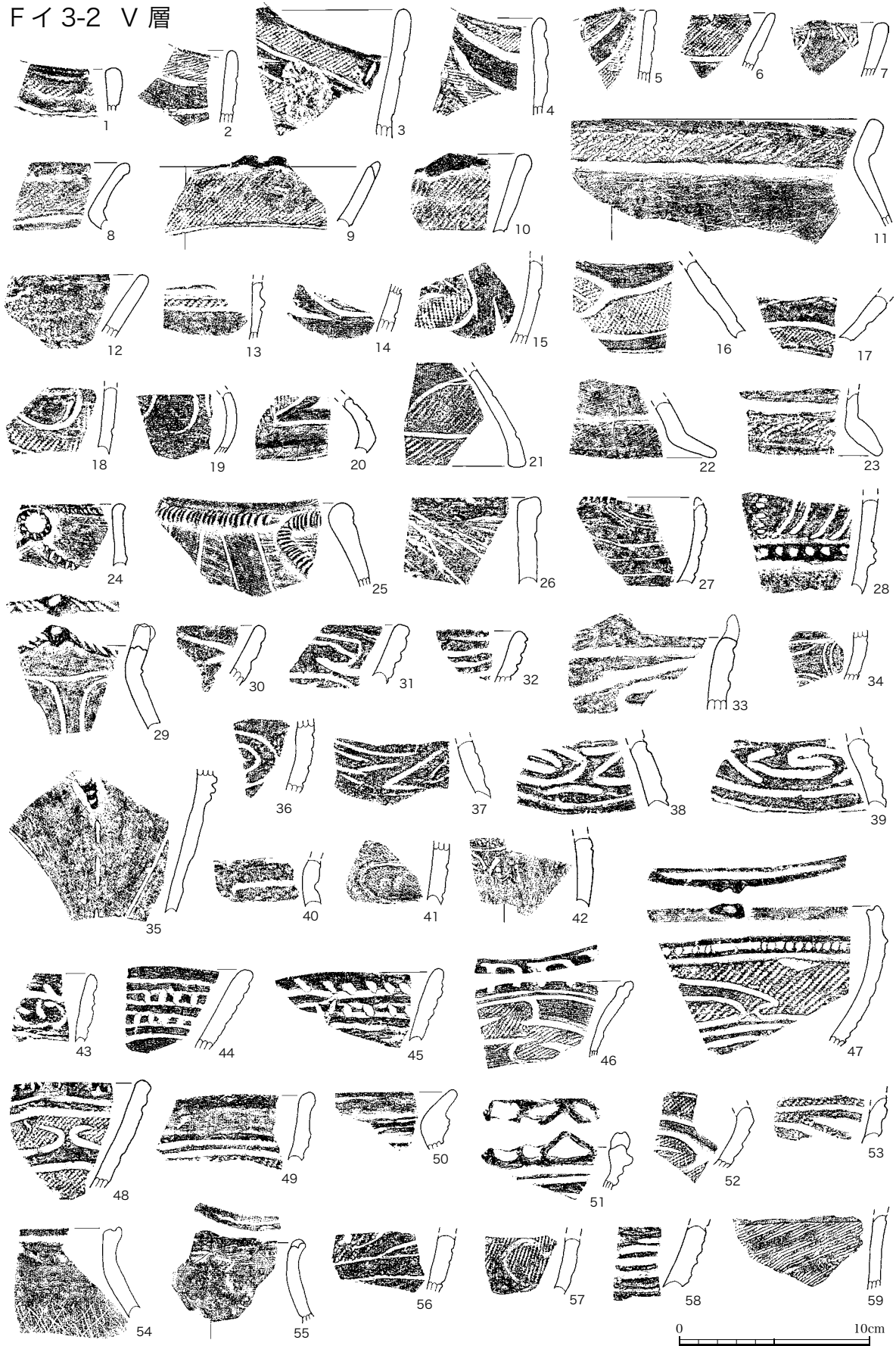
Fイ3-7グリッドでは第306図6、同図15の資料が注目される。後者は大洞A1式と推定され、本遺跡出土縄紋土器の中でも概ね最新の時期となるものであろう。幅広の沈線と体部の細かい擦系紋が特徴的である。Fイ3-8グリッドでは安行3b式あたりの資料及び安行3d式・大洞C2式資料が目立つ。第308図40は対向弧線文内に細かい円形刺突が充填されているもので、口端の刺突列も含め注目される。第309図1,2の沈線は比較的細い沈線で硬質な感を受ける施文手法である。第310図には大洞系を主に示したが、大洞A1式期にかかる資料も含まれている。

Fイ3-10グリッド出土の第313図24は菱形区画＋三角形区画の連続配置内に入組三叉文が充填されるもので、沈線幅不定などやや雑な施文だが三叉部分の抉り込みは比較的深く、安行3d式の手法に近い様相が窺える。第319～320図に示したS10は明瞭な掘り込みのある遺構ではなく、一定範囲の便宜的な遺物集中部に対して付した遺構名であるが、一定範囲の一定レベル（同一層位）における状態を示しているとも言える。若干の時期幅はあるものの、安行3b式を中心としたまとまりと捉えることもでき注目されよう。第322図にはD区全体のV層中から出土した（或いは小グリッド不明な）もので、形態の分かる無文土器大形破片なども出土しており、粗製土器の様相を考える上での参考となろう。

E区出土土器は、出土状況も含めD区と大きな様相の違いは認められない。大形破片は一定数あるが、完形や遺存率の高い復元個体は殆ど観られない。土器の組成・型式別の割合についても、A区やD区と変わらないように見えるが、大洞C2式及び平行期以降のものがやや少なくなる傾向があるかもしれない。

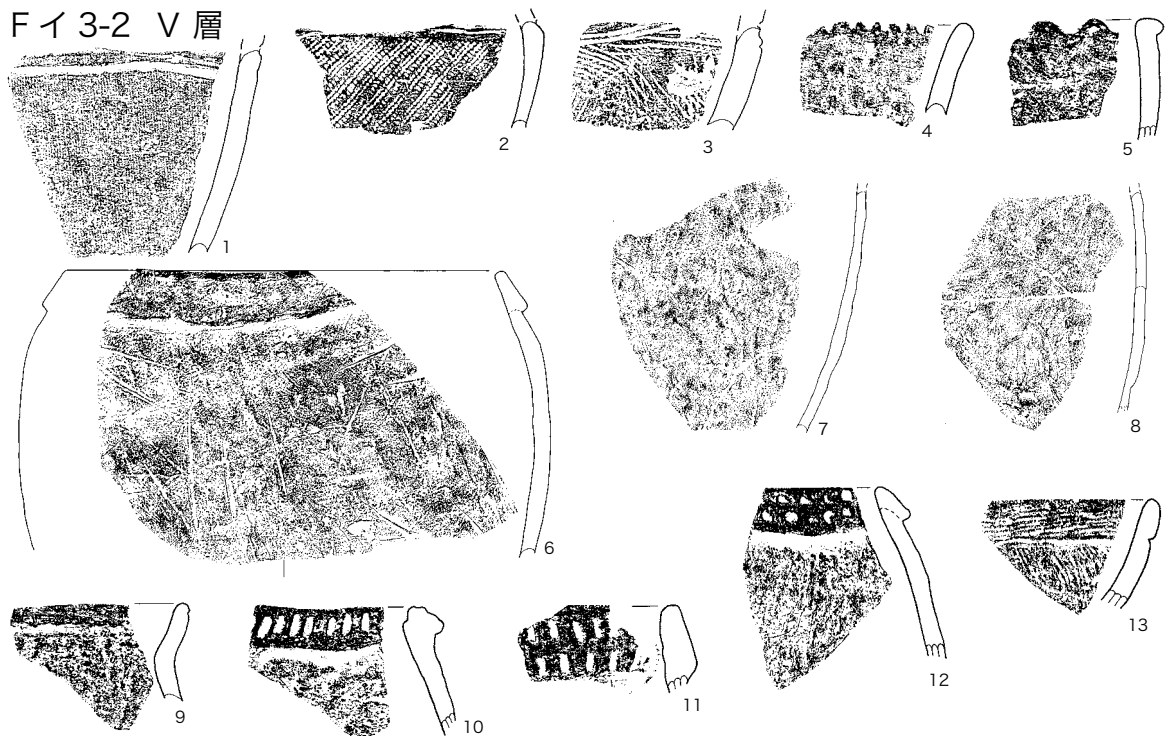
(→ P325)

Fイ3-2 V層

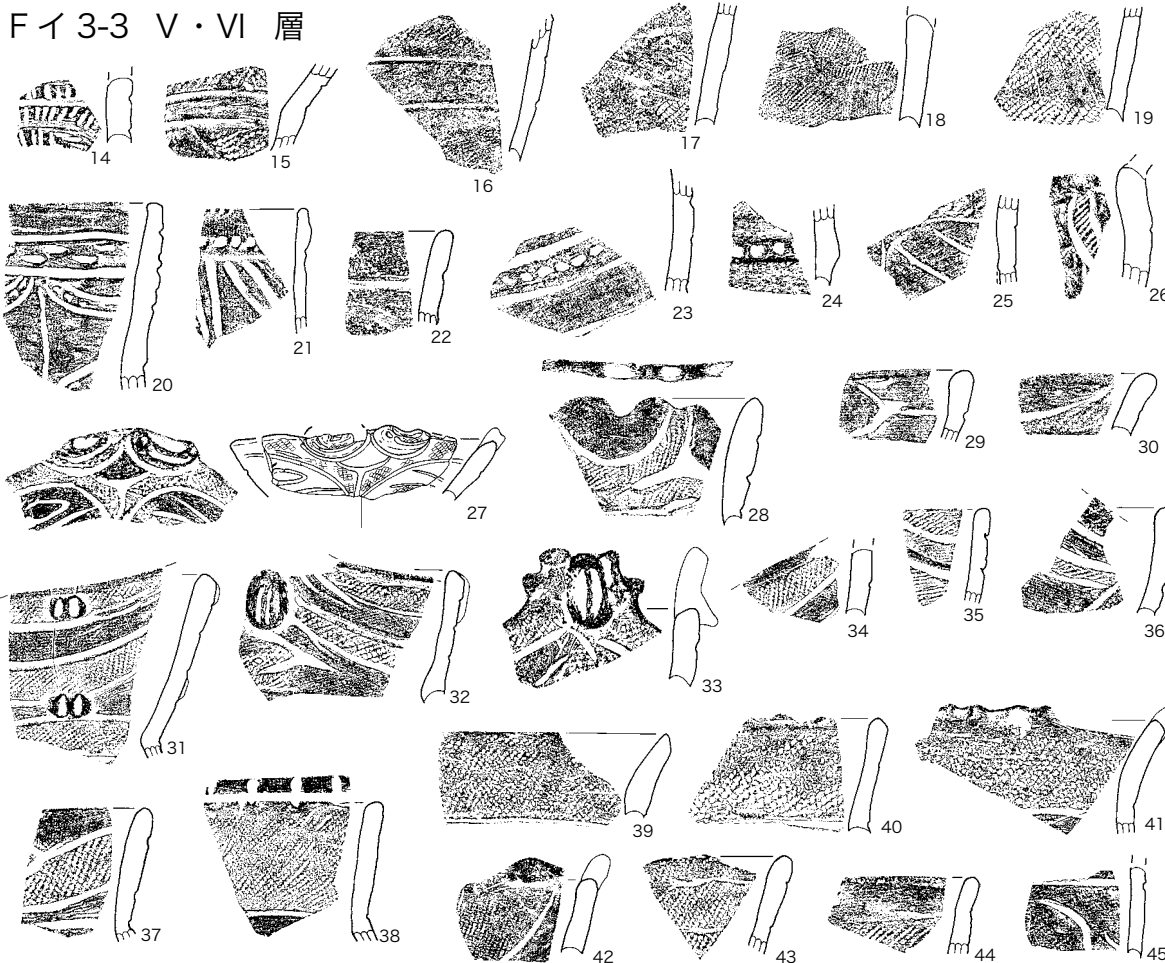


第298図 D区出土土器(1)

Fイ3-2 V層



Fイ3-3 V・VI層



0 10cm

0 10cm

0 10cm

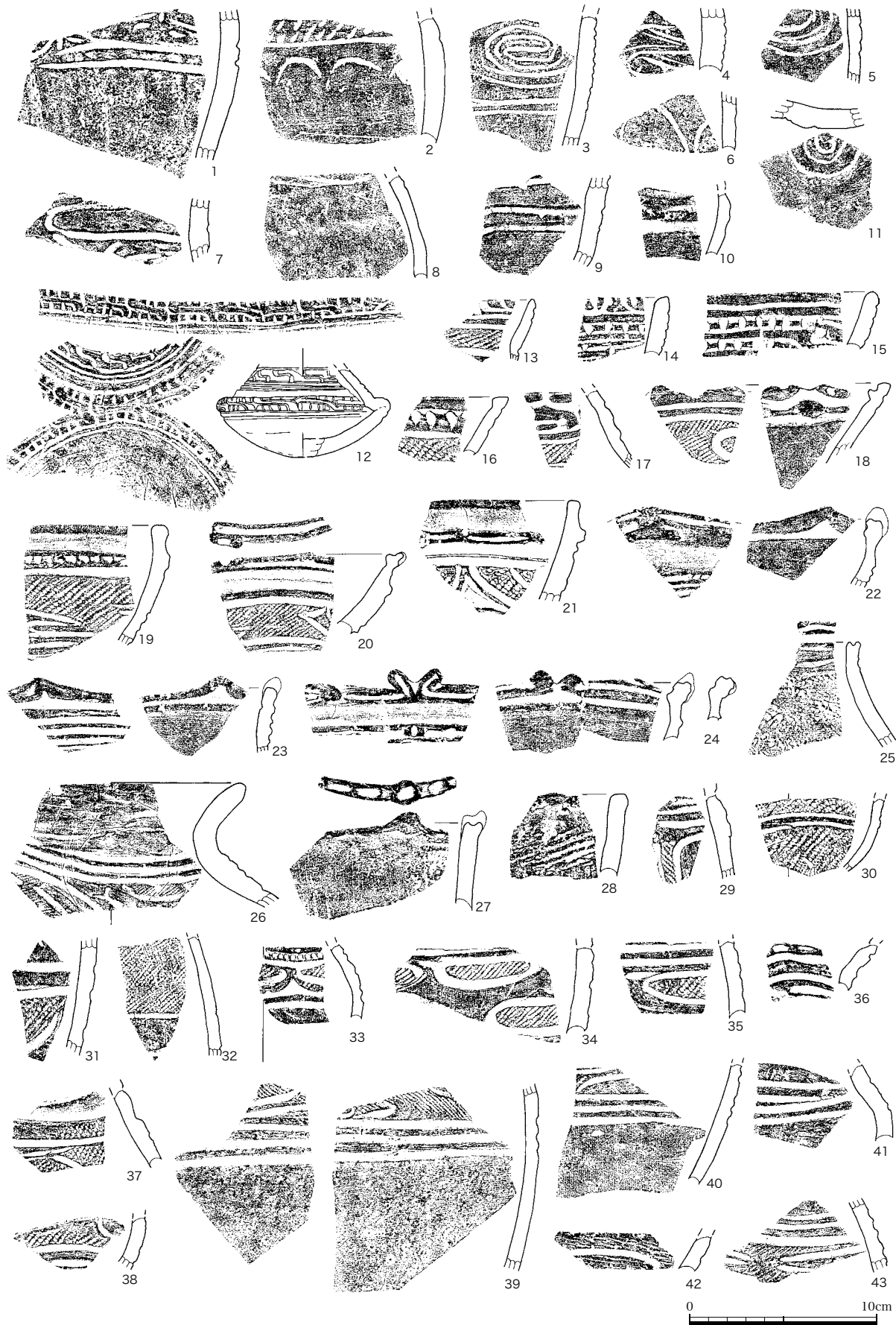
第299図 D区 出土土器(2)

Fイ3-3 V・VI層

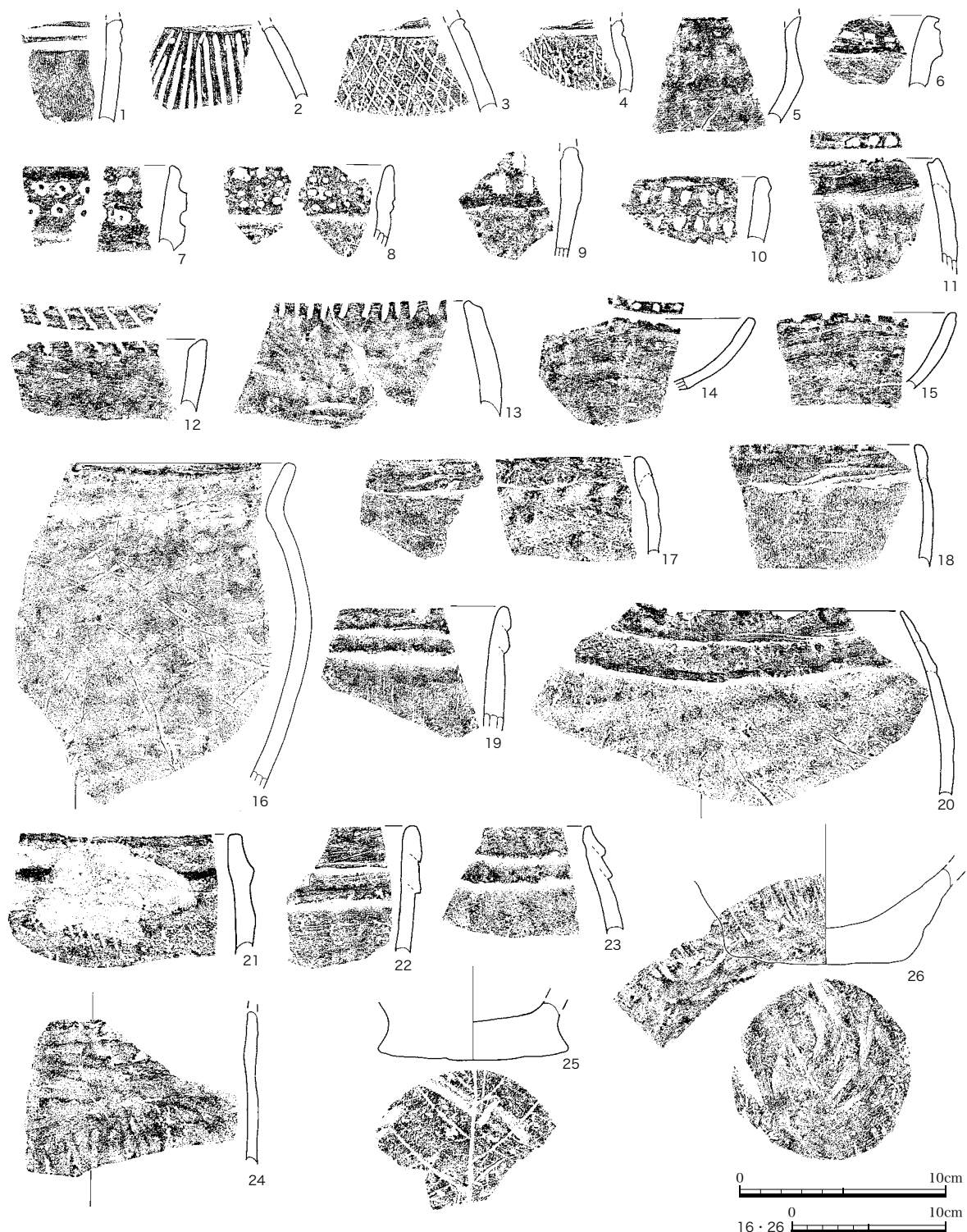


第300図 D区出土土器(3)

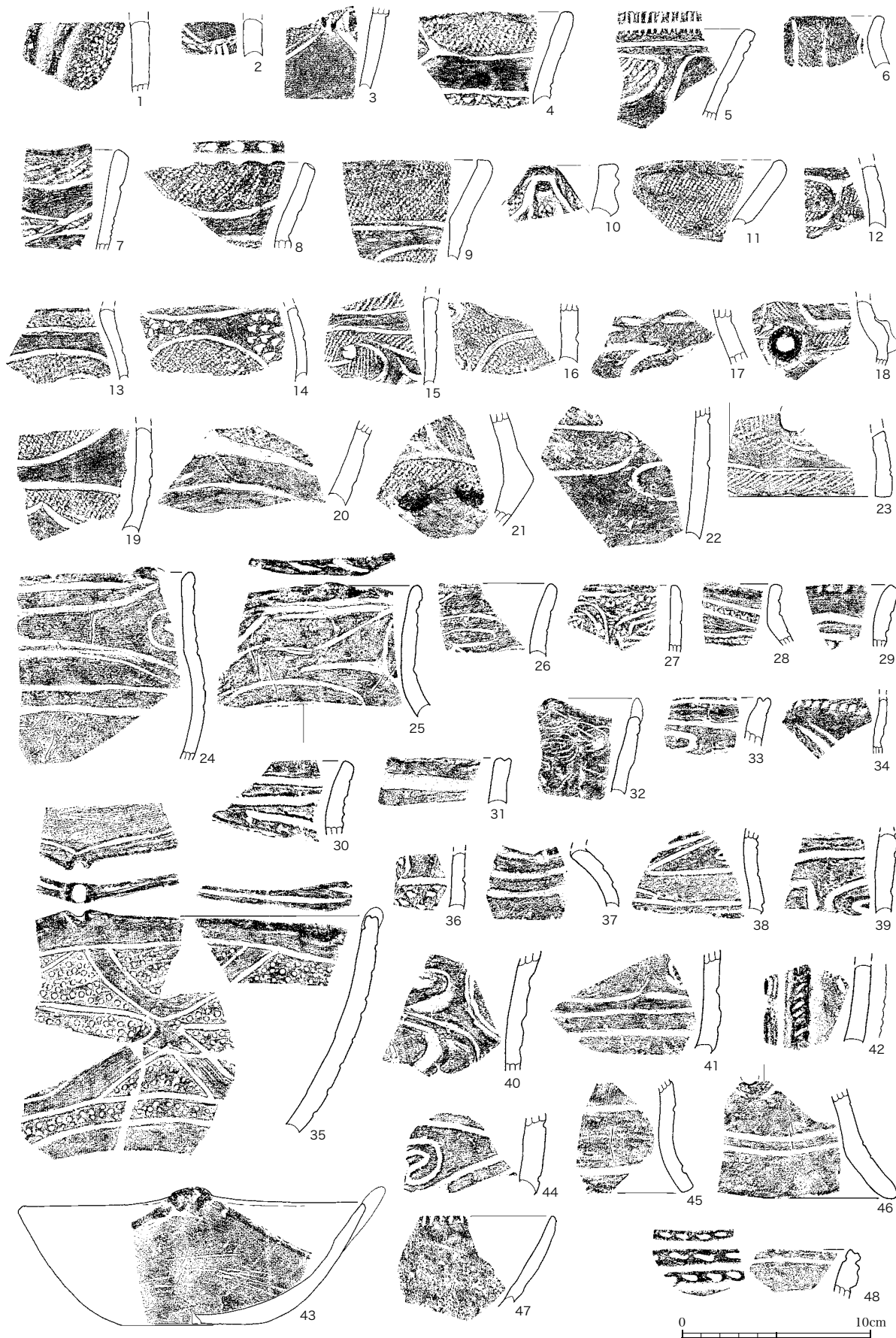
Fイ3-3 V・VI層



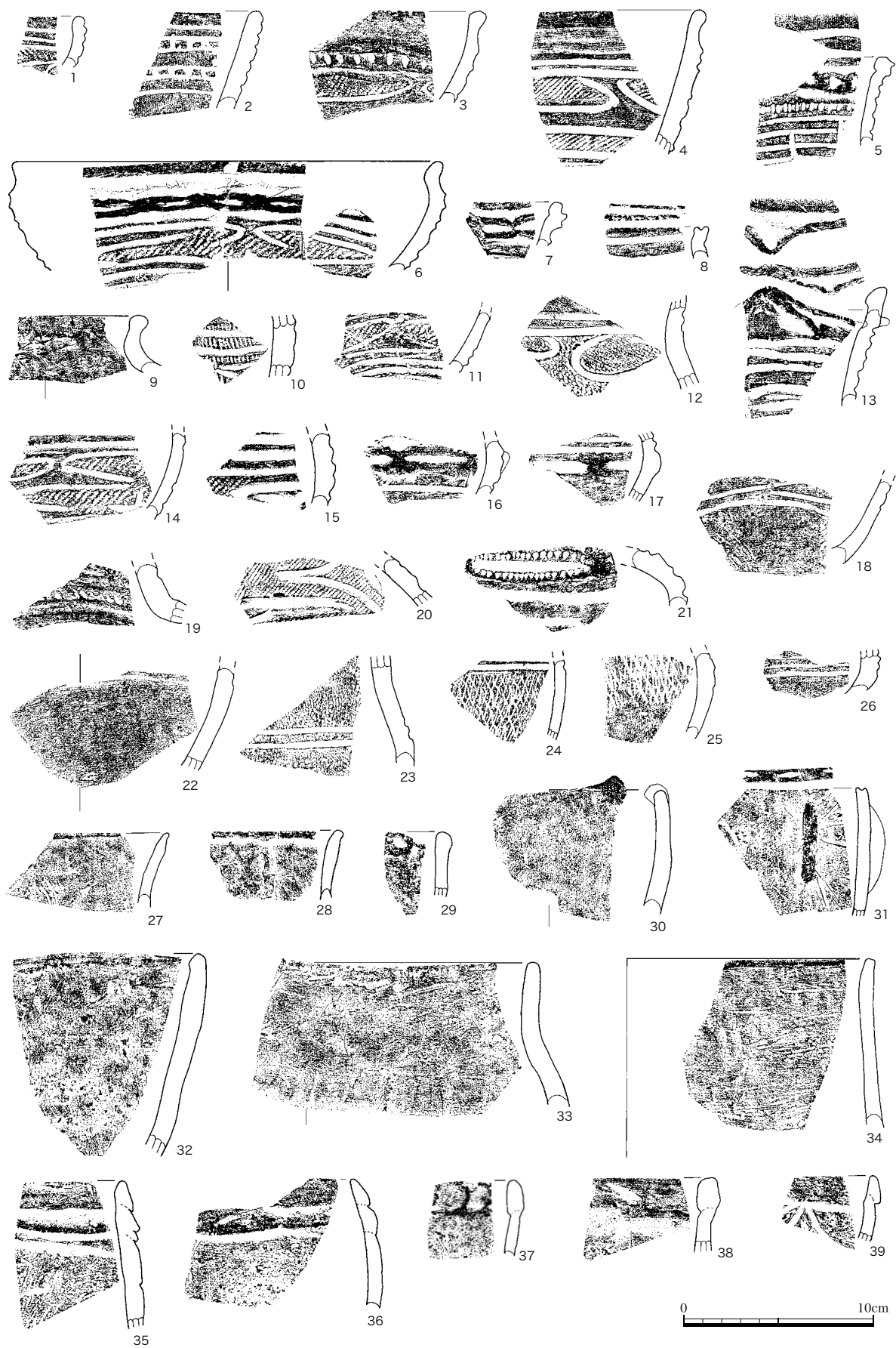
第301図 D区出土土器(4)



第302図 D区出土土器(5) Fイ3-3 5・6層



第303図 D区出土土器(6) Fイ3-4

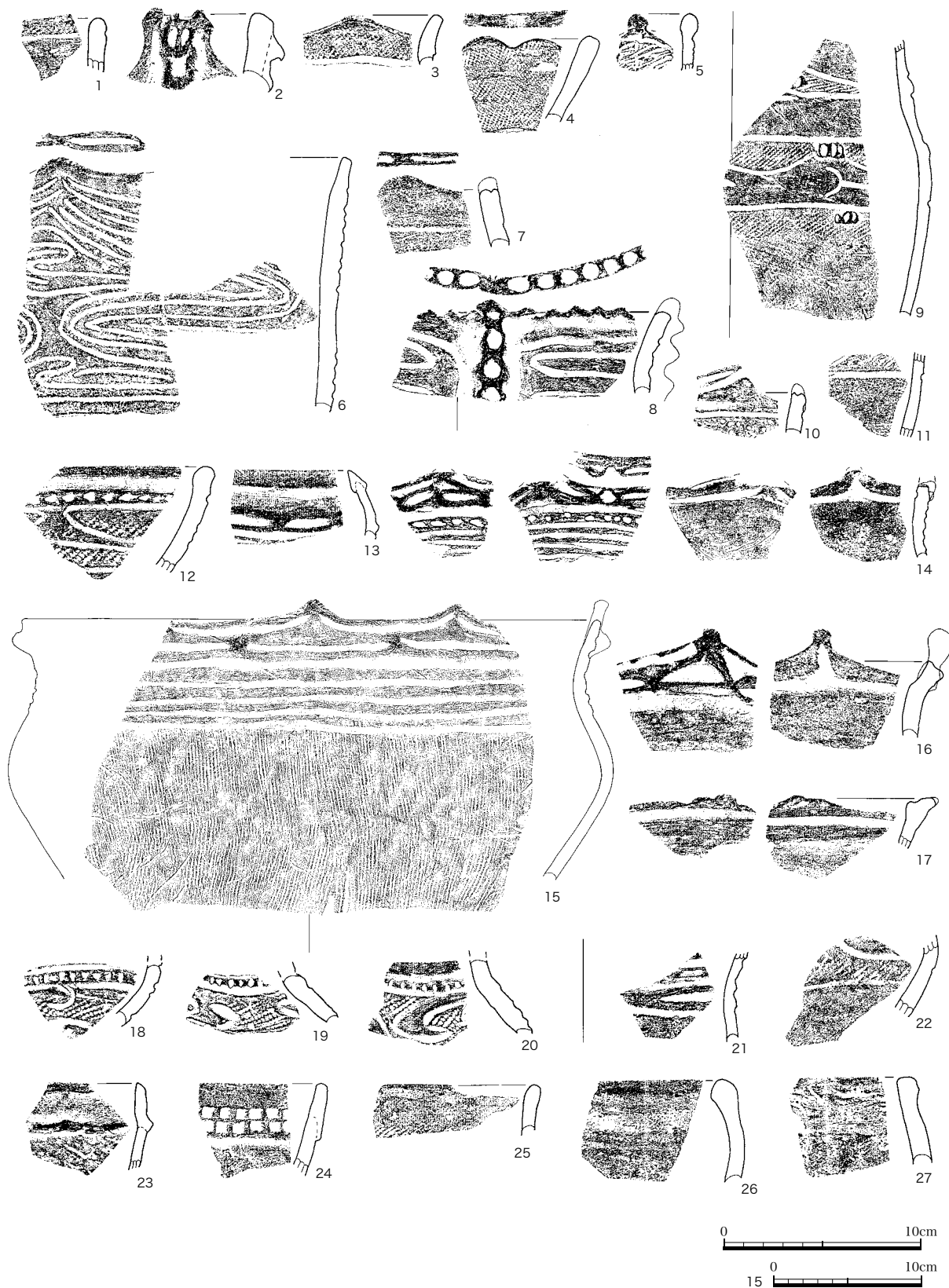


第304図 D区出土土器(7) Fイ3-4

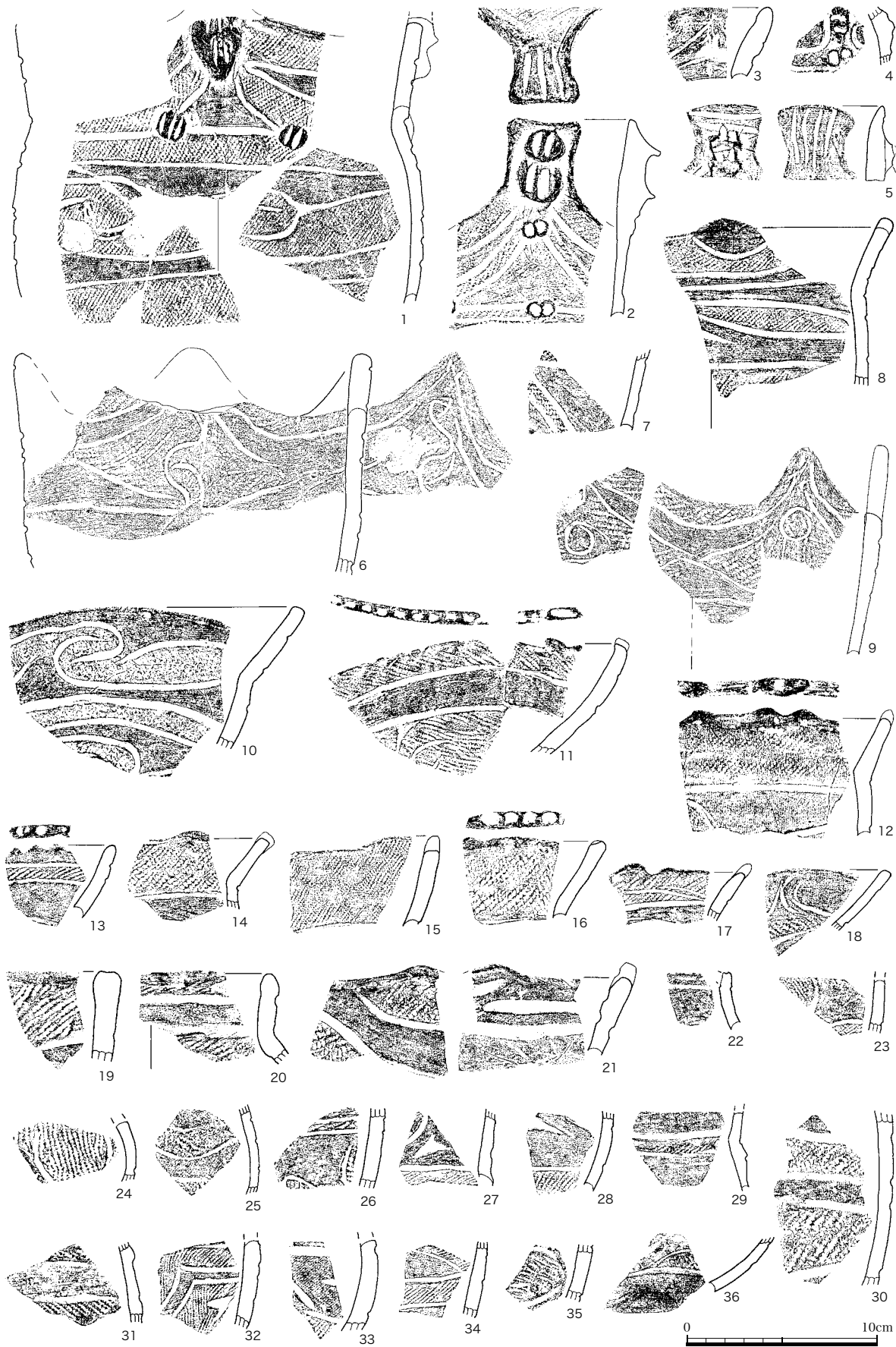
Fイ 3-5



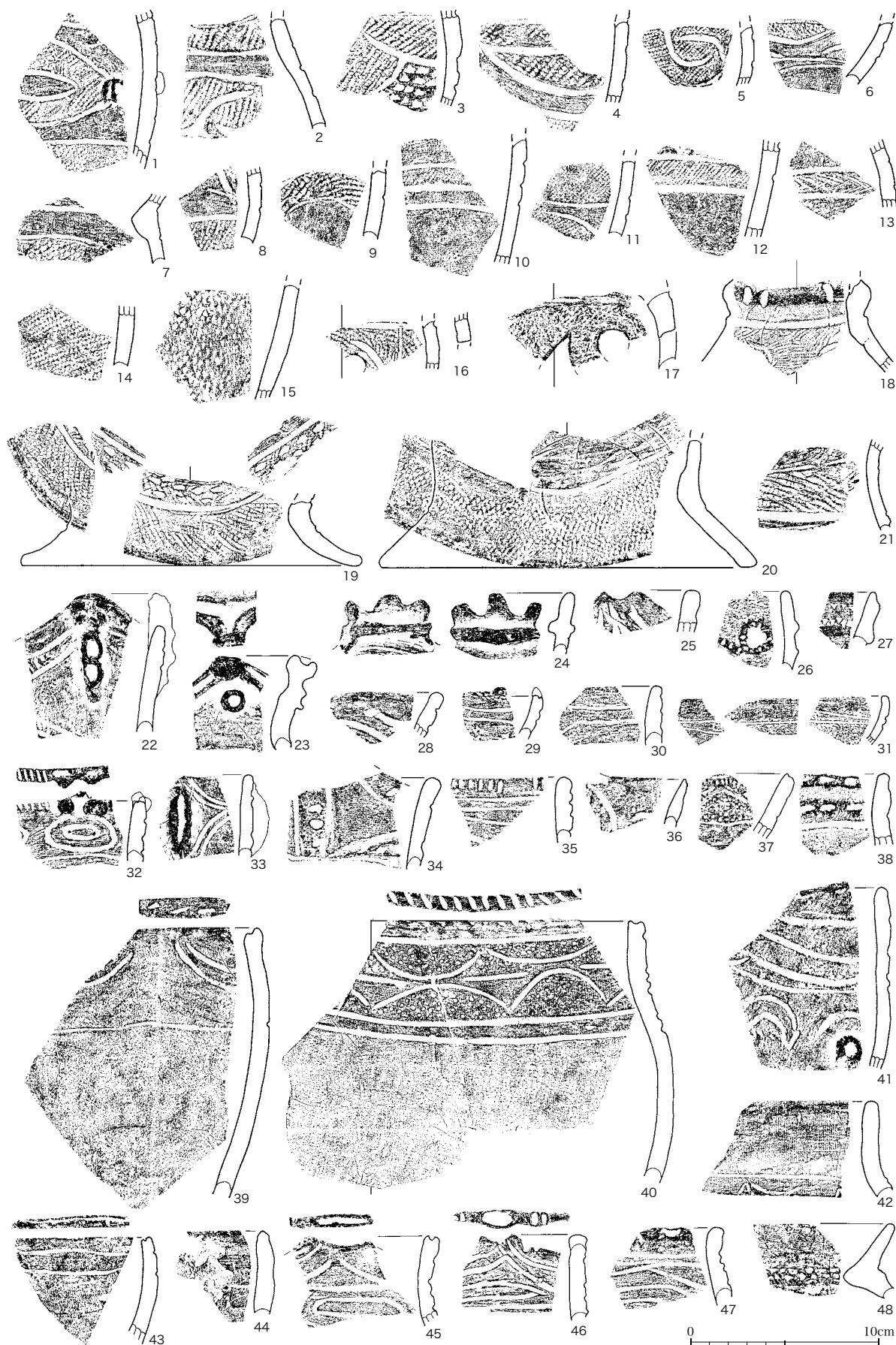
第305図 D区出土土器(8)



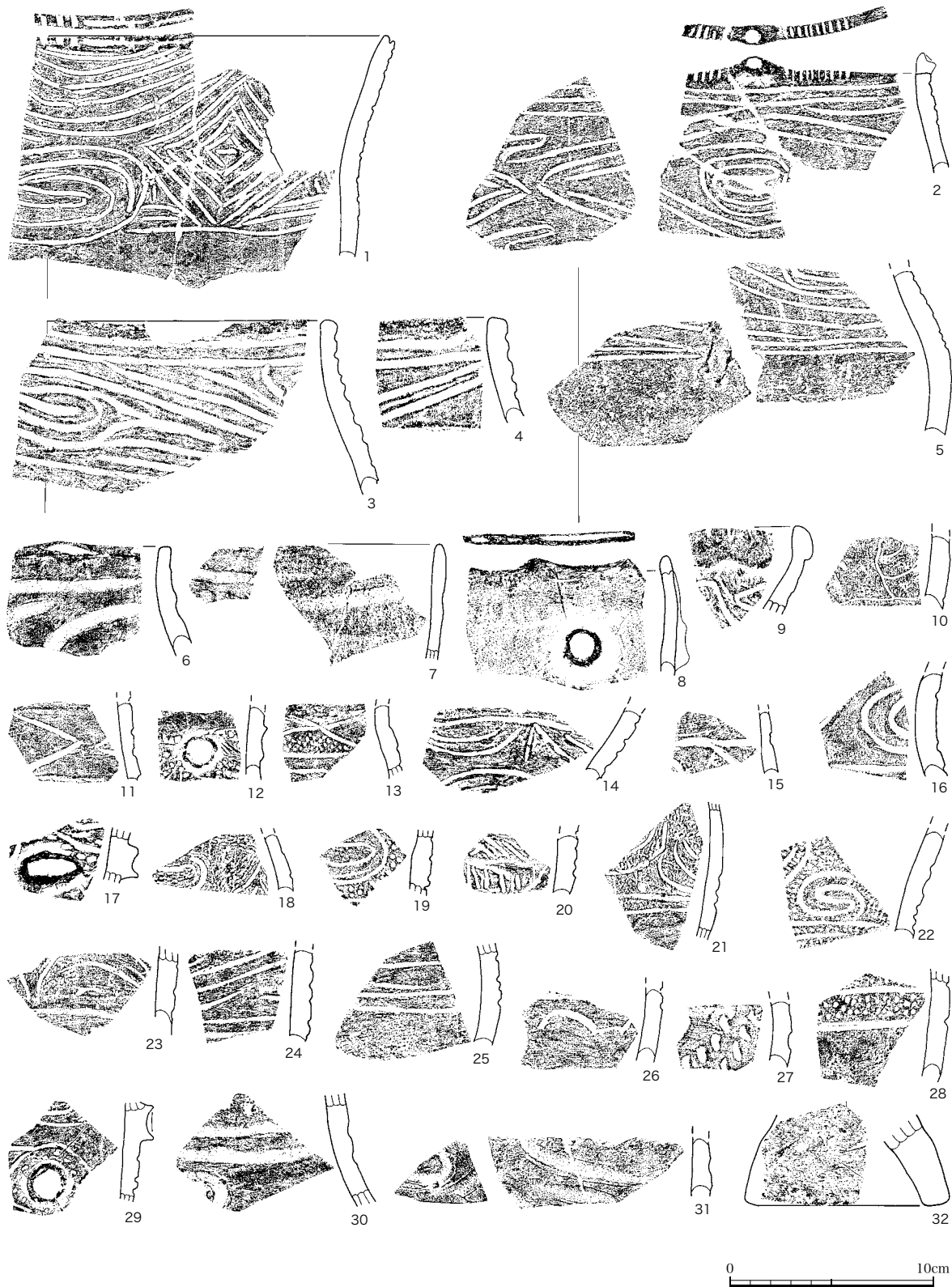
第306図 D区出土土器(9) Fイ3-7



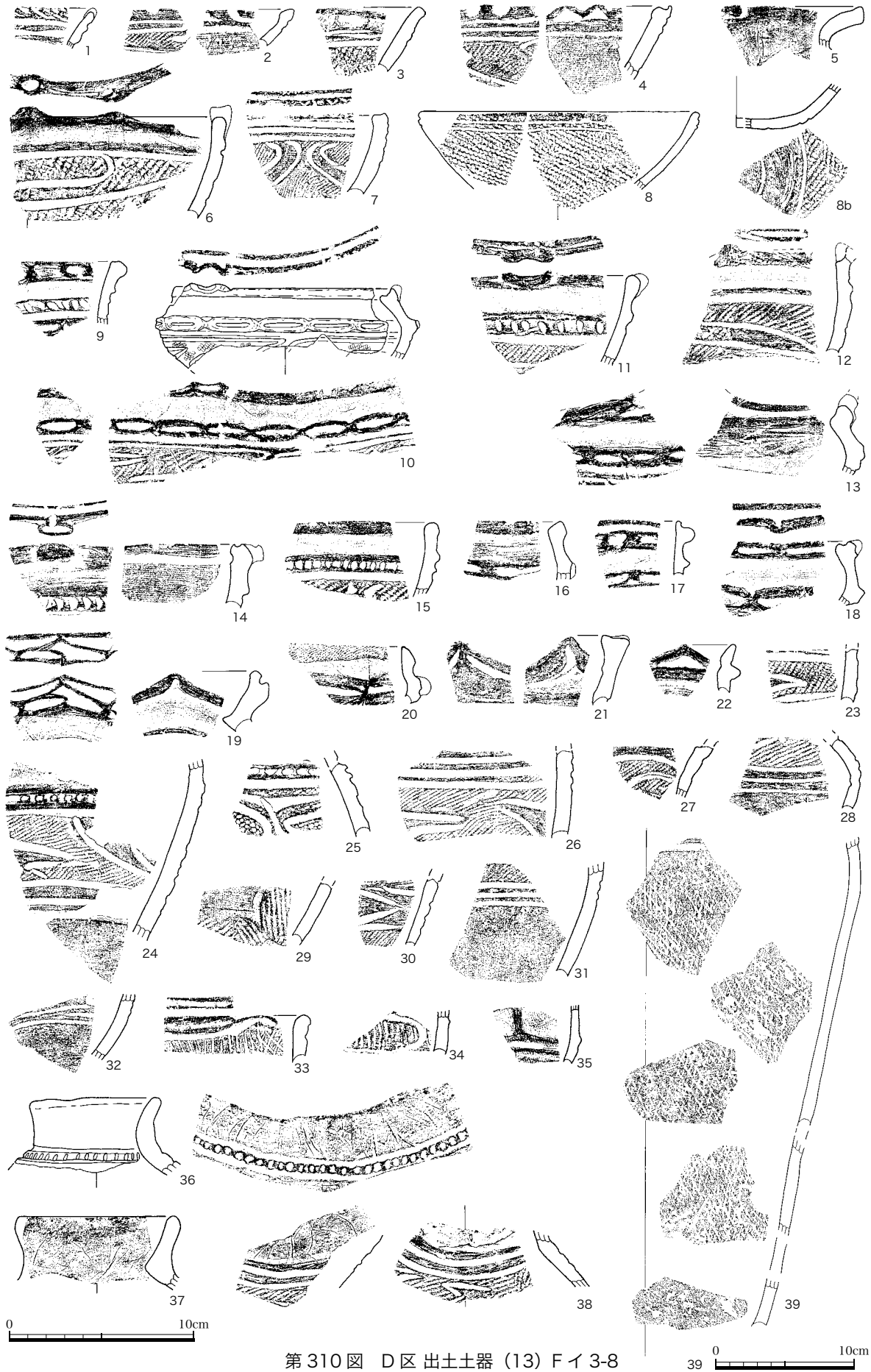
第307図 D区出土土器 (10) Fイ3-8



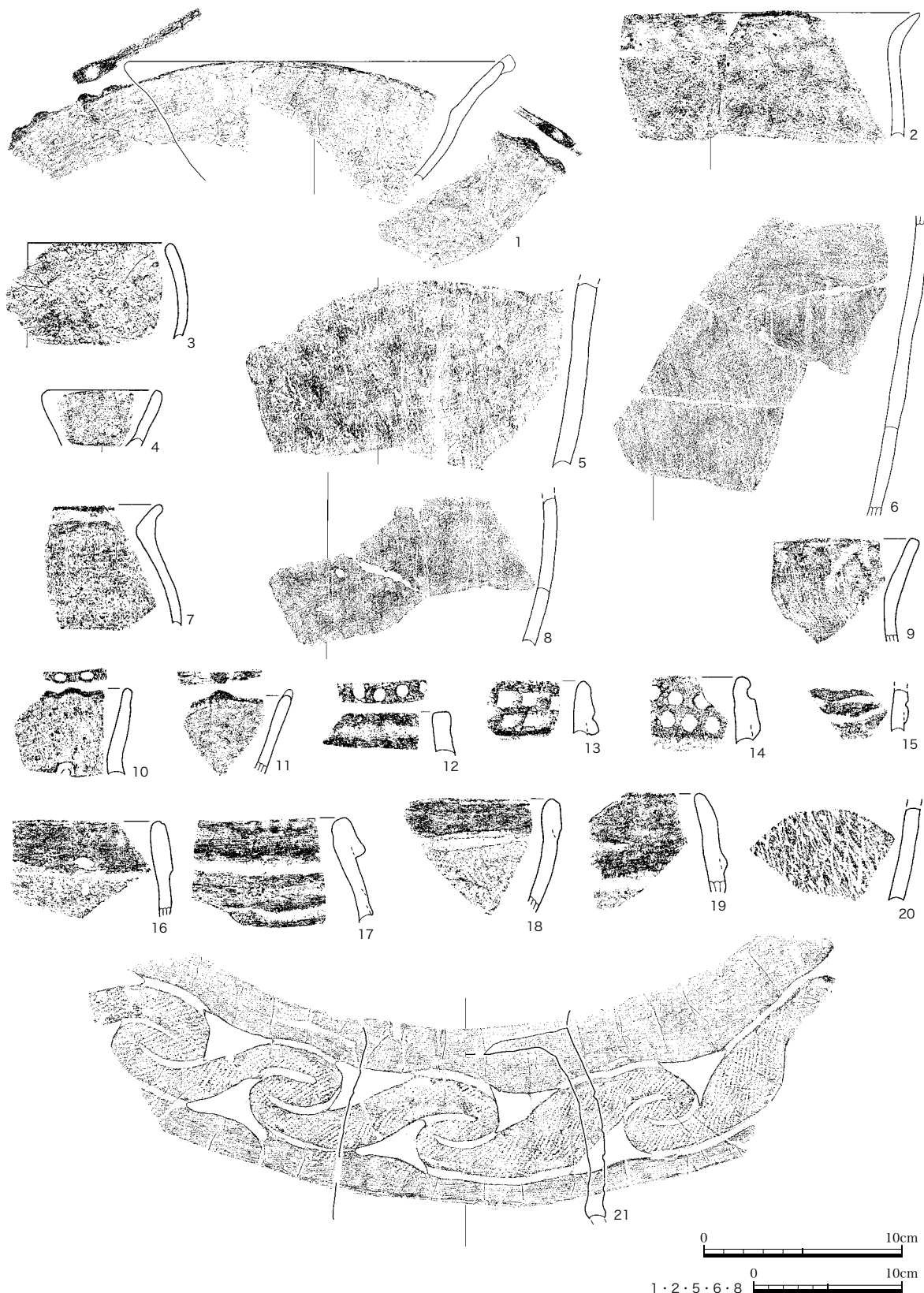
第308図 D区出土土器(11) Fイ3-8



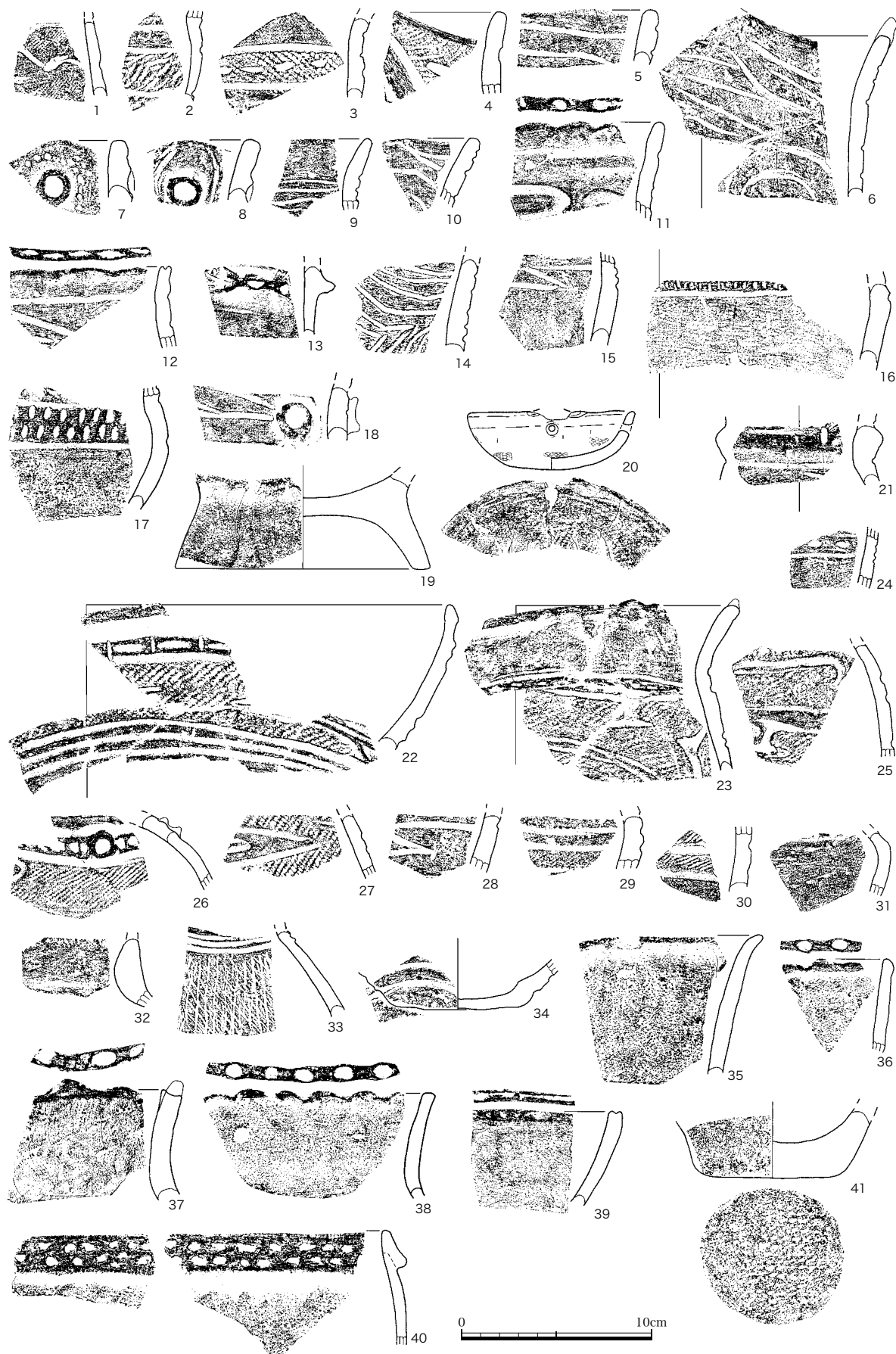
第309図 D区出土土器 (12) F13-8



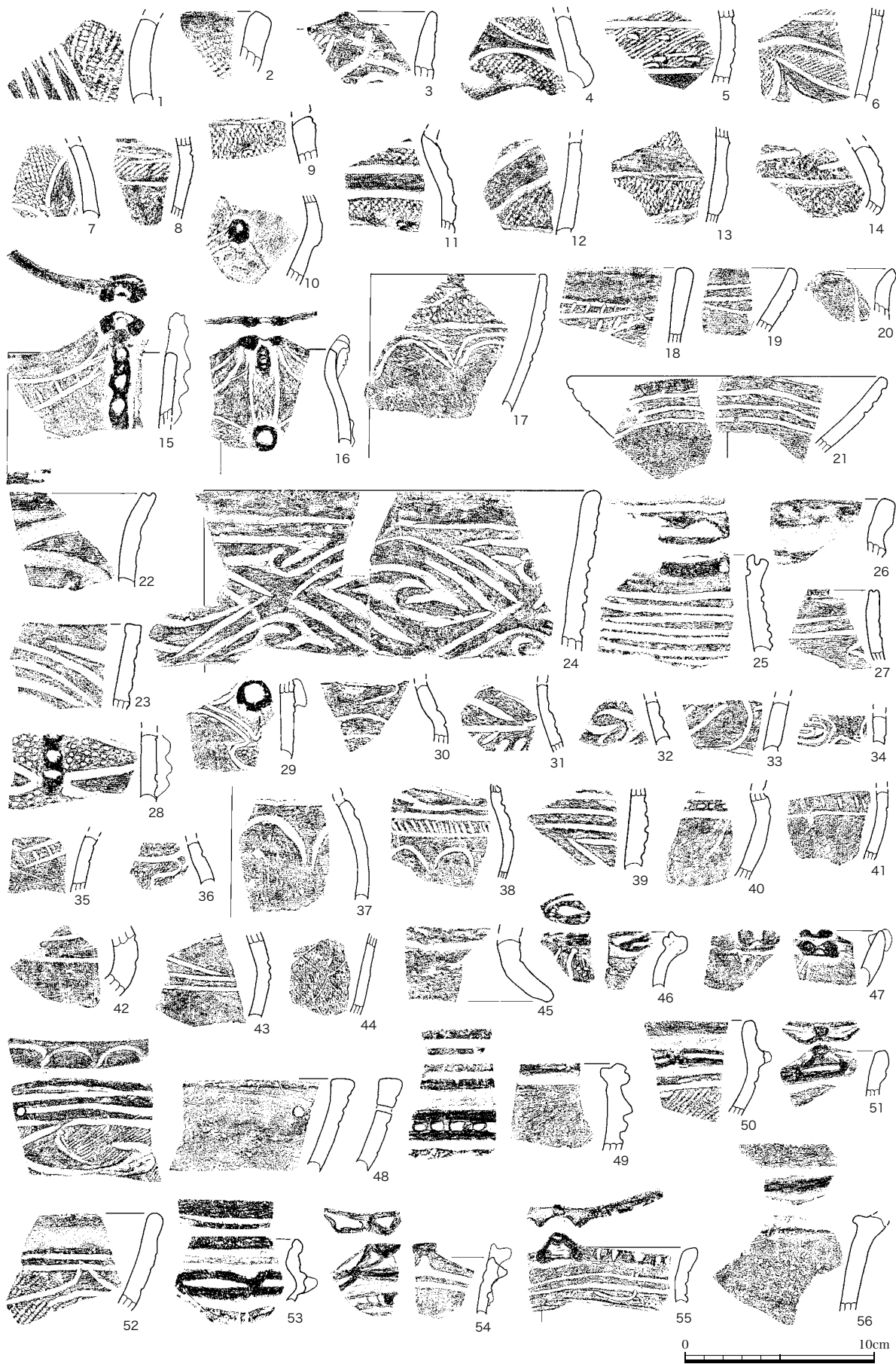
第310図 D区出土土器 (13) Fイ3-8



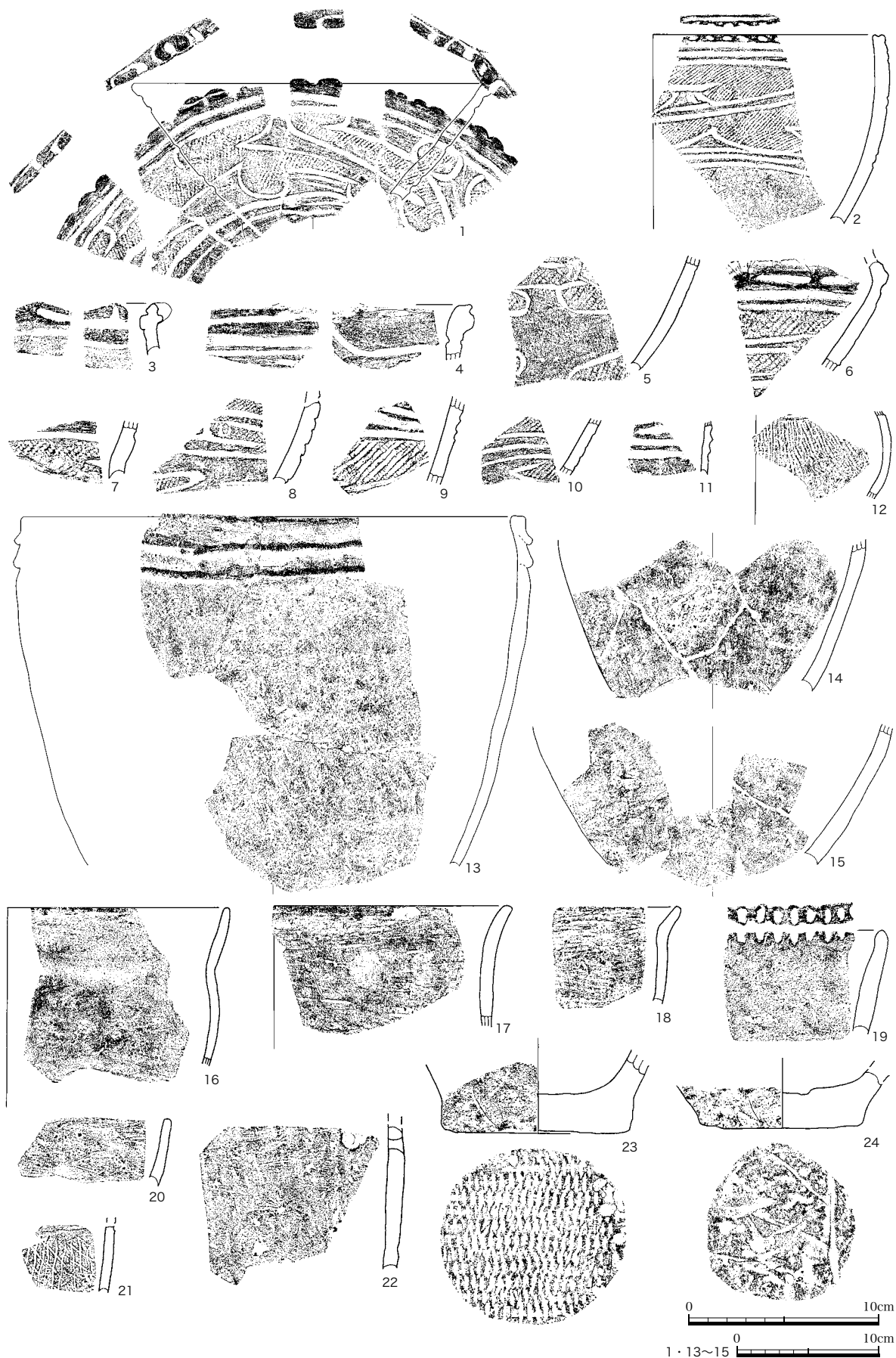
第311図 D区出土土器 (14) Fイ3-8



第312図 D区出土土器 (15) Fイ3-9



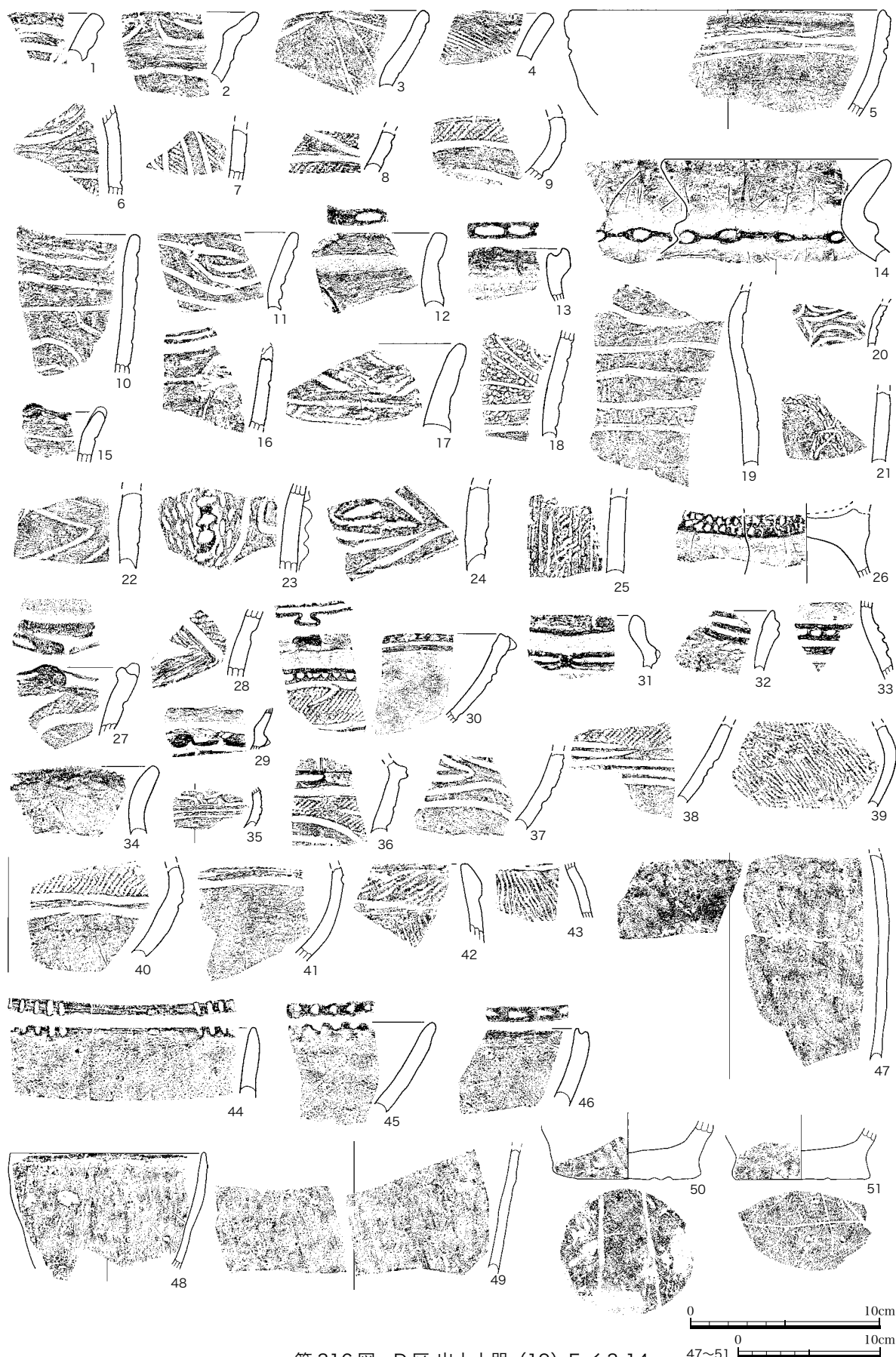
第313図 D区出土土器 (16) Fイ3-10



第314図 D区出土土器 (17) Fイ3-10

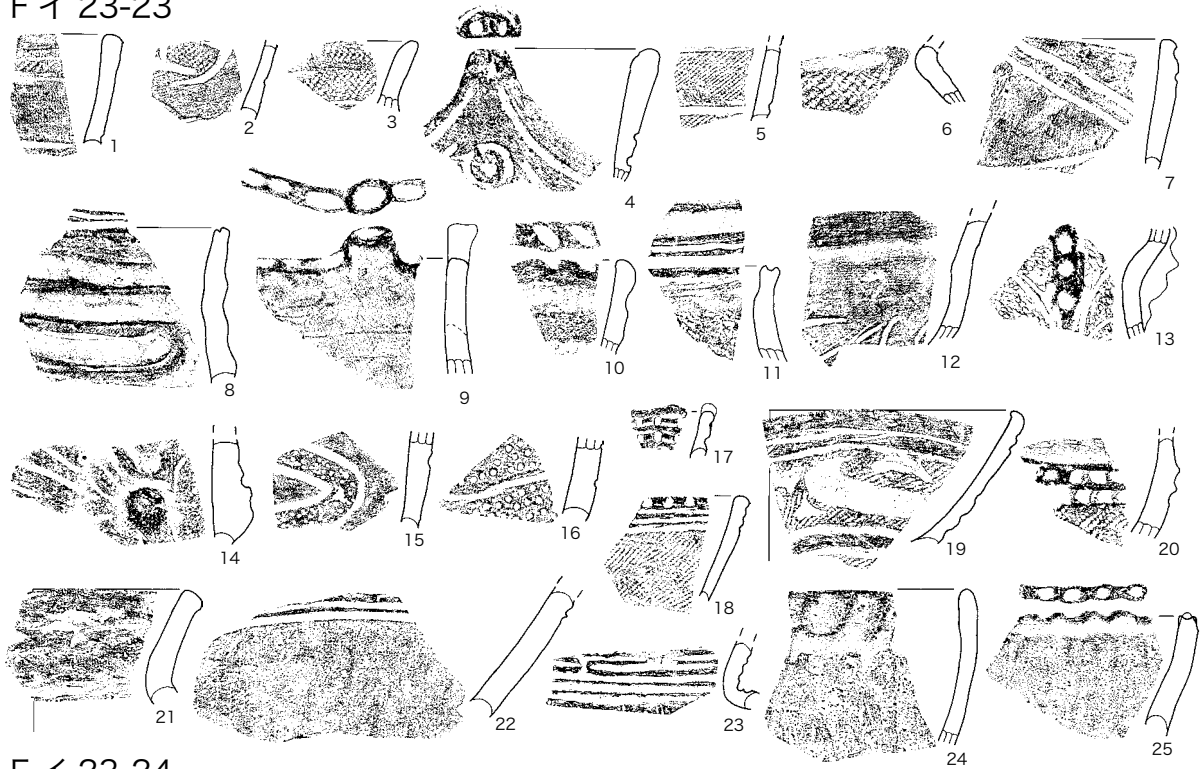


第315図 D区出土土器 (18) Fイ3-13、3-15 (33~45)

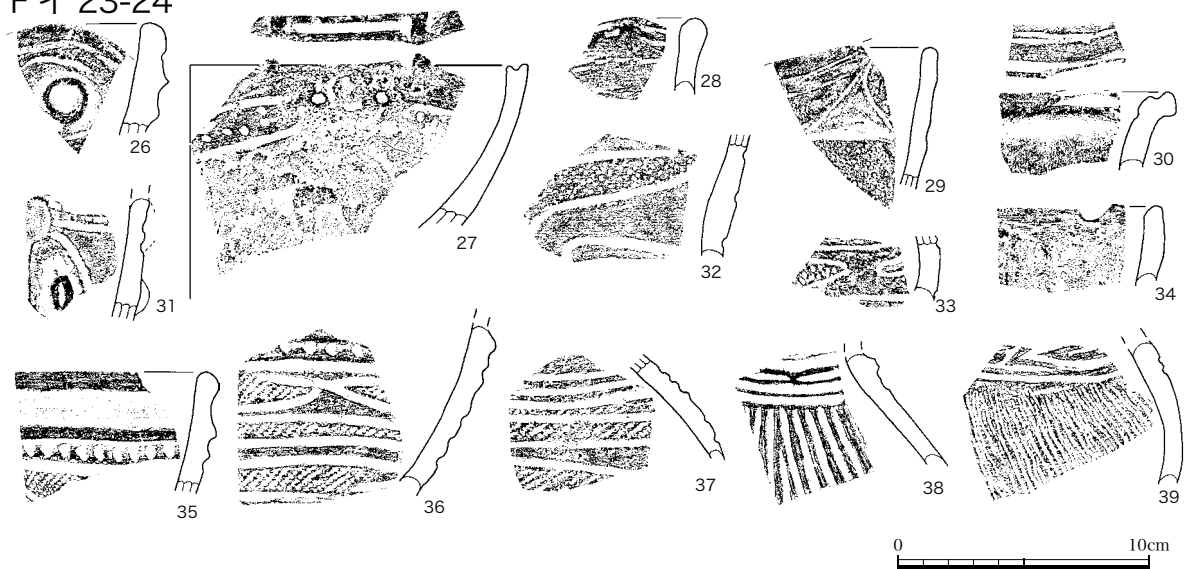


第316図 D区出土土器 (19) Fイ3-14

Fイ 23-23

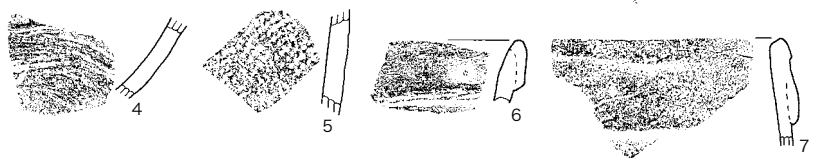
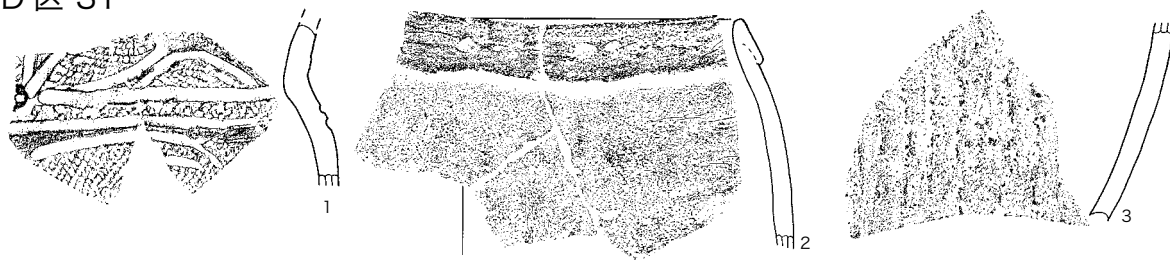


Fイ 23-24

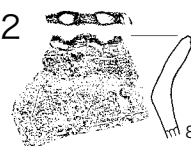


第317図 D区出土土器(20)

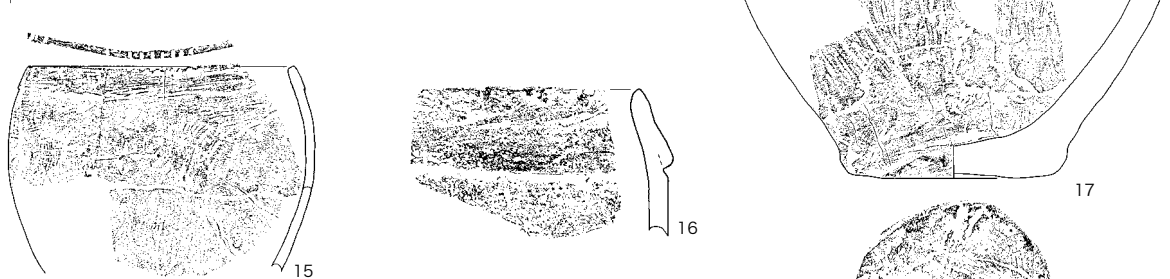
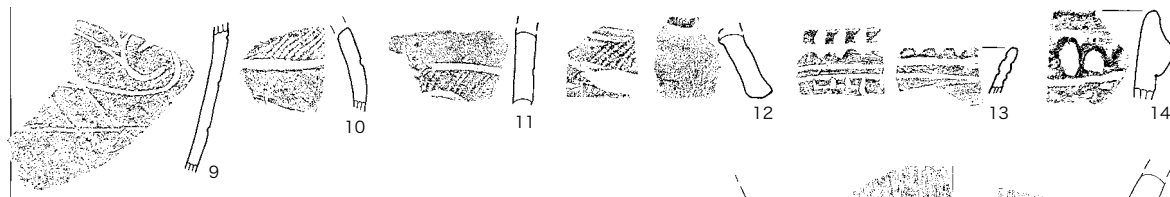
D区 S1



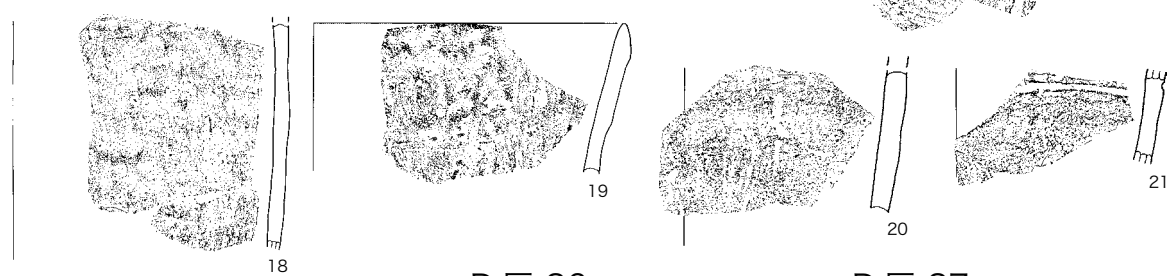
D区 S2



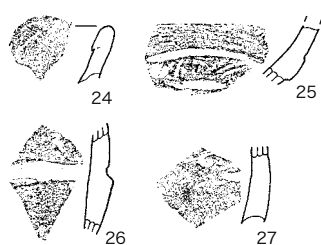
D区 S3



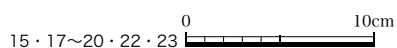
D区 S4・5



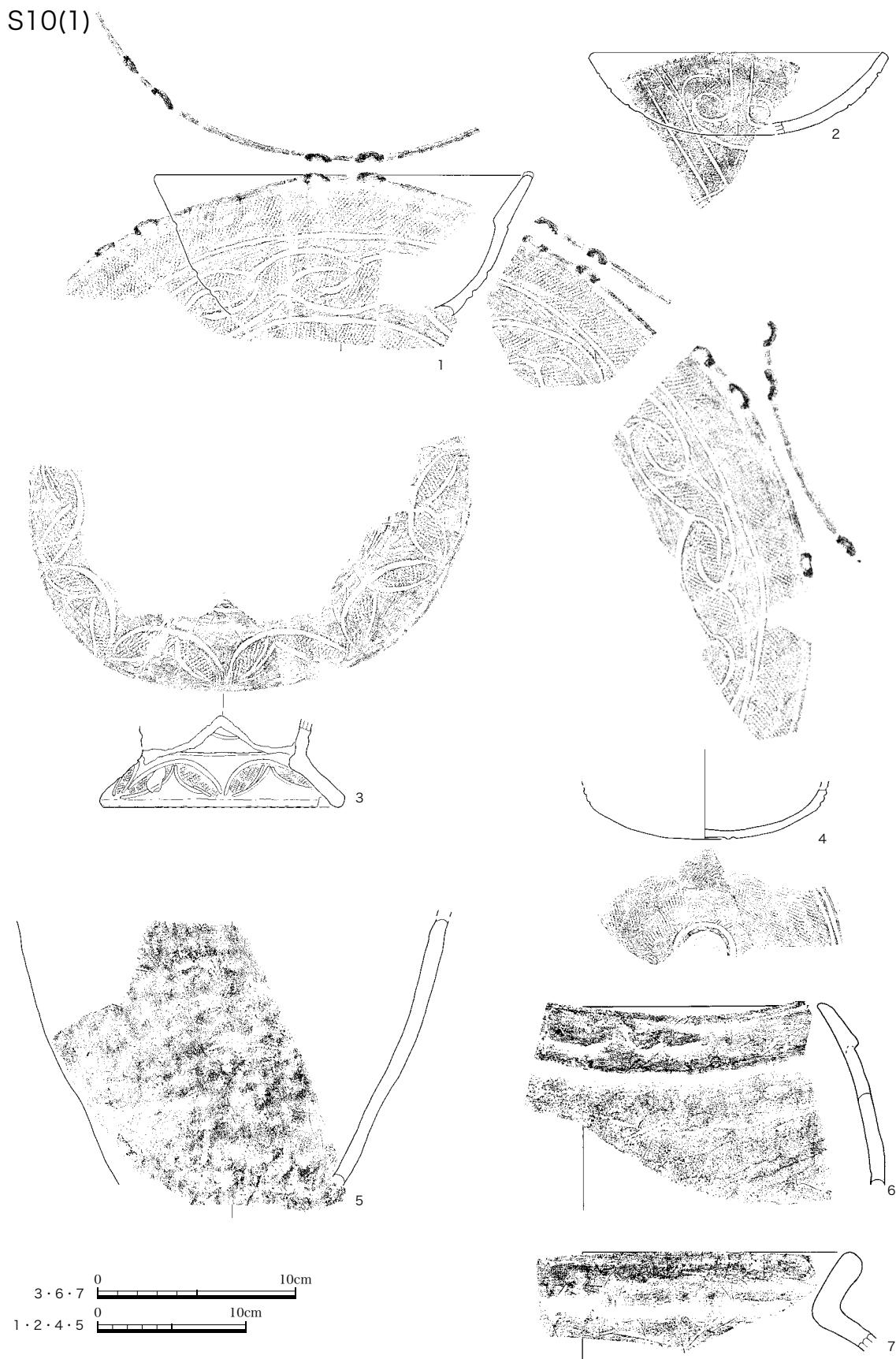
D区 S6



D区 S7



第318図 D区 出土土器 (21)

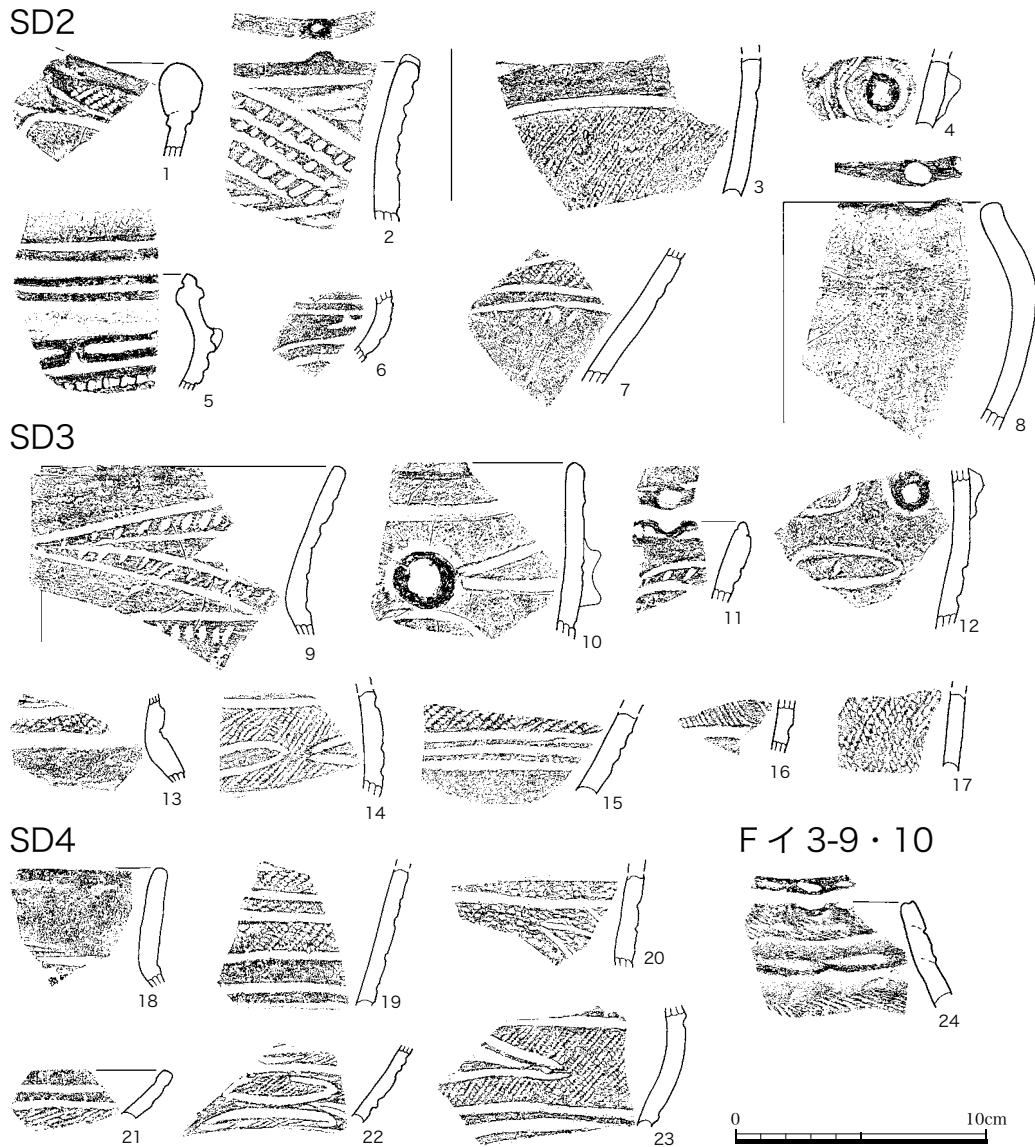


第 319 図 D 区 出土土器 (22)

S10(2)



第320図 D区出土土器(23)

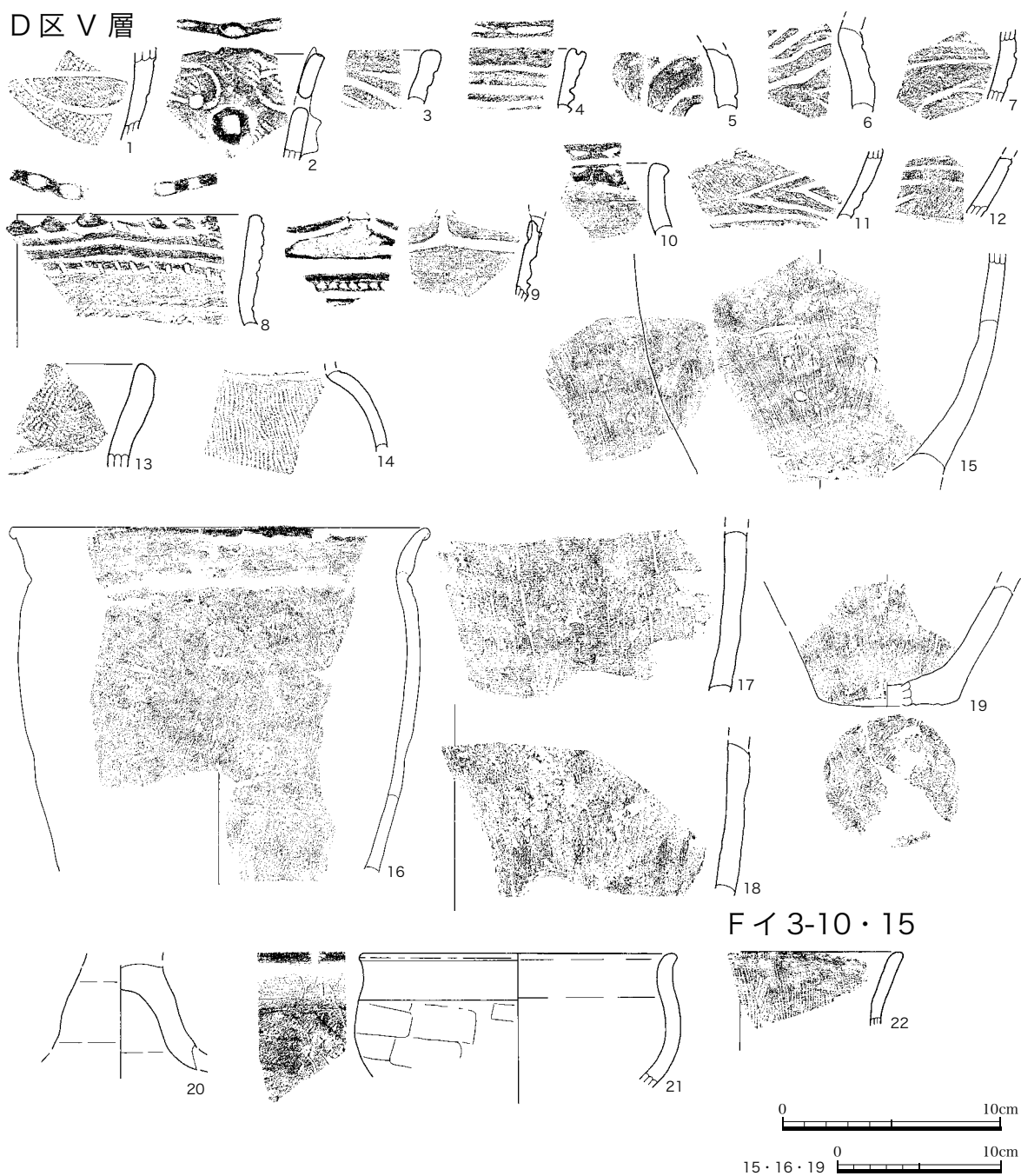


第321図 D区出土土器(24)

第324～325図に示したFイ2-23グリッドでは「天神原式系」の第324図19や大洞C2式の同図39が注意される資料である。Fイ2-24グリッドでは第325図21の安行3b式や第326図1,2等の資料が注目される。第326図1は大きく楕円状の単位がやや浅い沈線で描かれている。器面はやや粗いナデ調整。Fイ6-10は資料数の多いグリッドで、第328図30,34、第329図1など安行式～天神原式系で良好な資料がある。第329図1はやや幅広の沈線と比較的丁寧なミガキ調整が特徴的である。Fイ6-15グリッド出土の第322図26は附点紐線文系～副文様帯系で本遺跡ではあまり多くないものである。同図27もやや珍しく、隆帯による曲線文様が頸部に描かれ、口縁隆帯部に刻み短沈線が加えられる。C区Eイ24-18グリッド出土の第250図26と同一個体と判断されるが、60mを超える距離があり、再度の確認が必要な状況である。比較的器面調整丁寧な土器と観察される。

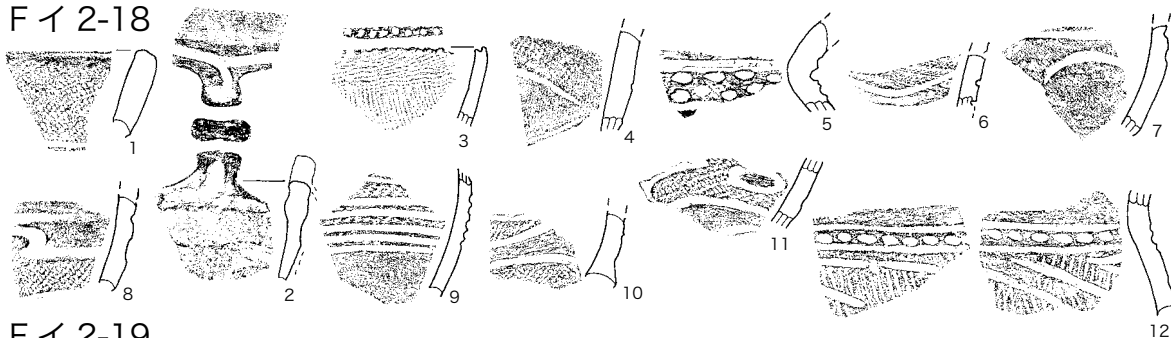
Fイ7-2グリッドは第335～338図にかけて示した。第335図5,21、第336図1,19、第337図1等が注目される場所である。第337図1はいわゆる角底土器で、2片の接合しない破片からの推定ではあるが、

(→P338)

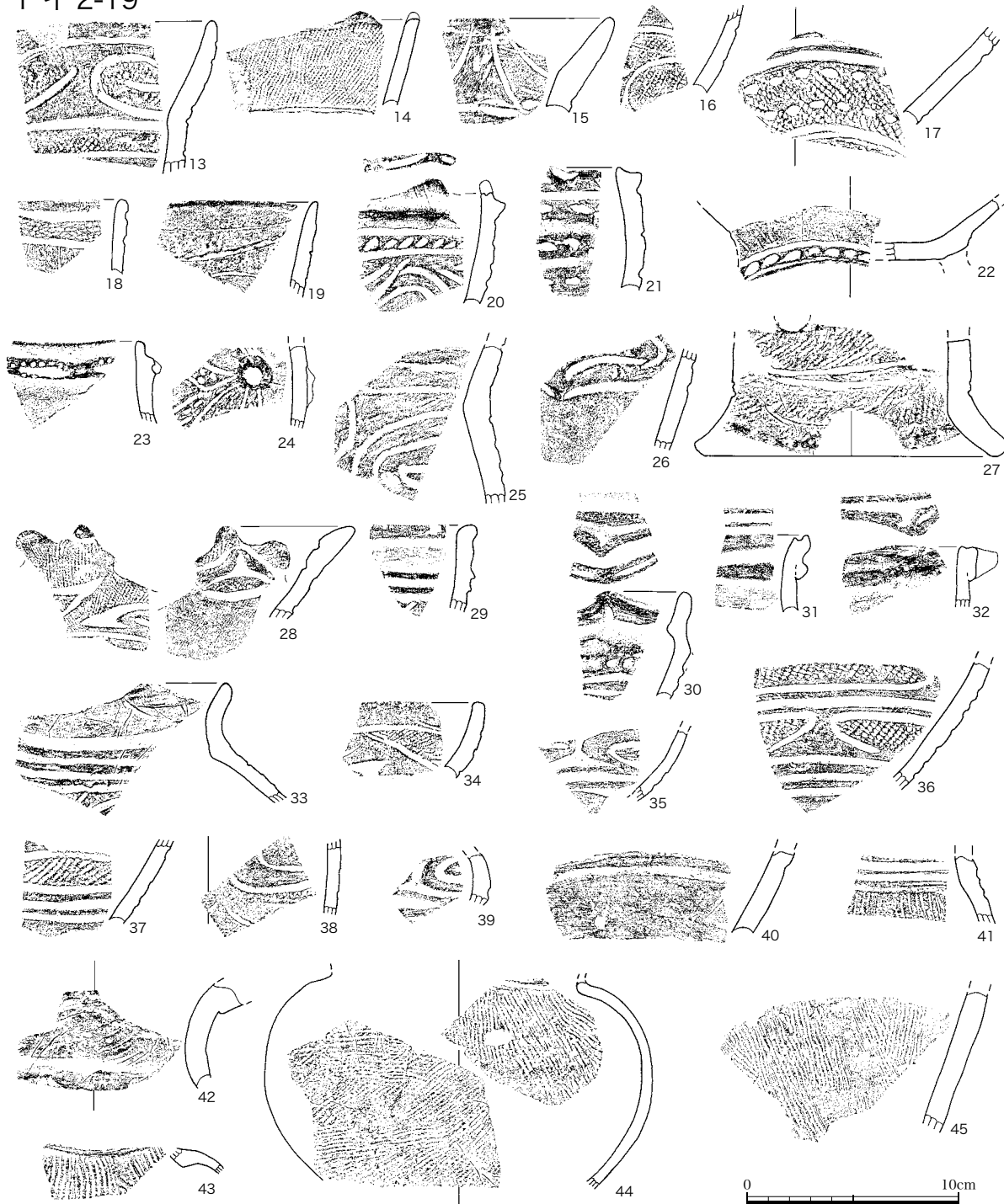


第322図 D区出土土器(25)

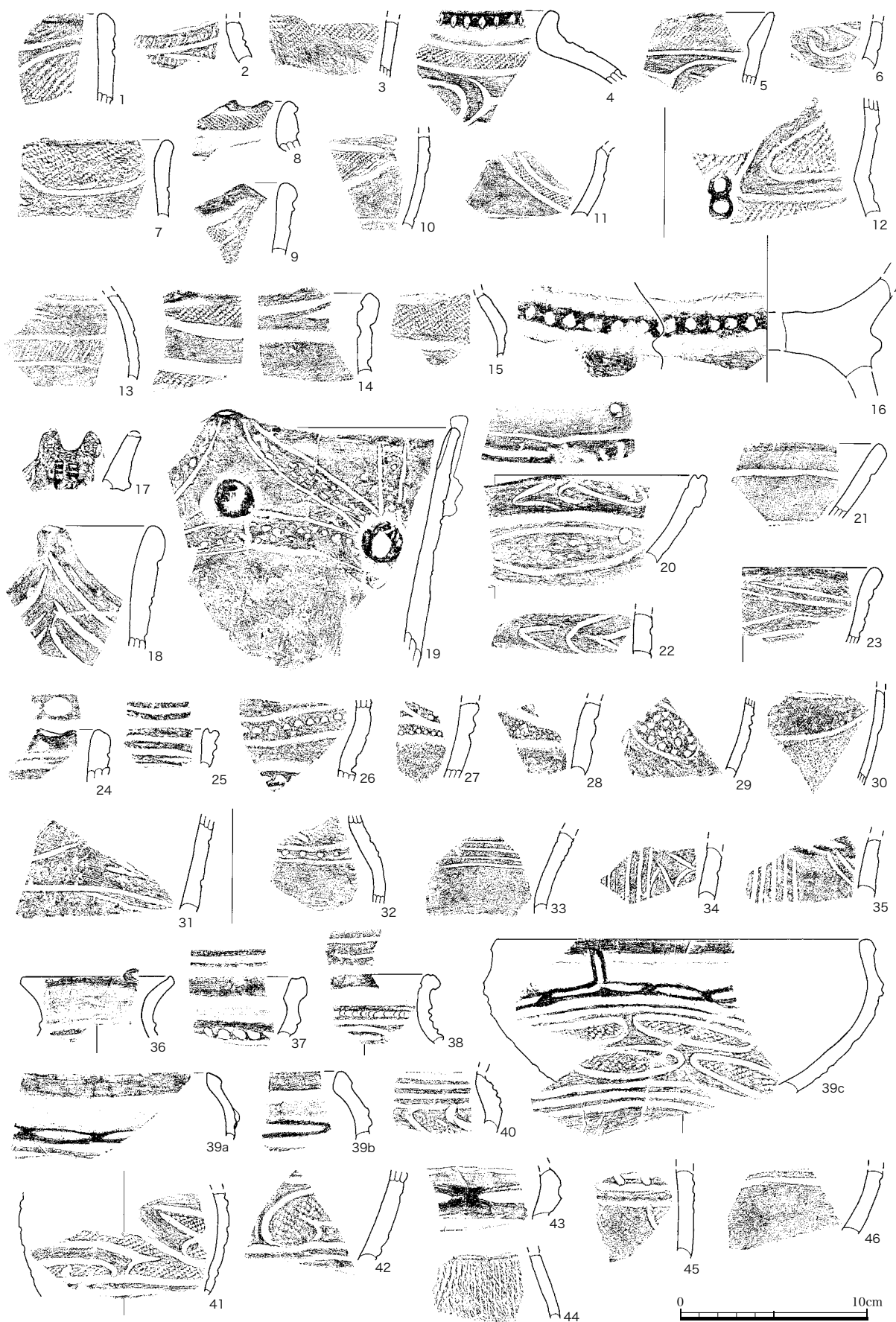
Fイ2-18



Fイ2-19

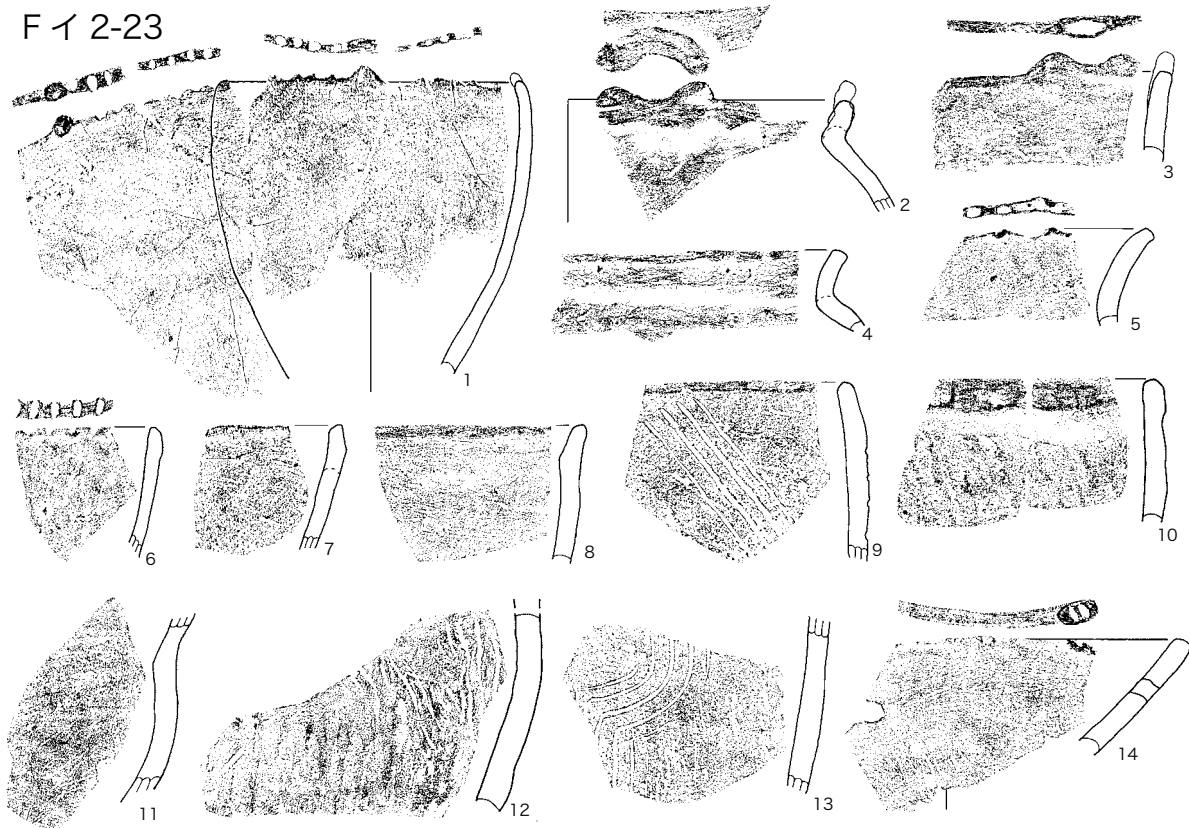


第323図 E区出土土器(1)

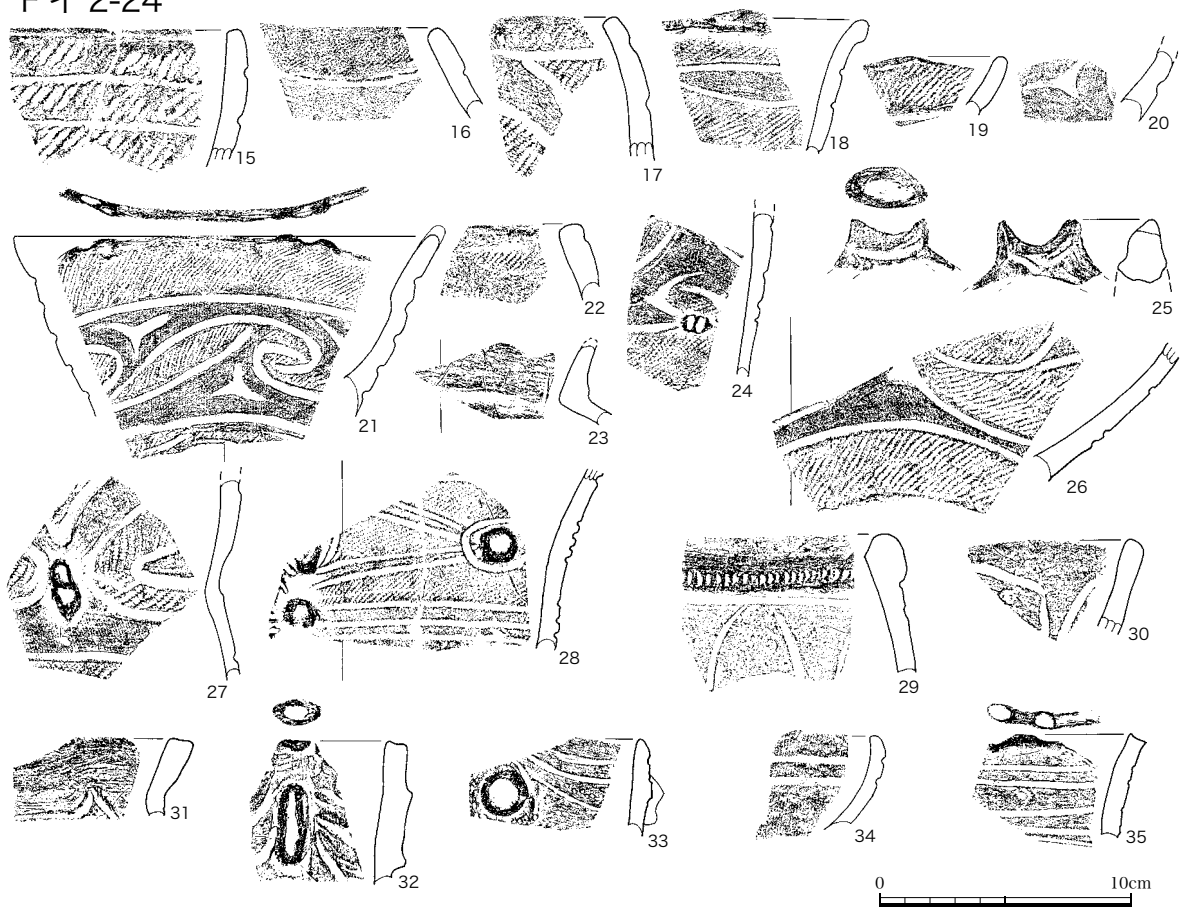


第324図 E区出土土器(2) Fイ2-23

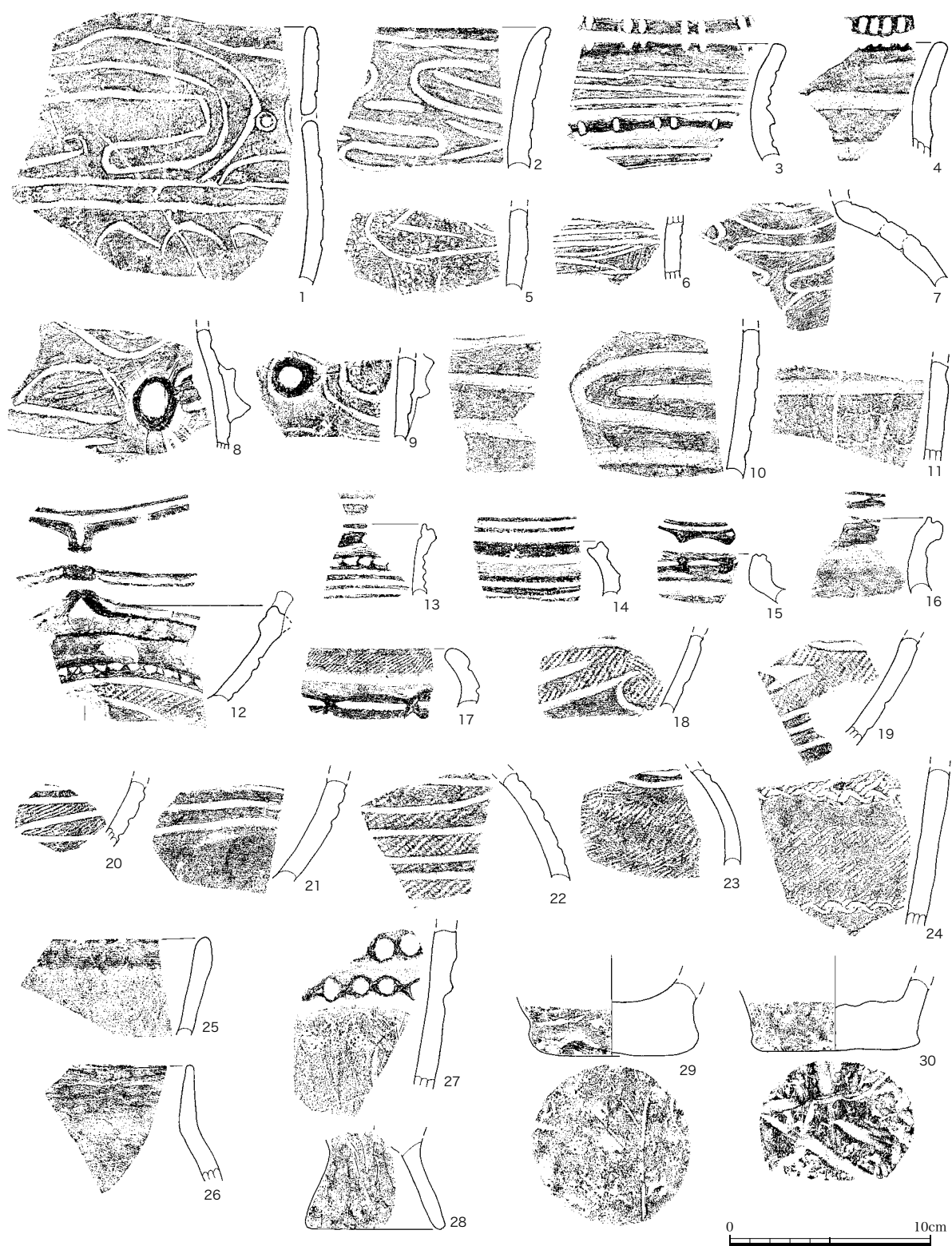
Fイ 2-23



Fイ 2-24



第325図 E区出土土器(3)

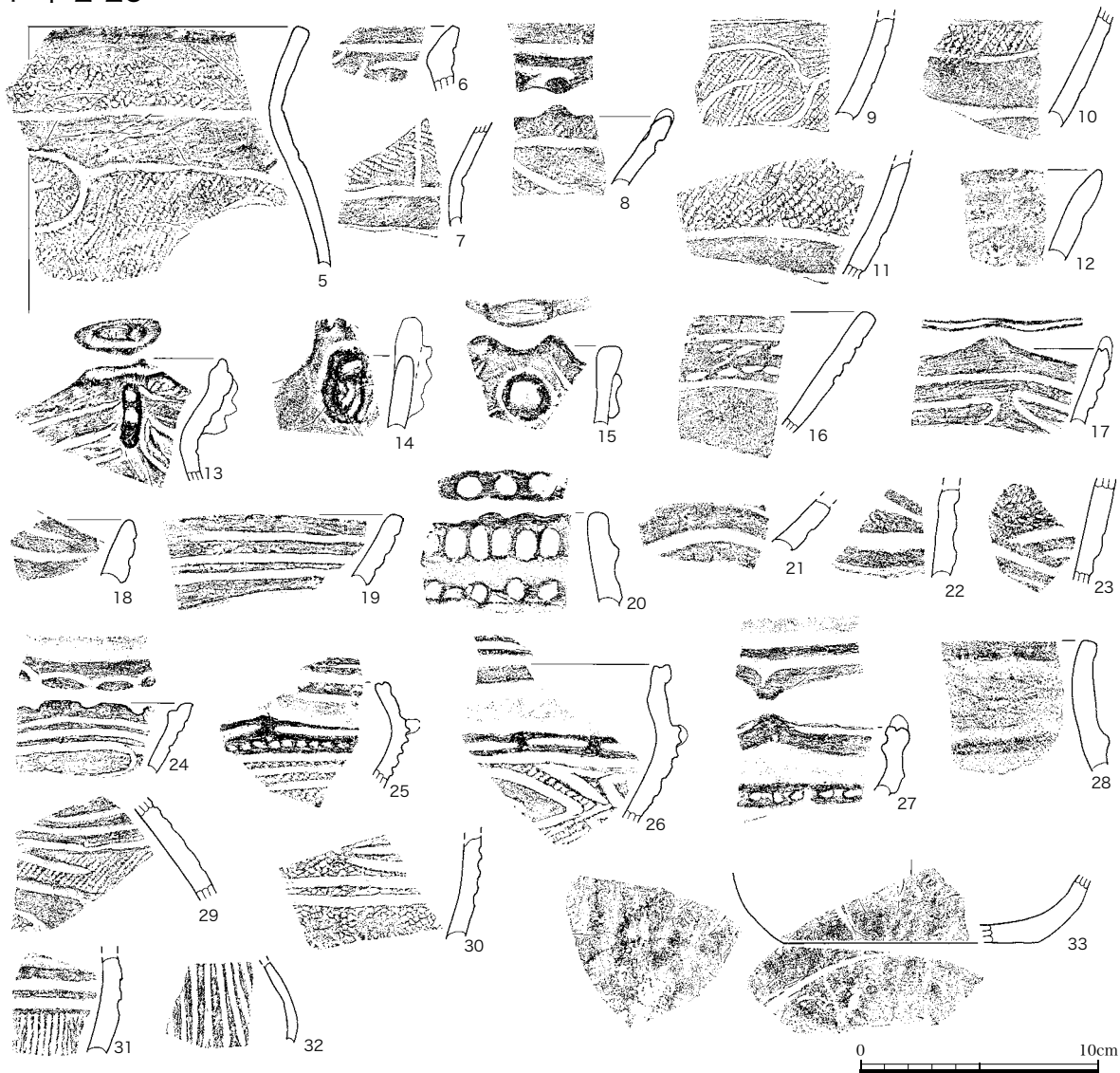


第326図 E区出土土器 (4) F1 2-24

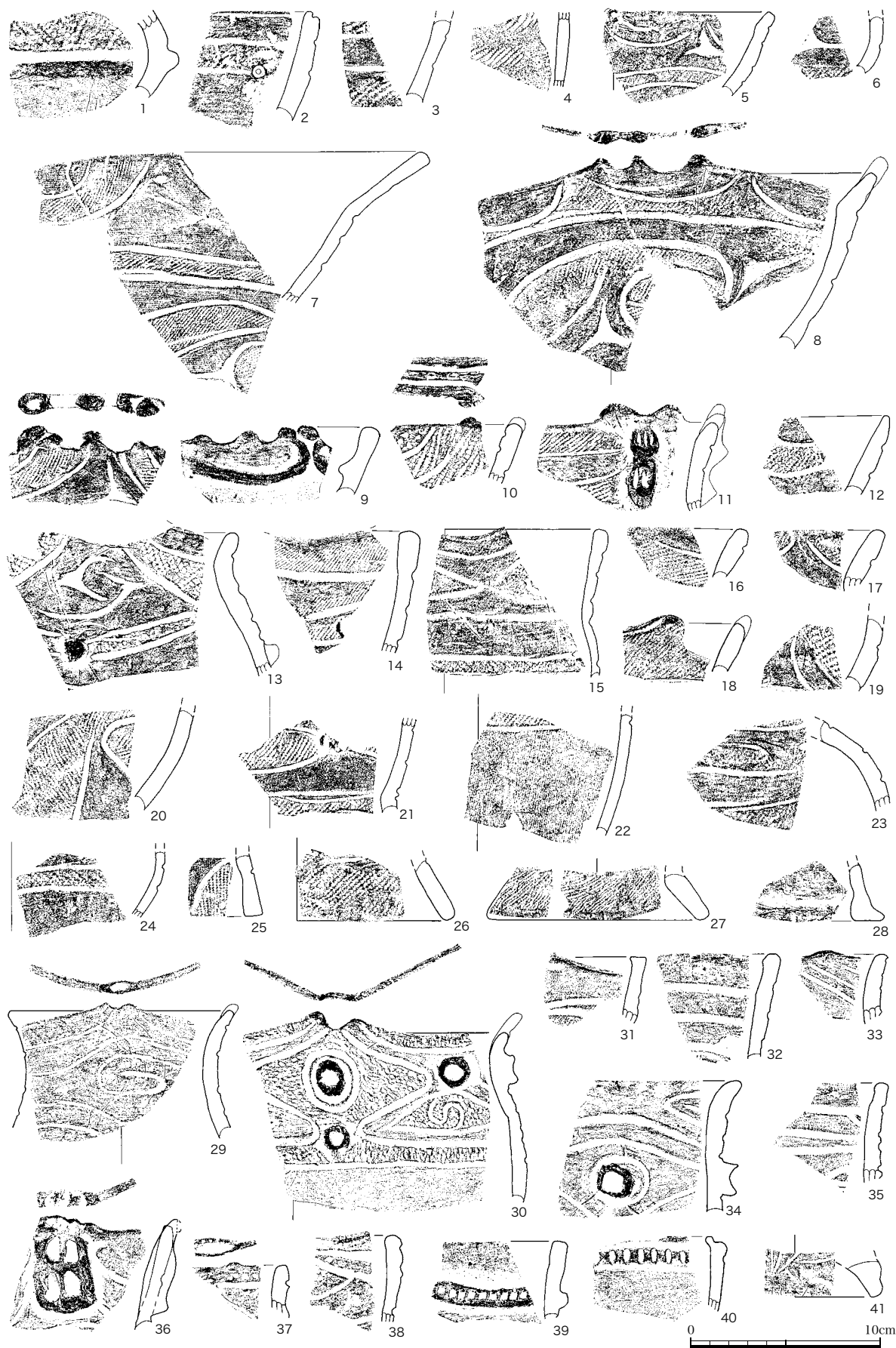
Fイ 2-22



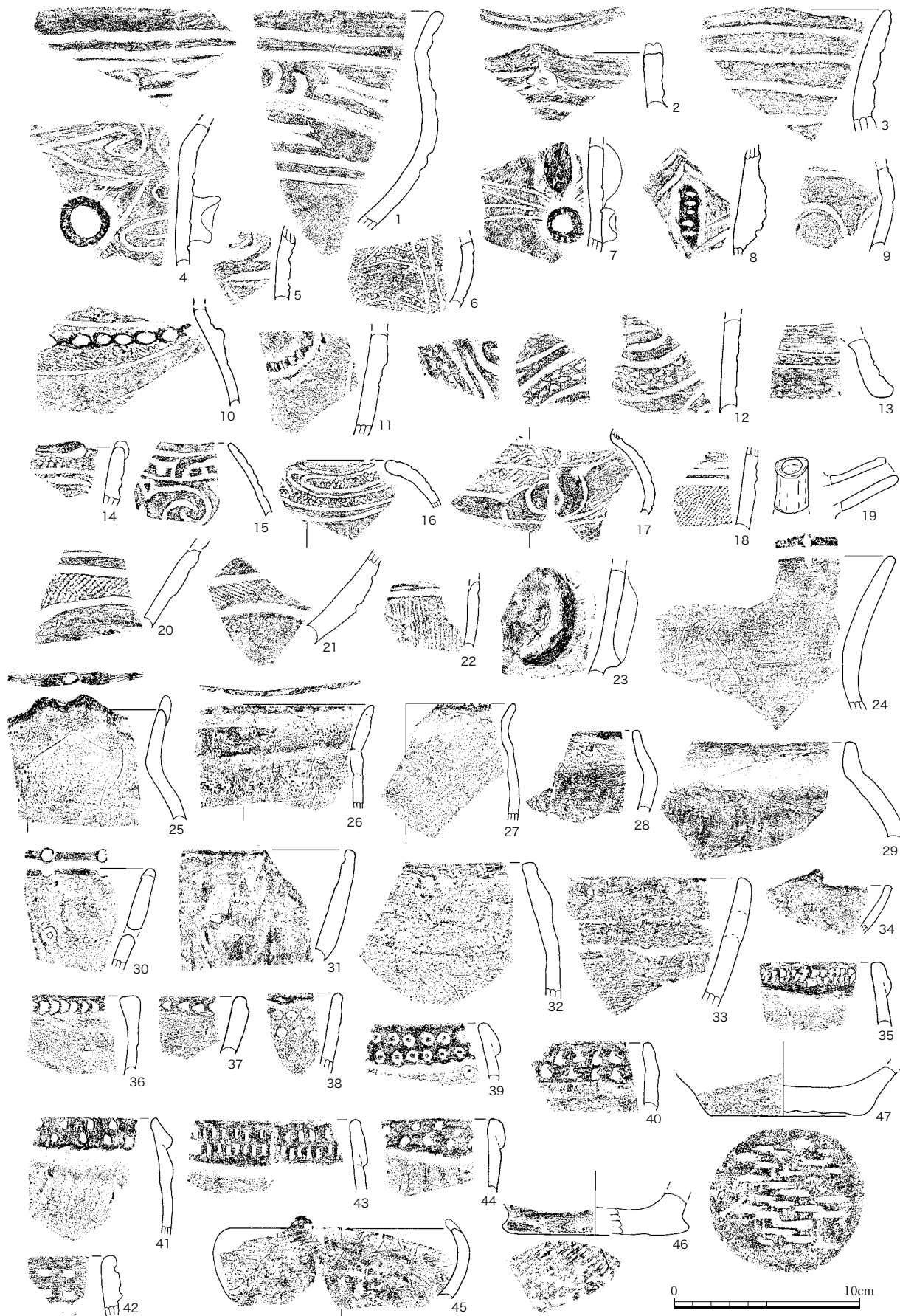
Fイ 2-25



第327図 E区出土土器(5)



第328図 E区出土土器(6) Fイ6-10



第329図 E区出土土器 (7) F16-10

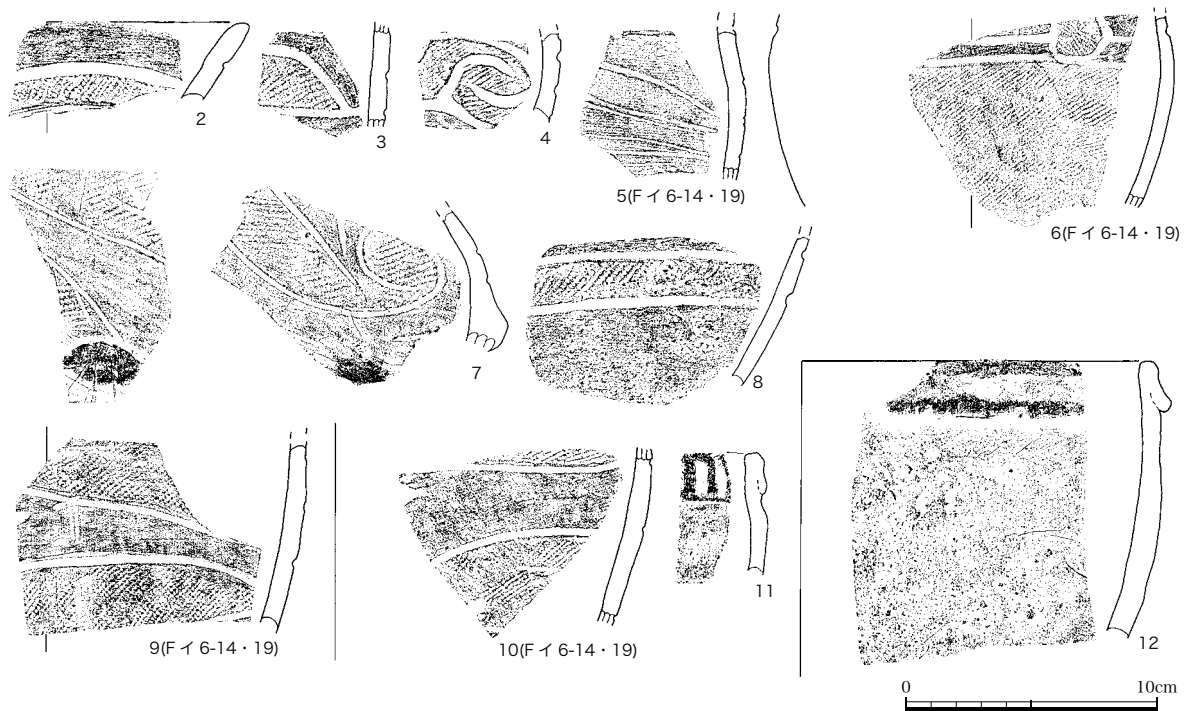


第330図 E区出土土器(8) Fイ6-14

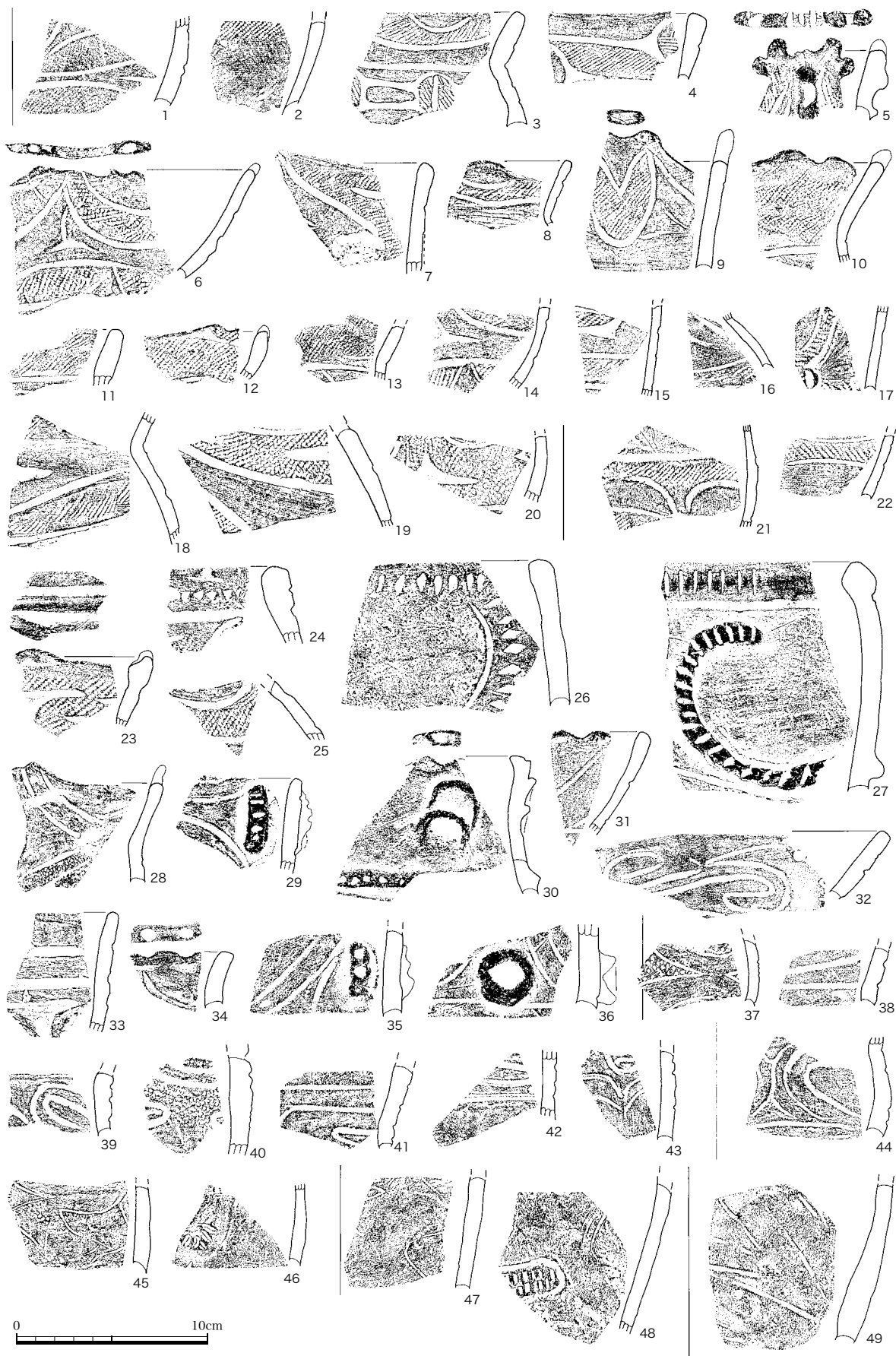
Fイ6-10



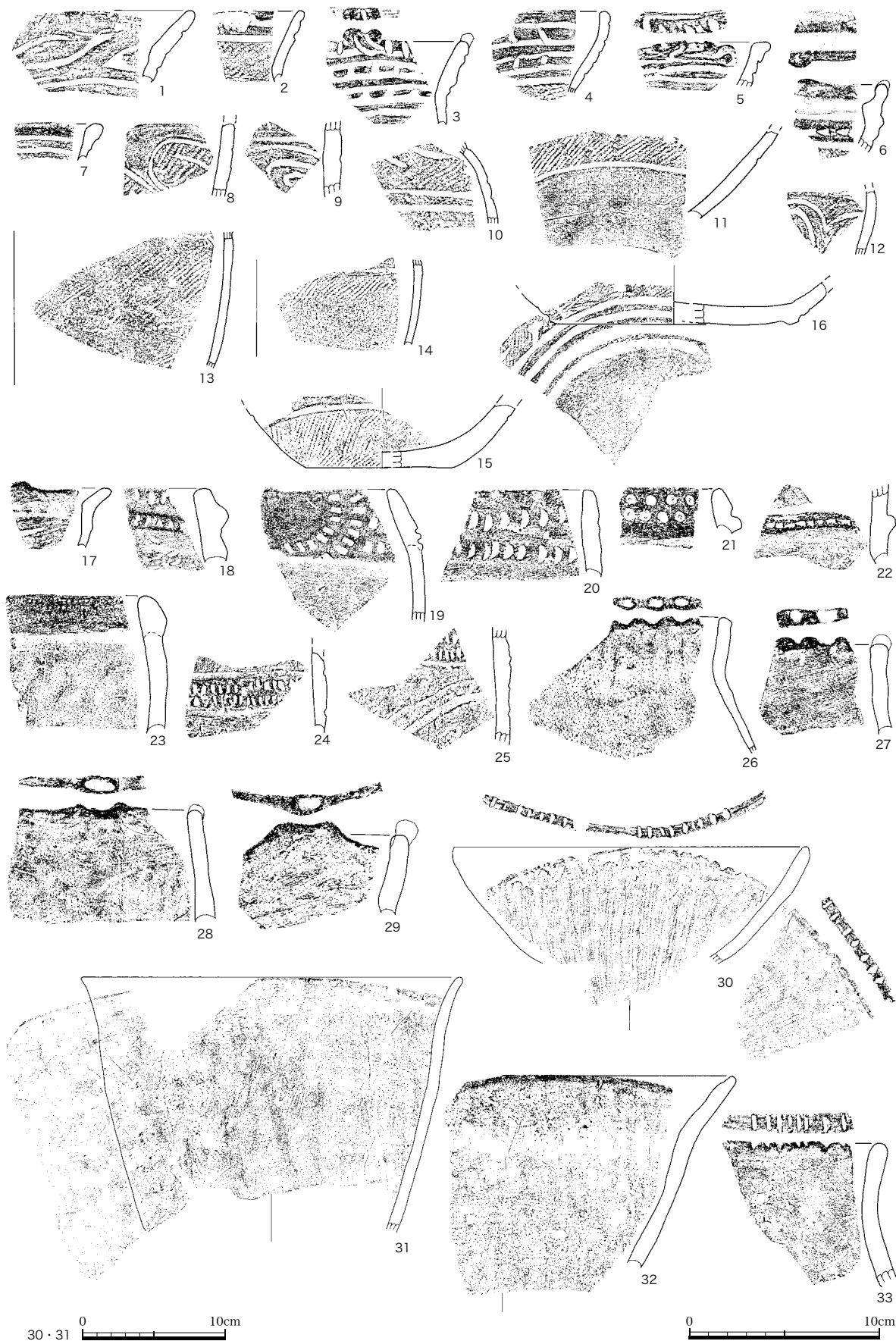
Fイ6-9・10・14



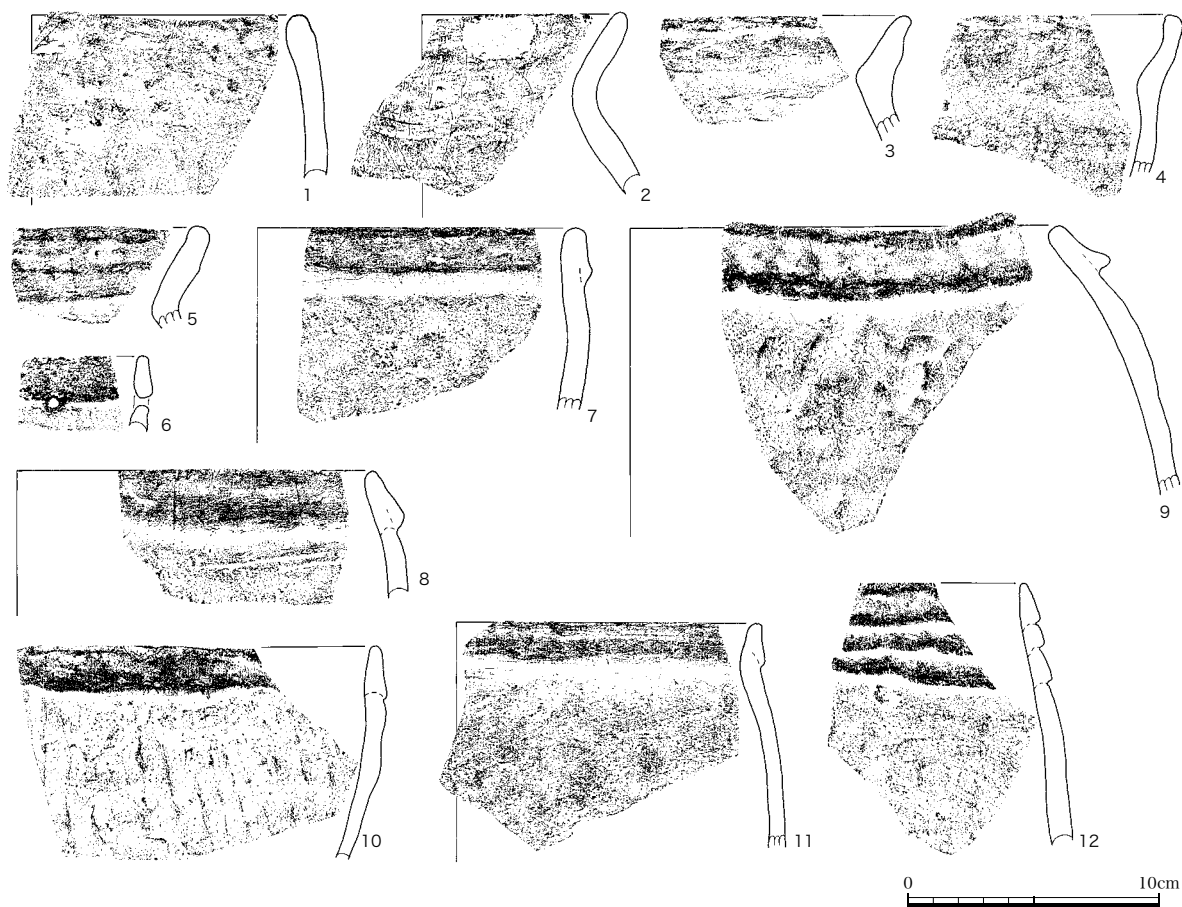
第331図 E区出土土器(9)



第332図 E区出土土器 (10) Fイ6-15



第333図 E区出土土器 (11) Fイ6-15



第334図 E区出土土器(12) Fイ6-15

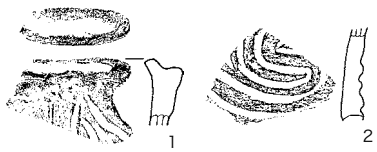
4面に同種の文様が配されるものと推定する。底部文様もあるようだが、遺存部が少なく判然としない。第339図27は大洞式半精製の仮称「刈沼類型」に近い土器だが、頸部の沈線間点列を挟んで上位はミガキに近い丁寧なナデ調整、下位はやや粗いナデ調整と観察される。Fイ7-6グリッドの第342図9以下の沈線で文様を描く一群は安行3c・3d式に対比される土器群であろうが、南関東例とは異なる文様や施文手法の例が目立っている。同図1～3のように前浦式が少量出土していることも注意される。

第348図はE区内の溝出土土器や最終的な確認を行ったトレンチからの出土資料を示す。トレンチ出土土器では晩期前半の資料がやや目立っており、VI層下位～より下方ではV層より若干古いものが多いことを示している可能性もある。少なくとも、調査し得なかったVI層下位以下でも多くの資料が含まれていたことを示していよう。ピット出土土器についても遺構の存在と併せ注意しておく。

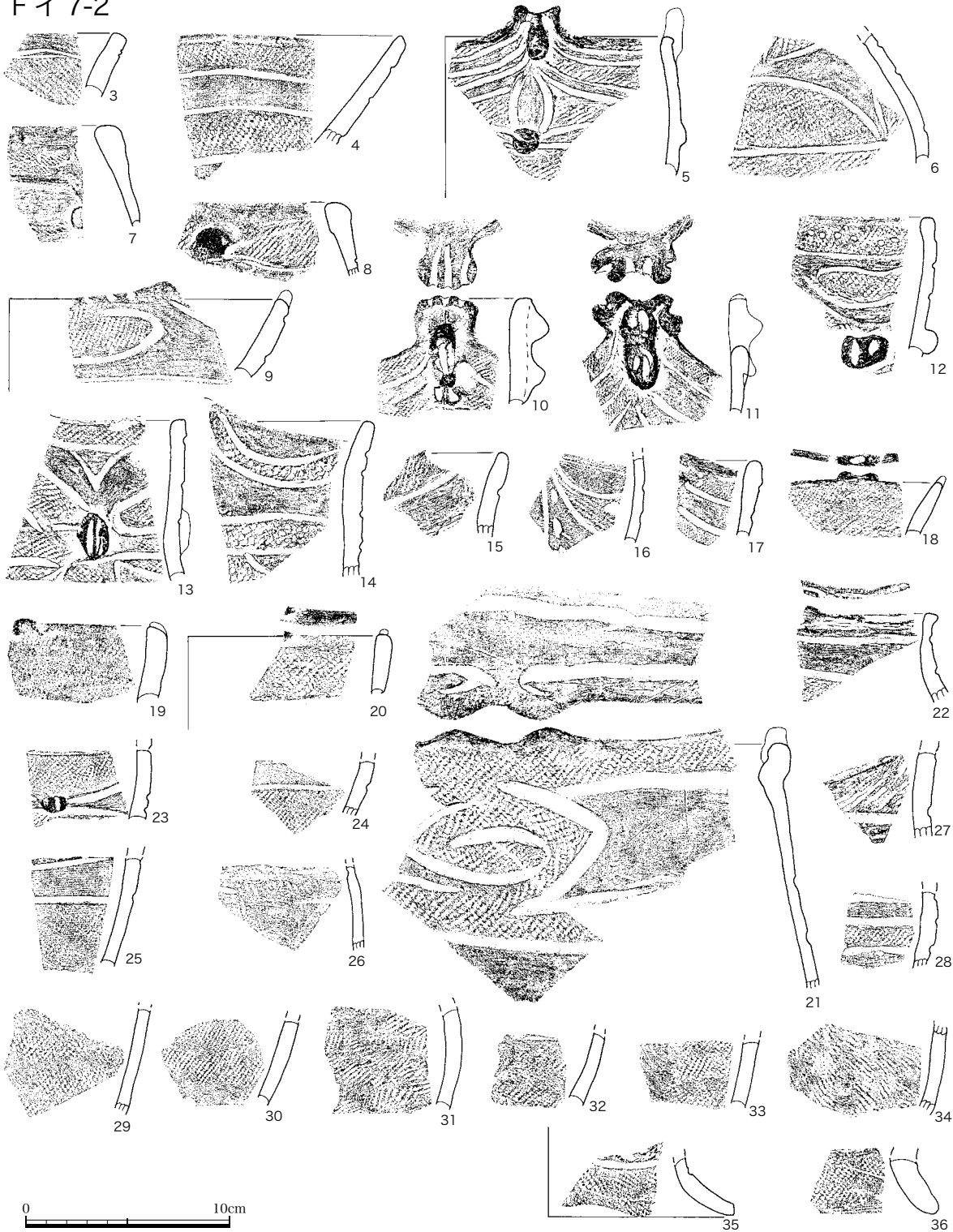
第349図には当初版組に組み得なかった資料を補足資料として示す。2は大きな深鉢で付帯口縁上に刺突が加えられている点、注目される。他にも大洞系の5、台付鉢7などの資料を示した。

なお、D区出土の石器について2点のみここで示す(第350図)。1はスクレイパー類もしくは使用痕ある剥片である。2も二次加工は殆ど見られないが、比較的鋭角な下端を使用している。

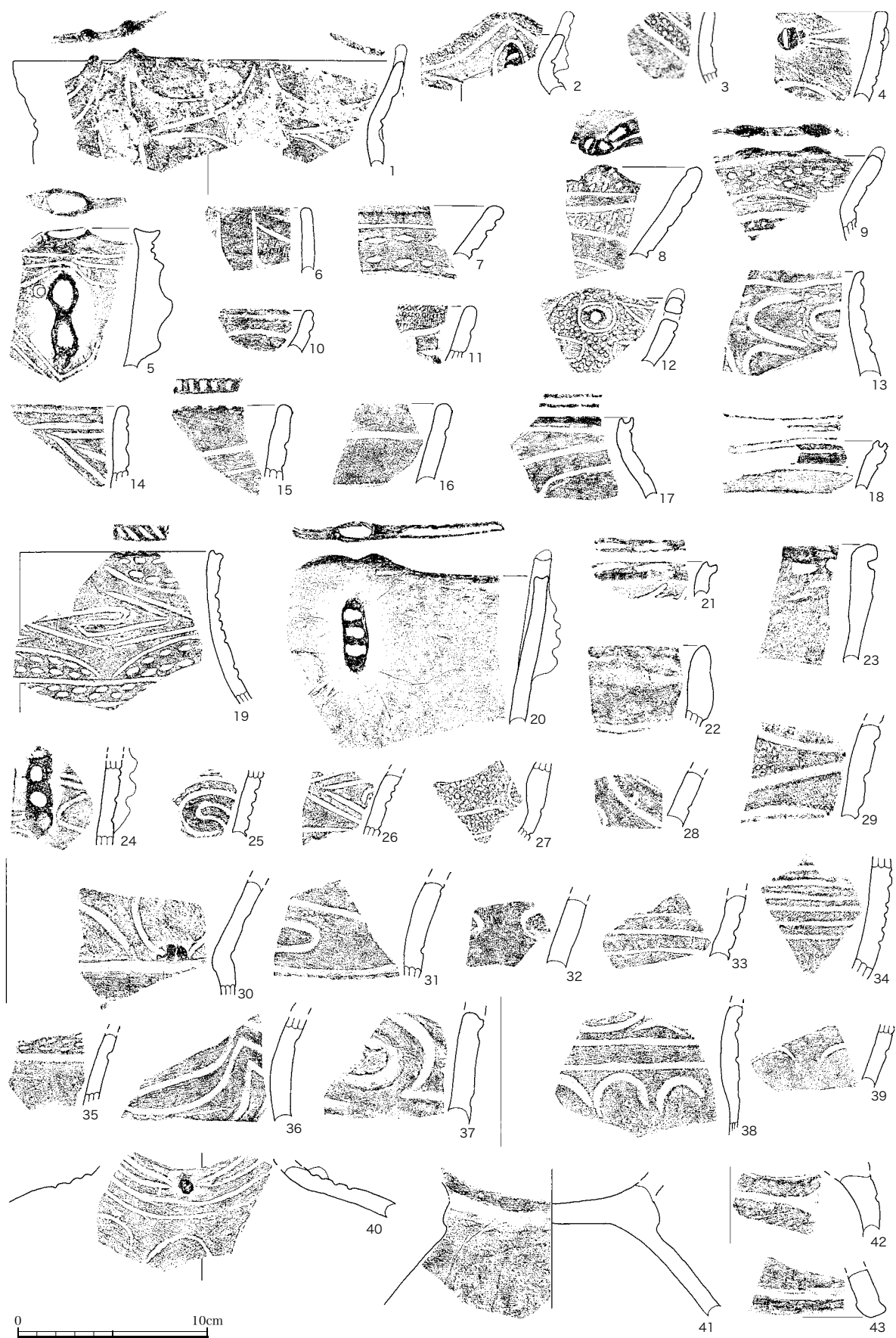
Fイ7-1



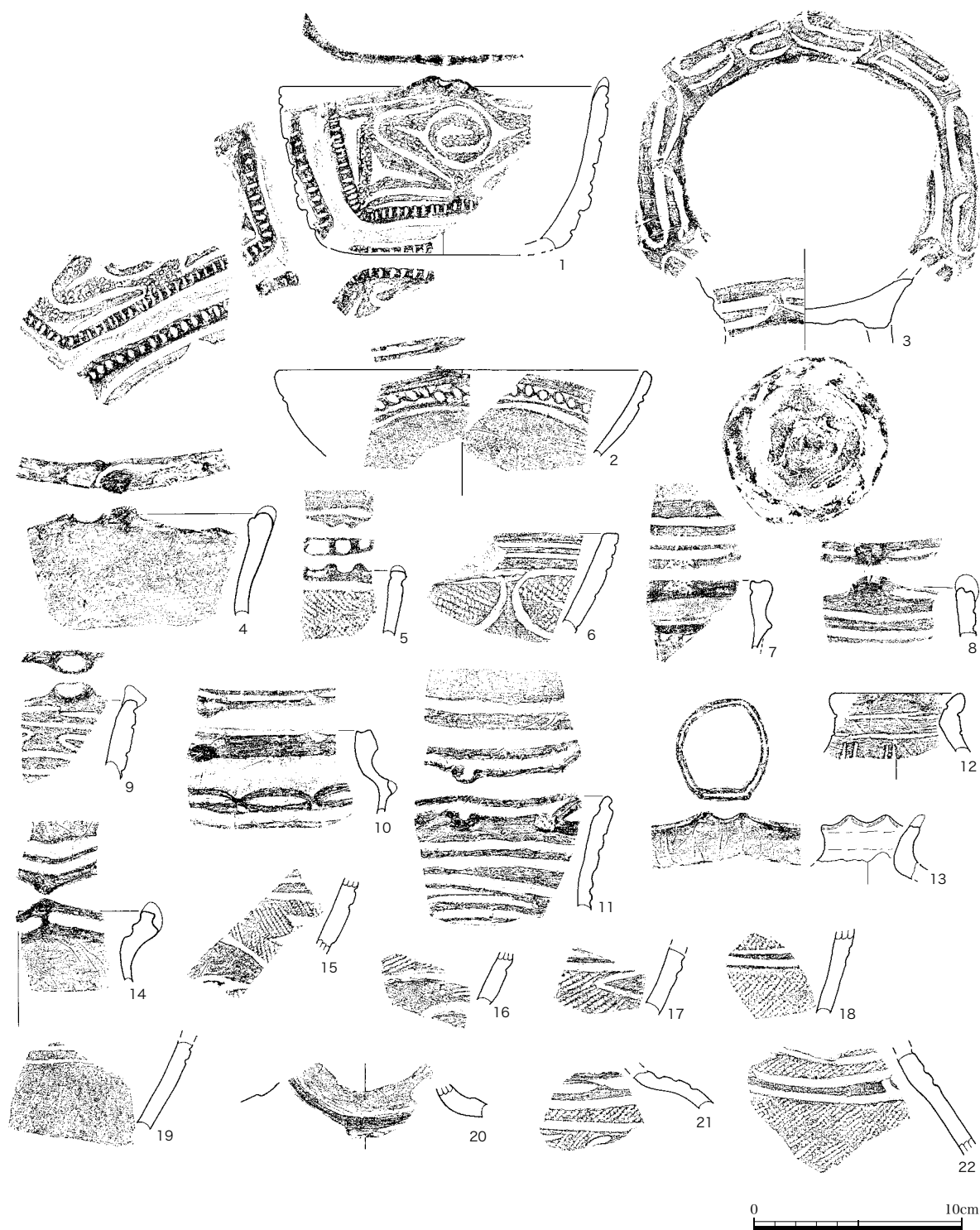
Fイ7-2



第335図 E区出土土器(13)



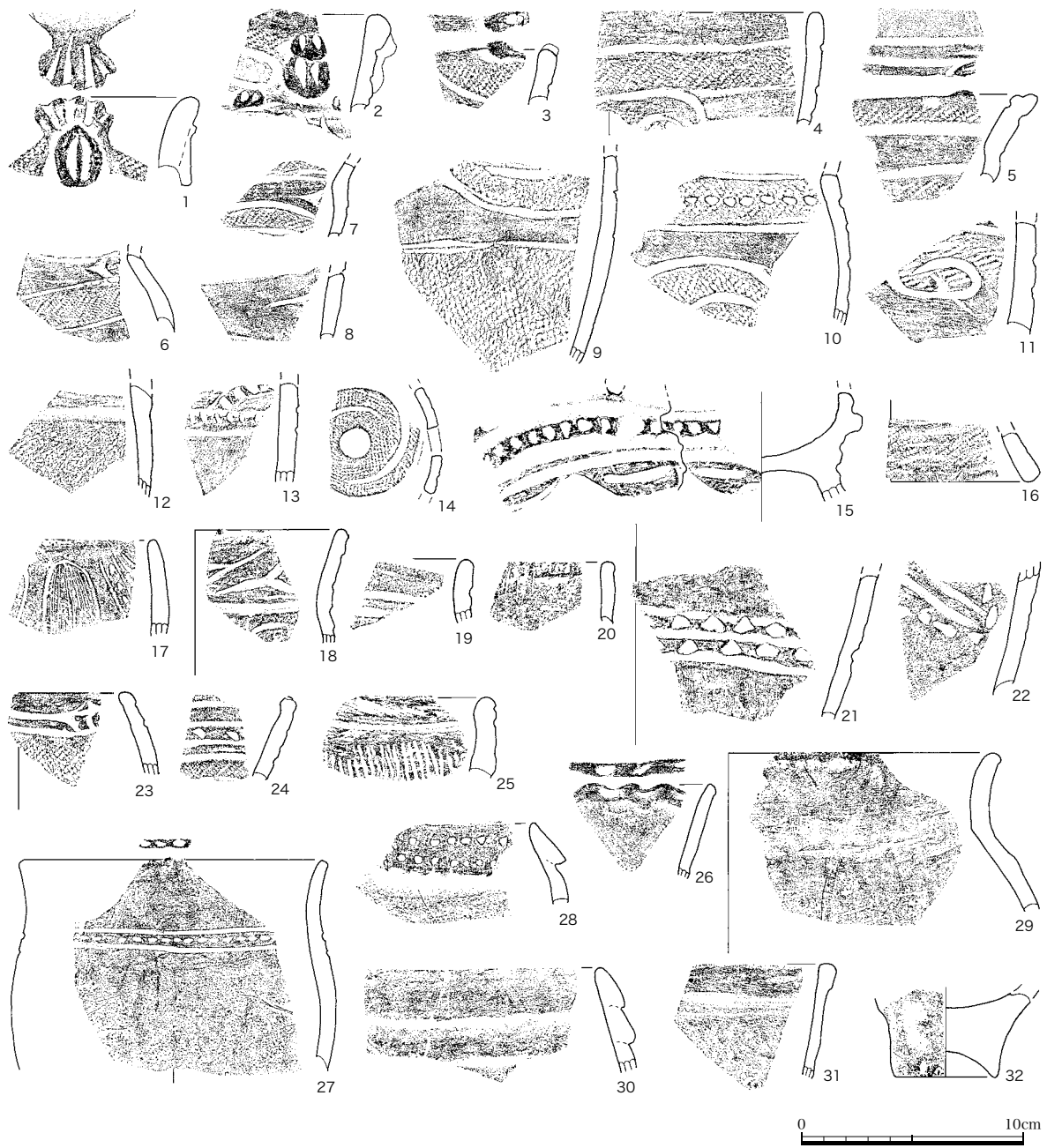
第336図 E区出土土器 (14) Fイ7-2



第337図 E区出土土器 (15) Fイ7-2

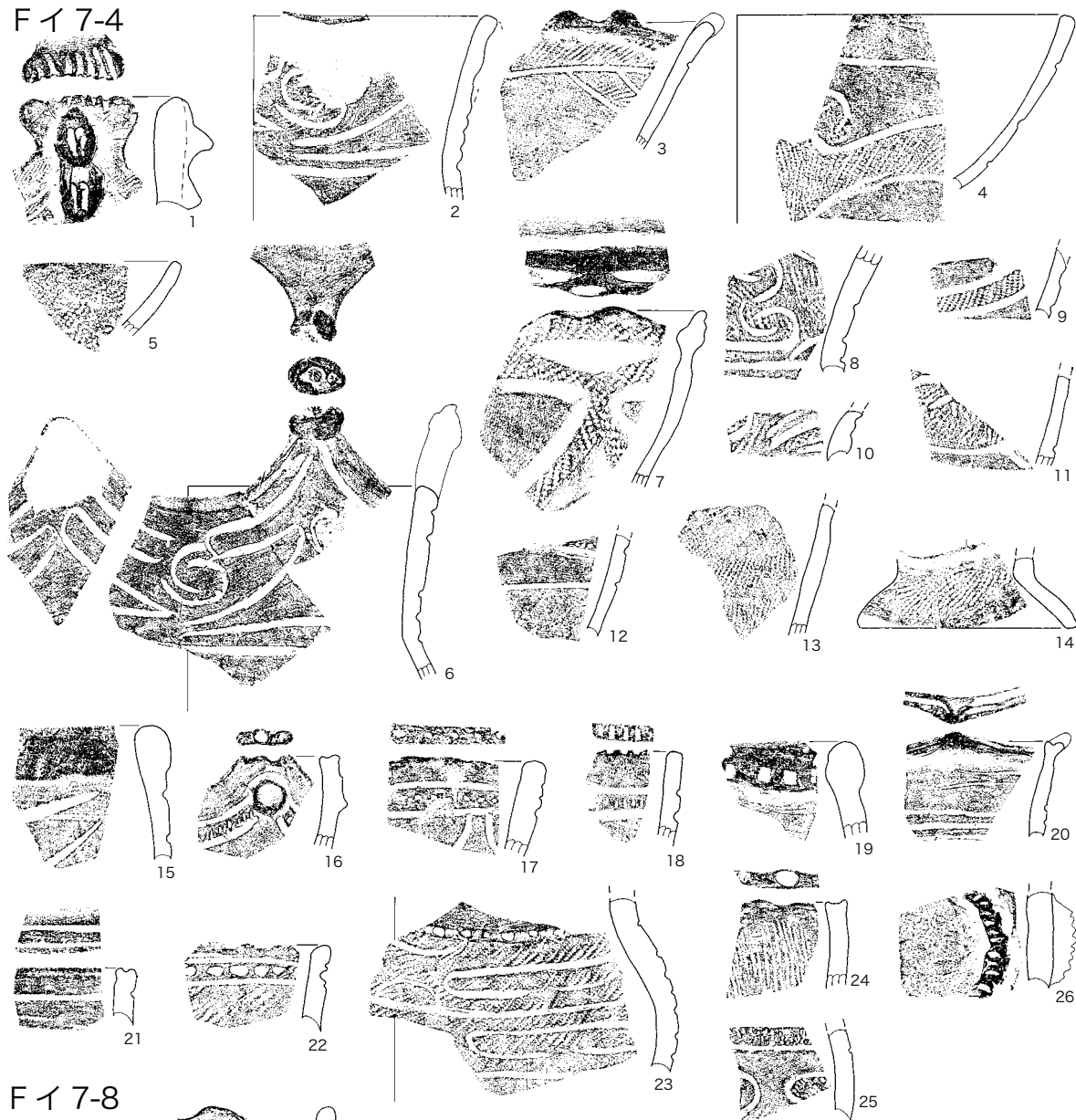


第338図 E区出土土器 (16) Fイ7-2

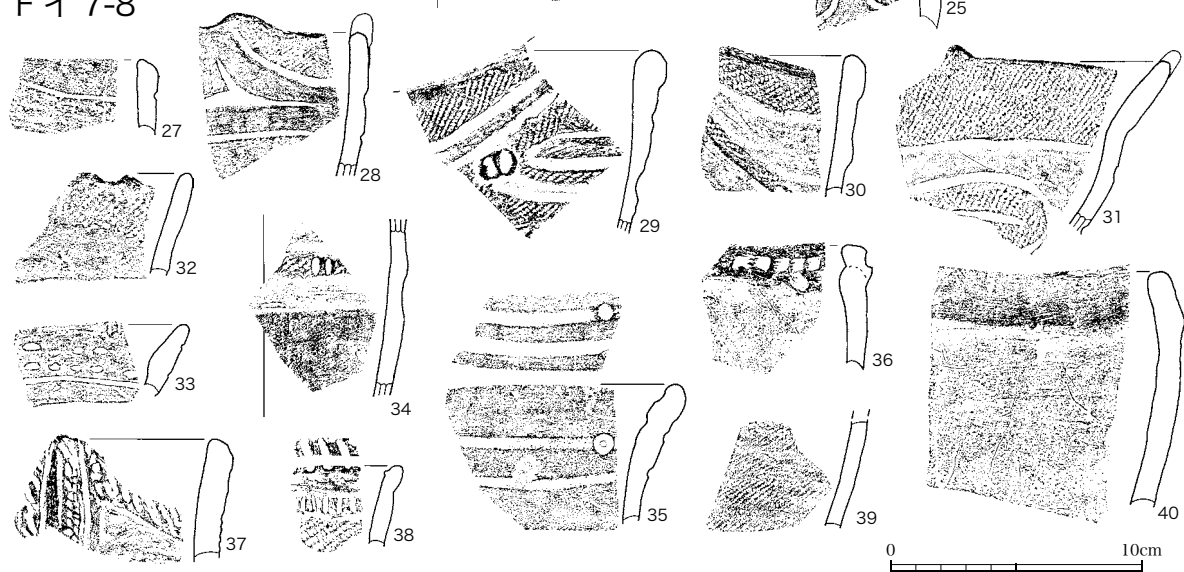


第339図 E区出土土器 (17) Fイ7-3

Fイ7-4

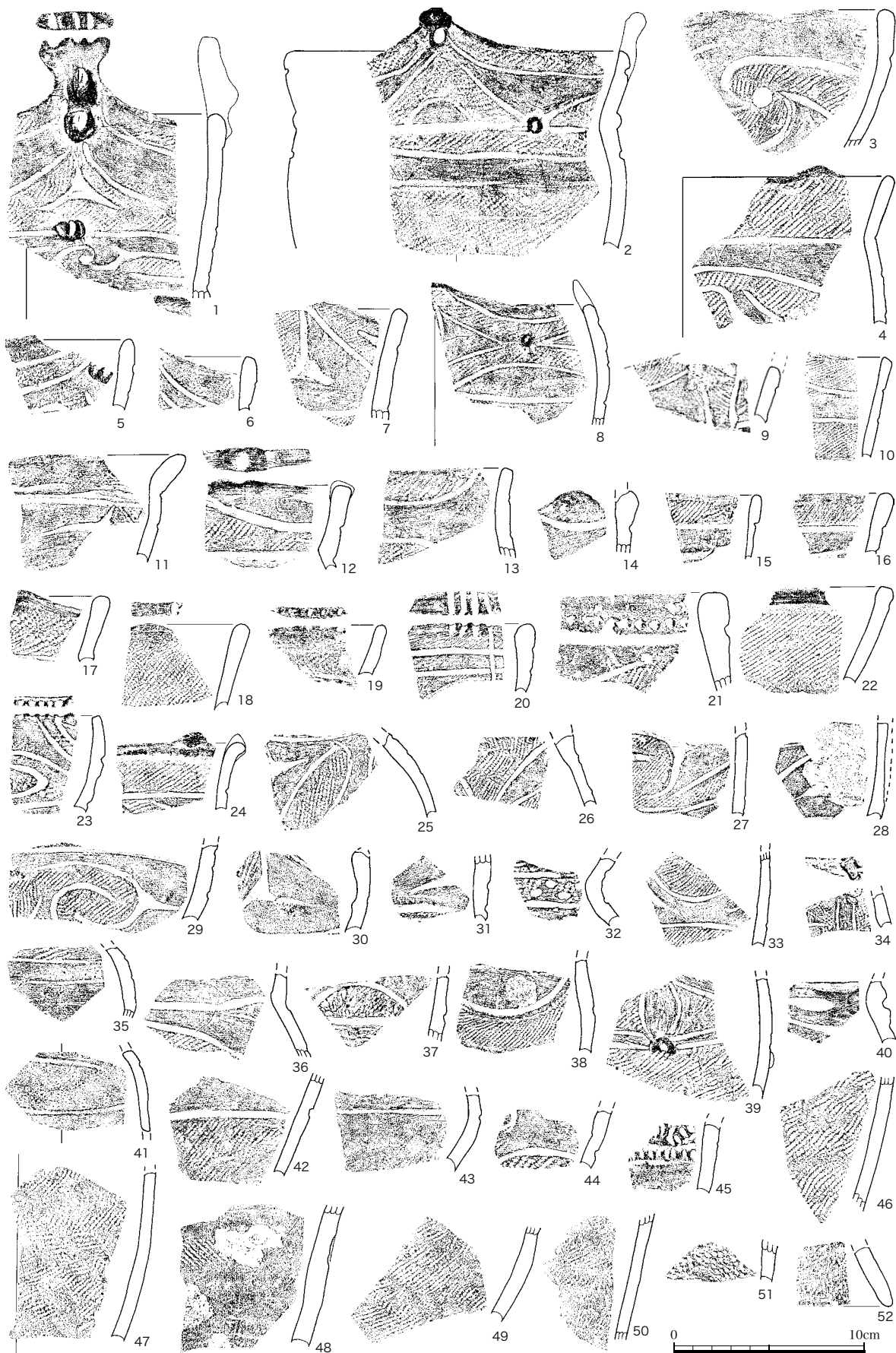


Fイ7-8

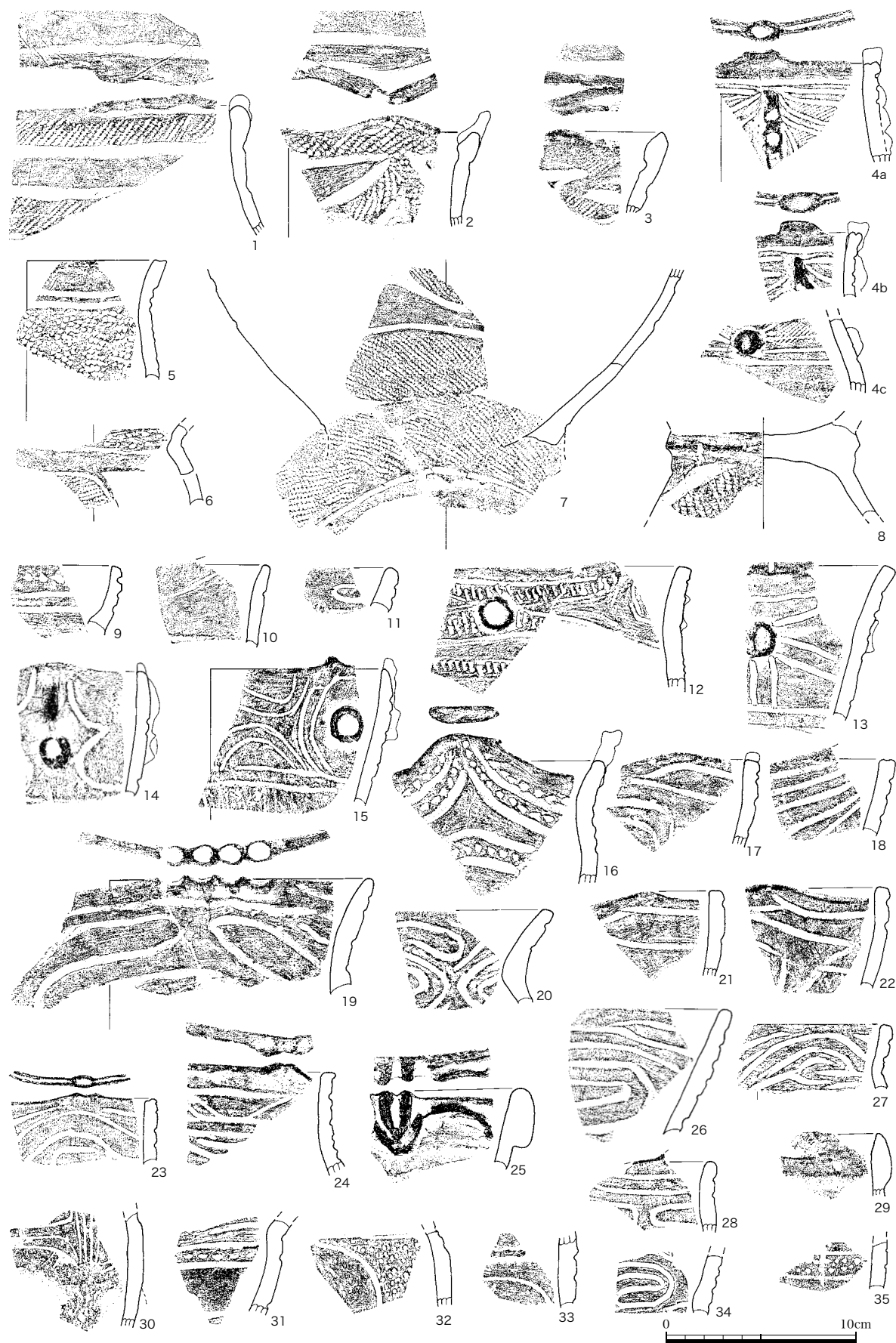


0 10cm

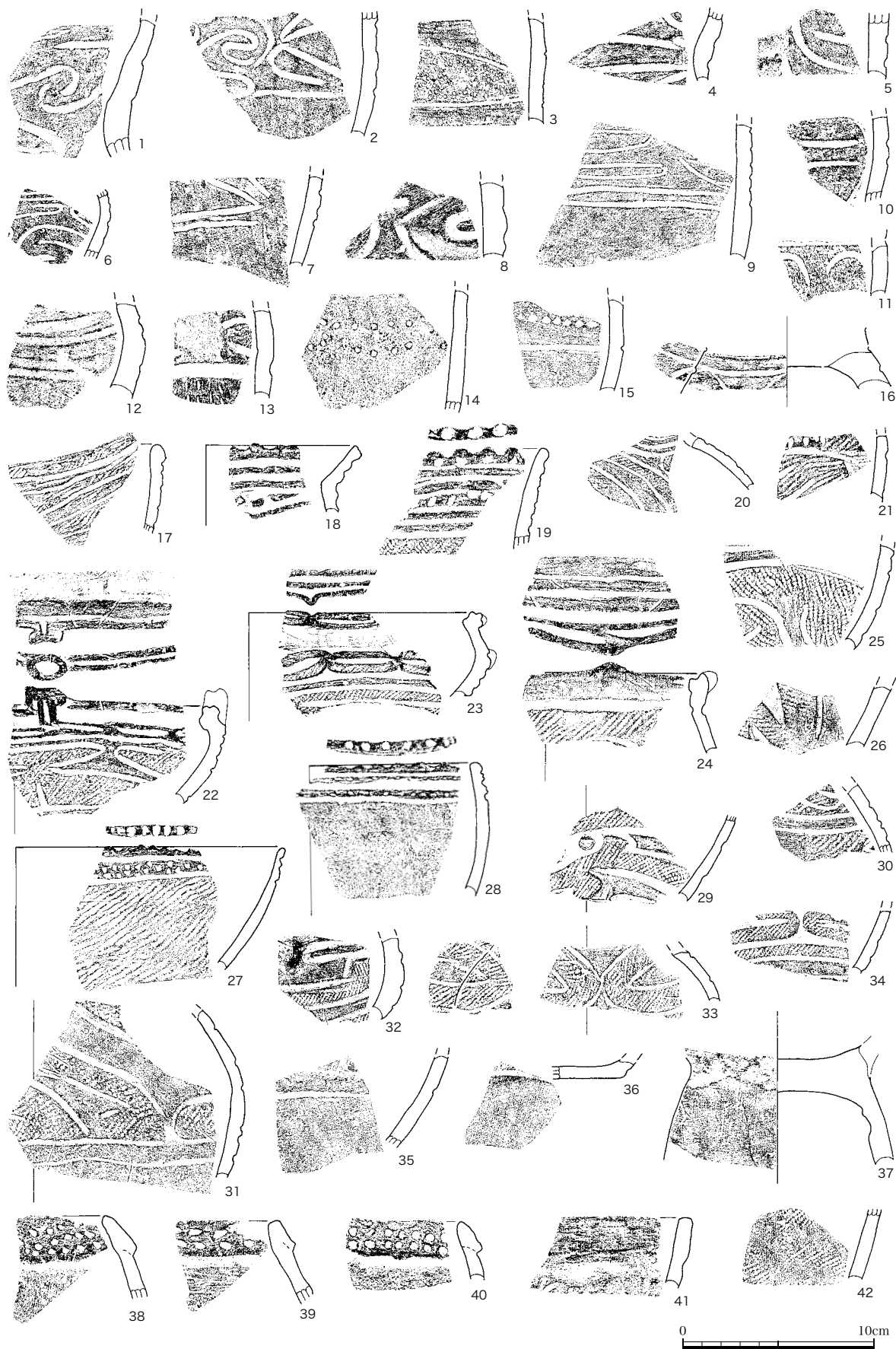
第340図 E区出土土器(18)



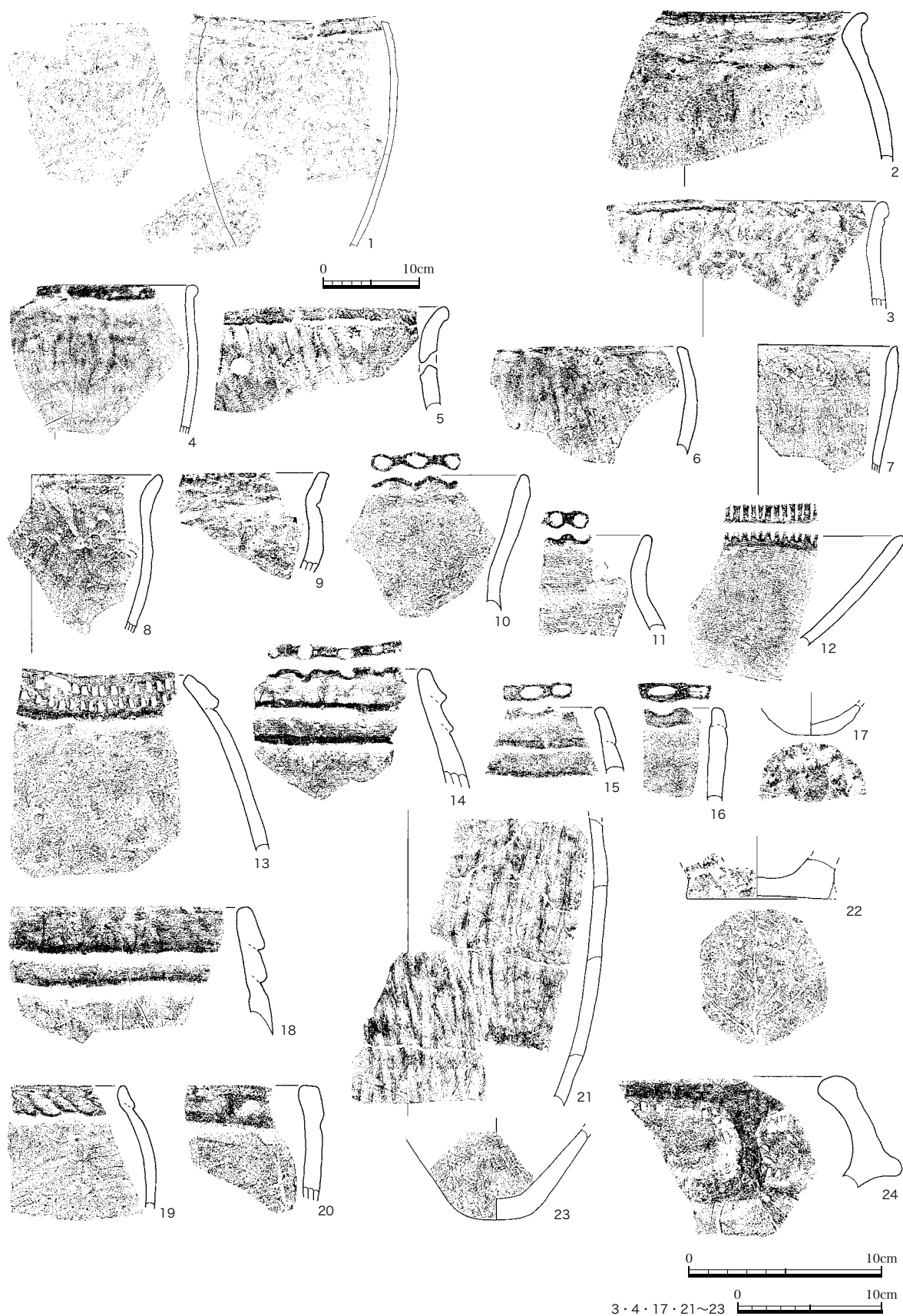
第341図 E区出土土器 (19) Fイ7-6



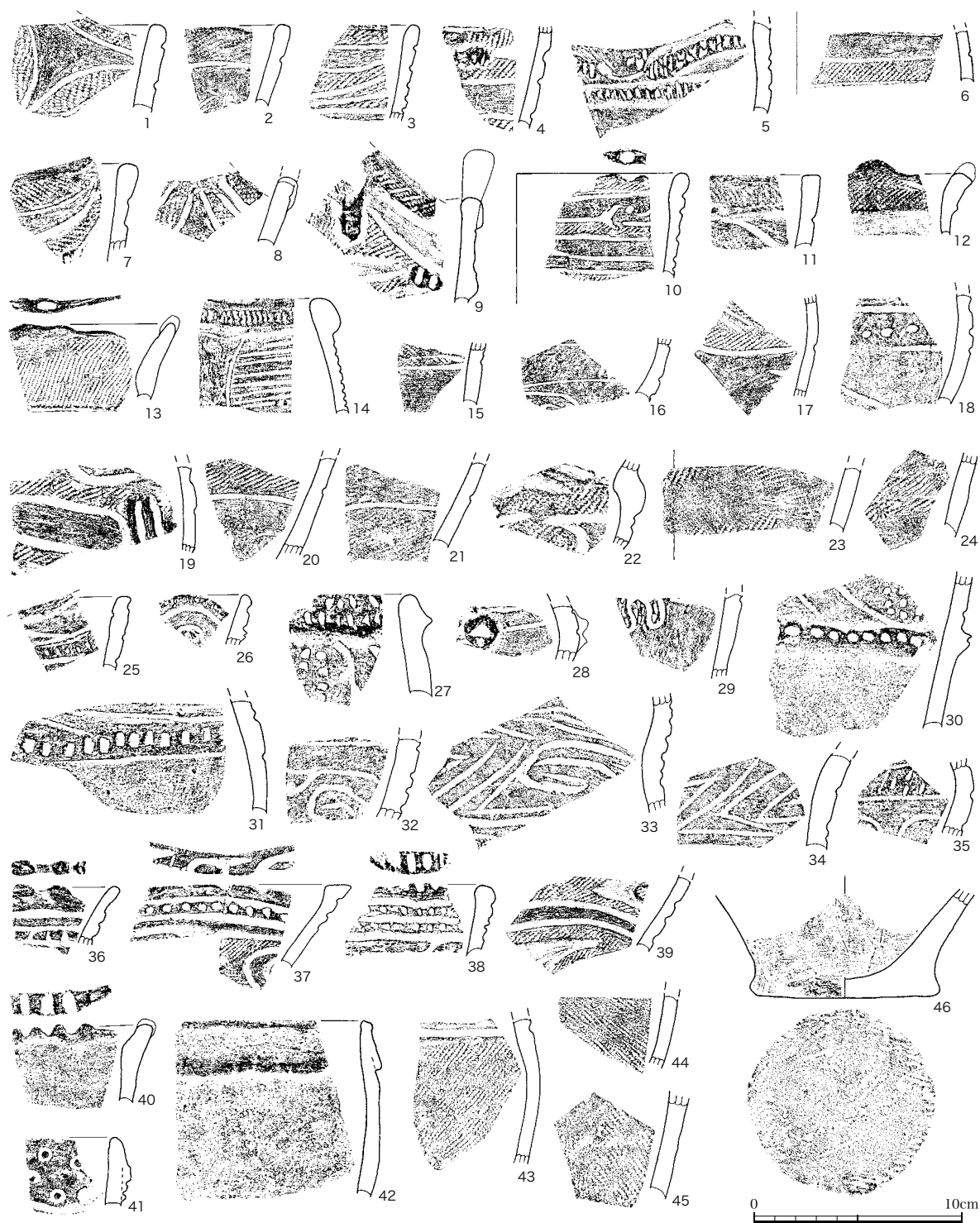
第342図 E区出土土器 (20) Fイ7-6



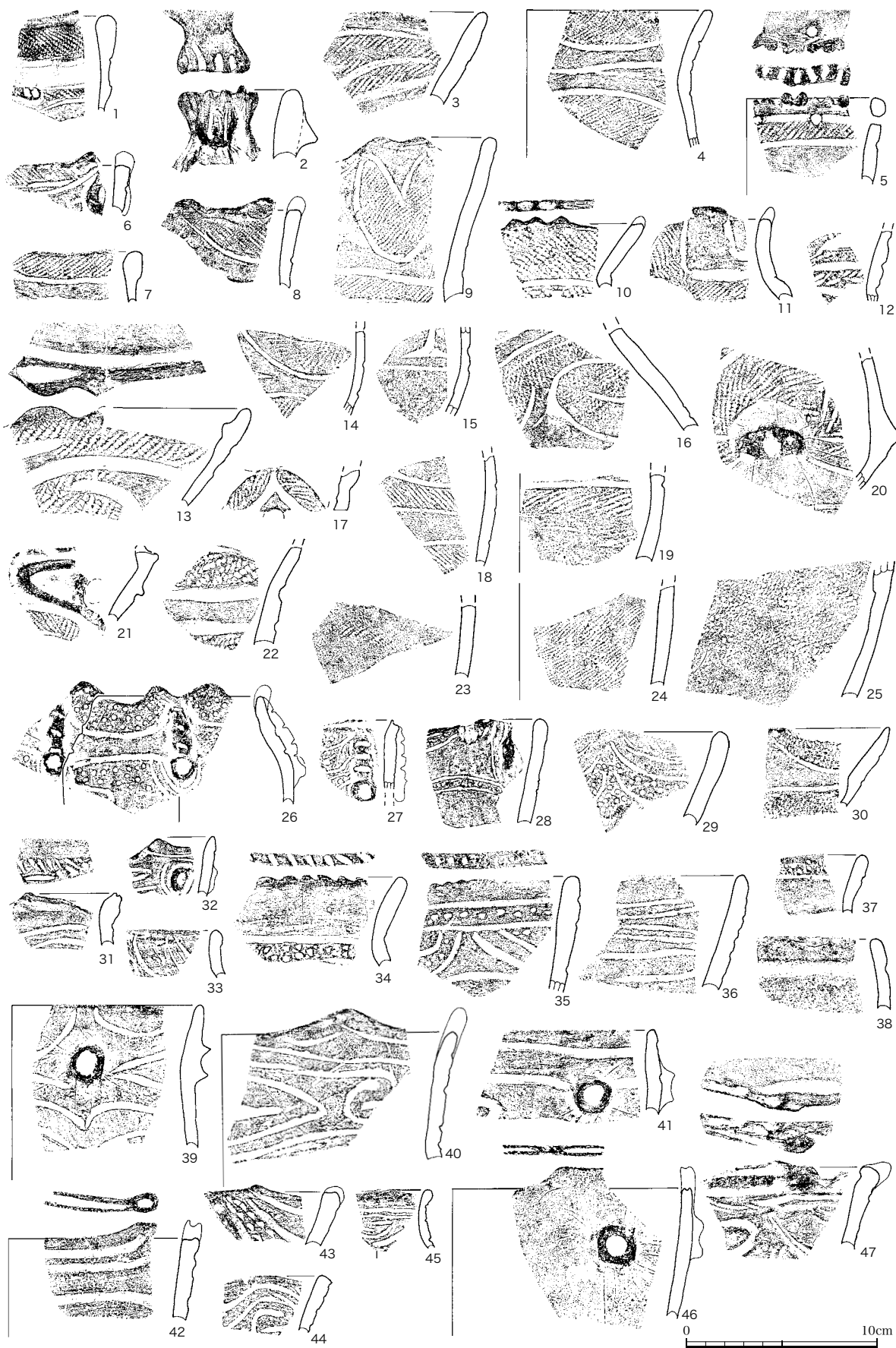
第343図 E区出土土器 (21) Fイ7-6



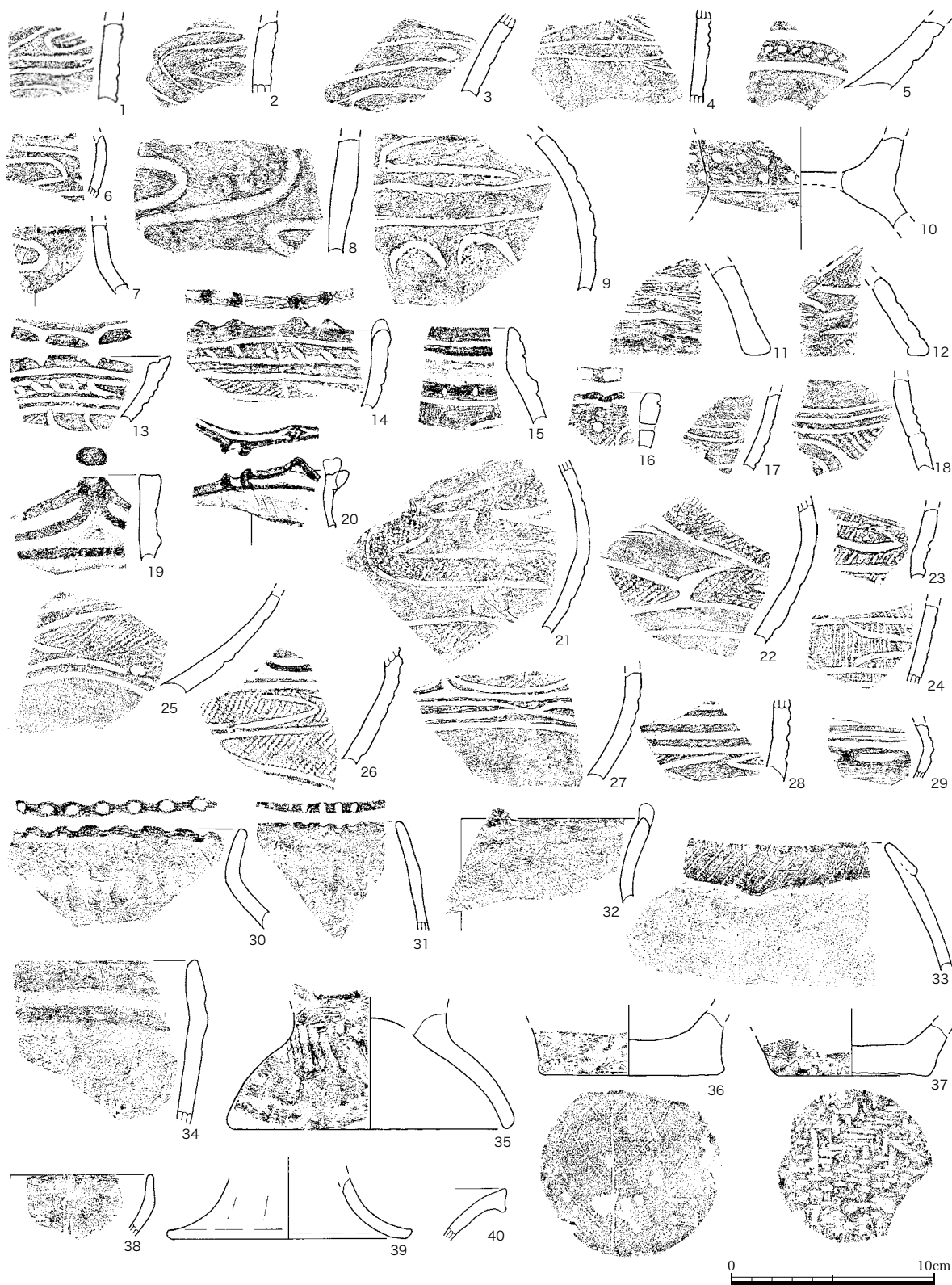
第344図 E区出土土器(22) Fイ7-6



第345図 E区出土土器 (23) Fイ7-7

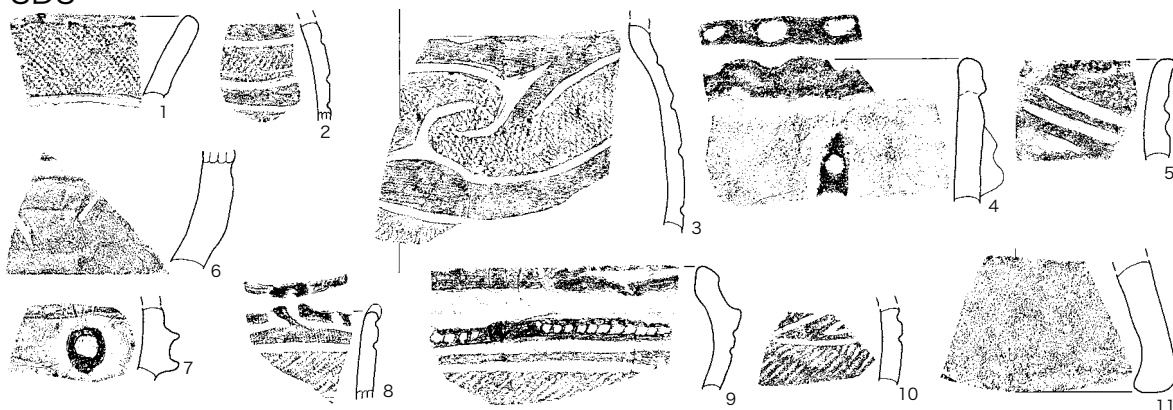


第346図 E区出土土器(24)SD2

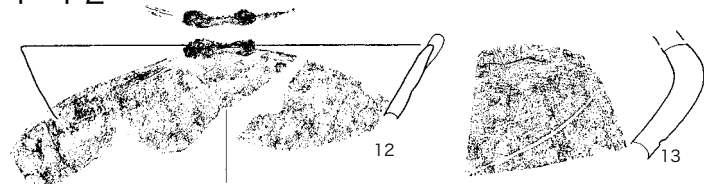


第347図 E区出土土器(25)SD2

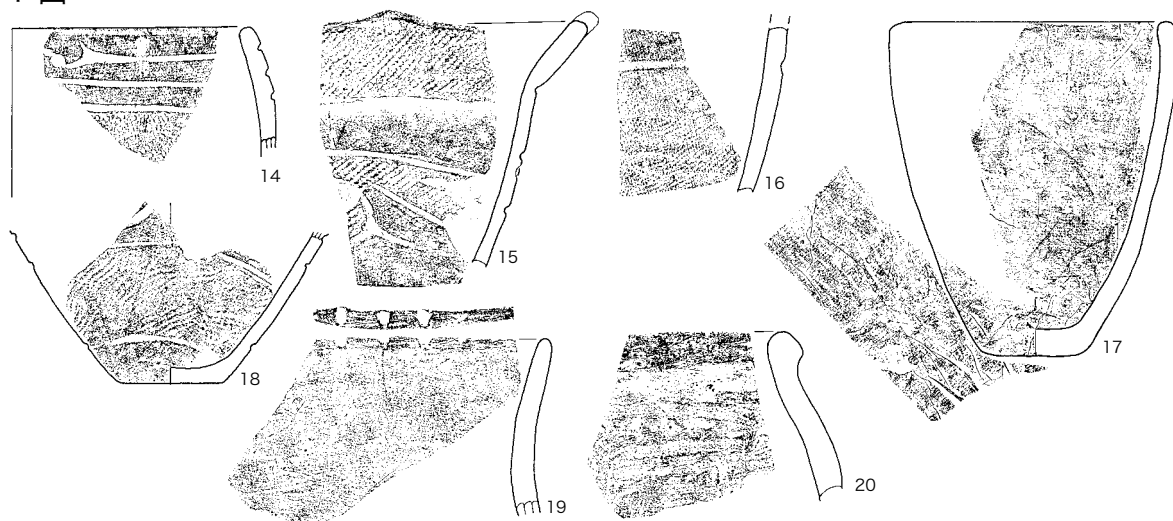
SD3



T・P2



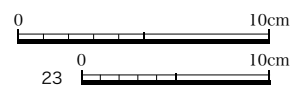
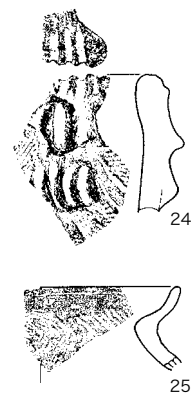
T西



T中央

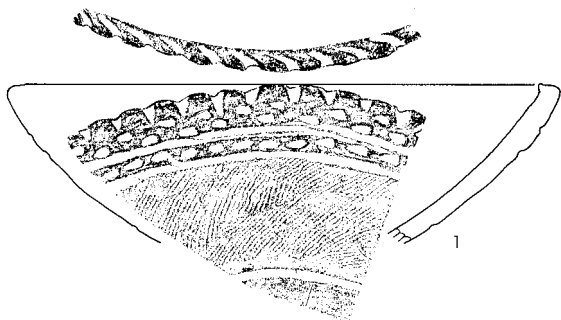


E区



第348図 E区出土土器(26)

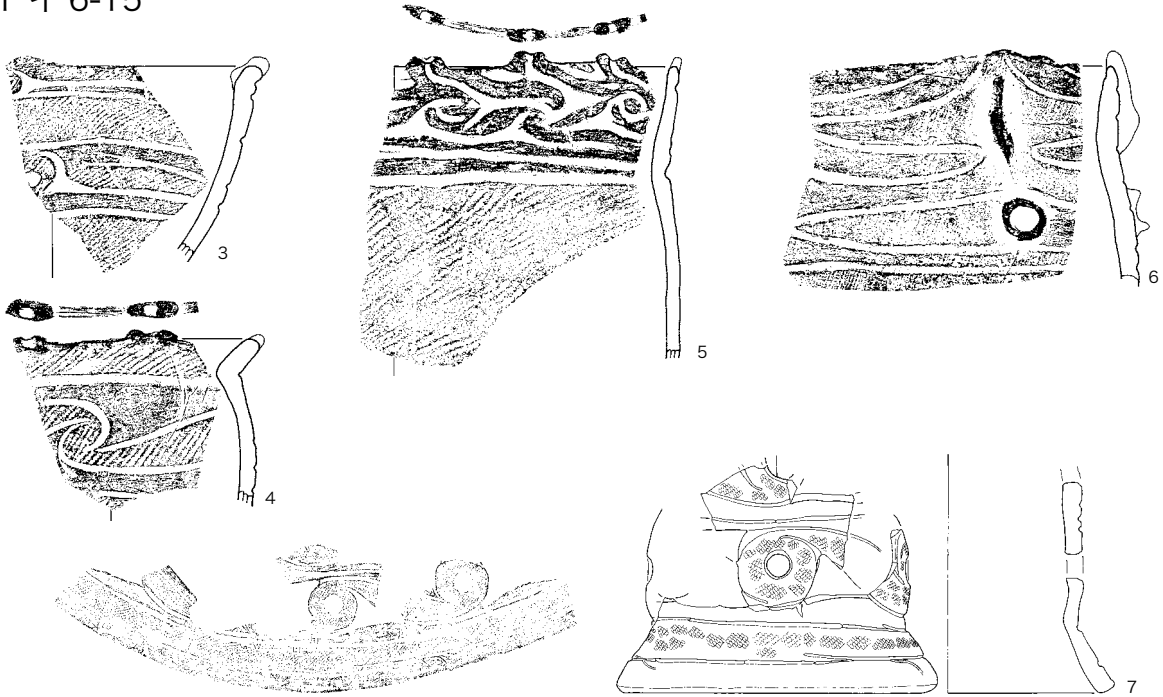
Fイ2-24



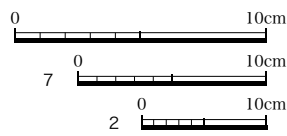
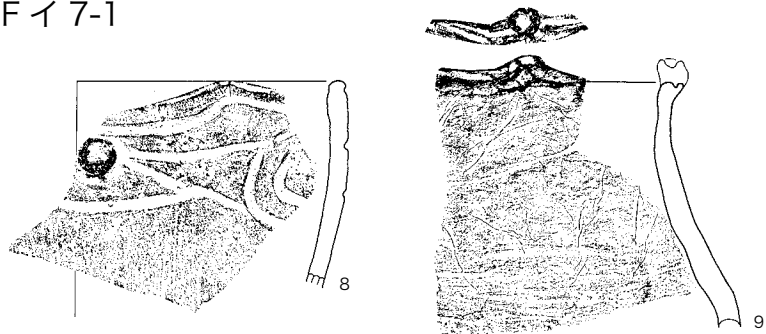
Fイ6-10



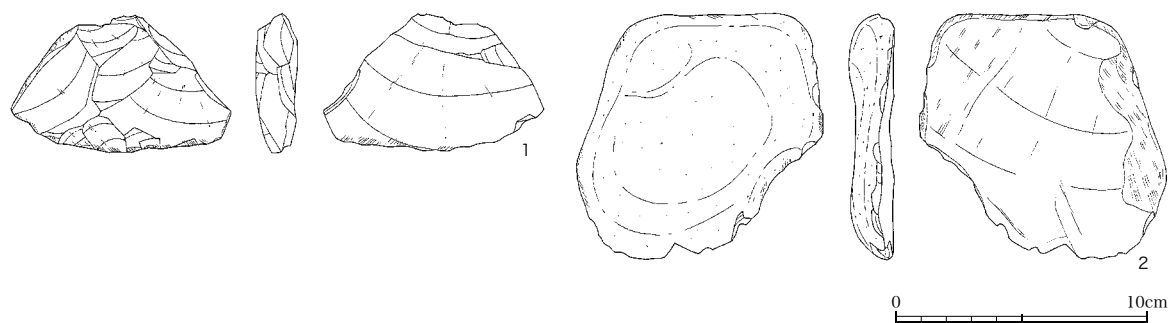
Fイ6-15



Fイ7-1



第349図 E区出土土器(27)



第350図 D区出土石器(1)

第6表 D・E区遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	軸・覆土・遺物(石器未集計)	遺構図版	遺物図版	写真図版
S10	526	430	70	N-27° -W			
S1	86	78	25		296	318	
S2	53	43	32		297	318	
S3	124	96	34	N-22° -E	296	318	
S4	68	47	20		296	318	
S5	71	40	20		296	318	
S6	97	46	27	N-5° -E	296	318	
S7	44	38	18	暗灰褐色土：炭化物粒微量、砂少量、しまりやや弱。	296	318	
S8	53	47	24		296		
SD2	1140	113	34	N-61° -W	293		29
SD3	1110	104	38	N-59° -W	293		29
SD4	1050	82	33	N-53° -W	293		29
E区 SD							
SD2	1250	95	47	N-69° -W	295		29
SD3	2950	200	63	N-87° -W ~ N-48° -W	295	348	29
SD5	2500	110	47	N-73° -W ~ N-52° -W	295		29
E区トレンチ							
P1			53	ピット	294		
P2			65	ピット	294	348	
SX1				焼土跡	294		

第6節 G・H・I区の遺構と遺物

G・H区の調査概要

このG～I区は開発区域内の区分では工業用地内の道路部分にあたる場所である。この部分の調査は実質調査年度の後半からの着手となったこともあって、極めて粗い調査とせざるを得なかった。遺物分布密度の低いところでは一部重機による包含層掘り下げを行っている。

H区やG区では平面的にグリッド掘り下げを進めたが、H区東端近くではかなり濃密な遺物分布があり、これを取り上げつつの調査となった。この過程でVI層以下の層の厚さが場所により異なることから、VII層～IX層が厚くやや高まり状になっていることが確認され、これの平面位置記録を全体図中に示した(第351図)。この外側ではVII層～IX層の分布はなく、VI層が厚く堆積している状況とも言える。B区でもVII～IX層の分布やX層のあるところで遺構遺物の確認があることから、層形成と人為的な活動痕跡との相関を窺わせるものであり、B区等と併せての更なる検討が必要となろう。結果的にこの部分での遺構の確認は無かったものの、多量の遺物出土と併せ、また後期末資料が多いとの所見も併せての検討が必要となろう。なお整理時においてもこの部分の整理が後半となったことから、土器についても極めて不十分な、一部のみの図示となった。復原個体さえ未図化のまま残っており、いずれ補足する機会は持ちたい。また石器についてもG～I区については未分類のものも残っており、数量提示の部分さえ不完全である点、了解を願いたい。

なおG区については、若干H区やB区より遺物が少ないようにも捉えられる。この南部分での水路工事立会においても、G区より東の方では遺構遺物を確認できなかったという所見もあり、集落範囲の限界に近いことをも窺せる。

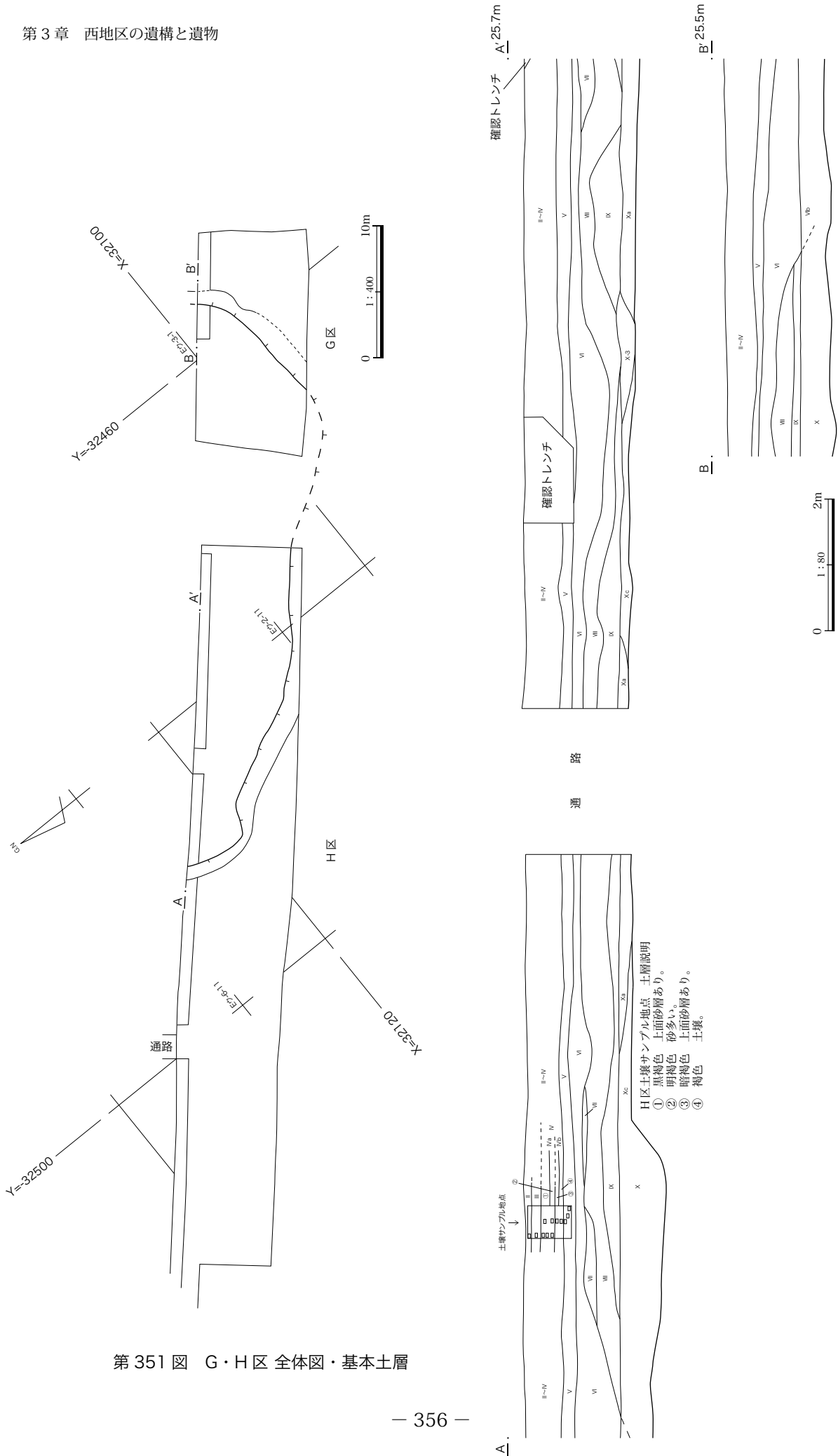
G・H区出土土器(第352～354図)

第352図にG区出土土器の内から3点のみ示す。調査時や整理過程における分類時の感覚的な所見ではあるが、後期末の資料が多い傾向が認められた。ここでは極めて限定的だが、瘤付系の鉢1、深鉢2、注口土器3の3点を示す。2は入組部内部に凹点(玉抱入組文の「玉」部分)を有し、三叉部はやや深く抉り込んでいる。薄手で沈線施文後の無文部ミガキも丁寧である。3の注口土器は口縁端部が若干突出する突起6単位で、幾つかの形態の突起が配される。欠損している注口部の左右に腕部、下位に脚が刻みが付された隆帯で描かれる。左右に貫通孔が設けられ、この脇に円形の貼付文がある。器表面はやや粗いナデ調整である。

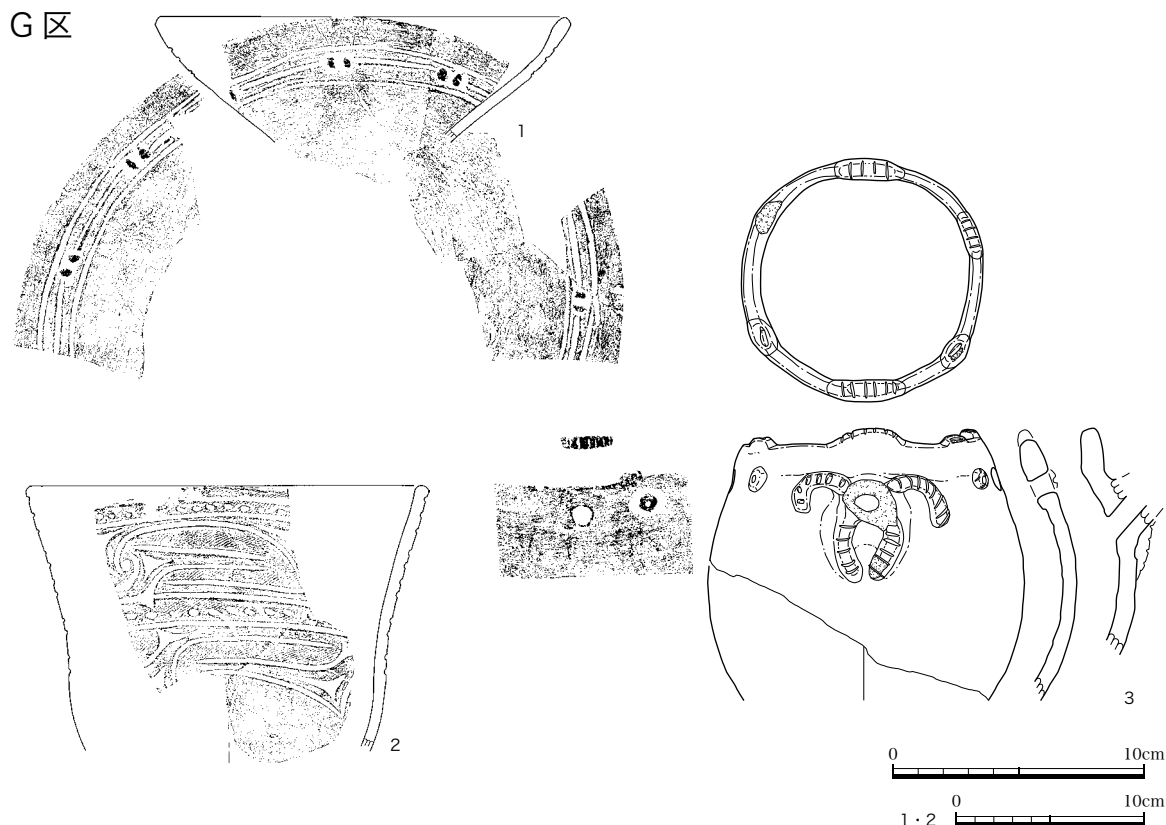
H区についても、調査及び整理時の所見として後期末の資料が多い傾向を認めている。

第353図には後期末～晩期初頭の資料を示す。1は大きく2つの破片群までに接合されたものの、両者の接合はならなかった。大形厚手の深鉢で、沈線施文後のミガキはあるものの、総じて器面調整はやや粗い印象を受ける。横繋がりを入組文が配されるが、やや乱れているところや刺突の充填がないところがある。雲母・石英・白色粒を多く含む。小形深鉢の2は比較的丁寧な作りで無文部ミガキも入念である。胎土中の鉱物も少ない。3は体部に屈曲部を有する深鉢で太く深めの沈線、深い施紋の縄紋など、器面が硬化していない段階での施文を窺せる。これも石英・雲母をやや多く含んでいる。4は頸部に玉抱入組三叉文と階段状入組文が交互に描かれるものである。施文後のミガキは比較的丁寧だが、下描線が比較的目立つなど、やや雑な施文の印象を受ける。石英・白色粒を多量に含む。

第354図には委託実測分を主に示す。1は小形の安行2式深鉢で、文様構成などは典型例に近い。沈線→刻み→豚鼻突起貼付→縄紋RL(前々段反撚りの可能性あり)→無文部ミガキと観察される。内外面に煤の付着が認められる。2は小形の台付鉢で、歪みがかかなりある。沈線→縄紋LR→ミガキで、文様は比較的丁



第351図 G・H区全体図・基本土層



第352図 G区出土土器(1)

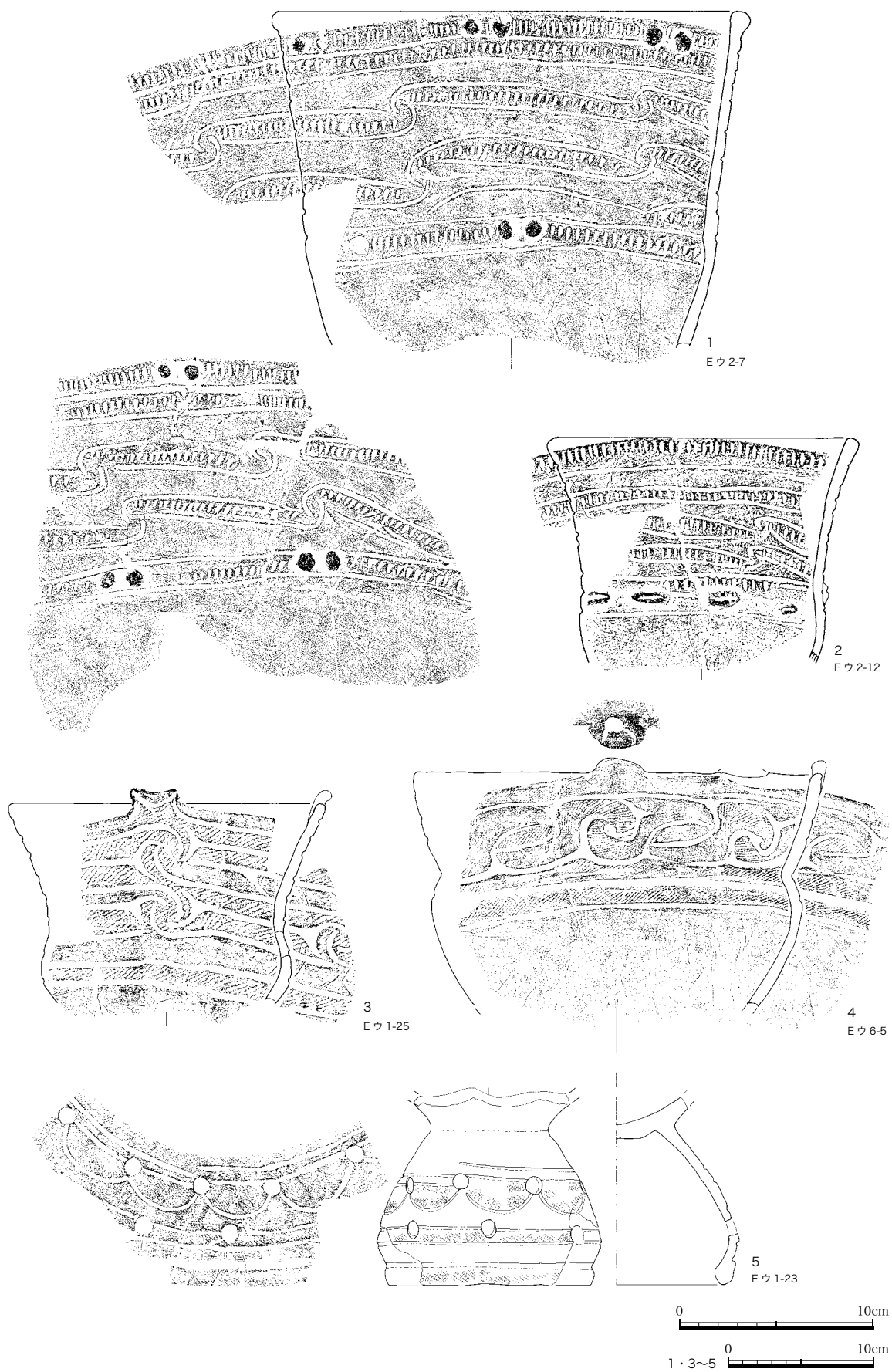
寧に施されている。3の注口土器は注口部欠損しているものの上位は比較的遺存が良い。沈線→縄紋LR→沈線ナゾリ・無文部ミガキと観察され、比較的丁寧な施文の印象である。4は大波状縁の深鉢で、口縁突起は5単位と推定される。接合しない突起破片がある。沈線→縄紋LRで体部は条線状の調整痕がある。内面下方に炭化物が付着している。5は頸部に大きめの突起が短い単位で連続しているものである。器面調整は削り～粗いナデである。6は波状縁深鉢の大形破片を復元したものである。小形の割には前面に大きく突出する突起が要所に付されているもので、波頂部突起も特徴的である。4単位と推定して図化した。5単位の可能性も残る。沈線・刺突とも比較的幅広で深い施文である。7は上端頂部を欠失している高井東式系大波状縁の突起で、口縁直下や内面の隆起帯上に縄紋が施されている点特徴となる。

I区の調査概要(第355～357図、写真図版三一)

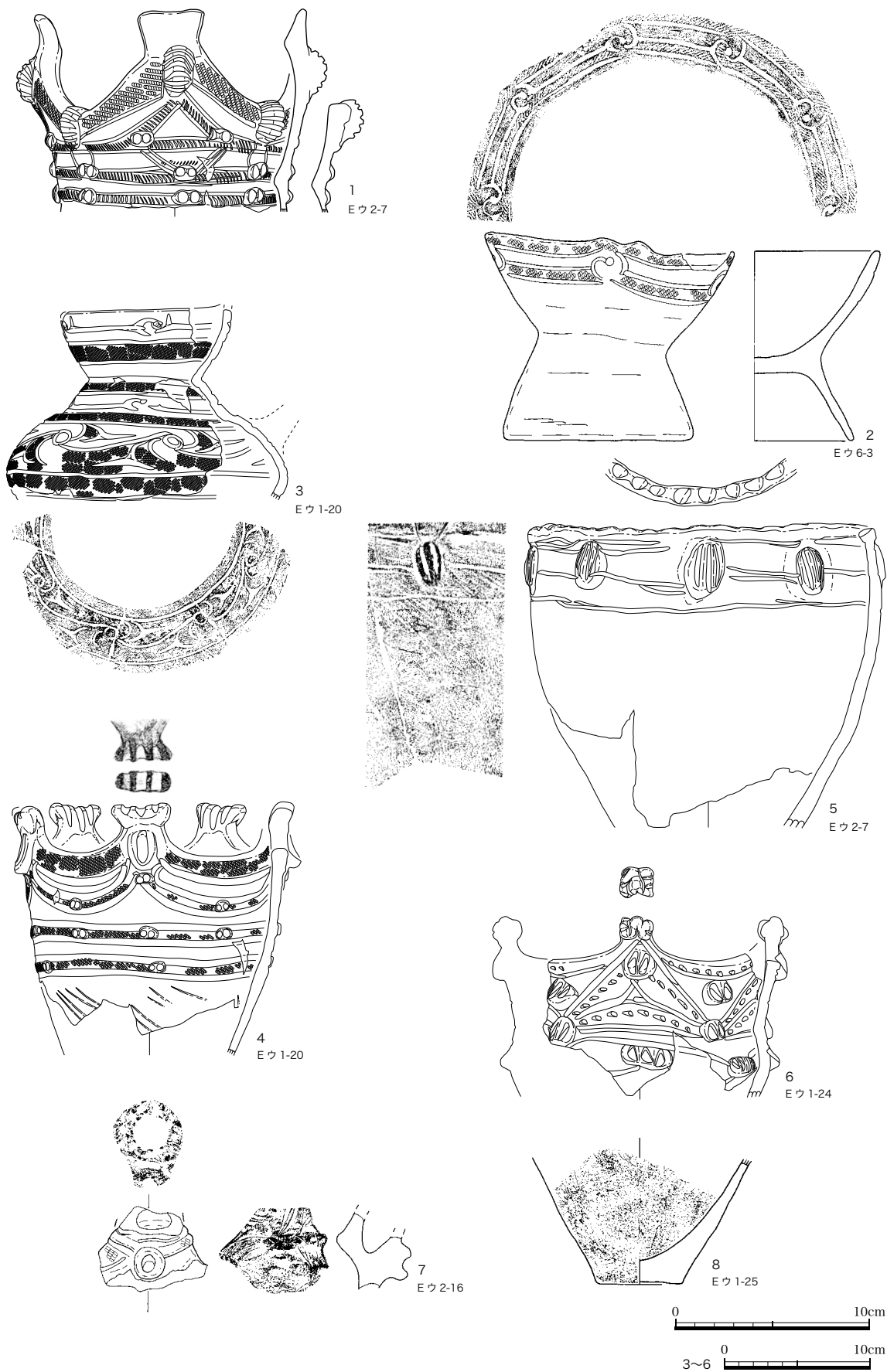
IV層(一部V層上位)までは重機による掘り下げを行い、V層以下を手作業により掘り下げを行った。VI層上面で遺構確認を行い、遺構の調査を進めた。I区はC区調査後に本調査を行った場所である。G・H区やK・L区等と同様、I区の東側では、調査区内北側にトレンチ状水路部分を設定している。

I区全体を見ると、西側ではV層～VI層上位包含層中の遺物は多いが、Eイ18-15グリッド辺りから遺物量が減り、Eイ19-2グリッド辺りでは遺物の出土が稀に近くなる。この状況はトレンチ調査で把握されており、かつC区内の東西差とも対応することが明らかで、遺構分布との対応という点でも注目される。

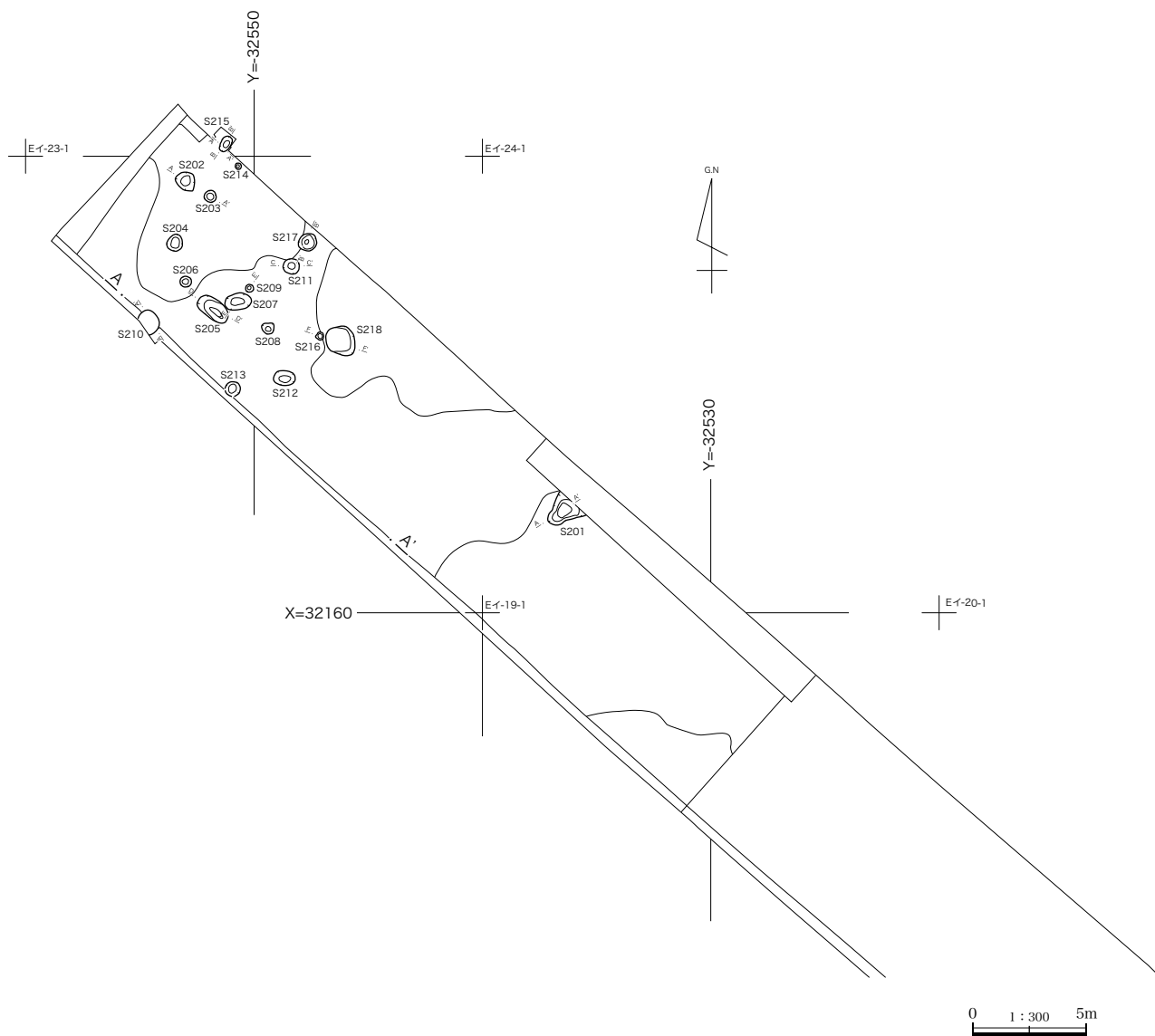
V層～VI層上位における遺物出土状態を第364図に示した。比較的大形の破片がまとまる部分も認められる。垂直遺物分布を示していないが、さほどレベル差がない概ね同一のレベル、つまりおおよそ平坦に広がっている傾向が認められた。この点はC区やB区とはやや異なる点である。但し、部分的にサブトレンチ状に



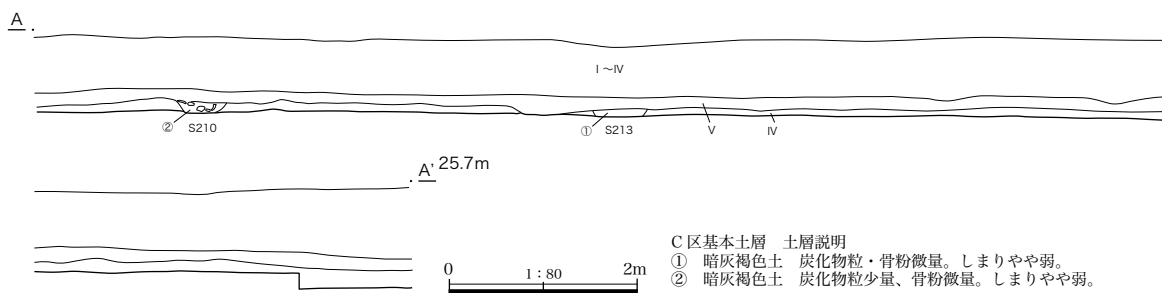
第353図 H区 出土土器(1)



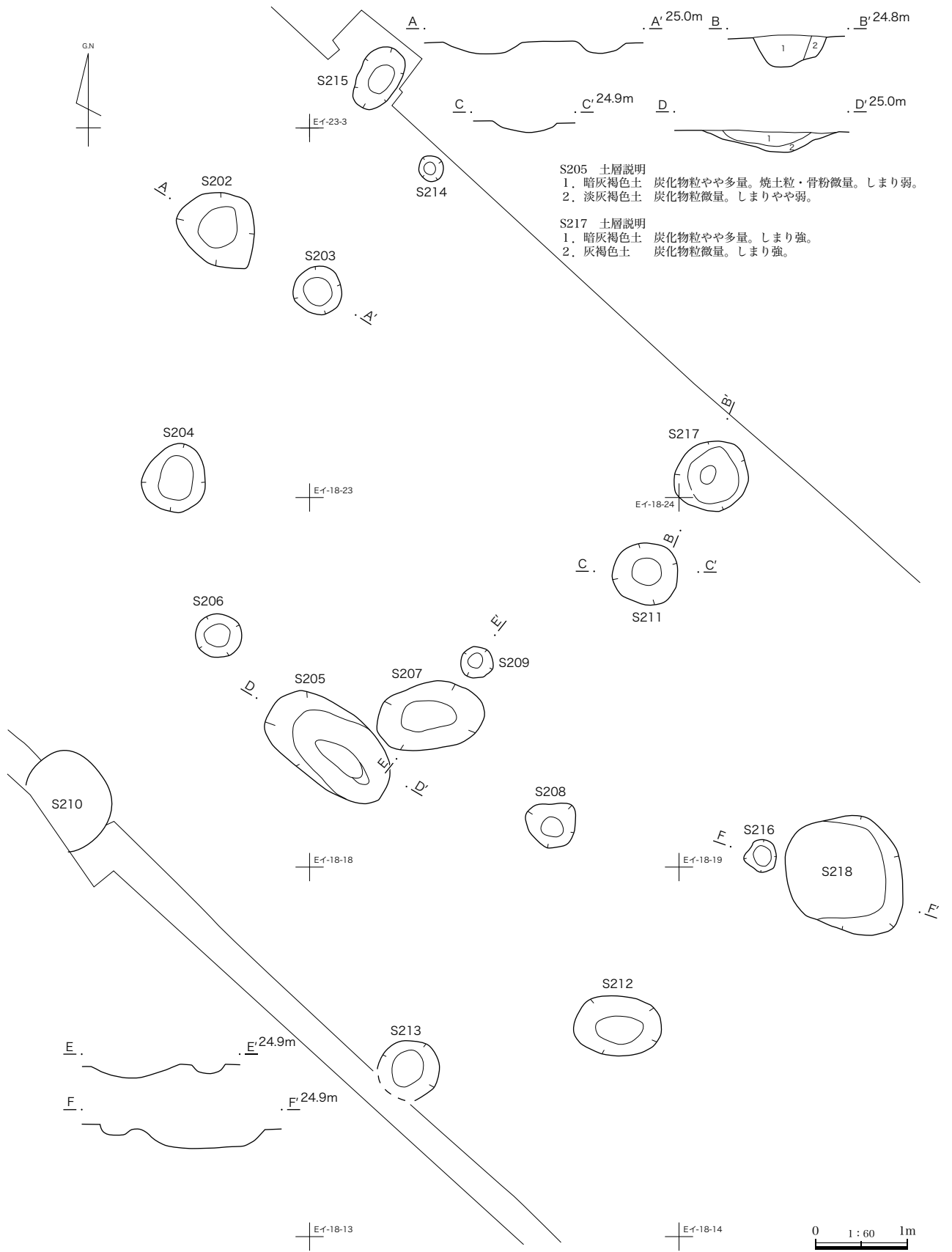
第354図 H区 出土土器(2)



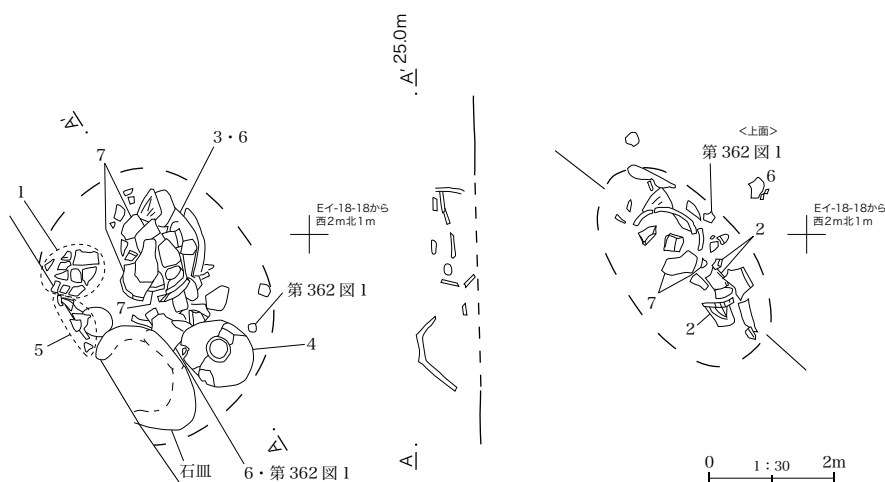
第355図 I区全体図



第356図 I区基本土層



第 357 図 I 区 S202 ~ 218 平面図・断面図



第358図 I区 S210 平面図・断面図

掘り下げた部分や水路部分の観察では、遺物の包含はさほど密ではないものの、広く掘り下げを行わなかったVI層以下も続いており、丁寧な確認を行えば、より下位の状態を調査することもできたと思われる。

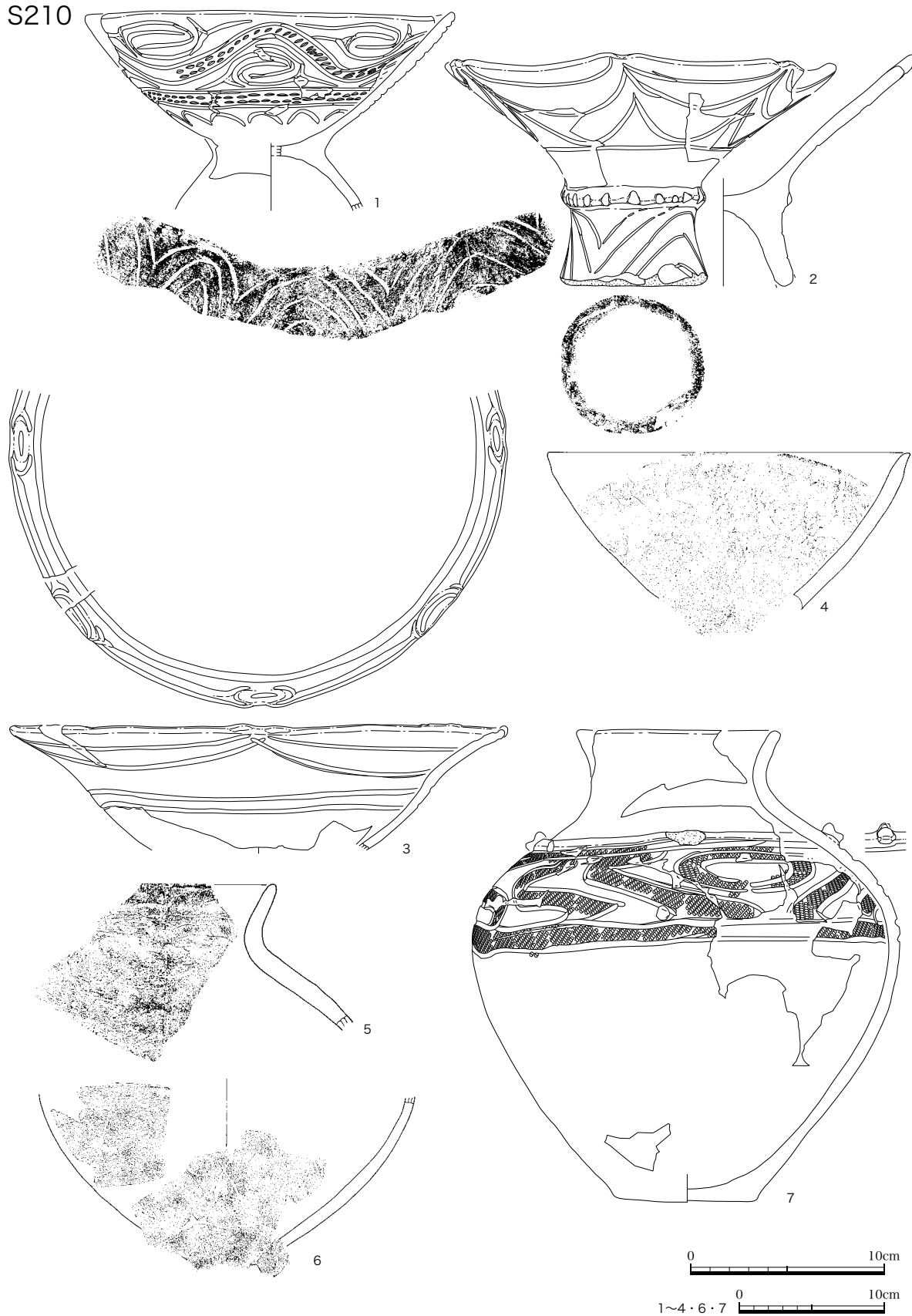
土坑の分布はEイ18-17,18グリッド周辺にまとまる。かなり近接しているところはあるが、重複例は無い。平面的に俯瞰すると土坑・ピットが円周状に廻るようにも見えるが、多くが10～15cm程度の深さであり、組合わさって住居跡等の建物跡となる可能性はあまり高くないように思われる。とはいえ、この10m四方程度の範囲内にまとまっている点は、有意味な事象と捉えても良いかもしれない。各遺構の詳細は触れず、規模などは計測表に譲る。全体的な所見としては、特徴的な形態・覆土や注目される遺物出土状態を示したものは無い。覆土もおおよそ類似したV層に近い覆土である。遺物が出土する場合も土器破片や礫が少数、数点出土するのみであった。なおI区の出土遺物については、水洗・分類以降実測に至る整理過程の中でB区やC区を優先したこともあり、極めて限定したもののみの図示となった。良好な資料も多く出土しており、別途補足する機会が得られればと考えている。石器については分類も一部に留まっており、極めて限られた選択を踏まえた図示となっている点、注意が必要である。

S 210 (第358図、写真図版三二)

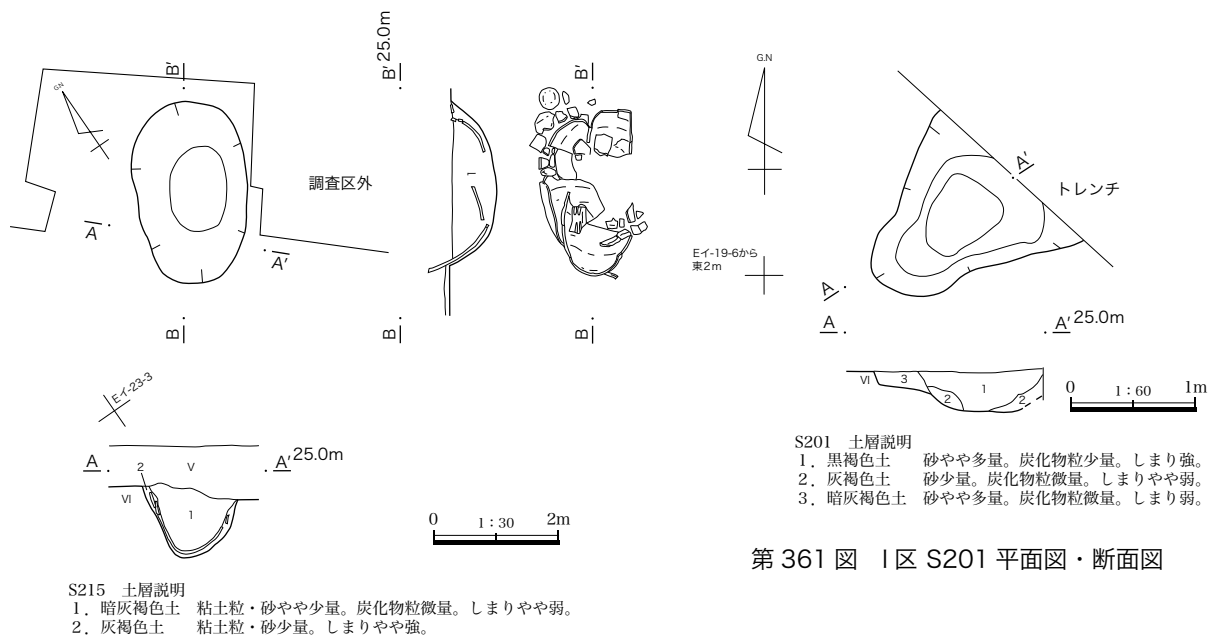
I区西側の調査区南壁際で確認された土器埋設遺構である。長軸102cm程度の範囲内に複数の土器个体や礫・石器を設置している。掘り方は調査区壁の断面観察で不明瞭だが確認した(第356図)。土器はV層下位～VI層上面での設置となる。掘り込みがあることから、遺物集中が遺構内の一括遺物出土と推定することも不可能ではないが、調査時所見を踏まえ、一応土器埋設遺構と扱う。

第359図4の浅鉢を南側で逆位に設置、この北側に3,6,7の土器を組合わせ設置している。浅鉢の西側に接するように大きめの石皿があり、これも設置と捉えられる。整理の過程で1～3のように接合復元が進んだものと、そうではないものがある。これについて、埋設時(个体分割時)の意図的な部分、或いは調査区外に残された土器や上位の掘削時などその後の影響等、幾つかの可能性を考慮するが、判断は難しい。出土状況からは設置時点である程度分割された个体を組合わせていた可能性を示すが、範囲内すべてを設置時の状態を留めていたとの判断も為し得ない。記録が不十分なところはあるが、詳細な出土位置の再度の検討が必要となろう。整理当初の分類時集計では、破片150点の確認で無文の破片が91点、晩期前半安行系の

S210



第 359 図 I 区 出土土器 (1)



第361図 I区 S201平面図・断面図

第360図 I区 S215平面図・断面図

破片9点、安行系沈線施文の破片23点、大洞系16点の出土である。接合で同一個体となった破片も多いものの、破片の出土について、有意なものか、混入の状況とすべきかは検討が必要となる。出土状態の検討が必要だが、復元された複数個体については、「一括性」を捉えて良いものと考えている。

第359図に埋設の土器個体を主に示す。1は小形平縁の台付鉢。均一幅でやや深い沈線、比較的丁寧なミガキ調整など、丁寧な作りを観察できる。2は7単位の緩い波状口縁台付鉢である。下方欠損だが脚部下端破断面がかなり擦れており、この状態での使用を推定できる。或いは意図的に擦っている可能性もあろう。浅い沈線→ミガキで、胎土中の白色粒は多量である。3は大きく4単位(対応する内面の扁平な突起は8単位)の弧線が展開する大形の鉢である。浅く幅広い沈線→ミガキで、石英を多量に含んでいる。第359図7は大形の広口壺で頸部以下はほぼ完形に近く復元された。肩部に突起が5単位配されるようだが、残存は1箇所のみで、3箇所は剥落している。隆帯・沈線→縄紋LR→沈線ナヅリ・無文部ミガキ。沈線は下描線等もあり、あまり丁寧な施文の感は受けない。口縁の遺存部が少なく、突起が付されていた可能性もあるが良く分からない。石英・片岩状の白色粒・角閃石などを多量に含む。体部は削り～ミガキ調整。第362図1はやや浅い沈線による雑な施文の土器で、接合思わしくないこともあり、文様構成が良く分からない。

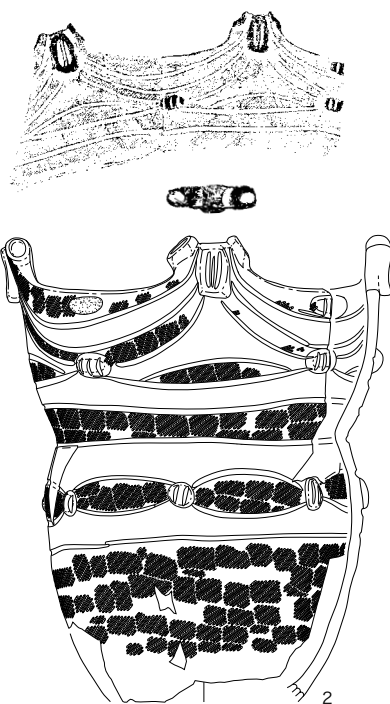
S 215 (第360図、写真図版三一)

I区北西の調査区壁際で確認された土器埋設遺構である。長軸73cmの楕円形掘り方内に横位～斜位に土器を埋設している。VI層を掘り込み、V層には覆われる。地山のVI層、掘り方埋土、土器内部の土それぞれを区別でき、掘り込みも比較的明瞭であった。かなり大形の無文土器で、整理により第363図1のように復元され図示した。調査時には上位の遺存はやや悪く破片としてやや散っている或いは内部に入り込んでいる破片も多く見られた。また詳細な出土位置のチェックを行っていないが、本体の復元個体と重なるように別の付帯口縁の無文土器や沈線施文の土器が出土している。整理当初の集計では、破片92点の出土で、無文72点、晩期安行系前半3点、安行系沈線施文の破片4点等が確認されている。別破片の出土について、出土位置の

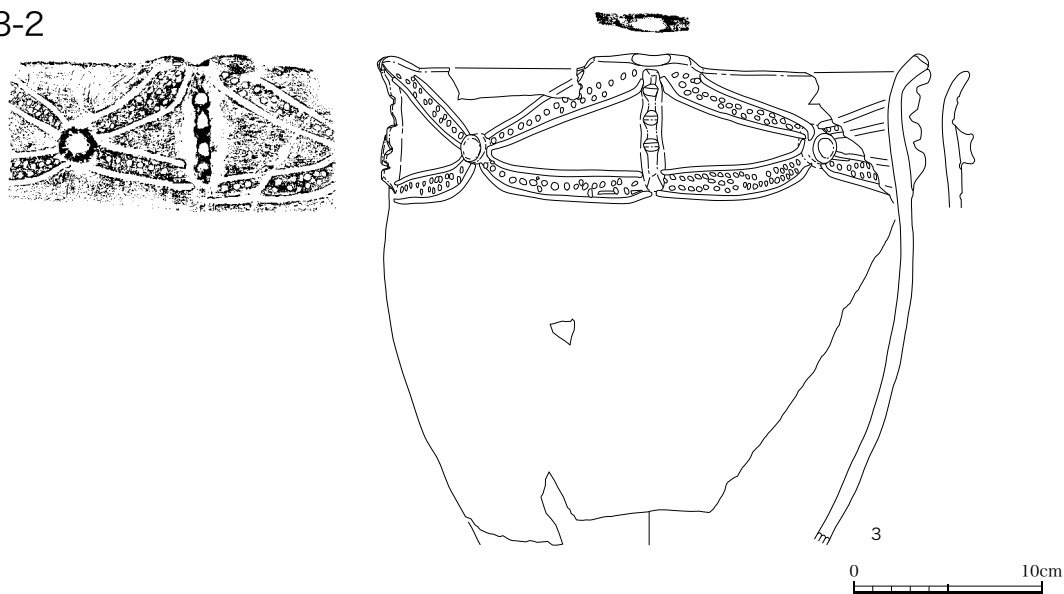
S210



Eイ 23-2



Eイ 23-2



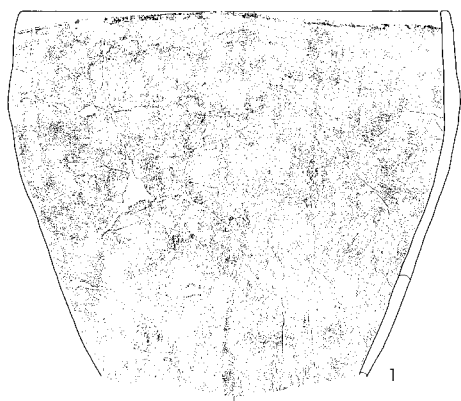
第362図 I区 出土土器 (2)

検討は殆ど為し得ておらず、包含層中遺物の混入も想定しておく必要がある。

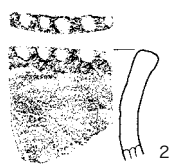
S 215 出土の第363図1はナデ調整の無文土器で小礫と言えるほどの大きい粒の鉱物(石英等)を多く含んでいる。この種の無文土器の割には薄手で緻密な感がある。

I区グリッド出土土器は多量にあるものの、遺憾ながら一部を示すに過ぎない(第362図2,3、363図5～9)。

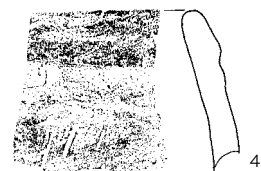
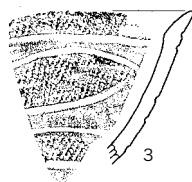
S215



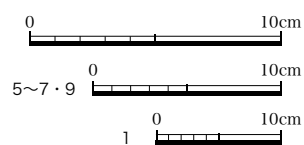
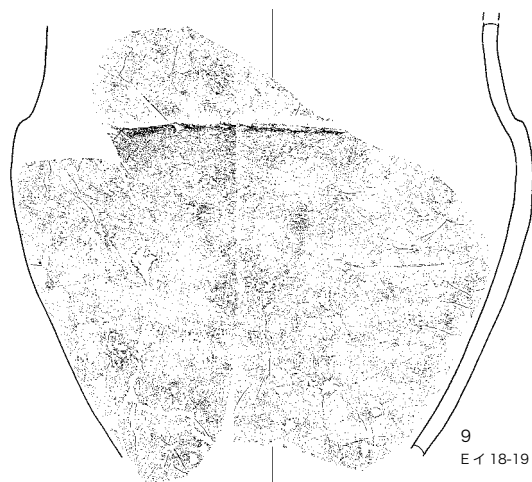
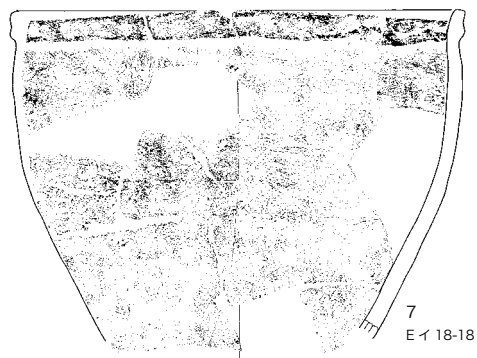
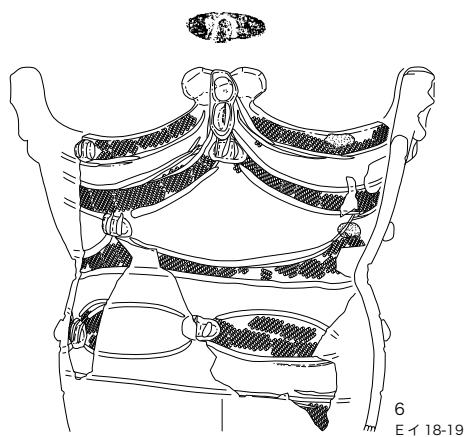
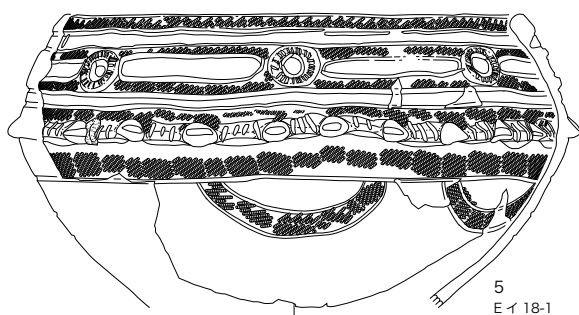
S217



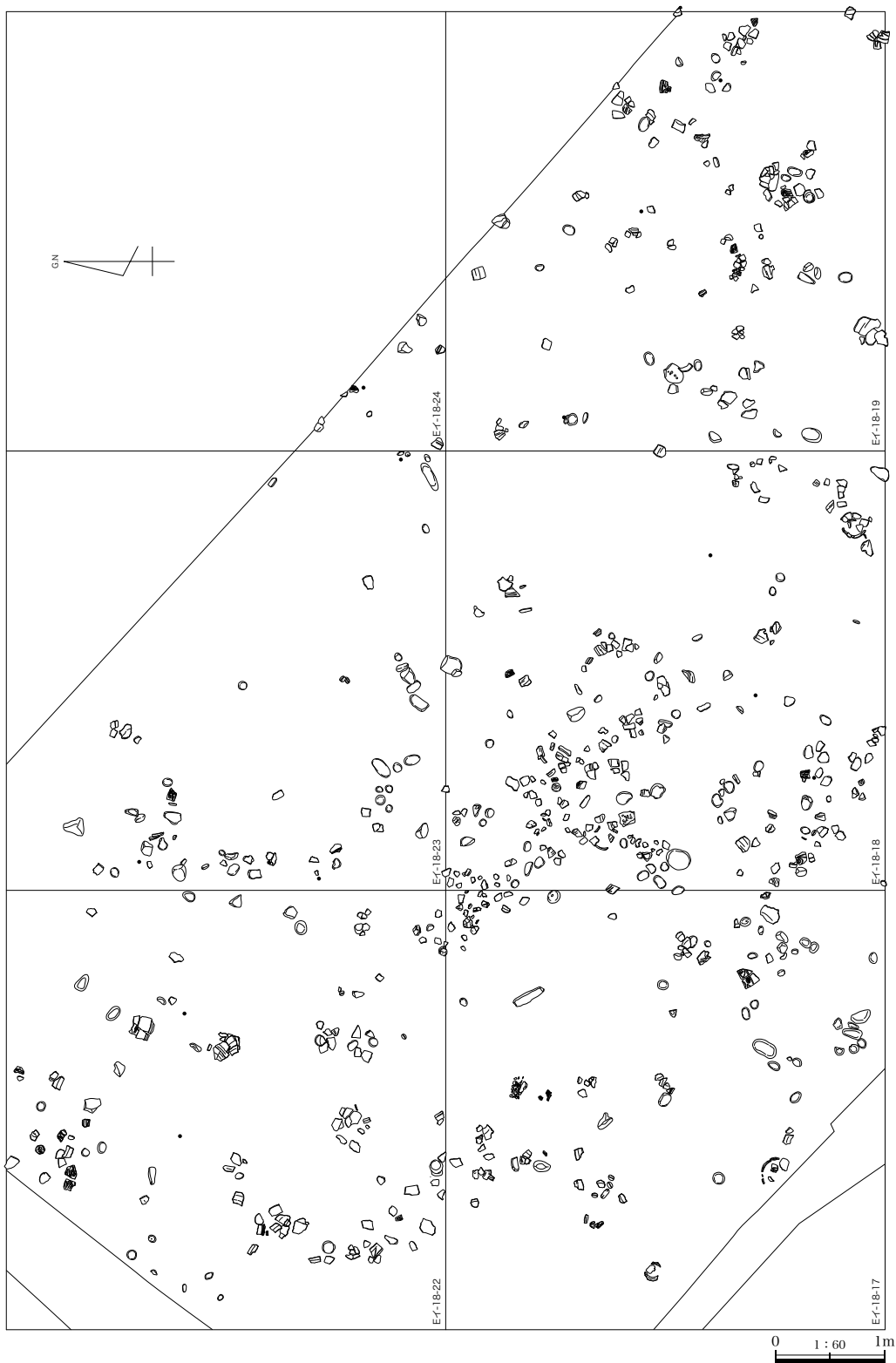
S218



I区



第363図 I区 出土土器 (3)

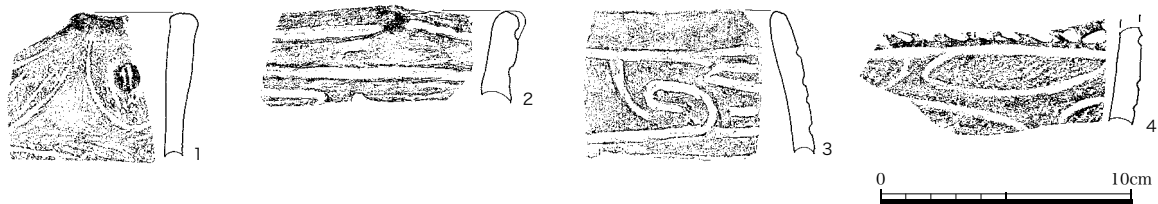


第 364 図 I 区 遺物出土分布図

第363図5は体部に屈曲部を有する安行系鉢で屈曲部の隆帯が特徴的である。刻みが付される凸部と押捺状の凹部が交互に加えられている。体部は削り状のやや粗い調整。文様部分は沈線・隆帯→縄紋LR→沈線ナゾリ・無文部ミガキである。6は4または5単位の波状緑深鉢で丁寧な作りである。沈線→縄紋LR→無文部ミガキで、内外面に比較的多く炭化物が付着している。7は付帯口縁の深鉢で体部の調整はかなり粗い。8は口縁直下に「突帯」を有する口縁部破片で、未図化だが他に同一の2片が確認されている。石英・白色粒を多く含むが、薄手で緻密な胎土である。内外面ナデ調整だが、一部ミガキに近いところもある。他とはかなり違う質感の土器ではあるが、9も含め「異系統」との判断は検討が必要であろう。9も異系統の疑いがある深鉢で、屈曲部に明瞭な段差を有している。体部は削り後ナデ調整、頸部はやや丁寧なナデ調整、石英等のかかなり大粒の鉱物粒を多量に含む。胎土や質感はさほど違和感があるものではない。色調は10YR6/3。

第362図2は比較的遺存が良く復元された4単位波状口縁の深鉢である。沈線→縄紋LR（直前段多条）→無文部ミガキと観察される。体部の弧線文・瘤は7単位。内外面に炭化物が付着している。同図3はやや大形の深鉢で、口縁には5単位と推定される低い突起が付されるが、遺存は2単位である。隆帯・瘤貼付→沈線→円形刺突→ミガキだが、ミガキはさほど丁寧ではない。胎土には石英・不透明白色粒を多量に含む。

J区は殆ど掘り下げの調査を行えなかったところであり、ここで示す資料（第365図）も重機掘削面での回収資料である。A区と同様に晩期前葉～中葉の資料が確認される。



第365図 J区出土土器

第7表 I区遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	軸	覆土・遺物（石器未集計）	遺構図版	遺物図版	写真図版
S202	88	78	12		淡灰褐色土：炭化物粒微量、しまりやや弱。	357		31
S203	53		10		202にほぼ同じ。骨粉微量。	357		
S204	74	63	9		暗灰褐色土：炭化物粒微量、骨粉微量、しまりやや強。	357		
S205	150	83	27	N-51° -W		357		
S206	51	47	6		203と同じ覆土。	357		
S207	115	74	14	N-84° -E	202と同じ覆土。	357		
S208	53	48	18		203と同じ覆土。	357		
S209	35		9		204と同じ覆土。	357		
S210	102	75		N-32° -W		358	359,362	31
S211	70	67	13		207と同じ覆土。	357		
S212	95	63	11	N-87° -W		357		
S213	63	58	10		204と同じ覆土。	357		
S214	25		12		204と同じ覆土。	357		
S215	73	46	28	N-35° -E		360	363	31
S216	34	28	11		暗灰褐色土：炭化物粒微量、しまりやや弱。	357	363	
S217	79	76	36			357	363	
S218	137	123	21		暗灰褐色土：鉄分多量、炭化物粒微量、しまり強。	357		

第7節 J・K・L区の遺構と遺物

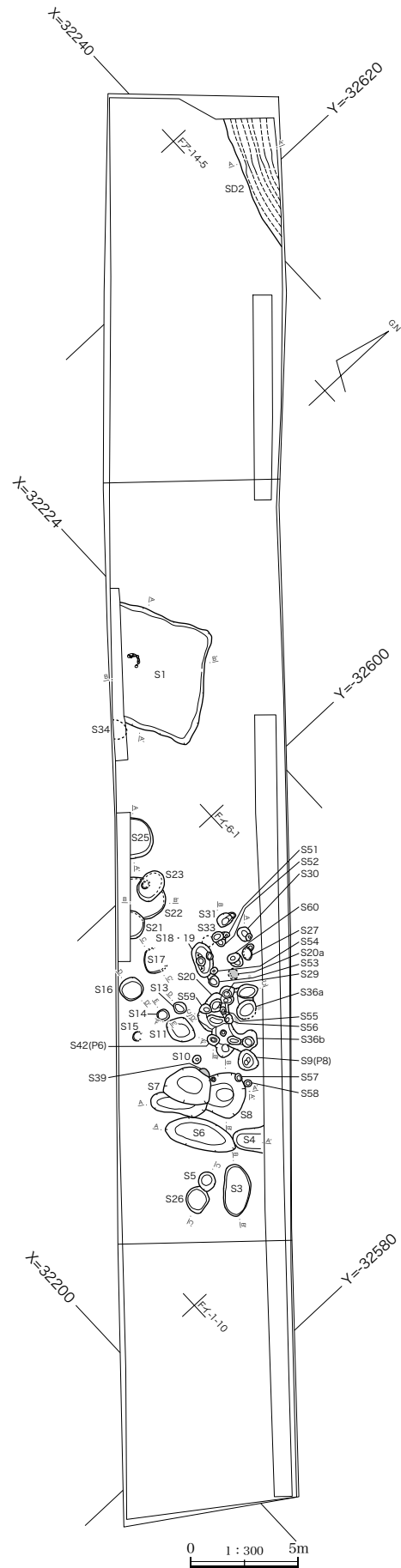
J・K・L区の概要

J区については、湧水もあって重機による掘り下げ後の調査を殆ど行えなかった調査区であり、全体図中の位置を示すに留まる。回収した遺物の一部は第6節第365図に示した。以下ではKL区調査の経緯・概要を記す。

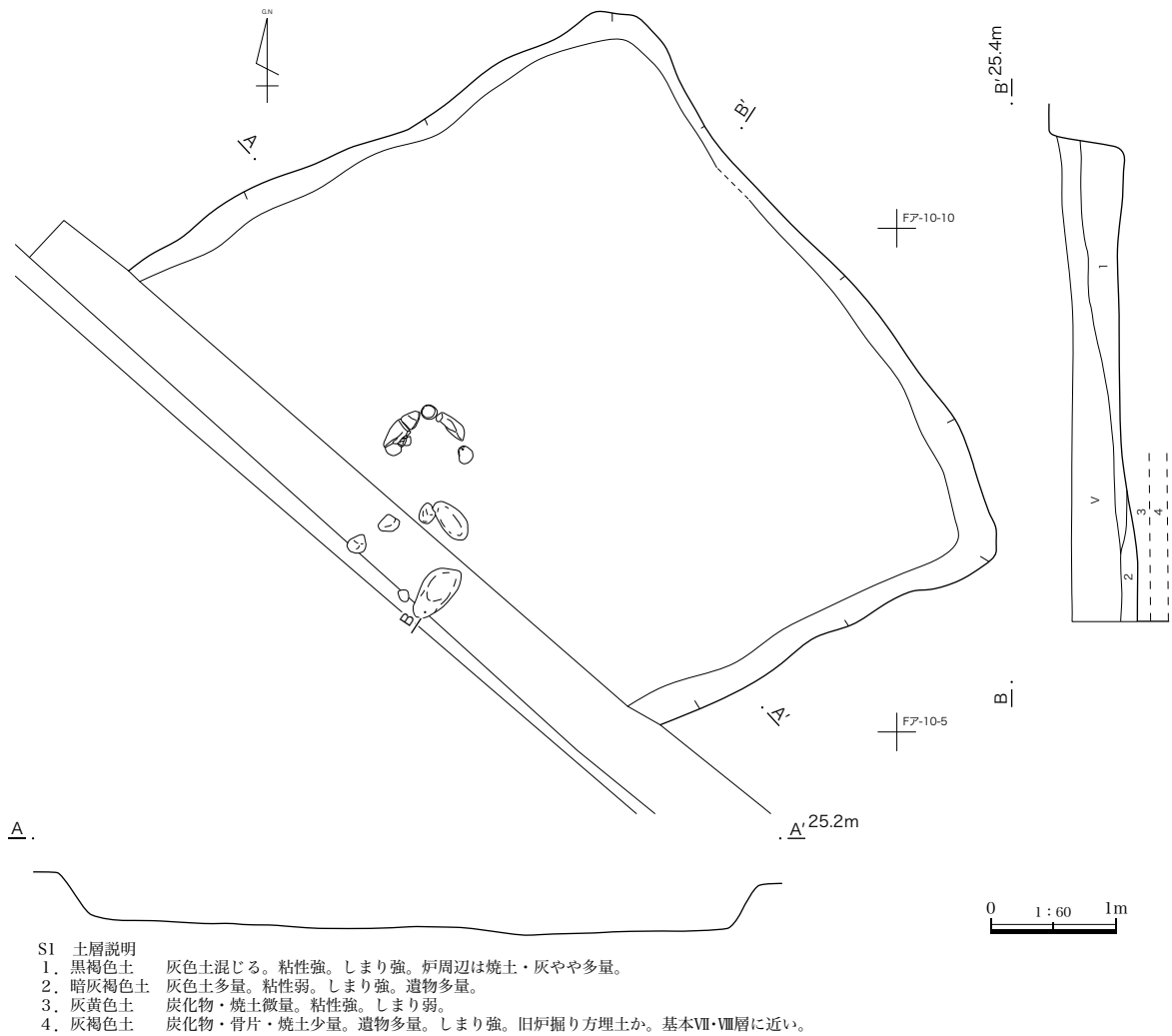
KL区は今回の西区調査区の中で最も南西側に位置する調査区である。KL相互の区別で一部混乱もあることから、併せてKL区と呼称する。平成29年度の調査遂行の中でB・C区での包含層及び遺構調査に予定以上の時間がかかったこともあり、当初計画に近く遅れを取り戻すために、これまでV層上面までの表土除去としていたところ、V層中位～下位まで重機による掘削を行わざるを得ない状況となった。KL区全体図中の西側及び東側はVI層上面～上位まで包含層を重機により除去し、その後廃土中よりの遺物回収という方法を進めたところである。KL区の中央部分については、確認トレンチの状況やT1北拡張区、T3、T4拡張区などの状況から遺構や遺物が密であることが予想されたため、V層上面～中位で掘削をとめ、その後人力による包含層掘り下げを行うこととした。包含層中からの遺物出土について記録～遺物取り上げ後精査したところ、土坑などの遺構が比較的多く確認された。更に西側調査区壁際で方形に近いプランの掘り込みが確認され、住居跡と想定して掘り下げを進めた。この時点で調査期間の終了も間近に迫っており、記録化と平行しつつ、急遽の調査を進めた。またS70ピット群と称するピットの集中部分が確認され、これについても住居跡の可能性を考慮して調査を進めた。

最終的に住居跡2軒、土坑17基、ピット6基(S70ピット群除く)、その他落ち込み1基が確認され、縄紋後晩期集落の様相を示す一地点となった。遺構の図化記録時点で調査期間終了となり、一部掘り下げたVI層中での遺物包含は確認しつつも、掘り下げの時間が無く、VI層以下の調査については断念するに至っている。V層下位～VI層上面でのS1周辺～遺構集中部にかけては包含層中の遺物量も多く、注目すべき資料となった岩版(第444図1)や、多くの土器・土偶等の土製品、石製品等注意すべき資料が出土している。

なお南側で隣接するM区(水路管設置立会部分)でもこの



第366図 K・L区全体図



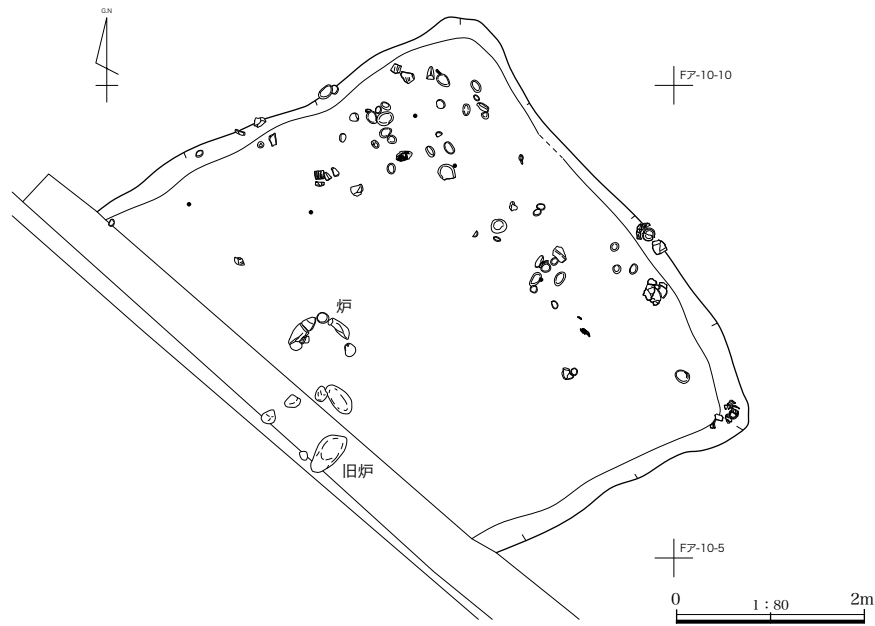
第 367 図 K・L 区 S1 平面図・断面図

K L 区隣接部では多量に遺物が出土しており、遺跡の広がりを考える上では注目されよう。また K L 区北西端で確認された溝については、包含層上位で確認されたもので、D・E 区の溝に繋がる可能性がある。

全体的な遺物出土状況については、重機による表土除去部分が多いことから、明確な記述をし得ないが、重機掘削時及び掘削土排土から回収した遺物はかなり多く、微小な遺物についてはかなり多くのサンプリングエラーがあることを踏まえておく必要がある。感覚的な所見だが、西端近くはやや少なくなる傾向もあるように思われる。K L 区東側については、遺構集中区域と連続的である。K L 区中央の遺物量が多いことについて、恣意的な掘り下げ調査区設定であり、明確な判断はできない。重機によって下げた部分の VI 層中～下位では遺構は確認されなかったものの、遺物量についてはかなり多いとの所見も付記する。

SD2 (第 381 図)

S D 2 は平面的には直線に近く、断面では底面から上端に向かって緩やかな傾斜を有している。覆土の 1・3 層で F A を含むとの所見がある。V 層上位の確認で、V 層の掘り込みは确实であるが、IV 層より上位との関係は不明である。方向や形態的に類似する D・E 区 S D 3 等と繋がる同一溝となる可能性があるが、未調査区を広く挟んでおり、未確定である。



第 368 図 K・L区 S1 遺物出土図

S 1 (第 367,368 図、写真図版三三)

調査区際をサブトレンチ状に下げており、この部分における遺構上端については不明である。やや歪んだ方形に近いプランで、壁は比較的急角度で立ち上がる。Ⅵ層を掘り込んでいるのは確実であり、更に立ち上がり＝掘り込みの上端はⅤ層中に及ぶものの、Ⅴ層上位・上面までの分層ラインは確認できなかった。Ⅴ層細別の問題にも関わるが、Ⅴ層堆積中に掘り込まれた遺構という推定をできるかもしれない。一部壁が不明瞭なところもあるが、一部の断割りや調査区壁部分の観察などから、壁の検出に至っている。床面は概ね平坦であるが、中央がやや下がる。調査時の湧水は常時著しく、床面の精査、炉跡の調査等困難を極めた。従って床の硬化面なども不明である。覆土は比較的黒味の強い土で、Ⅴ層に近い特徴を有する。覆土中の遺物は比較的多く、匙形土製品の出土等注目される資料も見られた。

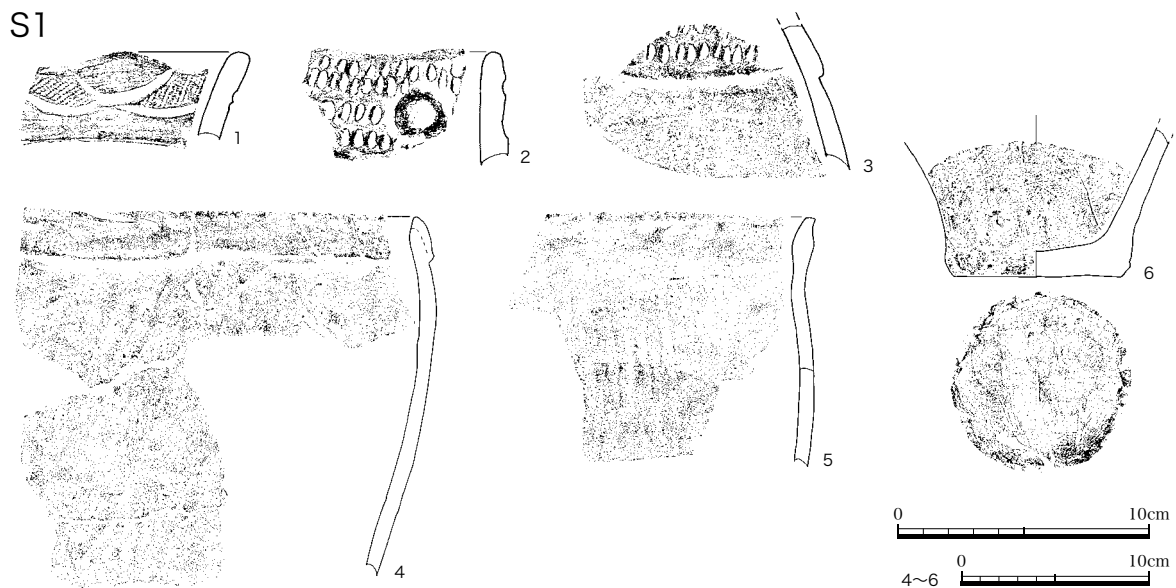
炉は2基確認され、いずれも石囲炉である。北寄りで確認された炉は60cm四方程度の範囲内に石を廻らす形態である。この炉跡の調査後、更に精査をしたところ調査区壁際でも石を廻らしている部分が確認され、これを旧炉跡とした。こちらの南側の炉跡の方が若干下位のレベルにある。これらの状況から2軒の住居跡を想定し、床面については、サブトレンチ部分から当初捉えた床面より旧炉跡と整合する下位の分層部分(レベル)を旧住居跡床面と判断することも考えたものの(第367図B-B'セクション図での4層上面や4層下位のライン)、判断はできなかった。2基の炉跡のレベルでは旧炉跡の方が若干下位のレベルにあることから、2基の新旧は概ね問題無い。旧炉跡の方は90cm四方程度の範囲に楕円形に近く石を廻らすもので、南は調査区外に延びているようである。石囲内の焼土・火床面の確認はいずれも為されていない。石の被熱は認められているが、明瞭な記録はとり得なかった。柱穴については、既述のように湧水が著しく床面の精査を充分に行い得なかったこともあり、確認できていない。

遺物は比較的多く、一部ではあるが、その出土状況の記録を示す(第368図)。安行3c式、大洞C1式辺りが目立っており、詳細な検討を経ていないが、概ねこの時期の住居跡と捉えておきたい。

S 1 出土土器は444点と多量で、図化選択候補も多く確認したものの、実際には復元個体を中心とする一



第369図 K・L区 S1 出土土器 (1)



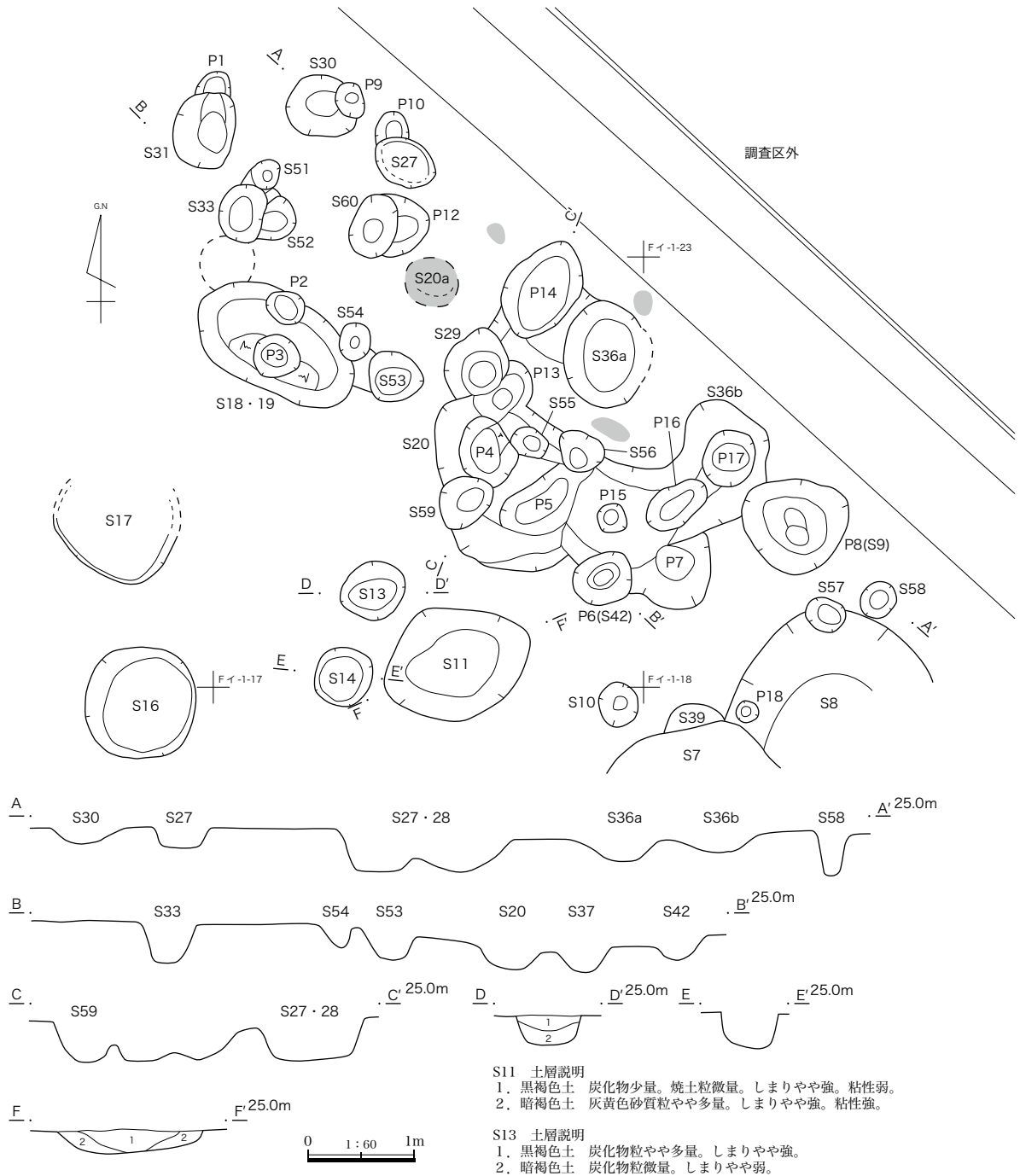
第370図 K・L区 S1 出土土器 (2)

部の図化に留まった。従って、この住居跡出土土器の様相全体を示してはならず、また出土状態の詳細なチェックも経てはいることから一括性についても確実ではない。とはいえ、図化し得なかったものも含め、比較的時期幅が限られていることも概ね確認できる点は注目して良いであろう。

第369図1は5～6単位の低い突起を有する深鉢で、やや薄手、鋳物粒をあまり含まない胎土等比較的丁寧な作りが窺える。沈線・突起下瘤貼付→やや粗い縄紋LR・刺突→無文部ミガキである。刺突は突起下の円文内のみ付施されるが、ペン先状の細かいもので、やや長く条線状となっている部分も多い。無文部ミガキも丁寧で、細いへら状工具の痕跡も確認できる。体部や内面もこの細い工具によって条線状に調整されており、この種の土器としては異質な程きれいな土器である。2は剥落部が多く文様が不鮮明な例。やや低い突起が付されるようで、この下位が菱形の区画となるものであろうか。瘤貼付の痕跡も観られる。3はやや粗いナデ状の器面に細く浅い線による文様が描かれる。線は硬質な感があり、比較的乾燥した状態での施文が推定される。体部下方は削り調整。4は小形の台付鉢で脚部は遺存が良いものの、鉢部は一部のみ遺存である。沈線→刺突→縄紋LR→沈線ナゾリ・無文部ミガキが観察される。沈線は下描状の部分も残っている。5は大洞系の壺で無文部は良く磨かれているものの、彫去手法とまでは言えない。6の大洞系鉢も太い沈線で丁寧な施文と観察される。無文部ネガ部分が殆ど無い構成である。7は大洞系壺のような器形と推定するが、文様は入組三叉文の横連繫で、線や縄紋も浅い施文である。無文部は比較的丁寧に磨かれている。8は大洞系鉢で、節の細かい縄紋が特徴的である。無文部は比較的良く磨かれ、単位文内の一部では若干の彫去手法が確認できる。内外面とも炭化物が付着している。第370図1～6には破片を一部示す。無文土器では付帯口縁例(4)と若干の肥厚例(5)とがある。

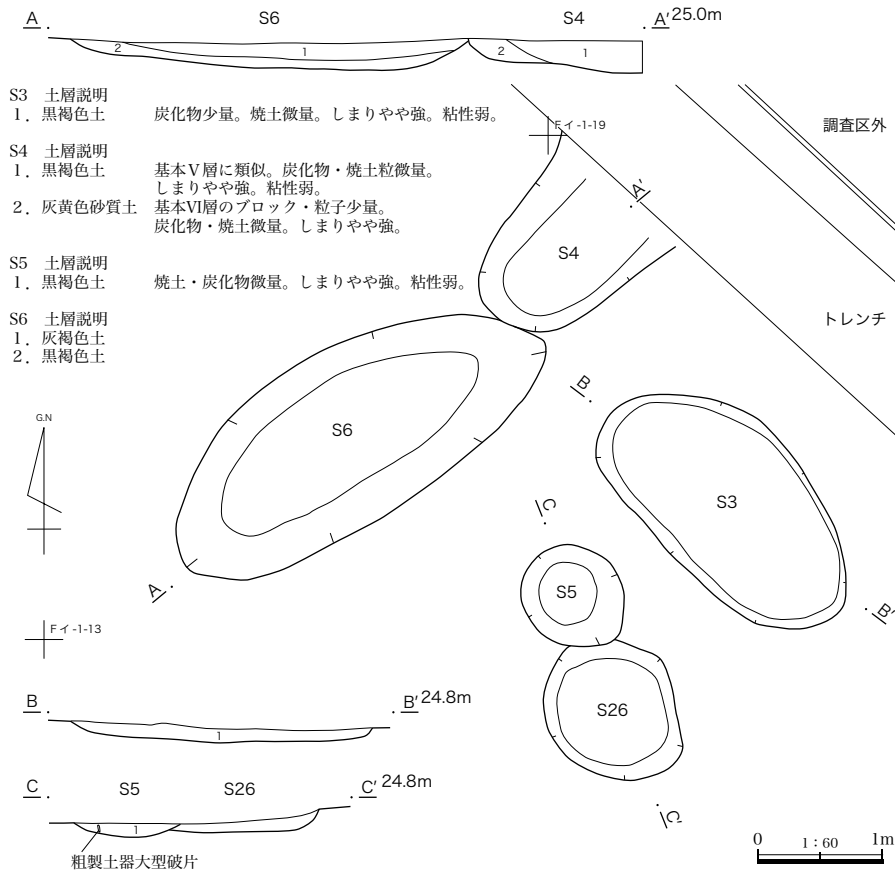
S70ピット群 (第371、372図 写真図版三四)

本節冒頭の概要部分でも記したように、当初この部分で確認された土坑とピットが幾つかあり、その後の精査過程でより多くのピット確認に至ったところである。住居跡と判断したが、竪穴の掘り込みは不明で、また調査区外にピットの集中が続くことがほぼ確実であることから、全体の形状も示し得ない。ピットの多



第371図 K・L区 S70ピット群平面図・断面図 (S7～11・13～20・20a・27・29～31・33・36a・36b・39・42 (P6)・51～60・P1～10・12～18)

遺構名	長軸	短軸	深さ											
P1	32	20	40	P13	62	40	29	S25	185	106	18	S51	32	25
P2	35	32	29	P14	90	66	35	S26	113	108	14	S52	40	30
P3	43	40	22	P15	30		38	S27	60	44	19	S53	50	48
P4	56	54	36	P16	64	35	17	S29	70	54	40	S54	34	28
P5	82	48	32	P17	55	49	22	S30	65	58	15	S55	23	18
P6	58	45	21	P18	20		13	S31	73	57	46	S56	40	38
P7	78	65	13	S20	153	130	23	S33	55	38	38	S57	38	32
P8	95	93	18	S21	130	66	15	S36a	98	82	21	S58	35	32
P9	33	27	11	S22	162	192	46	S36	98	83	22	S59	55	43
P10	38	28	14	S23	148	107	22	S36b	80	90	16	S60	62	41
P12	52	30	11											



第372図 K・L区 S3～6・26 平面図・断面図

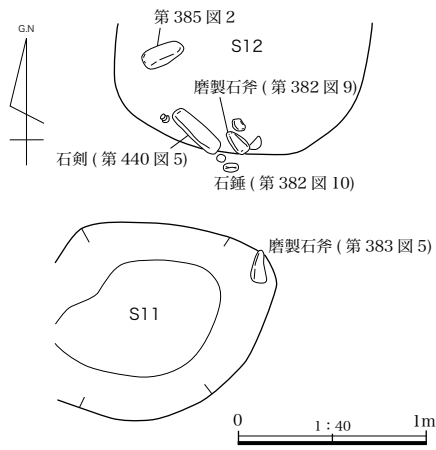
くはVI層上面での確認であり、4箇所以上ある焼土の堆積なども含め考え、概ねこのVI層上面が床面と考えられる。後述するが、ピットの配列から一辺5～7m程度の方形に近いプランの住居跡を想定している。掘り込みがV層中から或いは殆ど掘り込みの無い住居跡となる可能性もある。S 20aなどの焼土は厚いところで15cm程度の堆積であるが、硬化の著しいブロックの堆積というより、やや細くなった焼土粒の集合的な様相であった。炭化材・炭化物については、顕著な出土は認められていない。床面自体の硬化も見られなかった。一方で住居とは別遺構が含まれている可能性ももちろんある。

柱穴配列の第一の案として S30-P51-S33-P2-S54-S53-P4-P5-P6(S42)-P7-P8(S9) と外周壁柱穴プランの住居跡を想定する。この場合一辺6.7mとなる。第2案は P10-S27-S60-P12-S29-P13-S55-S56(P5)-P15-P16-P17 と外周柱穴を廻らすプランで、この場合一辺は5m程度となる。P 4・P 5 周辺が入口ピット状を呈しており、この点からは第1案の方が整合的である。東側の壁をどの程度とみるかが問題で、更に外側 S 58 辺りを想定する案もあろう。最大では7.4m程度の規模となる可能性も残る。また、ピットの重複部分も多いこと等から、これら幾つかの案の組合せ、つまり2軒以上を想定することも必要となる。

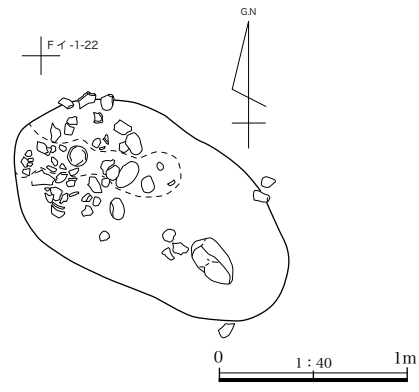
ピットの中にはかなり深く、形状・規模としても比較的大きな例があるが、明確な支柱の指示はし得ない。先に示した住居プランの想定からは調査区外や水路部に支柱部分があると考えられる。なお P58 覆土中位からは石錘5点がまとまって出土した。これ以外で特徴的な遺物出土状態の見られたピット等はない。

これらピット出土遺物について図化は殆ど為し得なかったが、チェックしたところ、安行3a～同3c式までであり、量的には安行3b式が目立っている。下限をとって安行3c式期の住居跡と捉えておく。

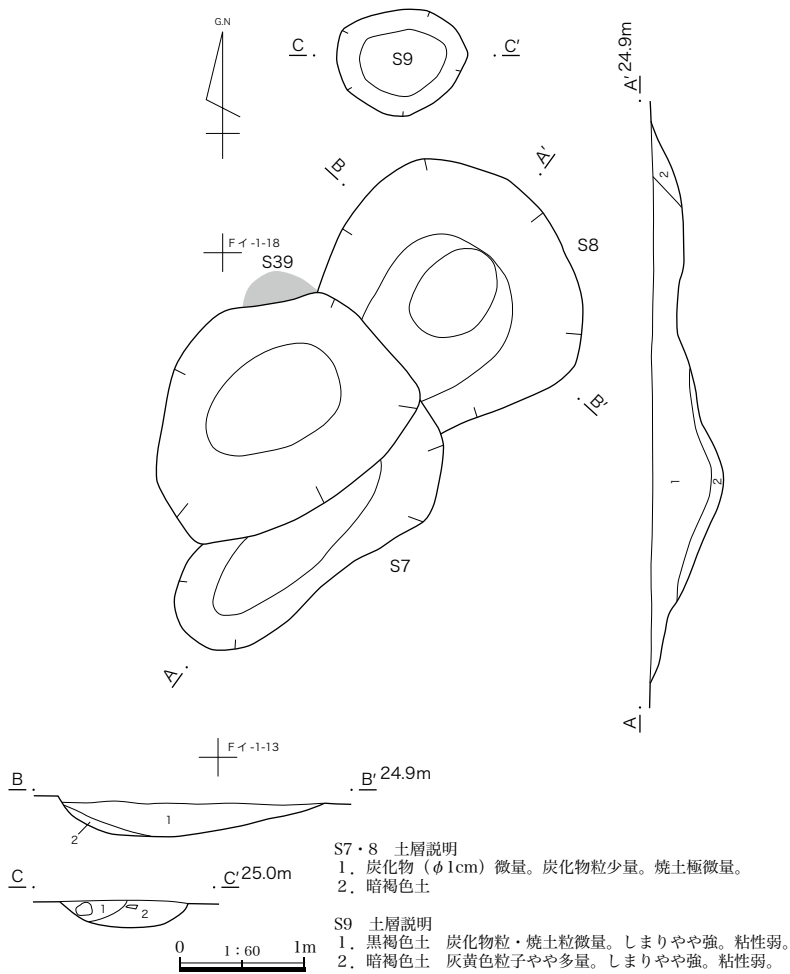
第3章 西地区の遺構と遺物



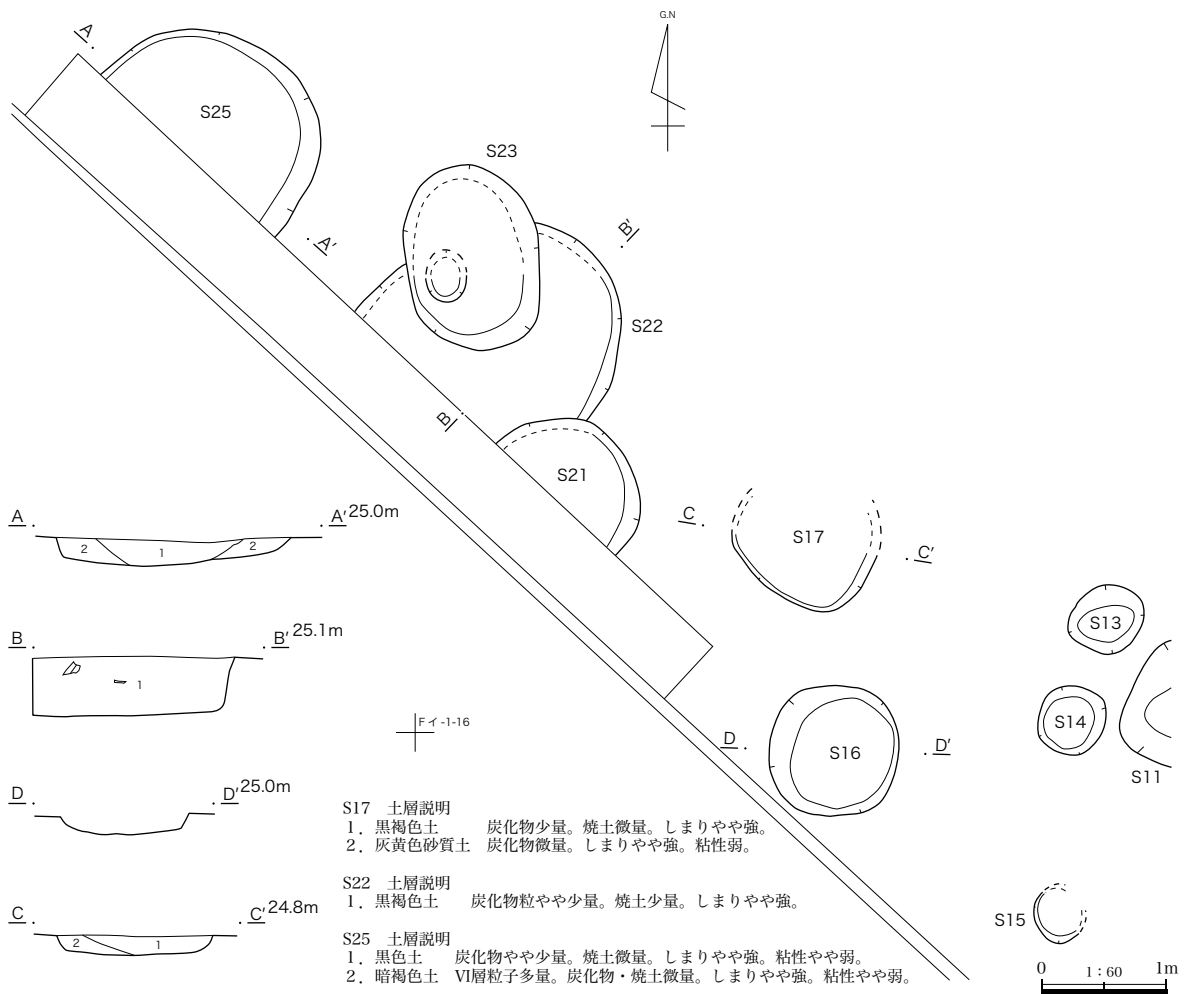
第373図 K・L区 S11・12 拡大図



第374図 K・L区 S18・19 遺物出土図



第375図 K・L区 S7～9 平面図・断面図



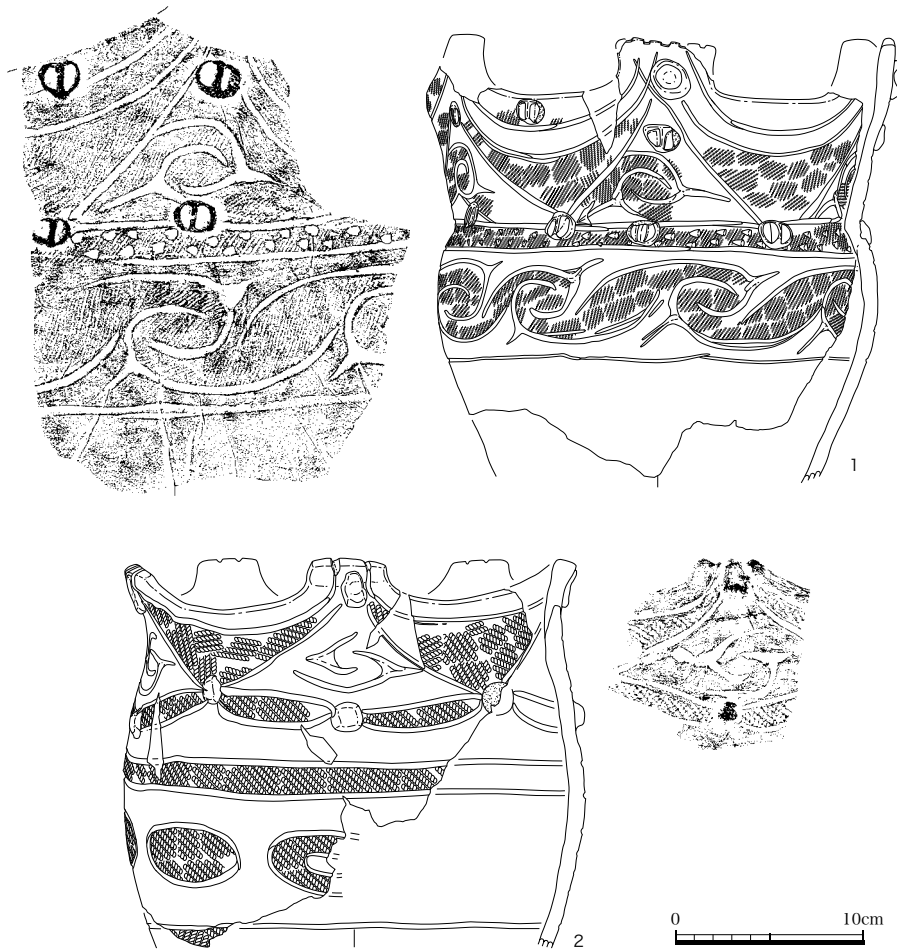
第 376 図 K・L区 S16・17・21～23・25 平面図・断面図

S 3～9、S 11～14、S 16～26 (第 372～376 図 写真図版三四)

いずれも浅い土坑である。V層下位～VI層上面で確認された遺構群で、調査未完掘の例もある。形態や覆土等で特筆すべき例は限られる。この区域に群在するとも言えるが、KL区の東西、S1西側など十分な調査を行い得なかったことを考慮すれば、土坑集中域の判断も慎重にならざるを得ない。S4、S6が近接しほぼ同軸にあること、これに直交する長楕円形土坑S3等、形状等も踏まえ墓坑群を想定したくなるが、他に判断材料がない。S5は遺物がやや多い。粗製土器の大形破片で土器埋設遺構の可能性も指摘されている。重複するS26よりは新しいとされているが、同一遺構の可能性もある。S22、S23、S25などの群在区域(第376図)では、円形土坑が目立っているが、深さ10～20cmの浅い土坑・ピットで占められている。当初S25～S21周辺は遺物集中域SX2との呼称も用いたが、明確な記録はない。S7、S8も浅い皿状の土坑で、S7は遺物がやや多い。S11,12は特徴的な遺物出土状態を示した。S12の覆土上位から石剣類・磨製石斧がまとめて出土した(第373図、写真図版三四-5)。近接するS11からも磨製石斧が出土しており(第383図5)、設置や埋納などの意図的な行為を想起させる状況である。

S7、S8も浅い不整形の土坑、S18、S19では比較的多くの遺物出土が確認されている。S25も遺物量

S25



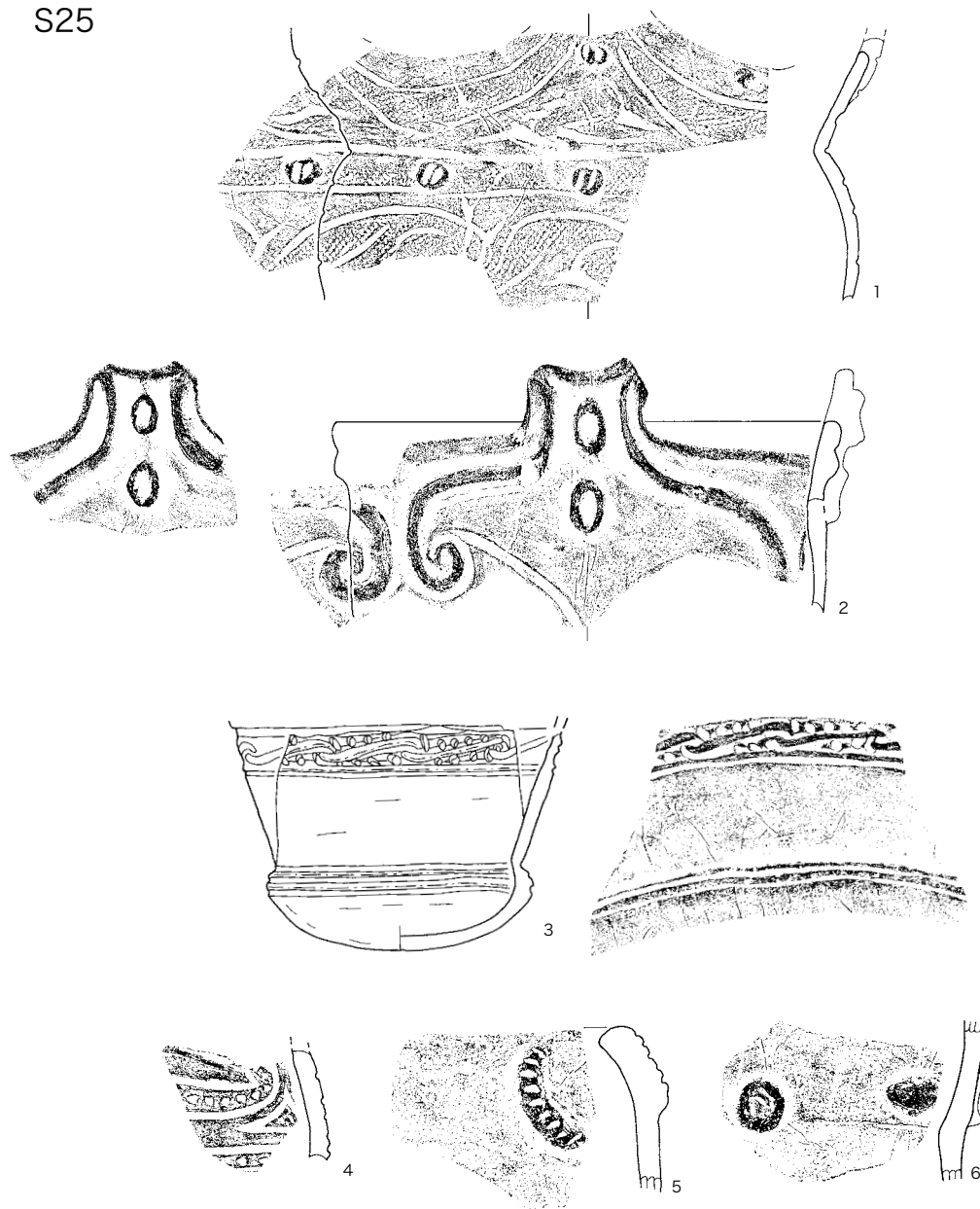
第377図 K・L区 出土土器 (1)

の多い土坑である (第377,378図)。出土状況の詳細なチェックは行っていないが、安行3b式、大洞BC式が目立っており、この時期の土坑と判断できよう。なお他のKL区の遺構出土土器については、型式判断可能なやや大きめの破片も比較的認められたものの、遺憾ながら凶化し得なかった。

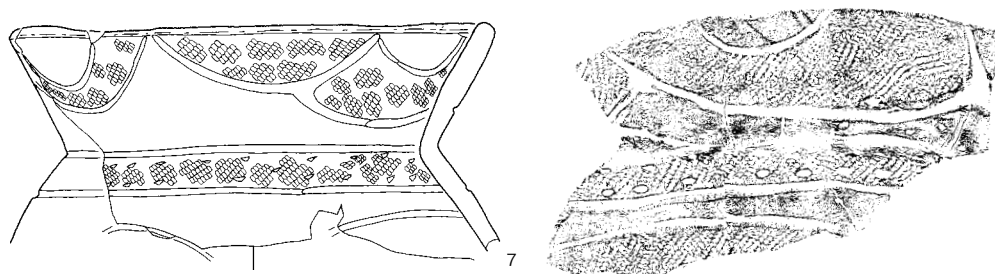
S25出土土器を第377図と第378図に示す。第377図1は5又は6単位と推定される波状縁深鉢である。波状といっても波頂部間は平縁に近い。沈線→刺突→縄紋無節R→瘤添付・無文部ミガキで、三叉部は若干挟り込まれている。内面ミガキで内面下方に炭化物が厚く付着している。2は5単位と推定される波状縁深鉢で、沈線→縄紋RL→沈線ナゾリ・無文部ミガキが観察される。接合しない口縁部破片1点を写影で示した。突起頂部の線は切り込み状で深い。三叉部の挟りはあまり顕著ではない。

第378図1は5または6単位の波状縁深鉢であるが波頂部は欠失している。沈線→縄紋LR→無文部ミガキで、比較的丁寧な作りの印象を受ける。2は例を見ない土器だが、平縁基調で突起が数単位付される構成か。突起から下垂する隆線がS字状の対向渦巻文となり、隆線脇には幅広で浅い沈線が沿っている。内外面とも比較的丁寧なミガキ調整で、薄手緻密な胎土であることも含め丁寧な作りの印象を受ける。3は大洞系の鉢

S25

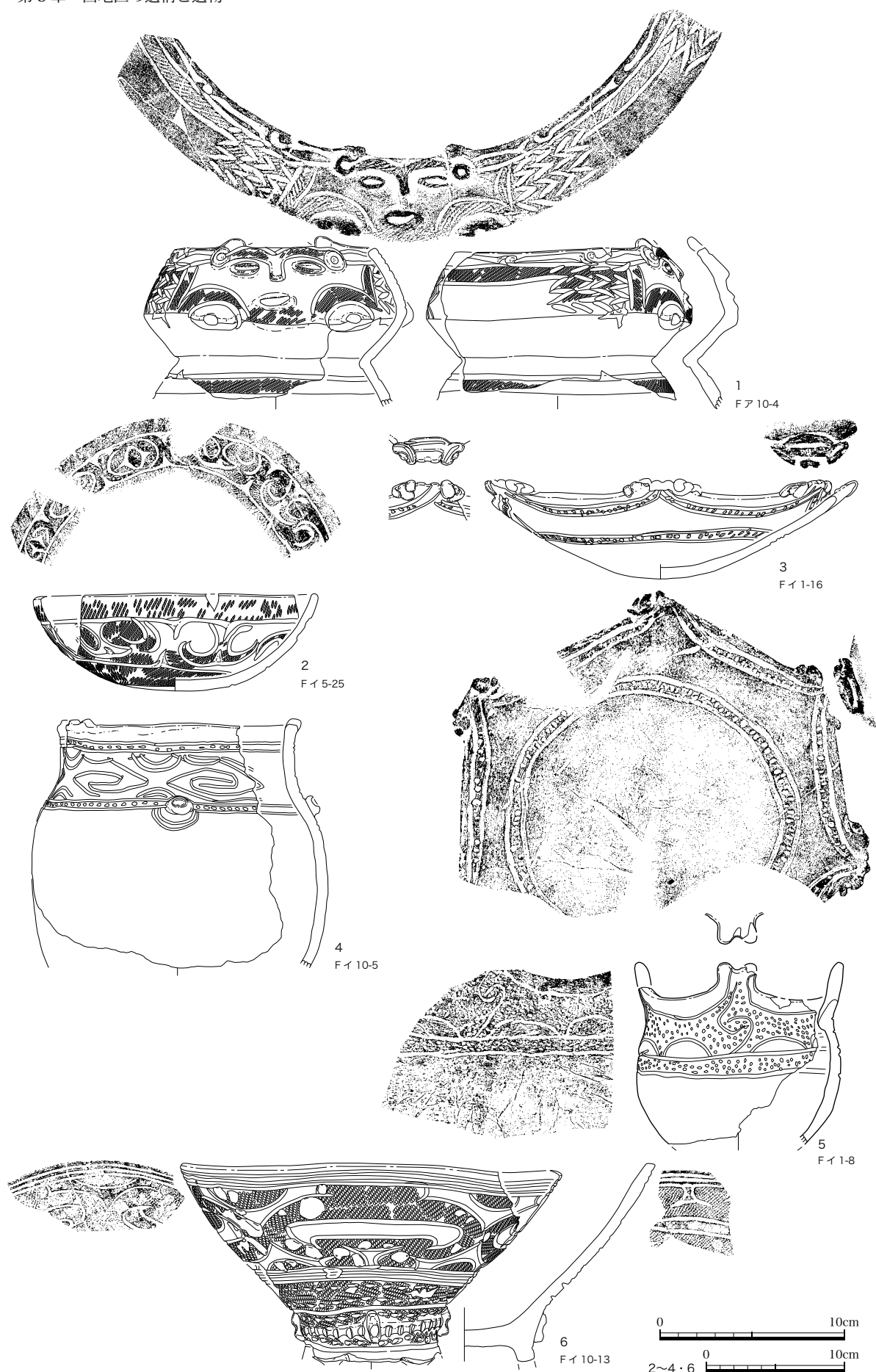


S21

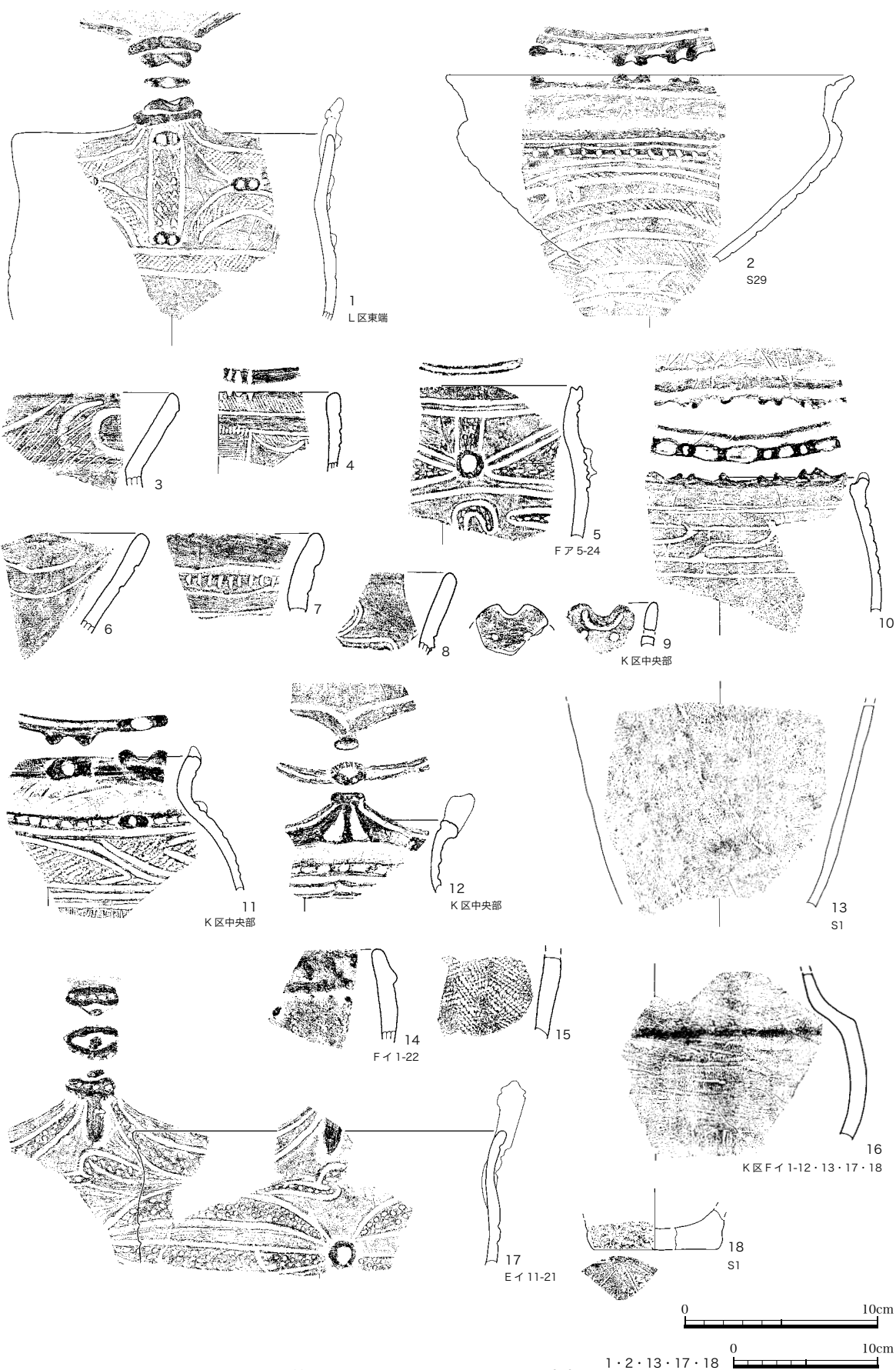


0 10cm

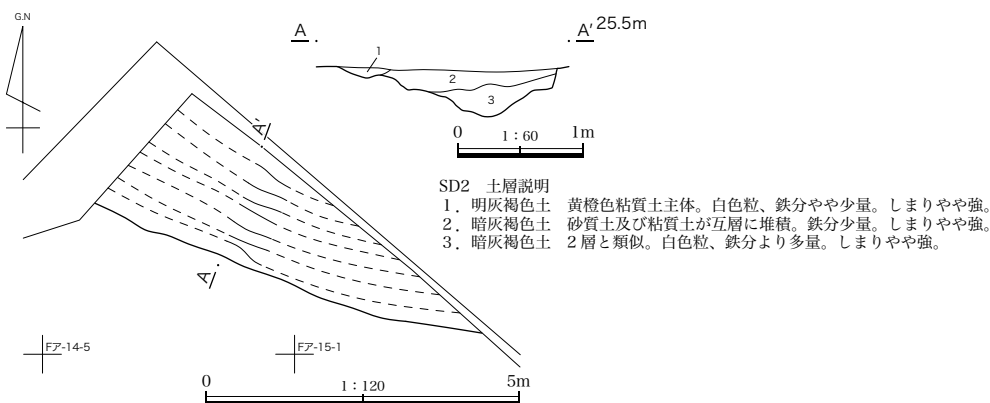
第 378 図 K・L区 出土土器 (2)



第379図 K・L区出土土器(3)



第380図 K・L区出土土器(4)



第381図 K・L区 SD2 平面図・断面図

で体部下方に明瞭な屈曲を有する。羊歯状文は施文後のミガキもあり、比較的丁寧な施文のように見える。4～6の破片資料も注目されるが、全体の構成は不明である。円形や楕円の瘤が貼付される6は構成不明で天地逆の可能性もある。S 25では他に無文土器、付帯口縁の無文土器、紐線文系の粗製土器、晩期初頭の土器等もある。7は当初台付鉢脚部と考えたものだが、頸部屈曲の深鉢とする。内面は削りに近い調整である。白色粒を多く含む胎土で、沈線や縄紋は浅い施文だが無文部ミガキは比較的丁寧である。

K L区出土土器 (第379～380図)

K L区としては3,700点を超える数量の土器が出土しているが、ここでは極めて限定的に示す。

第379図1は顔面付きで恐らく注口部が付されるものと推定する。顔面の上位が欠損しており、突起が付されていたようである。沈線→縄紋L R→無文部ミガキが観察される。同一個体破片の探索を比較的人念に行ったが、確認できなかった。鼻部分にも刺突があり鼻孔表現であろう。沈線は比較的深めの丁寧な施文である。内面はやや粗い調整、外面の色調は10 Y R 4/2、内面は10YR5/2 灰黄褐色である。目眉下唇などの隆起部上にも縄紋L Rが付される。口縁直下に沈線が廻るが、鋸歯文帯の上等で玉抱三叉文表現が認められる。鋸歯文帯は顔面の左右及び顔面部の180°反対、対面部にもある。右の鋸歯文帯では縄紋の充填もやや疎らである。全体にミガキはかなり入念で、口縁端部や屈曲部なども良く磨かれている。口縁一部に炭化物タールの付着があるが、使用時の付着ではなさそうである。

第379図3はやや大形の鉢で6単位の波状口縁と推定される。突起は巻き付けるような手法であるが、巻き付け後に丁寧に調整されている。沈線・刺突はやや浅い施文、施文後のミガキは丁寧に底部まで磨かれている。2は皿状の鉢で沈線→縄紋L R→沈線ナゾリ・無文部ミガキが観察できる。縄紋は繊維が粗い節が目立つものである。上下対向の三叉部は若干抉り手法である。4は頸部に沈線及び刺突の充填で文様が描かれるもので、頸部文様帯部分はナデ調整、無文の下半は横方向の削りである。石英など鉱物粒が多い。沈線及び刺突は細く浅い施文。突起は1箇所のみ残っている。5は小形の鉢で4単位波状と推定する。文様は細く浅めの沈線で描かれ、針先状の細かい刺突が充填される。無文部や体部下半は比較的良く磨かれている。6は台付鉢の鉢部～接合部で、上面観がやや方形に近いようにも見えるが、1/2程度の遺存であり歪みかもしれない。沈線・刺突→縄紋L R→無文部ミガキで、接合部の隆帯凸部にも一部縄紋が加えられる。

第380図1は頸部に対向弧線が描かれる深鉢で、突起下の直線帯状部では縄紋地に刺突も加えられる。口縁突起は姥山式系の特徴を示すが、頸部の瘤は比較的整った豚鼻状である。2は大洞系の鉢で太い沈線、無文

部ミガキが特徴である。外面炭化物の付着が目立つが、使用時の付着と見て良いかは検討が必要である。10の破片はB突起の密な貼付とクランク文端部の三叉部分が若干抉り手法である点注意される。5の破片も注目されるもので、比較的深い沈線、やや大きめの刺突があり、施文後も若干磨きが入るなど、やや丁寧な作りがうかがえる。16は頸部に段差を有する破片で、直立～内傾気味の口縁へ移行することが推測される。屈曲の上下とも削りに近い研磨調整で、破片下端近くでは縦方向の調整痕も観察される。内面では炭化物の付着も認められる。17も注目される4単位の波状口縁深鉢である。口縁突起は粘土紐を巻き付ける形態で、この上にも刺突が付される。ここから短く垂下する隆帯部があり、さらにこの軸の下方に円形貼付文が付される。波頂部間の対向弧線と波頂部下の区画文内に入組文が入る菱形区画の交互構成で、充填の刺突はやや大きめの円形刺突である。沈線刺突施文後のミガキも比較的入念で、全体に丁寧な作りの感を受ける。

K L区出土石器（第382～385図）

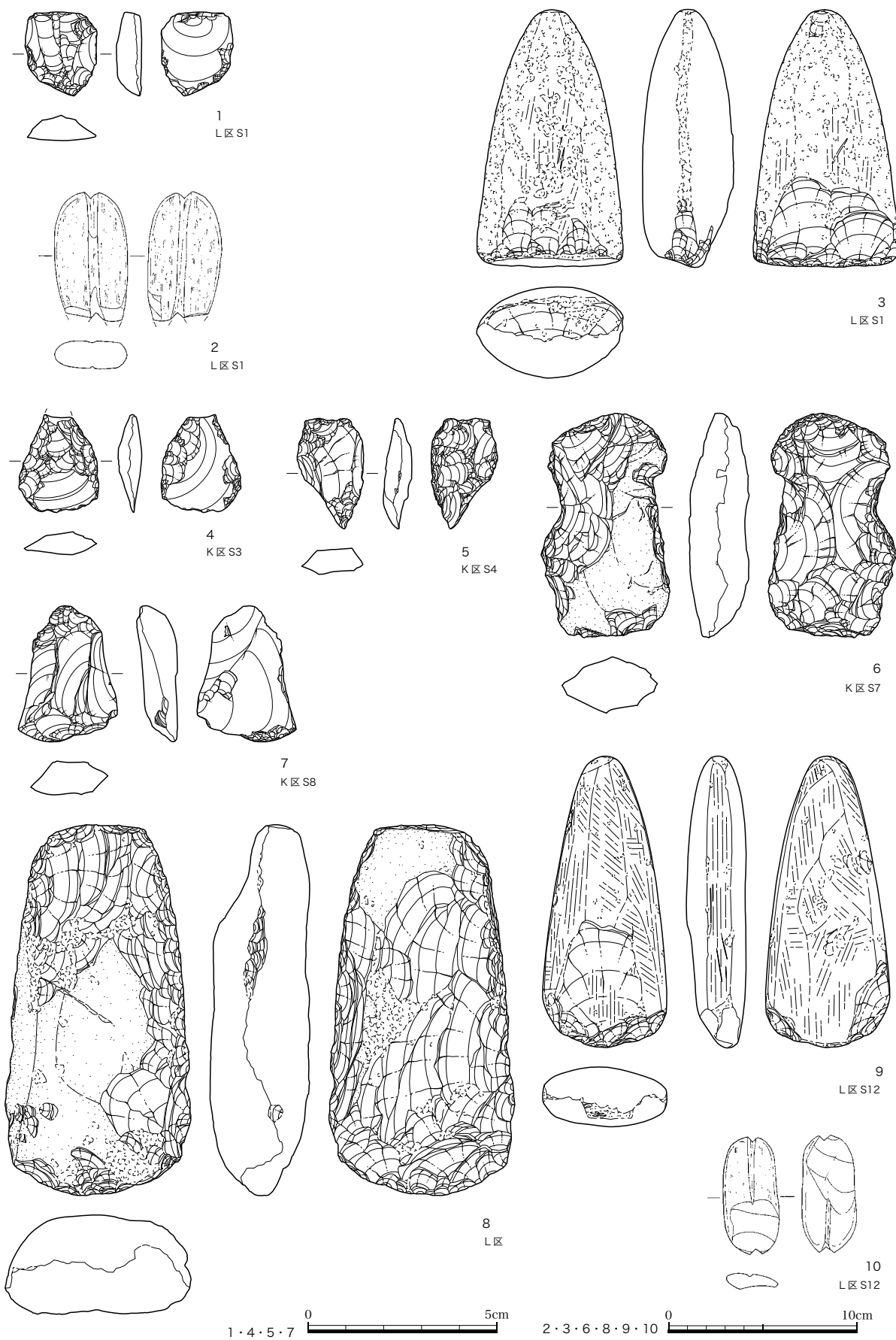
既述のように、K L区の石器については、機種分類及びカウントが未完了であり、各機種毎及び総点数は不明である。およその箱数で30箱があることから、カウント済みの338点の2～3倍程度の数と推定しておく。分類済みのものや調査整理時の抽出しにより図化候補を幾つか選び、更に厳選して代表例を図化した。この過程で機種が偏った点は否めず、磨製石斧・打製石斧を多く選択している一方で、チャートの剥片石器や磨石類・石皿類については殆ど図化し得なかった。図化の多くを株式会社アルカに委託している。

特徴的な出土状態としてはS 12での磨製石斧（第382図9）・石錘（同図10）及び石剣類（第440図5）の近接位置での出土（図版三四-5）、S58からの石錘集中出土（第384図5～10、同図版3）等がある。特定の機種がある数グリッド範囲に偏在するような可能性もあるが、現段階では不明である。グリッドを特定できない「K L区」のような扱いが多いのは、重機掘削時或いは、掘削時廃土から回収した遺物も多いことによる。遺構出土石器、グリッド出土石器の順で以下羅列的に示し、観察結果等については表に譲る。

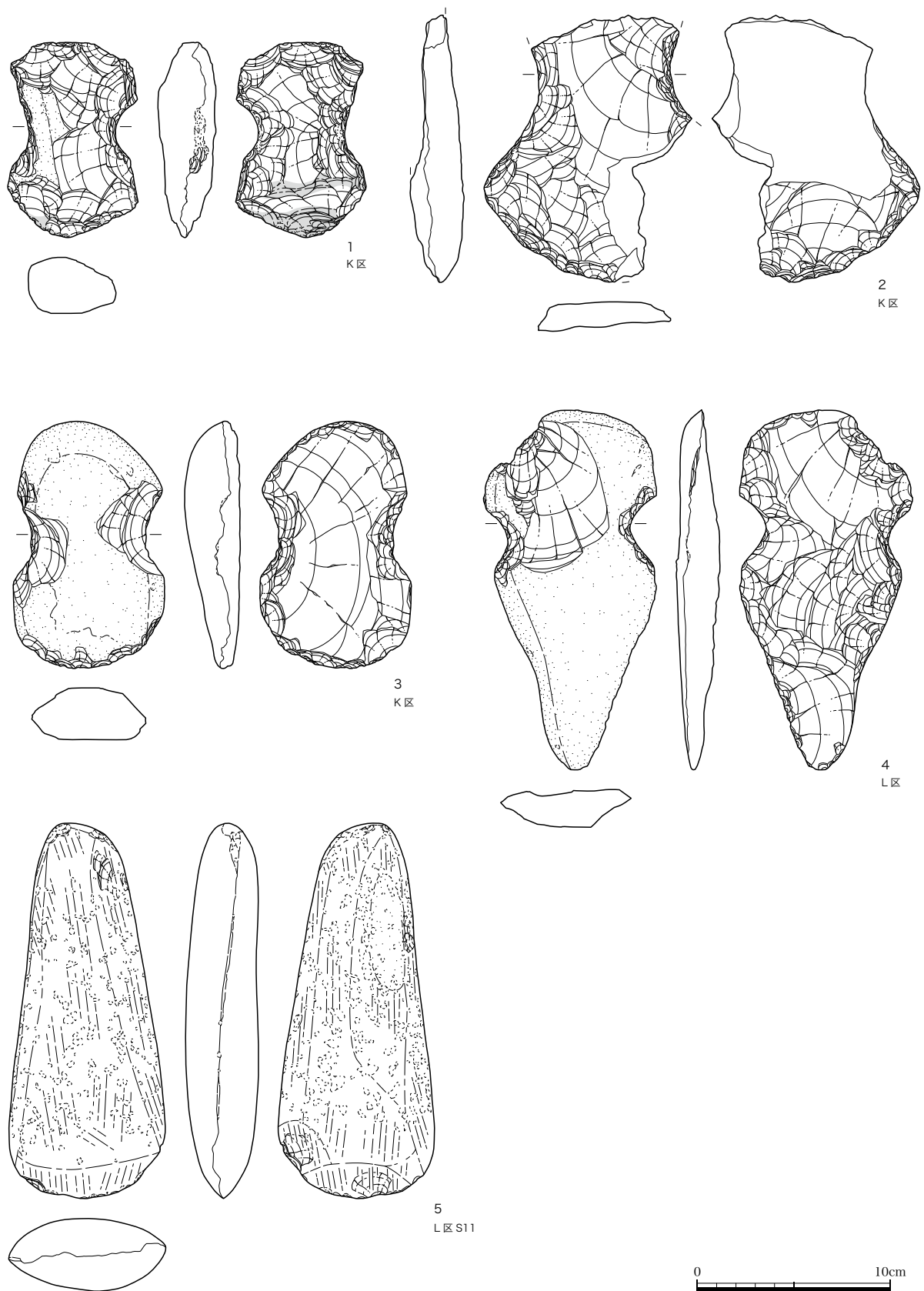
第382図では主に遺構出土例を示す。S 1住居跡出土のものとして剥片石器1点、石錘1点、磨製石斧1点を示す。3は磨製石斧欠損品で、下端に顕著な敲打痕があり欠損後敲石として転用している。9の磨製石斧も刃部の敲打痕・擦れ摩滅痕が観察でき、転用や使用法の多様性を示すものかもしれない。8は大形の磨製石斧未製品と判断したものだが、この状態での使用＝大形の打製石斧のような状況をも推測させる。第383図5は典型的な磨製石斧で、表裏面とも良く研磨されている。刃部の線状痕（使用痕）・刃こぼれが目立っており、使用の頻度を窺わせる。同図1～3は打製石斧として問題無いが、4は検討が必要となる。括れ部敲打はあるものの、刃部作出にかかる二次加工は一部側縁に限られ、搔削器とした方が良いかもしれない。

第384図はK L区グリッド、K L区遺構出土石器を示す。2は機種判断保留の「その他の石器」である。全体的に磨痕が見られるが、整形の磨痕として良いか、不明である。一周するやや深い溝も例を見ない。表面下方や裏面下方では凹み孔とその周囲の磨痕が複合しており、石皿類のような様相とも言える。3は平坦な面を有する石皿類で、主に中央に磨痕が認められる。側縁は加工しているようだが、痕跡は不明瞭である。4は赤色顔料が顕著に付着している磨石である。付着は特定部分に集中している。5～10は柱穴状のピットS 58から出土した石錘である。有溝～切目石錘で、サイズも概ね類似している点は注目されよう。

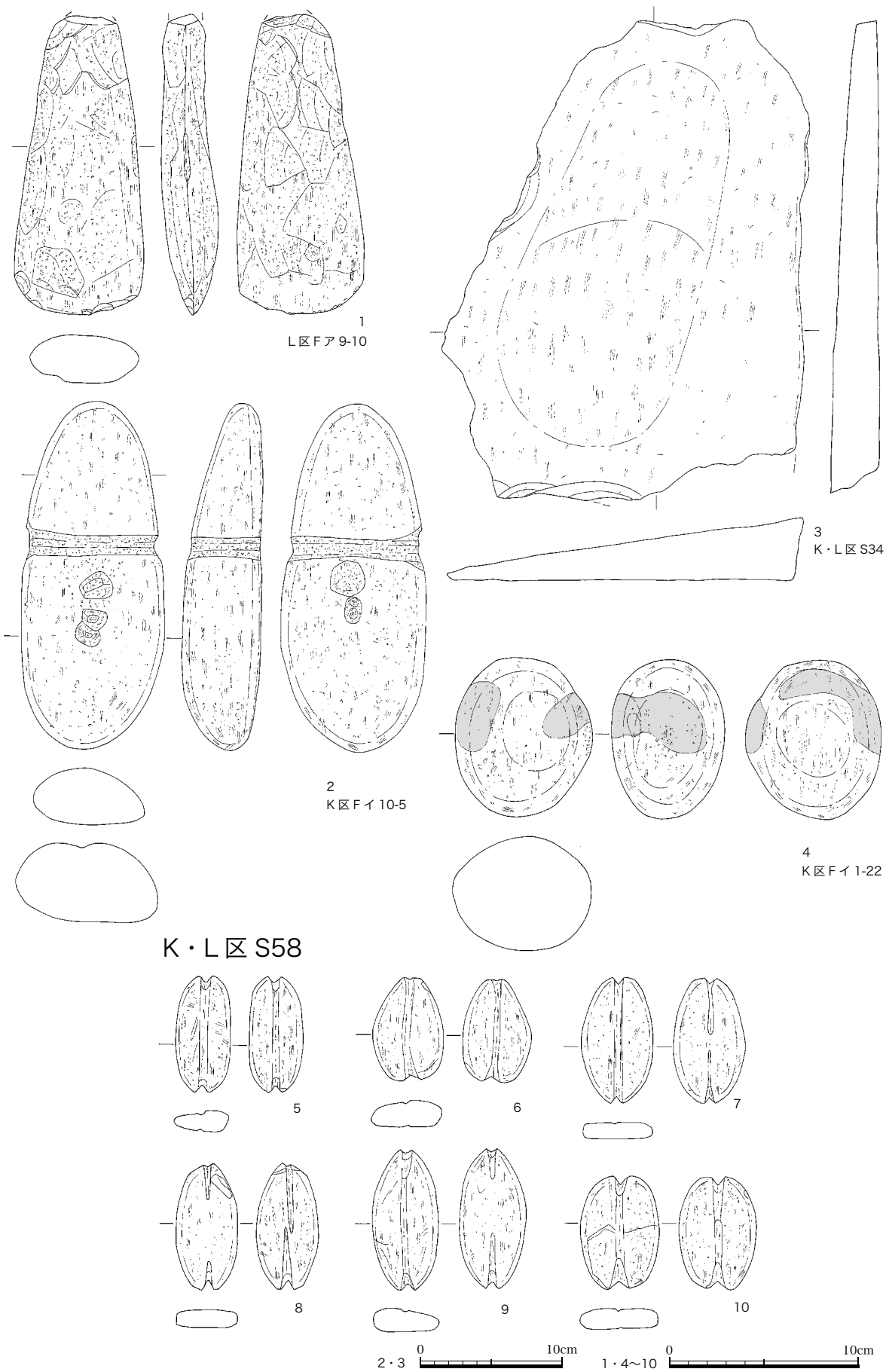
第385図には大形の石皿類1点及び磨石1点を示す。1は長さ40cm近いもので、表面は中央がやや膨らみ、裏面が平坦に近い。いずれの面も凹み孔と石皿面の磨痕が明瞭に観察される。側面の整形痕も認められる。2は扁平長楕円形態で、置いての使用＝石皿類と捉えた方が良いかもしれない。使用痕か整形痕か不明であるが側面の敲打痕が目立つ。部分的に炭化物の付着も見られる。



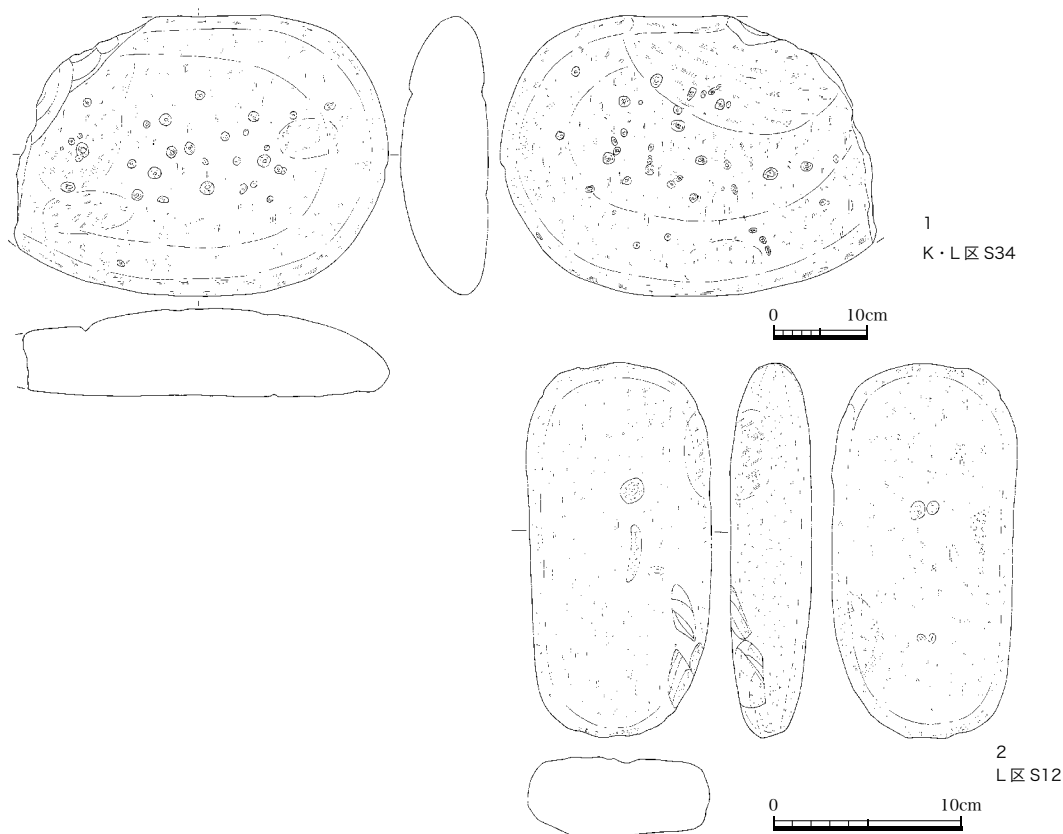
第382図 K・L区 出土石器 (1)



第383図 K・L区出土石器(2)



第384図 K・L区 出土石器 (3)



第 385 図 K・L区 出土石器 (4)

第 8 表 K・L区遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	軸・遺物 (石器未集計)	遺構図版	遺物図版	写真図版
S11	526	430	70	N-27° -W	367	369,370	33
SD2	646	220	40	N-68° -W	377 ?		
S1	150	83	27				
S2	51	47	6	N-51° -W			
S3	237	114	11	N-50° -W	372		34
S4	136	118	28	N-51° -E	372		
S5	78	91	10		372		34
S6	333	135	22	N-57° -E	372		
S7	260	90	58	N-35° -E	375		
S7b	220	168	54	N-51° -E	375		
S8	210	168	27	N-35° -E	375		
S9	102	87	18	N-90° =P8	375		
S10	42	37	16				
S11	143	110	22		373		
S12				遺構不明?	373		34
S13	56	50	27				
S14	58	54	32				
S15				遺構不明?			
S16	102	105	16				
S17	115	50	14				
S18,19	157	87	18		374		
S19				遺構不明?			
S70 ビット群					371		34
P6	58	45	21	S42 と同じ	371		
P8	95	93	18	S29 と同じ	371		
P11				遺構不明?	371		
P14	90	66	35	S27,28 と同じ	371		
S22	162	192	46	N-40° -E	371		
S23	148	107	22	N-3° -W	371		
S25	185	106	18			377,378	
S26	113	108	14	N-22° -W	372		34
S36a	98	82	21		371		
S36	98	83	22	a と同じ?	371		
S36b	80	90	16				
S39				遺構不明?	371		
S42				遺構不明?	371		
S53	50	48	30	黒褐色土：炭化物粒多量、焼土粒微量、しまり弱。	371		
S54	34	28	24	黒褐色土：炭化物粒やや多量、しまり弱。	371		
S56	40	38	31	黒褐色土：炭化物粒少量、砂少量、しまり弱。	371		
S58	35	32	38	暗灰褐色土：炭化物粒少量、砂やや多量、しまりやや弱、石錘5点。	371		
S59	55	43	40	1：黒褐色土：炭化物粒やや多量、しまり強。 2：暗褐色土：炭化物粒微量、砂多量、しまりやや弱。	371		

第8節 土製品

概要

土製品の整理は、土器などと並行して進められた。水洗注記の後、種別の分類を行い、その後大まかに地区分類、グリッド分類をして通し番号を付した。そして図化遺物を選択し、実測以降の整理を進めた。土偶や耳飾りなどこれまでの研究蓄積のあるものは、ある程度参考としたが、地域性が著しいものもあり、或いは本遺跡出土資料のみでは検討が困難なものもあり、分類検討を殆どできなかったものも多い。土版なども含め特徴的なものは可能な限り図化するよう努めたが、土製円盤のように、殆ど図化し得なかったものもある。小片においては種別不明なものもあり、各種別の実数は確定的ではないが、数量（第10表）についてもこの遺跡の特徴を示していよう。以下、種別毎に羅列的ではあるが概要を記す。

1. 土偶（第386図～第393図）

土偶は総数152点出土した。土偶として良いか不確実な資料もあり、或いは別種土製品で分類した中にも土偶とすべきものがあるかもしれない。地区別ではA区37点、B区39点、C区30点であり、残りはK L区、トレンチなどである。完存のものはなく、顔、胴体、手足などの破片資料となっている。この部位別の検討はしていないが、大きな偏りは無いように思える。小片では部位・表裏天地の判断を迷う資料もある。地区別・グリッド別・層位別の出土数や分類との相関などの検討は行い得ておらず、偏りや注目すべき相関などは検討していない。但し、山形土偶系やみみずく土偶系がB区で目立ち、I字文を有するものがA区やC区で目立っていることは、土器の出土状況とも対応する事象と捉えて良いであろう。つまり後期～晩期初頭の資料がB区で多いこと、晩期中葉の資料がA区やC区で多いことが、土偶の出土状況とも対応している可能性を示す。なお調査時における特徴的な土偶の出土状況については観られなかった。

整理に当たっては分類抽出したものについて、遺存の良好なものを中心にできるだけ多くの資料を図化し示すよう努めた。個別の観察結果については観察表に譲る。細かな分類・検討も行い得ていないことから、以下では羅列的な記述とする。本来類例の探索や検討が必要な資料も多いが、別の機会に譲りたい。

第386図はA区出土の資料で、4,10,11,18など中空の資料も比較的多い。1は頭頂部を十字状に粘土紐を交差して作っているもので、胴部は板状に近い形態である。3の顔面は板状扁平な作りで、土版となる可能性もあろうか。11は遮光器系の肩部に文様が展開する例である。18は雲形文の一部が胴部に描かれており、これも遮光器系と判断される。10,17,19等ではI字文表現が確認される。

第387図の1～4もA区出土資料で、対向三叉文やI字文表現の2～4と胴～脚部の1を示す。1はそれぞれやや離れて出土した左右脚及び胴部が接合した資料である。層位・レベル的には同じで、平面的にも極めて離れた位置関係ではないが、それぞれ3m程度は離れて出土しており、出土状況・位置関係の図などは示し得ないが、注目される出土事例である。形態・文様としても類例少ないもので注目される。

第387図の5～13はB区出土資料である。5は山形系の土偶であるが、後頭部突起の位置が下方にあること等の特徴がある。7は典型例に近いみみずく土偶であるが、顔面はかなり板状扁平な作りである。一方8,12等はかなり異質な感のある土偶顔面であるが、個別の要素という面では他と共通する部分も認められる。

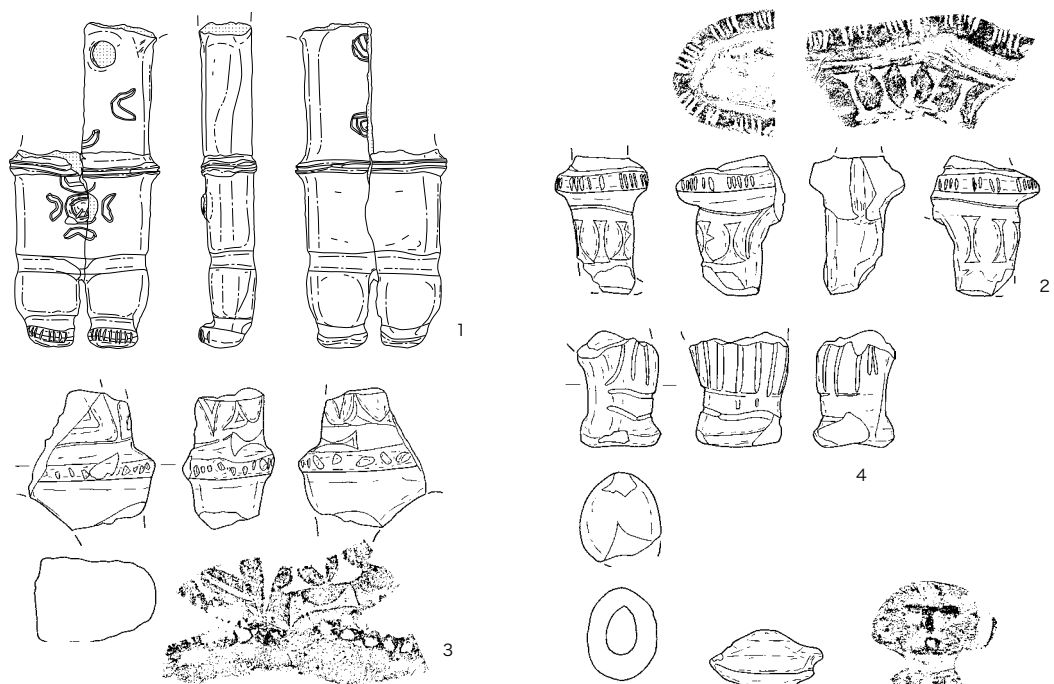
第388図は胴部や手脚などを主に示した。小形中実の資料主体だが、13はやや大きい中空の胴部である。15はかなり細かい刺突～短い線状の充填文様が股間に描かれている。肩～腕部で隆帯状に巻く部分が付加される6例や腰部分の張り出しと股間への区画文表現はエリ穴遺跡に類例がある。

A区

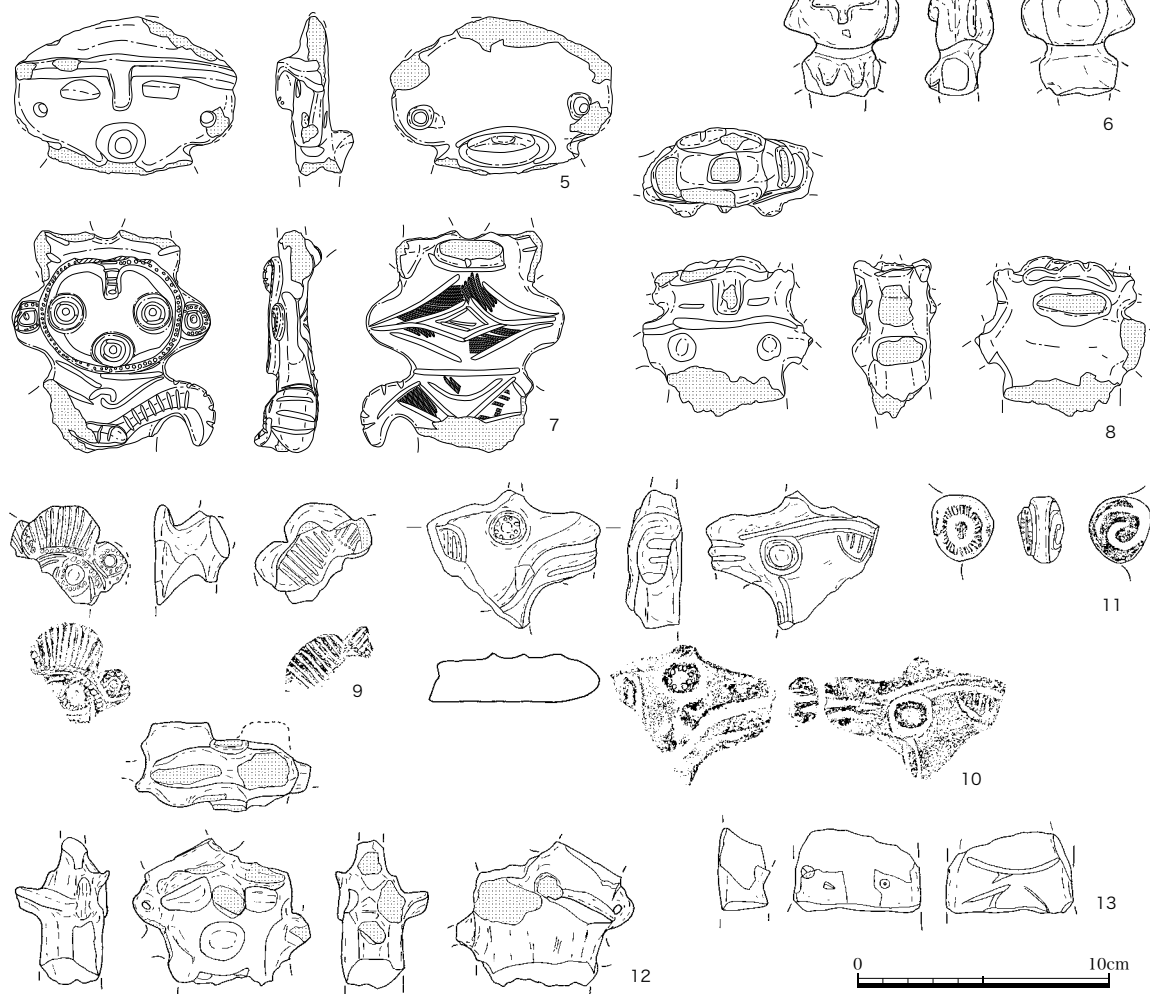


第386图 土偶(1)

A区

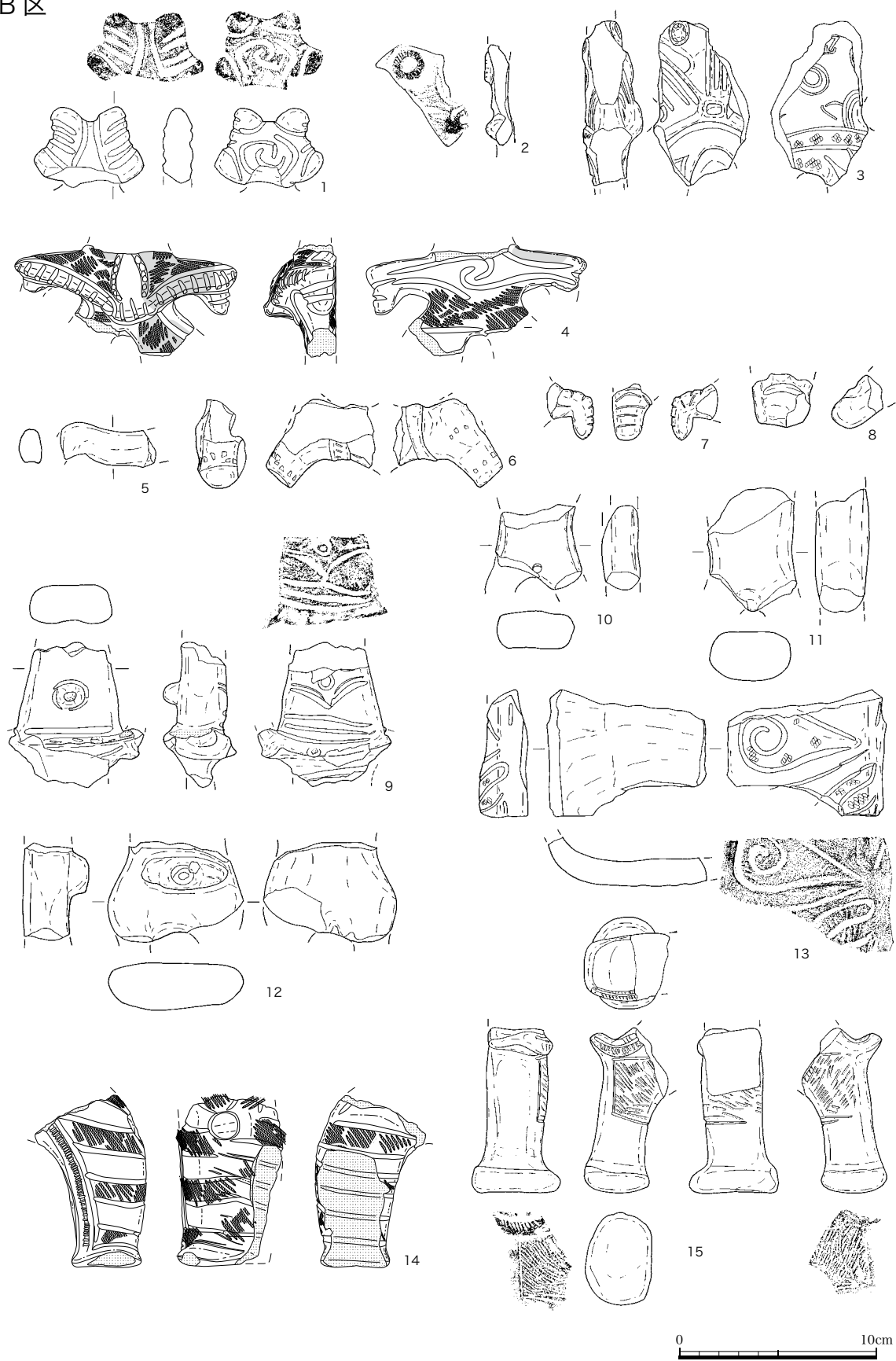


B区



第387図 土偶 (2)

B区



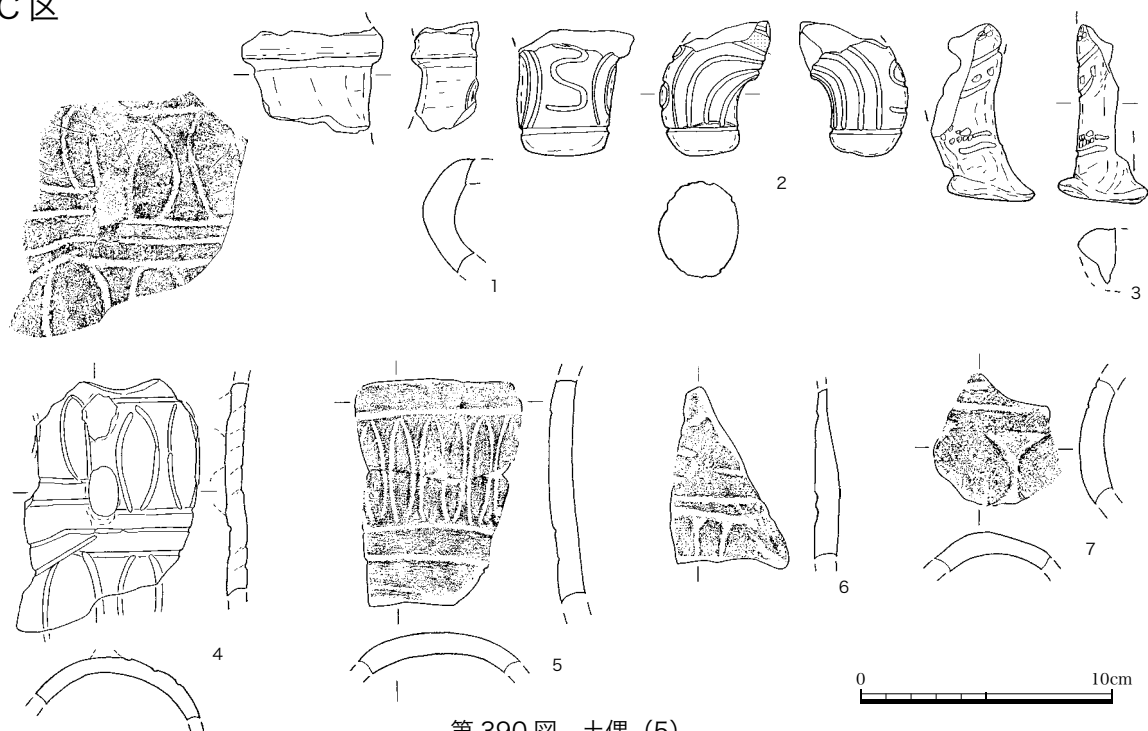
第388図 土偶 (3)

C区



第389図 土偶(4)

C区



第390図 土偶(5)

第389図はC区出土資料である。2は板状の形態と顔面などがかなり省略的な表現となっている特徴が認められる。6～9は遮光器系の中空土偶である。6では中空内面で粘土紐積み上げ状の接合痕を観察できる。6や8の文様表現では比較的丁寧なミガキが観察されるなど、彼地の土偶との関係を強く感じさせるものの、搬入との判断には検討が必要となろう。11は当初別種土製品かとも考えた資料だが土偶の肩部と判断した。但しかなり横に張り出す形状と側面下方にも文様があること、文様そのものも特徴的でこれも本来良く調べる必要があろう。12の土偶体部では接合痕の上端部から股間に抜ける貫通孔がある。北関東・中部の土偶では幾つかの例を見かけるものであり注意を要する。エリ穴遺跡出土例でも散見される。接合痕としてはかなり整った面を為している点も気にかかる点である。つまり、製作技法上の問題で、パーツ同士を組み合わせる過程の問題(芯棒のような役割?)或いは各パーツを別に焼いている可能性なども想定させるが判然とせず、更なる検討が必要である。

第390図1～7もC区出土で、4～7が中空例である。4の内面は粘土紐積み上げの接合痕跡が明瞭に観察でき、中空土製品の可能性が高い。土偶の腕部や脚部の可能性を考えたが、大きさなど違和感もあり、良く分からない。5,6は内面が良く磨かれており、脚部等の土器の一部となる可能性がある。

第391図にはD・E区出土の土偶をまとめた。中空の例やI字文～沈線密集施文例が目立っている。2は注目される資料で、かなり細く浅い線による文様表現が特徴的である。眼や首回り、背面などに円文・三叉状文などが描かれる。下端からの観察により、粘土紐積み上げ及び中空の裏面腕部付け根で補強の円状粘土貼り付けが観察されることも注目される。9,10の脚部は、重量のある例で深く太めの沈線など安行3d式あたりの施文手法に類似している。10は下方では中実、付け根付近が中空に近い形態であり、中空の胴部へと続く部分であろうか。

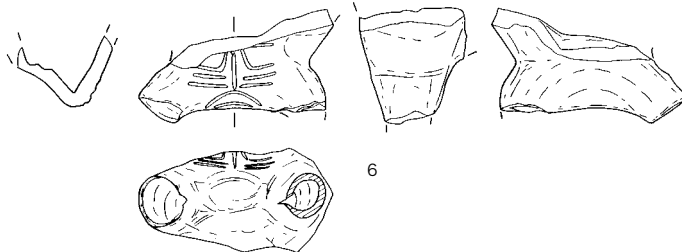
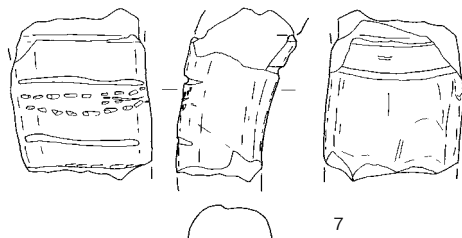
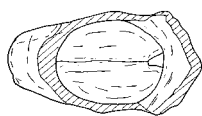
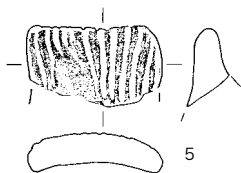
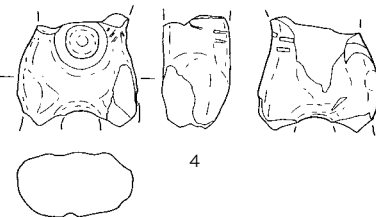
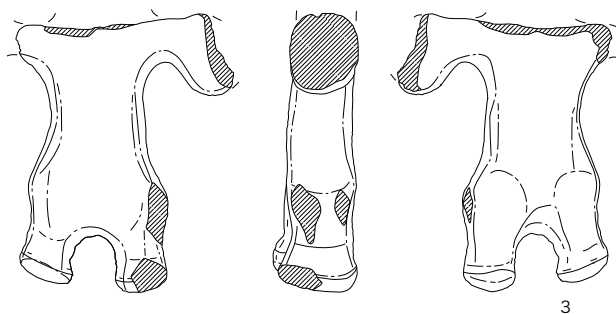
第392図にはH区・I区・KL区の資料を示す。2のような細長い胴部の土偶は群馬県から中部地方で観られる例との関係を示すものとなるだろうか。5はみみずく土偶の頭頂部突起部分、6は土偶としてよいか疑問の残るもので、当初示した形で図化したものの、天地逆で頭部とした方が良さそうである。便宜的に当初のま

D・E区

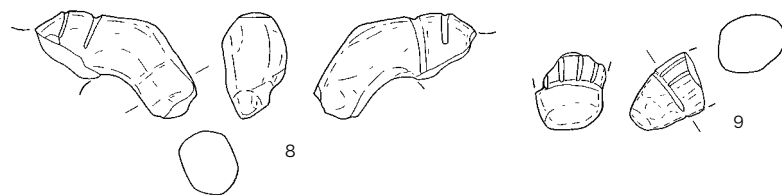


第391図 土偶(6)

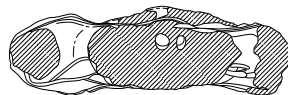
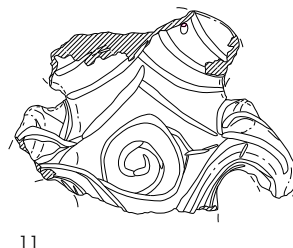
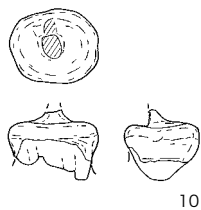
H区



I区



K・L区



第392図 土偶(7)

K・L区



トレンチ等

第393図 土偶 (8)

ます。二叉の口部端部が一部イキであり、全体に薄い基体であることなど特異なものである。K L区出土の11も注目される資料で、これも下端割れ口部分に縦貫の孔があり、口部分に抜けている。本例の顔面表現は一見「山形土偶」に近い特徴を有するが、腕部～胸部の形態や文様はみみずく系の表現を受け継ぐもので、更に胴部の形態や背面文様は晩期中葉の土器文様との類似を窺わせており、注目される資料であろう。

第393図は1～4がK L区、5以下がトレンチや遺跡内だが出土区別の特定ができない資料である。1は胴上部の正中線が腹部では貫通孔となり、股間へと抜けるものである。やや乱雑に密な沈線施文がある。2は中空の胴部上半資料、4は胴下半から脚部で股間に穿孔がある。6は大形となる赤城遺跡例で著名な中空土偶の顔面で表面は欠けている。耳飾り表現部で赤彩が観られる。9も大きくは遮光器系となる腕部か。7,8は腕部に縦位充填沈線列のある例、11はやや細かい刺突を巡らすもので小形である。

2. 土版(第394～397図)

土版は総数37点出土した。土版として良いか不確実な資料もあり、或いは土偶や別種土製品で分類した中にも土版と判断すべきものがある可能性が残る。地区別ではA区17点、B区3点、C区9点であり、残りはD区、K L区、トレンチなどである。A区とC区が目立っている点は、晩期のものが多い遺物である点と整合的である。ほぼ完存の例も5点あるが、多くは破片資料である。小片や無文例では部位・表裏天地の判断が難しい。基本的に顔面表現がある場合は、そちらを表面としている。関東地方における土版の出土数はかなり限られており、1遺跡でこの点数が出土することは注目される。また土版の形態的特徴・文様の特徴、作りなどから本遺跡出土土版の分類も可能であるが、系統的・編年の整理を行い得ていないこともあり、ここでは羅列的な図示と記述としたい。総じて厚手の作りで、胎土が密なためか重量感があるものが多い。一方文様は、繊細な表現例もあるものの、雑な施文例が目立つ。施文手法では土器文様と同種の手法によるものが目立つが、文様意匠そのものは、一般の土器文様と対応するものは殆どなく、土版文様というべき意匠が目立つ。対向三角形文、I字文、斜線文、弧線の組み合わせ文様などで、これらが組合う例ももちろん見られる。また顔面表現があるものが一定量あり、むしろ明瞭な顔面表現(第394図1,第395図5)などから抽象的な表現或いは一部の要素のみ残すもの(第397図1,4など)への変化が窺われる。

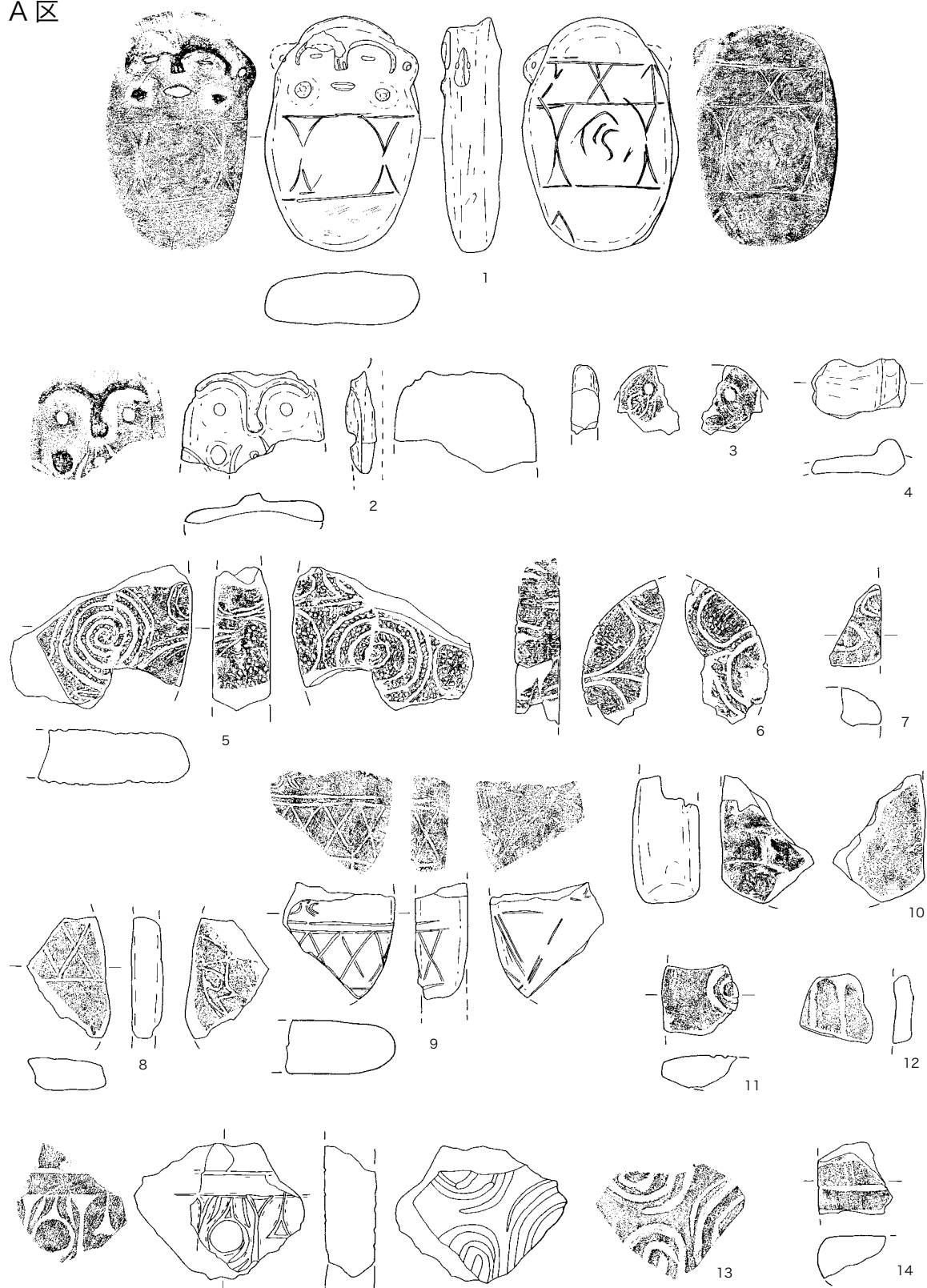
なお調査時における特徴的な土版の出土状況としては、土版と岩板の共伴的出土状況がB区においてみられた点注意される(写真図版一四-8)。これ以外は包含層から他の遺物と共に散発的な出土である。

整理に当たっては、遺存の良好なものを中心にできるだけ多くの資料を図化し示すよう努めた。個別の観察結果については観察表に譲り、以下では羅列的な記述とする。本来類例の探索や検討が必要な資料も多いが、別の機会に譲りたい。

第394図はA区出土の例をまとめている。1は顔面表現が表面に明瞭に描かれるもので、胴部及び裏面の文様はかなり細く浅い線によっている。土偶との対応関係も窺うことができ、口の両側やや下方にある2つの突起は胸表現ということになろう。2は裏面が薄く剥落しており、顔面付き土器などの可能性もあるが、一応ここで示す。眉～鼻の隆帯表現は1とも共通する。5,6は外縁部に弧線文を巡らすもので、北関東地方の土版としては比較的普遍的な文様意匠である。細かい針先状の刺突が加えられるが、6では弧線文内充填であるのに対して5では全体的に刺突がある。8,9は格子目文が描かれるもの、12,13はI字文が描かれるものである。13の沈線はやや幅広で深い施文であり、安行3d式の手法に近い。

第395図は1～3がB区出土資料、4以下がC区出土資料である。1は完存の例で、正中線、鋸歯文、外縁弧線文などが組み合う文様が特徴的である。線はかなり細く繊細な感を受ける。上端近くに「山」字文もある。

A区

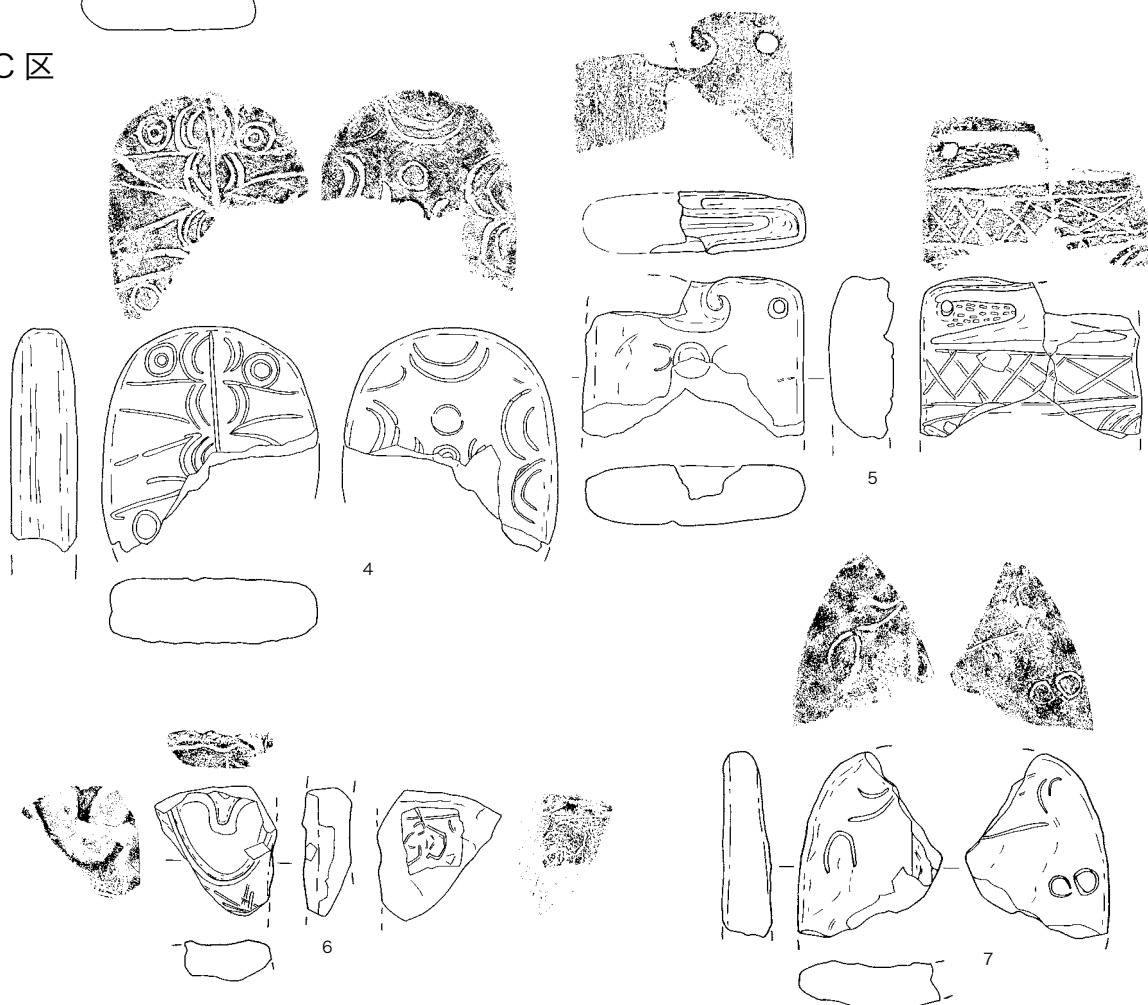


第394図 土版(1)

B 区

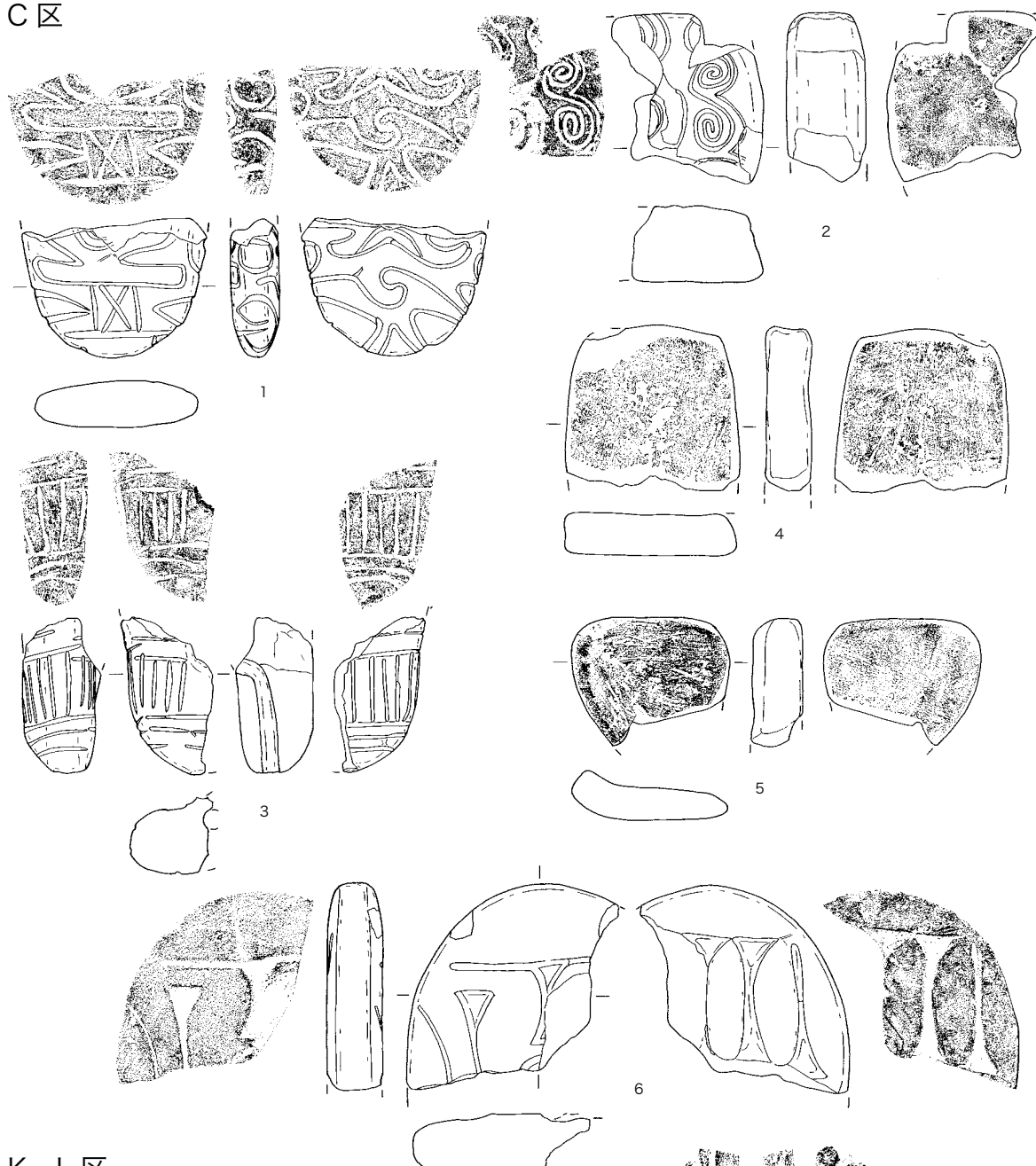


C 区

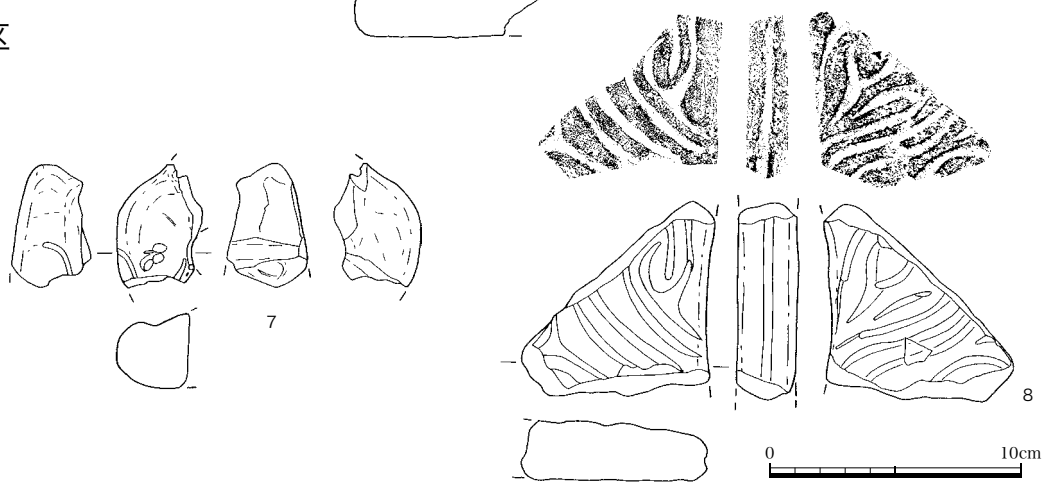


第 395 図 土版 (2)

C区



K・L区

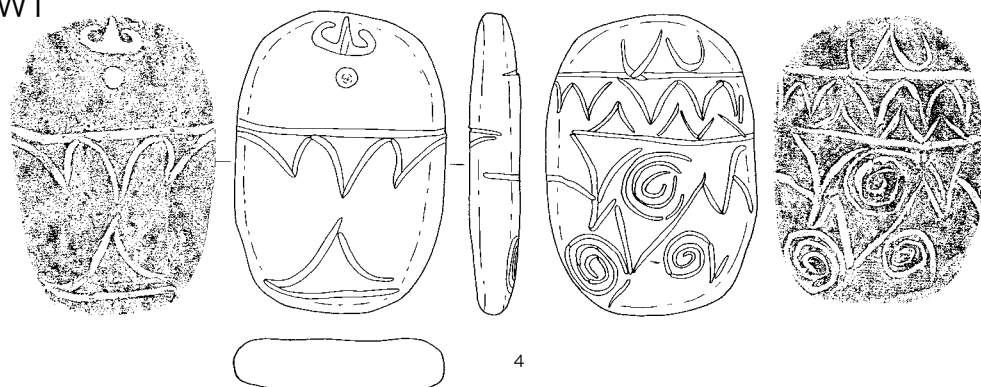


第396図 土版(3)

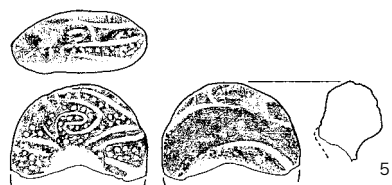
D・E区



WT



C区



0 10cm

第397図 土版(4)

2はかなり厚手で重量感がある資料。表面上端の凹点部を顔面口部分対応部分と考えた。3は他とは異なる細長い形態で土版の範疇として良いか迷うが、表裏の平坦面に描く文様など、他と共通する部分もある。4は1/2程度遺存の資料で、右側に示した部分の中央が凹点状?で、表裏上下逆の可能性もある。5は表面顔面表現、裏面に格子目文等が描かれるもので、上位の工字状陰刻はかなり深い彫去状の手法である。6は全体の形態が不明なものだが、表面では土偶顔面に近い表現が観られる。

第396図は1～6がC区の資料、7,8がKL区の資料である。1はS147住居跡出土資料で、入組状の曲線文様も特徴となる資料である。2は縦横断面とも長方形状となる、角が鋭角な作りで、線は比較的細い表現である。3は土偶の可能性も高い資料で破断面から観察できる基体の中を貫通する孔がある。5も土版典型例とは異なるもので、不整な形状を呈している。6はかなり大形となる両面I字文表現の例である。K区出土の8は太く明瞭な沈線で、文様表現も含め安行3d式との関りを示す資料である。

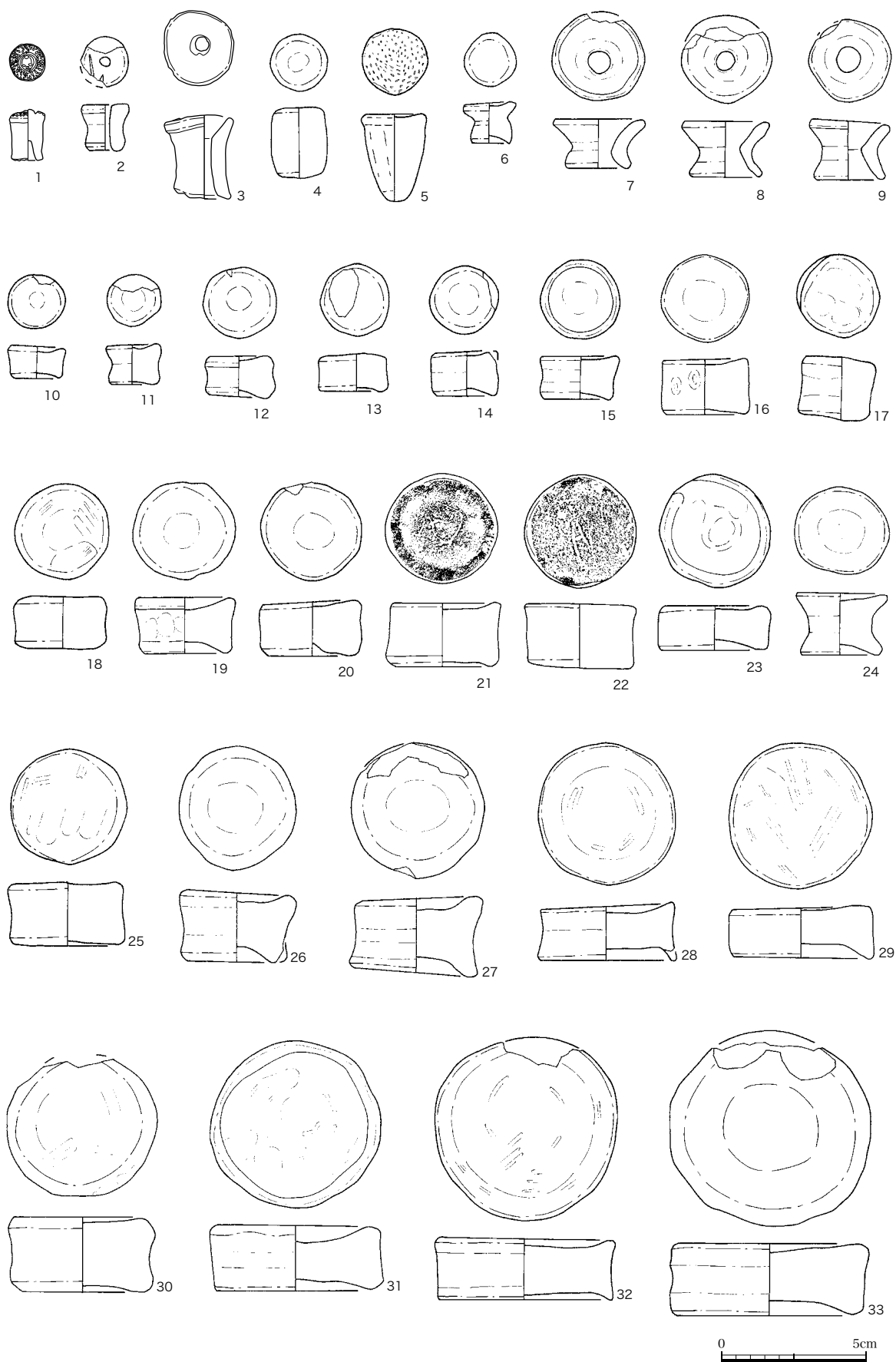
第397図は以上とは別の地点からのものである。1は顔面表現を残すもので、渦巻文表現が特徴的なものである。4も完存例で、表面に「山」字文や口表現があり、同図1や第394図1等との共通項、対応部分を見出すことができるものである。

3. 耳飾り (第398～409図)

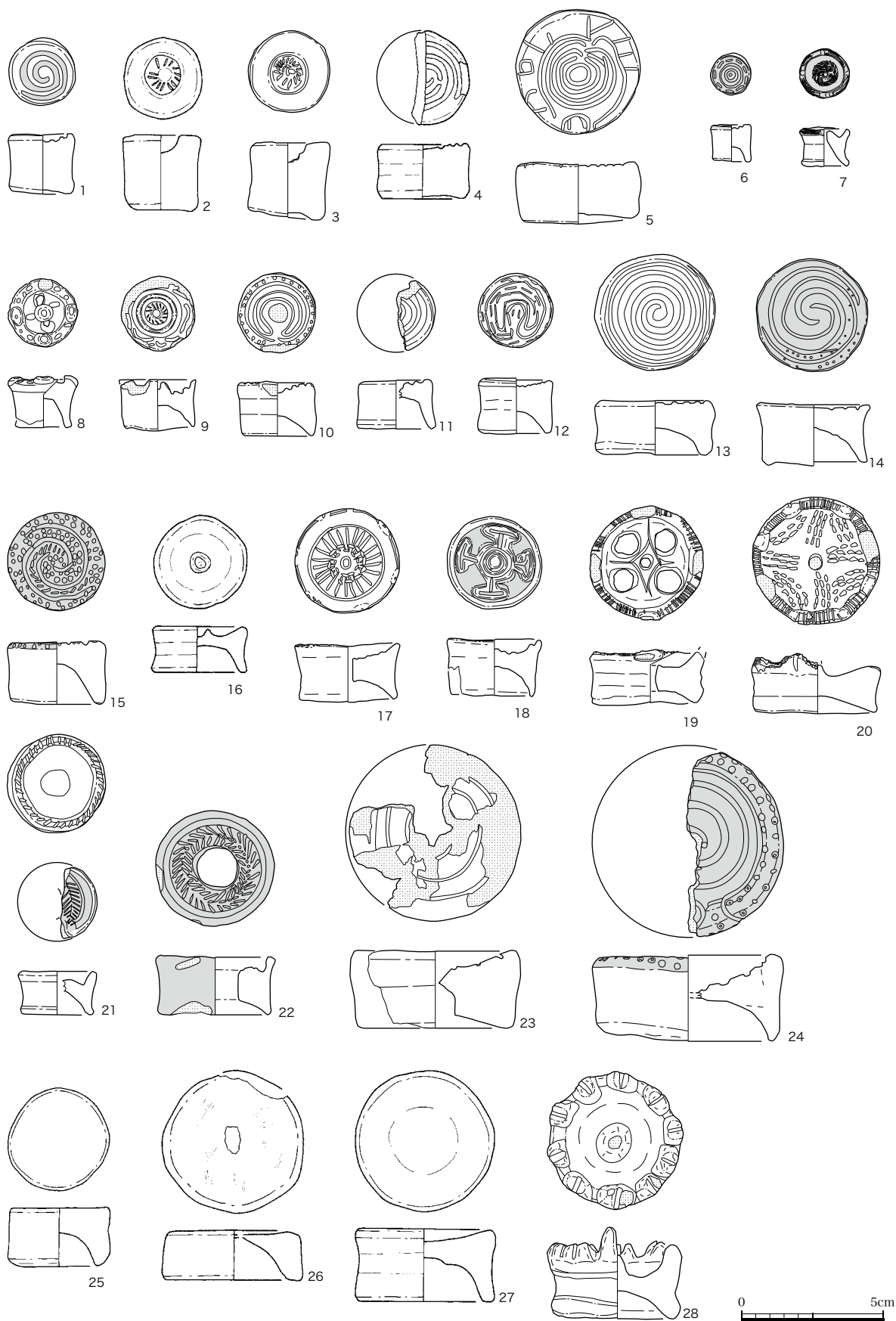
遺跡内からは総数434点の出土が確認された。縄紋包含層全体から出土している。地区別層位別などの検討は行っていないが、他の土器等の遺物と同様、面的な調査を行ったA～C区からの出土が多く、特にB区の出土量が266点と突出している。耳飾りの種別を整理し地区・グリッド毎に相関関係の検討を行えば、一定の傾向が出る可能性もあり、今後の検討課題である。住居跡等遺構出土資料もあるが、殆どが包含層出土資料である。層位的にはV層出土例が多く、VI層以下の例は少ないようにも思えるが、包含層全体でVI層以下の掘り下げ部分が少ないこともあり、有意か否かは判断できない。特異な出土状況としては、対の出土例が3例あり、いずれも近距離での出土であることは注意される。他の特異な出土状況や別種遺物との共伴等の特徴的な例は観られない。できるだけ多くの資料について図化し示すよう努めたが、残りの良いもの、また文様の明確なものを優先しており、恣意的選択的な提示となっている。

他の遺物については地区毎グリッド毎の提示を基本としたが、耳飾りについては、数も多く形態・文様・大きさの有意なまとまりを見出すことも可能であったので、これらに注意して分類整理し図の配列を行った。但し、それぞれのまとまりを細かく分類することは控え、白型・環状などの従来の大きな分類を踏まえつつ、示すこととした。分類は未だ不十分なもので、中間的なものや2分類以上の要素を有するものなどもあり、確定的なものではない。各分類毎の点数提示などもし得ない。

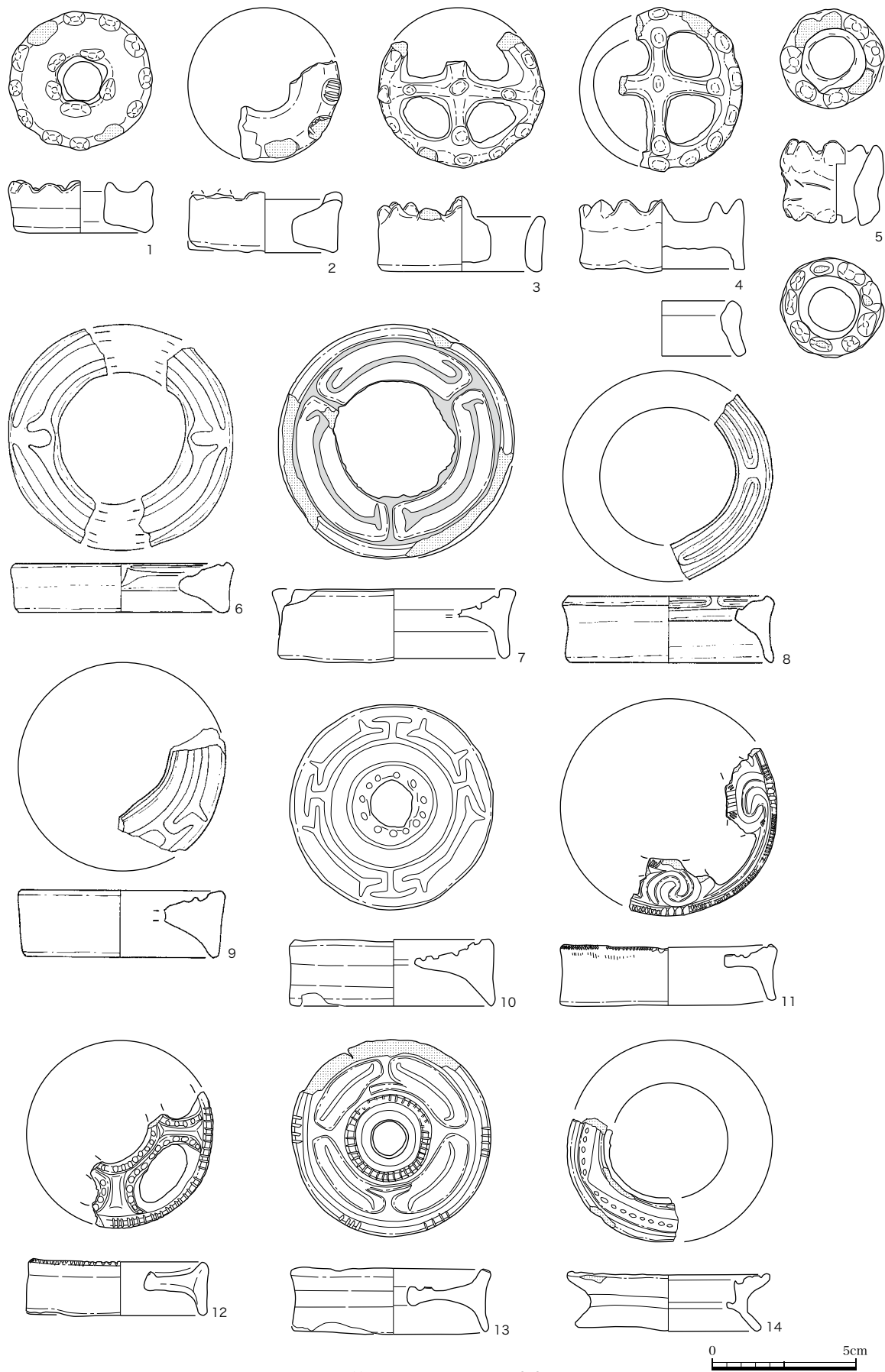
なお個別の観察結果については観察表に譲る。技法上の特徴などもできるだけ記すよう努めたが、遺漏や観察ミスもあろう。技法上の問題については本来整理して触れる必要があるが、ここでは殆ど触れえない。破片資料の破断面などの観察により製作技法を窺えるものが認められた点は注意したい。例えば、環状形態で、薄い粘土板を数枚重ね合わせるような状況が窺えたもの、白型で裏面が大きくくぼむものについては内側部分と外側環状部分の間で接合痕跡が認められたものがあること、環状の内側にブリッジによる装飾があるものでは、すべてが削り出し彫去ではなく、ブリッジの紐部分を貼付けて接合している状況が観察できるもの等が認められた。また胎土や調整についても本来詳細に観察し示すべきであるが、図示したものの観察結果の一部を示すに留めざるを得ない。胎土には土器胎土に近いような鉱物粒を含むものと、鉱物・砂などを殆ど含まないものがあることは注意される。調整についても、丁寧なミガキ・研磨調整されているものと、



第 398 図 耳飾り (1)



第399図 耳飾り(2)



第400図 耳飾り (3)

やや粗いナデ調整にとどまっているものがある。加えて注意すべきは赤色顔料を付しているものの存在で、図でも網点などでできるだけ示すようにしたが、残りの問題などもあり、完全には示し得ていない。なお顔料分析については2点のみではあるが委託分析し、結果を第5章第4節に示している。

以下羅列的に記しながら形態文様の種別を記す。

第398図の1～6は、以下の分類項目に示すようなものとはやや異なる形態例で小形のものを便宜的にまとめた。鼓状や高さのある円柱状の例などがある。無文例を主体とするが、5は表面に刺突を密に施しており異質である。7～9は断面がくの字状で中位の径が狭くなるものである。図示した例は3例に留まる。

白型と「逆凹型」

10以下が白型の例で表裏とも縁に比べて中央がやや窪む形態例が多い。径と高さの比率には一定の相関関係があるものの、径の大きなものはやや扁平になるものが多い。

第399図の1～3は円柱状になるものである。中央の狭い部分に刺突文、或いは全体に渦巻文が描かれる傾向が認められる。6や7も小形でややイレギュラーだがこのグループに含める。8以降は裏面が大きく窪み断面がL字状になるものである。表面も皿状に浅く窪むもの、中央がかなり薄くなり断面三角形の24などもある。渦巻文表現(13～15)や放射状の表現(17)、4単位で中央が十字状の表現例(19,20)などが目立ち、定型的なグループとも言えよう。文様要素で観れば円柱状の同図1～4とも共通するところがあり、連続性や近縁性を捉えても良いかもしれない。17や19では細い中心孔があることも注目される。

外周に瘤状突起を巡らすもの

第399図28及び第400図1～5は外周に瘤状突起を巡らす一群である。分けて図示したが、第403図の3～5もこの分類項に含む。形態としては、中央にも突起を擁する第399図28と、中央がやや大きい貫通孔で環状に近い形態の第400図1,2,5、環状+中央の十字状ブリッジとなる第400図3,4に分けることもできる。第400図5は裏面の外周にも瘤状突起が巡っており異質である。

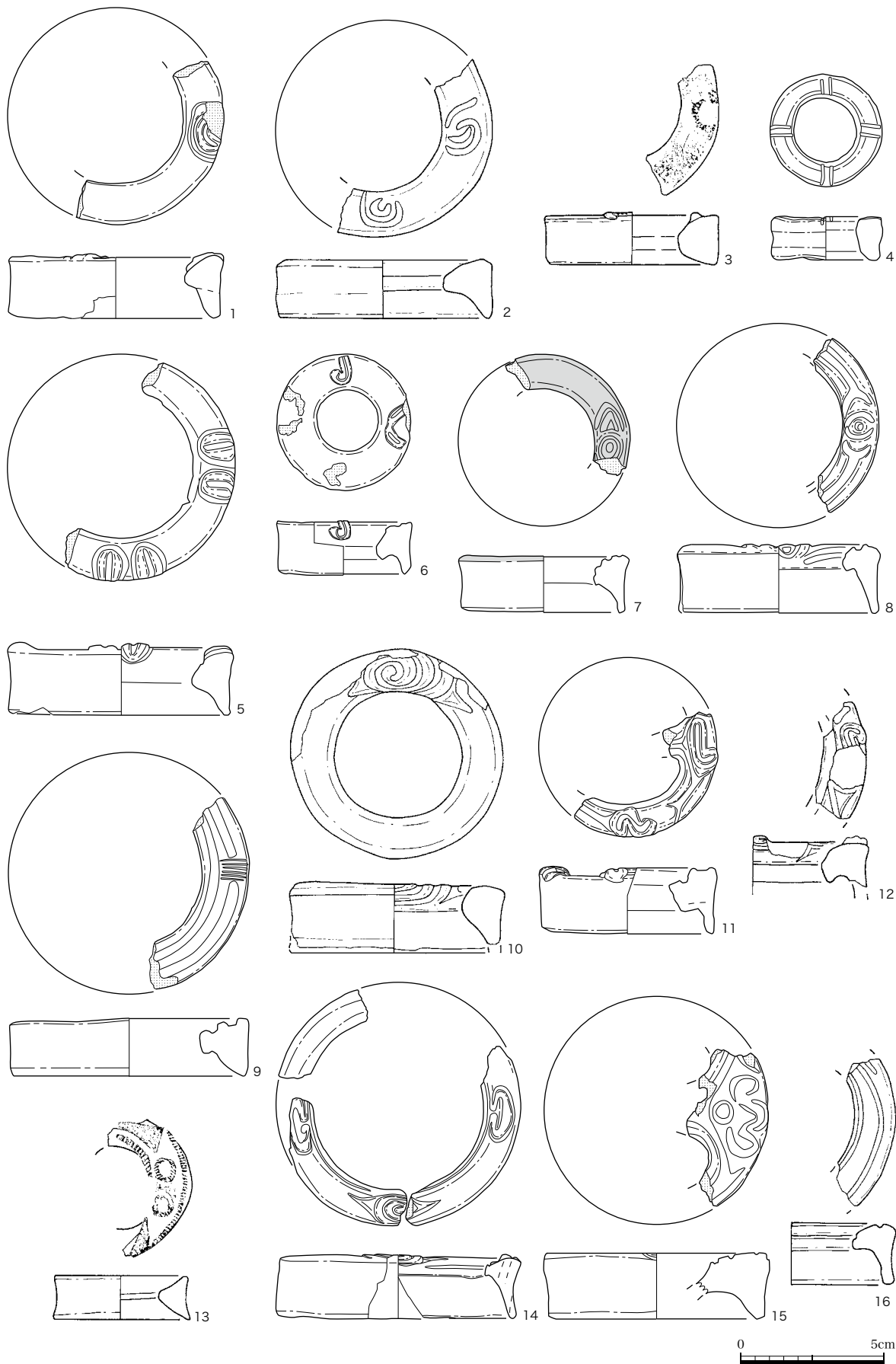
環状で表面内側内傾部(断面における左傾の三角形の上辺部分)に文様が描かれる一群

第400図の6～14が相当する。第400～403図にも同種の内傾面文様の一群と区別の困難な例も多く整理し直した方が良いかもしれない。第400図に示したものは比較的広く平坦に近い面を為しているもので、ここに主要単位+この間を連繋するような文様表現が目立っている。10や13では文様面がかなり広く、中央孔が狭くなっている。11や12では単位間が透かし孔となり、狭い外縁部には刻みが巡るなど、他とは異なる変化形態とも言える特徴を示している。

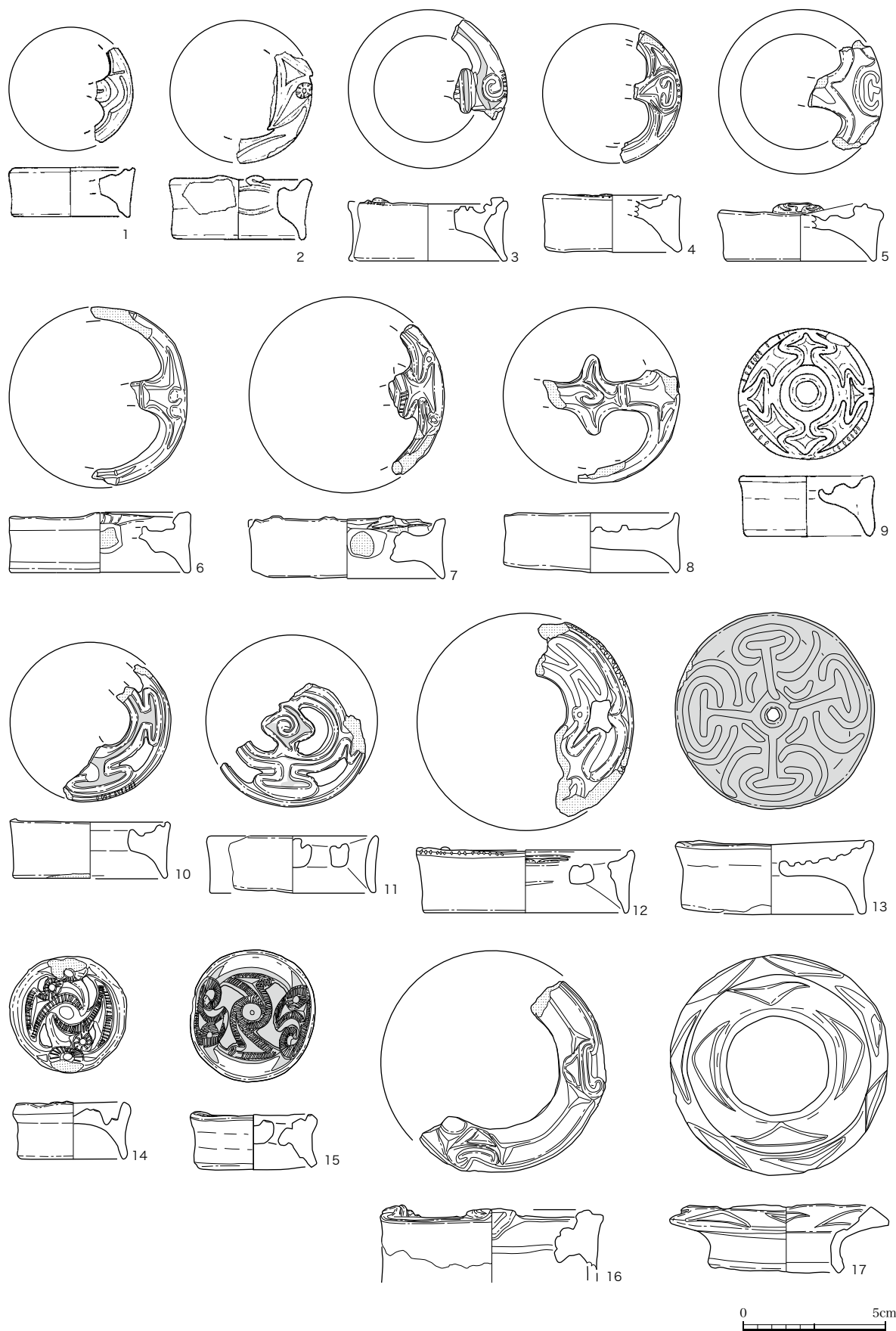
第401図の一群は隣接的で、同一系統と捉えた方が良いかもしれない。一応当初断面三角形の上部が厚く丸みを持っている点で第400図との区別を考えた。このやや傾斜する面に1または4単位の単位文のみ描かれるものを主に第401図に示した。破片では単位数を確定できないが、比較的遺存の良い個体でも10のように1単位例があることは注意される。単位文様は弧線や渦巻文を基調とし、この左右に三叉文が加わるものや単位文間を繋ぐ線が描かれるものへの系統的な変化を推定している。断面形態では肉厚な三角形或いは逆D字形であるものに4単位単独例が目立ち、三角形の下辺が弧状に湾曲したり薄くなっているもの(11,14等)で三叉文や単位文様間連繋文様のあるものが目立っていることは一定の変化の方向性を傍証している。

第402図の1以下は、主要単位文がより複雑になっているもの(3,4,6,7等)、ブリッジの発達などを特徴とする。文様面自体は広がらない1～8と、文様面が広がり工字状表現が目立つ一群(9～12)がある。後者は、断面形態の点でも第400図に示した内傾文様の一群に含めて考えた方が良いかもしれない。13はやや異質で細い中心孔以外すべて文様面としているものである。9や14,15も分類が難しい一群で白型の「逆凹型」

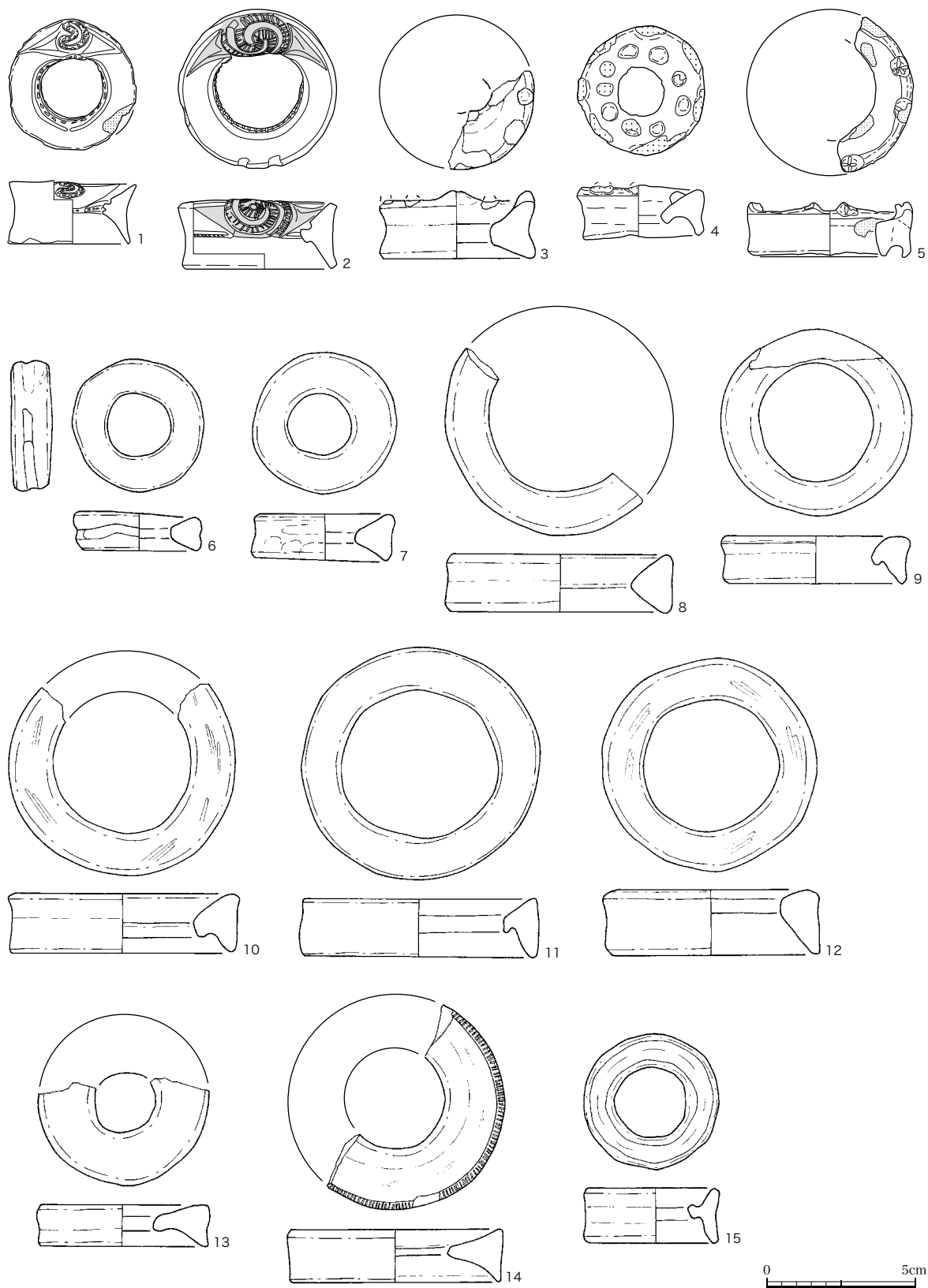
(→P413)



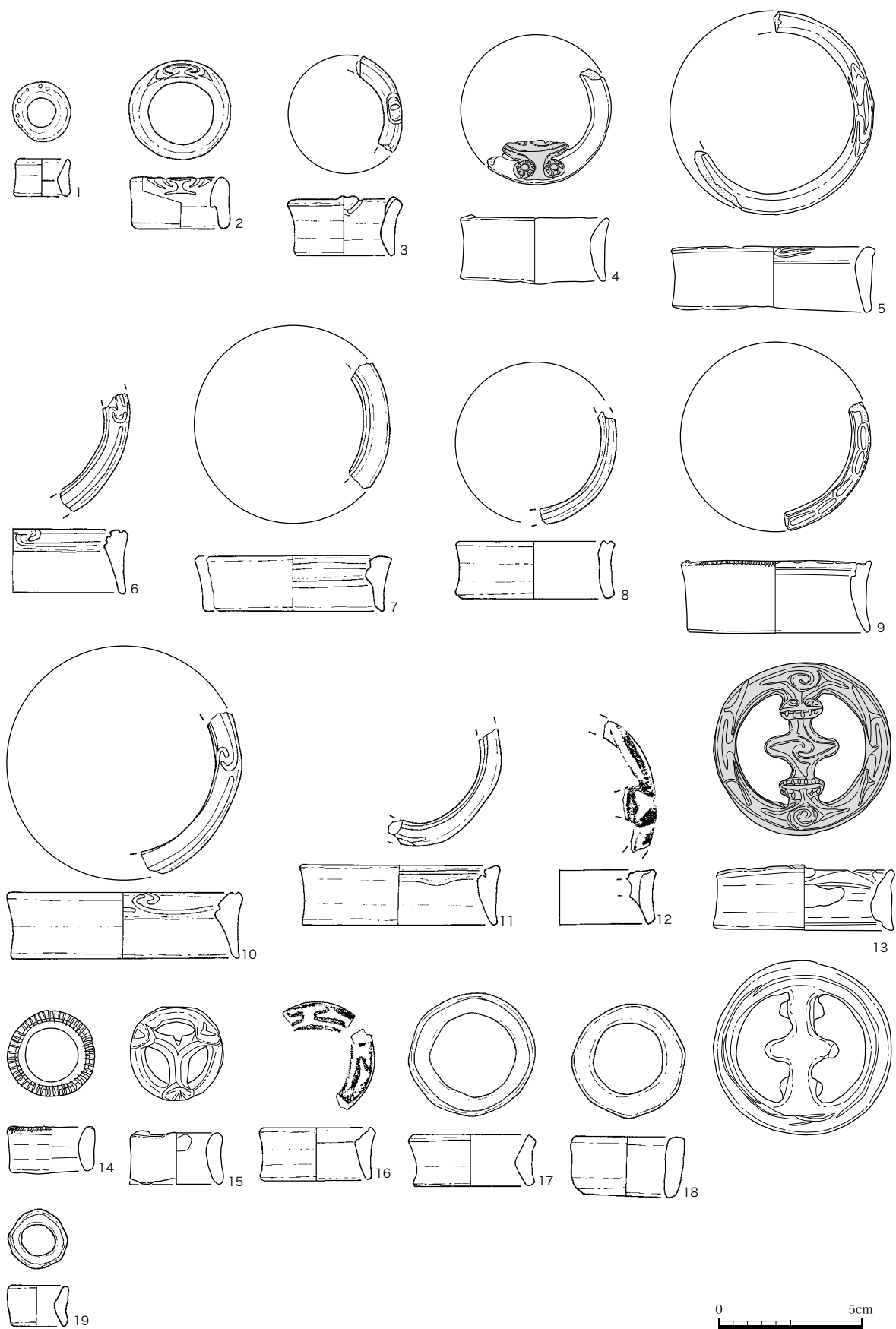
第401図 耳飾り(4)



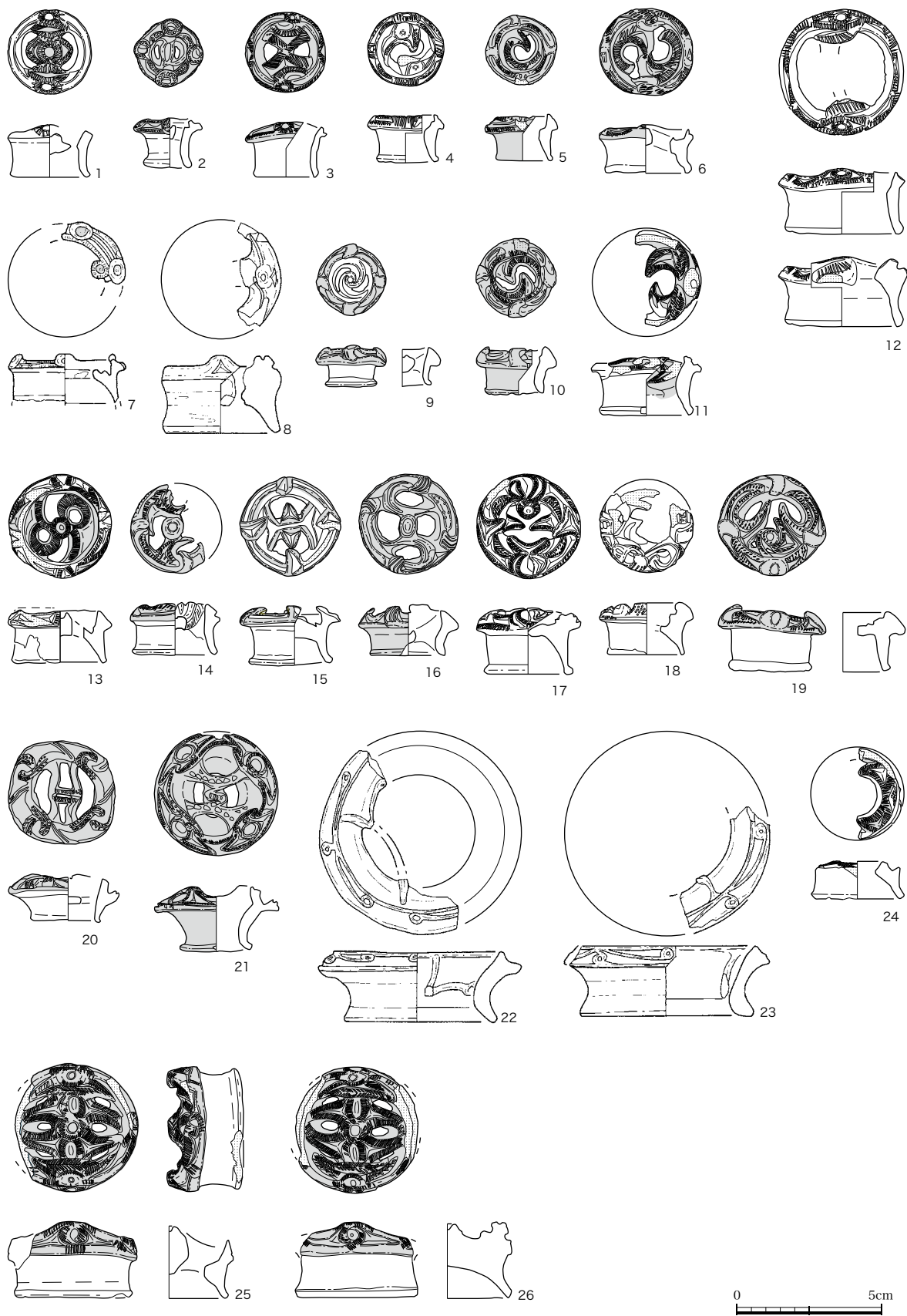
第402図 耳飾り(5)



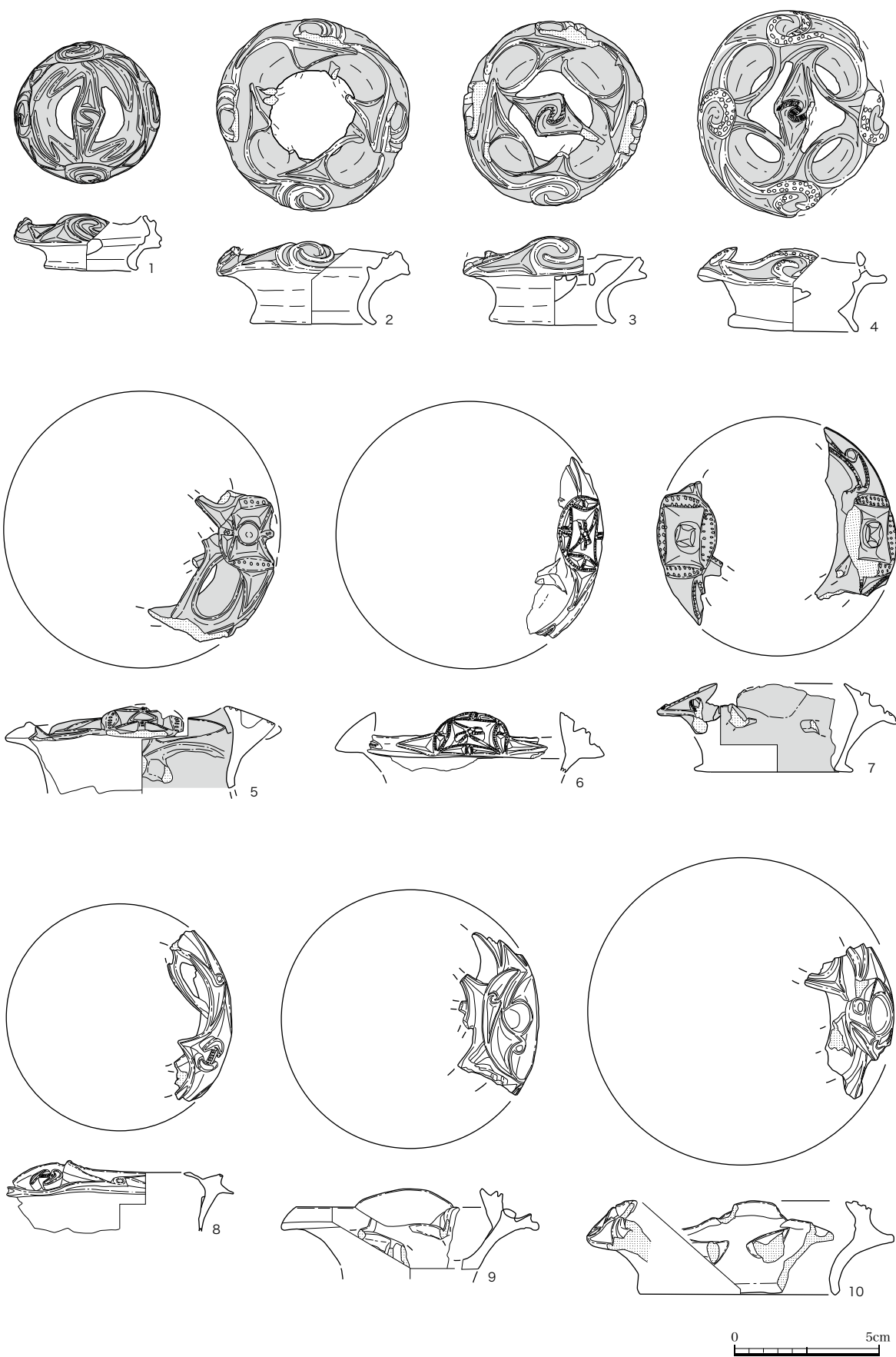
第 403 図 耳飾り (6)



第404図 耳飾り(7)



第 405 図 耳飾り (8)



第406図 耳飾り (9)

形態（百瀬長秀氏のドーム形）と近く、表面全体で文様表現している点で、環状形態とは異なる系統としても良いかもしれない。2+2単位的な表現であることも注目される。

第402図16もかなり異質でこのような細い隆線による表現は外傾面系統で主体的なものであり、躊躇するが、第402図2,3等にも共通する部分を見出すこともできる。17も他に類似例がなくここに示したが、三角形の重畳の表現や断面形態からすれば第408図の6～8のような一群に含めた方が良いかもしれない。

第403図の1,2も分類項比定が難しい一群で、便宜的にここに示した。内傾面に文様を表現するという点ではこれまで示してきた一群と共通する。6以下は無文の例である。形態の変化とともに調整の点でもミガキの程度などで差がある。

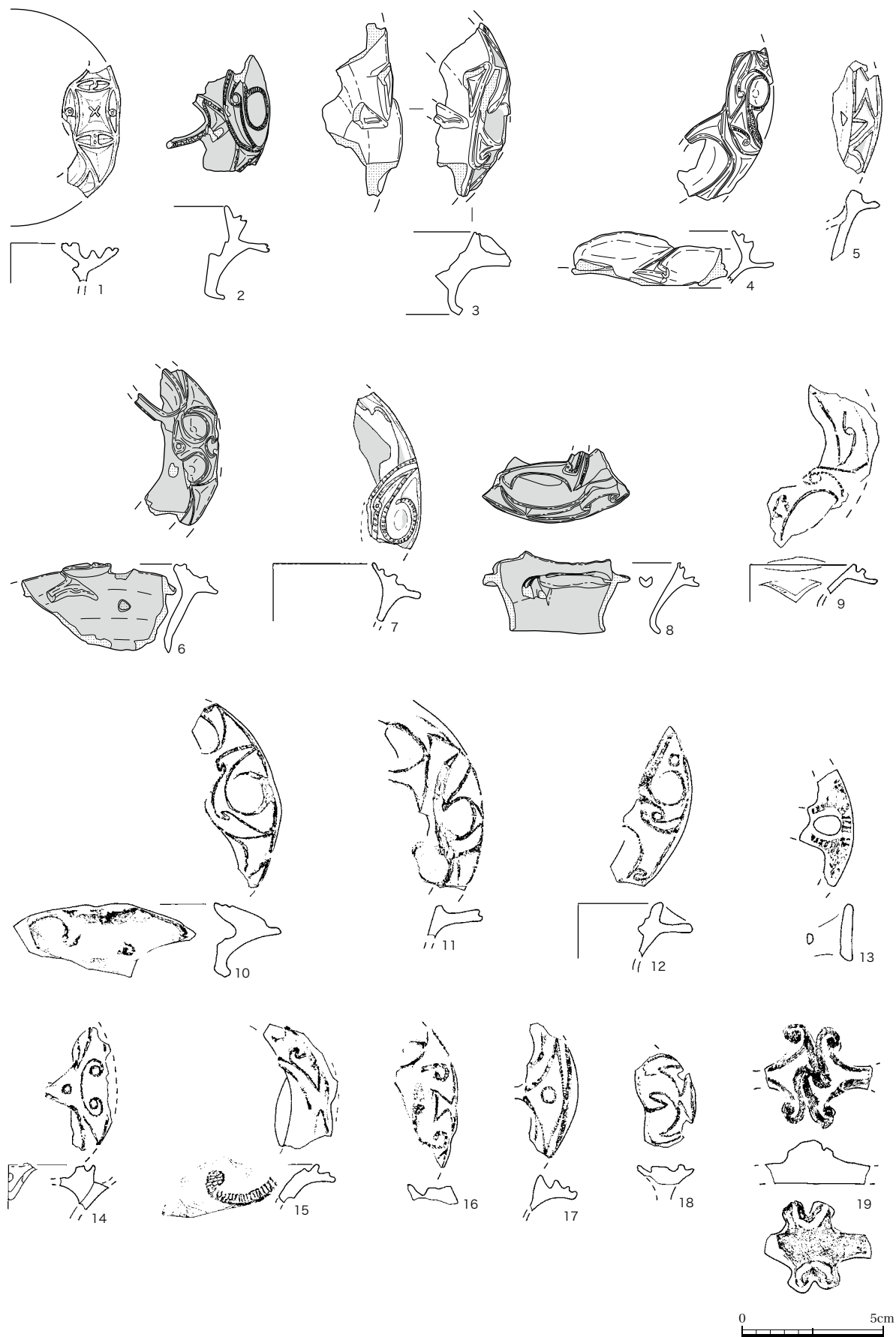
第404図は断面が長方形・長楕円形などのもので、薄い板状の粘土板を巡らして作っているものとも言える。厚みがないリング状などとも呼ばれている。つまり第403図までに示した断面三角形のものとは形態製作上の違いが大きく、明らかに違う作りのものと捉えられる。この形態の特徴から文様表現が狭い面に留まる制約があるものの、渦巻文・三叉文などの内面文様を内側面上位に描く例もあり(2,6)、或いは若干上位を厚く作り、またはブリッジで描く部分を作っているものなど他系統の一群との関係性を窺わせる。13は薄い板状の作りからここに示したが、文様では第402図8とも共通しており、一応内傾文様系統のグループで捉える方向で考えたい。17～19は無文の一群で、一定量の安定的存在を窺わせる。

第405図は断面長方形の狭い上辺＝上端が外傾し、ここに文様が描かれる一群である。図の上位に示したものでは第404図に示したような薄い板状の作りのものも目立っているが、僅かながらも外側に傾いた面を為していること、発達したブリッジなどから区別することができる。上端径と下端径が近いものから、21～23のようにその差が広がり、断面形も上位に湾曲しながら開くような形態への変化があるようにもみえる。これと関わって外傾の面自体も広がる傾向がある。文様も1,2のように円文などのシンプルな文様のみからの三叉文、単位文様間を結ぶ連繋線の表現、また単位文様もノの字状となってこれが内側や上位へに突出するもの(15,16)や入組状の表現(14,20)、細い浮線による表現や刻みの付加(21～23)など、種々の変化形態を観察することができる。系統的編年的な分析も行い得る資料で、詳細な検討が必要となろう。24～26は異質なもので白「逆凹型」との関係がうかがわれる。25,26は対の耳飾りで、欠損部も共通している点など興味深い特徴がある。

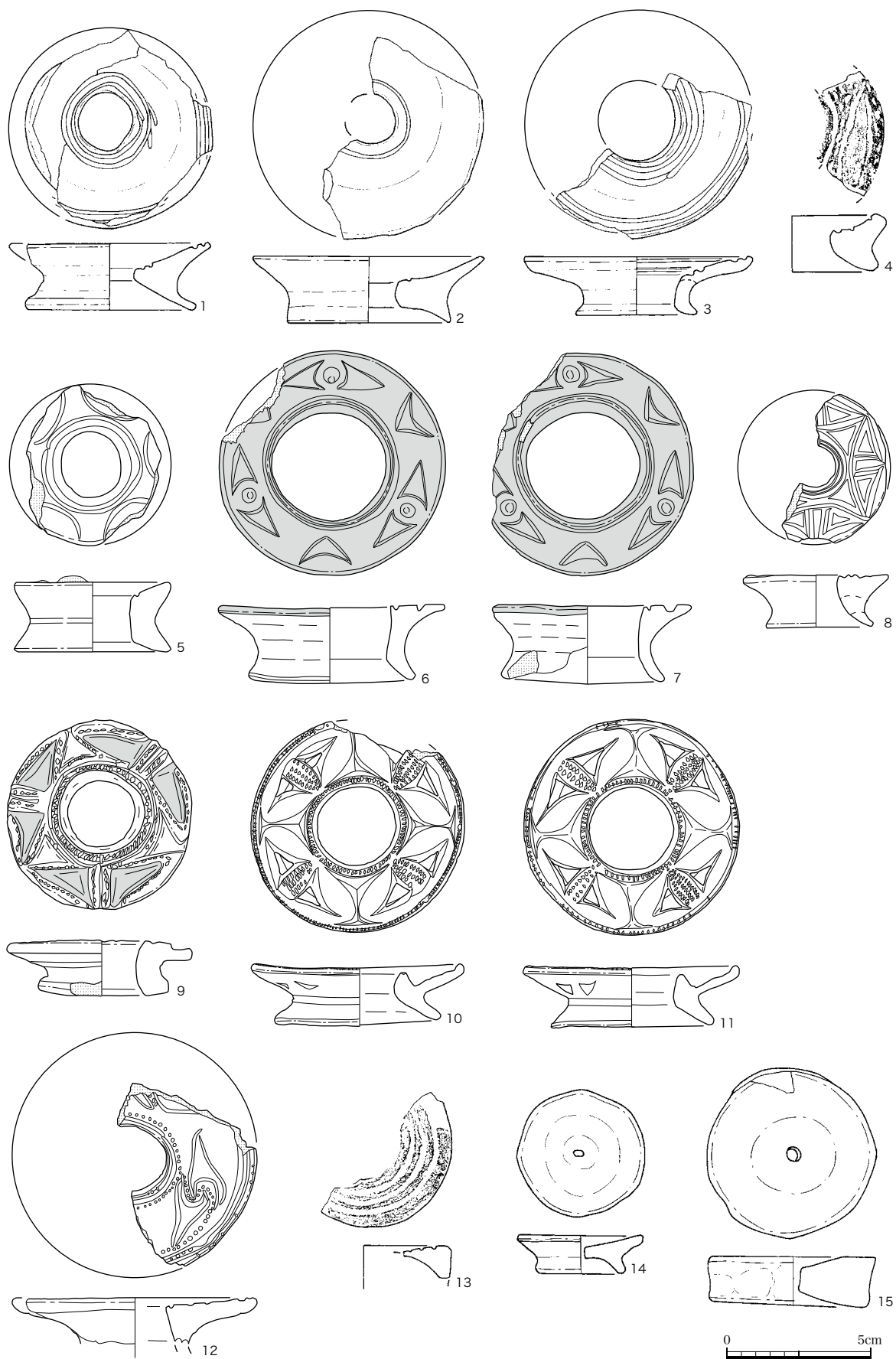
第406図に示した例は、外傾面が更に広がり、「漏斗状」となっていく一群である。上下端部の径の差は更に広がり、断面形でも湾曲・広がり認められる。文様の発達・変化も確認できるが、渦巻文を基調とする単位文部分とそれを連繋する部分という点では継承的な要素もある。中央ブリッジはやや下方に付され、長細い菱形の形態でその中央にS字状の入組文を表現する例が目立つ。これに外縁端部単位部分から斜めC字状に巻くように付される例が多い。5～7は単位部が楕円状の板状部分でこの内部に円文やX状の表現を嵌め込んでいるものである。このような文様展開には、更なる詳細な分析が求められるが、本跡出土資料では破片資料が多く限界もあろう。第407図にはこの一群の破片資料をできるだけ示した。

上端の広い平坦面に文様を描く一群（第408図1～12）

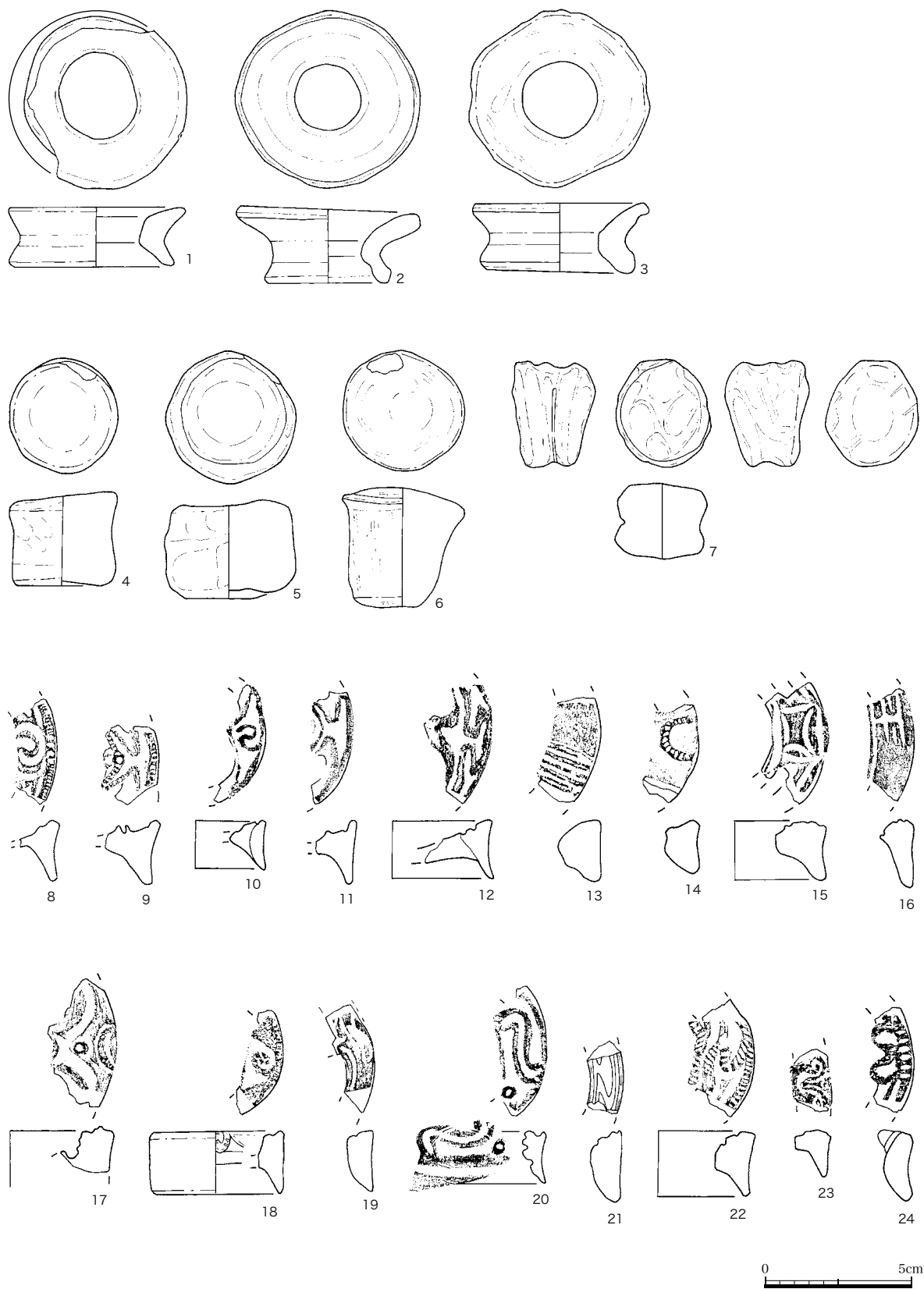
上端としたが、断面三角形の内傾する面に近いもの(1)や漏斗状に近いものもある。とはいえ内傾面文様の一群は側面が直線的で直立に近いのに対して、くの字状に大きく括れる断面形態である点は、違う作りのものと捉える必要があることを示している。文様も三角形の組み合わせによるものや円文等と合わせて三叉状に表現しているもの等が目立っており、形態と文様形態との相関を捉えることができる。10,11は対の例でC区S 143 b住居跡の床面近くで、10 cm程度の距離をおいて出土した例であり、注目資料である。



第407図 耳飾り (10)



第408図 耳飾り (11)



第409図 耳飾り(12)

14,15及び第409図の1～3については無文環状のものである。断面形では若干の変異がある。第409図の4～6はやや大きめの円柱状のもので、かなり作りが粗いものである。この周りに粘土を巻いて耳飾りを作るための芯材状のものとする説もあるもので、耳飾りが一定量出土する遺跡では一定量散見されるものである。7は別種土製品や粘土塊と捉えた方が良いかもしれない。8以下は破片資料をまとめたもので、分類項としては幾つかに跨る。断面三角形の内傾面文様を有する一群をやや多く選んでいる。

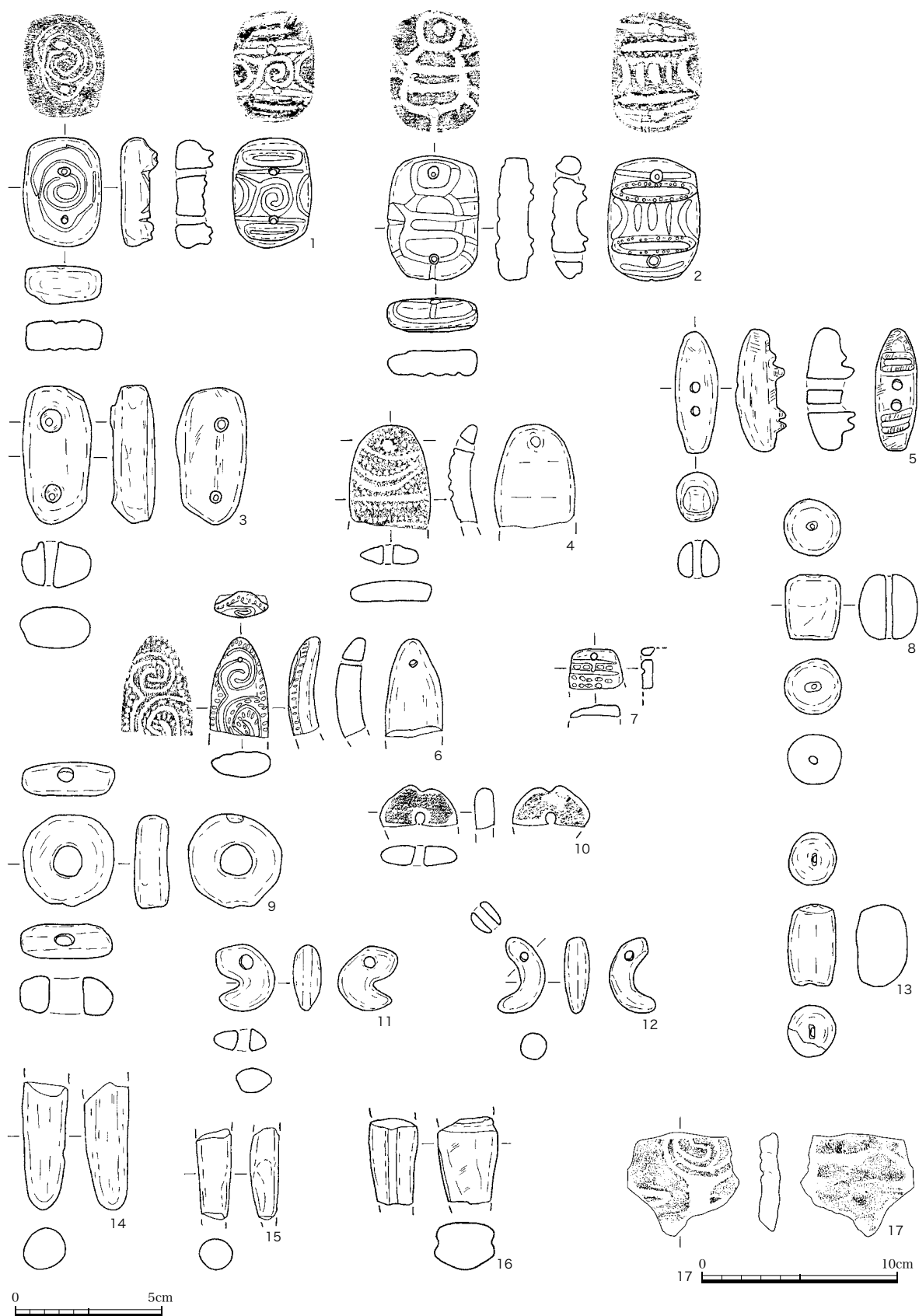
4. 土製垂飾・棒状土製品（第410図）

土製垂飾品としたものが当初分類で35点確認された。不確実な例もあり実数の確定は難しい。また垂飾とは言いが、棒状の土製品もここで示す。第410図の1～13までを垂飾としておくと、類例の少ないものもあり、本来検討が必要であろう。丁寧な作りのものであるが（1,2,4～7等）、さほど丁寧なミガキが観られないものも多い。胎土も耳飾りのようなきめ細かいものもある一方、土器と大差無いものも認められる。色調ではにぶい燈色、にぶい褐色あたりの、やや明るい色を基調とするものが多い。二次的な焼成や色の変化、附着物などは殆ど認められない。また特定の地点やグリッドへの偏りは顕著には認めにくい、B区にやや多い傾向は認めて良いかもしれない。以下羅列的に概要を記し、細かい個別の観察結果は表に示す。なお特記すべき出土状況を示した例は確認していない。

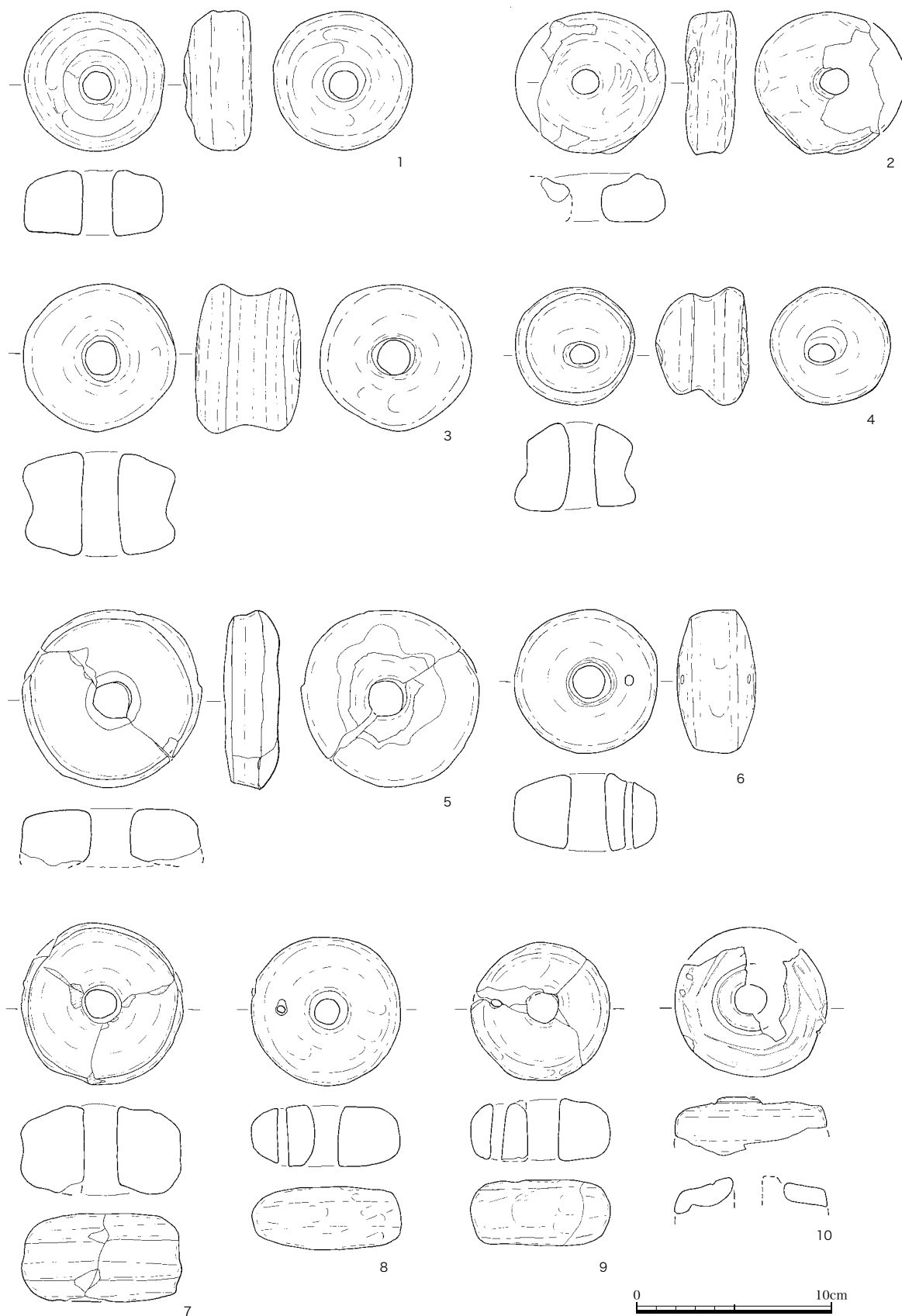
1,2は楕円形で表裏に文様が描かれるもので、相互の類似が目される。長楕円形の3は宇都宮市刈沼遺跡で比較的多く認められた形態で、やや粗い作りである。5は形態や孔の位置は異なるが、上下に隆起部を有する点では1,2と共通する。4,6の2点が相互に類似するもので、形態と共に沈線及び刺突の表現・手法も近似している。7は極めて薄く扁平なもので、細かい刺突が認められる。8,13が上下の貫通孔がある管玉状のもので、これも2点相互の類似が確認される。土錘とする判断もあるかもしれない。9は環状で上下にも貫通孔があるもの、10は土器片転用で、垂飾とはしない方が良くもしい。11,12は勾玉状のもので、関東後晩期遺跡では類例が認められるものである。14～16が棒状の土製品で、寺野東遺跡で比較的多くの出土例があり、骨角器との関連が注意されるものである。16には沈線が認められるが、意図的な装飾と言えるかは不明である。17は便宜的にここに示したが、土版もしくは中空土偶の一部、更には特殊な土器の一部である可能性がある。内面に粘土紐の積み上げ痕跡が残る。第418図10は9トレンチから出土したもので、上下にほぼ線対称となる形態・文様を擁する土製品である。側面や上下端部の面にも文様が描かれている。かなり細い貫通孔が上下1対で穿孔されている。沈線は細く鋭角な感があるが、裏面は浅い施文である。文様もやや不整な部分があり、施文後のミガキもさほど入念ではない。

5. 有孔土製円盤（第411,412図）

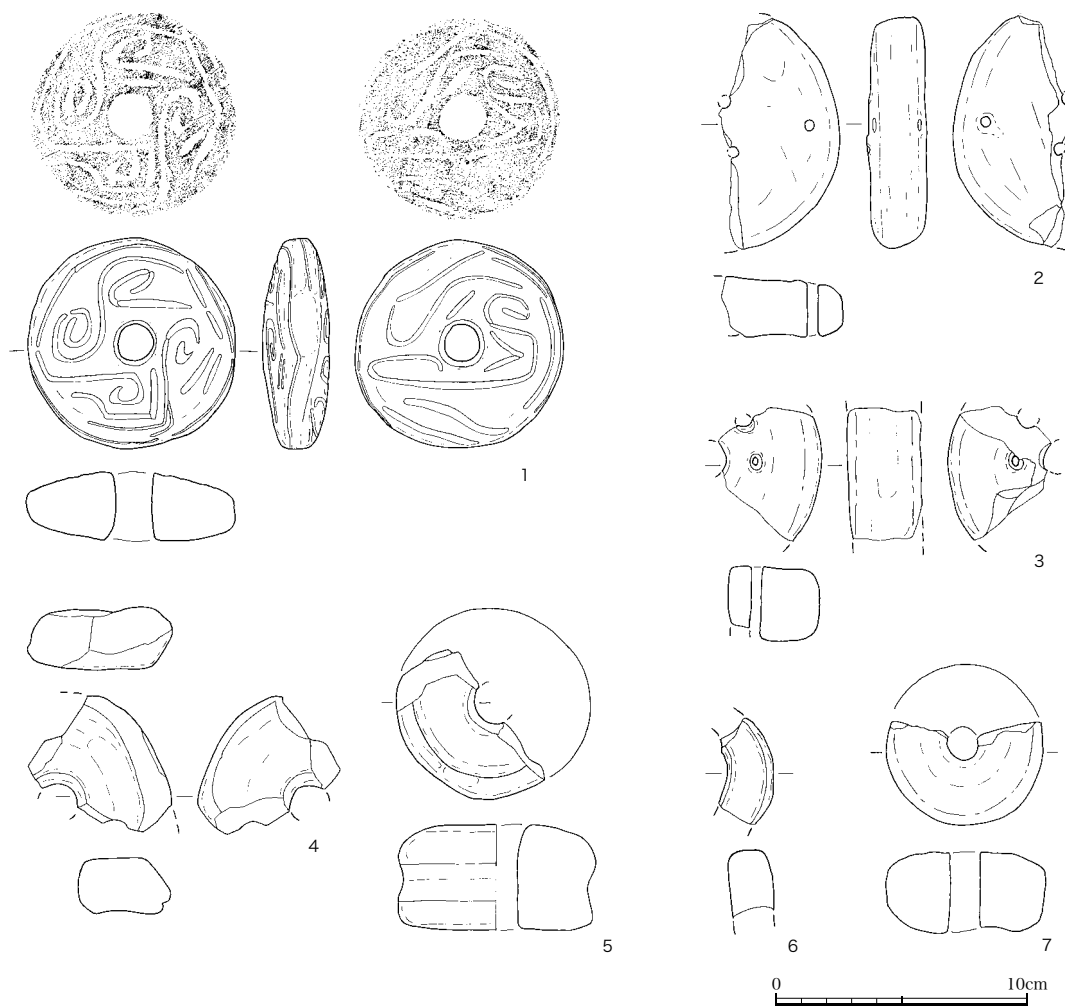
総数20点確認され、殆どを図化した。比較的定型性の高い土製品であり、他の土製品や土器との区別は概ね問題無いものの、小片では判断難しいものもあり、確実な実数は示しがたい。寺野東遺跡、栃木市藤岡神社遺跡、刈沼遺跡等県内の晩期集落では一定量の出土があるもので、形態等は概ね共通するものの遺跡毎の特徴も多少観られるように思える。大きさは7～9cm程度のものが多い。刈沼遺跡等と比べると厚みがあるのが本遺跡例の特徴のようで、第411図3,4,7等がこの例である。また中心孔以外に小さな貫通孔が1～4孔あるものが比較的一般的であるが、ここでは確実に2孔以上のものは第412図2,3ぐらいである。胎土・質感などは土器に近く、石英やチャート粒などの鉱物粒を多く含むものも目立っている。色調は燈色基調で、一部やくすんだにぶい黄燈色ぐらいの例もある。調整は粗いナデ調整例が殆どである。出土状況で特異な



第410図 土製垂飾



第411図 有孔土製円盤(1)



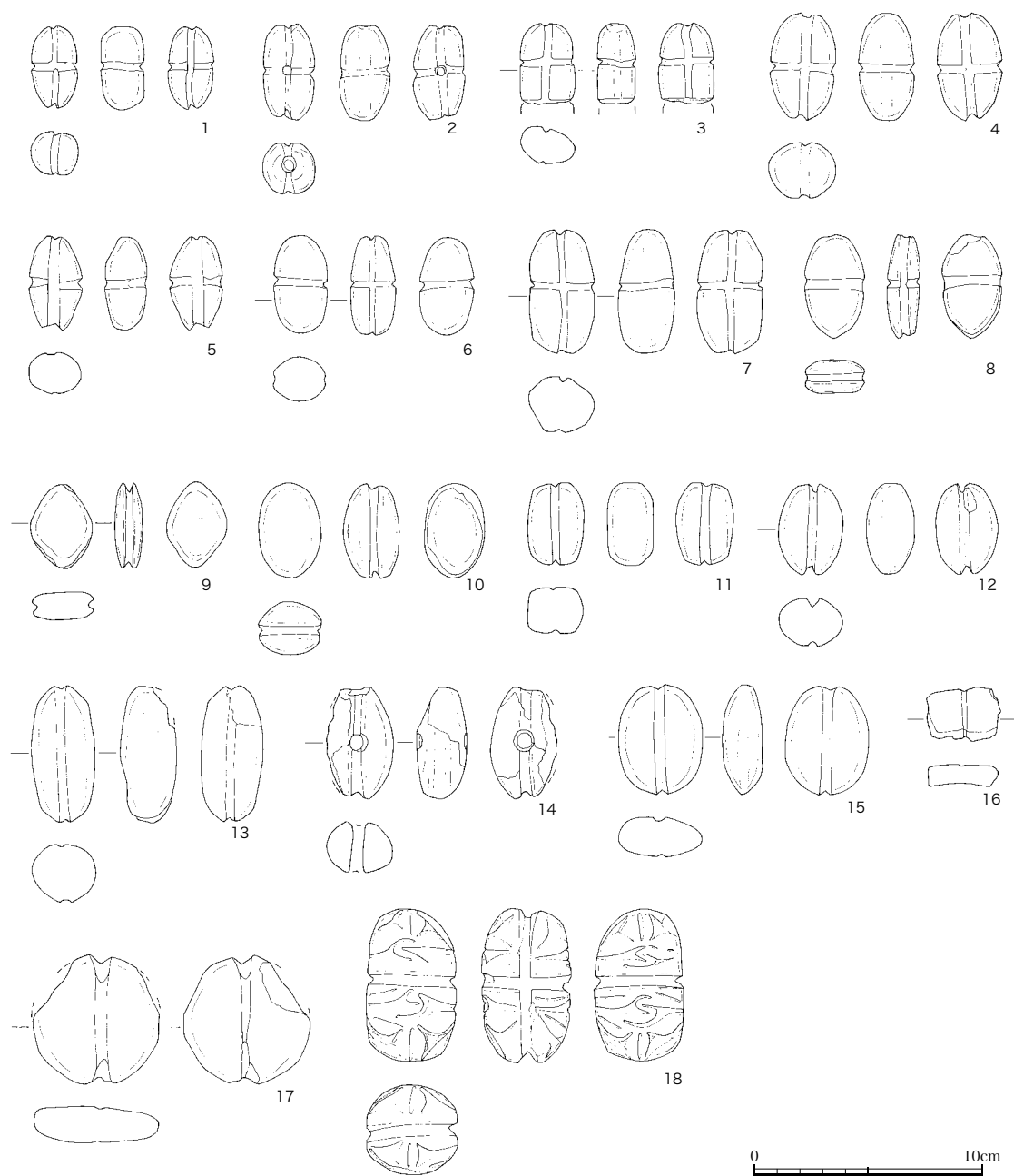
第412図 有孔土製円盤 (2)

状況を示した例は確認できていない。出土位置は殆どがC区であり、B区からの出土が1点も無いことは注意される。後期末～晩期前半が目立ち晩期中葉が稀薄な事象と対応するのであろう。

第411図5は底部を転用したもので、同図2もその可能性が残る。7は隣接する2グリッド及びトレンチ出土例が接合して完形となったものである。10は中心孔周りがやや高くなり、その脇に沈線が廻るものである。第412図1は珍しい有文例で表裏及び側面にやや細く浅い線が施されている。摩滅もあって線はやや不明瞭である。第412図2は中心孔を確認できず、大形となることも考えられるが、外縁のカーブからすると違和感が残る。第412図6は下端を欠損、一方内外縁は破損部では無いことから、他と大きく形態が異なる。別種土製品の可能性も残るものである。

6. 土錘 (第413図)

土錘は35点出土しており、遺存状態の良いものを中心に図化した。小片では確実性の弱い資料もあり、或いは別種土製品で分類しているものもあろう。また土器片錘については第417図で示すが、版組時のミスにより1点のみここで示した(16)。溝の位置や形態からの分類も可能であるが、数も少ないことから、項目立てでの分類は行っていない。概観すれば、十字に溝が廻るもの(1～5,7)、縦方向のみ周回するもの(11～15)、表裏では横方向のみもの(6,8)、側面が全周するもの(9)等があり、更に貫通孔が加わるものも



第413図 土錘

ある(2,14)。管玉状に縦方向中央に貫通するものは無く、ほぼすべて「有溝土錘」と言えるものである。胎土や色調は土器と概ね共通し、調整は粗いナデ調整が多い。4はミガキ調整されているもの、6は丁寧なナデ調整が認められるものである。17はやや異質で、表裏側面とも良く磨かれており、形態からも石錘との関係を窺わせる。18は土錘ではなく他の土製品とすべきものだが、便宜的にここに示す。太く深い溝(沈線)が側面観で十字に巡り、表裏に入組三叉文が描かれる。面はやや荒れているが、施文後のミガキも観察される。線はやや細いところもあるが、三叉部は扶込み状である。かなり重みがあることから、中に芯材が入っている可能性もあるが確認できていない。

なお出土状態で特記すべき例は確認していない。殆どがB区出土である点は興味深い。後期末が多いB区という時期の問題なのか、或いは場所の性格の問題が関わるのかは検討が必要となろう。

7. 匙・手燭形土製品（第414～416図）

当初分類では17点を確認している。匙形と手燭形の区別を行うことも可能ではあろうが、便宜的にまとめておく。個別の説明では使い分けをするが、明瞭な概念規定をしている訳ではない。感覚的な分類では第416図1や第415図2のような細い柄で下端が平坦では無いものは匙形、第414図3のように平坦な板状の面の上に皿状の受け部があるものが手燭形となろうか。小片では他の土製品との区別も難しいものが多く、実数は把握しがたい。柄部分の小片では土版との類似もある。また装飾性の高い第415図7のような例については、垂飾品の可能性も考える必要がある。本遺跡出土の手燭形土製品は定型性が弱く、共通項を見出しにくい。胎土や色調は土器や他の土製品と概ね共通し、石英等の鉱物粒をやや多く含むものも目立つ。但し第415図6は鉱物が少なく緻密な胎土のように観察される。色調はにぶい黄燈色あたりのくすんだ色調が多いが、第414図1は赤味が強い燈色基調である。面の調整も粗いナデ調整が基本であるが、丁寧なナデや一部ミガキが加わるもの（第415図4,7）も認められる。第414図2は典型例に近い完形の優品だが、文様を描く沈線はやや浅く雑な感があり、若干の歪みなども含めさほど丁寧な作りとの印象は受けない。第414図4はかなり大形になることが推定されるもので、図示した角度となるかは不明である。

第415図8はかなり歪んでおり、手燭の柄部として良いか、問題を残す。第416図1はK L区S1住居跡から出土した完形の匙形土製品である。削り痕を残す調整で、形態や質感からも木器模倣を推定できる。

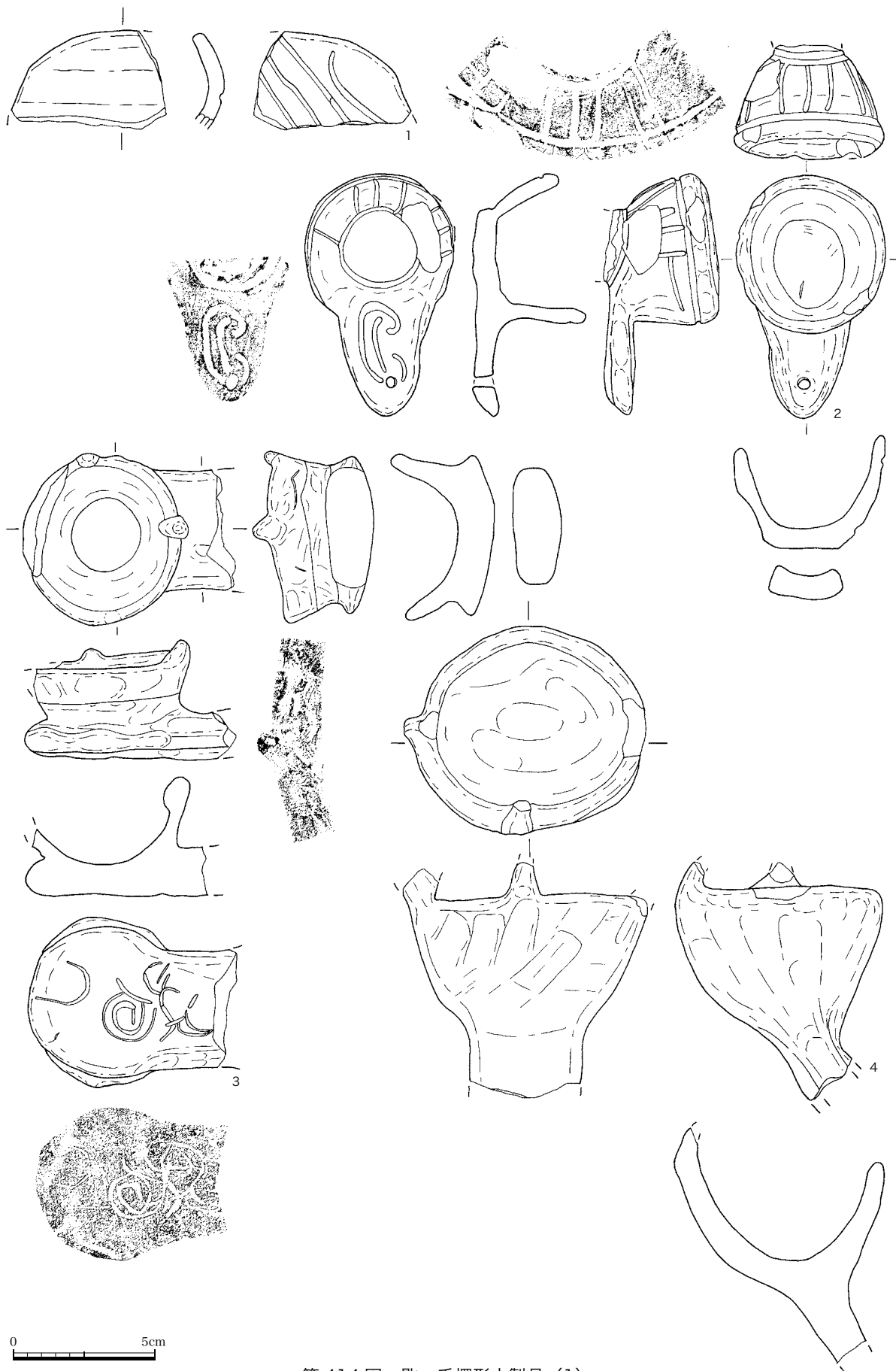
なお出土状態で注意すべき例は確認していない。A区やC区での出土が無く、B区が主体であることは注目されるが、土錘などと同様、時期の問題と考えて良いかは検討が必要となろう。

8. 土器片錘・土製円盤・その他の土製品・その他の土器（第417図）

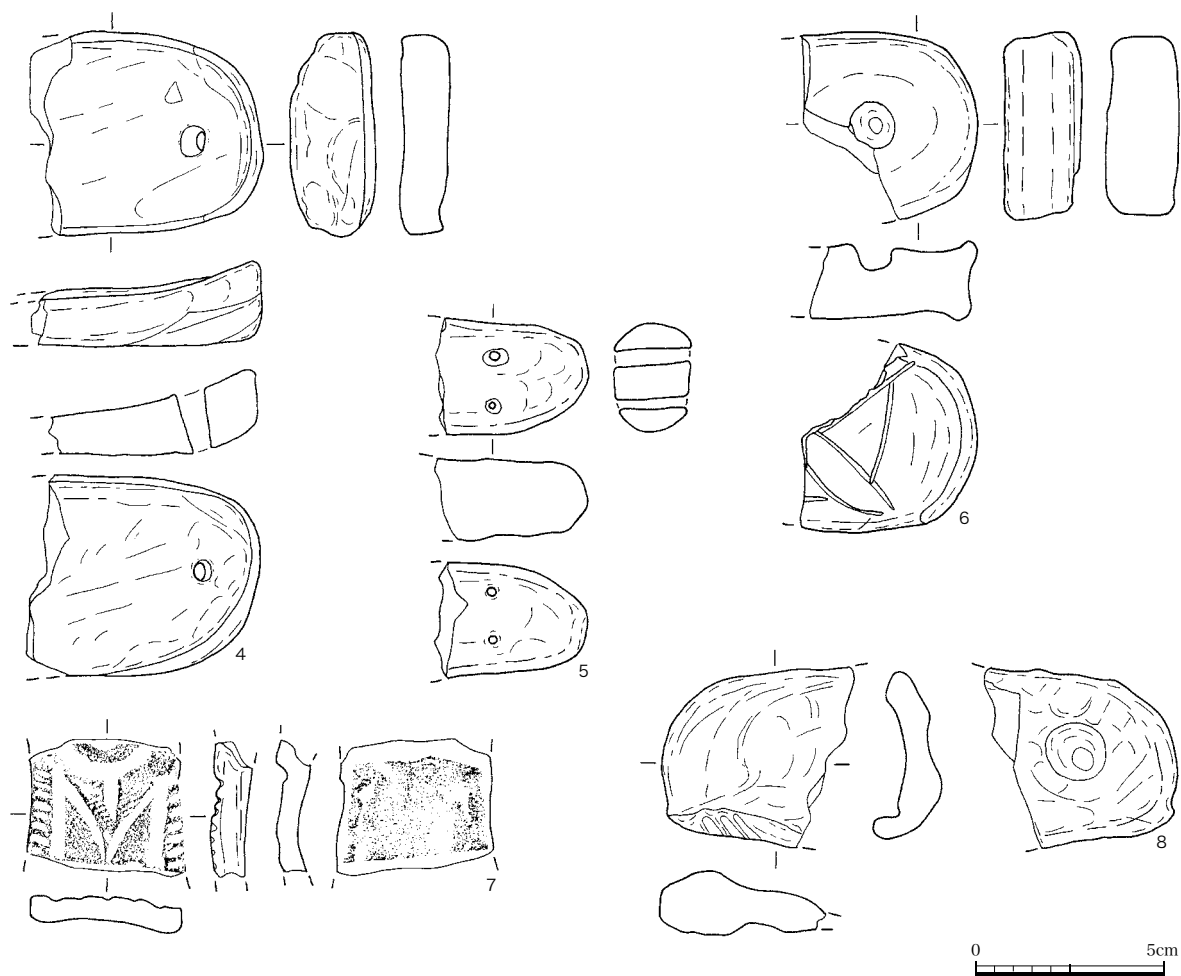
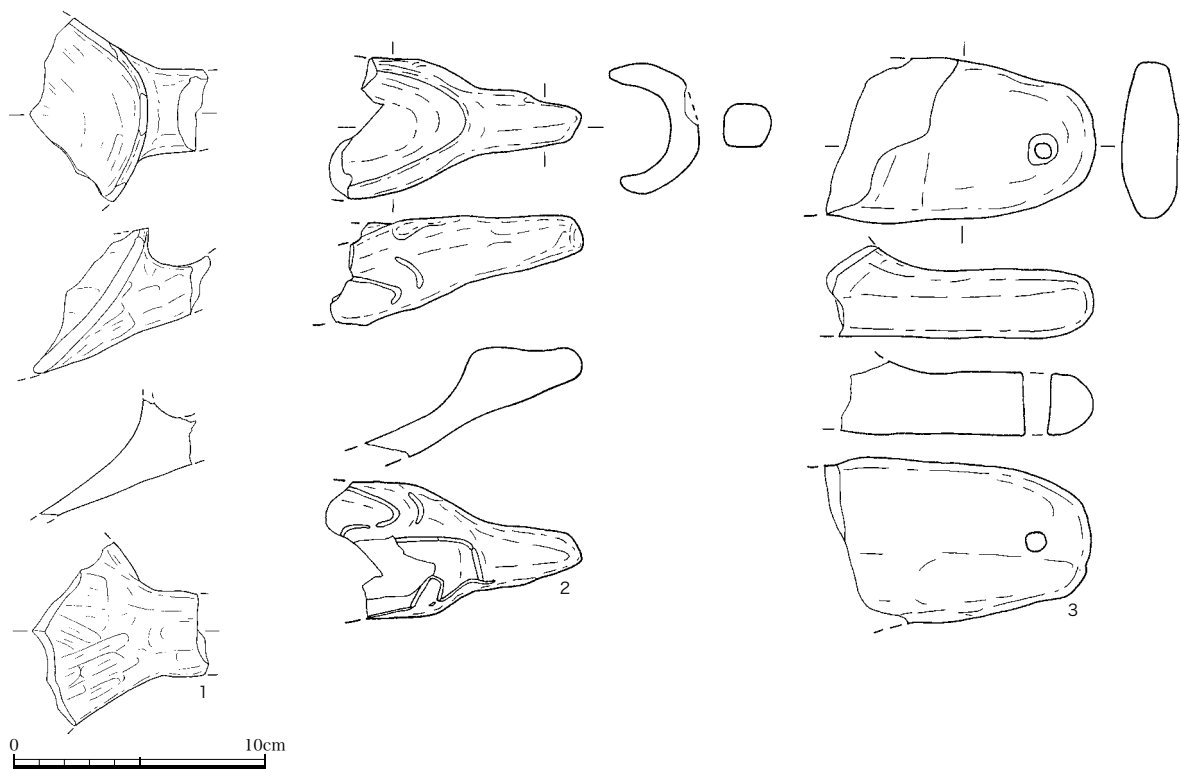
第417図1～5が土器片錘である。実際にはかなり多く出土しているが、厳密なチェック分類を行っておらず実数は不明である。第413図にも1点示している。第417図に示した5点はいずれも切込みが明瞭である。いずれも無文小片で土器の時期は不明であるが、晩期前半～中葉辺りの質感と類似している。

土製円盤は多量に出土しているが、4点のみ示す（6～9）。当初分類の確認の限りで520点あり、重量のみ計測の表を別途示す（第27表）。大きさや土器型式との対応、縁辺打欠きの程度部位、磨痕研磨の有無など、本来検討すべき要素が幾つかあるが、検討し得ないままである。

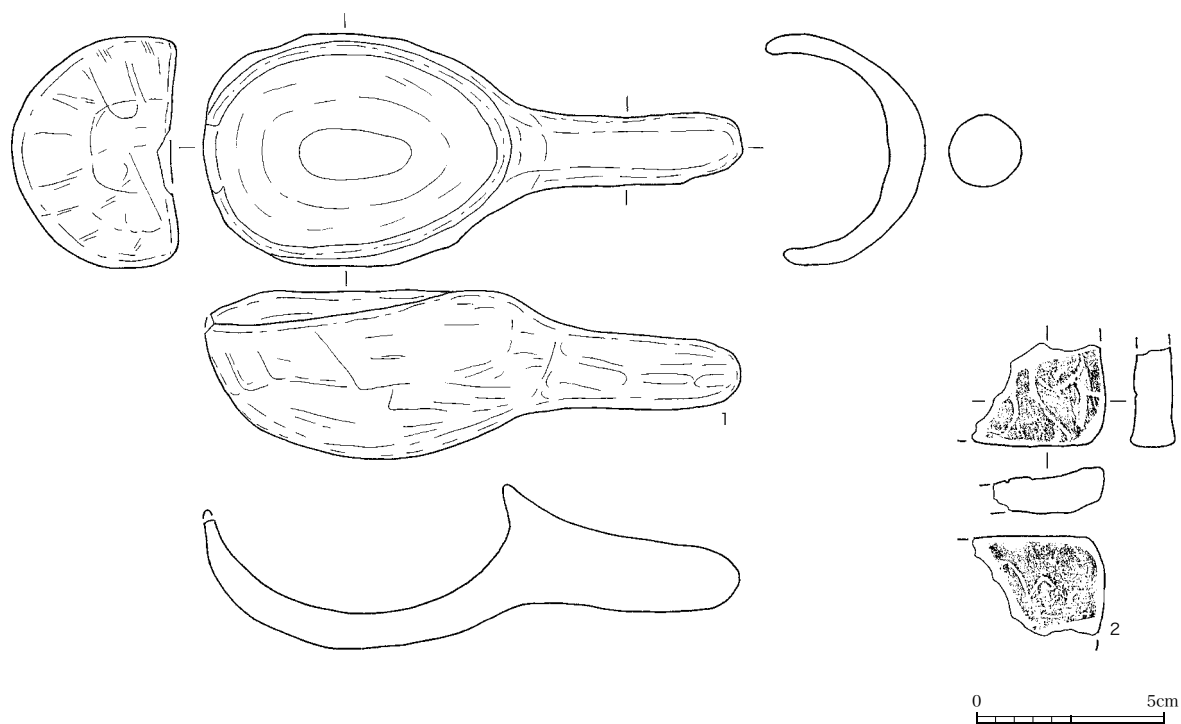
10以下は土製品ではなく土器で扱うべきものであるが、便宜的に各種の土器をまとめる。10は赤彩の土器片で、内面も顕著である。11は焼成前穿孔があるものだが、無文の粗製土器のように観察され異質である。12は焼成後の貫通孔があるもので、破片の縁辺が良く磨かれている。転用垂飾の可能性もあるが良く分からない。13は内面の褶曲・凹凸が著しく、粘土塊で捉えた方が良さそうである。但し表面は土器の面に近い。14は小形ミニチュアの壺で内面に厚く顔料の付着が確認される。15も赤彩の例。16は吊り手土器としたが、土製品の一部となる可能性も残る。17は手づくねの皿状土器で器面は側面の一部以外調整されず、凹凸や粘土の褶曲が著しく残されている。但し内面は土器の器表面に近く調整されている。19はミニチュアの壺形とも考えたが、破片左端が狭い隆線上に細かい円形刺突が加えられており、壺口縁とするには疑問が残る。別種土製品の可能性も考えたが良く分からない。18,20～23は顔面表現の可能性を当初考えたものだが、いずれも小片で確実性に乏しい。20は粗製土器の口縁のような瘤状貼付がある。21は上端に突起が付されるようだが、一部がイキの部分もある。目に近い表現が貼付隆起部で作られており、土偶の可能性もあろうか。施文は丁寧で沈線施文後のミガキも比較的人念である。22は台形状の突起となる口縁部破片で、口縁直下の隆起線のすぐ下に不自然な隆起線がある。顔面表現ではない文様表現かもしれない。23はV



第 414 図 匙・手燭形土製品 (1)



第415図 匙・手燭形土製品(2)



第 416 図 匙・手燭形土製品 (3)

字状の隆線があるもので天地逆の可能性もあるが、良く分からない。土器図版中にもこのような不自然な隆線が粗製土器に付されるものが幾つか認められるが、大形破片や完形例がなく不明な部分が多い。

24 も小片で土器突起の可能性もあるものの、破片上位に左右に貫通する細い孔があり、一応ここで不明土製品として示す。25 はやや厚手板状に近い形態で、長楕円の透かし孔部分を設ける（棒状の粘土を横U字状に廻らす）形状である。胎土や調整は土器と近い。26 は手燭形の柄部などの可能性も考えたが、彎曲等から不明土製品のまま扱う。胎土中の鈹物粒が多く、調整は粗いナデ調整によっている。

9. その他の土製品 (第 418 図)

第 418 図にもその他の土製品を便宜的にまとめて示した。10 は垂飾品として扱う。以下羅列的に記述する。いずれも特別な出土状態を確認してはいない。1 は重量のある円柱状のもので、耳飾りとするには形態重量から抵抗がある。全体粗いナデ調整。2 も形状としては耳飾りと扱いたくなるが、形態や重さ、粗い調整などから不明土製品としておく。3 は環状の土製品だが、摩滅や荒れを考慮してもなお面の凹凸が著しく、調整が殆ど為されていない状態を観察できるものである。4 も環状の土製品で、腕輪の可能性を考慮するものの、彎曲から推定する径は小さく判断できない。上下は切り込み状の鋭角な線、外側面上に描かれる線も細く先端鋭い工具による施文である。内面粗いナデ調整で粘土粒の付着もある。5 は円柱状～樽状の形態で粘土塊にも近いものの表面がある程度ナデ調整されており、一つの土製品と判断できる。爪形状の刺突も意図的なもののように観える。6 は彎曲の強い面に突起状の突出部があるもので、異形土器や土偶の一部の可能性のあるものの判断できない。7 は蓋である。関東地方の縄紋後期初頭から前半を主体とする遺跡では比較的普遍的に出土するが、本遺跡で確認できた資料はこれが唯一である。形態としては上記の時期のものと同じように捉えられる。8 は舟形状の土製品で、これも寺野東遺跡等で類例がある。手づくね状の作りで粗いナデ調整が観



第417図 土器片錘・その他の土製品

察される。ミニチュアとして扱っても良いかもしれない。9もミニチュアの注口土器状だが、注口部が下方に傾斜して付けられており、大きさからも注口土器とは言えないものである。向きを変えて考えた方が良いかもしれないが良く分からない。

10. ミニチュア (第 419 図～ 421 図)

ミニチュアは総数 81 点出土した。不確実な資料も多く、一般の土器との区別も明確な基準がある訳ではない。土器の項で示した中にもミニチュアとすべき例も存している。但し本遺跡出土例では、一般的な土器文様や形態を保ちつつサイズのみ小形となる例は稀であり、一般の土器とは異なる作り、文様表現、調整を観察できるものが殆どである。用途の違いも当然推測されるが、これを示す痕跡は殆ど無い。但し、二次的な被熱、焦げや煤については観察されず、一方赤色顔料の付着例が比較的観られる点は注目すべき事象であろう。

幾つかの代表的な形態例は抽出できるが、明確な基準を持つての分類は困難であり、図版の配列でも地区毎である以外は、さほど有意味な配列ではない。地区別では A 区 18 点、B 区 33 点、C 区 15 点であり、残りは K L 区、トレンチなどである。B 区が比較的多いようにも受け取れるが、意味のある比率と言えるかは何とも言えない。ほぼ完存の例も比較的目立つが、未掲載資料も含め考えれば破片資料も多い。またかなり異形のものでは、別種土製品と考えた方が良いものもあるが、便宜上整理時当初の分類を活かしそのままここに示している。胎土については、一般の土器と異なるように観えるものも多いが、全体的な検討は経ていない。調整は総じて粗く、丁寧なミガキ調整がされているものは限られる。

なお調査時における特徴的な遺物の出土状況は確認していない。以下、遺存の良好なものを中心にできるだけ多くの資料を図示した。個別の観察結果については観察表に譲り、以下では補足的な記述をする。

第 419 図は A 区出土例である。1 は当初天地逆も考えた台付土器脚部で、ミニチュアとしない方が良さそうなものの、異質なものである。2 は細い沈線で乱雑に文様が描かれる。3 は細かい刺突が密に施される台付鉢脚部～接合部、4～6,8,9 等は一般的なミニチュアとしてしばしばみられる形態例。7 は表裏（内外面）とも良く磨かれており、垂飾系など別種土製品とした方が良いかもしれない。

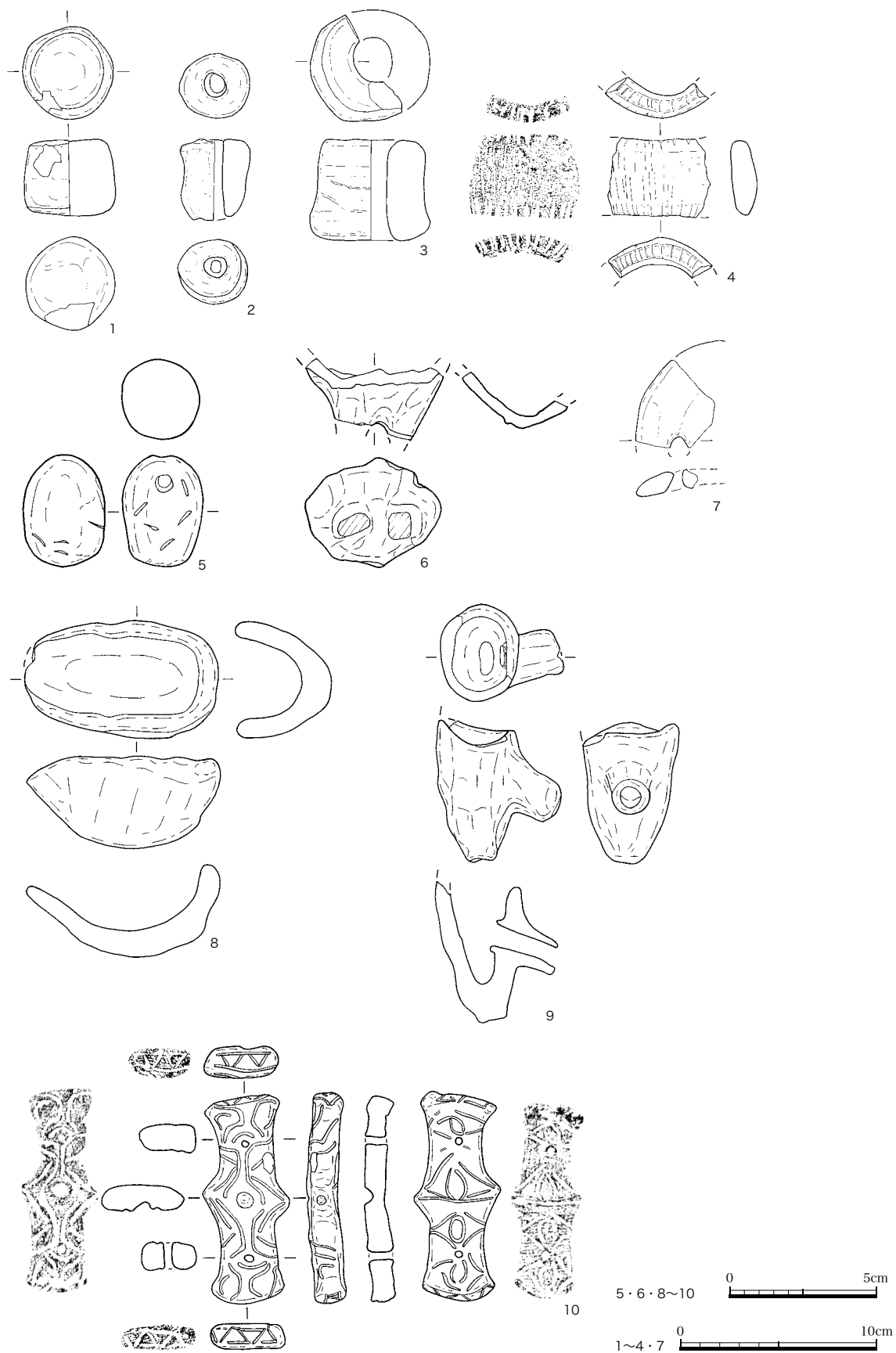
第 420 図は B 区出土資料である。1 は比較的土器文様に近い表現だが、遺存が少ないこともあり、全体の構成は良く分からない。2 も詳細不明なものである。6,9,13 などは粗い作りで土器形態からかなりはずれたものである。11 も異質なもので、図左側に 1 対の細い貫通孔が設けられる。

第 421 図に示した資料も、小形の壺や皿状のものが確認される。7 はリング状であり別種土製品と捉えた方が良さそうである。9 は丁寧なミガキ調整が確認されるもの、13 は B 突起状のものが最大径部分に巡る壺状のもので、比較的丁寧な作りである。

11. 粘土塊 (第 422 図)

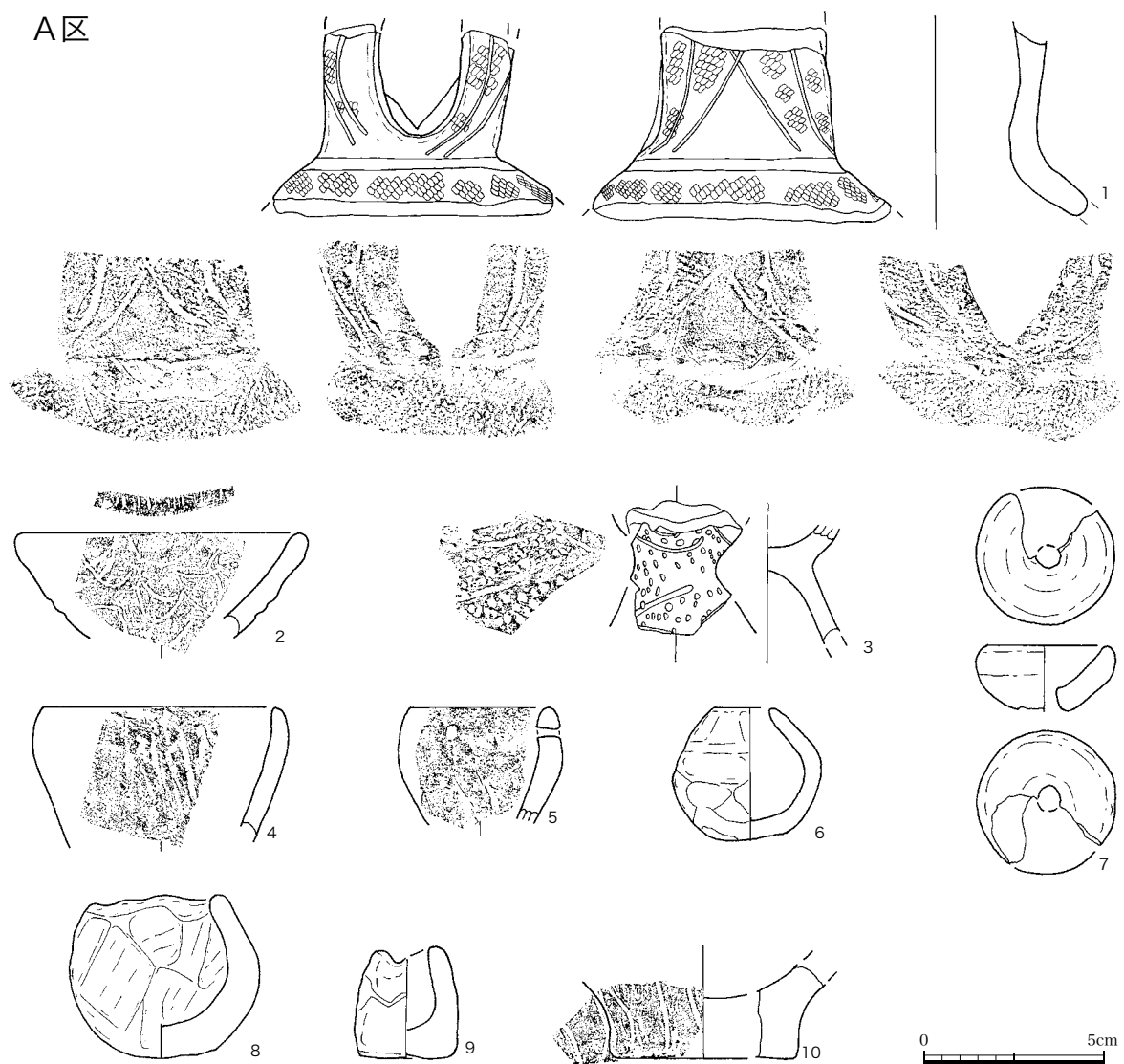
粘土塊は確認した限りで 91 点出土しており、一部を図化したに過ぎない。幾つかの形態や特徴を確認できることから、本来全点の詳細な観察と検討が望ましいが、任意抽出しての図化観察に留まる。図示資料内でも掌握したままのようなもの（1）や、一定の面があるもの（4,5 等）、削り取り状の痕跡などが観察される。胎土において土器との大きな差は認めたいが、総じて鉱物粒が少ない傾向があるように観察される。色調は明るい赤味～燈色のものが多いように見受けられる。

また写真図版五で掲載（未図化）したもののように、多量の塊（群）の出土もあり、これについても何らかの記録提示やデータ化を考えたものの、為し得ないままである。この試料中にも一定のやや滑らかな面



第418図 その他の土製品

A区

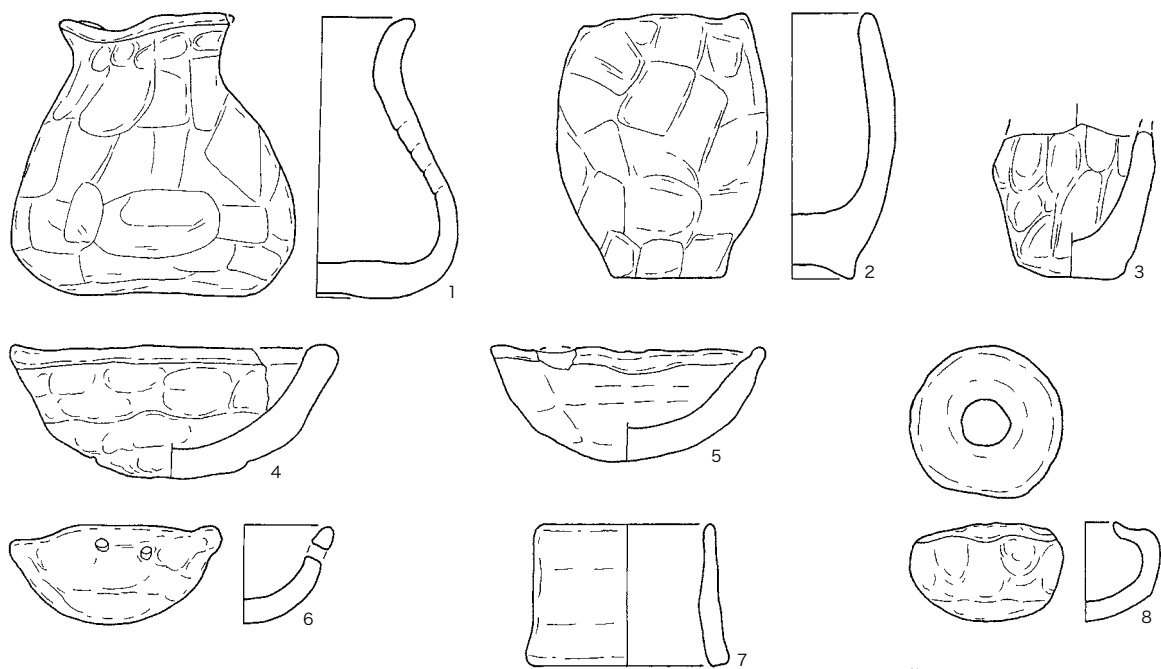


第419図 ミニチュア (1)

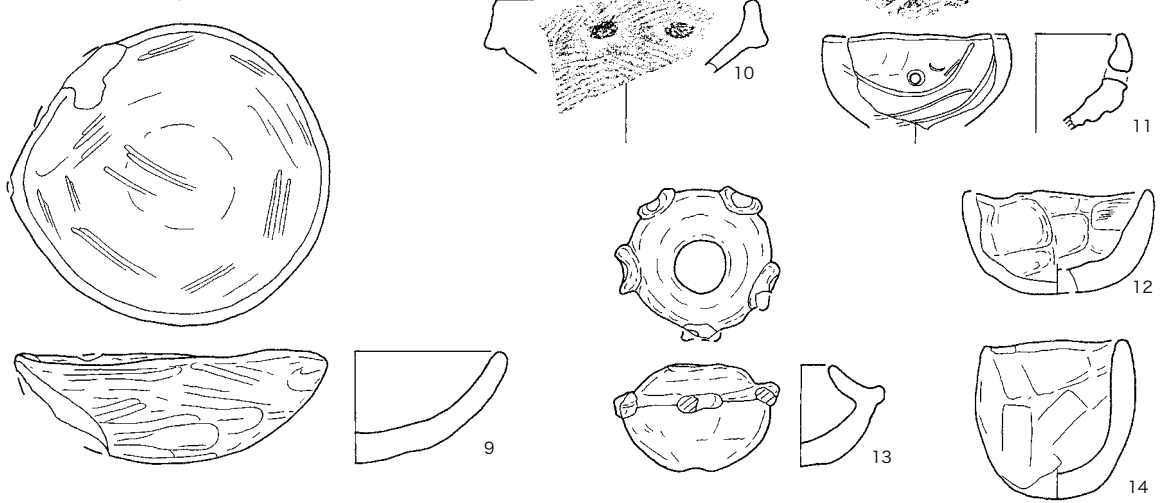


第420図 ミニチュア(2)

C区



E・H・I・K区



第421図 ミニチュア (3)

を有するもの、黒変している破片などもあり、籠状～袋状のものに貯えられていた粘土が焼けたものなどの推定もし得るものの、検討が必要であり、課題の一つである。



第422図 粘土塊

第9節 石器

石器整理の概要

石器は遺跡内から多量に出土しており、原石類も含めた総数は44,225点に及ぶ。原石剥片類を除いた狭義の石器点数でも15,200点となる。但しD E区の一部・G～L区の大部分にかかる石器は分類途上のまま残されており先の集計に含めていないことから、実数は1.2～1.4倍程度となる可能性がある。これについては、整理の過程で、水洗後機種分類を進めたものの、途中で全ての分類集計を断念せざるを得ず、平面的に調査し遺構も確認されているA～C区の整理を優先したことによる。第9表でK L区やG～I区の石器数が著しく少ないのはこのことが要因であり、実数とはかけ離れている点注意しなければならない。更に整理上の問題でいえば、注記についても図化したものに限定せざるを得ず、図化資料の選択に際しても、本来為すべき機種内の分類検討は行い得ないまま任意抽出的に選択した。形態などの特徴が多様なものについては、できる限り多様性を示し、或いは遺跡・地点などの特徴を示せるよう考慮したものの、未分類または分類が不徹底なこともあり、特徴を示す選択とはなっていない可能性がある。また機種ごとに選択資料の数・比率も大きく異なり、例えば多量に出土した石鏃・石錐以外の剥片石器については、ごく一部を示したに過ぎない。石鏃・石錐についても、その点数を考えれば、遺憾ながら極めて一部の資料提示に留まっている。

また機種判断については、当初分類から変更したものもかなり多いものの、カウントの表には反映し得ていない。以上のような整理時の状況に加え、調査時のサンプリングエラーの問題も考慮する必要があり、従って遺跡の石器組成についても検討し得るデータとは到底言えないことが確認される。礫については、調査時判断で整理時資料としなかったものも相当数あることも付記しておく。それでもあえて指摘しておくならば、石鏃類・二次加工剥片などの剥片石器類、磨石類、石皿類が500点を超える数量となっており、全体組成中の大きな比率を占めているということではできそうである。他遺跡との比較もここではできないが、打製石斧の少なさは遺跡の特徴の一つとなる可能性もある。また調査時の所見としても得られていたチャートの原石・荒割材・剥片の多さも特徴の一つと言えよう。

また石材について、図化したものは委託による肉眼鑑定結果を得ることができたが、図化以外のものにつ

第9表 石器集計表

	A区	B区	C区	D区	E区	G・H区	I区	K・L区	トレンチ・ 拡張区	その他	計
石鏃	348	204	194	49	37		19	43	49	2	945
石錐	60	32	58	7	12		1	3	8	1	182
剥片石器類	222	192	324	17	104			7	6		872
スクレイパー類	38	111	52	4	15			3	5		228
打製石斧	17	121	36	3	7			4	7		195
磨製石斧	6	12	14	1	8			1?			41
礫器、粗大Sc	37	116	169	4	18			4	29		377
擦切具	7	24	8	2							41
砥石	96	58	112	11	15			2	9		303
石錘	58	79	52	2	13			9	22		235
磨石敲石類	2,164	3,888	3,403	595	460			142	489		11,141
石皿類	140	387	271	41	31			14	35		919
チャート原石類	1,553	1,771	2,354	235	164			23	21		6,121
チャート剥片類	8,720	5,362	4,267	2,259	1,180			123	650		22,561
黒曜石原石剥片類	17	43	10	7?	2			1	4		77
玉髓原石剥片類	85	17	3		4						109
計	13,568	12,417	11,327	3,230	2,070	0	20	378	1,334	3	44,347

※剥片石器類にはRFUF、ピエス含む。石鏃・石錐は未製品を含む。チャート原石類には荒割材、残核含む。

※石皿類には多孔石・台石含む。他に石匙6点、その他の石器などがある。また白色泥岩が18点（A区17点）ある。

いては未鑑定であり、機種毎の石材組成についても、参考程度のデータとなる点注意が必要である。

図化し得たものは限定的で、既述のようにスクレイパー類、二次加工ある剥片など極めて一部に限定している。石器の出土状態については、他の遺物と大きな差異はないように思える。配石遺構や集石部分、土器埋設遺構などを除けば、極めて集中するような状態や設置のような状態は殆ど確認されていない。とはいえ、思いつくものだけでも、L区の磨製石斧集中や石錘集中出土ピット、I区包含層中の石錘集中部分、C区の緑泥片岩製大形石皿の設置状況、I区土器埋設遺構S 210での石皿の設置などがあり、詳細な検討・確認を行えば、ある機種の集中的出土や有意な偏在状況を考える必要があり、補足検討の機会をもちたい。

また機種毎に地点やグリッドでの出土数の偏りなどをチェックする必要もあるが、これについても検討未了のままである。この点と関わって石器の時期判断の問題もあるが、包含層の時期幅の広さもあり、絞り込みはかなり困難である。時期幅が比較的限定的な遺構覆土などの資料（C区S 143 bなど）では、伴う石器の資料もある程度把握可能となるが、こうした資料は限られており、更に遺構内出土位置の記録チェック及び記録の提示を遺憾ながら殆ど行い得ていないことも、検討を難しくさせている。

以下では出土石器の内、遺跡内から抽出した石鏃・石錐とA～C区以外の石器について限定的だが示す。なお石剣類、独鈷石、垂飾玉類については第10節で扱う。一部の礫石器についても補足する（E I区）。

石鏃（第423～426図 写真図版五七）

総数945点出土しているうちの83点（第423図8の異形石器含む）を示す。図化は株式会社アルカに委託して行った。石鏃については、当初の整理で形態分類を行っており、これを踏襲する形で図化資料の選択を行った。各分類毎の比率に注意して選ぶようにしたが、飛行機鏃などの特徴的なものは多く選んでいる。

全点の詳細な観察検討は為し得ておらず、図の選択提示も限定的な恣意的であることから、遺跡の様相把握を目途とした報告にはなっていない。またチャートの剥片石器としたものの中に石鏃未製品が相当数あることを確認しているが、最終的な分類判断を為し得ないままとなっている。なお出土状態について、特異な例は確認していない。また、特定のグリッドや地点への偏り、分類毎に見たときの偏りなども本来検討すべきであるが、これについてもできていない。

以下ではこれまでの研究・報告例などを踏まえた大まかな分類を示しておく。数量的には凸基有茎、有茎で鏃身が二等辺三角形のものが目立つ。

A類（第424図20、第425図1～3）：凹基鏃で23点出土している。抉りの深さ等比較的多様である。

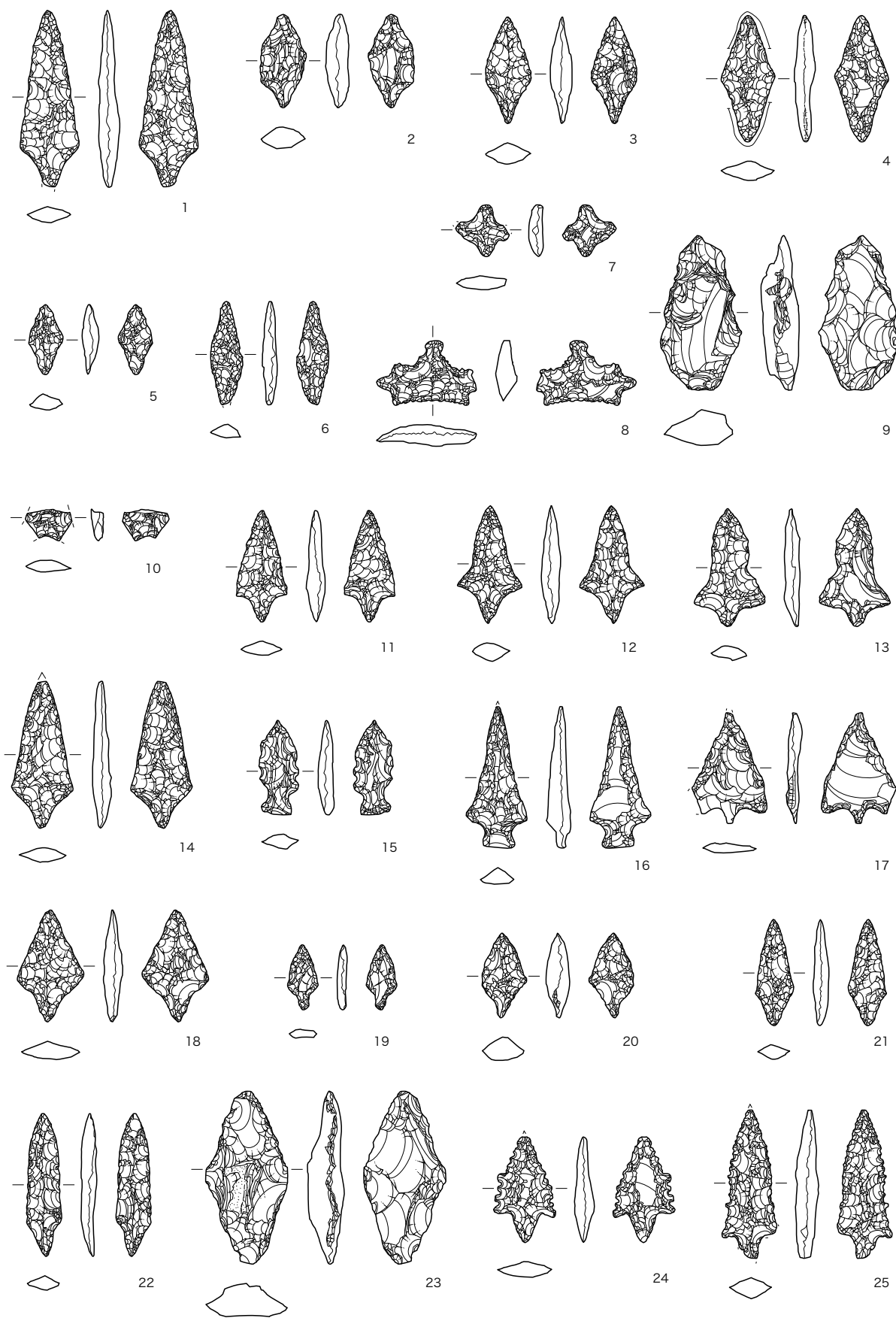
B類（第423図11,12,14,21、第425図6～12）：凸基有茎鏃で206点がある。遺跡内で最も多いが、図の提示は限定的である。これも基部の形状等で幾つかの種別が確認される。

B類2種（第424図12、第425図14～16、第426図7）：鏃身が二等辺三角形のもの。32点がある。

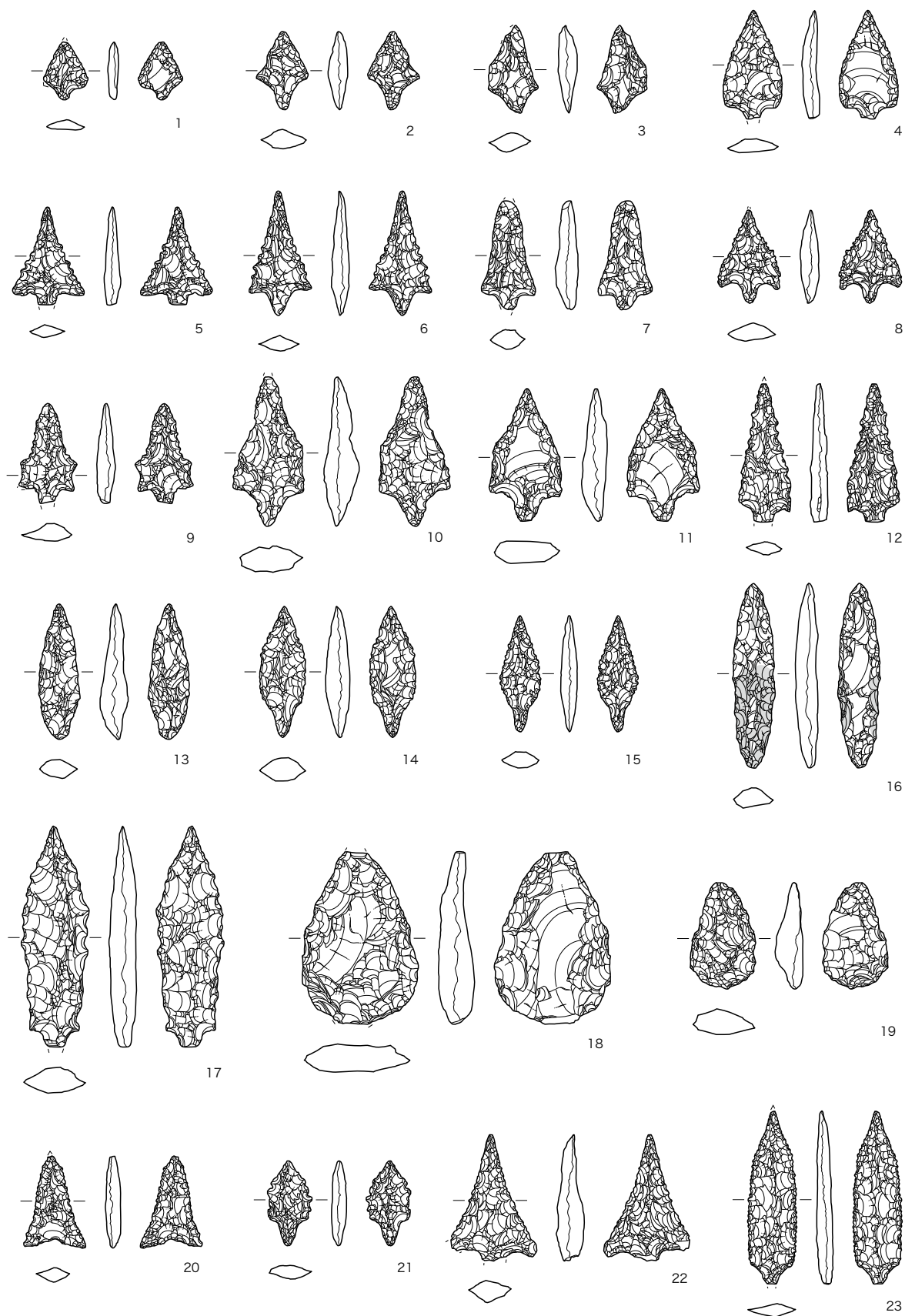
B類3種（第423図16,17、第424図4,5,8,22、第425図18、第426図2）：茎の左右が抉り状の曲線部となっているもので、15点がある。底辺が抉れるもの、或いは凹基有茎という言い方もできよう。抉りの強さや彎曲の程度などでも多様性が窺える。

C類1種（第423図3～5、第425図5）：菱形に近い形態のもので39点がある。長軸が長い場合には柳葉形や当初分類の「細身の有茎鏃」（15点）との区別が難しく便宜的である。

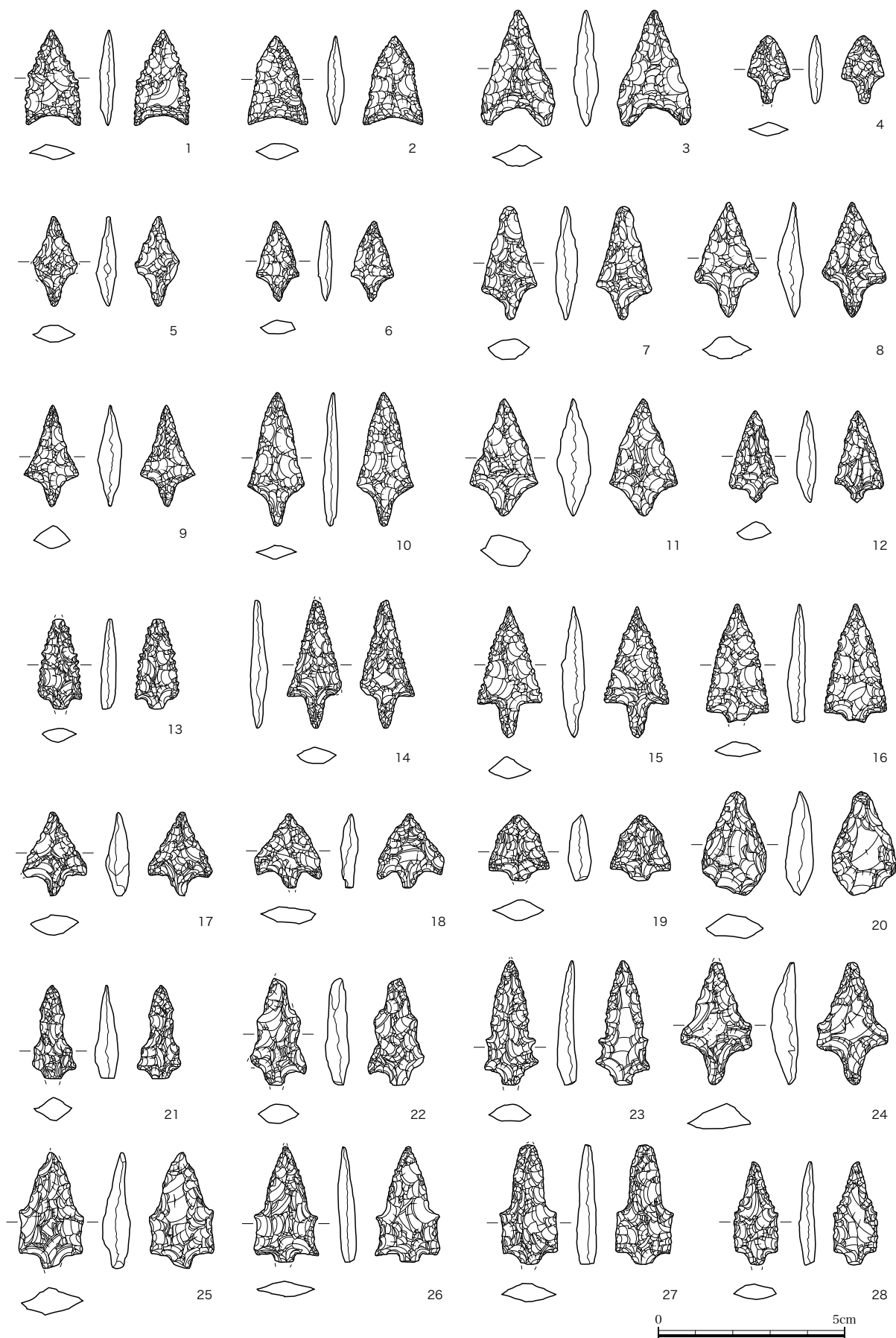
C類2種（第423図6,22、第424図13,16）：柳葉形とされるもので23点出土している。細身の第424図16等は石錐との区別が難しい。石錐第427図の10,11等との類似を確認することもでき、相互の区別は検討を要する。一応先端の回転摩耗痕があれば錐と判断しているが、判断の困難な例も多い。



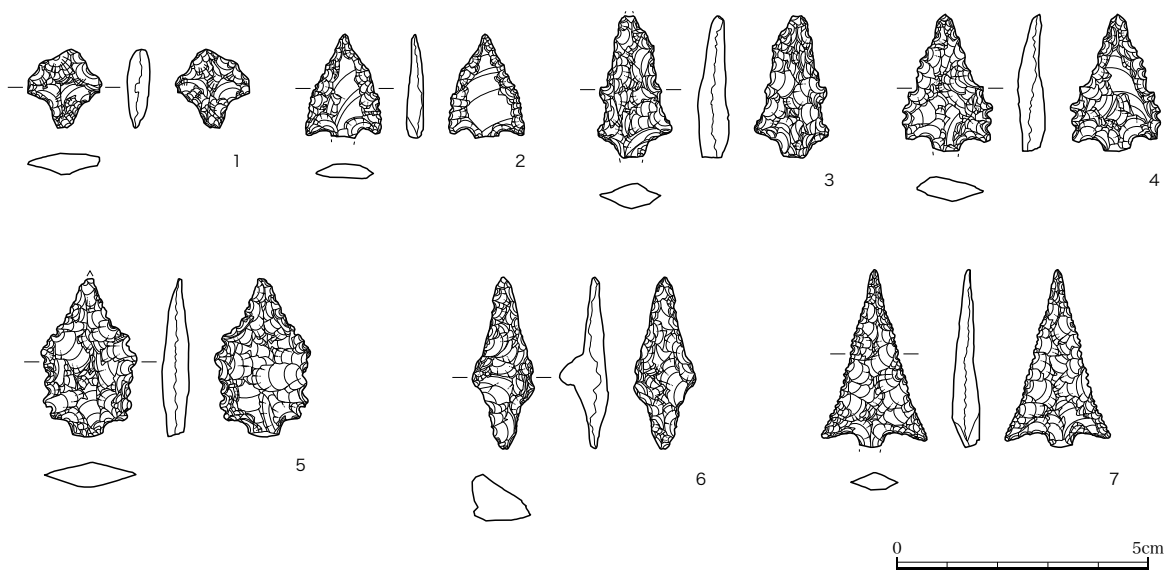
第423図 石鏃(1)



第424図 石鏃(2)



第 425 図 石鏃 (3)



第 426 図 石鏃 (4)

D類；飛行機鏃（第 423 図 24、第 424 図 9,10,21、第 425 図 21～28、第 426 図 3～5）：確実な例 15 点はすべて示した。この点数自体も有意な事象で、本来詳細に検討すべきであろう。

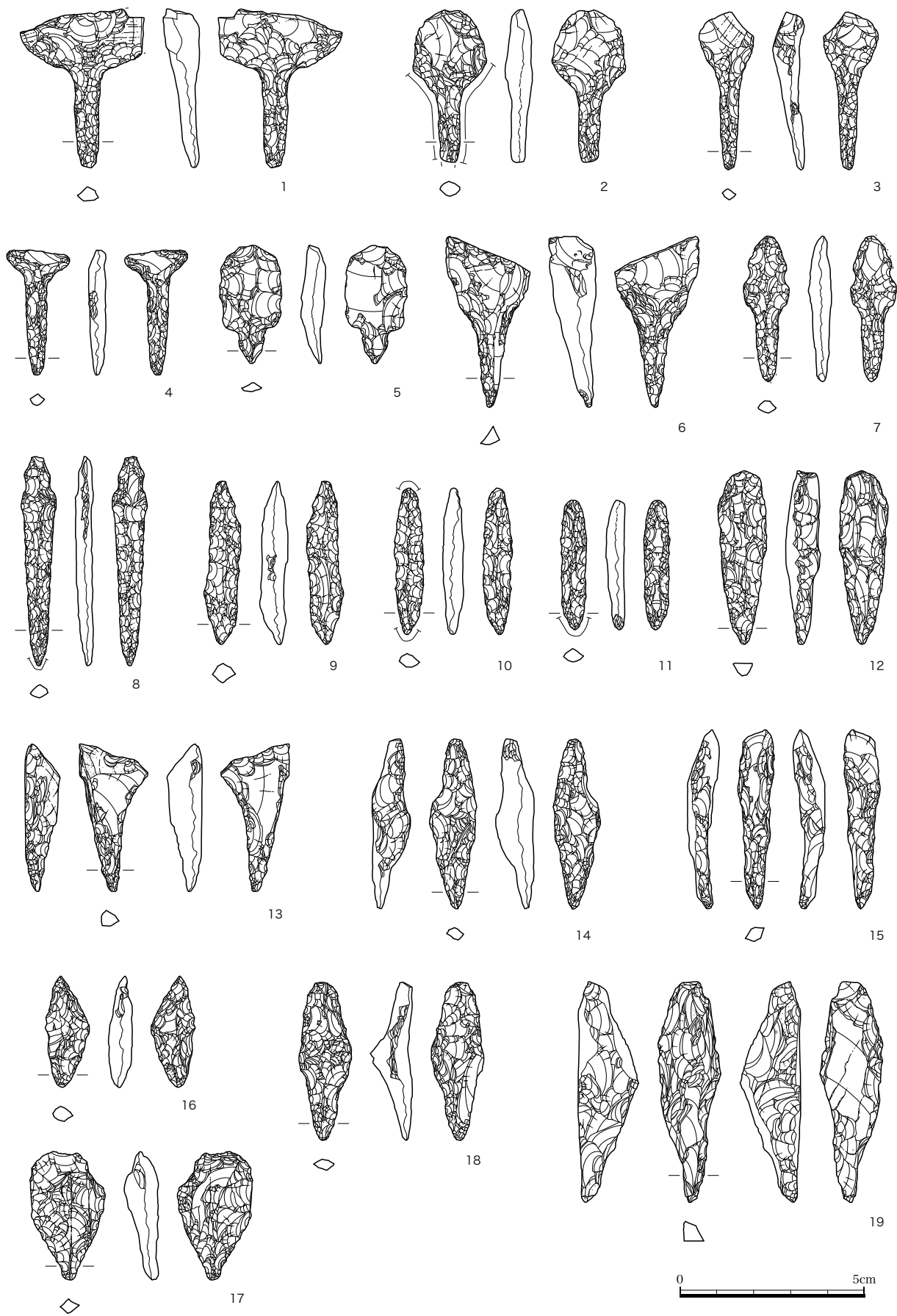
その他の 1 種として基部が円弧状の円基鏃をあげておく（第 425 図 20）。26 点ある。その他の 2 種として紡錘形 23 点（第 423 図 19）、細身の有茎鏃（図なし）15 点がある。以上の分類とは別に鋸歯縁の例を示す（第 423 図 24,25、第 424 図 5,6,9,17,23、第 425 図 13,28、第 426 図 2～5）、また異形石器も便宜的にここに示す（第 423 図 7,8）。第 423 図 9、第 424 図 18 は未製品と考えたもので、このような例はかなりの多いが殆ど図化し得なかった。第 423 図 1,14、第 424 図 12 などのように鋸歯縁ではないものかなり細かく丁寧な縁辺加工の例もある。

石材は図化の 83 点のみ鑑定している。チャートが 52 点と多数を占めるが、珪質頁岩 2 点、頁岩 20 点、黒曜石 3 点等が確認されている。未図化分についても概ね同様だが、よりチャートの比率が高くなる。

石錐（第 427 図）

当初分類で 102 点、その後の検討で 182 点の出土が確認された。摘み部を有するものと棒状のものがあり、後者では石鏃の一部と区別の難しいものもある。また剥片石器の最終的な分類判断が未了であり、再検討によっては大きく変わる可能性もある。実際幾つかのグリッドのみだが剥片石器の再検討から石錐への変更となったものが少数ある。一方石錐と判断したものの中に他機種へ変更すべきものもあり、詳細な観察検討が求められる。石材はチャート主体で頁岩・珪質頁岩・泥質チャート、玉髓がある。出土状態について特記すべき例は確認していない。特定の地点やグリッドへの偏りも検討していない。A区 60 点、B区 32 点、C区 58 点であり、ややB区が少ない傾向があるものの、どの程度有意か不明である。

図化にあたっては遺存度の高いもの内からの任意の選択であり、遺跡の様相を示すものとは言い難い。1～7 が摘み部を有するもので、摘み部の形態は多様である。8～11 は棒状の長い形態のもので、8 は上端の抉り状部分を摘み部作出と捉えられる。棒状の形態は丁寧な押圧剥離で定型性が強い。12 以下は先端に向かって鋭角な二等辺三角形に、徐々に細く作出しているものである。左右非対称の例が目立つ。



第 427 図 石錐

剥片石器類

搔削器スクレイパー類、楔形石器、二次加工ある剥片などの剥片石器は多量に出土しているが、整理は極めて不十分なままとなっている。当初分類でチャート剥片類としたものは総数 22,561 点という量である。またチャート原石も 6,121 点である。原石としたが荒割材等も含む。調査時における所見としても包含層中から多量の出土がある。B区やC区でチャート剥片類や小礫の集石部分もあることは、集落内における一定の活動の痕跡を示すもので、その意味でも本来観察分析は必要であろう。A～C区では極一部ではあるもののスクレイパー類を中心に凶化した。整理時の感覚的な所見だが、当初分類で剥片類としていたもののうちある程度再確認したグリッド出土資料においては、剥片類の内一定量がスクレイパー類や楔形石器、また二次加工ある剥片や使用痕ある剥片への変更が多く観られたことから、チャート剥片素材のスクレイパー類の実数はかなり増えるものと推定しておく。一方ホルンフェルスなどを粗く打ち割った剥片を素材とした剥片石器も、一部ではスクレイパー類扱いとしたものの、礫器との区別を含め充分な観察検討を経ていない。このあたりの機種についても再検討が必要である。

石材について言えば、黒曜石や玉髓についても注目する必要がある。黒曜石の原石剥片類は 77 点出土しており（第 39 表）、わずかではあるが製品や加工痕のあるものも認められており、原石～剥片剥離加工に至る検討が必要である。しかも肉眼観察による限りではあるが、高原山産とは考えにくい夾雑物の少ない黒曜石が多く、本来産地同定も必要であろう。玉髓についても、数は少ないものの一定数の製品もある点、確認しておく。他に石材の問題としては、石剣類にかかる緑泥片岩と粘板岩、玉類の素材となる硬玉翡翠や本遺跡で特徴的に観られた緑色の石材（碧玉）、岩版類の石材等の問題がある。

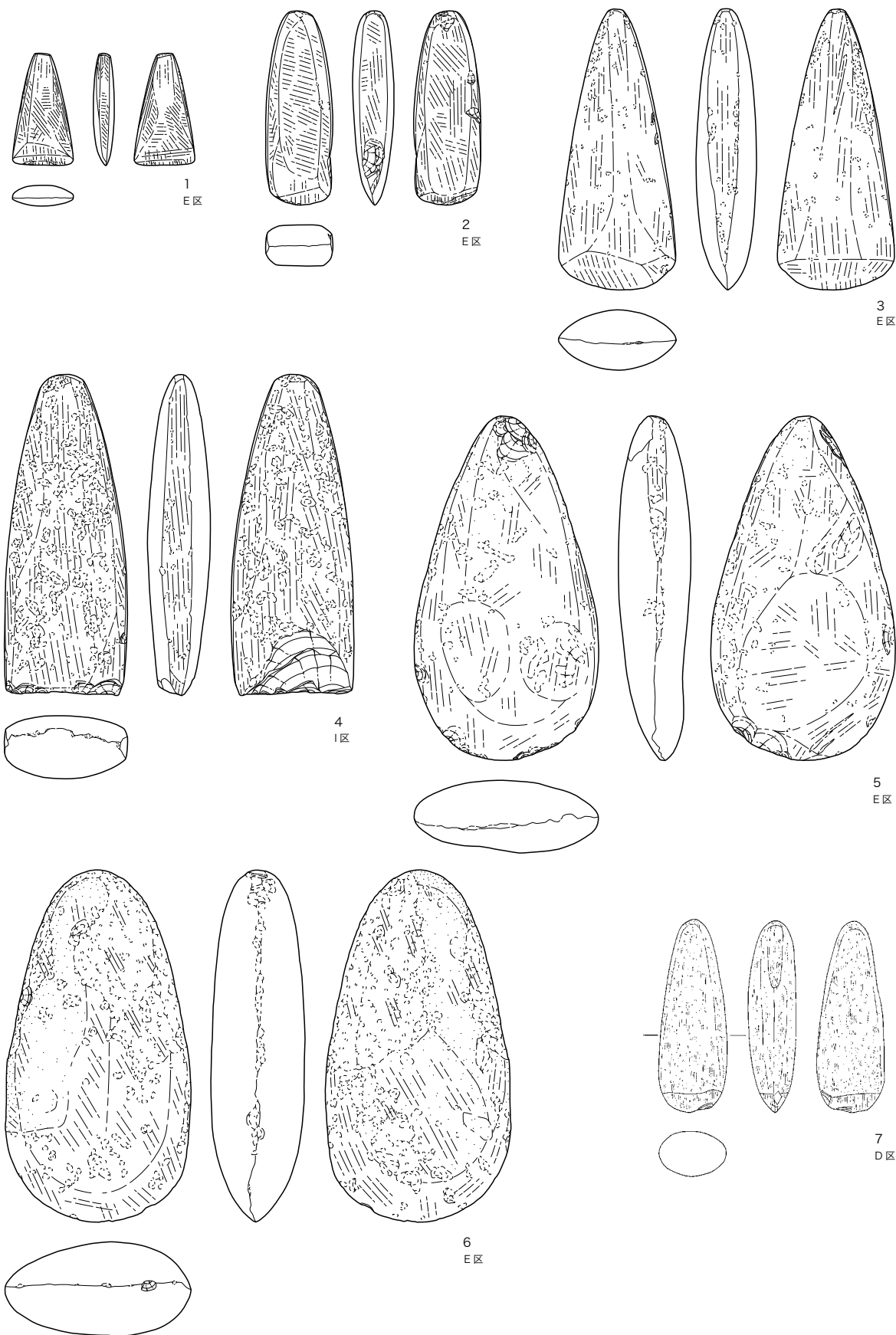
定形石器補足

定型石器では石匙及び磨製石斧の少なさが際立っている。磨製石斧では少数未製品が確認されている。とは言えその数は限られており、評価は難しいものの遺跡内での安定的な製作を想定するのは難しいかと思われる。その他の礫石器類についても補足すべきところが多くあるが、ここでは省略する。

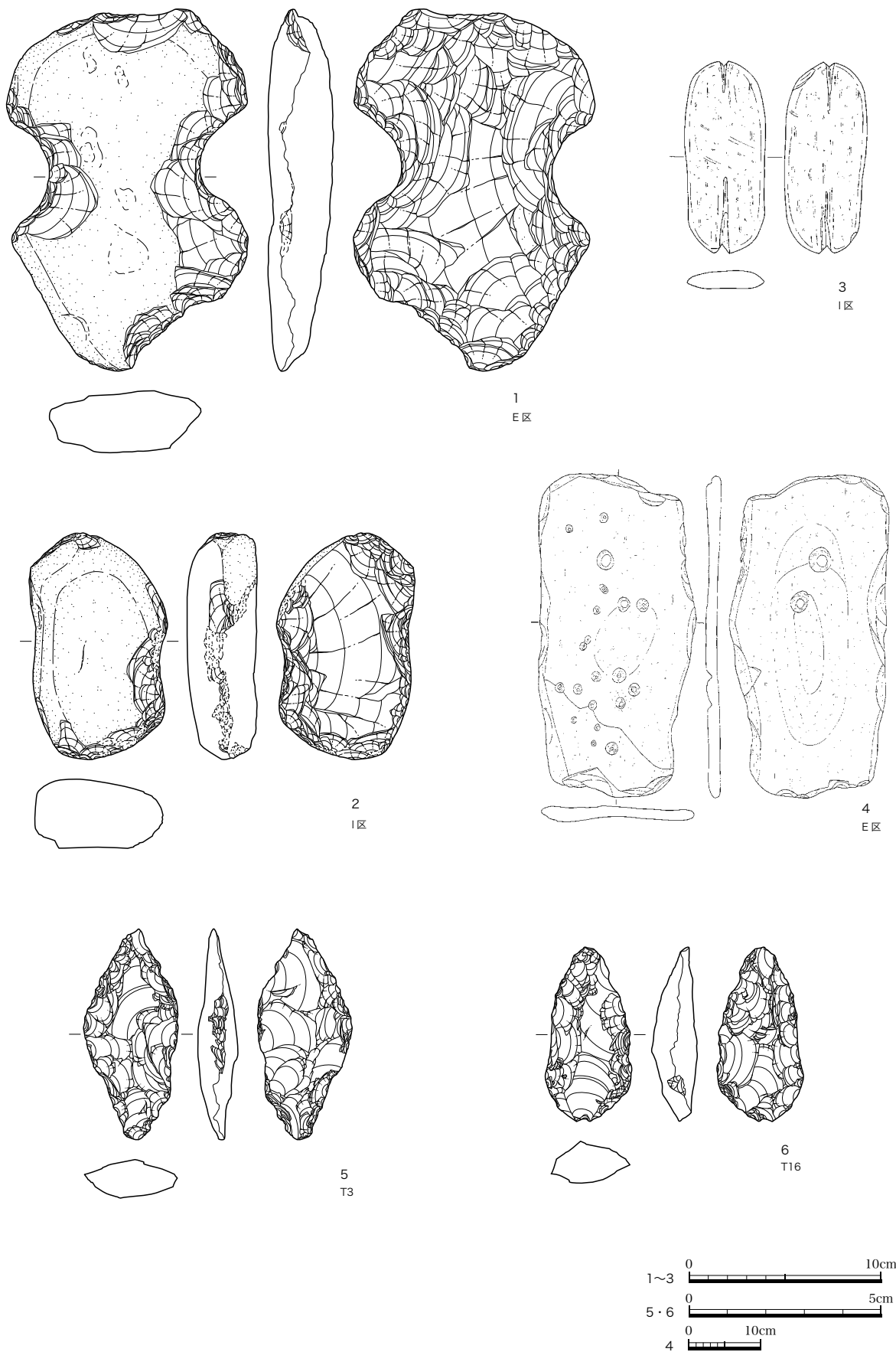
以下で E I 区出土石器について補足しておく（第 428.429 図）。

第 428 図 1 は小形の磨製石斧で、入念に研磨されたものである。刃部の線状痕が比較的目立っている。2 も遠隔地石材の磨製石斧優品で、入念な研磨で全体に光沢を帯びている。4 の磨製石斧は、下端欠損部を敲打により再生している。或いは敲打状の使用時敲打かもしれない。5 は幅がある扁平礫素材で、素材形状を活かす形で製作している。刃部形状は定型的な磨製石斧とほぼ変わらない。6 は一見厚みや幅の点では定型性からはずれる形状だが、敲打→研磨の状態や刃部形状は定型例と変わらない丁寧な作りと観察される。

第 429 図も補足的な資料。1 は E 区出土の打製石斧で大きな彎曲となる括れ部が特徴である。2 は石材や括れ部敲打など打製石斧の特徴も有しつつ、鈍角～丸みをもつ下端は敲打痕が集中しており、この意味では敲打石と分類される。上端も敲打痕がある。4 は緑泥片岩製の大型石皿で、表裏とも石皿面＋一部多孔石面となっている。上方中位の孔は表裏貫通している。縁辺の剥離加工は整形の加工となろうか。5 は当初石槍かとも考えたものだが、二次加工が殆ど無い縁辺もあり、スクレイパー類とした方が良いかもしれない。頁岩製。6 はチャートの剥片素材で、石槍や石鏃未製品の可能性を考えたものである。側縁では丁寧な剥離加工が観られるが、基部周辺の加工はあまりなく、厚みも残っている点など気がかりな部分が残る。



第428图 E·I区出土石器(1)



第429図 E・I区 出土石器 (2)

第 10 節 石製品

概要

石製品の整理については、土製品等と同様で、種別に分類した後、図化資料を選択し、以降の整理を進めた。良好な資料も多く、可能な限り図化するよう試みたが、石剣類では限定された資料提示になっている。以下種別毎に図の提示と概要を記述する。

1. 玉類 (第 430 ~ 434 図)

垂飾の玉類は総数 137 点出土した。これには後に触れる緑色の原石・剥片等も含まれており、これを除くと製品の数は 119 点となる。縄紋時代における 1 遺跡での玉類の総点数としては異例の点数であり、そのこと自体も重要な意義がある。他の石製品等との区別はほぼ問題無く、不確実な資料も少ないとは言え、調査年度の後半では大きな道具を用いての粗い調査であったことを考慮し、製品の大きさから生じる調査時におけるサンプリングエラーの問題を踏まえれば、実数はかなり上回ると見た方が良いであろう。製品のほぼすべてに近い数を図化した。十分な観察や分類検討には至っておらず、以下でも概略の記述となる。

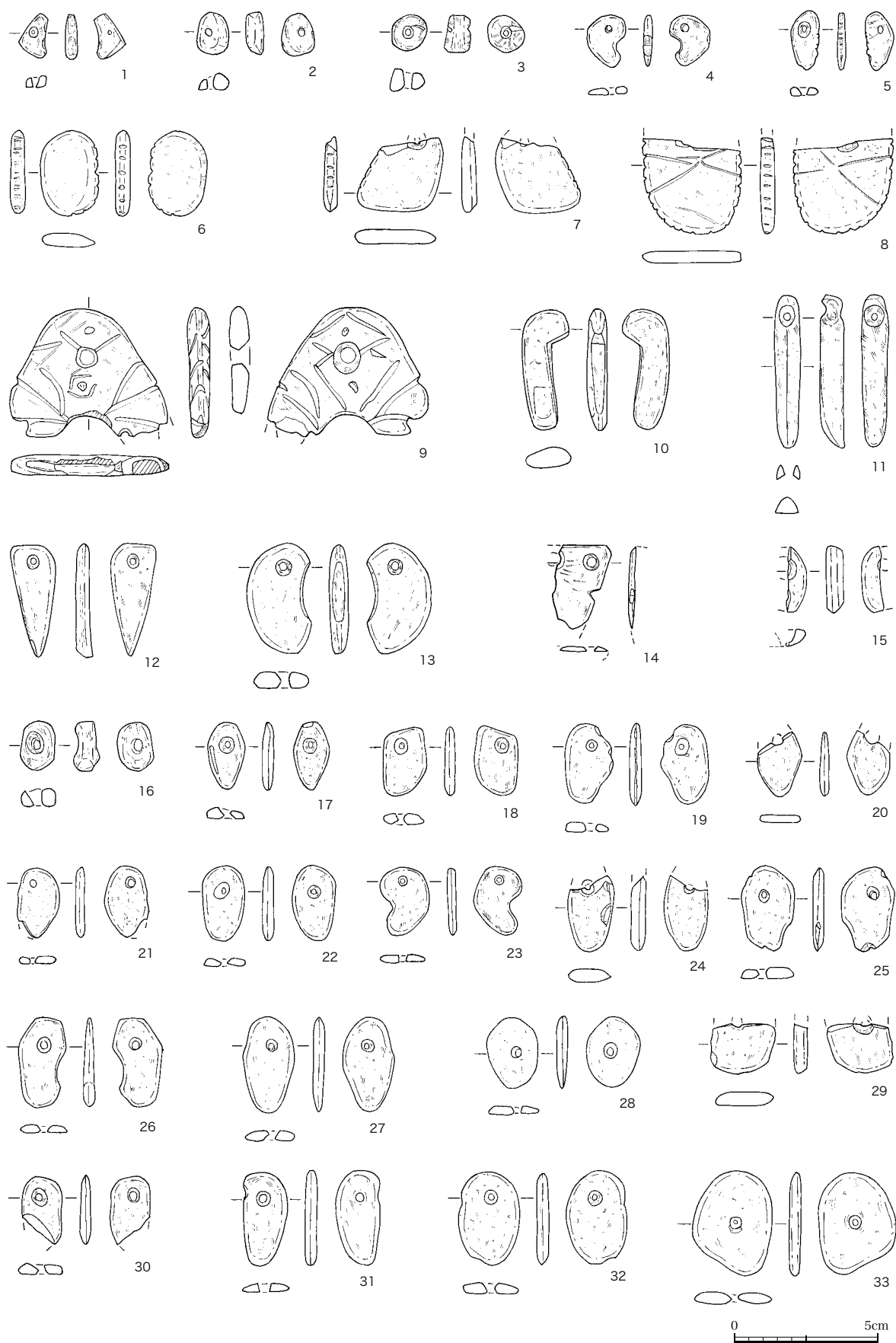
大きく見て遠隔地石材の玉類と在産石材によるものがあり、量的には後者が圧倒的多数を占める。形態や作り・文様・研磨の程度、石材などでの分類も可能であるが行っていない。玉類として良いか不確実な資料もある。穿孔もなく研磨も不明瞭なものを未製品とすべきか、或いは加工のない素材として扱うべきか等、問題も多い。特徴的な緑色素材のものについて、原石・剥片も一定数出土しており一部を図示した。

地区別では A 区 57 点、B 区 22 点、C 区 33 点であり、残りは K L 区、トレンチなどである。A 区と C 区が目立っているが、調査の精度等も関り、どの程度有意かの判断は難しい。碧玉の勾玉状のもの及びその石材が B 区で目立っている点は注目して良く、時期の問題或いは場の問題として考えてゆく必要があろう。整理に当たって、製品については可能な限り図化した。既述の原石剥片類については限定せざるを得なかった (第 432 図 10 ~ 13,15)。個別の観察結果については観察表に譲るが、幾つかの特徴について付記する。

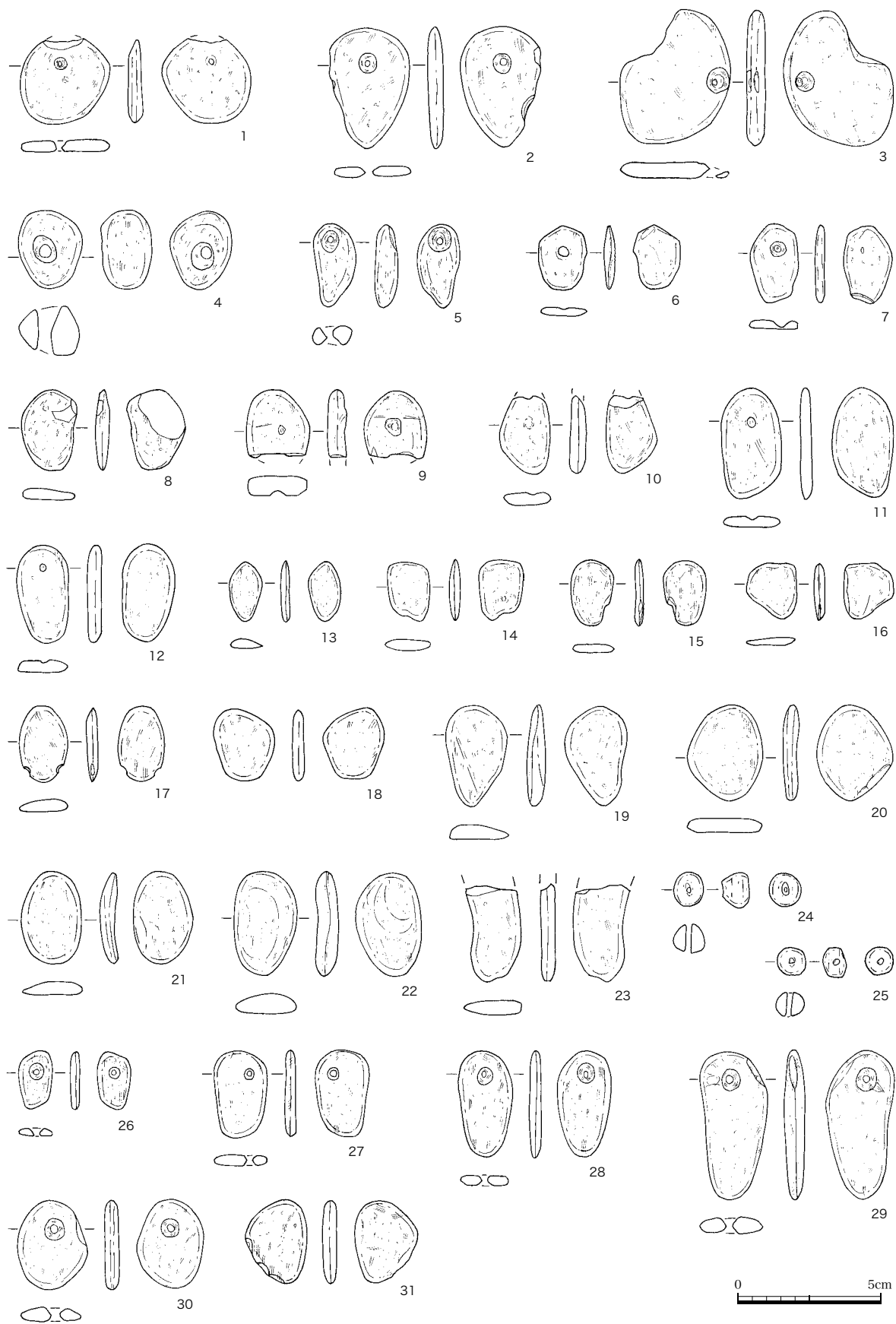
硬玉管玉状の例 (第 432 図 19)、異質な形態例 (第 430 図 10,11,14、第 432 図 20,21、第 433 図 9,19)、側面の刻み装飾例 (第 430 図 4 ~ 8)、表裏面の線刻文様 (第 430 図 8,9) 等がまずは注意される。一方主に簡素な在産石材のものをみると、穿孔に関わる加工加撃が観られるものの未貫通のもの (第 431 図 6 ~ 12、第 433 図 2,8,11 ~ 14)、穿孔に関わる痕跡もないもの (第 431 図 13 ~ 23,31)、穿孔が定型的ではない位置にあるもの (第 430 図 33、第 431 図 3 ~ 5、第 432 図 8) 等が観察される。とりわけ未貫通のものが一定数あることは注目される。第 433 図 9 や第 433 図 19 については他と大きく異なるサイズ・形態であり他の例と同じく扱って良いか問題となるが、一応ここで示した。なお第 431 図 24 及び 25 は土製品を誤ってここに示したものであり、注意されたい。

2. 石剣類 (第 435 ~ 441 図)

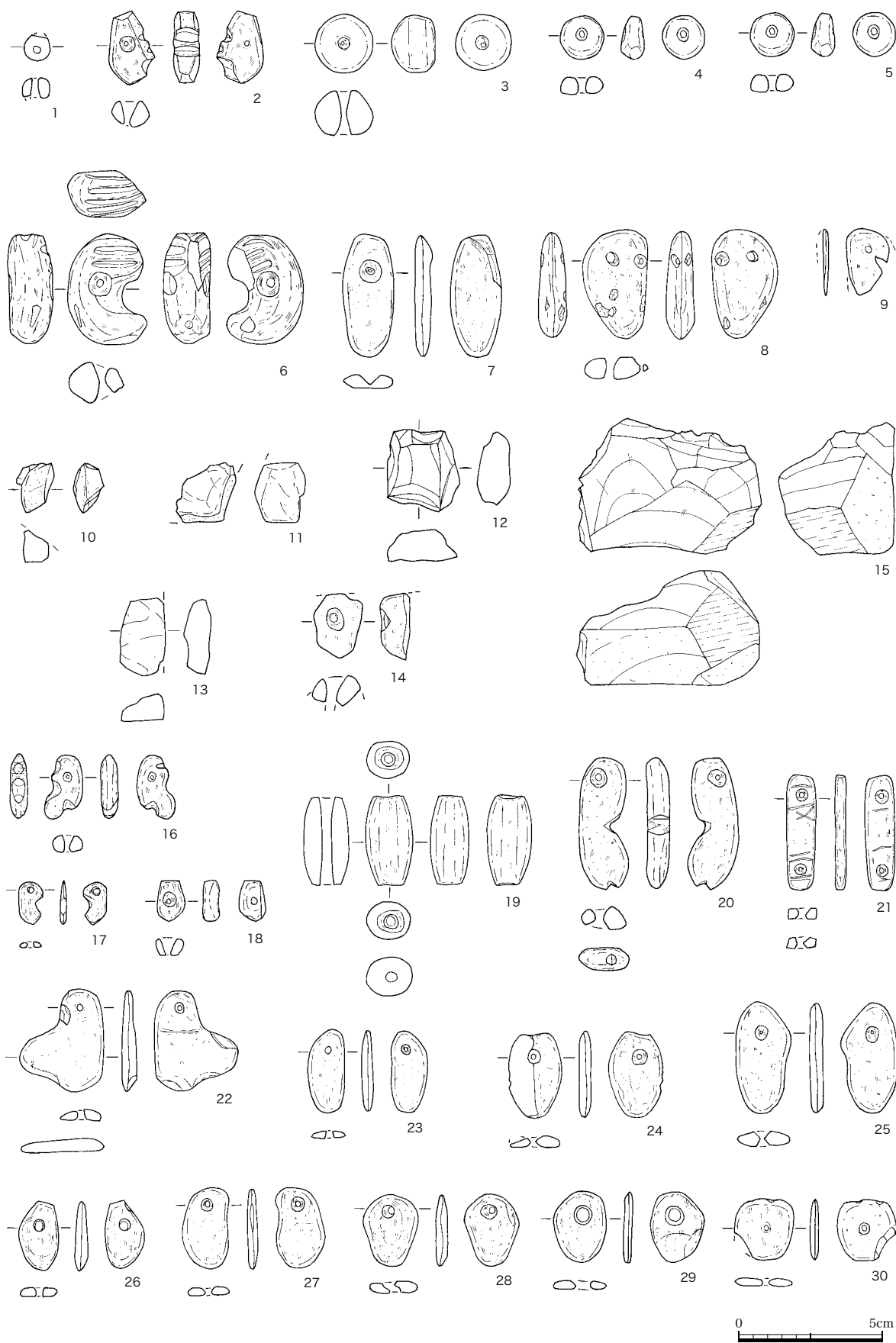
石剣類は総数 217 点出土した。石錘の転用品 (第 436 図 7、第 439 図 6、第 441 図 8) も含む。不確実な資料もあり、また明らかに割れた破片を除き小片も 1 点として数えている。接合や個体識別が不十分であり、同一個体の破片を別途の点数として数えている可能性も考慮する必要がある。地区別では A 区 44 点、B 区 32 点、C 区 70 点であり、残りは K L 区などである。やや C 区が目立っているが、どの程度有意かの判断は難しい。地点やグリッドでの偏在傾向もあるかもしれないが、検討に至っていない。ほぼ完存の例 1 点を除き破片資料である。小片や特徴の少ない破片では部位・天地の判断が難しい。ここでの図示も天地逆となっ



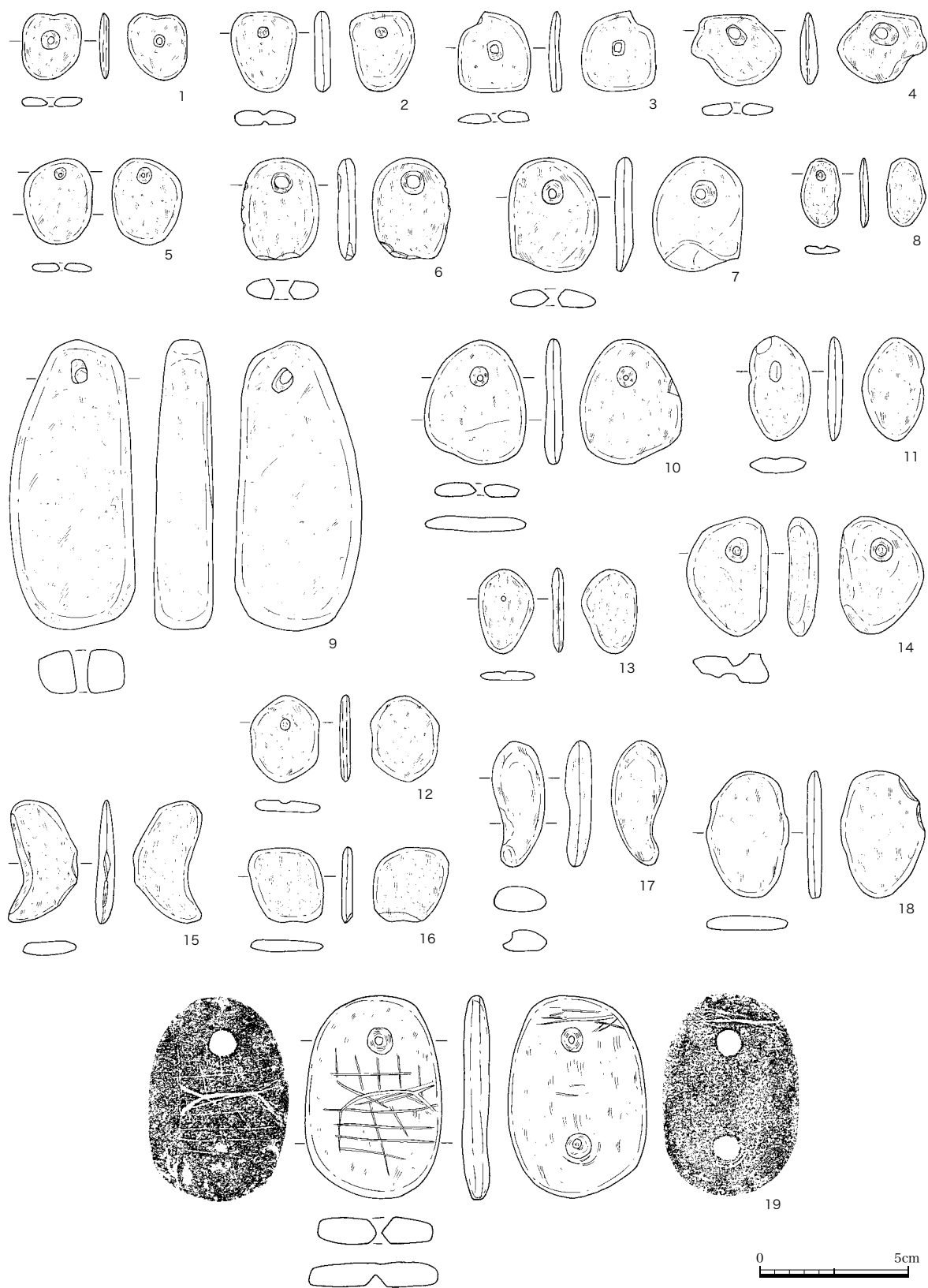
第430図 玉(1)



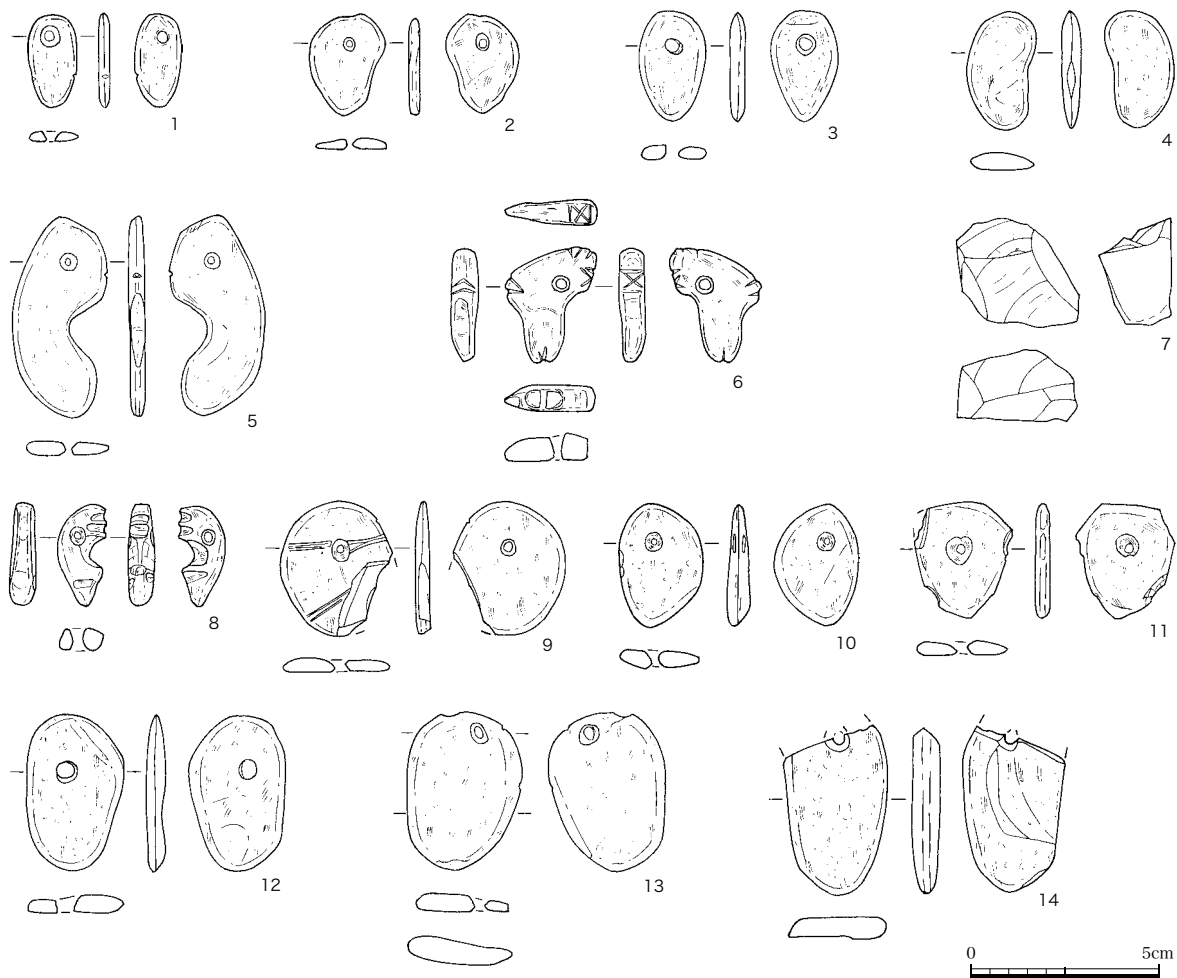
第431図 玉 (2)



第432図 玉(3)



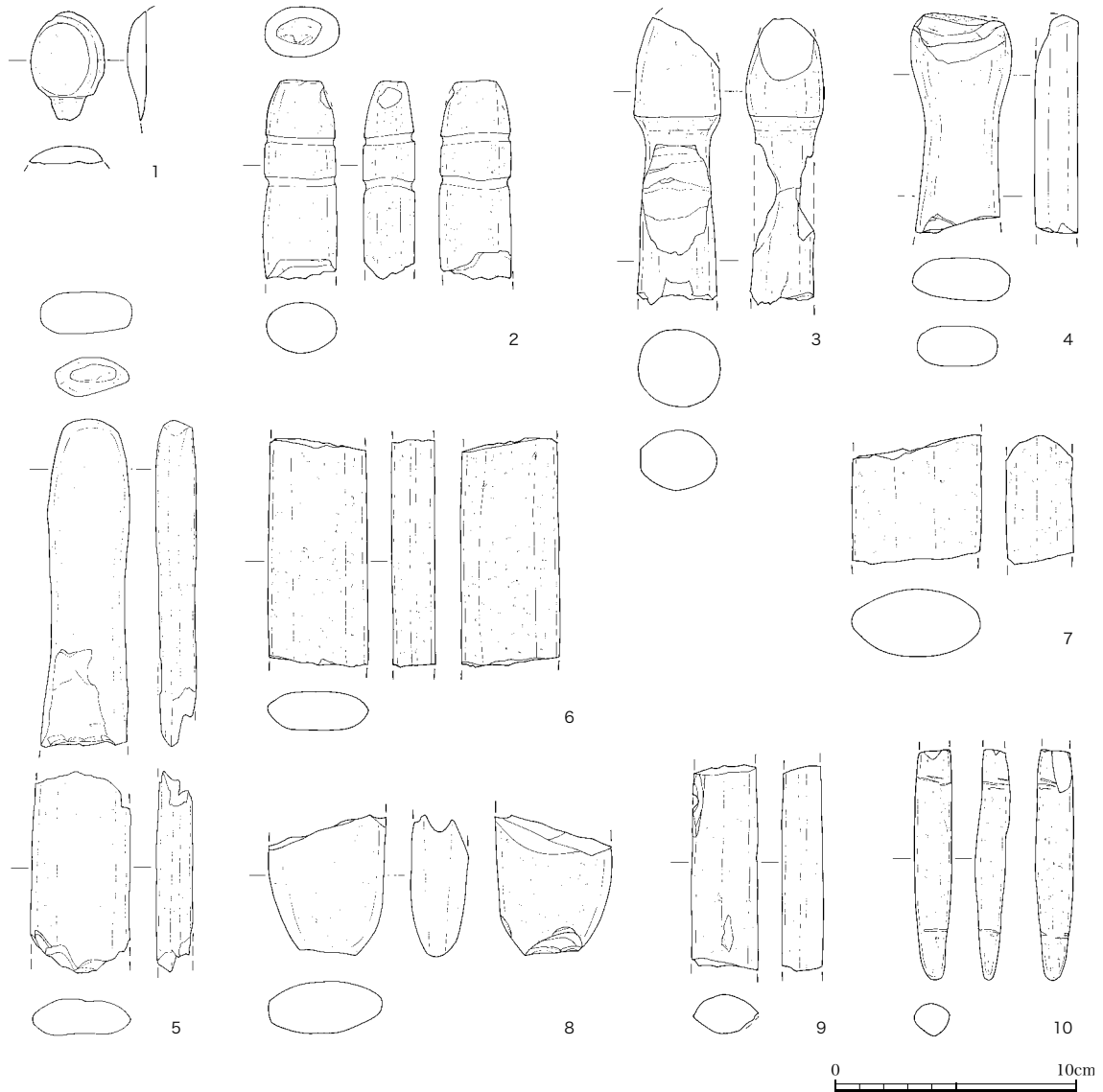
第433図 玉(4)



第434図 玉(5)

ているものもあろう。整理に当たっては、遺存の良好なもの、上下端部のある例は可能な限り図化した。が、胴部の特徴があまりない資料については、多くを図示できなかった。個別の観察結果については観察表に譲る。なお特徴的な出土状態として、数点がまとまって出土した部分がある（写真図版二六-7）。

関東地方における石剣・石棒類の出土数は近年増加しているが、それでも1遺跡での点数としては多く注目される。また近年石剣類の形態的特徴・文様の特徴、作りなどから研究も進んでおり、それらを踏まえる必要はあるものの、有文類が少ないこともあり、ここでは羅列的な記述とする。本来は、頭部文様の区別、断面形態、石材、製作技術に注目しての検討が必要となろう。剥離痕や敲打痕の残る「未製品」も一定数あるが（第436図9、第438図11?、第439図9,10、第441図9、図示以外は殆どない）、その数量・比率をどの程度評価するかも問題となる。石材では大きく分ければ緑泥片岩のものと、粘板岩系のものがあり、前者が多いようにもみえるが、破片化し易い石材であることも注意しておく必要はある。断面円形で頭部装飾の顕著な、いわゆる成興野型は第436図1のみで、これが後期末資料の多いB区出土である点は注意される。同図2も断面円形に近いことが推測され、立体的な装飾を有しており、関係性を示す。他に特徴的な例を示せば、頭部文様（X状：第437図1、第440図1）、頭部の丁寧な研磨例（第435図1、第437図2,6、第440図2）、頭部装飾（第435図2）、下端の文様例（第438図6,8、第439図7,8、第440図4、第441図



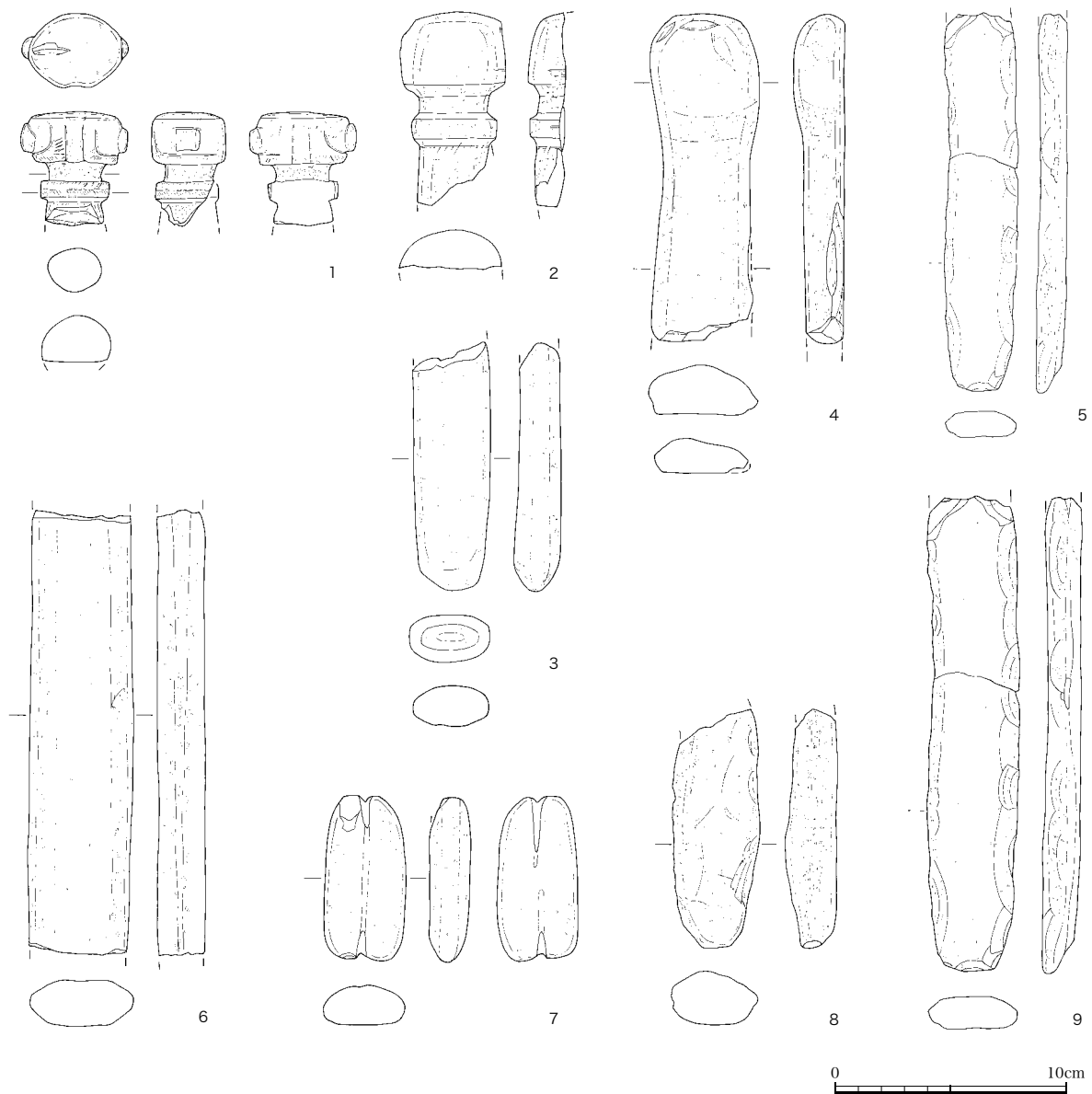
第435図 石剣類(1)

8)、頭部破損後転用? (第437図8)、定型的ではないもの(第438図11、第440図5、第441図4)を示しておく。第440図2の頭部には細く浅い線で形態に沿うような弧線文が描かれている。第440図5や第441図4等は別種石製品とした方が良いかもしれない。

なお、作りや研磨の程度などでも分類は可能であろうが、粘板岩系の方が丁寧な研磨と観察できることもあり、観察表の記述も統一的な基準があるわけではない。また被熱例が多いことも特徴であるが、これも観察表での記述に留り、全体的な検討には至っていない。感覚的な所見だが2～3割程度が赤変している。石材についてはパリノ・サーヴェイ株式会社による鑑定が示されているので参照されたい(第5章第2節)。

3. 岩板(第442～445図)

岩版は総数57点出土した。岩版として良いか不確実な資料もある。素材となる砂岩・白色泥岩・凝灰岩の破片も比較的多く出土しており、製品の一部破片の可能性及び製作時の剥片・未製品の可能性もあろうか。地区別ではA区18点、B区6点、C区24点、KL区2点であり、残りはトレンチなどである。C区が目立っている点は、晩期のものが主体の遺物であること、土版との関係性、土器などの他の遺物の出土傾向とも整



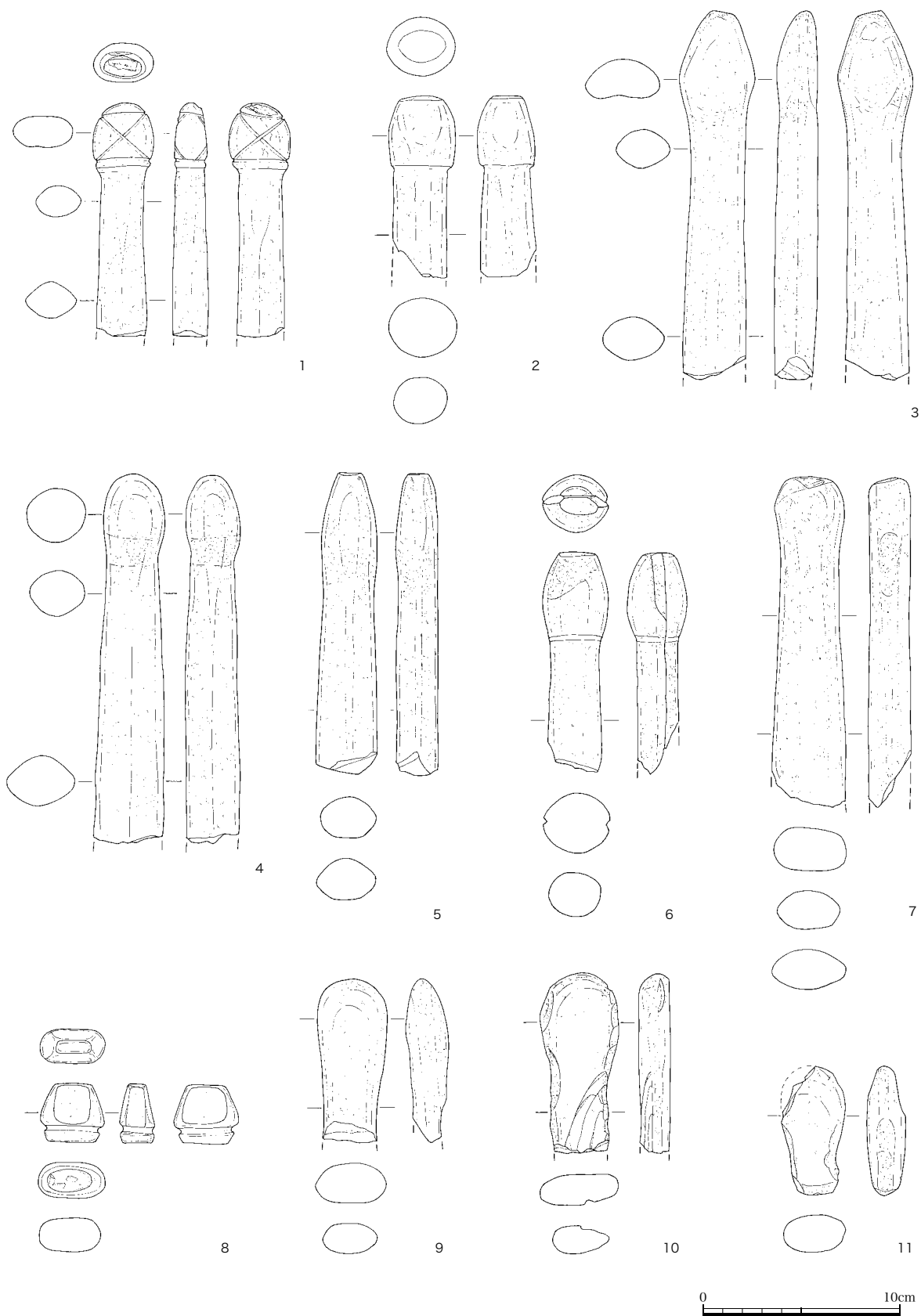
第436図 石剣類(2)

合的である。完存或いは完存に近い例も6点あるが、残りは破片資料である。小片や無文例では部位・表裏天地の判断が難しい。基本的に顔面表現がある場合は、そちらを表面として図示している。関東地方における岩版の出土数はかなり限られており、数量自体注目される。

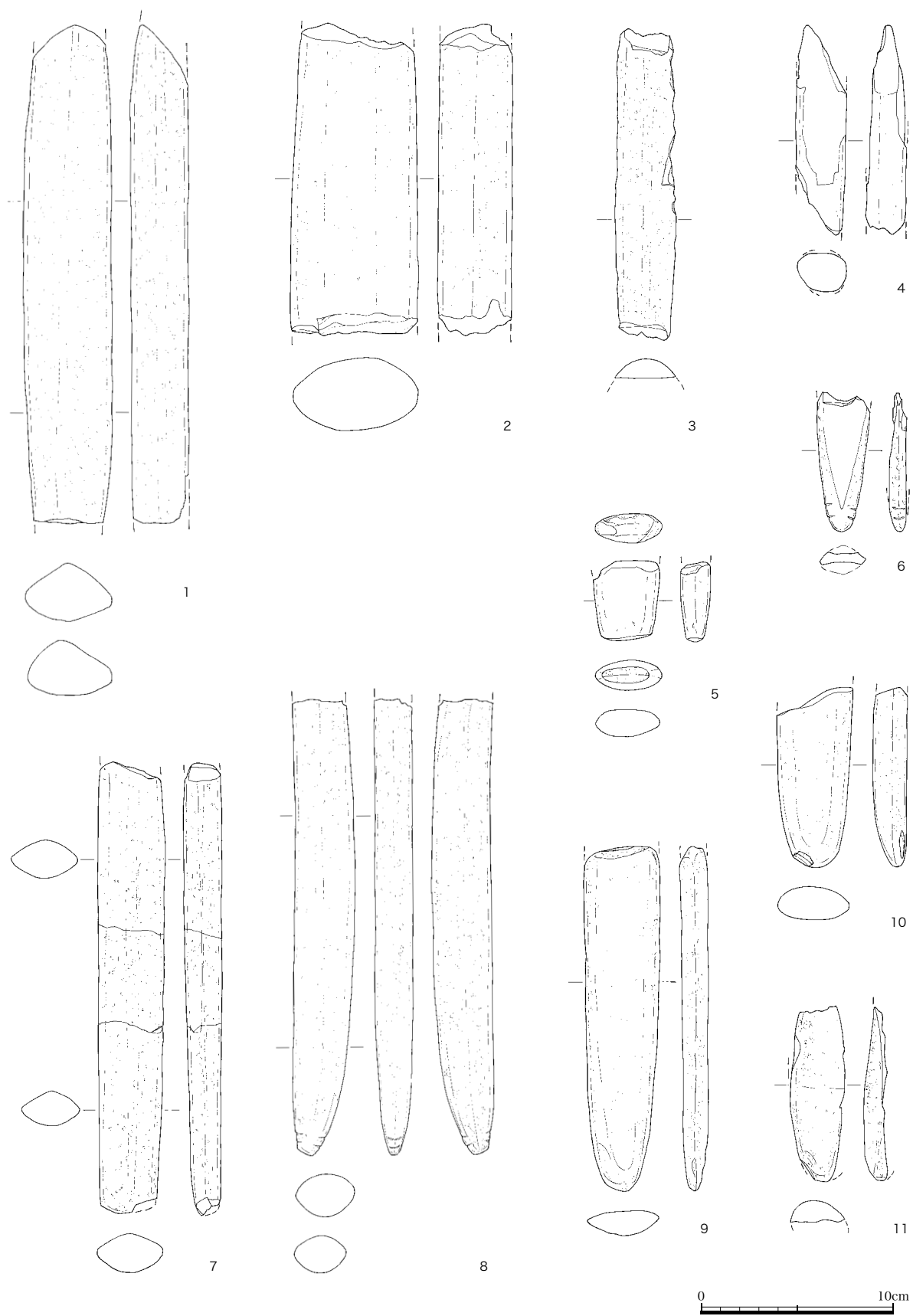
岩版の形態的特徴・文様の特徴、作りなどに注目しての、個別の観察結果・特徴は観察表に譲る。以下では羅列的な図示と記述としたい。文様は、立体的となる深い彫去表現の例(第443図1、第445図1)と、線刻状のもの(第442図1,4)、中間的なものがあり、素材の石質との相関もある程度窺える。文様意匠では、顔面表現、I字文などに加え、入組三叉文などの例もあり、総じて土版との共通点が注目される。本遺跡出土資料からは、両者を併せての検討が必要であることを示しているように思える。

なお調査時における特徴的な岩版の出土状況としては、土版と岩版の共伴の出土状況がB区において認められた点が注意される。これ以外は包含層から他の遺物と同様、散発的に出土するような状況である。

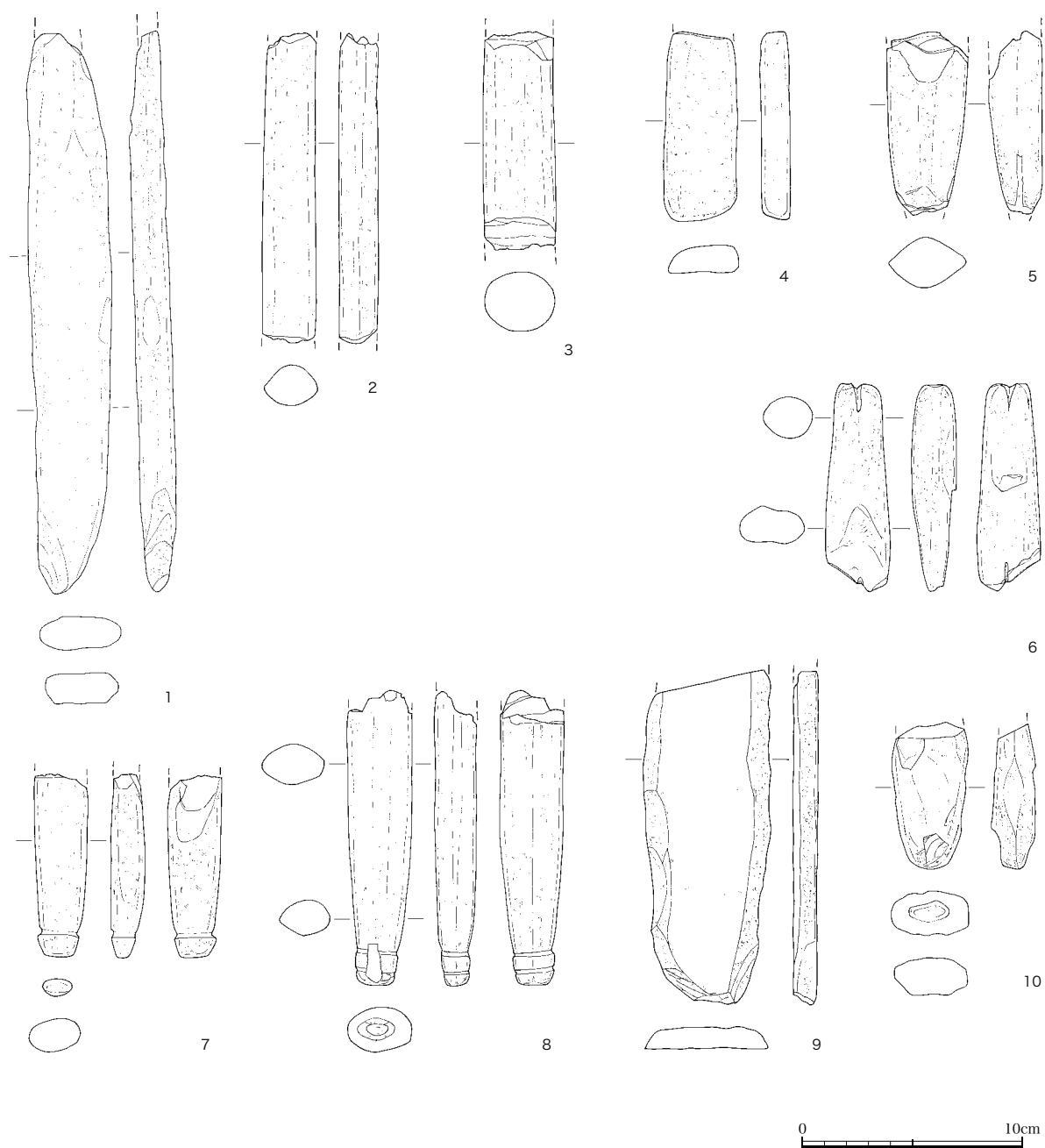
整理にあたっては、遺存の良好なものを中心にできるだけ多くの資料を図化し示すよう努めた。個別の観



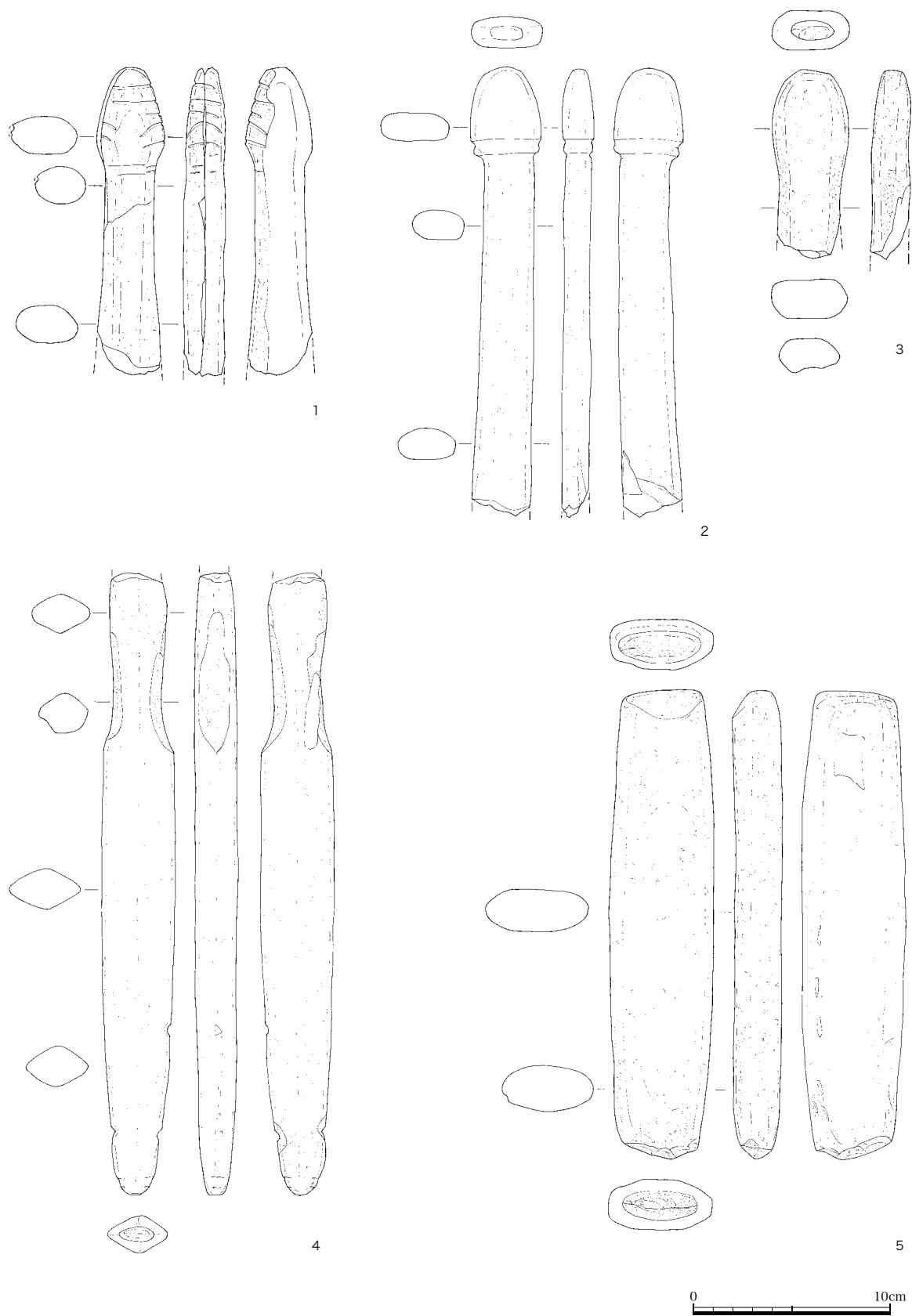
第437図 石剣類 (3)



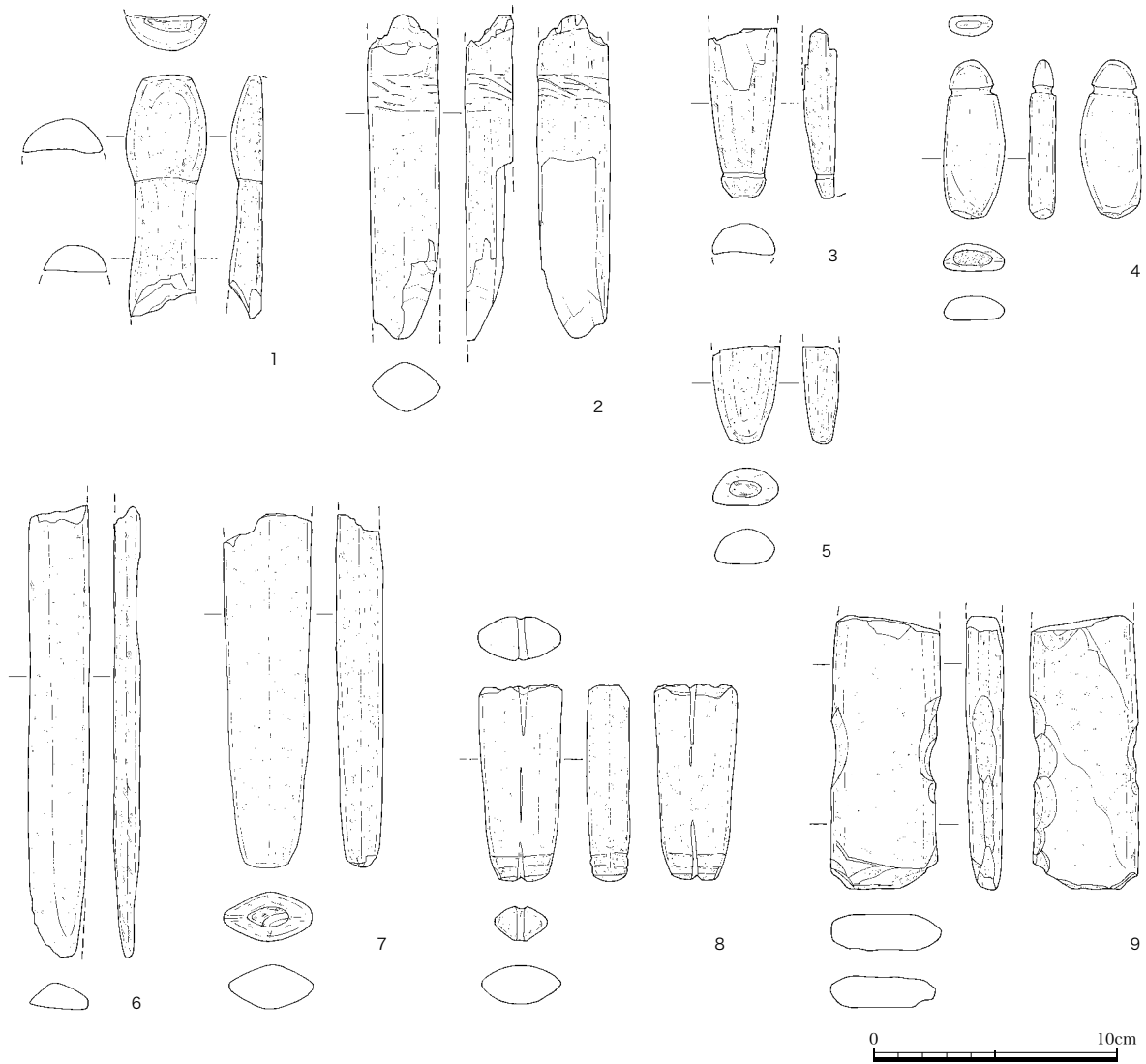
第438図 石剣類 (4)



第 439 図 石剣類 (5)



第440図 石剣類 (6)



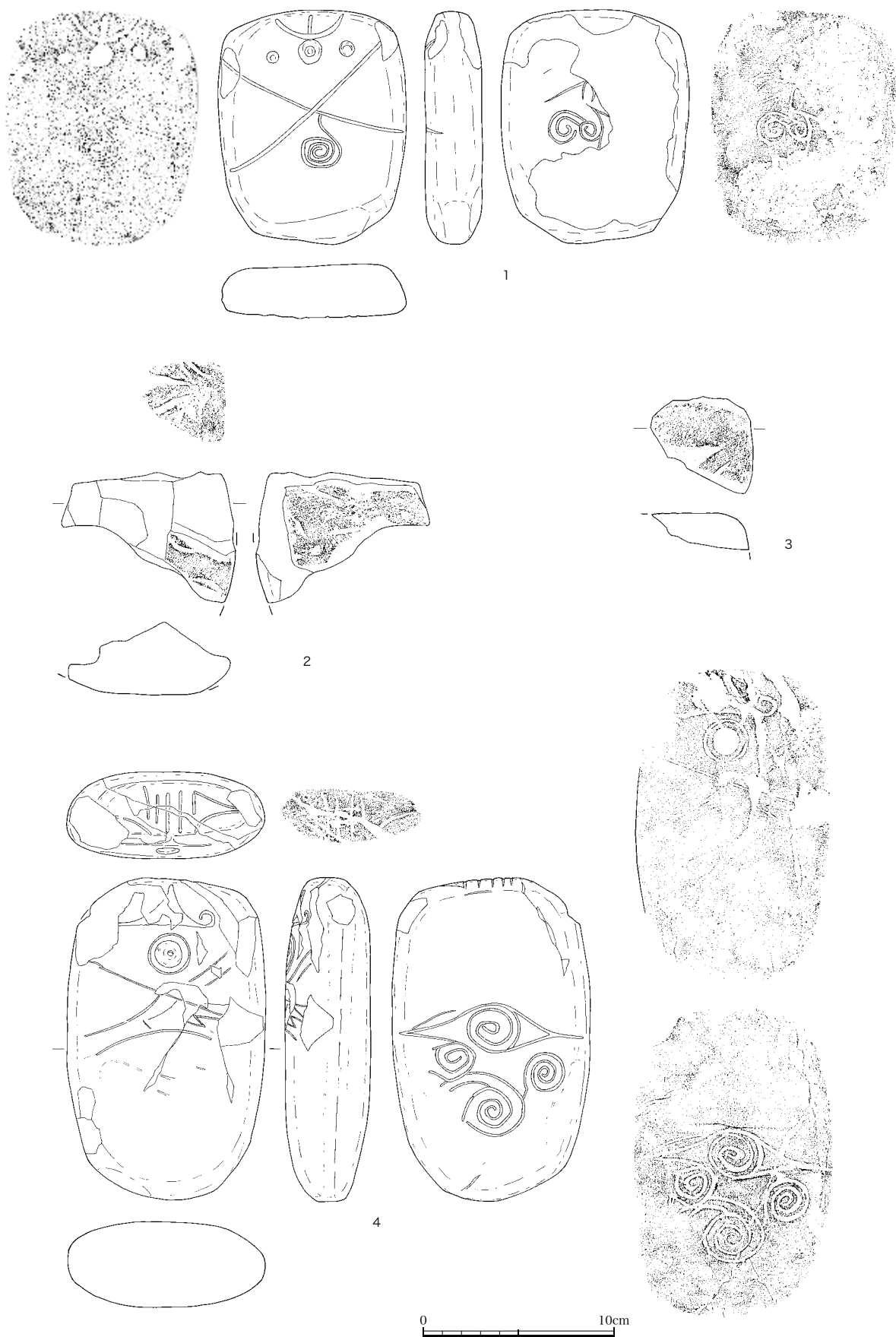
第 441 図 石剣類 (7)

察結果については観察表に譲り、以下では羅列的な記述とする。

第 442 図は 1～3 が B 区、4 が C 区出土資料である。1 の資料が B 区 E ウ 7-17 グリッドにおいて、第 395 図 1 とほぼ接するように出土した。1 は顔面表現の表面下位及び裏面に渦巻文表現が細い線刻状で描かれる。4 も近い文様意匠があるもので、頂部（上端部）にも文様が描かれる。第 443 図は C 区及び K L 区出土資料である。1 は「山」字文と対応する 3 本沈線、口や耳対応の意匠が上位に、中位～下位に入組三叉文、「工」字に近い I 字文が描かれる。裏面は剥落。4 は互連弧文が描かれるもので、90° 回転させての位置関係とすべきか。5 以下の破片資料は同一資料を含む。9 の右上や下端の円形凹部は耳や口対応部かもしれない。

第 444 図 1 は K L 区 VI 層上面出土の完存の岩板である。整った扁平の形態で、表裏に I 字文が密集して描かれる。「山」字文が大きく描かれている点も特徴で、文様線はかなり鋭角な彫刻的手法による。2 はトレンチ出土資料で、三角形部分はかなり大きく深めの彫刻的手法だがあまり丁寧さは感じられない。

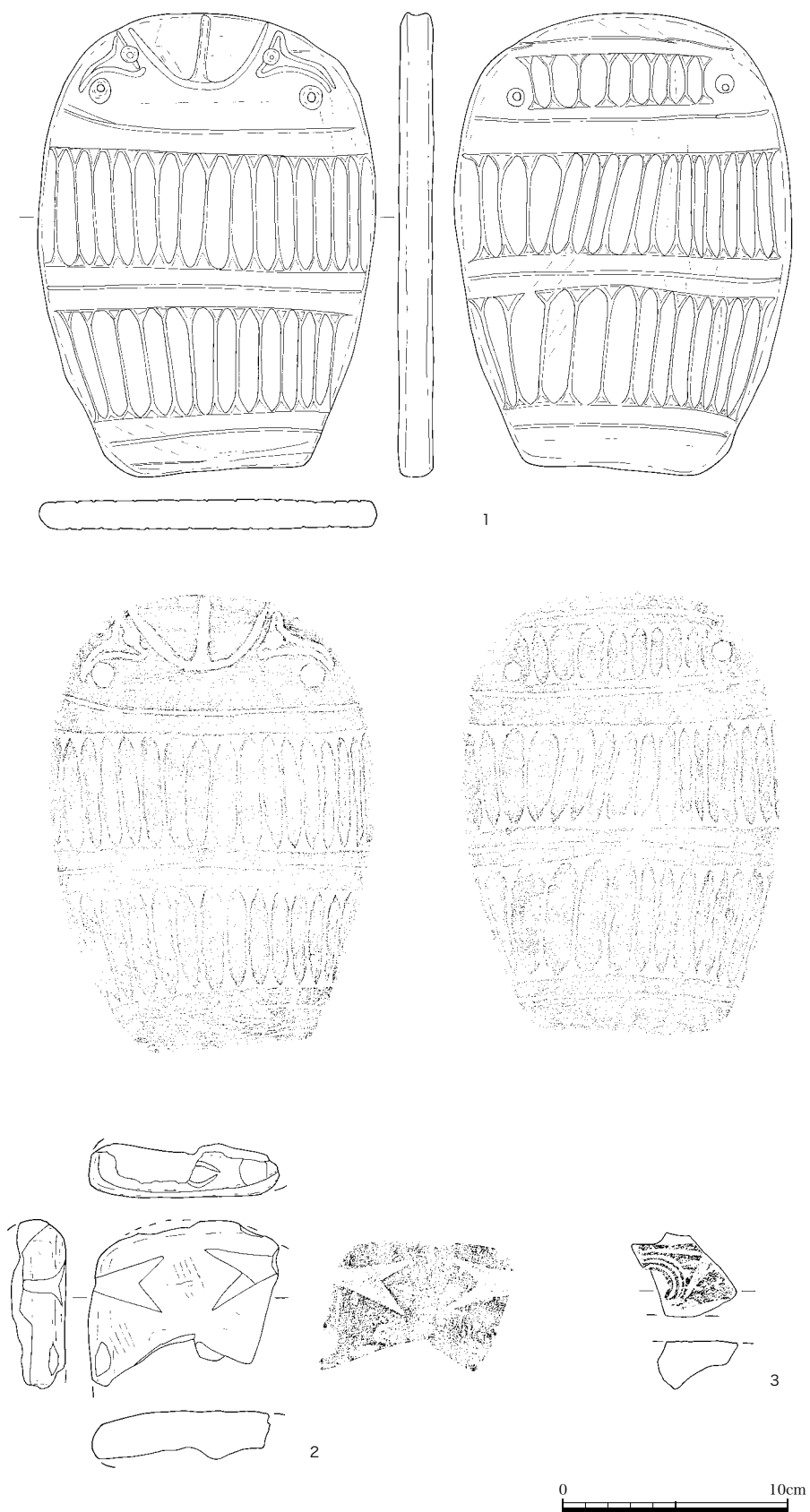
第 445 図 1 は丁寧な作りと文様表現を有する岩板で、表面の研磨も入念である。下端の孔はさほど奥までは至っていない。2 も丁寧な作りと文様意匠の例で、上位に「山」字文や渦巻文の組合せ、この下位に工字状の文様意匠が描かれる。下端割れ口は擦って研磨されており、「再生」的な意図を窺うことができる。



第442図 岩版(1)



第443図 岩版(2)



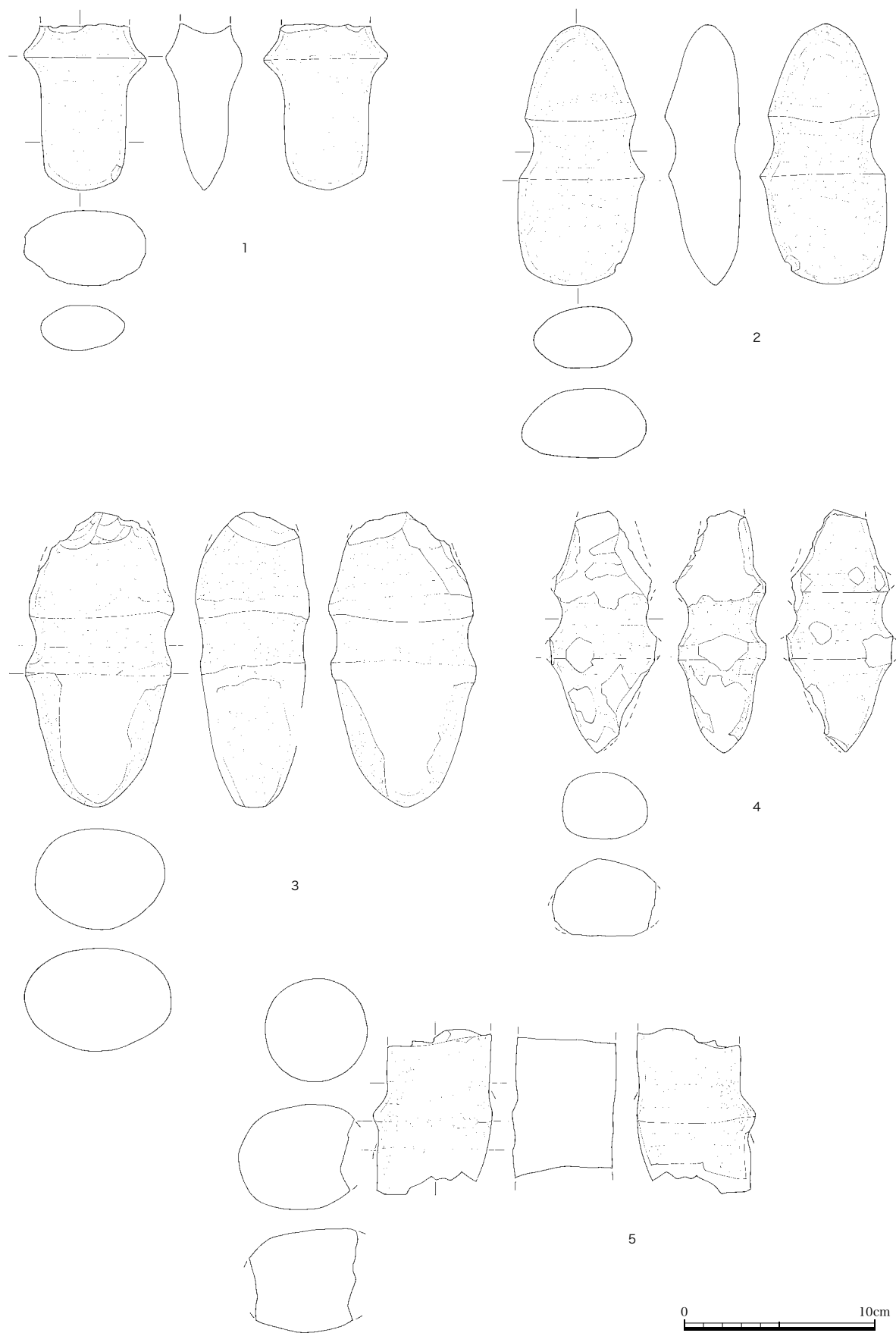
第444図 岩版(3)



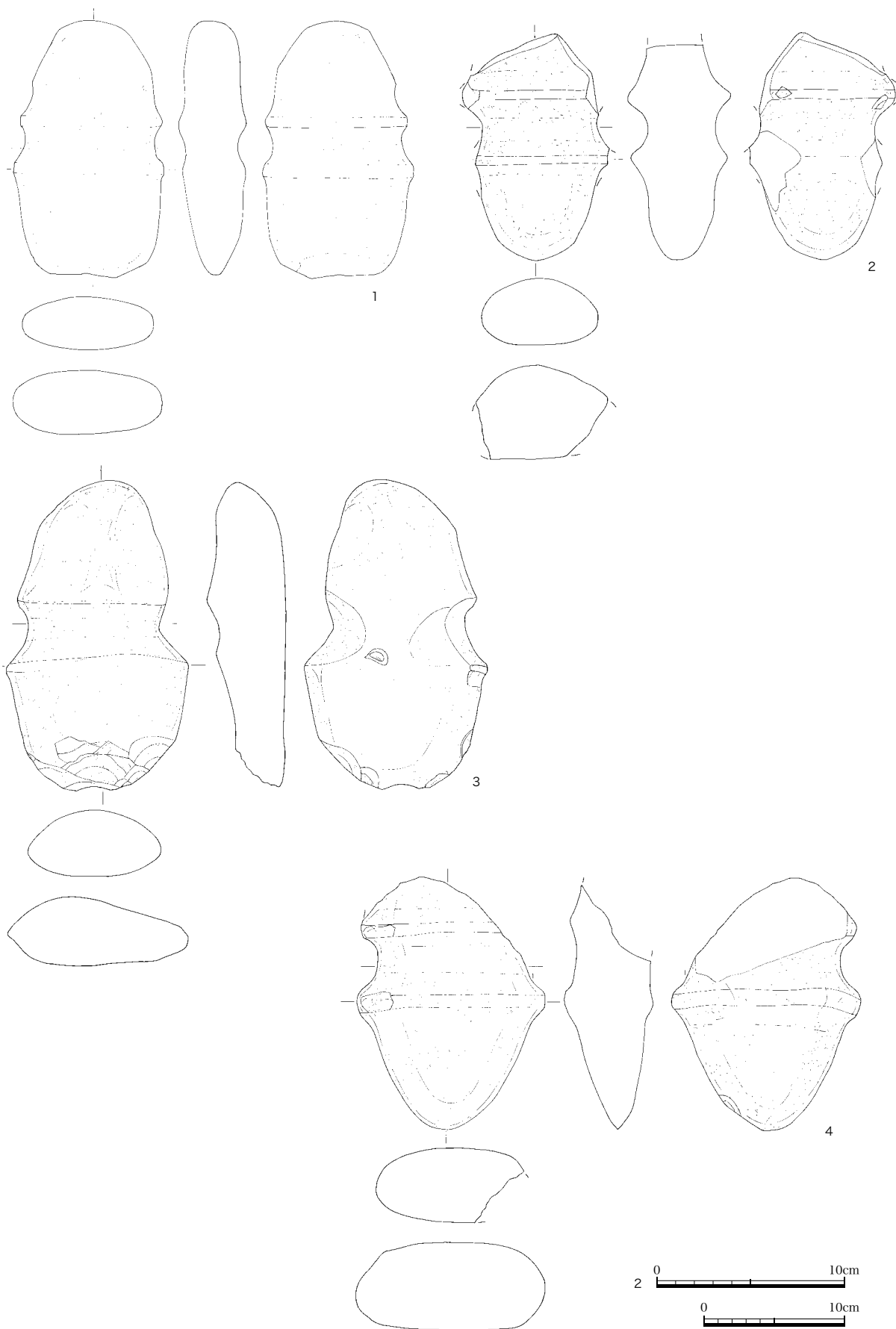
第 445 図 岩版 (4)

4. 独鈷石 (第 446 ~ 448 図)

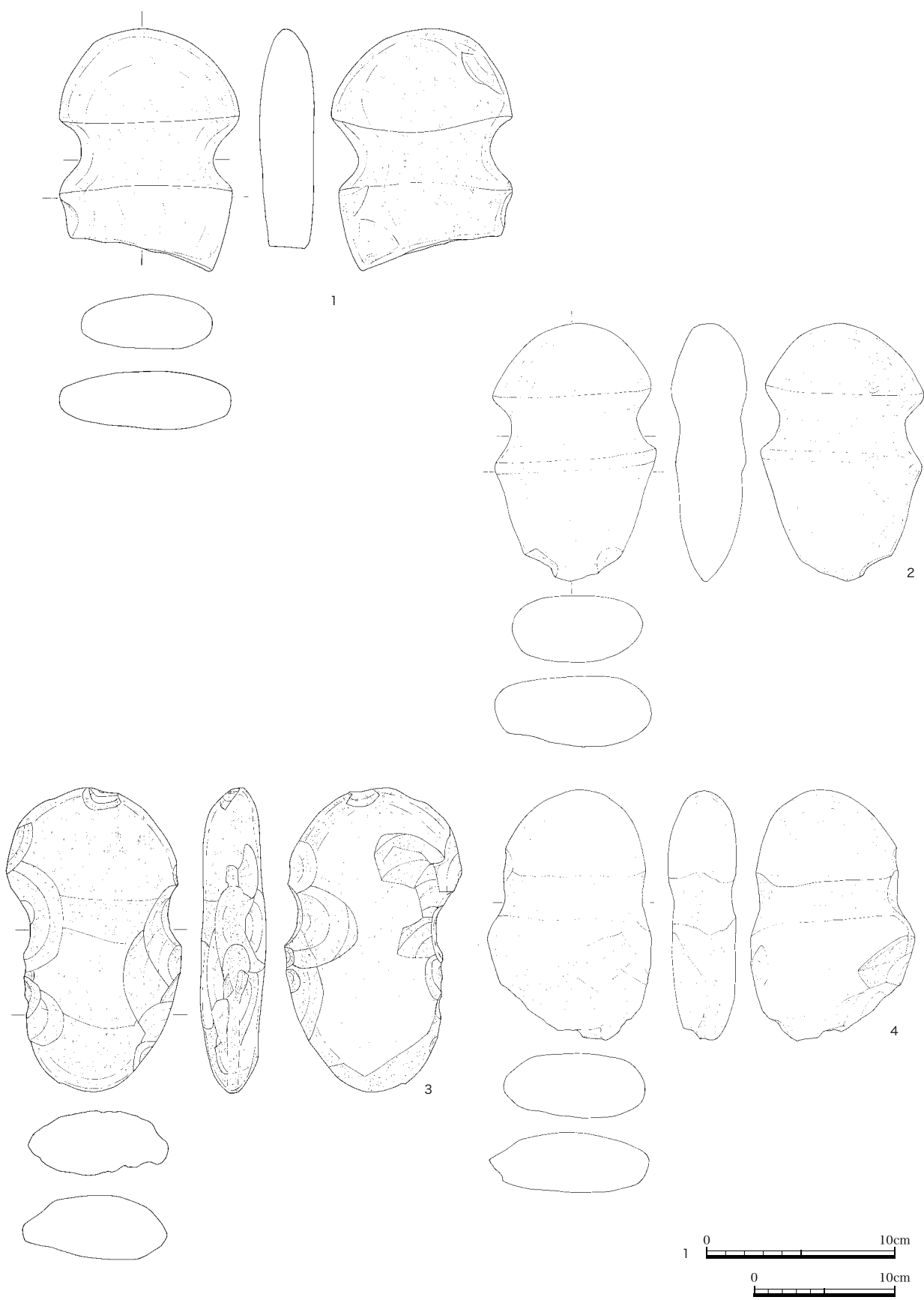
総数 14 点の出土で、うち 13 点を示す。小片では判断できない資料もあり、また K L 区の石器分類が未了である点を考慮すれば、実数は若干上回る可能性がある。B 区・C 区でやや目立つが、どの程度有意かは不明である。特異な出土状況を示した例は無く、いずれも包含層中からの出土である。独鈷石についても比較的研究の蓄積がある分野であり、それらを踏まえての検討分類なども必要となろうが、図の提示と一部の記述に留める。総じて定型的な形態が目立つが、先端斧状で顕著な研磨を有する例は少ない(第 446 図 1,2 など)。この 2 例は先端磨製石斧刃部と変わらない丁寧な研磨が観察される。第 446 図 5 は被熱赤変が顕著である。断面ほぼ円形であることも気にかかるが、両端欠損で全体形状は良く分からない。第 447 図 3 も不整な形態で、裏面は平坦に近いが表面は非対称で凸部が偏る。第 448 図 3 は括れ部の溝が一周せず表面に浅くあるのみであり、未製品や別種製品の可能性もあるものの、下端は敲打～磨痕があり打製石斧や礫器とはみなせない。第 448 図 4 も不整で定型的な独鈷石とは言い難いものである。



第446図 独鈷石(1)



第 447 図 独鈷石 (2)



第 448 図 独鈷石 (3)

第 11 節 その他の土器・土製品、その他の遺物

本節ではこれまで各区の土器挿図に示し得なかったもの、立会調査時の土器、版組時の遺漏・ミスなどの遺物をまとめて示す。まずは土器の補足分を示す（第 449～450 図）。

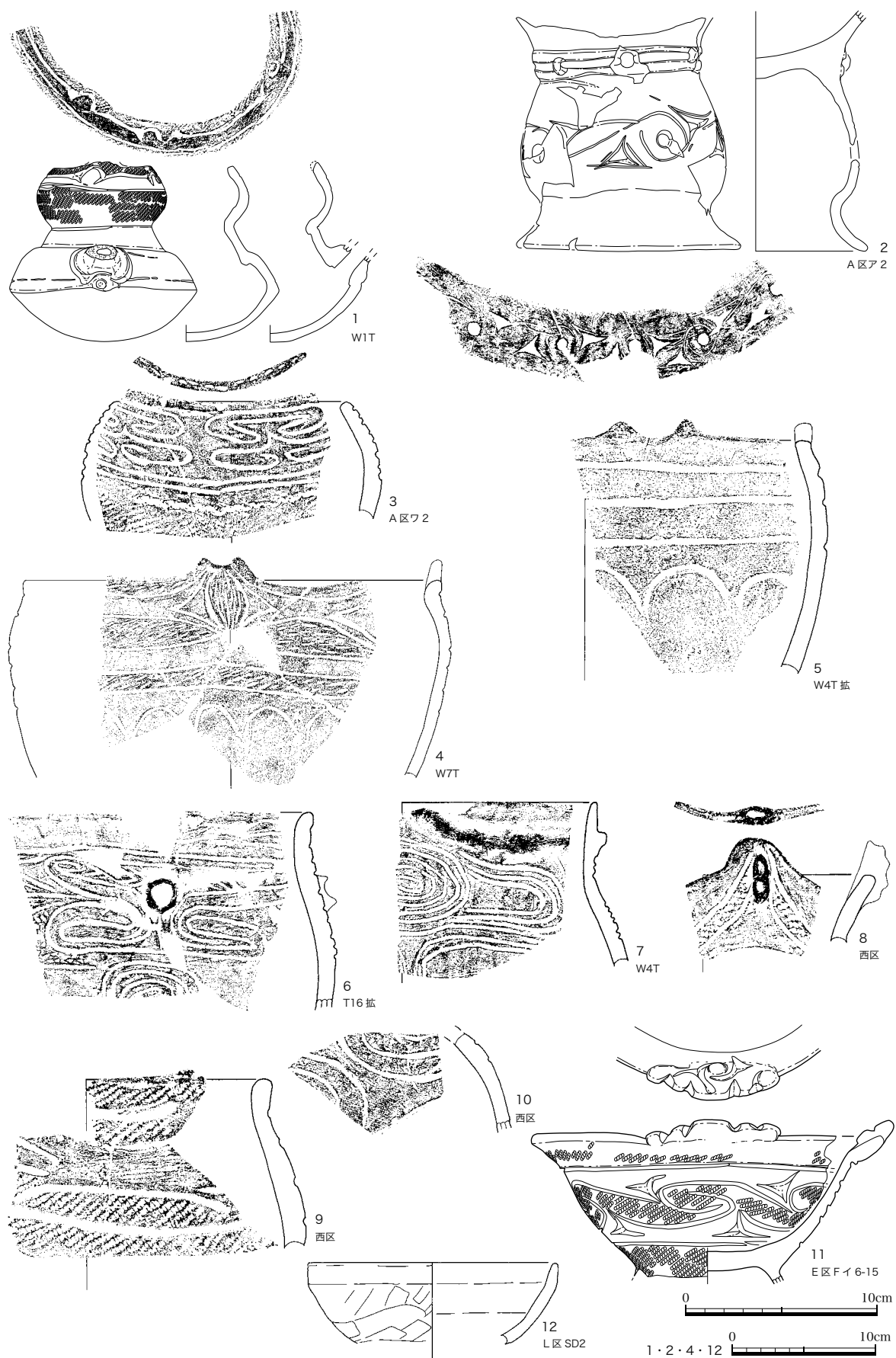
第 449 図 1 は確認トレンチ T 6 から出土した土器で、注口部及び注口部軸の口縁突起を一部欠損している以外完形である。本来トレンチ出土遺物の項で示すべきものであったが、遺漏によりここでの提示となった。沈線→縄紋 L R→無文部ミガキで、体部や底部近くの無文部も良く磨かれている。口縁直下の文様を描く沈線は浅く、下描線が一部残るなどやや雑な部分も観られる。玉抱三叉文の三叉部は若干の抉り込みである。

2 は A 区出土の台付鉢脚部である。全体に面が荒れており摩滅部分も多い。円形や三角形の透孔周囲に描かれる沈線は細く浅い沈線で、その後のミガキや面の摩滅もあって消えかけているところもある。下描線のような線も一部確認される。3 は A 3 区 W 2 グリッドの出土土器である。大洞系の広口壺とするには躊躇させるほど文様の変容し、手法も大洞系とは言えない手法である。施文順は沈線→ミガキだが、沈線はやや細く深さも不定、ミガキもやや丁寧さに欠けるように観える。体部は無節縄紋で、区画線直下には結節が加えられる。石英・白色粒をかなり多く含んでいる。

4 は天神原式系の深鉢で、比較的短い単位で低い波頂部突起が付されているようである。突起下の楕円文、突起間の対向弧線という普遍的な構成で、帯状部レンズ状区画内に細長く先端鋭角な工具による刺突が加えられる。沈線刺突施文後のミガキは不徹底で、あまりミガキが及んでいないところも見られる。突起の左側では口縁直下の帯状部に刺突が入るが、右側では無文である。石英や雲母の細かい粒がやや多く含まれている。第 449 図 5 は T 4 拡張区から出土したもので、3 本の横位線下に弧線文が連続する。沈線はやや幅広で施文後のミガキも見られる。同図 6 も異質な構成の土器で、細い沈線、円形貼付文、一部に充填される細かい刺突矢羽状の短沈線等が組合わさって表現されている。施文後のミガキはやや雑な感を受ける。7 は細い沈線により曲線や多重円文が描かれるもので、施文後若干のミガキ調整が加えられる。9 は厚手の土器で体部中位が屈曲して最大径となる深鉢と推定する。図より強く内傾するかもしれない。太い沈線、深く節の大きな縄紋など前浦式の手法が観察される。11 は E 区 F イ 6-15 グリッド出土土器である。小形の台付鉢だが、下端が擦れており、この状態での使用（転用）も推測される。沈線→縄紋 L R→無文部ミガキで、三叉部はやや深く抉られている。沈線はやや細く、シャープな印象を受ける。突起内面はかなり立体的な装飾で、玉抱三叉状の線はかなり深い抉り込み状である。内面のミガキも丁寧である。

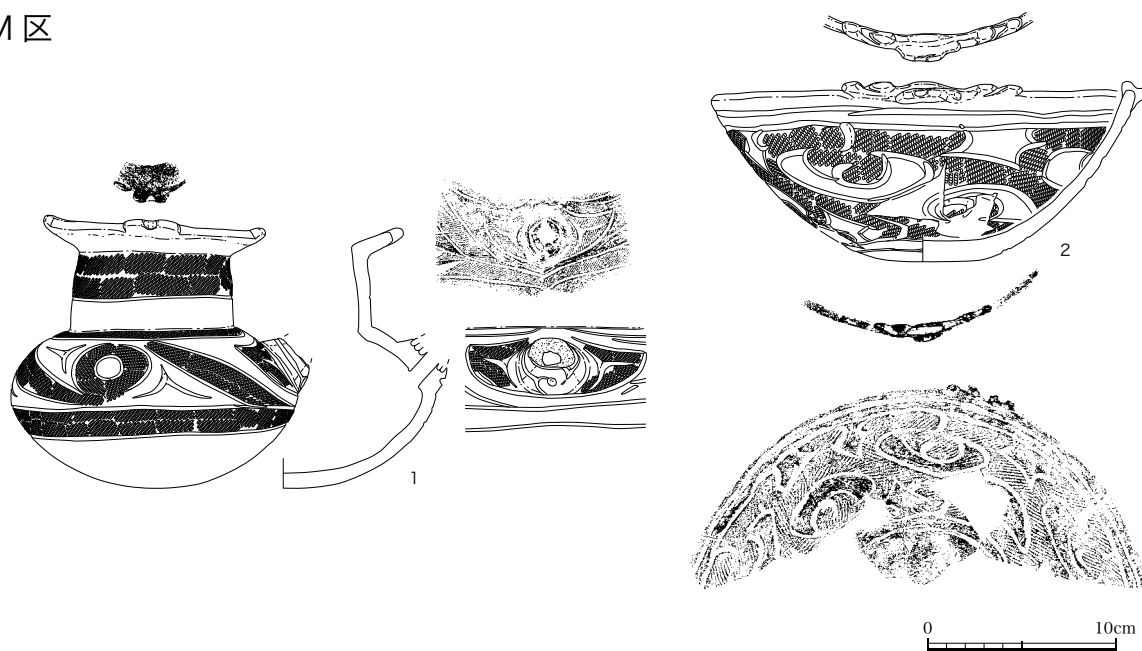
第 450 図に M 区出土の 2 点を示す。これは調査区南側の水道管敷設部分の工事立会時に出土したもので、出土状態の記録化は殆ど為し得なかった。但し、本調査区の南側における東西に長い工区の中でも遺物の出土が多かったのは K L 区の南～I 区西側にほぼ限られていたとの所見があり、ここで示す資料も恐らくこの範囲かと推定する。このような完形復元個体が出土すること自体、幾つかの問題を含む。若干残る記録についても本来提示すべきであるが、整理未了のため省略する。写真図版三七-6 に示したようにピットも確認されており、集落部分がより南に広がっていることを示す立会調査結果として重要であろう。この 2 点以外にも多くの土器が回収されており、別途報告する機会が得られればと考えている。

1 の土器は口縁部で水平方向（前面）に突出する 4 単位の突起を有する注口土器で、注口部欠損以外完形である。沈線→縄紋 L R→沈線ナゾリ・無文部ミガキで、口縁上端面や底部までの体部も含めミガキは丁寧である。胎土中に石英粒を多く含む。沈線はやや浅く細めの施文。注口部を挟んで左右の区画内にある三叉文、また図正面などの体部に描かれる三叉部はあまり深く抉られていない。文様構成では、図正面のような円文



第 449 図 西地区出土土器補足

M区



第450図 M区出土土器

を挟んで三叉文が配置される単位が図左 90° の部分及び反対面の部分に観られるものの、割付の失敗で狭くなっていることと関わってか、円文左側の三叉文が省略されている。言い換えれば、注口部以外の3単位の軸は口縁突起とずれて（円文の中心が突起軸より左に2～3cmずれる）配置されている点注目される。なお注口部下方も小さな玉抱三叉表現がある。胎土には石英・白色粒を多く含む。

2は大洞系の鉢で、半分程度遺存している。文様は沈線→縄紋LR→沈線ナゾリ～無文部ミガキで描かれる。無文部ミガキは丁寧だが、無文部ネガ部分彫去手法とまではいえない。

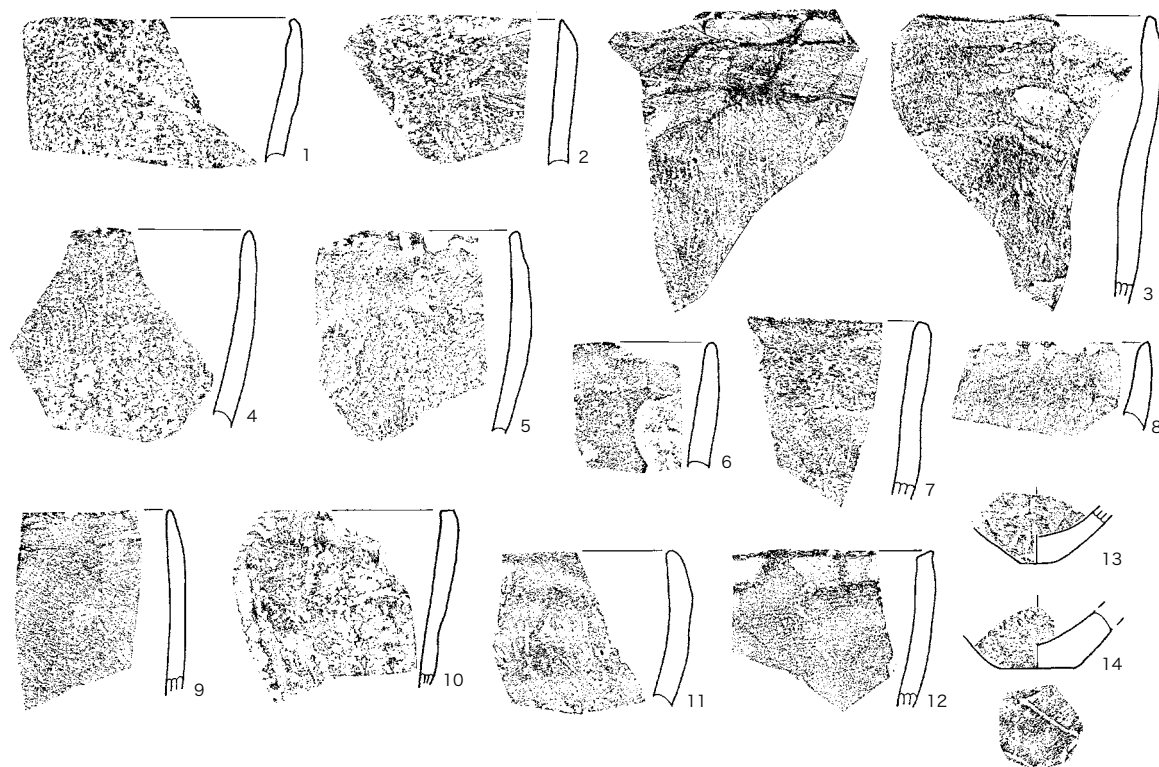
製塩土器（第451～453図）

遺跡内から471点が確認された。当初分類なので詳細な観察検討を経ておらず、一定数別種土器が含まれている可能性もあるが、概ね実数に近い破片数と考えている。いずれの地区からも出土しているが、主な地区別の出土数をみると、A区152点、B区147点、C区86点、KL区9点であり、A区・B区の数値が突出している。後期末が多いB区で多く確認されたことは、有意な可能性がある。出土状況で特異な例は確認していない。また特定のグリッドや層位での集中・偏りも認められない。

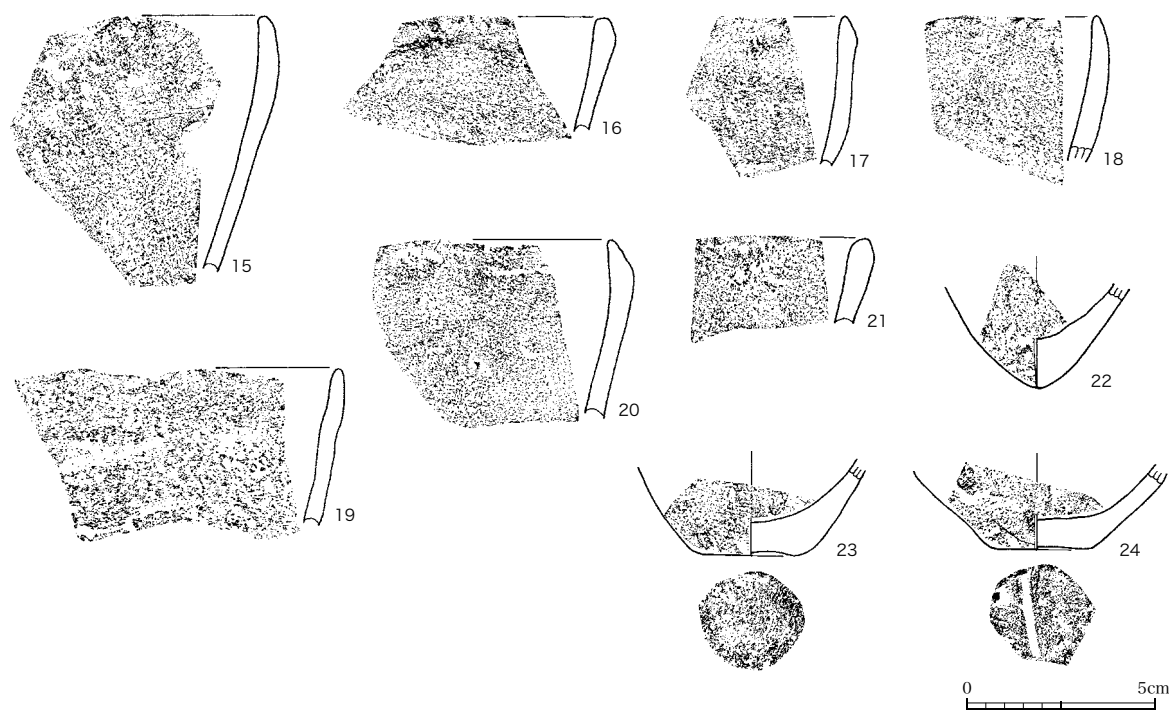
整理に際しては、主に口縁部破片を任意に抽出選択して図化した。本来詳細に観察し、技法や形態に注目しての分類検討を行うべきであろうが、未だ明確な視点を持ち得ていないこともあり、項目立てしての分類は行わない。図化したものについての観察結果も本来提示すべきだが、概要の提示に留まる。色調では燈色、にぶい赤褐色、にぶい燈色あたりのやや赤味が強い色調が多く、被熱赤変が著しいものが多い点は注意しておく必要がある。外面削り～ナデ、内面ナデ調整を基本とする。剥落例は比較的多く認められる。胎土では一般の土器と比べると鉍物を含む量が少ない傾向があるものの、C区出土の第452図1のように石英を多量に含む例も認められる。

A区出土の第451図1,4,5,9等は外削ぎ状或いは口縁が薄くなる形状である。6はやや丸みを有し全体やや厚手であり、製塩土器ではない可能性もある。3は口縁端部に面がある所謂「水平カット」の技法で、口

A区

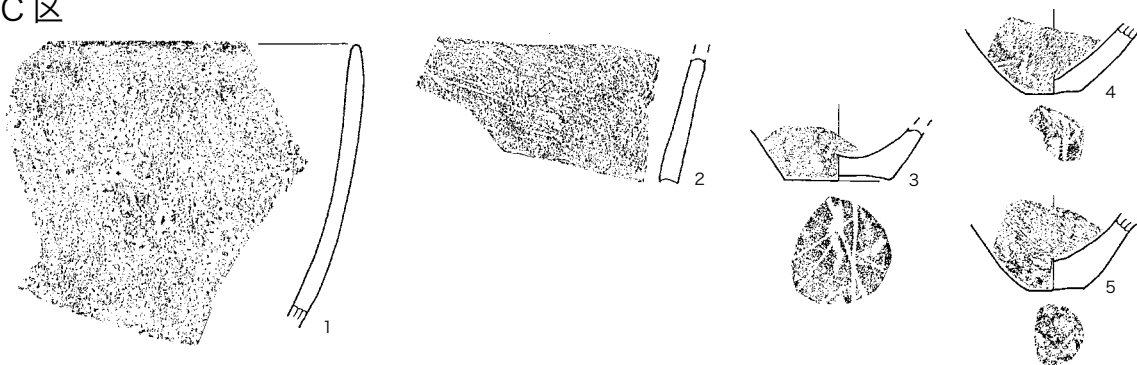


B区

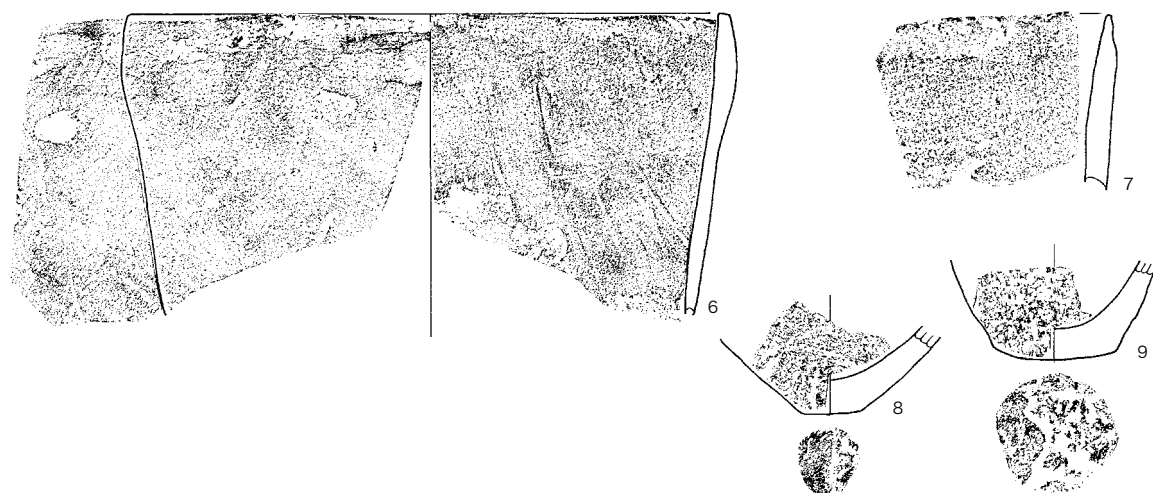


第451図 製塩土器(1)

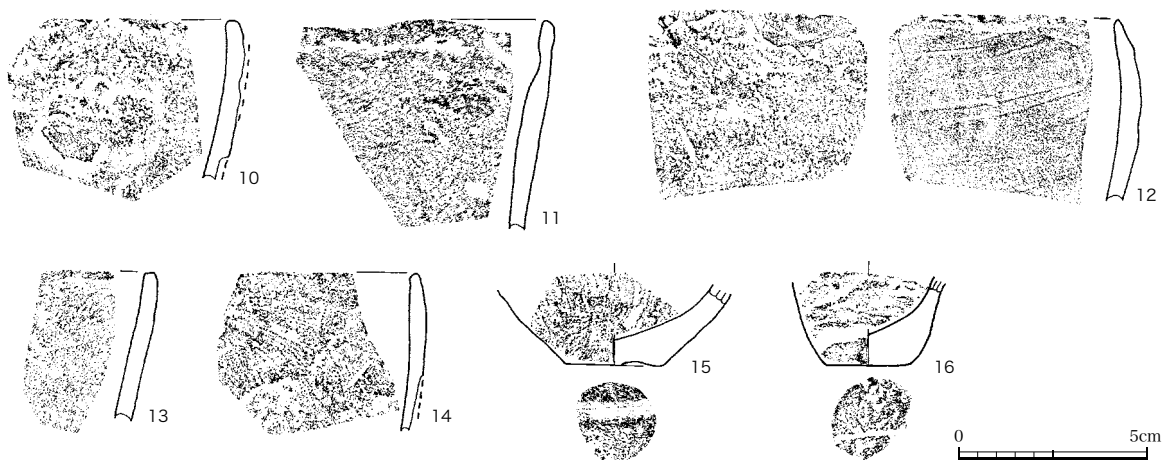
C区



D・E区

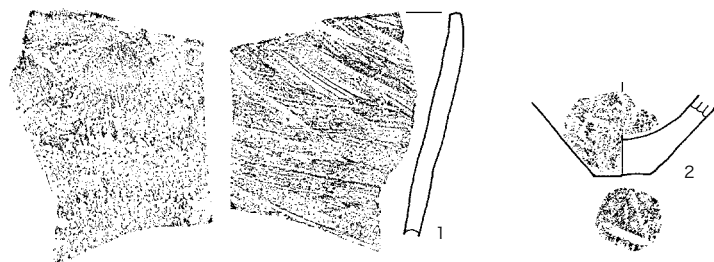


G・H区

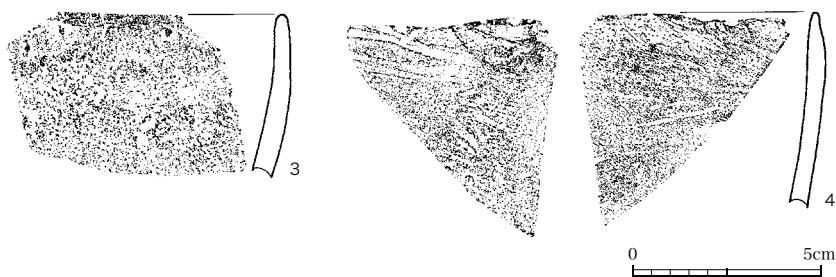


第452図 製塩土器(2)

K・L区



トレンチ



第453図 製塩土器(3)

縁直下横方向以下体部縦方向の削りが単位も明瞭に観察できる。14は平底で木葉痕がある。

B区でも15,18,19のように薄く摘み状となる口縁形状のものが目立ち、16は「水平カット」の例、21はやや厚みがあり内削ぎ状の形態である。24底部の線は沈線状の深いものだが、木葉痕と想定される。

第452図に示すC区出土例では良好な資料は少ない。1は口縁が若干内彎し摘み状の薄い口縁となっている。3の底部圧痕は木葉痕の重複だろうか。

D区の第452図6は比較的大形の破片で、内面縦方向で痕跡・単位の残るナデ調整、外面削り調整が観察される。口縁は「水平カット」で、口縁直下の横方向削りはミガキに近い。9は底面も剥落している。

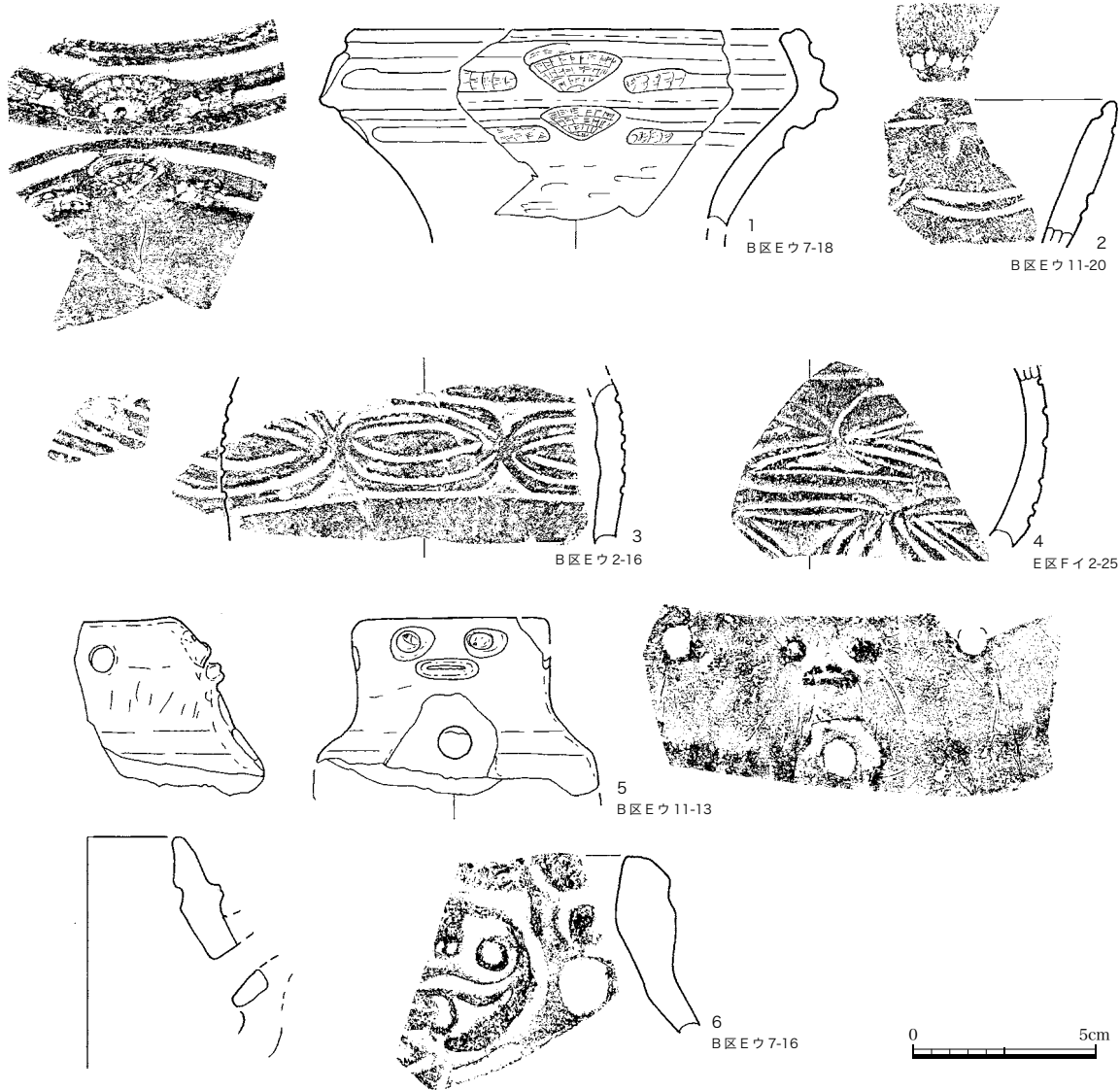
G・H区出土の第452図10は「水平カット」に近いオサエ状の例。12は摘み状で上面観がやや波打っている。11は横から見て口縁が水平となっていないもので最上段の粘土積上げ痕跡が一部残る。K L区出土の第453図1は口縁端部「水平カット」で、内面も削りに近いナデ調整であるが、単位が明瞭に認められるので、軟質の木口状工具かもしれない。外面口縁直下はやや丁寧なミガキに近い削り調整。トレンチ出土の3は口縁端部が丸みをもつが、丁寧にナデ～ミガキ調整されていることによる。内外面調整後この調整が加えられている。4は上面から観て波打っているもので、かなり口縁先端が薄くなるように調整されている。外面は一部ミガキに近い削り、内面は痕跡が残る削りに近いナデ調整である。

出土土器補足 - 異系統など (第454図)

第454図には異系統の土器や顔面表現例を示す。

1は巻貝圧痕が観られるもので「宮滝式」との関係が注目される土器である。下半は遺存していないものの、注口土器と推定している。隆帯・段作出→沈線・巻貝圧痕→ミガキと観察され、沈線も沈線内端部の観察から同一の工具=巻貝によるものと観られる。ミガキは丁寧で、沈線や圧痕の縁なども良く磨かれている。屈曲部や口縁外側に細く隆線粘土が貼られているようだが、或いは口縁全体に薄く化粧土状に粘土が加えられ

異系統・顔面付



第 454 図 異系統・顔面付

ているかもしれない。胎土は石英・白色粒を多量、雲母を微量に含むもので、感覚的な観察所見ではあるが極めて異質な感は受けない。色調は 10YR4/1 褐灰色。土器分類時に同一個体片を入念に探索したが、同一グリッド内及び周辺で他に確認することはできなかった。また同一グリッドの土器分類時の所見では後期後半主体で、特に曾谷・高井東式がやや主体的に近い組成であった点を所見として記しておく。

2～4は「榎原式文様」が描かれるものである。2は口縁部破片で、頸部の2条沈線による弧線文と共に内面口縁直下の刺突列が注目される。胎土には細かい不透明白色粒を含んでおり、3の土器と胎土質感は類似する。色調は内外面とも灰黄褐色。3はレンズ状に弧線文が描かれるもので、接合しない同一個体小片も扨影で示した。沈線はやや細いが深めの施文である。対向三叉状となる「三角形刳込み」の部分は浅い若干の



第 455 図 発泡土器

彫去と観られる。区画線より下位及び文様の沈線施文後ミガキ、内面はやや粗いナデ調整である。胎土は不透明白色粒を多く含み、やや異質な感はあるが、他の土器と顕著な違いとまでは言えない。色調は灰黄褐色～にぶい黄褐色。

4 はやや彎曲があるもので碗状の鉢となろうか。天地逆の可能性も考えたが良く分からない。やや細く浅い沈線で楕円状～三角形状区画及びこの内部の多重線が描かれる。

三叉部も浅い割込みだが、下端右側の三叉部は若干の深さがある。沈線施文後比較的丁寧な磨かれており、それにより沈線の縁が潰れるような形態となっている。内面もミガキに近い丁寧な調整が観察される。

5 は小形の顔面付き注口土器で口縁～頸部の半周程度は遺存している。注口部は欠損。注口部上位に目及び口貼付の顔面表現が為され、やや距離をおいた左右に安行系瓢形注口土器でも観られるような貫通孔が配される。器面調整は粗いナデで、内面は輪積痕を残す粗い調整である。石英を多量、雲母をやや多く含んでいる。全体に粗い作りと言える。

6 は顔面付きの土器と判断したもので、口縁がかなり内傾する。ひさご形や屈曲する鉢状の形態も想定されるが良く分からない。表面はナデ或いは施文後ミガキもあるようだが、全体に摩滅しており調整不明である。顔面表現は、顔を縁取る隆線、目や鼻の隆起などみみずく土偶顔面に近い。内面は削り状の粗い調整。

発泡土器 (第 455 図)

18 点確認され、2 点のみ示す。被熱により器体が発泡状となっているもので、中には元来の土器の原型から著しく変形しているものもある。ここに示したものは、むしろ原型に近いものと言える。小山市寺野東遺跡、栃木市藤岡神社遺跡等、関東後晩期遺跡でしばしば観られるもので、包含層中の他の遺物の被熱痕跡や焼土、炭化物、被熱骨片の出土、被熱礫の出土などと併せて検討する必要がある。器面の調整や文様等も多くの場合不明となっている。大きな塊状のものについては、土器を原型とするのではなく、石や粘土塊または土製品等の可能性もあろうか。いずれにしても、別途詳細な検討が必要となろう。

籠目土器 (第 456 図)

総数 13 点確認しており、12 点を図化した。同一個体もあるので、個体数の実数とは異なる。2,3 は同一個体で、6,7 も類似しており同一個体の可能性がある。本来籠目編み方の検討を行うべきだが、観察不十分で検討し得ず、図の提示に留まる。いずれ報告の機会を得たい。形態以外、胎土・色調・質感は他の土器とあまり変わらない。6,7,12 などは石英・白色粒をかなり多く含んでいる。11 は破片左上で条線が確認されており、籠目上に意図的に付けられたものであろうか。

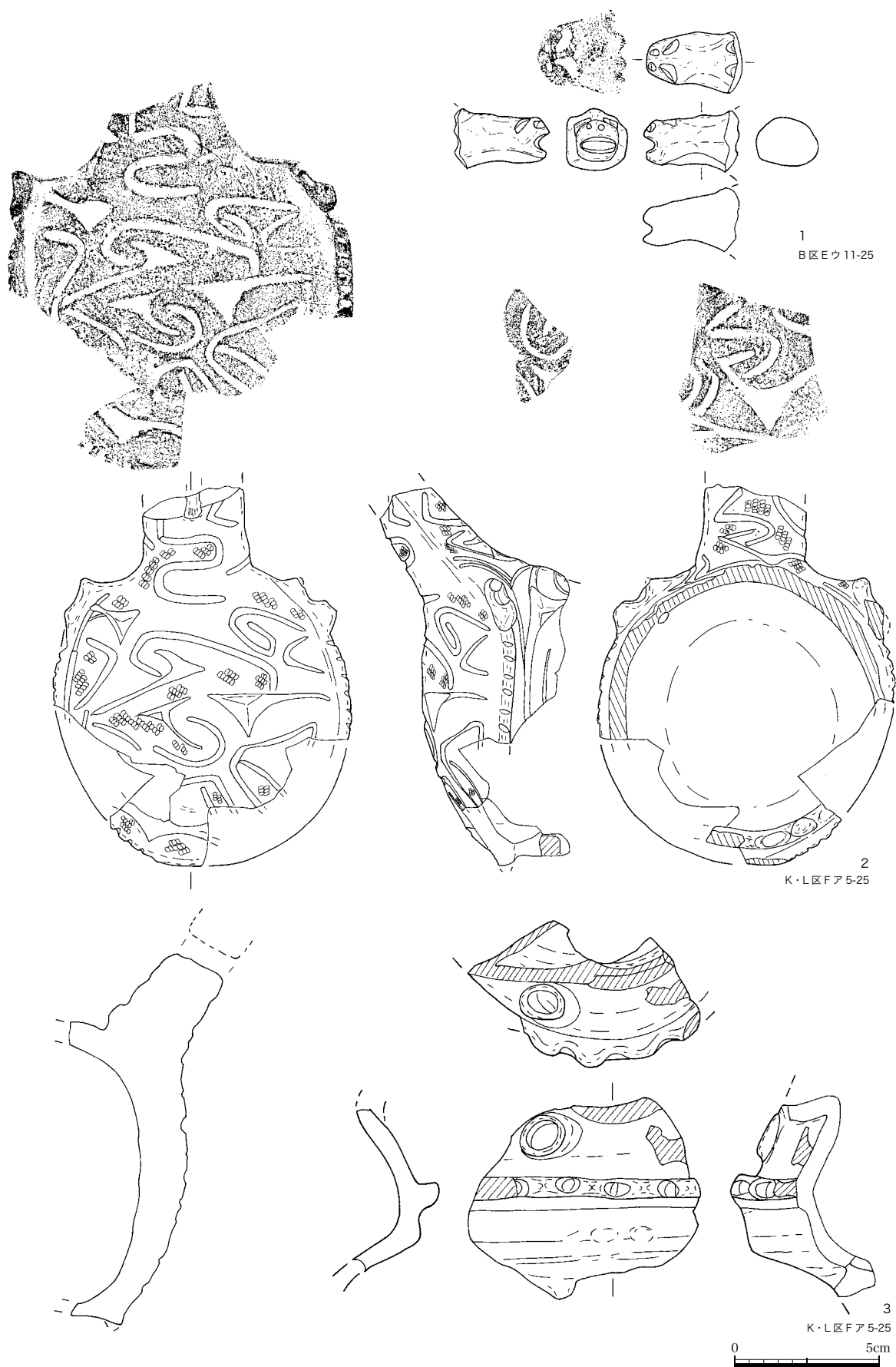
1 は口縁～底部まで確認できるもので、段下の太めの圧痕は末端処理に関わるものであろう。これより上位口縁までは良く磨かれている。内面やや粗いナデ調整。石英雲母などの鉱物粒を多く含む。12 はにぶい褐色を呈し (7.5YR5/3)、雲母少量、白色粒多量に含む胎土で他の土器胎土と大きく変わらないように観える。粘土が籠目圧痕に被るところがある。内面やや粗いナデ調整である。

土製品補足 - 動物形土製品 (第 457 図)

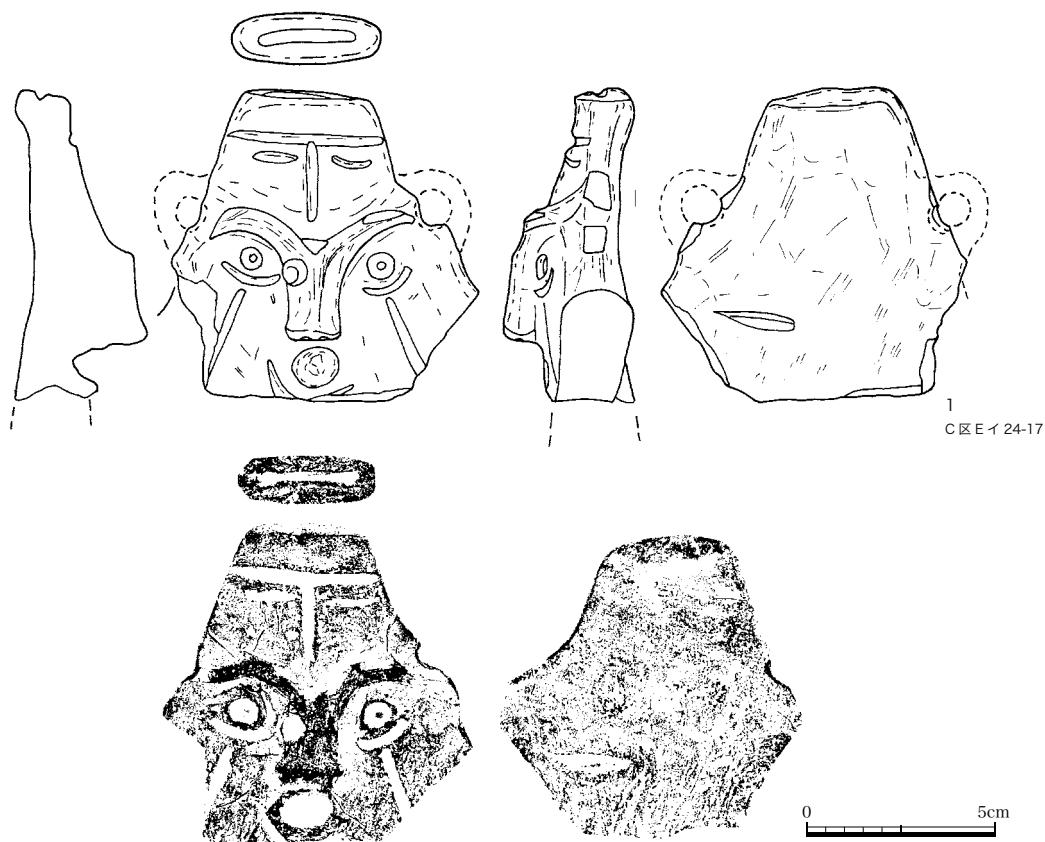
動物形土製品として 2 点が確認されている。1 は小形棒状のもので、四つ足動物の頭部と推定する。顔面



第456図 籠目土器



第457図 土製品補足(1) 動物形



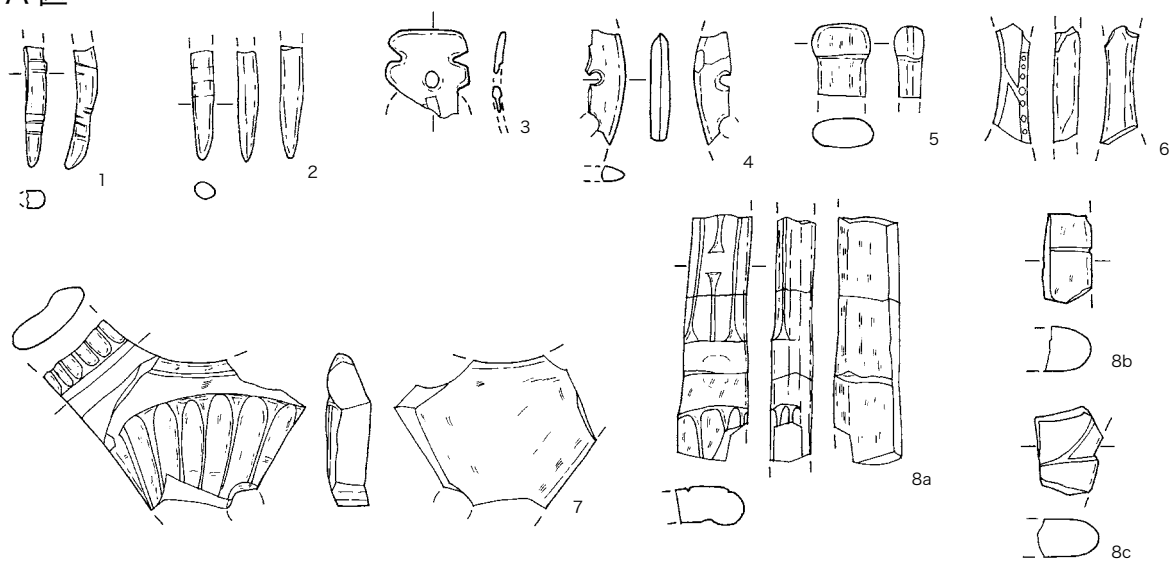
第 458 図 土製品補足 (2)

が刺突沈線で表現されるもので、やや粗い作りである。胎土は土器や他の土製品と大差無いように見える。3.3 × 2.1 × 2.1 cm で重さ 11.84g である。右端破断面は接合痕のようである。

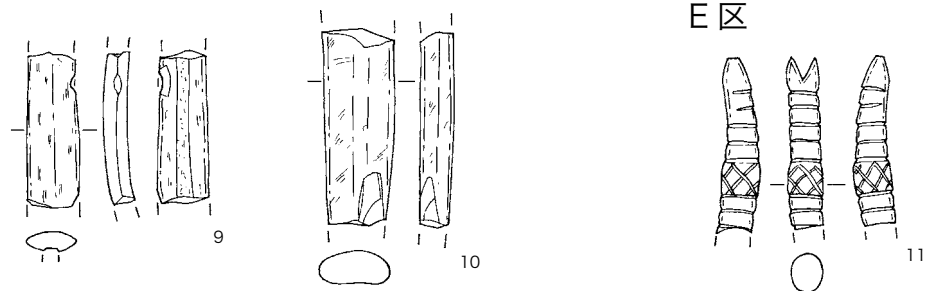
2 は亀形土製品等とも呼称される動物形土製品で、著名な北海道千歳市美々 4 遺跡、関東ではさいたま市東北原遺跡や蓮田市久台遺跡で著名な例がある。K 区のグリッド出土で、出土状態の詳細な記録は確認されない。本例は遺存がやや悪く、全体に摩滅も顕著であることなど不明な部分も多いものの、この種の土製品と判断した。但し他遺跡例で一般的な中空（袋状）の作りとなるかは不明で、図右側に示した「裏面」の縁一部が透かし孔の切り込み面またはイキの面のようにも観察される。内面の粗いナデ調整痕跡からは中空の可能性も残される。沈線はやや深く明瞭なところと細く浅い部分とがある。三叉部分は比較的深く抉り込まれている。折影で示した接合しない 1 片があり、これも透かし孔の切り込み面を観察できることから、「裏面」側の一部であろう。「首」部分に貫通孔がある。胎土は土器や他の土製品と大きな違いは無いように観察される。沈線→縄紋 R L →ミガキだが、ミガキ痕跡は面の荒れにより不鮮明である。B 突起状の「鱗」部分が左右に確認されるが、左側は一部欠損している。

同図 3 は種別不明の土製品である。中空土偶などの土製品の可能性と、壺形の異形土器などの可能性があるが、判断できない。胎土や質感は土器と類似している。面若干荒れているが、ナデ～ミガキ調整で施文も含め比較的丁寧な作りと観察される。

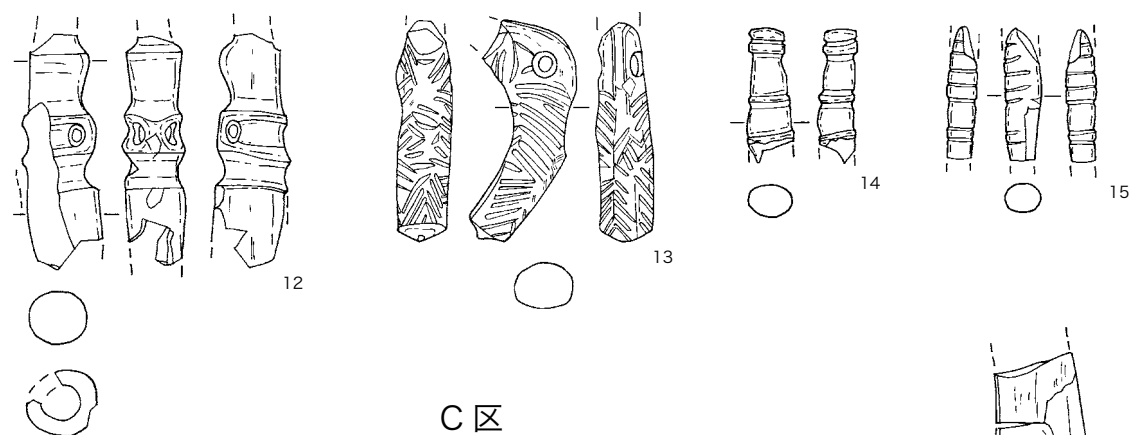
A区



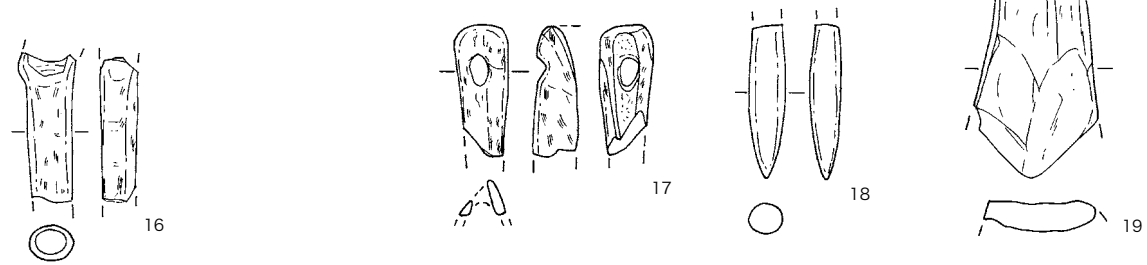
E区



B区

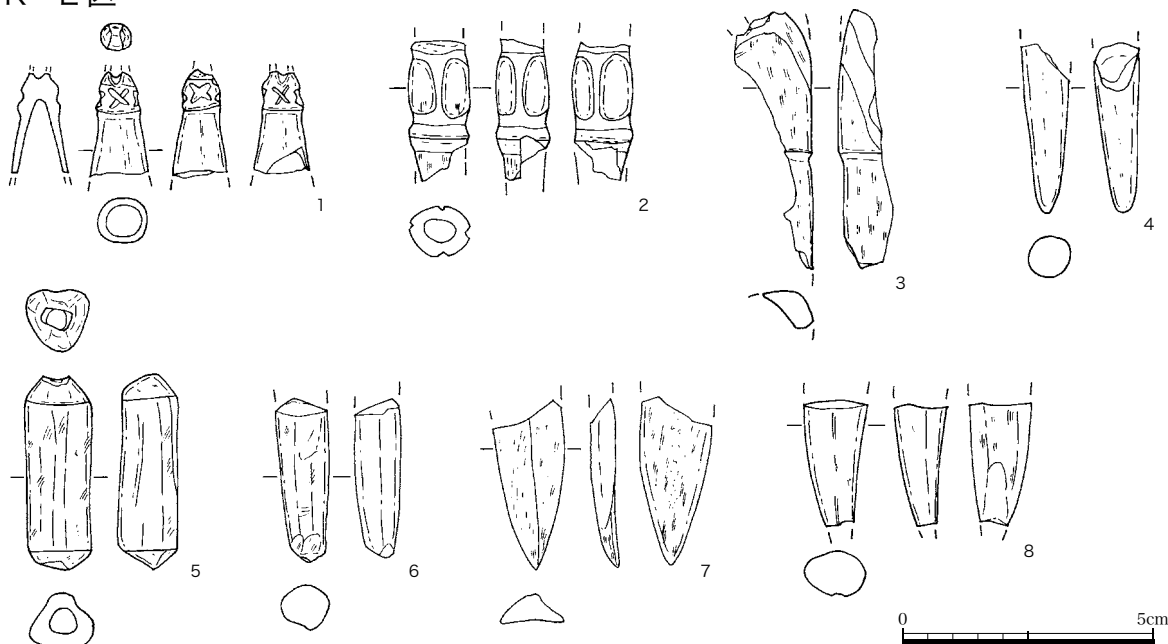


C区



第459図 骨角器(1)

K・L区



第 460 図 骨角器 (2)

第 458 図 1 は 2 つの顔面表現がある土製品である。当初顔面付き土器と想定したが、かなり厚みがあり、彎曲から想定するとかかなり径が大きくなること、大半を欠損しているが耳部分の突起表現、内面調整など、土器との判断を躊躇させる要素も多い。土製品とした場合も全体の形態を推定することができず良く分からないが、一応土製品としておく。今のところ類例も確認できない。

顔面表現の沈線は深く幅もあり明瞭で、目や口の刺突も深い施文である。但し上位側の顔面表現は若干沈線が浅いように見える。施文後のミガキもあるが、鼻の上などは丁寧に磨かれているものの、顔面の縁近くはあまり丁寧に磨かれていない。目は円形竹管を垂直に刺突することで「目玉」部分が凸部として表現されている。口はかなり深い刺突で周りが若干凸部となる立体的表現である（特に下側はやや隆起している）。胎土には白色粒や石英・チャート粒等の鉱物粒を多く含んでおり、土器の胎土に近い。

骨角器 (第 459、460 図)

総数 30 点出土しているが、同一個体もあること、獣骨類とした中に未確認の骨角器が残っている可能性もあることから、実数を確定できない。内陸での貴重な出土例であることから、可能な限り図化した。今まで確認された内陸部における骨角器の点数は必ずしも多くはないが、獣骨類の多量出土とも関わって、関東縄紋後晩期遺跡では一定数の出土がある。

本遺跡での出土例については、現地を確認したものに加え、整理時の土器分類や獣骨確認時に抽出確認したものがあがる。獣骨類については、すべての詳細な観察を経たおらず、更に点数が増える可能性はあろう。特に加工の少ない単純な形態の製品については、遺漏も多いことが推定される。種別の検討も行っていないが、いわゆる弓箭形角製品が多くを占め、ついで簪・ヘアピン系のものが確認される。第 459 図 3,17 等は穿孔があることから垂飾品の可能性と共に、簪の穿孔部分の可能性なども考慮する必要があるであろう。また先端に向かって鋭角な部分の認められる第 459 図 2,18、第 460 図 4,7,8 について漁撈具等刺突具の端部の可能性も

第3章 西地区の遺構と遺物

残る。個別の観察結果については観察表に譲り、概観と特徴的なもののみここで記述する。この骨角器についても、いずれ検討する機会をもちたいと考えている。

第459図7はI字文が密に施されるもので、穿孔部があることから垂飾系かと想定されるが、類例を確認できておらず、全体の形態も推定できない。第459図8,9等も質感は類似しており同一個体となる可能性も残る。彫刻線刻後研磨されている。裏側も粗く磨かれているが、骨組織が残っている。このようなI字文を有する骨角器は、宇都宮市刈沼遺跡の下野考古学研究会調査地点で確認されている。第459図11,14,15は弓矢状のもので線刻表現等相互に類似する部分がある。第459図13はB区住居跡S16出土のもので、穿孔と丁寧な線刻文様が特徴的である。出土状態の詳細は確認していない。このような鋸歯状の文様構成は栃木市藤岡神社遺跡でも類例が観られる。第460図1も弓矢状の先端でX状の線刻がある。第460図5のような短い円柱状で端部を整形するようなものも千葉県域で出土例がある。

第10表 土製品・石製品集計表

	A区	B区	C区	D区	E区	G・H区	I区	K・L区	トレンチ・ 拡張区	その他	計
土偶	37	39	30	6	8	7	4	8	9	4	152
土版	17	3	9	3				3	1	1	37
耳飾り	50	266	31	8	4	33		23	19		434
土製垂飾	5	21	2	2				2	3		35
有孔土製円盤	1		13	1	1			2	2		20
土錘	5	21	2	2				2	3		35
匙・手燭		10		1		1		2	3		17
粘土塊	19	36	10	2	11		1	7	5		91
ミニチュア	18	33	15	1	3	2	1	6	2		81
垂飾玉類	57	22	33	5	2	5		6	6	1	137
石剣類	44	32	70	10	10	4	7	14	26		217
岩版	18	6	24		3			2	3	1	57
独鈷石		5	4	1		2	1		1		14
発泡土器	11	1	11								23
籠目		10				3					13
土製円盤	6	445	12	1	2	45	1	2	6		520
骨角器	13	6	4		1			8			32
骨	185	181	149	38	55	1	2	75	98	11	795
炭化物種子	12	75	34	2		3	1	3	11		141
計	498	1,212	453	83	100	106	18	165	198	18	2,851

※なお、校正時における整理の過程で、石器（石鏃16点、打製石斧20点・黒曜石剥片5点等）・石製品（石剣類破片7点等）が新たに確認されたが、本表や第9表石器集計表及び本文中の記述に反映させることができなかった。他の種別の遺物も含め再度確認する機会を得た上で、別途提示することとした。

栃木県埋蔵文化財調査報告第 396 集

あがた駅南遺跡

— 足利市あがた駅南地区用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

発 行 栃木県教育委員会

宇都宮市塙田 1-1-20

T E L 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1-8

T E L 028 (643) 1011

編 集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

T E L 0285 (44) 8441

発行日 令和 2 年 3 月 30 日発行

印 刷 下野印刷株式会社
